

# 有馬遺跡 II

弥生・古墳時代編

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第32集—

《本文編》

1990

群馬県教育委員会  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団





# あり <sup>ま</sup>馬 遺 跡 II

弥生・古墳時代編

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第32集—

《本 文 編》

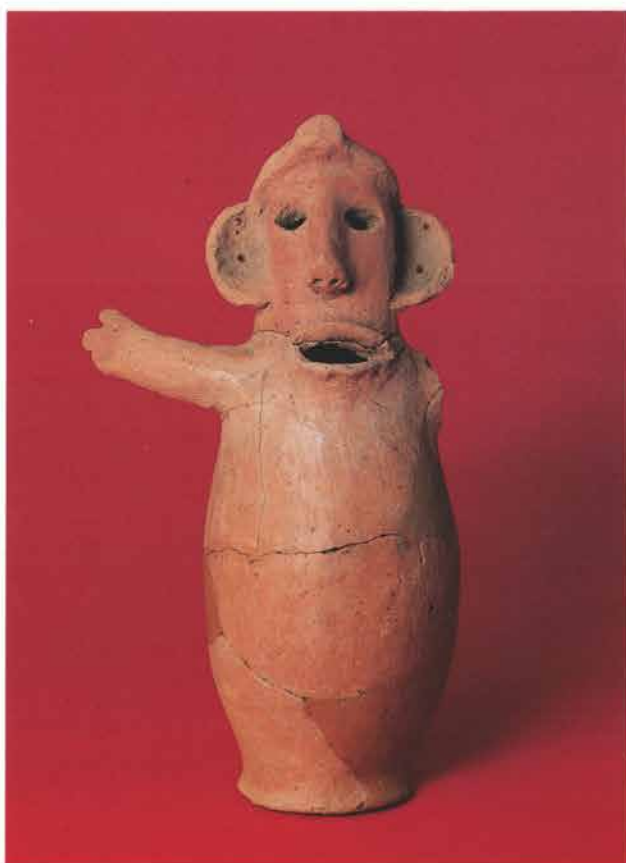
1 9 9 0

群 馬 県 教 育 委 員 会  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団





有馬遺跡全景 利根川上空より西方を望む



人物形土器 14号墓



鐵劍 6号墓 S K 440



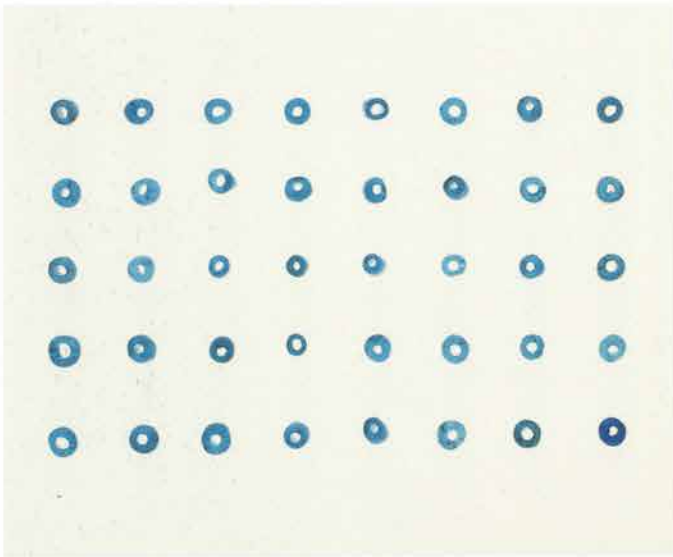
鐵劍 1 2 B号墓 S K 45 2 5号墓 S K 84  
3 18号墓 S K I34 4 19号 S K I40



銅釧 7号墓 S K 387



鐵釧 22号墓 S K I44

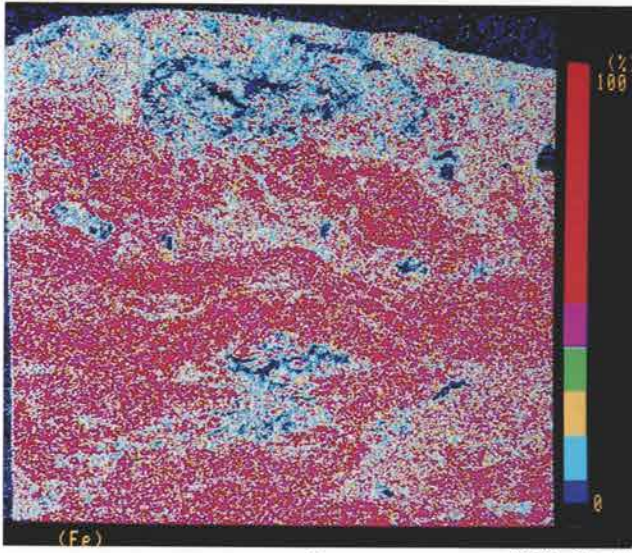


ガラス小玉 5号墓 S K 83

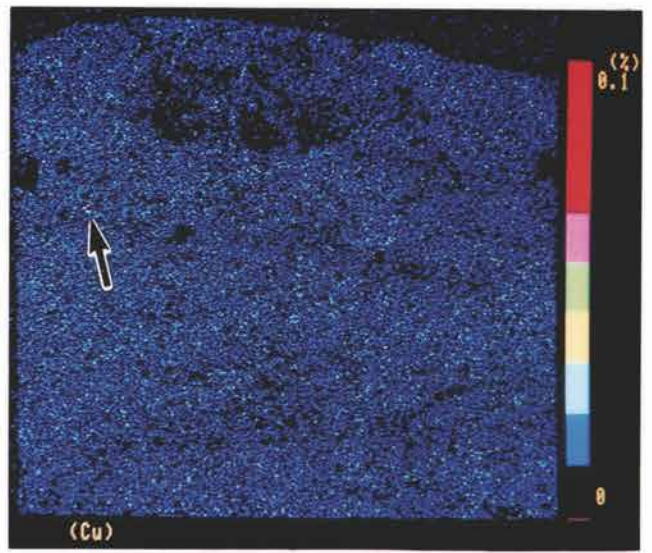


ひすい勾玉 1 5号墓 S K 84 2 19号墓 S K I09  
3 19号墓 S K I13 玦状耳飾 4 石冪遺構

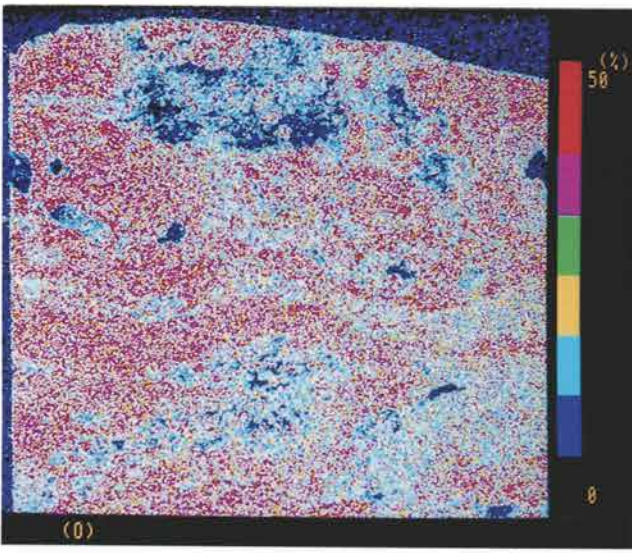




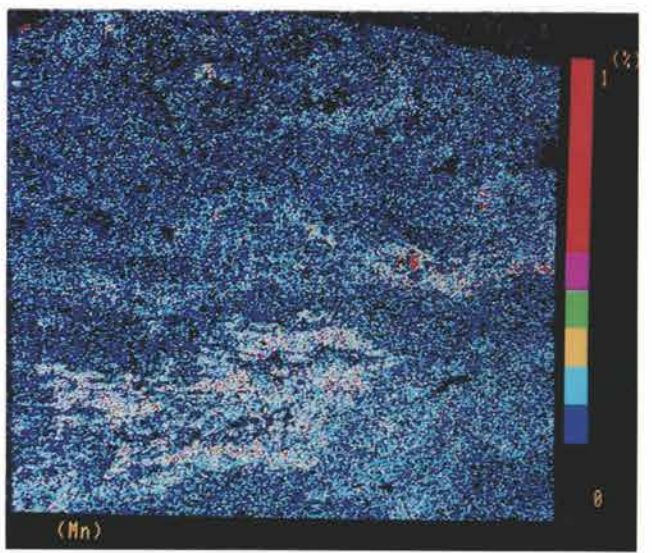
Fe CE9-21-11



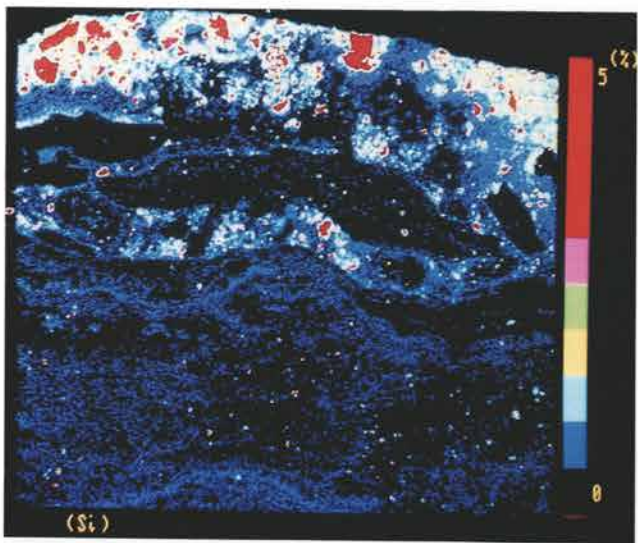
Cu CE9-21-2



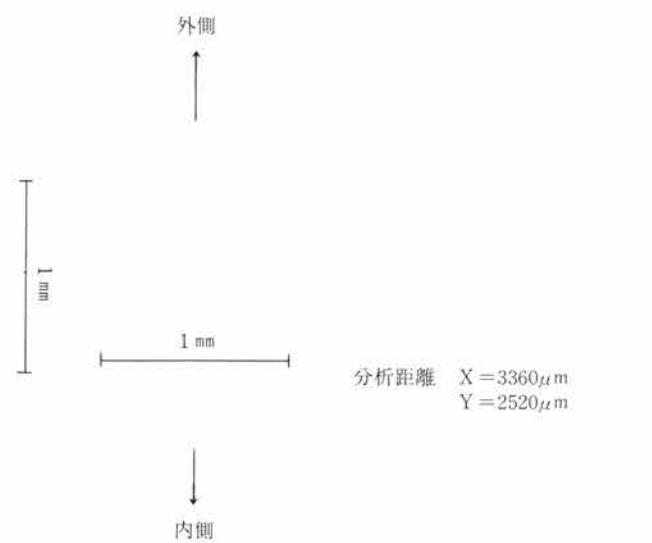
O CE9-21-6



Mn CE9-21-10



Si CE9-21-4



資料3 (S K84鉄剣)のFe, O, Si, Cu, Mnの濃土分布





## 序

関越自動車道新潟線は、太平洋側の首都東京と日本海側の新潟市を結ぶ高速自動車道として、昭和60年10月1日に開通いたしました。本道部の開通に際しては、数多くの埋蔵文化財が道路建設工事に先立って調査されました。本県でも58か所の埋蔵文化財包蔵地が発掘調査され、記録保存されています。

本報告による有馬遺跡は、渋川市有馬、及び八木原に所在する埋蔵文化財包蔵地であり、昭和57年1月から昭和59年1月にかけて、当事業団が調査しました。弥生時代の墳墓、住居、古墳時代の畑、古墳時代から平安時代にかけて継続的に営まれた集落跡等が調査され、弥生時代後期の人物形土器、鉄剣、礫床墓等古代における本県の歴史を知る上で数々の貴重な資料が得られました。昭和62年9月から、これらの資料の報告書作成のための整理作業が行われました。既に、古墳時代後期に大爆発した榛名山二ツ岳の火山灰が、降下して堆積したFA層より上層にある遺構については報告書が刊行されました。FA層より下層にある遺構については、今回整理が完了し、有馬遺跡の第2分冊として報告書を作成することができここに有馬遺跡の整理作業がすべて完了しました。

発掘調査から報告書の作成に至るまで、日本道路公団東京第二建設局、群馬県教育委員会、渋川市教育委員会、地元関係者等から種々のご援助、ご指導、ご協力を賜りましたことに対し、深甚なる感謝の意を表し、併せて本報告書が広く県民各位、研究者、教育機関等に活用され、本県の歴史を解明するための資料として役立てられることを願い、序とします。

平成2年3月1日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎



## 例 言

1. 本書は関越自動車道（新潟線）建設工事に伴い事前調査された有馬遺跡の報告書第2分冊である。本遺跡は縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中・近世、各時期にわたる複合遺跡であり、本書はこのうち弥生時代から古墳時代後期初頭（FA層以下の遺構）にかかる住居跡、周溝墓など集落に伴う遺構と畑跡、およびこれに伴う出土遺物の発掘調査結果を掲載している。
2. 本遺跡は群馬県渋川市有馬、および八木原に所在する。
3. 事業主体 日本道路公団東京第二建設局
4. 調査、整理主体 群馬県教育委員会から委託を受け（助）群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施。
5. 発掘調査期間 昭和57年1月30日～昭和59年1月31日
6. 発掘調査担当者

大西 雅広 神谷 佳明 佐藤 明人 関根 慎二 友廣 哲也 山口 逸弘

発掘調査、整理・報告書作成事務に関わった（助）群馬県埋蔵文化財調査事業団職員、及び役員（昭和56～58年度、同62～平成元年度）

小林起久治 白石保三郎 邊見 長雄 井上 唯雄 松本 浩一 大澤 秋良  
田口 紀雄 上原 啓己 神保 侑史 近藤 平志 定方 隆史 住谷 進  
平野 進一 真下 高幸 国定 均 笠原 秀樹 小林 昌嗣 須田 朋子  
吉田 有光 柳岡 良宏 並木 綾子 野島のぶ江 吉田 恵子 吉田 笑子  
今井もと子 松井美智子 角田みずほ

7. 本書の作成を担当した嘱託員、及び補助員

鈴木 幹子 福島恵理子 岩渕フミ子 神谷 順子 金子 加代 高橋 節子  
高柳 哲子 高田 栄子 田中 暁美 田村 栄子 田村 千種 平野 照美  
光安 文子 吉田せつ子 六反田達子

（3次元測定班）

長沼久美子 佐藤美代子 尾田 正子 八峠美津子 千代谷和子 高梨 房江

8. 本書の編集、執筆者

有馬遺跡におけるプラントオパール分析	宮崎大学農学部	藤原 宏志
有馬遺跡出土の弥生時代後期人骨について	聖マリアンナ医科大学	森本岩太郎 吉田俊爾
有馬遺跡出土鉄剣の分析	日立金属株式会社安来工場 冶金研究所	清永 欣吾
有馬遺跡出土ガラス玉の材質分析	慶応義塾大学文学部	富沢 威
	東京大学理学部	富永 健
	東京大学アイソトープ総合センター	小泉 好延
有馬遺跡資料花粉分析		パリノサーヴェイ株式会社
石製品の石材鑑定	群馬県地質研究会	飯島 静男
編集、本文執筆	（助）群馬県埋蔵文化財調査事業団	佐藤 明人

9. 本書の作成にあたり下記の諸氏の指導、協力を得た。

赤山 容造 新井 房夫 内田 俊秀 梅沢 重昭 大塚 真弘 大谷 猛 大塚 昌彦





大塚 初重 乙益 重隆 柿沼 恵介 熊野 正也 工楽 善通 小林 良光 小宮 恒雄  
近藤 義雄 田中 琢 千田 剛道 能登 健 宮崎 重雄 山口 明 山田 昌久  
横田 公男 横倉 興一

10. 本遺跡の発掘調査においては、日本道路公団、地元の関係者、及び大勢の発掘調査作業員の協力があった。

11. 出土遺物、実測図、写真、その調査記録は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

## 凡 例

1. 本書で使用する遺構番号は発掘調査時に付された数字を踏襲しているが次のように遺構の呼称記号を改めている。S J → 住居、S Z → 墓（周溝墓）、S D → 溝、S K については一部を土壌とする。
2. 挿図、遺物観察表、写真図版に付されている遺物番号は共通であり、遺物の種類にかかわらず出土遺構ごとに付された通し番号である。
3. 遺構図に示す北方向は国家座標に基づくものである。

遺構図中にスクリーンによる表現は  = 後世の攪乱による部分、 = 焼土帯、 = 灰、炭化粒子の広がり、 = 遺構基盤か第V層をそれぞれ表している。

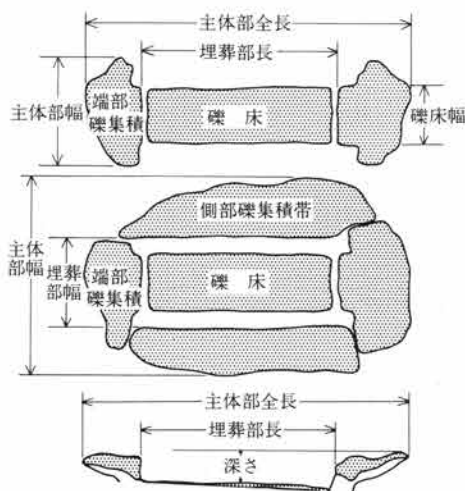
挿図中住居内のピットに付記した（ ）内の数値は床面からのピットの深さを表す。

断面図中の遺物ドットは床面からの高さを表わしている。

4. 遺構覆土中より出土した完形、半完形土器（1/6周以上）については復元実測し、およそ全点を掲載している。このほか文様の特徴が把握できる破片については拓本実測図を掲載している。
5. 遺物観察表において法量の項目中、口=口縁部の直径、頸=頸部の直径、胴=胴部の最大径、底=底部の直径、脚=脚部の直径をあらわす。単位はセンチメートル。胎土中の砂粒の粒子の大きさについてはおおよそ0.25~2.0mmの間を、細砂粒、砂粒、粗砂粒の3段階に区分している。

色調については農林省農林水産会議事務局監修新版標準土色帖に基づいている。遺存状態の項中に記された分数数値は全周を1とした場合の遺存の程度を表している。パーセントによる数値は全周を100としている。

6. 磔床墓の部位名称と計測点は下図に示すとおりである。墓計測表の単位はメートルである。
7. 挿図中の土器の描写では、ヘラミガキは、施す面に対して、くまなく一様に施すばあいと暗文のように間隔を空けて粗く施す場合があるが、本書では後者の場合のみ幅、本数を正確に表現し、前者の場合、同様な表現は困難であるため範囲、方向、ミガキの幅を表し、なるべく実感を似せるように努めた。写真図版中の遺物の縮尺は一律に挿図のおよそ95%であるが、一部に特に大型の土器棺が載る図版に限り挿図の80%としている。
8. 文中遺構の時期については伴出土器に従って弥生後期を第1期~第3期（前、中、後葉）の3時期に区分している。区分の根拠、内容については「関越自動車道（新潟線）調査報告書第18集 新保遺跡II」、及び佐藤明人「樽式土器の様式推移と地域色」『群馬の考古学』1988（財群馬県埋蔵文化財調査事業団に準拠している）。



# 目 次

(PL. は写真図版編)

序 文			
例 言			
凡 例			
1 発掘調査の経過	1頁	221号住居	PL. 20・100・101 …… 64頁
2 有馬遺跡の地理、歴史的環境	4頁	223号住居	PL. 20・101 …… 67頁
3 発掘調査の方法	7頁	224号住居	PL. 20・101 …… 69頁
4 標準層序	8頁	225号住居	PL. 20・101 …… 70頁
5 調査した遺構の概要	9頁	227号住居	PL. 21・101 …… 71頁
6 検出した遺構・遺物	9頁	232号住居	PL. 21・22・101 …… 73頁
(1) 住居観察表	9頁	235号住居	PL. 22・102 …… 75頁
(2) 弥生時代後期の住居跡	11頁	236号住居	PL. 23・102・103 …… 79頁
72号住居	PL. 8・95 …… 11頁	239号住居	PL. 22・103 …… 81頁
73号住居	PL. 9・95 …… 15頁	240号住居	PL. 23・24・103 …… 84頁
74号住居	PL. 9 …… 17頁	241号住居	PL. 24・104 …… 86頁
75号住居	PL. 10・96 …… 18頁	242号住居	PL. 24・104 …… 88頁
76号住居	PL. 10・96 …… 21頁	243号住居	PL. 25・104 …… 90頁
77号住居	PL. 10 …… 23頁	244号住居	PL. 25・104 …… 93頁
78号住居	PL. 10・11・96 …… 24頁	245号住居	PL. 26・105 …… 94頁
83号住居	PL. 11・97 …… 27頁	248号住居	PL. 26 …… 98頁
84号住居	PL. 11 …… 30頁	246号住居	PL. 26・27 …… 98頁
88号住居	PL. 11・12・97 …… 30頁	249号住居	PL. 27・105 …… 100頁
91号住居	PL. 12・98 …… 33頁	250号住居	PL. 28・106 …… 103頁
196号住居	PL. 12・98 …… 36頁	251号住居	PL. 28・106 …… 106頁
197号住居	PL. 12 …… 38頁	252号住居	PL. 29・107 …… 109頁
198号住居	PL. 13・98 …… 39頁	253号住居	PL. 29・30・107 …… 111頁
199号住居	PL. 13・98 …… 41頁	254号住居	PL. 30・107 …… 113頁
202号住居	PL. 14 …… 42頁	255号住居	PL. 31・108・109 …… 117頁
206号住居	PL. 14・15・98 …… 44頁	256号住居	PL. 31・109 …… 122頁
207号住居	PL. 15 …… 46頁	257号住居	PL. 32・109・118 …… 123頁
208号住居	PL. 16・98 …… 47頁	262号住居	PL. 32・110 …… 127頁
210号住居	PL. 16・99 …… 48頁	258号住居	PL. 32 …… 128頁
211号住居	PL. 17・99・100 …… 53頁	259号住居	PL. 32・33・110 …… 129頁
213号住居	PL. 17・18・100 …… 56頁	261号住居	PL. 33・110 …… 132頁
228号住居	PL. 18・100 …… 56頁	263号住居	PL. 32・33・110・111 …… 133頁
229号住居	PL. 18・100 …… 56頁	264号住居	PL. 32 …… 137頁
215号住居	PL. 18・19・100 …… 60頁	268号住居	PL. 34・111 …… 139頁
217号住居	PL. 19・100 …… 63頁	(3) 弥生後期～古墳前期の住居跡	142頁
		86号住居	PL. 34・111 …… 142頁
		87号住居	PL. 35・111 …… 144頁
		89号住居	PL. 35・111 …… 146頁
		90号住居	PL. 112 …… 149頁



195号住居	PL. 36	150頁	SK389、SK390、	
205号住居	PL. 36	151頁	SK391、SK393、	
219号住居	PL. 37・112	152頁	SK394、SK410、	
220号住居	PL. 38	154頁	SK442、SK445	
230号住居	PL. 38・112	155頁	8号墓	PL. 58・132・144
231号住居	PL. 39・112	157頁	SK421、SK422	267頁
237号住居	PL. 39	158頁	9号墓	PL. 59・133・144
260号住居	PL. 39・40・112	159頁	SK429、SK430、	272頁
(4) 古墳時代前期の住居跡		162頁	SK432	
82号住居	PL. 40・112～114	162頁	10号墓	PL. 60・133・144
85号住居	PL. 41・114	167頁	SK426、SK427、	277頁
200号住居	PL. 41・115	169頁	SK428	
201号住居	PL. 42・115	171頁	11号墓	PL. 61・62・133・144
203号住居	PL. 42・115	172頁	SK434、SK435、	280頁
204号住居	PL. 43・115	174頁	SK436、SK437	
209号住居	PL. 43・115・116	176頁	12号墓	PL. 62・63・133・144
212号住居	PL. 44・116・118	178頁	SK423、SK424、	284頁
214号住居	PL. 45・116	182頁	SK425、SK438	
216号住居	PL. 45・46・116・117	184頁	13号墓	PL. 63・64・133・144
233号住居	PL. 46・117	187頁	SK365、SK366、	288頁
234号住居	PL. 22・46・117・118	190頁	SK408、SK409	
(5) 墓跡		193頁	14号墓	PL. 64・134・144
1号墓	PL. 47・48・118・144	193頁	SK401、SK402	292頁
SK28、SK29			15号墓	PL. 65・66・134・144
2 A号墓	PL. 48・49・119・144	198頁	SK396、SK397、	295頁
SK31、SK41			SK412、SK413、	
2 B号墓	PL. 49・50・119・120	202頁	SK414、SK415、	
SK45	PL. 144		SK416	
3号墓	PL. 50・120・144	206頁	16号墓	PL. 66・134
SK54			SK446	300頁
4 A号墓	PL. 51・120・144	209頁	17号墓	PL. 66・67・144
SK66			SK136、SK137、	302頁
4 B号墓	PL. 52・120・144	211頁	SK138、SK139、	
SK75、SK76、			SK143	
SK78			18号墓	PL. 67・68・135・144
5号墓	PL. 53・54	214頁	SK114、SK115、	306頁
SK83、SK84、	PL.120～123・144		SK116、SK117、	
SK85、SK86、			SK119、SK134	
SK87、SK100			19号墓	PL. 68～70・135・145
6号墓	PL. 54・55	230頁	SK108、SK109、	311頁
SK440、SK441	PL. 124～130・144		SK110、SK111、	
7号墓	PL. 55～58	254頁	SK113、SK132、	
SK387、SK388、	PL. 130～132・144		SK133、SK135、	

SK140、SK142、 SK145		その他の土器棺 PL. 81・143 ……………371頁 SK130、SK184
20号墓	PL. 70・71・135・145 ……320頁	(7) 土壌、石囲遺構 PL. 81・145 ……………373頁 56号土壌、59号土壌、 63号土壌、93号土壌、 379号土壌、447号土壌、 453号土壌、454号土壌、 石囲遺構
SK107、SK131、 SK126		
21号墓	PL. 71・72・135 ……………324頁	
SK95、SK128、 SK129		
22号墓	PL. 72・135 ……………327頁	(8) 溝 PL. 81・145・146 ……………378頁 20号溝、21号溝、22号溝、 26号溝、44号溝、 46号溝、47号溝
SK144		
23号墓	PL. 72・73・145 ……………328頁	(9) 古墳時代の畑跡……………385頁 古墳時代初頭の畑跡 PL. 82・83 ……………385頁 (浅間C軽石層直下) 古墳時代中期の畑跡 PL. 84 ……………389頁 (有馬火山灰層直下) 古墳時代後期の畑跡 PL. 85～93 ……………392頁 (二ツ岳火山灰層・FA直下)
SK448、SK449、 SK450、SK452		
24号墓	PL. 73・135 ……………332頁	(10) 土器群、礫群 PL. 94・147～151 ……………407頁 包含層出土遺物
SK451		鑑定分析……………425頁
25号墓	PL. 73 ……………333頁	(1) 有馬遺跡出土の弥生時代後期の人骨に ついて PL. 153～155 ……………425頁
SK125		(2) 有馬遺跡資料 花粉分析 PL. 156～158 ……………432頁
(6) 土器棺		(3) 有馬遺跡における プラントオパール分析……………437頁
土器棺A群	PL. 74・75・136・145 ……334頁	(4) 有馬遺跡出土鉄剣の分析……………441頁
SK90、SK91、 SK94、SK97、 SK98、SK123、 SK380、SK404		(5) 有馬遺跡出土 ガラス玉の材質分析……………446頁
土器棺B群	PL. 75～79 ……………340頁	8 まとめ……………460頁
SK92、SK96、 SK127、SK367、 SK368、SK369、 SK370、SK371、 SK372、SK373、 SK374、SK376、 SK377、SK378、 SK385、SK417、 SK418、SK419、 SK420	PL. 137～140・145	9 付 図 付図1 有馬遺跡弥生、古墳時代遺構全体図(1) 付図2 同 上(2) 付図3 有馬遺跡古墳時代FA層直下畑(1) 付図4 同 上(2) 付図5 有馬遺跡古墳時代FA層直下畑旧畝跡
土器棺C群	PL. 79・141 ……………358頁	
SK383、SK386、 SK395、SK398、 SK400、SK411		
土器棺D群	PL. 80・142・145 ……………363頁	
SK70、SK72		
土器棺E群	PL. 80・142・143 ……………366頁	
SK82、SK88、 SK106、SK120		

## 1 発掘調査の経過

### (1) 発掘調査の経過

有馬遺跡の発掘調査は昭和57年1月22日に開始された。有馬遺跡の調査体制及び調査計画は、関越自動車道の60年全面開通の工事日程と関係遺跡の調査計画と連動させながら進められた。このため工所用資材搬入道路、ボックスカルバートなどの構造物と本道部を分離しての調査、中途段階での大久保B遺跡への調査班の移動など調査工程・調査体制上複雑さを伴うものとなった。

関越自動車道新潟線関係遺跡の発掘調査に至る経過と調査の経過の概要は以下のようである。関越自動車道新潟線建設の基本計画が決定された昭和44年に群馬県教育委員会により始めて分布調査が行われ、さらに昭和46年整備計画に基づく計画路線内の関連公共事業の調査に伴う、文化財調査が県教育委員会により実施され、渋川以南に有馬遺跡を含む22遺跡が確認された。この調査結果に従って、昭和48年「関越自動車道新潟線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する了解事項」が締結され、これにより昭和48年以後群馬県教育委員会の直営により発掘調査が着手された。昭和54年には前橋インターチェンジ以南の15遺跡の調査が完了し、昭和55年共用開始を見ている。

前橋インターチェンジから以北の調査予定遺跡（前橋～月夜野町間で27遺跡、60万㎡）の発掘調査については有馬遺跡の発掘調査開始時点では、ほとんどが未着手あるいは未完遂であった。これらの遺跡の発掘調査は、群馬県埋蔵文化財調査事業団が16遺跡を受託実施し、それ以外は関係市町村に県教育委員会から職員を派遣して対応するところとなった。

本事業団が対応した16遺跡は一部群馬町地区では53年時点から着手をみているが、56年度から58年度の3か年の間に本格実施されている。

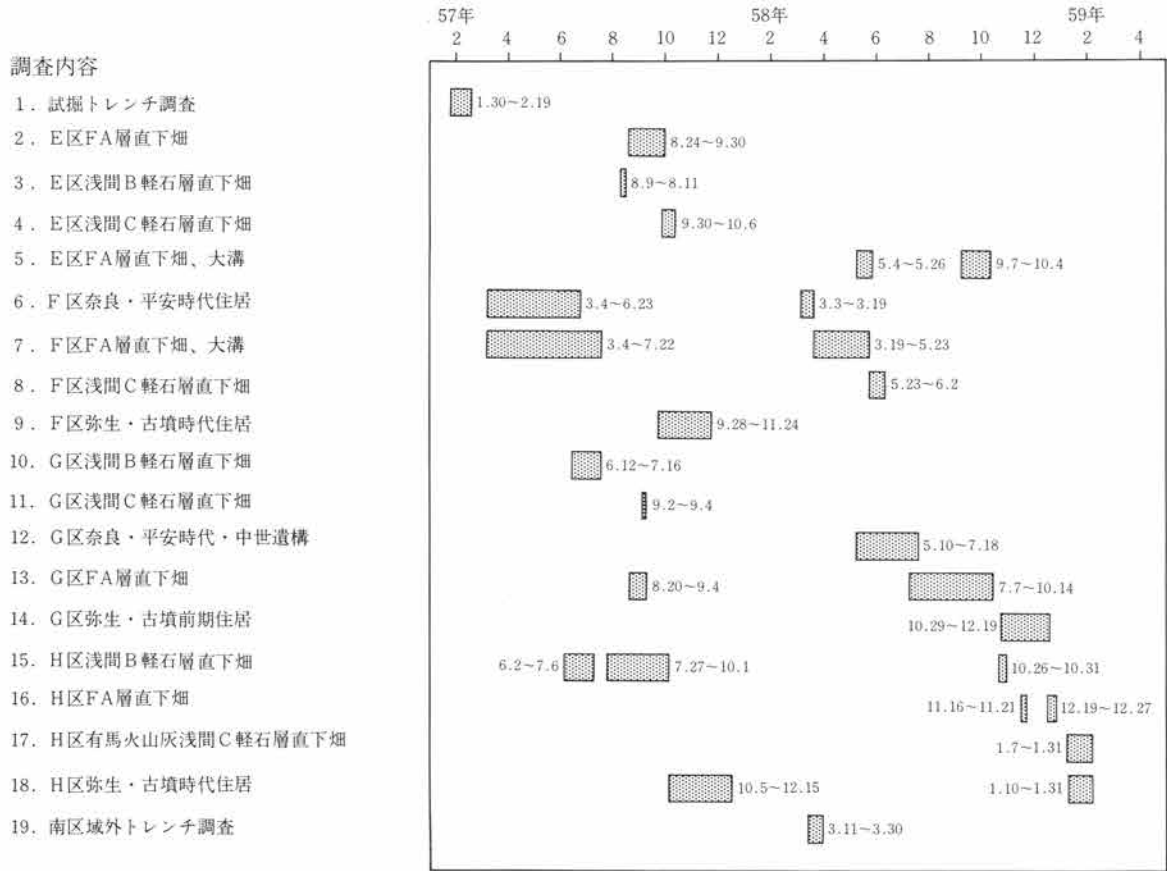
有馬遺跡調査班は、56年1月から57年度の調査では工事工程上の要請により早期に取りかかる必要のある工所用道路部分及びボックスカルバート区域の調査を完了させ、引き続き大久保B遺跡の調査に当たった。当初計画では有馬遺跡の本道部の調査は58年度に別班が投入される予定であったが、大久保B遺跡の発掘調査では予想されていた古墳群が調査区内に確認されず、また奈良・平安時代集落の中心からも外れたことにより、調査は短期に終了し、58年2月に調査班は再度有馬遺跡に戻った。

58年度の本道部の発掘調査では、確認された遺構数量に対応するには有馬班の現状の班体制では困難であることが予想されたため有馬条里班の応援を受けることとなった。昭和58年10月12日～11月5日、及び12月8日～12月21日有馬条里班の応援を受けた。

遺跡の範囲確認試掘調査は昭和57年度調査開始時期に当初調査予定区域（E～H区）に対して実施された。その後調査の進行に伴って遺構の広がり北、及び南へ当初調査予定区域外へ延びることが判明したため路線内の北区域外、及び南区域外への遺跡の範囲確認調査が行われた。遺構の南区域外のトレンチ試掘調査は昭和58年3月11日から3月30日にかけて行われ、北区域外では58年11月20日～25日にかけて実施された。この結果南区域外では各時代の畑の存在が認められ、そのうちでも古墳時代FA層直下の畑の検出面は地表下6mに達した。畑以外の遺構は認められなかった。北区域外では遺構面は深く、湧水も著しく、この調査では北の範囲確認についてのなんら成果を得る見込みが立たず、所期の計画は中断した。早期のうちに北区域外の状況が把握できなかったことは調査最終段階になってH区の平面調査により北区域外へ遺構が濃密に延びることが確認されながらも十分な対応ができないという状況に追い込まれた。結果的には諸般の制約によ

# 1 発掘調査の経過

り北区域外への調査区の拡張は確認された住居の及ぶ範囲である10m以内にとどまらざるを得なかった。



第1図 発掘調査の経過

## (2) 調査日誌

### 昭和57年

- 1.25 資材搬入、諸準備。発掘調査開始。
- 1.30~2.19 試掘トレンチ調査の実施。
- 2.13 群馬大学新井房雄教授土層観察指導のため来訪。
- 2.17 F区~H区、東側道、ボックスカルバート部（以下ボックス部とする）の試掘に着手。
- 2.27 F区東側道、ボックス部遺構確認作業着手。
- 3.4~6.23 F区東側道、ボックス部南部、奈良・平安時代住居FA層直下畑、大溝の確認、調査。
- 4.22 F区側道、ボックス部南部、奈良・

平安時代住居、FA層直下大溝、FA層直下畑の調査続行。

- 6.2~7.6 H区ボックス部浅間B軽石層直下水田の調査。
- 6.12~7.16 G区浅間B軽石層直下畑の調査。
- 6.23~7.22 F区北部FA層直下畑の調査。
- 7.27~10.1 H区北ボックス部FA層直下畑の調査。
- 8.4 宮崎大学藤原宏志氏プラントオパール採取。NHK宮崎支局が取材。
- 8.9~8.11 E区東側道部浅間B軽石層直下畑の調査。
- 8.20~9.4 G区FA層直下畑の調査。
- 8.24~9.27 E区FA層直下畑の調査。
- 9.2~9.4 G区東側道部浅間C軽石層直下畑の

1 発掘調査の経過

- 調査。
- 9.18～9.30 E区FA層直下畑の調査。
- 9.28～11.24 F区弥生、古墳前期住居の調査。
- 9.30～10.6 E区浅間C軽石層直下畑の調査。
- 10.5～12.15 H区北ボックス部弥生、古墳前期住居の調査。
- 10.28 墓主体部覆土の水洗いによる玉類検出作業着手。
- 11.1 大久保B遺跡の調査開始。調査担当者、作業員の一部を分遣する。
- 11.3 現地説明会を実施する。
- 11.20 リモコン飛行機による航空写真撮影。
- 11.24 花粉分析、資料採取。
- 11.1 新井房雄群馬大学教授土層観察指導。
- 12.2 有馬調査班の主力を大久保B遺跡に移す。
- 12.6 渋川市教育委員会による礫床墓、土層の移築保存作業実施。
- 12.18～19 ステレオ写真実測の実施。17号、18号、19号、20号、22号墓
- 昭和58年
- 2.26 大久保B遺跡の調査終了に伴い調査班を有馬遺跡に戻す。本格調査再開。F区本道部の表土掘削着手。浅間B軽石層直下～第III層上面の遺構確認。
- 3.3～3.19 F区本道部奈良・平安時代住居、浅間B軽石層直下畑の調査。
- 3.19～5.23 F区本道部FA層直下畑の調査。
- 3.11～3.30 南区域外トレンチ調査。
- 3.15 南区域外トレンチ浅間B軽石層直下畑、FA層直下畑を検出。
- 5.4～5.26 E区本道部FA層直下畑、大溝の調査。
- 5.10～7.18 G区本道部南部奈良・平安時代、中世遺構の調査。
- 5.16 セスナ機によるFA層直下畑の航空写真撮影。
- 5.19 F区本道部FA層直下畑の掘り方調査。G区本道部北部奈良・平安時代住居群の調査本格化する。
- 5.23～6.2 F区本道部浅間C軽石層直下畑の調査。
- 6.9～ F区本道部第IV層の遺構確認調査。弥生時代以前の遺構は希薄である。
- 7.7～10.14 G区本道部北部FA層直下畑の調査。
- 7.29 F区本道部埋め戻し。
- 8.6 G区浅間C軽石層直下遺構確認。畑を小部分で確認。
- 9.7～10.4 E区町道部の調査。
- 9.26 G区本道部南部弥生時代遺構の確認作業。
- 10.12 G区本道部南部弥生時代遺構の調査。本格着手。
- 10.14 G区本道部北部弥生時代遺構確認着手。
- 10.26～10.31 H区浅間B軽石層直下水田の調査。
- 10.29～12.19 G区本道部北部弥生、古墳前期住居の調査。
- 11.16～11.21 H区本道部FA層直下畑の調査。
- 11.28～2.23 電動フルイにより墓主体部覆土中の玉類など洗い出し作業。
- 11.30 H区本道部有馬火山灰層下の遺構確認作業。
- 12.17 礫床墓のステレオ写真実測着手。
- 12.19～12.27 H区北部FA層直下畑の調査。G区埋め戻し。
- 昭和59年
- 1.7～1.13 H区北部浅間C軽石層直下畑の調査。
- 1.10～2.2 H区北部遺構確認作業。有馬火山灰層直下より畑検出する。浅間C軽石層直下畑の調査。弥生、古墳時代住居の調査。
- 1.23 遺構が調査区域外へ延びているため、H区の調査区を北へ7m拡張する。
- 1.27 新井房雄教授来跡。土層観察指導。
- 2.2 発掘調査終了。土器洗い、図面整理。
- 3.26 現場撤収。

## 2 有馬遺跡の地理、歴史的環境

有馬遺跡は渋川市有馬字前原・同八木原字川原皆戸に所在する。遺跡の位置はJR上越線八木原駅の西方へおよそ700m、県道八木原停車場線と午王川の間で挟まれた、南北500mの区域である。現況は一带に桑、野菜を主とする畑地帯で、北部の低湿な地帯では午王川沿いに水田が東西方向に延びている。調査が実施された区域には、現在関越自動車道が完成し、頭上を上り線、下り線の車両が頻繁に往来している。

遺跡は榛名山の東山麓部最下段の緩傾斜地の中位に位置する。榛名山東山麓は山体部と山麓山地部、最下段の利根川に接する平坦な緩傾斜地にはっきり別れる。山体部は標高1,448mを最高峰とする山頂カルデラを形成し、その東側には新規に噴出した寄生火山、二ツ岳、水沢山が取り付いている。東部山麓山地は水沢山の裾部、標高600mの水沢観音付近から東へ下り、五輪平を経て標高290mの若伊香保神社裏手の台地上までのおよそ4.2kmに及ぶ地帯である。最下段の緩傾斜地はこの台地下の標高220mからおよそ3km下り、標高150mで利根川に接するまでの地帯である。遺跡の占地する緩傾斜地の勾配は1,000分の23である。

遺跡周辺の地形は6世紀初頭から中頃にかけての、榛名山二ツ岳の2回の噴火を契機に大きく変容する。この一連の噴火に伴う火砕流の堆積の後、これに誘発された河川氾濫、河川侵食、河道の変遷などが頻発し、周辺環境は不安定な状態が長く続く。有馬遺跡の周囲においては火砕流（軽石流）と以後の氾濫堆積物の厚さは深いところで4～6mに達している。

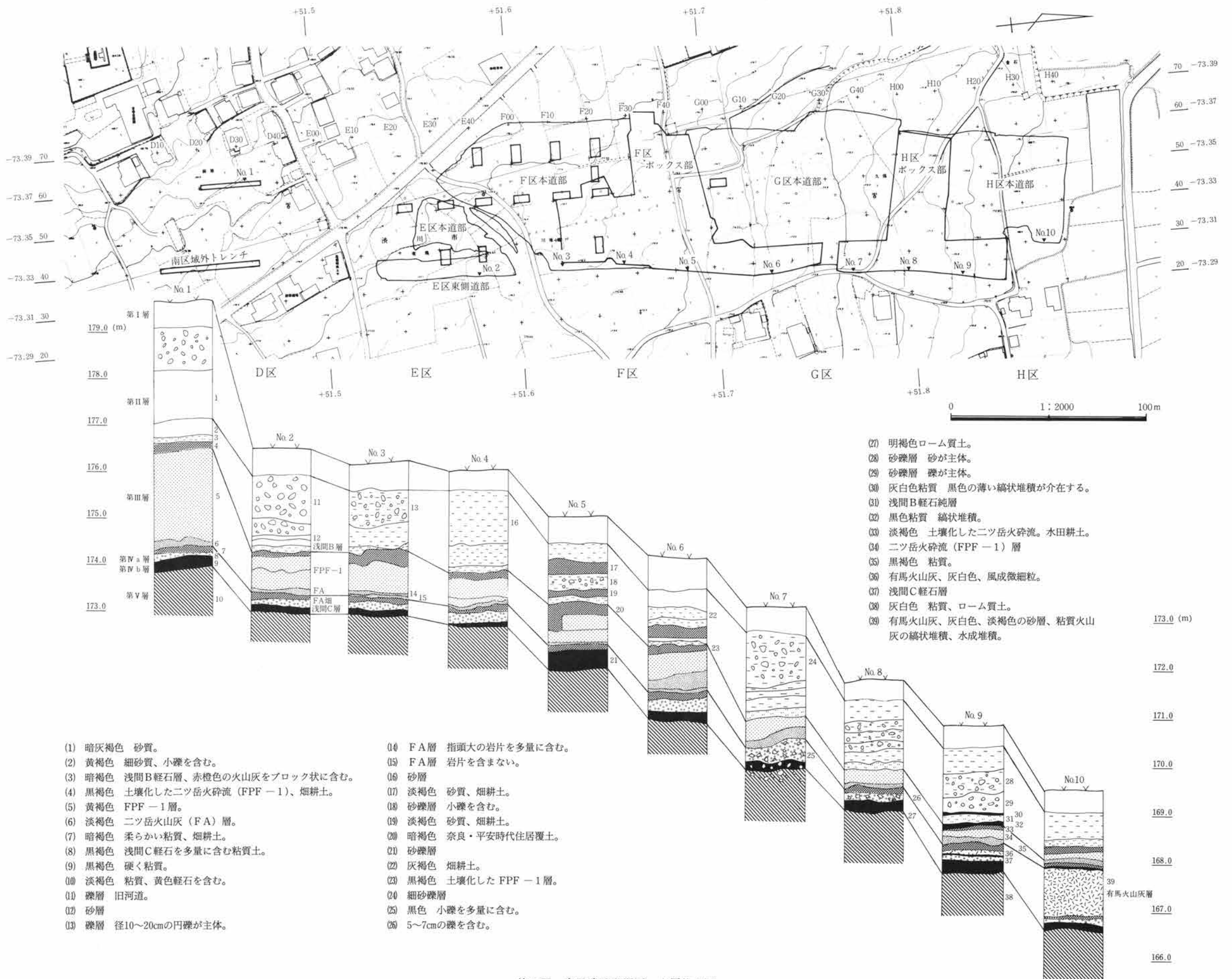
有馬遺跡は山麓山地を深く谷を作って流下する2条の小河川、滝沢川と午王川に挟まれた台地状の高燥地から北方に低い緩傾斜地にかけて立地する。この付近を境に以北と以南の地域では地形、地質上の差は大きい。有馬遺跡の北部（G、H地区）から午王川付近にかけては急勾配で北方向に傾斜し、以北には有馬田圃と呼称する広域な水田が広がっている。台地部と水田面との比高はおよそ10mを前後する。一方、台地部は、吉岡村、群馬町方面の火山扇状地へと続く、一带に高燥な畑作地帯である。

渋川市街地付近の更新世における地形生成については「ボーリング資料等によると下部から必ず円礫を多く含む砂層が出でることから吾妻川が悠々と流れていた川原であったことがわかる。この川原には吾妻川が運んできた土砂が堆積するとともに山麓部をけずりこんだ小河川から、山麓部堆積物が運ばれた小さな扇状地をつくりながら、吾妻川の流路を東へ押しやっていく傾向にあった。」と説明されている<sup>(1)</sup>。

遺跡地内台地部の第V層（ローム層）は薄い砂礫層を介在させながら2～3mの厚さの堆積をみるが、その下層には拳～人頭大の円礫層となる。この状況から、北の低地部では大河川の作用が主に進行したのに対して、台地部では更新世後期には川原上に専ら、上記の扇状地堆積物と関東ローム層の堆積が進み台地化したものと理解されよう。

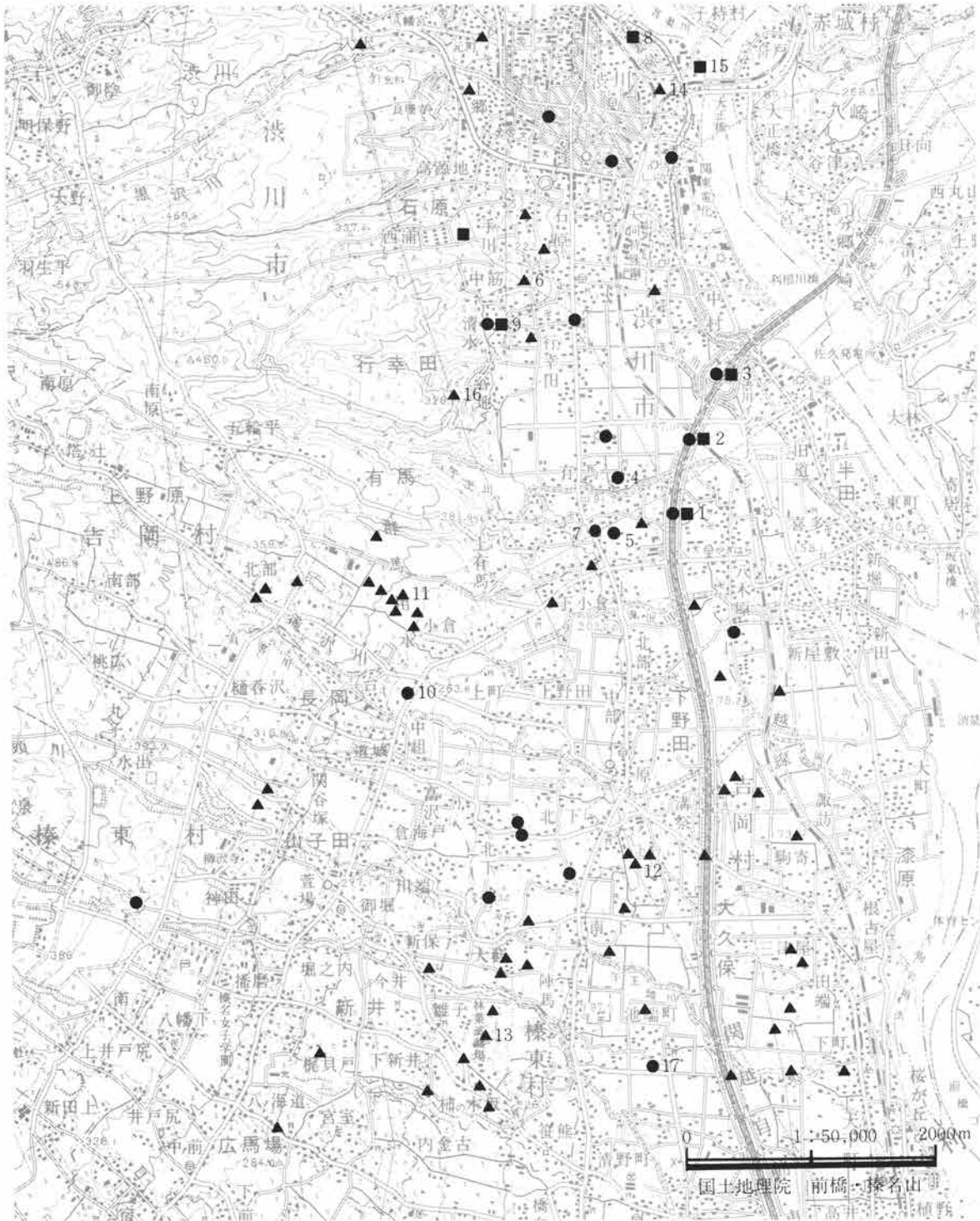
6世紀の二ツ岳噴火に伴う火砕流は午王川、吉岡川間の山麓山地の谷合を流下し、西南方向から遺跡地に流入し、古墳時代の畑を埋め尽くしている。火砕流の堆積は山麓山地の端部では、午王川の谷の右岸壁は厚さ6m以上、滝沢川と関越自動車道が交わる辺りで2m以上、有馬遺跡地内では最南部で厚さ1.5m、最北部で30cmであり、南方向に厚く、北に薄い様子が顕著に認められる<sup>(2)</sup>。なお二ツ岳第2軽石流（FPF-2）の堆積は本遺跡の調査区内ではほとんど認められないが、本遺跡の北に隣接する有馬条里遺跡ではFPF-1が1.2m前後、FPF-2は1.5mに達する堆積がみられるのでここでは別な流入経路を検討する必要がある<sup>(3)</sup>。二ツ岳の噴火以後、山麓山地における新たな侵食谷の生成に伴う土砂の流出と堆積、氾濫、河道移動などにより渋川市域一帯の変貌は大きく、旧地形は厚い土砂に深く覆われている<sup>(4)</sup>。





第2図 有馬遺跡発掘区・土層柱状図





- |           |             |              |
|-----------|-------------|--------------|
| 1. 有馬遺跡   | 7. 鳥居貝戸遺跡   | 13. 長久保古墳群   |
| 2. 有馬条里遺跡 | 8. 坂之下遺跡    | 14. 東町古墳群    |
| 3. 中村遺跡   | 9. 中筋遺跡     | 15. 坂下町古墳群   |
| 4. 後田東遺跡  | 10. 平石遺跡群   | 16. 行幸田山古墳群  |
| 5. 有馬廃寺遺跡 | 11. 有馬堂山古墳群 | 17. 清里・庚申塚遺跡 |
| 6. 空沢遺跡   | 12. 南下古墳群   |              |

- 弥生時代集落跡
- 古墳時代遺跡
- ▲ 古墳

第3図 有馬遺跡と周辺遺跡

## 2 有馬遺跡の地理、歴史的環境

周辺の遺跡について見ると、渋川市街地を中心に東麓一帯は上記のように厚く土砂に覆われており、現地表からの把握は他地域に比べると進んでいない。しかし近年関越自動車道建設に代表されるような大規模な開発事業に伴う遺跡の調査が続くなかで、弥生、古墳時代の事情も次第に明らかになりつつある。弥生時代～古墳時代前期の遺跡を近隣に求めると、有馬遺跡の北に隣接し、関越自動車道建設に伴い調査された有馬条里遺跡、さらにその北に続き、同様な調査が行われた中村遺跡<sup>(5)</sup>、北西方向400m、午王川の左岸の後田東遺跡<sup>(6)</sup>などは有馬遺跡に直接関連をもつ集落遺跡である。有馬条里遺跡と中村遺跡の間には幅20m程の小河川茂沢川を挟むが弥生集落は直接つながっている。両遺跡にまたがるこの弥生中期～古墳中期の集落はこの間連続と継続し、住居軒数は100軒近くに及んでいる。後田東遺跡では午王川左岸の微高地上に弥生時代住居7軒を調査している。また本遺跡の西方450mでは有馬廃寺遺跡の一画で弥生後期前葉の住居2軒が調査されている<sup>(7)</sup>。有馬遺跡を中心とする1.5kmの範囲は本県でも例の少ない大規模継続型の集落群域であったといえよう。渋川市街周辺地域では、礫床墓や鉄剣が検出された空沢遺跡<sup>(8)</sup>や、弥生住居が調査された鳥居貝戸遺跡<sup>(9)</sup>など、この時期の集落遺跡は、包蔵地が軽石流、砂礫層に厚く覆われた広域な低地地帯の縁辺部に比較的濃い分布が認められる。

翻って遺跡の南方、現在一帯に畑地帯が広がる吉岡村、群馬町に続く台地部では弥生～古墳前期の分布は希薄である。弥生中期、竜見町式期の環濠集落、清里庚申塚遺跡<sup>(10)</sup>の他は見るべき調査例はない。この相馬ヶ原火山扇状地を中心とする地帯は弥生時代にあつては高崎周辺地域の濃厚な集落遺跡分布域との間にあつて地域交流上の緩衝地帯であったともみなすことができる。

古墳時代後期の段階では、有馬遺跡の調査区域内は、一面に畑に転換するが、同様な状況が有馬条里遺跡においても認められる。有馬条里遺跡では二ツ岳火山灰（FA）層下は畑、FP・二ツ岳火砕流（FPF-2）の直下は一面に小区画水田が検出されている。中村遺跡ではFA、FPの直下は共に幅30m程の浅い谷地に小区画水田が調査されている。また本遺跡の北方4kmの吾妻川沿いに位置する坂之下遺跡<sup>(11)</sup>の調査でもFA直下から小区画水田を検出している。中筋遺跡<sup>(12)</sup>ではFA直下から畑と水田が共に検出されている。総じて狭小な水田可耕地の周囲に広域な畑地帯が展開するといった景観を示している。

目を転じ遺跡の南方ではFA直下畑が本遺跡の西南3kmに所在する吉岡村平石遺跡群<sup>(13)</sup>で調査されており、これが現在のところ東麓地域におけるFA直下から検出される畑の南限の例である。東南麓地域では群馬町国分寺中間遺跡<sup>(14)</sup>の畑が北限であり、この間には畑はもとより、弥生後期以降6世紀前半期の遺跡は希薄である。しかし6世紀後半以降はこの地域一帯に大規模な集落、古墳群が出現する。有馬堂山古墳群、南下古墳群、長久保古墳群など火山泥流丘に寄生した横穴式古墳を主体に、その数は昭和10年編纂の上毛古墳総覧に掲載されたもので688基を数える。一方渋川市域周辺では4世紀から6世紀にかかる古墳群は、昭和30～40年代に東町古墳群、坂下町古墳群、井野熊古墳、子持村有瀬古墳群など積石塚古墳が古くから知られ、近年では行幸田古墳群<sup>(16)</sup>、空沢古墳群<sup>(17)</sup>などこの時期の古墳の調査例は多くにのぼっている。その後は終末期まで、一貫して前方後円墳や大型古墳は作られないという地域の特色を見せながら、截石切組式の県指定虚空蔵塚古墳や前庭、扉石を持つ金井古墳、有馬遺跡の西へ2km登った地点の軽石流上に造られた172基（古墳総覧掲載）からなる堂山古墳群など、多くの後期、終末期古墳が造営されていく。

### 参考文献

- (1) 久保 誠「渋川誌史 第1巻 自然編」1987 渋川市誌編纂委員会
- (2) 佐藤明人「有馬遺跡—有馬遺跡周辺の域性」『研究紀要1』1984 群馬県埋蔵文化財調査事業団

- (3) 新井房雄氏の現地調査の結果による。
- (4) 「有馬条里遺跡」『年報3』1984 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (5) 「中村遺跡—関越自動車道路(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書」1986 渋川市教育委員会 群馬県教育委員会
- (6) 「後田東遺跡—市内遺跡I—渋川市発掘調査報告書第19集」1988 渋川市教育委員会
- (7) 「有馬廃寺遺跡—渋川市発掘調査報告書第16集」1988 渋川市教育委員会
- (8) 「空沢遺跡第2次・諏訪ノ木遺跡発掘調査概報」1980 渋川市教育委員会
- (9) 文献(6)と同じ
- (10) 「清里・庚申塚遺跡」1981 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (11) 文献(6)と同じ
- (12) 「中筋遺跡第2次発掘調査概要報告書」1988 渋川市教育委員会、水田の調査については大塚昌彦氏より教示。
- (13) 「平石遺跡群発掘調査報告書」1988 群馬県北群馬郡吉岡村教育委員会
- (14) 「国分寺中間地域遺跡」『年報2』1983 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (15) 尾崎喜左雄「古墳文化」『北群馬・渋川の歴史』1971 北群馬・渋川の歴史編纂委員会
- (16) 「行幸田山遺跡」1978 渋川市教育委員会
- (17) 「空沢遺跡—渋川市発掘調査報告書III」1978 群馬県渋川市教育委員会、「空沢遺跡(第3次)」1982 群馬県渋川市教育委員会

### 3 発掘調査の方法

**グリッド設定法** 関越調査道の建設予定区域は幅員約80mである。建設予定区域は有馬地区では遺跡地をほぼ南北方向に貫いている。グリッドの軸線方向、グリッドポイントは国家座標に沿って設定した。すなわち国家座標のY軸方向(南北方向)に一致させて、グリッドのY軸を設定し、この直角方向をX軸とする。グリッドの最小単位は2m方眼である。

グリッド呼称法は、Y軸については中軸線を50とし、東から西に2mごとに数値は増していく。X軸方向は100mごとに南からE地区～H地区を設定し、各区間に設定された50グリッドはそれぞれ頭にE～Hのアルファベットを付して南から00～49の数値をもって呼ぶこととした。たとえばE区のあるグリッドを呼ぶには50—E29、G区では60—G07となる。

国家座標とグリッドの対応関係は、グリッドのYの数値20は、国家座標第IX系のYの数値-73.290に一致する。同様に(Y)30は(Y)-73.310、(Y)40は(Y)-73.330、(x)E00は(X)+51.500、(x)G00は(X)+51.700にそれぞれ一致する。

**遺構の検出方法** 弥生後期、古墳前期の住居の確認、検出は第IVb層の面でできるよう努めたが多くの場合第IVb～第V層の漸移層で確認、検出を行っている。検出作業の最終段階では柱穴など、住居内外を第V層(ローム質土層)まで下げて精査した。

墓については周溝や主体部の土壌を第IVb層段階では正確に確認検出できなかった。調査段階で検出した周溝、土壌についても正確さを欠いたと判断されるものは本書では削除している。総じて周溝は第V層以下に深く達していないものも多いので本来周溝が存在していたにもかかわらず、検出されていない場合も少な



#### 4 標準層序

くないと思われる。主体部については、礫床や礫集積は土壌を伴っていたと思われるが、多くの場合検出できなかったため検出状態は礫床、礫集積が周囲から浮き上がった状態になり、実測図もこの状態のままを表現している。

主体部内の遺物についてはガラス小玉など細かな物でも出土位置を記録することに努めた。検出段階で確認できなかった物でも、主体部の土は、総てふるいにかけてながら水洗いしているため漏らさずに取り上げられたとみて良いだろう。

## 4 標準層序

本遺跡の自然堆積層の状況は南部の高燥地区（E～G区）とH区では若干様相を異にする。遺跡の周辺の地形についてみると、G区の傾斜部を境界にして以北のH区と以南のE、F区では地形、地質条件の差が大きい。それは対称的な土地利用現況、大きな標高差、湧水位の違い、浅間C軽石を始めとする軽石の堆積状況の違いなど全般にわたって認められる。

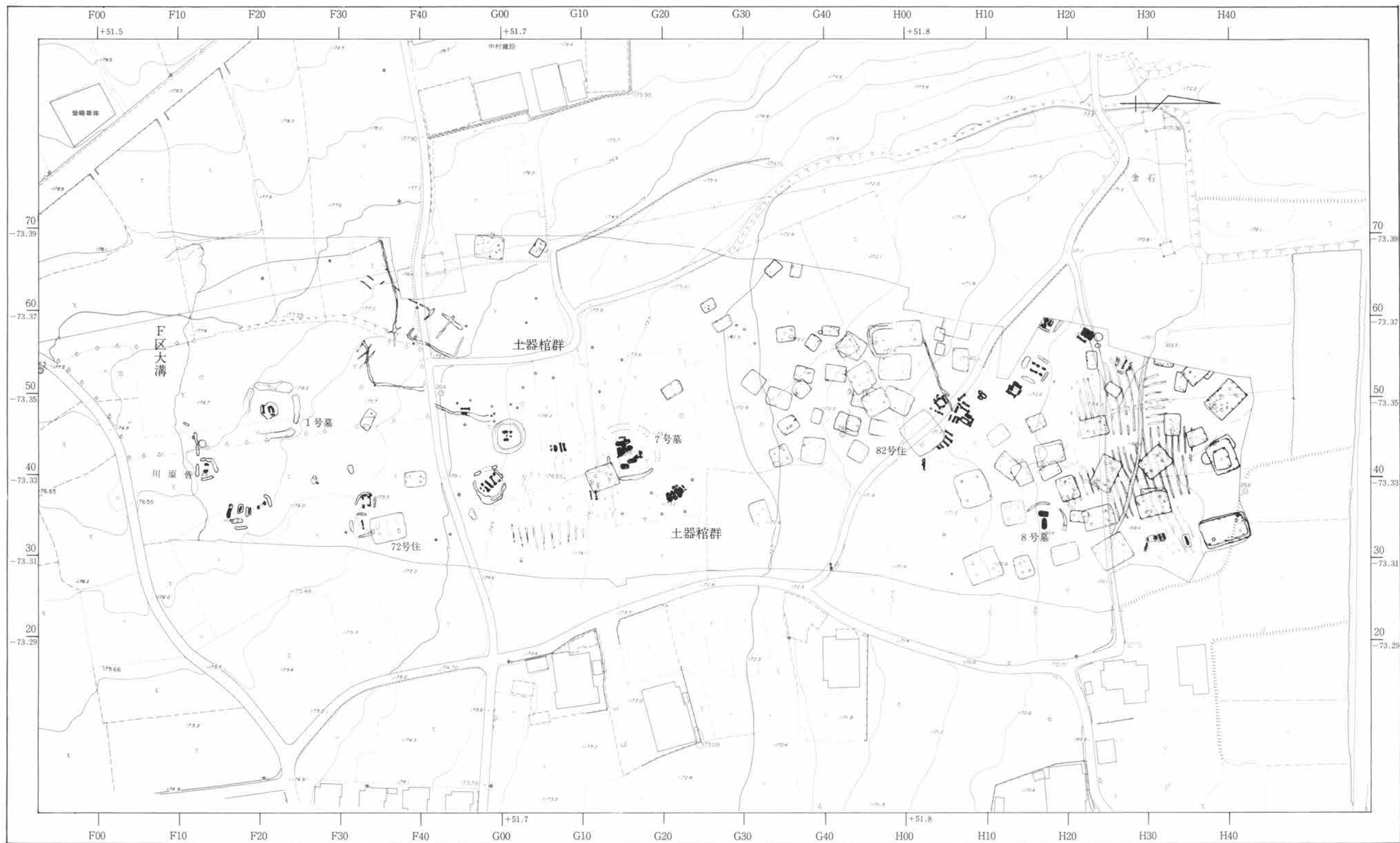
**第I層** 現耕作土である。E～G区は畑、H区では水田である。E、H両区の地表面における比高は7～8mである。畑耕土は厚さ30～50cm灰褐色で砂質である。水田耕土は暗灰褐色でやや粘質である。浅間A軽石層の堆積は明瞭ではない。

**第II層** E～H区全域にわたって1～1.5mの厚さで、灰褐色の砂礫層が堆積する。数層の砂礫層からなり、砂礫の大きさや層の厚さは各区で多様である。特にE区では河道の跡が見られ厚さ20cm～1mの礫層が見られる。F～G区では厚さ1m前後で薄い褐色細砂層を介させながら砂層中に1～3cmの軽石を多量に含む。最下層には浅間B軽石層の純層が堆積する。E～G区ではB軽石層は厚さ2～3cmで4～5か所で、砂層や浅間B軽石層に覆われた大小の畑の広がりを検出している。H区では暗灰色の浅間B軽石純層が5cm前後安定的に堆積している。浅間B軽石層を挟んで上下に、厚さ3cm前後の黒色粘質土の縞状堆積が認められる。縞状堆積には、緩い水流による波状の乱れが認められる。この黒色土中にはヨシ類の葉が珪酸体の状態で多量に含まれている。この直下層は奈良・平安時代の水田耕土であるが、耕土面と浅間B軽石層の間にはこの黒色土層が介在する。

**第III層** 榛名山二ツ岳火山噴出物を主成分とする。E～G区では最上層は黒褐色で土壌化した火砕流（FPF-1）で、奈良・平安時代の遺物包含層、最下で遺構を確認している。浅間B軽石層直下の畑の耕土でもある。以下はFPF-1層、FA層との間層は無く、下位層へ続く。二ツ岳火山第二軽石流（FPF-2）、およびFPは調査区域内には認められない。調査区内の一部でFPF-1層直上に2～3mmの黄褐色の軽石粒の薄いブロックが確認される。これは調査区の隣接地域にFPF-2が流下した際巻き上がった灰塵の堆積と想定される。FPF-1層は黄褐色で厚さ30cm～1.5mで南に厚く北に薄い。FA層は厚さ5～7cmであり、上下2層に分離できる。上層は指頭大の黒灰色の岩片を多量に含み、下層にはこれが見られない。H区ではFPF-1層の上部7～10cmは淡褐色に土壌化した奈良・平安時代の水田耕土である。

**第IV層** 最上部は畑の耕土である。厚さは10～15cm。E～F区では暗褐色で比較的柔らかくやや粘質である。G区では畑の耕土は黒味が強く礫の混在が目立つ。中部部は浅間C軽石混土層（第IVa層）で、厚さ5～10cm。軽石層下に畑が検出される。E～G区では黒褐色の軽石混土層である。H区では厚さ5～7cm、灰黒色で純層に近い。E～G区でも畑や周溝墓の溝内にはC軽石はほぼ純層の状態と認められる。H区ではFA層と浅間C軽石層の中間に有馬火山灰層が堆積する。H区は調査区内の北部の低い部分であり、有馬火山灰





第4図 遺跡全体図(弥生後期・古墳前期)



はこの標高の低い区域に水成堆積している。北に地形が下がるに従って厚さを増し、調査区の北端部では厚さ1.5m前後を測る。堆積状態は、一部風成堆積部分では厚さ10cm、灰白色の微細な火山灰層である。水成堆積の状態は、軽石の細粒を含む灰白色の砂質土層と淡褐色の粘質な火山灰層が縞状に数層に重なった状態で堆積する。水成有馬火山灰の直下から畑が検出されている。浅間C軽石混土層の下層は黒褐色の硬い粘質土（第IV b層）であり、厚さ15cm前後で漸次褐色ローム質土に移行する。この黒褐色土層の上部は弥生、古墳時代初頭の遺物包含層で、下部が遺構確認面になる。

第V層 関東ロームの堆積と榛名山麓の扇状地堆積が複合し、生成した土層である。ローム質土でE～G区は褐色で堅い粘質土。H区は灰白色で細砂を含む粘質土あるいはシルト質である。G区では礫層が介在する場所が多い。特に斜面部分には拳～人頭大の礫を主体とする礫層帯が広がっている。

## 5 調査した遺構の概要

本遺跡の調査により弥生時代から中・近世にかかる多数の遺構が検出された。縄文時代では、前期、中期、後期に属する土器破片がそれぞれで1～3片出土するのみで、縄文時代と確認できる遺構はない。G地区で块状耳飾りの半欠品を伴う石囲遺構1基をみるが、時期は明確ではない。

二ツ岳火山灰（FA）層下に検出される遺構については、住居は弥生時代後期から、古墳時代前期のものまでが検出され、墓は弥生後期に限られ、畑は古墳初頭（浅間C軽石層直下）、中期（有馬火山灰層直下）、後期（FA層直下）のものが3面検出される。

各時期の遺構数は、住居総数83軒。このうち弥生後期が59軒、弥生後期終末から古墳初頭にかかるもの、または弥生後期か古墳前期かどちらかに属するものが12軒、古墳前期が12軒である。墓は弥生後期の単位墓群、周溝墓（主体部群の最小単位で、周囲に周溝が確認されたものは周溝墓と呼ぶ。）は27基。単位墓群、周溝墓は礫床、礫集積により特徴づけられる礫床墓と称する主体部1～10基より構成され、また一部では土器棺も含む。礫床墓は総数87基。土器棺の一部は単位墓群、周溝墓に含まれるが、多くは土器棺のみで群域を構成している。土器棺と認定できたものは総数46基。土墳墓は2基。この他、弥生後期～古墳前期の土壇は7基、溝は7条を検出している。

## 6 検出した遺構・遺物

### (1) 住居観察表

(PL. は写真図版編)

番号	位置	平面形	規模(m)	面積	比率	主軸方向	主柱穴	炉跡の位置	時期	掲載頁
72号	32-F33	隅丸長方形	辺 8.9×6.5	57.8	1.4	N-12°-W	6本構造	奥2主柱の外側	弥生後1期	11頁 PL. 8
73号	39-F38	隅丸長方形	辺 5.4×3.9	21.1	1.4	N-05°-W	4本構造	側部主柱間	弥生後2期	15頁 PL. 9
74号	46-F33	長方形	辺 5.0×2.7	13.5	1.9	N-56°-W	不明確	不明確	弥生後期	17頁 PL. 9
75号	56-G49	長方形	辺 ー×6.3			N-00°	4本構造	不明	弥生後3期	18頁 PL. 10
76号	53-G49	長方形	辺 7.9×6.4	50.6	1.2	N-00°	4本構造	奥主柱間	弥生後3期	21頁 PL. 10
77号	55-H4	隅丸長方形	辺 3.0×2.3	6.9	1.3	N-76°-W	不明確	不明	弥生後3期	23頁 PL. 10
78号	57-H4	隅丸長方形	辺 3.1×2.4	7.4	1.3	N-78°-W	不明確	不明確	弥生後3期	24頁 PL. 10・11
82号	44-H3	隅丸方形	辺 9.5×8.8	83.6	1.1	N-56°-E	4本構造	主柱の傍ら内側	古墳前期	162頁 PL. 40
83号	57-H6	長方形	辺 4.8×4.5	21.6	1.1	N-12°-E	4本構造	不明	弥生後3期	27頁 PL. 11

6 検出した遺構・遺物

番号	位置	平面形	規模(m)	面積	比率	主軸方向	主柱穴	炉跡の位置	時期	掲載頁
84号	57-H5	不明					不明確	不明	弥生後期	30頁 PL. 11
85号	34-H3	不明					不明	中央部	古墳前期	167頁 PL. 41
86号	36-H7	隅丸方形	辺 8.7×7.8	67.9	1.1	N-73°-E	4本構造	不明	弥生末～古墳初	142頁 PL. 34
87号	27-H8	長方形	辺 8.5×7.5	63.7	1.1	N-20°-W	4本構造	不明確	弥生末～古墳初	144頁 PL. 35
88号	48-G48	長方形	辺 6.5×5.5	35.8	1.2	N-30°-E	不明確	不明	弥生後3期	30頁 PL. 11・12
89号	28-H13	隅丸長方形	辺 5.7×4.7	26.8	1.2	N-72°-E	4本構造	不明	弥生末～古墳初	146頁 PL. 89
90号	29-H18	隅丸長方形	辺 6.8×4.8	32.6	1.4	N-13°-W	不明	不明	弥生末～古墳初	149頁
91号	53-H6	隅丸長方形	辺 5.6×4.0	22.4	1.4	N-90°	不明確	不明確	弥生後期	33頁 PL. 12
195号	50-G21	隅丸長方形	辺 5.4×3.3	17.8	1.6	N-31°-W	不明確	不明	弥生後～古墳前	150頁 PL. 36
196号	60-G25	隅丸長方形	辺 3.5×2.7	9.5	1.3	N-28°-W	不明確	中央部に2か所	弥生後3期	36頁 PL. 12
197号	58-G27	長方形	辺 4.8×2.9	13.9	1.6	N-27°-W	2本構造	不明確	弥生後3期	38頁 PL. 12
198号	65-G33	隅丸長方形	辺 4.2×2.8	11.8	1.5	N-43°-W	2本構造か	中央部等4か所	弥生後期	39頁 PL. 13
199号	65-G37	隅丸長方形	辺 ー×2.7			N-82°-W	不明確	中軸線上東壁寄り	弥生後3期	41頁 PL. 13
200号	56-G35	隅丸長方形	辺 4.6×3.8	17.5	1.2	N-10°-W	不明確	中央部等2か所	古墳前期	169頁 PL. 41
201号	51-G31	方形	辺 5.0×4.7	23.5	1.1	N-29°-E	不明	不明	古墳前期	171頁 PL. 42
202号	49-G36	隅丸長方形	辺 6.3×4.5	28.4	1.4	N-22°-E	不明確	中央部に2か所	弥生後3期	42頁 PL. 14
203号	46-G36	隅丸長方形	辺 4.9×3.7	18.1	1.3	N-30°-W	不明確	中央部	古墳前期	172頁 PL. 42
204号	42-G34	隅丸方形	辺 5.0×4.8	24.0	1.0	N-18°-W	4本構造	不明確	古墳前期	174頁 PL. 43
205号	52-G37	長方形	辺 4.8×3.8	18.2	1.3	N-15°-E	不明確	中央部	弥生末～古墳初	151頁 PL. 36
206号	50-G38	隅丸方形	辺 4.3×4.1	17.6	1.1	N-52°-W	不明確	中軸線上北西寄り	弥生後3期	44頁 PL. 14・15
207号	56-G38	長方形	辺 3.6×3.1	11.2	1.2	N-51°-W	不明確	中央部等3か所	弥生後3期	46頁 PL. 15
208号	57-G41	隅丸長方形	辺 4.3×2.4	10.3	1.8	N-03°-E	2本構造か	北壁寄り	弥生後3期	47頁 PL. 16
209号	55-G42	隅丸長方形	辺 4.9×4.7	23.0	1.0	N-32°-W	不明	中央部	古墳前期	176頁 PL. 43
210号	54-G43	長方形	辺 6.3×5.4	34.0	1.2	N-32°-E	4本構造	主柱の外に3か所	弥生後3期	48頁 PL. 16
211号	52-G42	長方形	辺 5.3×4.2	22.3	1.3	N-04°-E	2本構造か	北壁寄り	弥生後3期	53頁 PL. 17
212号	52-G44	隅丸方形	辺 6.3×6.3	39.7	1.0	N-31°-W	4本構造	中央部	古墳前期	178頁 PL. 44
213・ 228・ 229号	54-G47	隅丸長方形か	辺 8.5× ー			N-04°-W	不明確	不明確	弥生後3期	56頁 PL. 18
214号	48-G45	隅丸長方形	辺 6.5×5.7	37.1	1.1	N-24°-W	4本構造	中央部	古墳前期	182頁 PL. 45
215号	45-G46	隅丸長方形	辺 ー×3.9			N-09°-E	不明確	中央部	弥生後3期	60頁 PL. 18・19
216号	43-G43	方形	辺 4.7×4.5	21.2	1.8	N-31°-E	4本構造	不明	古墳前期	184頁 PL. 45・46
217号	47-G39	隅丸長方形	辺 3.5×2.4	8.4	1.5	N-72°-W	不明	中央部	弥生後3期	63頁 PL. 19
219号	42-G37	隅丸長方形	辺 6.5×5.8	37.7	1.1	N-80°-W	4本構造	不明確	弥生末～古墳初	152頁 PL. 37
220号	35-G30	隅丸長方形	辺 5.2×4.7	24.4	1.1	N-72°-E	不明確	不明	弥生後～古墳前	154頁 PL. 38
221号	67-F48	長方形	辺 7.4×5.4	40.0	1.4	N-08°-E	4本構造	主柱外側等2か所	弥生後3期	64頁 PL. 20
223号	46-G43	胴張り方形	辺 3.6×3.6	13.0	1.0	N-19°-E	不明確	中央部に2か所	弥生後3期	67頁 PL. 20
224号	45-G43	不明	南北軸3.2			N-19°-E	不明	不明	弥生後3期	69頁 PL. 20
225号	47-G42	長方形	東西軸4.6			N-24°-E	4本構造	不明	弥生後3期	70頁 PL. 20
227号	67-G4	長方形	辺 4.3×2.7	11.6	1.6	N-53°-W	不明確	中軸線上西壁寄り	弥生後3期	71頁 PL. 21
230号	49-G44	長方形	辺 ー×5.5			N-15°-E	4本構造	不明	弥生後～古墳前	155頁 PL. 38
231号	34-H12	隅丸方形	辺 5.9× ー			N-10°-W	4本構造	西主柱間	弥生後～古墳前	157頁 PL. 39
232号	40-H12	長方形	辺 6.2×4.6	28.5	1.4	N-36°-E	4本構造	不明	弥生後3期	73頁 PL. 21・22
233号	39-H14	長方形	辺 5.5×4.2	23.1	1.3	N-60°-E	4本構造	不明	古墳前期	187頁 PL. 46
234号	40-H18	長方形	辺 5.1×3.2	16.3	1.6	N-25°-W	不明確	中央部	古墳前期	190頁 PL. 46
235号	42-H17	長方形	辺 7.2×5.4	38.9	1.3	N-13°-W	不明確	壁寄りに2か所	弥生後3期	75頁 PL. 22
236号	46-H17	長方形	辺 4.5×3.7	16.7	1.2	N-25°-W	不明確	西壁際	弥生後3期	79頁 PL. 23
237号	44-H11	不明				N-32°-W	不明	不明	弥生後～古墳前	158頁 PL. 39

## (1) 住居観察表 (2) 弥生時代後期の住居跡

番号	位置	平面形	規模(m)	面積	比率	主軸方向	主柱穴	炉跡の位置	時期	掲載頁
239号	42-H20	不明					不明	不明	弥生後3期	81頁 PL. 22
240号	38-H20	長方形	辺 5.8×4.7	27.3	1.2	N-70°-E	不明確	中軸線状西壁寄り	弥生後3期	84頁 PL. 23・24
241号	34-H21	長方形	辺 4.7×2.8	13.2	1.7	N-07°-E	2本構造か	中央部	弥生後3期	86頁 PL. 24
242号	41-H17	長方形	辺 5.8×4.2	24.4	1.4	N-13°-W	不明確	北壁寄り	弥生後3期	88頁 PL. 24
243号	39-G12	長方形	辺 7.2×5.6	40.3	1.2	N-21°-W	4本構造	北奥2主柱穴間	弥生後1期	90頁 PL. 25
244号	53-H33	不明	南北軸5.0			N-09°-E	不明確	不明	弥生後3期	93頁 PL. 25
245号	52-H35	長方形	辺 -×4.7			N-42°-W	4本構造	側部主柱間	弥生後3期	94頁 PL. 26
248号	52-H37	不明					不明	不明	弥生後3期	98頁 PL. 26
246号	51-H34	長方形	辺 4.7×-	14.6	1.5	N-80°-W	4本構造か	中軸線上西壁寄り	弥生後2期	98頁 PL. 26・27
249号	48-H39	長方形	辺 9.2×6.1	56.1	1.5	N-46°-W	6本構造	北西奥2主柱外側	弥生後3期	100頁 PL. 27
250号	45-H33	隅丸長方形	辺 5.5×4.2	23.1	1.3	N-90°	4本構造	西奥主柱内側	弥生後1期	103頁 PL. 28
251号	44-H35	長方形	辺 4.8×3.9	18.7	1.2	N-23°-W	2本構造か	中軸線上北壁際	弥生後3期	106頁 PL. 28
252号	45-H22	長方形	辺 6.9×4.6	31.7	1.5	N-10°-W	4本構造	壁寄りに2か所	弥生後3期	109頁 PL. 29
253号	40-H24	長方形	辺 8.4×5.6	47.0	1.5	N-62°-W	4本構造	北西奥主柱の外側	弥生後3期	111頁 PL. 29・30
254号	40-H30	長方形	辺 7.5×5.7	42.7	1.3	N-44°-W	4本構造	主柱外側に2か所	弥生後3期	113頁 PL. 30
255号	35-H30	長方形	辺 8.2×6.0	49.2	1.4	N-13°-W	4本構造	主柱外側に2か所	弥生後3期	117頁 PL. 31
256号	37-H29	不明	辺 6.1×-			N-00°	不明	不明	弥生後3期	122頁 PL. 31
257号	41-H38	長方形	辺 8.0×6.5	52.0	1.2	N-70°-E	4本構造	主柱外側に2か所	弥生後3期	123頁 PL. 32
258号	50-H25	長方形	辺 4.0×2.8	11.2	1.4	N-34°-E	2本構造か	中央部	弥生後3期	128頁 PL. 32
259号	31-H38	長方形	辺11.2×6.4	71.7	1.8	N-15°-W	6本構造	北奥主柱穴間	弥生後3期	129頁 PL. 32・33
260号	30-H24	長方形	辺 8.5×7.2	61.2	1.2	N-30°-W	不明確	側部主柱間2か所	弥生末～古墳初	159頁 PL. 39・40
261号	53-H23	隅丸長方形	辺 4.6×2.7	12.4	1.7	N-90°	2本構造か	中央部北寄り	弥生後3期	132頁 PL. 33
262号	44-H39	隅丸長方形	辺 -×4.1			N-28°-W	不明	不明	弥生後2期	127頁 PL. 32
263号	31-H38	隅丸長方形	辺11.8×7.0	82.6	1.7	N-15°-W	6本構造	奥壁際等3か所	弥生後3期	133頁 PL. 33
264号	40-H39	不整長方形	辺 5.1×4.0	20.4	1.3	N-75°-E	不明確	中軸線上東壁寄り	弥生後期	137頁 PL. 32
268号	34-H22	隅丸長方形	辺 7.8×5.3	41.3	1.5	N-17°-W	4本構造	主柱外側に2か所	弥生後3期	139頁 PL. 34

## (2) 弥生時代後期の住居跡

72号住居 (第5図、PL. 8)

**位置** 32-F33に位置する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形。規模は長軸8.9m、短軸6.5m。方位はN-12°-W。

**周壁、壁溝** 周壁の遺存状態は良好、黄褐色土(ローム質、第V層)、上部はローム漸移層。

**床面** 黄褐色土(第V層)で堅い。基盤層には拳大から頭大の河原石が多量に混在している。

**柱穴** 6本構造。柱穴覆土中にも河原石の混在が目立つ。南側出入部に1対のピットがある。主柱穴の壁は拳大の円礫層である。

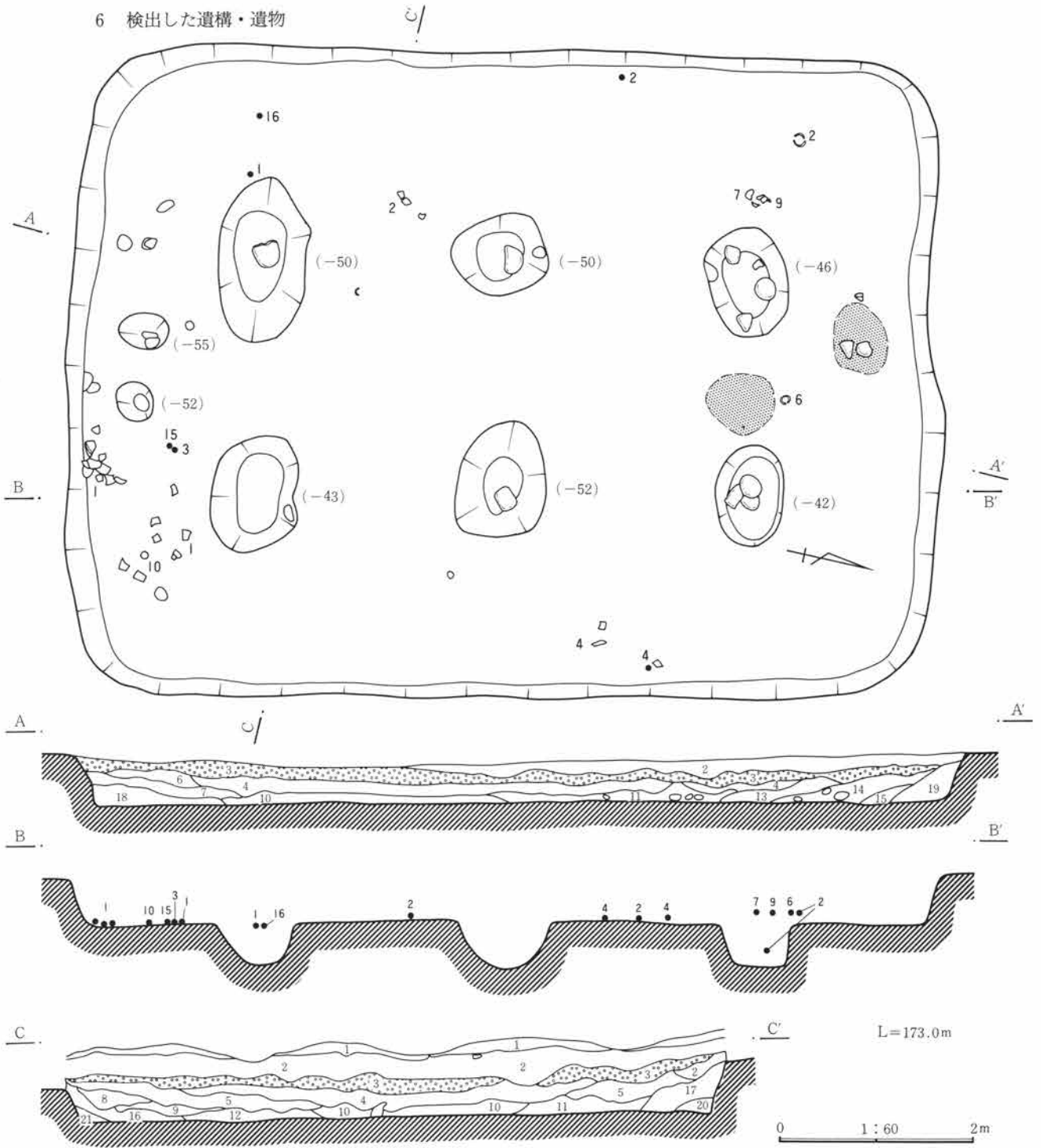
**炉跡** 炉跡は北、奥側の2主柱穴間と周壁寄りの2か所に認められる。

**覆土** 厚さ10cm前後の浅間C軽石混土層が床面上30～40cmにほぼ水平に堆積する。床面及び覆土下部に拳大の河原石が多量に混在する。

**遺物出土状態** 南側と東側周壁際に土器破片が集中して出土している。壁際の埋没が進んだ段階で投棄されたものである。南周壁と東南主柱穴の間、床面直上より石製の勾玉未製品が検出された。

**時期** 弥生後期第1期

**他の遺構との関係** 南辺部で本住居の覆土上に4A号墓の北側周溝が造られている。



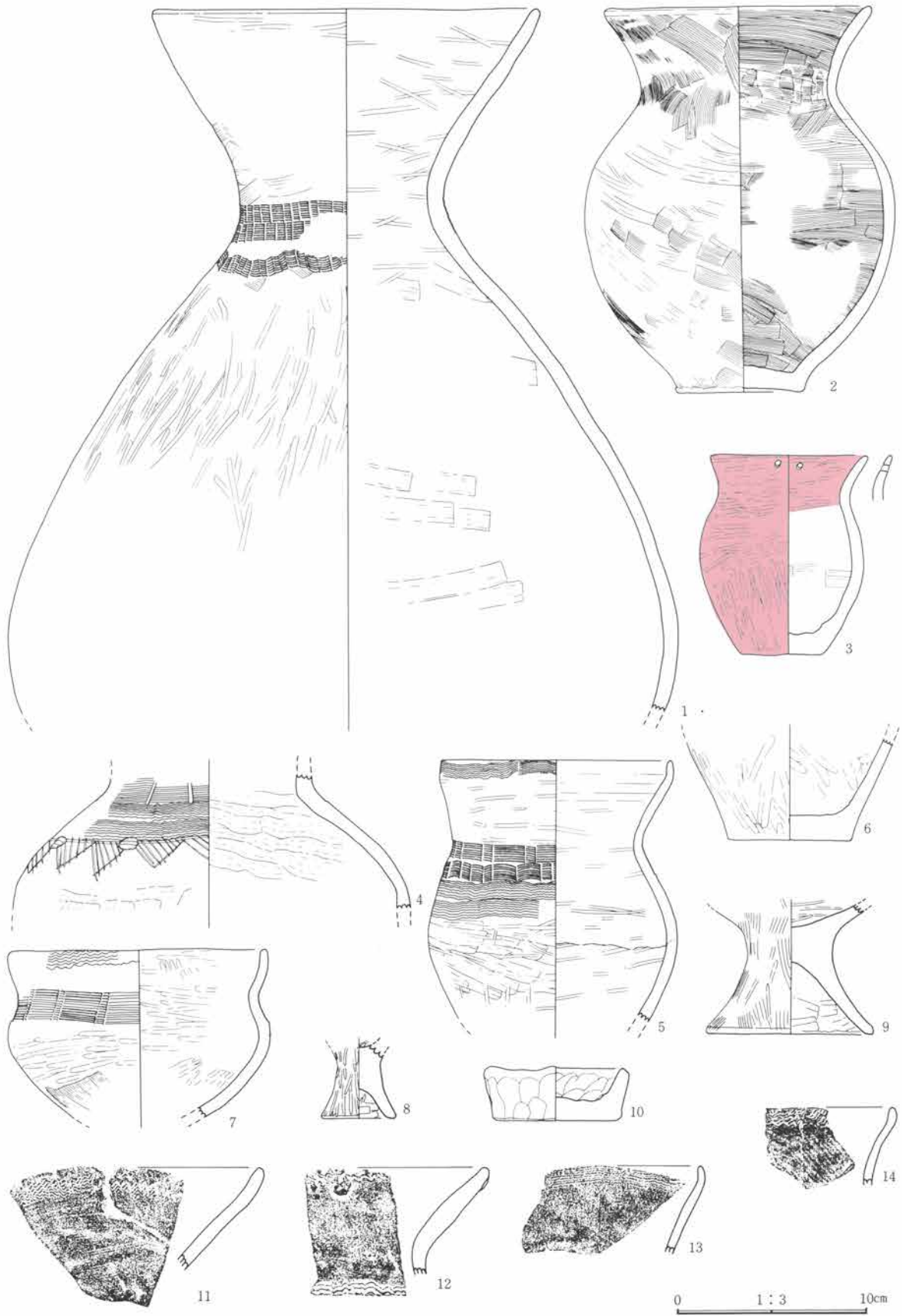
A・Cセクション

- |   |   |
|---|---|
| <p>1 暗褐色 粘質、FA下畑跡の耕土。</p> <p>2 暗褐色 浅間C軽石を多量に含む。IV a層。</p> <p>3 暗褐色 浅間C軽石細粒、ローム粒、砂礫を多量に含む。微量の炭化物も認められる。</p> <p>4 暗褐色 粘質、ローム粒、細砂を含む、ロームブロックが点在。</p> <p>5 暗褐色 少量のローム粒子、砂礫を含む。</p> <p>6 暗褐色 粘質、少量の円礫、ローム粒子を含む。</p> <p>7 暗褐色 ローム粒を多量に含む。</p> <p>8 暗褐色 ロームブロック粒子を主体とし、砂礫を含む。</p> <p>9 暗黄褐色 大型のロームブロックを多量に含む。</p> <p>10 暗黄褐色 粘質、大型のロームブロック、少量の円礫を含む。</p> | <p>11 暗褐色 大型の円礫を多量に含む。焼土粒、ローム粒子を少量含む。</p> <p>12 暗黄褐色 粘質、やや小振りの円礫、ロームブロックを多量に含む。</p> <p>13 暗褐色 やや明るい。円礫、ローム粒子を少量含む。</p> <p>14 暗褐色 やや暗い。円礫を多量に含む。</p> <p>15 暗褐色 粘質、微量の焼土粒子を含む。</p> <p>16 暗褐色 微量の砂礫を含む。</p> <p>17 暗黄褐色 粘質、微量のローム粒子を含む。</p> <p>18 暗黄褐色 大型の円礫を多量に含む。</p> <p>19 暗褐色 大型の円礫を多量に含む。</p> <p>20 暗褐色 ローム粒子が多量に混入する。</p> <p>21 暗褐色 黒褐色土とロームの混土層。</p> |
|---|---|

第5図 72号住居

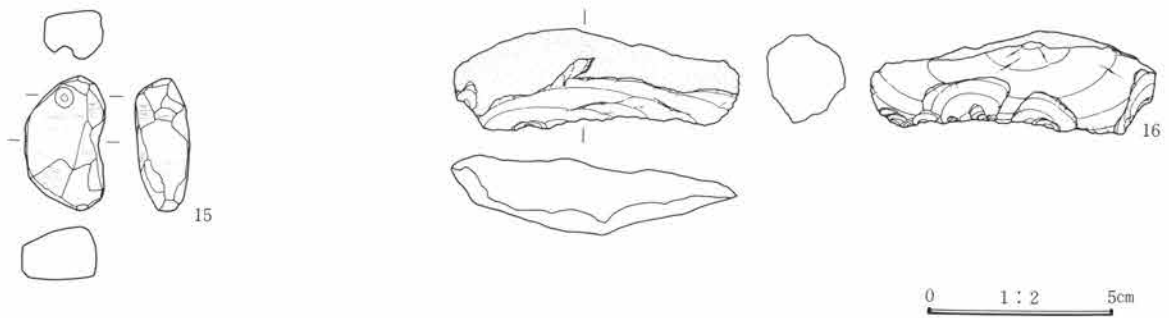


(2) 弥生時代後期の住居跡



第6図 72号住居出土遺物(1)

6 検出した遺構・遺物



第7図 72号住居出土遺物(2)

72号住居出土土器観察表 PL.95

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 20.0 胴 35.1	口縁は僅かに内湾する。胴最大径の位置は低い。	外 口縁部はヘラミガキ、ハケメ、頸部は等間隔止め簾状文3段、胴部はヘラミガキ。 内 口縁部はヘラミガキ、胴部はヘラナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、黄橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
2	壺	口 13.6 胴 16.1 高 19.9	内面、指オサエ痕めぐる。	外 口縁部はヨコナデ、胴部はハケメ、ヘラナデ。 内 ハケメ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	ほぼ完形
3	壺	口 8.0 胴 8.5 高 10.4	口縁端部に相対して1対の小孔を穿つ。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、暗赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸～底部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面円彩
4	壺	胴 21.0		外 頸部は櫛描直線2段に縦沈線、胴上部は波状文の下にヘラ沈線鋸歯文に斜線充填。 内 ヘラナデ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、浅黄橙色	頸～胴上部 一部遺存
5	甕	口 12.0 胴 13.0	受け口状口縁。	外 口縁部は波状文、頸部は2連～3連止め簾状文を2段、胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 口縁部ヨコナデ、以下ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、鈍黄橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
6	甕	底 6.4		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、鈍黄橙色	胴下部 $\frac{1}{2}$ 周
7	台付甕	口 13.4 胴 13.9	受け口状口縁	外 口縁部は波状文、頸部は2連止め簾状文、胴部はハケメ後ヘラミガキ。 内 口縁～胴部はヘラミガキ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、暗赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸～胴部全周
8	台付甕	脚 3.7		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、明黄褐色	脚部全周
9	高坏	脚 8.7		外 ハケメ後ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、黄褐色	脚部 $\frac{1}{2}$ 周
10	ミニチュア	口 7.6 高 2.7	器壁は厚い。手づくね	内外面とも指オサエ痕が巡る。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	完形 底部に黒斑

72号住居出土土器観察表(拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
11	壺	口 18	受け口状口縁	外 口縁部は波状文。内 ヘラミガキ、丹彩。	細砂粒を含む。	堅緻	灰白色	16%
12	壺	口 20		外 口縁部は波状文、付文。内 丹彩。	砂粒を含む。	堅緻	淡赤橙色	7%
13	甕	口 12	受け口状口縁	外 口縁部は波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	明灰褐色	34%
14	甕	口 16	受け口状口縁	外 口縁部は波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	4%

72号住居出土玉類観察表 PL.95

遺物番号	名称	長さ	厚さ	形状・成形・整形	色調	材質	備考
15	勾玉未製品	3.5	2.0	成形段階の未製品。孔は未貫通で、深さ4mm。器面は研磨面の稜線、粗い研磨痕が明瞭である。	明緑灰色	変質安山岩	完形



72号住居出土石器観察表 PL.95

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
16	刃器	2.7×7.6×2.1	黒色安山岩	42.8	片面に自然面を残す横長の剥片。刃部は両面から剝離調整している。厚手である。

## 73号住居 (第9図、PL.9)

**位置** 39-F38に位置する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。規模は長軸5.4m、短軸3.9m。方位はN-5°-W。

**周壁、壁溝** 壁土は暗褐色土(第V層)で場所によっては礫を多量に含む。壁溝は検出できない。

**床面** 床面は堅く平坦。

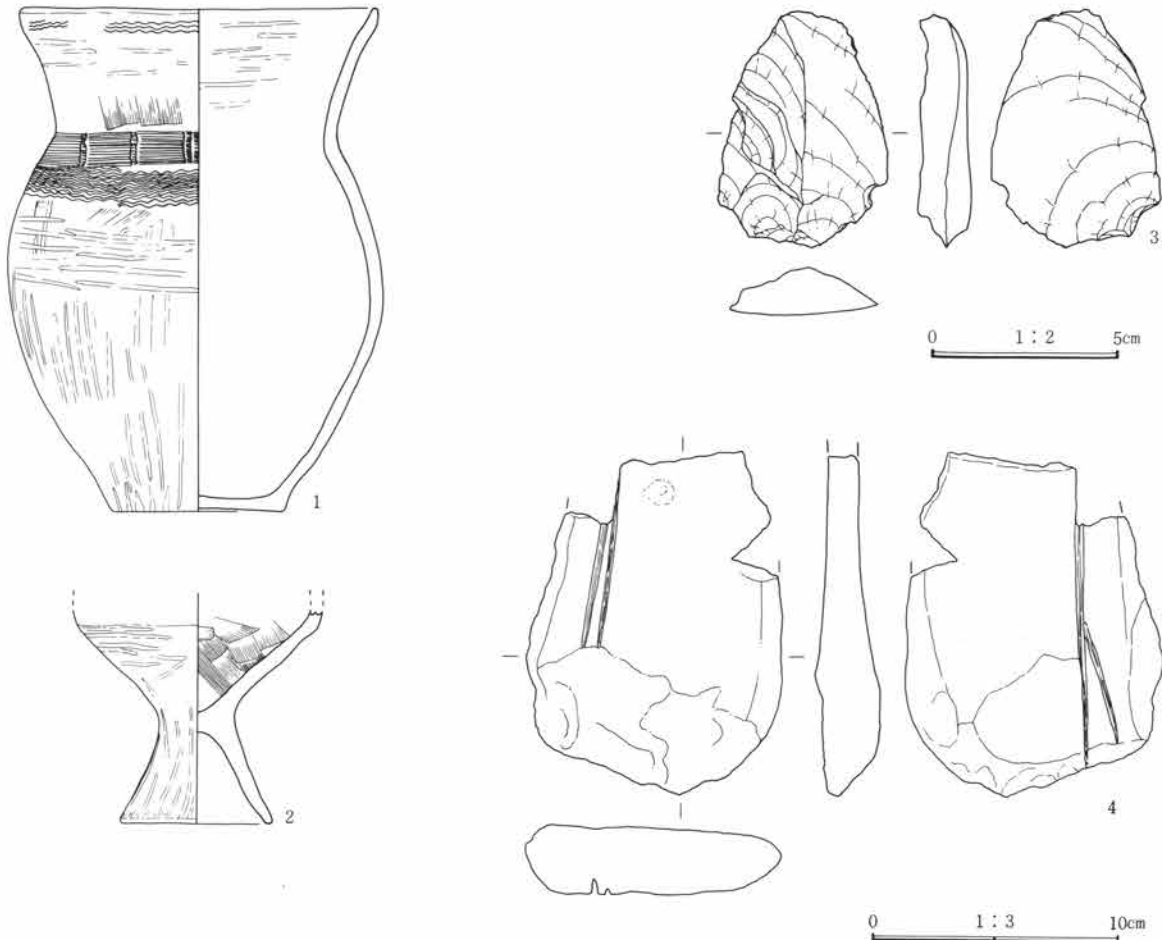
**柱穴** 主柱穴は4本構造。南周壁際に1対のピット有り。

**炉跡** 西側2主柱穴間に地床炉を設けている。

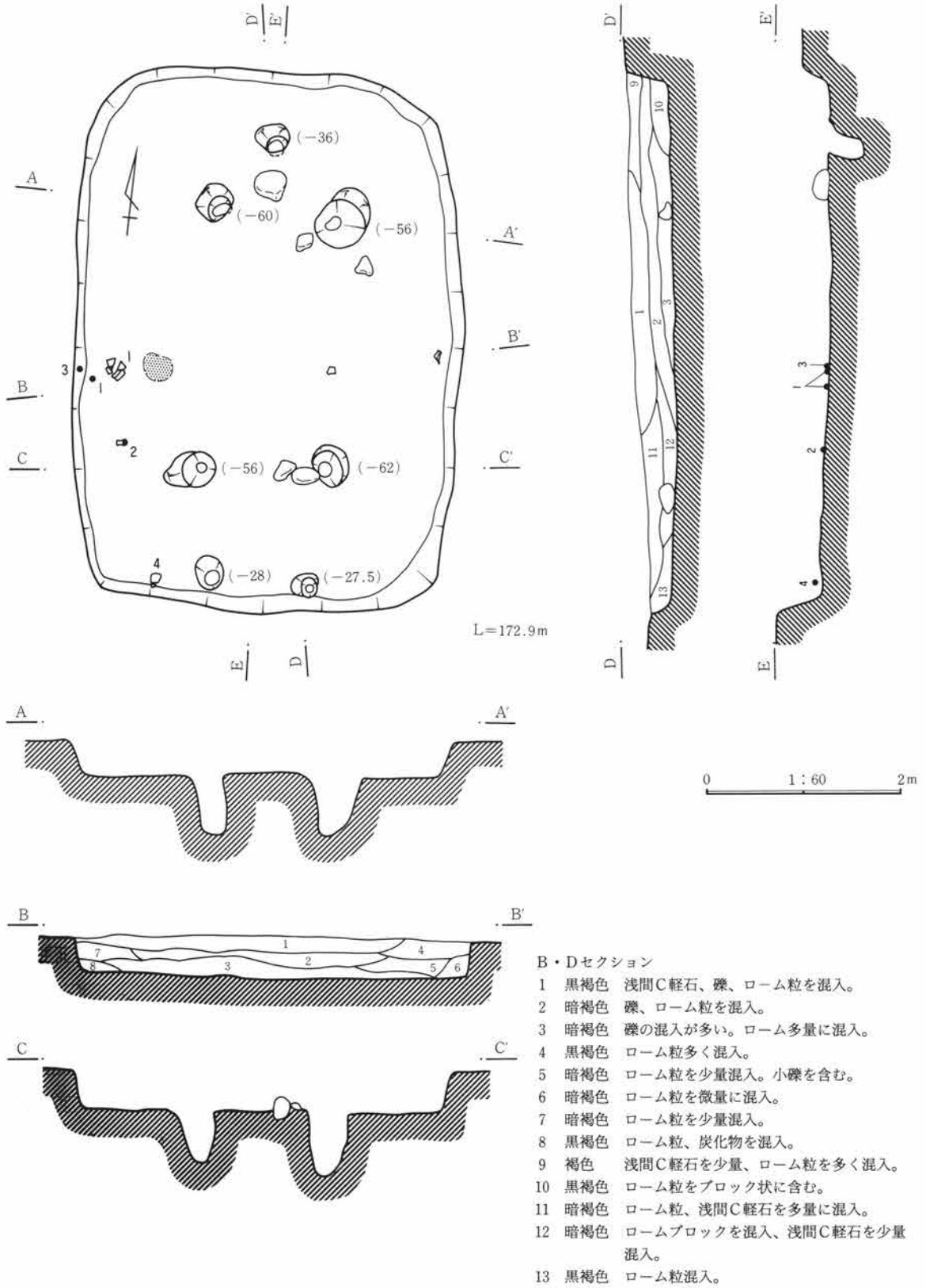
**覆土** 覆土中には拳大～頭大の円礫の混在が目立つ。

**遺物出土状態** 遺物の出土は少ない。時期の分かる資料は、東壁際の床面上より甕の大形破片出土。

**時期** 弥生後期第2期。



第8図 73号住居出土遺物



第9図 73号住居

73号住居出土土器観察表 PL.95

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 14.2 胴 15.1 高 19.9	口縁部はやや受け口状。	外 口縁部は波状文、頸部は2連止め簾状文、胴上部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 胴部 $\frac{1}{2}$ 周
2	高坏	底 6.0		外 ヘラミガキ。 内 ナデ、ハケメ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	脚部全周

73号住居出土石器観察表 PL.95

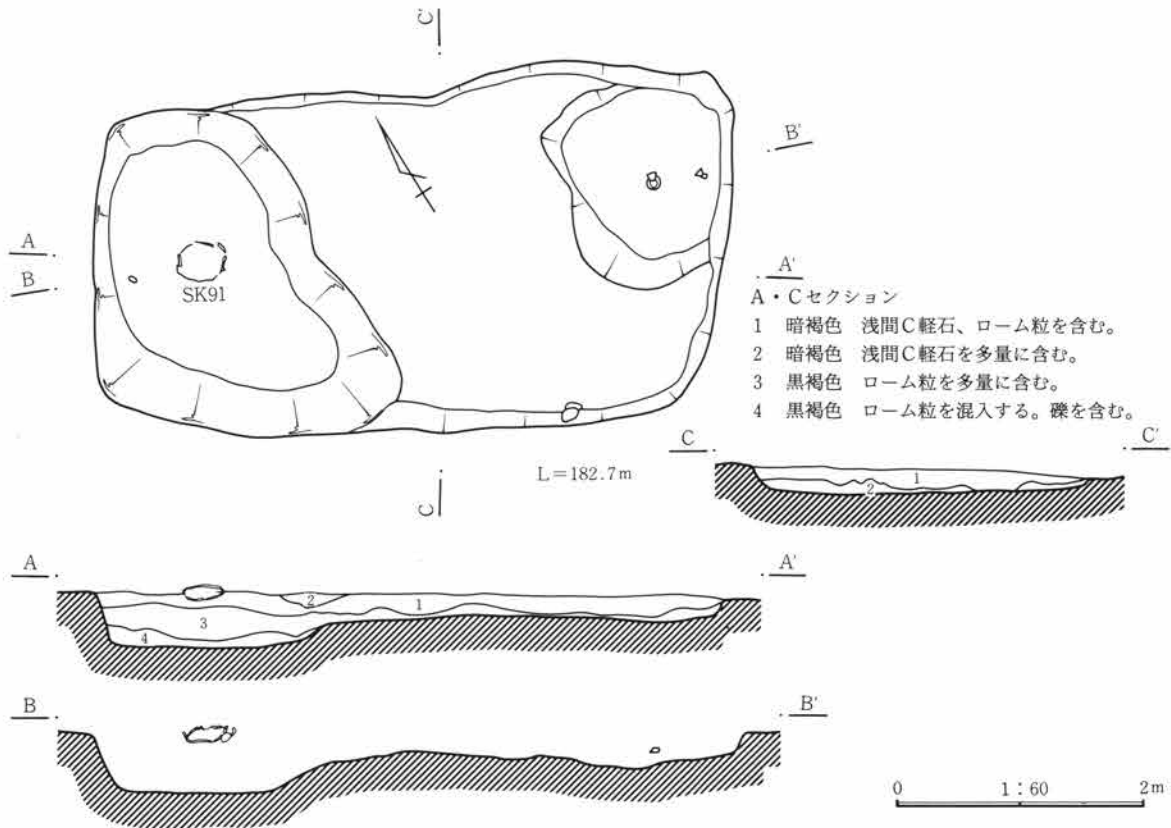
遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
3	刃器	6.2×4.6×1.4	黒色頁岩	30.3	縦長の剥片、片面に剥離調整を施す。刃部は両側縁に見られる。刃部の細かい剥離は使用痕とみられる。
4	砥石	13.6×10.4(+) $\times$ 2.7	砂岩	326.4	裏表面とも砥面となっており、磨減って、とくに中央部が薄い。両面に鋭い溝が2条できている。一端は欠損している。

74号住居 (第10図、PL. 9)

位置 46-F33に位置する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。規模は長軸5.0m、短軸2.7m。方位はN-56°-W。

周壁、壁溝 壁土は礫を混じる褐色土 (第V層)、壁溝はなし。



第10図 74号住居

6 検出した遺構・遺物

**床面** 検出面は凹凸が著しい。床面は検出できない。不整形な土塊状の落ち込みが2か所見られる。

**柱穴** 不明瞭。検出できない。

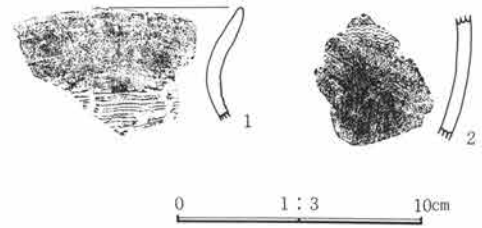
**炉跡** 不明瞭。検出できない。

**覆土** 覆土上面に土器棺が埋置されている。

**遺物出土状態** 覆土中より土器破片が僅かに出土する。時期の分かる土器は甕の口縁部小破片数片。

**時期** 弥生後期。

**他の遺構との関係** 覆土上部に甕棺が1基埋置されている。本遺構は住居ではない可能性が高い。



第11図 74号住居出土遺物

74号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
1	甕	口 11		外 頸部は簾状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	やや堅緻	橙色	21%
2	甕			外 胴上部は波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	3%

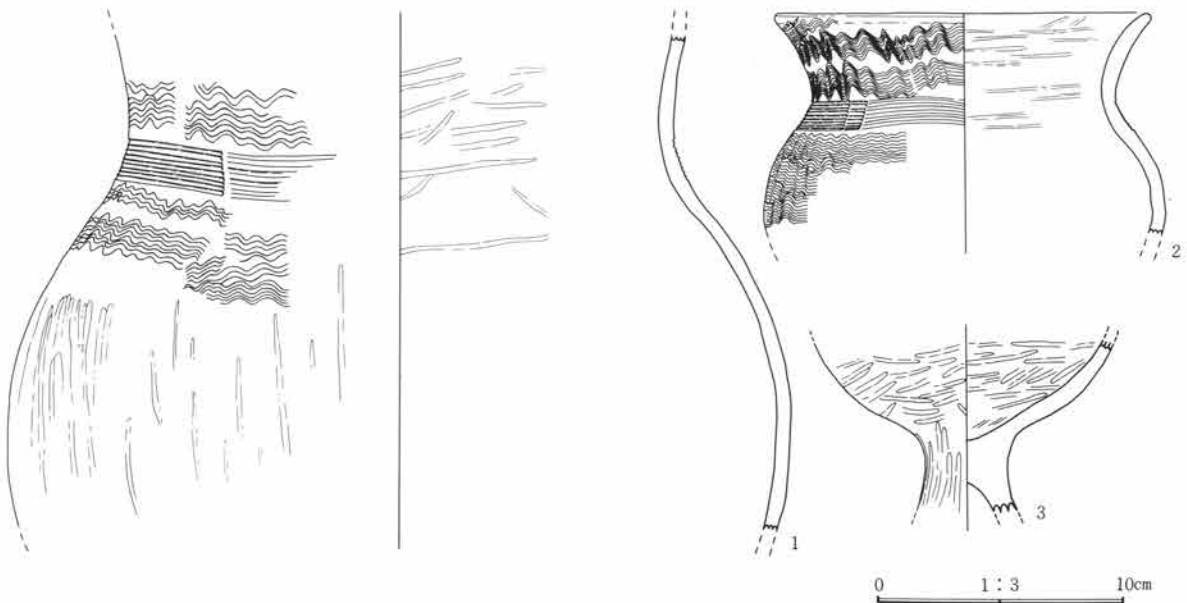
75号住居跡 (第13図、PL. 10)

**位置** 56-G49に位置する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。南部は調査区境界であり、213号住居との重複もあって不明確。規模は東西6.3m。方位はN-0°。

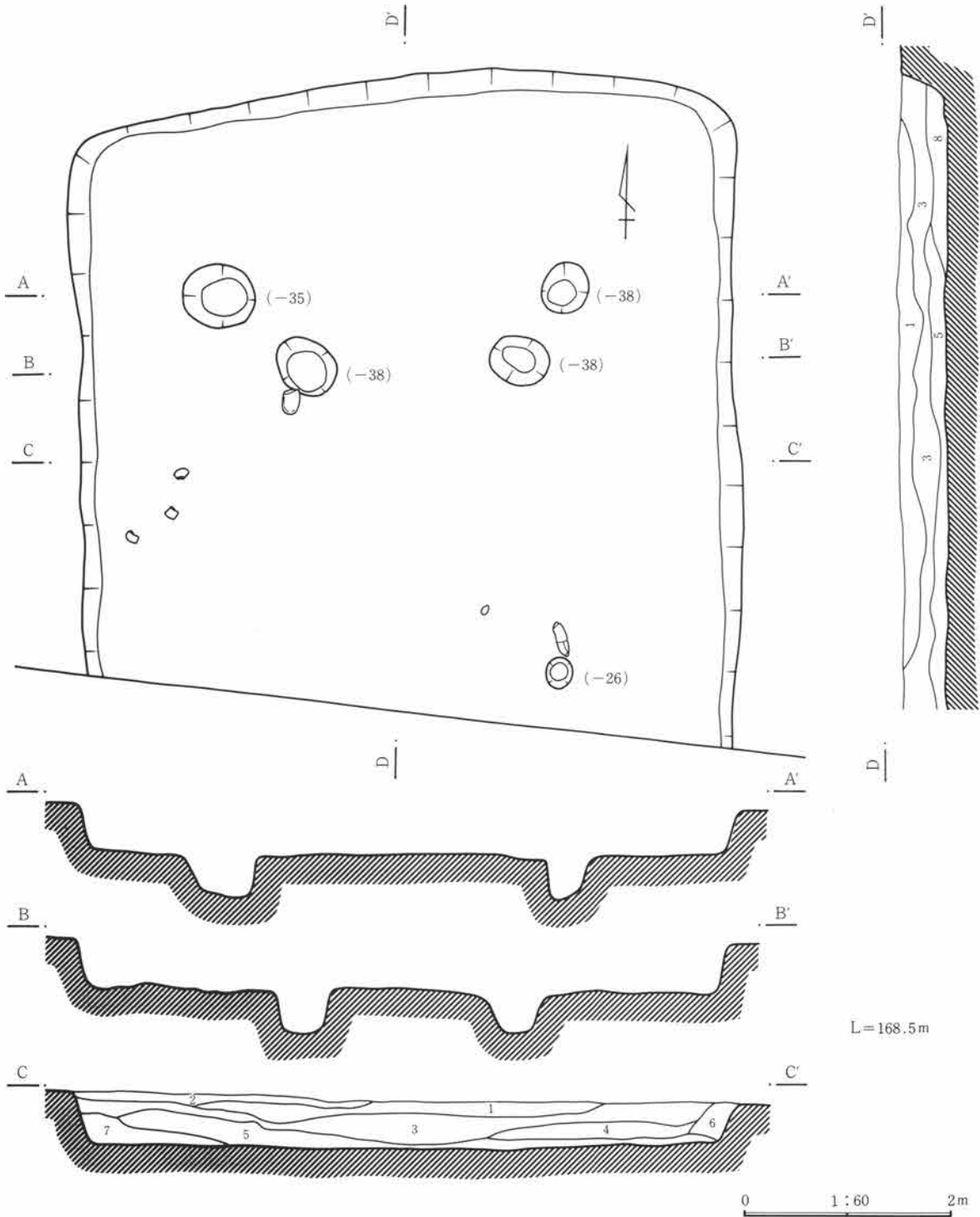
**周壁、壁溝** 壁土は礫を含まない黄褐色土 (第V層)、壁溝は検出されない。

**床面** 黄褐色ローム質土を踏み固めている。



第12図 75号住居出土遺物 (1)

(2) 弥生時代後期の住居跡



C・Dセクション

- |                            |                     |
|----------------------------|---------------------|
| 1 黒褐色 浅間C軽石、炭化物を多量に混入する。   | 5 褐色 炭化物を少量含む。      |
| 2 黒褐色 炭化物、焼土を多量に含む。        | 6 暗灰褐色 ローム粒を含む。     |
| 3 黒褐色 炭化物を多量に含む。浅間C軽石を含む。  | 7 暗灰褐色 ロームとの混土層、粘質。 |
| 4 暗灰褐色 炭化物を多量に含む。ロームを少量含む。 | 8 暗灰褐色 ローム粒を混入。     |

第13図 75号住居

6 検出した遺構・遺物

**柱穴** 支柱は4本構造と推定される。北側に2対の支柱穴を検出するがこのうちの1対は建て替えに伴うものと思われる。

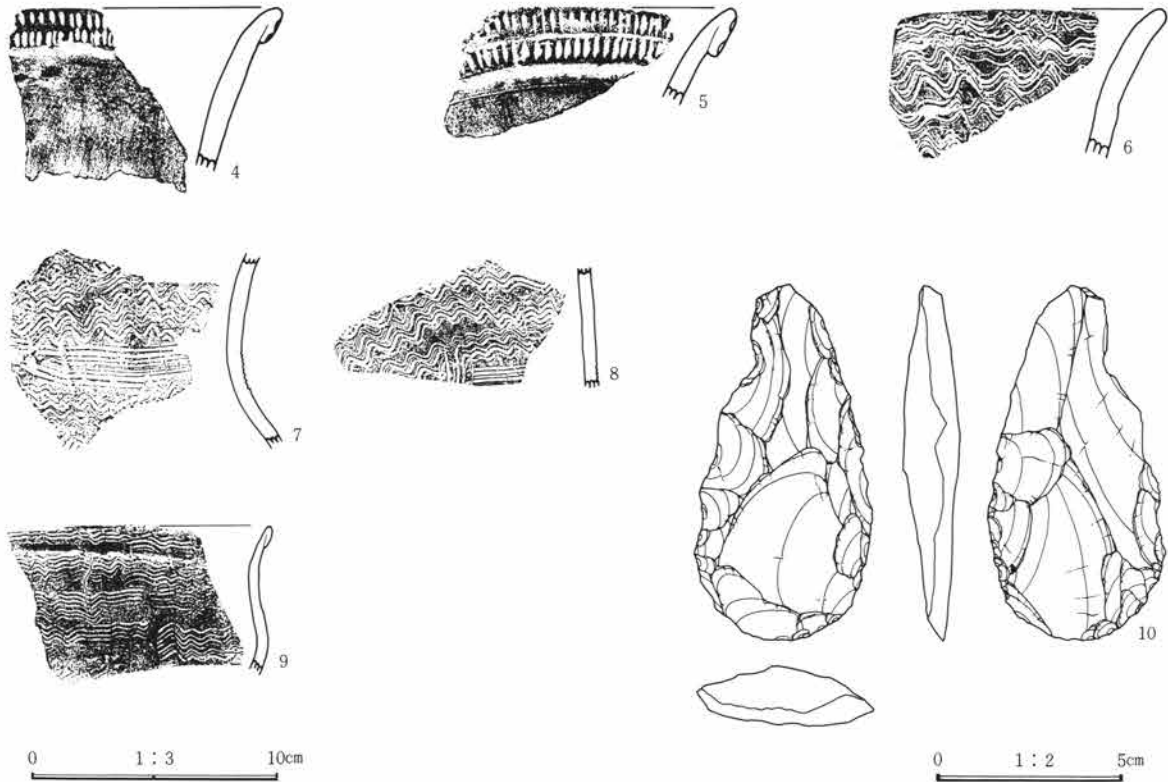
**炉跡** 炉跡は不明。東側2支柱間に炉跡に伴うと思われる長細い石が床面に密着して据えられている。この位置に炉跡があった可能性もある。

**覆土** 覆土上面に灰、焼土帯が比較的広い範囲で認められた。

**遺物出土状態** 覆土中より土器破片が多数出土する。床面上の出土は少ない。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 南部で213号住居と重複する。



第14図 75号住居出土遺物(2)

75号住居出土土器観察表 PL.96

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	胴 31.4		外 頸部は櫛描直線文、肩部は波状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤橙色	頸～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
2	台付甕	口 15.2 胴 16.2		外 口縁～胴上部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
3	高坏			外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、褐色	坏下部 $\frac{1}{2}$ 周

75号住居出土土器観察表(拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
4	壺	口 22	折り返し口縁	外 口縁部はヘラ刻み。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	明赤褐色	5%

(2) 弥生時代後期の住居跡

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
5	壺	口 30	折り返し口縁	外 2段の刻み目。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	9%
6	甕	口 18		外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	鈍赤褐色	15%
7	甕			外 頸部は2連止め簾状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	明赤褐色	10%
8	甕			外 櫛描縦直線に横直線。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	14%
9	台付甕	口 11	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	淡橙色	23%

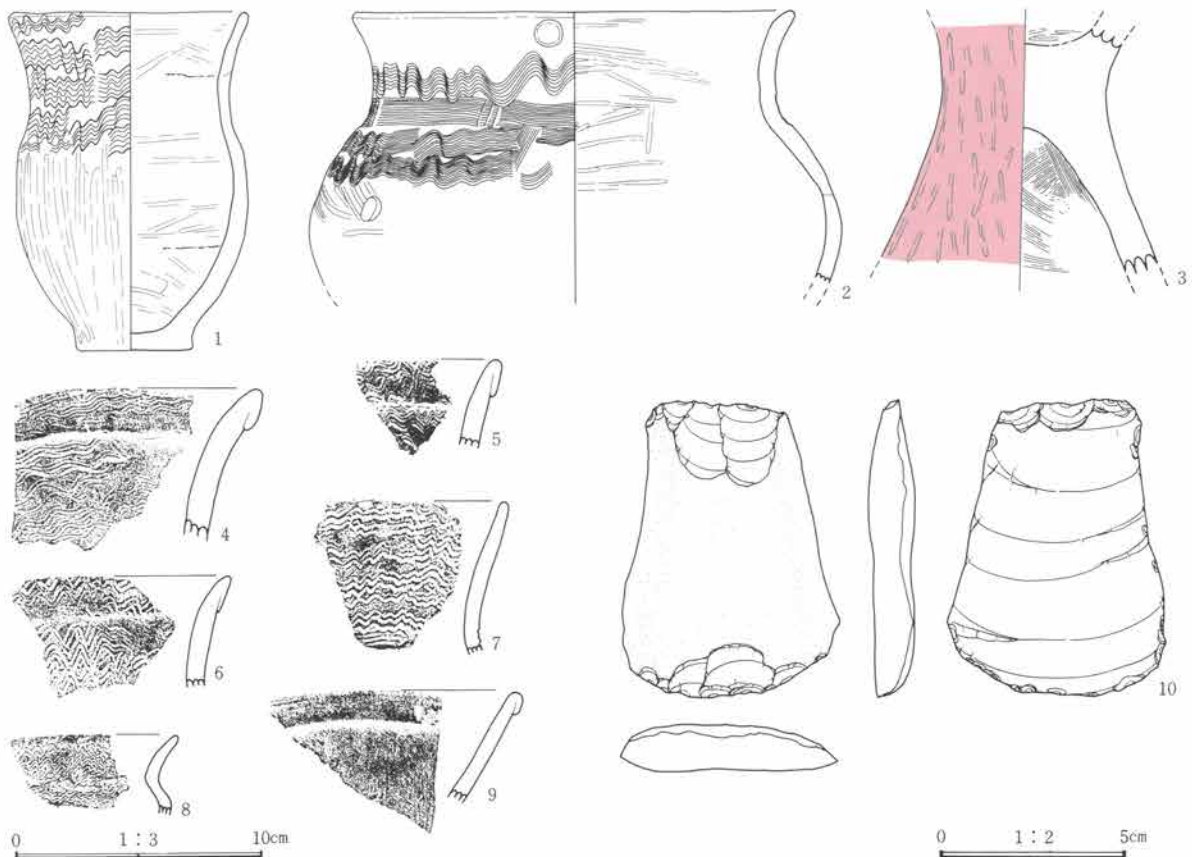
75号住居出土石器観察表 PL.96

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
10	土掘り具	9.4×4.9×1.6	黒色頁岩	57.0	横長剥片を素材とした、両面加工品、とくに両側縁、刃部は両面から剝離調整している。

76号住居跡 (第16図、PL.10)

位置 53-G49に位置する。

形状、規模、方位 長方形。北半部と南半部では調査区が異なり時期を異にして調査される。規模は長軸7.9m、短軸6.4m。方位はN-0°。



第15図 76号住居出土遺物

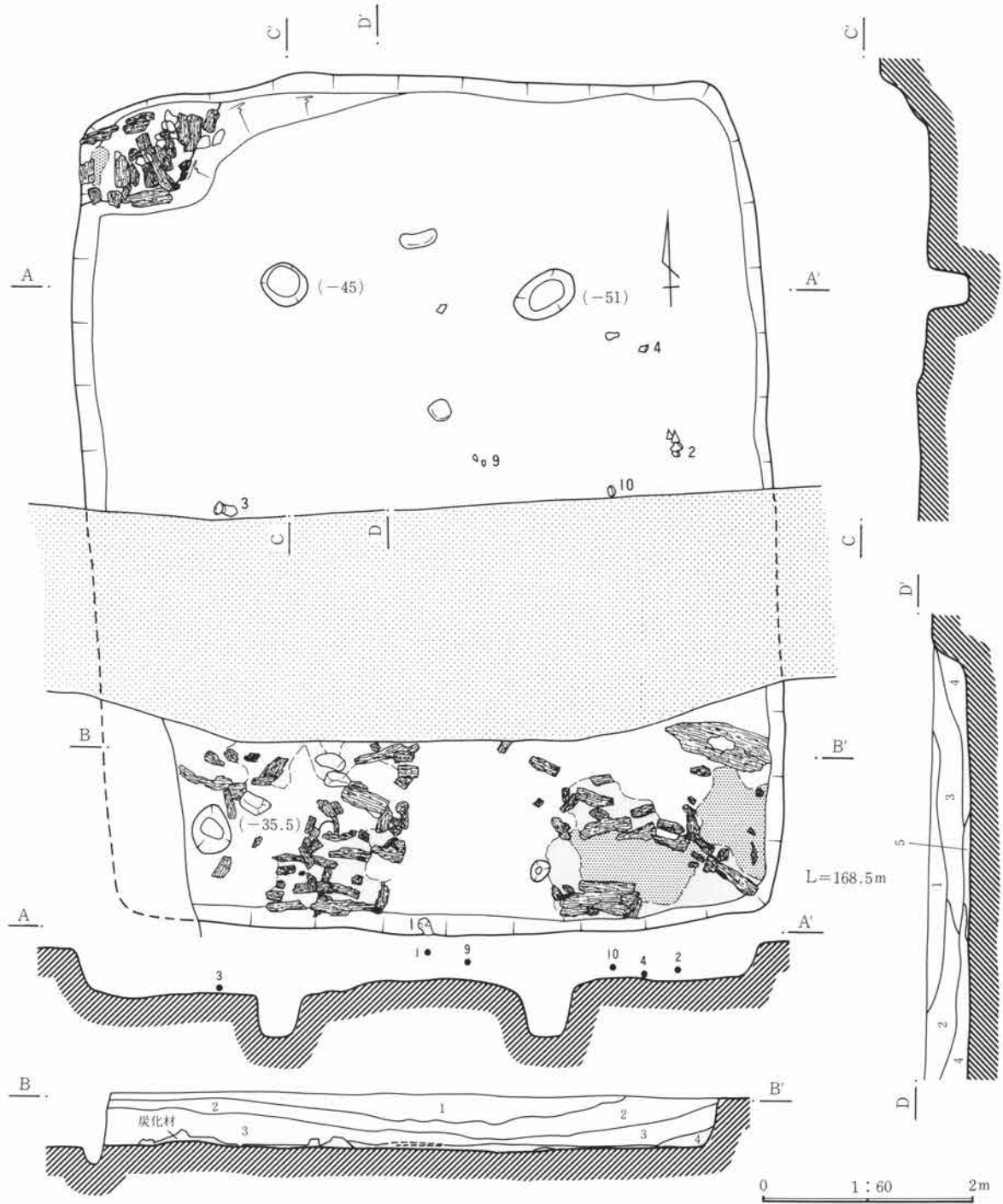


6 検出した遺構・遺物

**周壁、壁溝** 周壁は黄褐色土（第V層）、良好に検出される。壁溝は見られない。

**床面** 床面は黄褐色土（第V層）を踏み固めている。西北コーナー部は緩い壇上になり、炭化材が集中する。

南半部では床面上に焼土、炭火材が著しく検出される。火災に遭っている。



Bセクション

- 1 暗褐色 炭化物を少量含む。茶色粒子を多量に含む。
- 2 黒褐色 炭化物を含む。
- 3 暗褐色 炭化物を多量に含む。
- 4 暗褐色 炭火物を多量に含む。

Dセクション

- 1 暗褐色 炭化物を多量に含む。
- 2 淡灰褐色 水成ロームを含む。
- 3 暗灰褐色 炭化物を多量に含む。
- 4 暗灰褐色 炭化物を多量に含む。
- 5 暗褐色 ローム粒を含む。

第16図 76号住居



## (2) 弥生時代後期の住居跡

**支柱穴** 支柱は4本構造と推定できる。北側2支柱穴を検出する。

**炉跡** 北、奥側2支柱穴間に炉跡の据え石と思われる長細い円礫が床面に密着して見られる。焼土帯は確認できない。

**遺物出土状態** 床面上より、土器破片が数点出土している。

**時期** 弥生後期第3期

76号住居出土土器観察表 PL.96

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 9.4 高 13.4		外 口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ、底部はヘラナデ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周 底部全周
2	台付甕	口 17.8 胴 21.4		外 口辺～胴上部は波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
3	高坏		大型で器壁は厚い。	外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	脚上部全周 外面丹彩。

76号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
4	甕	口 22	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	11%
5	甕		折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	6%
6	甕		折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	鈍黄褐色	8%
7	甕			外 波状文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	橙色	8%
8	台付甕	口 12		外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	やや堅緻	暗赤褐色	8%
9	鉢	口 16	折り返し口縁	外 ヘラミガキ。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	橙色	14%

76号住居出土石器観察表 PL.96

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
10	刃器	7.8×5.8×1.3	黒色頁岩	72.8	片面に自然面を残す縦長剥片、両先端部に刃部を作り出している。両側縁は鋭利ではあるが、二次調整或使用痕はない。

## 77号住居 (第17図、PL.10)

**位置** 55-H04に位置する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形で小規模である。規模は長軸3.0m、短軸2.3m。方位N-76°-W

**周壁、壁溝** 周壁は深さ15cm前後、ほぼ全周検出する。壁溝は無し。

**支柱穴** 検出できない。浅いピットが2か所に検出される。このうち東壁沿いのピットは主軸線上に位置しており、支柱穴の可能性もある。

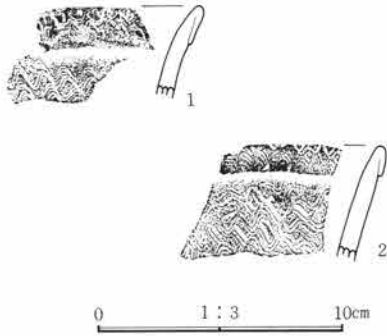
**床面** 床面上の数か所に焼土帯、炭化材が散在する。火災に遭った可能性がある。南縁辺部、床面直上に径40cmの偏平な河原石が置かれている。

6 検出した遺構・遺物

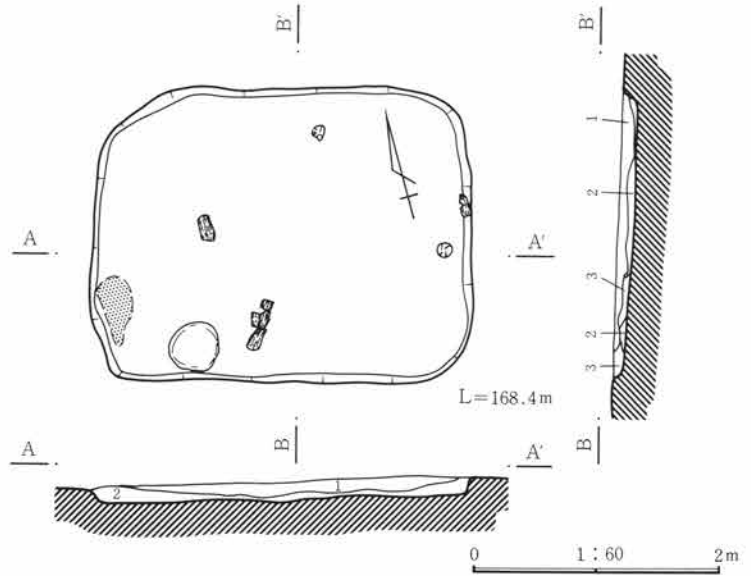
炉跡 不明

遺物出土状態 出土遺物はほとんどない。覆土中より甕の破片が数片出土する。

時期 弥生後期第3期。



第18図 77号住居出土遺物



A・Bセクション  
 1 暗褐色 夾雑物は少ない。  
 2 暗褐色 炭化物を多量に含む。  
 3 赤褐色 鉄分の凝集著しい。

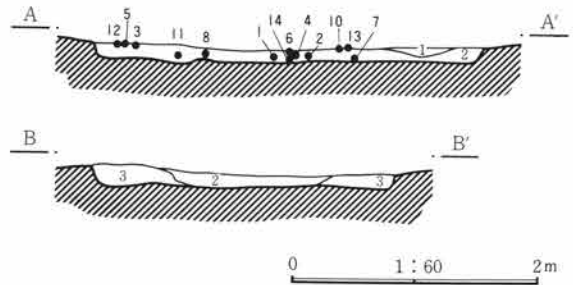
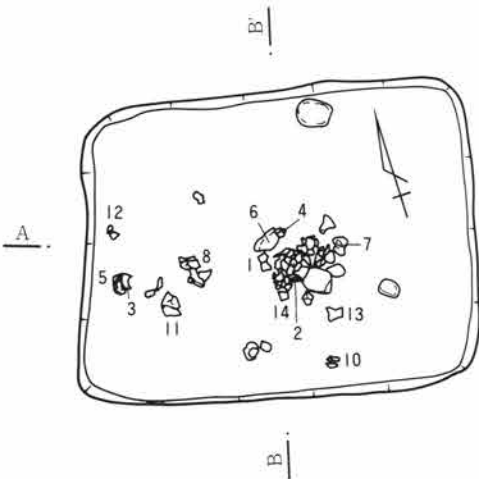
第17図 77号住居

77号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
1	甕	口 18	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	淡赤橙色	7%
2	甕	口 24	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	4%

78号住居跡 (第19図、PL. 10)

位置 57-H04に位置する。



A・Bセクション  
 1 黒褐色 浅間C軽石小粒を微量に含む。  
 2 黒褐色 炭化物を少量含む。  
 3 暗褐色 浅間C軽石、炭化物を少量含む。

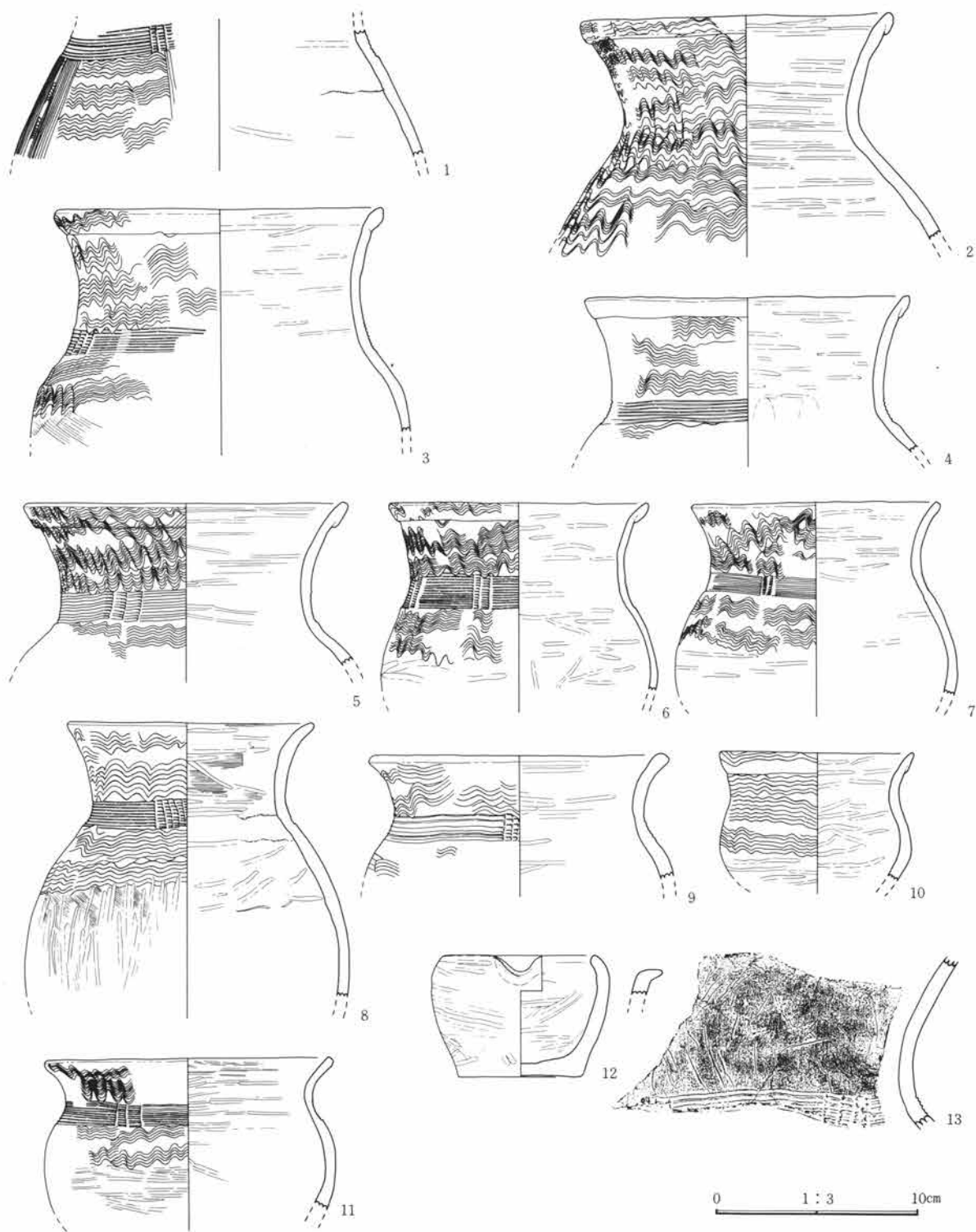
第19図 78号住居

(2) 弥生時代後期の住居跡

形状、規模、方位 隅丸長方形を呈する。規模は長軸3.1m、短軸2.4m。小型の住居である。方位はN-78°-W。

周壁、壁溝 周壁は淡黄褐色（第V層）。10~15cmの高さで全周検出する。壁溝はなし。

支柱穴 検出できない。



第20図 78号住居出土遺物（1）

6 検出した遺構・遺物

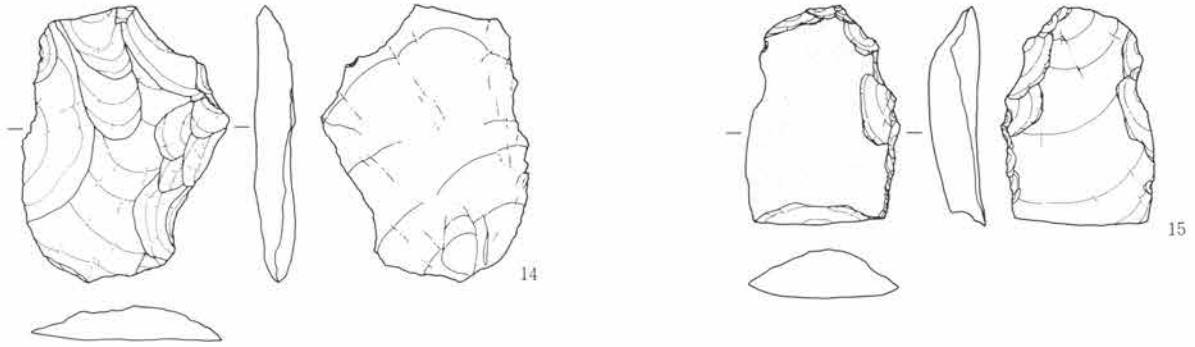
床面 淡黄褐色ローム質土面を踏み固めている。

炉跡 検出できない。

遺物出土状態 住居中央部の床面上より土器破片が多数集中して出土した。

時期 弥生後期第3期。

他の遺構との関係 84号住居と北西部で重複するが本住居の方が新しい。



第21図 78号住居出土遺物(2)

0 1:2 5cm

78号住居出土土器観察表 PL.96

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺		接合痕目立つ。	外 頸部は3連止め簾状文、胴上部は波状文に縦櫛描直線2条垂下する。 内 ナデ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	胴部一部遺存
2	甕	口 14.8	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	口縁部全周 頸～胴上部 $\frac{1}{2}$ 周
3	甕	口 16.2 胴 18.6	折り返し口縁、段胴は弱い。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周 胴上部 $\frac{1}{2}$ 周
4	甕	口 16.0	折り返し口縁	外 口縁部はヨコナデ、口辺～胴上部は波状文、頸部は櫛描直線文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～胴上部 $\frac{1}{2}$ 周
5	甕	口 15.5	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、灰白色、黒褐色	口縁～胴上部 $\frac{1}{2}$ 周
6	甕	口 12.8 胴 13.6	折り返し口縁。器壁は薄い。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁部ほぼ全周 胴部 $\frac{1}{2}$ 周
7	甕	口 12.2 胴 13.8		外 口縁～胴上部波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ、器面は荒れる。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 周
8	甕	口 12.0 胴 15.8	頸部付近接合痕目立つ。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は5連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍黄橙色	口縁部全周 頸～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
9	甕	口 14.8		外 口縁～胴上部波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～胴上部 $\frac{1}{4}$ 周
10	台付甕	口 9.5 胴 9.3	折り返し口縁。段は目立たない。	外 口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
11	台付甕	口 13.7 胴 14.3		外 口縁～胴上部は波状文。頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周 頸～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
12	片	口 7.4 高 5.9		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周

78号住居出土土器観察表(拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
13	壺			外 頸部は4連止め簾状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	鈍橙色	27%

## (2) 弥生時代後期の住居跡

78号住居出土石器観察表 PL. 96

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
14	刃器	7.3× 5.6× 1.1	黒色頁岩	41.5	縦長剥片の片面を剥離調整している。片側縁に片面剥離により刃部を作っている。
15	刃器	5.9× 4.1× 1.5	黒色頁岩	40.0	片面に自然面を残す縦長剥片、両側縁に刃部を作る。片側に使用による細かい剥離がみられる。

## 83号住居跡 (第22図、PL. 11)

**位置** 57-H06に位置する。南半部で84号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。西辺は不明であるが支柱穴などから正方形に近いと想定できる。規模は長軸4.8m以上、短軸4.5m以上。方位はN-12°-E。

**周壁、壁溝** 西側周壁部は調査区域外のため不明。壁土は灰褐色土 (第V層)。84号住居の周壁との間に弱い段が生じている。壁溝はなし。

**支柱穴** 支柱は4本構造。

**床面** 周壁際で炭化物、焼土帯が多量に見られる。火災に遭ったとおもわれる。84号住居との境界部はわずかに段を認めるが明瞭ではない。

**炉跡** 不明

**遺物出土状態** 住居中央部床面上5cm前後より土器大形破片が多数出土している。

**時期** 弥生後期第3期。

**他の遺構との関係** 84号住居と南半部で重複するが本住居の方が新しく、84号住居の床面を切っている。

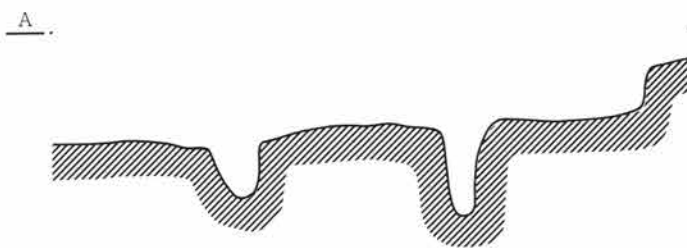
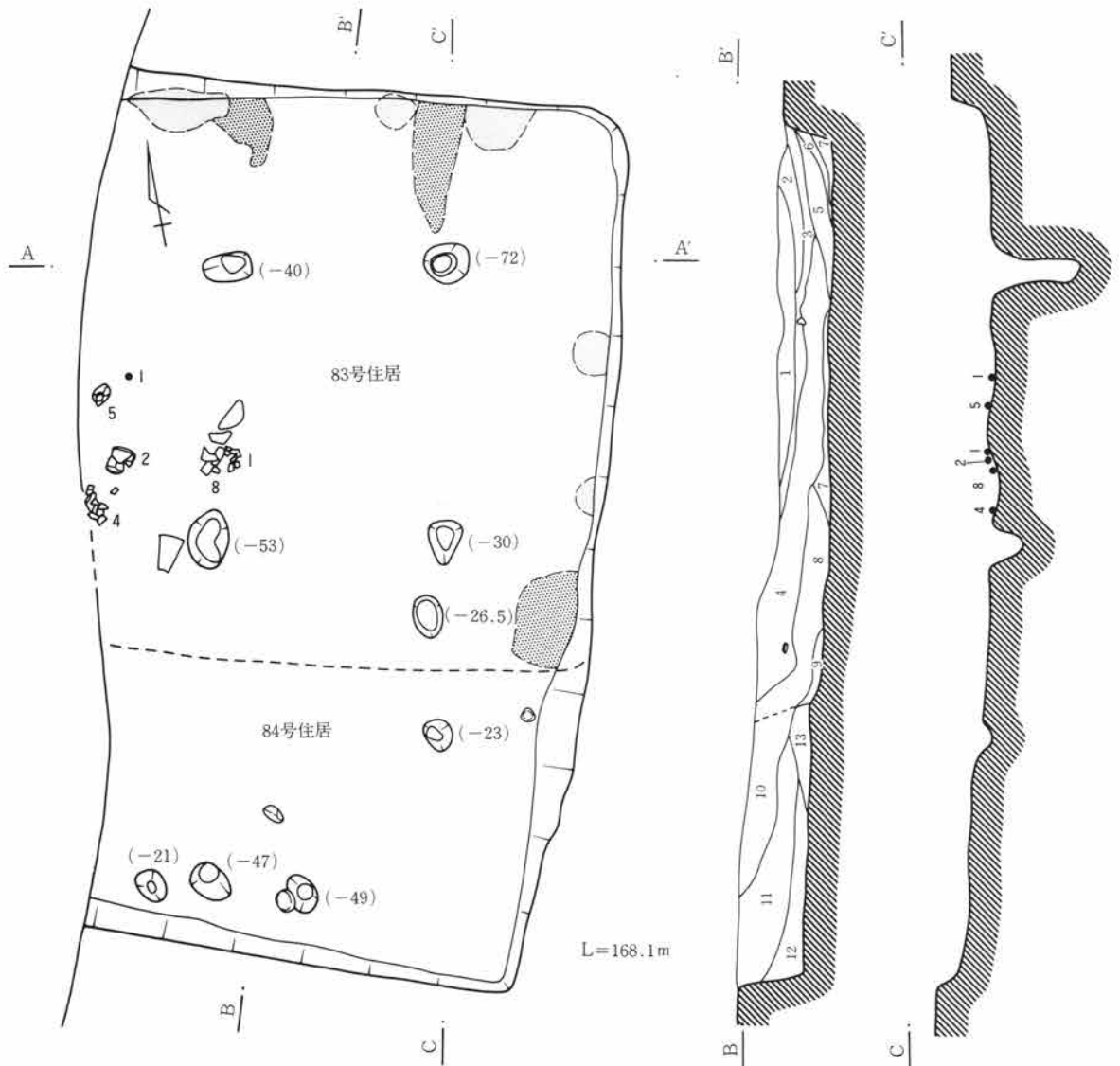
83号住居出土土器観察表 PL. 97

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 16.7 高 29.7	折り返し口縁。	外 口縁部はハケメ後ヘラミガキ、頸部は3連止め簾状文、胴上部は波状文。以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、鈍黄褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
2	壺	胴 20.1		外 頸部は楕描直線文、胴部は波状文、ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍橙褐色	頸部 $\frac{1}{2}$ 周 胴～底部全周
3	甕	口 15.5 高 26.4	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、明褐色	ほぼ完形 スス付着
4	甕	口 16.6 胴 20.4	折り返し口縁。	外 口縁部はヨコナデ、一部に波状文、口辺～肩部は波状文、胴部はハケメ後ヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍橙褐色	口縁～胴部 $\frac{3}{4}$ 周
5	甕	底 7.7	底部は丸い。	外 ハケメ後ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	胴下部～底部 全周
6	高坏	脚 6.0		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はナデ。	砂粒を含む。 堅緻、褐色	坏部 $\frac{1}{2}$ 周 脚部 $\frac{1}{2}$ 周

83号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
7	甕			外 頸部は楕描横直線に縦直線。	細砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	17%
8	台付甕			外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	鈍橙褐色	16%
9	高坏	口 16		外 ヘラミガキ、丹彩。内 ヘラミガキ、丹彩。	砂粒を含む。	堅緻	赤色	9%

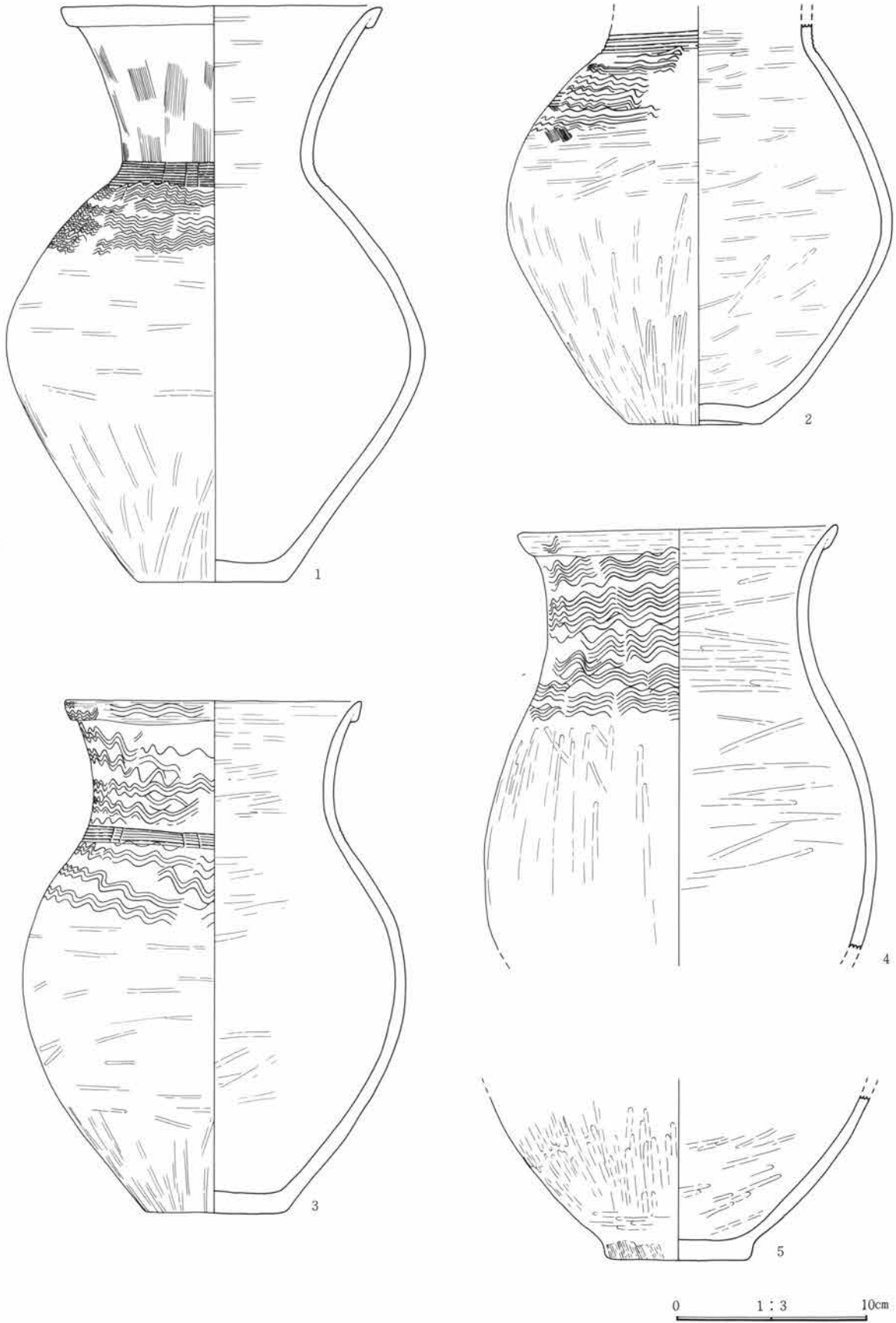
6 検出した遺構・遺物



0 1:60 2m

- |       |              |         |                   |
|-------|--------------|---------|-------------------|
| 1 淡黒色 | 粘質。          | 7 黒色    | 炭化物層。             |
| 2 淡黒色 | 1にはほぼ同じ。     | 8 淡黒色   | 粘質。               |
| 3 灰白色 | 粘土。          | 9 淡黒褐色  | ローム、焼土、炭化物を含む。    |
| 4 黒褐色 | 粘質、鉄分が沈着。    | 10 淡黒色  | 淡褐色粘土がブロック状に混在。   |
| 5 黒褐色 | 鉄分の沈着がより目立つ。 | 11 淡灰黒色 | 鉄分の沈着目立つ。         |
| 6 淡褐色 | ロームブロック主体。   | 12 黒色   | 粘質土、淡褐色ロームブロック含む。 |
|       |              | 13 黒褐色  | ロームブロックを多く含む。     |

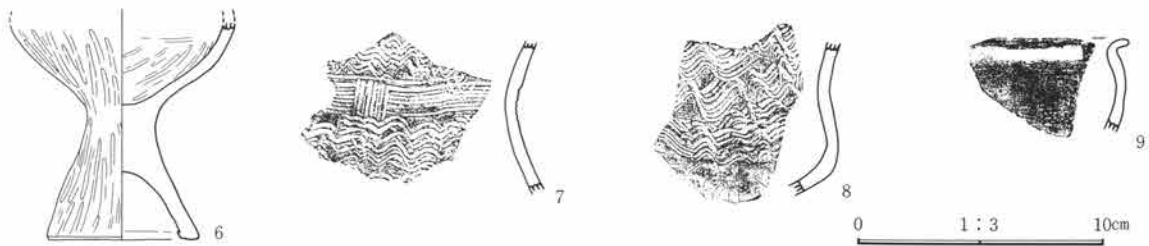
第22図 83号、84号住居



第23図 83号住居出土遺物(1)



6 検出した遺構・遺物



第24図 83号住居出土遺物(2)

84号住居(第22図、PL. 11)

**位置** 57-H05に位置する。

**形状、規模、方位** 形状は不明。北部は83号住居と重複し、西部は調査区域外。

**周壁、壁溝** 壁土は灰褐色土(第V層)。壁溝はなし。

**主柱穴** 主柱穴は不明確。南側出入部に1対のピットがある。

**床面** 灰褐色土を踏み固めている。83号の床面よりも5cm前後高い。

**炉跡** 不明

**遺物出土状態** 出土遺物は僅少。住居の時期の決め手になる遺物は見られない。

**時期** 弥生後期

**他の遺構との関係** 83号住居と重複。本住居の方が古い。

88号住居(第25図、PL. 11)

**位置** 48-G48に位置する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。規模は長軸6.5m以上、短軸5.5m、方位はN-30°-E。南辺部は調査区域境のため明確に検出できない。

**周壁、壁溝** 壁土は砂質褐色土(第V層)。周壁は無し。

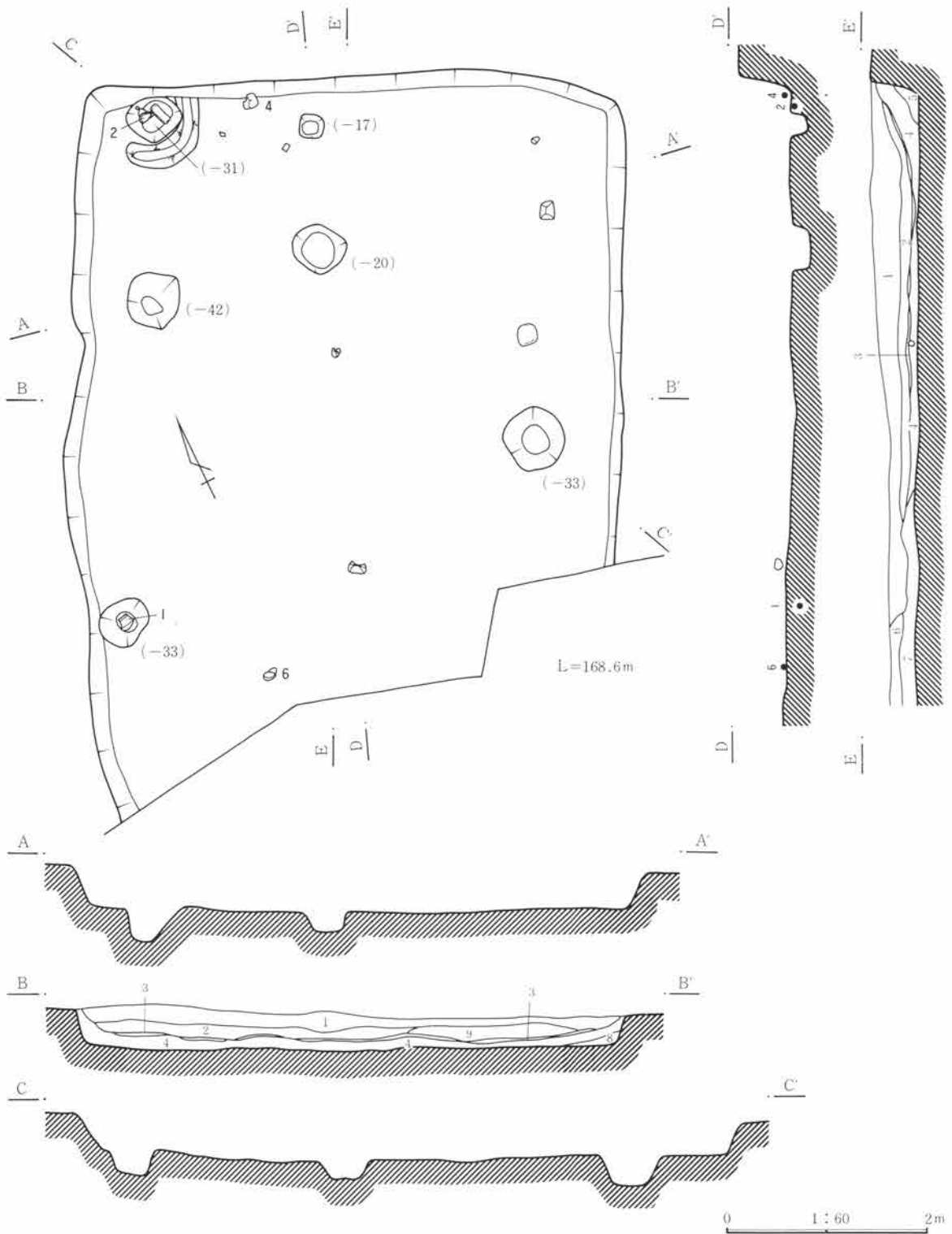
**主柱穴、その他ピット** 主柱穴と明確に特定できるピットは認められない。北西コーナー部及び西壁際の2か所に貯蔵穴と思われるピットを検出する。北西コーナー部のピットは径60cm、深さ40cm、周囲に幅30cm、高さ5cmの周堤を巡らしている。ピット内からは上部が完存する壺と長細い石が出土している。西壁下のピットからは胴部欠損の壺が出土している。

**床面** 黄褐色土を平坦に踏み固めている。

**炉跡** 不明。

**遺物出土状態** 床面上からの出土遺物は少ない。覆土中より弥生後期終末の土器破片が出土している。

**時期** 弥生後期第3期。

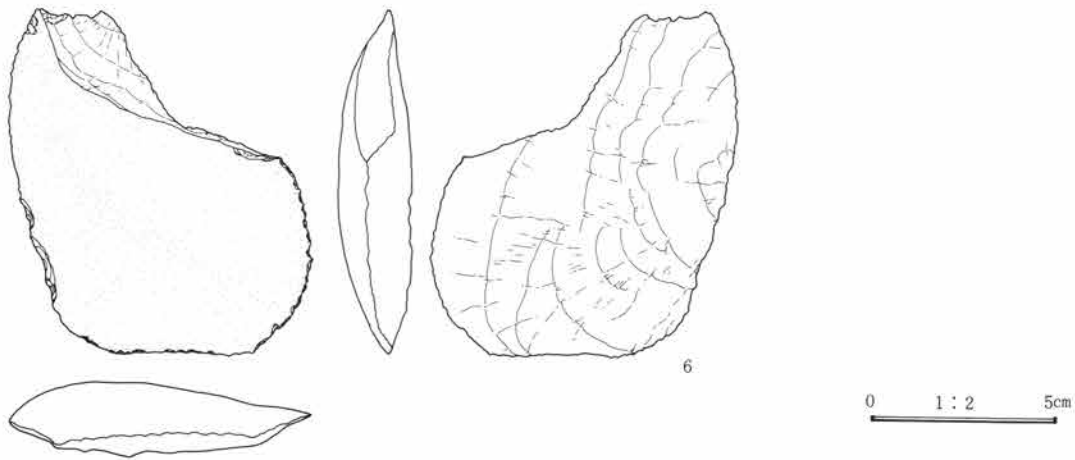
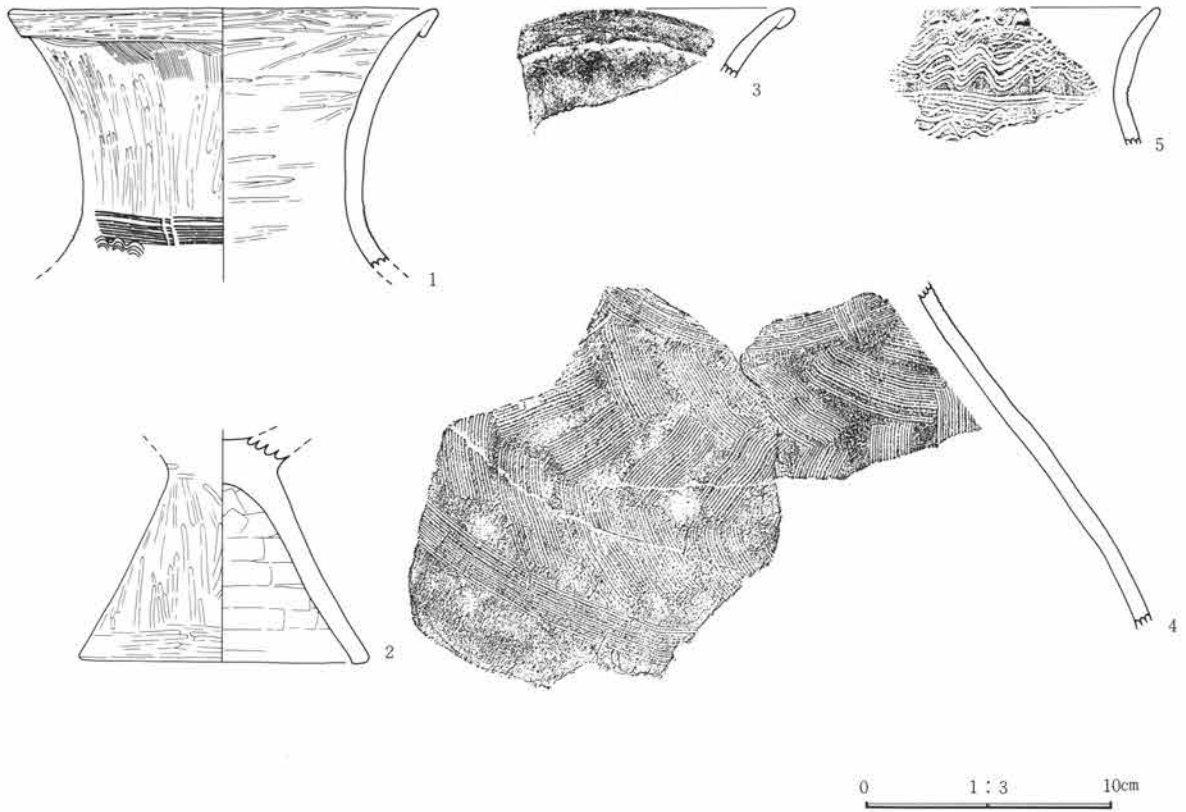


B・Eセクション

- |                   |                    |
|-------------------|--------------------|
| 1 暗灰褐色 夾雑物は少ない。   | 6 暗灰褐色 炭化物を多量に含む。  |
| 2 暗灰褐色 炭化物目立つ。    | 7 淡灰褐色 ローム粒を多量に含む。 |
| 3 灰色 灰色珪酸体の層。     | 8 淡灰褐色 ローム粒点在。     |
| 4 暗灰褐色 炭化物を多量に含む。 | 9 暗灰褐色 褐色ローム粒層。    |
| 5 褐色 ローム粒を含む。     |                    |

第25図 88号住居

6 検出した遺構・遺物



第26図 88号住居出土遺物

88号住居出土土器観察表 PL.97

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 16.9	折り返し口縁。	外 口縁～口辺部はハケメ後ヘラミガキ、頸部は2連止め簾状文。肩部は波状文。 内 ハケメ後ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。堅緻、明赤褐色	口縁～頸部全周
2	高坏脚	11.5		外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。	細砂粒を多量に含む。堅緻、鈍橙色	脚部全周

## (2) 弥生時代後期の住居跡

88号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
3	壺	口 16	折り返し口縁	外 ヘラミガキ。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	橙色	15%
4	壺			外 頸部は櫛描縦、横直線、肩部は櫛描羽状文。	砂粒を含む。	やや堅緻	淡橙色	
5	甕	口 14		外 頸部は櫛描直線文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	やや堅緻	赤褐色	10%

88号住居出土石器観察表 PL. 97

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
6	刃器	9.2×8.2×2.0	黒色頁岩	145.4	片面に自然面を残す剥片、二次調整は施していない。側縁部に細かい使用による剥離が多数みられる。

## 91号住居 (第27図、PL. 12)

**位置** 53-H06に位置する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。東南コーナーは鈍角でやや台形状を呈する。規模は長軸5.6m、短軸4.0m。方位はN-90°。

**周壁、壁溝** 壁土は灰褐色土(第V層)で、検出状況は良好。検出できた壁高は50cm。竪穴の深さに比べ住居規模は小さい。

**主柱穴** 中軸線上に4か所、四隅にそれぞれ1か所円形ピットを検出する。中軸線上のピットには深さ42cm、あるいは35cmといった深いものがあり、これらが主柱穴になると思われる。

**床面** 灰褐色土(第V層)を踏み固めている。

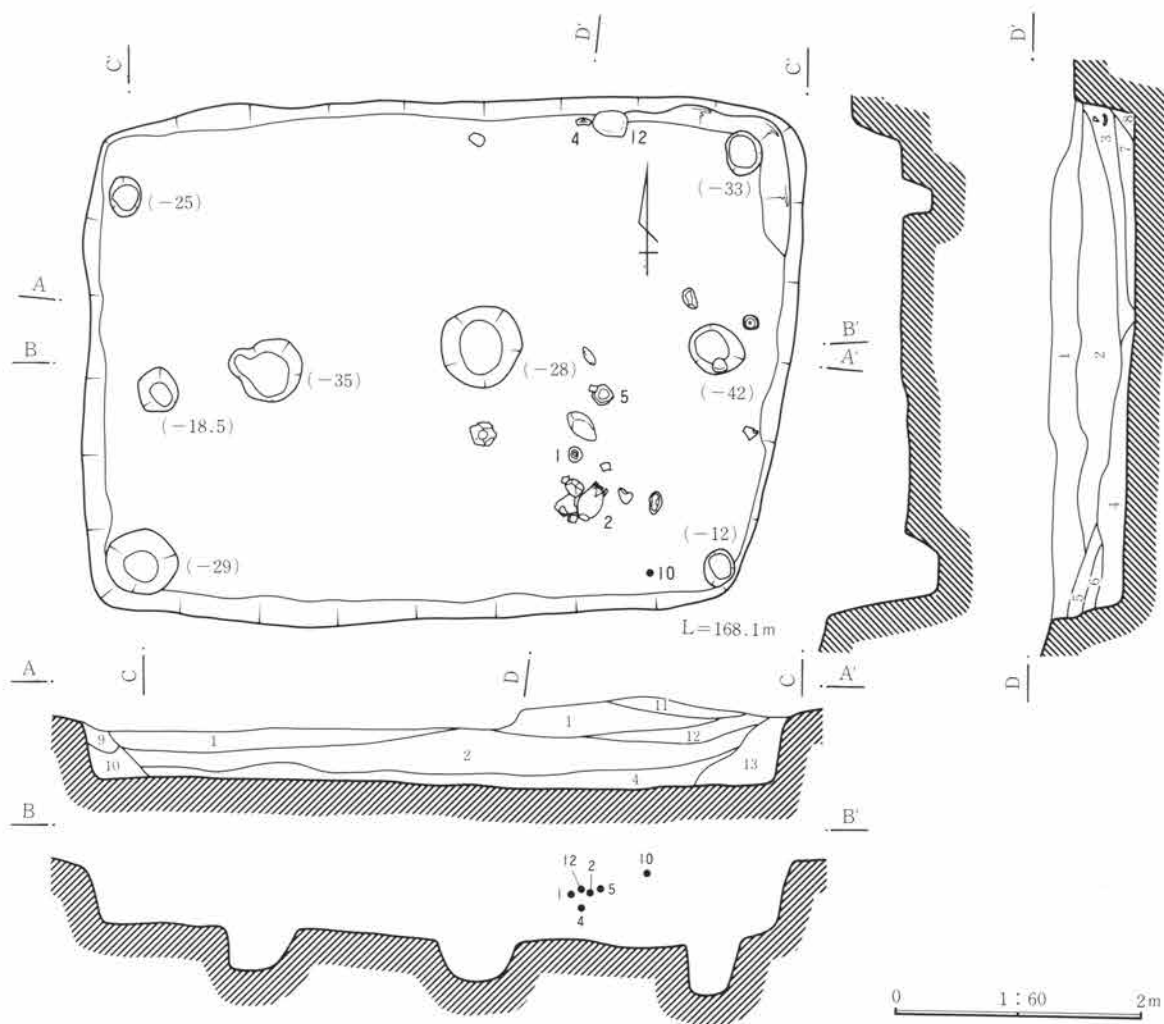
**炉跡** 不明確。検出できない。

**遺物出土状態** 床面上からの出土は少ない。床面上30cm前後の覆土上部より弥生土器、古式土師器の完形個体、大形破片が集中して出土している。これらの遺物は住居が廃絶され、埋没が半ばまで進んだ後に東方向から投棄されたものである。覆土の堆積状況は、住居中央部がレンズ状をなし、自然埋没と認められる。浅間C軽石を含む土層は最上部に15cm程の厚さで認められる。軽石の降下時にはほぼ埋没し、わずかに浅く窪んでいる状態であったと思われる。

**時期** 弥生後期。

**他の遺構との関係** 他の住居との重複関係はない。

6 検出した遺構・遺物



A・Dセクション

- |       |                        |         |                  |
|-------|------------------------|---------|------------------|
| 1 暗褐色 | 浅間C軽石、炭化物を少量混入する。      | 8 黄褐色   | 大粒のロームブロックを混入する。 |
| 2 黒褐色 | 炭化物を少量混入する。            | 9 黒褐色   | 浅間C軽石を僅かに混入する。   |
| 3 灰褐色 | ロームブロックを混入する。          | 10 黄褐色  | ローム粒を混入する。       |
| 4 黒褐色 | ロームブロックを混入する。炭化物を少量含む。 | 11 暗灰褐色 | 浅間C軽石を多量に含む。     |
| 5 黒褐色 | ロームを少量混入する。            | 12 灰褐色  | 粘質。              |
| 6 灰褐色 | ロームを混入する。              | 13 暗灰褐色 | 黄褐色ロームを含む。       |
| 7 黄褐色 | ロームブロックを混入する。          |         |                  |

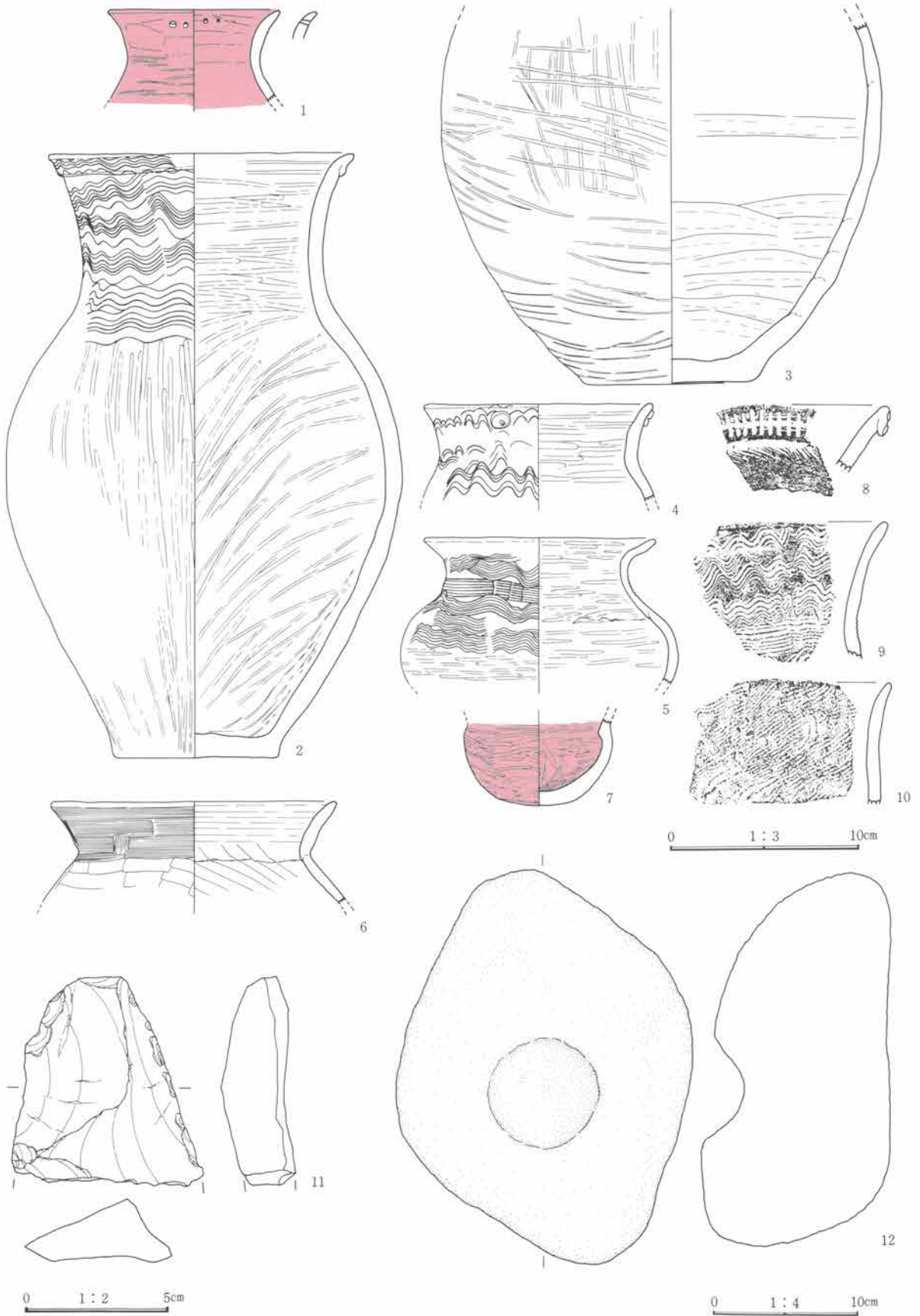
第27図 91号住居

91号住居出土土器観察表 PL.98

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 8.8	口縁部に円孔2個並びで2か所あり。	外 ヘラミガキ、丹彩。 内 ヘラナデ、丹彩。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、赤色	口縁～胴上部全周
2	甕	口 15.8 高 31.6	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	ほぼ完形
3	壺	胴 23.3	内面は接合痕が目立つ。	外 ヘラミガキ。 内 ナデ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	胴～底部 $\frac{1}{4}$ 周
4	甕	口 11.6		外 口縁～肩部は波状文。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 やや軟弱、暗赤褐色	口縁～胴上部 $\frac{1}{4}$ 周



(2) 弥生時代後期の住居跡



第28図 91号住居出土遺物

6 検出した遺構・遺物

91号住居出土土器観察表 PL. 98

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
5	台付甕	口 12.2 胴 14.6		外 口辺～胴上部は波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、暗褐色	口縁～胴部全周
6	甕	口 15.0	頸部内側に接合痕が目立つ。	外 口縁部はハケメ状のヨコナデ、胴部はヘラナデ。 内 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、暗褐色	口縁部1/4周
7	埴	胴 7.8	器壁は厚い。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、赤褐色	胴～底部全周 内外面丹彩

91号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
8	壺		折り返し口縁	外 口縁部はヘラ刻み目。内外面に丹彩。	粗砂粒を含む。	堅緻	赤色	6%
9	甕	口 14		外 頸部は2連止め簾状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	灰褐色	13%
10	甕	口 10		外 L R単節縄文。	細砂粒を含む。	堅緻	鈍赤褐色	20%

91号住居出土石器観察表 PL. 98

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
11	刃器	7.4(+) $\times$ 6.9 $\times$ 2.6	頁岩	106.1	横長剥片を両面剥離調整する。両側縁に刃部を作っている。半欠品とみられる。
12	くぼみ石	27.9 $\times$ 20.9 $\times$ 13.2	粗粒安山岩	7180.0	自然石の片面に半球形のくぼみを作る。

196号住居

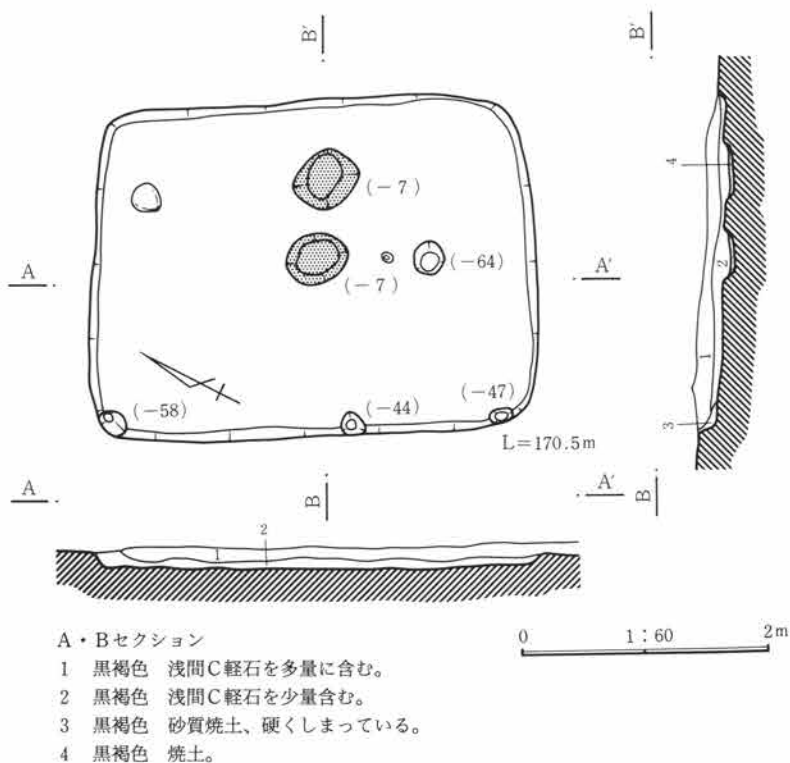
(第29図、PL. 12)

位置60-G25に位置する。

形状、規模、方位 隅丸長方形の小型住居。規模は長軸3.5m、短軸2.7m。方位はN-28°-W。

周壁、壁溝 周壁は暗褐色土(第V層)で明確。壁溝は検出できない。

主柱穴 住居中央部中軸線上に1か所径25cm、深さ60cm程の円形ピットを検出する。これは主柱穴の可能性が高い。ただ北部にはこれに対応する



第29図 196号住居

(2) 弥生時代後期の住居跡

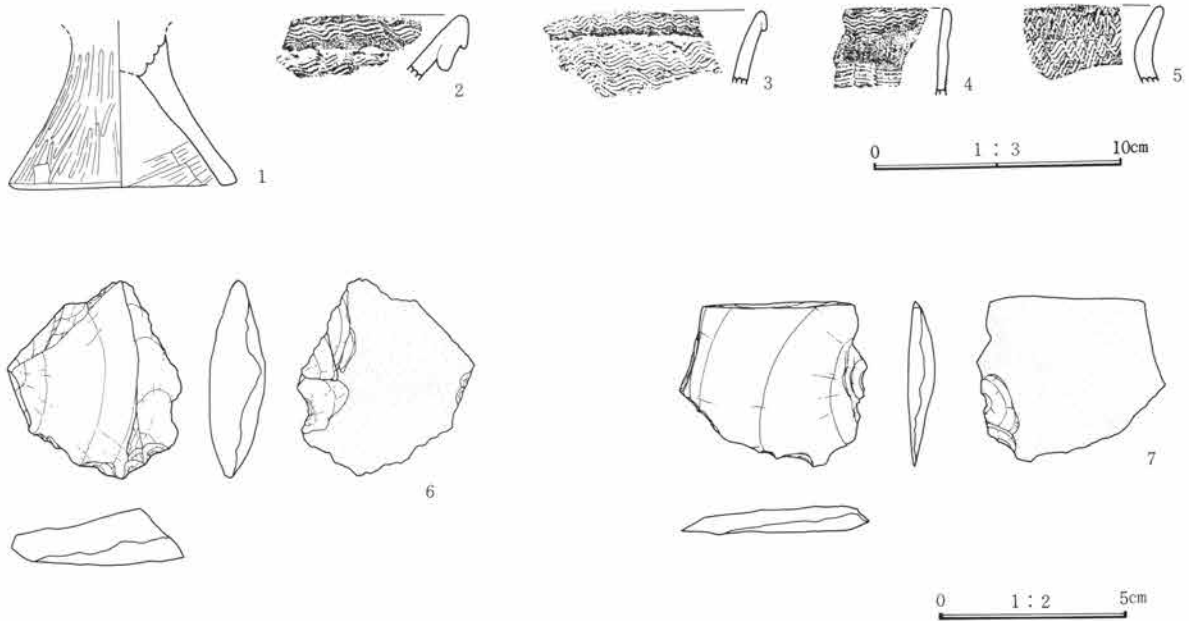
ピットは認められない。このほか東辺の周壁際に深さ50cm前後のピットを3か所で検出する。

床面 床面は小礫を含む暗褐色で、平坦に踏み固めている。

炉跡 地床炉が2か所に設けられている。径1m、深さ20cm前後の円形ピットの内面が焼土化している。

遺物出土状態 出土遺物は少ない。覆土中より弥生土器破片が数点出土している。

時期 弥生後期第3期。



第30図 196号住居出土遺物

196号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	台付甕(?) 脚	9.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ、ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	脚部1/2周

196号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
2	壺		2段口縁	外 口縁部は波状文。内 ハケメ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	灰白色	6%
3	甕		折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	やや堅緻	灰褐色	6%
4	甕			外 口縁部は波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	褐色	4%
5	台付甕 口	8		外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	やや堅緻	赤褐色	10%

196号住居出土石器観察表 PL.98

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
6	刃器	5.3×4.7×1.5	黒色頁岩	30.8	片側に自然面を残す剥片、1側縁を剥離調整しており、使用による細かい剥離があり、刃部は両側縁にわたっている。
7	刃器	4.4×5.1×0.7	黒色頁岩	14.9	片側に自然面を残す剥片、二次調整は施されていないが、2側縁が刃部となっており、こまかい剥離使用痕がある。

6 検出した遺構・遺物

197号住居 (第31図、PL. 12)

位置 58-G27に位置する。

形状、規模、方位 東辺が短かく、やや歪んだ長方形の小型住居。規模は長軸4.8m、短軸2.9m。方位はN-27°-W。

周壁、壁溝 壁土は褐色粘質土(第V層)。

主柱穴 中軸線上に2か所、東辺部に3か所、円形ピットを検出する。中軸線上の2ピットは深さ24~28cmで、主柱穴と認められる。

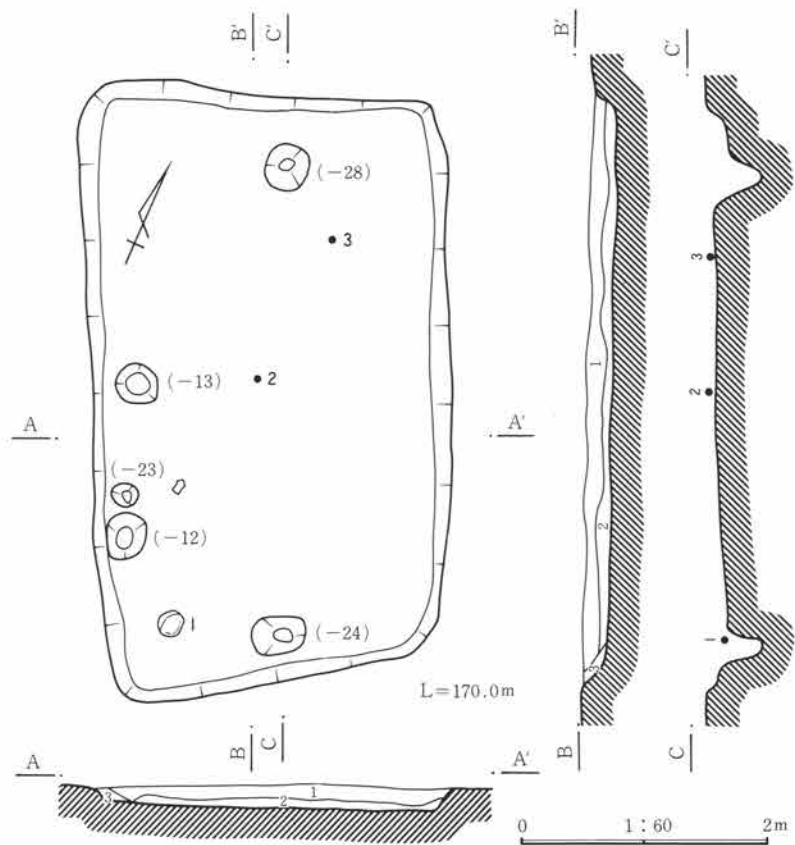
床面 円礫を多量に含む平坦な褐色土面。

炉跡 不明確。検出できない。

覆土 覆土上部には礫群が乗っている。

遺物出土状態 覆土中より弥生土器破片が出土している。

時期 弥生後期第3期。



A・Bセクション

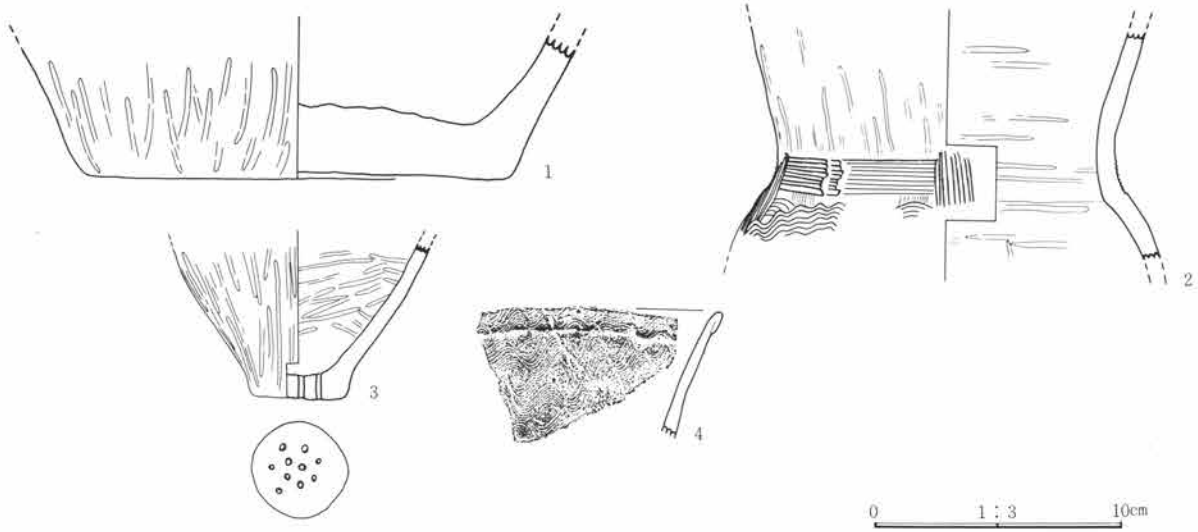
- 1 暗褐色 浅間C軽石、黄褐色土小粒を少量含む。
- 2 暗褐色 浅間C軽石を含まず。黄褐色小礫を微量に含む。
- 3 暗褐色 基盤層(第V層)少量含む。

第31図 197号住居

197号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	底 17.0		外 ヘラミガキ。 内 ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、浅黄橙色	底部全周
2	甕	頸 13.5		外 頸部は2連止め簾状文に櫛描縦線、肩部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	頸~胴上部全周
3	甕	底 3.9	底部に小孔10個あり。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	胴下~底部全周

(2) 弥生時代後期の住居跡



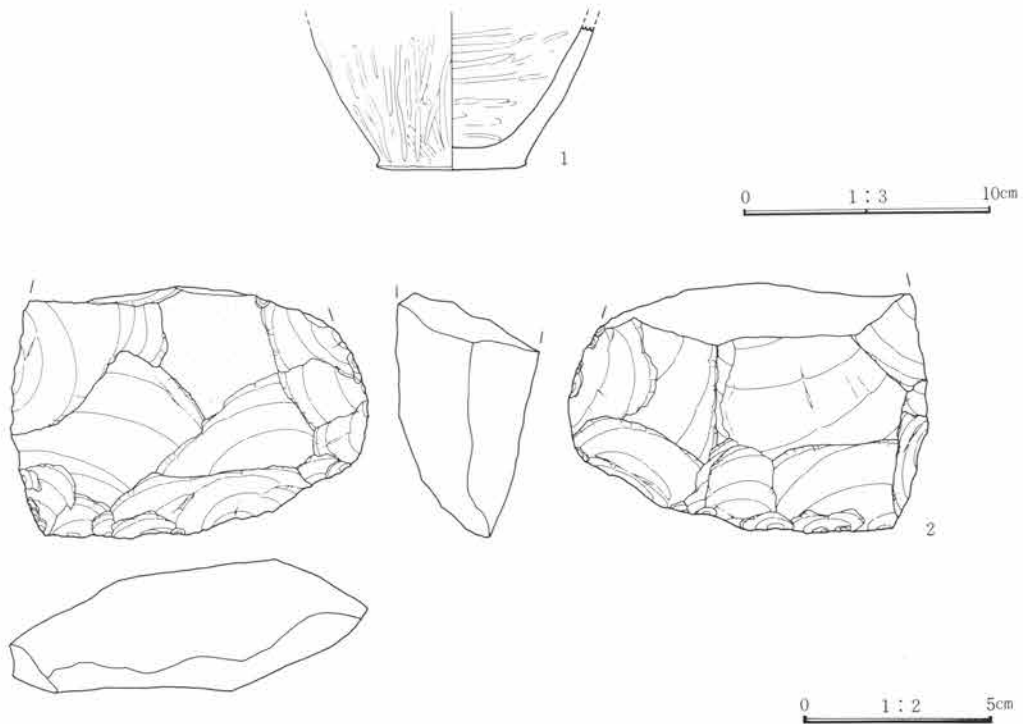
第32図 197号住居出土遺物

197号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
4	甕	口 20	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	暗褐色	12%

198号住居 (第34図、PL. 13)

位置 65-G33に位置する。



第33図 198号住居出土遺物

6 検出した遺構・遺物

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する小型住居。規模は長軸4.2m、短軸2.8m。方位はN-43°-W。

**周壁、壁溝** 壁土は褐色粘質土（第V層）。壁溝は検出できない。

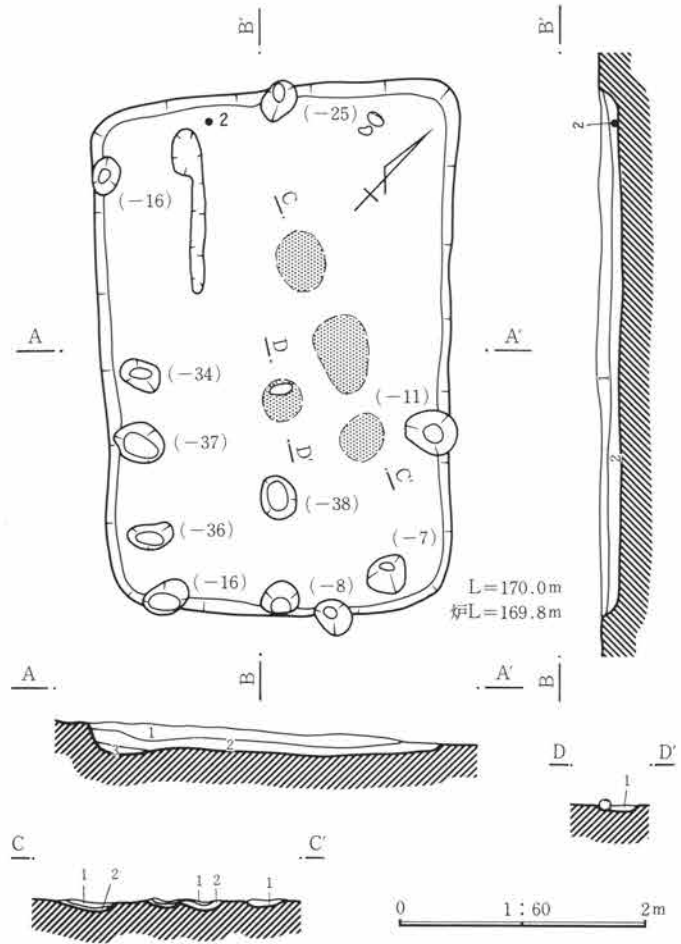
**支柱穴** 中軸線上、3か所に深さ25~40cmの支柱穴と見られるピットを検出する。その他、周壁際に多数のピットを検出する。

**床面** 床面は褐色粘質土。西コーナー部に細長く溝が検出されるが、これは間仕切りの可能性も考えられる。

**炉跡** 4か所に地床炉と思われる焼土帯を検出する。それぞれ一様に5~7cmの深さの掘り方が認められる。中央の炉跡は西の縁辺に長さ20cm程の長細い円礫を据えている。

**遺物出土状態** 出土遺物は少ない。弥生土器破片、石器が数点あり。

**時期** 弥生後期。



- A・Bセクション  
 1 黒褐色 浅間C軽石を多量に含む。  
 2 黒褐色 浅間C軽石を少量含む。  
 3 黒褐色 炭化物を僅かに含む。
- 炉跡セクション  
 1 焼土塊  
 2 焼土混土層。

第34図 198号住居

198号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	底 6.0		外 内 ヘラミガキ。	胎土・焼成・色	細砂粒を含む。 堅緻、黒褐色 胴下部1/3周 底部1/2周

198号住居出土石器観察表 PL.98

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
2	土掘り具	6.6(+) $\times$ 9.6 $\times$ 3.4	砂岩	244.5	片面に自然面を残す。刃部、側縁部は両面からの剝離調整を施す。基部は欠損している。



199号住居 (第35図、PL. 13)

位置 65-G37に位置する。

形状、規模、方位 隅丸長方形を呈する小型の住居。西辺部は調査区域外のため不明。規模は長軸不明、短軸2.7m。方位はN-82°-W。

周壁、壁溝 壁高は30cm前後を検出する。壁土は黄褐色土(第V層)で良好に検出する。壁溝は無し。

支柱穴 支柱穴と考えられるピットは認められない。南周壁際に1mの間隔をとって1対の長円形ピットを検出する。深さ20cm前後。これは出入のための施設に伴うピットであろう。

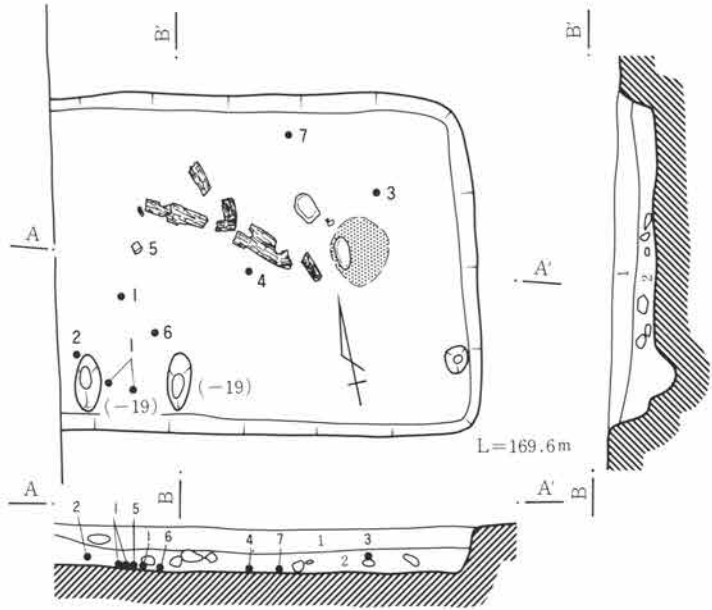
床面 床面直上に炭化材が目立つ。

焼失に遭ったと思われる。また床面上2~3cmに拳大~頭大の円礫が多量に集積して見られ、この石の間隙には炭化物の散在が目立って見られた。

炉跡 東壁から約1mの位置に地床炉が設けられる。炉跡は径50cm前後の焼土帯で、西縁には長さ30cm前後の長細い円礫を据えている。

遺物出土状態 床面上より弥生土器破片が数点出土している。後期第3期のものが主体であるが、第1、第2期の破片も混入している。

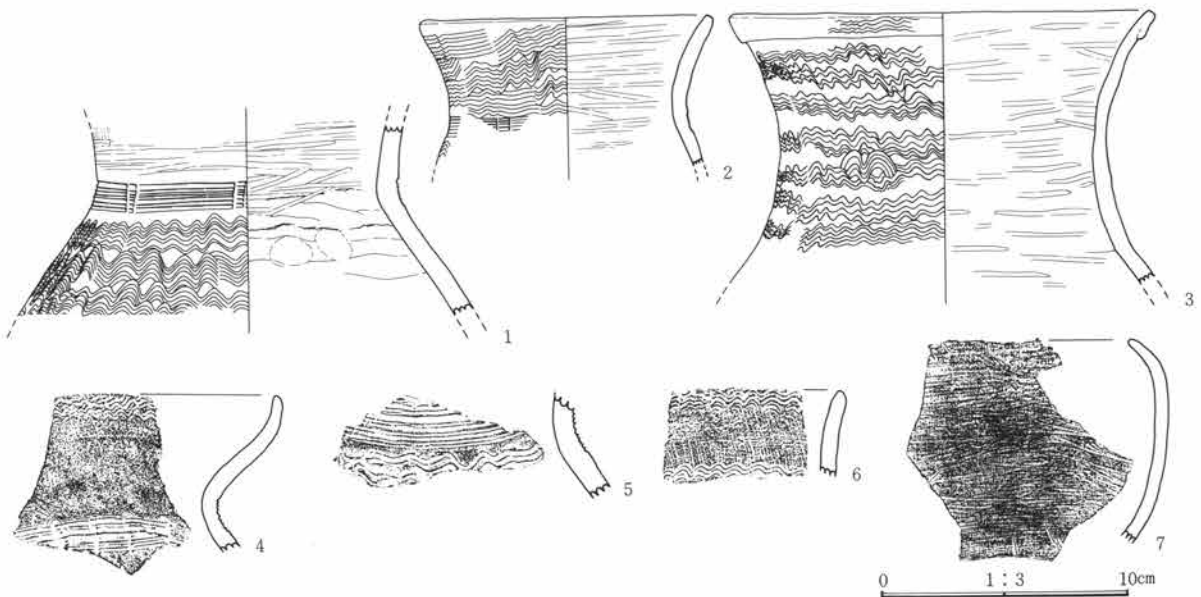
時期 弥生後期第3期。



A・Bセクション

- 1 暗褐色 浅間C軽石を含む。
- 2 暗褐色 粘質、1層よりも粒子が細かく、浅間C軽石を含む。

第35図 199号住居



第36図 199号住居出土遺物

6 検出した遺構・遺物

199号住居出土土器観察表 PL.98

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	頸 12.0		外 頸部は2連止め簾状文。肩部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	頸部1/4周
2	甕	口 12.0		外 口縁～肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～頸部1/4周
3	甕	口 16.6	折り返し口縁	外 口縁～頸部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～頸部1/4周

199号住居出土土器観察表（拓本）

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
4	壺	口 22	受け口状口縁	外 口縁部は波状文、頸部は等間隔止め簾状文。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	5%
5	壺			外 肩部は簾状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	橙色	8%
6	甕	口 18		外 口縁部は波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	7%
7	鉢	口 12		外 ハケメ。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	橙色	12%

202号住居（第38図、PL.14）

位置 49-G36に位置する。

形状、規模、方位 隅丸長方形を呈する。規模は長軸6.3m、短軸4.5m。方位はN-22°-E。

周壁、壁溝 壁土は褐色土（第V層）。壁高15cmで全周検出する。壁溝は検出できない。

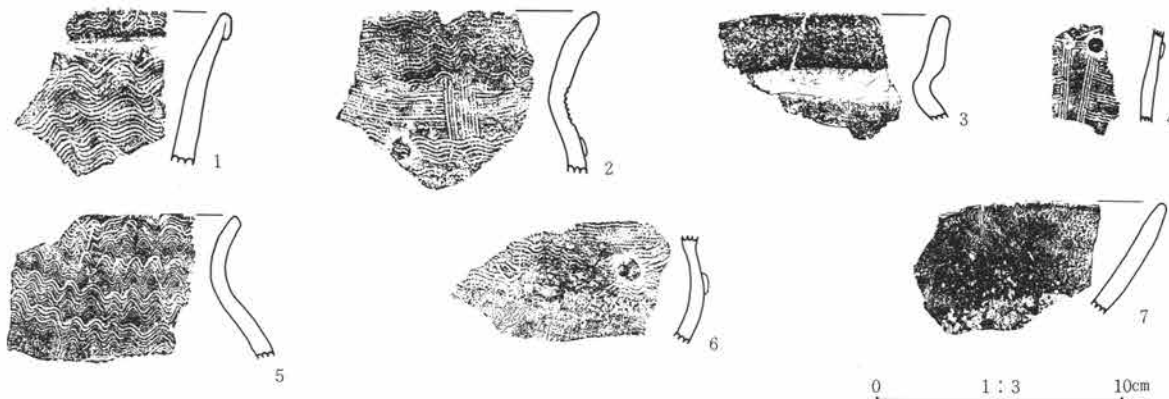
支柱穴 不明確。支柱穴と明確に特定できるピットは認められない。東部に不整形なピットを2か所に認めるが位置的に支柱穴にはなり得ない。

床面 比較的平坦な面を検出する。

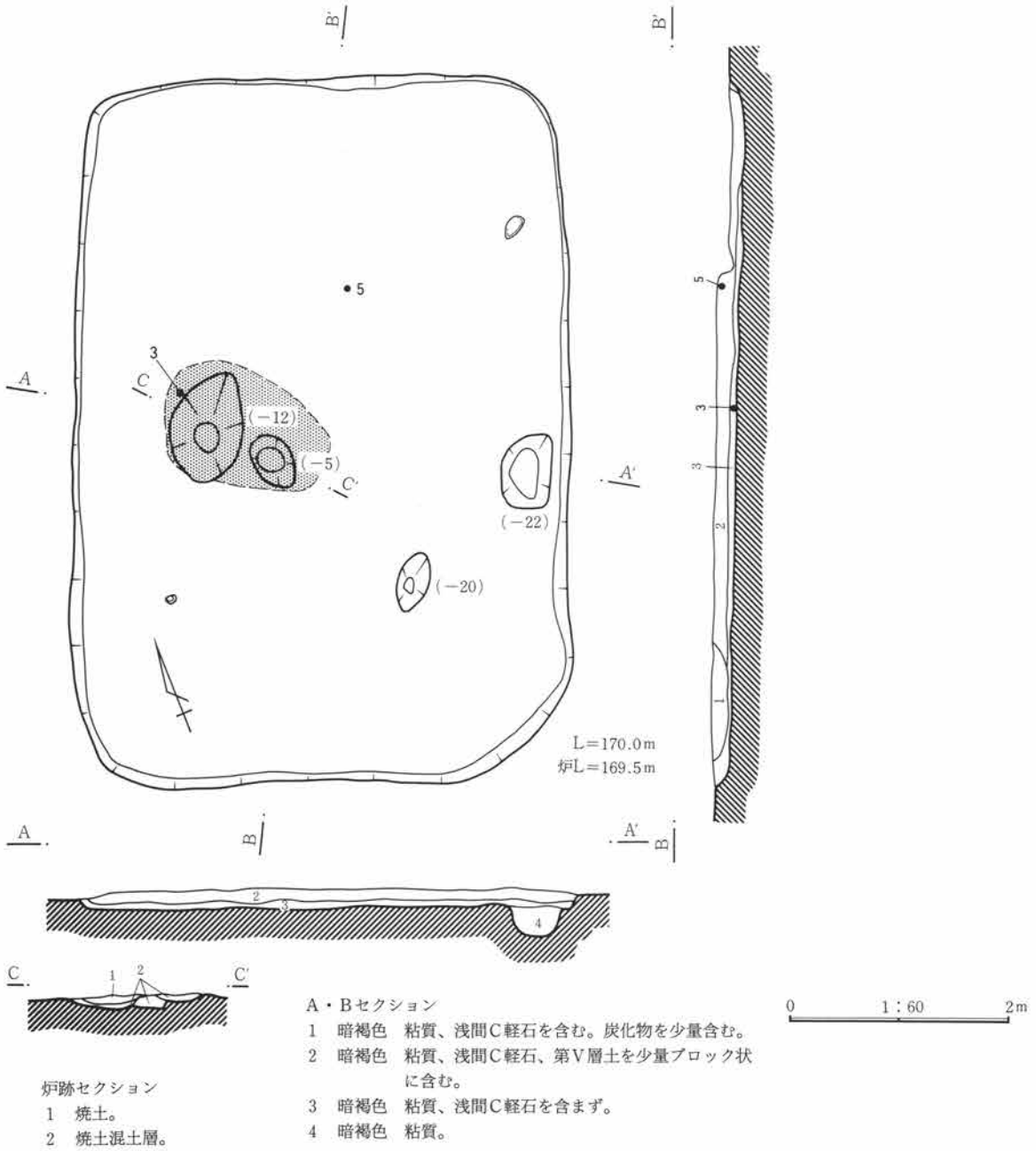
炉跡 中央部やや西よりに長径1.0mに達する長円形の地床炉が見られる。炉の掘り方は2か所あり、炉の移動に伴うものと思われる。

遺物出土状態 出土遺物は少ない。床面、覆土中より弥生土器小破片の出土が見られる。このうち小破片ではあるが東関東系、北陸系の土器も見られる。

時期 弥生後期第3期。



第37図 202号住居出土遺物



第38図 202号住居

202号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
1	甕		折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	明赤褐色	5%
2	甕	口 14		外 頸部は櫛描横直線に縦直線文、付文。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	13%
3	甕	口 16	受け口状口縁	外 ヨコナデ。内 ヨコナデ、胴部はナデ。	粗砂粒を含む。	やや堅緻	明褐色	13%
4	甕			外 櫛描縦区画内に横波状文、付文。	砂粒を含む。	堅緻	褐色	2%
5	台付甕			外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	明赤褐色	7%
6	台付甕			外 胴上部は波状文、付文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	明赤褐色	10%
7	高 坏	口 14		外 ヘラミガキ、丹彩。内 ヘラミガキ、丹彩。	砂粒を含む。	やや堅緻	赤色	13%

6 検出した遺構・遺物

206号住居 (第39図、PL. 14)

位置 50-G38に位置する。

形状、規模、方位 不整形な隅丸方形の小型住居。規模は長軸4.3m、短軸4.1m。方位はN-52°-W。

周壁、壁溝 壁土は黄褐色土(第V層)で良好に検出する。壁溝は西南半部にのみ検出される。

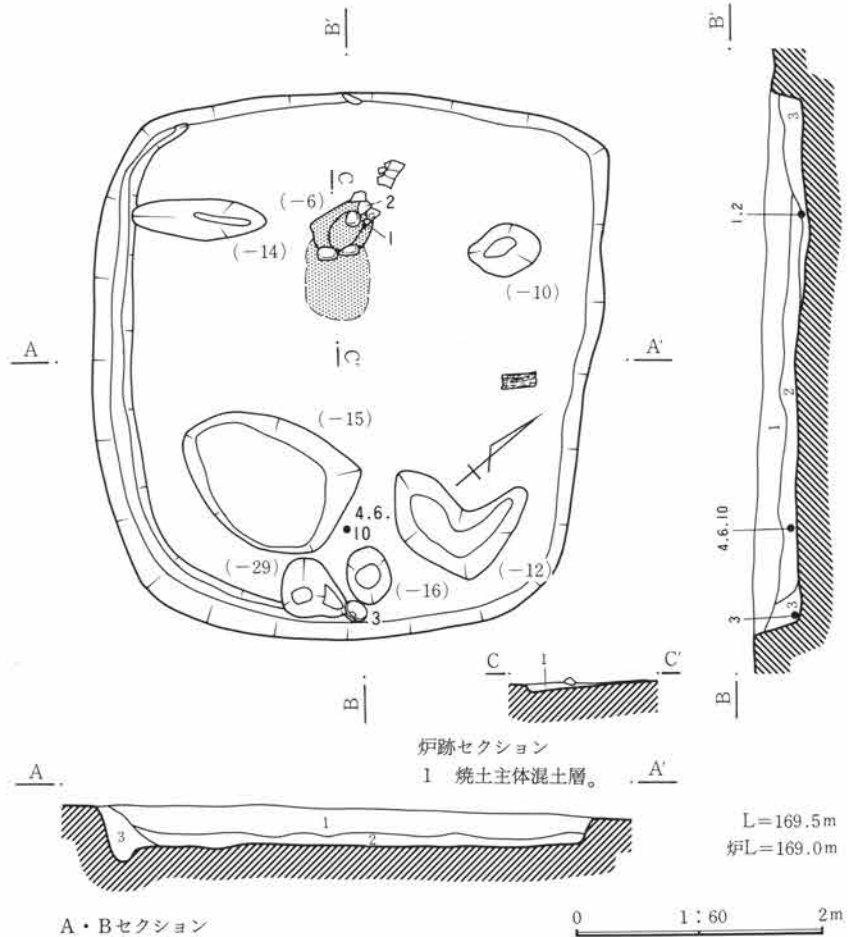
主柱穴 深さ10~15cmの不整形な大小のピットがみられるが主柱穴としてはそれぞれやや明確さを欠く。南東側の短辺の壁際に1対のピットがあり、深さ16~30cm。出入部の施設に伴うものと思われる。

床面 褐色の平坦な面を検出する。

炉跡 中軸線上北西寄り、2主柱穴間の辺りに地床炉を設けている。径7cm程の掘り方を伴い、炉の縁辺部には長細い石を据える。

遺物出土状態 床面上覆土中より、弥生土器大形破片が数点出土する。

時期 弥生後期第3期。



- A・Bセクション
- 1 黒褐色 浅間C軽石を多量、炭化物を少量含む。
  - 2 黒褐色 浅間C軽石、炭化物を少量含む。
  - 3 暗褐色 ローム粒を含む。

第39図 206号住居

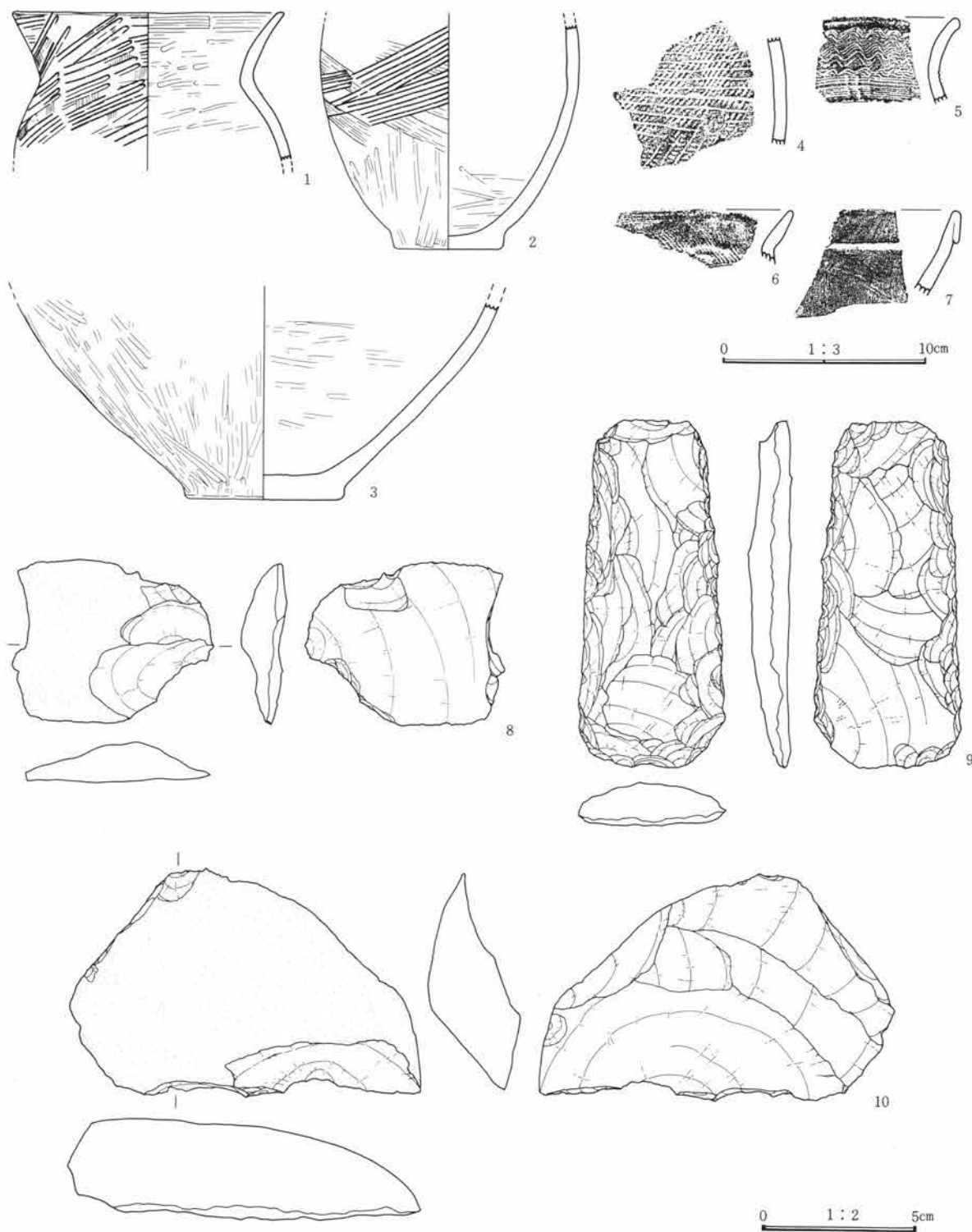
206号住居出土土器観察表 PL. 98

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 13.2		外 口縁~胴部は櫛描斜行直線文。 内 口縁部はハケメ後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明褐色	口縁~胴上部 全周
2	甕	底 5.2		外 胴部はハケメ後櫛描斜行直線文。以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	胴~底部1/2周
3	甕	底 7.8		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、鈍褐色	胴~底部全周

206号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
4	甕			外 胴部は捺糸文。内 ナデ。	砂粒を含む。	やや堅緻	灰白色	8%
5	甕			外 頸部は3連止め簾状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	橙色	8%

(2) 弥生時代後期の住居跡



第40図 206号住居出土遺物

206号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
6	甕	口 22		外 胴部はハケメ。内 口縁部はハケメ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	灰褐色	10%
7	鉢			外 ヘラミガキ。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	鈍橙色	5%

6 検出した遺構・遺物

206号住居出土石器観察表 PL.98

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
8	刃器	5.2×6.5×1.5	黒色頁岩	43.0	片側自然面の縦長剥片で、刃部は両面に粗い剥離を施している。
9	土掘り具	11.2×4.8×1.4	黒色頁岩	95.1	作りは丁寧で、短冊形に整えられ、刃部、側縁部に細かい調整が施されている。
10	刃器	7.3×11.5×3.3	黒色頁岩	245.4	片側は自然面、刃部には両面からの剥離調整を施している。

207号住居 (第41図、PL. 15)

位置 56-G38に位置する。

形状、規模、方位 長方形を呈する小型住居。規模は長軸3.6m、短軸3.1m。方位はN-51°-W。

周壁、壁溝 壁土は黄褐色土(第V層)で良好に検出される。壁溝は無し。

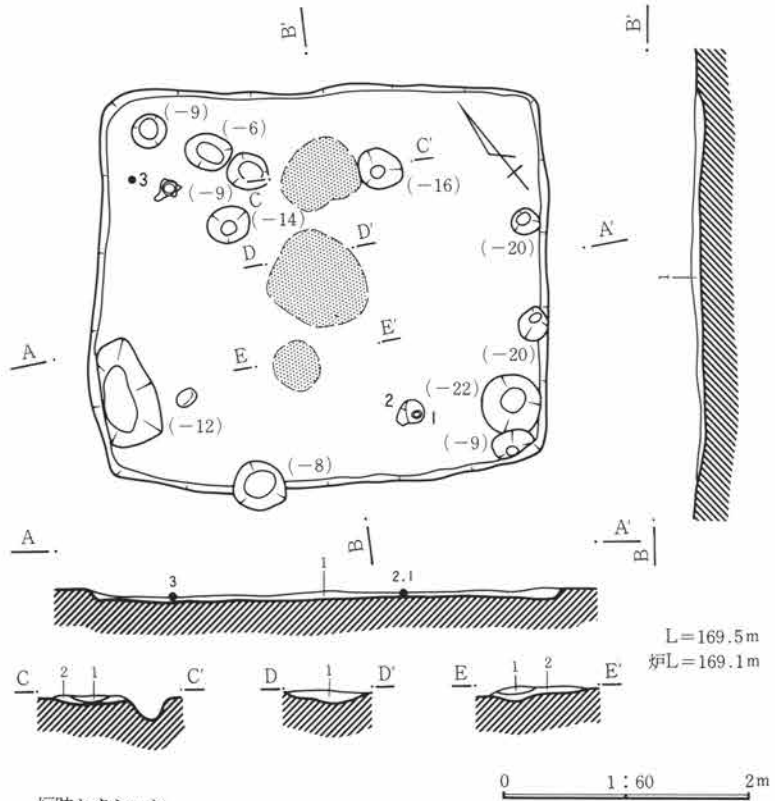
支柱穴 住居内には大小のピットが多数検出されるが支柱穴としてそれぞれ明確に認められない。

床面 床面の土は褐色土でやや粘質。覆土中には床面直上まで多量の浅間C軽石を含む。

炉跡 中央部に3か所地床炉が見られる。中央部のものが最も大きく、径80cm。

遺物出土状態 床面上より弥生土器破片が数点出土している。

時期 弥生後期第3期。



炉跡セクション

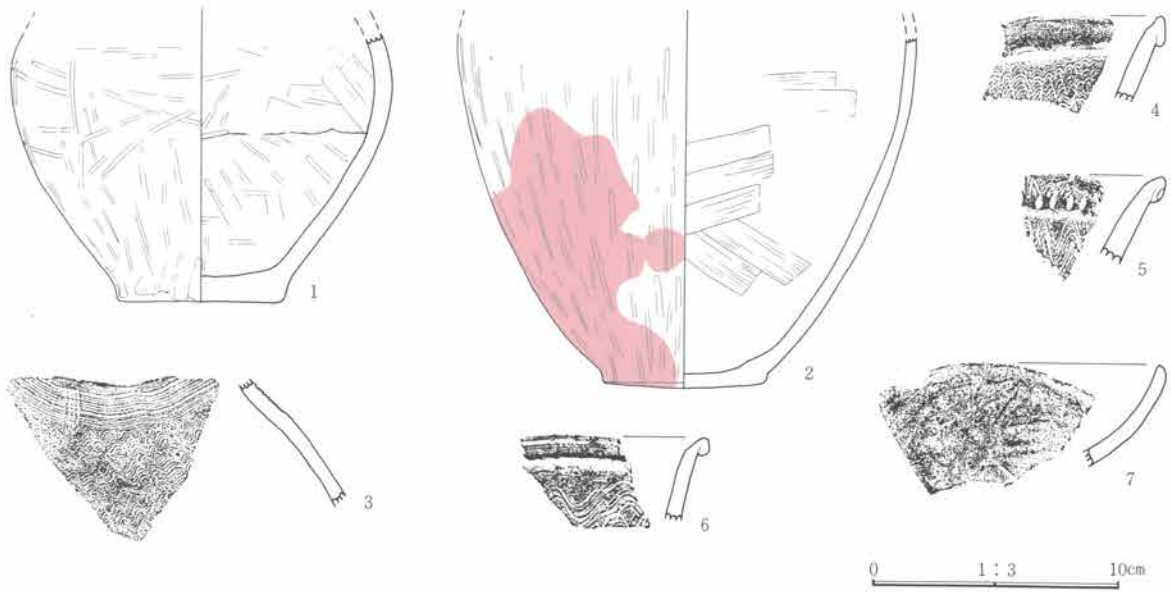
- 1 焼土ブロック  
2 暗褐色土、焼土を含む。
- A・Bセクション  
1 黒褐色 ロームを含む。

第41図 207号住居

207号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	底 6.2		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ、指ナデ、粗いヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	胴～底部全周 外面黒色付着
2	甕	底 6.6		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	胴～底部3/4周 外面丹付着





第42図 207号住居出土遺物

## 207号住居出土土器観察表 (拓本)

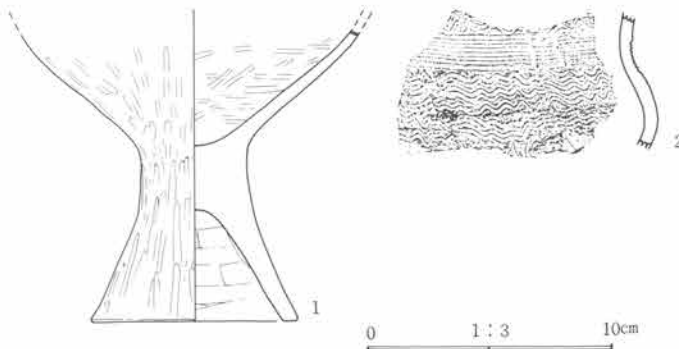
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
3	壺			外 頸部は4連止め縹状文。内 ナデ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	19%
4	甕		折り返し口縁	外 口縁部はヨコナデ、口辺部は波状文。	細砂粒を含む。	堅緻	赤橙色	6%
5	甕		折り返し口縁	外 口縁部は波状文にヘラ刻み目。	細砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	5%
6	甕		折り返し口縁	外 口縁部はヨコナデ、口辺部は波状文。	砂粒を含む。	堅緻	赤橙色	7%
7	高杯	口 10		外 ヘラミガキ。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	25%

## 208号住居 (第44図、PL. 16)

位置 57-G41に位置する。

形状、規模、方位 著しく長い隅丸長方形を呈する。規模は長軸4.3m、短軸2.4m。方位はN-3°-E。

周壁、壁溝 壁土は黄褐色土 (第V層)。ほぼ良好に検出する。壁溝は認められない。



第43図 208号住居出土遺物

6 検出した遺構・遺物

**支柱穴** 中軸線に2か所、支柱穴に関わると、思われるピットを検出する。西側周壁際に大小のピットを検出する。

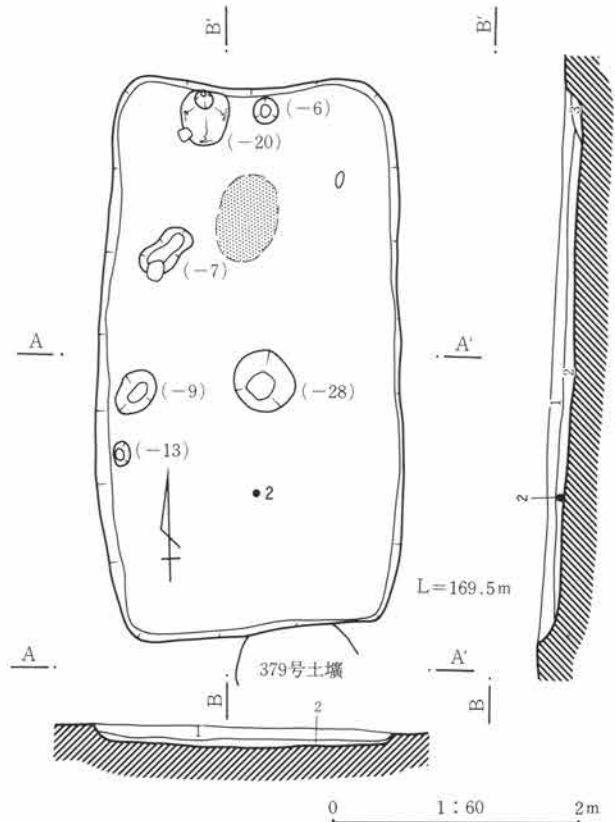
**床面** 黄褐色土面を平坦に踏み固めている。床面上3cm程の覆土中に拳大の円礫が10数個散在し、この中には凹石も1点見られる。

**炉跡** 中軸線上北部に地床炉を設けている。長径70cmの焼土帯を検出する。

**遺物出土状態** 出土遺物は少ない。住居内ピット中より弥生土器高坏下半部、床面上より台付甕破片を見る。

**時期** 弥生後期第3期。

**他の遺構との関係** 南辺部で、円形土壌が重複するが、本住居に付設したものではないと思われる。



A・Bセクション

- 1 黒褐色 黄色ローム粒を多量に含む。
- 2 黒褐色 ローム粒を含む。
- 3 暗褐色 ローム混土層。

第44図 208号住居

208号住居出土土器観察表 PL.98

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	高坏底	8.3		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	坏部4周 脚部全周

208号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
2	台付甕			外 頸部は2連止め簾状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	13%

210号住居 (第45図、PL. 16)

**位置** 54-G43に位置する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。規模は長軸6.3m、短軸5.4m。方位はN-32°-E。

**周壁、壁溝** 壁土は砂質黄褐色土(第V層)で検出状態は良好。検出できた壁高は50cm。

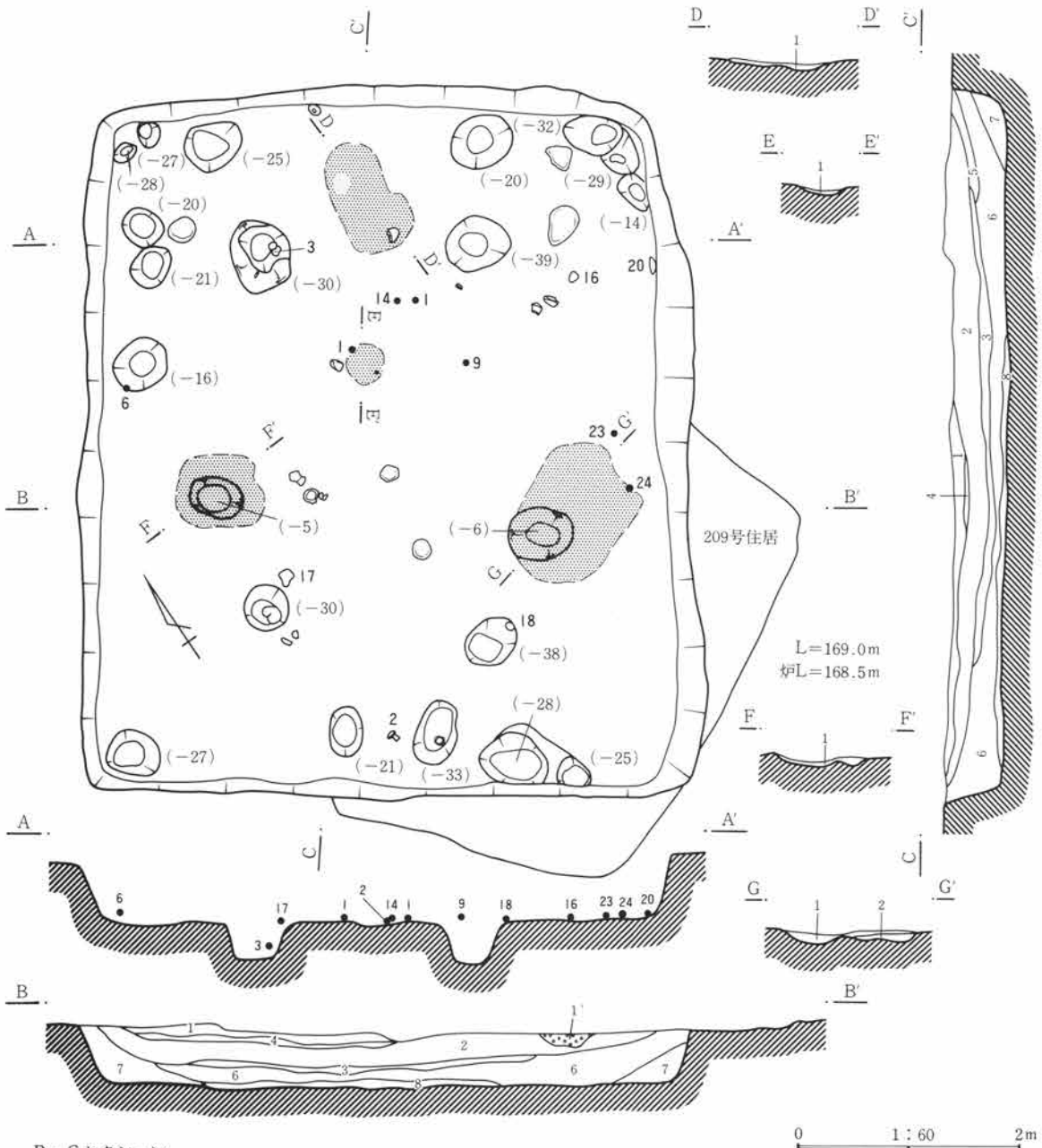
**支柱穴** 支柱は4本構造。深さは30~40cm。このほか周壁際などに多数のピットを検出する。南側周壁際20

cm程内よりに1対のピットを検出する。出入部の施設に関わると思われる。

**床面** 床面の土は黄褐色細砂質土で、この層の下20cmは黒色礫層。

**炉跡** 北側奥2主柱穴間やや外寄り、東西両側部2柱穴間外寄りの3か所に地床炉を検出する。それぞれ掘り方を伴う同規模の炉跡である。このほか中央部にも1か所径30cm程の小規模な焼土帯を検出する。

**遺物出土状態** 炉跡の周辺部に獣歯が点在する。覆土中、床面上より出土遺物は比較的多い。鉄鏃は東部の



B・Cセクション

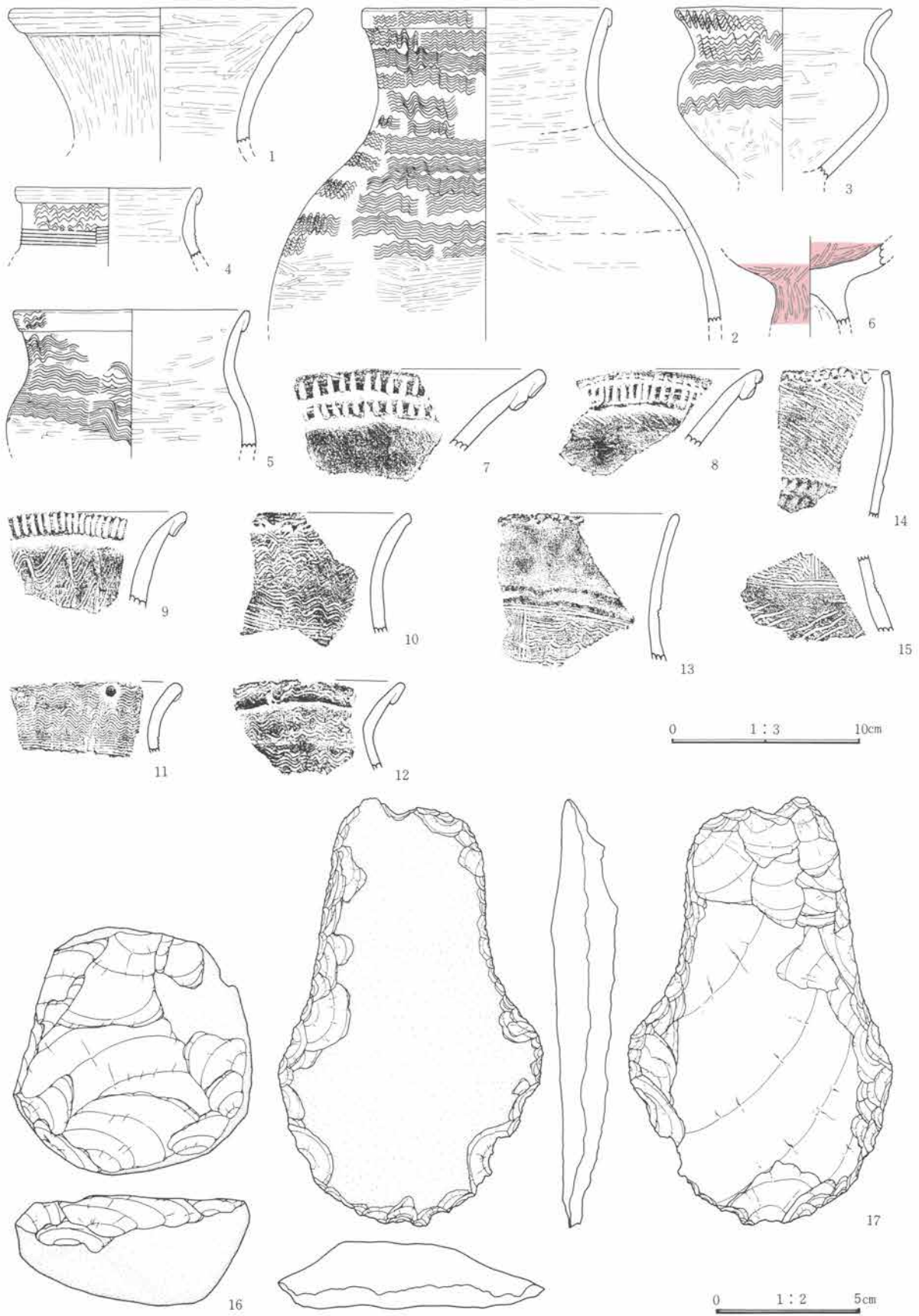
- 1 黒褐色 浅間C軽石を含む。
- 1' 黒褐色 浅間C軽石純層。
- 2 黒褐色 炭化物小粒を含む。
- 3 灰褐色 砂層。
- 4 灰層 焼土粒、炭化物を含む。
- 5 淡褐色 第V層土主体。
- 6 黒褐色 炭化物小粒を含む。
- 7 黒褐色
- 8 黒色 炭化物を多量に含む。

炉跡セクション

- 1 灰層
- 2 淡褐色 砂質、焼土粒を含む。

第45図 210号住居

6 検出した遺構・遺物



第46図 210号住居出土遺物(1)

炉の縁部床面に密着した状態で出土している。

時期 弥生後期第3期。

他の遺構との関係 北半部で209号住居と重複する。本住居の方が古い。



第47図 210号住居出土遺物(2)

210号住居出土土器観察表 PL. 99

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 16.0	折り返し口縁。	外 口縁部はヨコナダ、口辺～頸部はヘラミガキ。 内 口辺部はヘラミガキ。	細砂粒を含む。	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周 堅緻、赤褐色
2	甕	口 13.1 胴 23.7	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周 堅緻、橙色



6 検出した遺構・遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
3	台付甕	口 11.3 胴 11.0		外 口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ハケメ後ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、淡褐色	口縁～胴下部 1/2周
4	台付甕	口 9.8	折り返し口縁。	外 口縁部はヨコナデ、口辺部は波状文。頸部は櫛描直線文。	砂粒を含む。 堅緻、鈍黒褐色	口縁～頸部1/2周
5	台付甕	口 12.3 胴 12.8	折り返し口縁、端部は角ばる。	外 口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	口縁～胴上部 1/2周
6	高 坏			外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部は指ナデ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	脚上部全周 内外面丹彩

210号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
7	壺		2段口縁	外 口縁部は2段の刻み目。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	赤灰色	7%
8	壺	口 28	2段口縁	外 口縁部は刻み目、以下丹彩。内 丹彩。	細砂粒を含む。	堅緻	赤色	10%
9	甕		折り返し口縁	外 口縁部はヘラ刻み目。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	明褐色	8%
10	甕			外 頸部は櫛描直線文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	6%
11	甕	口 16		外 頸部は2連止め簾状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	灰赤褐色	14%
12	台付甕	口 17	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	やや堅緻	明褐色	11%
13	甕	口 18	頸部微隆起帯	外 口縁端部無節絡状体押圧、頸部は櫛描文。	細砂粒を含む。	堅緻	灰色	7%
14	甕		頸部突帯押圧	外 口縁端部無節絡状体押圧、口辺部は絡状体。	細砂粒を含む。	堅緻	灰褐色	
15	甕			外 胴上部は櫛描文、胴下部は無節絡状体。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	

210号住居出土土器観察表 PL.99

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
16	石核	8.6×8.4×3.8	細粒安山岩	471.3	円礫の片面を剥離調整している。刃器の未製品か。
17	土掘り具	14.8×9.2×2.3	灰色安山岩	299.7	片側は自然面、他面の剥離面は面が粗く打撃方向は不明確。周縁部を細かく調整している。
18	刃器	6.8×8.8×2.8	ケイ質頁岩	159.6	片側に自然面を大きく残す横長剥片で、刃部には粗く剥離調整がなされている。細かい剥離は使用痕とみられる。
19	刃器	3.6×4.0×0.7	黒色頁岩	10.2	両面剥離片の両側縁を鋭利な刃部としている。刃部には使用によるとみられる細かい剥離がみとめられる。
20	磨石	12.6×5.5×3.3	粗粒安山岩	367.4	自然石の一端に僅かに摩滅痕が認められる。
21	くぼみ石	12.3×9.7×7.0	粗粒安山岩	781.0	やや多孔質の自然石の両面にくぼみが見られる。くぼみ面は敲打による細かい凹凸があり、磨った滑らかさはない。
22	くぼみ石	14.6×12.3×8.2	粗粒安山岩	1947.0	大形の円礫の両面に径5cm程のくぼみが見られる。

210号住居出土土製品観察表 PL.99

遺物番号	名称	長さ	径	形状、成形、整形	色調	材質	備考
23	土 錘	2.9	3.3	円筒状を呈する。器面には指押さえによる凹凸が目立つ。器面全体に粗いヘラミガキが施される。	橙色	土製	完形

210号住居出土鉄鏃観察表 PL.99

遺物番号	器種	計測値(縦×横×厚さ)	材質	重量(g)	特徴
24	鉄 鏃	3.4×2.5×0.15±	鉄製	2.5	無莖、逆刺(カエリ)は長く、わずかに外反している。逆刺の片側端部に欠損が見られる。鏃は認められない。



211号住居 (第48図、PL. 17)

位置 52-G42に位置する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。規模は長軸5.3m、短軸4.2m。方位はN-4°-E。

周壁、壁溝 壁土は黄褐色細砂質土 (第V層)。壁溝は検出できない。

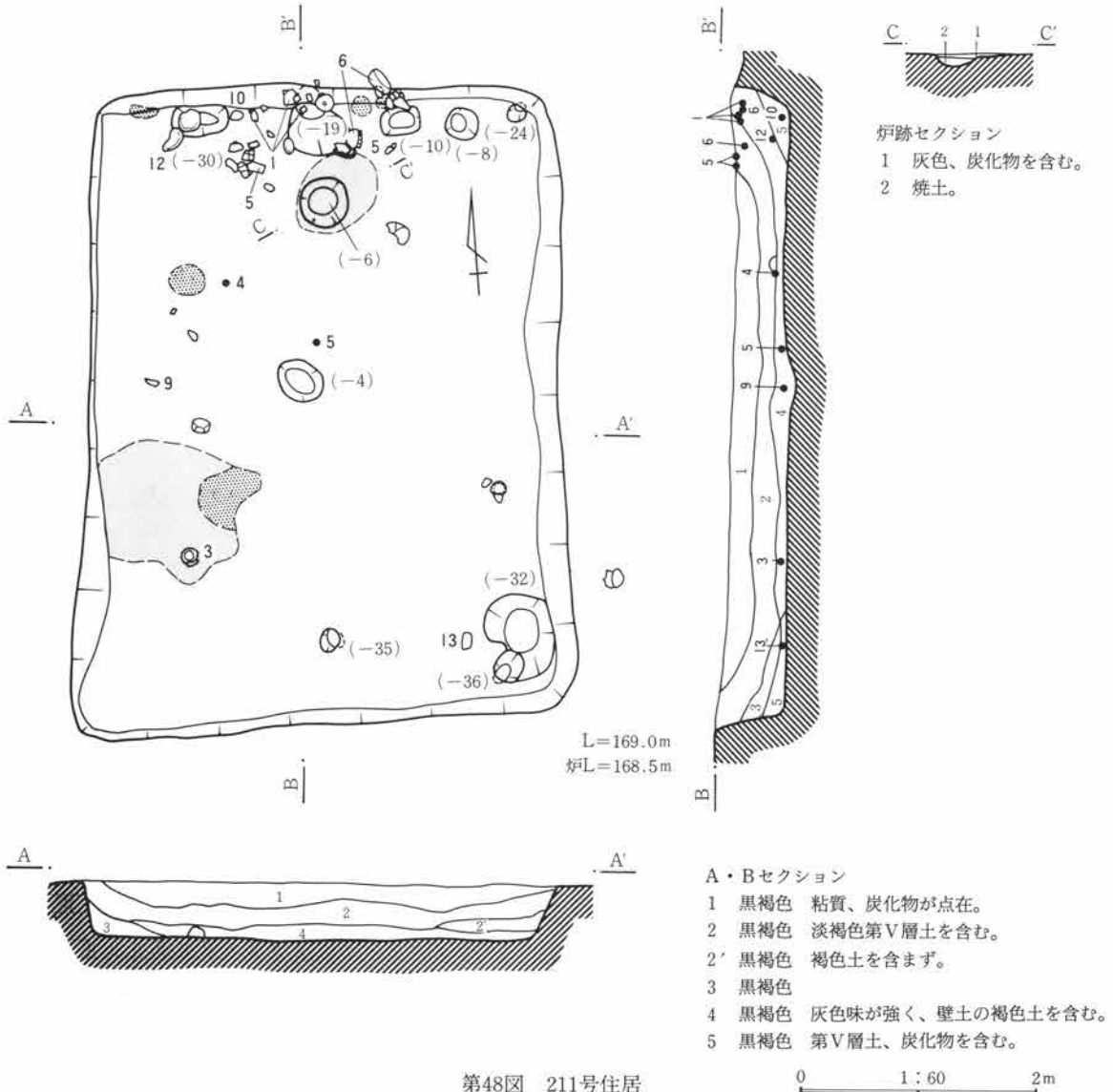
支柱穴 中軸線上に3か所にピットを検出する。これらが支柱穴に関わるピットと思われる。その他周壁に沿って数か所にピットを検出する。

床面 黄褐色細砂質土を平坦に踏み固めている。

炉跡 中軸線上の北壁の近くに地床炉を見る。長径80cmの焼土帯で円形掘り方ピットを伴う。西周壁近くに更に1か所焼土帯と灰の広がりを見めるがこれも炉跡の可能性が高い。

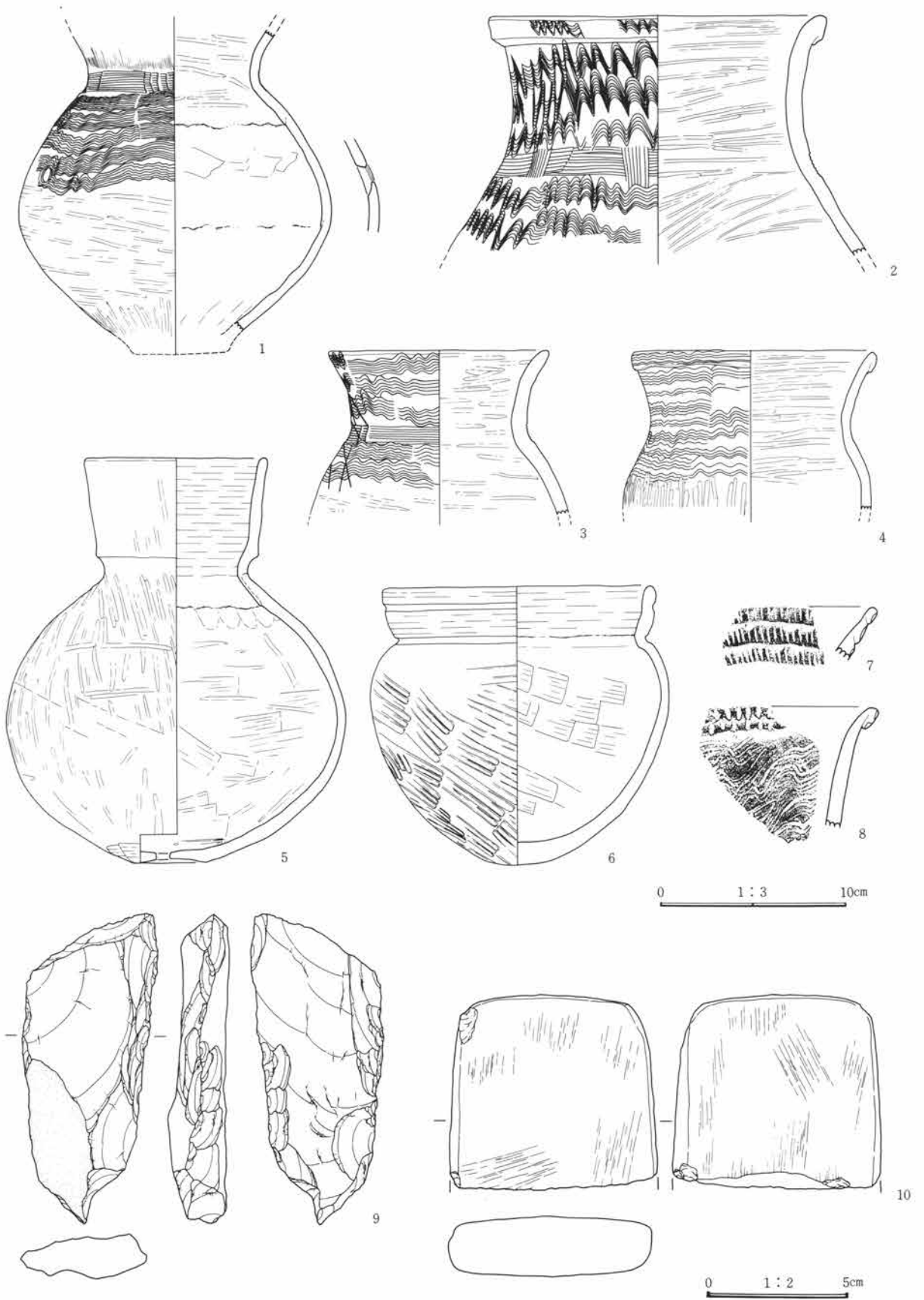
遺物出土状態 床面直上より弥生土器、覆土下部から上部にかけて弥生土器、古式土師器が多数出土している。北辺部、覆土上部に投棄によると思われる完形に近い古式土師器の一群が出土している。

時期 弥生後期第3期。



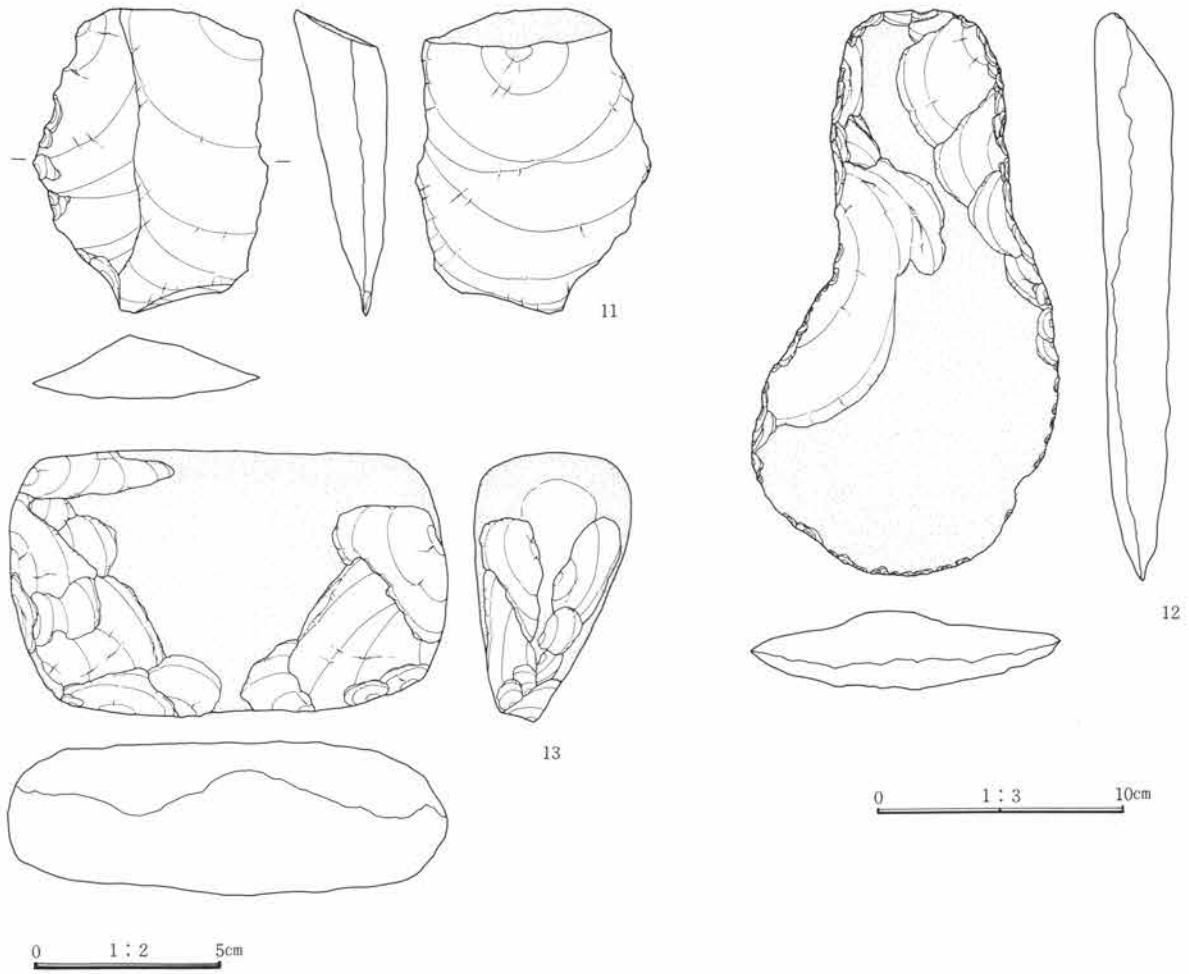
第48図 211号住居

6 検出した遺構・遺物



第49図 211号住居出土遺物(1)

(2) 弥生時代後期の住居跡



第50図 211号住居出土遺物(2)

211号住居出土土器観察表 PL. 99・100

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	胴 16.6	胴中位に焼成後の円孔あり、径8mm	外 頸部は3~5連止め簾状文、胴上部は波状文。 内 口縁~頸部はヘラミガキ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍黄橙色	口辺~胴部1/2周
2	甕	口 17.4	折り返し口縁。	外 口縁~胴上部は波状文、頸部は櫛描き横直線に縦直線。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	口縁~胴上部1/2周
3	甕	口 11.6 胴 13.6		外 口縁~胴上部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、暗褐色	口縁~胴上部全周
4	甕	口 12.6 胴 13.2	折り返し口縁。	外 口縁~胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁~胴上部全周
5	罎	口 9.8 高 21.2	口縁部は下端部に強い段を作る。	外 口縁部はヘラミガキ、胴部はヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、胴部はナデ、粗いヘラミガキ。	砂粒を多量に含む。 堅緻、橙色	口縁~底部1/2周
6	甕	口 14.5 高 14.6	口縁部はやや内湾する、丸底。	外 口縁部はヨコナデ、弱い凹線を作る。胴部は粗いハケメ。 内 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	小石、砂粒を含む。 やや堅緻、灰白色	口縁部1/2周 頸~底部全周

## 6 検出した遺構・遺物

### 211号住居出土土器観察表（拓本）

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
7	壺		3段口縁	外口縁部は刻み目。内ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	6%
8	甕		折り返し口縁	外口縁部は刻み目。内ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	7%

### 211号住居出土石器観察表 PL.100

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
9	刃器	10.9×4.8×2.2	黒色頁岩	105.3	縦長剥片の両側縁に両面剥離による刃部を作っている。片面に一部自然面を残す。
10	磨製石斧	6.8(+) <sup>+</sup> ×7.4×2.2	変輝緑岩	215.8	刃部側が半ばで折損し、失われている。稜線は比較的明瞭、器面は滑沢である。
11	刃器	8.1×6.3×2.5	黒色頁岩	88.8	両面剥離の縦長剥片で両側縁に刃部を作る。刃部の二次剥離調整は細かく片面にみられるが、使用痕も含んでいる。
12	土掘り具	22.5×12.2×3.2	輝緑岩	859.0	長大な横長剥片を素材にしている。側縁は両面剥離調整し、刃部は片面に細かな剥離調整痕がある。
13	刃器	7.1×11.8×4.2	砂岩	546.3	自然石の片側縁に両面剥離調整を施し鈍い刃部を作っている。

### 213号住居（第52図、PL. 18）

**位置** 54-G47に位置する。

**形状、規模、方位** 隅丸方形、あるいは隅丸長方形を呈する。北辺部は調査区域の境のため明瞭に検出されない。規模は長軸8.5m。方位はN-4°-W。

**周壁、壁溝** 壁土は黄褐色土（第V層）。西南コーナー部は229号住居の覆土。壁溝は部分的に検出できない箇所があるが、南半部はほぼ全周する。

**支柱穴** 深さ20～30cmの小ピットが支柱穴の配置される位置に数個見られるが、本住居のピットとして明確には特定できない。南周壁際に1対の円形ピットが見られるがこれは出入部の施設に関わると思われる。床面中央部には228号住居が重複しており、周壁際は黄褐色土。重複部は228号住居の覆土。床面上には多量の炭化材が中央部から壁土際へ放射状に見られる。火災に遭ったと思われる。

**炉跡** 不明確。

**遺物出土状態** 出土遺物は少ない。床面上5～10cmより弥生土器小破片が出土する。覆土中より弥生土器、古式土師器破片が出土している。

**時期** 弥生後期第3期。

**他の遺構との関係** 228号住居と重複。本住居の方が新しい。また西南コーナー部に229号住居が検出されたが、これよりも本住居の方が新しい。

### 228号、229号住居（第52図、PL. 18）

**位置** 228号、229号住居はともに213号住居内に重複している。

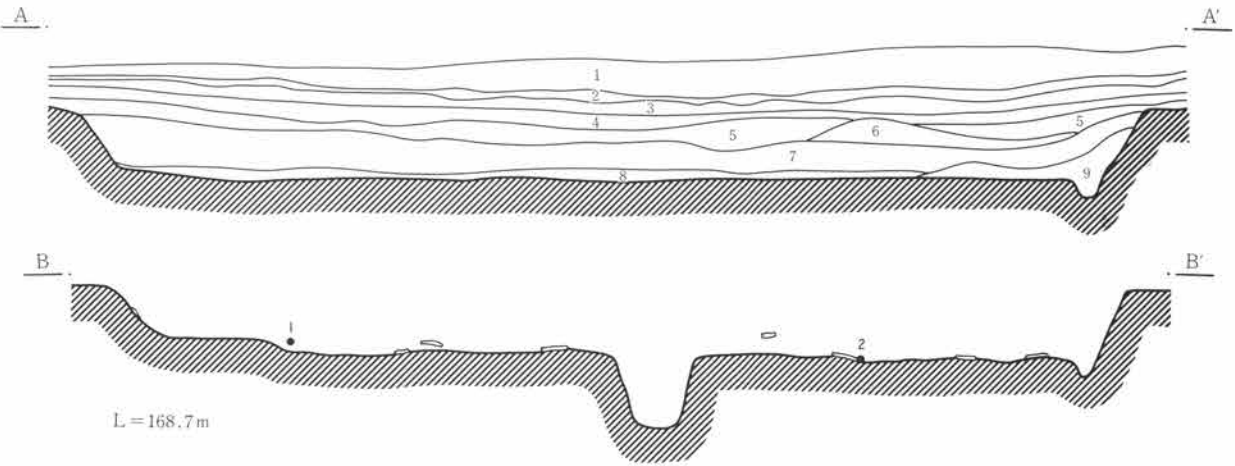
**形状、規模** 228号住居は隅丸長方形ないしは隅丸方形で、東西6.4mである。229号住居は西南コーナー部を中心に鉤状に周壁が検出されている。

**周壁、壁溝** 228号住居の周壁は213号住居の床面下に10cm程の段を認める。229号住居の西南コーナー部の周壁は深さ50cmで良好に検出される。壁溝は両住居とも認められない。

**支柱穴、炉跡、時期** 支柱穴については、いずれのピットがどの住居に属するか特定するのは困難である。

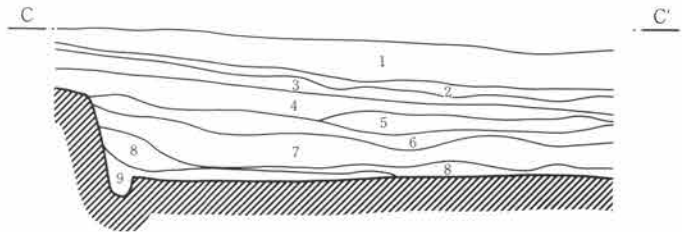
炉跡はともに検出できない。時期は両住居ともに弥生後期。

(2) 弥生時代後期の住居跡



A・Cセクション

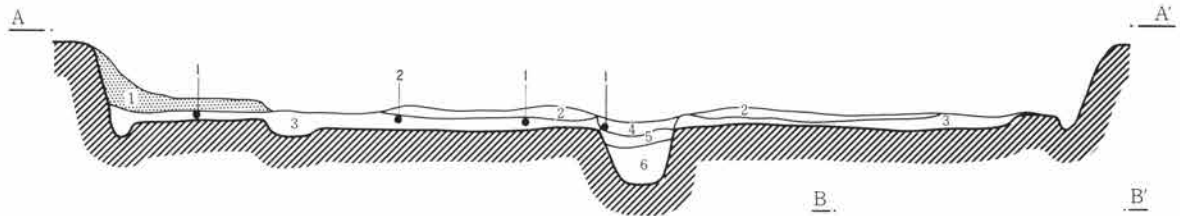
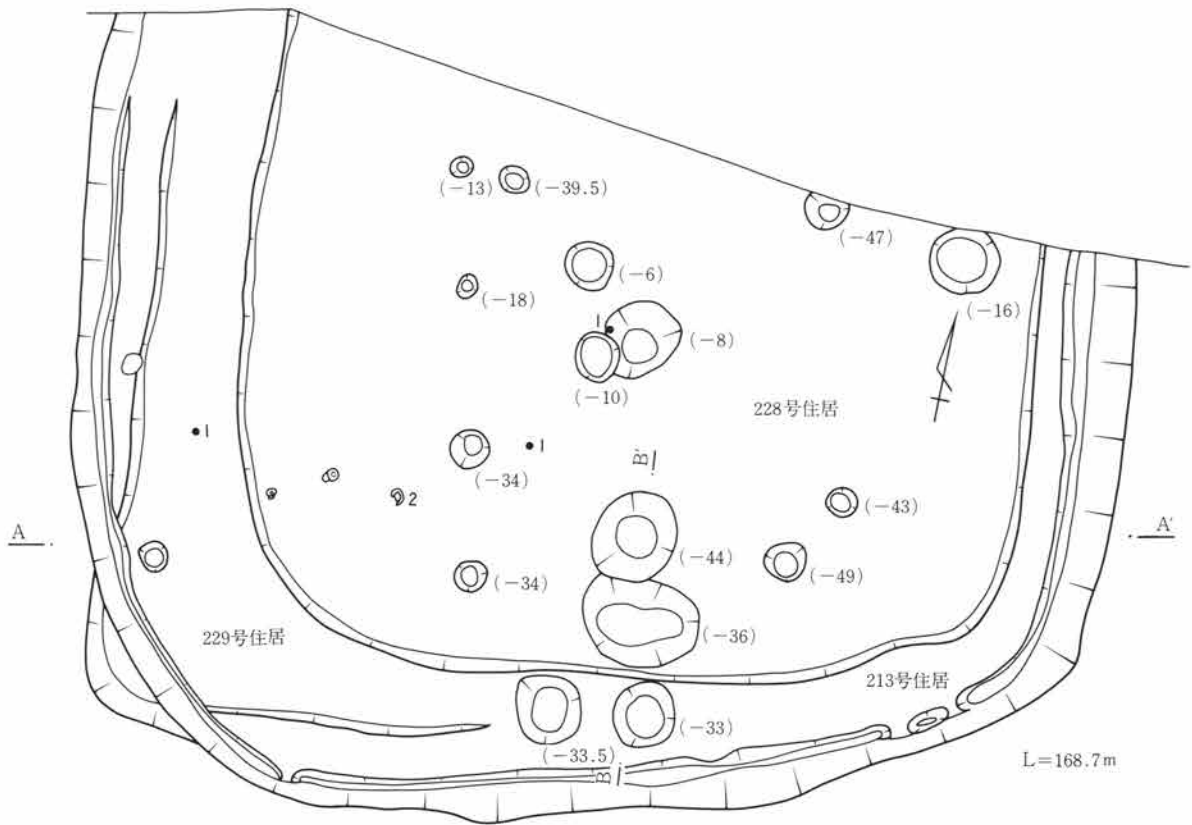
- 1 淡褐色 ニツ岳火山灰 (FA) 中軽石細粒を含む。
- 2 淡褐色 FA層、縞状堆積。
- 3 黒褐色 粘質、浅間C軽石を多量に含む。畑耕土。
- 4 黒褐色 浅間C軽石を含む。
- 5 褐色 浅間C軽石が点在、炭化物を含む。
- 6 暗褐色 浅間C軽石を含まず。夾雑物少ない。
- 7 暗褐色 浅間C軽石を含まず。炭化物を含む。
- 8 暗褐色 炭化物を多量に含む。
- 9 黒褐色 粘質、炭化物を殆ど含まず。



0 1:60 2m

第51図 213号住居

6 検出した遺構・遺物



213号住居、228号住居、229号住居

- 1 赤褐色 焼土主体。
- 2 黒褐色 黄褐色土との混土層。
- 3 黒褐色 黄褐色土が僅かに混在。
- 4 黒褐色 炭化物を含む。
- 5 黒褐色 黄褐色土が縞状に入る。
- 6 黒褐色 黄褐色土を含む。



0 1:60 2m

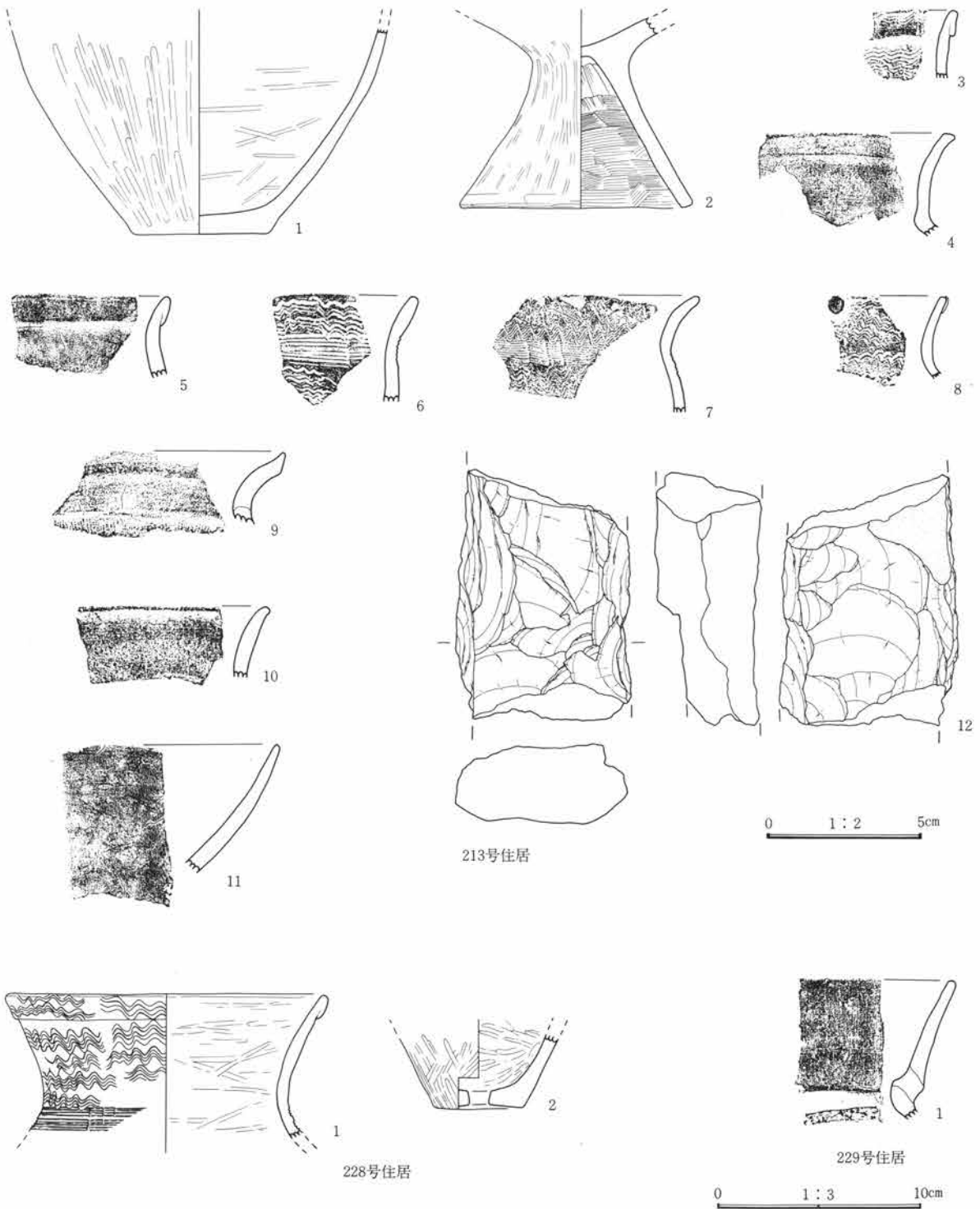
第52図 213号、228号、229号住居

213号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	底 6.6		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	胴～底部3/4周
2	高坏?	底 11.0		外 ヘラミガキ。 内 天井部は指ナデ、以下ハケメ。	砂粒を多量に混入。 堅緻、灰黄褐色	脚部全周



(2) 弥生時代後期の住居跡



第53図 213号、228号、229号住居出土遺物

6 検出した遺構・遺物

213号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
3	甕		折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	やや堅緻	橙色	4%
4	甕			外 ヨコナデ。内 ヨコナデ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	灰白色	7%
5	甕		折り返し口縁	外 ヨコナデ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	8%
6	甕			外 頸部は2~3連止め簾状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	5%
7	台付甕	口 12		外 頸部は3連止め簾状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	12%
8	台付甕			外 波状文、付文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	3%
9	甕	口 20		外 胴部はハケメ。内 胴部は指ナデ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	明褐色	10%
10	甕	口 24		外 ヨコナデ。内 ナデ。	細砂粒を含む。	堅緻	灰褐色	10%
11	鉢	口 16		外 ヘラミガキ。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	鈍橙色	10%

213号住居出土石器観察表 PL.100

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
12	土掘り具	8.1(+) $\times$ 5.8 $\times$ 3.5	灰色安山岩	208.9	両面、両側縁を剥離調整により偏平に、また側縁を直線状に整えている。基部、刃部を欠損している。

228号住居出土土器観察表 PL.100

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 15.3	折り返し口縁。	外 口縁~口辺部は波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁~頸部 $\frac{1}{2}$ 周
2	甕	底 4.4 孔 1.0	底部に焼成前に穿った円孔あり。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	底部全周

229号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
1	壺	口 12		外 ヘラミガキ、丹彩。内 ヘラミガキ、丹彩。	小礫を含む。	堅緻	赤色	10%

215号住居 (第54図、PL. 18)

位置 45-G46に位置する。

形状、規模、方位 隅丸長方形の小型住居。規模は短軸3.9m。方位はN-9°-E。

周壁、壁溝 周壁は黄褐色土(第V層)で検出状態は良好。壁高は50cmを検出。

支柱穴 周壁下に深さ15cm前後の小ピット列を認めるが、明確に支柱穴と特定できるピットは認められない。中軸線に2か所支柱を配すると想定できる。

床面 黄褐色土面を平坦に踏み固めている。

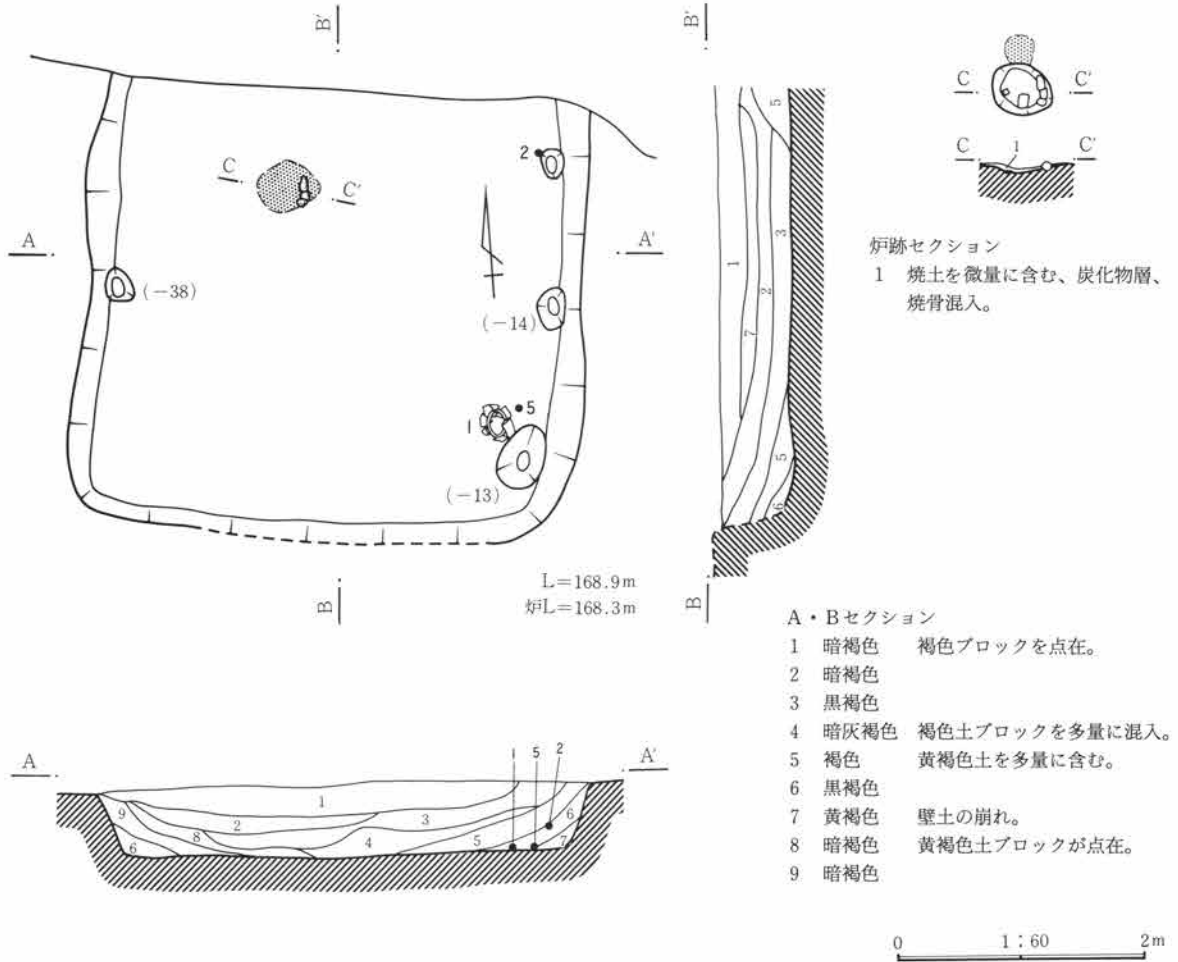
炉跡 中央部やや西よりに地床炉を検出する。縁辺に長細い円礫を据え、円形掘り方を伴う。

覆土 覆土の堆積状況はレンズ状を呈し、典型的な自然埋没状況を示している。覆土中の浅間C軽石の堆積は認められず、軽石降下時にはすでに埋没していたと思われる。

(2) 弥生時代後期の住居跡

遺物出土状態 出土遺物は少ない。床面上に口縁～頸部が全周している壺、獣歯を検出する。

時期 弥生後期第3期。

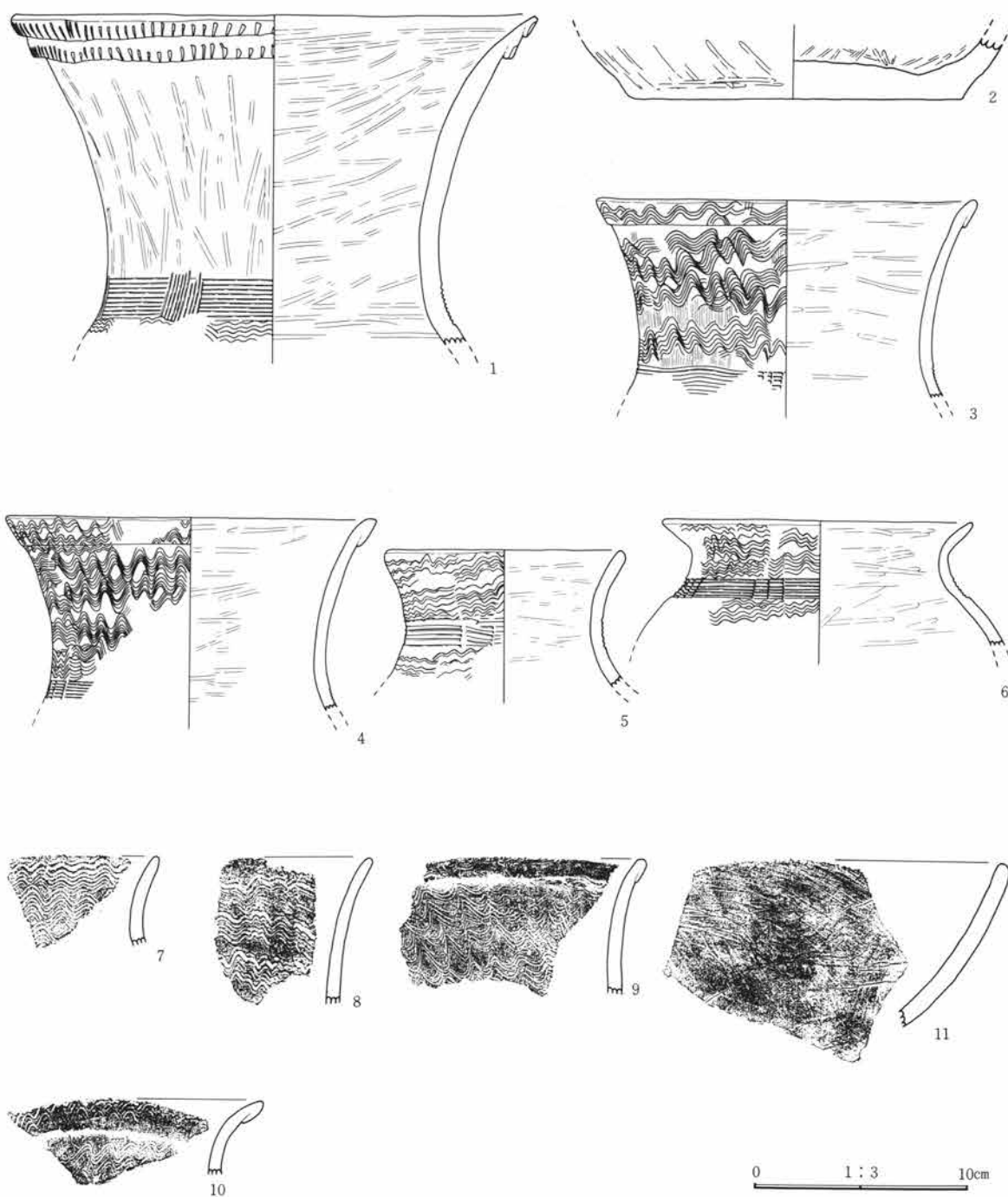


第54図 215号住居

215号住居出土土器観察表 PL. 100

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 24.0	2段折り返し口縁。	外 口縁部は刻み目文を2段、頸部は櫛描き横直線に縦直線、肩部は波状文。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、明褐色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周
2	壺	底 15.3		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、鈍黄橙色	底部全周
3	甕	口 17.6	折り返し口縁。	外 口縁～口辺部はハケメ、頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{4}$ 周
4	甕	口 17.0	折り返し口縁。	外 口縁～口辺部は波状文。頸部は3連止め以上の簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{4}$ 周
5	甕	口 10.7	口縁部はやや角ばる。	外 口縁～胴上部まで波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	口縁～胴上部 $\frac{1}{4}$ 周
6	台付甕	口 14.0		外 口縁～胴上部は波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、明褐色	口縁部全周 頸～胴部 $\frac{1}{4}$ 周

6 検出した遺構・遺物



第55図 215号住居出土遺物

215号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
7	甕	口 12		外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	やや堅緻	灰褐色	10%
8	甕			外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	褐色	9%
9	甕	口 17	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	16%
10	台付甕	口 18	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	赤橙色	14%
11	鉢	口 14		外 ハケメ、ヘラミガキ。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	14%

217号住居 (第56図、PL. 19)

位置 47-G39に位置する。

形状、規模、方位 隅丸長方形の小型住居。規模は長軸3.5m、短軸2.4m。方位はN-72°-W。

周壁、壁溝 壁土は礫を多量に含む褐色土 (第V層)。壁溝は検出できない。

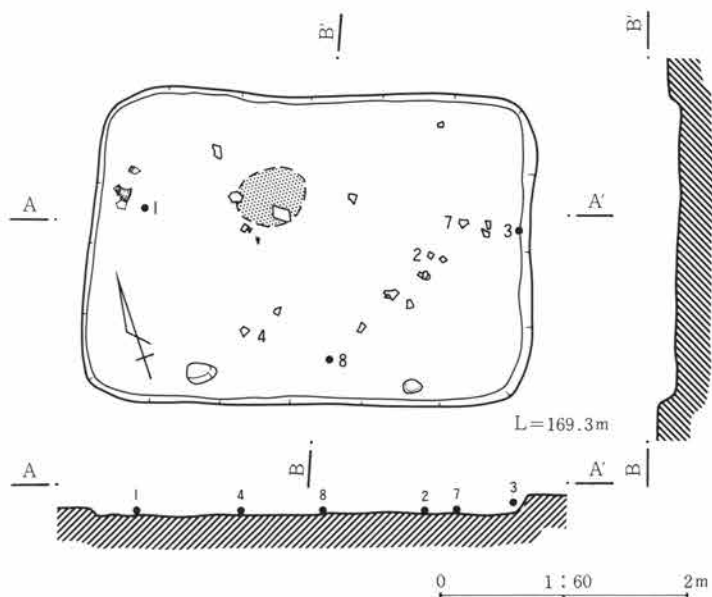
支柱穴 不明。

床面 褐色土面を踏み固めている。北半部は小礫を多量に含んでいる。

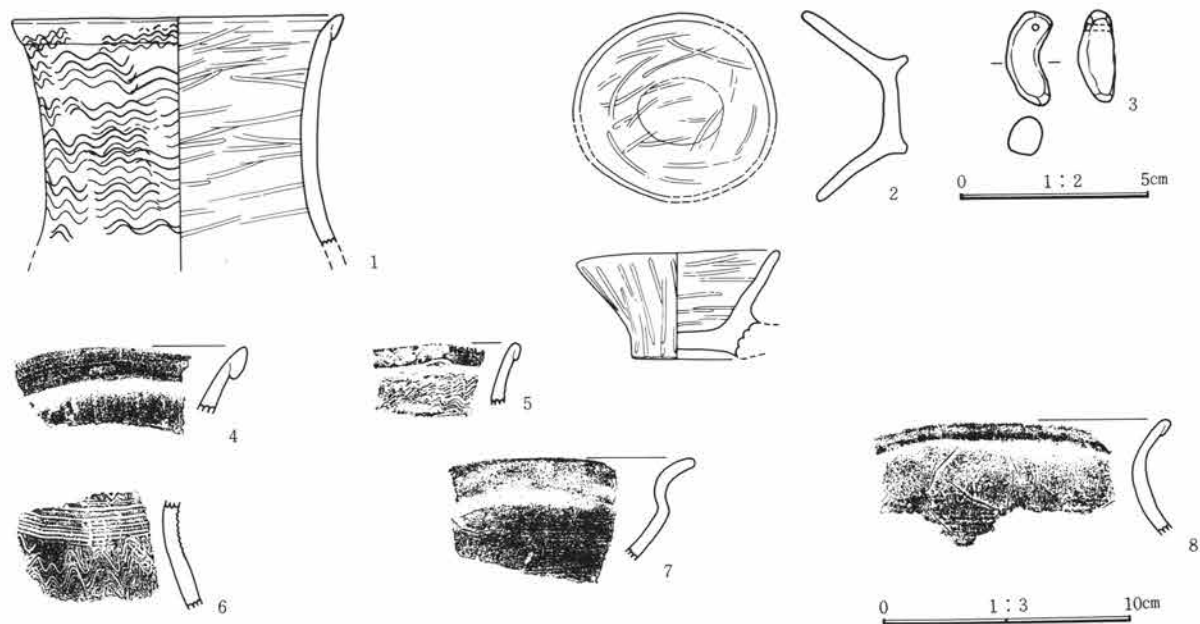
炉跡 中央部やや北寄りに地床炉を設けている。焼土帯の南縁辺に偏平な円礫を据える。

遺物出土状態 床面上5~10cm前後に土器小破片が散在する。

時期 弥生後期第3期。



第56図 217号住居



第57図 217号住居出土遺物

## 6 検出した遺構・遺物

217号住居出土土器観察表 PL.100

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 13.1	折り返し部は部分的に薄い。	外 口縁～頸部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、黄橙色	口縁部はほぼ全周
2	さじ	径 8.2×7.5 高 4.4	破損部には柄が付く。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、暗赤褐色	柄は欠損

217号住居出土土製品観察表 PL.100

遺物番号	名称	長さ	幅	厚さ	孔径	形状・成形	整形	材質・色	備考
3	土製勾玉	2.4	0.9	1.0	0.15	断面は円い。尾部に細まる。	器面全体にナデ。	鈍橙色	完形

217号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
4	壺	口 16	折り返し口縁	外 ヘラミガキ。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	黄橙色	14%
5	甕		折り返し口縁	外 口縁部はヨコナデ、以下波状文。	細砂粒を含む。	堅緻	鈍橙色	7%
6	甕			外 3連止め籠状文。内 ヘラミガキ。	小礫を含む。	堅緻	鈍赤褐色	8%
7	高環	口 18		外 ヘラミガキ。内 ヘラミガキ。	砂粒多い。	堅緻	鈍橙色	11%
8	台付甕	口 14	折り返し口縁	外 頸部は波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	やや堅緻	明黄褐色	21%

### 221号住居 (第58図、PL. 20)

**位置** 67-F48に位置する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。規模は長軸7.4m、短軸5.4m。検出状態は良好である。方位はN-8°-E。

**周壁、壁溝** 壁土は黄褐色細砂質(第V層)。上部は焼土化している。壁際には焼土が床面まで多量に崩落している。西側周壁で高さ1mに達する。覆土中には炭化材が多量に検出される。炭化材は焼土塊の上に位置するものが多い。本遺跡においては最深である。

**支柱穴** 支柱は4本構造。それぞれ深さ40~50cmの円形ピット。この他、周壁下に小ピットを数か所で検出する。南周壁際に深さ20cm前後の1対のピットを見る。2つのピット間は約1m。出入口の施設に関わるピットと思われる。

**床面** 床面は黄褐色細砂質土面。覆土中には炭化材が多量に検出される。炭化材は焼土塊の上に位置するものが多い。火災に遭っている。

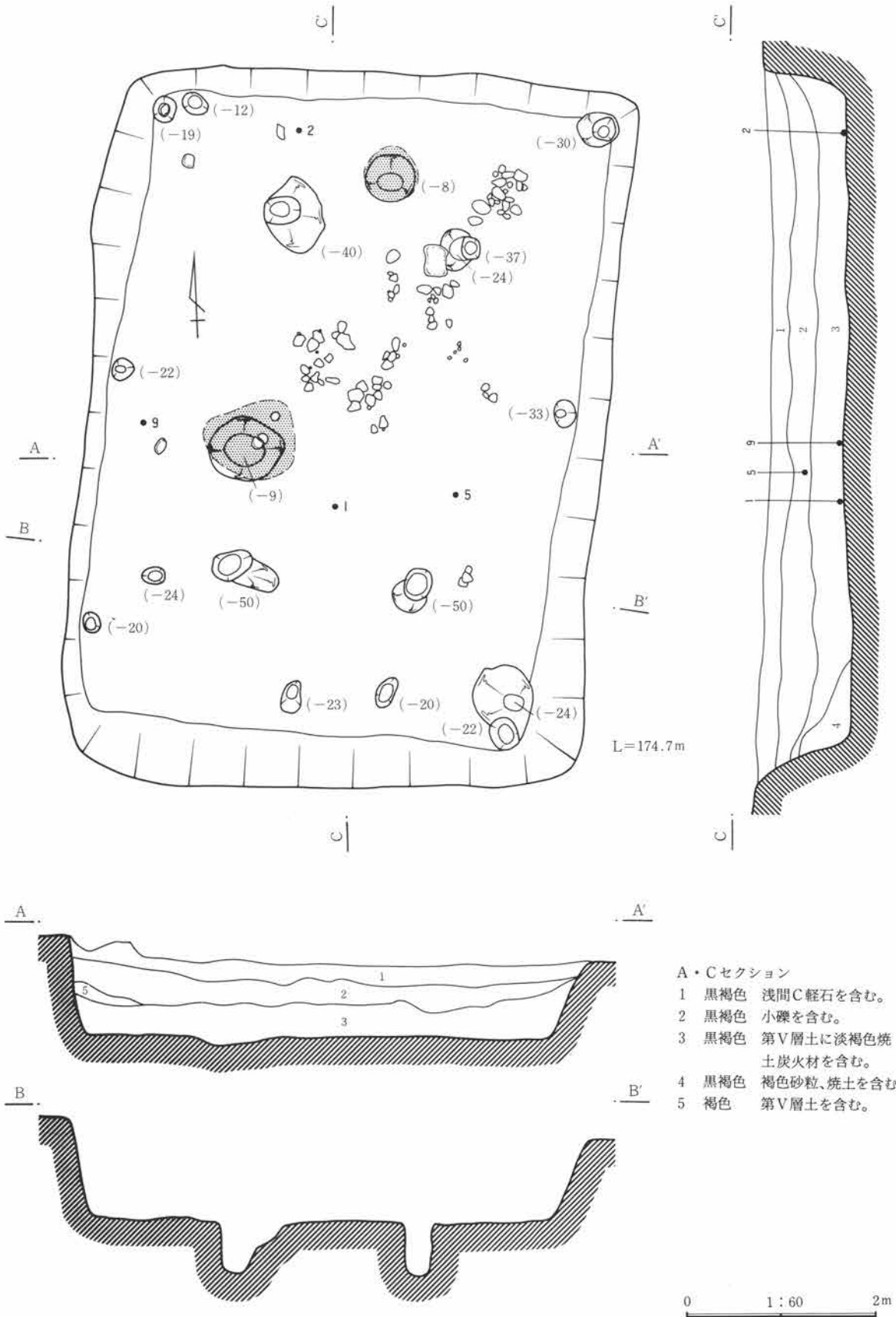
**炉跡** 北奥2支柱穴と周壁間及び、西側2支柱穴間の2か所に地床炉を検出する。それぞれ円形の浅い掘り方を伴う。

**遺物出土状態** 床面上に弥生土器破片が散在する。

**時期** 弥生後期第3期。

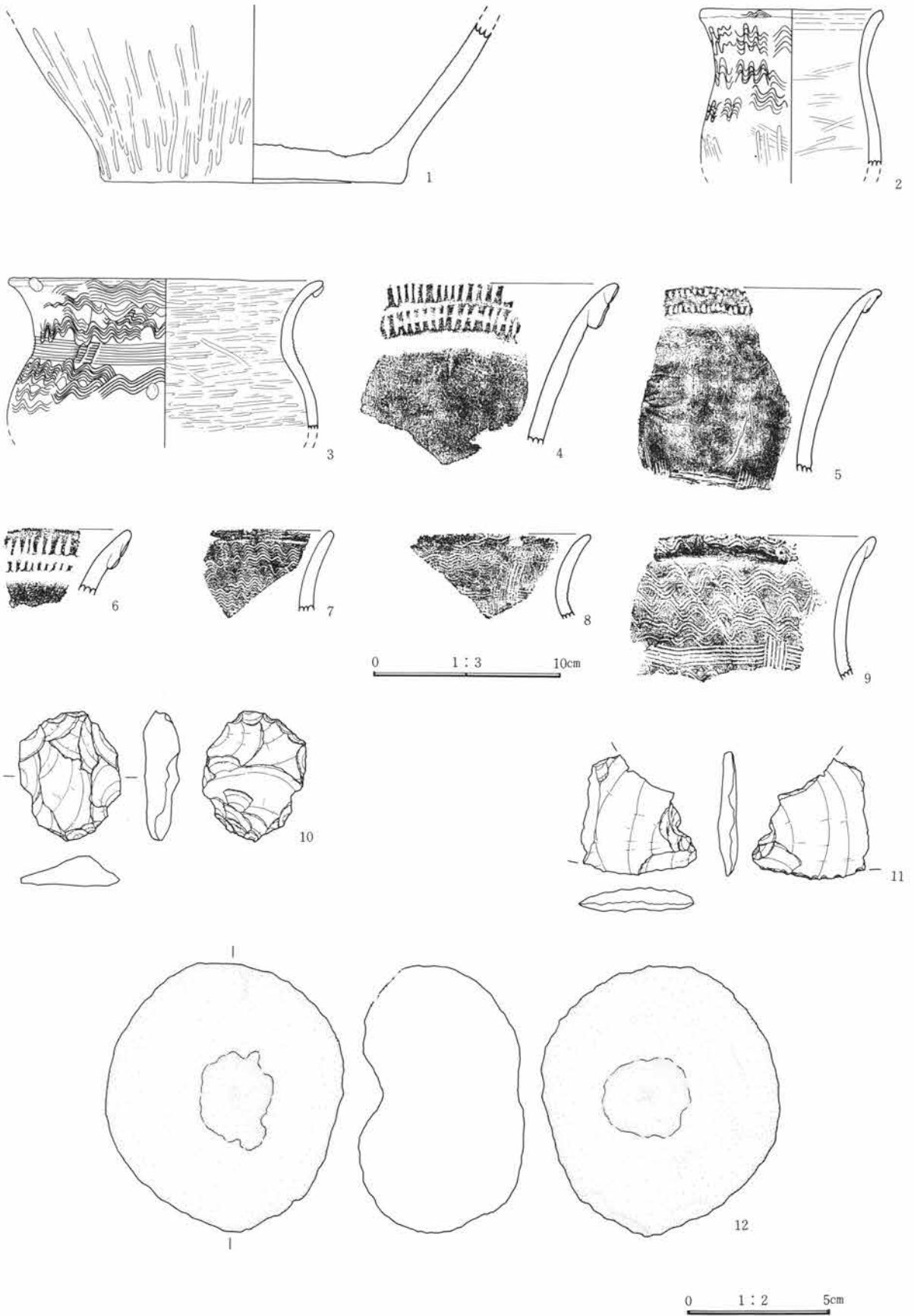


(2) 弥生時代後期の住居跡



第58図 221号住居

6 検出した遺構・遺物



第59図 221号住居出土遺物

## (2) 弥生時代後期の住居跡

221号住居出土土器観察表 PL.100

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	底 15.6		外 ヘラミガキ。 内 器面が荒れている。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	底部全周
2	甕	口 9.6	口縁端部には面を作る。	外 口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、暗褐色	口縁～胴部1/2周
3	台付甕	口 16.4 胴 16.8		外 口縁端部、肩部に付文を添付。それぞれ推定5個、 口縁～胴上部は波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤黒色	口縁～胴部1/2周

221号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
4	壺		2段口縁	外 口縁部はヘラ刻み目。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	橙色	11%
5	壺	口 20	折り返し口縁	外 口縁部は刻み目。	小礫を含む。	堅緻	橙色	
6	壺		2段口縁	外 口縁部はヘラ刻み目。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	鈍橙色	7%
7	甕	口 14		外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	10%
8	甕	口 16		外 頸部は楕横直線に縦直線。	小礫を含む。	堅緻	鈍橙色	14%
9	甕	口 14	折り返し口縁	外 頸部は楕横直線に縦直線。	粗砂粒多い。	堅緻	鈍橙色	16%

221号住居出土石器観察表 PL.100・101

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
10	刃器	4.5×3.6×1.3	黒色頁岩	17.3	両面二次剝離調整を施した小形品。周縁部に剝離調整痕が巡る。
11	刃器	4.2×4.2×0.7	黒色頁岩	11.4	縦長剣片の一側縁を刃部としている。刃部には細かい剝離使用痕が見られる。片半が欠損している。
12	くぼみ石	9.4×8.4×5.8	粗粒安山岩	440.9	自然石の両面にコウ打によるとみられるくぼみがある。くぼみ面に磨った滑らかさはない。

## 223号住居 (第60図、PL. 20)

位置 46-G43に位置する。

形状、規模、方位 やや胴の張った方形を呈する。規模は東西、南北両軸とも3.6m。方位はN-19°-E。北辺、及び西辺はそれぞれ224号、225号住居の各辺と一致している。しかし接点ではわずかに不連続面が認められる。

周壁、壁溝 壁土は黄褐色細砂質土(第V層)。壁高は65cm検出し、特に深い、検出状態は良好である。壁溝は認められない。

支柱穴 不明確。周壁下に深さ30cm程の小ピットを数か所で検出する。

床面 黄褐色土面で、一部に張り床面を造っている。

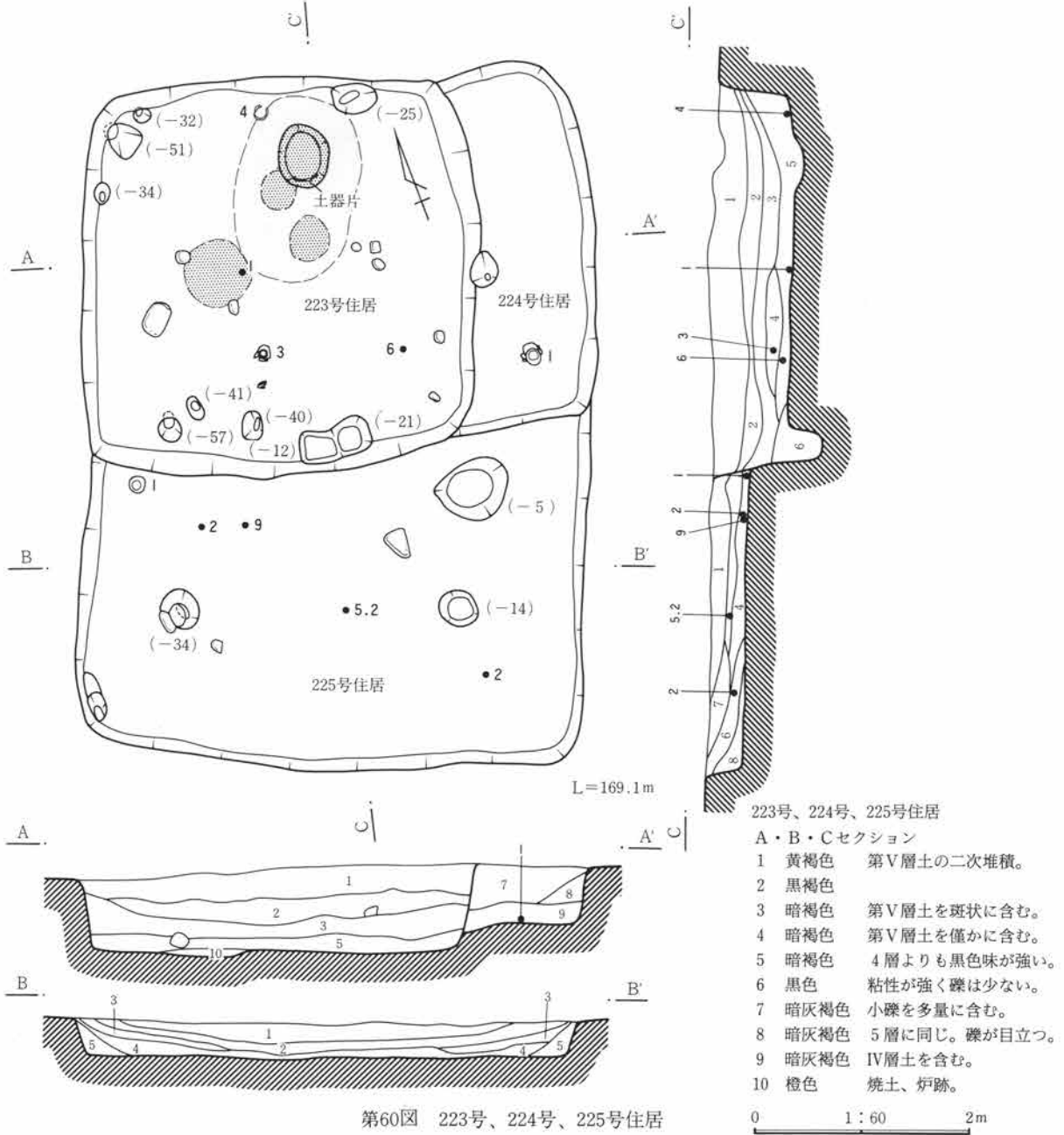
炉跡 2か所に地床炉を検出する。北側の炉跡は薄い黄褐色土の張り床面の下に見られる。北側の炉跡には縁辺部に沿って大型土器の長さ30cm程の破片を埋め込んでいる。北側の炉跡が使われなくなった後漸次南に炉が移動していったと思われる。

遺物出土状態 床面上より弥生土器大形破片が数点出土している。

6 検出した遺構・遺物

時期 弥生後期第3期。

他の遺構との関係 225号、224号住居を切っている。

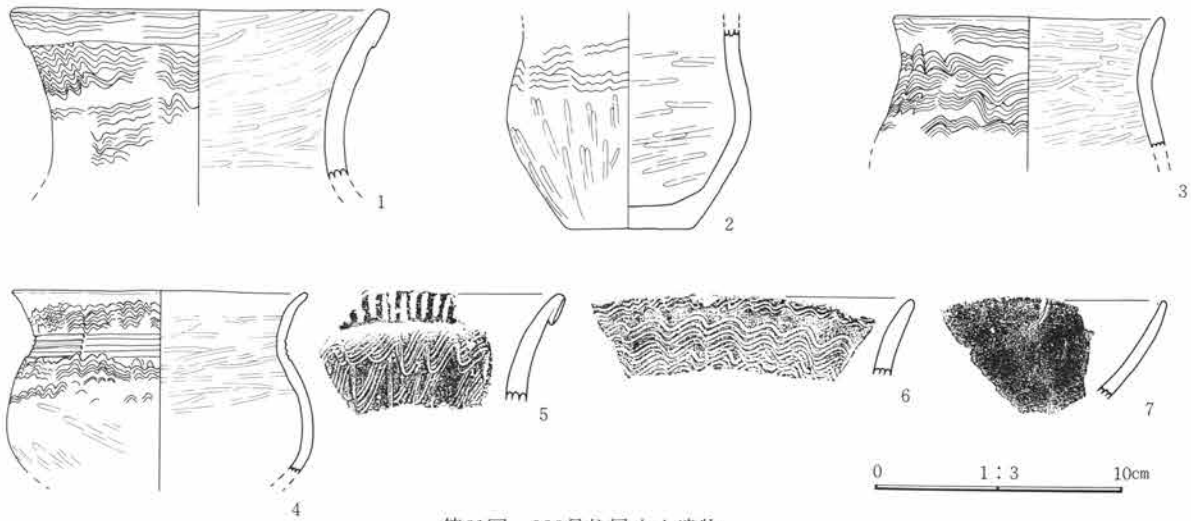


第60図 223号、224号、225号住居

223号住居出土土器観察表 PL. 101

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 14.5	折り返し口縁。	外 口縁～頸部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～頸部1/4周
2	甕	胴 9.8 底 5.1		外 頸～胴上部は波状文、胴下部はヘラミガキ。 内 胴部はヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、暗赤色	胴部1/4周 底部全周
3	甕	口 10.7		外 口縁～胴上部はヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	口縁～胴上部 全周
4	台付甕	口 11.7 胴 12.3		外 口縁～胴上部は波状文、頸部は櫛描直線文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～胴部全周

## (2) 弥生時代後期の住居跡



第61図 223号住居出土遺物

## 223号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
5	甕		折り返し口縁	外 口縁部はヘラ刻み目。内 ヘラミガキ。	小礫を含む。	堅緻	橙色	9%
6	甕	口 16	口端部角ばる	外 口縁端部は波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	淡赤橙色	19%
7	鉢	口 12		外 ヘラミガキ。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	明黄褐色	13%

## 224号住居 (第60図、PL. 20)

位置 45-G43に位置する。

形状、規模、方位 形状、規模は不明。規模は南北軸3.2m、方位はN-19°-E。

周壁、壁溝 周壁は砂質黄褐色土(第V層)。南側及び北側周壁はともに223号住居の周壁のほぼ延長線上にのるが、両住居の接点の壁面は不連続である。

主柱穴 不明。

床面 223号住居の床面よりも約20cm高い。225号住居の床面よりも12cm程低い。床面は黄褐色土面で、踏み固められた痕跡は顕著ではない。

炉跡 不明。

覆土 比較的黄褐色ローム質土の混入が目立つ。223号との接点では本住居の覆土が切られている状態が認められ、225号住居の覆土を本住居が切っている。本住居の覆土中に225号住居の床面は延びていない。

遺物出土状態 床面上より弥生土器の甕の完形個体が下半部が破損し、崩れた状態で直立していた。この他南周壁下に甕の底部破片を認めるが、全体に出土遺物は少ない。

時期 弥生後期第3期。

他の遺構との関係 223号住居に切られており、本住居の方が旧く、225号住居を切っており、本住居が新しい。

6 検出した遺構・遺物

224号住居出土土器観察表 PL. 101

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 12.7 胴 16.8 高 23.2	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は櫛描直線文、胴下部はヘラミガキ。 内 ハケメ後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	ほぼ完形

225号住居 (第60図、PL. 20)

位置 47-G42に位置する。

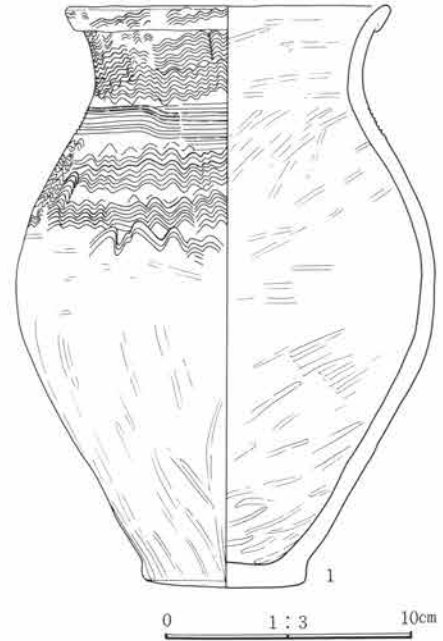
形状、規模、方位 長方形を呈する。規模は東西軸4.6m。方位はN-24°-E。

周壁、壁溝 礫を含む黄褐色土(第V層)。特に南周壁は礫層を切って造られている。壁溝は認められない。

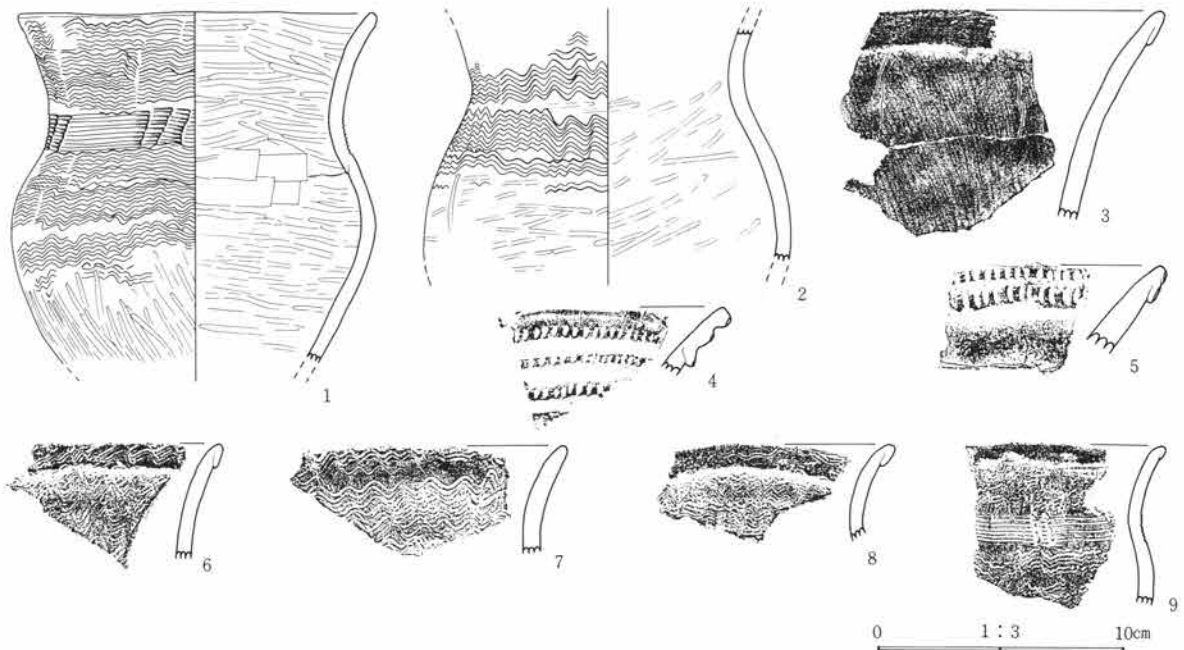
支柱穴 支柱は4本構造。南側の2支柱穴を明確に検出する。北側の支柱穴は不明確。224号住居内に認められる小ピットは本住居に伴う支柱穴の可能性が高い。

床面 小礫を多量に含む黄褐色土面。

炉跡 不明。



第62図 224号住居出土遺物



第63図 225号住居出土遺物



(2) 弥生時代後期の住居跡

遺物出土状態 床面上から5~10cmの高さで弥生土器破片が散在する。南側から投棄されたと見られる。

時期 弥生後期第3期。

他の遺構との関係 223号、224号住居よりも古い。

225号住居出土土器観察表 PL.101

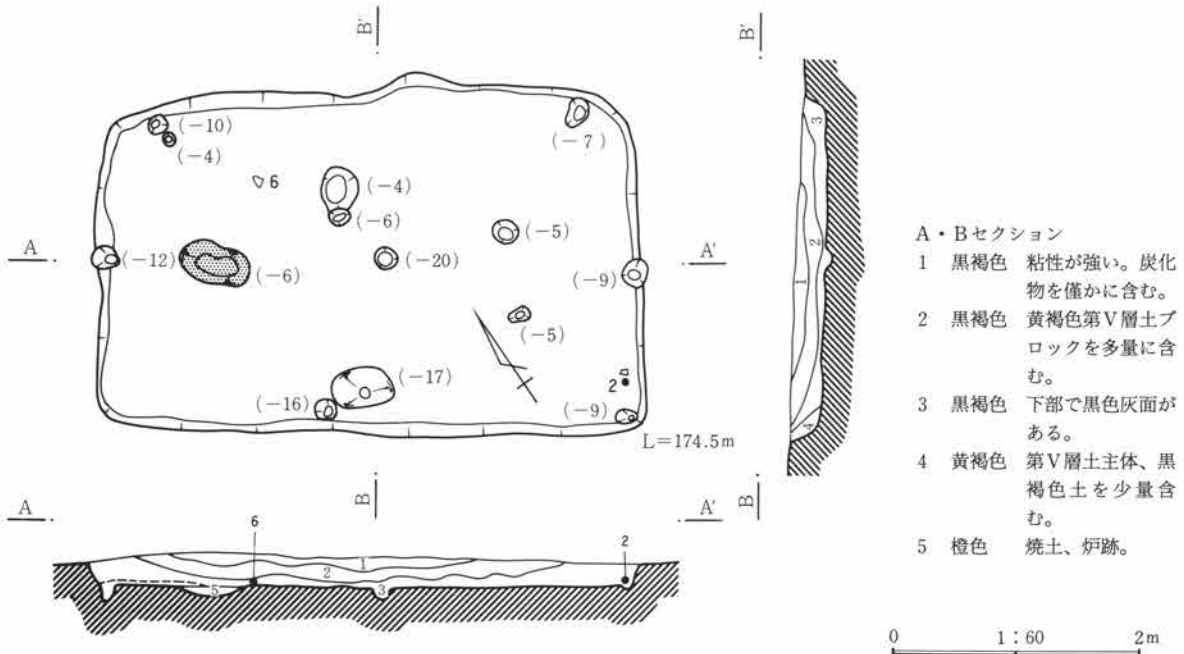
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 14.2 胴 14.5		外 口縁~胴上部は波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍褐色	口縁~胴部全周
2	甕	胴 14.6		外 口辺~胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	頸~胴部3/4周

225号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
3	壺		折り返し口縁	外 ヘラミガキ。内 ヘラミガキ。丹彩?	砂粒多い。	堅緻	赤色	9%
4	壺		多段口縁	外 ヘラ刻み目。	細砂粒を含む。	堅緻	赤橙色	10%
5	壺		2段口縁	外 ヘラ刻み目。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	やや堅緻	赤橙色	9%
6	甕	口 16	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒多い。	堅緻	暗赤褐色	11%
7	甕	口 16		外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	鈍黄褐色	15%
8	台付甕	口 12	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	橙色	18%
9	台付甕	口 11	折り返し口縁	外 頸部は2連止め簾状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	明赤褐色	16%

227号住居 (第64図、PL. 21)

位置 67-G04に位置する。



第64図 227号住居

6 検出した遺構・遺物

**形状、規模、方位** 長方形を呈する小型住居。規模は長軸4.3m、短軸2.7m。方位はN-53°-W。

**周壁、壁溝** 壁土は黄褐色土（第V層）。壁溝は認められない。

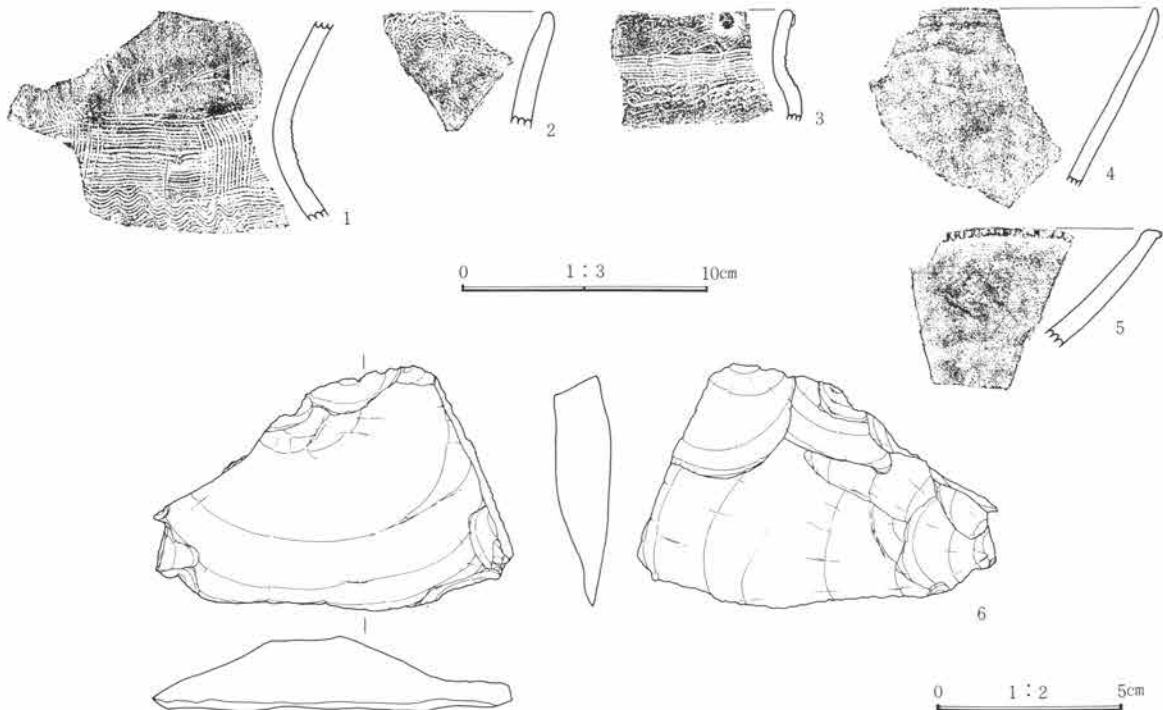
**支柱穴** 住居の中軸線に沿って、また周壁際にそって、深さ10cm前後の小ピットを認める。

**床面** 黄褐色土面で、炉跡を中心に東周壁際まで灰層が広がる。

**炉跡** 中軸線上西部に地床炉を設けている。

**遺物出土状態** 床面上、覆土中より弥生土器破片が出土する。

**時期** 弥生後期第3期。



第65図 227号住居出土遺物

227号住居出土土器観察表（拓本）

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
1	壺			外 頸部は櫛描横直線に縦直線。	砂粒多い。	やや堅緻	鈍黄橙色	14%
2	甕			外 口縁部は波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	灰赤色	7%
3	台付甕	口 12		外 頸部は等間隔止め簾状文。内 ヘラミガキ。	砂粒多い。	堅緻	赤褐色	12%
4	鉢			外 ヘラミガキ、丹彩。内 ヘラミガキ、丹彩。	粗砂粒を含む。	堅緻	赤色	8%
5	高 坏			外 口縁端部はヘラ刻み目、丹彩。内 丹彩。	粗砂粒を含む。	堅緻	赤色	8%

227号住居出土石器観察表 PL.101

遺物番号	名 称	計測値(縦×横×厚さ)	石 質	重量(g)	特 徴
6	刃 器	6.5× 9.7× 2.0	黒色頁岩	84.8	片側の一部に二次剝離調整を加えた剝片で、刃部は剝離調整はないが鋭利である。

232号住居 (第66図、PL. 21)

位置 40-H12に位置する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。北コーナー部から北東辺部にかけては233号住居と重複し、不明確。規模は長軸6.2m、短軸4.6m。方位はN-36°-E。

周壁、壁溝 壁土は淡褐色土 (第V層)。南東コーナー部では壁高は70cmに達する壁高を良好に検出する。

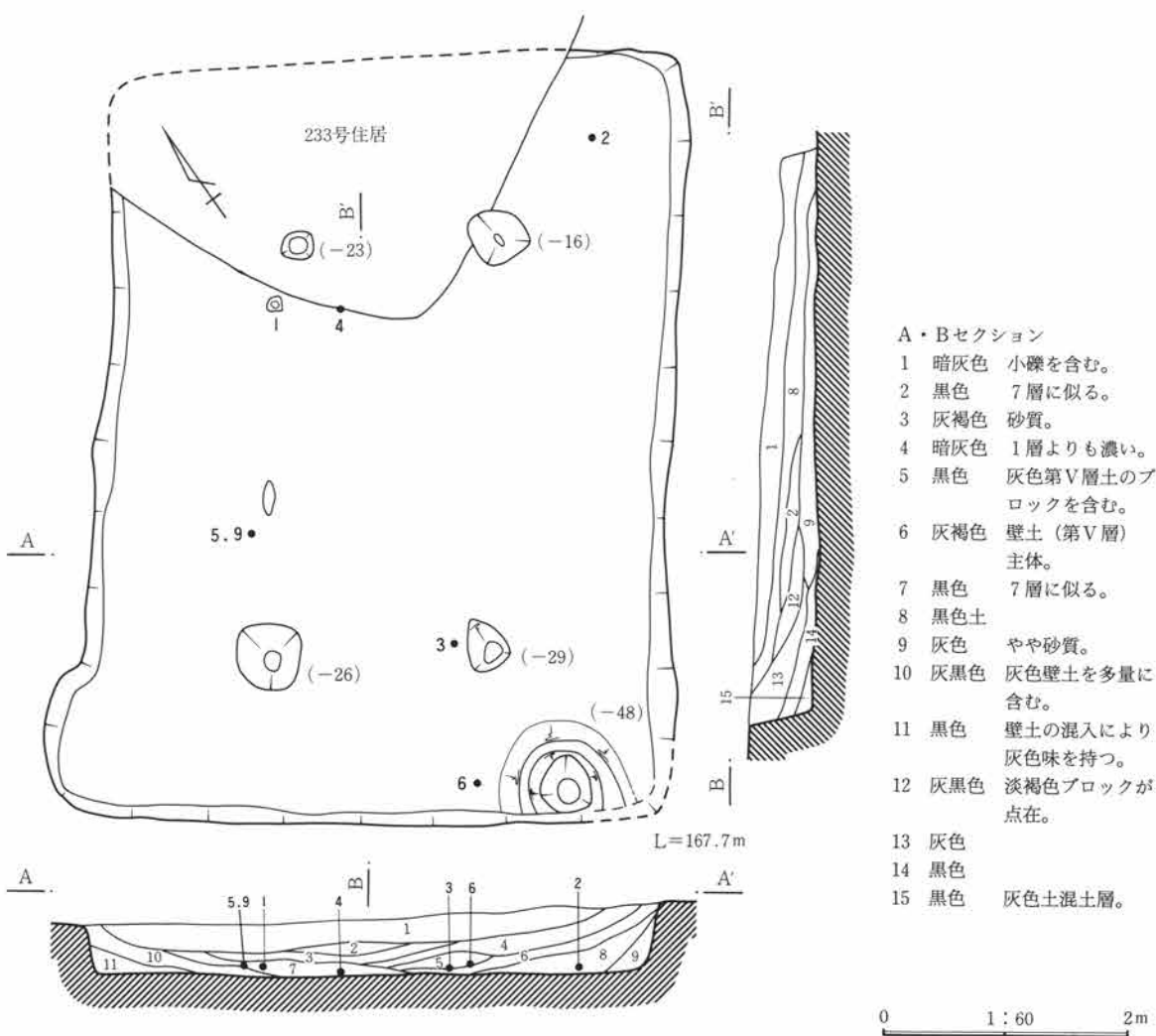
支柱穴 支柱は4本構造。深さ25~30cmのピットを4か所で検出する。

貯蔵穴 南コーナー部に径50cm、深さ約45cm程の円形ピットが見られる。ピットの周囲には土手状に幅30cm程の低い高まりが認められる。貯蔵穴の可能性が考えられるが、ピット内より獣骨片のほかに出土物はない。

床面 床面は淡褐色土を平坦に踏み固めている。

炉跡 不明。

覆土 覆土の堆積状態は、中央部に顕著なレンズ状堆積が認められ、典型的な自然埋没の状況を示している。中央部が後の段階まで窪地として残っていたとみられるが、土層中に浅間C軽石の混入が目立たないことが注意される。



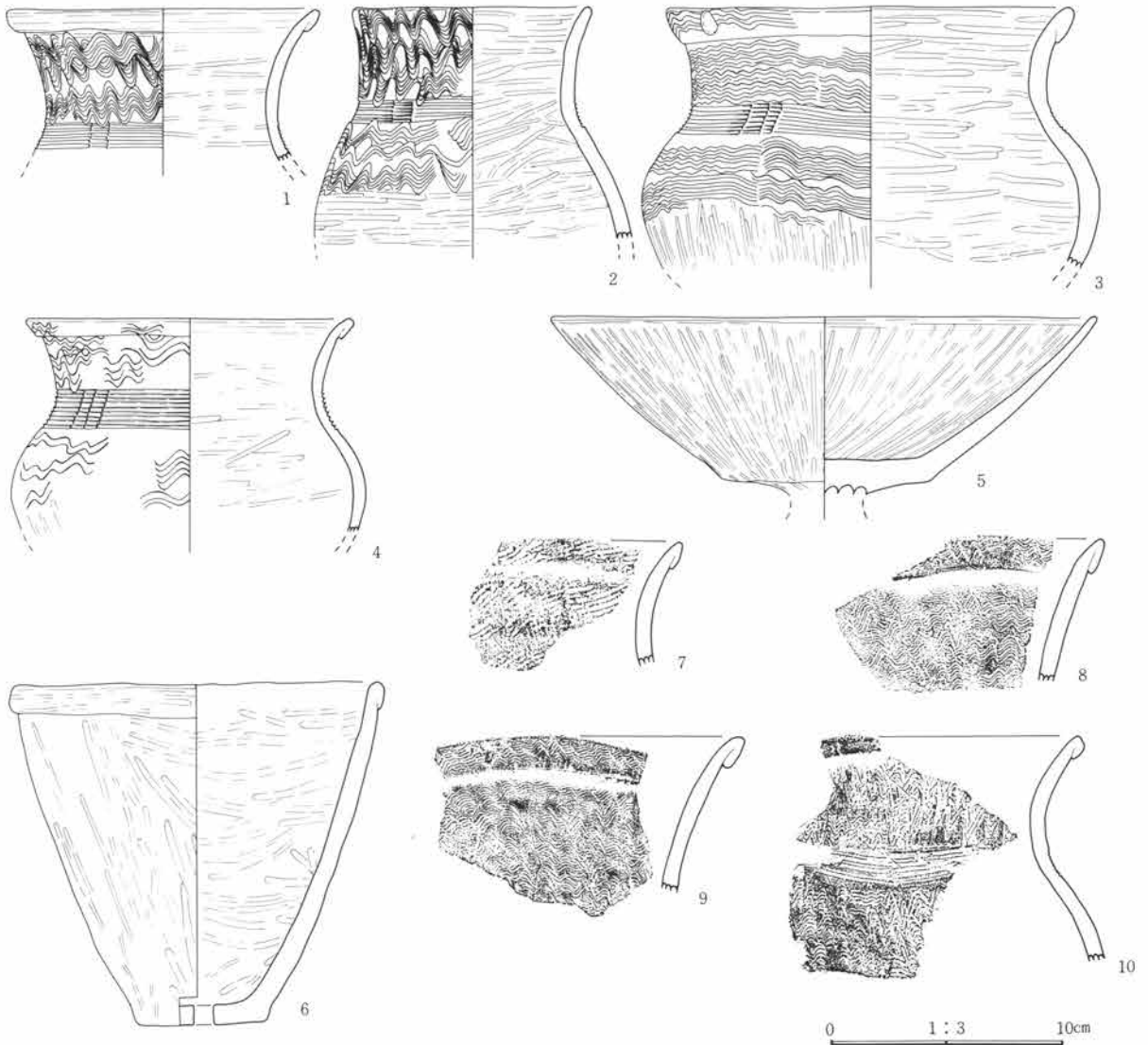
第66図 232号住居

6 検出した遺構・遺物

**遺物出土状態** 床面上、覆土中より弥生土器破片が多数出土する。中央部床面上5cm程から古式土師器の高坏の大形破片が出土している。この土器は住居が廃棄された後、比較的永く窪みが残り古墳時代の段階に混入したと思われる。

**時期** 弥生後期第3期。

**他の遺構との関係** 北部で233号住居と重複する。233号住居よりも本住居の方が古い。



第67図 232号住居出土遺物

232号住居出土土器観察表 PL. 101

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 13.2	折り返し口縁。	外 口縁部はヨコナデ。口辺部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	口縁～頸部全周
2	甕	口 10.1 胴 13.4		外 口縁～胴上部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁～胴部 ほぼ全周

## (2) 弥生時代後期の住居跡

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
3	台付甕	口 16.9 胴 19.4	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒、小石を含む。 やや堅緻、赤褐色	口縁～胴部%周
4	台付甕	口 13.9 胴 15.1	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、暗褐色	口縁～胴部%周
5	高 坏	口 23.0	坏部下端部に段を作る。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	坏部ほぼ全周
6	甕	口 15.6 高 14.3	底部に焼成前に穿った円孔有り。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍褐色	口縁部%周

## 232号住居出土土器観察表（拓本）

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
7	甕	口 13	折り返し口縁	外 LR縄文、内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	14%
8	甕	口 18	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	やや堅緻	鈍褐色	12%
9	甕	口 16	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	褐灰色	17%
10	甕		折り返し口縁	外 頸部は楕円直線文。	小礫を含む。	堅緻	黒褐色	7%

## 235号住居（第68図、PL. 22）

**位置** 42-H17に位置する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。規模は長軸7.2m、短軸5.4m。方位はN-13°-W。

**周壁、壁溝** 壁土は細砂質灰褐色土（第V層）で良好に検出される。

**支柱穴** 不明確。

**貯蔵穴** 東南コーナー部に不整形なピットが設けられる。ピット形状は3個の円形ピットが接した状態で、周囲は灰褐色土が床面よりも15cm程周堤状に高い。

**床面** 242号住居との重複部は灰色のV層土と黒色土の混土層。重複部以外は灰褐色土（第V層）。重複部の土は客土と認められる。

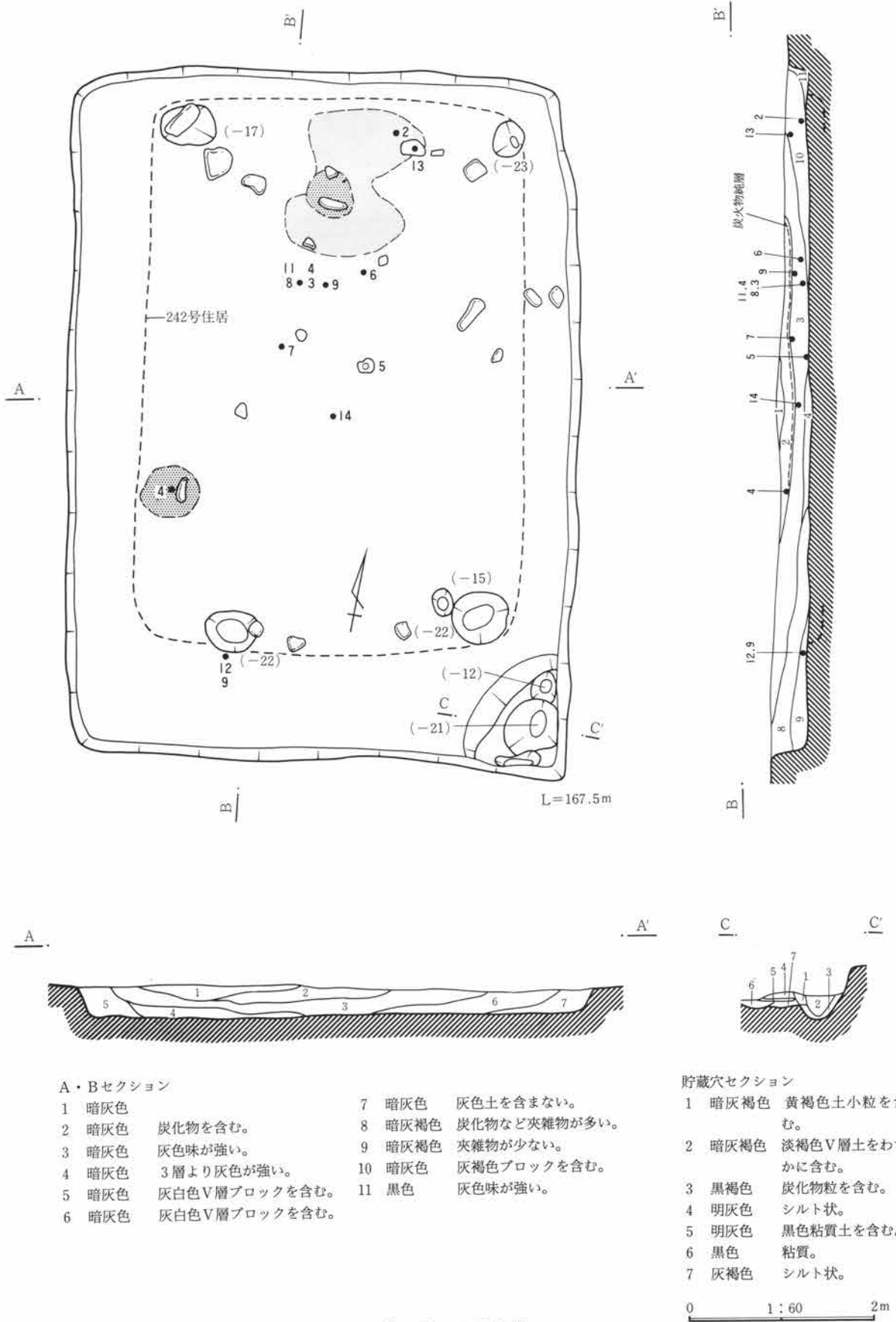
**炉跡** 242号住居との重複部分、中軸線上北側周壁寄りと西側周壁の傍らの2か所に地床炉が見られる。両炉跡とも焼土帯が良く生成しており、長細い円礫を据えている。北側の炉の周辺には広く灰層の広がりがあり、骨片が点在する。

**遺物出土状態** 床面上、覆土中より弥生土器破片が多数出土する。住居中央部覆土上部（床面上10～20cm）より古式土師器破片が多数出土する。これらの古式土師器は埋没が進んだ段階で投棄されたものだろう。

**時期** 弥生後期第3期。

**他の遺構との関係** 本住居の床面下に242号住居が重複する。本住居は242号住居の覆土の状態などから242号住居の拡張、建て替え住居と考えられる。

6 検出した遺構・遺物



A・Bセクション

- |       |        |              |
|-------|--------|--------------|
| 1 暗灰色 | 7 暗灰色  | 灰色土を含まない。    |
| 2 暗灰色 | 8 暗灰褐色 | 炭化物など夾雑物が多い。 |
| 3 暗灰色 | 9 暗灰褐色 | 夾雑物が少ない。     |
| 4 暗灰色 | 10 暗灰色 | 灰褐色ブロックを含む。  |
| 5 暗灰色 | 11 黒色  | 灰色味が強い。      |
| 6 暗灰色 |        |              |

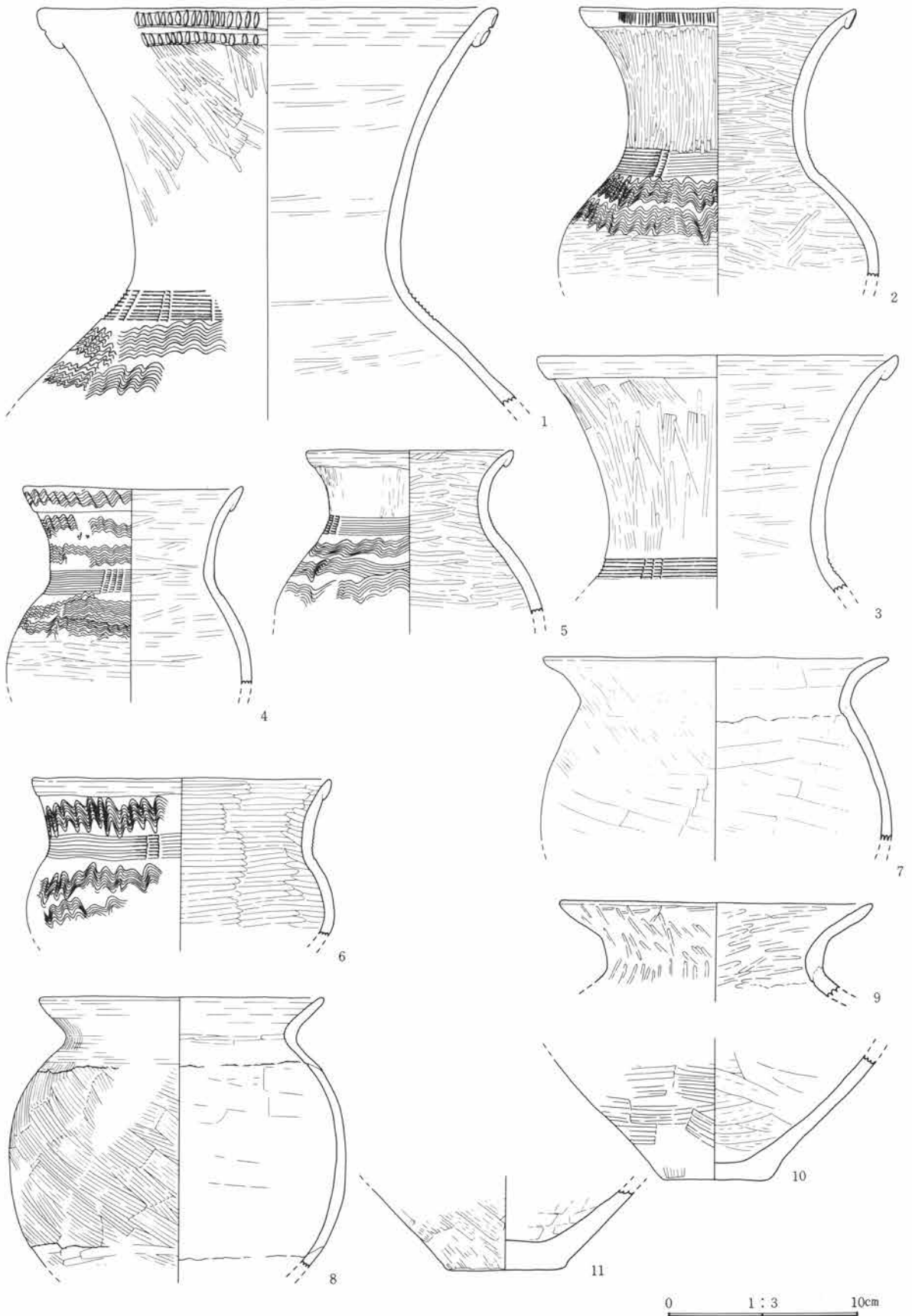
貯蔵穴セクション

- |        |                |
|--------|----------------|
| 1 暗灰褐色 | 黄褐色土小粒を含む。     |
| 2 暗灰褐色 | 淡褐色V層土をわずかに含む。 |
| 3 黒褐色  | 炭化物粒を含む。       |
| 4 明灰色  | シルト状。          |
| 5 明灰色  | 黒色粘質土を含む。      |
| 6 黒色   | 粘質。            |
| 7 灰褐色  | シルト状。          |

第68図 235号住居

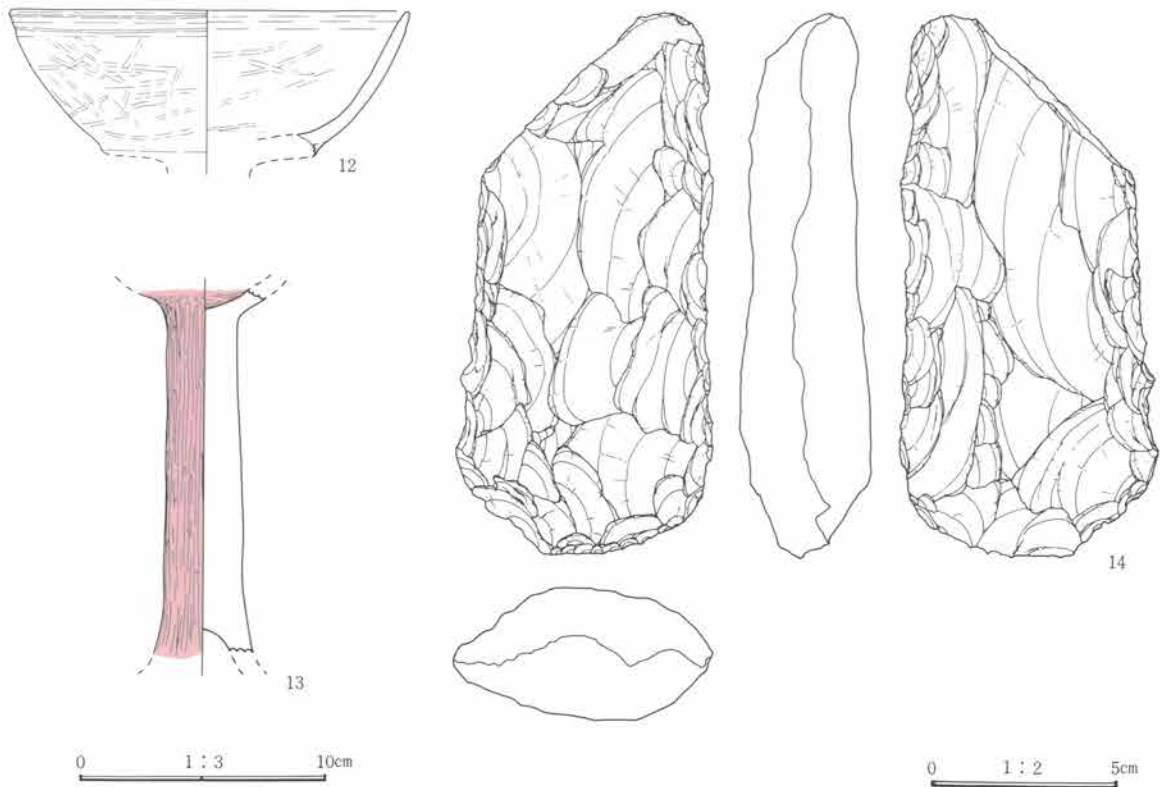


(2) 弥生時代後期の住居跡



第69図 235号住居出土遺物(1)

6 検出した遺構・遺物



第70図 235号住居出土遺物(2)

235号住居出土土器観察表 PL.102

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 24.0 頸 14.0	2段の折り返し口縁。	外 口縁部は刻み目2段、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～胴上部 1/6周
2	壺	口 14.4 胴 16.6	折り返し口縁。	外 口縁部は鋭いヘラ刻み目、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～胴部1/6周
3	壺	口 18.8	折り返し口縁。	外 口縁部はヨコナデ、頸部は3連止め簾状文。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	口縁～頸部1/6周
4	甕	口 11.4 胴 13.0	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は4連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	口縁～胴部全周
5	甕	口 10.9		外 口縁部はヨコナデ、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、黒褐色	口縁～胴部全周
6	台付甕	口 15.5 胴 16.0		外 口縁部はヨコナデ、口辺～胴上部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁～胴部1/6周
7	甕	口 18.0 胴 18.2		外 口縁～頸部はハケメ後ヨコナデ、胴部はハケメ、ヘラケズリ。 内 ヘラナデ、肩部に指オサエ痕が巡る。	砂粒を含む。 やや堅緻、灰白色	口縁～胴部1/6周
8	甕	口 14.5 胴 17.6		外 口縁～頸部はハケメ後ヨコナデ、胴部はハケメ。 内 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	小石を含む。 堅緻、褐灰色	口縁～胴部1/6周
9	甕	口 16.2	頸部はややコの字状。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁～頸部1/6周
10	甕	底 5.4		外 ハケメ。 内 ヘラナデ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、褐色	胴下部～底部 1/6周
11	甕	底 6.0		外 ハケメ。 内 ヘラナデ。	細砂粒を含む。 堅緻、明褐灰色	底部全周
12	高坏	口 16.0	坏部下半部に段が作られる。	外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	坏部1/6周
13	高坏			外 ヘラミガキ、丹彩。 内 ヘラミガキ、丹彩。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	脚柱状部のみ遺存。

235号住居出土石器観察表 PL. 102

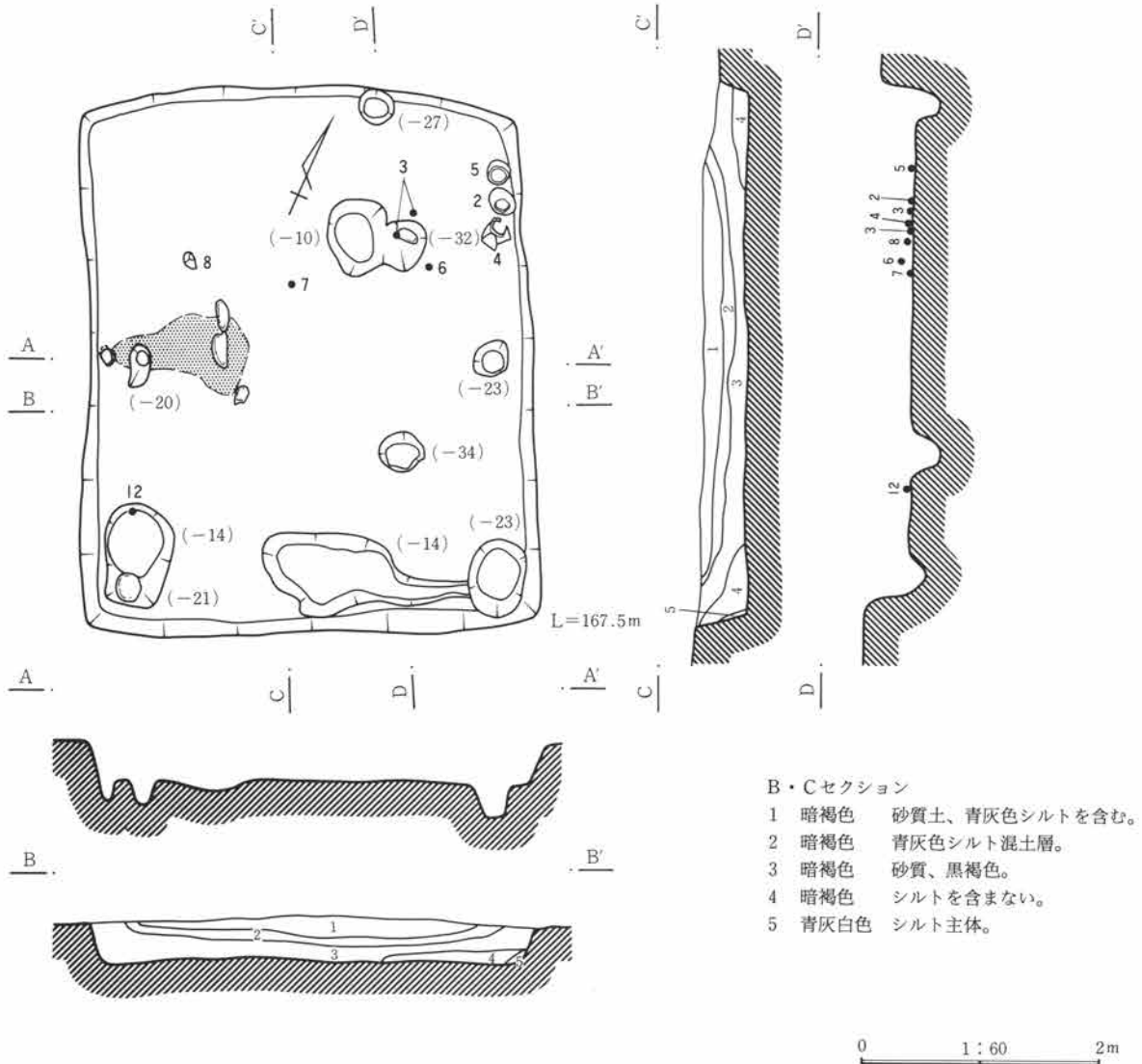
遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
14	土掘り具	14.3(+) $\times$ 7.0 $\times$ 3.5	黒色頁岩	347.3	比較的肉厚で側縁は直線的、基部は欠損している。両面に丹念に剝離調整を施している。

## 236号住居 (第71図、PL. 23)

位置 46-H17に位置する。

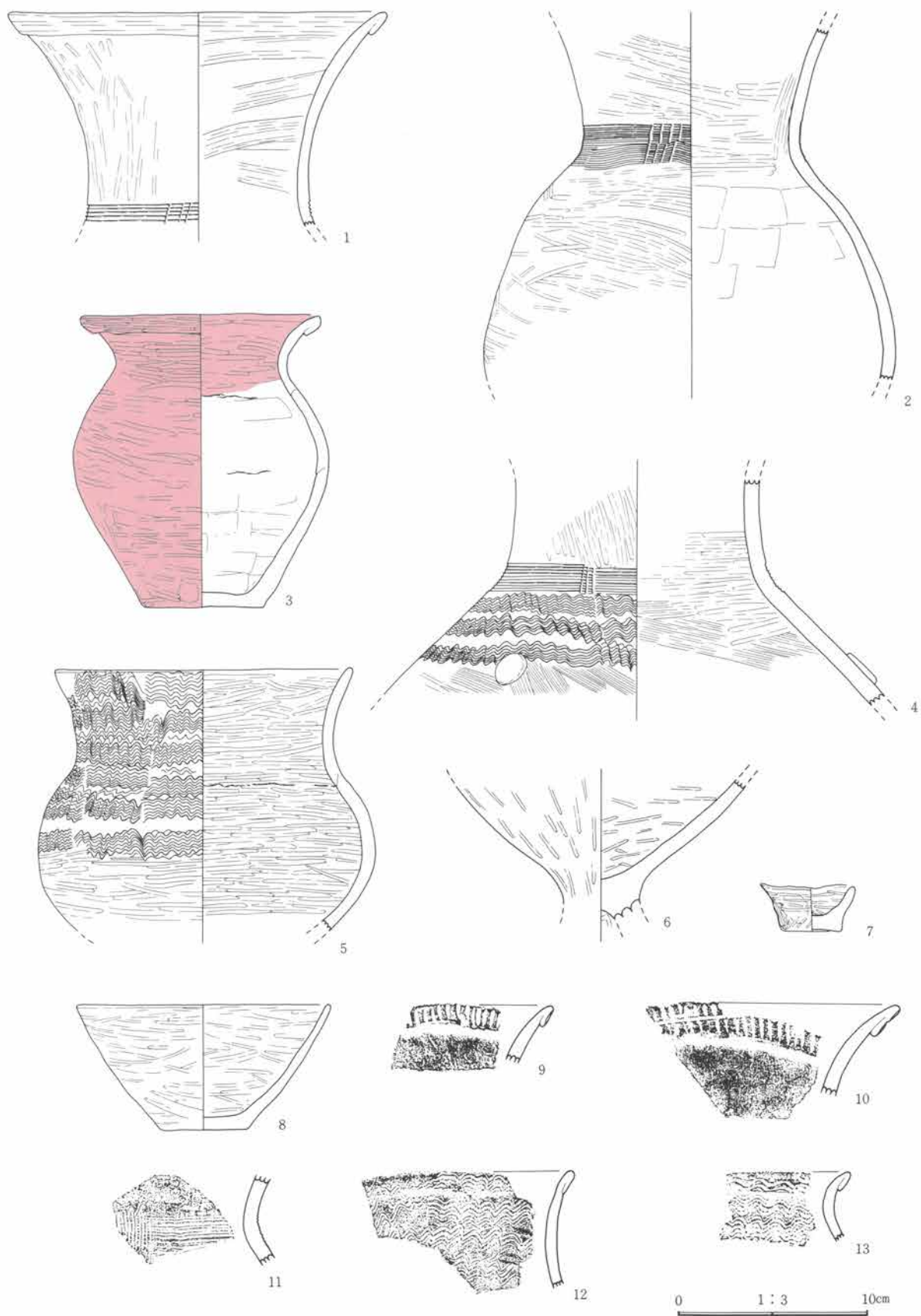
形状、規模、方位 長方形を呈する。規模は長軸4.5m、短軸3.7m。方位はN-25°-W。

周壁、壁溝 壁土は灰褐色土か又は青灰色土(第V層)で良好に検出する。検出できた壁の高さは30cm前後を測る。壁溝は認められない。



第71図 236号住居

6 検出した遺構・遺物



第72図 236号住居出土遺物

## (2) 弥生時代後期の住居跡

**支柱穴** 住居の東半部に深さ30cm程のピットを2か所で検出する。これらが支柱穴になると思われる。周壁際の数か所に小ピットが検出される。

**床面** 青灰色土を踏み固めている。

**炉跡** 西周壁際に地床炉を設ける。焼土帯の西縁部傍らに長細い円礫を2個並べている。炉跡の中心部は東周壁際の柱穴から60～70cmで近接位置にある。

**貯蔵穴** 住居→東南コーナー部に長径60cm、深さ23cm程のピットが認められる。これは貯蔵穴になる可能性が高い。周提は認められない。

**遺物出土状態** 床面上より多数の弥生土器が出土する。北東コーナー部に壺、甕の上部全周個体が並んで出土している。

**時期** 弥生後期第3期。

236号住居出土土器観察表 PL.102・103

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 19.5	折り返し口縁。	外 口縁部はヨコナデ、頸部は3連止め簾状文。 内 口縁部はヨコナデ、以下ハケメ後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、灰褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
2	壺	胴 21.4		外 頸部は4連止め簾状文を2段、以下ヘラミガキ。 内 口縁～頸部ヘラミガキ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	頸～胴部全周 胴部スス付着
3	壺	口 12.2 高 14.8	折り返し口縁。	外 ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩
4	壺	頸 13.0		外 頸部は3連止め簾状文、肩部は波状文、以下ハケメ。 内 口辺～頸部はヘラミガキ、胴部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	胴上～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
5	台付甕	口 15.4 胴 17.6		外 口縁～胴上部波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁～胴部全周
6	高坏			外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	坏下部 $\frac{1}{2}$ 周
7	ミニチュア	口 4.8 高 2.5	手づくね	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
8	鉢	口 13.2 高 6.5		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周

236号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
9	壺		折り返し口縁	外 口縁部はヘラ刻み目。内 ヘラミガキ。	砂粒多い。	堅緻	赤褐色	8%
10	壺	口 26	折り返し口縁	外 口縁部は沈線区画に刻み目。	粗砂粒を含む。	堅緻	鈍橙色	11%
11	壺			外 頸部は櫛描横直線に縦直線。	砂粒多い。	堅緻	赤褐色	8%
12	甕	口 12	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒少ない。	堅緻	赤褐色	20%
13	台付甕		折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	淡橙色	9%

## 239号住居 (第73図、PL. 22)

**位置** 42-H20に位置する。

**形状、規模、方位** 不明。

**周壁** 不明確。検出できなかった。 竪穴住居ではない可能性も高い。

**支柱穴** 不明。



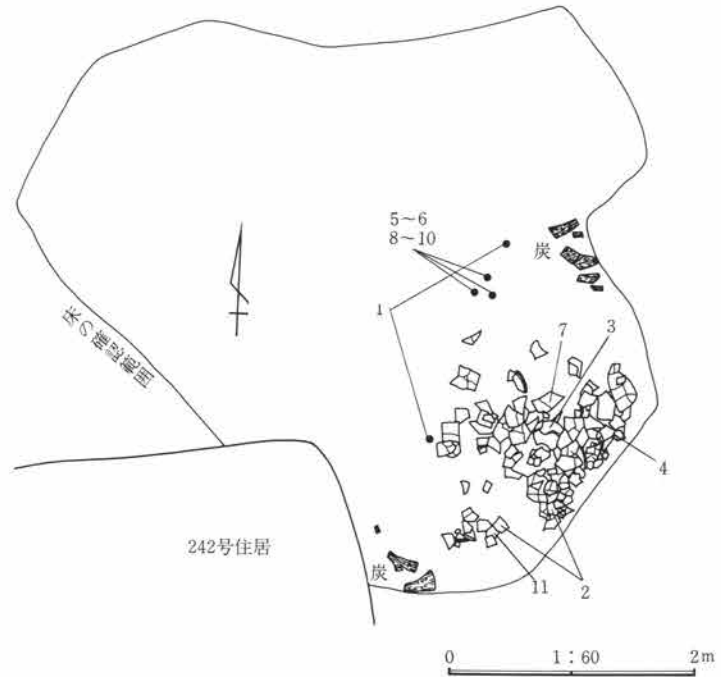
6 検出した遺構・遺物

床面 黒褐色土面を踏み固めている。床面上には灰の堆積が広く著しく見られ、炭化材の散在も顕著である。

炉跡 不明。

遺物出土状態 床面上に弥生土器大形破片が多数密集している。

時期 弥生後期第3期。



第73図 239号住居

239号住居出土土器観察表 PL.103

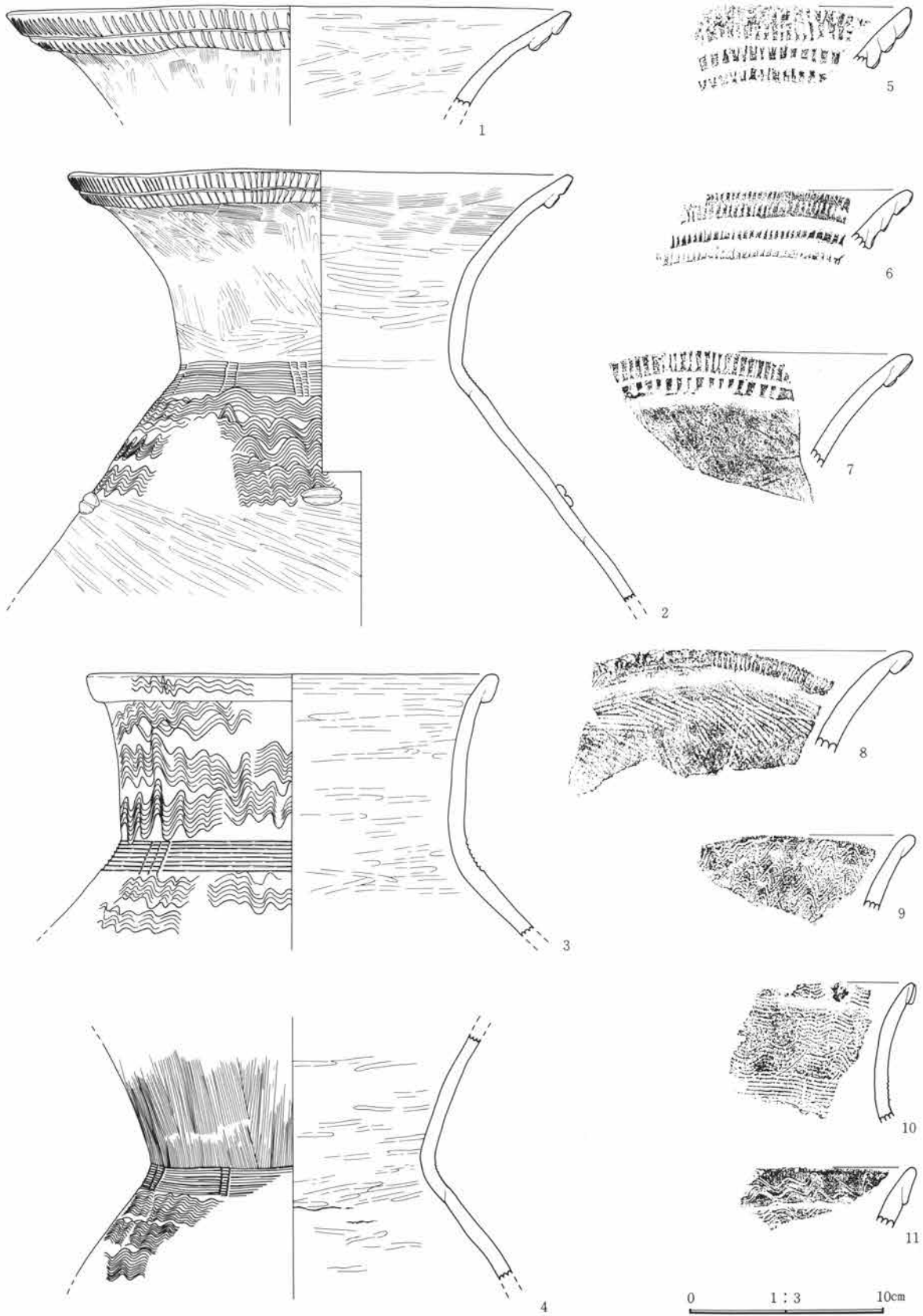
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 28.6	2段口縁。	外 口縁部は刻み目文、口辺部はハケメ後ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
2	壺	口 25.5 頸 14.4	折り返し口縁。	外 口縁部は沈線で区画し、上下に刻み目文、頸部は2~3連止め簾状文、肩部は波状文、付文4か所。 内 口辺~頸部はハケメ後ヘラミガキ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	口縁~胴部 $\frac{1}{2}$ 周
3	甕	口 20.9	折り返し口縁。	外 口縁~胴上部は波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周 胴部 $\frac{1}{2}$ 周
4	甕	頸 14.4		外 頸部は2連止め簾状文。肩部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍赤褐色	口辺~胴上部 $\frac{1}{2}$ 周

239号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
5	壺	口 24	3段口縁	外 口縁部はヘラ刻み目。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	橙色	12%
6	壺		多段口縁	外 口縁部はヘラ刻み目。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	橙色	13%
7	壺	口 23	折り返し口縁	外 口縁部は沈線区画に刻み目。	細砂粒を含む。	堅緻	灰白色	12%
8	壺	口 20	折り返し口縁	外 口縁部はヘラ刻み目。内 丹彩。	粗砂粒を含む。	堅緻	鈍橙色	18%
9	甕	口 18	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	灰赤色	15%
10	甕		折り返し口縁	外 口縁部は付文、波状文。頸部は簾状文。	粗砂粒を含む。	堅緻	鈍褐色	8%
11	甕		折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	鈍赤褐色	9%



(2) 弥生時代後期の住居跡



第74図 239号住居出土遺物

6 検出した遺構・遺物

240号住居 (第75図、PL. 23)

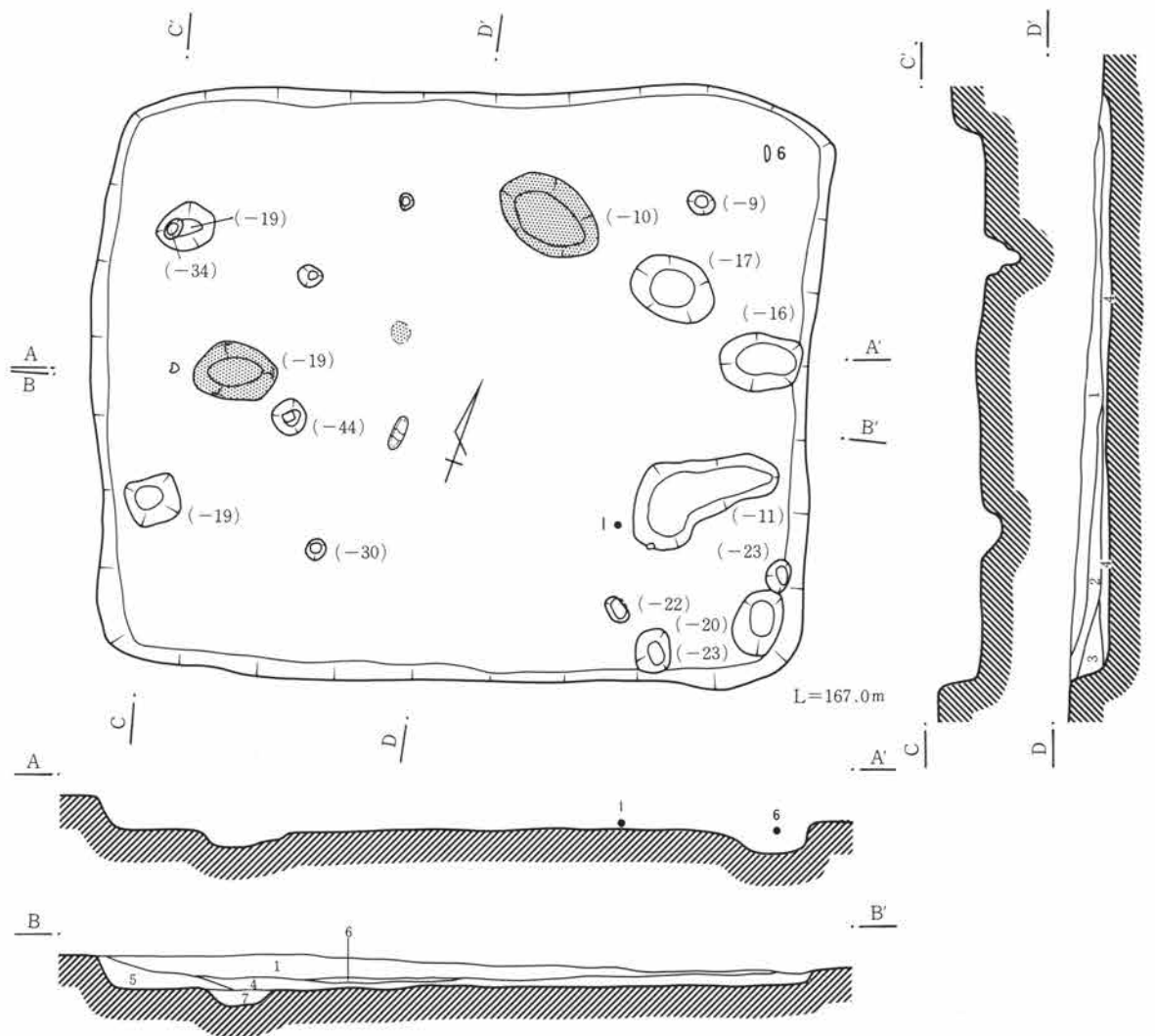
位置 38-H20に位置する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。規模は長軸5.8m、短軸4.7m。方位はN-70°-E。

周壁、壁溝 壁土は灰色土 (第V層)。

支柱穴 支柱穴は明確ではない。住居内には大小の多数のピットが検出されるが支柱穴と特定できない。中軸線上に深さ10cmの浅いピットを2か所に検出する。

床面 床面は灰色土 (第V層)。



B・Dセクション

- 1 黒灰色 炭化物、灰色土ブロックを含む。
- 2 黒灰色 やや褐色味が強い。
- 3 黒灰色 暗灰色土ブロックを含む。
- 4 暗灰色 灰色土ブロックを含む。
- 5 灰黒色 灰色土を僅かに含む。
- 6 黒色 純灰層。
- 7 橙色 焼土、炉跡。

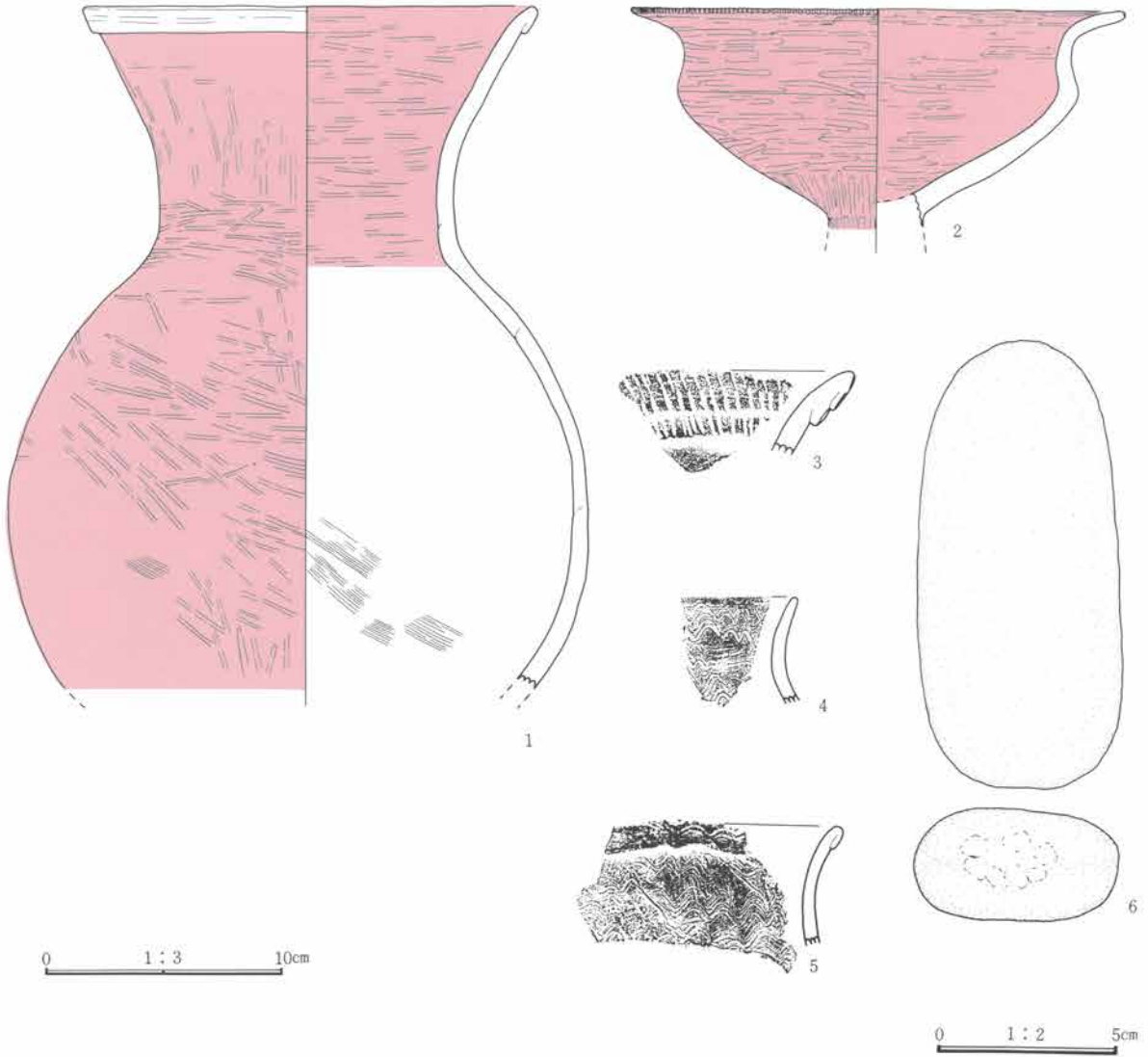
第75図 240号住居

(2) 弥生時代後期の住居跡

**炉跡** 中軸線上西周壁寄りに地床炉を設けている。浅い窪みを伴い、窪みの壁面は焼土化し、窪みの中の黒色灰下部は珪酸体の層が充填している。また住居の中央部に長さ30cmの長細い円礫が検出されるが、炉の据え石の可能性が高い。周囲に焼土の点在が認められる。北壁寄りにも地床炉を設けている。

**遺物出土状態** 床面～床面上5cm程に弥生土器大形破片が出土している。

**時期** 弥生後期第3期。



第76図 240号住居出土遺物

240号住居出土土器観察表 PL. 103

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 19.0 胴 24.2	折り返し口縁。	外 口縁～胴部はヘラミガキ、丹彩。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はハケメ、丹彩。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁～胴部迄周
2	高坏	口 20.6 胴 16.8		外 口縁部は細かい刻み目、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部迄周 内外面丹彩

6 検出した遺構・遺物

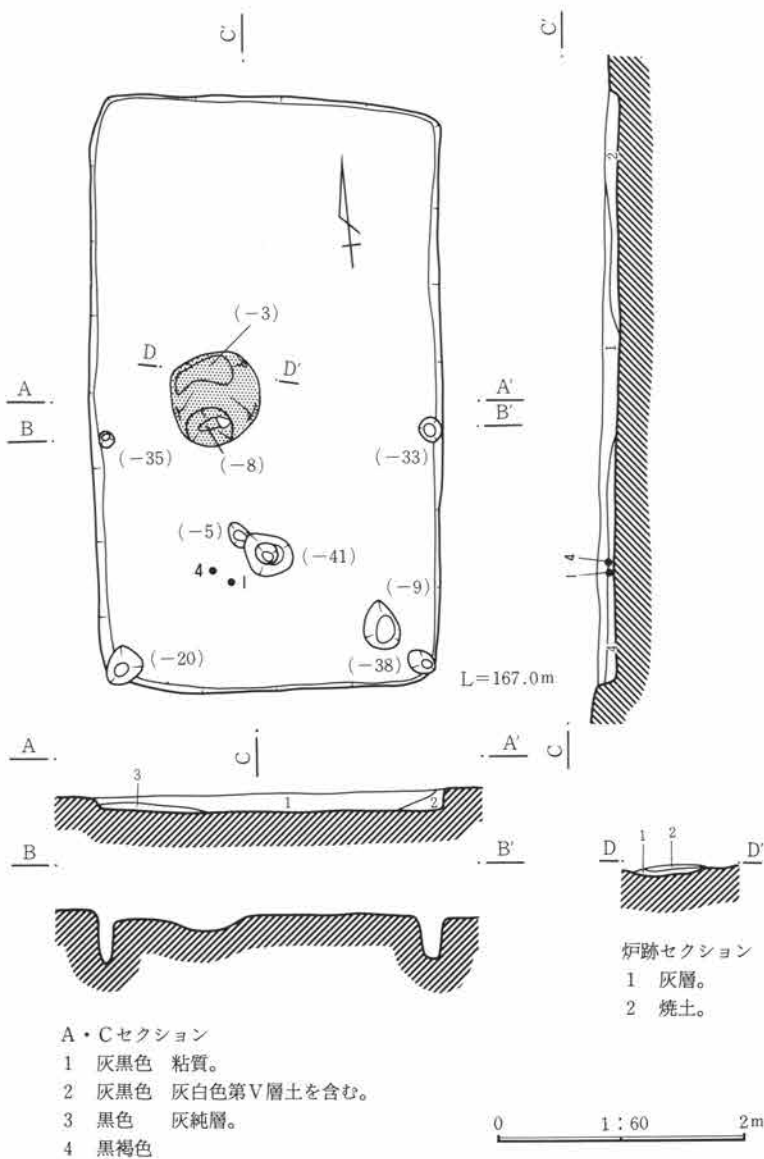
240号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
3	壺		2段口縁	外 口縁部は刻み目。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	やや軟弱	淡黄色	10%
4	甕	口 15		外 波状文。	粗砂粒を含む。	堅緻	暗褐色	17%
5	甕	口 16	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	12%

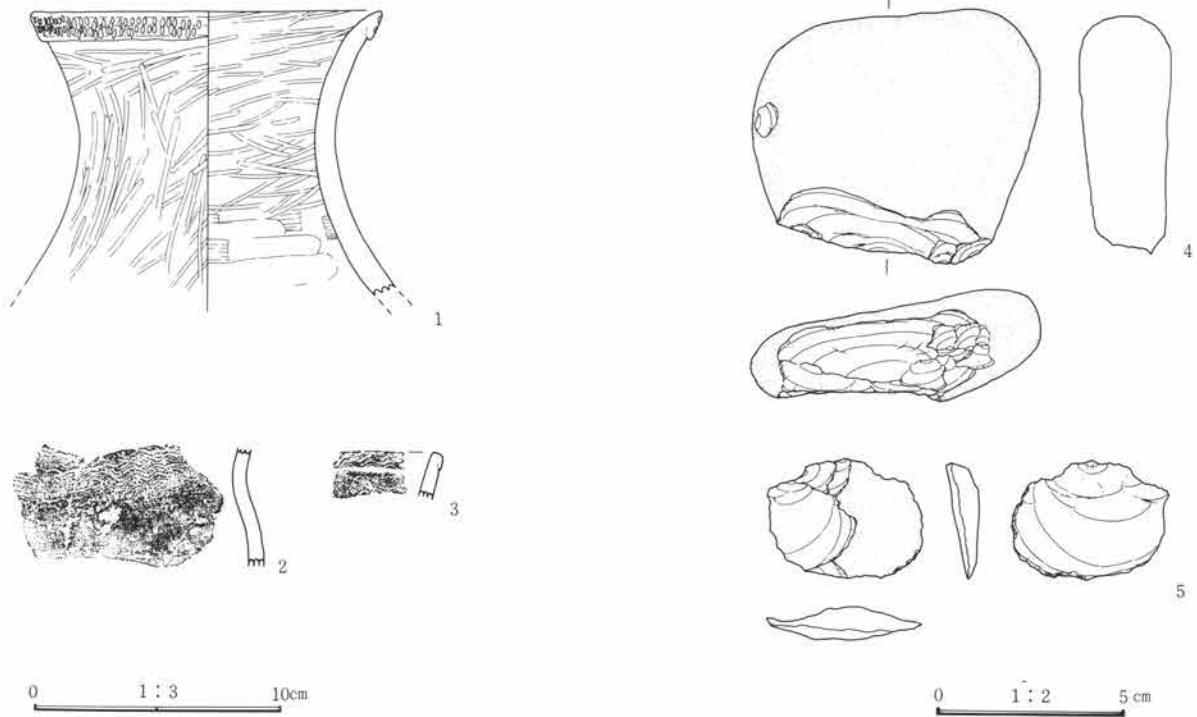
240号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
6	磨石	12.3×5.6×3.1	粗粒安山岩	360.2	自然石の一端に使用による摩滅痕がある。

241号住居 (第77図、PL. 24)  
 位置 34-H21に位置する。  
 形状、規模、方位 長方形を呈する。規模は長軸4.7m、短軸2.8m。方位はN-7°-E。  
 周壁、壁溝 壁土は灰色土(第V層)、検出できた壁高は10cm。  
 支柱穴 中軸線上に深さ40cmの支柱穴になるとおもわれる円形ピットを認める。この他周壁際、コーナー部などに深さ20cm前後の小ピットを認める。  
 床面 268号住居と北部で重複するが、貼り床など認められない。  
 炉跡 中央部に地床炉が設けられ、周囲に黒色灰の広がりが見られる。  
 遺物出土状態 出土遺物は少ない。床面上3cm前後から覆土中に弥生土器が出土する。  
 時期 弥生後期第3期。  
 他の遺構との関係 北部で268号住居跡と重複する。



(2) 弥生時代後期の住居跡



第78図 241号住居出土遺物

241号住居出土土器観察表 PL. 104

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 13.9	折り返し口縁。	外 口縁部は刺突文、以下ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴上部はハケメ、ヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	口縁～胴上部 4周

241号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
2	甕			外 肩部は波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	灰赤色	10%
3	甕		折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒多い。	堅緻	鈍赤褐色	3%

241号住居出土石器観察表 PL. 104

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
4	刃器	6.8×7.6×3.0	黒色頁岩	195.8	自然石の一侧縁に両面剝離調整を施した鈍い刃部を作っている。
5	刃器	3.2×4.2×0.9	ケイ質頁岩	8.4	片面に自然面を残す横長小剝片のほぼ全周縁を刃部としている。 刃部には細かい剝離使用痕がある。

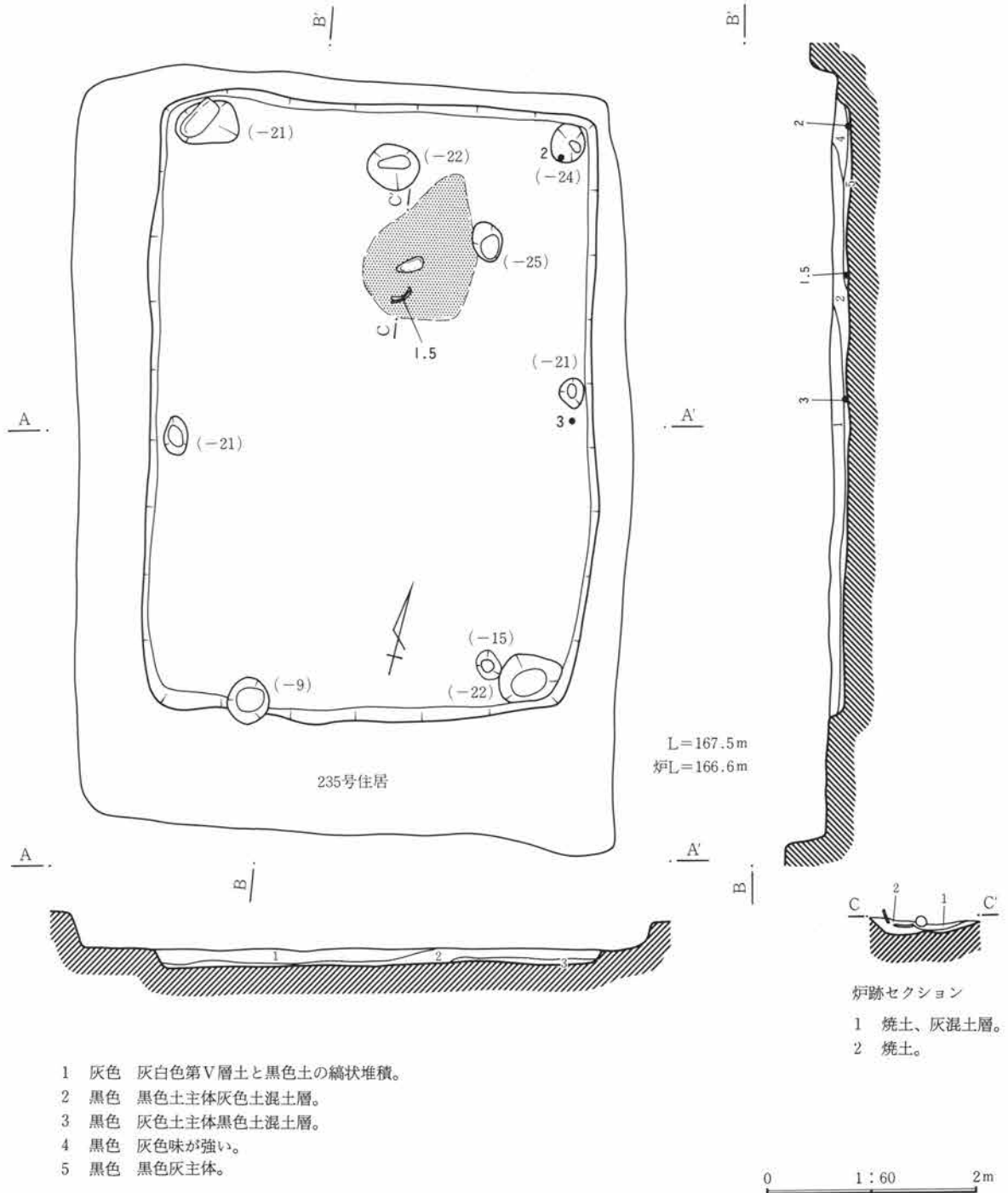
6 検出した遺構・遺物

242号住居 (第79図、PL. 24)

位置 41-H17に位置する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。規模は長軸5.8m、短軸4.2m。方位はN-13°-W。

周壁、壁溝 本住居は235号住居の床面下に検出されており、壁土は灰褐色(第V層)で、壁高は15cmほど検出されるが、235号住居の壁高もあわせれば、50cm以上になる。



第79図 242号住居

(2) 弥生時代後期の住居跡

**支柱穴** 支柱穴は中軸線上、炉跡と周壁の間に1か所認める。この他、周壁下に数か所、深さ20cm前後の小ピットを検出する。コーナー部3か所、長辺の中間部の壁際に小ピットが認められる。

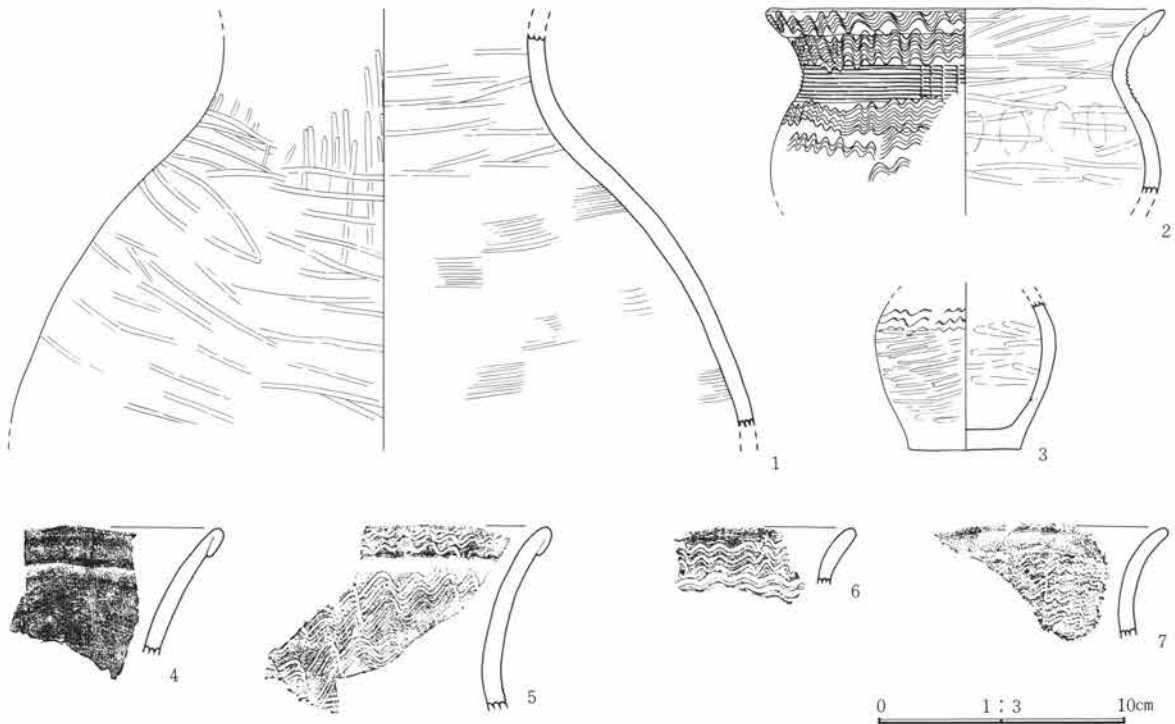
**床面** 床面は灰褐色土。

**炉跡** 中軸線上北周壁寄りに地床炉を設けている。炉跡内には長さ30cm程の長細い円礫及び大形土器破片を縦に埋め込んでいる。浅い円形掘り方を伴う。

**遺物出土状態** 床面上より弥生土器破片が出土する。

**時期** 弥生後期第3期。

**他の遺構との関係** 本住居は235号住居の床面下から検出される。



第80図 242号住居出土遺物

242号住居出土土器観察表 PL. 104

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	胴 29.9		外 ヘラミガキ。 内 頸部はヘラミガキ、胴部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	頸～胴部 ほぼ全周
2	台付甕	口 15.7 胴 15.2	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は4連止め簾状文。 内 ヘラミガキ、指オサエ痕。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
3	甕	胴 7.2		外 胴上部は波状文、胴～低部はヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、灰褐色	胴～底部 $\frac{1}{2}$ 周

242号住居出土土器観察表（拓本）

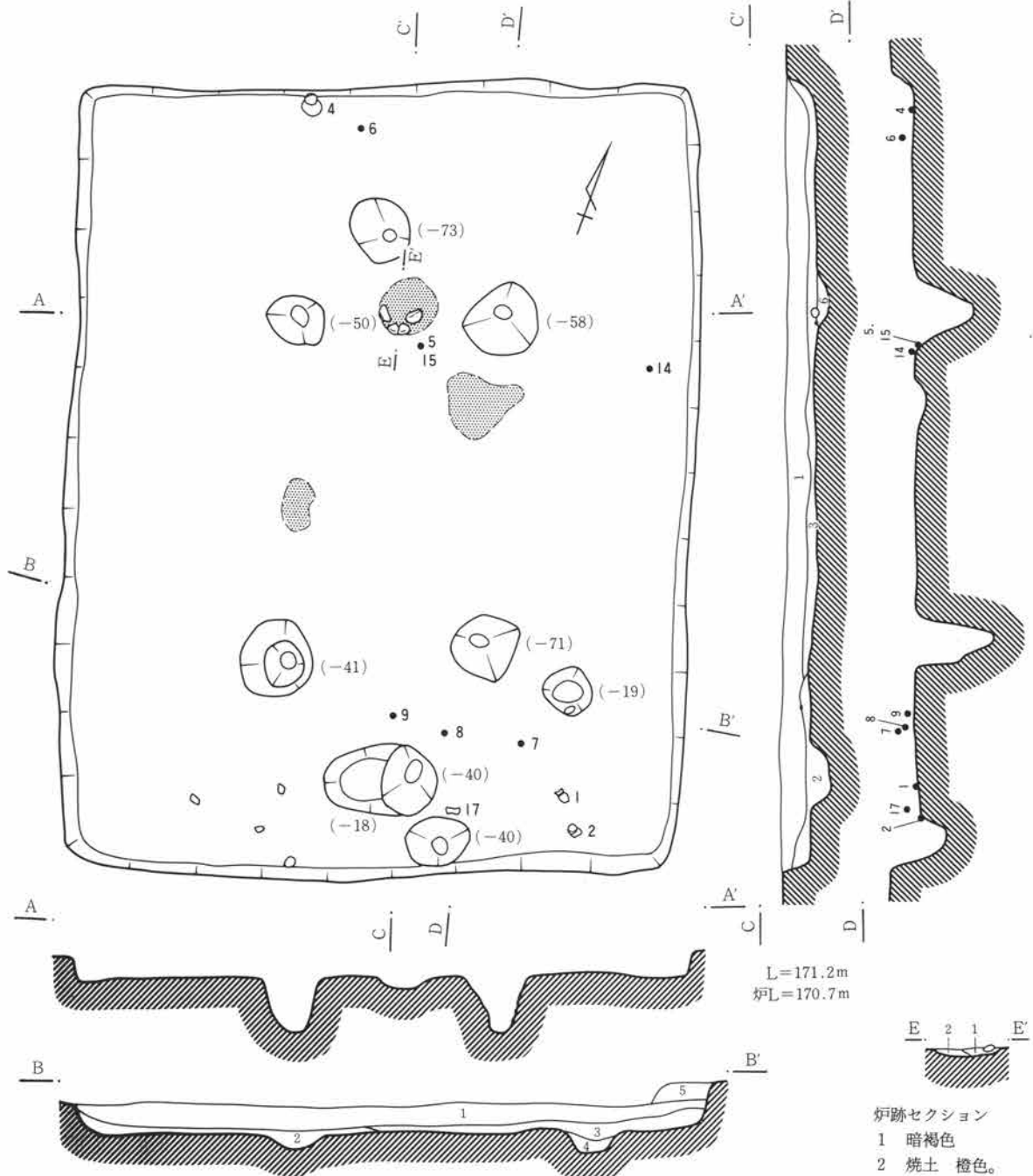
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
4	壺		折り返し口縁	外 ヘラミガキ。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	7%
5	甕		折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	8%



6 検出した遺構・遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
6	甕			外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	8%
7	甕	□ 10		外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒多い。	堅緻	橙色	13%

243号住居 (第81図、PL. 25)



B・Cセクション

- |                      |                     |
|----------------------|---------------------|
| 1 暗褐色 粘質。            | 4 暗褐色 やや砂質、黄褐色土を含む。 |
| 2 暗褐色 炭化物を少量含む。      | 5 暗褐色 黄褐色土を混じる。     |
| 3 黄褐色 黄褐色砂質土をより多く含む。 | 6 暗褐色 焼土混土層。        |

0 1:60 2m

第81図 243号住居

## (2) 弥生時代後期の住居跡

位置 39-G12に位置する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。規模は長軸7.2m、短軸5.6m。方位はN-21°-W。

周壁、壁溝 壁土は黄褐色土で良好に検出する。検出できた壁高は40cm前後である。

支柱穴 支柱は4本構造。4支柱穴を明瞭に検出する。

床面 黄褐色土を踏み固めている。

炉跡 北寄り2支柱穴間に地床炉を設ける。径50cm程の円形焼土帯を生成し、縁辺部に3個の円礫を据えている。この他中央部にも小範囲に2か所焼土帯が認められる。炉跡としてはやや不明確であるが、これらも地床炉の可能性が高い。

遺物出土状態 床面上に多数の弥生土器の完形個体、大形破片が多数出土している。遺物はとくに住居南部の出入部と炉跡の周囲に集中している。

時期 弥生後期第1期。

他の遺構との関係 北部で本住居の覆土上に7号墓の南側周溝が造られている。

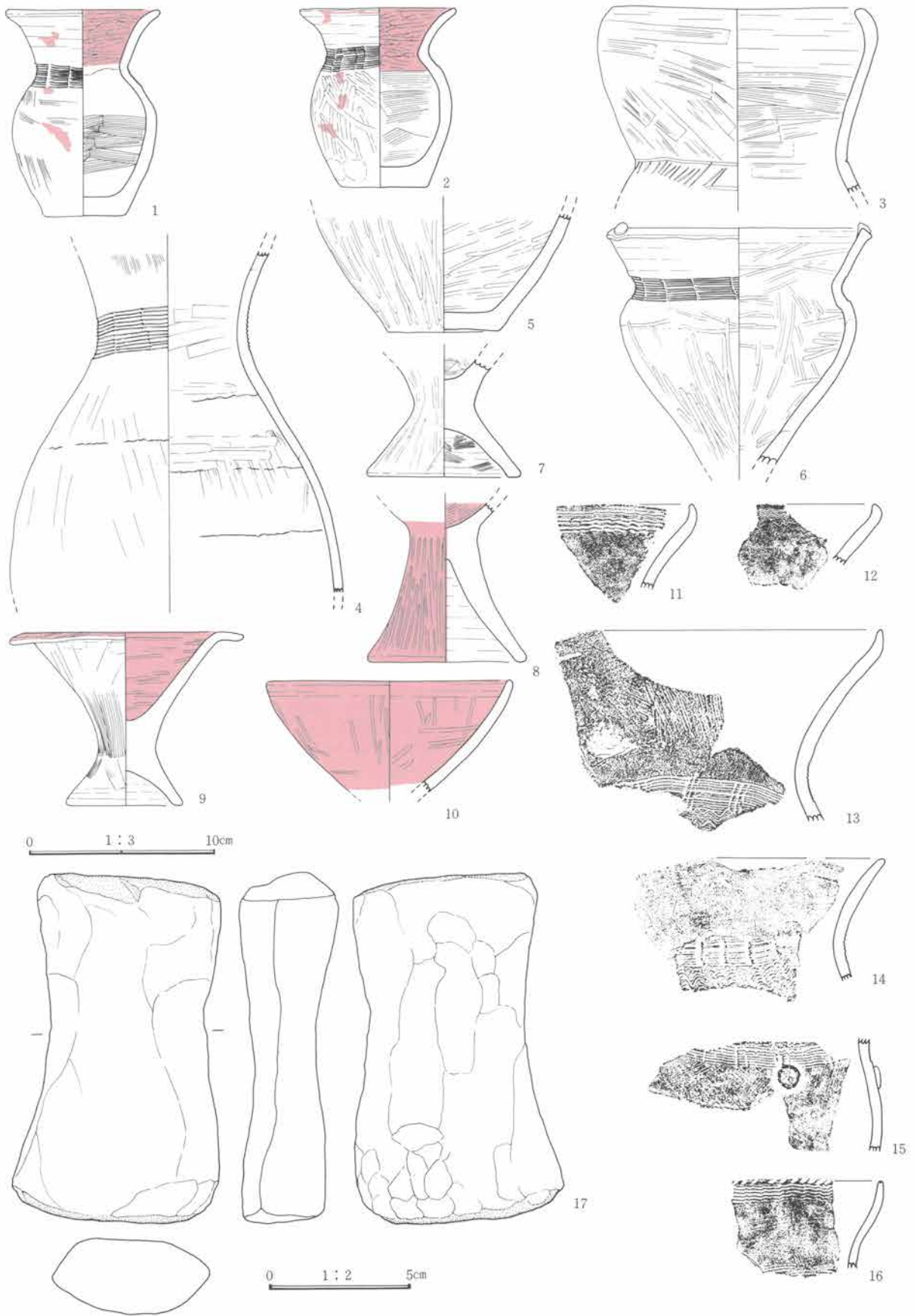
243号住居出土土器観察表 PL. 104

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 8.1 高 10.8		外 口縁部はヨコナデ、頸部は等間隔止め簾状文。 内 口縁部はヘラミガキ、胴部はハケメ、頸部に丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	完形 外面丹付着
2	壺	口 8.1 高 9.4		外 口縁部はヨコナデ、頸部は2連止め簾状文。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はハケメ、頸部丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	ほぼ完形 外面丹付着
3	壺	口 13.1 頸 11.4	口縁部は著しく内湾する。	外 口縁部はヨコナデ、頸部は沈線間に斜行ヘラ描沈線を巡らす。羽状になるだろうか。 内 口縁部はヨコナデ、以下ハケメ、ナデ。	砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	口縁～頸部 ほぼ全周
4	壺	胴 17.3		外 頸部等間隔止め簾状文を2段以下ハケメ、ナデ。 内 ヘラナデ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	頸～胴部全周 胴部スス付着
5	甕	底 5.9		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	胴下～底部全周
6	台付甕	口 13.3 胴 12.6	口縁端部に幅広い面を作る。	外 口縁端部に付文、頸部は等間隔止め簾状文。 内 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	口縁～胴部1/2周
7	高坏	脚 8.1		外 ヘラミガキ。 内 脚部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	脚部全周
8	高坏	脚 8.2		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部ヨコナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	脚部全周 内外面丹彩
9	高坏	口 12.4 高 9.1		外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラケズリ、ハケメ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はヨコナデ、丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、黄橙色	ほぼ完形
10	高坏	口 12.9		外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	坏部1/2周 内外面丹彩

243号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
11	壺		受け口状口縁	外 口縁部は波状文。内 ハケメ。	砂粒を含む。	堅緻	浅黄色	11%
12	壺		受け口状口縁	外 口縁部は波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	やや堅緻	鈍橙色	9%
13	壺		受け口状口縁	外 頸部は3連止め簾状文。	細砂粒を含む。	やや軟弱	灰白色	9%
14	甕	口 16		外 頸部は等間隔止め簾状文。	砂粒を含む。	堅緻	鈍黄橙色	20%
15	甕			外 頸部は2連止め簾状文、肩部は鋸歯文。	細砂粒を含む。	堅緻	鈍褐色	17%
16	甕		受け口状口縁	外 口縁端部は刻み目、口縁部は波状文。	砂粒を含む。	堅緻	鈍黄褐色	9%

6 検出した遺構・遺物



第82図 243号住居出土遺物

243号住居出土石器観察表 PL. 104

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
17	砥石	12.3×7.5×3.5	砂岩	310.5	断面が紡錘形で両面が砥面となっている。中央部が摩滅により、細まっている。

## 244号住居 (第83図、PL. 25)

位置 53-H33に位置する。

形状、規模、方位 形状不明。住居の西半部は調査区域外である。規模は南北5.0m。方位はN-9°-E。

周壁、壁溝 壁土は灰白色土、砂質(第V層)。壁高は50cm前後を検出する。壁溝は一部に認められる。深さは3~5cm。

支柱穴 不明確。

土壌 東南コーナー部に長径80cm、深さ40cmのピットを検出するが、これは貯蔵穴になる可能性がある。

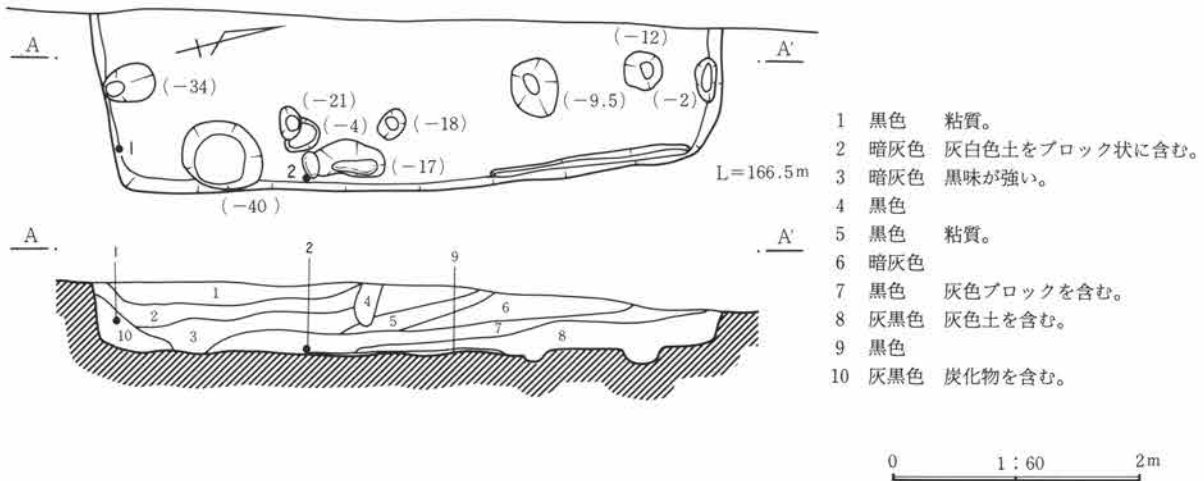
覆土 覆土は北方向からの埋没が顕著である。

床面 灰白色土(第V層)で平坦に堅く踏み固められている。

炉跡 不明。

遺物出土状態 東周壁下、床面上より弥生土器破片が出土している。

時期 弥生後期第3期。

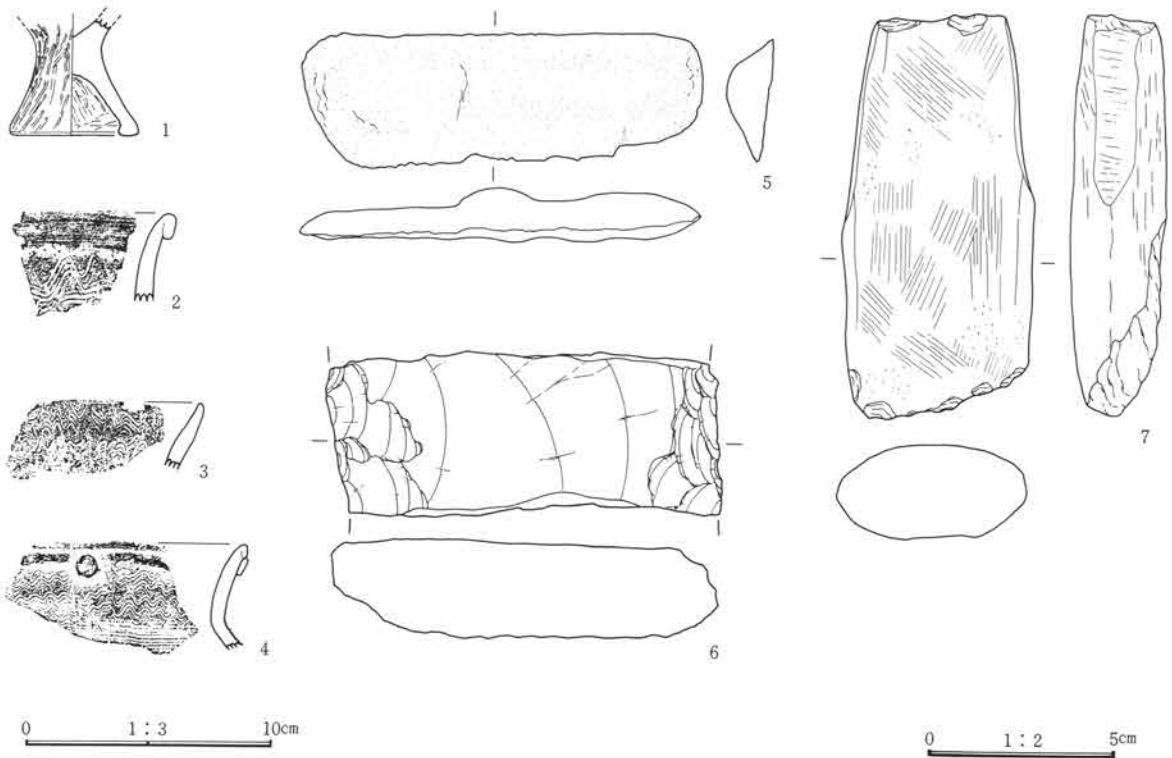


第83図 244号住居

244号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	台付甕(?)	脚 5.0		外 ヘラミガキ。 内 ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	脚部全周

6 検出した遺構・遺物



第84図 244号住居出土遺物

244号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
2	甕	口 14	折り返し口縁	外 口縁部はヨコナデ、以下波状文。	砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	10%
3	甕	口 12		外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	やや軟弱	明褐色	15%
4	台付甕	口 12		外 口縁部は付文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	鈍赤褐色	15%

244号住居出土石器観察表 PL. 104

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
5	刃器	3.5×11.3×1.4	頁岩	60.5	縦長の剥片の一侧縁を刃部としている。刃部には全体に細かい剝離使用痕がある。
6	土掘り具	4.4(+ )×10.3×2.7	粗粒安山岩	217.2	身部中央部の破片であり、刃部と基部を欠損している。大形の横長剥片を素材としている。両側縁の調整は丹念。
7	磨製石斧	10.8×5.1×2.6	変玄武岩	243.3	基部側縁は強い稜をもって面を作っている。基部、刃部には使用による破損が著しい。

245号住居 (第85図、PL. 26)

位置 52-H35に位置する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。西半部は調査区域外のため不明。規模は短軸4.7m。方位はN-42°-W。

周壁、壁溝 壁土は灰白色土（第V層）。壁溝は検出できない。

主柱穴 主柱は4本構造と思われる。

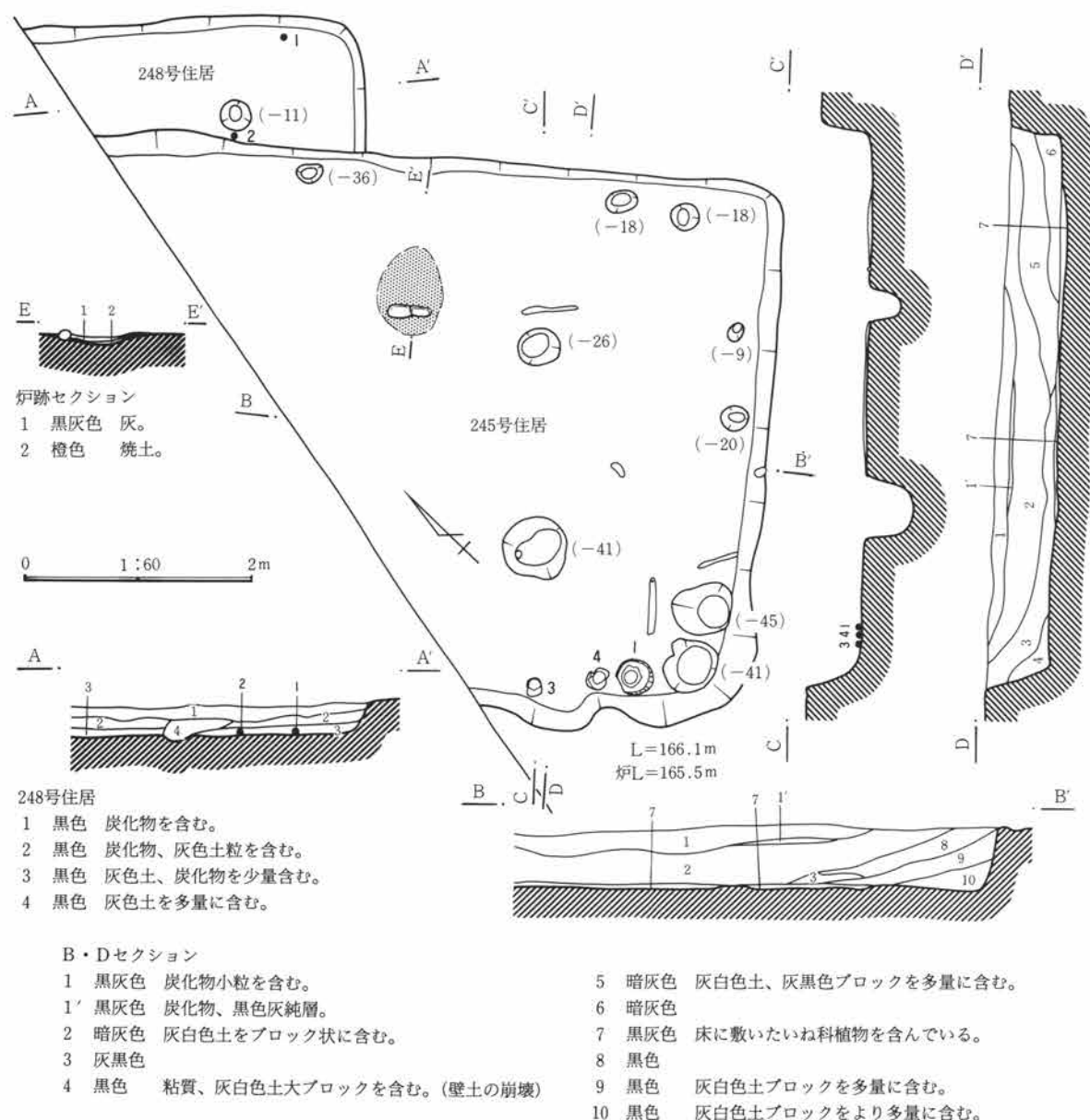
床面 灰色砂質、床面は平坦、薄いワラ状のものが床面上の大半部分に広がって認められた。住居のレベルが湧水以下のため、木片など床面上に多数遺存して検出された。

炉跡 北東周壁側、側部2主柱穴間に地床炉を設けている。長さ35cm程の細長い円礫を焼土帯の縁辺部に据えている。浅い円形の掘り方を伴う。

遺物出土状態 西南周壁下の床面上に胴部以下を欠く弥生土器の壺、甕が3個倒立状態で検出される。

時期 弥生後期第3期。

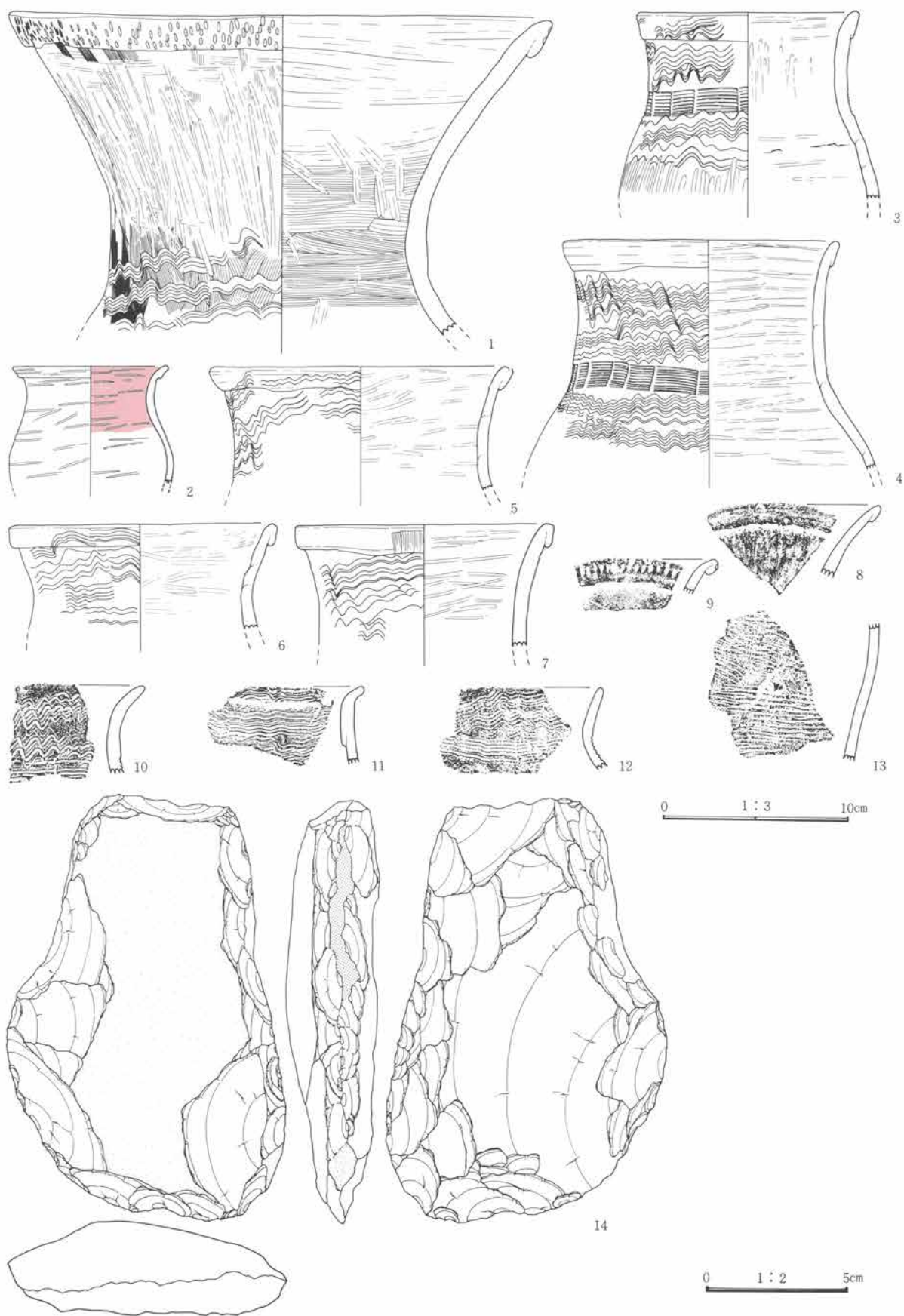
他の遺構との関係 246号（後期第2期）248号住居と重複する。



第85図 245号、248号住居



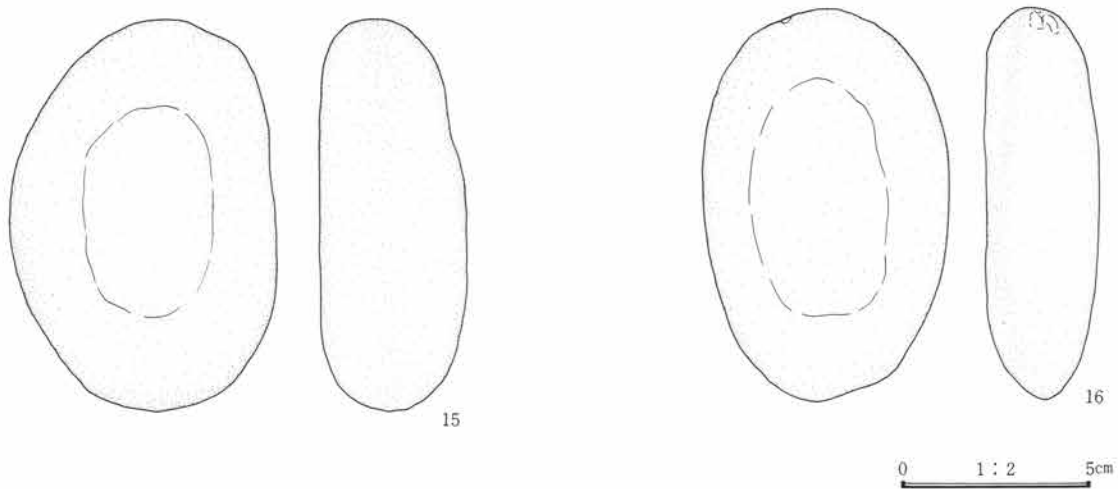
6 検出した遺構・遺物



第86図 245号住居出土遺物(1)



## (2) 弥生時代後期の住居跡



第87図 245号住居出土遺物(2)

245号住居出土土器観察表 PL. 105

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 28.4	折り返し口縁。	外 口縁部は刺突文、頸部は波状文。 内 口縁～頸部はハケメ後ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～頸部全周
2	壺	口 8.2 胴 8.8	折り返し口縁。	外 ヘラミガキ、丹彩。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はハケメ、丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
3	甕	口 11.4	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文。頸部は等間隔止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	口縁～胴上部 $\frac{1}{2}$ 周
4	甕	口 14.3	折り返し口縁。	外 口縁部はヨコナデ、口辺～胴上部は波状文。頸部は等間隔止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁～胴上部全周 スス付着
5	甕	口 16.0	折り返し口縁。	外 口縁部はヨコナデ、口縁～口辺部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
6	甕	口 13.7	折り返し口縁。	外 口縁～頸部は波状文。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
7	甕	口 13.3	折り返し口縁。	外 口縁部はヨコナデ、口辺部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周

245号住居出土土器観察表(拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
8	壺	口 14	折り返し口縁	外 ヘラミガキ。内 ヘラミガキ。	小礫を含む。	堅緻	橙色	14%
9	壺	口 16	折り返し口縁	外 口縁部は刻み目。内 ナデ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	12%
10	甕			外 頸部は2連止め簾状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	7%
11	甕	口 11		外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	12%
12	台付甕	口 10		外 頸部は3連止め簾状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	灰褐色	13%
13	甕			外 R燃糸文。内 ヘラミガキ。	砂粒少ない。	堅緻	赤褐色	7%

245号住居出土石器観察表 PL. 105

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
14	土掘り具	14.7×9.9×3.4	輝緑凝灰岩	604.1	片側に自然面を残す大形の横長剥片を素材とする。周縁を丹念に剝離調整している。基部側縁には摩滅が目立つ。

## 6 検出した遺構・遺物

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
15	磨石	10.4×7.2×4.0	石英閃緑岩	448.7	自然石の片面に僅かに摩滅痕が見られる。
16	磨石	10.3×6.5×3.1	石英閃緑岩	326.2	自然石を残す片面に僅かに摩滅痕が見られる。

### 248号住居 (第85図、PL. 26)

**位置** 52-H37に位置する。

**形状、規模、方位** 住居の大部分が調査区域外、245号住居との重複により形状は不明。辺の方向は245号住居と一致する。

**周壁、壁溝** 壁土は灰白色土。壁高は25cm前後で、良好に検出する。壁溝は認められない。

**床面** 灰白色土面で245号住居とのレベル差は10～15cm。

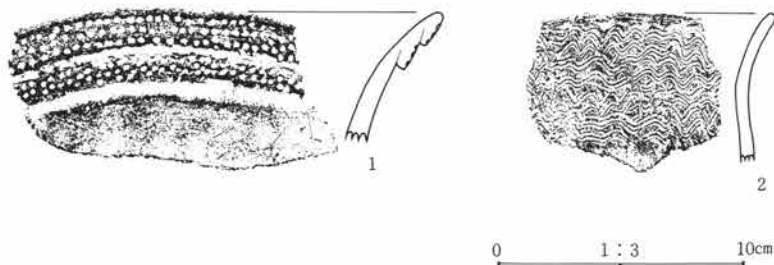
**主柱穴** 不明。住居内に深さ10cmの小ピットを検出するが柱穴になるか明確ではない。

**炉跡** 不明。

**遺物出土状態** 床面上より弥生土器破片が出土している。

**時期** 弥生後期第3期。

**他の遺構との関係** 245号住居と大きく重なる。245号住居の覆土中に張り床面などが認められないので本住居の方が古い可能性が高い。



第88図 248号住居出土遺物

### 248号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
1	壺	口 26	2段口縁	外 口縁部は刺突。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	橙色	14%
2	甕	口 11		外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	鈍橙色	17%

### 246号住居 (第89図、PL. 26)

**位置** 51-H34に位置する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。北西部は245号住居と重複しており、不明確。規模は長軸4.7m、短軸は不明確。方位はN-80°-W。

(2) 弥生時代後期の住居跡

**周壁、壁溝** 北側周壁は灰色第V層の最上部に位置するため、ほとんど検出することができない。南周壁は壁高8cmを検出する。

**床面** 床面は黄褐色土で平坦。北周壁際に径50cm程の範囲に赤色顔料の広がりが見出された。

**支柱穴** 支柱は4本構造と思われる。南側に2か所支柱穴を良好に検出する。北側では検出できなかった。

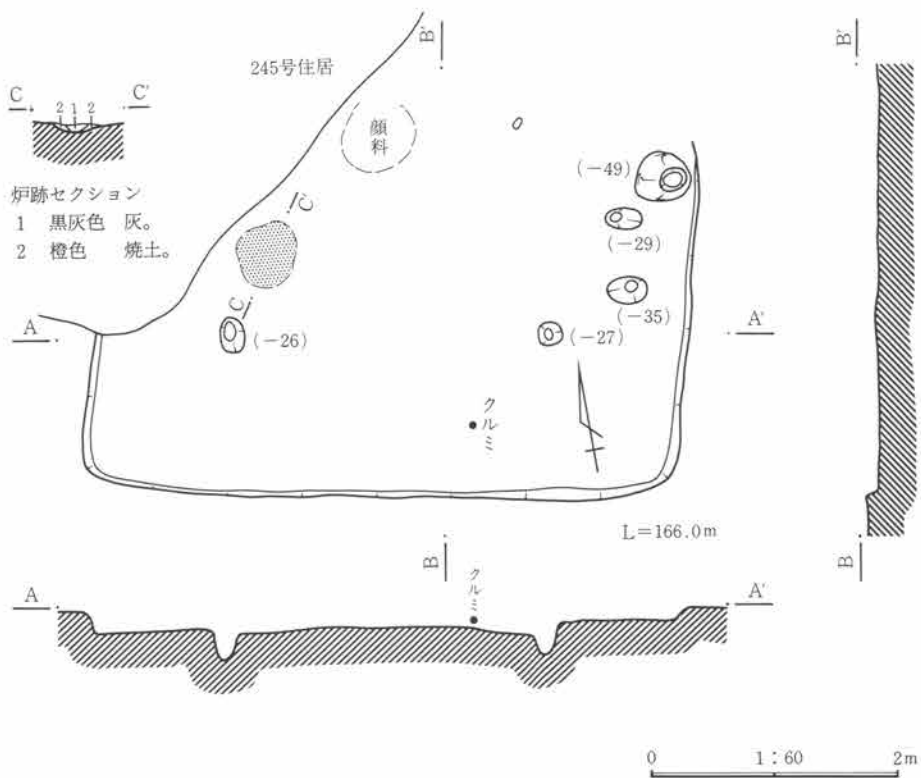
東側周壁際に1対のピットを検出する。これは出入部の施設に関わるピットと思われる。

**炉跡** 中軸線上西部に地床炉がある。浅い円形の掘り方を伴い灰、焼土を充填する。

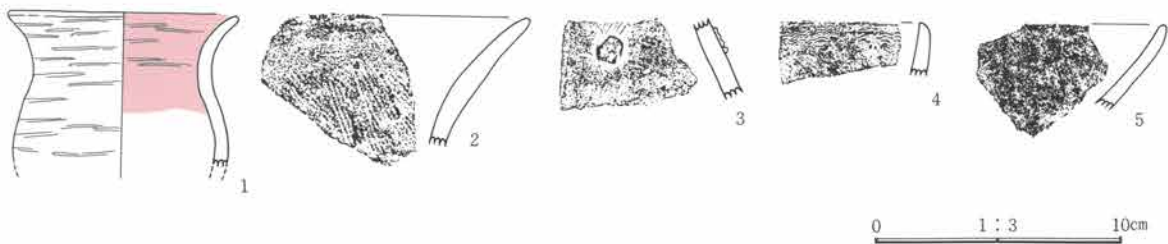
**遺物出土状態** 出土遺物は少ない。床面上、覆土中より弥生土器破片が出土する。

**時期** 弥生後期第2期。

**他の遺構との関係** 245号住居と西南部で重なる。本住居は245号住居に切られている。



第89図 246号住居



第90図 246号住居出土遺物

6 検出した遺構・遺物

246号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 9.0 胴 8.6		外 ヘラミガキ、丹彩。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はナデ、丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁～胴部1/4周

246号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
2	壺			外 口縁部はヨコナデ、ハケメ。内 ハケメ。	細砂粒を含む。	堅緻	淡黄色	7%
3	壺			外 胴上部は鋸歯文、付文。	砂粒を含む。	堅緻	鈍褐色	5%
4	甕			外 口縁部は波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	褐灰色	9%
5	高坏	口 14		外 ヘラミガキ、丹彩。内 ヘラミガキ、丹彩。	細砂粒を含む。	堅緻	赤色	12%

249号住居 (第91図、PL. 27)

位置 48-H39に位置する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。大型住居。規模は長軸9.2m、短軸6.1m。方位はN-46°-W。

周壁、壁溝 壁土は灰白色土。壁溝は認められない。

支柱穴 支柱は6本構造。5か所に長円形の大規模なピットを検出する。深さは40～80cm。東端部のピット内には柱材が残存し、床面上25cmほど突出した状態で検出された。周壁際に多数の小ピットが並んで検出される。

床面 床面は灰白色土面で薄い藁状の堆積物の広がりが見られる。

炉跡 北西奥2支柱穴と周壁の間に地床炉を設ける。焼土帯が良好に生成し、周囲に広く灰層の広がりが認められる。

遺物出土状態 床面上より弥生土器大形破片が出土する。土錘は床面密着状態で検出される。

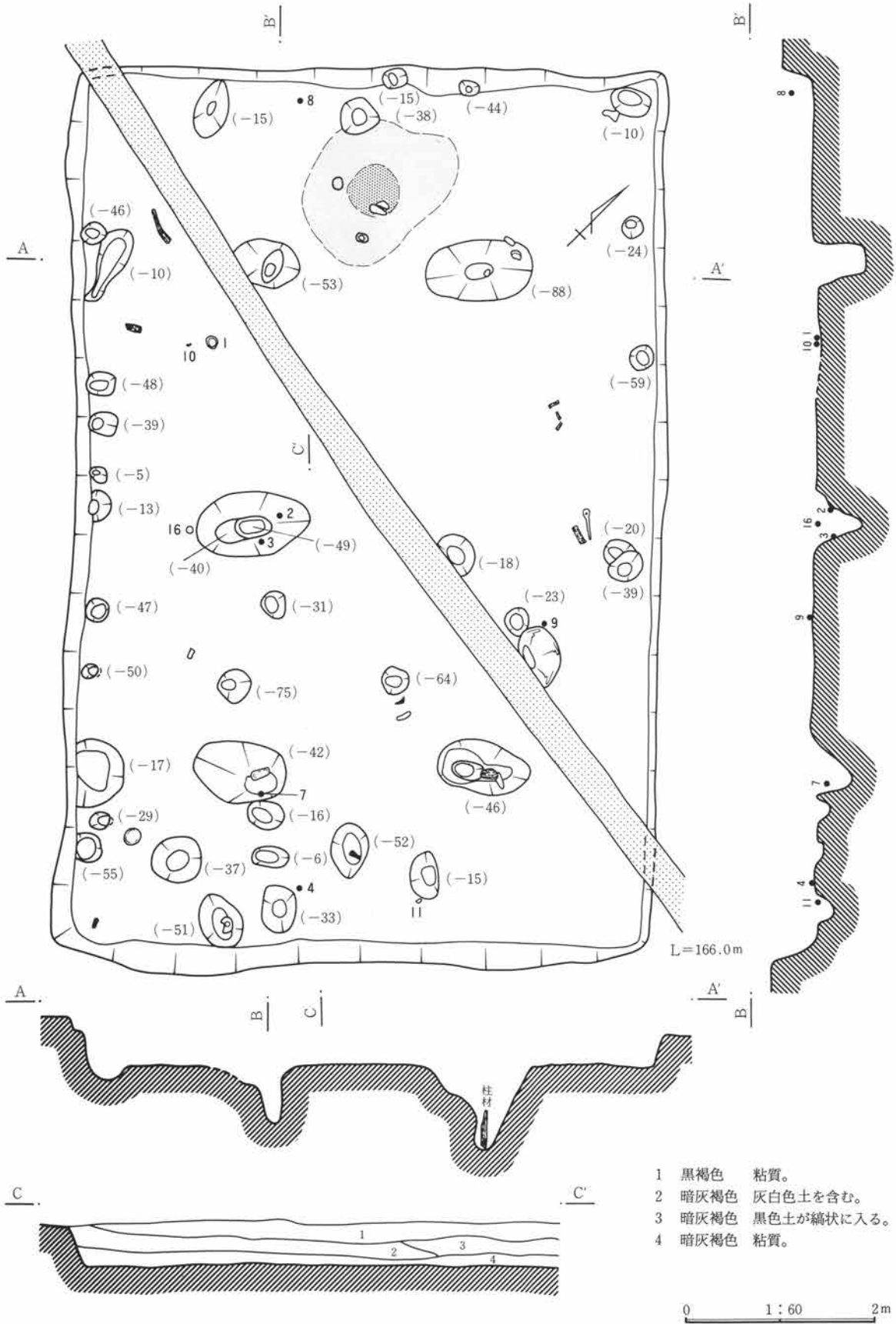
時期 弥生後期第3期。

249号住居出土土器観察表 PL. 105

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	胴 13.4 底 5.1		外 胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 胴上部はヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、褐色	胴～底部1/4周
2	甕	口 15.3	折り返し口縁。	外 口縁～頸部波状文。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、鈍赤褐色	口縁部全周 スス付着
3	甕	口 20.0	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	口縁部1/4周 頸～胴部1/2周
4	台付甕?	脚 9.2		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	脚部全周

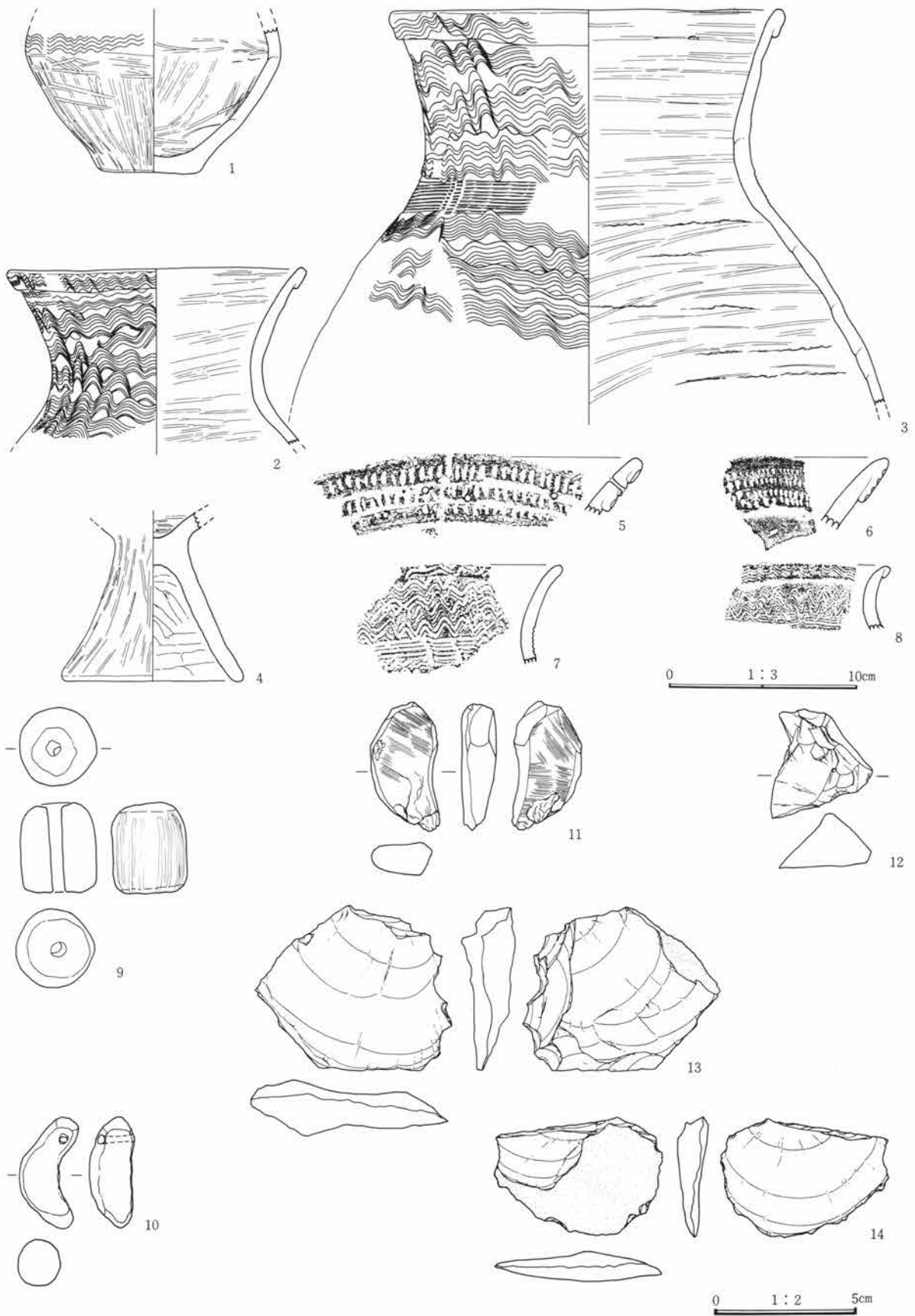
249号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
5	壺	口 26	3段口縁	径2mmの補修孔が3か所に見られる。	砂粒多い。	堅緻	鈍黄橙色	18%
6	壺		折り返し口縁	外 口縁部は刻み目。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	鈍褐色	7%
7	甕	口 14		外 頸部は等間隔止め簾状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	暗灰黄色	14%
8	台付甕	口 12	折り返し口縁	外 頸部は櫛描直線文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	14%



第91図 249号住居

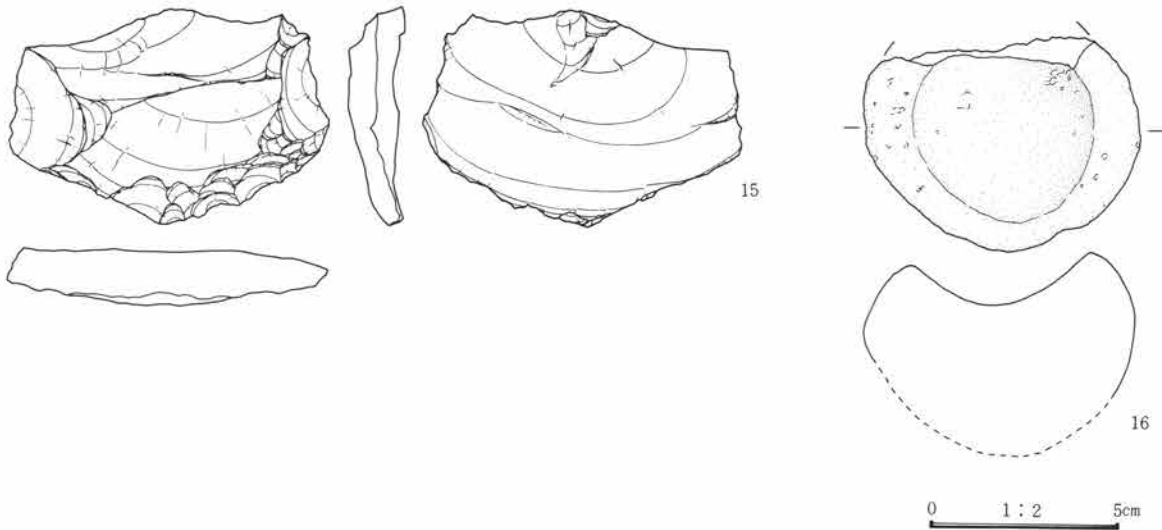
6 検出した遺構・遺物



第92図 249号住居出土遺物(1)



## (2) 弥生時代後期の住居跡



第93図 249号住居出土遺物(2)

## 249号住居出土土製品・玉類観察表 PL.105

遺物番号	名称	長さ	径、厚さ	形状、成形、整形	色調	材質	備考
9	土 錘	3.2	2.7	円筒形を呈し、両端面は丸みを持っている。器面にはヘラミガキを施している。	鈍橙色	土製	完形
11	勾玉未製品	4.4	1.2	成形段階の未製品、孔はなし。器面には研磨面の稜線や粗い研磨痕が明瞭である。尾部に打撃痕が認められる。	明緑灰色	ケイ質変質岩	完形
12	勾玉原材	3.8	1.9	不整形な、三角錐状の剝片。表面は不規則な剝離面で、一部自然面とみられる風化面あり。11番の勾玉未製品と同一原石。	明緑灰色	ケイ質変質岩	

## 249号住居出土土製品観察表 PL.105

遺物番号	名称	長さ	幅	厚さ	孔径	形状、成形	整形	色調	備考
10	土製勾玉	3.8	1.5	1.5	0.3	断面は円い。胴部が太い。	器面全体にナデ。	鈍橙色	完形

## 249号住居出土石器観察表 PL.105

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
13	刃 器	5.7×7.0×1.9	黒色頁岩	54.8	側面に自然面が残っている剝片。二次調整痕は認められない。一側縁が鋭利であり、ここを刃部としている。
14	刃 器	4.0×6.0×1.1	黒色頁岩	20.4	小さな横長剝片で片面に自然面を残す。刃部は半円状に認められる。刃部には細かい剝離使用痕が認められる。
15	刃 器	5.7×8.6×1.5	黒色頁岩	60.2	横長剝片の両面に二次剝離調整を加えている。刃部は弧状に、片面剝離により、作出している。
16	くぼみ石	7.3×5.7×5.2(±)	粗粒安山岩	139.1	多孔質な円礫の片面にすり鉢状のくぼみを作っている。くぼみの面は磨った状態で、敲打による凹凸は見られない。

## 250号住居(第94図、PL.28)

位置 45-H33に位置する。

形状、規模、方位 隅丸長方形を呈する。コーナー部の丸味は一律ではない。規模は長軸5.5m、短軸4.2m。方位はN-90°。

周壁、壁溝 壁土は灰白色土(第V層)。周壁の高さは15cm前後で良好に検出する。壁溝は認められない。

6 検出した遺構・遺物

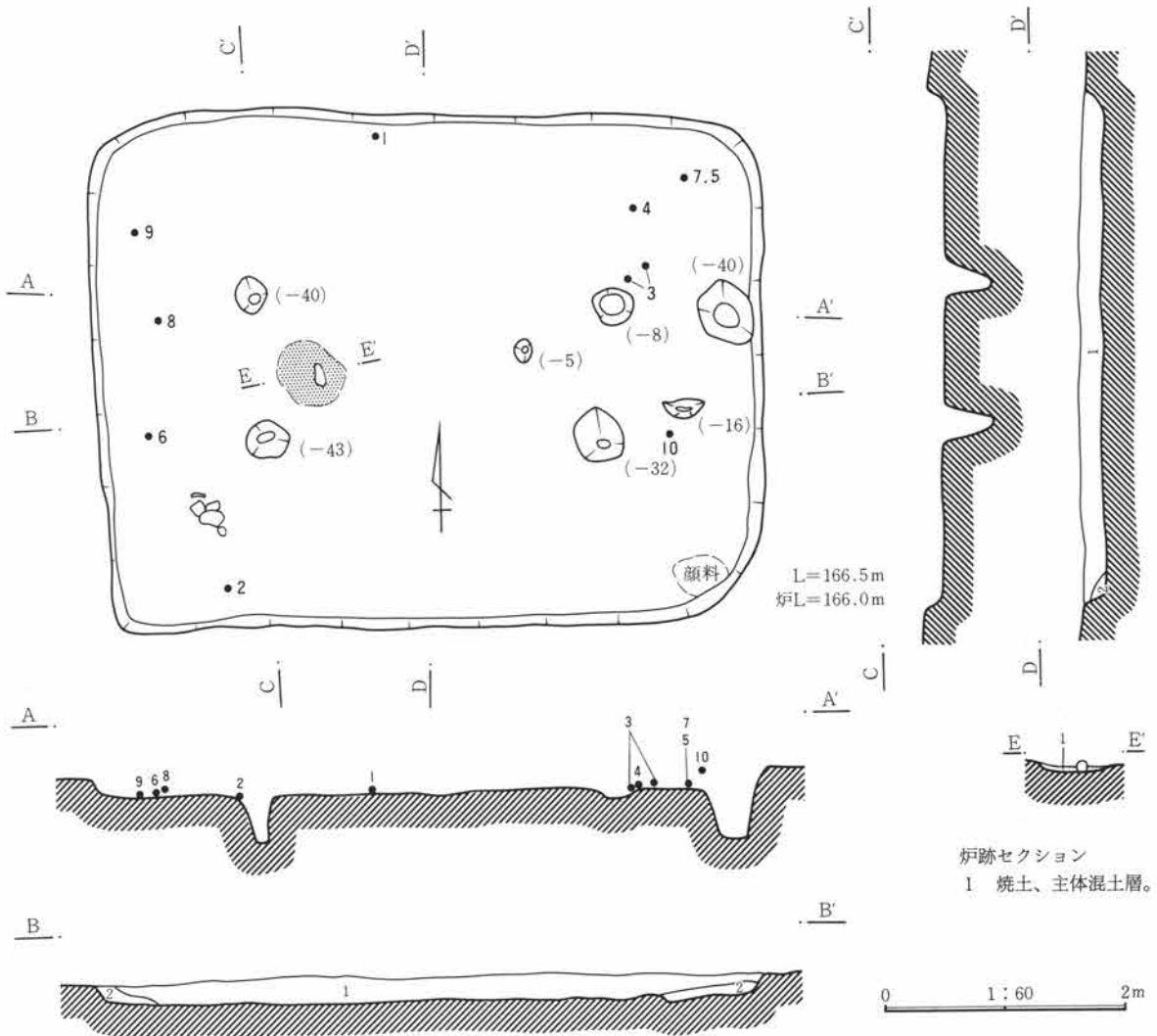
**支柱穴、その他ピット** 支柱は4本構造。深さ30cm前後、円形ピットを4か所で明瞭に検出する。東側周壁際に径50cm、深さ40cmの断面が整った逆円錐台形の円形ピットが検出されるが、出土遺物は土器破片のみ。貯蔵穴の可能性はある。また東周壁と支柱穴の間に長円形の小ピットを認めるが、これは出入部の施設に関わるピットと思われる。

**床面** 床面は灰白色土で平坦に踏み固められている。

**炉跡** 中軸線上西奥側支柱よりもやや中央寄りに地床炉が設けられている。円形焼土帯が生成し炉内には長さ20cm程の細長い円礫が据えられている。

**遺物出土状態** 床面上より弥生土器完形個体、大形破片が多数出土する。東南コーナー部に赤色顔料が床面に水溜り様に検出された。

**時期** 弥生後期第1期。

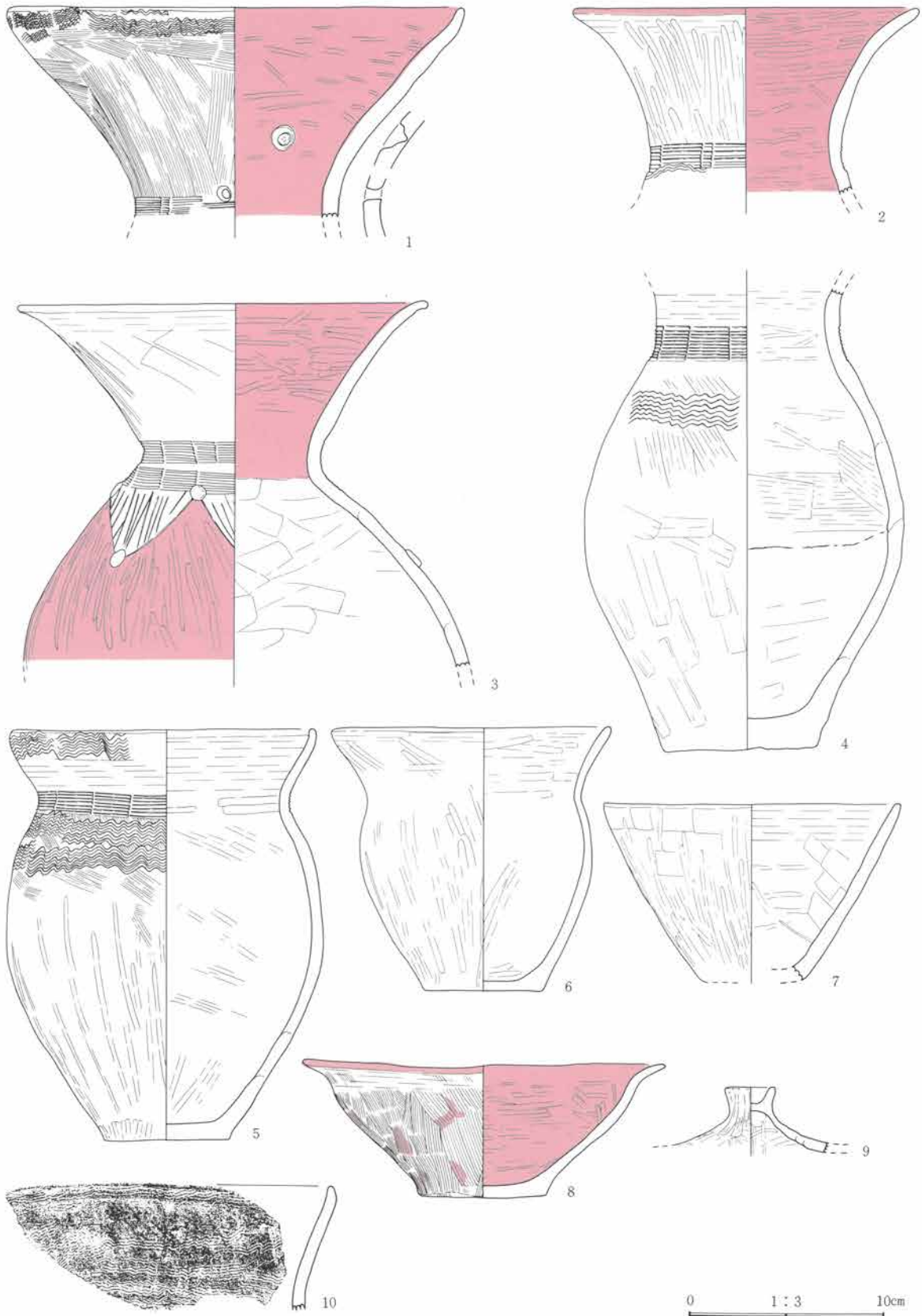


B・Dセクション

- 1 暗褐色 粘質。
- 2 暗褐色 青灰色シルトを含む。

第94図 250号住居

(2) 弥生時代後期の住居跡



第95図 250号住居出土遺物

6 検出した遺構・遺物

250号住居出土土器観察表 PL.106

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 23.0	受け口状口縁、頸部に1個円孔あり、2孔は貫通せず。	外 口縁部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ、丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	口縁～頸部 ほぼ全周
2	壺	口 17.5		外 頸部は2連止め簾状文、胴上部は波状文。 内 ヘラミガキ、丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
3	壺	口 20.8 胴 22.5		外 頸部は等間隔止め簾状文を2段、肩部はヘラ沈線鋸歯文、斜行沈線充填、付文、以下ヘラミガキ、丹彩。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はヘラナデ、丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
4	壺	胴 16.1 底 7.5		外 口縁部はヨコナデ、頸部は等間隔止め簾状文、胴上部は波状文、1段。 内 口縁～頸部ヨコナデ、ヘラミガキ、胴部はハケメ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、灰白色	頸～底部 $\frac{3}{4}$ 周
5	甕	口 15.2 高 20.5	受け口状口縁。	外 口縁部は波状文、頸部は等間隔止め簾状文、胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 スス付着
6	甕	口 14.0 高 13.2		外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	小礫を少量含む。 堅緻、暗赤褐色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周 スス付着
7	鉢	口 15.0	口縁部は角ばる。	外 ヘラケズリ、ヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラケズリ、ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、灰褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
8	鉢	口 18.3 高 6.4	口縁部はやや歪みがある。	外 口縁部はヨコナデ、以下ハケメ、丹付着。 内 ヘラミガキ、丹彩。	砂粒を含む。 やや軟弱、赤色	ほぼ完形
9	蓋	ツマミ径 2.4		外 ヘラナデ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	縁部欠損

250号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
10	甕	口 20	口縁短く内折。	外 波状文。内 ヘラナデ。	細砂粒を含む。	堅緻	褐灰色	21%

251号住居 (第96図、PL. 28)

位置 44-H35に位置する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。規模は長軸4.8m、短軸3.9m。方位はN-23°-W。

周壁、壁溝 壁土は灰褐色土。検出状態は良好で、壁高は60cmに達する。壁溝は認められない。

支柱穴 中軸線上に径30cm前後のピットを検出する。また周壁下コーナー部に小ピットを検出する。これらが支柱穴、または支柱穴になると思われる。中軸線上の2個のピットは深さ50cm以上である。支柱穴は2本構造と思われる。

床面 床面は灰褐色土で平坦に踏み固められている。

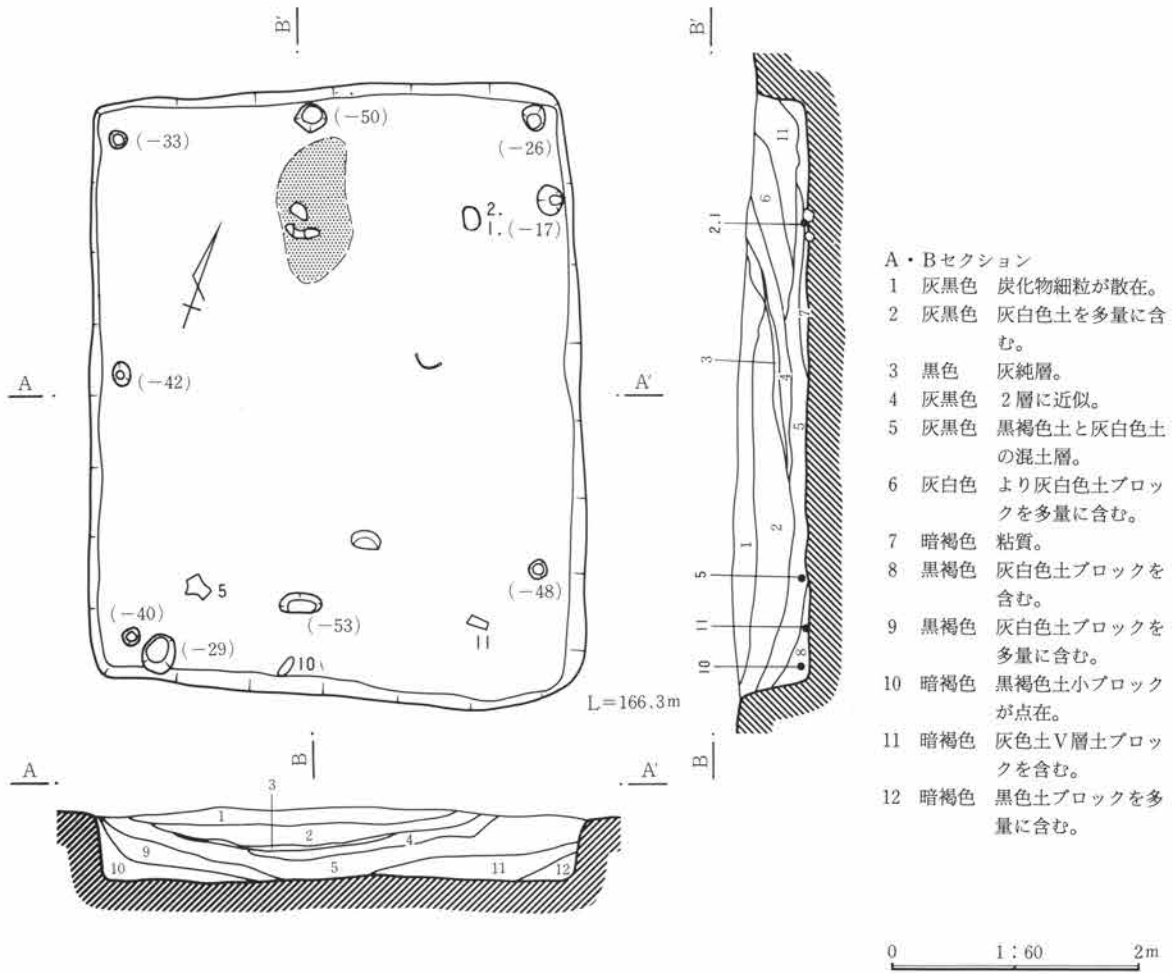
炉跡 中軸線上北周壁から1m程に地床炉を設けている。炉内には長さ30cm程の長細い円礫を据え、浅い円形掘り方を伴う。

覆土 覆土の堆積状況は典型的なレンズ状堆積で、自然埋没によったことを示している。埋没途上で黒色灰の投棄が行われている。

遺物出土状態 床面上、覆土中より弥生土器大形破片が出土している。

時期 弥生後期第3期。

(2) 弥生時代後期の住居跡



第96図 251号住居

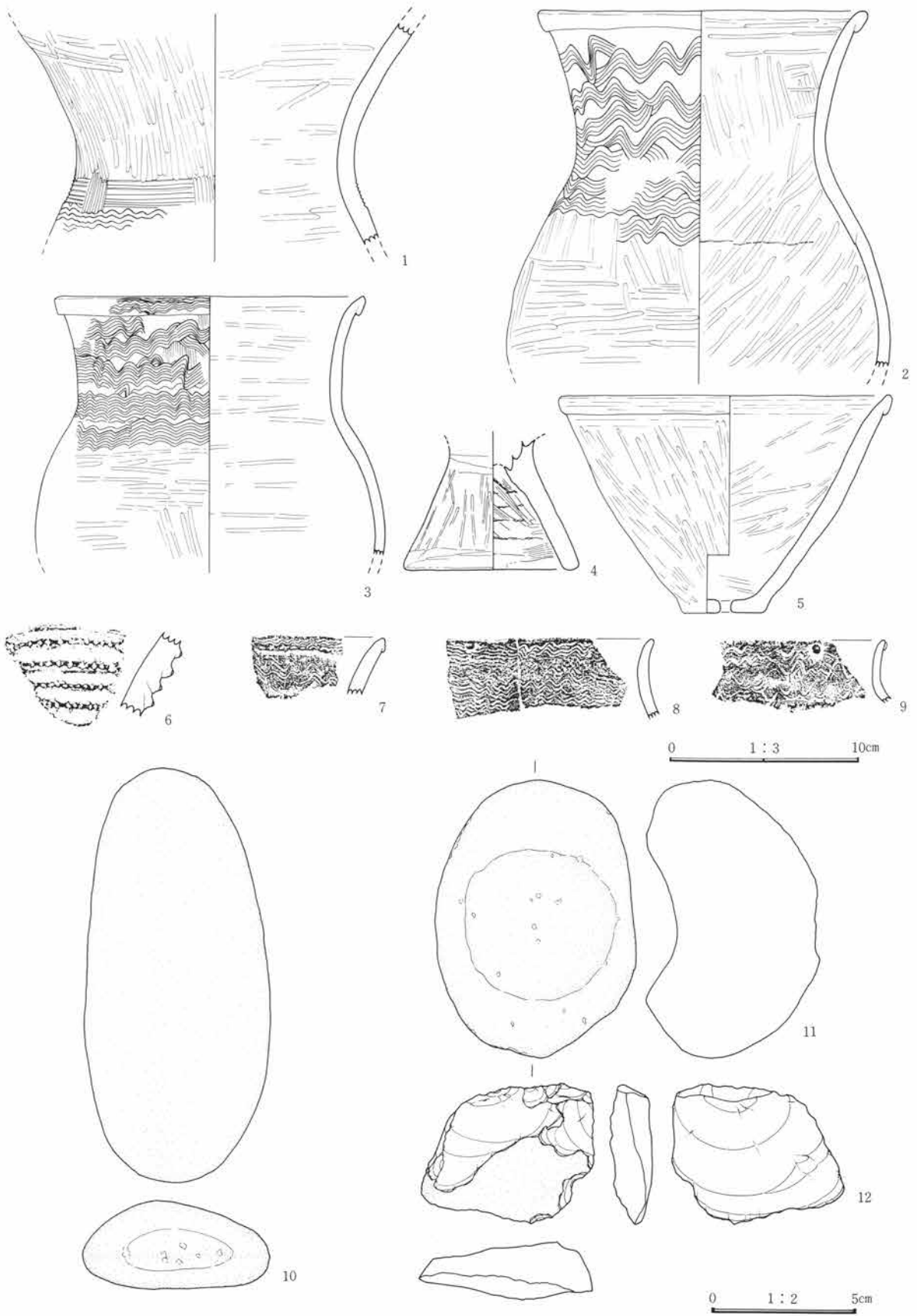
251号住居出土土器観察表 PL.106

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	頸 14.8		外 頸部は楕横直線に縦直線、肩部は波状文。 内 ヘラミガキ、荒れている。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口辺～肩部迄周
2	甕	口 17.2 胴 20.0	折り返し口縁。	外 口辺～肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を多量に含む。 堅緻、黒褐色	口縁～胴上部迄周
3	甕	口 16.1 胴 18.2	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、暗赤褐色	口縁～胴部迄周
4	台付甕(?)	脚 8.9		外 ヘラミガキ。 内 ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	脚部全周
5	甕	口 17.4 高 11.2	折り返し口縁。	外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、灰褐色	口縁部迄周

251号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
6	壺		多段口縁	外 口縁部は刻み目。内 ヘラミガキ。	砂粒多い。	堅緻	橙色	8%
7	甕		折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	灰赤褐色	9%
8	甕	口 12		外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	鈍赤褐色	20%
9	台付甕	口 11		外 波状文、付文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	鈍赤褐色	16%

6 検出した遺構・遺物



第97図 251号住居出土遺物

251号住居出土石器観察表 PL. 106

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
10	磨石	14.4×6.5×3.2	粗粒安山岩	420.7	細長の自然石の先端にやや摩滅した痕跡がある。
11	くぼみ石	9.6×7.0×6.0	粗粒安山岩	412.2	多孔質の円礫の両面にくぼみを作っている。一方がすり鉢状で大きく、面は磨った状態で、敲打による凹凸はない。
12	刃器	4.8×6.0×2.0	黒色安山岩	43.1	片面に自然面を残す菱形の剝片で、2辺に刃部を作っている。

## 252号住居(第99図、PL. 29)

位置 45-H22に位置する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。南辺部は調査区境のため明確に検出できなかった。規模は長軸約6.9m、短軸4.6m。方位はN-10°-W。

周壁、壁溝 壁土は灰白色でやや砂質。東南コーナー部は周壁を明確に検出できない。他の3辺は壁高20cm程で良好に検出する。壁溝は認められない。

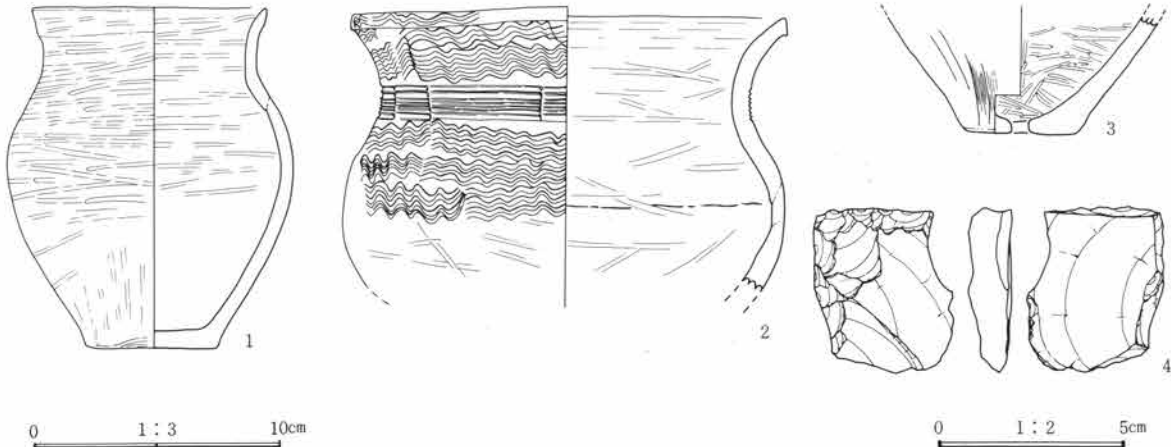
主柱穴 主柱は4本構造。3か所で深さ50~70cmの主柱穴を良好に検出する。東南部のピットは不明確。ピットは浅く位置的にややはずれている。

床面 床面は灰白色土(第V層)。

炉跡 北奥2主柱穴と周壁の間及び、東側2主柱間の2か所に地床炉を設けている。北側の炉跡と周壁との間は80cm程に近接し、この間には灰層の広がり著しい。両炉跡とも焼土、灰を充填する浅い掘り方を伴う。

遺物出土状態 出土遺物は少ない。床面上より弥生土器破片が出土する。

時期 弥生後期第3期。



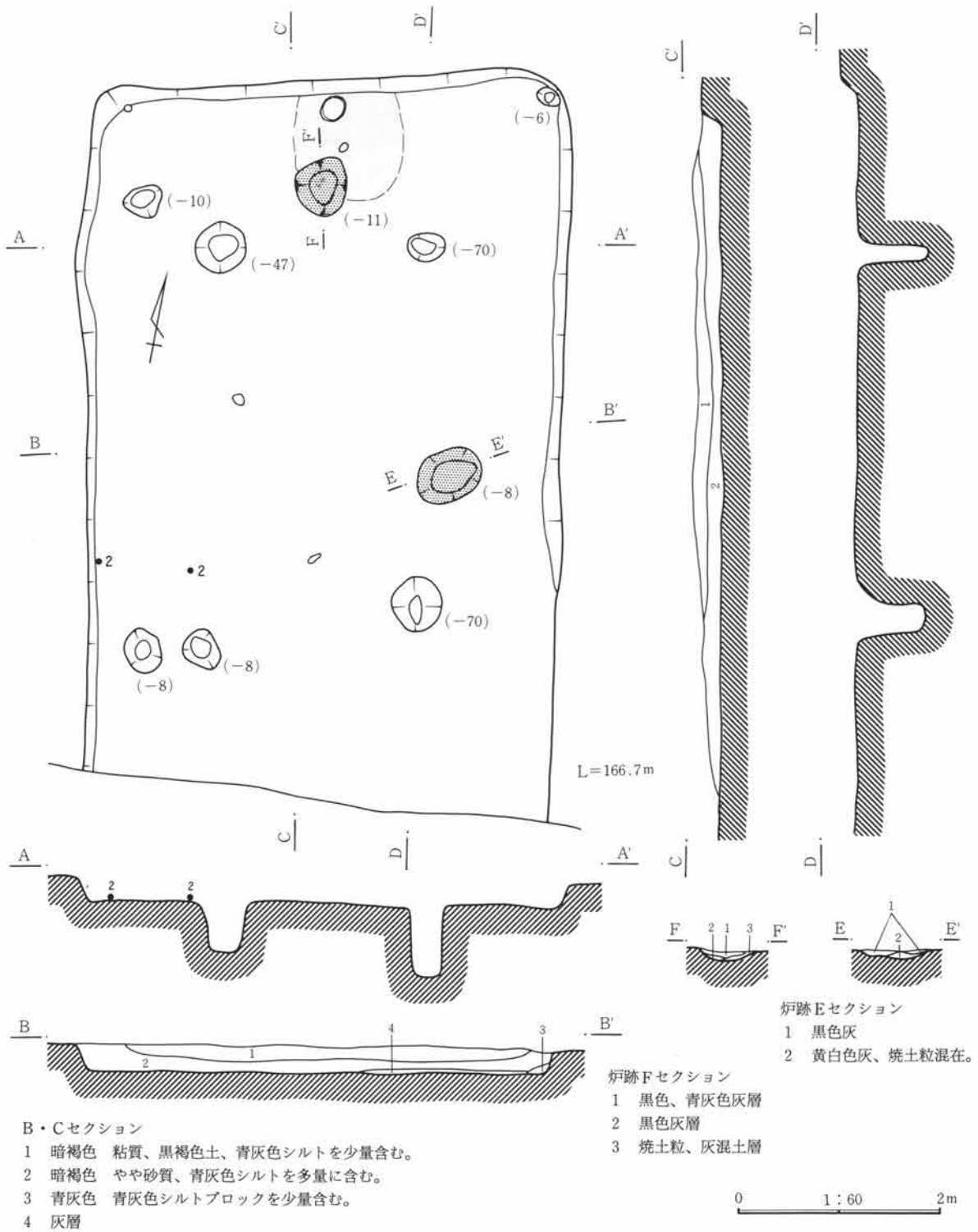
第98図 252号住居出土遺物

252号住居出土土器観察表 PL. 107

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 9.3 高 13.5		外 ヘラミガキ、荒れている。 内 ヘラミガキ、荒れている。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、赤橙色	口縁~底部1/4周
2	台付甕	口 17.4 胴 17.8	口縁端部は鋭く角ばる。	外 口縁~胴上部は波状文、頸部は等間隔止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁部1/4周 頸~胴部1/4周
3	甕	底 4.5 孔 0.7		外 ハケメ、器面は荒れている。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 軟弱、橙色	胴下部1/4周 底部全周



6 検出した遺構・遺物



第99図 252号住居

252号住居出土石器観察表 PL. 107

遺物番号	名称	計測値 (縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
4	刃器	4.3×3.7×1.2	黒色安山岩	21.0	横長剥片で、刃部は二次調整が加えられていない外湾状の小部分で、剥離使用痕が認められる。

## 253号住居 (第101図、PL. 29)

**位置** 40-H24に位置する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。コーナー部は比較的角ばっている。規模は長軸8.4m、短軸5.6m。方位はN-62°-W。

**周壁、壁溝** 壁土は灰色(第V層)。崩落が著しいが、検出状態は良好。壁高は50cmを検出している。壁溝は認められない。

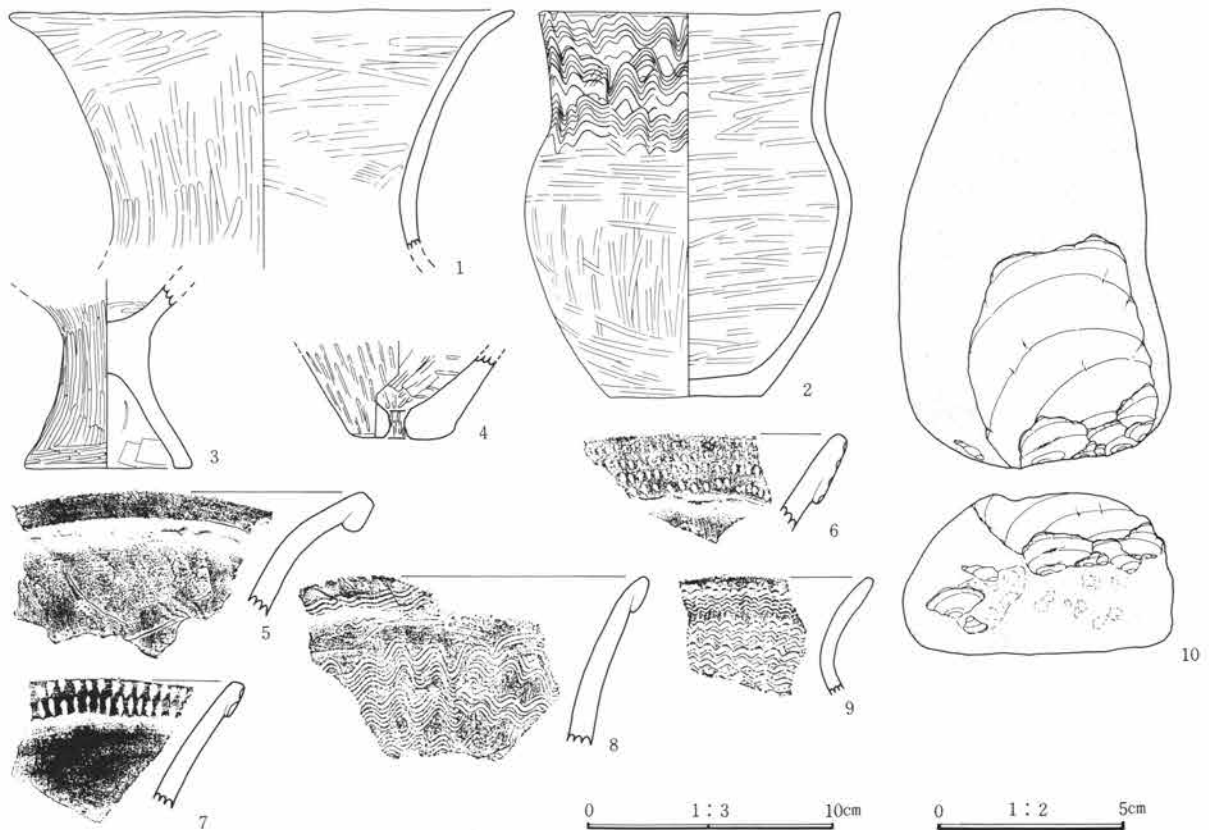
**支柱穴** 支柱は4本構造。1か所、東部の支柱穴内には幅3cm程の柱材の残欠が遺存する。各支柱穴は長径80cm前後で比較的大規模である。

**床面** 床面は灰色土で平坦に踏み固めている。

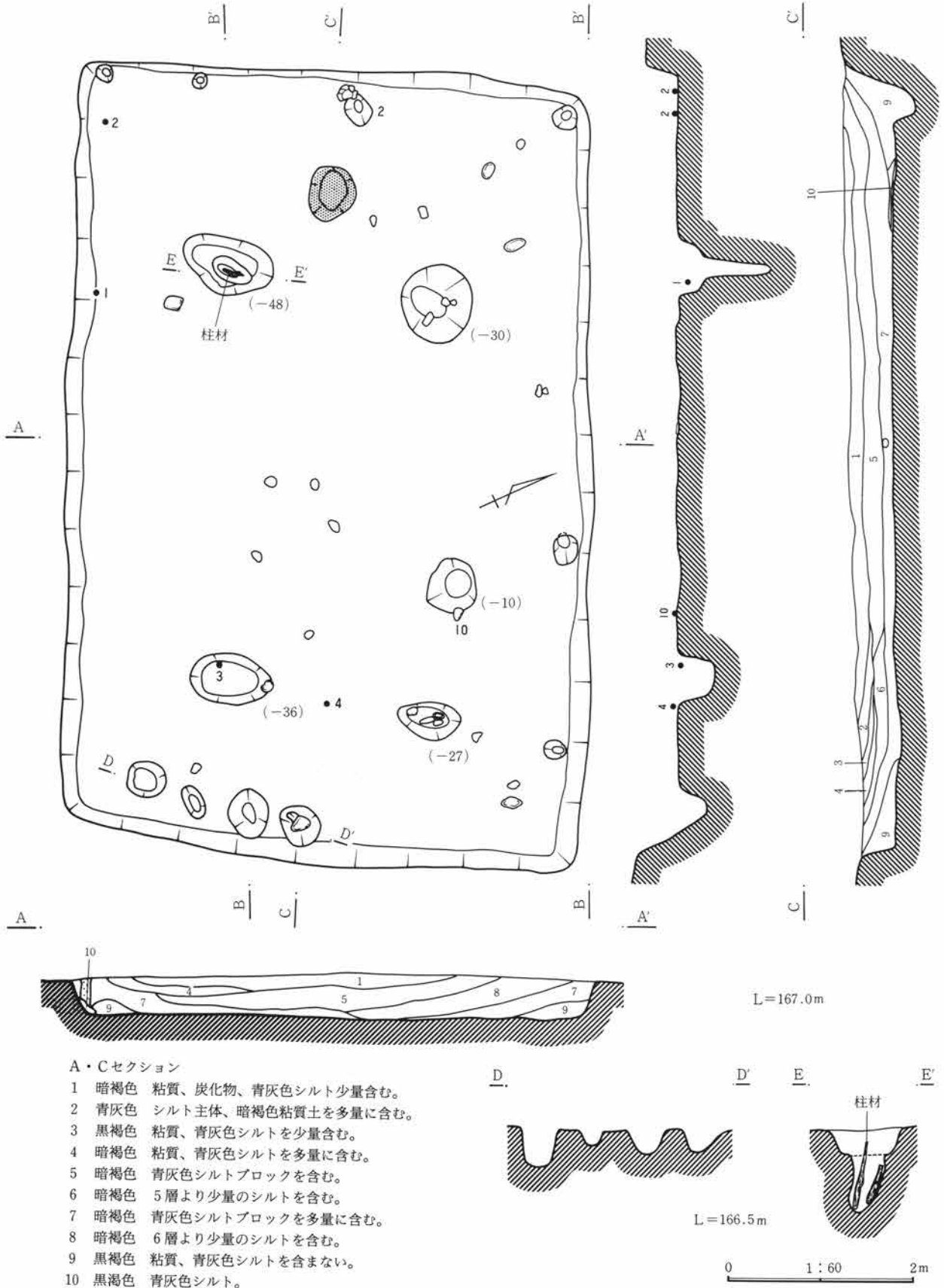
**炉跡** 北西奥2支柱穴と周壁の間に地床炉を設けている。

**遺物出土状態** 床面直上～床面上10cmの覆土中に弥生土器破片が多数出土する。

**時期** 弥生後期第3期。



第100図 253号住居出土遺物



第101図 253号住居

## (2) 弥生時代後期の住居跡

253号住居出土土器観察表 PL. 107

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 20.0		外 ヘラミガキ。 内 ハケメ後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～頸部全周 スス付着
2	甕	口 12.0 高 15.2		外 口縁～頸部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、暗赤褐色	口縁～底部全周
3	高 坏	脚 6.7		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はヘラケズリ、ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	脚部全周
4	甕	底 3.4 孔 0.7		外 ヘラミガキ。 内 ナデ、ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	胴下～底部全周

253号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
5	壺	口 24	折り返し口縁	外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	14%
6	壺		折り返し口縁	外 口縁部は刺突。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	褐色	8%
7	壺		折り返し口縁	外 口縁部は刻み目。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	明褐色	8%
8	甕	口 18	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	鈍赤褐色	20%
9	甕			外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	暗赤褐色	8%

253号住居出土石器観察表 PL. 107

遺物番号	名称	計測値 (縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
10	磨石	12.0×7.2×4.3	黒色頁岩	525.0	細長の円礫の一部分に大小の剝離調整を作っている。端部に摩減面が認められる。

## 254号住居 (第102図、PL. 30)

**位置** 40-H30に位置する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。北西の辺が南東辺よりも60cm長く、やや台形。規模は長軸7.5m、短軸5.7m。方位はN-44°-W。

**周壁、壁溝** 壁土は青灰色シルト質土。検出状態は良好。壁溝は認められない。

**主柱穴** 主柱は4本構造。4か所で深さ70cm前後の円形ピットを良好に検出する。このほか周壁下に円形小ピット列が認められる。東南周壁際には1対の長円形ピットが見られるが、出入部に伴う施設に関わると思われる。

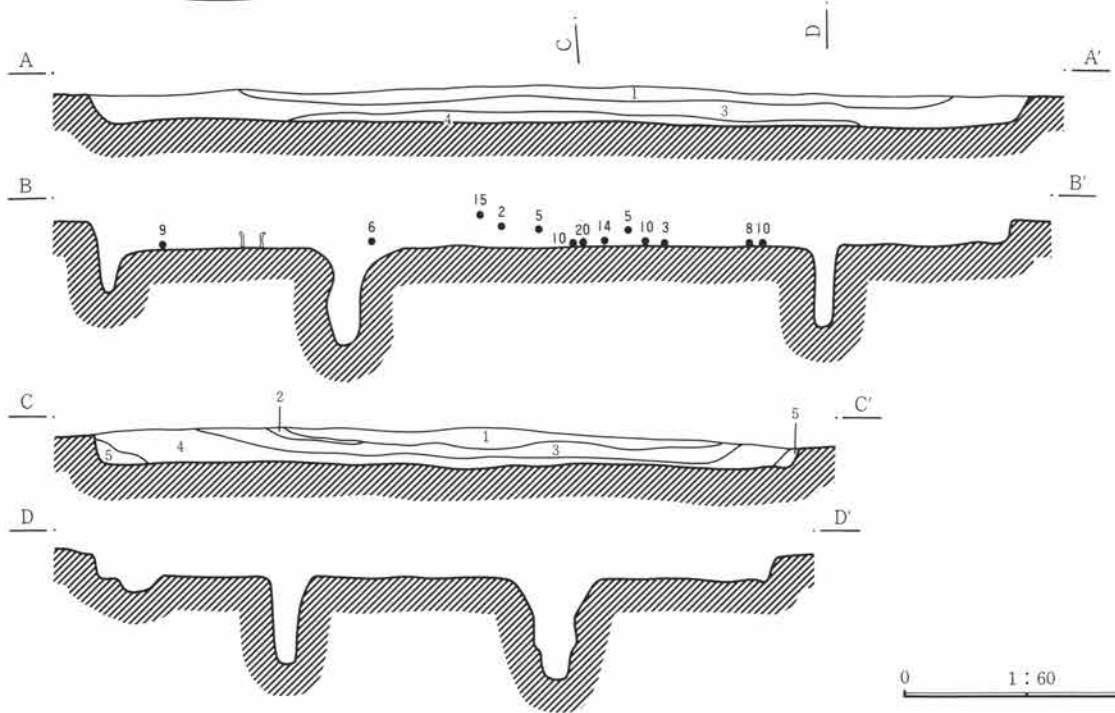
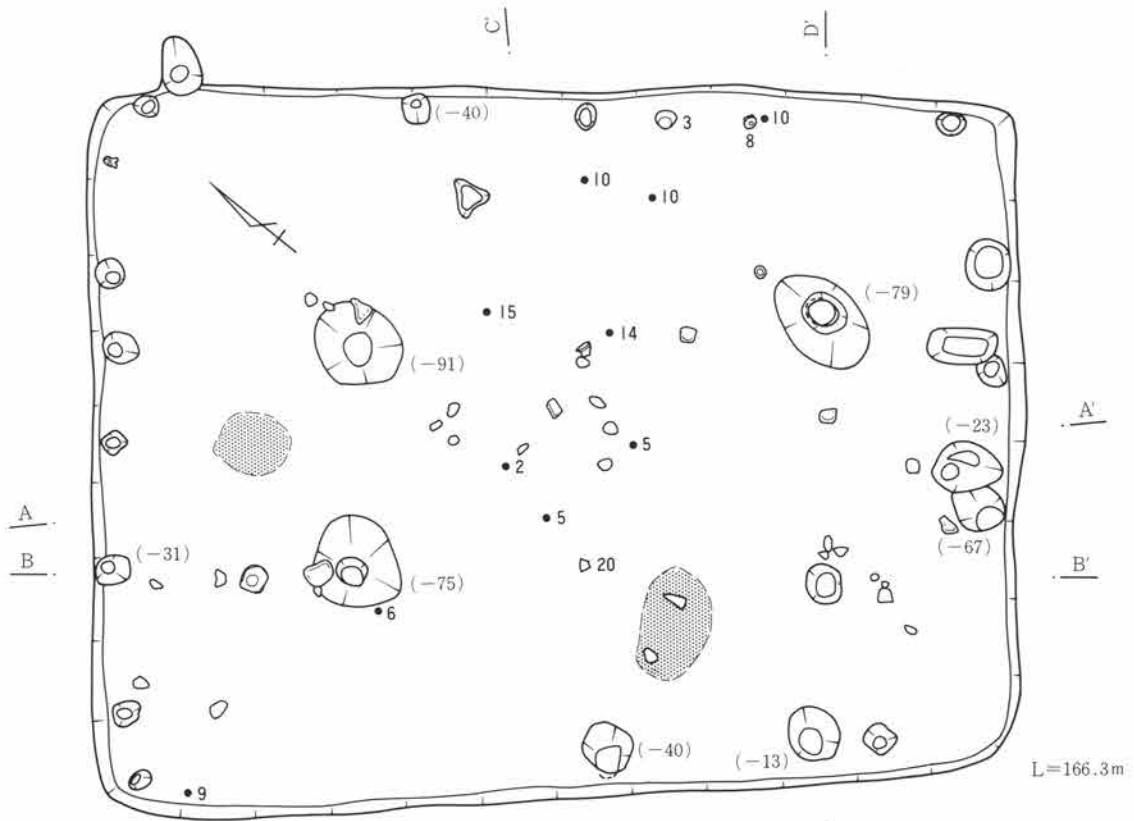
**床面** 床面は青灰色シルト質土。

**炉跡** 北西奥2主柱穴と周壁の間、及び南西側2主柱穴間の2か所に地床炉を設けている。両炉跡とも浅い掘り方ピットを伴い焼土帯が生成されている。後者の炉の中には長さ20cm程の長細い円礫が据えられている。炉中灰層内には焼けた獣骨片が多数認められる。

**遺物出土状態** 床面～覆土下部に弥生土器大形破片が多数出土している。

**時期** 弥生後期第3期。

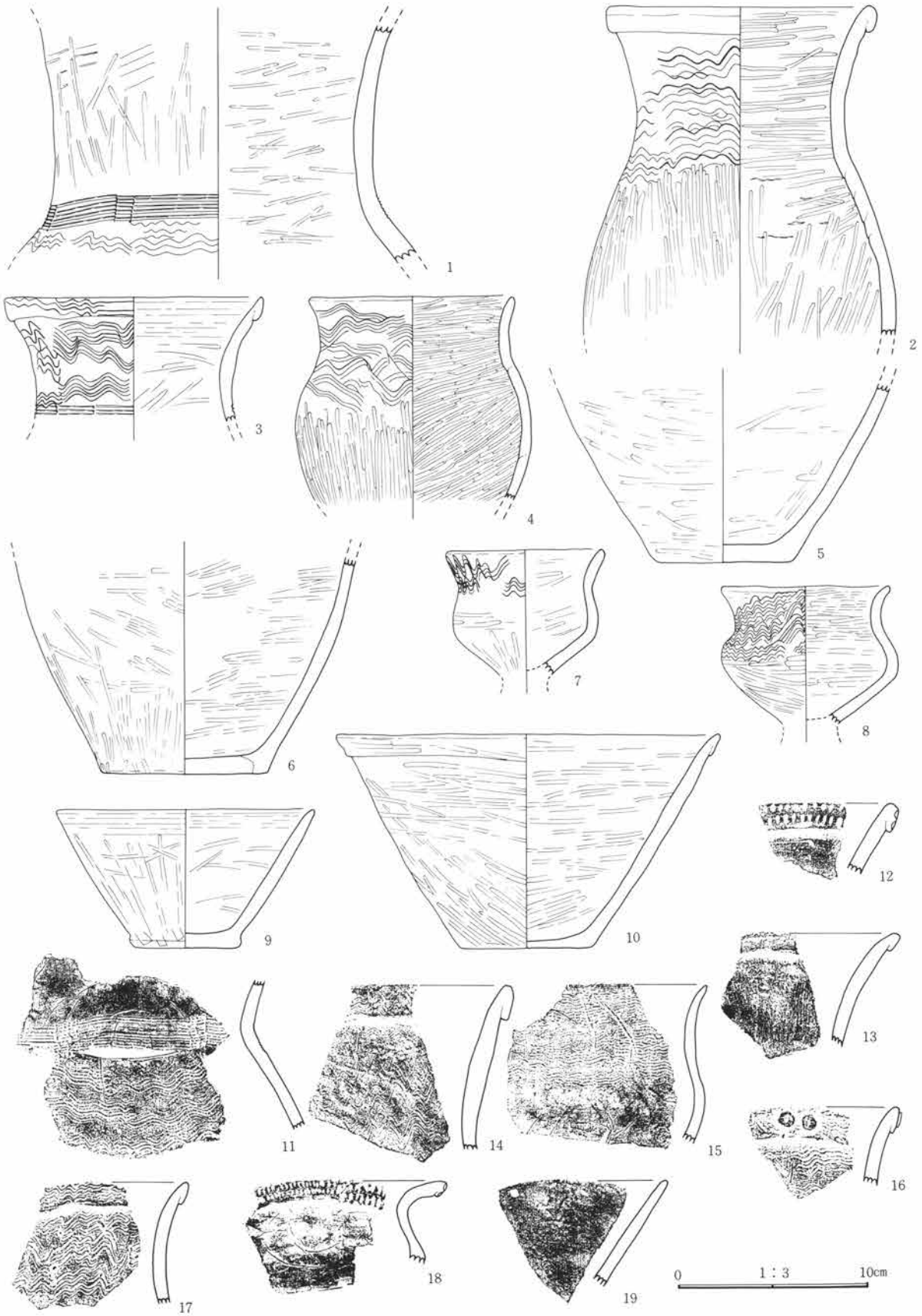
6 検出した遺構・遺物



A・Cセクション

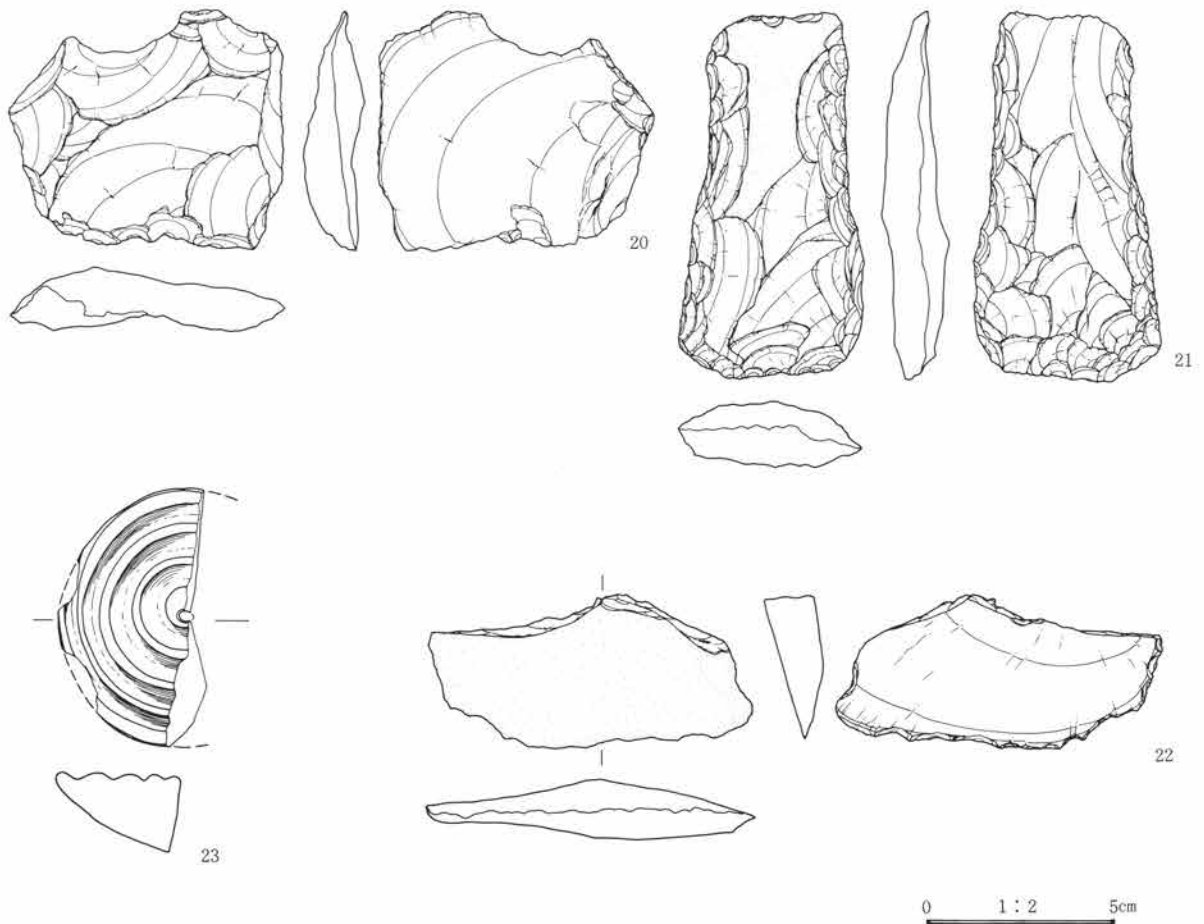
- 1 暗褐色 粘質、炭化物を少量含む。
- 2 灰層
- 3 暗褐色 粘質、青灰色シルトを多量に含む。
- 4 暗褐色 粘質、青灰色シルトを少量に含む。
- 5 暗褐色 粘質土と青灰色シルトの混土層。

第102図 254号住居



第103図 254号住居出土遺物(1)

6 検出した遺構・遺物



第104図 254号住居出土遺物（2）

254号住居出土土器観察表 PL.107

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	頸 16.8		外 口辺部はヘラナデ、頸部は2連止め簾状文。 内 口辺～頸部はヘラミガキ、内面は荒れている。	砂粒を含む。 やや軟弱、鈍橙色	口辺～頸部全周
2	甕	口 14.0 胴 16.2	折り返し口縁。	外 口縁部はヨコナデ、口辺～頸部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
3	甕	口 13.3	折り返し口縁。	外 口縁～頸部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	口縁～頸部全周
4	甕	口 10.5 胴 12.2		外 口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	口縁～胴部全周 スス付着
5	甕	底 7.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	胴下～底部 $\frac{1}{2}$ 周
6	甕	底 8.5		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	胴下～底部 $\frac{1}{2}$ 周
7	台付甕	口 8.0 胴 7.6		外 口縁～頸部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、暗褐色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
8	台付甕	口 8.6 胴 9.2		外 口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、灰褐色	口縁～胴部全周
9	鉢	口 13.4 高 7.1		外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
10	鉢	口 19.9 高 11.0	折り返し口縁。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周



## (2) 弥生時代後期の住居跡

254号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
11	壺			外 頸部は3～4連止め簾状文。	細砂粒を含む。	やや堅緻	鈍橙色	22%
12	壺		折り返し口縁	外 口縁部は刺突。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	灰白色	7%
13	甕		折り返し口縁	外 口縁部はヨコナデ。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	やや堅緻	灰白色	8%
14	甕		折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	9%
15	甕	口 8		外 口縁～頸部は波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	19%
16	甕	口 16	折り返し口縁	外 口縁部は2個単位の付文、波状文。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	10%
17	甕		折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	9%
18	高 坏	口 19		外 口縁端部は2段の刻み目、丹彩。内 丹彩。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	10%
19	高 坏	口 15		外 ヘラミガキ、丹彩。内 ヘラミガキ、丹彩。	砂粒を含む。	堅緻	赤色	12%

254号住居出土石器観察表 PL.107

遺物番号	名称	計測値 (縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
20	刃器	6.3×7.5×1.6	粗粒安山岩	54.9	縦長剥片の片側面に二次調整を加え、周縁に鋭利な刃部を作出している。
21	土掘り具	9.7×5.0×1.8	黒色頁岩	88.2	横長の剥片の両面を丹念に剝離整形している。片側に自然面を残している。
22	刃器	4.1×8.7×1.6	黒色頁岩	45.5	片側が自然面の横長剥片で、刃部に小さな剝離が全体に見られる。使用痕の可能性もある。

254号住居出土石製品観察表 PL.107

遺物番号	名称	長さ	厚さ	形状、成形、整形	色調	材質	備考
23	紡錘車	6.9	2.0	片面には断面カマボコ状の浮線が同心円状に巡る。器面は両面とも滑らかに磨かれている。	淡褐灰色	流文岩質 凝灰岩	片半部欠損

## 255号住居 (第105図、PL. 31)

位置 35-H30に位置する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。北西コーナー部は隅丸状を呈するが、大小のピットが集中しているためやや不明確である。規模は長軸8.2m、短軸6.0m。方位はN-13°-W。

周壁、壁溝 壁土は灰白色土で、検出状態は良好。部分的に壁溝を検出する。幅15cm、深さは5cm前後である。

支柱穴 支柱は4本構造。支柱穴は深さ70～100cmに達するものもあり、総体に深い。南側周壁際に1対の長円形のピットが見られる。出入部の施設に関わるピットと思われる。

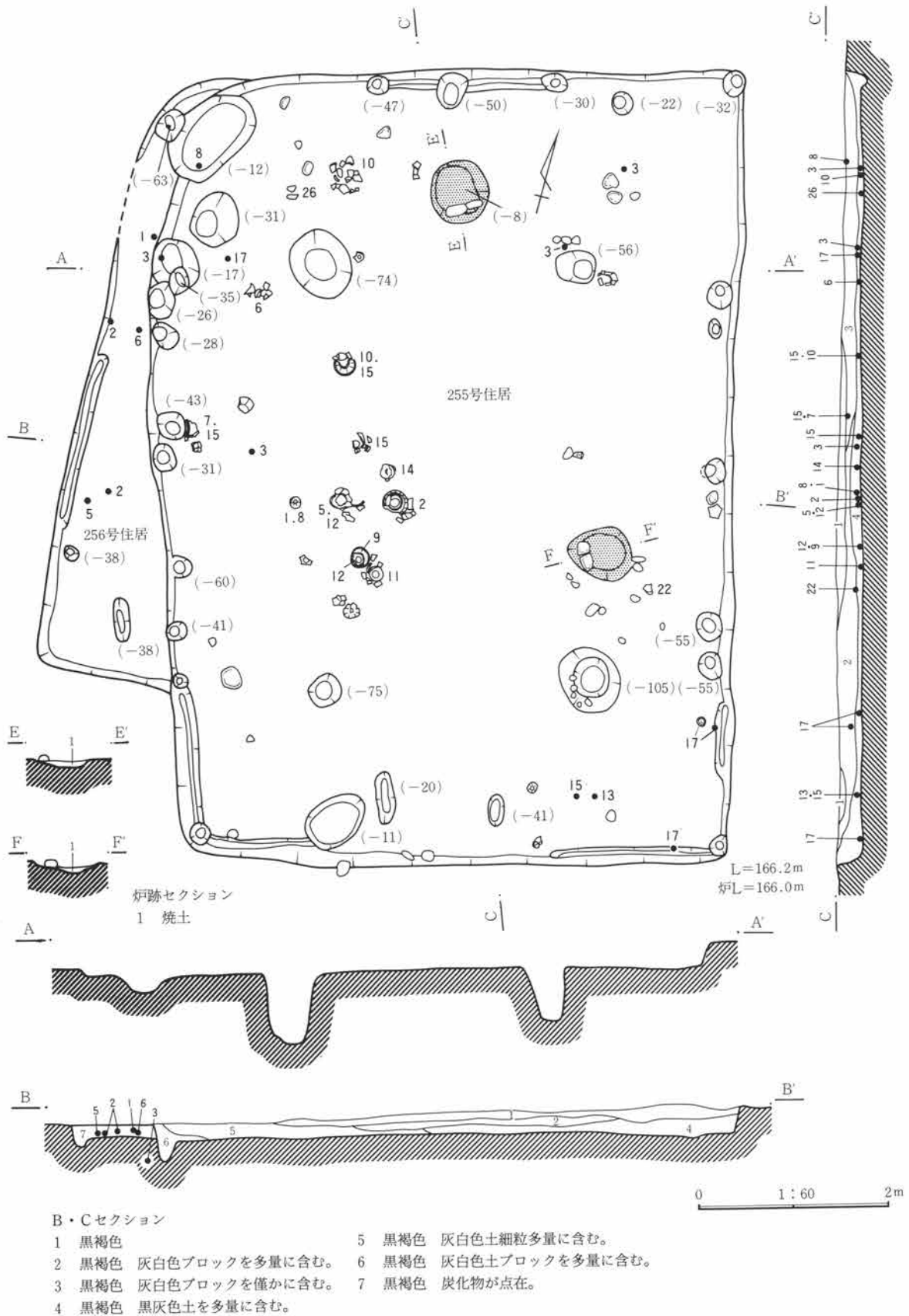
床面 灰白色土面を平坦に踏み固めている。

炉跡 北奥2支柱穴と周壁の間、及び東側2支柱穴間の2か所に地床炉を設ける。両炉跡とも浅い掘り方、長細い円礫を据えている。

遺物出土状態 床面上に弥生土器完形個体、大形破片が多量に出土している。特に土器の上部、または下部を欠き全周する個体が目立つ。

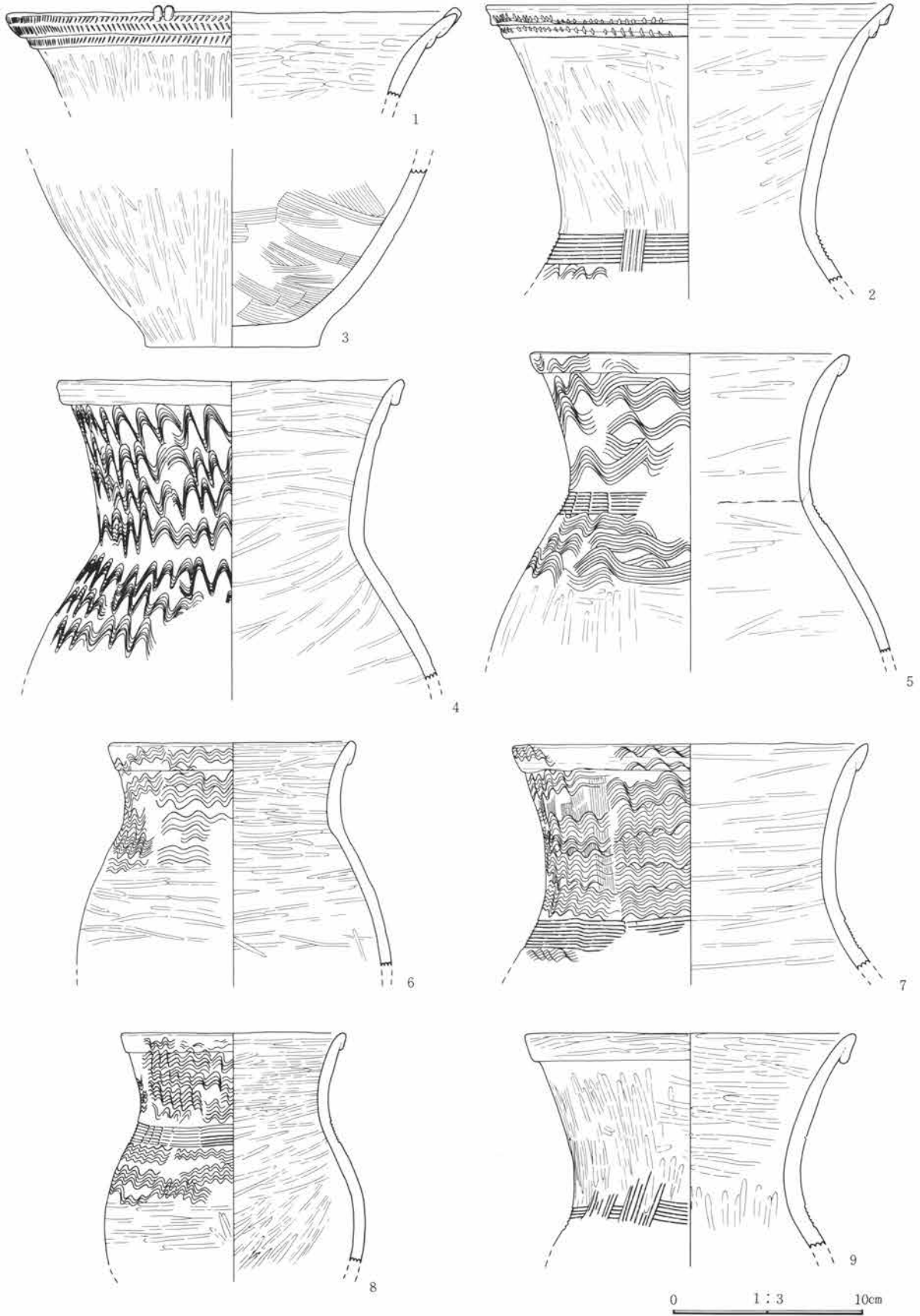
時期 弥生後期第3期。

他の遺構との関係 256号住居と重複する。本住居が256号住居の覆土を切っている。



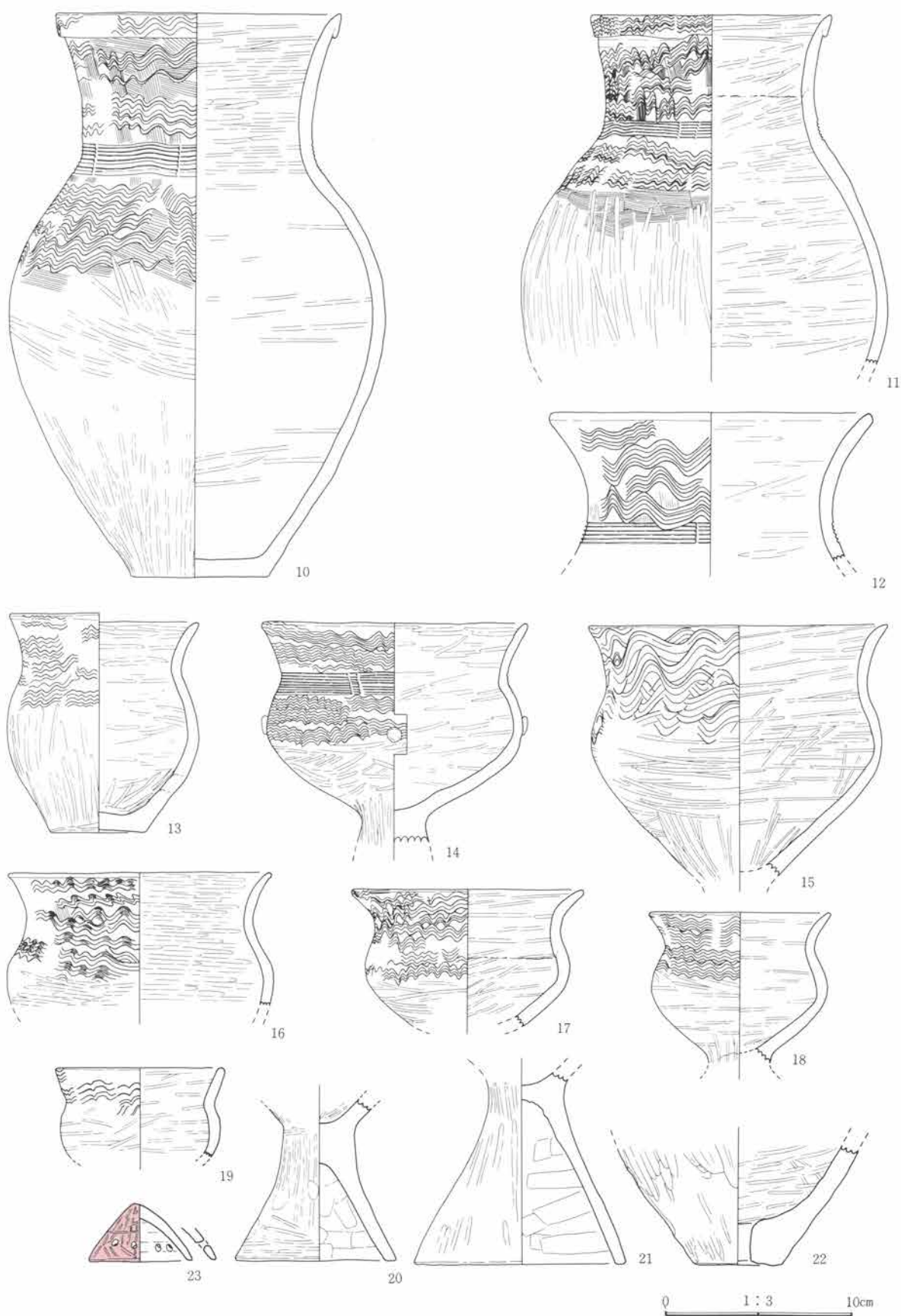
第105図 255号、256号住居

(2) 弥生時代後期の住居跡

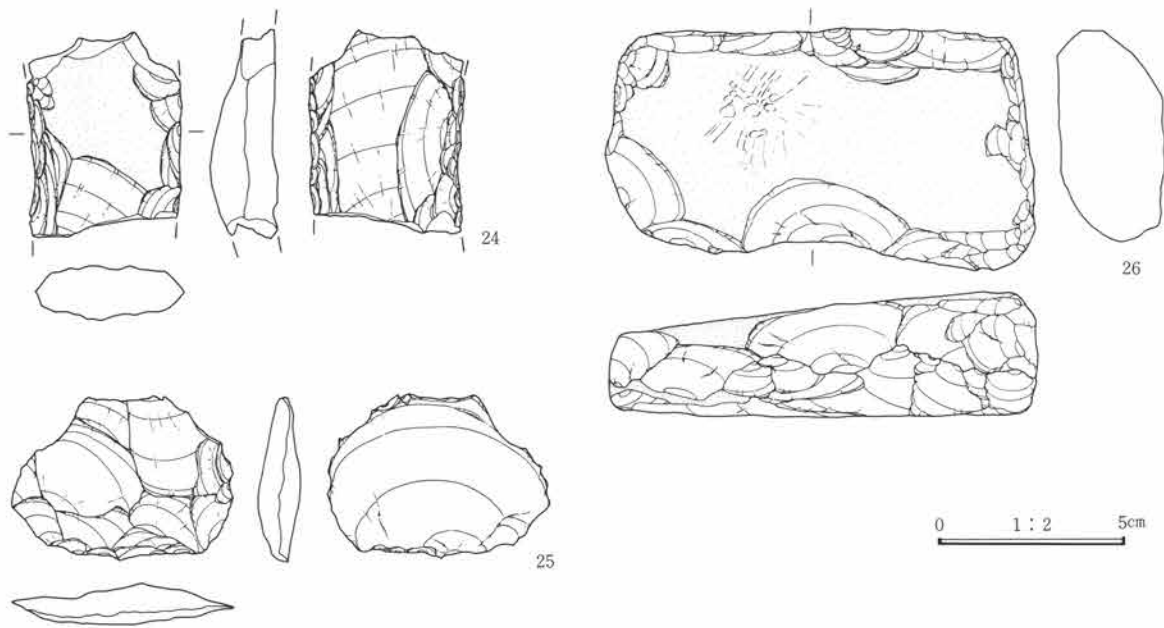


第106図 255号住居出土遺物(1)

6 検出した遺構・遺物



第107図 255号住居出土遺物(2)



第108図 255号住居出土遺物(3)

255号住居出土土器観察表 PL.108・109

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 23.3	2段の折り返し口縁。	外 口縁部は3段の刻み目文、端部に付文。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	砂粒を含む。 頸部、鈍橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
2	壺	口 21.3	2段の折り返し口縁。	外 口縁部は2段の刻み目文、頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文。 内 口縁部はヨコナデ、口縁～頸部はヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁部 $\frac{2}{3}$ 周 頸部全周
3	壺	底 9.1		外 ヘラミガキ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、明褐色	胴下～底部全周
4	甕	口 17.8	折り返し口縁。	外 口縁部はヨコナデ、口辺～胴上部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～胴上部全周
5	甕	口 16.3	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～胴部全周 胴部スス付着
6	甕	口 13.0 胴 16.4	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、褐色	口縁～胴部 $\frac{2}{3}$ 周
7	甕	口 18.4	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
8	甕	口 11.6 胴 13.6	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、暗赤褐色	口縁～胴部 $\frac{2}{3}$ 周
9	甕	口 17.0	折り返し口縁。	外 口縁～頸部はヘラミガキ、頸部は櫛描横直線に縦直線。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明褐色	口縁～頸部全周
10	甕	口 15.0 高 29.4	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は間隔の長い等間隔止め簾状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明褐色	口縁 $\frac{1}{2}$ 周
11	甕	口 12.6 胴 19.3	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁～胴部全周
12	甕	口 16.8	口縁端部に面を作る。	外 口縁～頸部は波状文、頸部は簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～頸部 $\frac{2}{3}$ 周
13	甕	口 10.0 高 11.4		外 口縁～胴上部は波状文、胴部はヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	胴下～底部全周
14	台付甕	口 14.0 胴 13.5		外 口縁～胴上部は波状文、頸部は3連止め簾状文、胴部に付文4個。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、褐色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周

6 検出した遺構・遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
15	台付甕	口 15.8 胴 15.3		外 口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
16	台付甕	口 13.7 胴 14.1		外 口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周 頸～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
17	台付甕	口 12.0 胴 10.8		外 口縁端部、口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明褐色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
18	台付甕	口 9.5 胴 9.3		外 口縁～肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
19	台付甕	口 8.7		外 口縁～頸部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
20	台付甕(?)	脚 8.4		外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍黄褐色	脚部全周
21	高坏(?)	脚 10.8		外 ヘラミガキ。 内 ヘラケズリ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、灰褐色	脚部全周
22	甕	底 4.7 孔 1.1	底部に焼成前の穿孔あり。	外 ヘラケズリ、ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ、孔部は指ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、浅黄褐色	胴下～底部全周
23	蓋	径 5.5 高 2.9	小円孔4個あり。	外 ヘラミガキ、丹彩。 内 ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	完形

255号住居出土石器観察表 PL.109

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
24	土掘り具	5.4(+) $\times$ 4.1 $\times$ 1.9	黒色頁岩	52.9	横長剥片を両面加工している。片側に自然面を残している。基部、刃部を欠損している。
25	刃器	4.4 $\times$ 6.0 $\times$ 1.2	黒色頁岩	22.3	やや横長の剥片の片側に二次剥離調整を加えている。刃部は片側縁に剥離調整を加え弧状に作出している。
26	刃器	6.4 $\times$ 11.6 $\times$ 3.3	黒色頁岩	390.3	長く、偏平な円礫の一側縁に鈍い刃部を作出している。

256号住居 (第105図、PL. 31)

位置 37-H29に位置する。

形状、規模、方位 255号住居に大方を切られていて形状は明確ではない。長軸6.1m、短軸不明。方位はN-0°。

周壁、壁溝 壁土は灰白色土(第V層)西側周壁は良好に検出される。壁溝は部分的に認められる。壁溝は幅15cm、深さ5cm。

支柱穴 255号住居内も精査したが検出できない。

床面 灰白色土面を平坦に踏み固めている。255号住居との床面レベルの差は約10cm。

炉跡 不明。

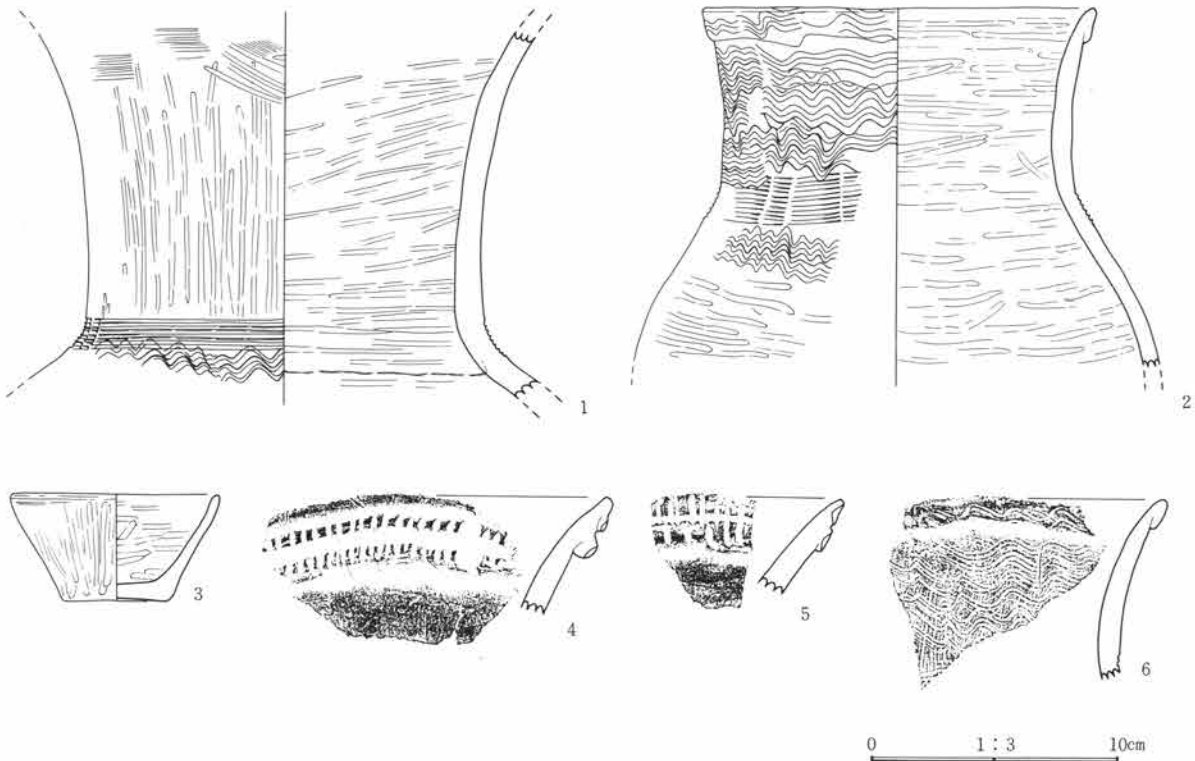
遺物出土状態 床面上より弥生土器大形破片が出土している。

時期 弥生後期第3期。

他の遺構との関係 255号住居が本住居の覆土を切っている。



(2) 弥生時代後期の住居跡



第109図 256号住居出土遺物

256号住居出土土器観察表 PL. 109

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	頸 16.1		外 頸部は2連止め簾状文、肩部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口辺～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
2	甕	口 15.7 胴 21.0	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁～胴上部 $\frac{1}{2}$ 周
3	鉢	口 8.2 高 4.2		外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周

256号住居出土土器観察表 (拓本)

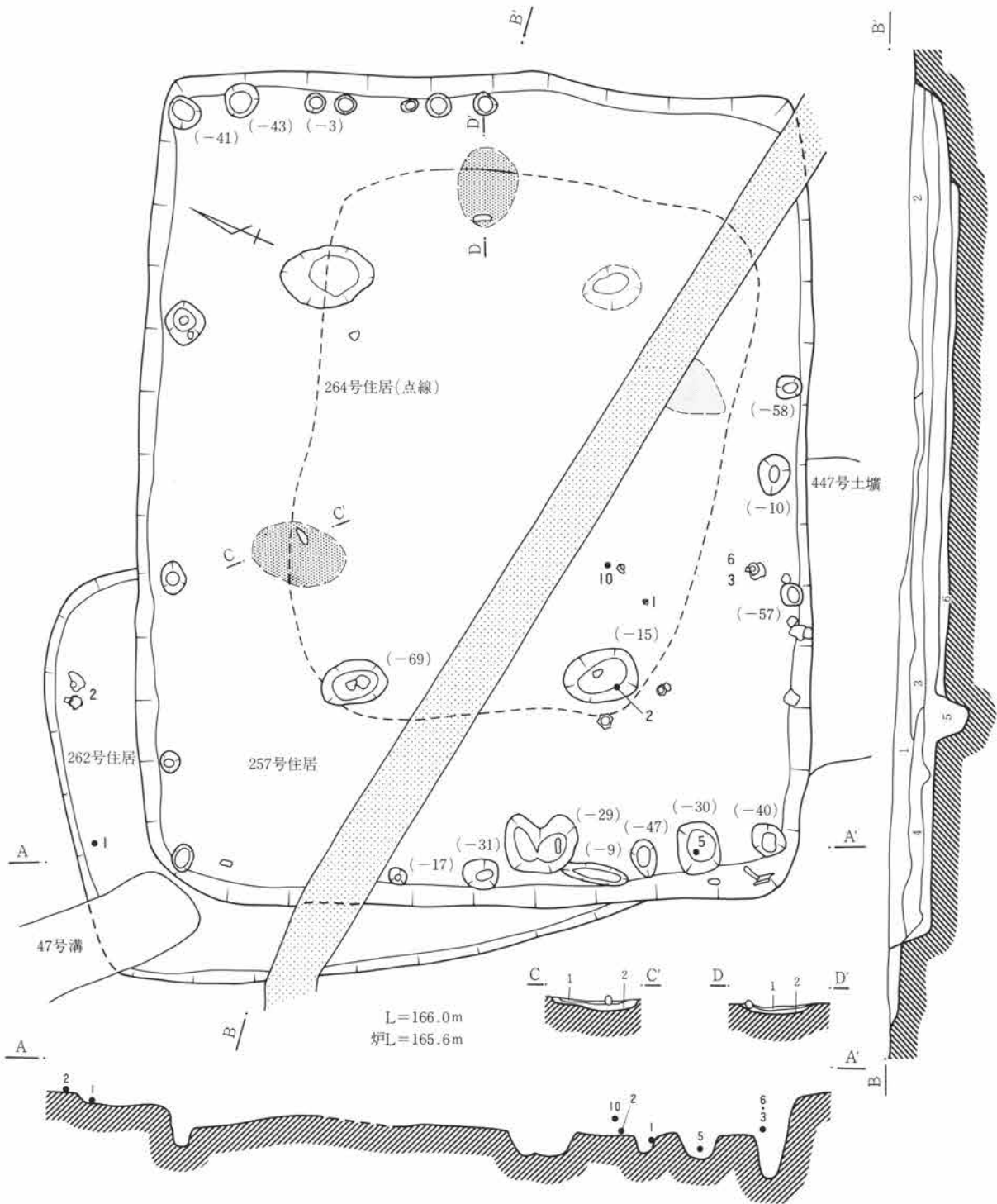
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
4	壺		2段口縁	外 口縁部は刻み目。	細砂粒を含む。	やや堅緻	橙色	17%
5	壺		2段口縁	外 口縁部は刻み目。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	5%
6	甕		折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	16%

257号住居 (第110図、PL. 32)

位置 41-H38に位置する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。長軸8.0m、短軸6.5m。方位はN-70°-E。住居中央部を東西に貫く攪乱部分は調査区境に設けた排水溝である。





- 1 暗褐色 粘質、青灰色シルトを少量含む。
- 2 暗褐色 粘質、青灰色シルトブロックを少量含む。
- 3 暗褐色 粘性強く、シルトの混入は少ない。
- 4 暗褐色 青灰色シルトを多量に含む。
- 5 黒色 灰を多量に含む。
- 6 暗褐色 青灰色シルトを多量に含む。264号住居覆土。

炉跡セクション

- 1 黒色灰
  - 2 灰色灰、粘質。
- \* 灰層中に獣骨の細片が多数見られる。

0 1:60 2m

第110図 257号、262号住居

**周壁、壁溝** 壁土は灰白色土（第V層）で、明瞭に検出される。

**床面** 264号住居との重複部は黒褐色土と淡灰褐色土のブロック混土層を客土し、上面に薄いワラ状の植物繊維の広がりが見られた。

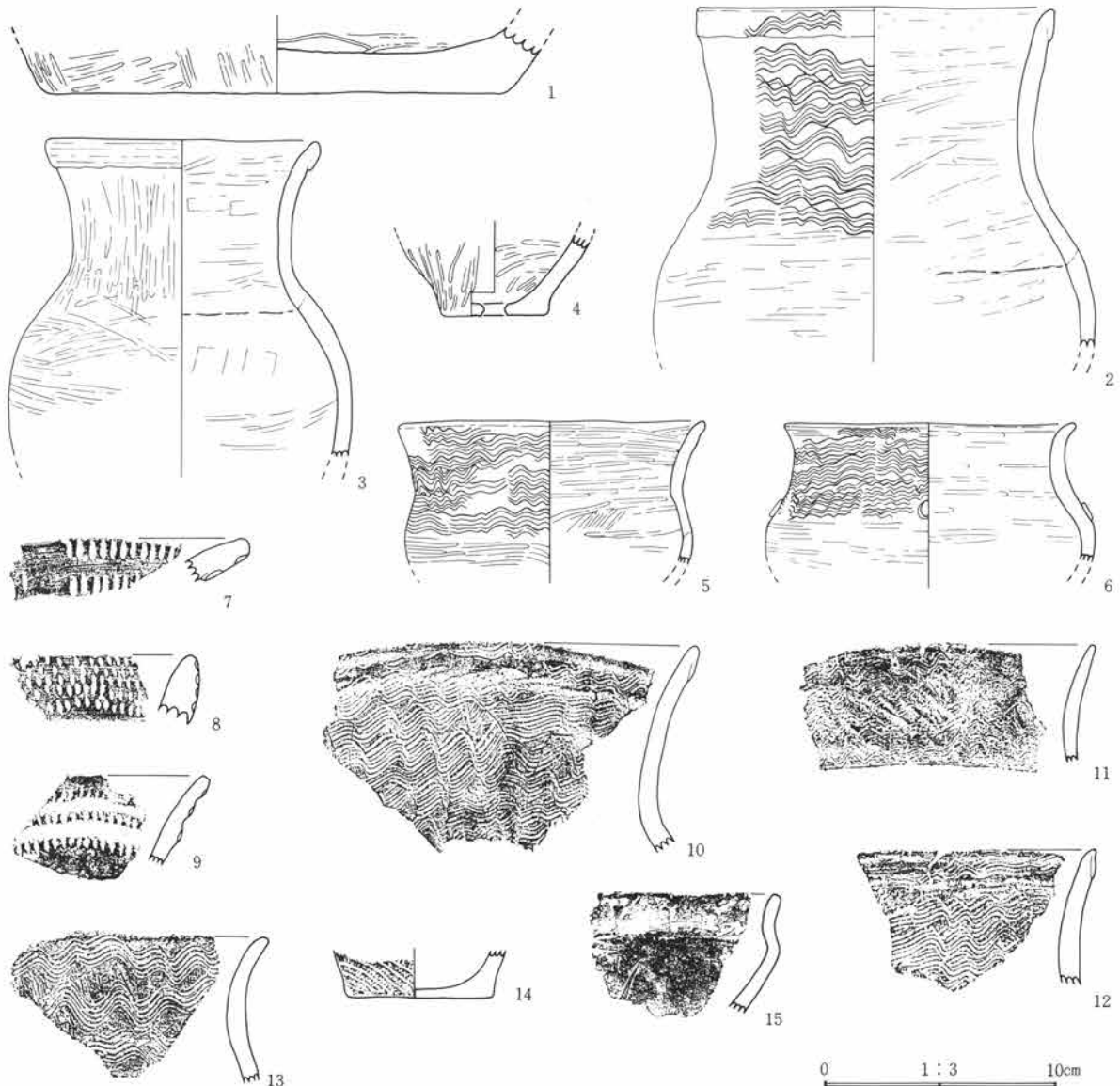
**主柱穴** 主柱は4本構造。主柱穴は一様に長径70cm、深さ70cm前後の長円形のピットである。周壁下に小ピット列がほぼ全周にわたって検出されている。

**炉跡** 東奥2主柱穴と周壁の間に地床炉が見られる。炉跡は長径70cm前後で長さ18cm程の長細の円礫を据えている。炉跡は円形の掘り方を伴い、掘り方内には黒色灰と灰色土が縞状に堆積する。

**遺物出土状態** 床面上より弥生土器の大形破片が出土する。

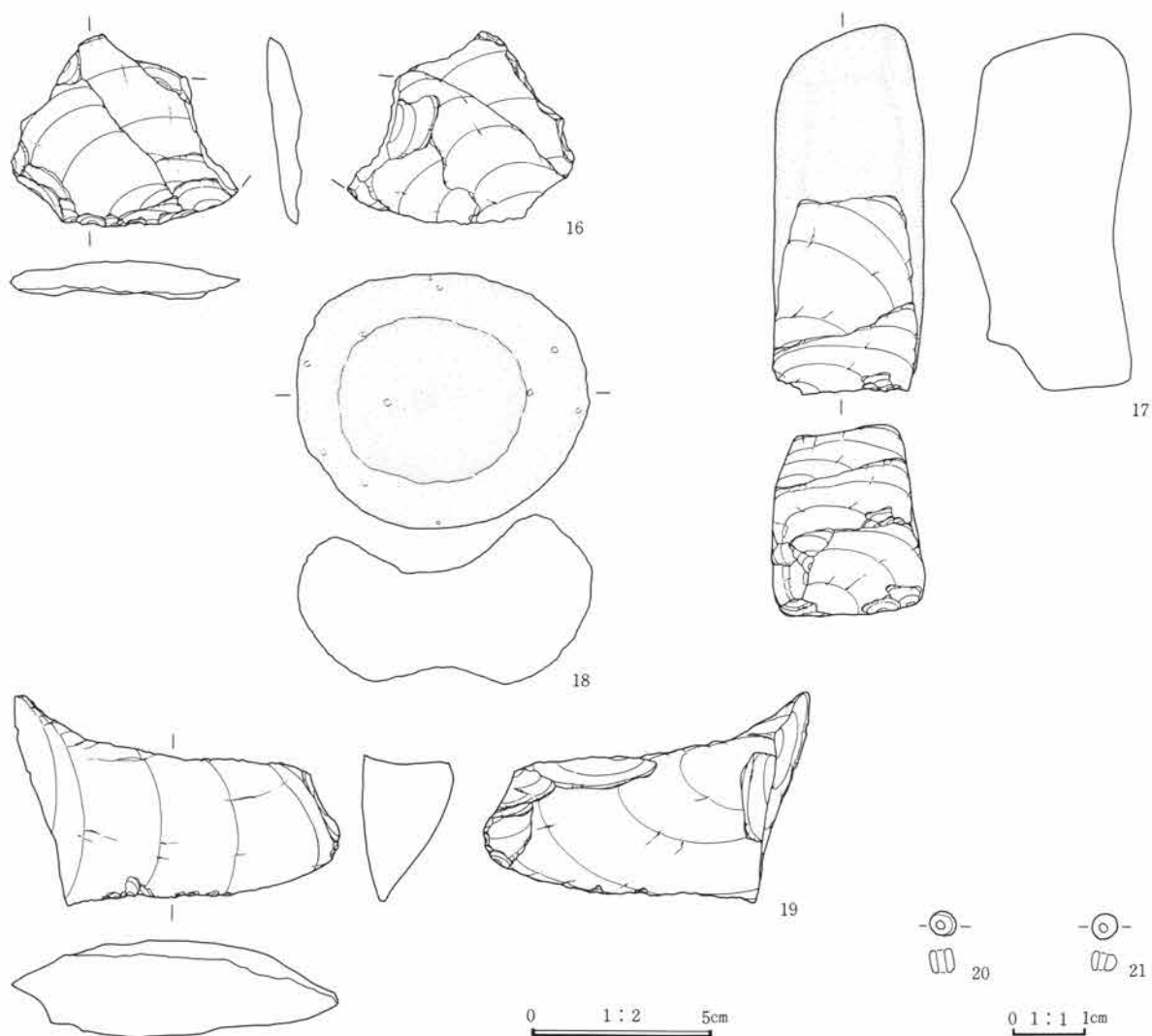
**時期** 弥生後期第3期。

**他の遺構との関係** 南周壁部で447号土壇と、北、西周壁部で262号住居と重複する。本住居が土壇と262号住居の覆土を切っている。また、264号住居上を客土し、本住居は造られている。



第111図 257号住居出土遺物（1）

6 検出した遺構・遺物



第112図 257号住居出土遺物(2)

257号住居出土土器観察表 PL.109

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	底 19.5		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	底部全周
2	甕	口 15.0 胴 18.8	折り返し口縁の段は低い。	外 口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 周
3	甕	口 11.6 胴 14.6	折り返し口縁。	外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	口縁～胴部 $\frac{3}{8}$ 周
4	甌	底 4.5 孔 1.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	底部全周
5	台付甕	口 13.2 胴 12.0		外 口縁～肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、褐灰色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
6	台付甕	口 12.2 胴 14.0		外 口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。肩部に付文4個。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、暗赤褐色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周

## (2) 弥生時代後期の住居跡

257号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
7	壺		折り返し口縁	外 口縁部は2段の刻み目。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	橙色	8%
8	壺		折り返し口縁	外 口縁部は刺突。内 ヘラミガキ、丹彩。	砂粒を含む。	堅緻	暗褐色	6%
9	壺		3段口縁	外 口縁刻み目、丹彩。内 ヘラミガキ、丹彩。	砂粒を含む。	堅緻	赤色	8%
10	甕	口 15	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	暗褐色	26%
11	甕	口 13		外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	赤灰色	20%
12	甕	口 16	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	暗褐色	14%
13	甕	口 16		外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	鈍赤褐色	14%
14	甕	底 6		外 付加条。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	赤灰色	23%
15	台付甕	口 8		外 ナデ。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	24%

257号住居出土石器観察表 PL. 109

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
16	刃器	5.2×6.3(+ )×1.1	黒色頁岩	29.1	縦長剥片の両面を剥離調整している。刃部には細かい剥離を施している。
17	石核	10.0×4.2×5.0	黒色頁岩	344.6	長細の一端に大きな剥離面が3か所認められる。
18	くぼみ石	7.0×8.1×4.6	粗粒安山岩	235.5	多孔質の円礫の両面に大小のすり鉢状のくぼみを作っている。くぼみはやや長円形で面は磨った状態で、滑らか。
19	刃器	5.7×9.0×2.6	黒色頁岩	95.7	縦長剥片の一侧縁に鈍い刃部を作っている。刃部には細かい剥離使用痕が認められる。

257号住居出土玉類観察表 PL. 118

遺物番号	名称	長さ・厚さ	径	孔径	材質	色・備考
20	小玉	0.3	0.35	0.1	ガラス	スカイブルー
21	小玉	0.2	0.35	0.09	ガラス	スカイブルー

## 262号住居 (第110図、PL. 32)

位置 44-H39に位置する。

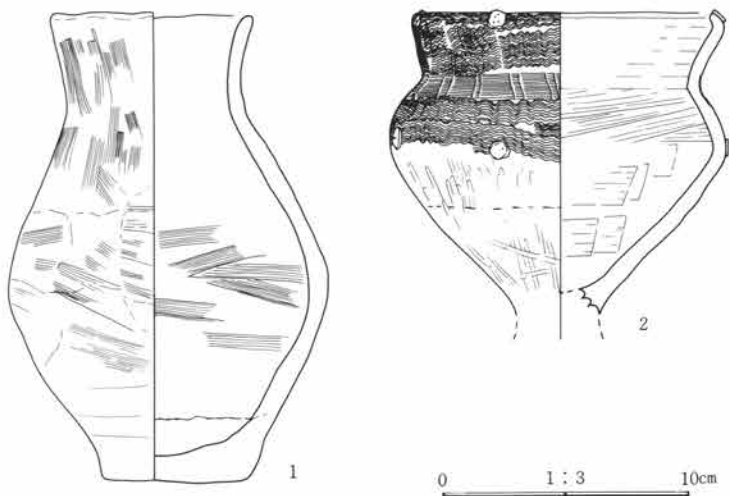
形状、規模、方位 隅丸長方形を呈し、やや胴が張っている。東、南部の周壁は257号住居に切られている。長軸不明、短軸4.1m。方位はN-28°-W。

周壁、壁溝 壁土は灰褐色第V層土。明瞭に検出される。壁高は10cm前後を検出する。

床面 大方は遺存していない。灰白色第V層土。

支柱穴 不明。

炉跡 不明。



第113図 262号住居出土遺物

6 検出した遺構・遺物

遺物出土状態 床面上より弥生土器大形破片が出土している。

時期 弥生後期第2期。

他の遺構との関係 本住居の覆土、床面が257号住居に切られている。

262号住居出土土器観察表 PL. 110

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 8.0 高 18.6		外 口縁～胴部ハケメ、胴部は粗いヘラケズリ後ハケメ。 内 ナデ、ハケメ。	砂粒を含む。 やや軟弱	ほぼ完形
2	台付甕	口 11.8 胴 13.4	口縁部は短く、強く、内側に折れる。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 口縁部はヨコナデ、以下ハケメ後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部%周 付文推定7個

258号住居 (第114図、PL. 32)

位置 50-H25に位置する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。小型住居。規模は長軸4.0m、短軸2.8m。方位はN-34°-E。周壁、壁溝 壁土は灰白色土(第V層)で検出状態は良好。壁高は50cm以上を確認する。壁溝は認められない。

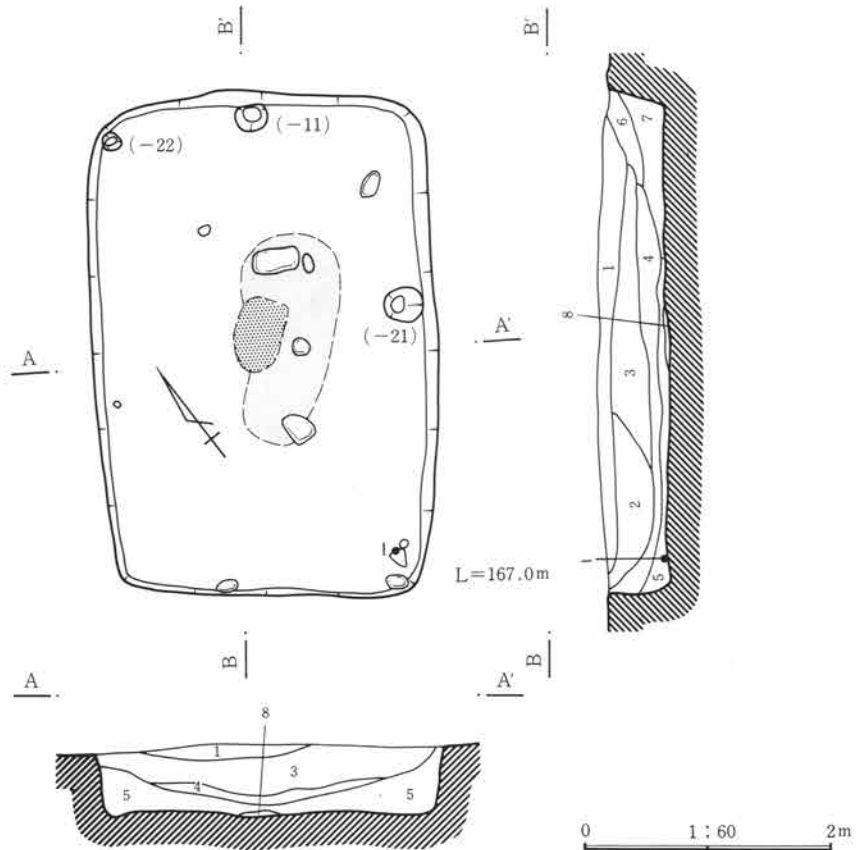
支柱穴 中軸線上に1か所、深さ10cm程の浅いピットを検出する。この他周壁下に2か所で小ピットを検出する。

床面 灰白色土面を踏み固めている。

炉跡 中央に1か所地床炉を設けている。焼土帯が良好に生成している。

周囲には灰の広がり比較的広く見られる。

遺物出土状態 床面上に検出された遺物は少ない。覆土中より弥生土器



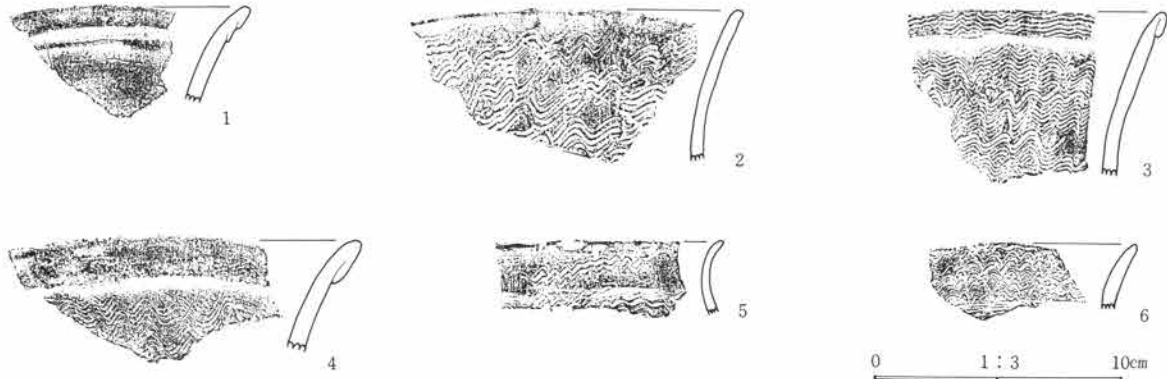
A・Bセクション

- |                      |                      |
|----------------------|----------------------|
| 1 灰黒色 粘質。            | 5 暗灰色 灰白色小ブロックを含む。   |
| 2 灰黒色 灰白色ブロックを多量に含む。 | 6 暗灰色 灰白色土ブロックを含む。   |
| 3 灰黒色 灰白色土が点在。       | 7 暗灰色 灰白色土ブロックを少量含む。 |
| 4 灰黒色 炭化物が点在。        | 8 橙色 焼土。             |

第114図 258号住居

破片が出土している。

時期 弥生後期第3期。



第115図 258号住居出土遺物(1)

258号住居出土土器観察表(拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
1	壺	口 16	2段口縁	外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	砂粒を含む。	やや堅緻	橙色	13%
2	甕	口 15		外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	鈍赤褐色	24%
3	甕	口 14	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	鈍橙色	17%
4	甕	口 18	折り返し口縁	外 口縁部はヨコナデ、以下波状文。	細砂粒を含む。	堅緻	鈍赤褐色	18%
5	台付甕	口 10		外 波状文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	鈍橙色	25%
6	台付甕	口 12		外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	14%

### 259号住居(第116図、PL. 33)

位置 31-H38に位置する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。規模は長軸11.2m、短軸6.4m。方位はN-15°-W。本遺跡で調査された住居中、最大規模である。

周壁、壁溝 壁土は淡褐色土(第V層)。壁溝は認められない。

支柱穴 支柱穴は6本構造になると推定される。支柱穴になると思われるピット列が認められ、東側は2か所、西側は4か所見られる。周壁下に小ピットを20個以上検出する。1か所の壁下ピット内より、柱材、あるいは杭材の残欠が検出されている。

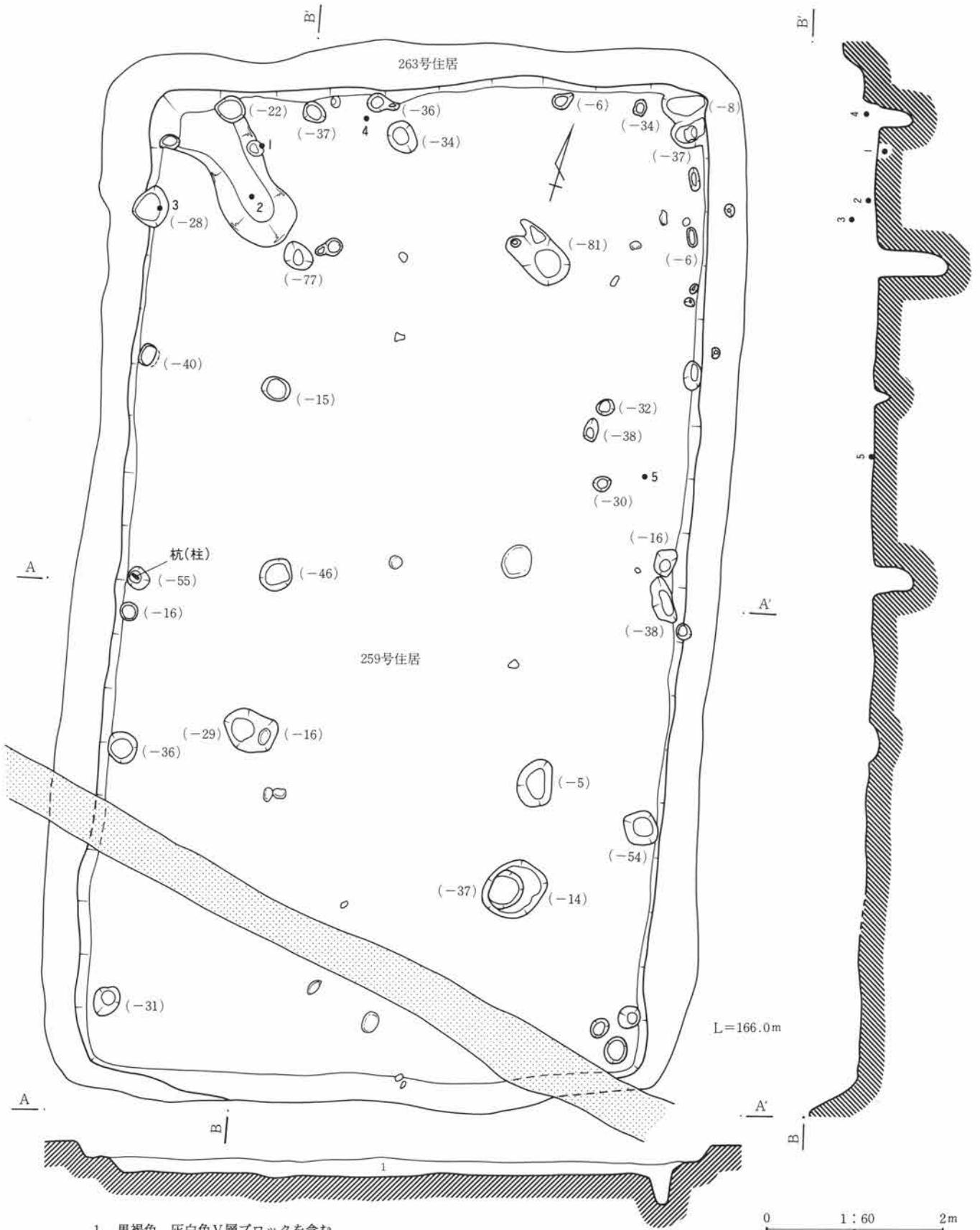
床面 淡褐色土面(第V層)を平坦に踏み固めている。

炉跡 北奥2支柱穴の間に黒色の灰の広がりが見られる。地床炉の痕跡と思われる。

遺物出土状態 床面上5cm前後より弥生土器大形破片が多数出土する。

時期 弥生後期第3期。

他の遺構との関係 本住居は263号住居の床面下より検出される。263号住居の建て替え前の住居である。

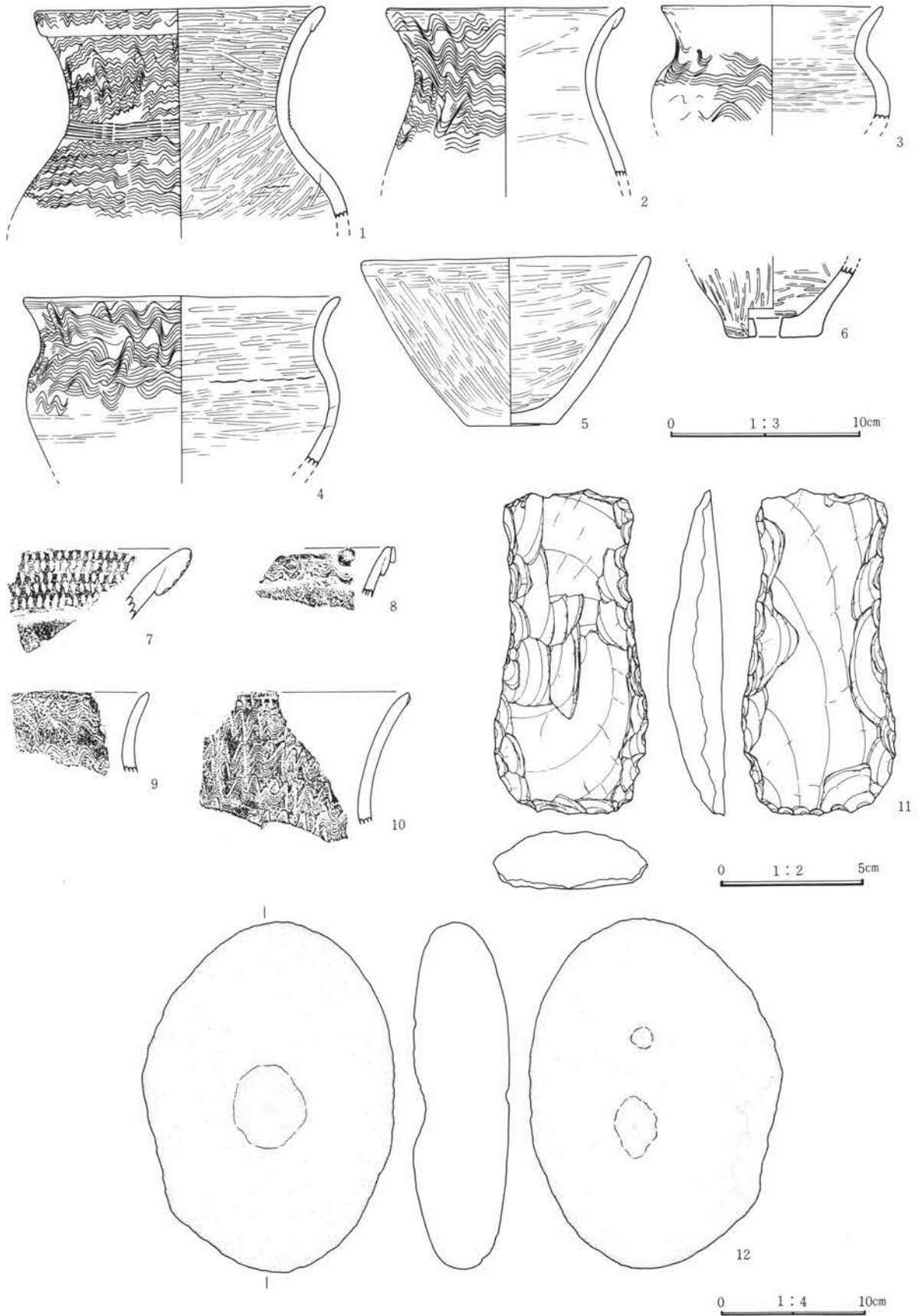


1 黒褐色 灰白色V層ブロックを含む。

第116図 259号住居



(2) 弥生時代後期の住居跡



第117図 259号住居出土遺物

6 検出した遺構・遺物

259号住居出土土器観察表 PL.110

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 15.2 胴 17.6	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、明橙色	口縁～胴上部 全周
2	甕	口 12.4		外 口縁部はヨコナデ、口縁～胴上部波状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	口縁～胴上部 $\frac{1}{2}$ 周
3	台付甕	口 11.4 胴 12.4		外 口辺～胴上部は波状文。 内 ヘラミガキ、器面は荒れている。	砂粒を含む。 堅緻、暗赤褐色	口縁～胴上部 $\frac{1}{2}$ 周
4	台付甕	口 16.4 胴 16.5		外 口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
5	鉢	口 14.8 高 8.6		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 スス付着
6	甕	底 5.0 孔 1.2		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、褐色	底部全周

259号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
7	壺		折り返し口縁	外 口縁部は5段の刻み目、丹彩。内 丹彩。	粗砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	8%
8	甕		折り返し口縁	外 口縁部は付文、波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤灰色	7%
9	甕	口 13		外 波状文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	鈍赤褐色	21%
10	甕			外 波状文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	褐色	5%

259号住居出土土器観察表 PL.110

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
11	土掘り具	11.3×5.4×2.0	黒色頁岩	131.2	剥片の片面に面調整を加え、周縁部を丹念に剝離調整している。
12	くぼみ石	24.3×17.6×6.8	粗粒安山岩	2722.0	大形で偏平な、やや多孔質な自然石の両面にくぼみを作っている。 くぼみはすり鉢状で、面は比較的滑らか。

261号住居 (第118図、PL. 33)

位置 53-H23に位置する。

形状、規模、方位 隅丸長方形を呈する。規模は長軸4.6m、短軸2.7m。小型住居。東辺に比べ西辺がやや長い。方位はN-90°。

周壁、壁溝 周壁は全周にわたり、良好に検出する。壁溝は認められない。

支柱穴 中軸線上2か所に支柱穴と思われる深さ30～40cmの円形ピットが見られる。周壁下に数か所柱穴と思われるピットを検出する。南側周壁下に深さ30cm前後の円形ピットが1対見られるが出入部に関する可能性が高い。

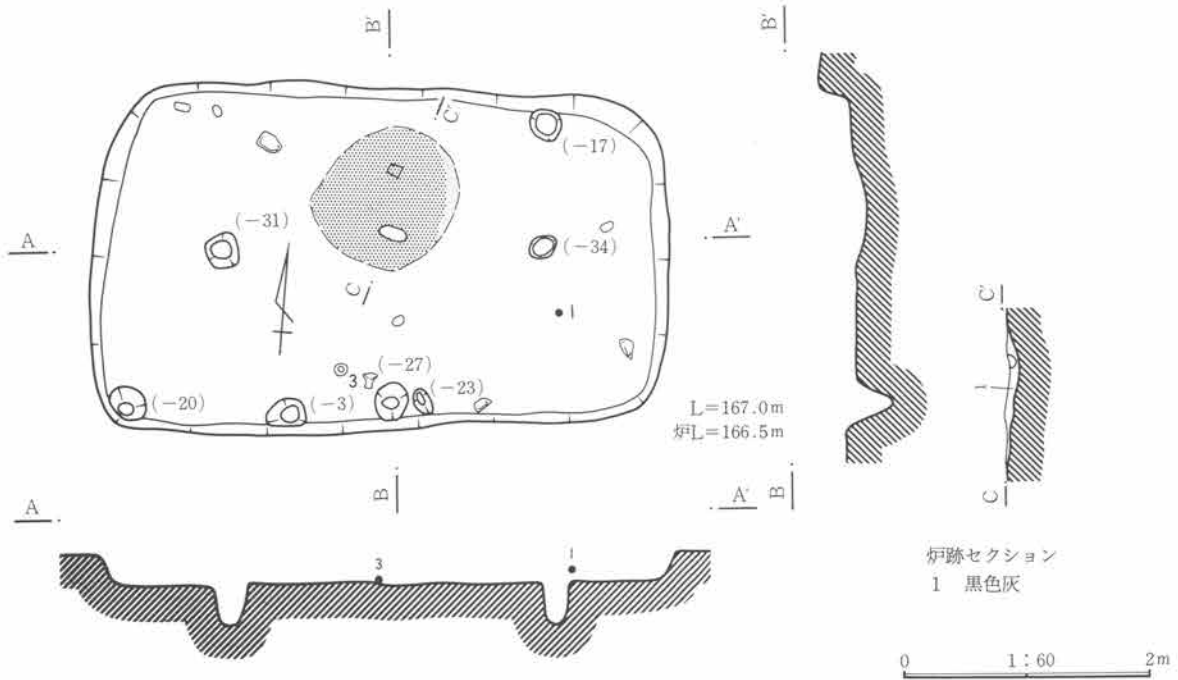
床面 床面は平坦に踏み固められた面を検出するが、多数の小ピットが見られ、これによる凹凸が目立つ。

炉跡 中央部北側寄りに地床炉を設けている。炉内には焼土帯が良好に生成し、細長い円礫を据える。周囲には広く灰の広がりが見られる。

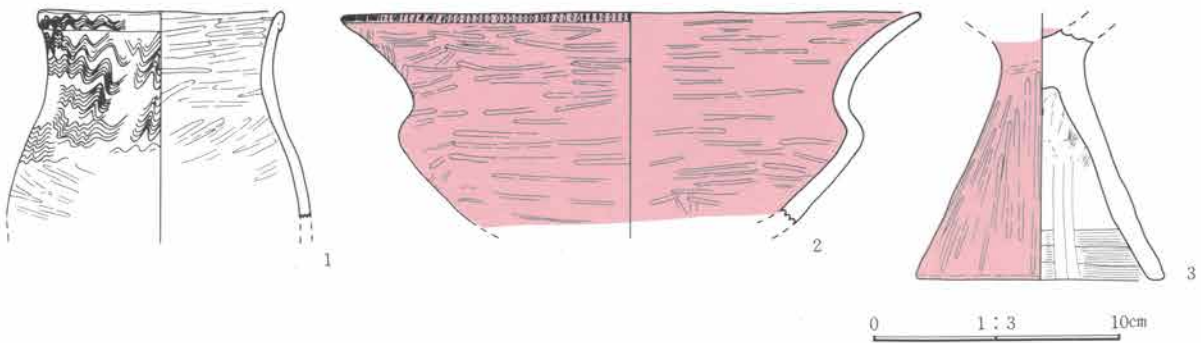
遺物出土状態 床面～覆土下部に弥生土器破片が出土している。

時期 弥生後期第3期。

(2) 弥生時代後期の住居跡



第118図 261号住居



第119図 261号住居出土遺物

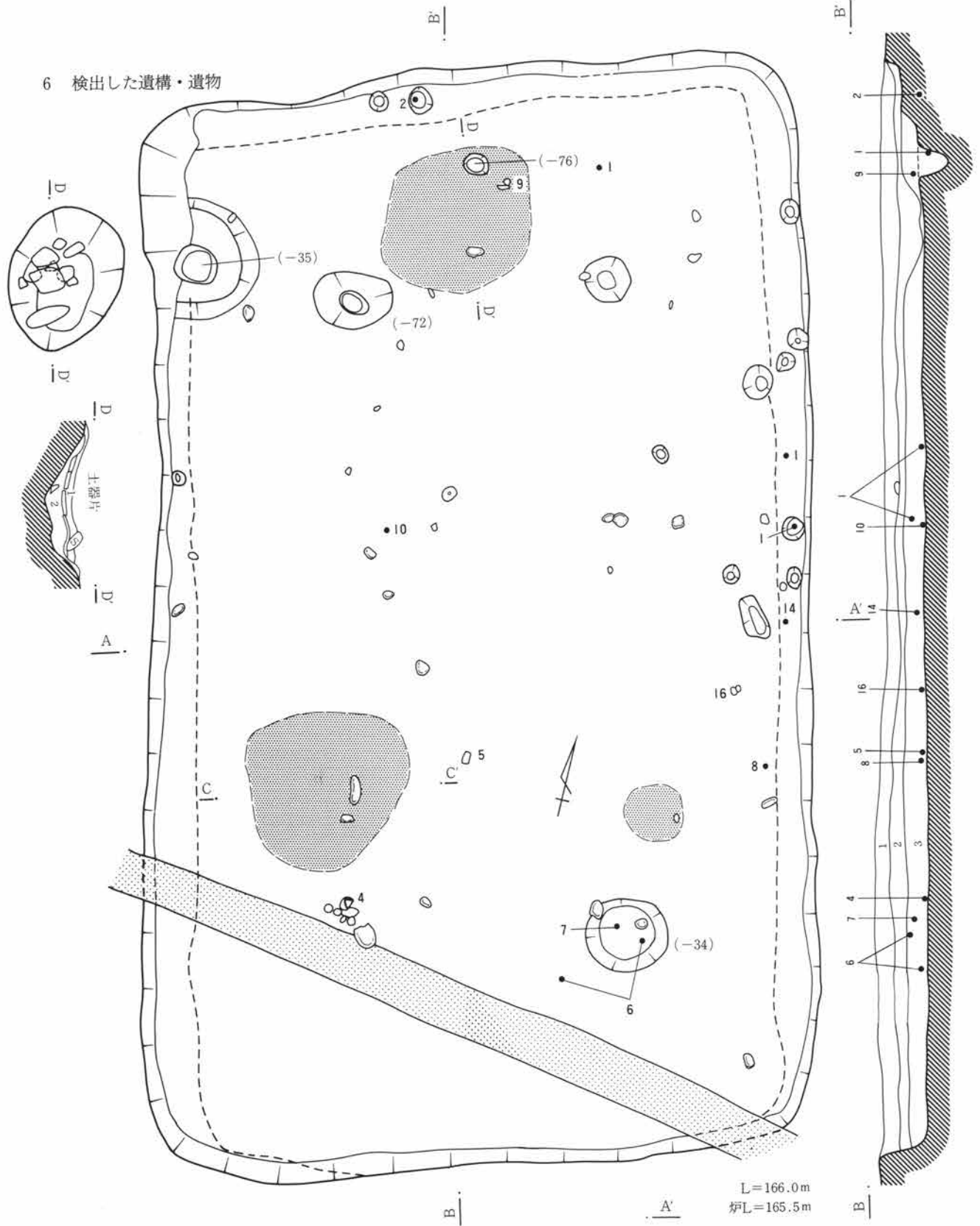
261号住居出土土器観察表 PL.110

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 9.8 胴 12.1	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～胴部均周
2	高坏	口 23.0 胴 18.7		外 口縁端部は刻み目、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	坏部均周 内外面丹彩
3	高坏	脚 10.0		外 脚部ヘラミガキ、丹彩。 内 脚部指ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	脚部全周

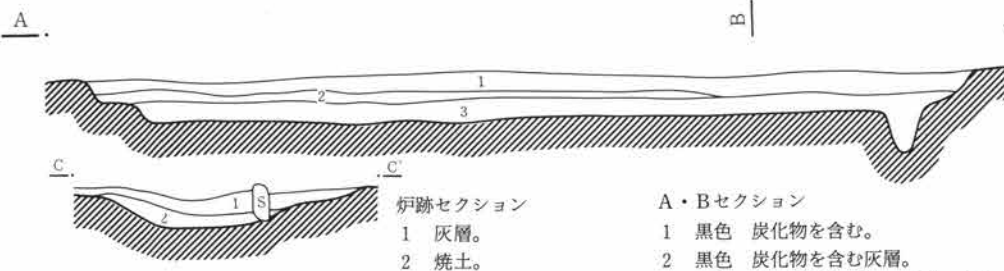
263号住居 (第120図、PL. 33)

位置 31-H38に位置する。

6 検出した遺構・遺物



L=166.0m  
炉L=165.5m



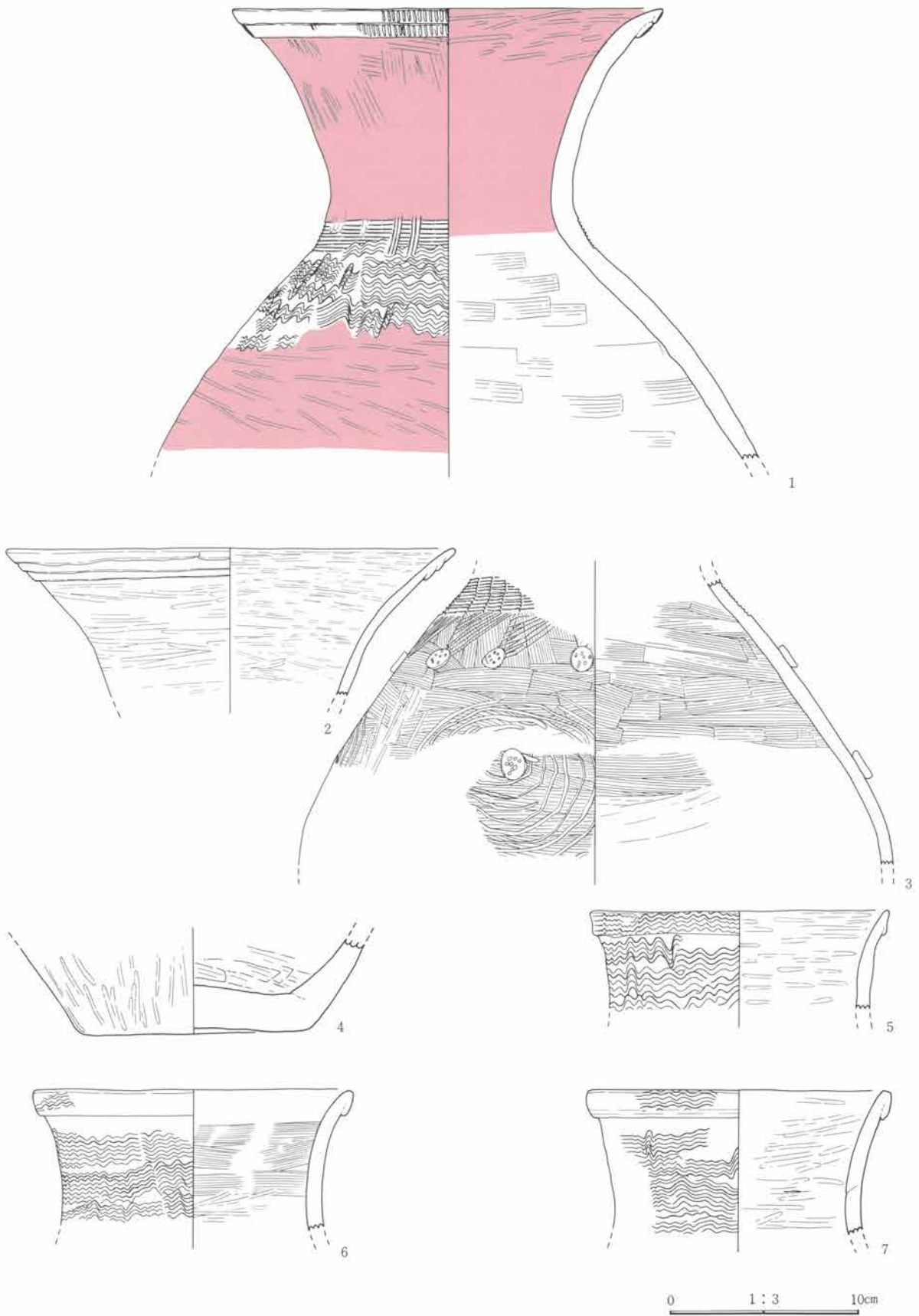
炉跡セクション

- 1 灰層。
- 2 焼土。

A・Bセクション

- 1 黒色 炭化物を含む。
- 2 黒色 炭化物を含む灰層。
- 3 黒色 第V層土をブロック状に含む





第121図 263号住居出土遺物(1)

6 検出した遺構・遺物

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する大型住居。南へ梯形に広がる。規模は長軸11.8m、短軸7.0m。方位はN-15°-W。

**周壁、壁溝** 壁土は淡褐色土（第V層）。壁溝は認められない。

**支柱穴** 支柱穴は6本構造と思われる。周壁際以外の床面は張り床面であるが、張り床面上から3か所で深さ60~90cmの円形ピットを良好に検出する。この他、東周壁下には深さ10~15cm前後の小ピット列を検出する。

**貯蔵穴** 北西コーナー部の周壁下に径40cm、深さ40cm前後のピットが認められる。ピットの周囲は高さ3~5cm、幅30cm程の周堤状の高まりが認められる。

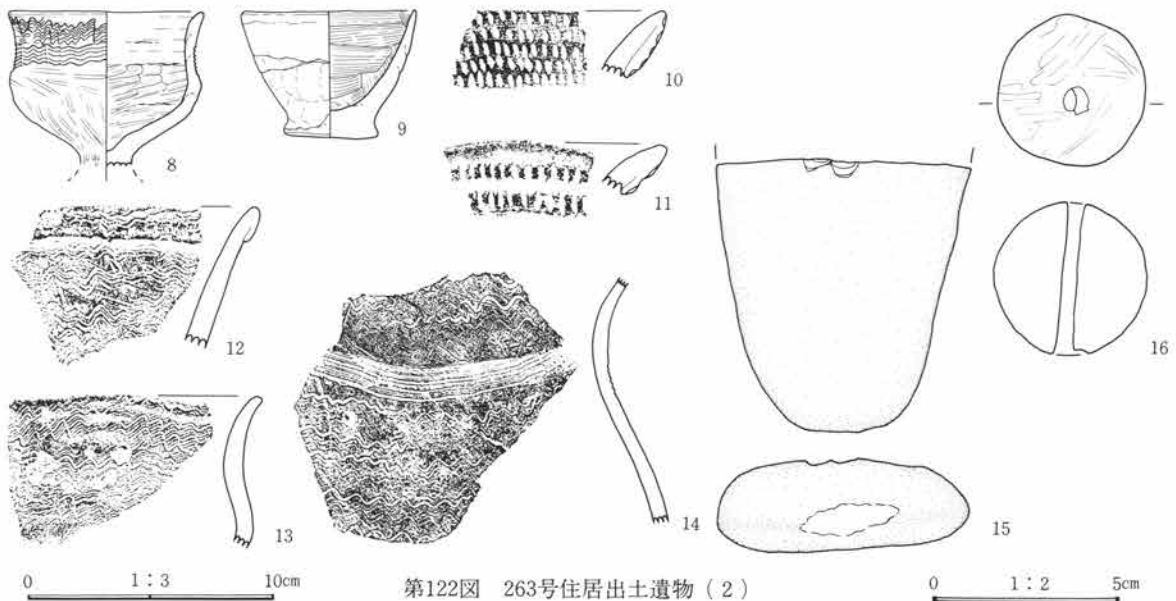
**床面** 本住居は259号住居の拡張住居であり、周壁際を除き床面は張り床面で、259号住居床面上に厚さ20cm程の淡褐色土（第V層）を多量に含む客土で、縞状に硬く築成している。

**炉跡** 北奥側2支柱穴と周壁の間、西側、および東側2支柱穴間の3か所に地床炉を設けている。共に炉内に長細い円礫を据え、浅い掘り方ピットを伴う。炉内には焼土帯が良好に生成され、周囲には灰層が広く見られる。

**遺物出土状態** 床面上より弥生土器大形破片が多数出土する。覆土出土の東関東系の文様モチーフを施す後期前葉（後期第1期）の土器は混入と見られる。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 259号住居覆土上に本住居の床面が認められることから259号住居の拡張住居と思われる。



第122図 263号住居出土遺物（2）

263号住居出土土器観察表 PL. 110・111

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 22.5	2段口縁。	外 口縁部は2段の刻み目、頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 口縁~頸部はヘラミガキ、胴部はハケメ。	粗砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周 内外面丹彩。
2	壺	口 23.2	3段口縁。器壁は薄い。	外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや軟弱、淡黄色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周
3	壺	胴 31.2		外 肩部は等間隔止め簾状文を2段以上、ヘラ描鋸歯文、胴部は沈線同心円文、付文、ハケ目、ヘラミガキ。 内 胴上部ハケメ。以下はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	胴部 $\frac{1}{4}$ 周



## (2) 弥生時代後期の住居跡

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
4	甕	底 12.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ、ナデ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、褐色	底部 $\frac{1}{4}$ 周
5	甕	口 15.4	折り返し口縁。	外 口縁～口辺部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周
6	甕	口 16.9	折り返し口縁。	外 口縁～口辺部は波状文。 内 ハケメ後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、褐灰色	口縁～頸部 $\frac{1}{4}$ 周
7	甕	口 15.9	折り返し口縁。	外 口縁～口辺部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、褐色	口縁部小片
8	台付甕	口 7.7 胴 7.6		外 口縁部はヨコナデ、口辺～頸部は波状文。 内 口縁部はヨコナデ、胴部はハケメ後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁～胴部全周
9	鉢	口 7.0 高 5.0	接合痕外面に目立つ。	外 指ナデ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周

## 263号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
10	壺		折り返し口縁	外 5段の刻み目、丹彩。内 丹彩。	粗砂粒多い。	堅緻	鈍赤褐色	6%
11	壺		2段口縁	外 口縁部は刻み目。内 ヘラミガキ、丹彩。	砂粒多い。	堅緻	橙色	6%
12	甕		折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	小礫を含む。	堅緻	暗赤褐色	10%
13	台付甕	口 15		外 波状文。内 ヘラミガキ。	小礫を含む。	堅緻	鈍橙色	17%
14	甕			外 頸部は2連止め簾状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	黒褐色	21%

## 263号住居出土石器観察表 PL. 111

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
15	磨石	7.2(+) $\times$ 6.9 $\times$ 2.4	変質安山岩	179.8	円礫の半欠品の一端に摩滅痕が認められる。

## 263号住居出土土製品観察表 PL. 111

遺物番号	名称	径	厚さ	形状・成形・整形	色調	材質	備考
16	土錘	3.9	0.45	球形を呈する。球の中心部を直状に円孔を開けている。器面は滑沢にヘラミガキが施されている。	赤褐色	土製	完形

## 264号住居 (第123図、PL. 32)

位置 40-H39に位置する。

形状、規模、方位 不整長方形を呈する。規模は長軸5.1m、短軸4.0m。方位はN-75°-E。中央部を斜に貫く攪乱部分は調査区境に設けた排水溝である。

周壁、壁溝 壁土は灰褐色粘質土(第V層)。267号住居の床面と本住居の床面のレベル差は5cm。壁溝は認められない。

支柱穴 支柱穴は不明確。住居中央部に深さ35cm程のピットを認めるがこれが支柱穴になると思われる。

北西コーナー部のピットは257号住居の支柱穴だろう。

床面 床面は灰褐色土。

炉跡 中軸線上東周壁際に地床炉を設けている。炉内には長さ30cm前後の細長い円礫を据え、浅い掘り方を



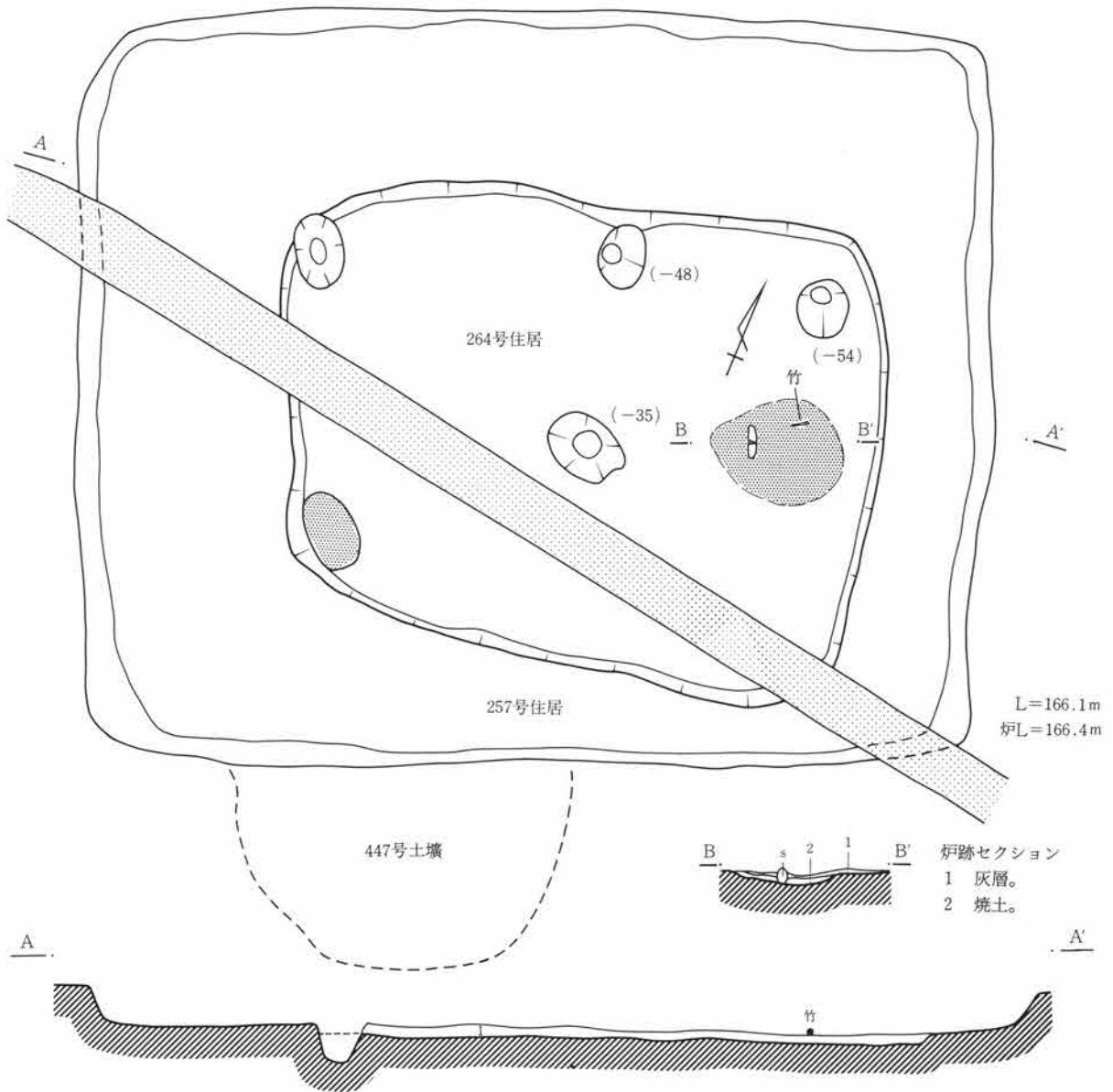
6 検出した遺構・遺物

伴う。西壁寄りに地床炉を設けている。

遺物出土状態 出土遺物は少ない。炉内に竹の断片が出土する。

時期 弥生後期。

他の遺構との関係 257号住居の床面下より検出。



Aセクション

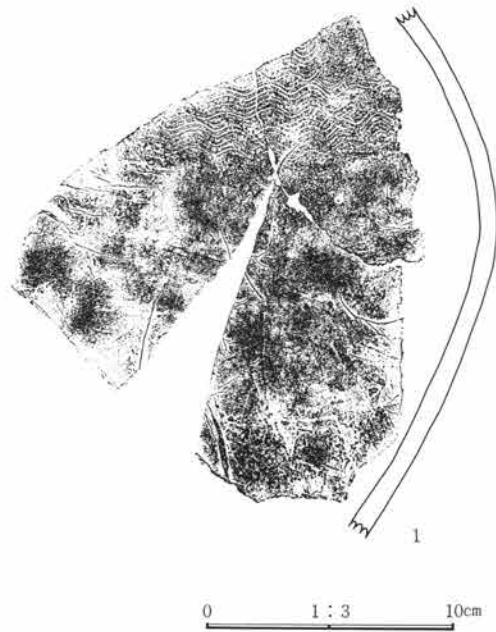
1 暗褐色 青灰色シルトを多量に含む。

0 1:60 2m

第123図 264号住居

264号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
1	甕			外 胴上部は波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	20%



第124図 264号住居出土遺物

268号住居 (第126図、PL. 34)

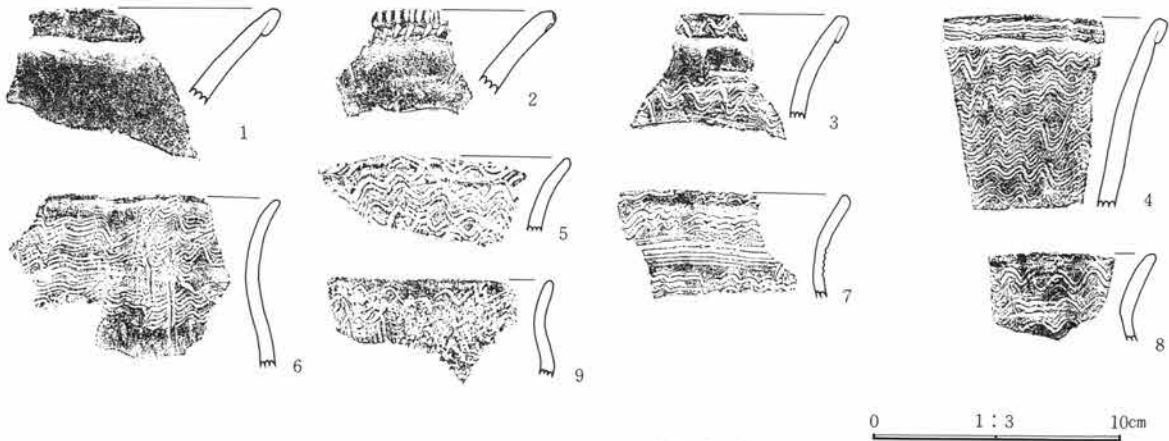
位置 34-H22に位置する。

形状、規模、方位 隅丸長方形を呈する。規模は長軸7.8m、短軸5.3m。方位はN-17°-W。

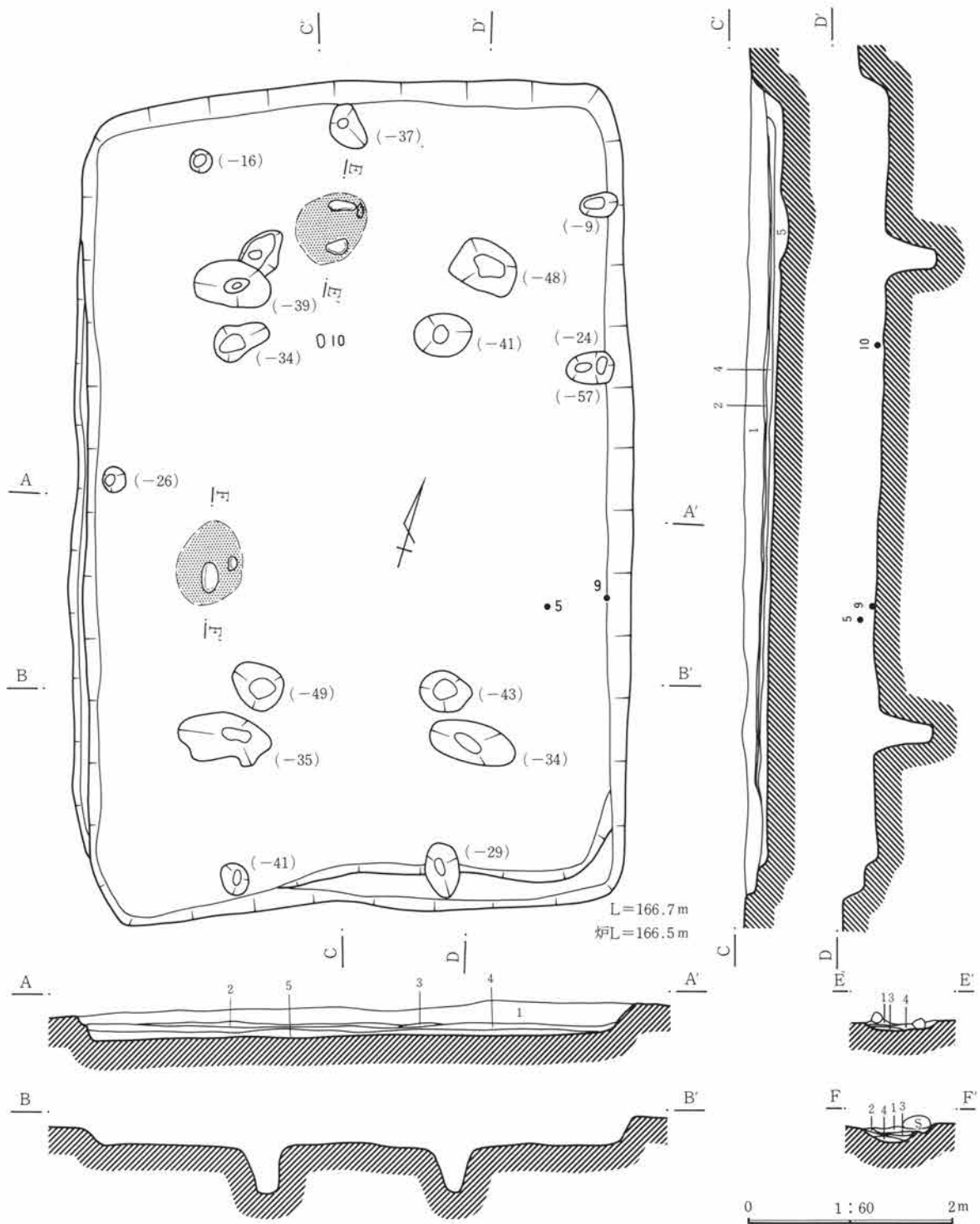
周壁、壁溝 壁土は灰色シルト質土。西、南周壁は2段に重なっている。建て替えによる。壁溝は認められない。

支柱穴 支柱は4本構造。内側の4ピットは径40~50cm、深さ35~45cmの円形ピット。この4ピットは外側4ピットに先行し、上位の床面下より検出され、覆土は灰色第V層ブロックを多量に含む。外側の4ピットは深さ35~45cmで、一様に長円形を呈する。長径70~80cm。このほか周壁下に小ピットを数か所に検出する。

床面 床面は上下に2枚検出する。上位の床面は下位の床面上に青灰色シルト質土主体混土層を縞状に版築している。



第125図 268号住居出土遺物(1)



A・Cセクション

- 1 暗褐色 砂質。
- 2 暗褐色 青灰色シルトの混土層。
- 3 灰層
- 4 青灰色 シルト小ブロック主体。
- 5 黒褐色 粘質、青灰色シルトを含む。

炉跡セクション

- 1 黒色灰中に暗灰褐色土を含む。
- 2 黒色灰と青灰色シルト混土層。
- 3 黒色灰層
- 4 灰色灰層

\*掘り方面は橙色に焼土化している。灰層中に獣骨細片が多数見られる。

第126図 268号住居

## (2) 弥生時代後期の住居跡

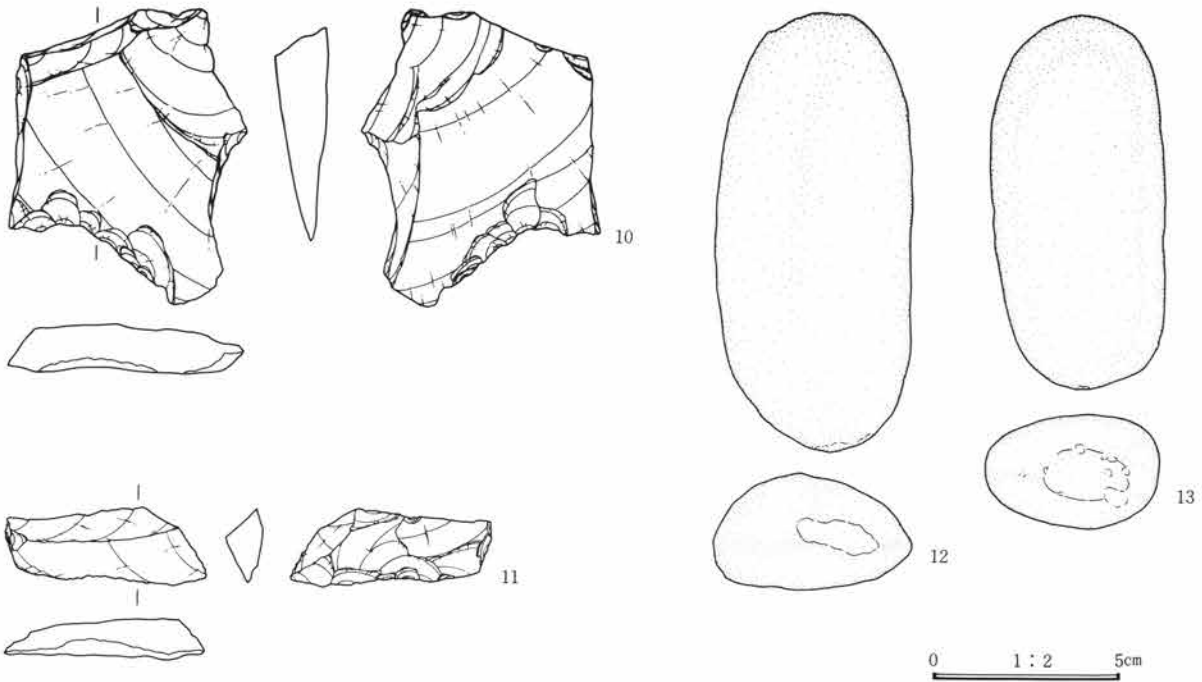
炉跡 地床炉を2か所で検出する。西側主柱穴間の炉跡は張り床面上に見られ、立て替え後のもので、中軸線上北奥の炉跡は建て替え前の炉跡である。共に焼土帯が良好に生成し細長い円礫を据えている。

遺物出土状態 床面上～覆土上部に弥生土器破片が出土している。

時期 弥生後期第3期。

268号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
1	壺		折り返し口縁	外 ヘラミガキ、丹彩。内 ヘラミガキ、丹彩。	粗砂粒多い。	堅緻	赤色	9%
2	壺			外 口縁端部、口縁部に刻み目。	砂粒を含む。	堅緻	橙色	5%
3	甕		折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	褐灰色	4%
4	甕	口 18	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	11%
5	甕	口 15		外 波状文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	17%
6	甕	口 10		外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	22%
7	甕	口 16		外 口縁部は波状文、頸部は櫛描直線文。	細砂粒を含む。	堅緻	鈍赤褐色	12%
8	台付甕			外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	鈍赤褐色	17%
9	台付甕	口 8		外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	暗赤灰色	24%



第127図 268号住居出土遺物(2)

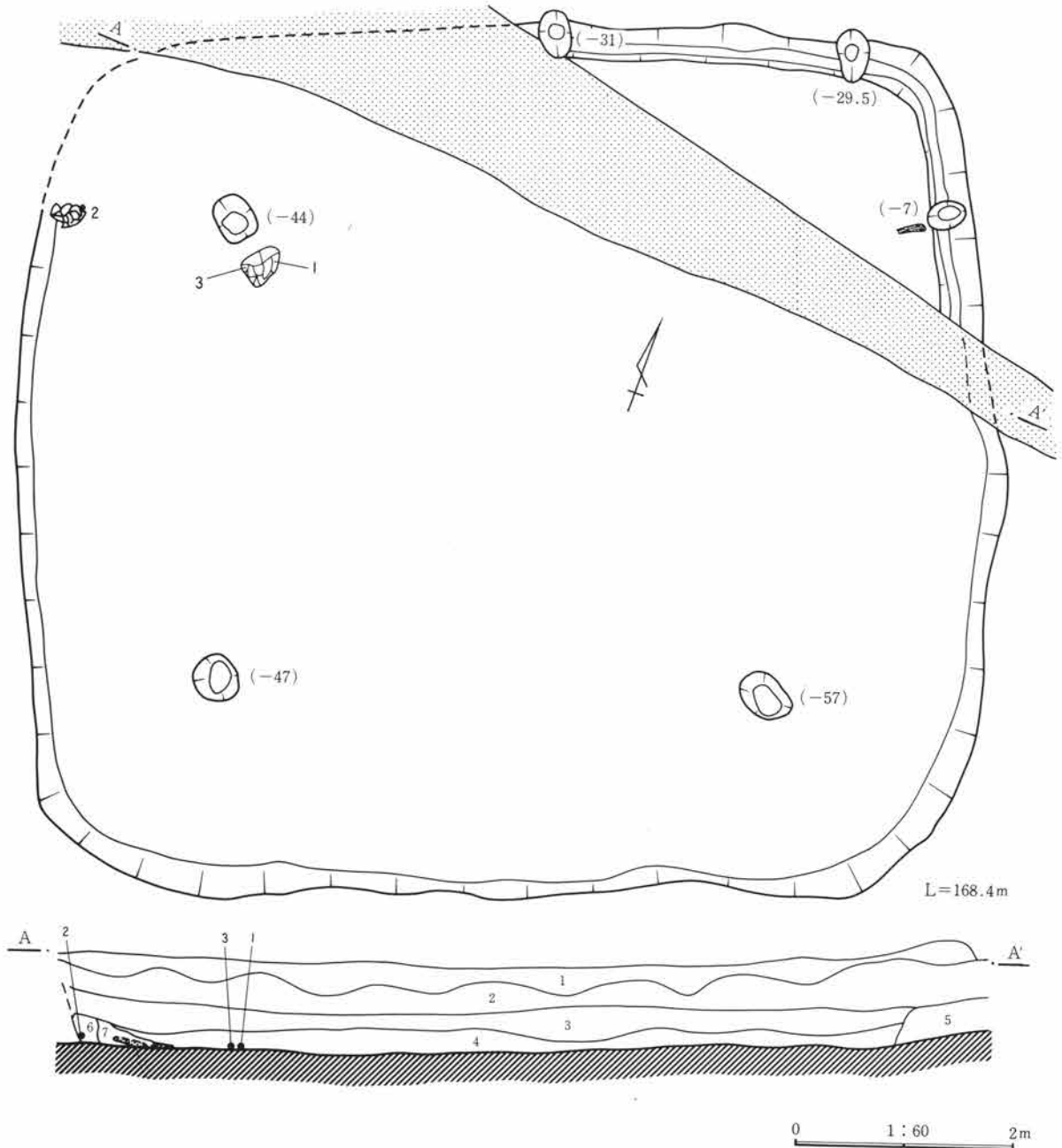
268号住居出土石器観察表 PL. 111

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
10	刃器	7.8×6.4×1.4	黒色頁岩	53.2	剥片の側縁に両面から剝離調整を加え、内湾する刃部を作出している。
11	刃器	2.1×5.4×1.1	黒色頁岩	9.9	断面三角形の縦長剥片の片面に二次調整を加えている。側縁に剝離調整を加え、刃部を作出している。
12	磨石	11.7×5.3×3.1	粗粒安山岩	287.5	長細の自然石の一端に摩滅痕が認められる。
13	磨石	9.9×4.7×3.0	粗粒安山岩	232.3	長細の円礫の一端に摩滅痕が認められる。

(3) 弥生後期～古墳前期の住居跡

86号住居 (第128図、PL. 34)

位置 36-H07に位置する。



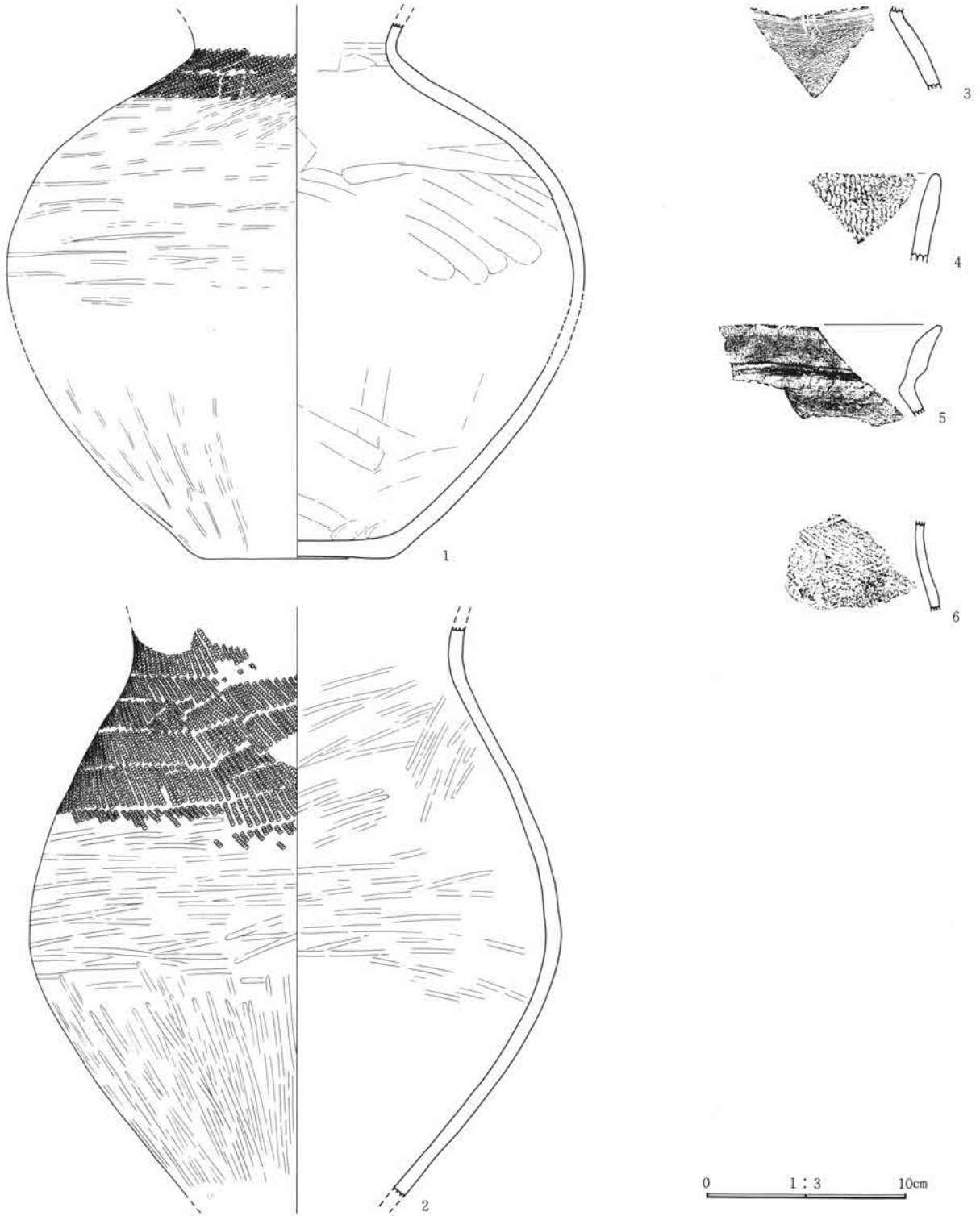
- |                               |                        |
|-------------------------------|------------------------|
| 1 明褐色 FA層。                    | 5 淡褐色 小礫を多量に含む。        |
| 2 黒色 浅間C軽石を多量に含む。小礫の混入多い。畑耕土。 | 6 灰色 やや砂質、第V層土主体。      |
| 3 暗灰色 小礫多い。浅間C軽石含まず。          | 7 黒色 灰、焼土、炭化材などを多量に含む。 |
| 4 暗灰色 やや黒色味増す。夾雑物は少ない。        |                        |

第128図 86号住居

(3) 弥生後期～古墳前期の住居跡

形状、規模、方位 隅丸方形を呈する。北辺部は調査区が異なり、時期を異にして調査している。規模は長軸8.7m、短軸7.8m。方位はN-73°-E。

周壁、壁溝 壁土は灰白色で微細な砂質（第V層）。小礫層を含む。壁溝は北東コーナー部で検出されている。



第129図 86号住居出土遺物

6 検出した遺構・遺物

南部の大半部分では検出できなかった。

**主柱穴** 主柱は4本構造。3か所で深さ40cm前後のピットを検出する。

**床面** 床面の土は、西半部は礫を含まない柔らかい灰白色土。東半部は礫を多量に含む。

**炉跡** 不明。

**遺物出土状態** 西周壁付近の床面直上より壺、甕の半完形個体が2点出土している。

**時期** 弥生後期末～古墳初頭。

86号住居出土土器観察表 PL.111

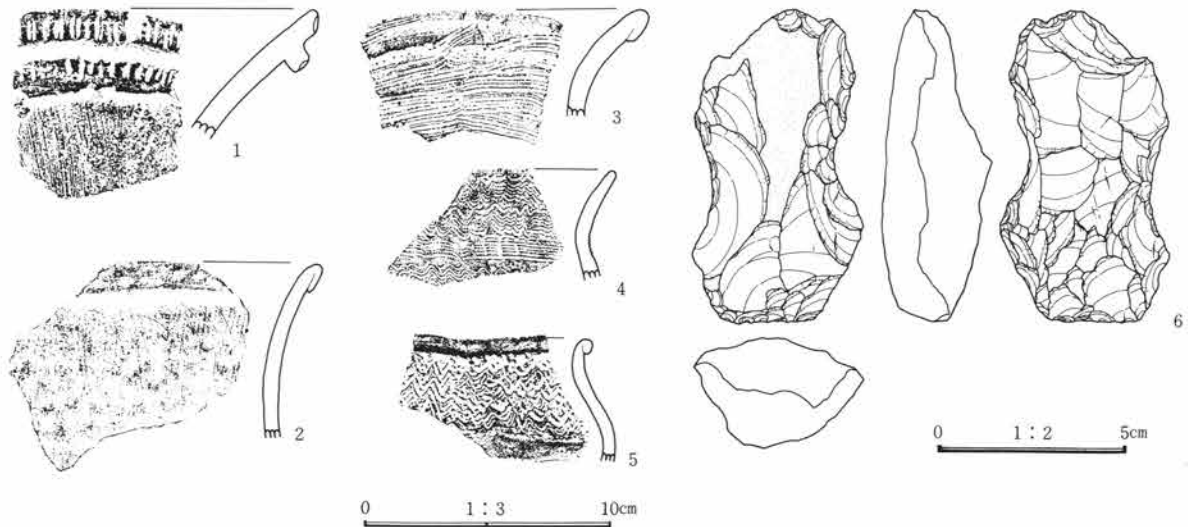
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	胴 28.8		外 頸～肩部はL R単節縄文、以下ヘラミガキ。 内 胴上部は指ナデ、下部はヘラナデ、底部は指オサエ。	細砂粒を含む。 堅緻、明褐色	頸～底部 $\frac{2}{3}$ 周
2	甕	胴 26.3		外 頸～胴上部はR L単節縄文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒多量に含む。 堅緻、鈍赤褐色	頸～胴下部 $\frac{1}{2}$ 周

86号住居出土土器観察表（拓本）

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
3	甕			外 3連止め簾状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	明赤褐色	15%
4	甕			外 R L単節縄文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	やや堅緻	灰褐色	5%
5	甕			外 口縁部はヨコナデ。内 胴部はヘラケズリ。	粗砂粒を含む。	やや堅緻	鈍橙色	8%
6	甕			外 頸～肩部はR L縄文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	8%

87号住居（第131図、PL. 35）

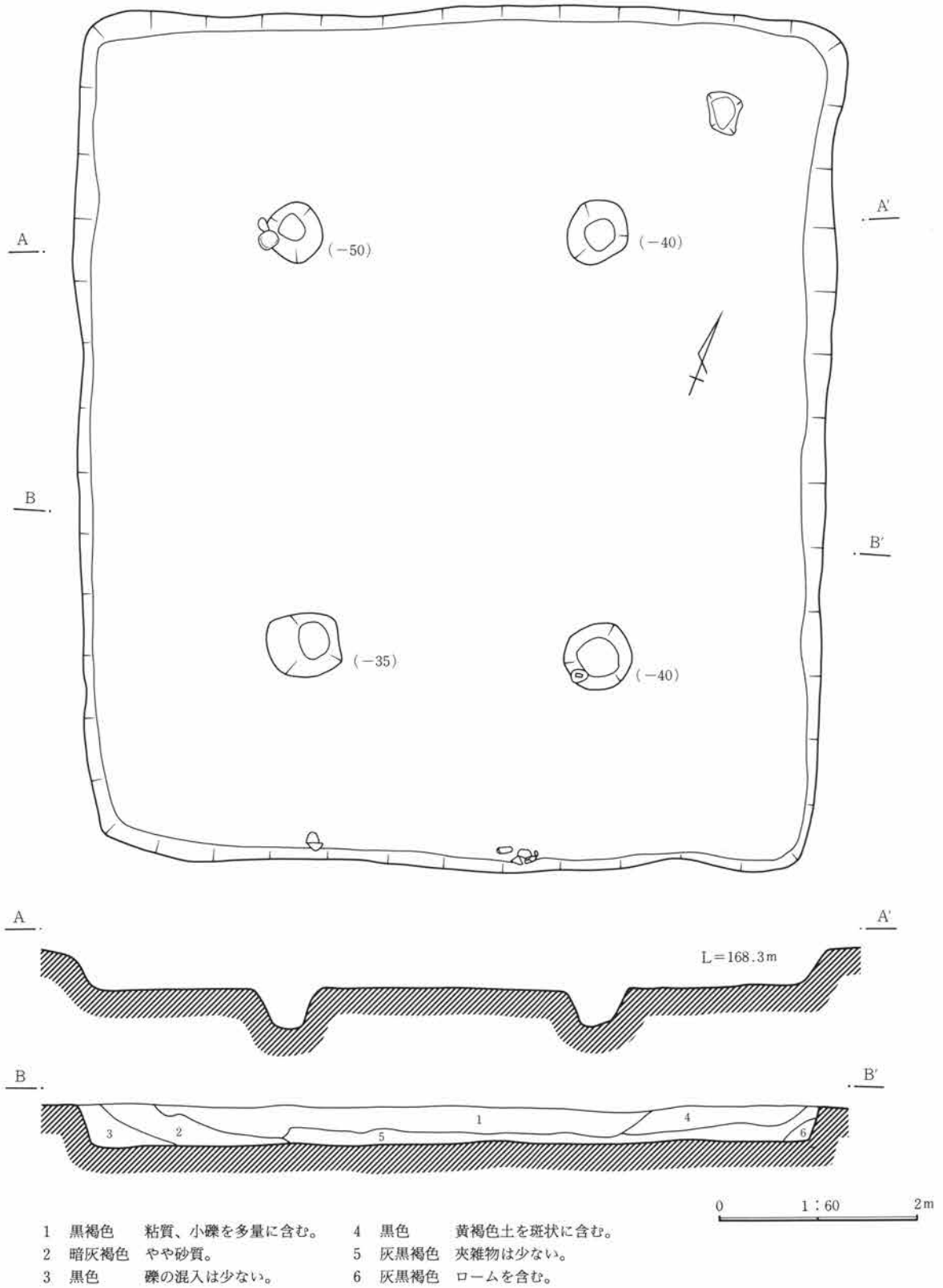
**位置** 27-H08に位置する。



第130図 87号住居出土遺物



(3) 弥生後期～古墳前期の住居跡



第131図 87号住居

6 検出した遺構・遺物

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。四辺は直線的で全体に整っている。規模は長軸8.5m、短軸7.5m。方位はN-20°-W。

**周壁、壁溝** 壁土は褐色土（第V層）で砂を含む。壁面の検出状態良好。高さ40cmを検出する、壁溝は検出できない。

**主柱穴** 主柱は4本構造。主柱穴の形態は一樣で、径60cm前後。住居の対角線上に配置されている。

**床面** 小礫層を平坦に踏み固めている。

**炉跡** 不明確。検出できない。

**遺物出土状態** 床面上からの土器の出土はない。覆土中より弥生土器の破片が数点、石器が数点出土している。

**時期** 弥生後期末～古墳初頭になる可能性が高い。住居形状、柱の配置には古墳時代前期の住居の特徴が認められる。

87号住居出土土器観察表（拓本）

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
1	壺		2段口縁	外 口縁部は2段のヘラ刻み目。	粗砂粒を含む。	やや堅緻	鈍赤褐色	7%
2	甕	口 14	折り返し口縁	外 ヘラミガキ。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	鈍赤褐色	10%
3	甕	口 16	折り返し口縁	外 櫛描直線。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤色	17%
4	甕			外 頸部は4連止め簾状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	4%
5	台付甕	口 10	折り返し口縁	外 口縁部は無文。内 ヘラミガキ以下波状文。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	18%

87号住居出土石器観察表 PL.111

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
6	打製石斧	8.2×4.6×2.9	黒色頁岩	101.9	片面に自然面を残す。片側面を剝離調整するが肉厚である。全周縁部に剝離整形を施す。

89号住居（第132図、PL. 35）

**位置** 28-H13に位置する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。規模は長軸5.7m、短軸4.7m。西辺部は壁際には幅40cm前後、高さ5～7cmのテラス状の段が設けられている。方位はN-72°-E

**周壁、壁溝** 壁土は礫を含む黄褐色土（第V層）。壁面の検出状態は良好であり、壁高約30cmを検出する。壁溝は無し。

**主柱穴** 主柱は4本構造。4か所で主柱穴を良好に検出する。住居形状は東部が幅広でやや台形状を呈するが、主柱穴の配置もこれに従って東部の2主柱穴間が西部に比べ50cm前後広い。

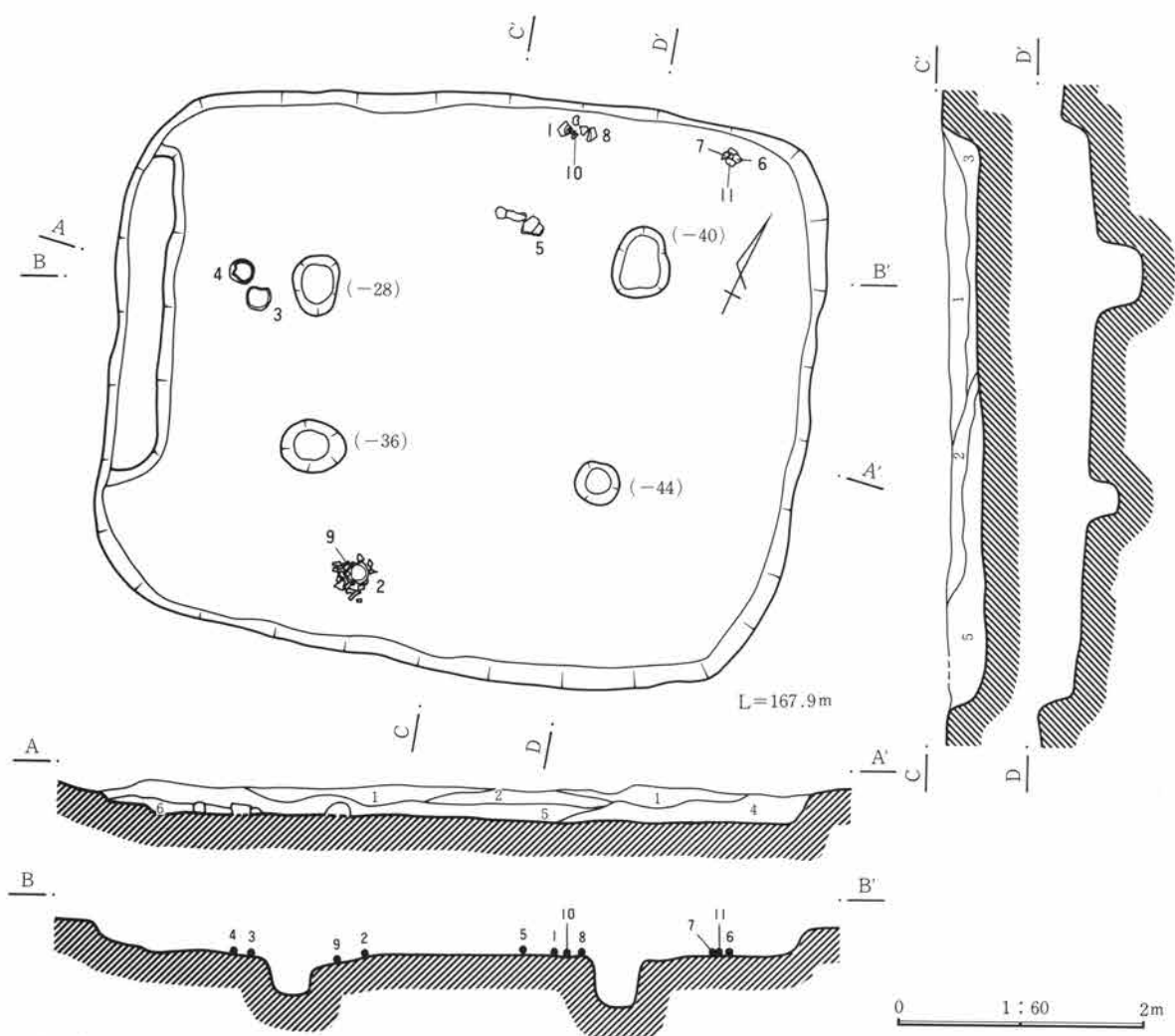
**床面** 小礫主体混土層面。

**炉跡** 不明。

**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器及び古墳前期の土器が出土する。

**時期** 弥生後期末～古墳初頭

(3) 弥生後期～古墳前期の住居跡



A・Cセクション

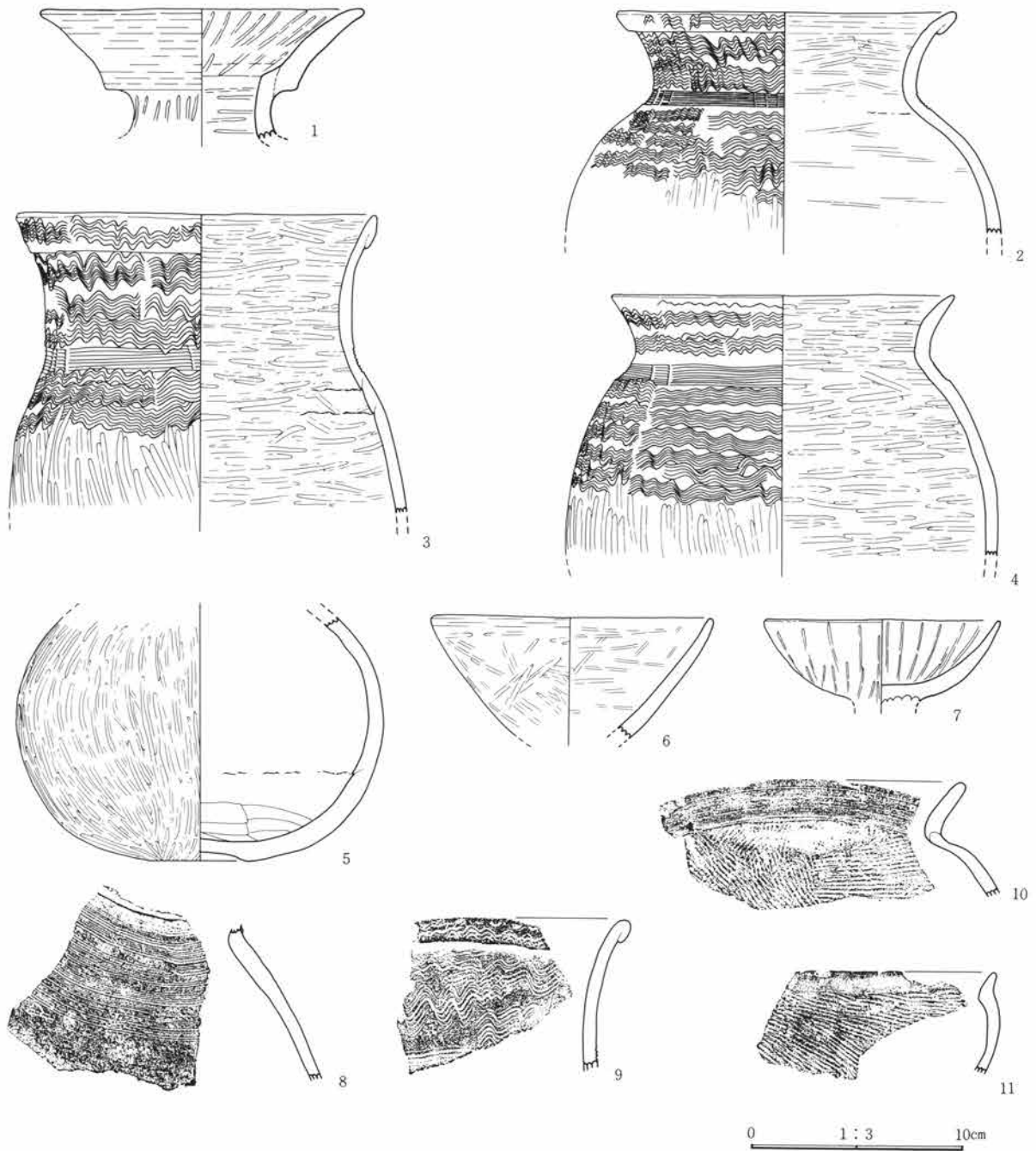
- |                                |                           |
|--------------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 中、大形の円礫を含む。              | 4 黒色 3に類似するが、やや大振りの円礫を含む。 |
| 2 暗褐色 黄褐色砂質ブロックを主体とし、大形の円礫を含む。 | 5 黒色 大振りの円礫を含む。           |
| 3 黒色 粘質、小振りの円礫を含む。             | 6 黒色 赤褐色砂質のロームブロックを含む。    |

第132図 89号住居

89号住居出土土器観察表 PL.111

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 14.6		外 口縁部はヨコナデ、頸部はヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
2	甕	口 15.9 胴 20.4	折り返し口縁	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、暗赤褐色	口縁～胴部全周
3	甕	口 16.6 胴 18.5	折り返し口縁	外 口縁～胴上部波状文、頸部3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、暗褐色	口縁部 $\frac{2}{3}$ 周 頸～胴部全周
4	甕	口 16.0 胴 20.2		外 口縁～胴上部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸～胴部全周
5	埴	胴 17.2	底部はくぼむ。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラケズリ、ナデ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	胴～底部 $\frac{2}{3}$ 周
6	高 坏	口 13.1		外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	坏部 $\frac{1}{2}$ 周
7	高 坏	口 10.9		外 口縁～坏部はヘラミガキ。 内 口縁～坏部はヘラミガキ。	砂粒、小礫を含む。 堅緻、橙色	坏部 $\frac{1}{2}$ 周

6 検出した遺構・遺物

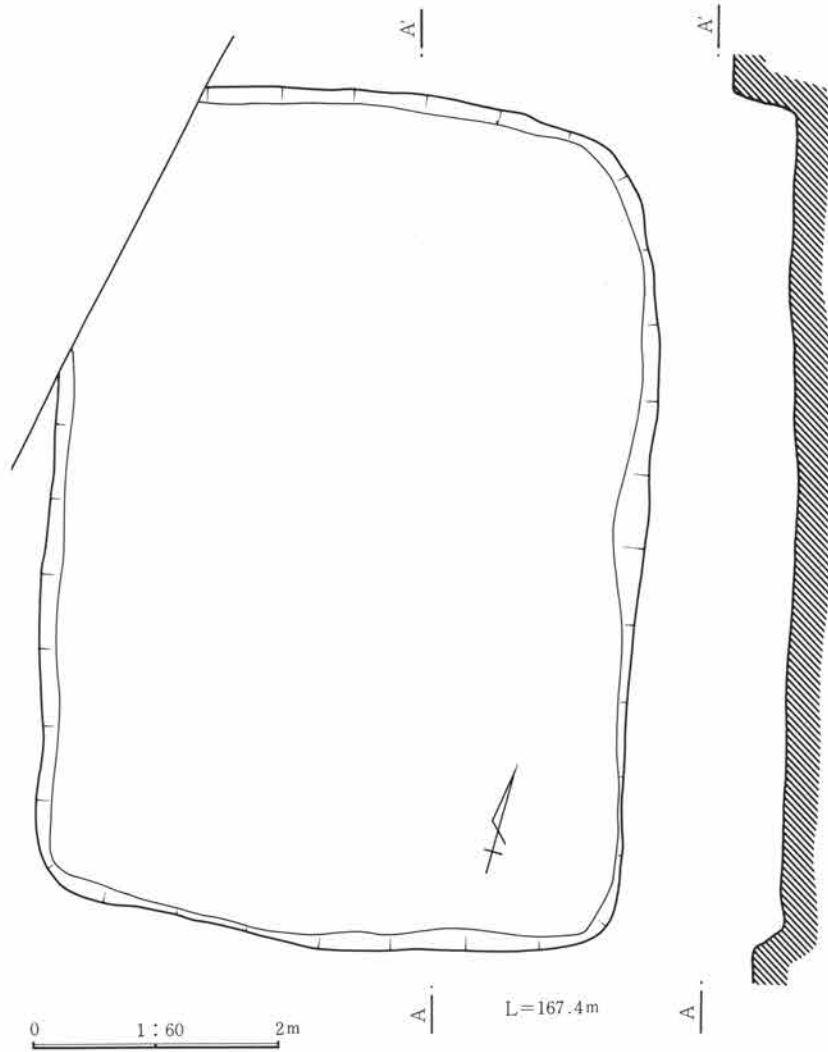


第133図 89号住居出土遺物

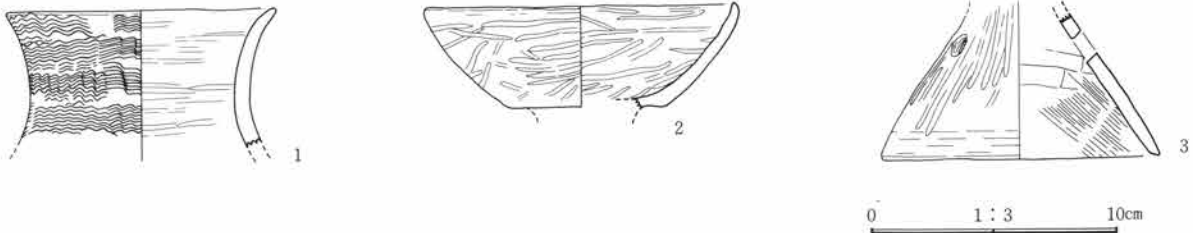
89号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
8	壺		頸部に突帯	外 肩部は櫛描直線文。内 ヘラナデ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	明赤褐色	9%
9	甕	口 14	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	橙色	13%
10	甕	口 16		外 胴部はハケメ。内 口縁部はハケメ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	23%
11	鉢	口 10		外 胴部はハケメ。内 胴部はナデ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	暗赤褐色	29%

90号住居 (第134図)  
 位置 29-H18に位置する。  
 形状、規模、方位 隅丸長方形を呈する。北西コーナー部は調査区境のため明確に検出できない。規模は長軸6.8m、短軸4.8m。方位はN-13°-W。本住居は著しい湧水と土砂の崩落のため詳細な調査ができなかった。  
 周壁、壁溝 壁土は礫層を含む黄褐色土(第V層)。壁溝は不明。  
 支柱穴 不明。  
 床面 礫を含む黄褐色土面。  
 炉跡 不明。  
 遺物出土状態 出土遺物は少ない。覆土中より弥生土器、古式土師器の破片が出土している。  
 時期 弥生後期末～古墳初頭。



第134図 90号住居



第135図 90号住居出土遺物

90号住居出土土器観察表 PL.112

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 10.7		外 口縁～頸部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周

6 検出した遺構・遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
2	高坏	口 12.6	坏部は下端に段を作る。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	坏部全周
3	高坏(?)	脚 11.0 孔 1.0	脚部円孔は3個。	外 ヘラミガキ、ヨコナデ。 内 ナデ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、褐色	脚部1/2周

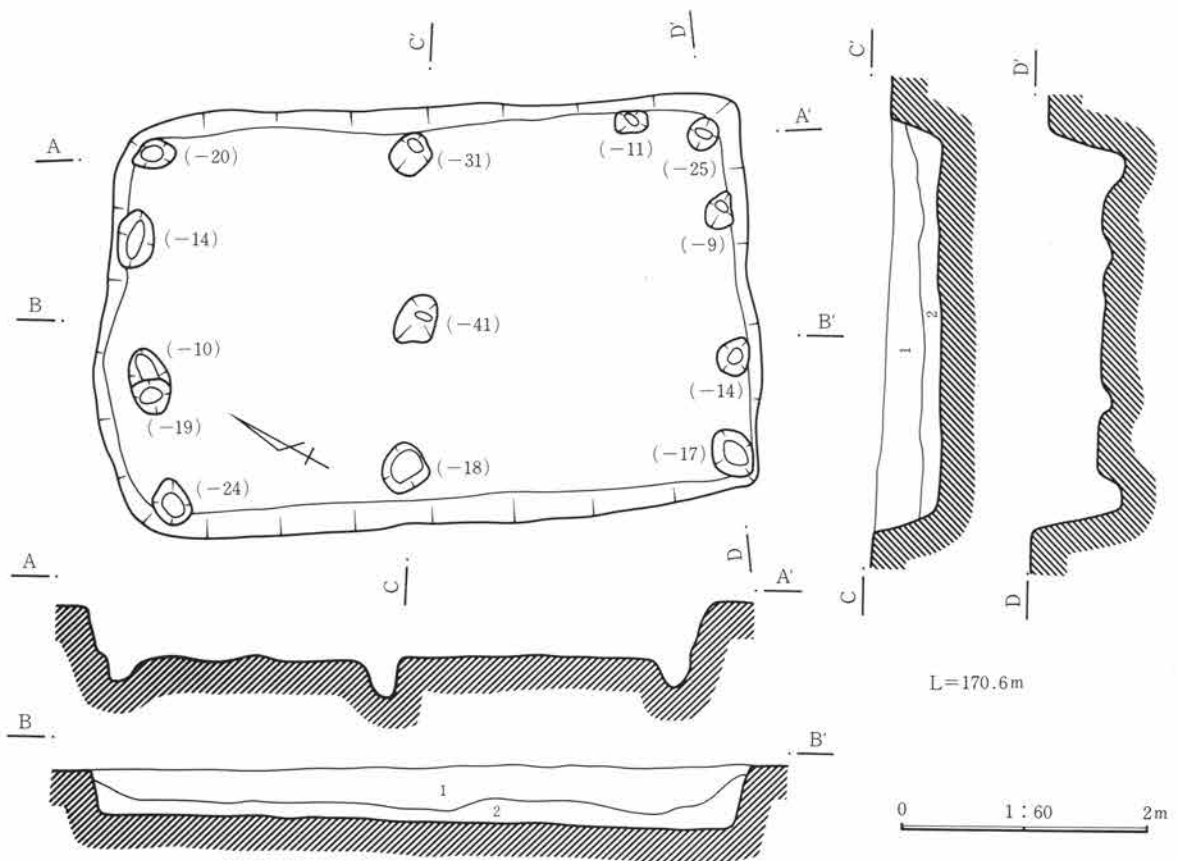
195号住居 (第136図、PL. 36)

位置 50-G21に位置する。

形状、規模、方位 隅丸長方形を呈する小型の住居である。規模は長軸5.4m、短軸3.3m。方位はN-31°-W。北西部の周壁が壁土の崩れによるものかやや乱れている。

周壁、壁溝 壁土は小礫を多量にふくむ褐色土 (第V層)。壁面の検出状態は良好。壁高40cm前後を測る。壁溝は検出できない。

支柱穴 住居の中央部に1か所と四隅コーナー部にそれぞれ1か所、その他周壁に沿って円形ピットを検出



B・Cセクション

- 1 暗灰褐色 粘性を欠く。浅間C軽石、ローム粒を含む。
- 2 暗灰褐色 粒子は細かい。浅間C軽石、ローム粒を含む。

第136図 195号住居

(3) 弥生後期～古墳前期の住居跡

する。中軸線上のピットを中心にこれらが柱穴として機能していたものと思われる。

**床面** 礫を多量に含む褐色土面を平坦に固く踏み固めている。

**炉跡** 不明。焼土帯など検出できない。

**遺物出土状態** 出土遺物は非常に少ない。

**時期** 弥生後期～古墳前期。

205号住居 (第137図、PL. 36)

**位置** 52-G37に位置する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。規模は長軸4.8m、短軸3.8m。方位はN-15°-E。

**周壁、壁溝** 壁土は褐色粘質土(第V層)。南東コーナー部を中心に壁溝が巡る。

**主柱穴** 西側周壁際に深さ10~24cmのピットが3個、その他不規則な位置に多数のピットを見るが、明確に主柱穴と認められない。

**床面** 床面は平坦な褐色粘質土面。

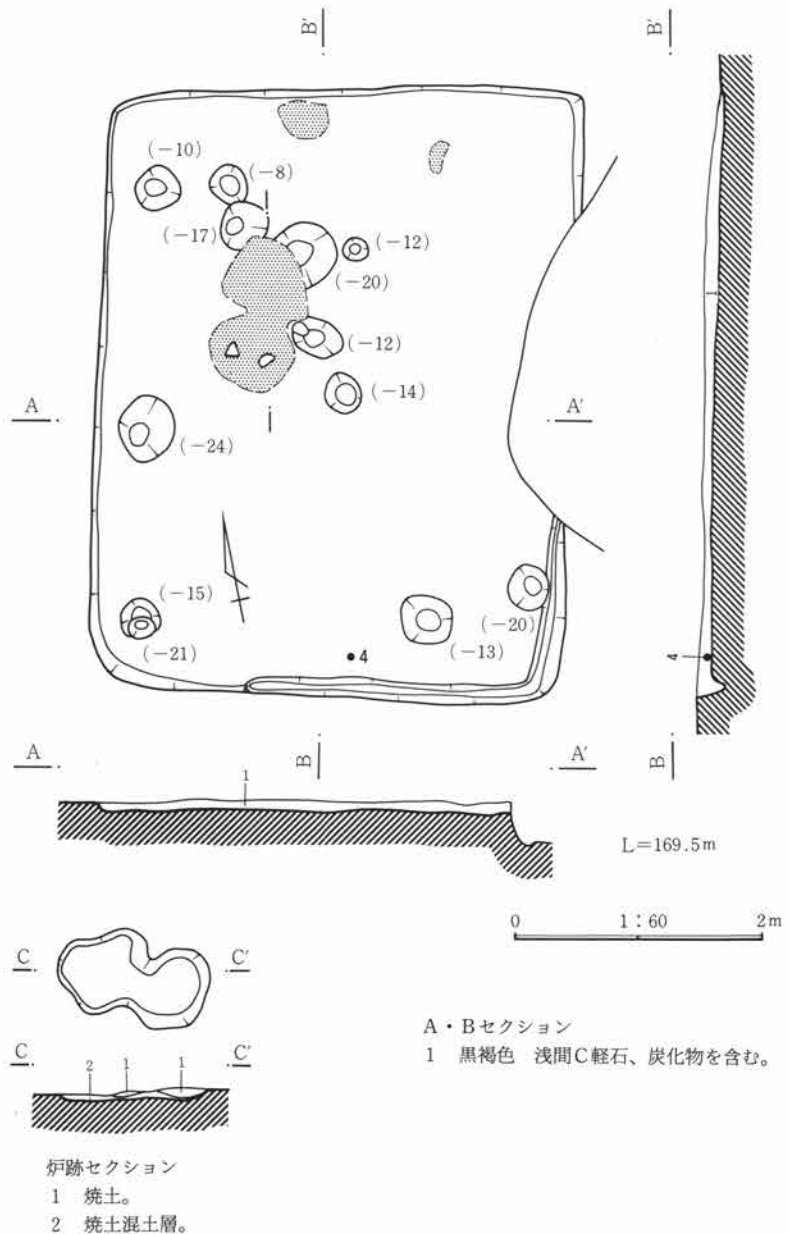
**炉跡** 中央部やや北西コーナー寄りに地床炉を見る。焼土帯は長円形に広がっており、長径1.2mに及ぶ。掘り方はひょうたん形に2つの落ち込みが連結した状態で認められる。

**遺物出土状態** 遺物は少ない。

床面上、覆土中より弥生土器、古式土師器破片が数点出土する。

**時期** 弥生後期末～古墳初頭。

**他の遺構との関係** 206号住居と東辺部で重複する。本住居の方が新しい。



第137図 205号住居



6 検出した遺構・遺物



第138図 205号住居出土遺物

205号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
1	甕		折り返し口縁	外 口縁部はヨコナデ、口辺部は波状文。	砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	6%
2	甕		受け口状口縁	外 ヨコナデ。内 ヨコナデ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	灰白色	4%
3	甕	口 12	受け口状口縁	外 ヨコナデ。内 ヨコナデ。	砂粒を含む。	やや堅緻	灰白色	12%
4	台付甕	口 9		外 ヘラミガキ。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	22%

219号住居 (第140図、PL. 37)

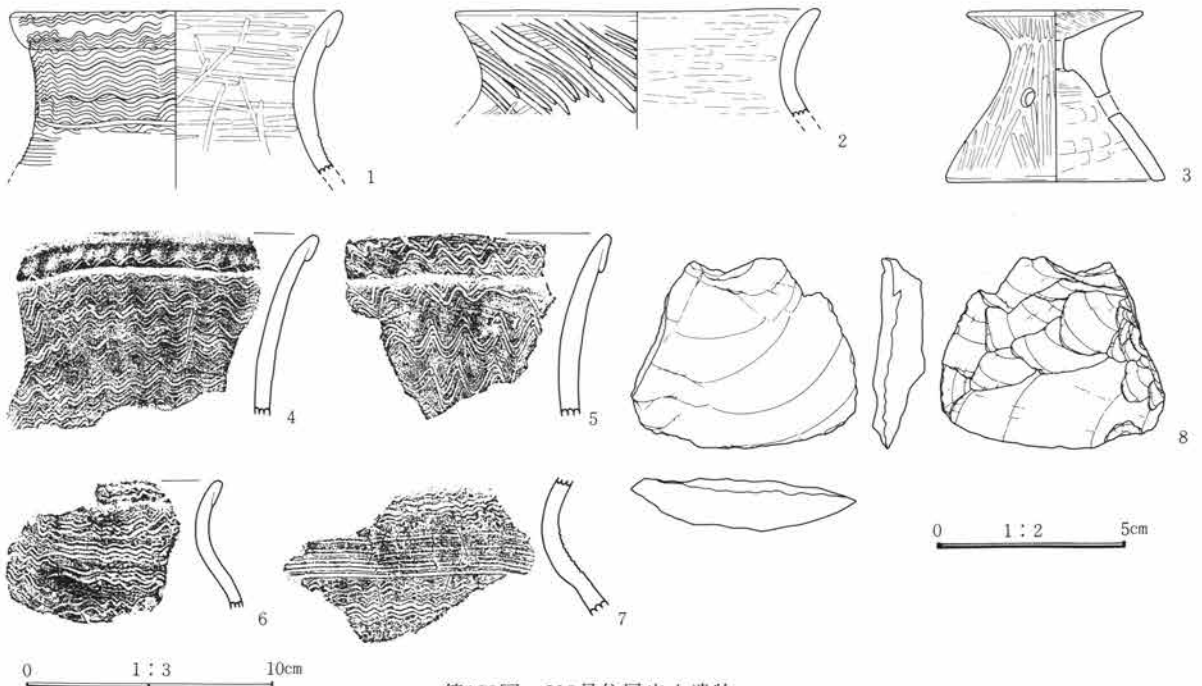
位置 42-G37に位置する。

形状、規模、方位 隅丸長方形を呈する。規模は長軸6.5m、短軸5.8m。方位はN-80°-W。

周壁、壁溝 壁土は小礫を含む褐色土 (第V層)。壁溝は無し。

主柱穴 主柱は4本構造。深さ30cm前後の円形ピットを4か所で検出する。南周壁際に不整形なピットがみられるが、本住居に伴う貯蔵穴になると思われる。

床面 礫を多量に含む平坦な褐色土面を造っている。南東コーナー部がテラス状の段になり、炭化材が集積



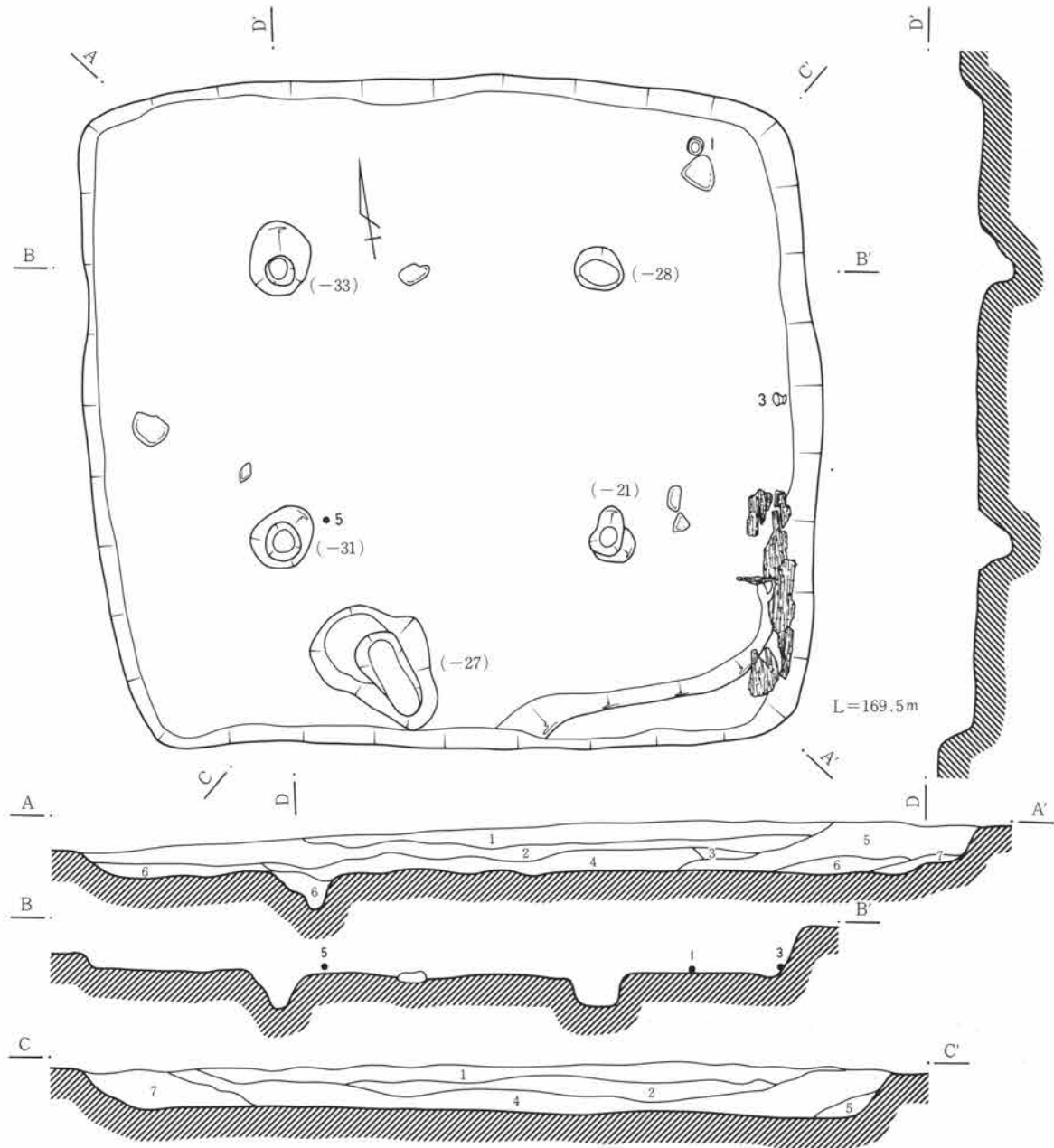
第139図 219号住居出土遺物

している。住居の構造材か。火災に遭った可能性が濃い。

炉跡 不明確。焼土帯など検出できない。

遺物出土状態 北周壁際床面上に古式土師器の器台完形品、弥生土器の甕の口縁～頸部全周個体が出土している。覆土中の土器は総て弥生後期第3期に属するものである。

時期 弥生後期末～古墳初頭



A・Cセクション

- |                       |                          |
|-----------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 粘質、浅間C軽石を多量に含む。 | 5 暗褐色 黄褐色土をより多く含む。       |
| 2 暗褐色 黄褐色粒子を含む。酸化気味。  | 6 暗褐色 黄褐色、黒褐色土の混土層。      |
| 3 暗褐色 5層に黄褐色小ブロックを含む。 | 7 黒褐色 粘性を欠く、浅間C軽石を微量に含む。 |
| 4 暗褐色 黄褐色土少量含む。円礫が点在。 |                          |

0 1:60 2m

第140図 219号住居

6 検出した遺構・遺物

219号住居出土土器観察表 PL.112

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 13.0	折り返し口縁。	外 口縁～口辺部は波状文、頸部は簾状文又は直線文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	口縁～頸部全周
2	甕	口 14.5		外 口縁～胴上部はハケメ後描斜行直線文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、暗褐色	口縁～頸部全周
3	器台	器受 6.9 高 6.8	円孔は3個	外 ヘラミガキ。 内 器受部はヘラミガキ、脚部はヘラナデ。	砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	器受部全周 脚部全周

219号住居出土土器観察表（拓本）

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
4	甕	口 18	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	やや堅緻	明黄褐色	17%
5	甕	口 16	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	14%
6	台付甕	口 14	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	鈍赤褐色	12%
7	台付甕			外 頸部は等間隔止め簾状文。	砂粒を含む。	堅緻	明赤褐色	13%

219号住居出土石器観察表 PL.112

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
8	刃器	5.0×6.0×1.4	黒色頁岩	45.0	やや横長の剥片の片面のみ粗い二次剥離調整を施している。刃部はU字状で、細かな剥離使用痕が認められる。

220号住居（第141図、PL. 38）

位置 35-G30に位置する。

形状、規模、方位 隅丸長方形を呈する。東辺部は調査区域外。規模は長軸5.2m前後、短軸4.7m。方位はN-72°-E。

周壁、壁溝 壁土は小礫を多量に含む褐色土（第V層）。検出状態は良好。壁高20～30cmを検出する。壁溝は無し。

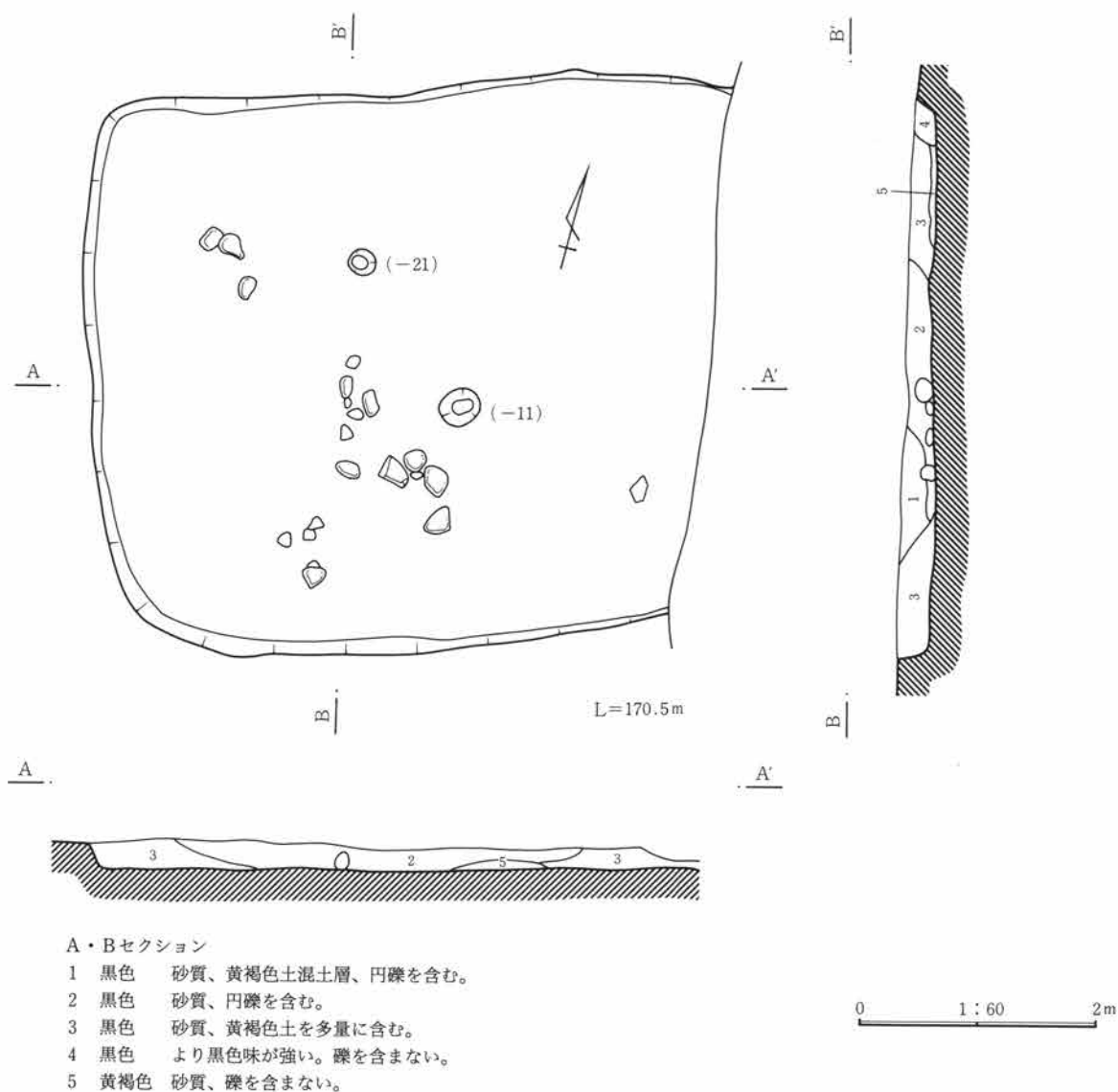
支柱穴 不明確。深さ10～20cmの小ピットを2か所に検出するが、支柱穴としては不明確である。中央部のピットは、ほぼ中軸線に位置することから支柱穴の可能性も考えられる。

床面 床面は小礫を含む褐色土面。

炉跡 不明。

遺物出土状態 出土遺物なし。床面上に拳大の円礫が多数散在する。これらは投棄、その他人為によるものか不明である。

時期 弥生後期～古墳前期



第141図 220号住居

### 230号住居 (第142図、PL. 38)

**位置** 49-G44に位置する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。西南コーナー部は212号住居と、北半部は214号住居と重複しており、不明瞭。規模は短軸5.5m。方位はN-15°-E。

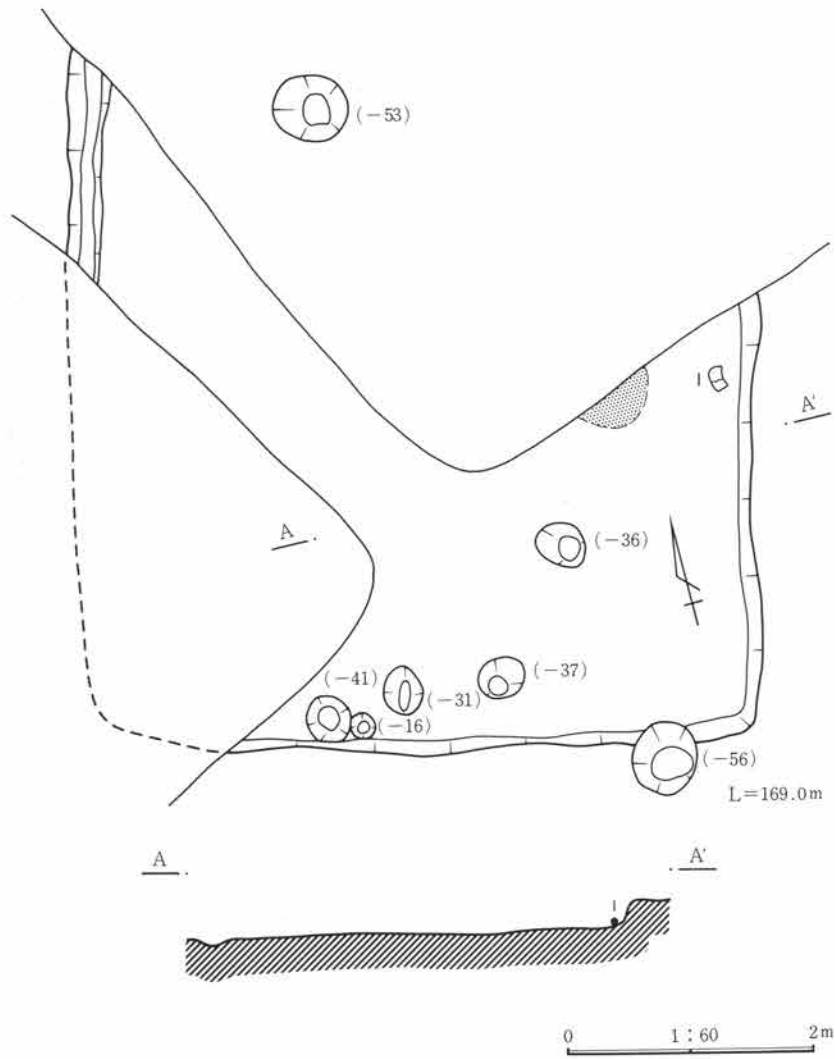
**周壁、壁溝** 壁土は黄褐色土 (第V層)。西辺で壁溝を検出する。溝幅は20~30cm。深さは15~20cm。

**主柱穴** 主柱は4本構造と思われる。東南主柱穴の位置に深さ36cmの円形ピットを検出する。214号住居内に径60cm程の円形ピットをみるが本住居の主柱穴の可能性が高い。

**床面** 床面は黄褐色土で平坦に踏み固めている。

**炉跡** 不明。東側主柱穴間に地床炉と思われる焼土帯を検出する。

6 検出した遺構・遺物

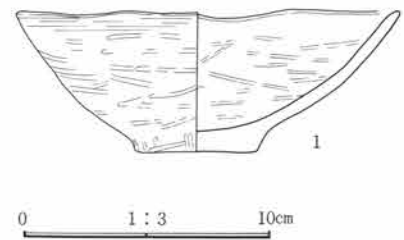


第142図 230号住居

**遺物出土状態** 出土遺物は少ない。弥生土器、鉢が床面上5cmより出土している。

**時期** 弥生後期～古墳前期。

**他の遺構との関係** 212号、214号住居に切られており、両住居よりも本住居の方が古い。



第143図 230号住居出土遺物

230号住居出土土器観察表 PL. 112

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	鉢	口 15.2 高 5.5	口縁部は凹凸が目立つ。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、淡赤橙色	口縁部%周

231号住居 (第144図、PL. 39)

位置 34-H12に位置する。

形状、規模、方位 隅丸方形を呈する。北辺部は形状不明確。規模は東西5.9m。方位はN-10°-W。

周壁、壁溝 北半部は黒色土が深く周壁は明確に検出できない。壁溝は認められない。

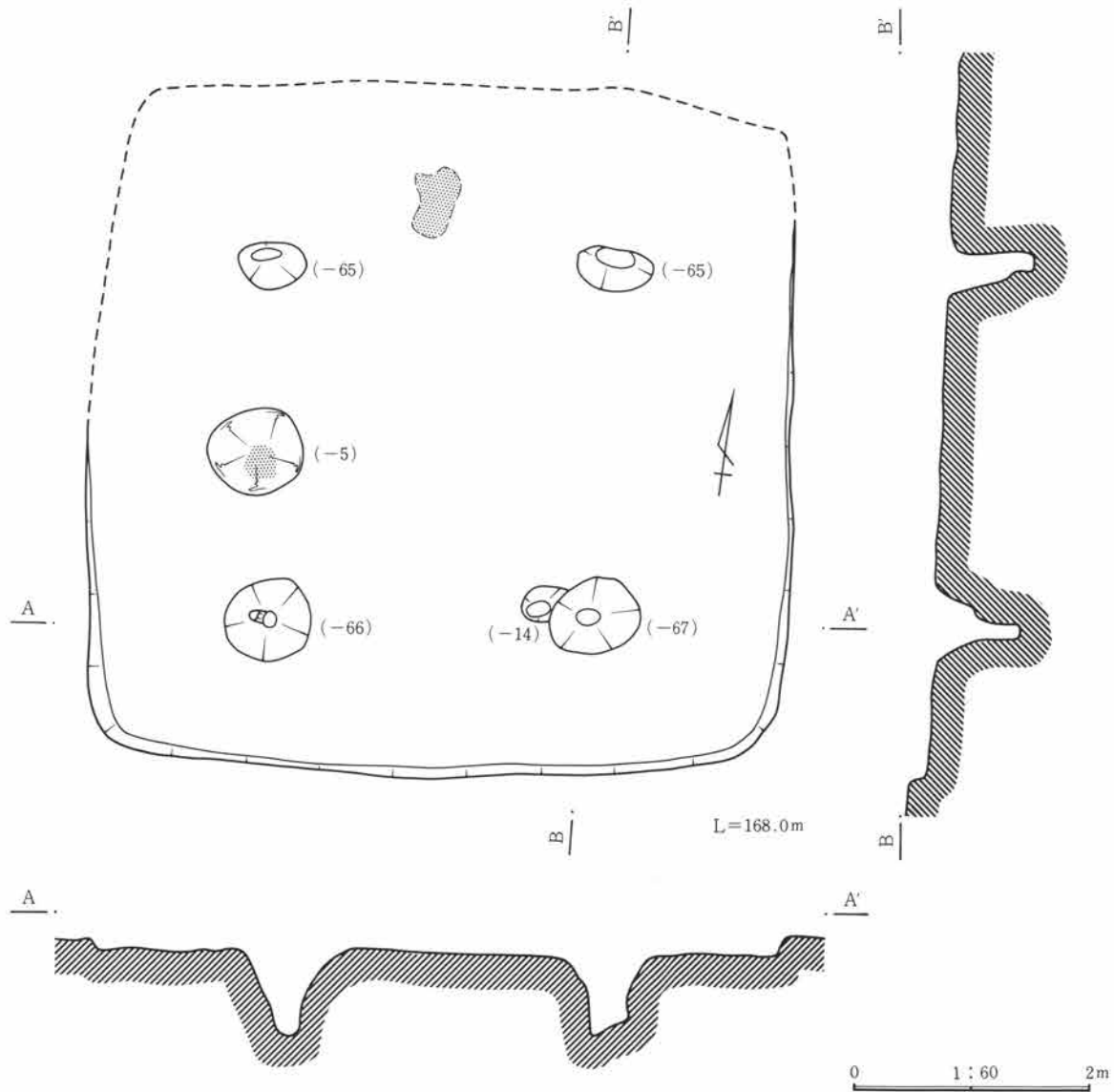
支柱穴 支柱は4本構造。断面ロート状の支柱穴を4か所で良好に検出する。

床面 礫を含む黄褐色土面を平坦に踏み固めている。

炉跡 西側支柱穴間に地床炉を設けている。炉跡中央部に焼土が良好に生成しており、円形掘り方を伴っている。このほか北側支柱穴間、外寄りに焼土帯が見られる。これも炉跡の可能性もある。

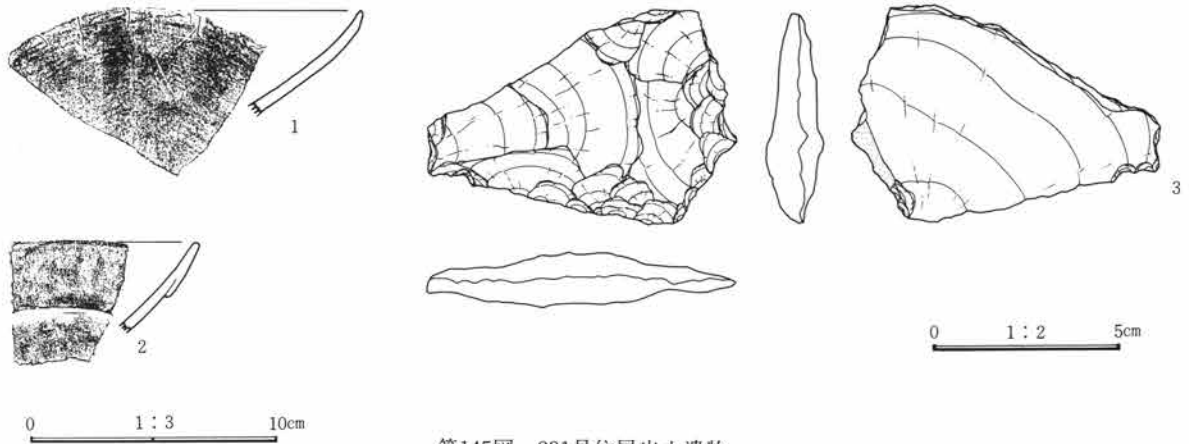
遺物出土状態 出土遺物は少ない。

時期 弥生後期～古墳前期。



第144図 231号住居

6 検出した遺構・遺物



第145図 231号住居出土遺物

231号住居出土土器観察表（拓本）

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
1	高坏	口 13		外 ヘラミガキ。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	鈍橙色	24%
2	鉢		折り返し口縁	外 ヘラミガキ。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	明赤褐色	9%

231号住居出土石器観察表 PL. 112

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
3	刃部	5.7× 8.3× 1.5	灰色安山岩	56.5	横長剝片で刃部の片面に剝離調整を加えている。刃部はくの字状。

237号住居（第146図、PL. 39）

位置 44-H11に位置する。

形状、規模、方位 形状不明。南半部は調査区境のため検出することができない。規模不明。方位はN-32°-W。

周壁、壁溝 壁土は青灰色土。

支柱穴 不明。1か所深さ20cm程の円形ピットを検出する。

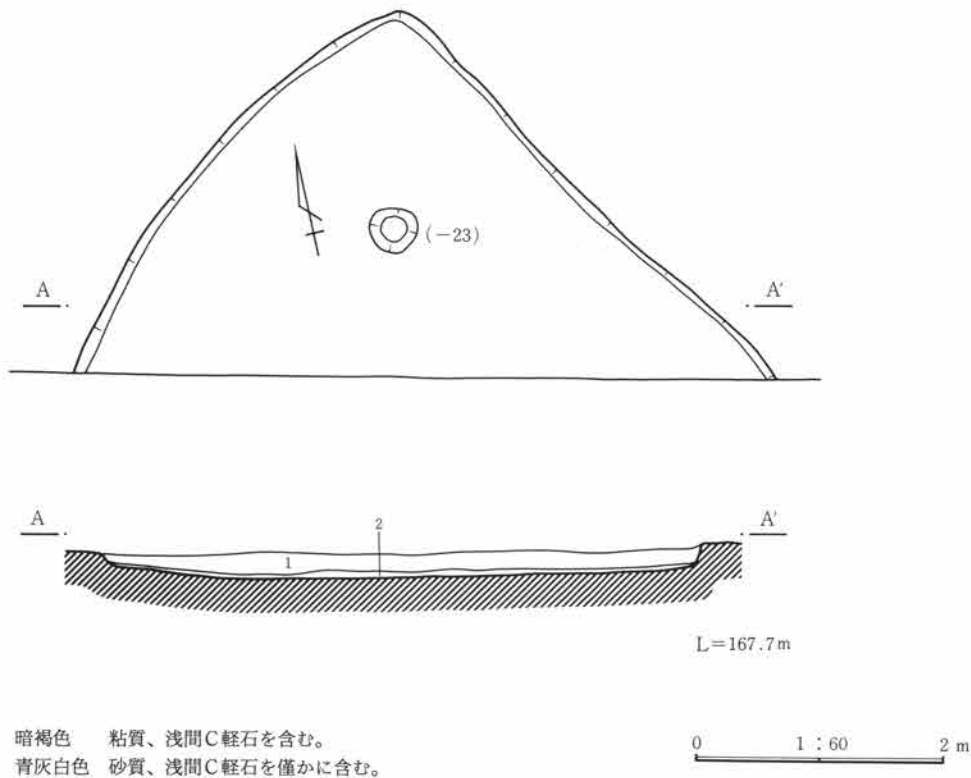
床面 不明。

炉跡 堅い面が検出されない。

遺物出土状態 出土遺物はほとんど無し。

時期 弥生後期～古墳前期。





第146図 237号住居

260号住居 (第147図、PL. 39・40)

**位置** 30-H24に位置する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。南東部に自然流路による攪乱がある。規模は長軸8.5m、短軸7.2m。方位はN-30°-W。

**周壁、壁溝** 壁土は青灰色シルト質土。

周壁は直線的。検出状態は良好。壁溝は南側を除いては全周する。壁溝幅は20cm、深さ10cm。

**支柱穴** 南側支柱穴は攪乱により明瞭に検出できない。攪乱部分で、床面下深さ78cm(西)、87cm(東)のピットを検出する。4支柱穴は住居の対角線上にのっている。南側周壁際に長細いピットを認めるが、これは出入部の施設に関わるピットと思われる。

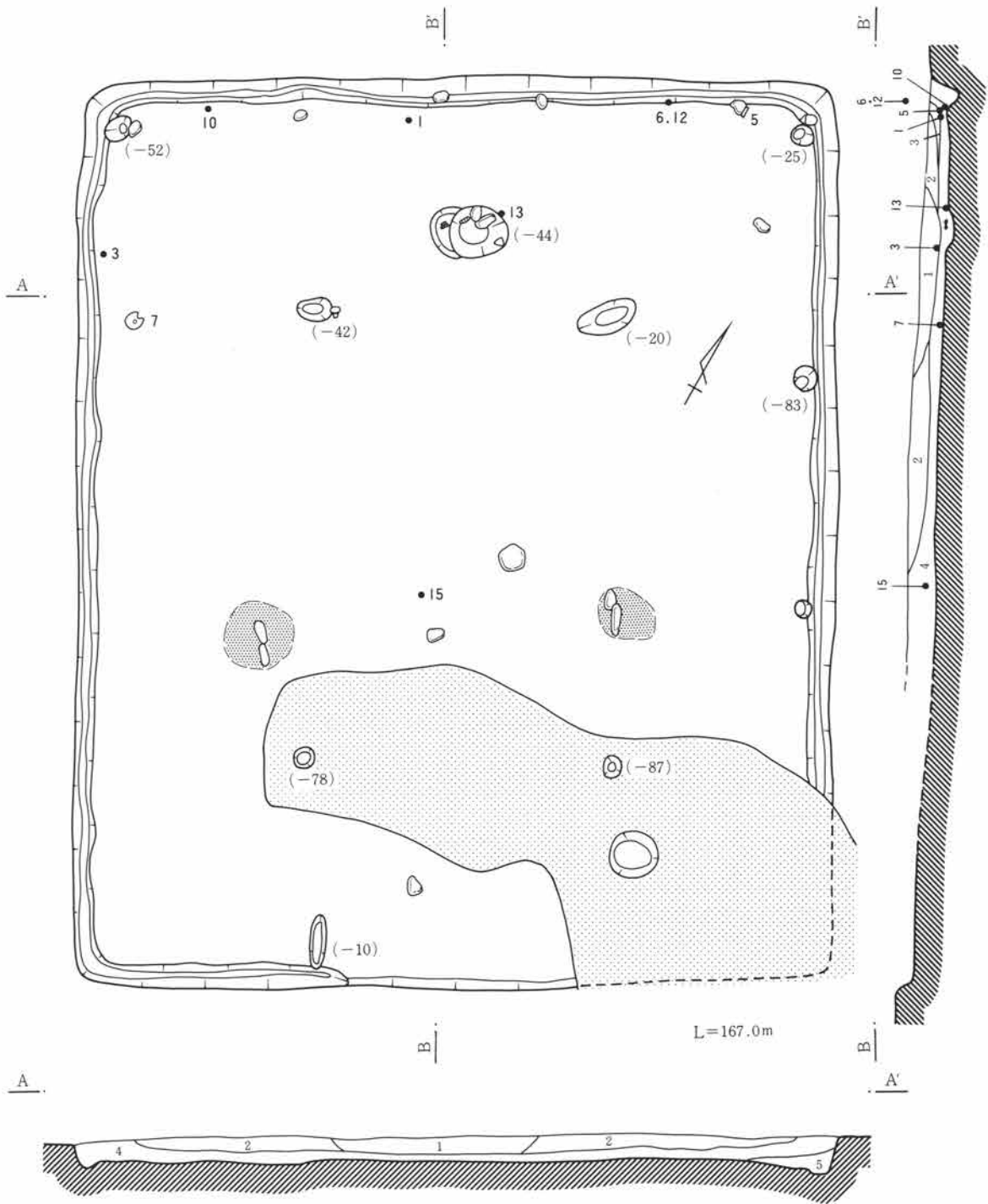
**床面** 床面は青灰色土面を平坦に踏み固めている。

**炉跡** 東側及び西側のそれぞれ2支柱間に地床炉を検出する。炉跡内には焼土帯が良好に生成し、長細い円礫を2本据えている。

**遺物出土状態** 床面上5～10cmより弥生土器が多数出土している。これらのうちに古式土師器半完形個体が数点含まれている。

**時期** 弥生後期末～古墳初頭。

6 検出した遺構・遺物

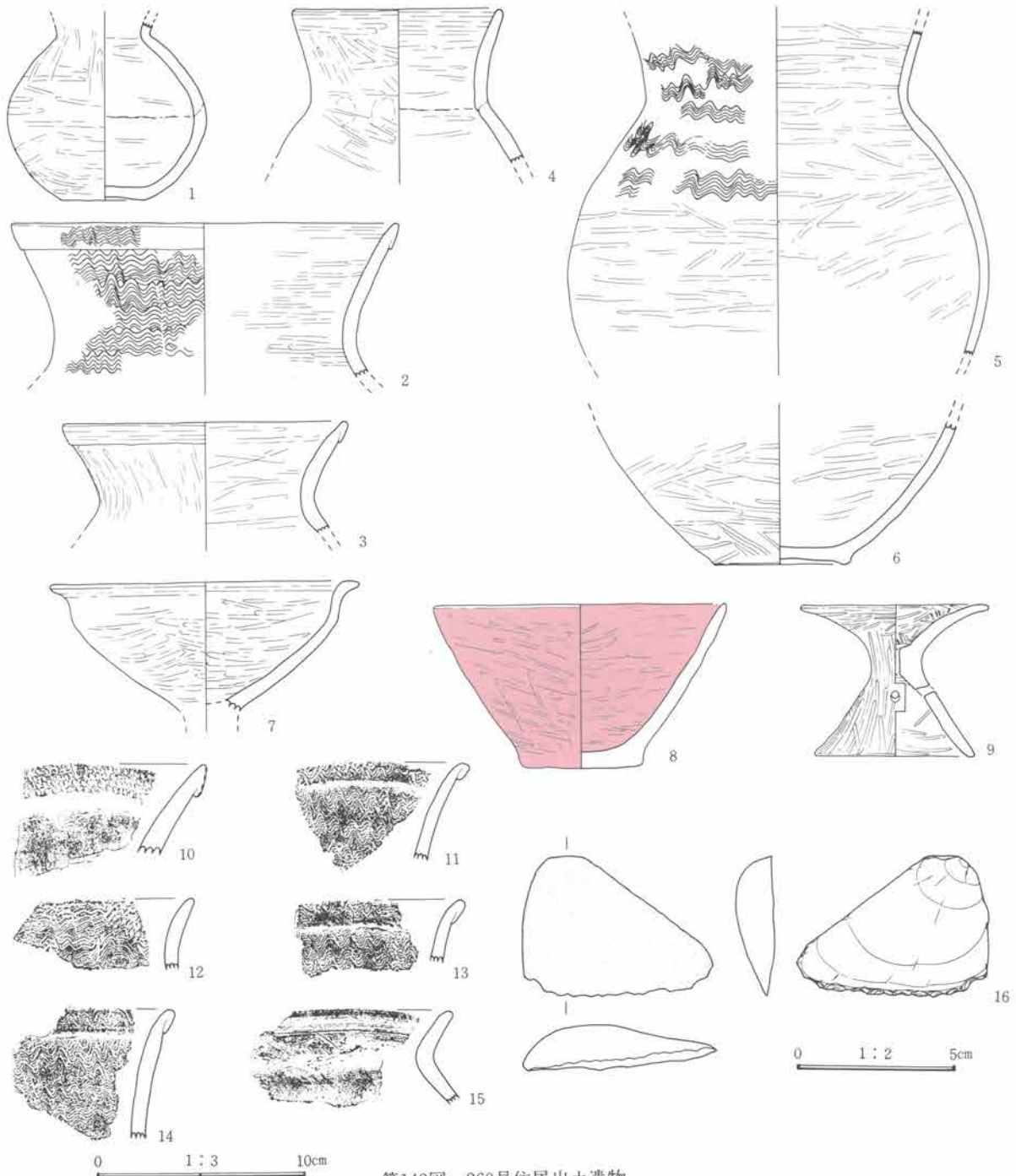


A・Bセクション

- 1 暗褐色 青灰色土を多量に含む。下面に灰と焼土が薄く見られる。
- 2 暗褐色 砂質。青灰色シルトを含む。
- 3 暗褐色 青灰白色シルトを多量に含む。
- 4 黒褐色 砂質。
- 5 黒褐色 青灰色シルトを含む。

第147図 260号住居

(3) 弥生後期～古墳前期の住居跡



第148図 260号住居出土遺物

260住居出土土器観察表 PL.112

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	胴 9.5 底 3.8		外 ヘラミガキ。 内 ナデ、ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、明褐色	頸～底部全周
2	甕	口 18.2		外 口縁～胴上部は波状文。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周

6 検出した遺構・遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
3	甕	口 13.4	折り返し口縁。	外 口縁部はヨコナデ、口辺部はヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、灰赤色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
4	壺	口 9.8	頸部外面に指オサエ痕が巡る。	外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤黒色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸部スス付着
5	甕	胴 20.0 頸 12.2		外 口辺～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、黒色	口辺～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
6	甕	底 6.4		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、黒褐色	胴下～底部 $\frac{1}{2}$ 周
7	高 坏	口 14.7		外 口縁部はヨコナデ、坏部はヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	坏部 $\frac{1}{2}$ 周
8	鉢	口 13.8 高 7.8		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩
9	器台	器受 8.9 高 7.1	中央孔径は4mm。 脚部円孔は4個。	外 ヘラミガキ。 内 器受部はヘラミガキ、脚部はナデ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	ほぼ完形

260号住居出土土器観察表（拓本）

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
10	壺		折り返し口縁	外 口縁部は刺突。内 ヘラミガキ。	小礫を含む。	堅緻	鈍橙色	8%
11	甕	口 14	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒多い。	堅緻	黒褐色	12%
12	甕	口 11		外 波状文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	灰褐色	12%
13	甕	口 16	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	暗赤灰色	10%
14	甕		折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	暗褐色	8%
15	甕	口 18		外 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒多い。	堅緻	灰赤色	13%

260号住居出土石器観察表 PL.112

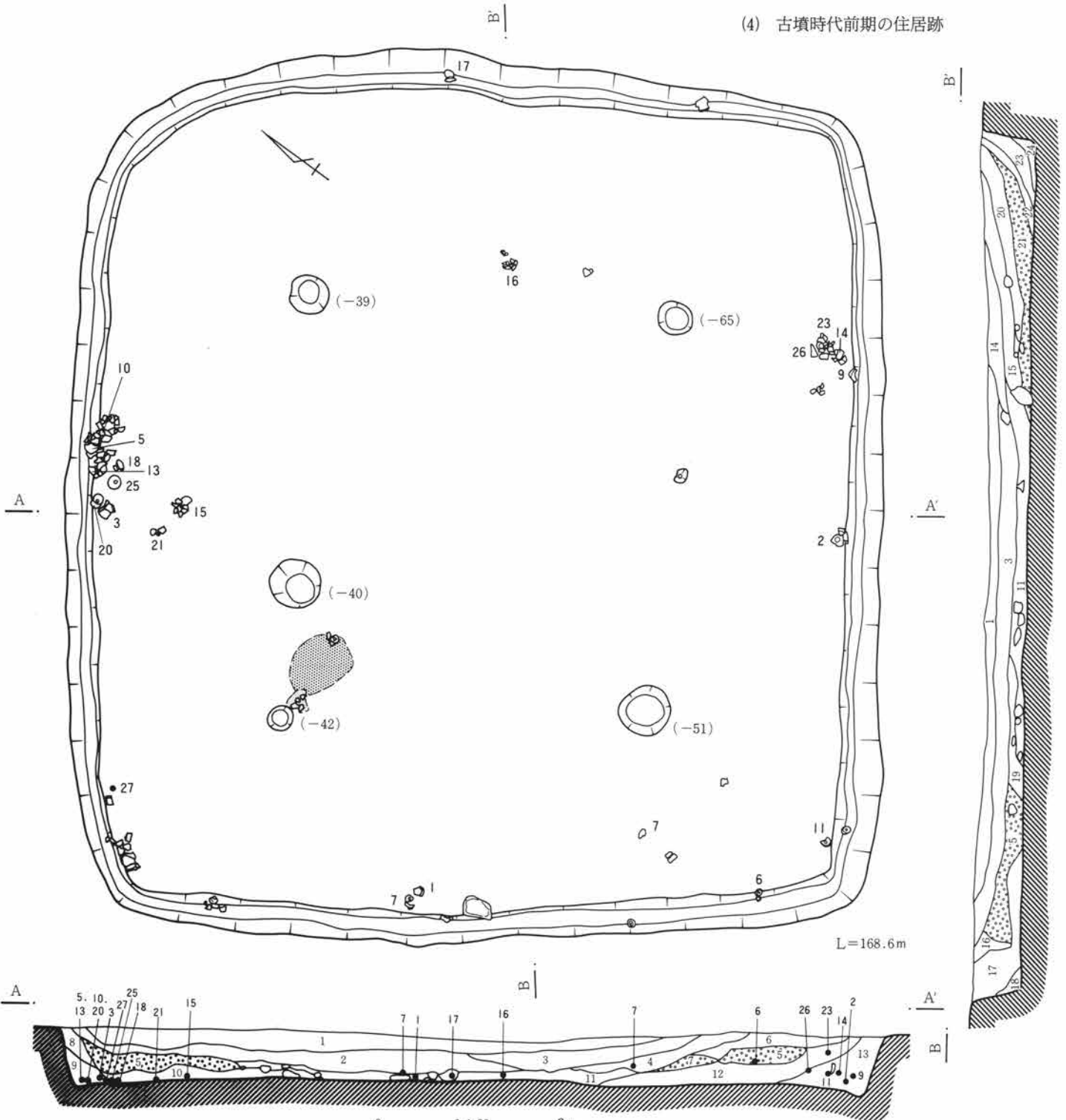
遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
16	刃器	4.4×6.1×1.5	黒色頁岩	36.3	片側自然面の剥片で一側縁を刃部としている。刃部に見られる細かい剥離は使用痕の可能性もある。

(4) 古墳時代前期の住居跡

82号住居跡（第149図、PL. 40）

位置 44-H03に位置する。

形状、規模、方位 隅丸方形。北東辺はやや膨らむ。規模は長軸9.5m、短軸8.8m。大型である。方位はN-56°-E。



A・Bセクション

- |        |                          |         |                            |        |                        |
|--------|--------------------------|---------|----------------------------|--------|------------------------|
| 1 暗褐色  | ローム粒、浅間C軽石、炭化物をブロック状に含む。 | 8 淡褐色   | ローム主体。                     | 17 暗褐色 | ローム粒を含む。浅間C軽石を殆ど含まない。  |
| 2 暗褐色  | ローム粒を縞状に多量に含む。           | 9 黒褐色   | 粘質、浅間C軽石を含まない。             | 18 黒褐色 | 炭化物を多量に含む。             |
| 3 黒褐色  | 小礫を含む。                   | 10 暗灰褐色 | 浅間C軽石を僅かに含む。               | 19 褐色  | ローム粒を多量に含む。            |
| 4 黒褐色  | 小礫を含む。炭化物が目立つ。           | 11 黒褐色  | 粘質浅間C軽石を僅かに含む。炭化物が著しく見られる。 | 20 褐色  | ローム粒を多量に含む。            |
| 5 暗灰褐色 | 浅間C軽石を多量に含む。純層に近い。       | 12 淡褐色  | 浅間C軽石を僅かに含む。               | 21 褐色  | ロームを著しく含む。浅間C軽石を多量に含む。 |
| 6 暗褐色  | 浅間C軽石、炭化物を含む。            | 13 暗褐色  | 浅間C軽石を殆ど含まない。              | 22 黒褐色 | 浅間C軽石を含む。              |
| 7 淡褐色  | 浅間C軽石を多量に含む。             | 14 暗黄褐色 | ロームを含む。                    | 23 黒褐色 | ローム主体。浅間C軽石を多量に含む。     |
|        |                          | 15 黒色   | 砂質。                        | 24 黒色  | 浅間C軽石を含む。              |
|        |                          | 16 黒褐色  | 浅間C軽石を僅かに含む。               |        |                        |

第149図 82号住居

6 検出した遺構・遺物

**周壁、壁溝** 壁土は黄褐色土(第V層)。北側の壁土は厚い円礫層で壁面は良好に検出する。壁溝は全周する。溝幅25cm深さ10cm前後。

**主柱穴** 主柱は4本構造。4か所に円形主柱穴を良好に検出する。

**床面** 床面は黄褐色土を平坦に踏み固めている。

**炉跡** 西北主柱穴の内側の傍らに地床炉らしき焼土帯を見る。

**覆土** 覆土下部は浅間C軽石を主体とする。周壁沿いでは浅間C軽石純層堆積が覆土上部に認められる。浅間C軽石降下前に廃棄されたと認められる。

**遺物出土状態** 周壁際の床面上5~10cmに完形土器、大形土器破片が多数出土している。特に床面直上より磨製石斧が2点出土しているのが注意される。

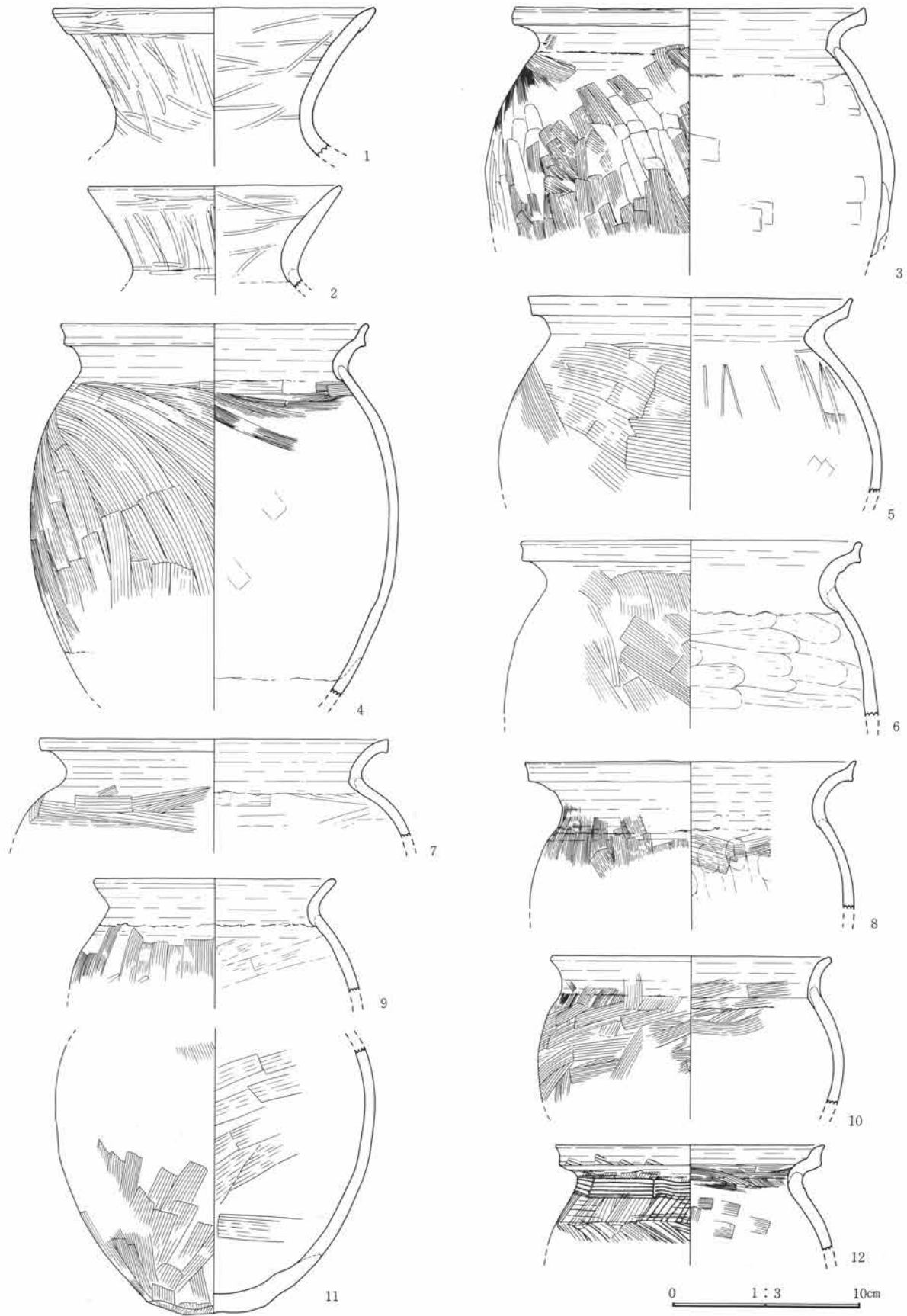
**時期** 古墳前期

**他の遺構との関係** 北東壁部分で17号墓(弥生後期)の礫床主体部を4基切っている。

82号住居出土土器観察表 PL.112・113

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 17.3	折り返し口縁。段は小さい。	外 口縁～頸部はヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
2	壺	口 13.4		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～頸部全周
3	甕	口 18.3 胴 21.5	口縁部外側は丸い面を作る。	外 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はハケメ。 内 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
4	甕	口 16.2 胴 19.4	口縁部は鋭い稜線を作って立つ。	外 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はハケメ。 内 口縁～頸部はヨコナデ、肩部はハケメ、胴部はナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
5	甕	口 16.9 胴 20.1	口縁部は強い稜線を作って立つ。	外 口縁部はヨコナデ、胴部はハケメ。 内 口縁部はヨコナデ、胴部はナデ、擦痕。	細砂粒を含む。 やや軟弱、鈍橙色	口縁～胴上部全周
6	甕	口 18.0 胴 19.6	口縁部は鋭い稜線を作って立つ。	外 口縁部はヨコナデ、胴部はハケメ。 内 口縁部はヨコナデ、胴部は指ナデ。	砂粒、小礫を含む。 やや堅緻、鈍橙色	口縁～胴上部 $\frac{1}{2}$ 周
7	甕	口 18.4	口縁端部に面を作る。	外 口縁部はヨコナデ、胴部はハケメ。 内 口縁部はヨコナデ、頸部はナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～胴上部 $\frac{1}{2}$ 周
8	甕	口 17.4 胴 16.9	口縁部は鋭い稜線を作って立つ。	外 口縁部はヨコナデ、頸部はハケメ、ヨコナデ。 内 口縁部はヨコナデ、頸部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
9	甕	口 12.5 胴 15.2		外 口縁～頸部はヨコナデ、胴上部はハケメ。 内 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
10	甕	口 14.5 胴 16.1	口縁端部に面を作る。	外 口縁部はヨコナデ、頸～胴部はハケメ。 内 口縁部はヨコナデ、頸部はハケメ、胴部はナデ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
11	甕	胴 16.7	やや丸底胴部との境は弱い稜線を作る。	外 胴部はハケメ、底部はハケメ。 内 胴部はナデ、ハケメ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	胴部～底部全周
12	甕	口 14.0	口縁部は強い稜線を作って立つ。器壁は厚い。	外 口縁部はヨコナデ、頸部は横方向のハケメを巡らす。簾状文風の止めがみられる。胴部はハケメ。 内 口縁部はヨコナデ、頸～胴部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
13	甕	胴 20.1		外 ハケメ、胴上部と下部のハケメ幅は異なる。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	胴～底部 $\frac{1}{2}$ 周
14	埴	胴 12.9	底部はやや窪む。	外 ハケメ、ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	胴上～底部 $\frac{1}{2}$ 周
15	埴	口 7.4 高 14.4 底 4.0	内面に指オサエ痕巡る。平底。	外 胴部はヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、胴部はハケメ、ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、明赤褐色	口縁部全周 頸～底部 $\frac{1}{2}$ 周
16	埴	胴 14.0	丸底。	外 ハケメ、ヘラミガキ。 内 頸部はハケメ、胴部はヘラナデ、底部はハケメ。	砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	頸～底部 $\frac{1}{2}$ 周
17	埴	口 10.0 高 7.1	口縁部は長く直状。下端部に段を作る。	外 口縁～頸部はヨコナデ、肩部はハケメ、胴部はヘラナデ。 内 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、淡橙色	完形

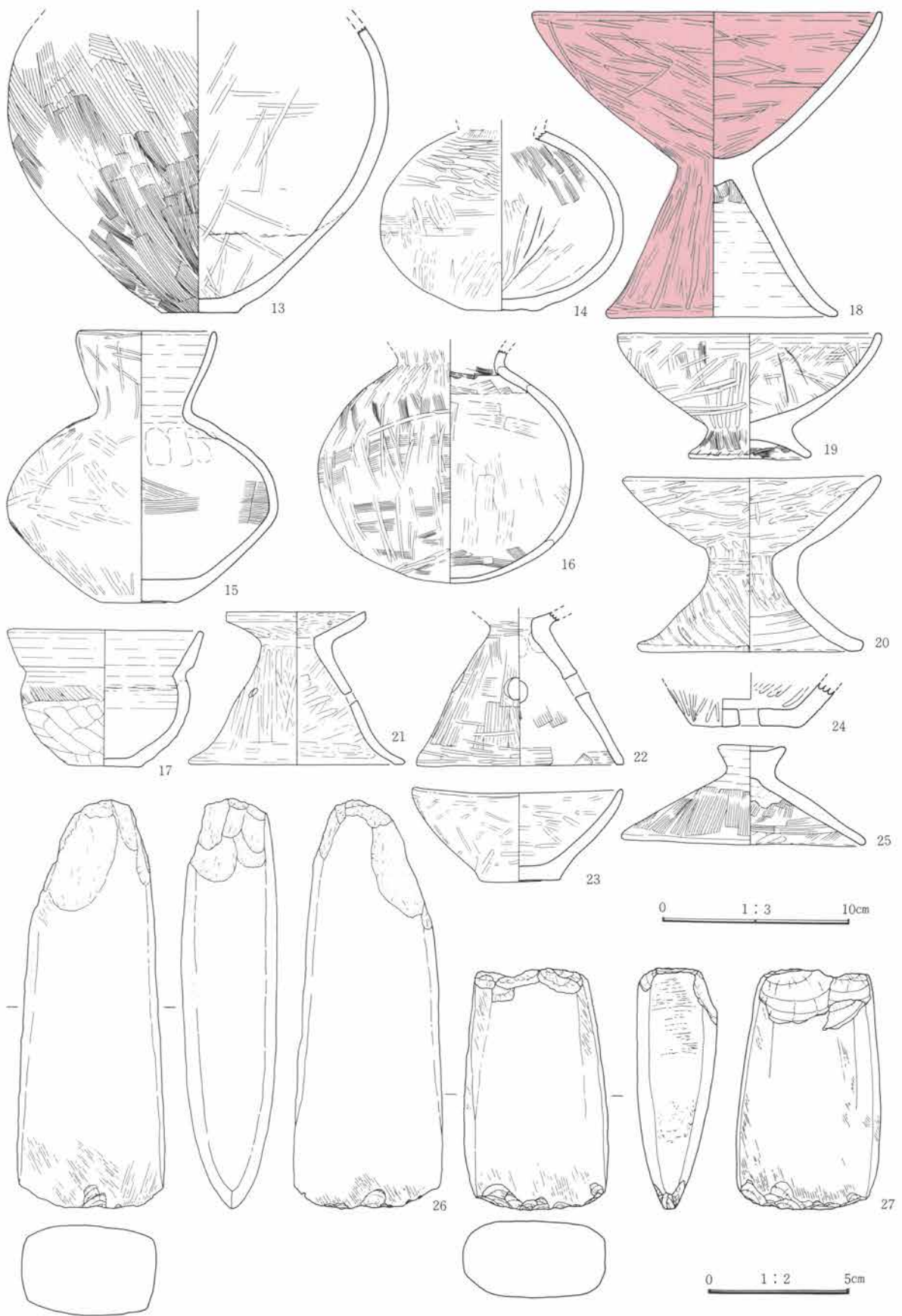
(4) 古墳時代前期の住居跡



第150図 82号住居出土遺物(1)



6 検出した遺構・遺物



第151図 82号住居出土遺物(2)

## (4) 古墳時代前期の住居跡

82号住居出土土器観察表 PL. 113

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
18	高坏	口 18.2 高 16.0		外 口縁部はヨコナデ、坏~脚部ヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、坏部はヘラミガキ、脚部はハケメ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	完形 内外面丹彩
19	高坏	口 13.8 高 6.6	脚部は小さい。	外 坏部はヘラミガキ、脚部はハケメ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はハケメ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、鈍褐色	口縁~底部1/2周
20	器台	器受13.5 高 9.1	中央孔は大きく、面は丸みがある。径は2.3×2.7cm	外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はハケメ、ナデ。	細砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	完形
21	器台	器受 7.4 高 8.0 中央孔2.0	器受端部に面を作る。脚部円孔は3個。	外 器受端部はヨコナデ、器受、脚部はヘラミガキ。 内 器受部はヘラミガキ、脚部はヘラケズリ後、粗いヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍褐色	器受部1/2周 脚部全周
22	器台	脚 10.9		外 ハケメ、ヘラミガキ。 内 ナデ、ハケメ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	脚部全周
23	鉢	口 11.0 高 4.6	器体はやや内湾する。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁部1/4周
24	甔	底 5.6 孔 1.0	底部に1か所の円孔あり。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	底部全周
25	蓋	径 13.0 高 5.2		外 つまみ部はヨコナデ、蓋部はハケメ。 内 蓋部はハケメ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、鈍褐色	完形

82号住居出土石器観察表 PL. 114

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
26	磨製石斧	14.3×5.3×3.4	輝緑岩	415.0	器面は滑らかに磨かれている。刃部に使用による擦痕、剝離痕がある。基部には打撃による著しい破損がある。
27	磨製石斧	8.4×5.2×2.8	変質玄武岩	233.3	器面は滑沢に磨かれている。刃部、基部は著しい破損ある。基部の破損は打撃によるとみられる。

## 85号住居 (第152図、PL. 41)

位置 34-H03に位置する。

形状、規模、方位 不明。

周壁、壁溝 周壁の有無は不明、竪穴住居ではない可能性もある。壁溝は検出できない。

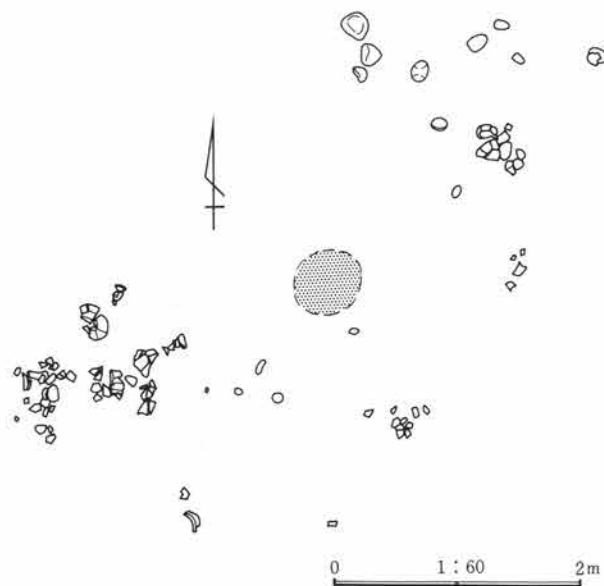
支柱穴 不明。

床面 黒色土(第IV b層)上に固い面を確認することはできない。

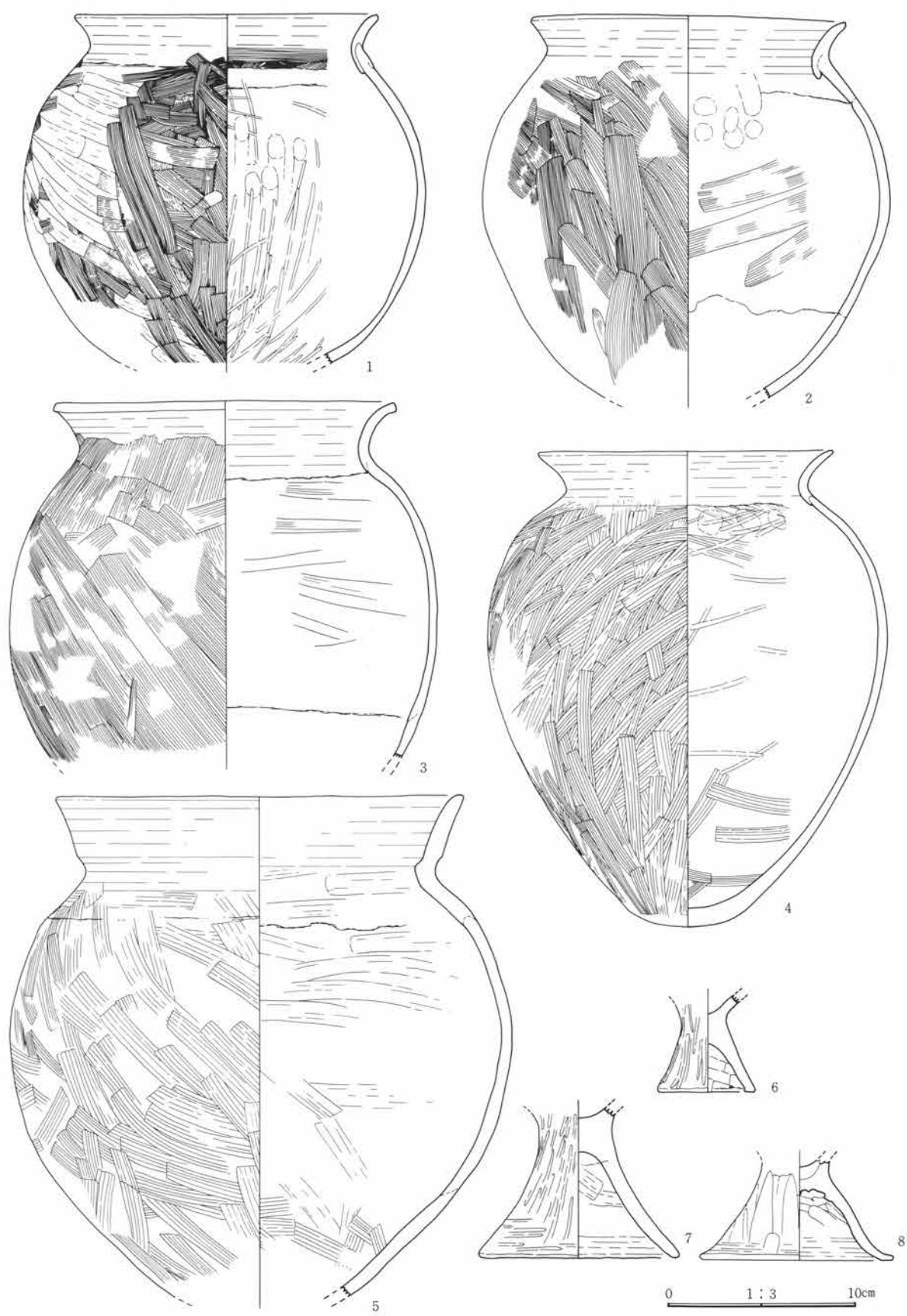
炉跡 床面中央部に径50cm程の地床炉が設けられている。

遺物出土状態 床面上に多数の土器大形破片が出土する。

時期 古墳前期



第152図 85号住居



第153図 85号住居出土遺物

85号住居出土土器観察表 PL.114

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 16.0 胴 21.1	内面胴上部に指オサエ痕が巡る。	外 口縁部はヨコナデ、胴部はハケメ、ヘラナデ。 内 口縁部はヨコナデ、頸部はハケメ、胴部はヘラミガキ。	砂粒を多量に含む。 堅緻、灰赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
2	甕	口 16.5 胴 21.3	内面に接合痕が目立つ。	外 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はハケメ。 内 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はハケメ、ナデ。	細砂粒多量含む。 堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
3	甕	口 18.1 胴 22.5	口縁端部は角ばる。	外 口縁部はヨコナデ、頸～胴部はハケメ。 内 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	細砂粒多量含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～胴部全周
4	甕	口 15.6 高 24.6	丸底	外 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はハケメ。 内 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はハケメ、ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周 スス附着
5	甕	口 21.2 胴 26.4	口辺下端部に段を作る。	外 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はハケメ。 内 口縁～頸部はヨコナデ、ハケメ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～胴部全周
6	台付甕(?)	脚 5.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	脚部全周
7	高坏(?)	脚 10.6		外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ、ナデ、裾部はヨコナデ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	脚部全周
8	高坏	脚 10.2	坏部との接合部に剥離面を見る。	外 ヘラケズリ、裾部はヨコナデ。 内 ハケメ、裾部はヨコナデ。	細砂粒少量含む。 堅緻、灰褐色	脚部全周 裾部 $\frac{1}{2}$ 周

## 200号住居 (第154図、PL. 41)

位置 56-G35に位置する。

形状、規模、方位 隅丸長方形を呈する。規模は長軸4.6m、短軸3.8m。方位はN-10°-W。周壁、壁溝 壁高は5cmほどで全周検出する。南半部に幅15~20cmの溝が巡る。

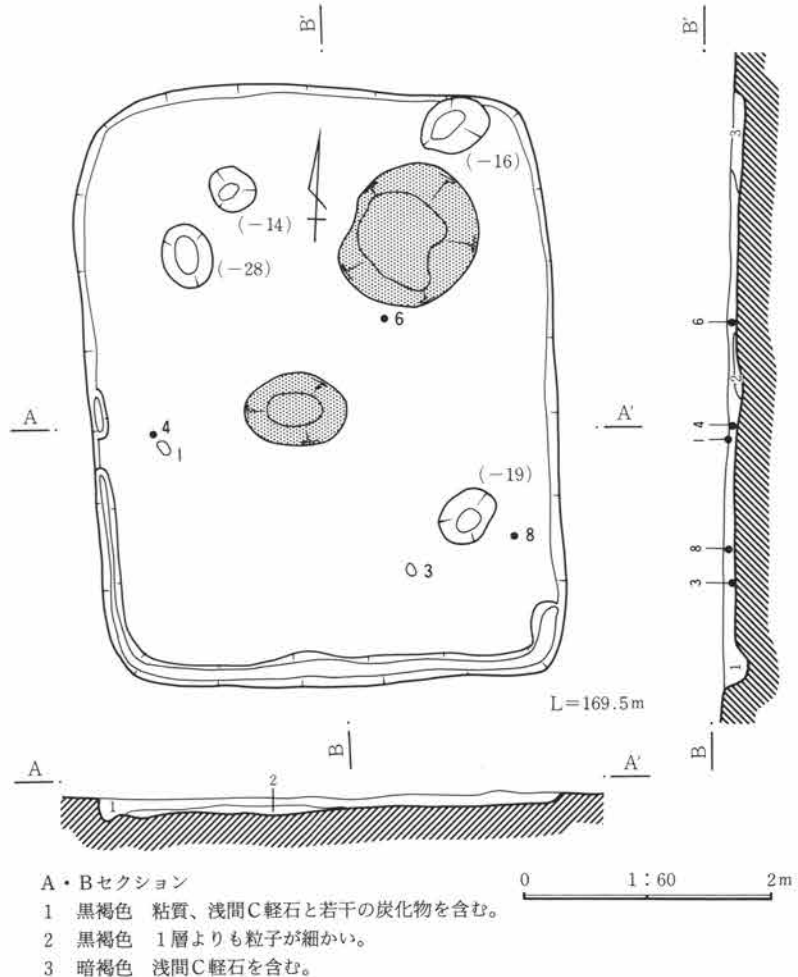
支柱穴 5か所に大小のピットを検出するが、支柱穴と特定できるピットは明確ではない。

床面 床面は褐色土。凹凸が著しい。

炉跡 大型の炉跡を2か所で検出する。北東コーナーの方は著しく大きく径1m以上、中央のものは80cm前後の焼土帯で中央部がやや窪む。ともにこの場で生成したものである。

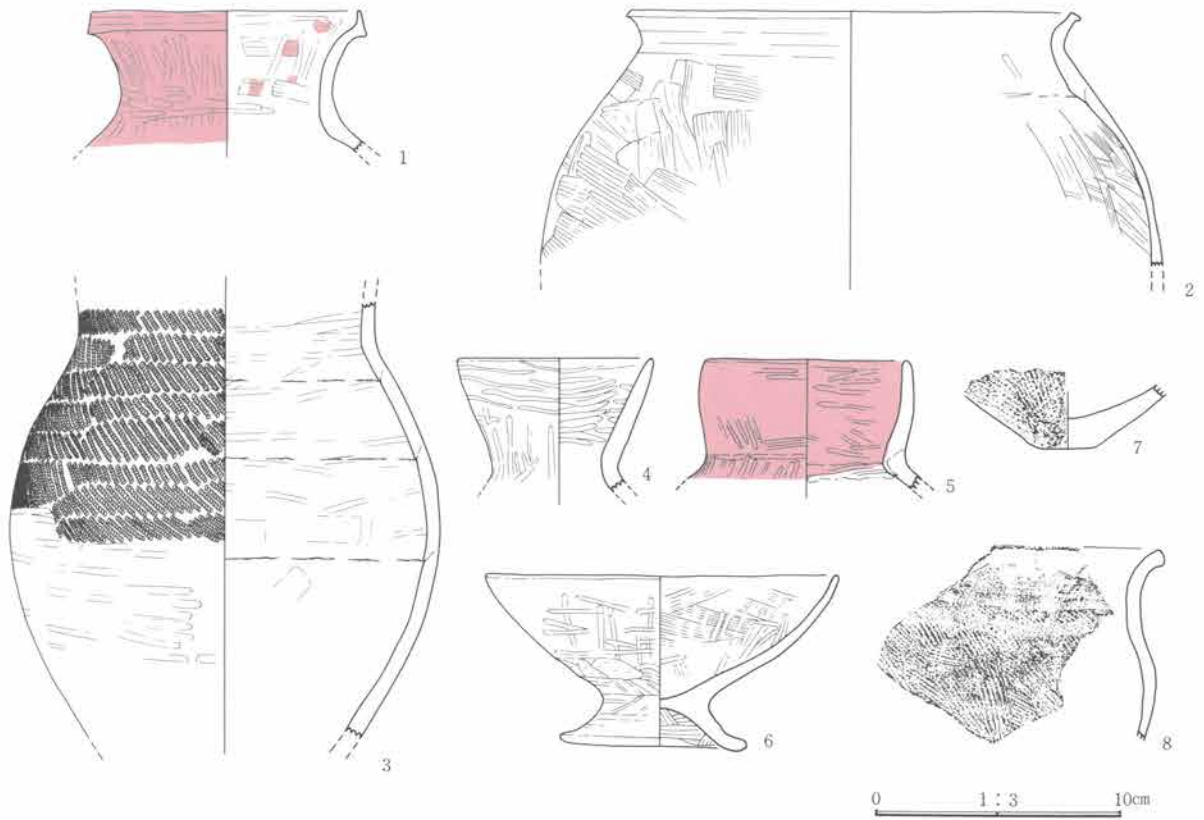
遺物出土状態 住居南半部床面上より古式土師器大形破片が多数出土している。

時期 古墳前期。



第154図 200号住居

6 検出した遺構・遺物



第155図 200号住居出土遺物

200号住居出土土器観察表 PL.115

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 10.8	口縁部は段を作って立ち上がる。	外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ、丹彩。 内 ハケメ後ヘラミガキ、丹彩。器面が荒れている。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁部ほぼ全周
2	甕	口 17.6 胴 24.8		外 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラナデ、ハケメ。 内 胴部はヘラナデ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、淡黄色	口縁～胴部1/4周
3	甕	胴 17.3		外 頸～胴部RL縄文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	頸～胴部1/4周
4	埴	口 8.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～頸部全周
5	埴	口 8.0		外 ヘラミガキ、丹彩。 内 ヘラミガキ、丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁～頸部1/4周
6	高 坏	口 14.2 高 6.7		外 坏部はヘラミガキ、ヘラケズリ、脚部はヨコナデ。 内 坏部はハケメ後ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、鈍褐色	坏部1/4周

200号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
7	甕			外 ハケメ。内 ハケメ。	粗砂粒を含む。	やや堅緻	暗赤褐色	
8	甕	口 16		外 胴部はハケメ。内 ハケメ。	粗砂粒を含む	やや堅緻	灰赤褐色	26%



201号住居

(第156図、PL. 42)

位置 51-G31に位置する。

形状、規模、方位 方形を呈する。中央部を自然水流の生成による溝に侵食されている。規模は長軸5.0m、短軸4.7m。方位はN-29°-E。

周壁、壁溝 壁溝は認められない。

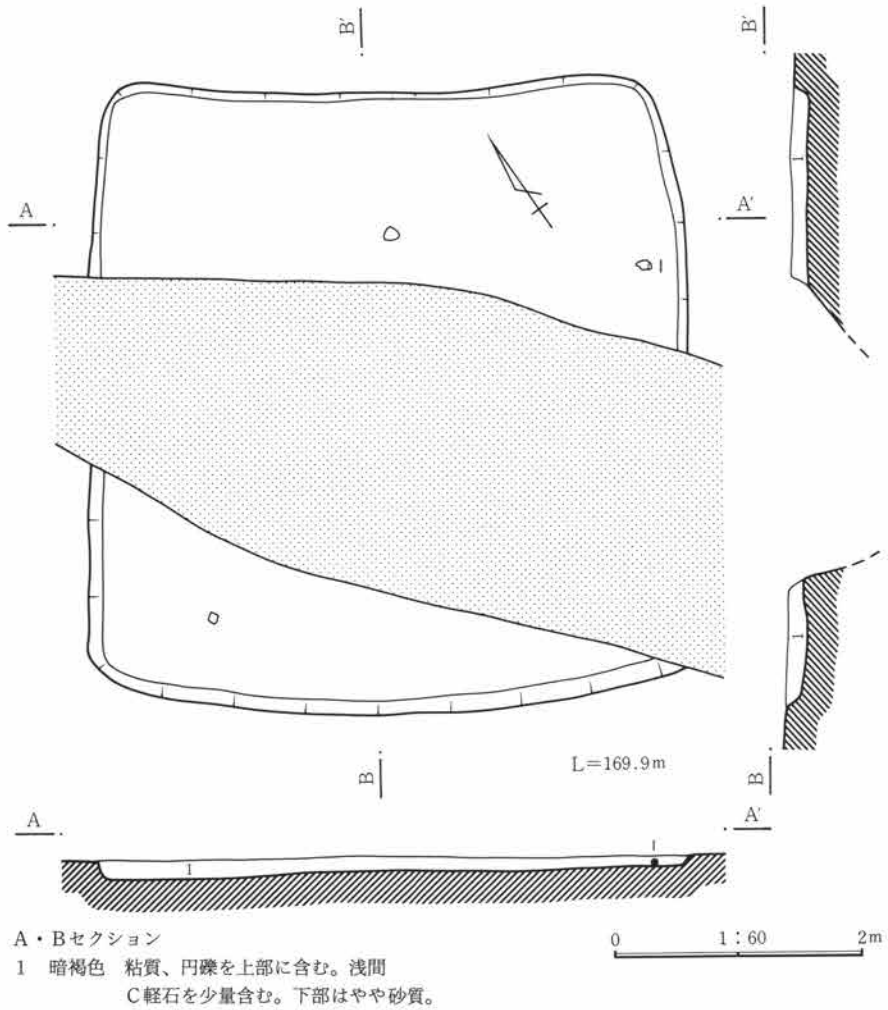
支柱穴 不明。

床面 小礫を含む褐色土(第V層)。

炉跡 不明。

遺物出土状態 出土遺物は少ない。床面上より古式土師器破片が数点出土している。

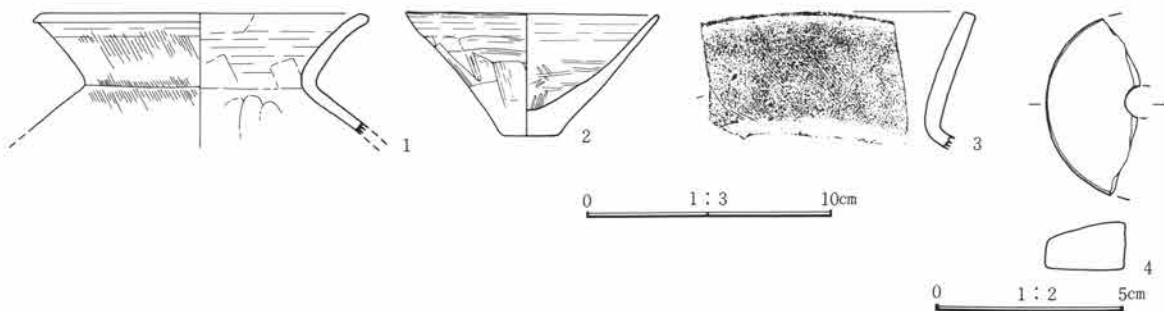
時期 古墳前期。



A・Bセクション

1 暗褐色 粘質、円礫を上部に含む。浅間  
C 軽石を少量含む。下部はやや砂質。

第156図 201号住居



第157図 201号住居出土遺物

201号住居出土土器観察表 PL. 115

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 13.0	口縁端部は角ばり、面を作る。	外 口縁部はヨコナデ、ハケメ、頸部はハケメ。 内 ヨコナデ、頸部指オサエ痕。	細砂粒を含む。 堅緻、白色	口縁～胴上部 1/2周
2	鉢	口 10.0 高 4.9		外 ヨコナデ。 内 ヘラナデ。	粗砂粒を含む。 やや軟弱、橙色	ほぼ完形

6 検出した遺構・遺物

201号住居出土土器観察表（拓本）

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
3	壺	口 14		外口縁部はヨコナデ、ハケメ。内ハケメ。	砂粒を含む。	やや堅緻	橙色	16%

201号住居出土土製品観察表 PL. 115

遺物番号	名称	径	厚さ	形状、成形、整形	色調	材質	備考
4	紡錘車	5.0±	1.3	側縁部は比較的角ばっている。器面は丁寧にナデが施されて、滑らかである。	黄橙色	土製	半欠品

203号住居（第158図、PL. 42）

位置 46-G36に位置する。

形状、規模、方位 隅丸長方形を呈する。小型住居。規模は長軸4.9m、短軸3.7m。方位はN-30°-W。

周壁、壁溝 壁土は小礫を含む褐色土（第V層）。全周明瞭に検出される。壁高は10cm程検出される。壁溝は検出できない。

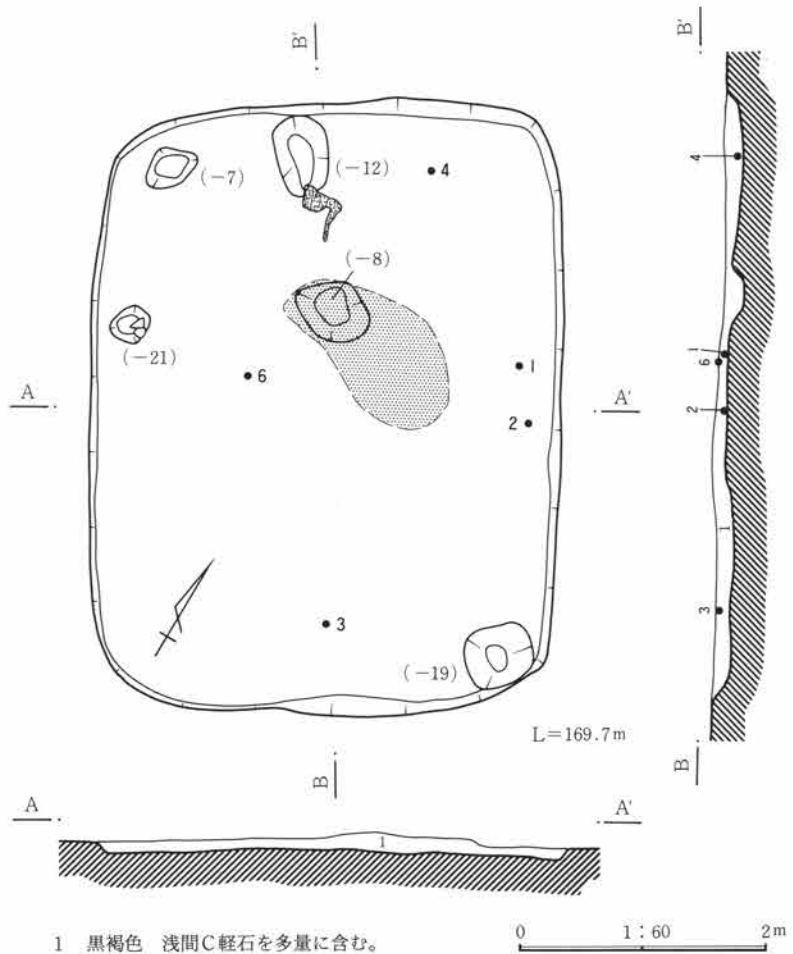
支柱穴 周壁際に深さ10~20cmのピットが4か所に認められるが、支柱穴として明確に認められるものはない。

床面 床面直上覆土中に多量の円礫が集積している。炭化物の混在も目立つ。

炉跡 中央部北寄りに地床炉が設けられている。径60cm程の浅い掘り方を伴う。

遺物出土状態 床面上より古式土師器の大形破片が数点、礫の間から出土する。

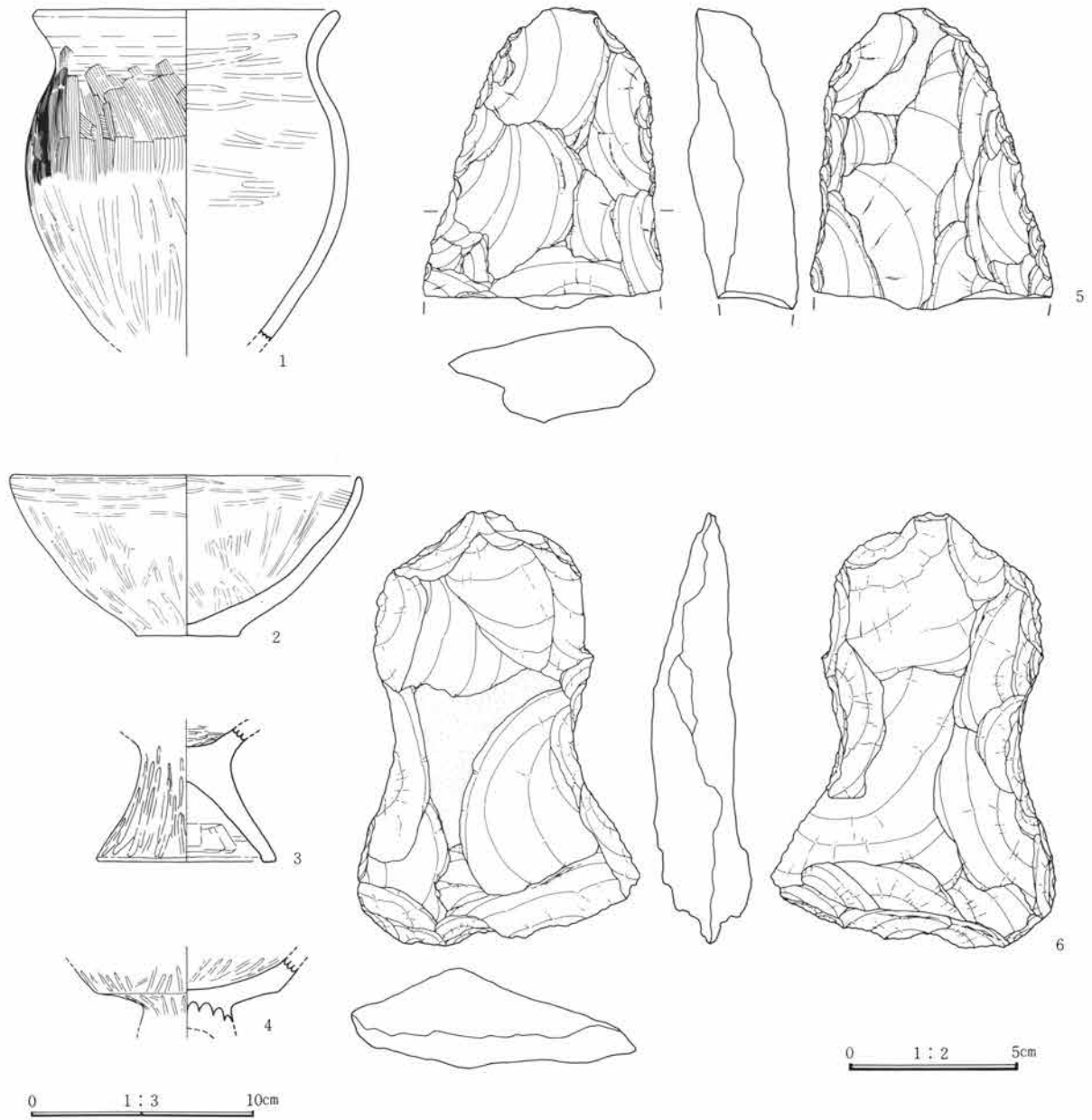
時期 古墳前期。



第158図 203号住居



(4) 古墳時代前期の住居跡



第159図 203号住居出土遺物

203号住居出土土器観察表 PL.115

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 13.6 胴 14.2	口縁端部はやや角ばる。	外 口縁～頸部はヨコナデ、胴上部はハケメ、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部全周 頸～胴下部 $\frac{2}{3}$ 周
2	鉢	口 15.6 高 7.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を少量含む。 堅緻、明赤褐色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周
3	台付甕(?)	脚 8.0		外 ヘラミガキ。 内 底部はヘラミガキ、脚部はヘラナデ。	細砂粒を含む。 堅緻、明橙色	脚部全周
4	高 坏			外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍黄橙色	坏底部全周

6 検出した遺構・遺物

203号住居出土石器観察表 PL. 115

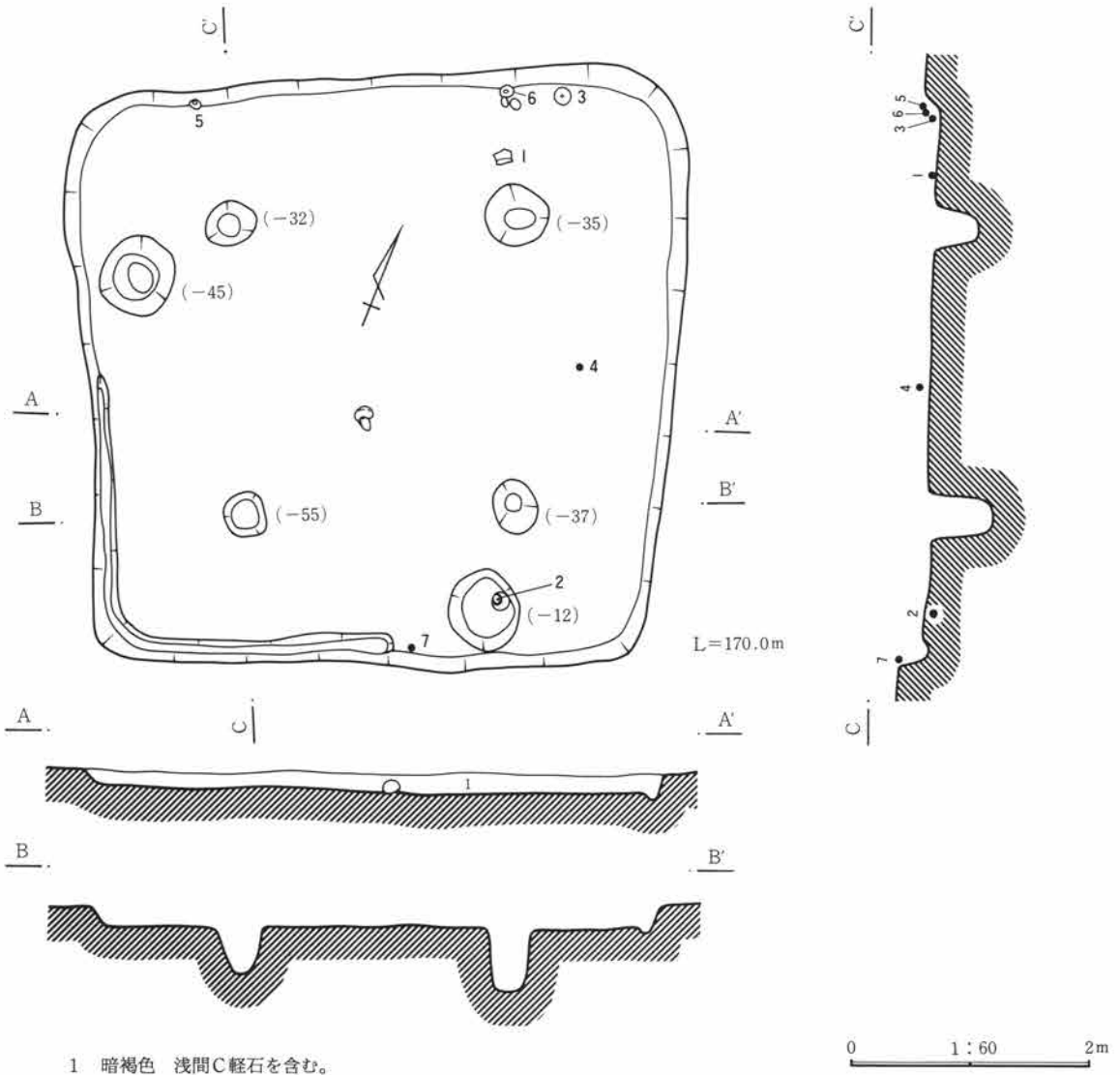
遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
5	土掘り具	8.8(+) <sup>1</sup> × 7.1 × 3.3	黒色頁岩	188.3	一部に自然面を残すが両面とも二次剥離調整を施している。刃部は欠損している。
6	土掘り具	12.8 × 8.5 × 3.0	細粒安山岩	266.9	片面に自然面を残す。刃部、基部には両面から剥離調整を施している。

204号住居 (第160図、PL. 43)

位置 42-G34に位置する。

形状、規模、方位 隅丸方形を呈する。規模は長軸5.0m、短軸4.8m。方位はN-18°-W。

周壁、壁溝 壁土黄褐色土(第V層)で全周良好に検出する。壁高は15cm前後を検出する北側コーナー部を中心に壁溝を認める。壁溝は幅15cm、深さ5cm。



第160図 204号住居

(4) 古墳時代前期の住居跡

**主柱穴** 主柱は4本構造。深さ30~50cm前後で、特に南西側のピットは55cmと深い。柱穴内の覆土中には浅間C軽石の混入が目立つ。

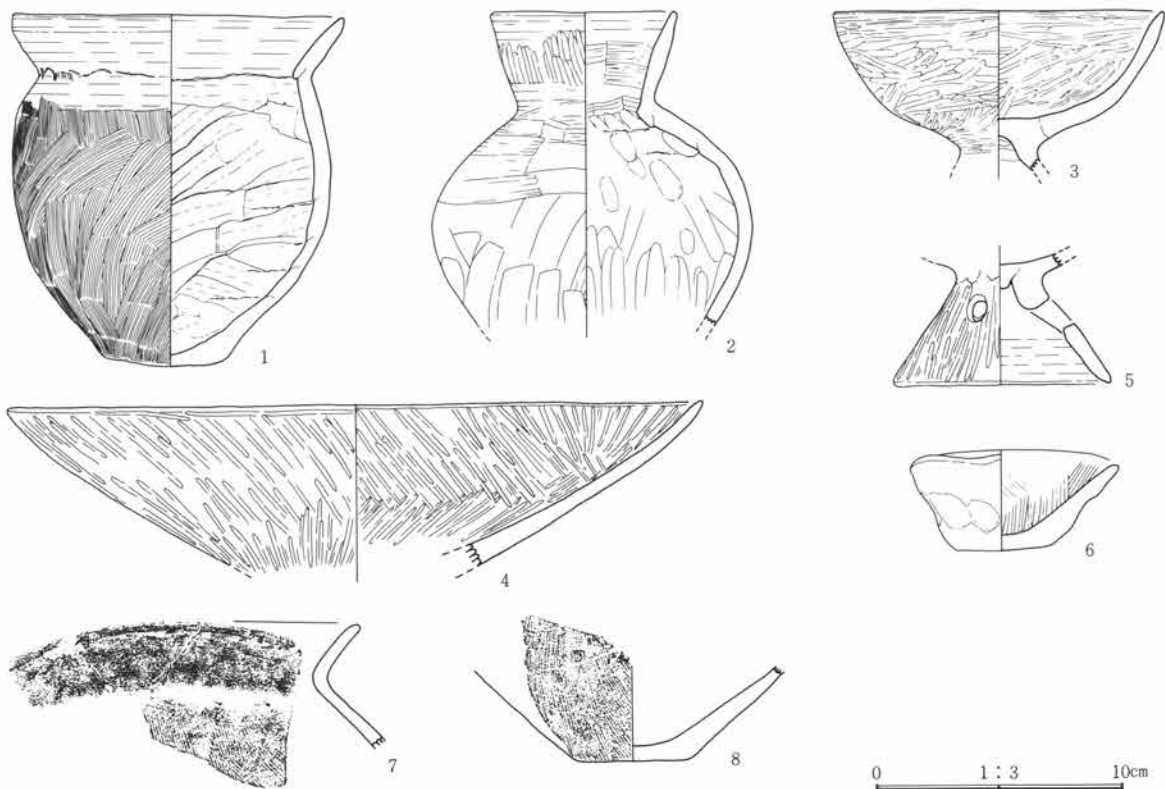
**床面** 床面の土は径3cm前後の礫を多量に含む黄褐色土。

**炉跡** 不明確。検出できない。

**貯蔵穴** 西側と北側の周壁際の2か所に円形の貯蔵穴を認める。北側の貯蔵穴中底部に径30cm程の平らな円礫が出土する。覆土中には浅間C軽石の混入が目立つ。

**遺物出土状態** 南東周壁際の床面上より、古式土師器大形破片が出土する。

**時期** 古墳前期。



第161図 204号住居出土遺物

204号住居出土土器観察表 PL.115

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 13.3 高 13.8	口縁部はやや内湾する。	外 口縁～頸部はヨコナデ、胴上～底部はハケメ。 内 口縁～頸部はヨコナデ、胴上～底部はヘラナデ。	粗砂粒を含む。 やや軟弱、橙色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周 頸～底部全周
2	埴	口 7.4 胴 12.9		外 口縁部はヨコナデ、胴上部はヘラナデ、下部はヘラケズリ。 内 ヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、明黄褐色	口縁～胴部全周
3	高坏	口 13.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、橙色	坏部 $\frac{1}{4}$ 周
4	高坏	口 28.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	坏部 $\frac{1}{4}$ 周
5	高坏(?)	脚 8.6	脚部円孔は3個。	外 ヘラミガキ。 内 脚下半部はヨコナデ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	脚部全周

6 検出した遺構・遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
6	ミニチュア鉢	口 8.4	手づくね	外 指頭圧痕が巡る。 内 細かいハケメ。	砂粒を少量含む。 堅緻、橙色	口縁部均周

204号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
7	甕	口 15		外 胴部はハケメ。内 胴部ナデ、ヘラナデ。	砂粒を含む。	やや堅緻	橙色	35%
8	甕			外 ハケメ。内 ハケメ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	赤褐色	10%

209号住居 (第162図、PL. 43)

位置 55-G42に位置する。

形状、規模、方位 やや台形状の隅丸長方形を呈する規模は長軸4.9m、短軸4.7m。方位はN-32°-W。

周壁、壁溝 壁土は黄褐色土(第V層)。周壁は明瞭に検出される。検出できた壁高は10cm。壁溝はなし。

支柱穴 不明。検出できない。

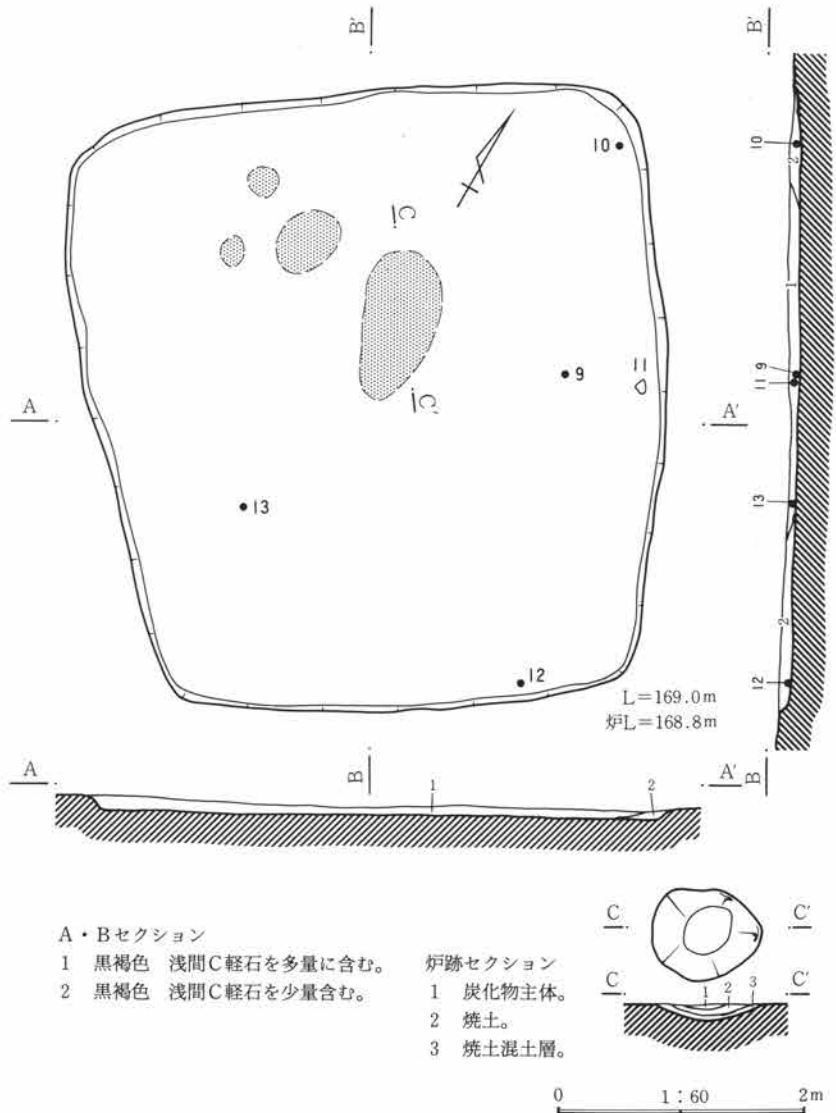
床面 平坦な褐色土面を検出する。

炉跡 中軸線上やや北寄りに地床炉を設けている。焼土帯は長径1.2m。このほか炉跡と北壁との間に小規模な焼土帯が点在する。

遺物出土状態 床面上に古式土師器の大形破片が多数出土している。

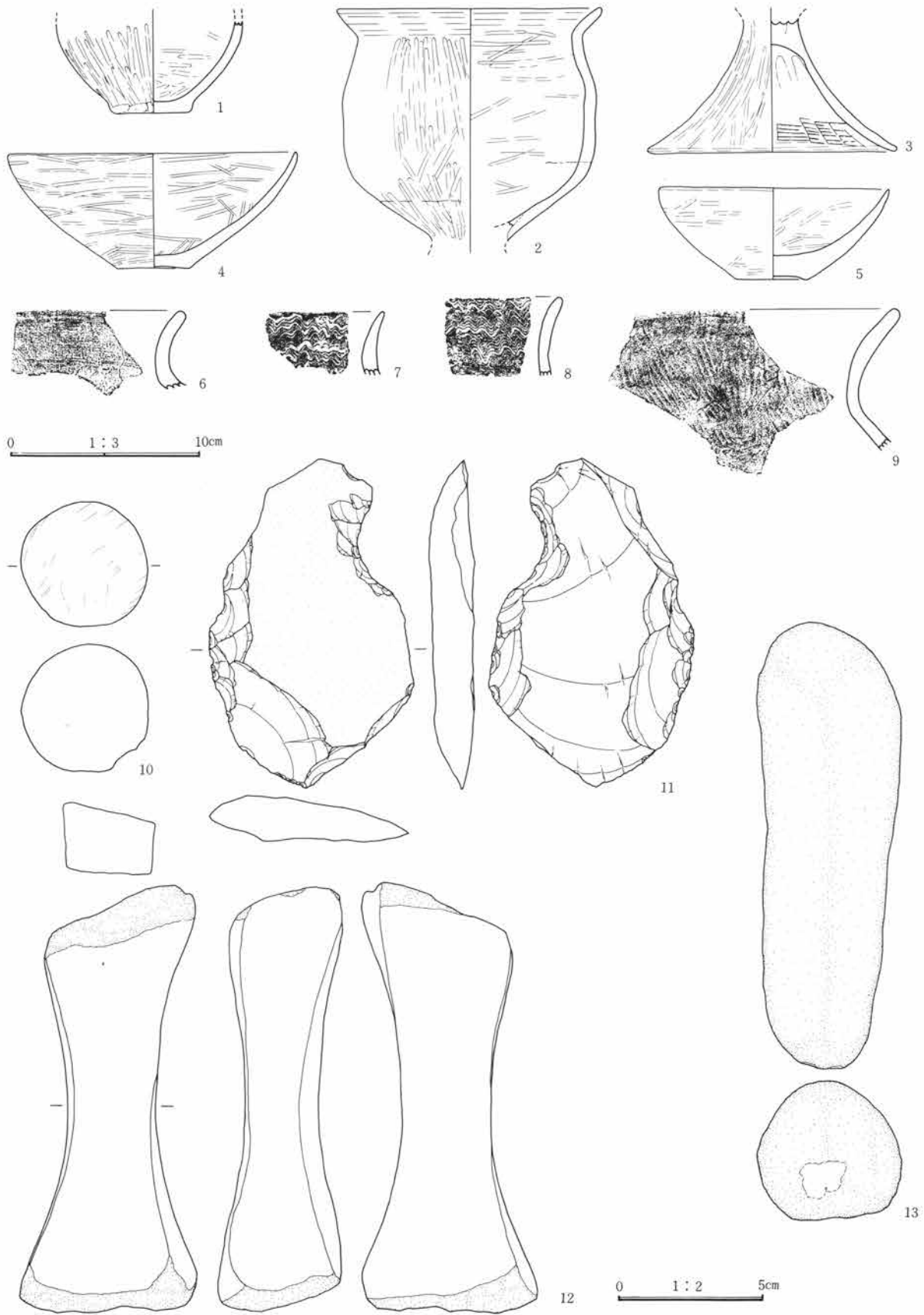
時期 古墳前期。

他の遺構との関係 210号住居の覆土上に造られている。本住居の方が新しい。



第162図 209号住居

(4) 古墳時代前期の住居跡



第163図 209号住居出土遺物

6 検出した遺構・遺物

209号住居出土土器観察表 PL.115

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	底 4.2		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	胴～底部全周
2	台付甕	口 14.0 胴 13.2		外 口縁部はヨコナデ、頸～底部はヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、頸～底部はヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸～底部 $\frac{1}{2}$ 周
3	高坏	脚 13.0		外 脚部ヘラミガキ、脚端部はヨコナデ。 内 上部はナデ、下部はハケメ後ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	脚部 $\frac{1}{2}$ 周
4	鉢	口 15.0 高 5.6		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 胴部 $\frac{1}{2}$ 周
5	鉢	口 11.9		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 軟弱、浅黄褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周

209号住居出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
6	甕			外 口縁端部は波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	8%
7	甕			外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	明赤褐色	7%
8	甕			外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	明赤褐色	6%
9	甕	口 24		外 ハケメ。内 ハケメ。	細砂粒を含む。	堅緻	鈍褐色	10%

209号住居出土石器観察表 PL.116

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
11	土掘り具	11.3×7.1×1.7	黒色頁岩	138.6	片面に自然面を大きく残す。両側縁に細かい剝離調整を加えている。
12	砥石	14.7×6.1×4.3	砂岩	383.0	4面に砥面を作っている。砥面は滑らかで擦痕は目立たない。中央部は減って細まっている。
13	磨石	15.4×5.0×4.8	粗粒安山岩	486.3	自然石の一端に僅かに摩滅痕が認められる。

209号住居出土土製品観察表 PL.116

遺物番号	名称	径	厚さ	形状・成形・整形	色調	材質	備考
10	土玉	4.4	—	球形を呈する。穿孔などは認められない。器面には滑沢にヘラミガキが施される。	赤褐色	土製	完形

212号住居 (第165図、PL. 44)

位置 52-G44に位置する。

形状、規模、方位 隅丸方形を呈する。規模は東西、南北両軸とも6.3m。方位はN-31°-W。

周壁、壁溝 壁土は黄褐色で堅い(第V層)。壁溝は東辺、西辺部を中心に巡る。北辺部は確認できない。

支柱穴 支柱は4本構造。北西側の支柱穴では炭化した柱材が柱穴覆土から5cm直立状態で検出された。

床面 床面土は堅い黄褐色土で検出状態は凹凸が目立つ。特に中央部が高く周辺部が低い。床面直上には炭化材が多量に出土する。炭化材は上部構造が想像できるほど良好な遺存状態である。材は太いもので10cm、細いもので5cmの太さである。中央部から周壁際まで放射状に見られる。焼失家屋である。

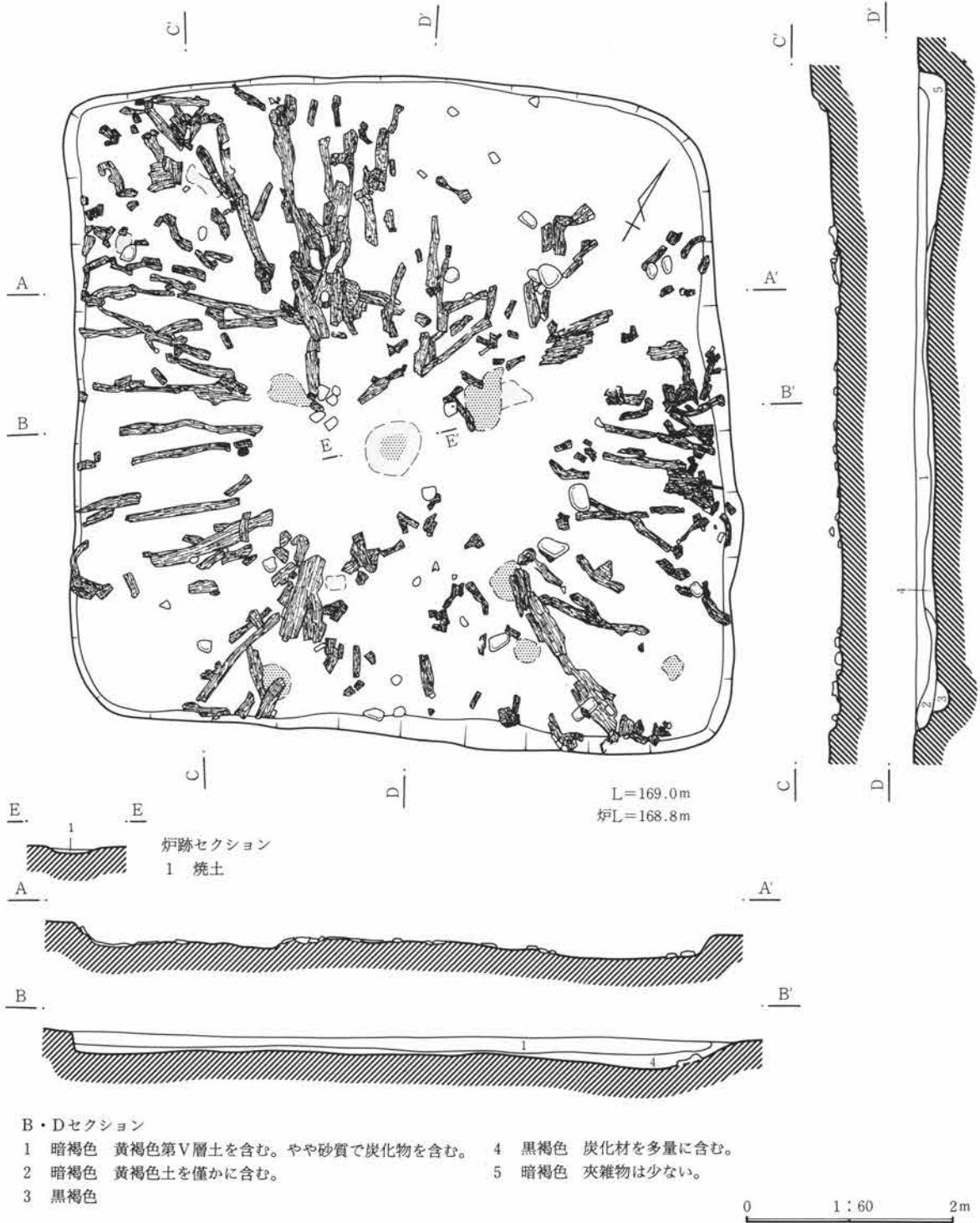
(4) 古墳時代前期の住居跡

炉跡 中央部に地床炉を検出する。

遺物出土状態 土器が多数出土している。炭化材の間に古式土師器破片が散在する。

時期 古墳前期

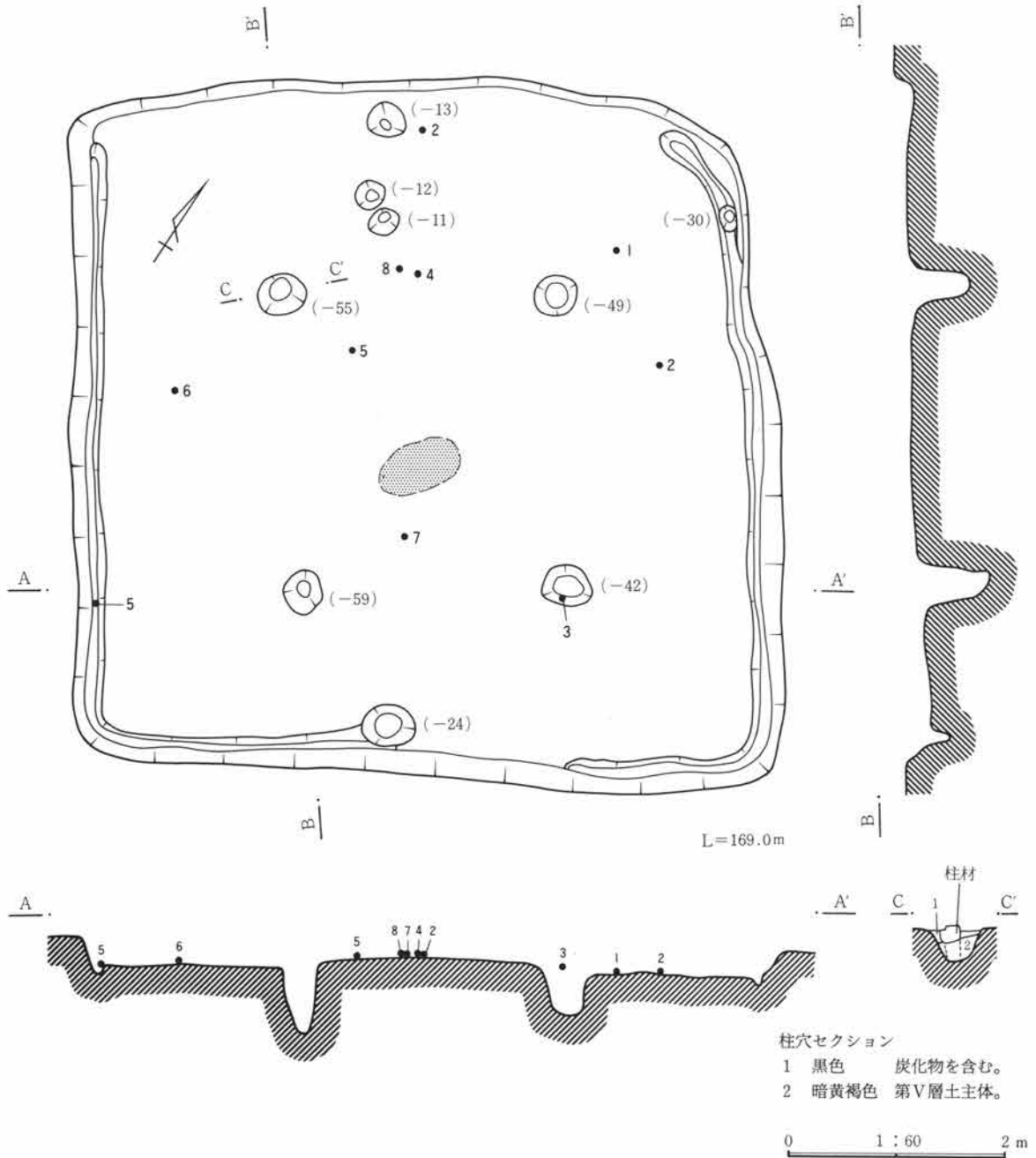
他の遺構との関係 東部で230号住居と重複する。本住居の方が新しい。



第164図 212号住居 (1)



6 検出した遺構・遺物



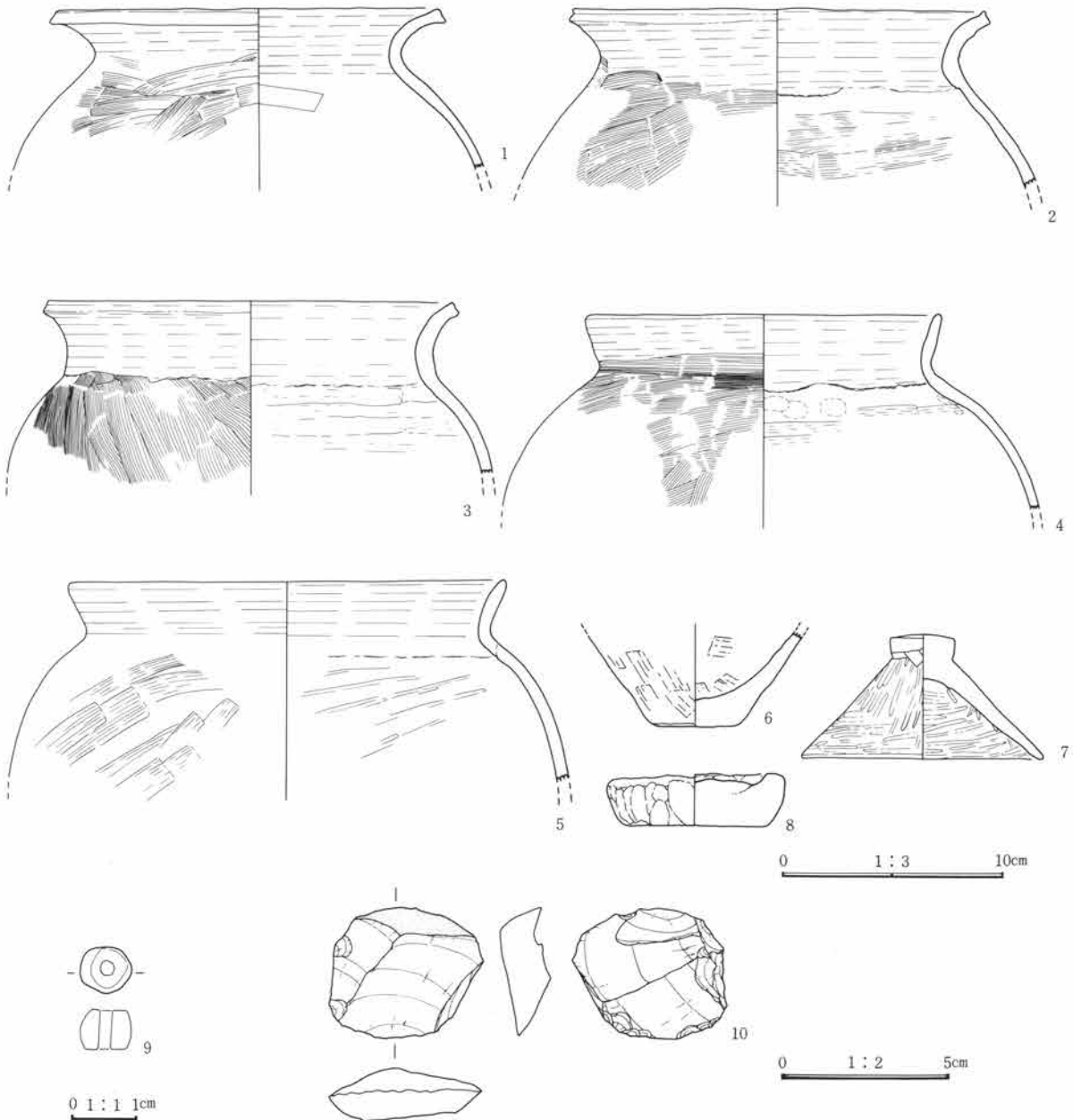
第165図 212号住居(2)

212号住居出土土器観察表 PL.116

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 17.0	口縁端部に鋭い稜線と面を作る。	外 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はハケメ。 内 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、橙褐色	口縁～胴部迄周
2	甕	口 18.3	口縁端部は鋭い稜線と面を作る。	外 口縁～頸部はヨコナデ、口縁端部には弱い凹線、胴部はハケメ。 内 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はハケメ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、浅黄橙色	口縁～胴部迄周
3	甕	口 18.0	口縁端部は角ばり、面を作る。	外 口縁部はヨコナデ、胴部はハケメ。 内 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、浅黄橙色	口縁～胴部迄周

(4) 古墳時代前期の住居跡

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
4	甕	口 15.6		外 口縁部はヨコナデ、頸～胴部はハケメ。 内 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 やや堅緻、黄橙色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周
5	甕	口 19.6		外 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はハケメ。 内 口縁～頸部はヨコナデ、胴部は粗いヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、褐灰色	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 周
6	甕	底 3.6		外 ヘラナデ。 内 ヘラナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	胴下～底部全周
7	蓋	径 10.8 高 5.6		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	$\frac{1}{2}$ 周
8	土製品	口 8.0 高 2.2	手づくね、内面に粘土を添付する。	外 指オサエ痕。 内 指オサエ痕。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	完形



第166図 212号住居出土遺物

6 検出した遺構・遺物

212号住居出土玉類観察表 PL.118

遺物番号	名称	長さ・厚さ	径	孔径	材質	色・備考
9	小玉	0.6	0.8	0.2	ガラス	コバルトブルー

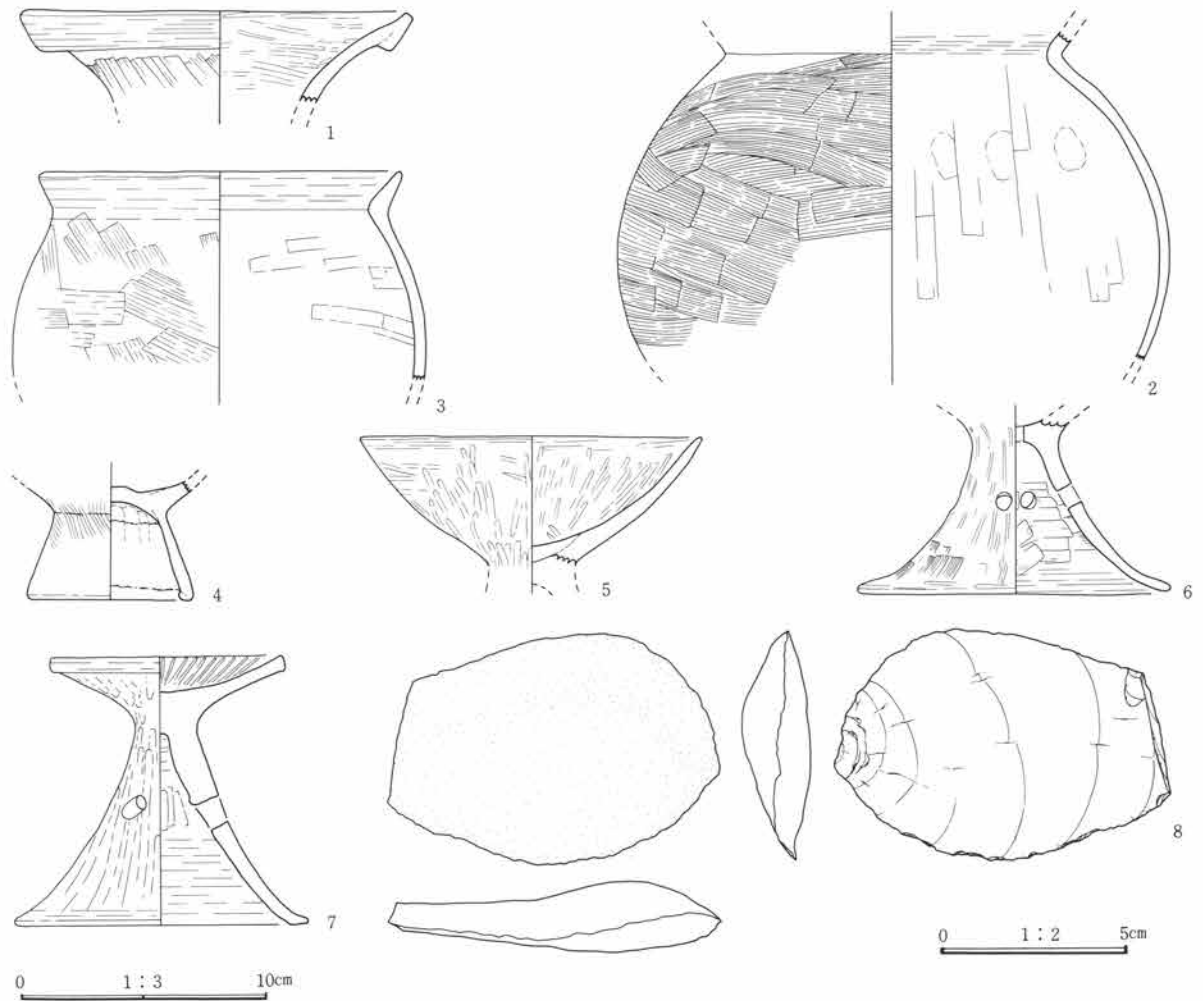
212号住居出土石器観察表 PL.116

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
10	刃器	3.8×4.6×1.5	黒色頁岩	26.0	小剥片の一边の鋭利な縁部を刃部としている。刃部の細かな剥離は使用痕か。

214号住居 (第168図、PL. 45)

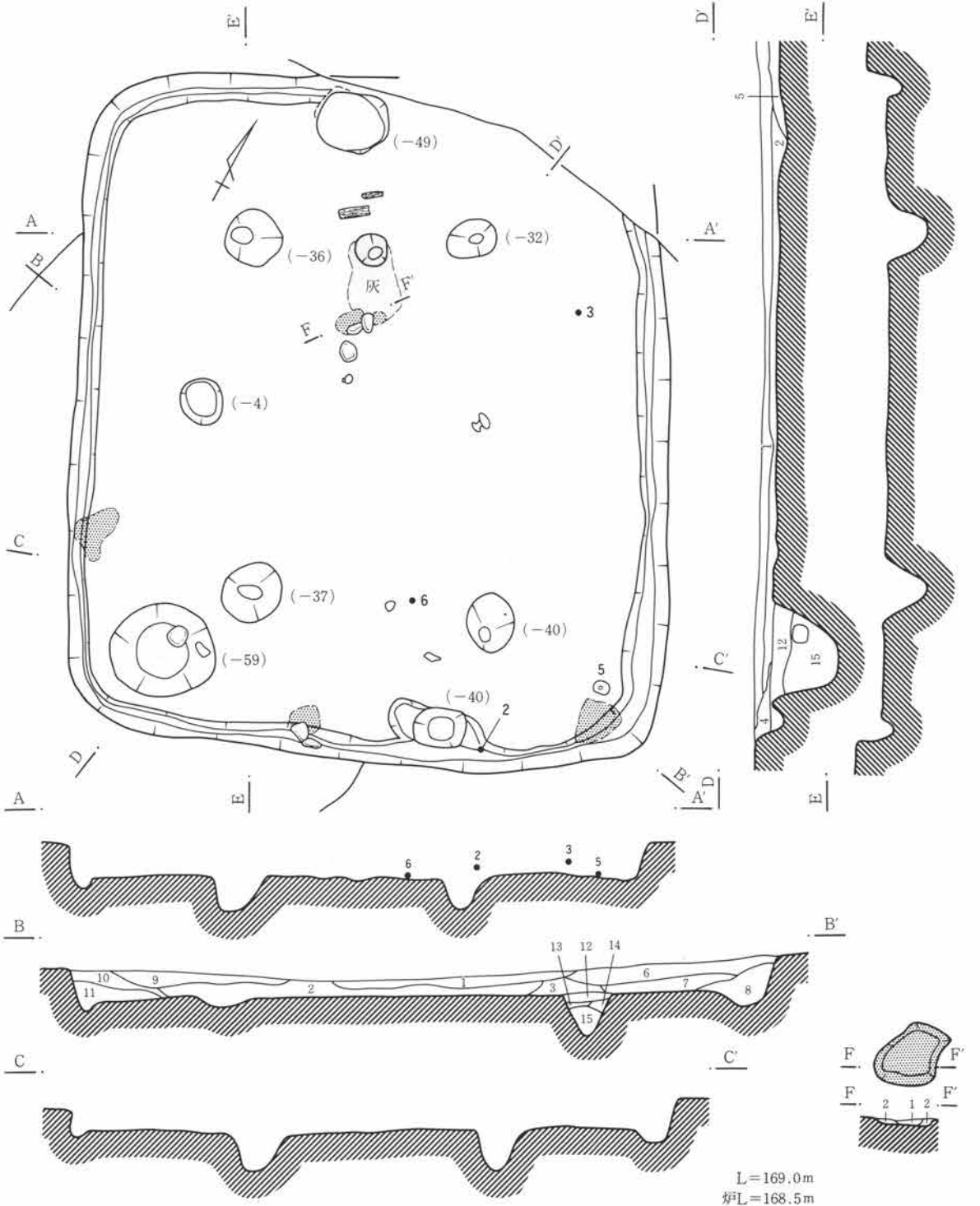
位置 48-G45に位置する。

形状、規模、方位 隅丸長方形を呈する。規模は長軸6.5m、短軸5.7m。方位はN-24°-W。北側コーナー



第167図 214号住居出土遺物

(4) 古墳時代前期の住居跡



B・Dセクション

- |                             |                          |
|-----------------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 砂質浅間C軽石を微量に含む。        | 9 暗褐色 夾雑物は少ない。           |
| 2 暗褐色 第V層土の小ブロックを含む。        | 10 暗褐色                   |
| 3 暗褐色 第V層土を含む。              | 11 暗褐色 炭化物を含む。           |
| 4 暗褐色 浅間C軽石の混入は少ない。         | 12 黒色 炭化物を含む。            |
| 5 暗褐色 黄褐色土が多量に混入。           | 13 暗褐色 ローム粒(第V層土)を僅かに含む。 |
| 6 暗褐色 黄褐色土が斑状に混入。浅間C軽石が目立つ。 | 14 暗褐色 ローム粒を少量含む。        |
| 7 暗褐色 炭化物が点在。               | 15 黄褐色 ローム粒を含む。          |
| 8 暗褐色 5層に同じ。焼土。             |                          |

炉跡セクション

- |              |
|--------------|
| 1 焼土。        |
| 2 焼土、炭化物混土層。 |

第168図 214号住居

6 検出した遺構・遺物

部は調査区境であり、検出できなかった。

**周壁、壁溝** 北東コーナー部の周壁は調査区境のため明確に検出できない。壁土は黄褐色土（第V層）で検出状態は良好。壁溝は全周する。

**支柱穴** 支柱は4本構造。4支柱穴は深さ30cm前後。

**貯蔵穴** 北東コーナー部に径1m、深さ60cmの円形土壇がある。覆土の堆積状態の所見では住居床面下である。貯蔵穴であった可能性もある。

**床面** 黄褐色土面を平坦に踏み固めている。炭化物、焼土帯が点在する。火災に遭った可能性がある。

**炉跡** 中央部の北奥側寄りに地床炉を設けている。

**遺物出土状態** 床面上に古式土師器の完形器台や大形破片が散在する。

**時期** 古墳前期。

214号住居出土土器観察表 PL.116

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 15.3	折り返し口縁。	外 口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、浅黄橙色	口縁部 $\frac{2}{3}$ 周
2	甕	胴 22.0		外 ハケメ。 内 指オサエ後、ヘラナデ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	胴部全周
3	甕	口 14.4		外 口縁部はヨコナデ、胴上部はハケメ。 内 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、鈍赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
4	台付甕	脚 6.6	S字状口縁甕になるか。	外 脚部はハケメ。 内 天井部は指ナデ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、明褐灰色	脚部全周
5	高坏	口 13.7		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、赤橙色	坏部全周
6	器台	脚 12.4	脚部円孔は4か所 中央孔は径6mm	外 ハケメ後ヘラミガキ。 内 ヘラケズリ、裾部はヨコナデ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	器受部欠損
7	器台	器受 9.3 高 10.6	脚部円孔は3か所。	外 器受部～脚部はヨコナデ、ヘラミキガキ。 内 器受部～細い棒状具によるミガキ、脚部はヘラナデ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	器受部 $\frac{1}{2}$ 周 脚部全周

214号住居出土土器観察表 PL.116

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
8	刃器	6.2×9.0×1.9	黒色頁岩	91.4	縦長剥片を二次調整することなく、鋭利な側縁を刃部としている。刃部には細かな剝離使用痕が認められる。

216号住居 (第169図、PL.46)

**位置** 43-G43に位置する。

**形状、規模、方位** ほぼ正方形を呈する。規模は長軸4.7m、短軸4.5m。方位はN-31°-E。

**周壁、壁溝** 壁土は黄褐色土（第V層）で検出状態は良好。検出できた壁高は50cm。壁溝は全周する。壁溝の幅は20cm、深さ10cm前後である。

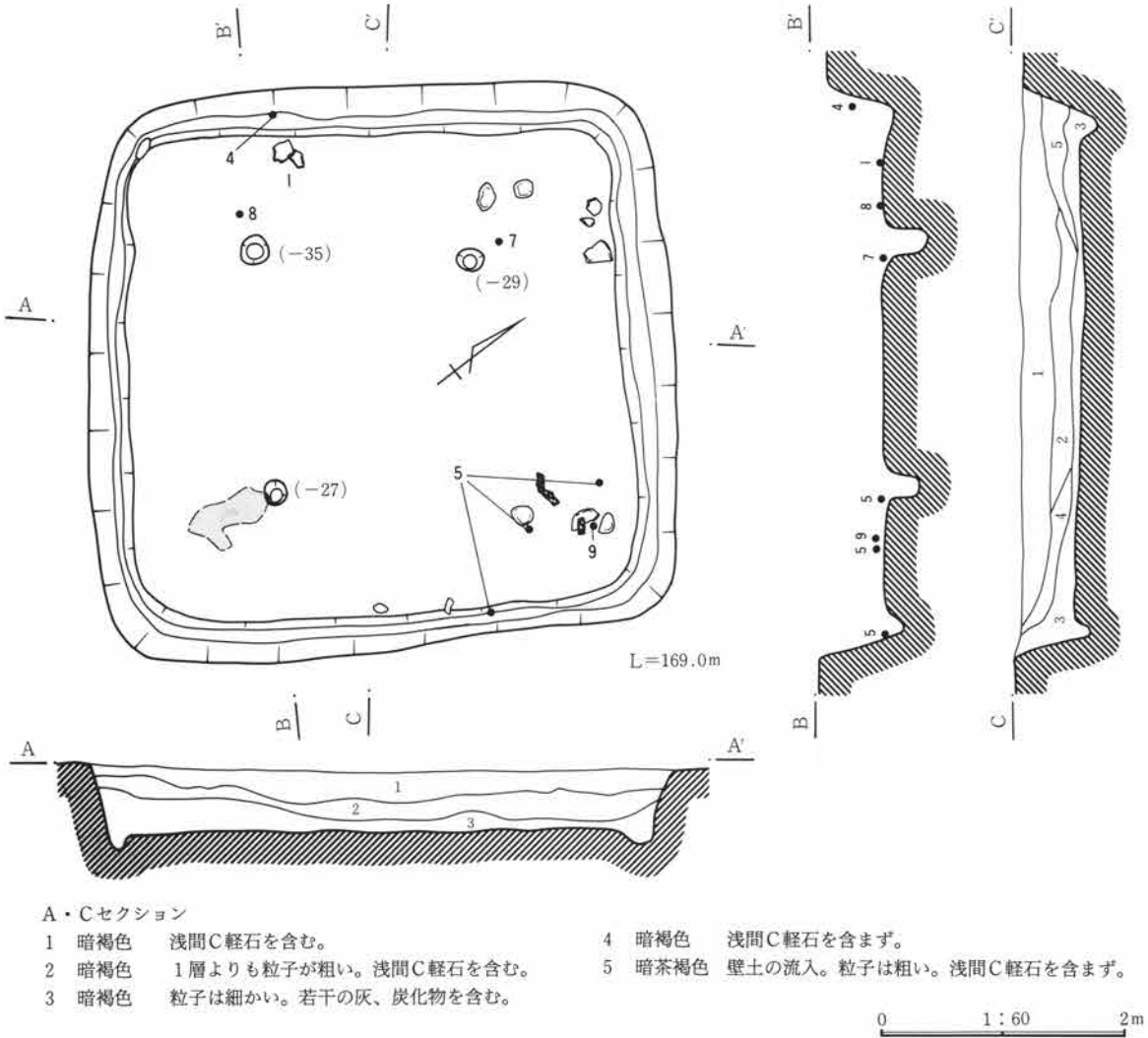
**支柱穴** 支柱は4本構造。3か所で径15cm前後の支柱穴を検出する。

**床面** 平坦に踏み固められた黄褐色土面を良好に検出する。

炉跡 不明。焼土帯など確認できない。

遺物出土状態 床面5~10cmにわたって多量に古式土師器が出土する。周壁沿いに分布が濃い。

時期 古墳前期。

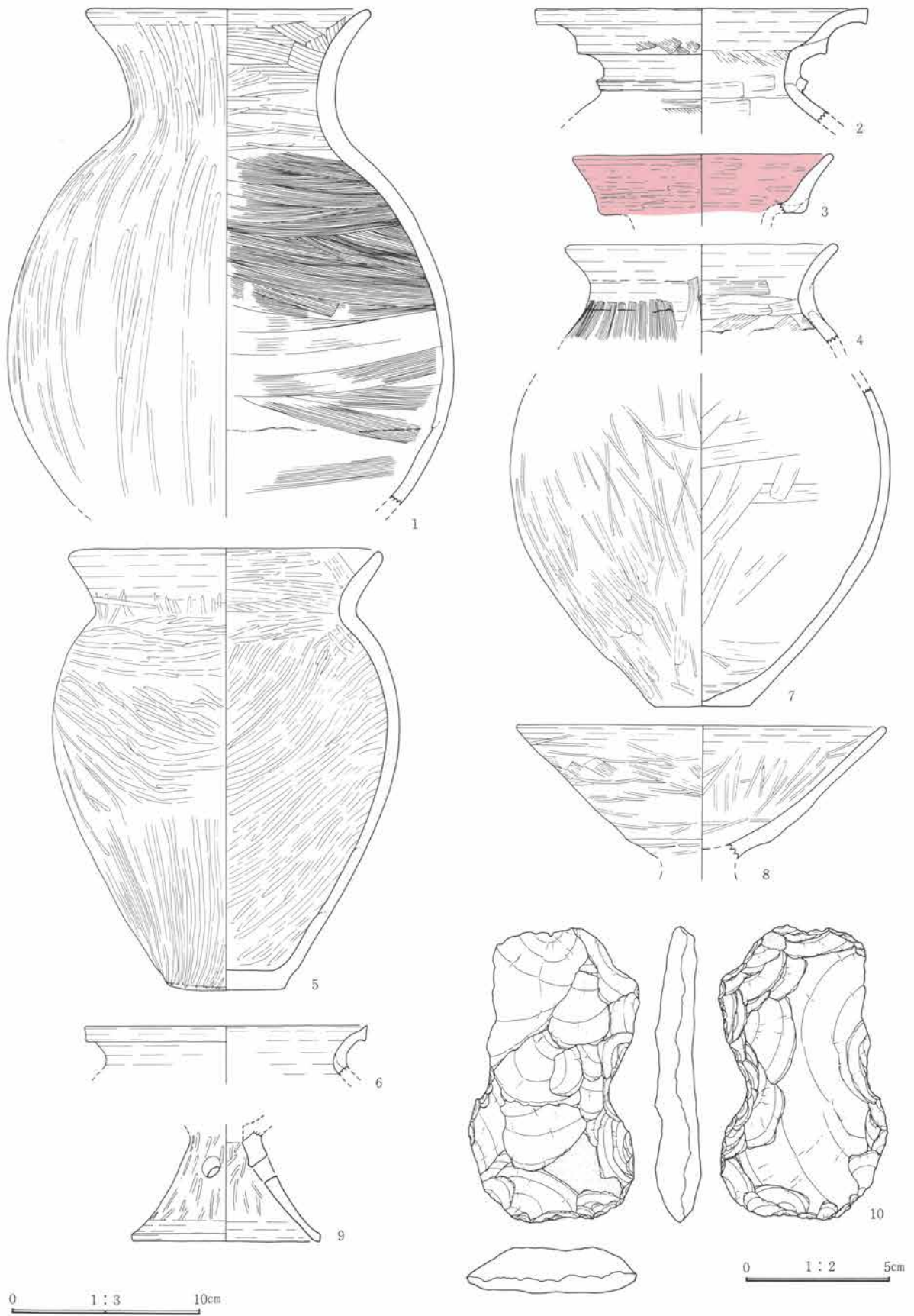


第169図 216号住居

216号住居出土土器観察表 PL. 116・117

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 14.6 胴 23.5		外 口縁部はヨコナデ、口辺~胴部はヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、頸~胴部はハケメ、ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部全周 胴部 $\frac{1}{2}$ 周
2	壺	口 17.5	複合口縁、頸部に突帯を作る。	外 口縁~頸部はヨコナデ、部分的にハケメを残す。 内 口縁部はヨコナデ、部分的にハケメを残す。	砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	口縁~頸部 $\frac{1}{2}$ 周
3	壺	口 13.8	複合口縁。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒目だけ やや堅緻、明赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩
4	甕	口 14.2	頸部内側にヘラナデの稜がある。	外 口縁部はヨコナデ、頸~胴部はハケメ。 内 口縁部はヨコナデ、頸部はヘラナデ、ハケメ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
5	甕	口 16.2 高 23.0		外 口縁部はヨコナデ、頸~胴部はヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍赤褐色	口縁~胴部 $\frac{1}{2}$ 周

6 検出した遺構・遺物



第170図 216号住居出土遺物



## (4) 古墳時代前期の住居跡

216号住居出土土器観察表 PL.117

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
6	甕	口 14.8	口縁部は鋭い稜を作る。	外 口縁～頸部はヨコナデ。 内 口縁～頸部はヨコナデ。	砂粒を含む。 堅緻、黄橙色	口縁～頸部1/2周
7	壺	胴 20.0		外 胴部、ヘラミガキ、胴下部ヘラナデ。 内 ヘラナデ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、鈍黄橙色	胴部1/2周 胴部スス付着
8	高坏	口 19.2	坏下端部に段を作る。	外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 やや軟弱、橙色	坏部全周
9	器台	底 9.8 孔 1.3	くびれ部に剝離面あり。円孔3個。	外 ヘラミガキ、裾部はヨコナデ。 内 ヘラミガキ、裾部はヨコナデ。	砂粒を含む。 堅緻、黄橙色	脚部1/2周

216号住居出土石器観察表 PL.117

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
10	土掘り具	10.2×6.0×1.6	硬質泥岩	101.5	横長剝片を素材としている。周縁は両面から剝離整形している。

## 233号住居 (第171図、PL. 46)

位置 39-H14に位置する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。南コーナー部は232号住居との重複部であり、形状不明。規模は長軸5.5m、短軸4.2m。方位はN-60°-E。

周壁、壁溝 壁土は灰褐色土(第V層)。最上部は浅間C軽石を含む黒褐色土、確認した壁高は50cm。この直上層は有馬火山灰ブロックを含むことから、この黒褐色土上面がおおよそ当時の地面になると思われる。当時の推定地面から床面までおおよそ40cmである。

主柱穴 主柱は4本構造と思われる。深さ15cm前後の浅い柱穴を3か所で検出する。この他北西側、東南側周壁際に円形ピットを検出するが、これも柱穴になる可能性がある。

床面 床面は灰褐色土(第V層)。

炉跡 不明。

遺物出土状態 床面～床面上10cmより古式土師器大形破片が多数出土する。

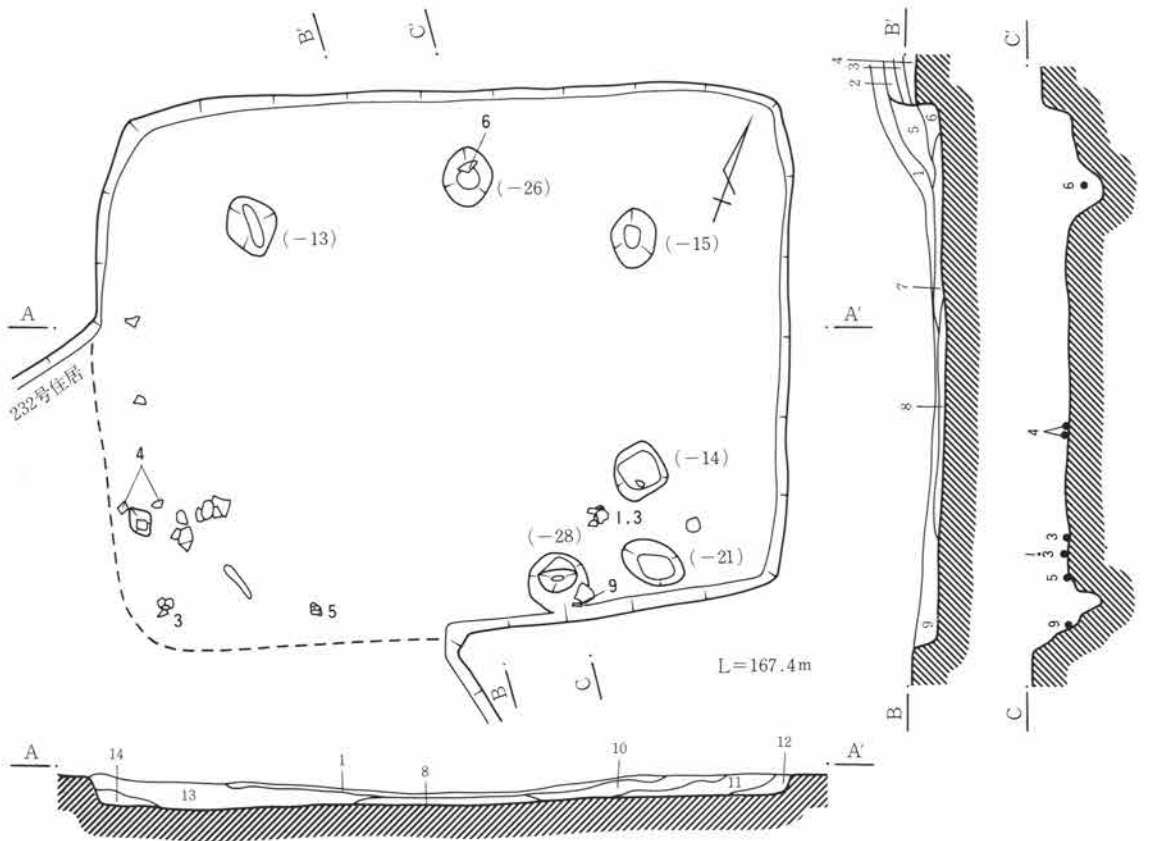
時期 古墳前期。

他の遺構との関係 232号住居と西南部で重複する。本住居の方が新しい。

233号住居出土土器観察表 PL.117

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 18.3 胴 23.8		外 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。 内 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 やや堅緻、褐灰色	口縁～胴部1/2周 器面は荒れている。
2	甕	口 13.6 胴 13.2	口縁端部は角ばる。	外 口縁部はヨコナデ、頸部～胴部はヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤橙色	口縁～胴部1/2周
3	甕	胴 13.3		外 胴～底部ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	胴～底部全周
4	鉢	口 13.8 高 8.3	口縁端部が僅かに内湾する。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁部1/2周

6 検出した遺構・遺物



A・Bセクション

- |       |                          |       |                         |
|-------|--------------------------|-------|-------------------------|
| 1 黒色  | 浅間C軽石、灰白色有馬火山灰をブロック状に含む。 | 8 黒色  | 灰白色土を多量に含む。             |
| 2 黒色  | より灰色味が強い。浅間C軽石を含む。       | 9 黒色  | 灰白色土を僅かに含む。             |
| 3 黒色  | 浅間C軽石を含まず。               | 10 黒色 | 灰色味が強い。                 |
| 4 灰褐色 | 第V層(基盤)漸移層。              | 11 黒色 | 灰色土ブロックを含む。             |
| 5 黒色  | 3層に似る。                   | 12 黒色 | 灰色土を多量に含む。              |
| 6 黒色  | 灰白色第V層土が混じる。             | 13 黒色 | 灰色土を僅かに含む。浅間C軽石の混入が目立つ。 |
| 7 黒色  | 灰白色土ブロックを含む。             | 14 黒色 | 灰色土ブロックを含む。             |

0 1:60 2m

第171図 233号住居

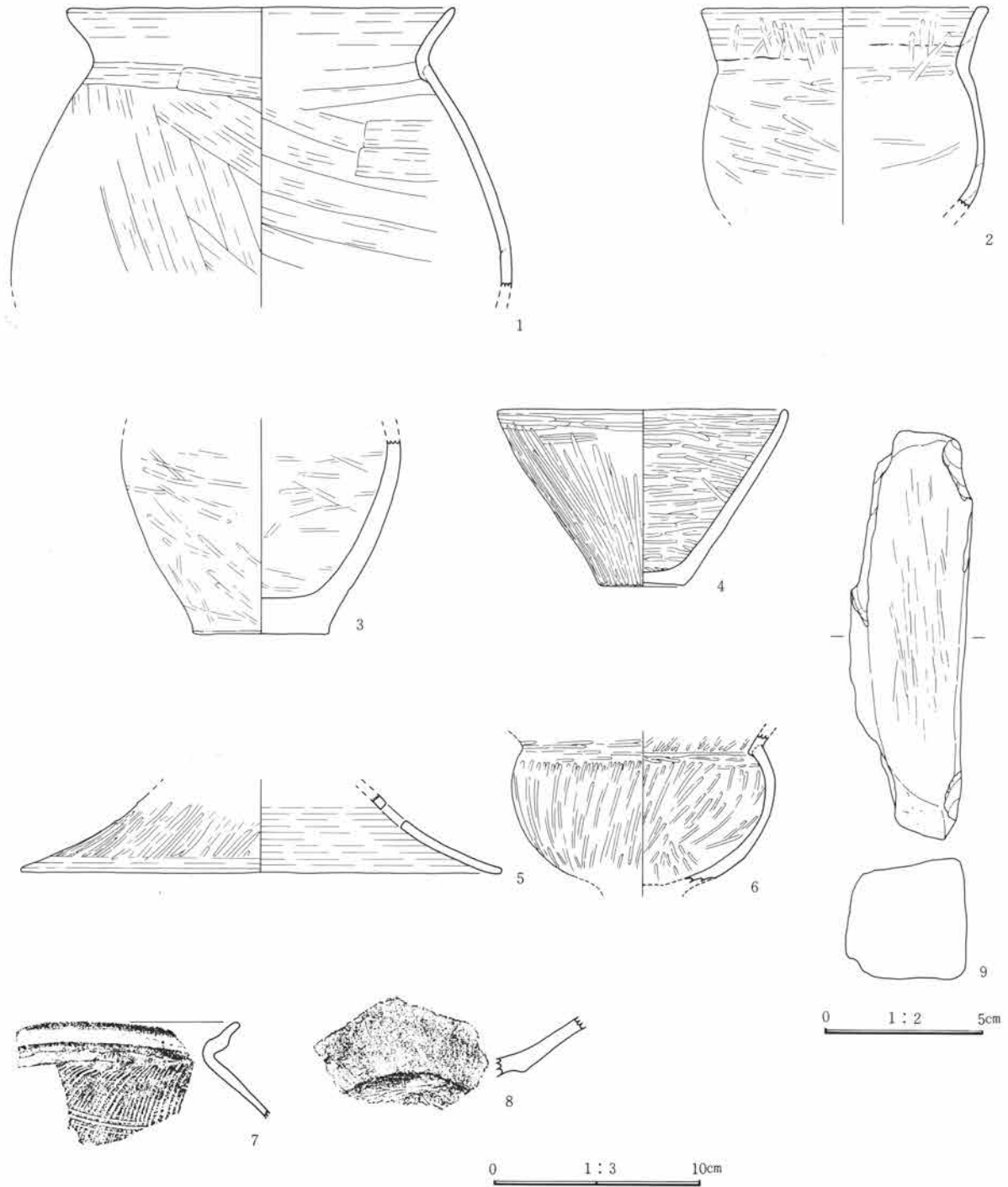
233号住居出土土器観察表 PL.117

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
5	高坏	脚 23.2	器壁は薄い。	外 ヘラミガキ、裾部はヨコナデ。 内 ヨコナデ。	砂粒を含む。	脚部 $\frac{1}{2}$ 周 やや堅緻、鈍橙色
6	台付罌	胴 12.5		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	胴部 $\frac{1}{2}$ 周 堅緻、橙色

233号住居出土土器観察表(拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
7	甕	口 15	S字状口縁	外 胴部はハケメ。内 ナデ。	砂粒多い。	堅緻	黒褐色	18%
8	高坏			外 ヘラミガキ。内 ヘラミガキ。	小礫を含む。	堅緻	灰白色	11%

(4) 古墳時代前期の住居跡



第172図 233号住居出土遺物

233住居出土石器観察表 PL.117

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
9	砥石	12.9×3.8×3.8	流紋岩	322.4	砥面は1面で他の3面に使用の痕跡はない。砥面には縦方向の擦痕が目立つ。

6 検出した遺構・遺物

234号住居 (第173図、PL. 22・46)

位置 40-H18に位置する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。西コーナー部は235号住居との重複により、不明確。規模は長軸5.1m、短軸3.2m、方位はN-25°-W。

周壁、壁溝 検出できた壁高は5cm以下で南半部ではかろうじて確認できる。壁溝は検出できない。

支柱穴 中軸線上に深さ15~20cmの小ピットが見られるが、これが支柱穴になる可能性がある。

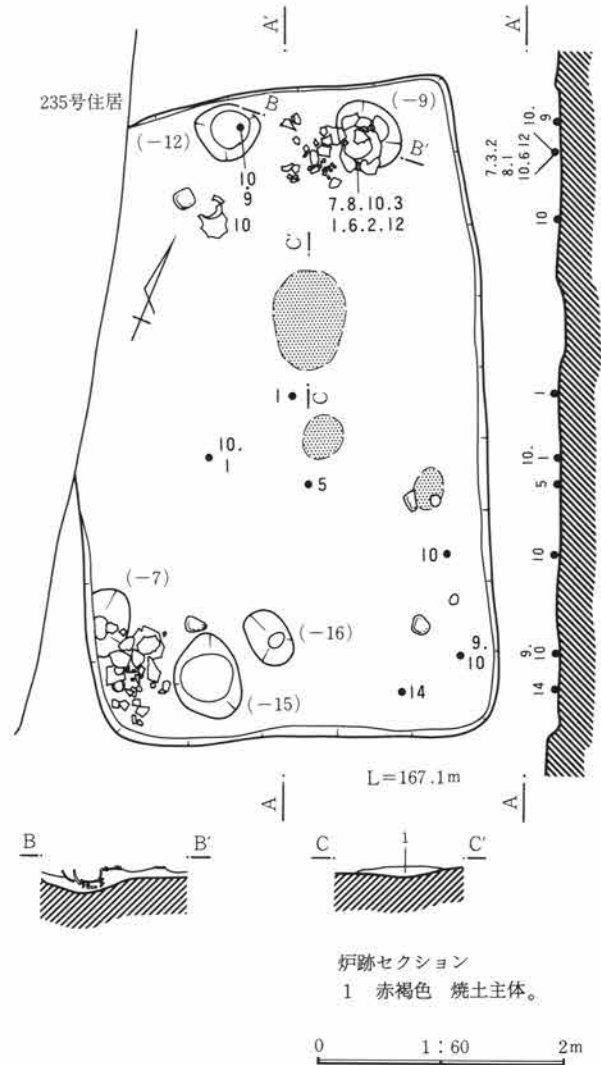
床面 床面は黒褐色土面を踏み固めている。

炉跡 中軸線上に1か所地床炉が見られる。焼土の生成が著しく、大きい。

遺物出土状態 床面上に多量に古式土師器の完形、半完形の破損した個体が出土する。

時期 古墳前期。

他の遺構との関係 235号住居と西部で重複する。本住居の出土土器の方が新しい。本住居の床面が30cmほど低い。



第173図 234号住居

234号住居出土土器観察表 PL. 117・118

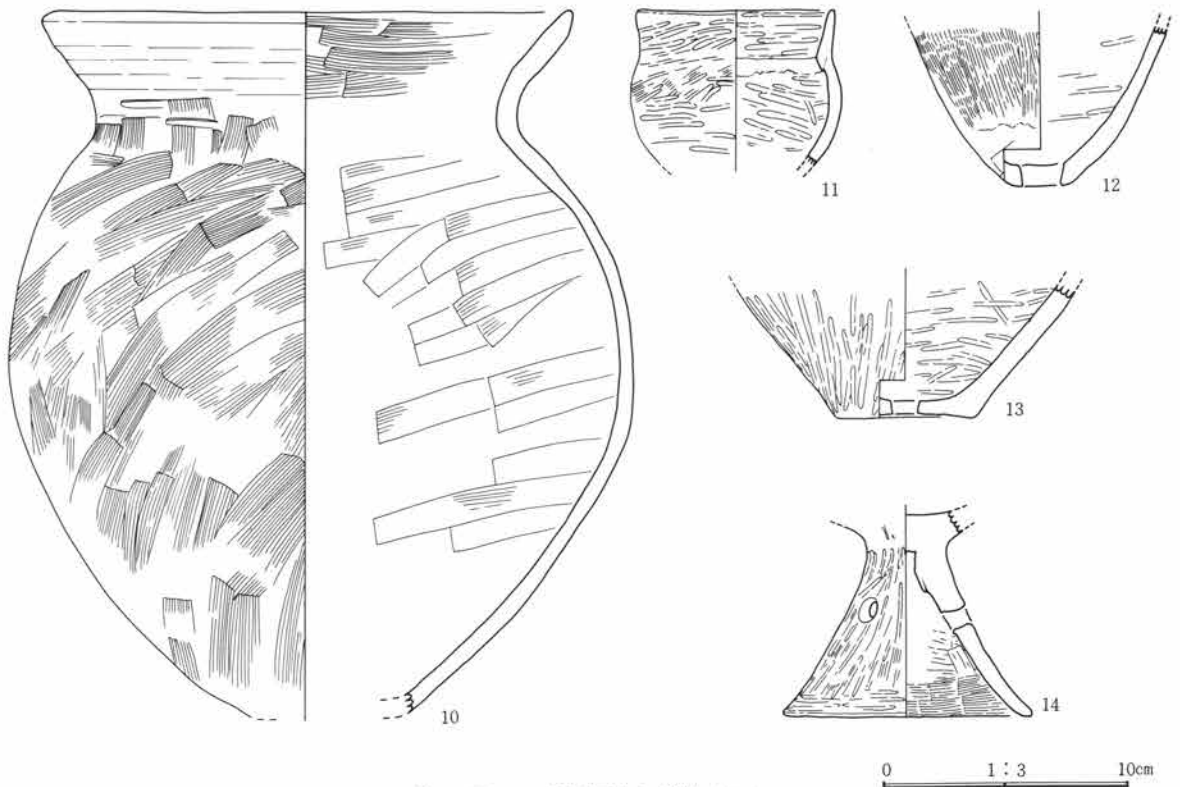
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 7.1 高 21.8	口縁部はやや内湾 気味に直立。	外 ヘラミガキ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	ほぼ完形 外面丹彩
2	壺	口 13.6	口縁下部に段を 作る。	外 口縁部はヨコナデ、ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色。	口縁部が周 内外面丹彩
3	甕	口 14.9 高 17.5	口縁部は段を作り 立ち上がる。	外 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はハケメ。 内 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はハケメ。	粗砂粒を多量に含 む。 堅緻、橙色。	ほぼ完形
4	甕	口 14.8 高 20.8	口縁外側に面を作 る。	外 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はハケメ。 内 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はナデ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍黄橙色	口縁部全周 頸～底部が周
5	甕	口 19.8 胴 22.0	口縁端部に面を作 る。	外 口縁部はヨコナデ、頸～胴部はハケメ。 内 口縁部はハケメ、ヨコナデ、胴部はヘラナデ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	口縁～胴部が周
6	甕	口 16.0 胴 20.2	口縁部は段を作 り、受け口状。	外 口縁～頸部はヨコナデ、胴部はハケメ。 内 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	口縁～胴部 ほぼ全周
7	甕	口 16.9		外 口縁部はヨコナデ、頸～胴部はハケメ。 内 口縁部はヘラナデ、胴部はハケメ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	口縁～胴部 ほぼ全周

(4) 古墳時代前期の住居跡



第174図 234号住居出土遺物(1)

6 検出した遺構・遺物



第175図 234号住居出土遺物(2)

234号住居出土土器観察表 PL. 118

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
8	甕	口 17.8	内面肩部に指オサエ痕が巡る。	外 口縁部はヨコナデ、頸～胴部はハケメ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～胴部1/4周
9	甕	口 17.8		外 口縁部はヨコナデ、頸部～胴部はハケメ。 内 口縁部はヨコナデ、ハケメ、頸～胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～胴上部1/4周
10	甕	口 21.0 胴 25.0		外 口縁部はヨコナデ、胴部はハケメ。 内 口縁部はハケメ、胴部はヘラナデ。	砂粒を多量に含む。 やや堅緻、橙色	口縁～胴部全周
11	埴	口 7.8 胴 8.4		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、灰白色	口縁～胴部1/4周
12	甕	孔 1.5		外 ハケメ、ヘケラズリ。 内 ヘラミガキ、ナデ。	粗砂粒、小礫を含む。 やや堅緻、鈍黄橙色	胴下～底部1/4周
13	甕	底 5.4 孔 1.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	胴下～底部全周
14	高环(?)	脚 10.0	脚部円孔は3個。	外 ヘラミガキ。 内 ナデ、ハケメ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、鈍黄橙色	脚部全周



## (5) 墓 跡

## 1号墓 (第176~179図、PL. 47・48)

1号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(磔床)×深さ	主体部主軸方位
東-西 13.4	北 1.7×0.24	S K 28	2.4×1.4	1.6±0.5 ×0.35±	N-73.3°-E
南-北 13.6	東 1.9×0.4	S K 29	2.0×0.5	1.4×(0.45) ×0.35	N-86°-E
	南 1.2×0.6				
	西 2.4×0.9				

**位置** F区の墓群中南端部に位置する。地形的に最も高い位置に造られている。

**周溝** 本遺跡中周溝規模は最も大きい。4本の溝をやや不整形な方形に配置し、南東部を除くコーナー部は土橋状に溝が途切れている。南東コーナー部は後世の流水による侵食を受け不明である。遺物は東側周溝内覆土中よりガラス製小玉が1点出土する。このほか南側周溝覆土上面、浅間C軽石層直下より長細い小円礫が数点、同層南周溝の外側よりS字口縁甕の脚部破片が2個体分出土しているが、これらの遺物は1号墓に後出するものである。

**土層堆積の状況** 低い盛土が認められる。封土の厚さは中央部で約50cm。上位層は浅間C軽石層で平均10cmの厚さをもって覆っている。周溝覆土はそれぞれに覆土上部、あるいは下部にまで厚い浅間C軽石層がレンズ状に堆積している。1号墓の周囲一帯は二ツ岳火山灰（FA）層の直下より畑跡が検出される。畑跡は1号墓の周溝上まで覆っているが、墓のマウンド部には畝は造られていない。

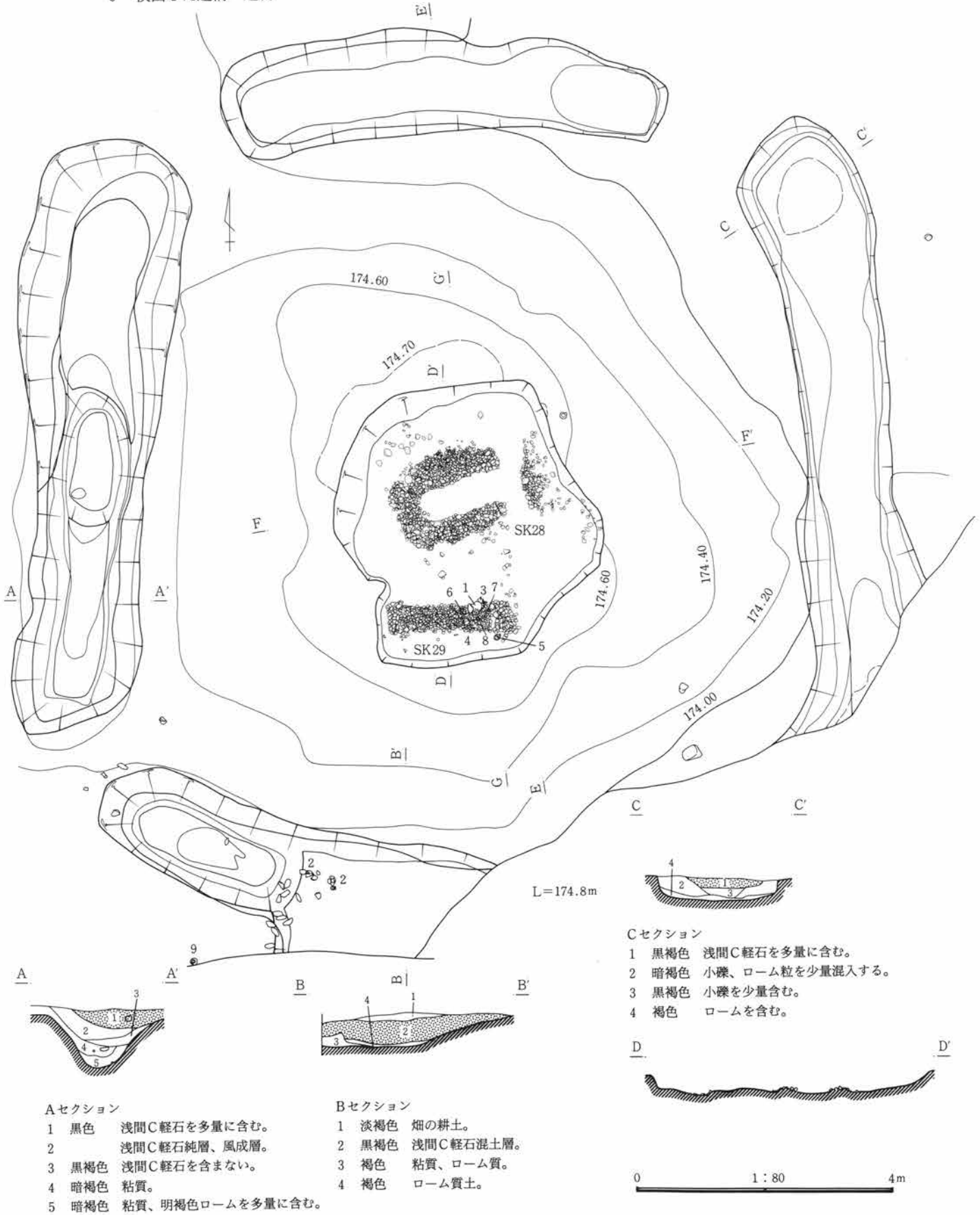
**主体部** マウンドの頂部には浅間C軽石層のやや厚い堆積が認められ、軽石層下の褐色土層の上面は平坦かやや窪んだ状態であった。主体部はこの土層下に2基（SK28、SK29）検出される。主体部の周囲には約4.2×4.3mの不整形な掘り込みが検出される。この掘り込みの周壁の検出状況はやや明確さを欠く。

SK28は埋葬部の周囲に礫集積帯を巡らす。礫床は認められない。礫群の外縁形状は胴部の張る隅丸長方形を呈する。東部で一部礫群が欠けているのは調査時の試掘トレンチにより失われてしまったことによる。床面は明確ではない。また埋葬部の覆土は暗褐色土で、層中に礫の混入などは少なく埋葬部を礫で覆った痕跡はない。埋葬部東部寄りの床面上に被葬者の歯を検出した。

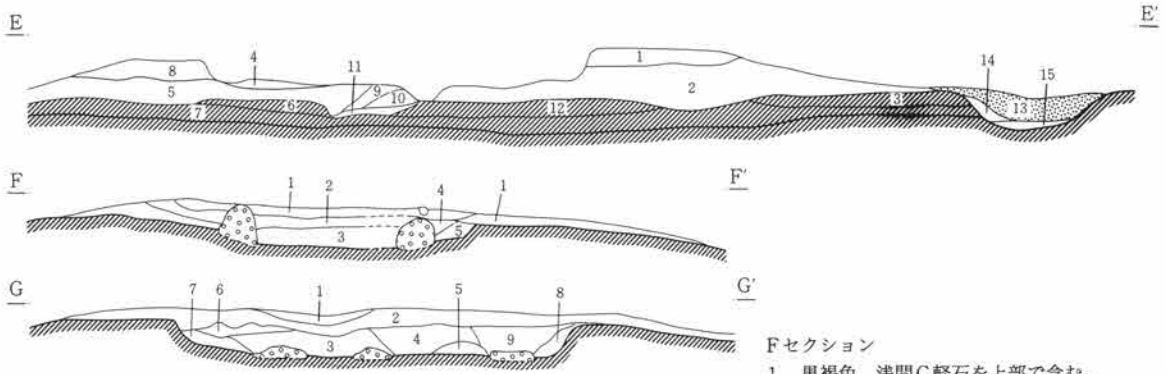
SK29 埋葬部には礫床を設け、その両端部に礫を集積する。礫床部は小円礫を密に比較的平坦に敷き詰め、礫床面の側縁部はやや大きめの円礫を直状に、礫床面よりもややせり上がった状態に配列している。礫床面直上において被葬者の歯が噛合った状態で検出される。SK29の覆土上部より壺、小型台付甕、高坏など数個体がほぼ完形の状態で出土している。



6 検出した遺構・遺物



第176図 1号墓(1)



L=174.8m

Eセクション

- 1 暗褐色 小礫を含む。ローム中の礫が多い。浅間C軽石層の直下層。(盛土)
- 2 暗褐色 やや粘質、小礫少ない。(盛土)
- 3 暗褐色 小礫を含む。下層(7層)漸移層。
- 4 暗褐色 黄褐色土をブロック状に含む。(主体部の覆土)
- 5 黒褐色 黄褐色ブロックは入らない。(盛土)
- 6 暗褐色 黄色のローム細粒が混入。
- 7 黄褐色 ローム質、小礫を多く含む。
- 8 暗褐色 炭化物点在。小礫も多い。(盛土)
- 9 暗褐色 ロームを含む。倒木跡か。
- 10 黒褐色 黄色ブロックは入らない。6層と同じ。
- 11 暗灰褐色 6層と7層の中間層。
- 12 暗黄褐色 7層との間は漸移的、2層との間は明瞭。
- 13 黒色 浅間C軽石を多量に混入。
- 14 黒色 ローム粒子を混入。
- 15 黒色 粘質。

Fセクション

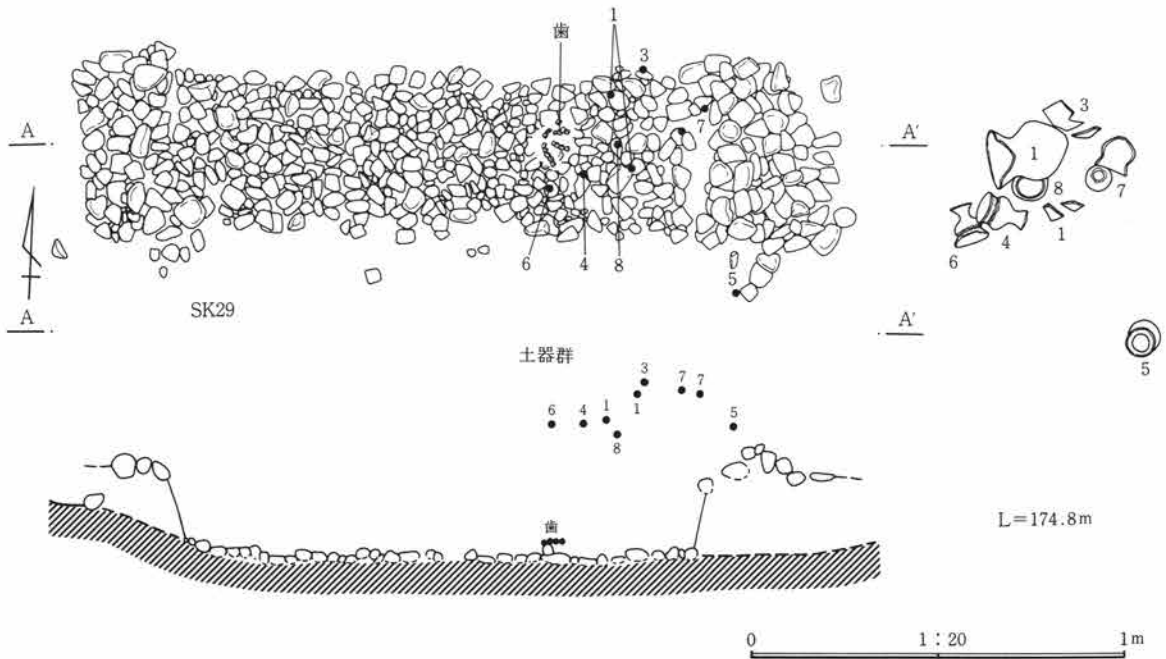
- 1 黒褐色 浅間C軽石を上部で含む。
- 2 暗褐色 小礫を多く含みかたい。
- 3 暗褐色 礫少なく比較的やわらかい。
- 4 暗褐色 礫を多量に含む。
- 5 暗褐色 ロームを含む。

Gセクション

- 1~3はFセクションに同じ。
- 4 黒褐色 ローム小ブロックが入る。
- 5 黒色 礫を含む。
- 6 黒色 細小礫を多量に含む。ローム粒を含む。
- 7 暗褐色 ローム粒、細礫を多量に含む。
- 8 暗褐色 やや粘質、ローム粒を僅かに含む。
- 9 暗褐色 ローム粒を含まない。黄色の軽石粒を点在。

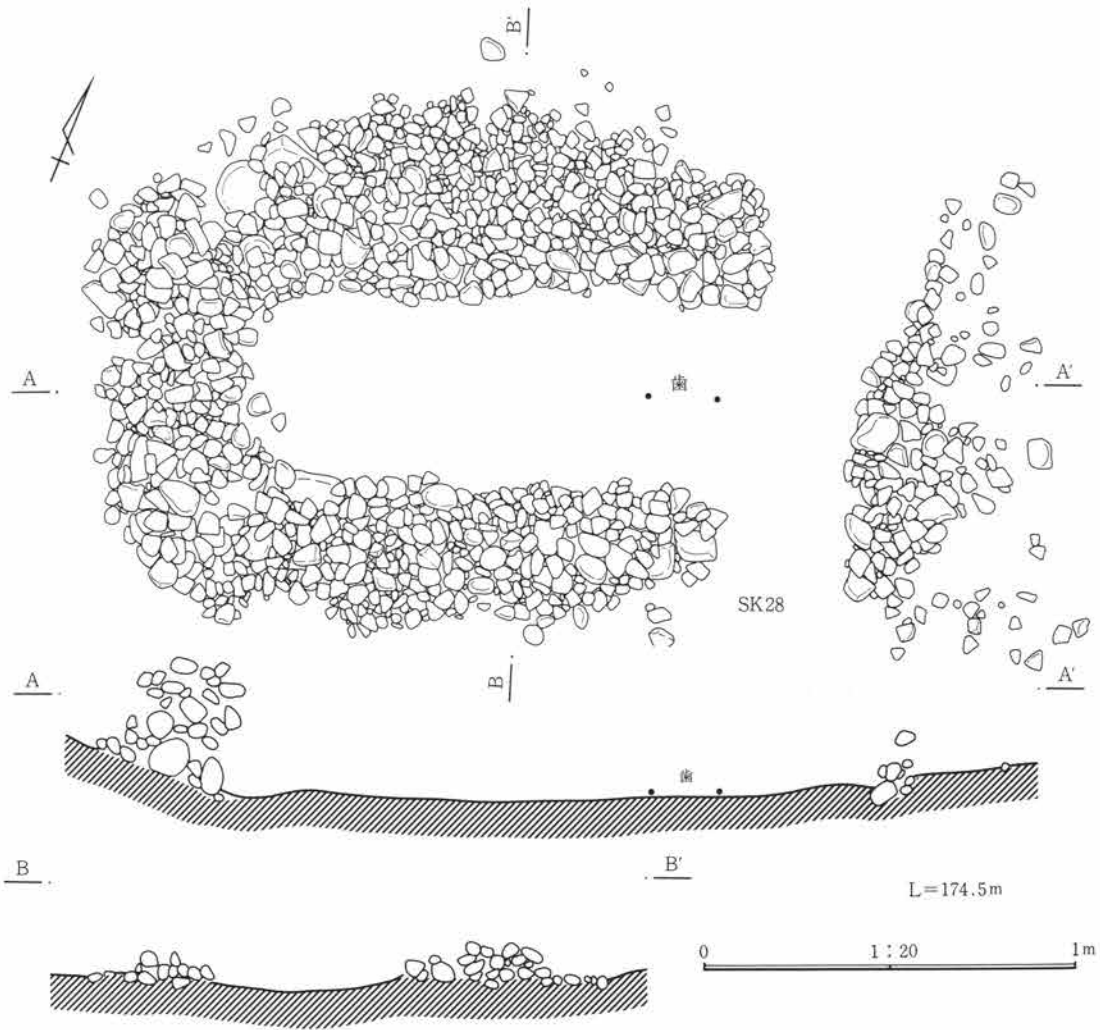
0 1:80 4m

第177図 1号墓(2)



第178図 1号墓(3)

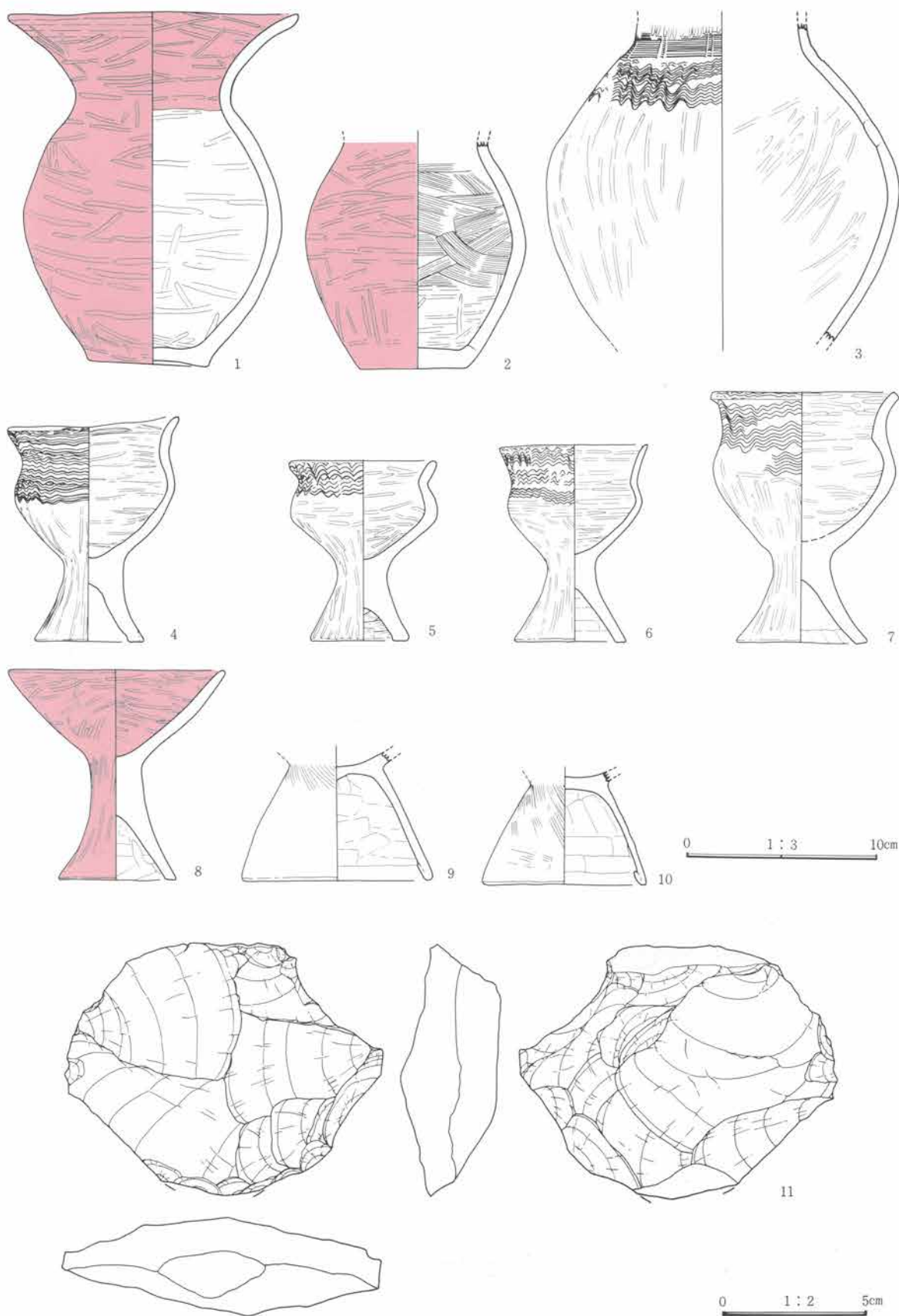
6 検出した遺構・遺物



第179図 1号墓(4)

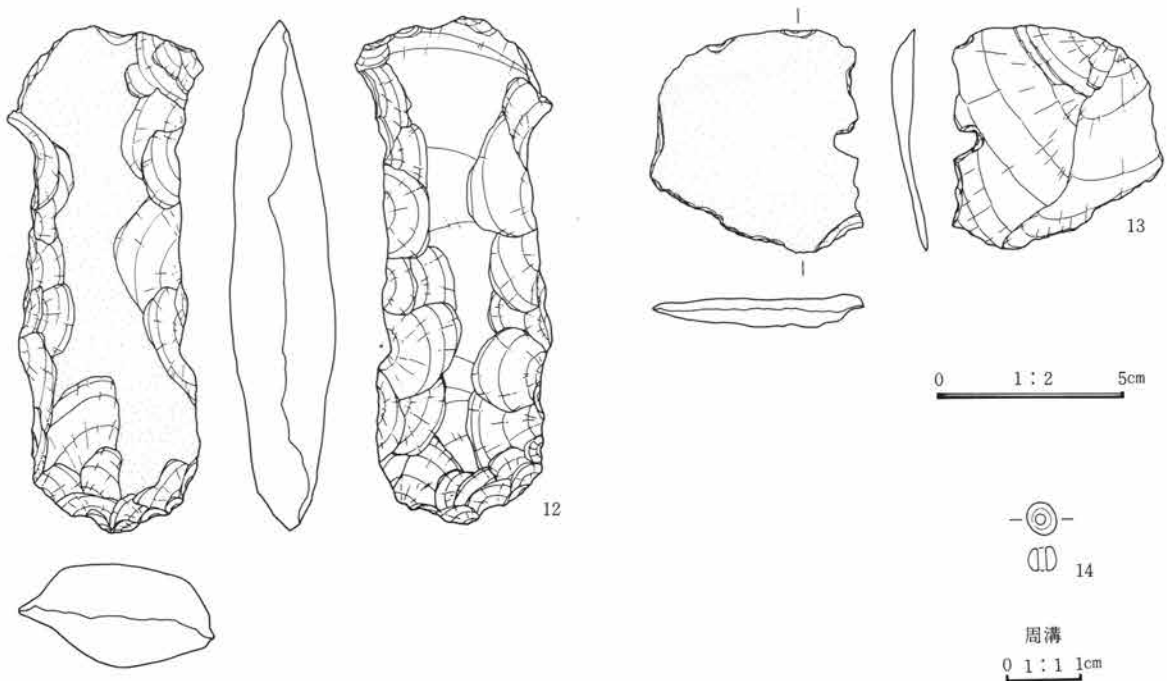
1号墓出土土器観察表 PL.118

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 15.5 高 17.8		外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	ほぼ完形 内外面丹彩
2	壺	胴 11.4		外 ヘラミガキ。 内 頸部、底部はヘラミガキ、胴部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	頸～胴部 $\frac{1}{2}$ 周 外面丹彩
3	甕	胴 18.3		外 頸部は2連止め簾状文、肩部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤橙色	頸～底部 $\frac{1}{2}$ 周
4	台付甕	口 8.8 高 11.2		外 口縁～肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 口縁～底部はヘラミガキ、脚部はナデ。	砂粒を含む。 やや軟質、暗赤褐色	ほぼ完形
5	台付甕	口 7.5 高 9.6		外 口縁～頸部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 口縁～底部はヘラミガキ、脚部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	ほぼ完形
6	台付甕	口 7.7 高 10.1		外 口縁～肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 口縁～底部はヘラミガキ、脚部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、明褐色	完形
7	台付甕	口 9.4 高 12.9	口縁端部は角ばり、面を作る。	外 口縁端部～頸部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 口縁～底部はヘラミガキ、脚部はナデ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周 脚部全周
8	高坏	口 11.4 高 10.8		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	完形 内外面丹彩
9	台付甕	脚 9.7		外 脚部はハケメ、ナデ。 内 脚部天井部は指ナデ、以下ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、浅橙色	脚部全周
10	台付甕	脚 8.5		外 脚部はハケメ、ナデ。 内 指ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、灰白色	脚部全周



第180图 1号墓出土遗物(1)

6 検出した遺構・遺物



第181図 1号墓出土遺物(2)

1号墓出土石器観察表 PL.118

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
11	刃器	8.7×11.0×3.4	黒色頁岩	312.4	両面剥離調整が加えられている。刃部は円弧状に作られている。刃部の一部に欠損が認められる。
12	土掘り具	13.5×5.2×2.8	黒色頁岩	212.7	両面自然面を残す。周縁部には丹念に剥離調整を加えている。両端部に刃を作出している。
13	刃器	5.9×5.6×0.9	黒色頁岩	24.2	片面剥離の薄い剥片。刃部に細かい剥離が認められる。使用痕とみられる。

1号墓出土玉類観察表 PL.144

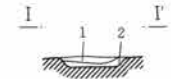
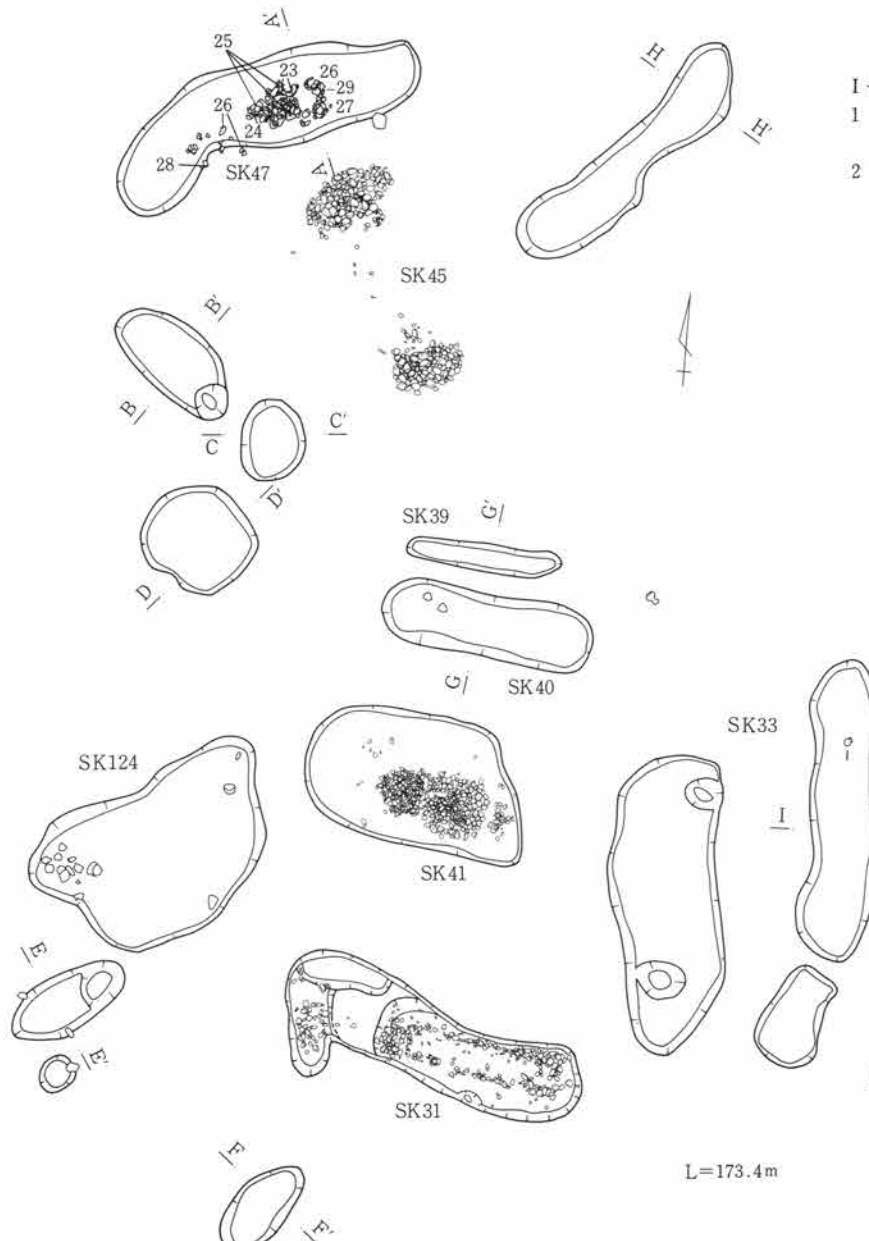
遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
14	小玉	0.3	0.4	0.1	ガラス、コバルトブルー	

2 A号墓 (第182~184図、PL. 48・49)

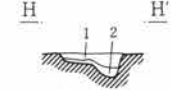
2 A号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(礎床)×深さ	主体部主軸方位
		SK 31	2.1×0.55	1.4 ±×(0.5) ×0.2 ±	N-72.5°-W
		SK 41	1.5×0.7	1.2 ×(0.5) ×-	N-87°-W

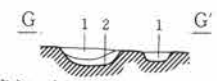
(5) 墓 跡



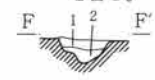
Iセクション  
 1 暗褐色 浅間C軽石、ローム粒を混入。  
 2 褐色 ローム粒を多量に混入。



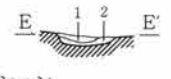
Hセクション  
 1 黒褐色 粘質、浅間C軽石を含む。  
 2 褐色 粘質。



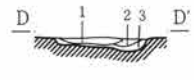
Gセクション  
 1 黒褐色 やや大粒の浅間C軽石を多く含む。炭化物を少量混入する。  
 2 暗褐色 粘質、ロームブロックを含む。



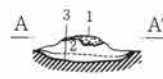
Fセクション  
 1 黒褐色 浅間C軽石、ローム粒を含む。  
 2 褐色 ローム粒を少量含む。



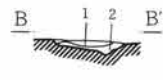
Eセクション  
 1 黒褐色 浅間C軽石、ローム粒を含む。  
 2 褐色 ローム粒を少量含む。



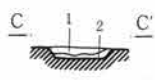
Dセクション  
 1 黒褐色 粘質、浅間C軽石、多量のロームを含む。  
 2 暗黒褐色 少量のローム粒を含む。  
 3 褐色 ローム粒を含む。漸移層に近い。



Aセクション  
 1 黒褐色 粘質、大粒の浅間C軽石を含む。  
 2 暗黒褐色 粘質、少量のロームを含む。  
 3 褐色 ローム漸移層に近い。

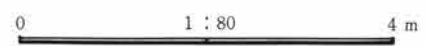


Bセクション  
 1 黒褐色 粘質、浅間C軽石小粒を含む。  
 2 暗褐色 粘質、ローム粒をわずかに含む。



Cセクション  
 1 暗黒褐色 粘質、浅間C軽石小粒を含む。  
 2 暗褐色 やや粘質、ロームブロックを含む。

L=173.4m



第182図 2 A号墓・2 B号墓

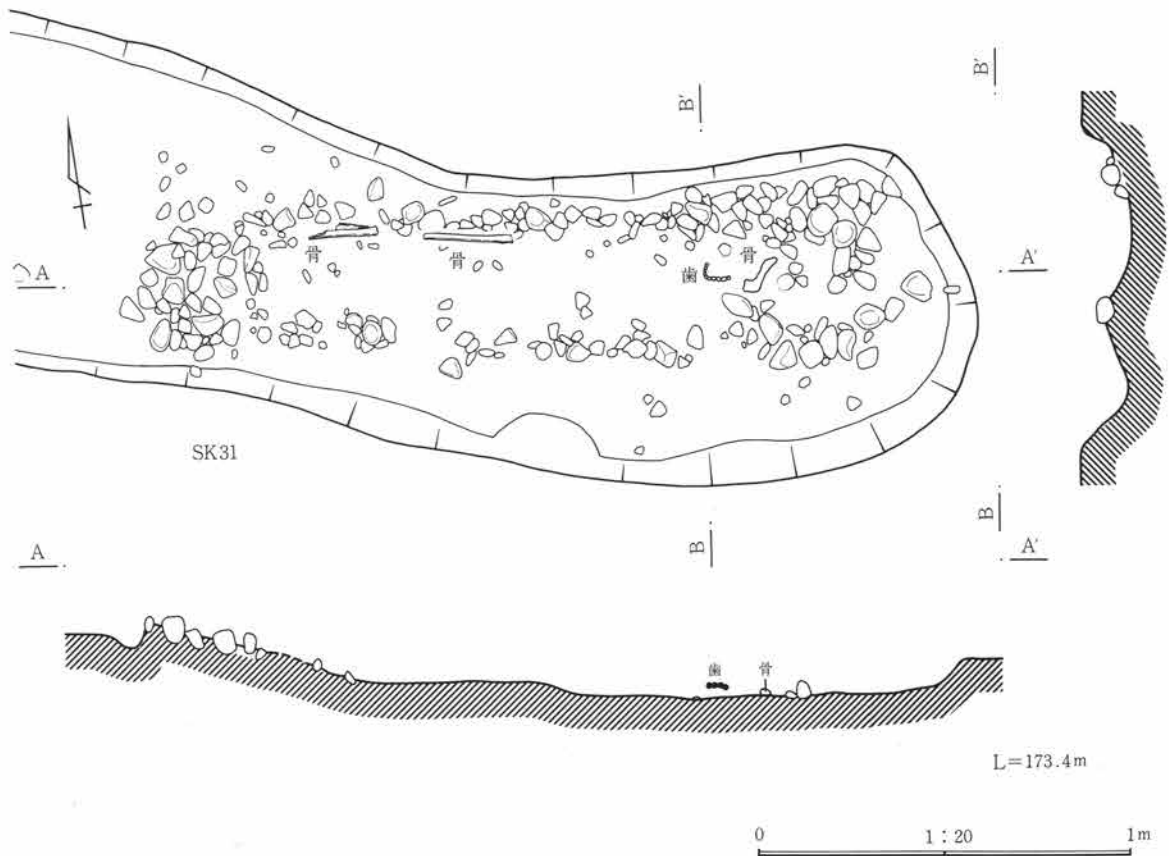
6 検出した遺構・遺物

**位置** 34-F16に位置する。F区の墓群の最南部に3基の主体部（SK31、SK41、SK45）が近接して設けられている。3基の主体部の周囲には周溝と見られる溝や不整形な窪みが検出される。主体部の位置関係や周囲の溝などの配置関係から南部の主体部、SK31とSK41を2A号墓、北部のSK45を2B号墓とする2基の周溝墓を認めることができる。

**周溝** 二つの主体部SK31とSK41の間は約2mであり、この間に溝などは造られていない。2B号墓の主体部であるSK45と2A号墓のSK41の間は約4mで、この間は2条の溝（SK39、SK40）で区画されている。東側は長さ4.2mで弧状の溝、SK33が配置されている。溝中より完形の小型壺が1点出土する。2A号墓の東側周溝であった可能性も考えられる。

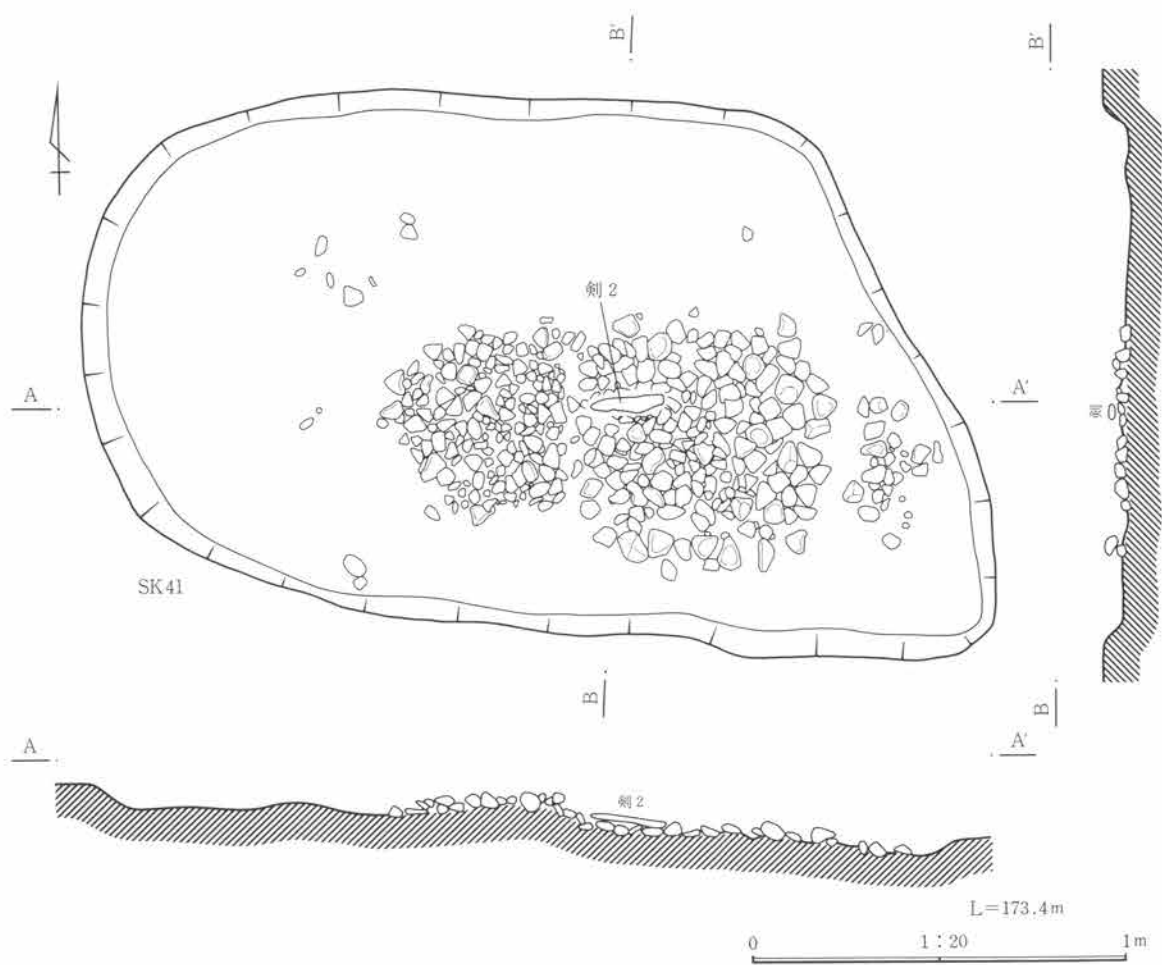
**主体部** SK31は埋葬部の両端部に礫を集積し、両側部には礫を配列する。礫床は設けない。埋葬部には被葬者の四肢骨、東端より歯を検出する。主体部の西に礫集積があるがSK31との関係は不明。

SK41は埋葬部に小円礫を敷き詰める。周囲に礫集積などは認められない。礫床部の幅は50cmで比較的幅が広い。人骨など被葬者の遺体は検出できなかった。ほぼ中央には、礫床面に密着して鉄剣が1点検出される。尖端を西方向に向けている。覆土中よりガラス製小玉を1点検出している。

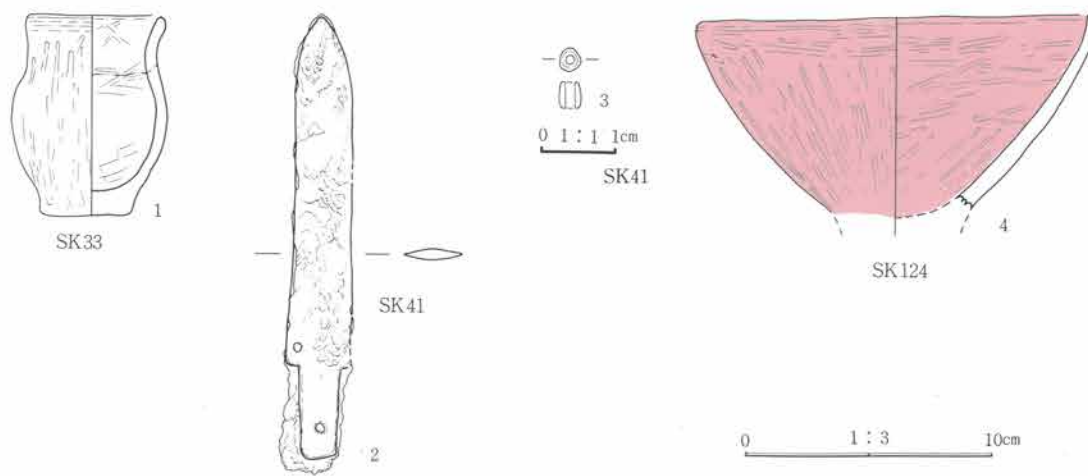


第183図 2A号墓(1)





第184图 2 A号墓 (2)



第185图 2 A号墓出土遺物

6 検出した遺構・遺物

2 A号墓出土土器観察表 PL.119

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 5.6 高 7.9	成、整形は丁寧。粘土積上痕あり。	外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 口縁部はヘラミガキ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、灰褐色	完形
4	高 坏	口 15.6		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	坏部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩

2 A号墓出土鉄剣観察表 PL.119

遺物番号	全長	身幅	茎長	身厚	形状、遺存状態など
2	17.5	2.3	3.6	0.4±	剣身部は芯の空洞化が進んでいるが、尖端から刃部まで両刃線は遺存している。刃部の片側は錆が進み不明瞭である。茎と刃部に小孔を認める。錆（シノギ）は不明瞭。

2 A号墓出土玉類観察表 PL.144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
3	小 玉	0.35	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	

2 B号墓 (第182・186図、PL.49・50)

2 B号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(礎床)×深さ	主体部主軸方位
	北側 1.0×0.2	SK 45	2.5×1.0	1.75 × — ×0.28	N-26°-W

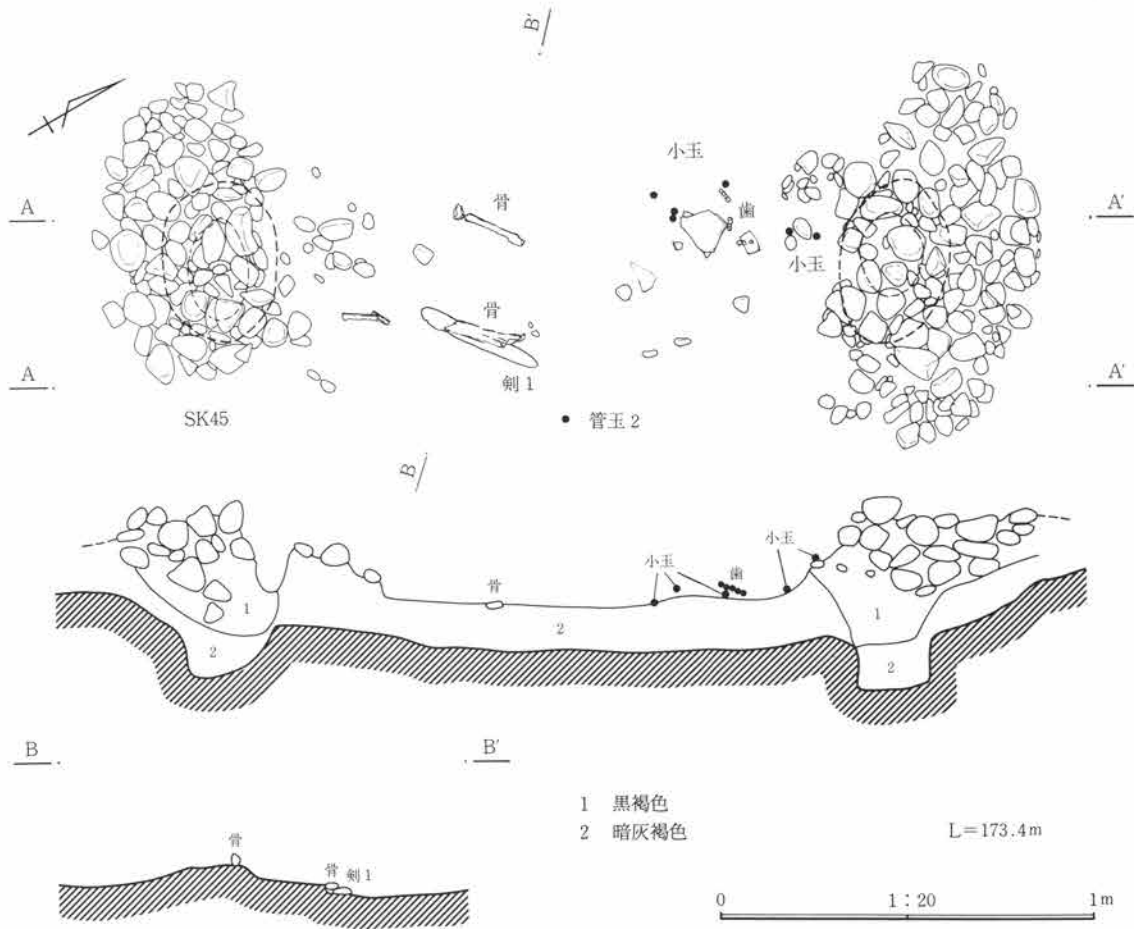
**位置** 36-F20、2 A号墓の北に隣接する。

**周溝** 北側周溝は、主体部の北に長さ3.6mの弧状の溝が配置されている。周溝内には丹彩の大形壺、高坏など多くの完形個体が出土している。これらの土器の上部は浅間C軽石層に覆われている状態が認められる。

南側2 B号墓の主体部であるSK41との間に2条の小規模な溝が設けられている。

**主体部** SK45は埋葬部の両端に礫を集石し、礎床は伴わない。埋葬部の床面は判然としない。埋葬部の北寄りに被葬者の歯やガラス製小玉や管玉などが多数点在する。頭位は北方向で、被葬者の腰部付近の西側部に肢骨と見られる骨片に密着して鉄剣1点が検出された。尖端を足方向に向いている。礫集積下2か所に長円形ピットを設けている。

(5) 墓 跡



第186図 2 B号墓

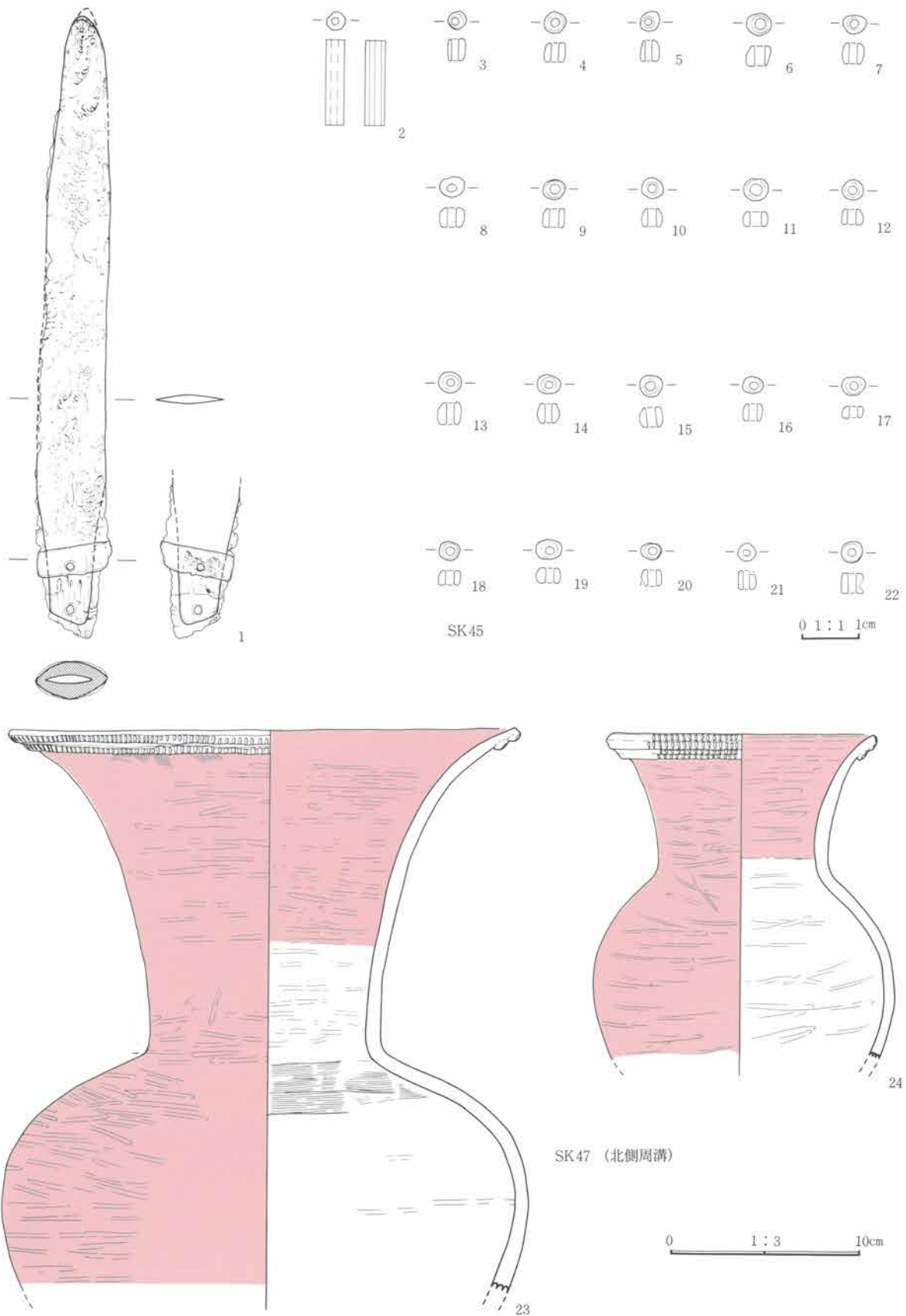
2 B号墓出土鉄剣観察表 PL.119

遺物番号	全長	身幅	茎長	身厚	形状、遺存状態など
1	31.4	3.6	—	0.5±	刃部は錆化のためやや不明瞭であるが、刃線が茎とつながっており、關(マチ)は作られていないようである。腰巾(ハバキ)とみられる鹿角製のリングがつけられ、目釘で止められている。鍔(シノギ)は不明瞭。

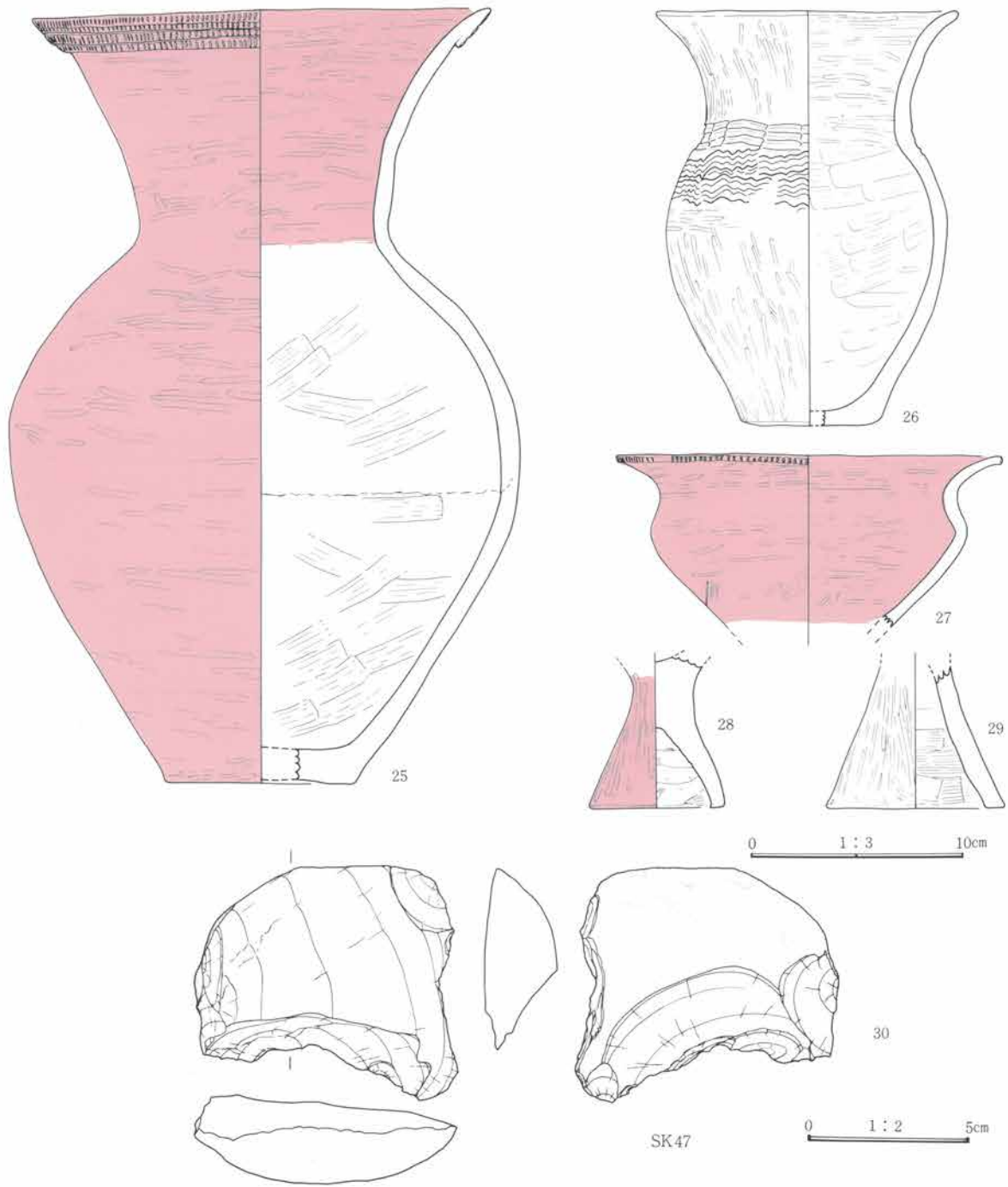
2 B号墓出土玉類観察表 PL.119・144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
2	管玉	1.48	0.33	0.16	赤色ケイ質岩	研磨稜線あり
3	小玉	0.4	0.32	0.18	ガラス、スカイブルー	
4	小玉	0.3	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
5	小玉	0.35	0.35	0.12	ガラス、スカイブルー	
6	小玉	0.35	0.45	0.21	ガラス、スカイブルー	
7	小玉	0.35	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	
8	小玉	0.35	0.45	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
9	小玉	0.35	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	
10	小玉	0.35	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
11	小玉	0.25	0.45	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
12	小玉	0.25	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
13	小玉	0.4	0.45	0.15	ガラス、スカイブルー	
14	小玉	0.35	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	
15	小玉	0.35	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	
16	小玉	0.3	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	
17	小玉	0.2	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
18	小玉	0.25	0.35	0.2	ガラス、スカイブルー	
19	小玉	0.25	0.45	0.18	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
20	小玉	0.3	0.37	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
21	小玉	0.35	0.35	0.11	ガラス、スカイブルー	
22	小玉	0.35	0.4	0.16	ガラス、スカイブルー	研磨面、気泡あり。

6 検出した遺構・遺物



第187図 2 B号墓出土遺物(1)



第188図 2 B号墓出土遺物(2)

2 B号墓出土土器観察表 PL. 119・120

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
23	壺	口 26.4 胴 27.4	2段折り返し口縁。 頸部は強く屈曲。	外 口縁部は2段の刻み目、以下ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁～胴部迄周 内外面丹彩
24	壺	口 13.9 胴 15.7	2段の折り返し口 縁。	外 口縁部は4段の刻み目。以下ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はヘラナデ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁～胴部迄周 内外面丹彩。

6 検出した遺構・遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
25	壺	口 21.4 高 35.8	幅広の折り返し口縁。	外 折り返し部を2条の沈線で区画し、刻み目を4段巡らす。以下ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ。胴部はハケメ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	ほぼ完形 内外面丹彩
26	甕	口 14.0 高 19.0		外 頸部は等間隔止め簾状文、胴上部は波状文。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、以下ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～底部%周
27	高坏	口 17.8 胴 14.7		外 口縁端部は刻み目文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	坏部%周 内外面丹彩
28	高坏(?)	脚 6.4		外 ヘラミガキ。 内 指ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	脚部全周 外面丹彩
29	台付甕(?)	脚 8.1		外 ヘラミガキ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 やや堅緻、赤橙色	脚部全周

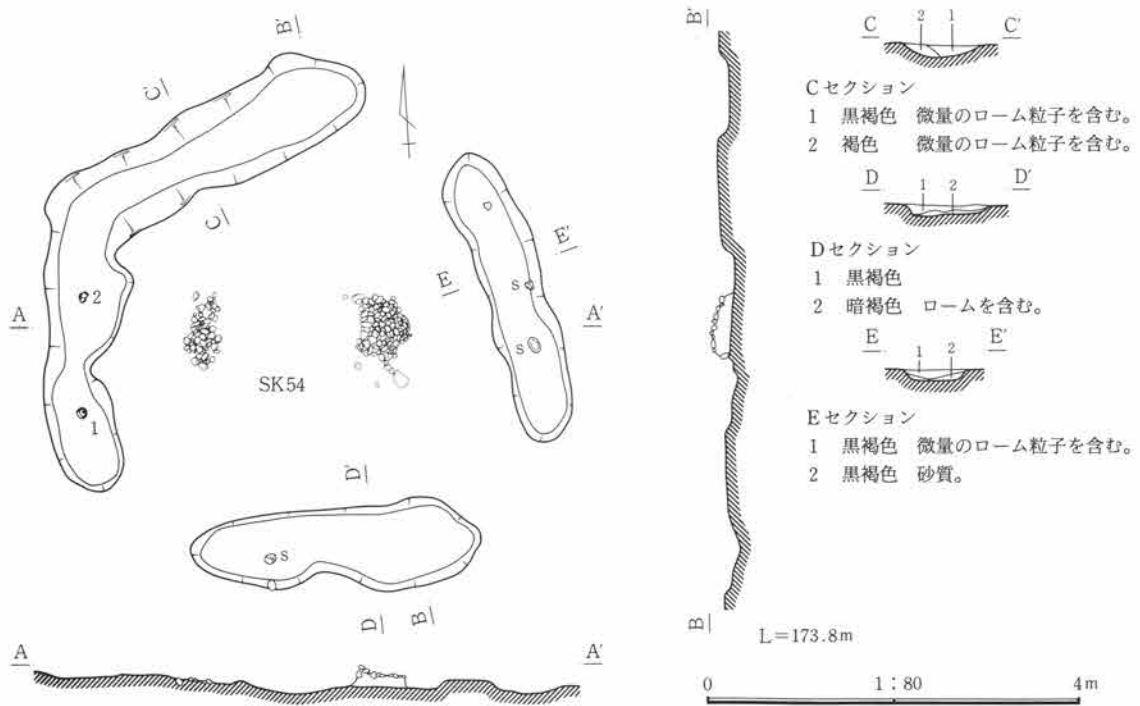
2 B号墓出土石器観察表 PL. 120

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
30	刃器	7.2×8.2×2.8	ケイ質頁岩	159.3	片面に自然面を残す剥片。刃部は両面から剥離調整し、作出する。内湾が目立つ。厚手である。

3号墓 (第189・190図、PL. 50)

3号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(礎床)×深さ	主体部主軸方位		
東-西	5.3	北側	0.9×0.15	SK 54	2.45×0.6 ±	1.5× — ×0.3	N-89°-E



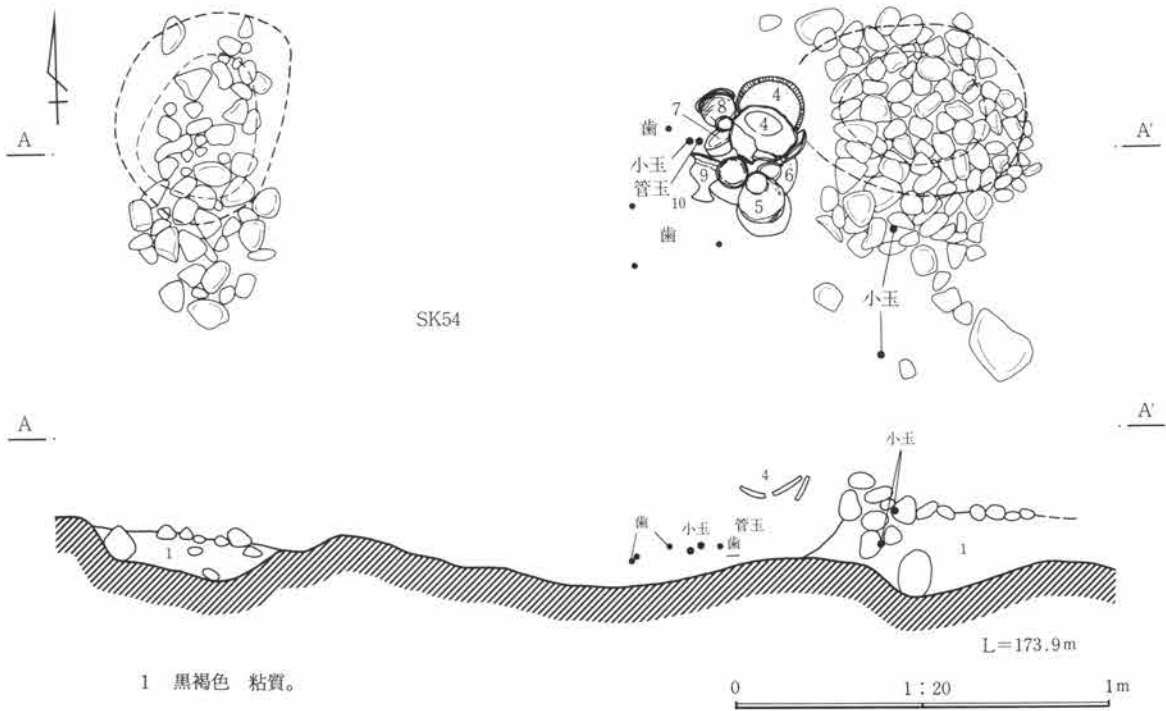
第189図 3号墓(1)



位置 40-F13、墓群の最南端に位置する。F区大溝の北辺部に当たるが、大溝の上限は覆土の状況から浅間C軽石層降下以後であり、弥生時代の墓に後出すると見られる。

周溝 1基の主体部の周囲に不整形な方形周溝を巡らす。3か所のコーナー部が土橋状に途切れる。溝の検出状態は部分的にやや明確さに欠ける。

主体部 周溝内に1基の主体部が検出される。主体部は埋葬部の両端に礫を集積する。礫床を伴わない。埋葬部の床面は明確に検出できない。礫集積下2か所に長円形浅いピットを設けている。埋葬部の東部に被葬者の歯や石製管玉、ガラス製小玉が多数出土する。また小型壺、小型台付甕、小型高坏などの完形個体が歯、玉類などの出土した地点の直上、埋葬部の覆土上部に重なり合った状態で検出された。



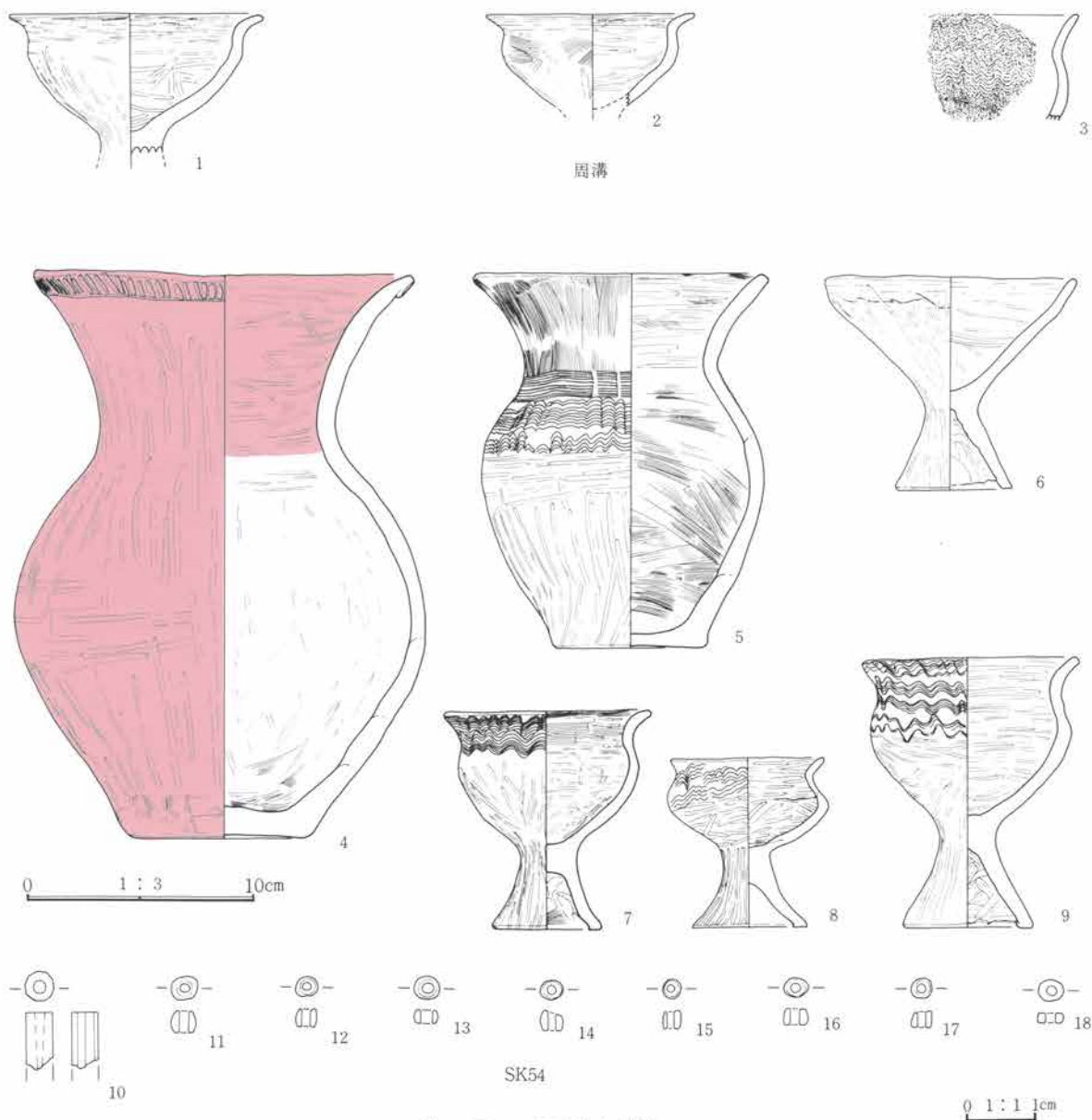
第190図 3号墓(2)

3号墓出土土器観察表 PL.120

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	高坏	口 10.8		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	坏部 $\frac{1}{2}$ 周
2	高坏	口 8.8		外 口縁部はヨコナデ、以下ハケメ後ヘラミガキ。 内 ハケメ後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、赤褐色	坏部 $\frac{3}{4}$ 周
4	壺	口 16.1 高 24.2	折り返し口縁。	外 口縁部は刻み目、以下ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、以下ヘラナデ。	砂粒を含む。 やや軟質、赤色	ほぼ完形 内外面丹彩
5	壺	口 12.2 高 16.4		外 頸部は2連止め簾状文、肩部は波状文。 内 口縁～頸部はハケメ後ヘラミガキ、以下ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	完形
6	高坏	口 10.7 高 9.2	器面に歪みが目立つ。	外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はナデ。	砂粒を含む。 やや堅緻、赤褐色	完形
7	台付甕	口 8.7 高 9.4		外 口縁～頸部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 口縁部はハケメ後ヘラミガキ、以下ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、赤褐色	完形



6 検出した遺構・遺物



第191図 3号墓出土遺物

3号墓出土土器観察表 PL. 120

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
8	台付甕	口 6.6 高 7.3		外 口縁～肩部波状文、以下ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はナデ。	砂粒を含む。 堅緻、褐色	ほぼ完形
9	台付甕	口 9.0 高 11.6	口縁端部はやや角ばる。	外 口縁～肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 体部はヘラミガキ、脚部はヘラナデ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	完形

3号墓出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
3	台付甕	口 9		外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	明赤褐色	9%

3号墓出土玉類観察表 PL.120・144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
10	管玉	—	0.4	0.12	赤色ケイ質岩	研磨稜線あり。
11	小玉	0.3	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	
12	小玉	0.2	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	
13	小玉	0.2	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	
14	小玉	0.3	0.32	0.12	ガラス、スカイブルー	

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
15	小玉	0.3	0.3	0.12	ガラス、スカイブルー	
16	小玉	0.25	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	
17	小玉	0.25	0.32	0.15	ガラス、スカイブルー	
18	小玉	0.15	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	

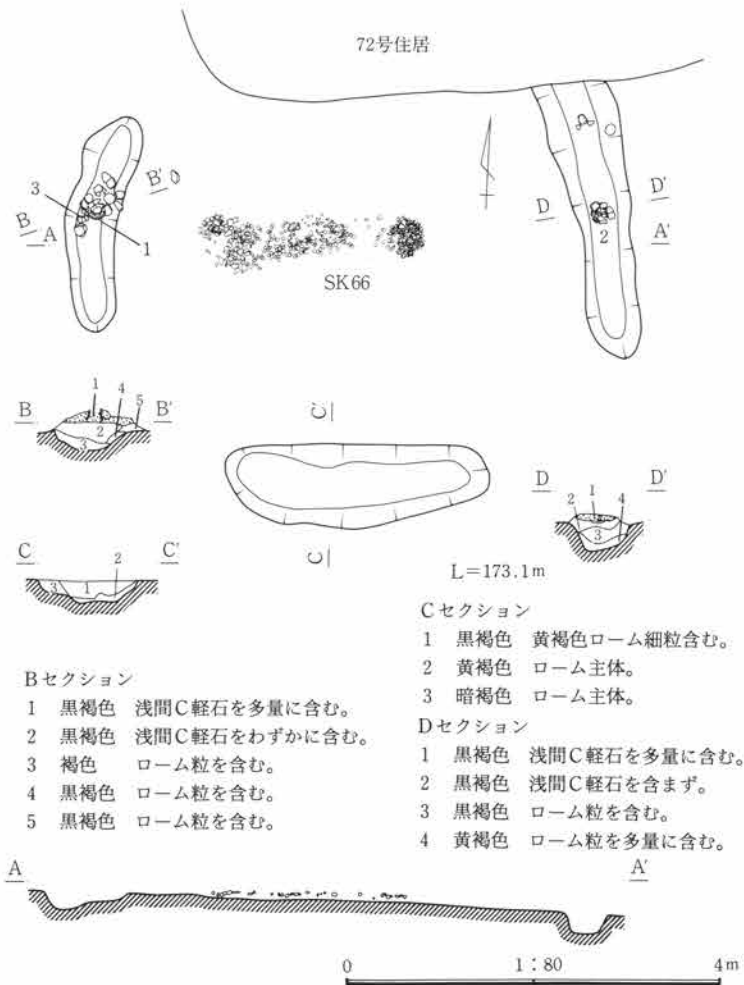
4 A号墓 (第192・193図、PL. 51)

4 A号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(礎床)×深さ	主体部主軸方位		
東—西	6.05	東側	0.9×0.4	SK 66	2.4×0.6	1.3±×(0.4)×0.09	N—84°—E

位置 33—F32に位置する。4 B号墓と隣接する。

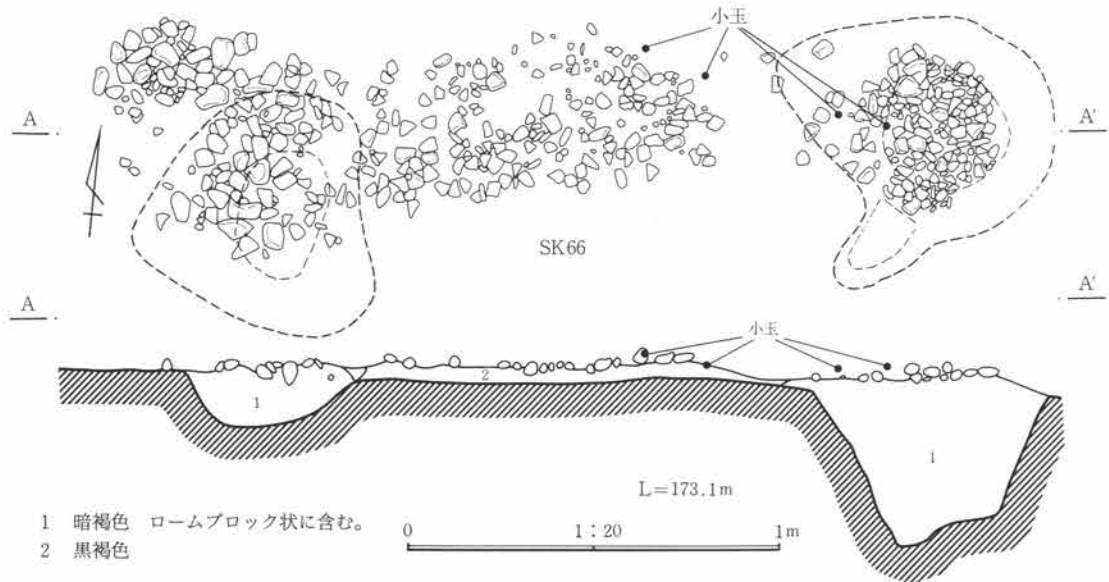
周溝 主体部の周囲に方形に周溝を巡らす。3か所のコーナー部が土橋状に途切れる。北東のコーナから北側周溝にかけて72号住居の覆土上に造られているため、溝の存在は確認できたが溝の形状は明確にすることはできなかった。4 B号墓との間を区切る西側溝はやや弧状をなしている。4 B号墓と共用する溝とみられるが、その湾曲状況から本来4 A号墓に伴って造られたと考えられる。東側および西側溝の覆土上部より壺の大形破片が数個体分出土している。土器群上部を浅間C軽石層が覆っている。



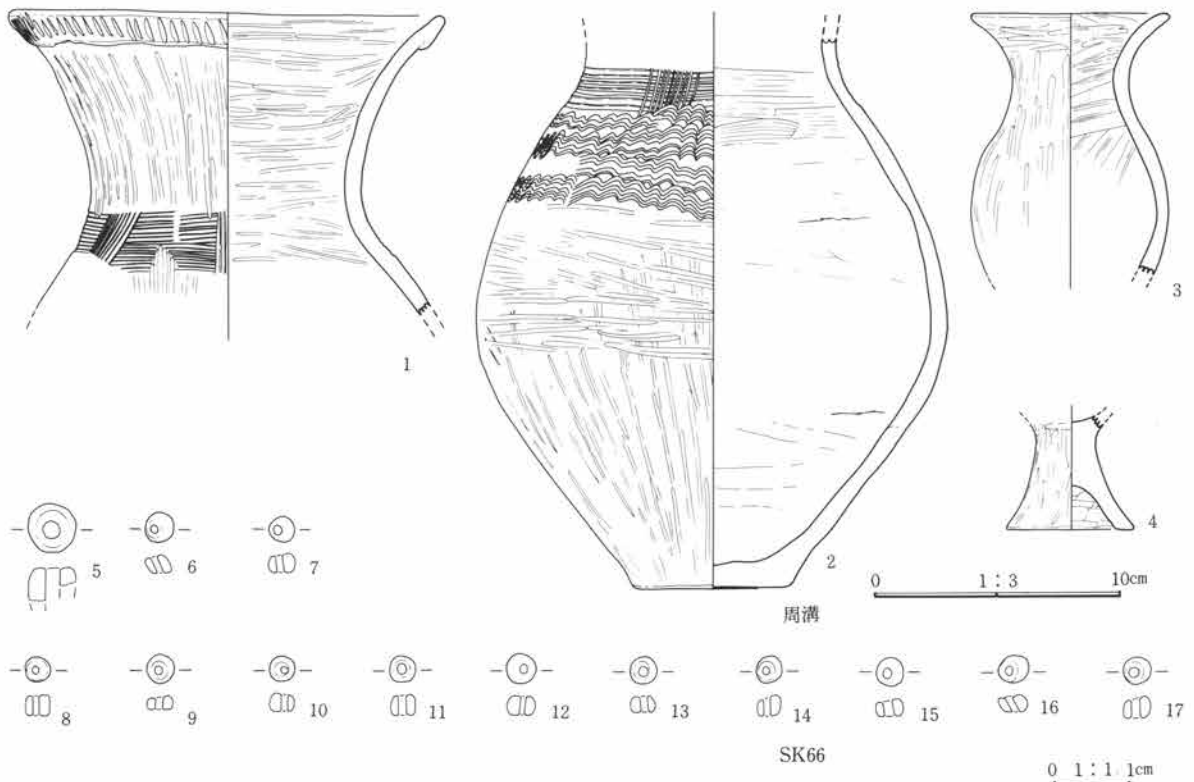
第192図 4 A号墓 (1)

6 検出した遺構・遺物

**主体部** 主体部は周溝内に1基見られる。主体部は、埋葬部に磔床を設け、この両端に磔を集積する。埋葬部の両端に集積された小円磔は比較的数量が少なく、磔床部とほぼ同じ高さで、また磔の大きさに差が少ないため、埋葬部と磔集積部の境界がやや明確さを欠く。埋葬部床面上、東端部にガラス製小玉が多数検出されている。磔集積下2か所に長円形ピットを設けている。このうち東側のピットは上端径70cm、深さ45cmで特に大きなものである。



第193図 4A号墓(2)



第194図 4A号墓出土遺物

4 A号墓出土土器観察表 PL.120

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 17.1	折り返し口縁。	外 口縁部は刻み目文、頸部は櫛描横直線2段に縦直線。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁～肩部ほぼ全周
2	壺	胴 18.9		外 頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文。 内 ハケメ後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、赤褐色	頸～底部 $\frac{2}{3}$ 周
3	壺	口 7.8 胴 7.9		外 ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はナデ。	砂粒を含む。 堅緻、明褐色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
4	台付臺(?)	脚 5.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	脚部全周

4 A号墓出土玉類観察表 PL.144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
5	小玉	—	0.65	0.2	ガラス、スカイブルー	破損あり。
6	小玉	0.25	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
7	小玉	0.25	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
8	小玉	0.26	0.35	0.08	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
9	小玉	0.2	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
10	小玉	0.24	0.35	0.09	ガラス、スカイブルー	長円形、研磨面あり。
11	小玉	0.27	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー	

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
12	小玉	0.26	0.4	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
13	小玉	0.2	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
14	小玉	0.27	0.35	0.05	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
15	小玉	0.21	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
16	小玉	0.21	0.35	0.09	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
17	小玉	0.27	0.4	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。

## 4 B号墓 (第195～197図、PL. 52)

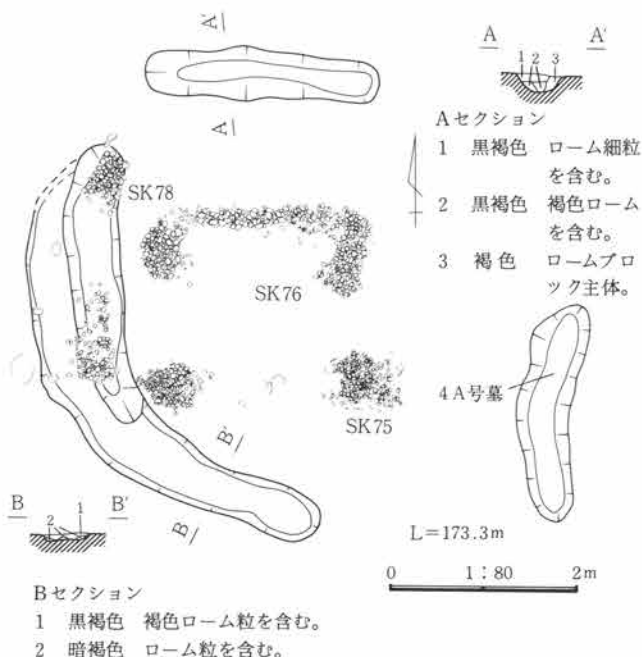
4 B号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(礎床)×深さ	主体部主軸方位		
東-西	5.9	北側	0.6 × 0.2	SK 75	2.8 × 0.6	1.5 × — × 0.18	N-89.5°-W
南-北	5.2	西側	1.0 × 0.35	SK 76	2.4 × 0.95	1.65 × 0.5 × 0.22	N-89.6°-E
				SK 78	2.5 × 0.45	1.4 × — × 0.13	N-1.4°-E

位置 36-F32に位置する。4 A号墓の西に隣接する。

周溝 3基の主体部の周囲の3方に周溝を巡らす。東側周溝は4 A号墓と共用している。この溝は東方向に弧状に湾曲していることから、もともとは4 A号墓の周溝として造られたとみられる。西側の周溝は、SK 78が覆土上に造られている。やや弧状の溝と、この外寄りに沿って重なり、西側から、南側にかけて弧状に長く延びる溝からなる。

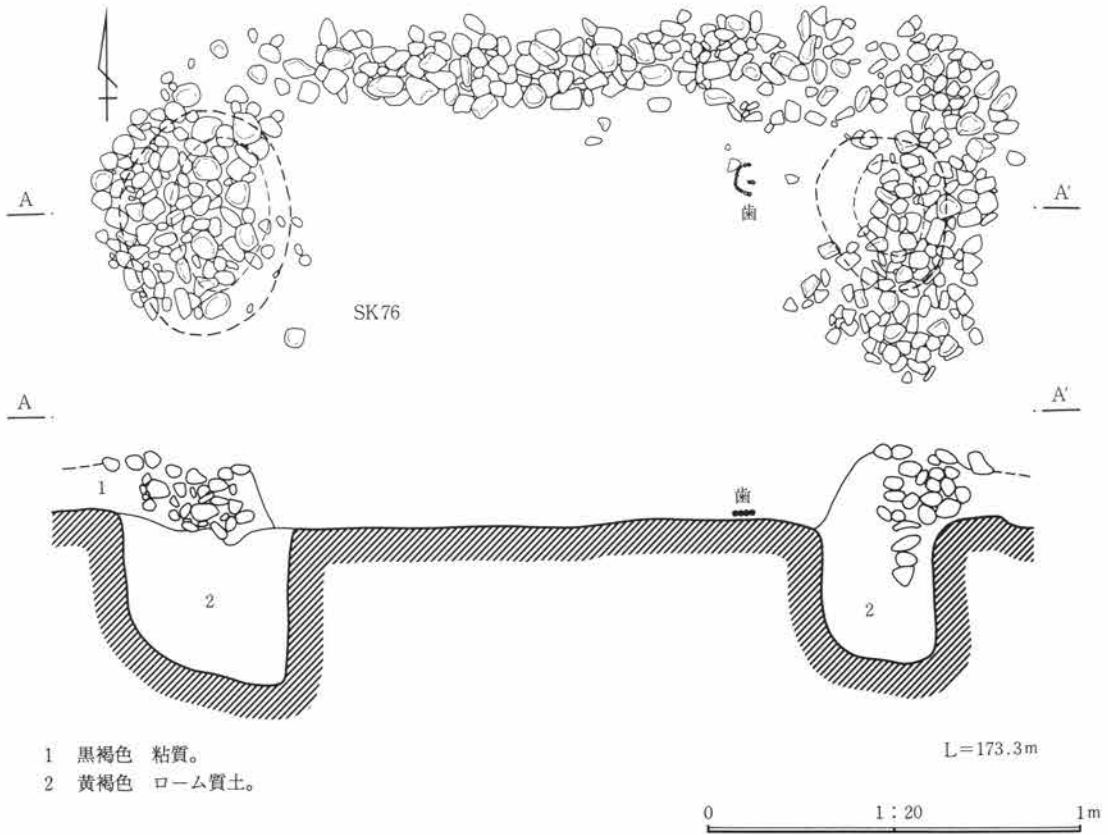
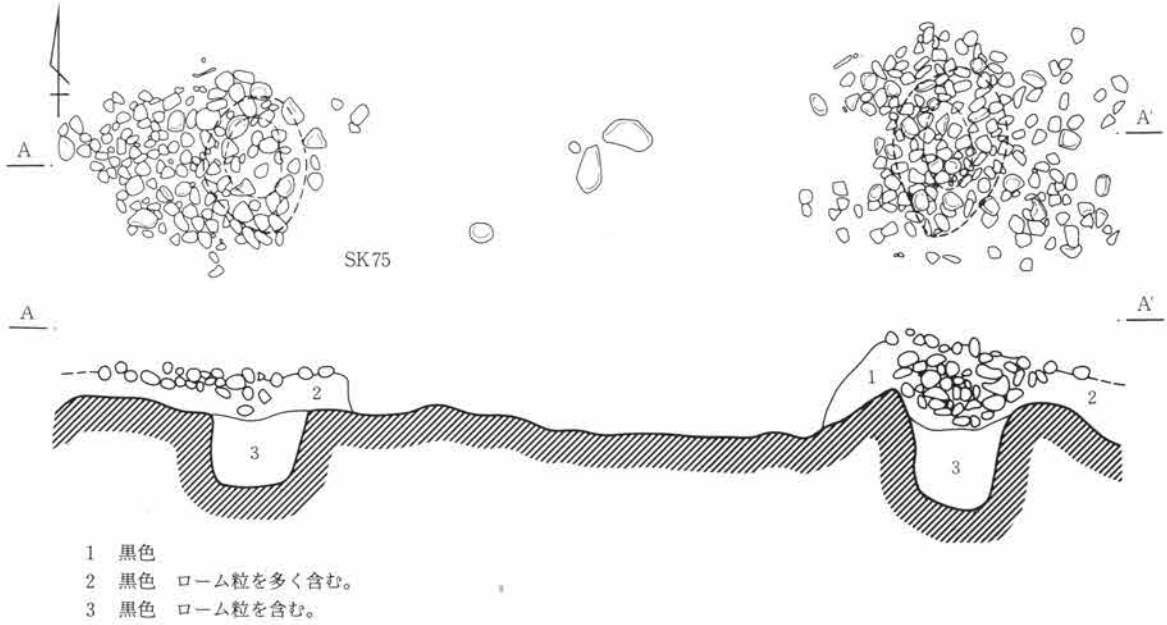
主体部 SK 75とSK 76が中央部に2基並び、SK 78は西側周溝の覆土上に造られている。



第195図 4 B号墓 (1)

6 検出した遺構・遺物

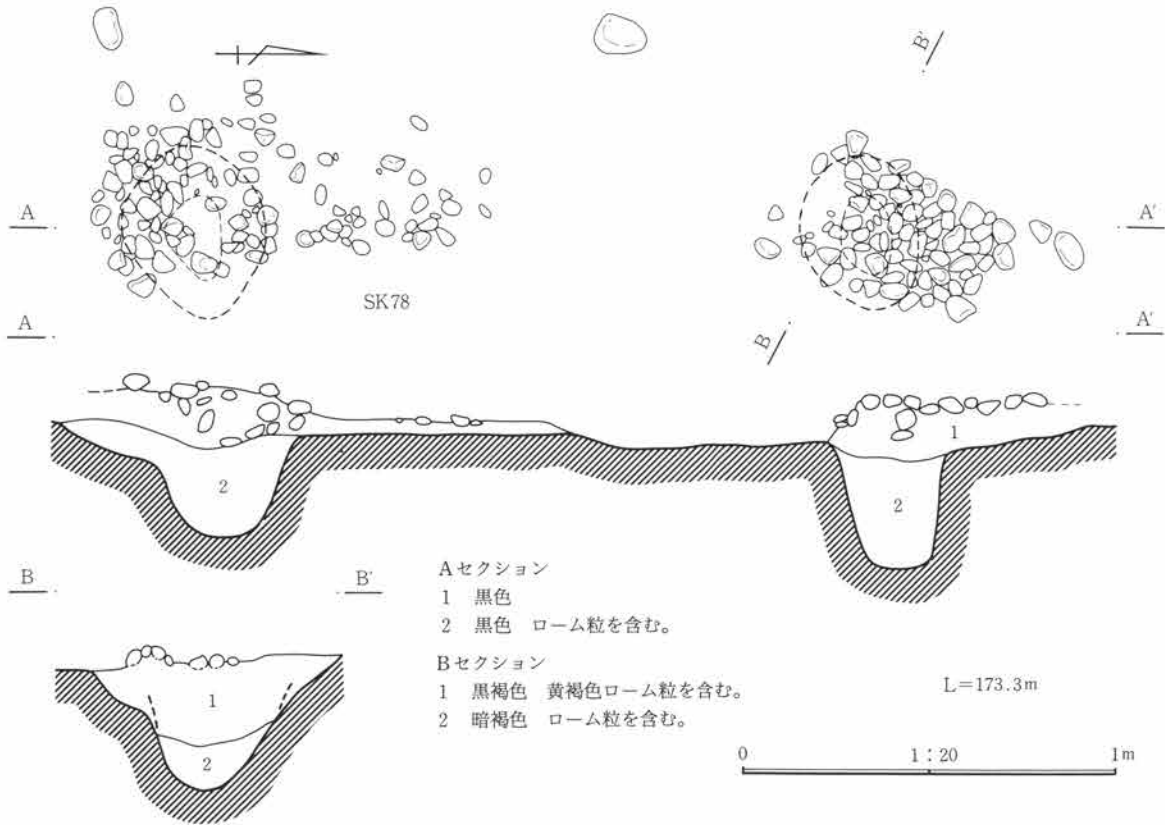
SK75は埋葬部の両端に礫を集積する。礫床は伴わない。床面は不明確である。礫集積下、2か所に円形ピットを設けている。埋葬部覆土中より小型甕とガラス製小玉が1点出土している。被葬者の遺体は検出できない。



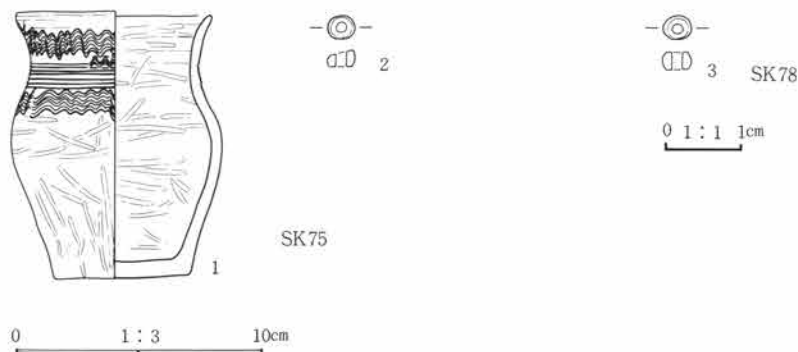
第196図 4B号墓(2)

SK76は埋葬部の周囲に礫集積帯を巡らす。礫床は伴わない。埋葬部床面は不明確である。南側部では礫集積帯は欠けている。礫集積下、2か所に円形ピットを設けている。埋葬部東端部に被葬者の歯が検出される。出土遺物はみられない。

SK78は埋葬部の両端に礫を集積する。礫床は伴わない。床面は不明確である。礫集積下、2か所に円形ピットを設けている。ガラス製小玉が1点出土している。被葬者の遺体は検出できない。



第197図 4 B号墓 (3)



第198図 4 B号墓出土遺物

6 検出した遺構・遺物

4 B号墓出土土器観察表 PL.120

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 7.7 高 10.8		外 口縁～頸部は波状文、頸部は櫛描直線文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～底部は周

4 B号墓出土玉類観察表 PL.144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
2	小玉	0.2	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	
3	小玉	0.25	0.42	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。

5号墓 (第199～202図、PL. 53・54)

5号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(磔床)×深さ	主体部主軸方位
東-西 9.4	東側 1.2 ±0.3	S K 83	2.75×0.9	1.95 ×(0.5) ×0.14	N-41.8°-E
南-北 8.4		S K 84	2.7 ×0.7	1.6 ×(0.65) ×0.2	N-43.8°-E
		S K 85	2.65×1.0	1.65 ×(0.6) ×0.25	N-57.4°-E
		S K 86	1.4 ×0.4	0.6 × - ×0.2	N-35.4°-E
		S K 87	2.75×0.8	1.65 × - ×0.2	N-50.2°-E

位置 38-F48に位置する。

周溝 並列する5基の主体部の周囲に円形状に周溝を巡らす。周溝の壁土は大方黒色粘質土で覆土との峻別が困難であったため明確に形状を確認することができなかった。特に北西部から西南部にかけては明確ではない。検出の際北側に大きく巡るとみられた溝の覆土は黒色自然堆積土と峻別がしにくく、また遺物の出土もほとんど伴わないことから、この部分の溝の形状は明確さに欠けるため第199図では削除した。東側周溝内には弥生土器が完形、または大形破片の状態で多量に重なって出土している。これらの土器群の最上部は浅間C軽石層に覆われており、溝埋没が進んだ時点で軽石の降下があったと考えられる。器種構成では壺の多さが目立つ。

主体部 S K 83は埋葬部に磔床を設け、その両端に磔を集積する。磔床は西部で大きく欠けている。磔集積下の2か所に不整形のピットを設けている。磔床面上、東端部に被葬者の歯が検出され、またその周囲にはガラス製小玉が多数点在していた。総数75個を数える。埋葬頭位は北東方向である。

S K 84は埋葬部に磔床を設け、その両端に磔を集積する。磔集積下、2か所に長円形ピットを設けている。磔床面上、東端部に被葬者の歯が検出される。その周囲には勾玉のほかガラス製小玉が多数点在していた。埋葬頭位は東方向である。磔床面上、被葬者の腰部と思われる辺りに鉄剣を検出する。剣はやや斜方向に尖端を足部方向に向ける。

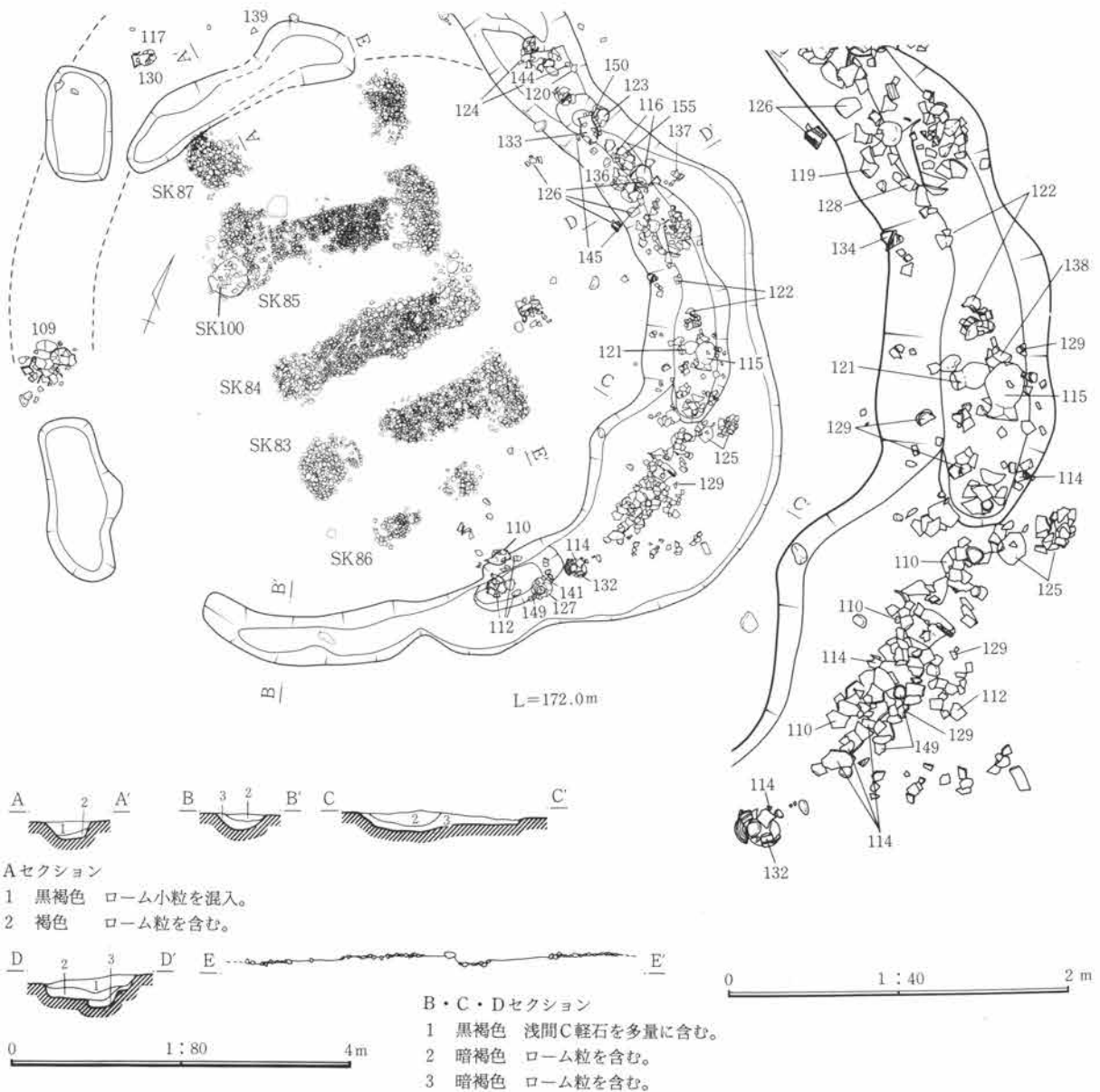
S K 85は埋葬部に磔床を設け、その両端に磔を集積する。磔集積下、2か所に長円形ピットを設けている。



埋葬部東端の礫床面上に被葬者の歯が検出される。歯の周囲には多数のガラス製小玉が点在する。被葬者の腰部に当たるとされる礫床面上より鉄剣が出土する。埋葬部西端の礫集積を掘り込んで壺棺が埋置されている。壺棺は上半部が欠損しており、蓋なども失われている。これは後世の耕作によると思われる。棺内には遺体や遺物は認められなかった。

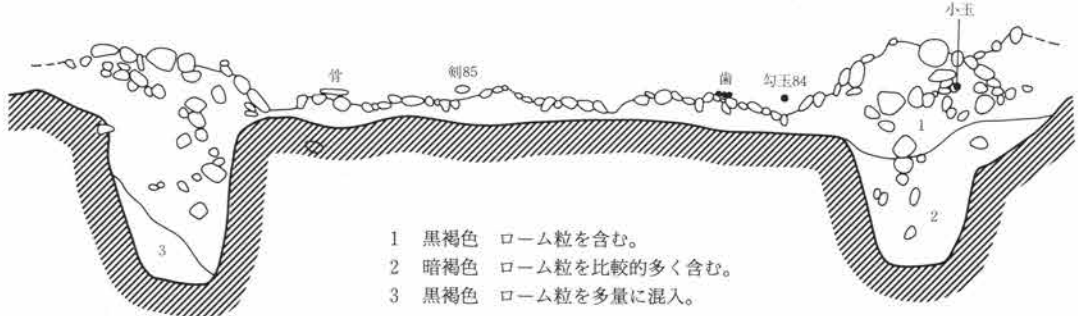
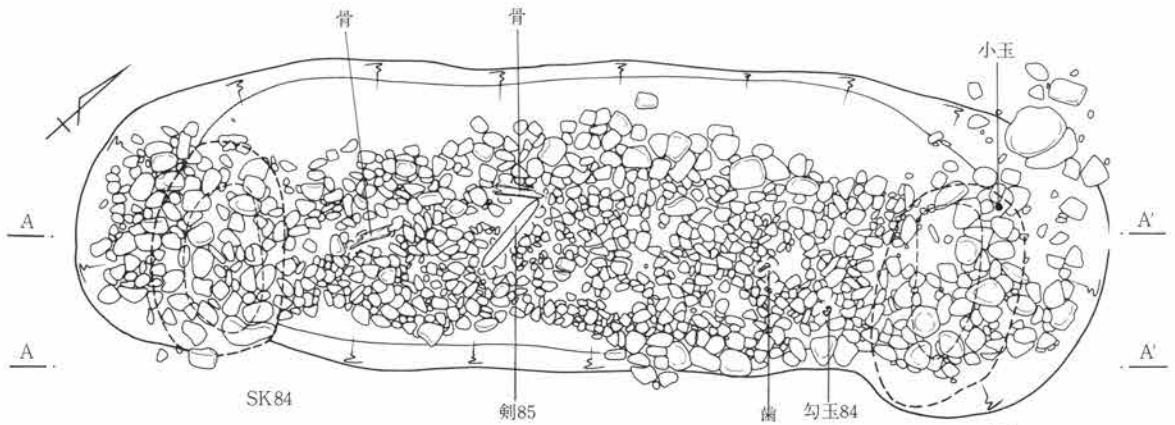
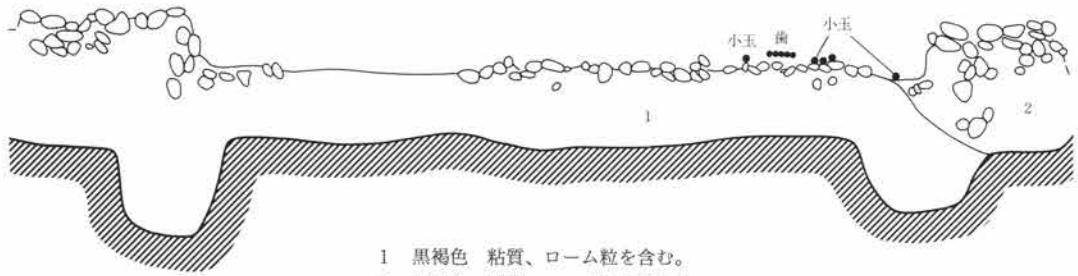
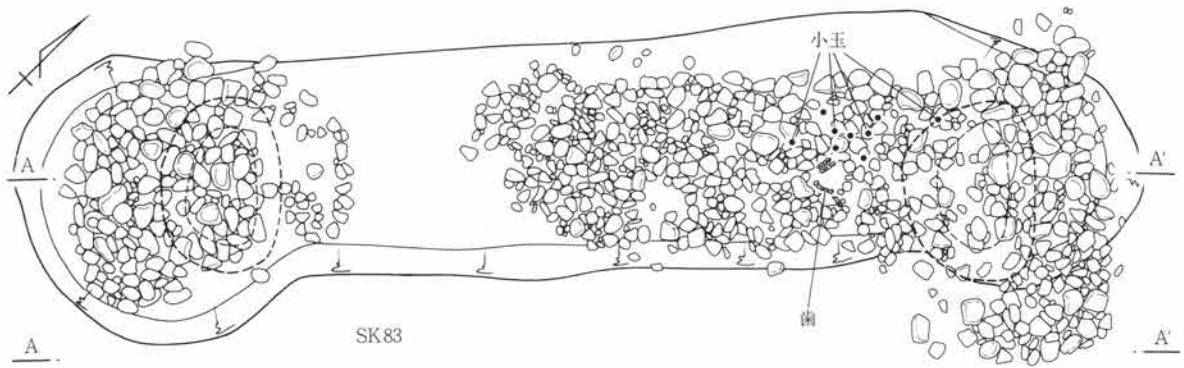
SK86は最南部に位置する小規模な主体部である。埋葬部の両端に礫を集積する。礫床は伴わない。埋葬部の床面は確認できない。被葬者の遺体や遺物は見られない。

SK87は最北部に位置する主体部である。埋葬部の両端に礫を集積する。礫床は伴わない。埋葬部の床面は明確でない。礫集積下、2か所に長円形ピットを設けている。被葬者の遺体は見られない。埋葬部の覆土中からガラス製小玉が1点検出される。



第199図 5号墓(1)

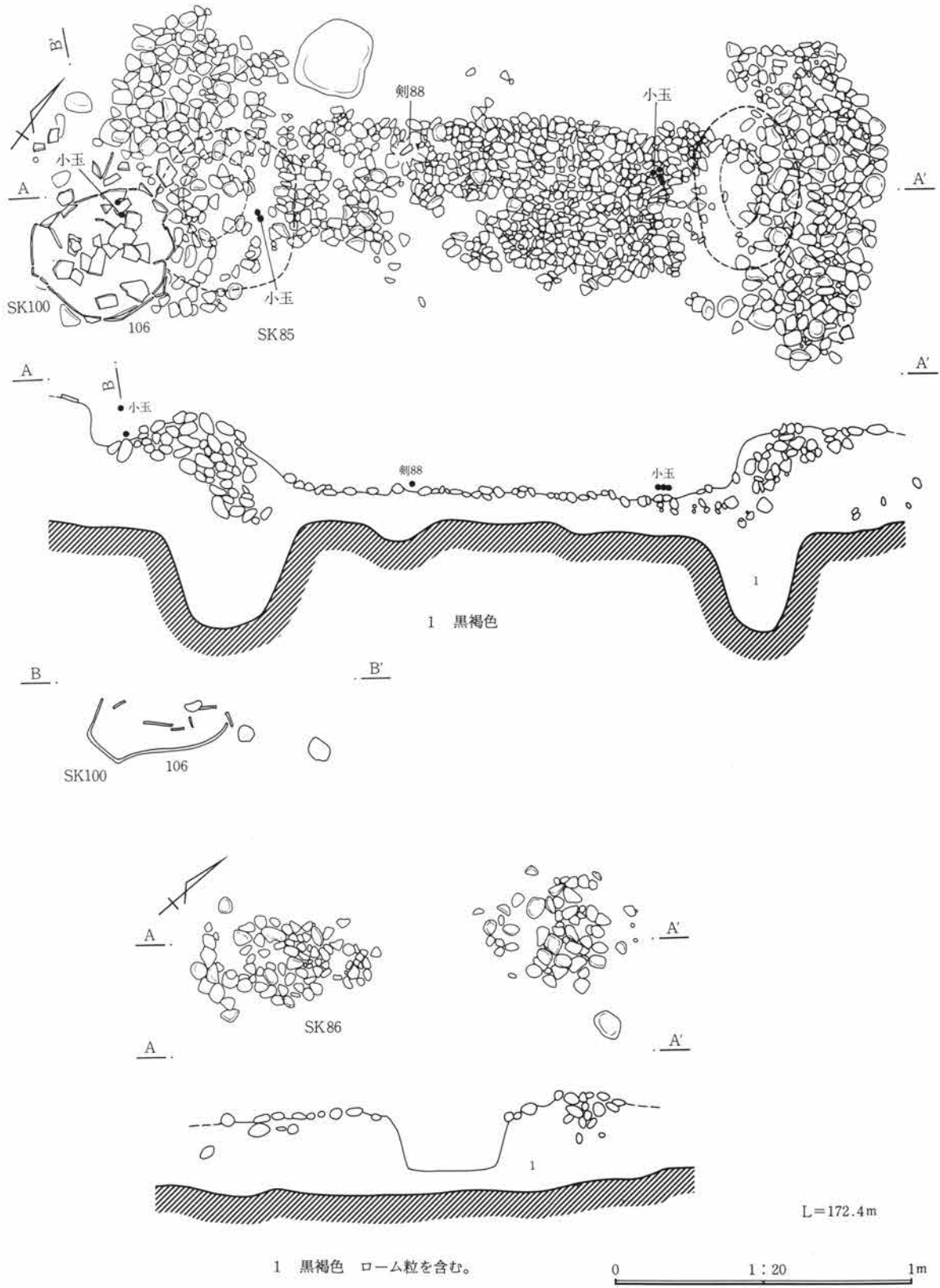
6 検出した遺構・遺物



L=172.4m

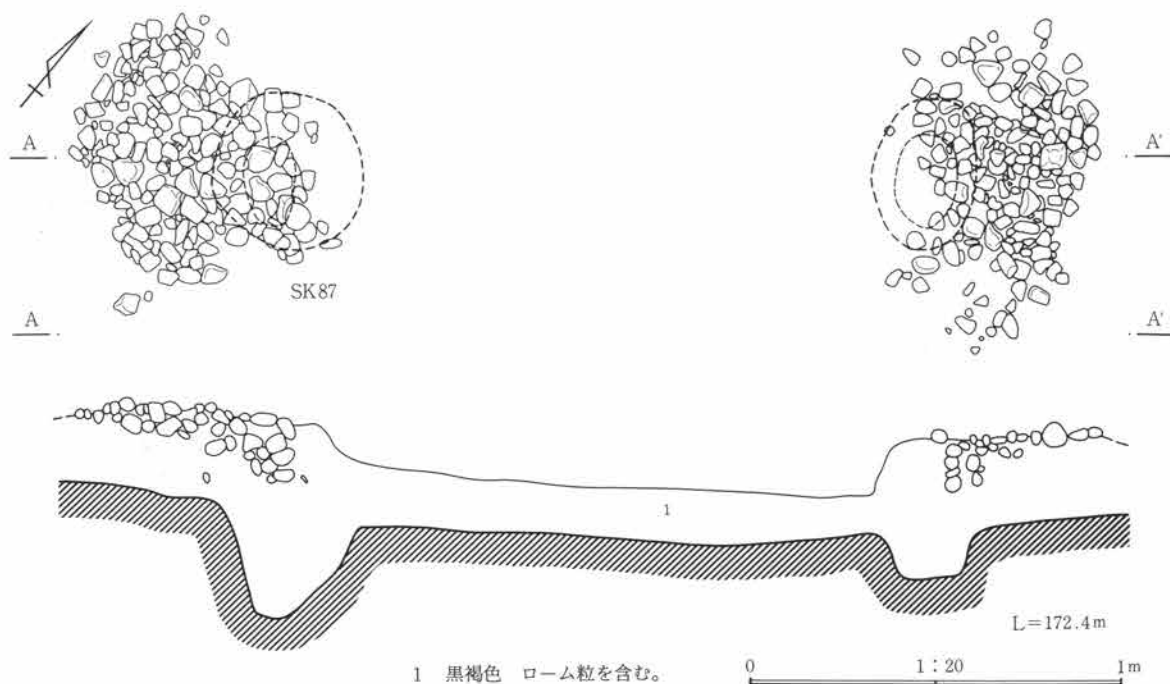
0 1:20 1m

第200図 5号墓(2)



第201図 5号墓(3)

6 検出した遺構・遺物

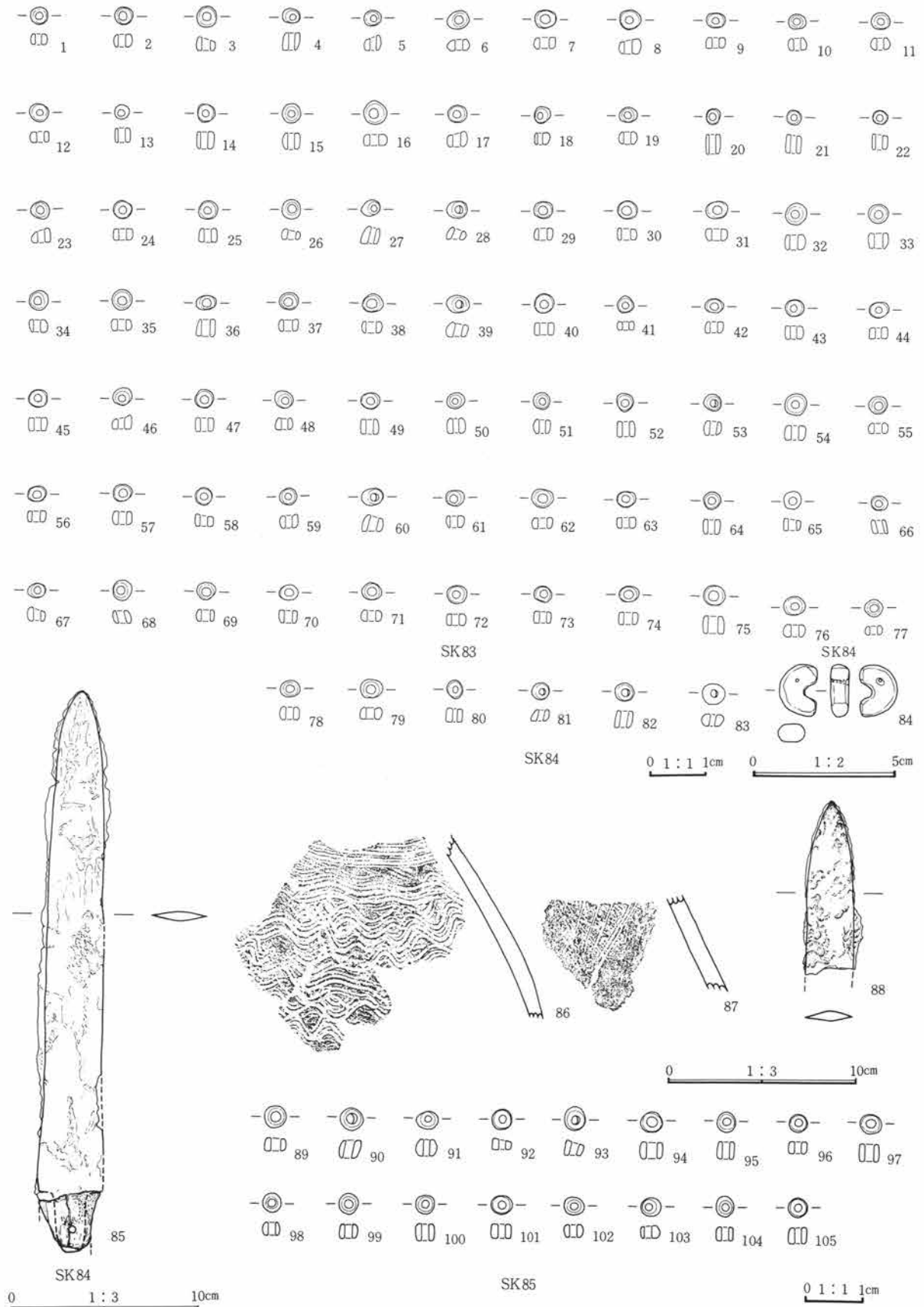


第202図 5号墓(4)

5号墓出土玉類観察表 PL.144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
1	小玉	0.2	0.32	0.15	ガラス、コバルトブルー	研磨面あり。
2	小玉	0.25	0.35	0.17	ガラス、淡グリーン	
3	小玉	0.25	0.35	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
4	小玉	0.3	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー	
5	小玉	0.3	0.31	0.15	ガラス、スカイブルー	
6	小玉	0.2	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	
7	小玉	0.2	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
8	小玉	0.3	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	
9	小玉	0.2	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
10	小玉	0.2	0.34	0.15	ガラス、スカイブルー	
11	小玉	0.2	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	
12	小玉	0.19	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
13	小玉	0.25	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面は角ばる。
14	小玉	0.29	0.32	0.15	ガラス、スカイブルー	
15	小玉	0.25	0.32	0.15	ガラス、スカイブルー	
16	小玉	0.2	0.4	0.18	ガラス、スカイブルー	
17	小玉	0.25	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	
18	小玉	0.25	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	
19	小玉	0.25	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	
20	小玉	0.35	0.25	0.15	ガラス、スカイブルー	
21	小玉	0.35	0.25	0.15	ガラス、スカイブルー	
22	小玉	0.29	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	
23	小玉	0.25	0.35	0.12	ガラス、スカイブルー	
24	小玉	0.2	0.35	0.12	ガラス、グリーン	研磨面あり。
25	小玉	0.25	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
26	小玉	0.2	0.32	0.18	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
27	小玉	0.3	0.32	0.1	ガラス、スカイブルー	
28	小玉	0.25	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	
29	小玉	0.2	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
30	小玉	0.2	0.35	0.2	ガラス、スカイブルー	
31	小玉	0.2	0.35	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
32	小玉	0.25	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
33	小玉	0.25	0.33	0.18	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
34	小玉	0.15	0.34	0.2	ガラス、スカイブルー	
35	小玉	0.2	0.35	0.17	ガラス、スカイブルー	
36	小玉	0.3	0.35	0.2	ガラス、スカイブルー	
37	小玉	0.2	0.35	0.18	ガラス、スカイブルー	
38	小玉	0.2	0.35	0.2	ガラス、スカイブルー	孔は楕円形。
39	小玉	0.25	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
40	小玉	0.25	0.32	0.15	ガラス、グリーン	
41	小玉	0.18	0.3	0.1	ガラス、スカイブルー	
42	小玉	0.2	0.35	0.18	ガラス、スカイブルー	
43	小玉	0.25	0.35	0.12	ガラス、スカイブルー	
44	小玉	0.2	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面は角ばる。
45	小玉	0.25	0.31	0.15	ガラス、スカイブルー	
46	小玉	0.25	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	
47	小玉	0.25	0.32	0.2	ガラス、スカイブルー	
48	小玉	0.21	0.31	0.11	ガラス、スカイブルー	
49	小玉	0.25	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	
50	小玉	0.25	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー	
51	小玉	0.25	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
52	小玉	0.25	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	
53	小玉	0.25	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	
54	小玉	0.25	0.4	0.22	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
55	小玉	0.2	0.32	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
56	小玉	0.2	0.31	0.15	ガラス、スカイブルー	
57	小玉	0.25	0.31	0.15	ガラス、スカイブルー	
58	小玉	0.21	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
59	小玉	0.21	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	
60	小玉	0.3	0.36	0.15	ガラス、スカイブルー	

(5) 墓 跡

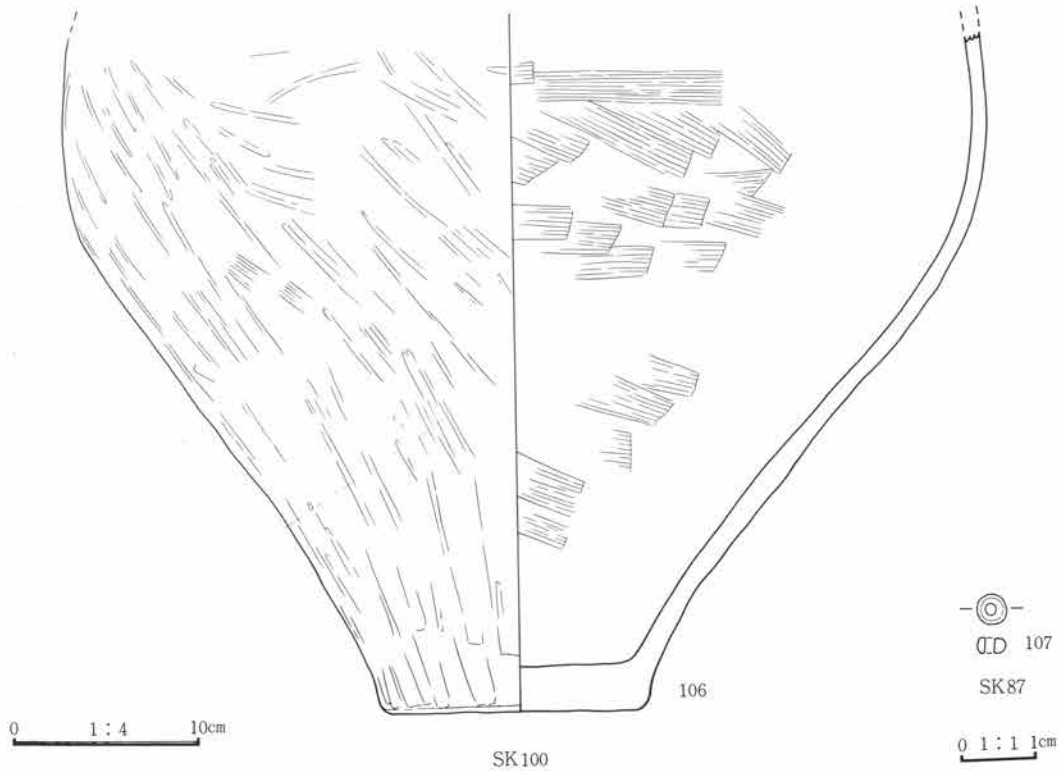


第203图 5号墓出土遺物(1)

6 検出した遺構・遺物

5号墓出土玉類観察表 PL. 120・144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
61	小玉	0.2	0.33	0.15	ガラス、スカイブルー	
62	小玉	0.2	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
63	小玉	0.2	0.32	0.15	ガラス、スカイブルー	
64	小玉	0.27	0.33	0.16	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
65	小玉	0.2	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	
66	小玉	0.25	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	
67	小玉	0.25	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	
68	小玉	0.2	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
69	小玉	0.2	0.33	0.15	ガラス、スカイブルー	
70	小玉	0.2	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
71	小玉	0.2	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
72	小玉	0.2	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
73	小玉	0.21	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
74	小玉	0.2	0.33	0.15	ガラス、スカイブルー	
75	小玉	0.3	0.35	0.35	ガラス、スカイブルー	
76	小玉	0.2	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
77	小玉	0.15	0.32	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
78	小玉	0.2	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
79	小玉	0.25	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	孔縁に研磨面あり。
80	小玉	0.25	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
81	小玉	0.2	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
82	小玉	0.3	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	
83	小玉	0.2	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
84	勾玉	1.8	—	0.25	ヒスイ、オリーブ灰	研磨面あり。
89	小玉	0.25	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
90	小玉	0.3	0.45	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
91	小玉	0.3	0.4	0.11	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
92	小玉	0.2	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
93	小玉	0.3	0.35	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
94	小玉	0.3	0.35	0.2	ガラス、スカイブルー	
95	小玉	0.38	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	
96	小玉	0.15	0.35	0.25	ガラス、スカイブルー	
97	小玉	0.3	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	
98	小玉	0.25	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
99	小玉	0.25	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
100	小玉	0.32	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
101	小玉	0.25	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
102	小玉	0.3	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
103	小玉	0.25	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
104	小玉	0.25	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
105	小玉	0.3	0.35	0.12	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
107	小玉	0.25	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
161	小玉	0.23	0.4	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
162	小玉	0.22	0.4	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。



第204図 5号墓出土遺物(2)

5号墓出土土器観察表(拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
86	壺			外 肩部は波状文。内 ハケメ。	細砂粒を含む。	堅緻	灰白色	
87	壺			外 胴上部は鋸歯文。内 ハケメ。	細砂粒を含む。	堅緻	灰白色	

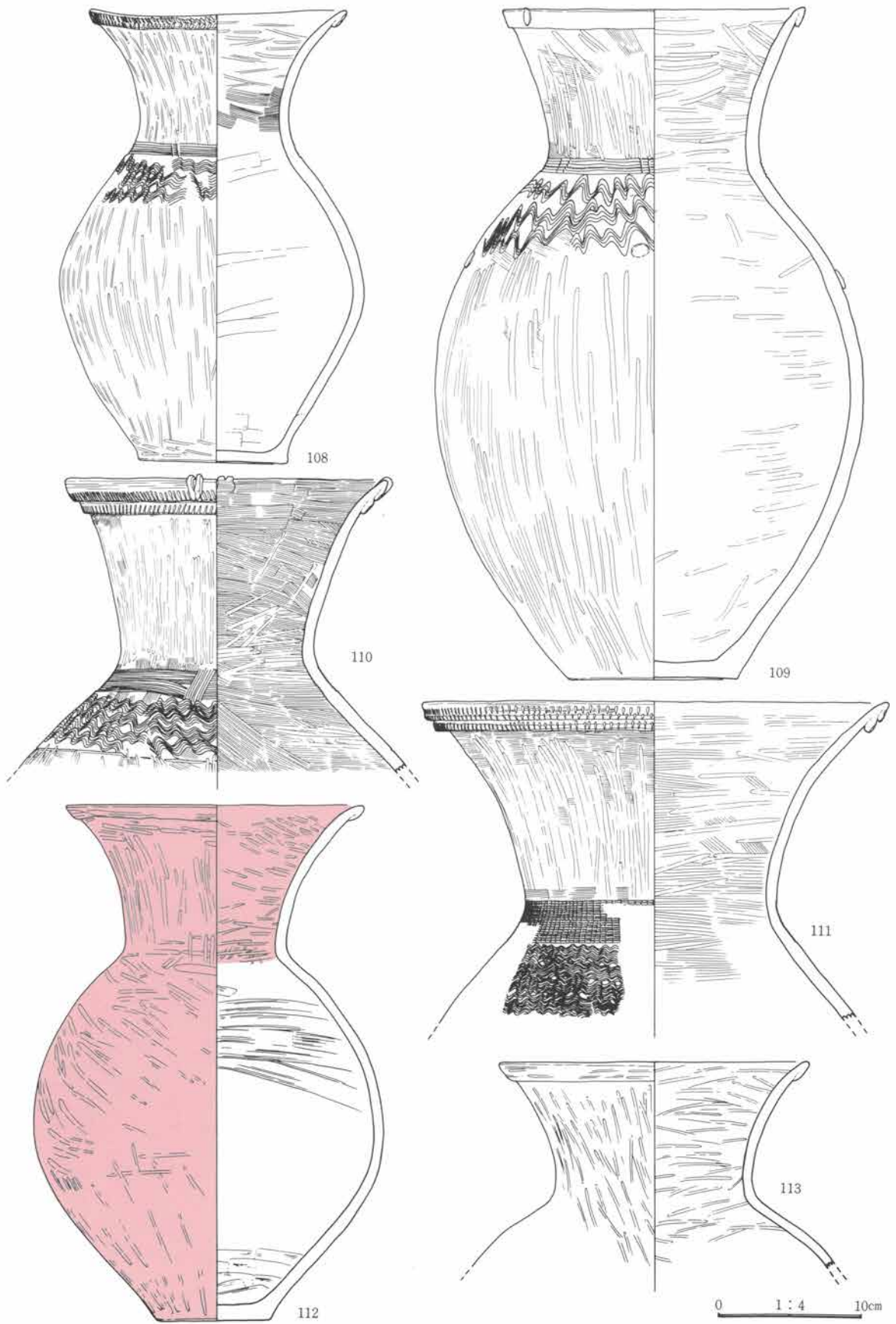
5号墓出土鉄剣観察表 PL.120

番号	全長	身幅	茎長	身厚	形状、遺存状態など
85	29.2	2.9	3.1	0.5±	刃線から茎線は比較的明瞭である。刃部部の刃線がやや広がっている。茎には装着された鹿角製の把が残存している。把縁は闊と角度が合致しない。把面は滑沢に磨かれるなどの調整がされている。茎に目釘孔を認める。鐔(シノギ)は不明瞭。
88	9.0±	2.4	—	0.6±	半失品、芯は空洞化が進んでいるが、尖端から両刃線は良好に遺存している。鐔は不明瞭。

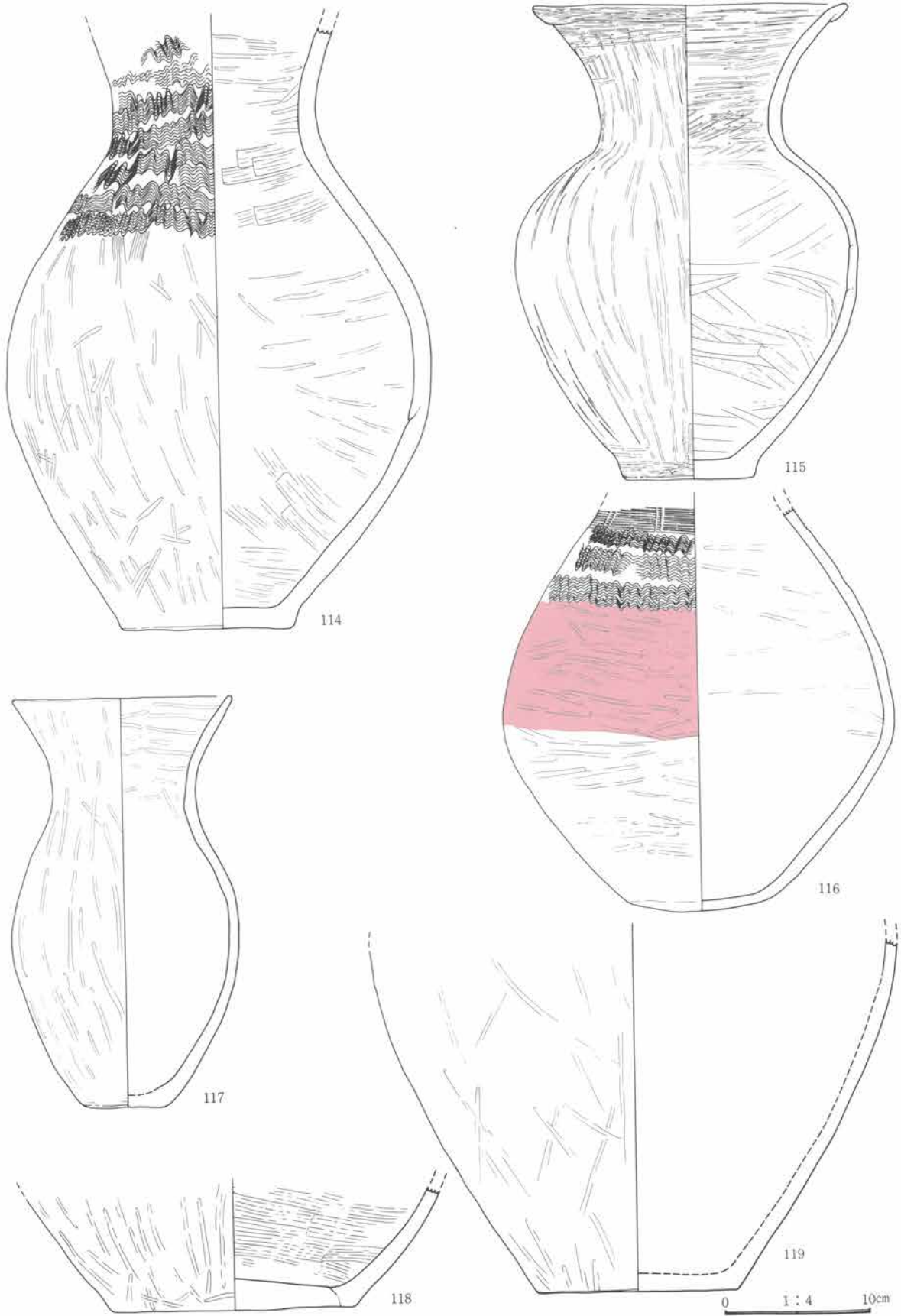
5号墓出土土器観察表 PL.121~123

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
106	壺 棺底	14.0		外 ハケメ後ヘラミガキ。 内 ハケメ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、鈍赤褐色	胴部 $\frac{1}{2}$ 周 底部全周
108	壺	口 17.6 高 31.0	折り返し口縁。	外 口縁部は刻み目文、頸部は2連止め簾状文、肩部は波状文。以下ヘラミガキ。 内 口縁部はヘラミガキ、胴部はナデ、ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	ほぼ完形
109	壺	口 21.3 高 46.4	折り返し口縁。	外 頸部は2連止め簾状文、肩部は波状文。 内 ハケメ後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	ほぼ完形
110	壺	口 22.7	2段の折り返し口縁	外 口縁部は2段の刻み目文、付文2本1単位推定4か所、頸部は櫛描横直線2段に縦直線、肩部は波状文、沈線1条。 内 ハケメ、粗いヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁~胴上部 $\frac{1}{2}$ 周
111	壺	口 32.5	2段の折り返し口縁。	外 口縁部は3段の刻み目文、頸部は止めの細かい簾状文を2段、肩部は波状文。 内 口縁~頸部はハケメ後ヘラミガキ。胴部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍黄褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 胴上部 $\frac{1}{2}$ 周
112	壺	口 20.7 高 35.5	折り返し口縁。	外 ヘラミガキ。丹彩。 内 口縁~頸部はヘラミガキ、胴部はナデ、ハケメ。丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部全周 底部全周
113	壺	口 21.3	折り返し口縁。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁~肩部 $\frac{1}{2}$ 周
114	壺	胴 29.8	器壁は厚い。	外 口辺~肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 口辺~頸部はヘラミガキ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、褐色	口辺~底部全周
115	壺	口 21.5 高 33.0	折り返し口縁。	外 ヘラミガキ。 内 口縁~頸部はヘラミガキ。胴部はヘラナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸~胴部全周
116	壺	胴 27.3	底部は丸底状。	外 肩部は2連止め簾状文、胴上部は波状文。 内 胴上部はヘラミガキ、胴下部はヘラナデ。	細砂粒を含む。 堅緻、橙色	頸~底部 $\frac{1}{2}$ 周 外面丹彩。
117	壺	口 15.4 高 28.4		外 ヘラミガキ。 内 口縁~頸部はヘラミガキ、胴部はナデ。	砂粒、小礫を含む。 やや堅緻、鈍褐色	ほぼ完形 器面は荒れる。
118	壺	底 17.0		外 ヘラミガキ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、浅黄褐色	胴下~底部全周
119	壺	胴 37		外 ヘラミガキ。 内 器面の荒れが著しい。	砂粒を含む。 やや軟質、暗褐色	胴部 $\frac{1}{2}$ 周 底部全周
120	壺	胴 21.9		外 頸~肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 口縁~頸部はヘラミガキ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口辺~胴部 $\frac{1}{2}$ 周
121	壺	胴 15.9	底部は器壁が薄く中央部が欠損、穿孔かどうか不明。	外 頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文、直下に半円形の沈線区画を推定6個、内に刺突を充填する。 内 口辺~頸部はヘラミガキ、胴部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口辺~底部全周
122	壺	口 8.7 高 9.5	折り返し口縁、口縁部に円孔を穿つ、確認1個、推定1~2個。	外 ヘラミガキ。 内 口縁~頸部はヘラミガキ、胴部はナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	ほぼ完形 内外面丹彩。



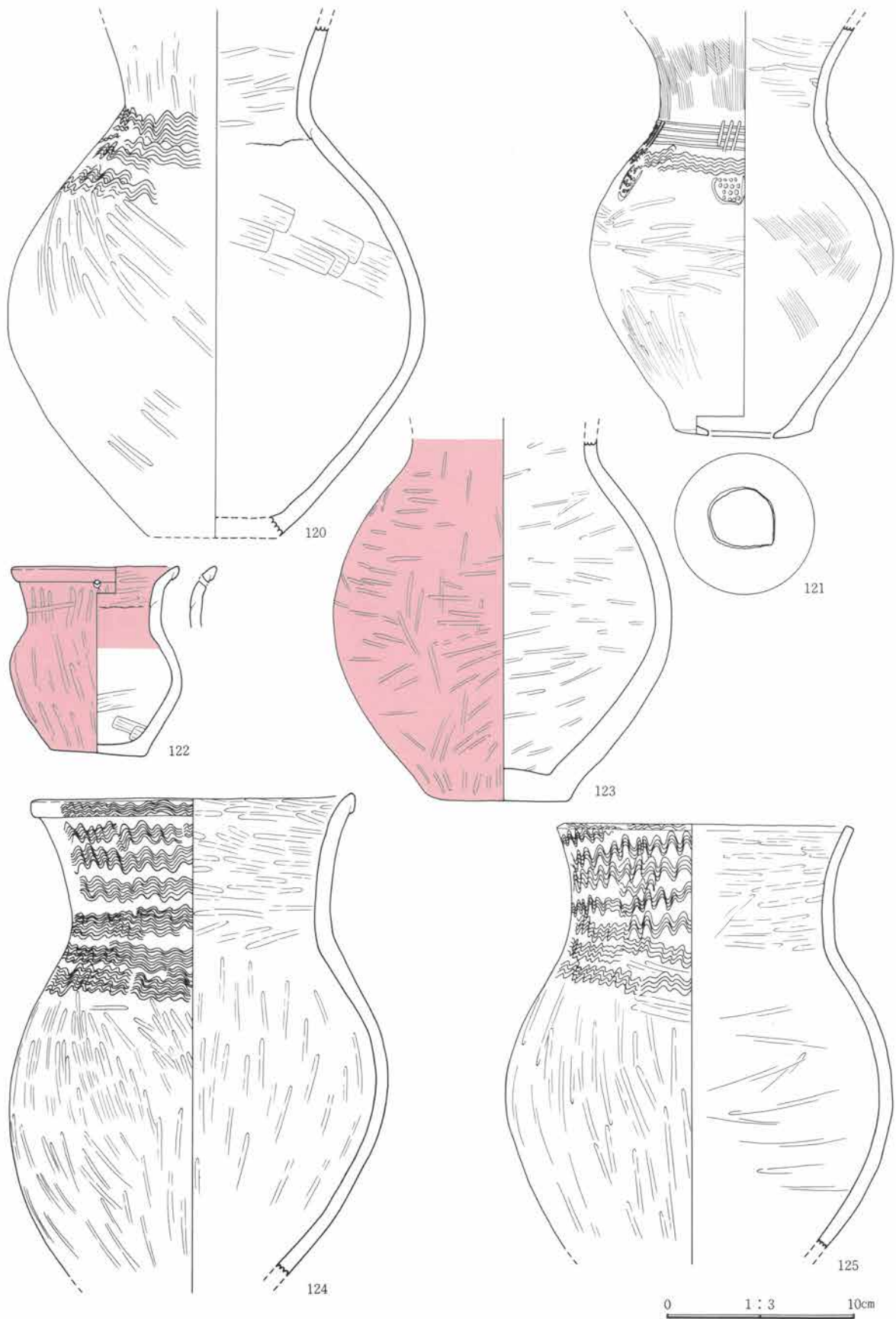


第205図 5号墓出土遺物(3)



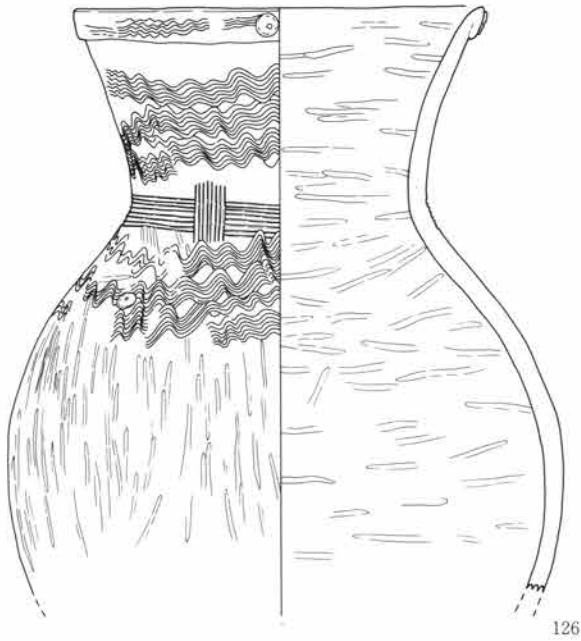
第206图 5号墓出土遺物(4)

6 検出した遺構・遺物

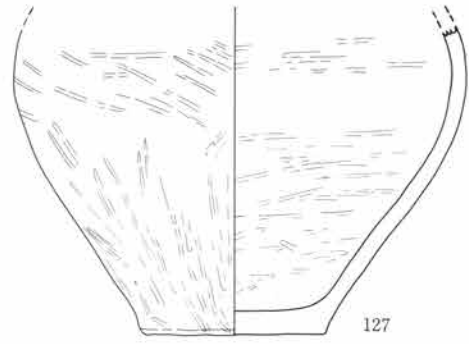


第207図 5号墓出土遺物(5)

(5) 墓 跡



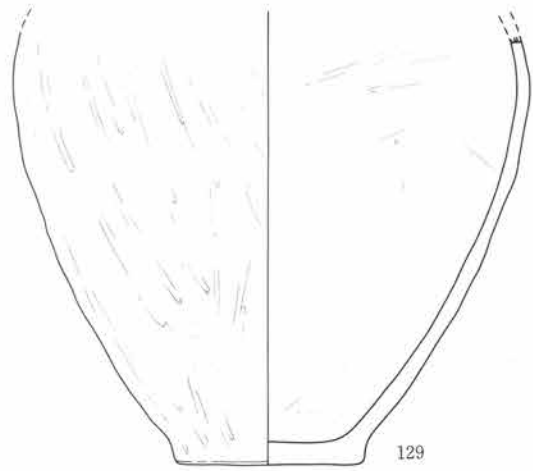
126



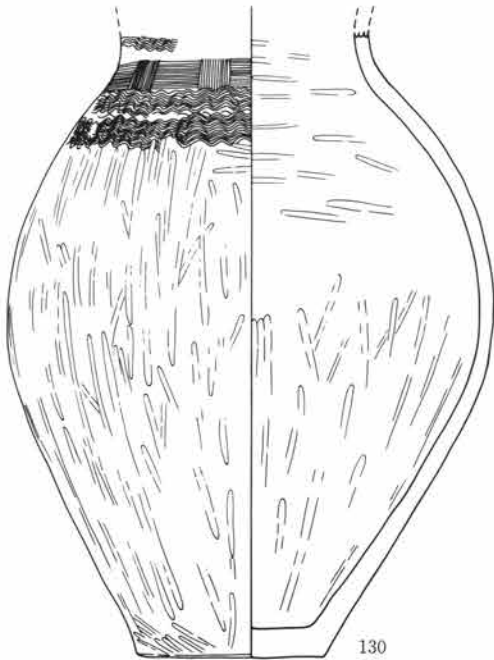
127



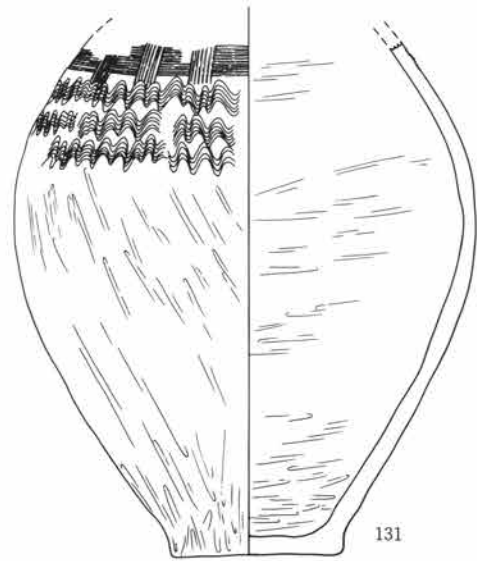
128



129



130



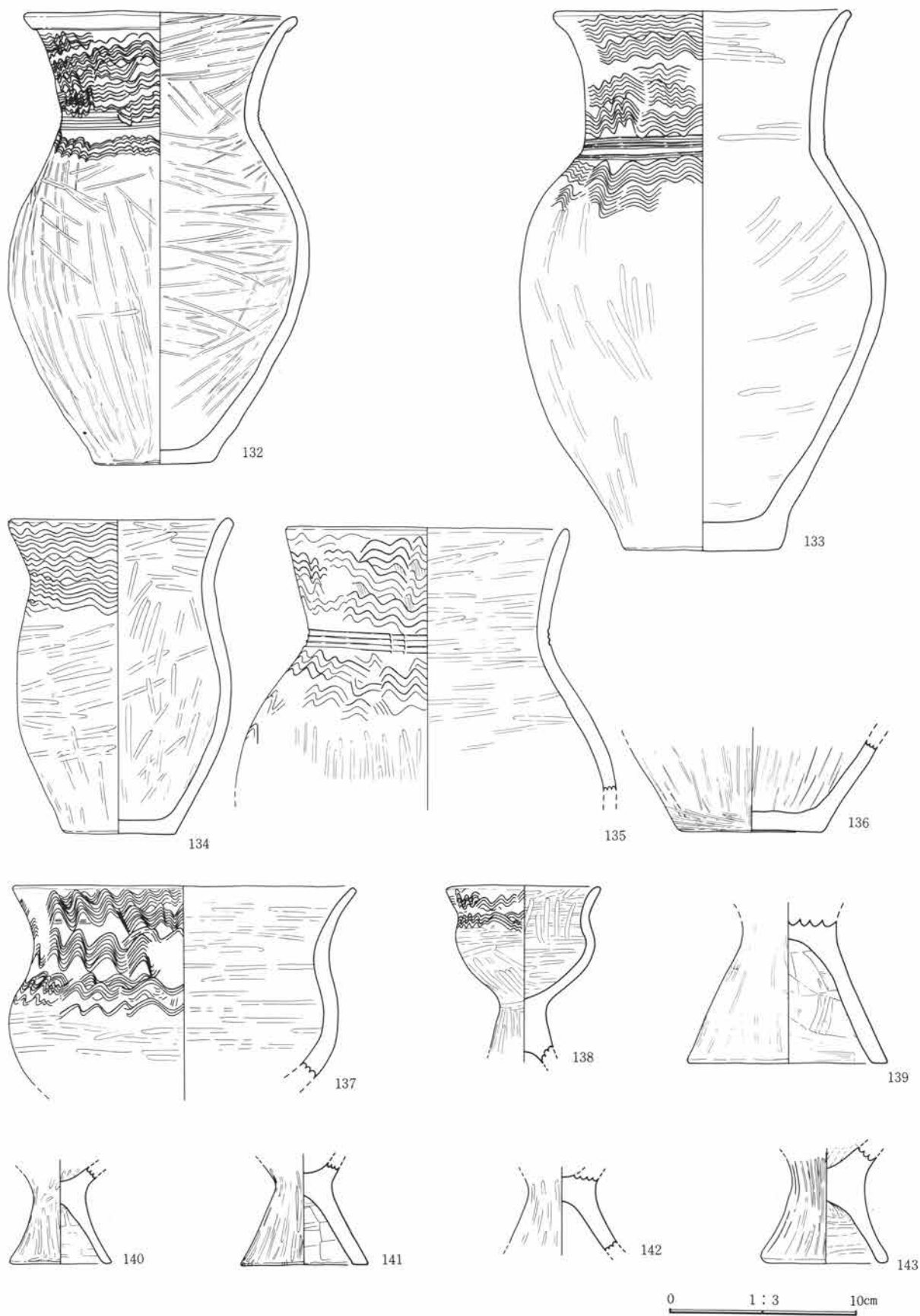
131

0 1:4 10cm

第208图 5号墓出土遗物(6)

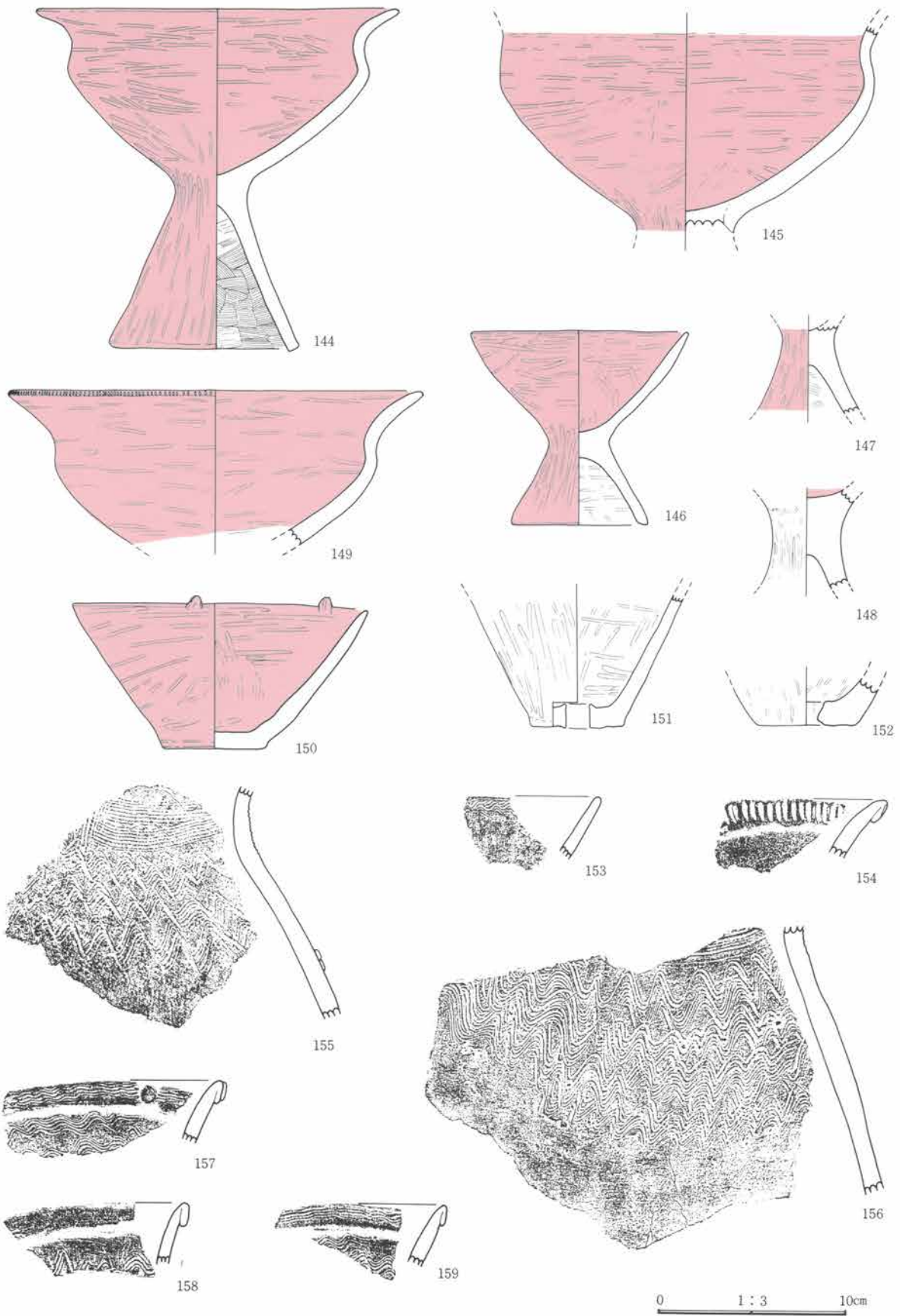


6 検出した遺構・遺物



第209図 5号墓出土遺物(7)

(5) 墓 跡



第210图 5号墓出土遗物(8)

6 検出した遺構・遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
123	壺	胴 17.8		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや軟質、赤色	頸～底部全周 外面丹彩。
124	甕	口 16.9 胴 19.7	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	口縁部ほぼ全周 頸～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
125	甕	口 15.0 胴 20.2	口縁端部は角ばり、面を作る。	外 口縁端部～頸部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、暗赤褐色	口縁～胴部全周
126	甕	口 22.0 胴 29.6	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、頸部は櫛描横直線に縦直線。 口縁部、肩部に付文を各々5個巡らす。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、暗褐色	口縁部ほぼ全周 頸～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
127	甕	胴 24.1		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	胴～底部全周
128	甕	底 11.7		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍褐色	胴下～底部 $\frac{1}{2}$ 周
129	甕	胴 27.5		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。器面は荒れている。	細砂粒を含む。 やや堅緻、明赤褐色	胴～底部全周
130	甕	胴 25.9		外 口縁～肩部は波状文、頸部は櫛描横直線に縦直線。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	頸部 $\frac{1}{2}$ 周 胴～底部全周
131	甕	胴 24.6		外 肩部は櫛描横直線に縦直線、波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、暗赤褐色	胴上～底部 $\frac{3}{4}$ 周
132	甕	口 14.1 高 23.6		外 口縁部はヨコナデ、口辺～肩部は波状文、頸部は櫛描直線文、胴部はヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	ほぼ完形
133	甕	口 15.6 高 28.0		外 口縁～肩部は波状文、頸部は櫛描直線文。 内 ヘラミガキ。	砂粒、小礫を含む。 やや軟弱、褐色	口縁～胴上部 $\frac{1}{2}$ 周 胴～底部 $\frac{3}{4}$ 周
134	甕	口 11.7 高 16.3		外 口縁～頸部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、暗赤褐色	ほぼ完形
135	甕	口 14.8 胴 19.7		外 口縁～肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁～胴部ほぼ全周
136	甕	底 7.4		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	底部全周
137	台付甕	口 17.8 胴 17.4	口縁端部は角ばる。	外 口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍褐色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周 頸～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
138	台付甕	口 8.0		外 口縁～頸部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、淡赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸～脚部全周
139	台付甕(?)	脚 10.4		外 ヘラミガキ。 内 天井部はヘラアテ痕、以下ヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍褐色	脚部 $\frac{3}{4}$ 周
140	台付甕(?)	脚 5.3		外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、鈍褐色	脚部全周
141	台付甕(?)	脚 5.6		外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	脚部全周
142	台付甕(?)			外 ヘラミガキ。 内 ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍褐色	脚上部全周
143	台付甕(?)	脚 6.4		外 ヘラミガキ。 内 脚部はナデ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、淡黄褐色	脚部全周
144	高 坏	口 18.8 高 17.7		外 ヘラミガキ。丹彩。 内 坏部はヘラミガキ。脚部はハケメ。丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	坏部 $\frac{3}{4}$ 周 脚部 $\frac{3}{4}$ 周
145	高 坏	胴 19.8	脚部接合部に剝離面あり。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	坏部 $\frac{3}{4}$ 周 内外面丹彩
146	高 坏	口 11.4 高 10.1		外 ヘラミガキ。丹彩。 内 ヘラミガキ。丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	坏部 $\frac{3}{4}$ 周 脚部ほぼ全周
147	高 坏			外 ヘラミガキ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	脚部 $\frac{1}{2}$ 周 外面丹彩
148	高 坏			外 ヘラミガキ。 内 ナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、鈍褐色	脚上部全周 内面丹彩
149	高 坏	口 21.5		外 口縁端部は細かい刻み目、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや軟弱、赤色	坏部 $\frac{3}{4}$ 周 内外面丹彩
150	鉢	口 15.4 高 7.6		外 口縁端部に3個付文を付す。ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや軟弱、赤色	ほぼ完形 内外面丹彩
151	甌	底 4.9	焼成前の円孔あり	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	胴下部 $\frac{1}{2}$ 周 底部全周

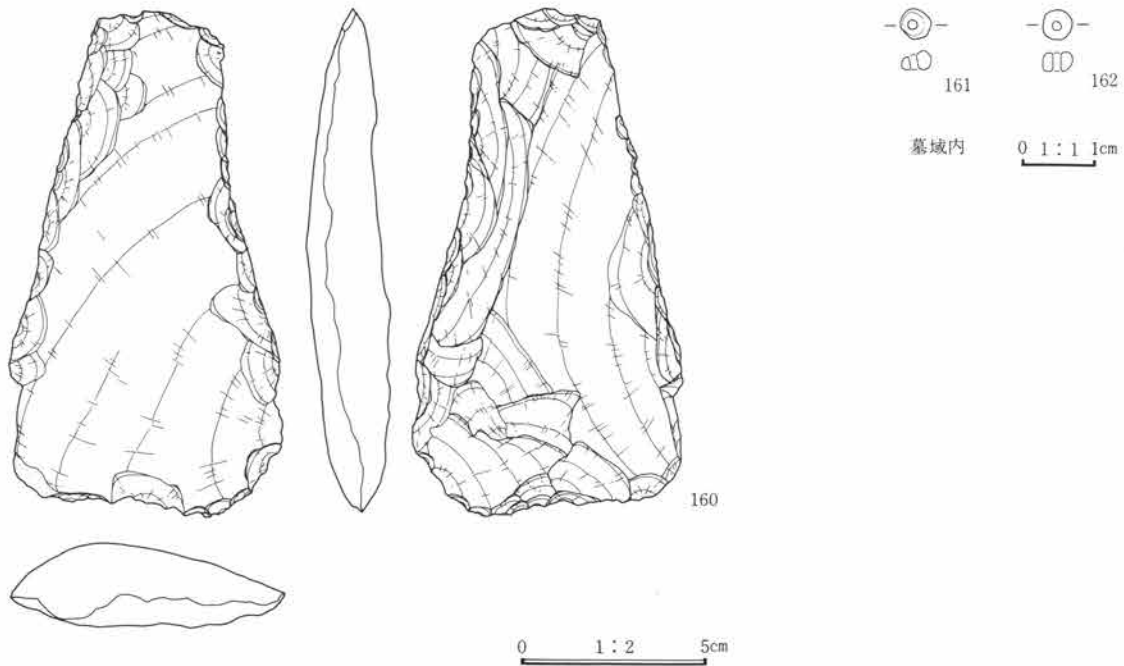


## (5) 墓 跡

遺物番号	器 種	法 量	器 形 ・ 成 形	文 様 ・ 整 形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
152	甌	底 5.2	焼成前の円孔あり	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、浅黄橙色	底部 $\frac{1}{4}$ 周

## 5号墓出土土器観察表 (拓本)

153	壺			外 口縁部は波状文。内 ハケメ。	砂粒を含む。	堅緻	鈍橙色	5%
154	壺		折り返し口縁	外 口縁部は刻み目。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	8%
155	壺			外 頸部は2条の櫛描横線に縦直線、丹彩。	砂粒を含む。	堅緻	赤橙色	
156	甕			外 肩部は波状文。内 ヘラミガキ。	小礫を含む。	堅緻	明赤褐色	
157	甕	口 20	折り返し口縁	外 口縁部は付文、波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	赤橙色	17%
158	甕	口 16	折り返し口縁	外 口縁部はヨコナデ。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	淡赤橙色	12%
159	甕	口 20	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	鈍赤色	9%



第211図 5号墓出土遺物(9)

## 5号墓出土石器観察表 PL.123

遺物番号	名 称	計測値(縦×横×厚さ)	石 質	重量(g)	特 徴
160	土掘り具	13.4×7.4×2.3	粗粒安山岩	207.7	両面剝離の横長剝片。刃部、両側部には両面から剝離調製を行っている。

6 検出した遺構・遺物

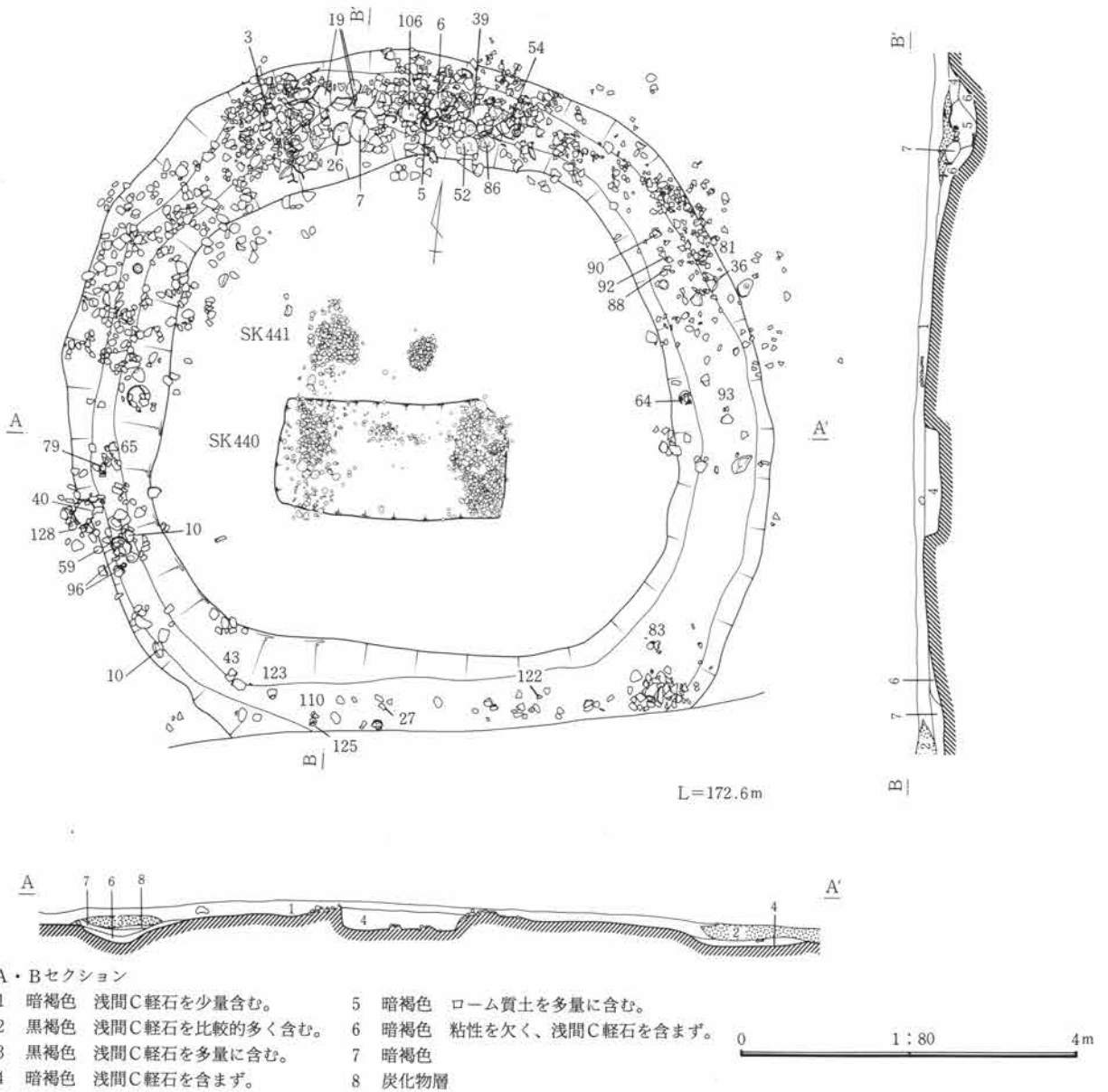
6号墓 (第212~214図、PL. 54・55)

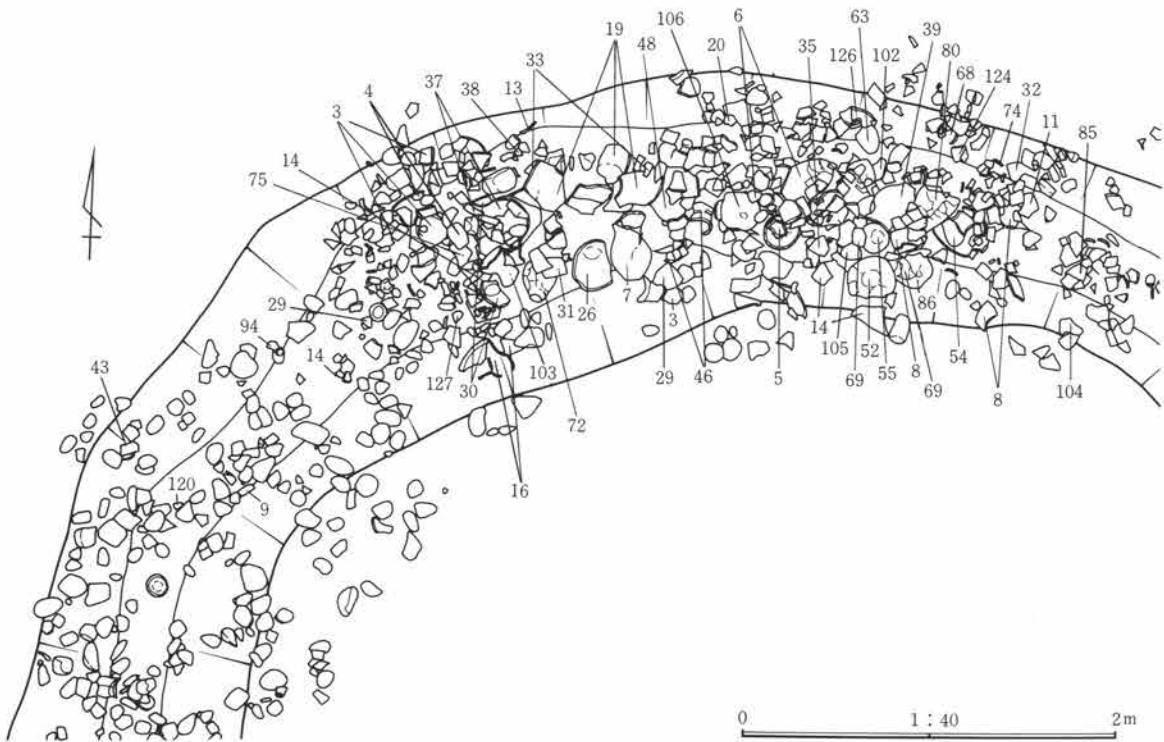
6号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(磔床)×深さ	主体部主軸方位
東-西	8.3	SK 440	2.7 × 1.4	1.55 × - × 0.27	N-89.5°-E
		SK 441	1.6 × 0.9	0.65 × - × 0.09±	N-88.7°-E

位置 45-G00に位置する。

周溝 2基の主体部 (SK 440、SK 441) の周囲に円形の周溝を巡らす。溝の覆土は暗褐色土であり、第IV





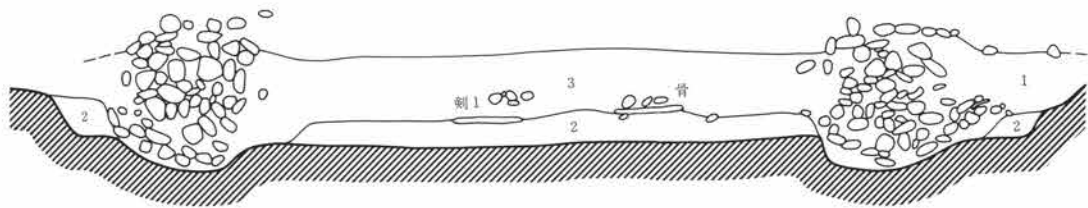
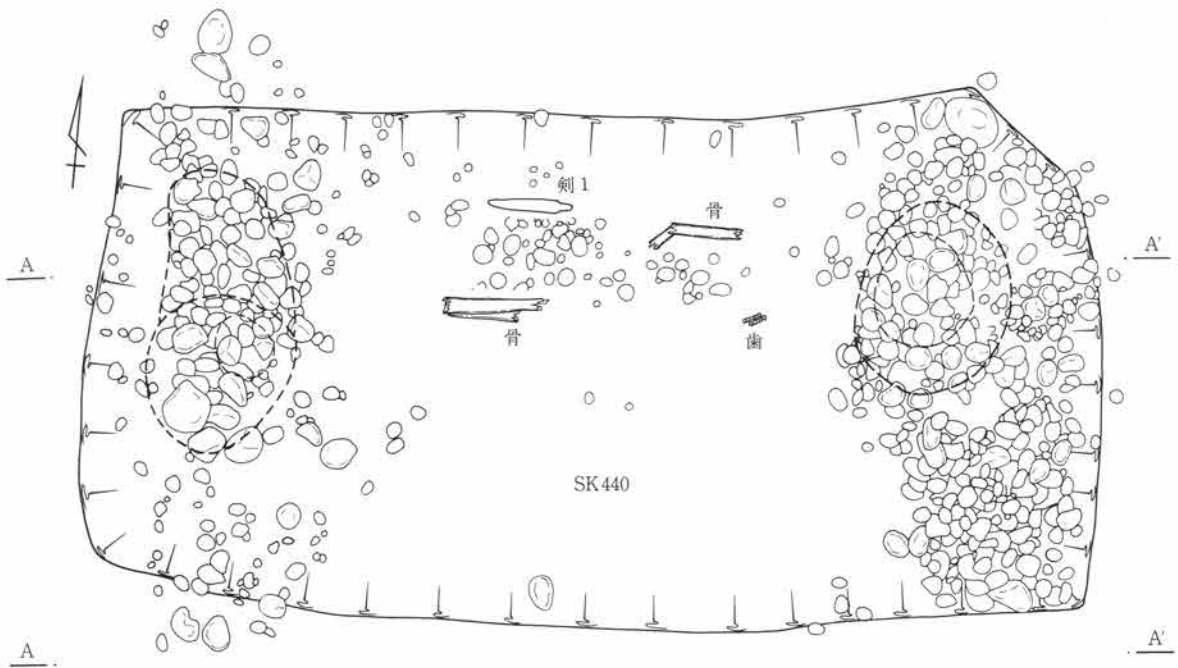
第213図 6号墓遺物出土状態(2)

層と第V層の漸移層である壁土の検出が一部困難な箇所があったが、全体として検出状態は良好である。周溝内より、土器の完形個体、大形破片が多数出土している。とくに北半部に著しく、溝底部から重なり合った状態で密集していた。器種は壺、甕、高坏、鉢などでおよそ器種を網羅しているが、なかでも壺がその多くを占め、また小形高坏、小形鉢がやや目立つ。周溝覆土上部に浅間C軽石を多量に含む。

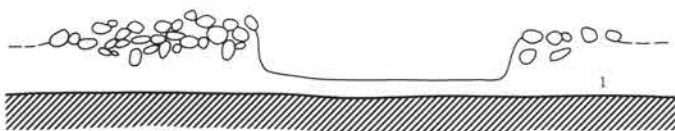
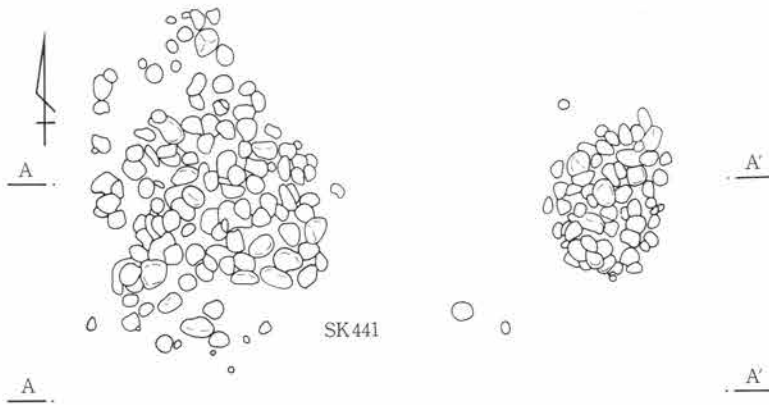
**主体部** SK440は埋葬部の両端に小円礫を集積し、礫床は設けられない。両端の礫集積部の幅は1.4mを測り、とくに幅広く造られ、また礫集積は直下に設けられたピットまで深く及んでいる。埋葬部の床面は不明確であるが、床面直上とみられる刃りから被葬者の歯や肢骨が検出されたほか、鉄剣やガラス製小玉が出土している。歯は埋葬部東部に点在することから頭を東に向け、剣は先端を足部方向に向け、腰部の右傍らに置かれていたとみられる。主体部の外郭には方形に掘り込みを検出するが、覆土と壁土の区別がつきにくいいため、やや明確さを欠く。礫集積下、2か所に長円形ピットを設けている。磨製偏平片刃石斧はSK440の礫集積上より検出された。玉類はガラス製小玉がSK440の埋葬部から検出されたほか周囲の覆土より石製管玉や多数のガラス製小玉が出土している。

SK441はSK440の北に並び、礫の配置はSK440と同形式であるが著しく小規模である。埋葬部の床面は不明確で被葬者の遺体や、遺物は検出できなかった。

6 検出した遺構・遺物

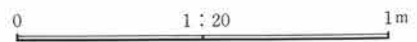


- 1 暗褐色 粘性を欠く。
- 2 暗褐色 粘質。
- 3 暗褐色

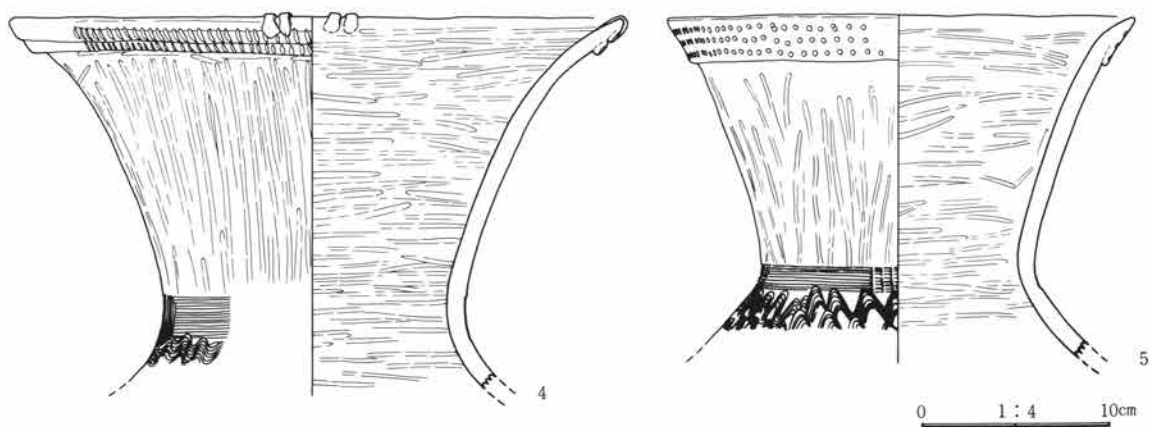
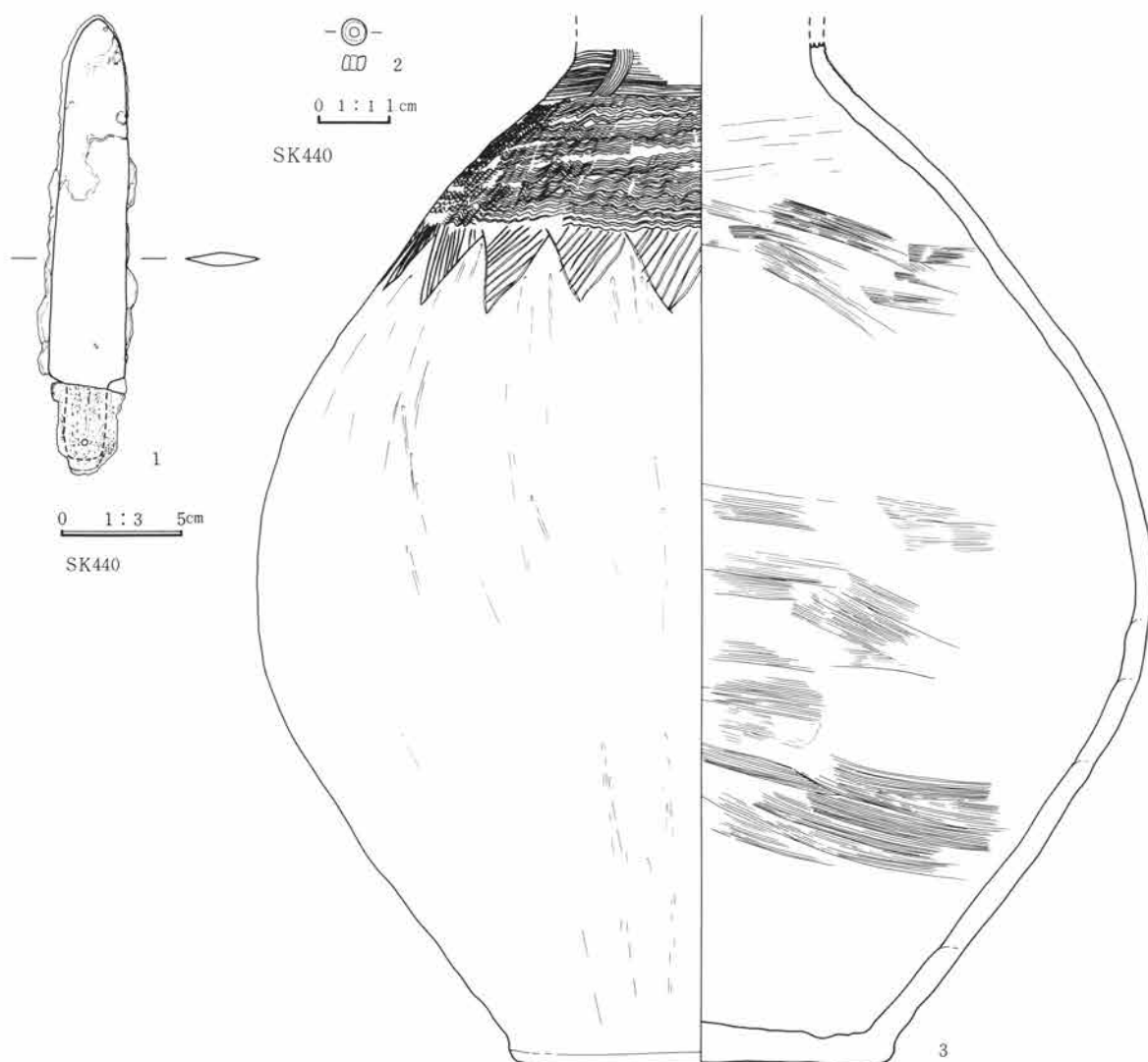


- 1 暗褐色 粘質。

L=172.6m

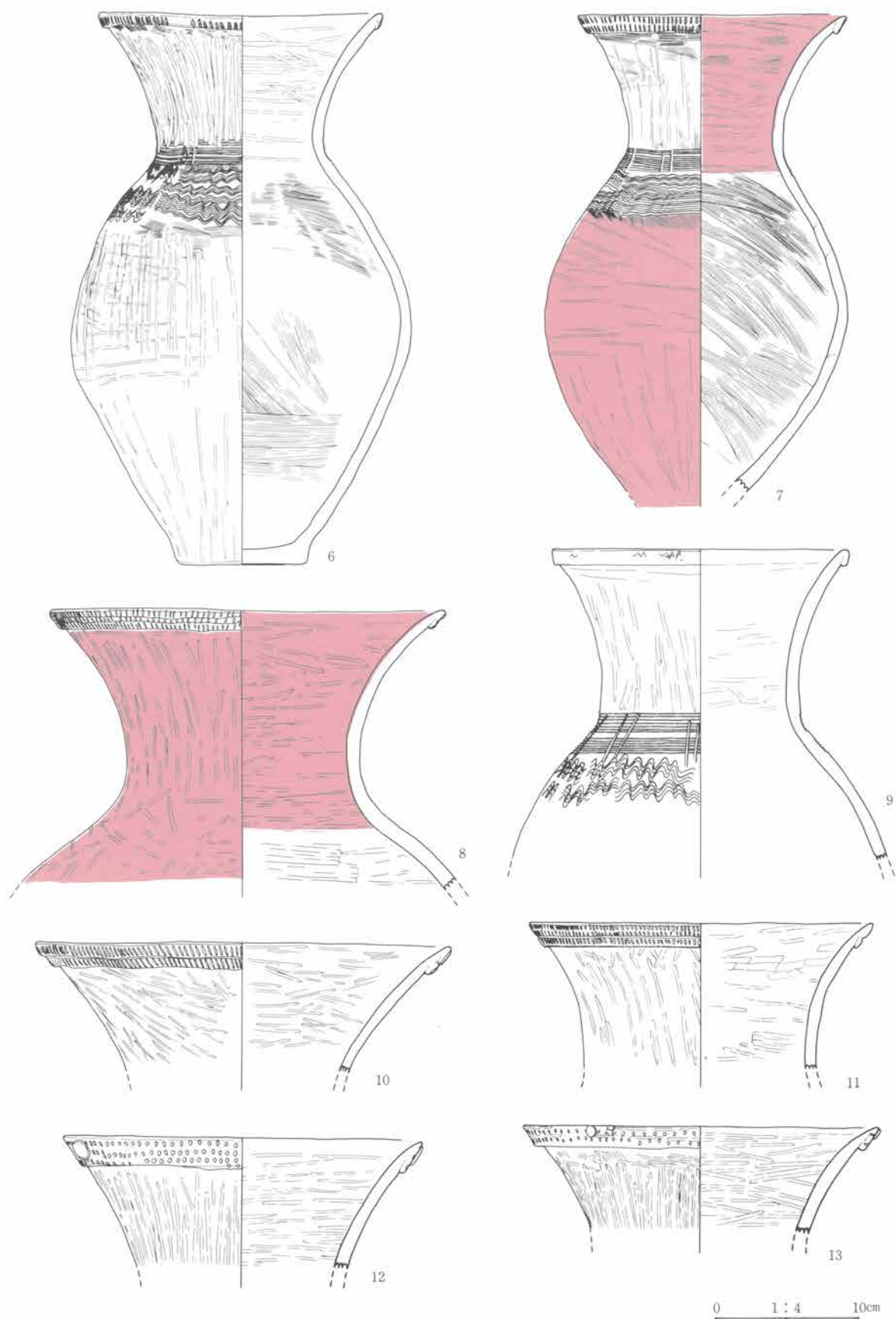


第214図 6号墓(3)



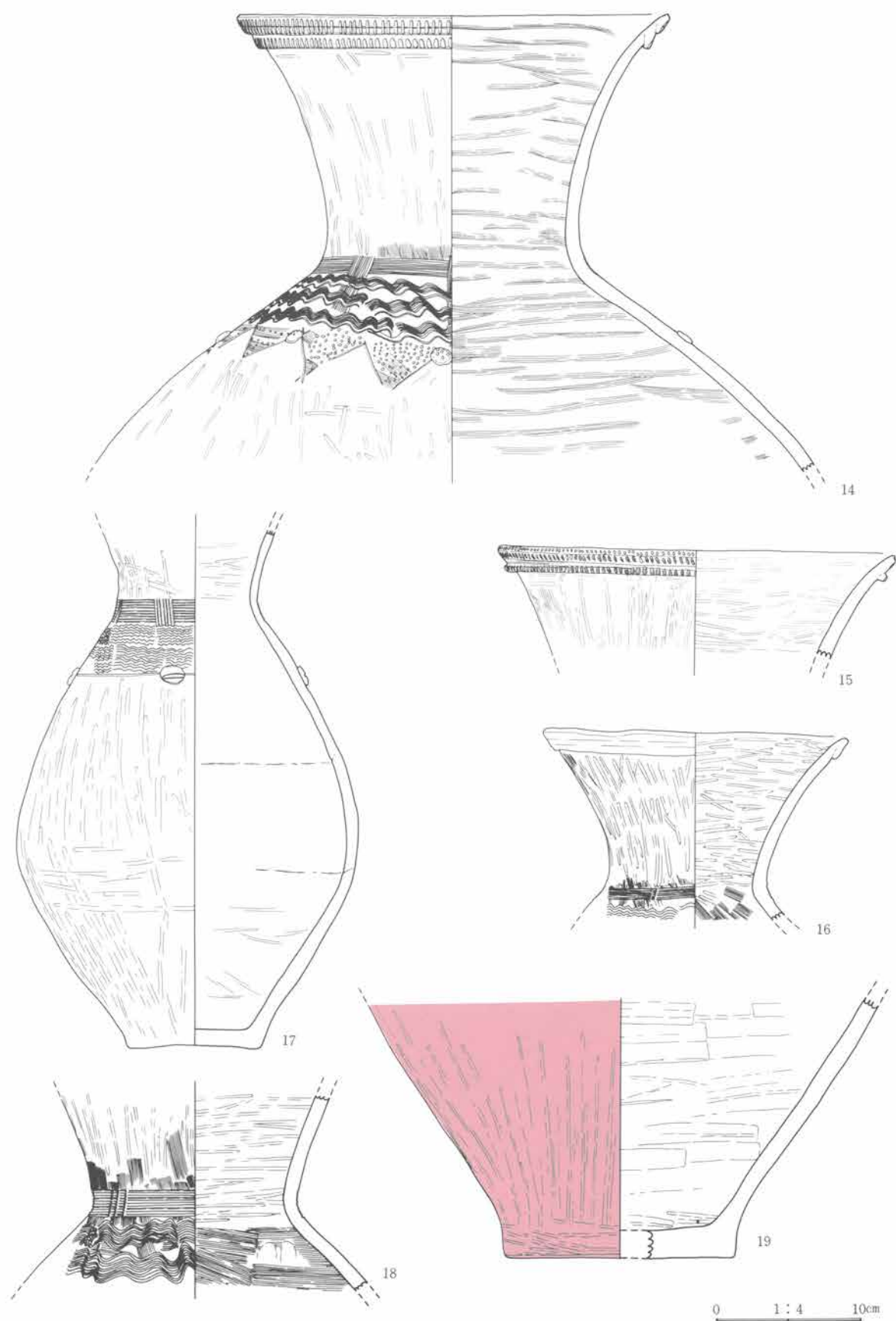
第215图 6号墓出土遗物(1)

6 検出した遺構・遺物



第216図 6号墓出土遺物(2)

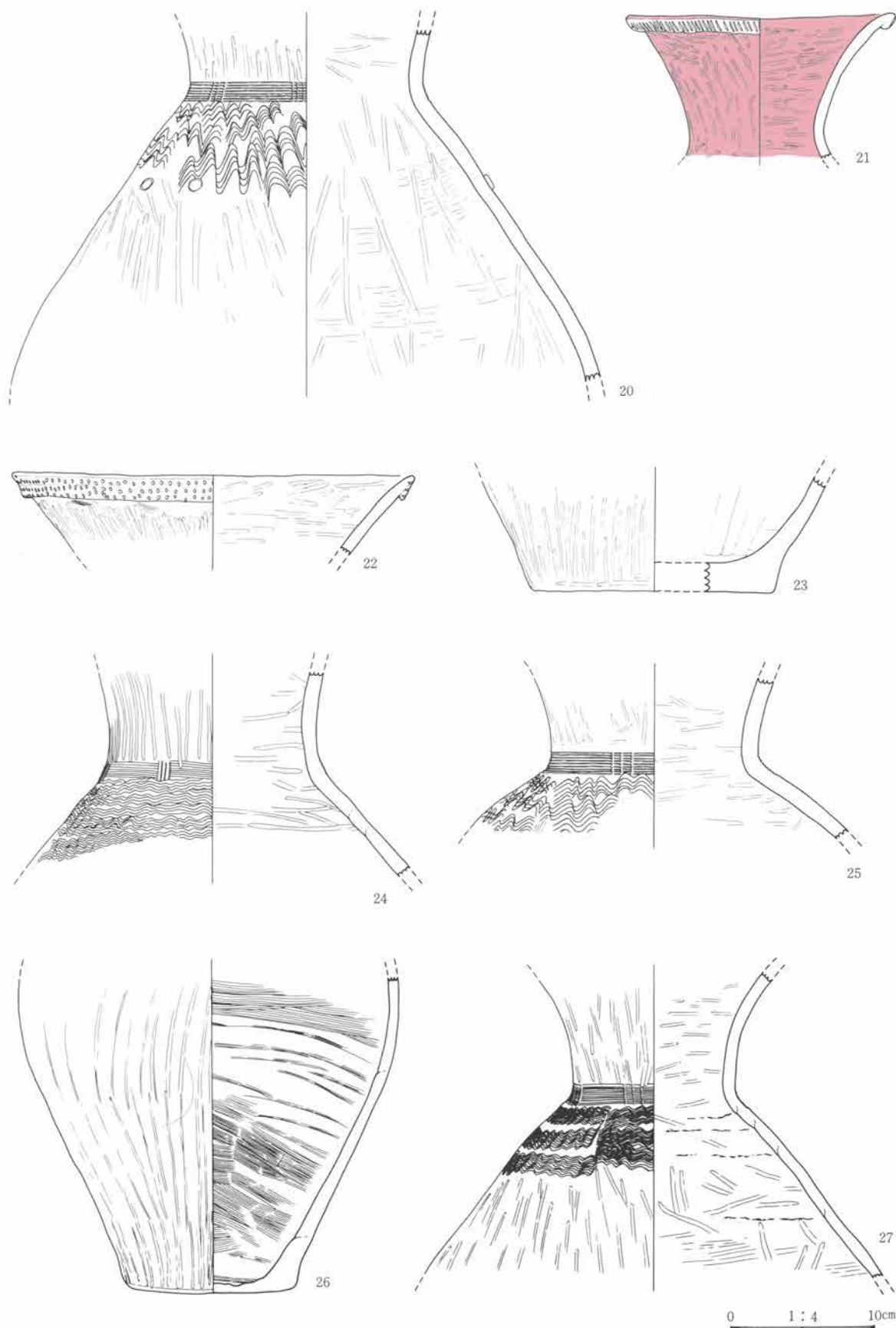




第217图 6号墓出土遗物(3)



6 検出した遺構・遺物

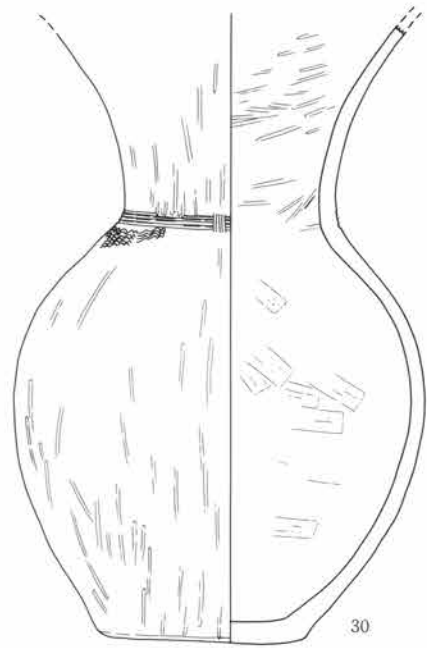


第218図 6号墓出土遺物(4)

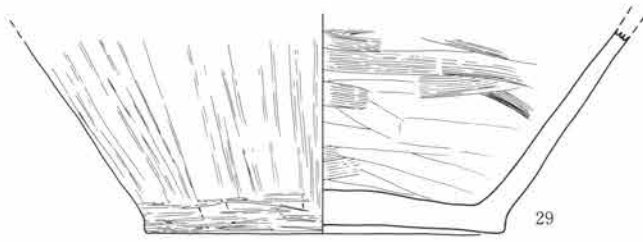
(5) 墓 跡



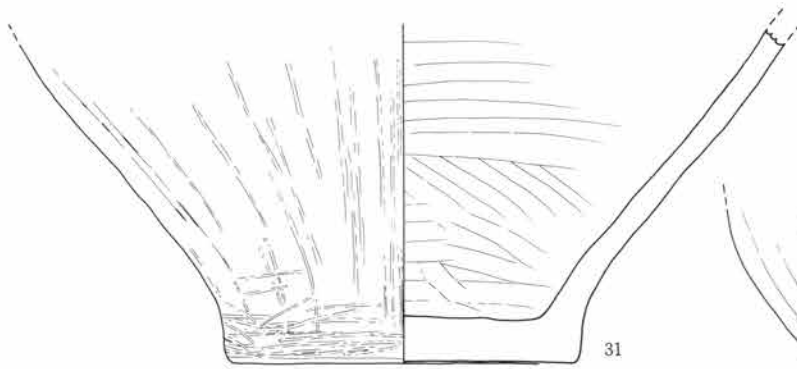
28



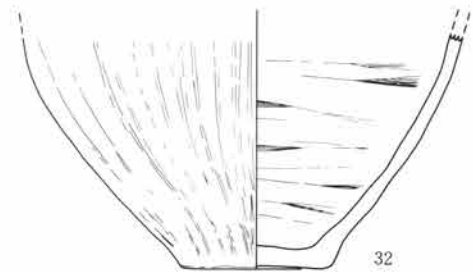
30



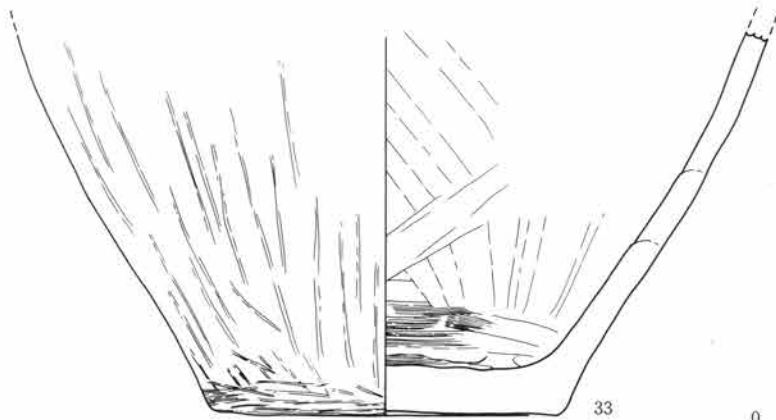
29



31



32

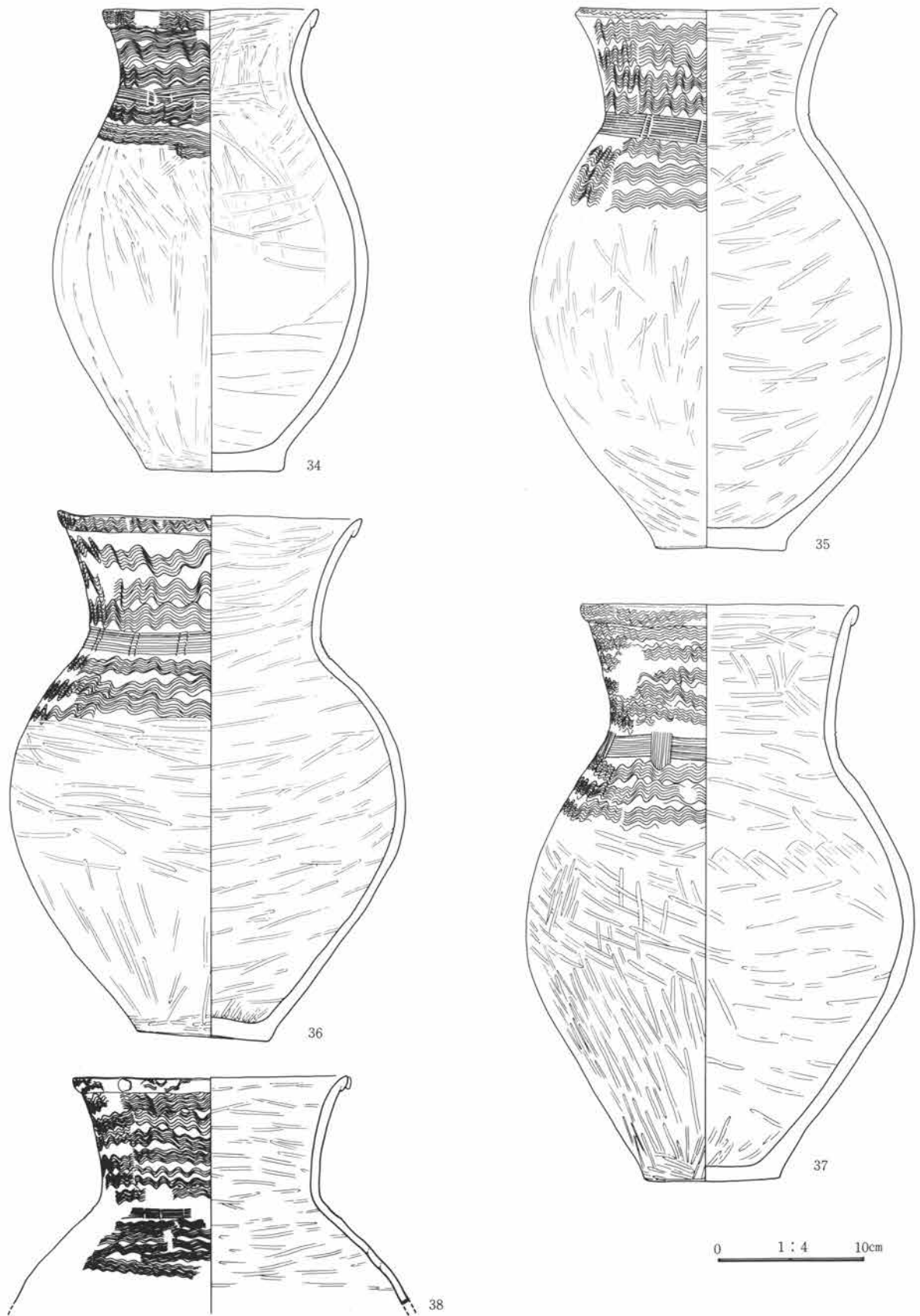


33

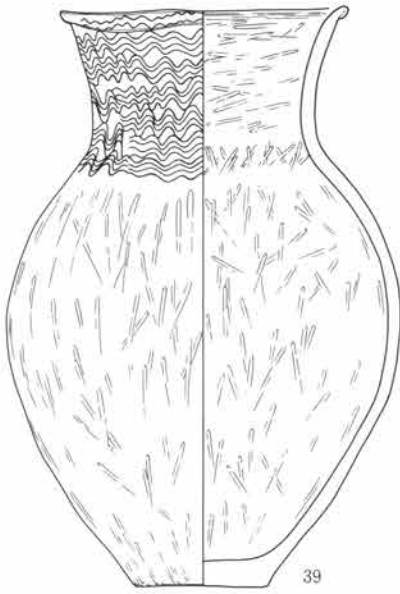
0 1 : 4 10cm

第219図 6号墓出土遺物(5)

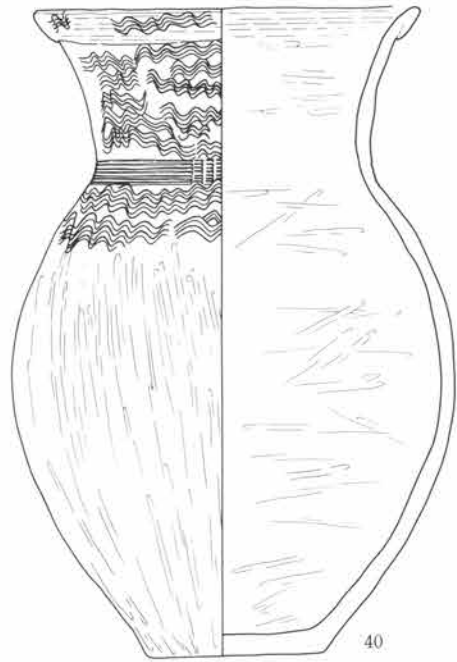
6 検出した遺構・遺物



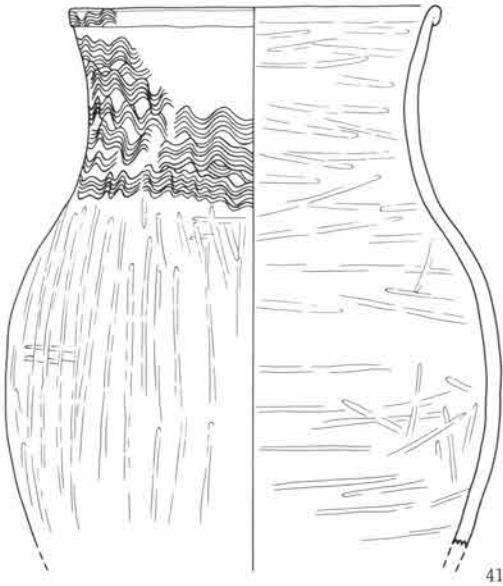
第220図 6号墓出土遺物(6)



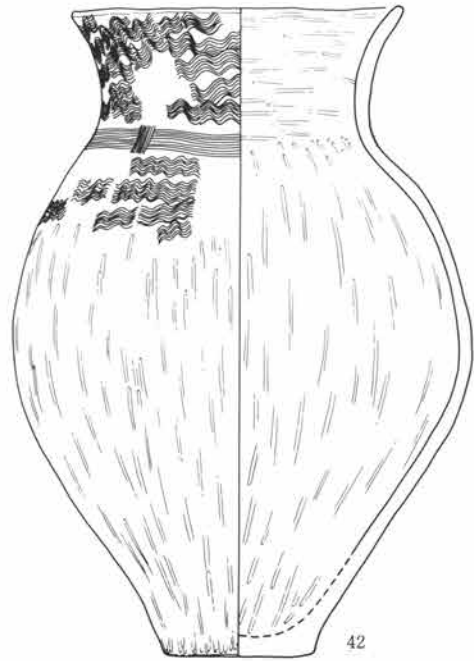
39



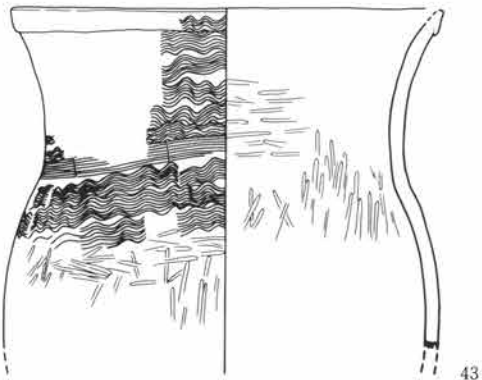
40



41



42

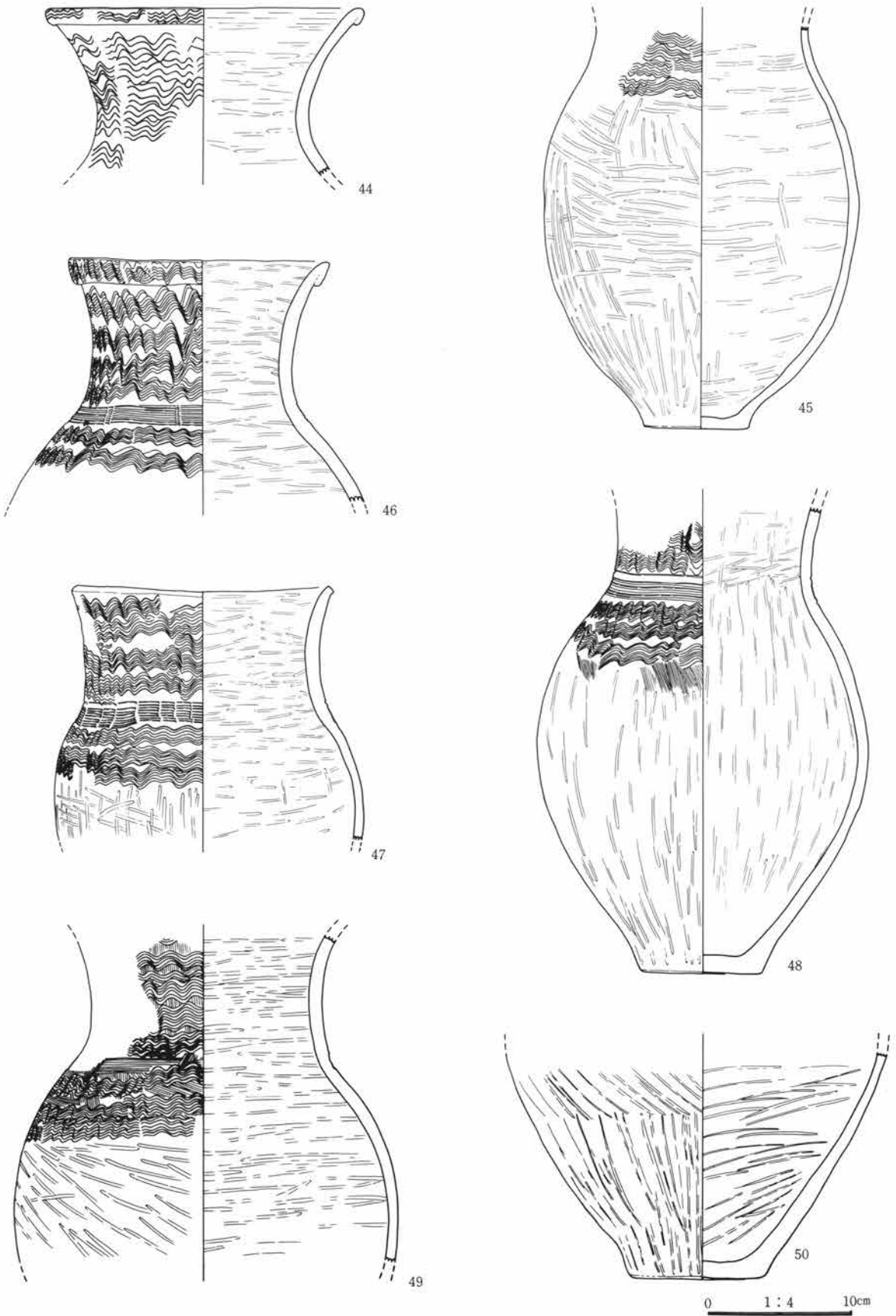


43

0 1 : 4 10cm

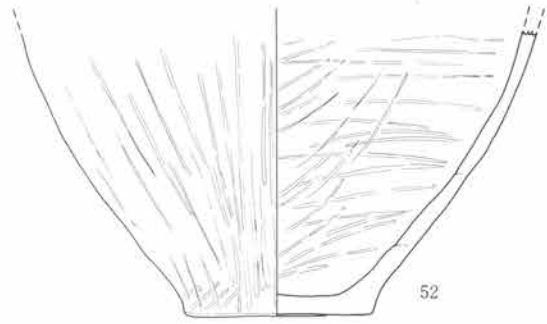
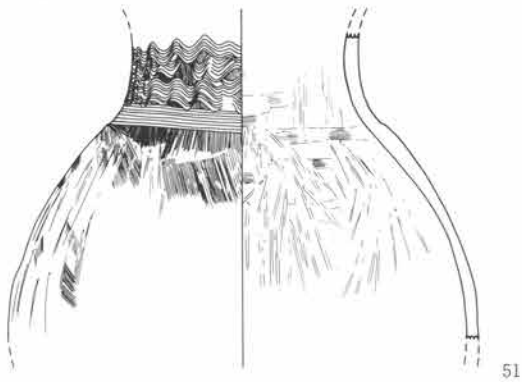
第221图 6号墓出土遺物(7)

6 検出した遺構・遺物

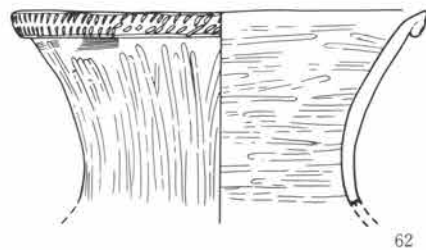
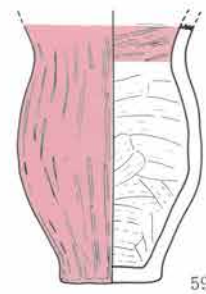
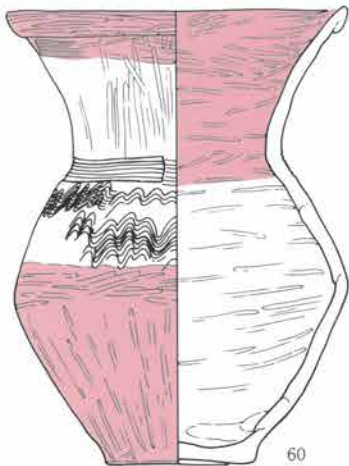
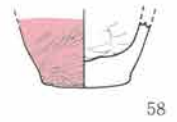
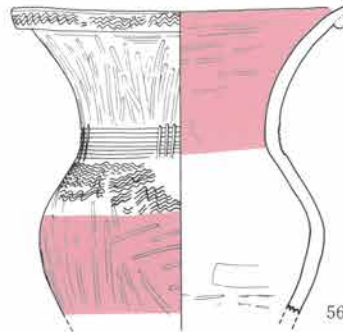
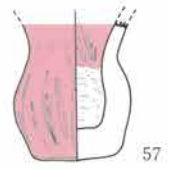
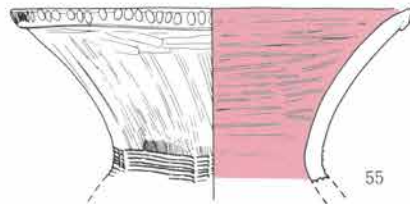
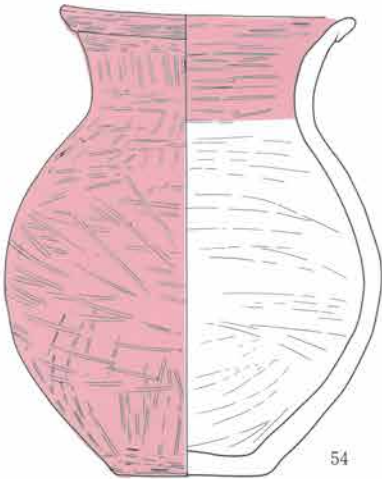
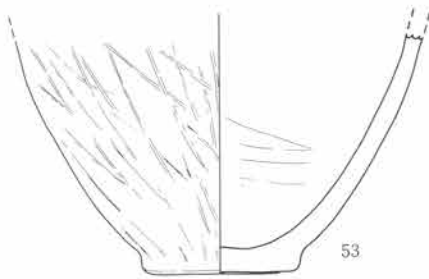


第222図 6号墓出土遺物(8)

(5) 墓 跡



0 1:4 10cm

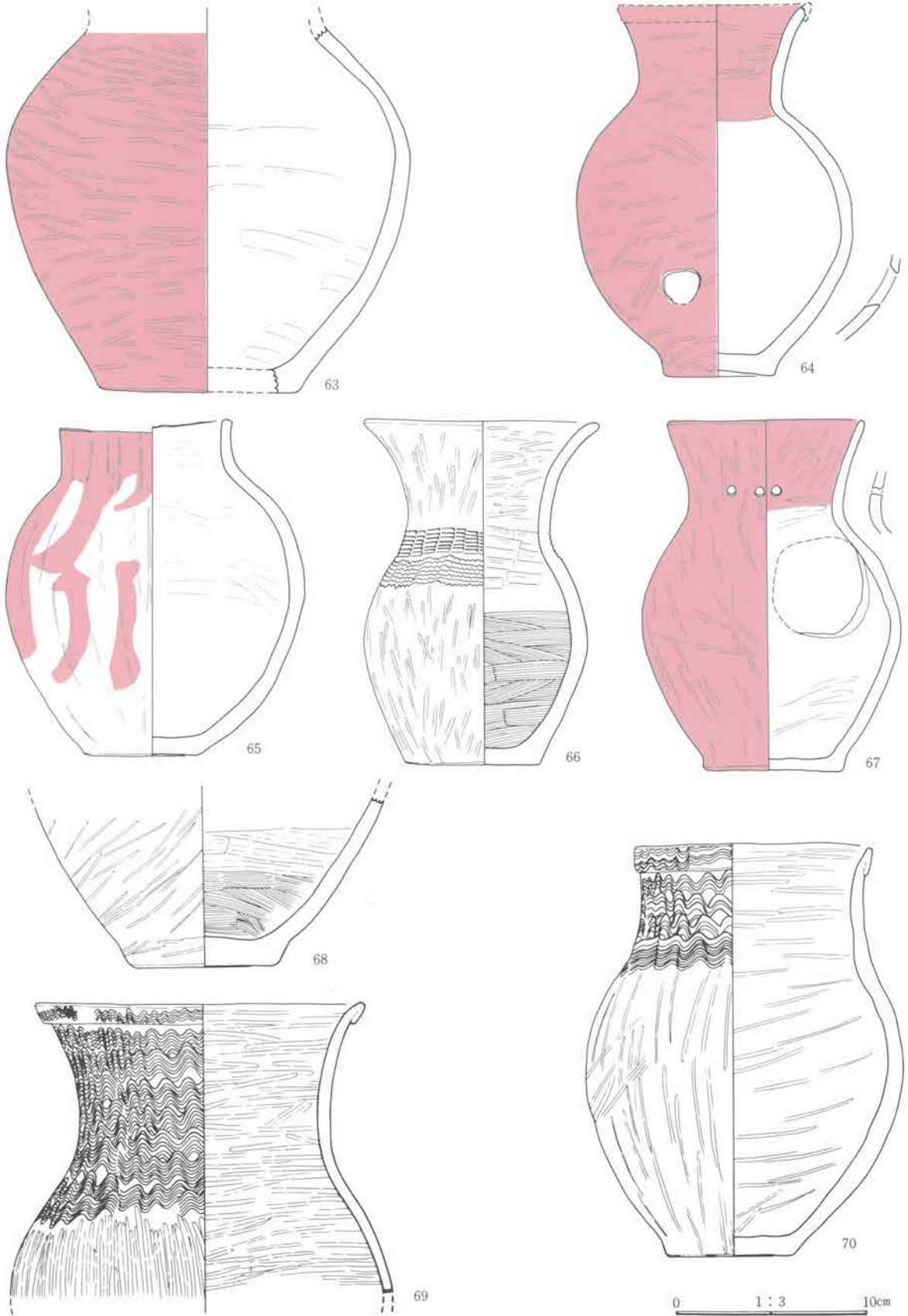


0 1:3 10cm

第223图 6号墓出土遗物(9)

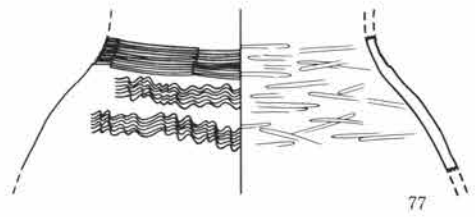
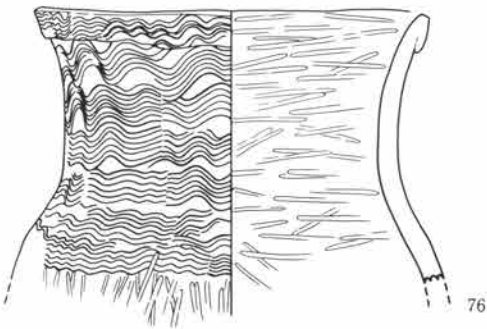
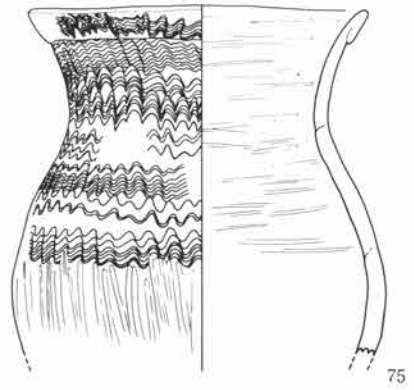
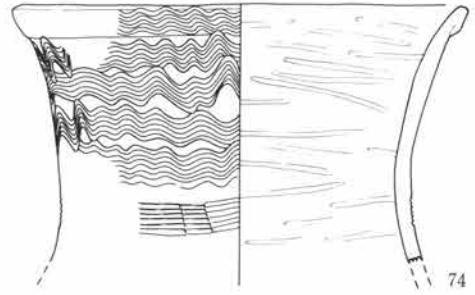
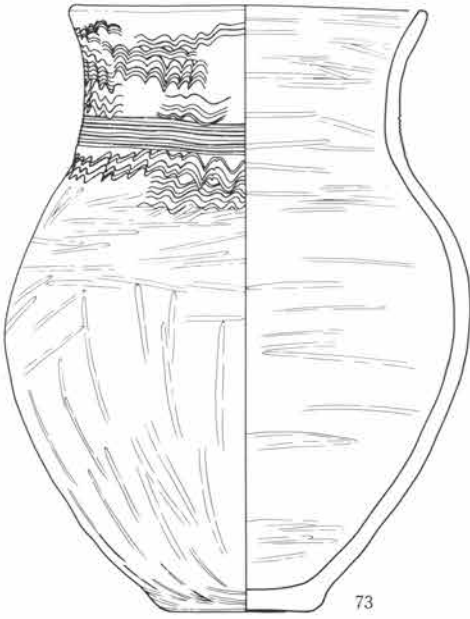
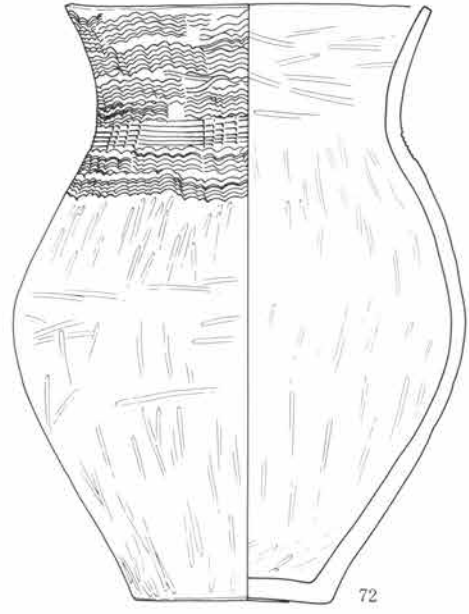
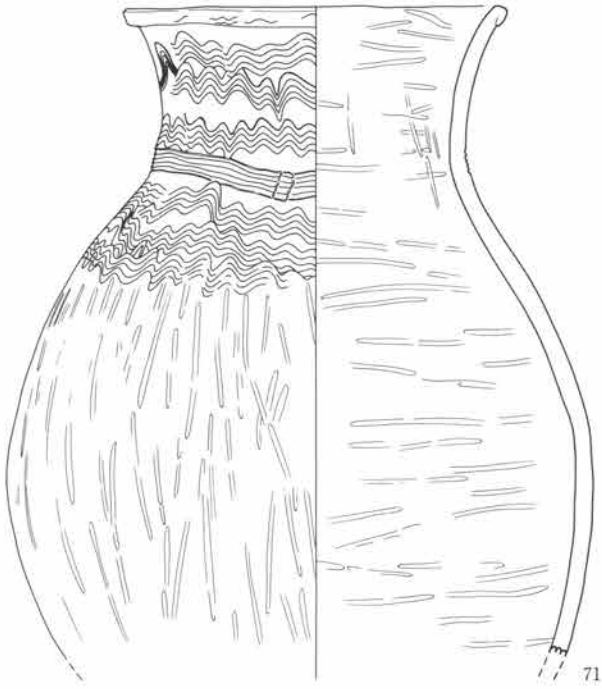


6 検出した遺構・遺物



第224図 6号墓出土遺物(10)

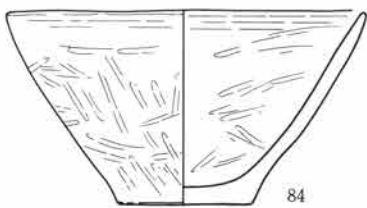
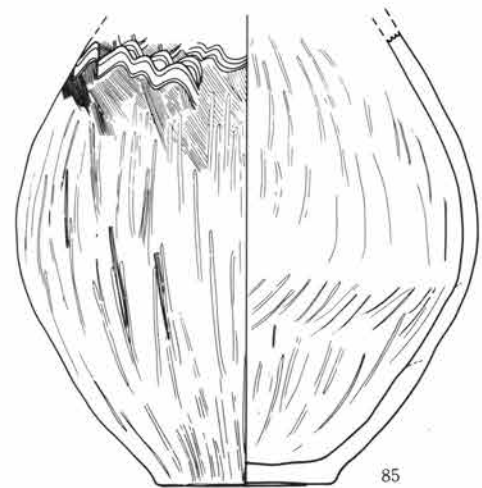
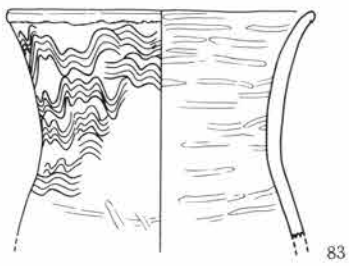
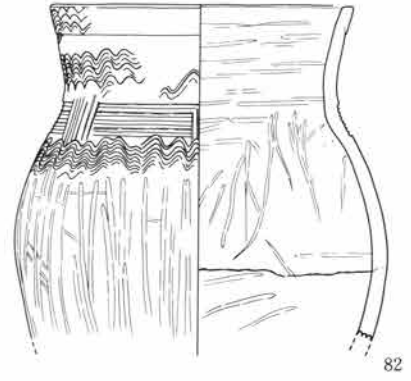
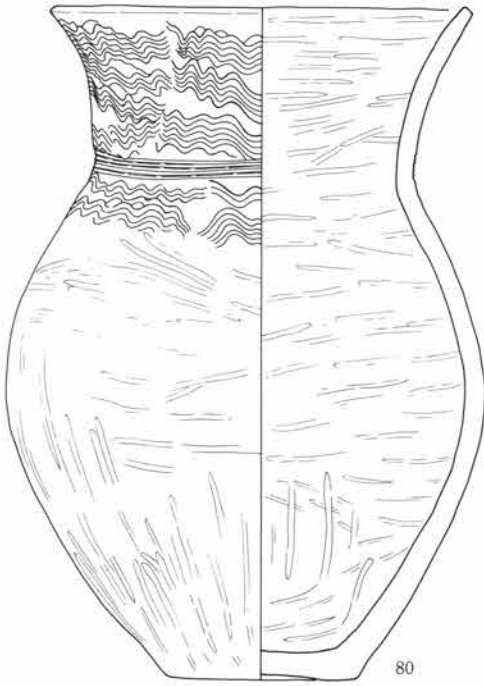
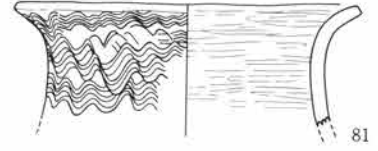
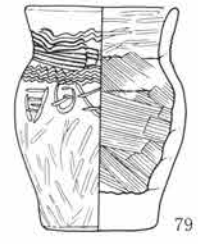
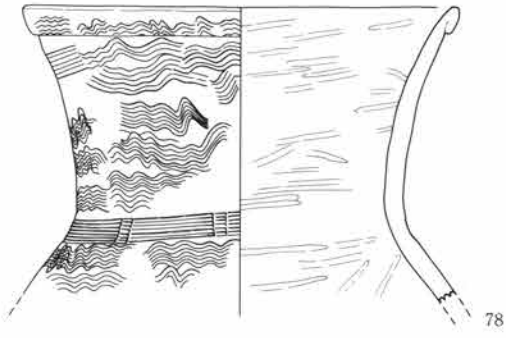




0 1:3 10cm

第225图 6号墓出土遗物(11)

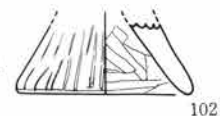
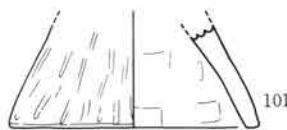
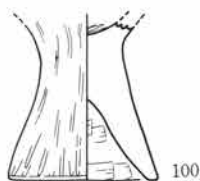
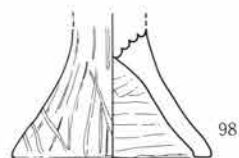
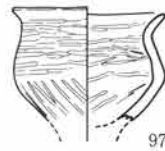
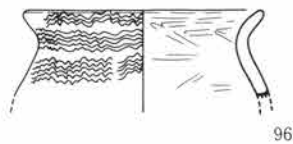
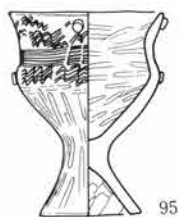
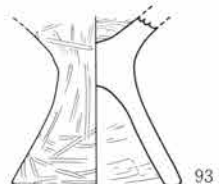
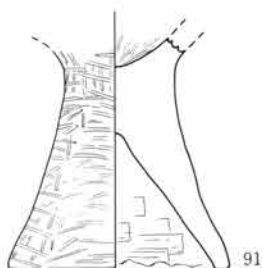
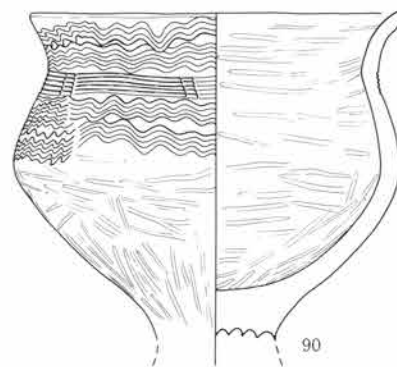
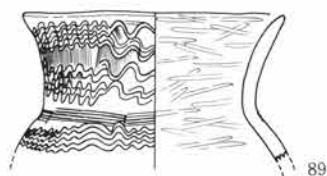
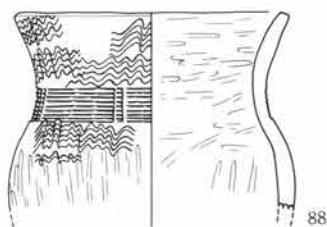
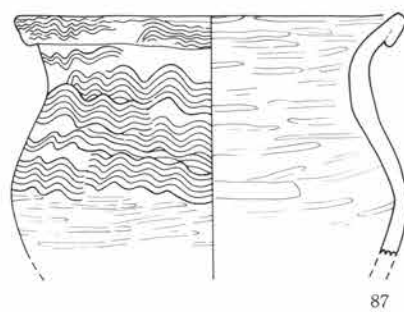
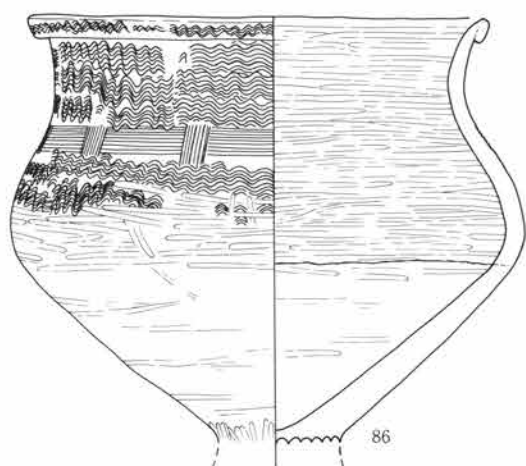
6 検出した遺構・遺物



0 1 : 3 10cm

第226図 6号墓出土遺物(12)

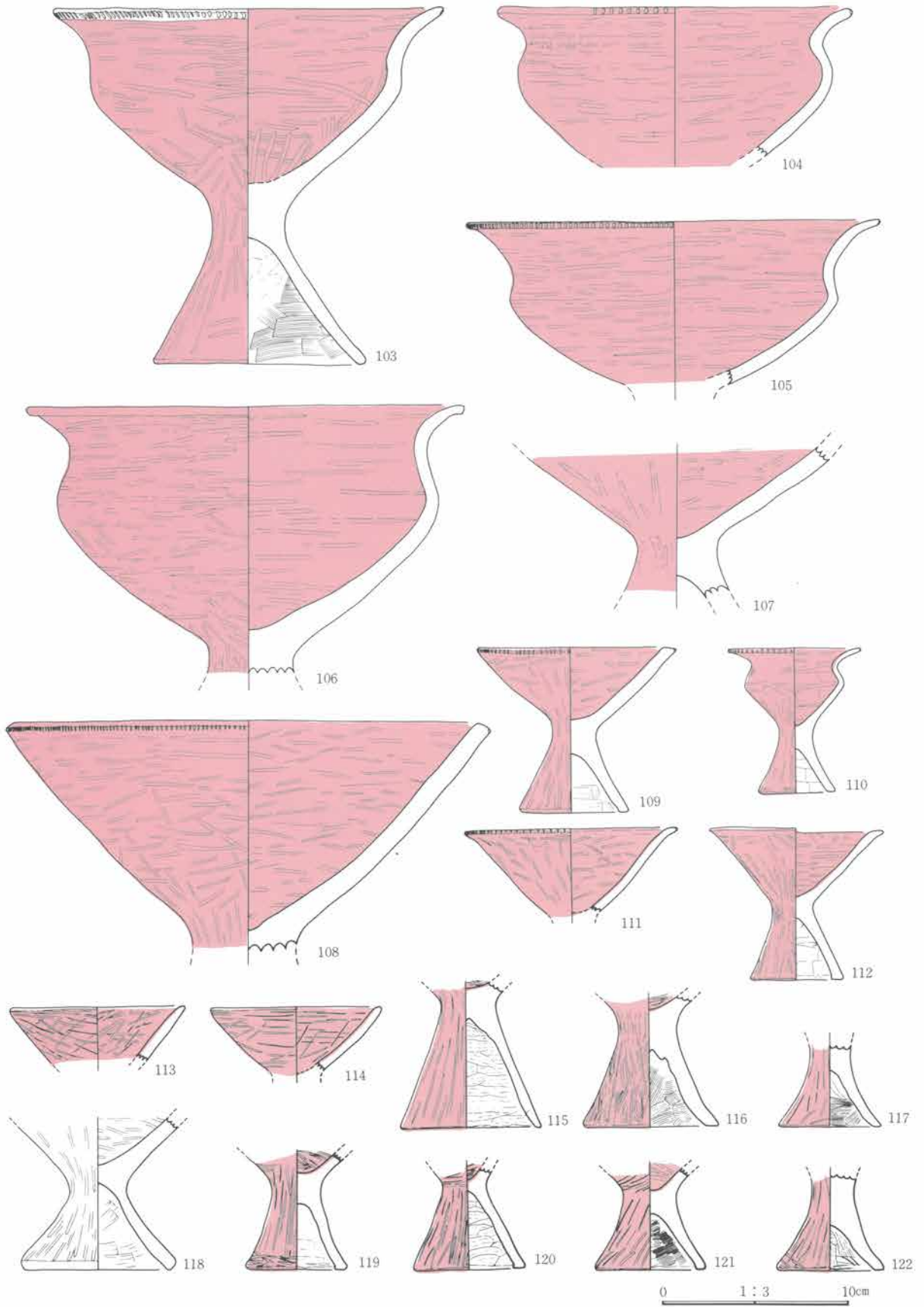
(5) 墓 跡



0 1 : 3 10cm

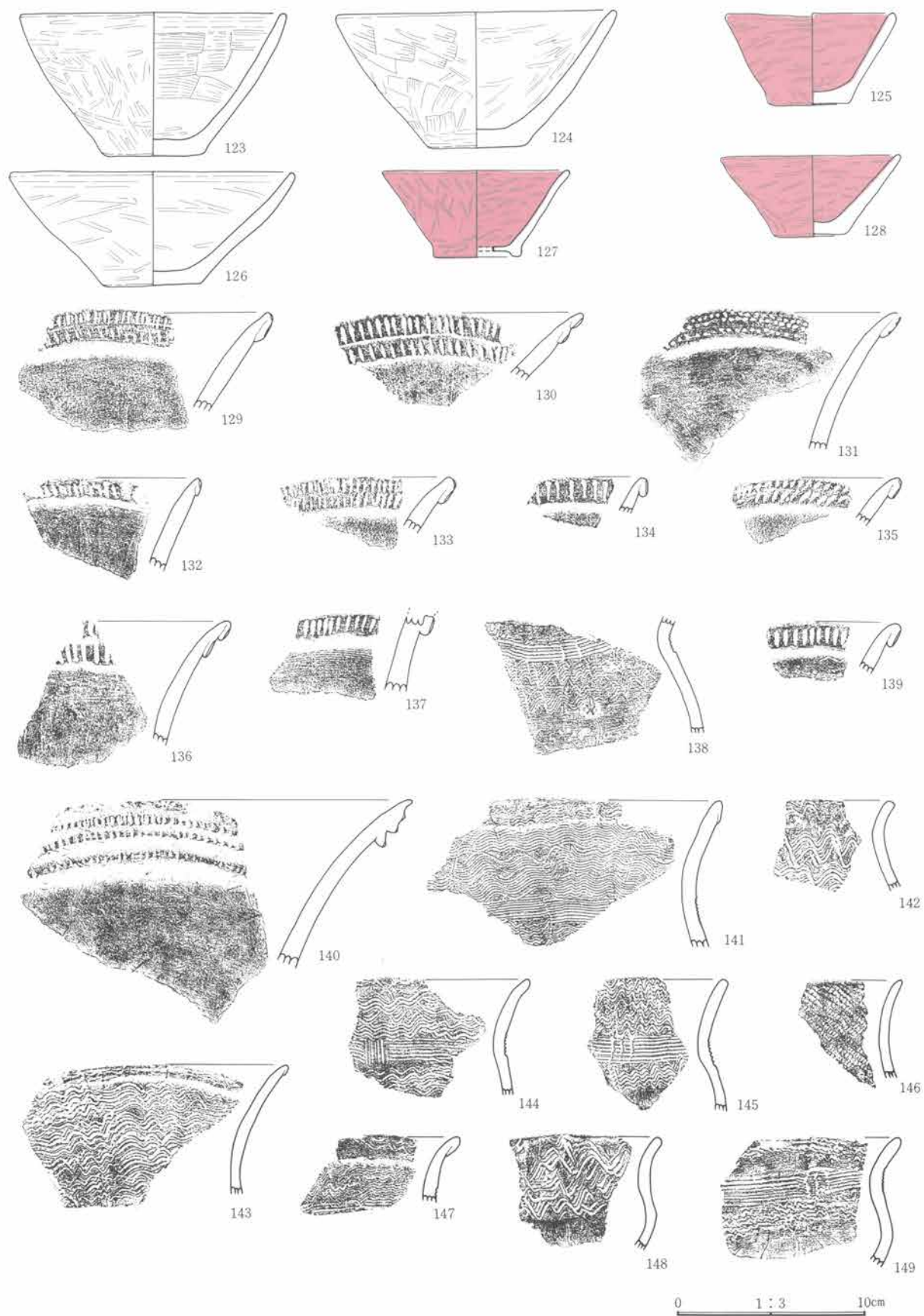
第227图 6号墓出土遗物(13)

6 検出した遺構・遺物



第228図 6号墓出土遺物 (14)

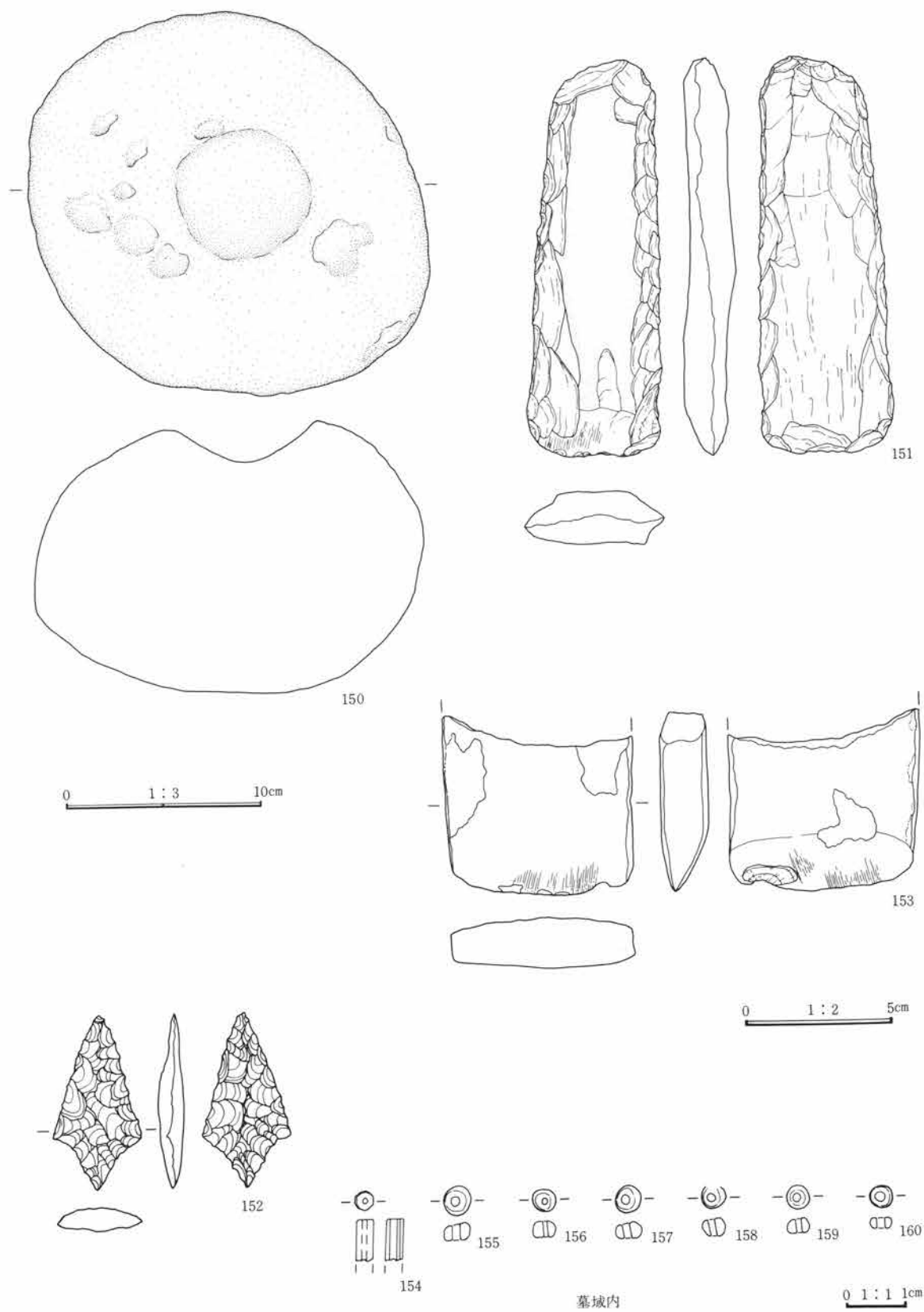
(5) 基 跡



第229图 6号墓出土遗物(15)



6 検出した遺構・遺物



第230図 6号墓出土遺物(16)

6号墓出土鉄剣観察表

番号	全長	身幅	茎長	身厚	形 状、 遺 存 状 態 な ど
1	17.9	3.0	3.1	0.5±	幅に比して比較的剣身は短い。茎に装着していた鹿角製の把が残存する。把縁部は遺存良好であるが、当初の把の表面は腐食し、遺存しない。目釘孔を認める。錆（シノギ）は不明瞭。

6号墓出土玉類観察表 PL.144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備 考
2	小 玉	0.18	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。

6号墓出土土器観察表 PL.124~130

遺物番号	器 種	法 量	器 形 ・ 成 形	文 様 ・ 整 形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
3	壺	胴 48.0		外 頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文、ヘラ描鋸歯文に平行沈線を充填。以下ヘラミガキ。 内 口辺～頸部はヘラミガキ、胴部はハケメ、ナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	頸～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
4	壺	口 32.8	2段の折り返し口縁。	外 口縁部は2段の刻み目文、付文2個単位を4個、頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 口辺～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
5	壺	口 24.6	幅の広い折り返し口縁。	外 口縁部は刺突文、頸部は3連止め簾状文、肩部は波状文。 内 口縁～頸部はヘラミガキ。	砂粒を多量に含む。 堅緻、明褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸部 $\frac{1}{2}$ 周
6	壺	口 19.4 高 38.2 胴 23.8	折り返し口縁	外 口縁部は刻み目文、以下ヘラミガキ、頸部は3連止め簾状文、肩部は波状文、胴～底部はヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴～底部はハケメ。	粗砂粒を含む 堅緻、橙色	ほぼ完形
7	壺	口 18.5 胴 21.2	折り返し口縁。	外 口縁部は2段の刻み目文、口辺～頸部は2連止め簾状文、肩部は波状文、胴～底部はヘラミガキ。 内 口縁～底部はハケメ、ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや軟質、浅黄橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸～胴下部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩
8	壺	口 27.6	2段の折り返し口縁。	外 口縁部は3段の波状文、以下ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、肩部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部全周 頸部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩
9	壺	口 20.8	折り返し口縁。	外 口縁部は波状文、頸部は櫛描横直線2段に縦直線、肩部は波状文。 内 口縁～頸部ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸～胴部全周
10	壺	口 29.0	2段の折り返し口縁。	外 口縁部は2段の刻み目文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
11	壺	口 24.0	折り返し口縁。	外 口縁部は沈線を1条巡らし、上下に刻み目文3段。 内 ヘラミガキ、ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁 $\frac{1}{2}$ 周
12	壺	口 24.8	折り返し口縁。	外 口縁部は棒状具による刺突文、付文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
13	壺	口 24.8	幅広の折り返し口縁。	外 口縁部は刺突文、付文2個1単位に付す、以下ハケメ後ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
14	壺	口 30.1	2段の折り返し口縁。	外 口縁部は1条の沈線に2段の刻み目文、頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文、鋸歯文に刺突。 内 ハケメ、ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、浅黄橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸部 $\frac{1}{2}$ 周 胴部 $\frac{1}{2}$ 周
15	壺	口 27.5	口縁部は2段の折り返し口縁。下段突帯状。	外 口縁部は2段の折り返し口縁。下段突帯状。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
16	壺	口 21.1	折り返し口縁。	外 口縁部はヨコナデ、頸部は2連止め簾状文、肩部は波状文。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	口縁部ほぼ全周 頸部 $\frac{1}{2}$ 周



6 検出した遺構・遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
17	壺	胴 23.7		外 頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文、沈線の後、付文を4個付す。以下ヘラミガキ。 内 口辺～頸部はヘラミガキ、胴部ナデ、荒れている。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	口辺～胴部全周
18	壺	頸 14.3		外 頸部は3連止め簾状文、肩部は波状文。 内 口辺部はヘラミガキ、胴部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口辺～肩部1/4周
19	壺	底 16.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ、粗い縦ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	底部1/4周 外面丹彩
20	壺	頸 16.6		外 頸部は3連止め簾状文、肩部は波状文。 内 胴部はヘラナデ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、赤褐色	頸部1/4周 胴部1/4周
21	壺	口 18.6	折り返し口縁。	外 口縁部はヘラ刻み目文、頸部はヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁～頸部全周 内外面丹彩
22	壺	口 27.9	幅広の折り返し口縁。	外 口縁部は棒状具による刺突文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒、小礫を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁部1/4周
23	壺	底 16.2		外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。	小礫を含む。 堅緻、鈍黄色	底部1/4周
24	壺	頸 14.5		外 頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文。 内 口辺～頸部はヘラミガキ、以下ナデ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、暗橙色	頸～肩部1/4周
25	壺	口 14.8		外 頸部は3連止め簾状文、肩部は波状文。 内 口辺～頸部はヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、灰褐色	頸～肩部1/4周
26	壺	胴 26.5		外 ヘラミガキ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、明褐色	胴部1/4周 底部全周
27	壺	頸 11.5		外 頸部は3連止め簾状文、肩部は波状文。 内 頸部はヘラミガキ、肩部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、淡橙色	口辺部1/4周 頸部ほぼ全周
28	壺	底 13.2		外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。	粗砂粒を含む。 軟弱、赤色	胴下～底部全周
29	壺	底 19.0		外 ヘラミガキ。 内 ハケメ、ヘラナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	底部全周
30	壺	頸 11.1 胴 21.1		外 頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文。 内 口辺～頸部はヘラミガキ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 やや軟弱、橙色	口縁～頸部1/4周 頸～底部全周
31	壺	底 18.3		外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	胴下部1/4周 底部1/4周
32	壺	底 7.8		外 ヘラミガキ。 内 ハケメ、ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	胴下～底部全周
33	壺	底 18.4		外 ヘラミガキ。 内 ハケメ、ヘラナデ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	胴下部1/4周 底部全周
34	甕	口 14.5 高 31.6	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、以下ヘラミガキ、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部1/4周 口辺～底部1/4周
35	甕	口 17.3 高 36.8	口縁部は角ばり、端部に面を作る。	外 口縁部～肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや軟弱、明赤褐色	口縁部ほぼ全周 胴部1/4周
36	甕	口 20.7 高 35.8	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	ほぼ完形
37	甕	口 19.1 高 39.4	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、頸部は櫛描横直線に縦直線。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、褐色	口縁部1/4周 頸～胴部全周
38	甕	口 18.8	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、口縁部に付文4個、頸部は等間隔止め簾状文、胴部はヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～胴部1/4周
39	甕	口 15.2 高 30.4	折り返し口縁、折り返し幅は不定。	外 口縁～頸部波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、暗赤褐色	口縁部1/4周 胴部全周
40	甕	口 20.0 高 34.0	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁部1/4周 頸部以下全周
41	甕	口 19.6 胴 26.3	折り返し口縁。	外 口縁部～頸部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	口縁部1/4周 頸～胴部1/4周
42	甕	口 17.5 高 34.4		外 口縁～肩部は波状文、頸部は櫛描横直線に縦直線。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや軟弱、橙色	ほぼ完形
43	甕	口 23.0	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、頸部は等間隔止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、灰褐色	口縁部1/4周 頸～胴部1/4周
44	甕	口 22.2	折り返し口縁。	外 口縁～頸部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、灰赤色	口縁部1/4周
45	甕	胴 22.0		外 頸～肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	胴部1/4周 底部全周

## (5) 墓 跡

遺物番号	器 種	法 量	器 形 ・ 成 形	文 様 ・ 整 形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
46	甕	口 18.1	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 周
47	甕	口 17.7 胴 21.6	口縁部は鋭く角ばる。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は等間隔止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～頸部全周 胴部 $\frac{1}{2}$ 周
48	甕	胴 23.2		外 口辺～肩部は波状文、頸部は櫛描直線文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明褐色	口辺部 $\frac{1}{2}$ 周 胴部全周
49	甕	胴 26.8		外 口辺～肩部は波状文、頸部は櫛描横直線に縦直線。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	頸部 $\frac{1}{2}$ 周 胴上部全周
50	甕	底 9.2		外 胴～底部はヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	底部全周 胴部 $\frac{1}{2}$ 周
51	甕	胴 25.0		外 口辺部は波状文、頸部は櫛描直線文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	頸～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
52	甕	底 9.9		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	底部全周 胴部 $\frac{1}{2}$ 周
53	甕	底 7.9		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	胴下～底部全周
54	壺	口 11.6 高 18.3	折り返し口縁。	外 ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はヘラナデ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩
55	壺	口 15.8	折り返し口縁。	外 口縁部は棒状具による刻み目文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、黄褐色	口縁～頸部ほぼ全周 内面丹彩
56	壺	口 13.4 胴 11.4	折り返し口縁、断面三角状。	外 口縁部は波状文、頸部は櫛描直線に3本1単位の沈線、肩部は波状文。以下ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。	砂粒を多量に含む。 堅緻、淡黄赤褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩
57	壺(ミニチュア)	胴 4.7	粘土積み上げ痕は見られない。	外 頸～胴部はヘラミガキ。 内 頸部はヘラミガキ、胴部はナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	頸～胴部全周 内外面丹彩
58	壺(ミニチュア)	底 3.3	手づくね成形。器面は凹凸目立つ。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	底部全周 外面丹彩
59	壺	胴 7.3		外 ヘラミガキ。 内 頸部はヘラミガキ、胴部はナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	頸～底部全周 内外面丹彩
60	壺	口 13.6 高 18.0	折り返し口縁。	外 頸部は櫛描直線文、肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 滑沢、ヘラミガキ、ヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	ほぼ完形 内外面丹彩
61	壺	口 18.0	折り返し口縁。	外 口縁部は刻み目文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや軟弱、橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
62	壺	口 16.5	折り返し口縁。	外 口縁部は刻み目文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
63	壺	胴 20.9 底 10.2		外 ヘラミガキ。 内 胴部はハケメ、ヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	頸部～胴部 $\frac{1}{2}$ 周 外面丹彩
64	壺	胴 14.2	胴下部に焼成後穿孔がある。	外 ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ。胴部はナデ。器面は荒れている。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁端部は欠損 頸～胴部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩
65	壺	胴 15.5	口縁部を平らに打ち欠いている。	外 ヘラミガキ。 内 ナデ。	粗砂粒を含む。 軟弱、橙赤色	頸部～胴部 $\frac{1}{2}$ 周 外面丹彩
66	壺	口 11.9 高 17.7		外 頸部は等間隔止め簾状文、肩部は波状文。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はナデ、ハケメ。	砂粒を含む。 やや軟弱、橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 口辺～底部全周
67	壺	口 10.0 高 18.0	頸部に孔3個あり、推定4個、胴部に形状不明な孔あり。	外 ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ。胴部はヘラナデ。	粗砂粒を含む。 やや軟弱、赤色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩
68	壺	底 7.3		外 ヘラミガキ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	胴～底部全周
69	甕	口 16.8	折り返し口縁	外 口縁～肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、褐色	口縁～胴部ほぼ全周 口縁端部 $\frac{1}{2}$ 周
70	甕	口 12.0 高 21.2	折り返し口縁。	外 口縁～頸部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや軟弱、橙色	ほぼ完形
71	甕	口 15.2 胴 23.4	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、頸部2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 胴部 $\frac{1}{2}$ 周
72	甕	口 14.1 高 23.8	口縁端部は鋭く角ばる。	外 口縁～肩部は波状文、頸部は4連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍褐色	完形
73	甕	口 14.2 高 24.1		外 口縁～肩部は波状文、頸部は櫛描直線文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 口辺～底部全周

6 検出した遺構・遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
74	甕	口 18.1	折り返し口縁。	外 口縁～口辺部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
75	甕 胴	口 13.2 14.9	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部全周 頸～胴部 $\frac{3}{4}$ 周
76	甕	口 15.5	折り返し口縁。	外 口縁～頸部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	口縁～頸部全周
77	甕	頸 11.2		外 頸部は等間隔止め簾状文を2段、肩部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	頸部 $\frac{1}{2}$ 周
78	甕	口 17.5	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周
79	甕	口 6.0 高 8.7	輪積み痕が明瞭。	外 口辺～肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。胴上部には沈線三角区画文を巡らす。以下ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はハケメ。	砂粒を含む。 やや堅緻、灰黄色	口縁部は $\frac{1}{2}$ 周 頸～底部全周
80	甕	口 16.8 高 26.6	口縁端部は角ばる。	外 口縁～肩部は波状文、以下ヘラミガキ、頸部は櫛描直線文。 内 ヘラミガキ。	砂粒小礫を含む。 堅緻、鈍橙色	ほぼ完形
81	甕	口 13.9	口縁端部は角ばり、平坦面を作る。	外 口縁～胴上部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周
82	甕	口 12.0 胴 14.9	折り返し口縁、端部は鋭く角ばる。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は櫛描横直線に縦直線。 内 ヘラミガキ。	砂粒を多量に含む。 堅緻、鈍赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 胴部 $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{3}{4}$ 周
83	甕	口 12.3		外 口縁～頸部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
84	鉢	口 14.3 高 7.7		外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 底部全周
85	甕	胴 18.6 底 7.0		外 胴上部は波状文、以下ハケメ後ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや軟弱、橙色	底部全周 胴部 $\frac{1}{2}$ 周
86	台付甕	口 18.3 胴 20.6	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、頸部は櫛描横直線に縦直線。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 口辺～胴部全周
87	台付甕	口 15.6 胴 15.8	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周 胴部全周
88	甕	口 10.6 胴 11.5		外 口縁～肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 胴部 $\frac{3}{4}$ 周
89	甕	口 10.4		外 口縁～肩部は波状文、頸部は櫛描直線文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや軟弱、明赤褐色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周 頸部全周
90	台付甕	口 14.9 胴 15.4		外 口縁～肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、褐色	口縁～胴部ほぼ全周
91	台付甕(?)	脚 8.9		外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	脚部 $\frac{1}{2}$ 周
92	台付甕(?)	脚 9.1		外 ヘラミガキ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	脚部全周
93	台付甕(?)	脚 6.8		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	脚部全周
94	台付甕(?)	脚 6.5		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、ヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、黄橙色	脚部 $\frac{1}{2}$ 周
95	台付甕	口 6.1 高 8.2		外 口縁部は波状文、付文4個、頸部は2連止め簾状文、胴上部は波状文、付文4個、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周
96	台付甕	口 9.3		外 口縁～肩部は波状文。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	口縁～胴上部全周
97	台付甕	口 5.9 胴 6.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 やや軟弱、灰褐色	口縁部は一部遺存 頸～胴部 $\frac{3}{4}$ 周
98	台付甕(?)	脚 7.8		外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	脚部 $\frac{1}{2}$ 周
99	台付甕(?)	脚 5.9		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はナデ。	砂粒を含む。 堅緻、暗赤褐色	脚部 $\frac{1}{2}$ 周
100	台付甕(?)	脚 5.9		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はナデ。	砂粒を含む。 堅緻、明褐色	脚部 $\frac{3}{4}$ 周
101	台付甕	脚 9.9		外 ヘラミガキ。 内 ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、黄褐色	脚部 $\frac{1}{2}$ 周
102	台付甕(?)	脚 6.9		外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	脚部 $\frac{1}{2}$ 周

## (5) 墓 跡

遺物番号	器 種	法 量	器 形 ・ 成 形	文 様 ・ 整 形	胎 土 ・ 焼 成 ・ 色	遺 存 状 態 ・ 備 考
103	高 坏	口 20.7 高 18.5		外 口縁端部は刻み目文、以下ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はハケメ、指ナデ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、赤色	ほぼ完形 内外面丹彩
104	高 坏	口 18.6		外 口縁端部は刻み目文、以下ヘラミガキ。丹彩。 内 ヘラミガキ。丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部は一部遺存 坏部 $\frac{1}{2}$ 周
105	高 坏	口 21.8 胴 17.4		外 口縁端部は刻み目文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周 坏部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩
106	高 坏	口 23.0 胴 20.2		外 ヘラミガキ。丹彩。 内 坏部はヘラミガキ、丹彩。	細砂粒含む。 堅緻、赤色	口縁部は一部遺存 頸部全周
107	高 坏			外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	坏下部～脚部 内外面丹彩
108	高 坏	口 25.5	口縁端部は角ばる	外 口縁端部は刻み目文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	坏部全周 内外面丹彩
109	高 坏	口 10.4 高 8.6		外 口縁端部は刻み目文、以下ヘラミガキ、丹彩。 内 坏部はヘラミガキ、脚部ヘラナデ、丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	坏部 $\frac{1}{4}$ 周 脚部全周
110	高 坏	口 6.9 高 7.2		外 口縁端部は刻み目文、以下ヘラミガキ、丹彩。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はヘラナデ、丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁 $\frac{1}{2}$ 周 口辺～脚部全周
111	高 坏	口 11.0		外 口縁端部は刻み目文、以下ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	坏部ほぼ全周 内外面丹彩
112	高 坏	口 9.1 高 8.0		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	完形 内外面丹彩
113	高 坏	口 9.1		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	脚部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩
114	高 坏	口 8.8		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周 内外面丹彩
115	高 坏	脚 7.3		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はナデ。	小礫、砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	脚部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩
116	高 坏	脚 7.0		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はハケメ。	粗砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	脚部全周 内外面丹彩
117	高 坏	脚 5.3		外 ヘラミガキ。丹彩。 内 脚部はナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	脚部 $\frac{1}{2}$ 周
118	高 坏	脚 7.7		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	坏部 $\frac{1}{2}$ 周 脚部 $\frac{1}{2}$ 周
119	高 坏	脚 5.2		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	脚部ほぼ完形 内外面丹彩
120	高 坏	脚 5.8		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	脚部完形 内外面丹彩
121	高 坏	脚 5.7		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	脚部全周 内外面丹彩
122	高 坏	脚 5.5		外 ヘラミガキ。丹彩。 内 脚部はナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	脚部全周
123	鉢	口 14.0		外 ハケメ後ヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、以下ハケメ、ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周 底部全周
124	鉢	口 14.6 高 7.1		外 ハケメ後ナデ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 内面黒色物付着
125	鉢	口 8.6 高 4.8		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	完形 内外面丹彩
126	鉢	口 14.9 高 6.0		外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 軟弱、赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 底部全周
127	鉢	口 9.7 高 4.5	底部は高台状にくぼむ。	外 ヘラミガキ。丹彩。 内 ヘラミガキ。丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周 底部 $\frac{1}{4}$ 周
128	鉢	口 9.2 高 4.2		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	完形 内外面丹彩

6号墓出土土器観察表(拓本)

遺物番号	器 種	法 量	器 形 ・ 成 形	文 様 ・ 整 形	胎 土	焼 成	色 調	遺 存
129	壺	口 20	折り返し口縁	外 口縁部は2段の刻み目。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	12%
130	壺	口 22	2段口縁	外 口縁部は2段の刻み目。内 ナデ。	砂粒を含む。	堅緻	鈍赤褐色	13%

6 検出した遺構・遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
131	壺	口 28	折り返し口縁	外 口縁部は刺突、丹彩。内 ヘラミガキ、丹彩。	細砂粒を含む。	堅緻	赤色	12%
132	壺	口 30	折り返し口縁	外 口縁部はヘラ刻み目。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	赤橙色	10%
133	壺	口 24	折り返し口縁	外 口縁部は2段の刻み目。内 ヘラミガキ。	小礫を含む。	堅緻	鈍橙色	9%
134	壺	口 18	折り返し口縁	外 ヘラ刻み目。内 ヘラミガキ、丹彩。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	5%
135	壺	口 16	折り返し口縁	外 口縁部は刻み目。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	橙色	8%
136	壺		2段口縁	外 口縁部は刻み目、丹彩。内 丹彩。	砂粒を含む。	堅緻	赤色	9%
137	壺		多段口縁	外 口縁部は刻み目。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	鈍褐色	6%
138	壺			外 2連止め簾状文、丹彩。内 丹彩。	粗砂粒多い。	堅緻	淡赤色	
139	甕		折り返し口縁	外 口縁部は刻み目、口辺部は波状文。	砂粒を含む。	堅緻	鈍橙色	5%
140	壺	口 30	3段口縁	外 口縁部刻み目。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	赤橙色	16%
141	甕	口 18	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	鈍橙色	24%
142	甕		口縁は角ばる。	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	鈍赤褐色	5%
143	甕	口 17	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	鈍橙色	18%
144	甕	口 13		外 頸部は楕横直線に縦直線。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	9%
145	甕	口 8		外 頸部は3連止め簾状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	9%
146	甕			外 R L縄文。内 ヘラミガキ。	小礫を含む。	堅緻	暗褐色	4%
147	台付甕	口 12	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	褐色	9%
148	台付甕	口 14		外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	明赤褐色	15%
149	台付甕	口 13		外 頸部は3連止め簾状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	褐色	18%

6号墓出土石器観察表 PL.130

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
150	くぼみ石	20.3×19.2×13.5	粗粒安山岩	6180.0	円礫の自然面に円形、すり鉢状のくぼみがある。くぼみは擦りくぼんだものと認められる。
151	土掘り具	13.3×4.6×1.8	緑色片岩	166.2	片面に自然面をのこし、刃部は部分磨製。他面の刃部と両側縁部は丹念に剝離調整する。
152	石 鎌	2.9×1.5×0.4	ケイ質頁岩	1.0	丹念に調整が加えられ、形状は整っている。凸基式で欠損はない。横断面菱形。
153	偏平片刃石 斧	6.0(+ )×6.5×1.7	変輝緑岩	111.7	上半部は欠損している。磨製仕上げ、刃部は片面から研ぎ出されている。刃部に使用による擦痕を認める。

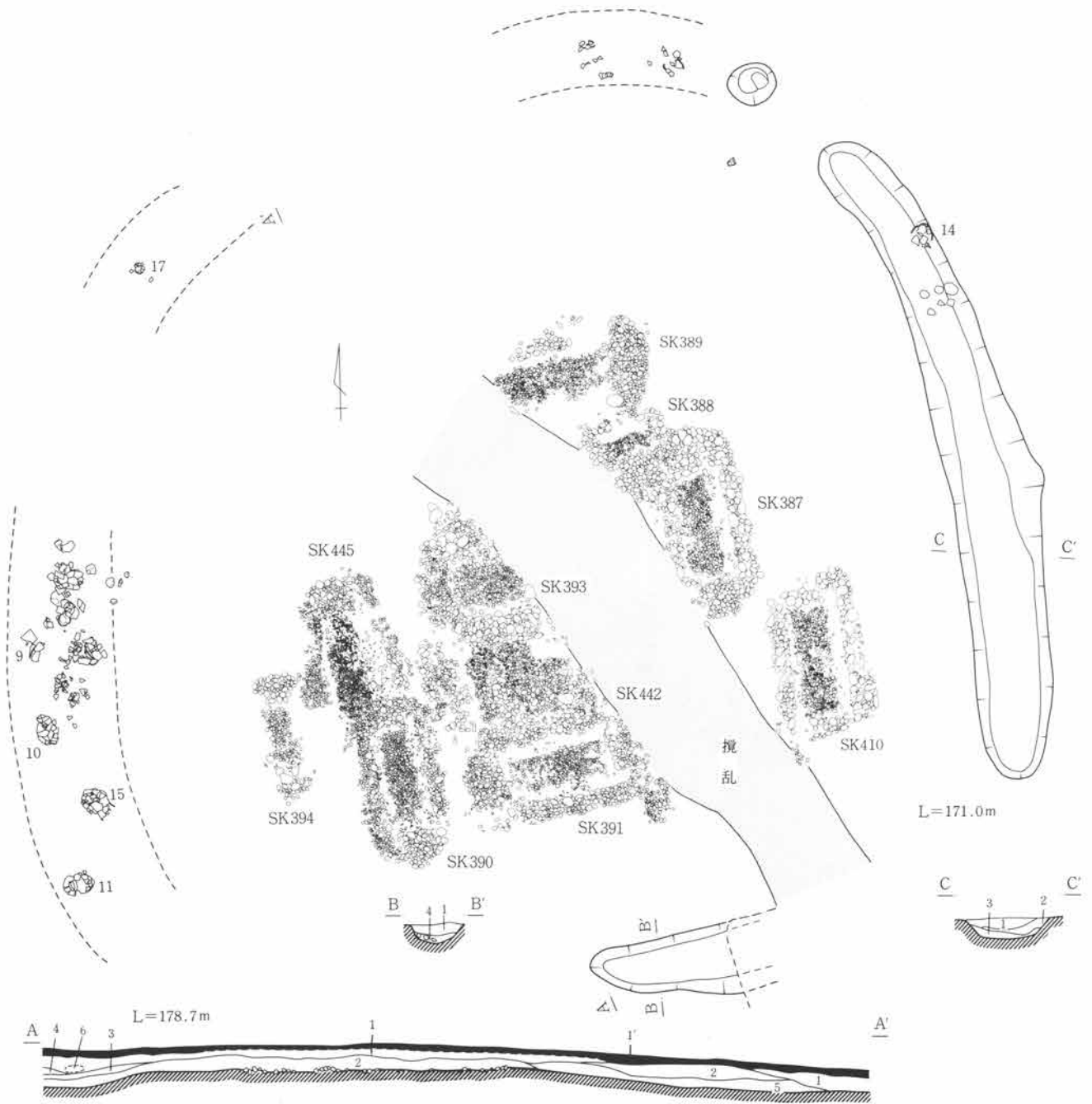
6号墓出土玉類観察表 PL.130・144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
154	管 玉	—	0.38	0.07	赤色ケイ質岩	研磨稜線あり。
155	小 玉	0.3	0.48	0.12	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
156	小 玉	0.27	0.4	0.07	ガラス、スカイブルー	
157	小 玉	0.25	0.42	0.12	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。

7号墓 (第231~238図、PL. 55~58)

7号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(礫床)×深さ	主体部主軸方位	
東—西	13.45	東溝1.0×0.3	S K 387	2.5×1.5	1.4 ×0.65(0.4)×0.2	N—14.2°—W
南—北	12.6	南溝0.9×0.28	S K 388	1.1×0.65	— ×— ×0.1	N—63.8°—E
			S K 389	2.0×1.2	1.35±× (0.5)×0.24	N—79.8°—E
			S K 390	2.2×1.15	1.4 ×0.6 (0.4)×0.14	N—6.2°—W
			S K 391	2.45×1.3	1.4 ×0.8 (0.5)×0.23	N—79.6°—E
			S K 393	— —	— ×0.8 (0.55)×0.39	N—33.5°—W
			S K 394	1.65×0.6	0.85 × (0.3)×0.11	N— 6° —W
			S K 410	2.1×1.3	1.5 ×0.7 (0.45)×0.2	N—11.4°—W
			S K 442	— —	— ×— ×0.33	N—81.8°—E
			S K 445	— ×1.4	— ×0.85(0.45)×0.15	N—10.8°—W



Aセクション

- 1 黒褐色 小円礫を含む。
- 1' 暗淡褐色 浅間C軽石を含む。FA下畑耕土。
- 2 黒褐色
- 3 暗褐色土と黒褐色土の混土层。
- 4 黒褐色 浅間C軽石を多量に含む。
- 5 褐色 V層斑状が混土。3層に対応する。
- 6 浅間C軽石純層

B・Cセクション

- 1 暗褐色 粘質、浅間C軽石を含まず。
- 2 暗褐色 1層にほぼ同じやや黒色味強い。
- 3 黒褐色 粘質。
- 4 暗褐色 粘性を欠く、黄褐色V層土を含む。

0 1:80 4m

第231図 7号墓(1)

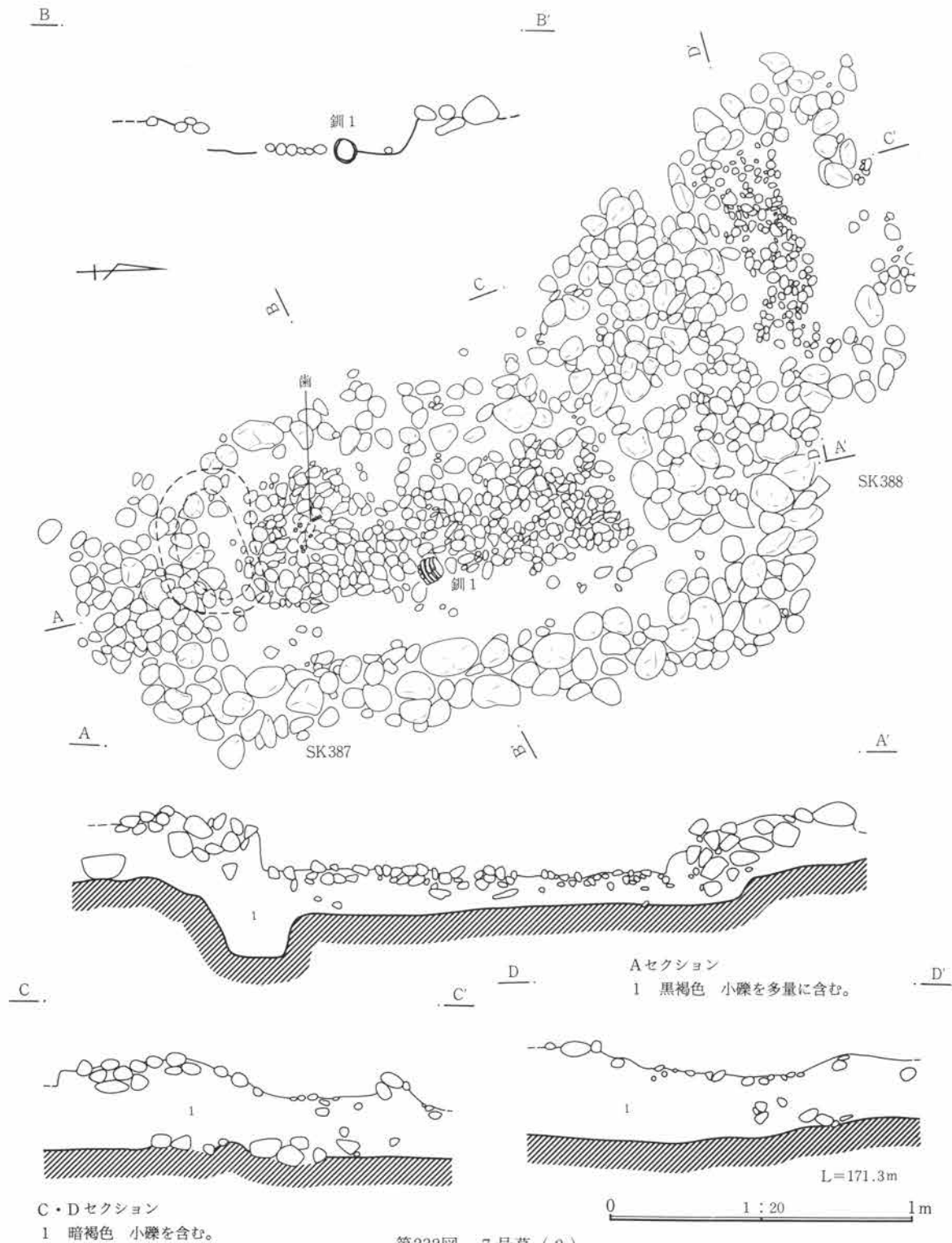
位置 42-G16に位置する。

周溝 やや丸味のある方形状に周溝を巡らすと推定される。周溝内には10基の主体部が設けられている。周



6 検出した遺構・遺物

溝は東側、及び南側で良好に検出される。東側周溝はやや弧状を呈し、南北方向に約8mにわたって延び、両端部は土橋状に切れる。南側周溝は一部243号住居の覆土中に位置するため検出できなかったが、長さ4m前後で両端が土橋状に立ち上がるとみられる。南側周溝の西端部の覆土上部では浅間C軽石純層のレンズ状堆積が見られる。西側では、周溝は検出できなかったが、土器の大形破片、完形土器が多数帯状に連なって出土しており、これらは周溝内の土器と認められる。



第232図 7号墓(2)

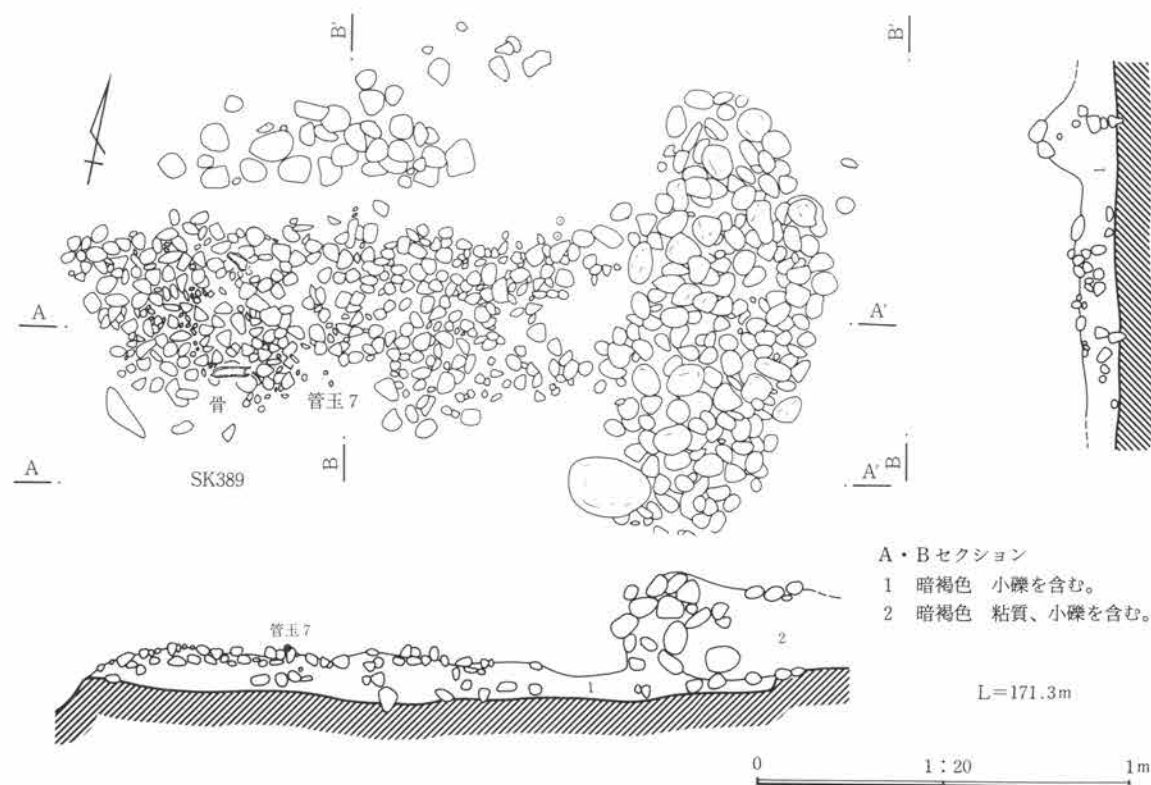


**主体部** 周溝内に礫床形式の主体部が10基相互に埋葬部が重なり合うことなく密集状態で配置されている。このほかに甕棺が1基(S K386)北にやや外れた周溝内に埋置されている。それぞれ主体部は主軸方向を南北か東西のいずれかに一致させ、大半の主体部が埋葬部を囲う礫集積帯を相互に重ねるか、あるいは共用している。主体部が密集する周溝墓の中心部を幅約2mの後世の溝が深く削っている。S K391の東南コーナー部の傍らの礫集積は溝の攪乱により破壊された主体部の痕跡である可能性もある。7号墓中央部の主体部、S K393、S K442、S K391の覆土直上層は二ツ岳火山灰(F A)層直下畑の耕土であるが、この層下端部から上記3基の主体部の礫床面まで20~25cmである。埋葬部の深さあるいは墓の高さはこの数字に近いものになるだろう。

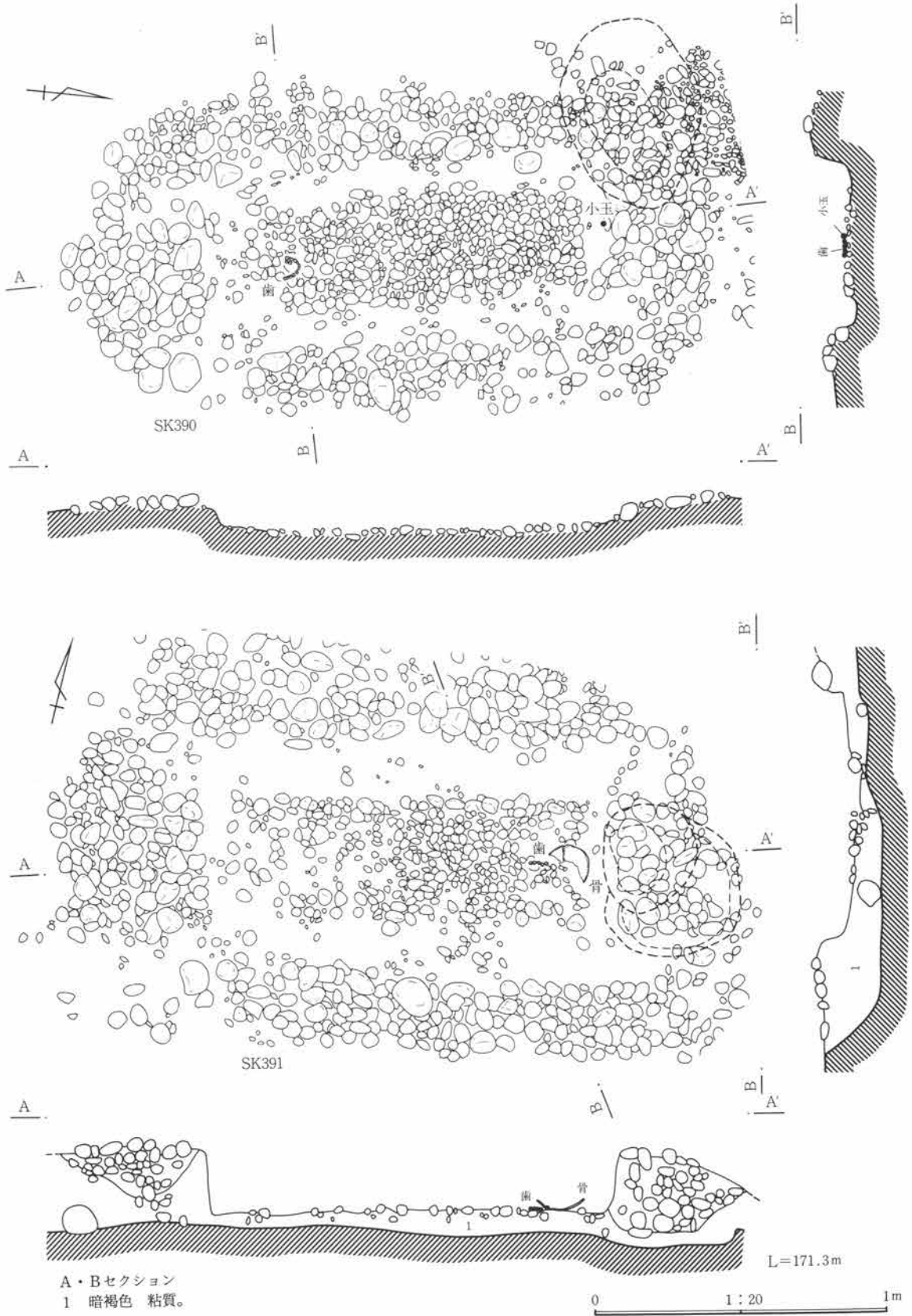
S K387は埋葬部に礫床を設けその周囲に礫集積を長方形に巡らす。端部集積は側部集積に対し上端レベルは数cm高く、また深く埋め込まれている。また側部礫集積及び礫床側縁の間には、比較的幅広く礫が見られない間隙があり、この間隙は直状に端部礫集積の両側部まで延びている。これは板状の材のようなものが置かれていた痕跡ではないかと考えられる。礫集積下、1か所に円形ピットを設けている。埋葬部南端部の礫床面には被葬者の歯が検出されており、頭位は南方向であったと判断される。礫床面上中央部東よりに銅釧が出土している。釧中より骨片が検出されていることから、腕に装着していたものとみられる。西辺部は後世の溝に削られている。

S K388は著しく小規模である。埋葬部に礫床を設け、その周囲に礫集積帯を巡らす。被葬者の遺体は検出できなかった。埋葬部の覆土中よりガラス製小玉が1点出土している。

S K389は埋葬部に礫床を設け、その端部に礫を集積する。北側にわずかに側部礫集積帯がみられる。西端部は後世の溝により失われている。礫床上面西端に被葬者の骨片が検出される。礫床面上から石製管玉が1



第233図 7号墓(3)



第234図 7号墓(4)



第235図 7号墓(5)

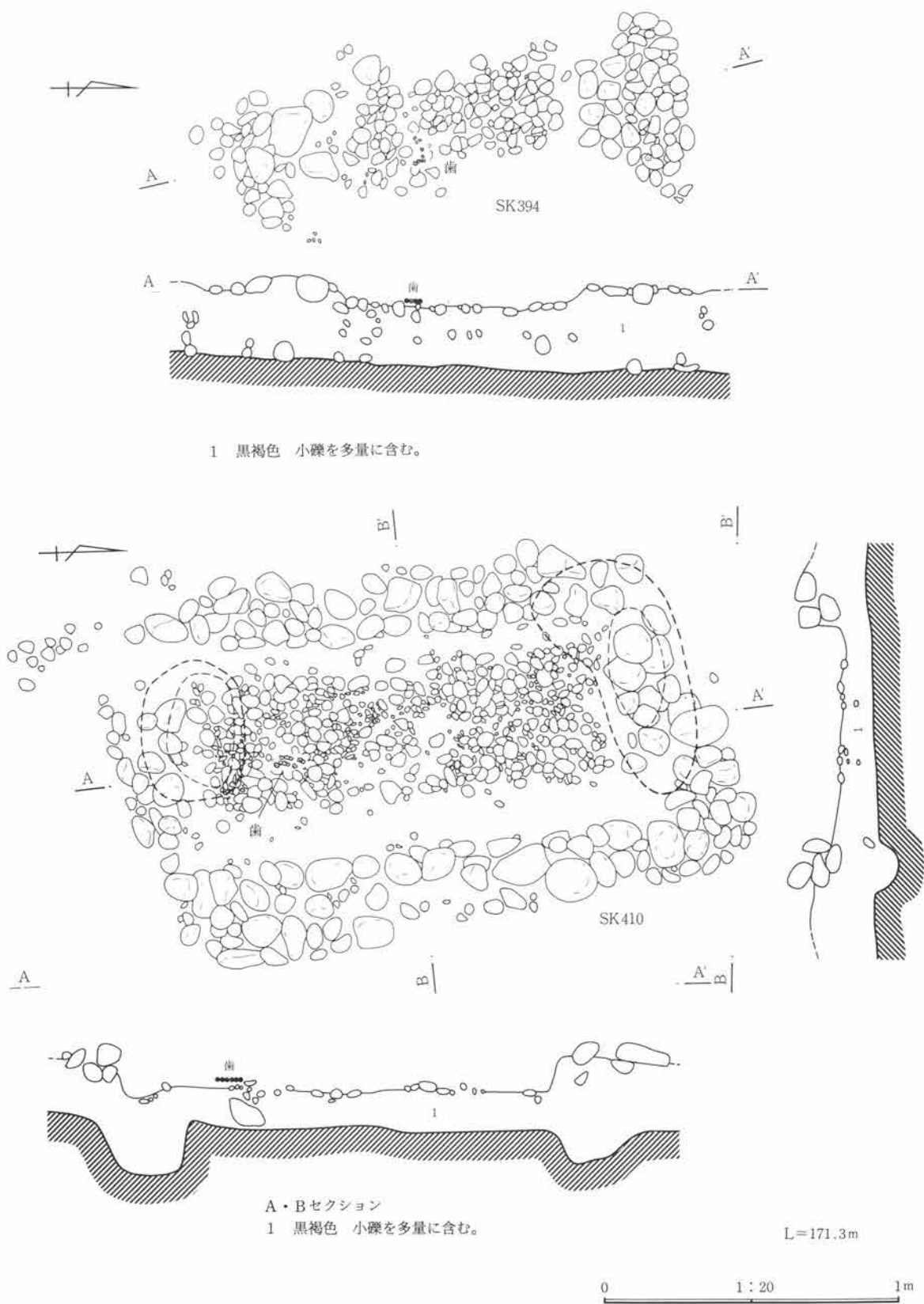
点出土している。

S K 390は埋葬部に磔床を設け、その周囲に磔集積帯を巡らす。磔床面上南端部に被葬者の歯が噛み合わさった状態で検出されている。埋葬部覆土中よりガラス製小玉1点が出土している。北磔集積の部分でS K 445の南端部と重複している。切り合いの状況からS K 390が後出と認めることができる。

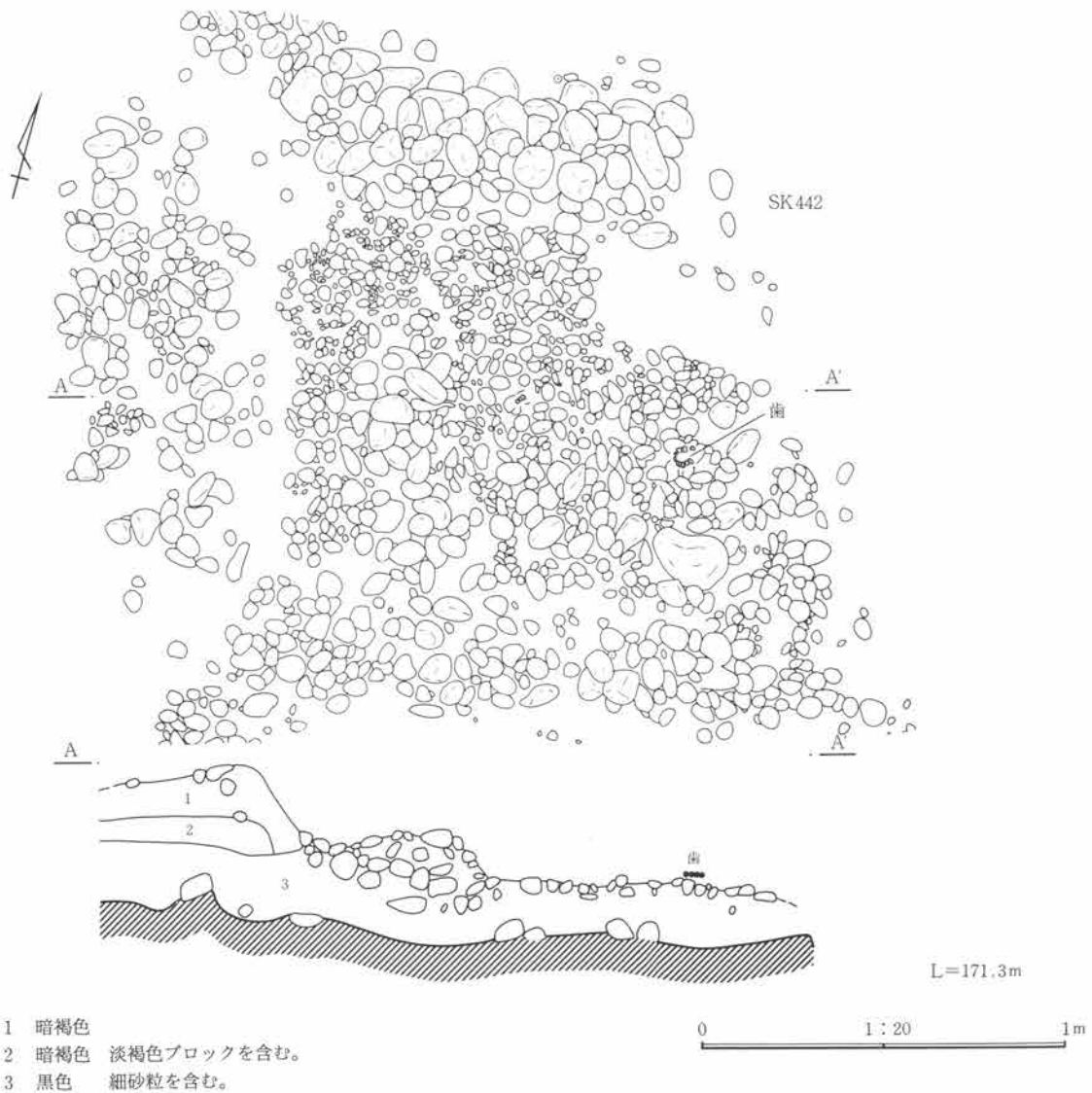
S K 391は埋葬部に磔床を設け、その周囲に磔集積帯を長方形に巡らす。磔床側縁はせり上がった状態で、磔が直線的に並んでいる。側部磔集積帯と磔床側縁の間の磔が見られない間隙は幅広で、この間隙は端部磔集積の両側部まで直線状に延びている。これは板状の材のようなものが置かれていた痕跡ではないかと考えられる。磔床側縁はせり上がった状態で、磔が直線的に並んでいる。磔床上、東端部に被葬者の骨、歯が数点検出される。

S K 393は埋葬部に磔床を設け、その周囲に磔集積帯を巡らす。側部磔集積帯は大形の円磔を高く積み上げ、

6 検出した遺構・遺物



第236図 7号墓(6)



第237図 7号墓(7)

整った壁面を造っている。端部礫集積の状況は側部と比べ著しく礫が小さく、壁面は整えられていない。礫床面から鉄釧の小破片が出土している。

SK394は埋葬部に礫床を設け、その両端部に礫を集積する。一様に小さく造られている。端部礫集積には礫床側縁部から板状の材を両側から当てた痕跡かと思われるような鈎形にくびれた状態が観察される。礫床面上、南端部に被葬者の歯が検出される。

SK410は埋葬部に礫床を設け、その周囲に礫集積を長方形に巡らす。側部礫集積帯と礫床側縁の間には礫を配さない幅広の間隙が見られる。この間隙は礫床側縁から端部礫集積の側部まで直線状に延びている。これは板状の材のようなものが置かれていた痕跡ではないかと考えられる。礫集積下、2か所に円形ピットを設けている。礫床面上南部に被葬者の歯を検出する。銅鏃が1点出土している。

SK442は埋葬部に礫床を設け、その周囲に礫集積を巡らす。周囲の集積の状況は、両隣りの主体部との側部集積帯の共有あるいは重なりのため、形状はやや不明瞭である。また南側部礫集積帯と礫床との境界も区別しにくい。東部を後世の溝に削られ失っている。礫床面上、東寄りに被葬者の歯を検出する。

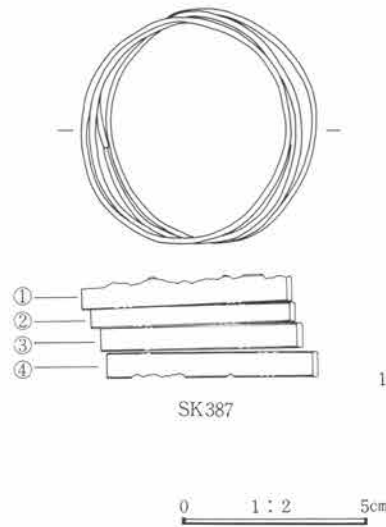


SK445は埋葬部に礫床を設け、その周囲に礫集積を巡らす。南端部はSK390に切られている。側部礫集積帯の輪郭はやや不明瞭である。礫床面上部に被葬者の下肢骨が検出されており、歯は認められなかったが、頭位を南方向に埋葬されたと考えられる。

7号墓出土銅釦観察表 PL.130

遺物番号	名称	個体番号	径	幅	厚さ	形状、成形、整形
1	銅釦	①	6.0~5.1	0.8	0.15	計測値①~④で示される4個の釦が束ねられ1組みになっている。被葬者の右腕に④を手首方向にして釦を通した状態で検出された。4個の釦は接合箇所はなく、環状に鋳造されたものである。各釦の断面は薄板状で、側縁は丸く整形されている。4個のうち、①の側縁がやや腐食しているが、遺存状態は良好である。
		②	6.0~5.6	0.45	0.15	
		③	6.1~5.5	0.6	0.15	
		④	6.2~5.5	0.75	0.15	





第239図 7号墓出土遺物(1)

## 7号墓出土玉類観察表 PL.130・144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
2	小玉	0.3	0.37	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
3	小玉	0.18	0.38	0.12	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
7	管玉	1.7	0.31	0.15	赤色ケイ質岩	研磨稜線なし。
8	管玉	—	0.3	0.1	赤色ケイ質岩	研磨稜線あり。
24	小玉	0.34	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	
25	小玉	0.21	0.38	0.1	ガラス、スカイブルー	孔縁研磨面あり。
26	小玉	0.21	0.38	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
27	小玉	0.23	0.4	0.1	ガラス、スカイブルー	
28	小玉	0.22	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー	

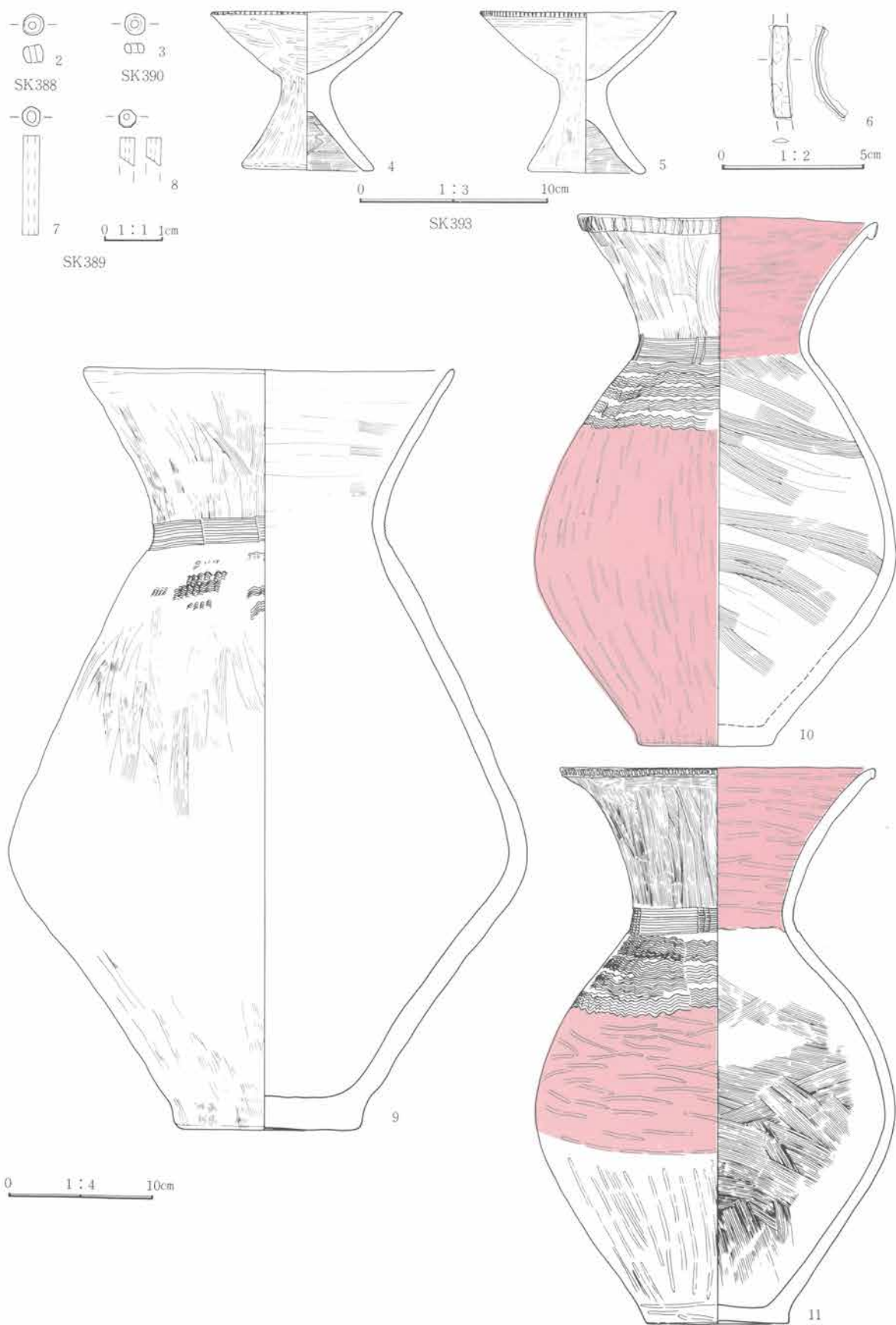
## 7号墓出土鉄釧観察表 PL.130

遺物番号	名称	個体番号	径	幅	厚さ	形状、成形、整形
6	鉄釧	—	—	0.6	0.3	小破片であり、錆びが進行しており詳細な観察は不可能である。湾曲した薄板状である。

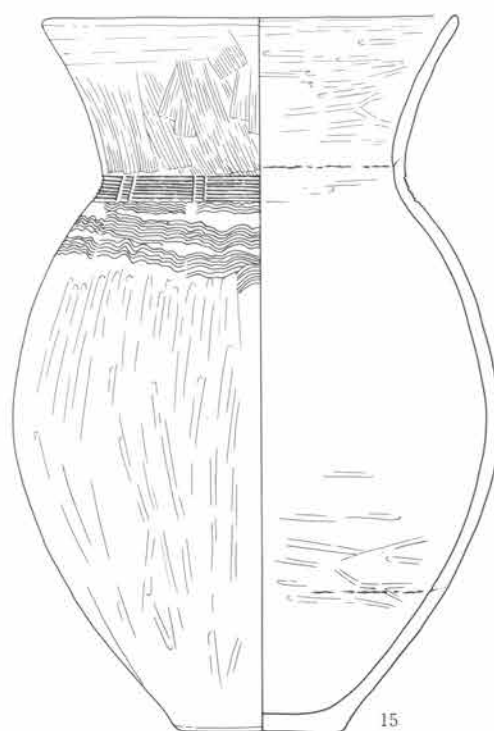
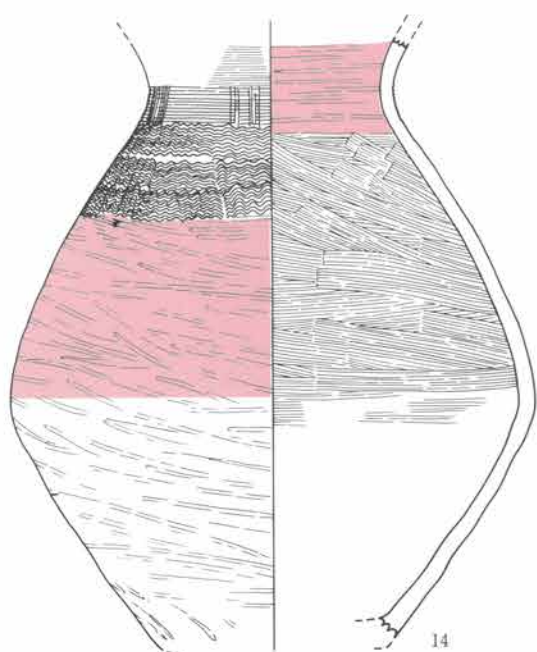
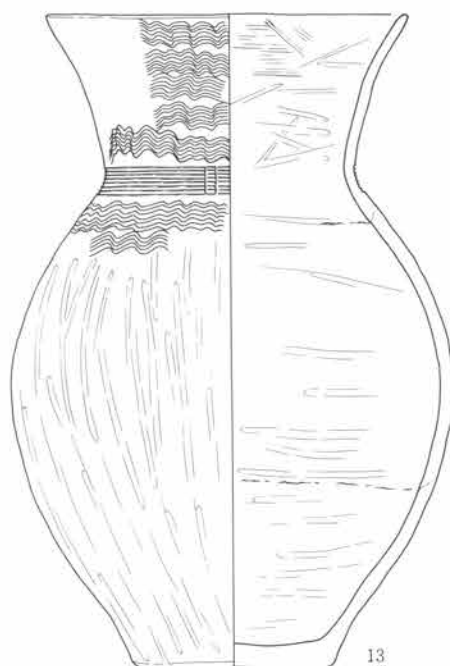
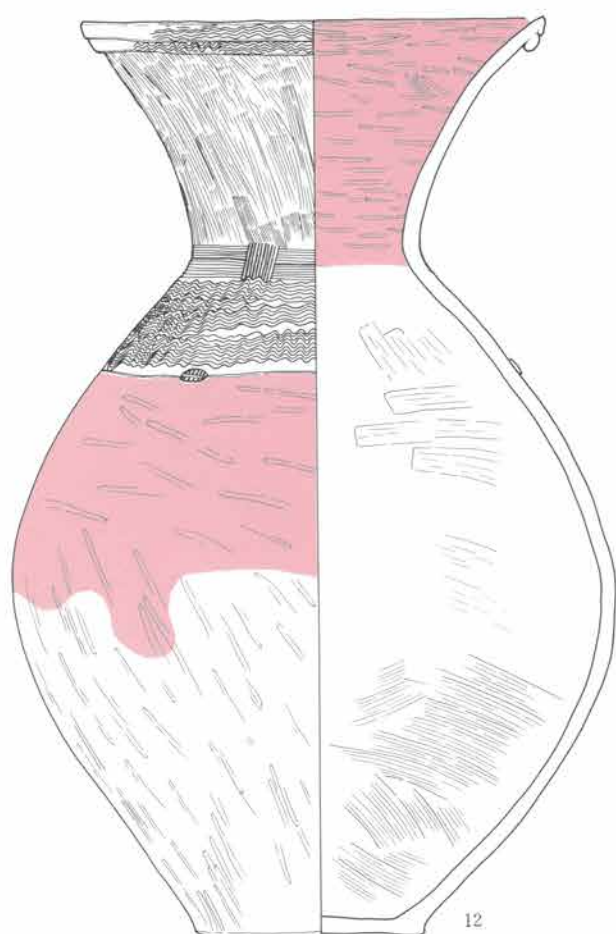
## 7号墓出土土器観察表 PL.130・131

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
4	高坏	口 9.9 高 8.2	口縁端部に面を作る。	外 口縁端部は刻み目文、以下ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ。脚部はハケメ。	砂粒を含む。 やや堅緻、淡黄色	ほぼ完形
5	高坏	口 10.3 高 8.2		外 ヘラミガキ。 内 坏部ヘラミガキ、脚部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、淡黄色	脚部全周
9	壺	口 25.4 高 59.5	胴中位は著しく張出す。	外 口縁部はヨコナデ、頸部は2連止め簾状文。 内 口縁部はハケメ。胴部はナデ。	粗砂粒を含む。 軟弱、浅橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸~底部 $\frac{1}{2}$ 周
10	壺	口 20.7 高 36.7	折り返し口縁。	外 口縁部は刻み目文、頸部は櫛描横直線に縦沈線 2条1単位、肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 口縁~肩部はヘラミガキ、胴部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	ほぼ完形 内外面丹彩
11	壺	口 22.0 高 38.4	口縁は小さく折り返す。	外 口縁部は波状文後に刻み目文、頸部は3連止め簾状文、肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 口縁~頸部はヘラミガキ、胴部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、褐色、赤色	完形 内外面丹彩
12	壺	口 24.8 高 48.5	2段の折り返し口縁。	外 口縁部は波状文、頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文、沈線区画。 内 口縁~肩部はヘラミガキ、胴~底部はハケメ。	細砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	ほぼ完形 内外面丹彩
13	甕	口 19.3 高 34.5		外 口縁~肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや軟弱、鈍橙色	口縁~底部 $\frac{1}{2}$ 周

6 検出した遺構・遺物



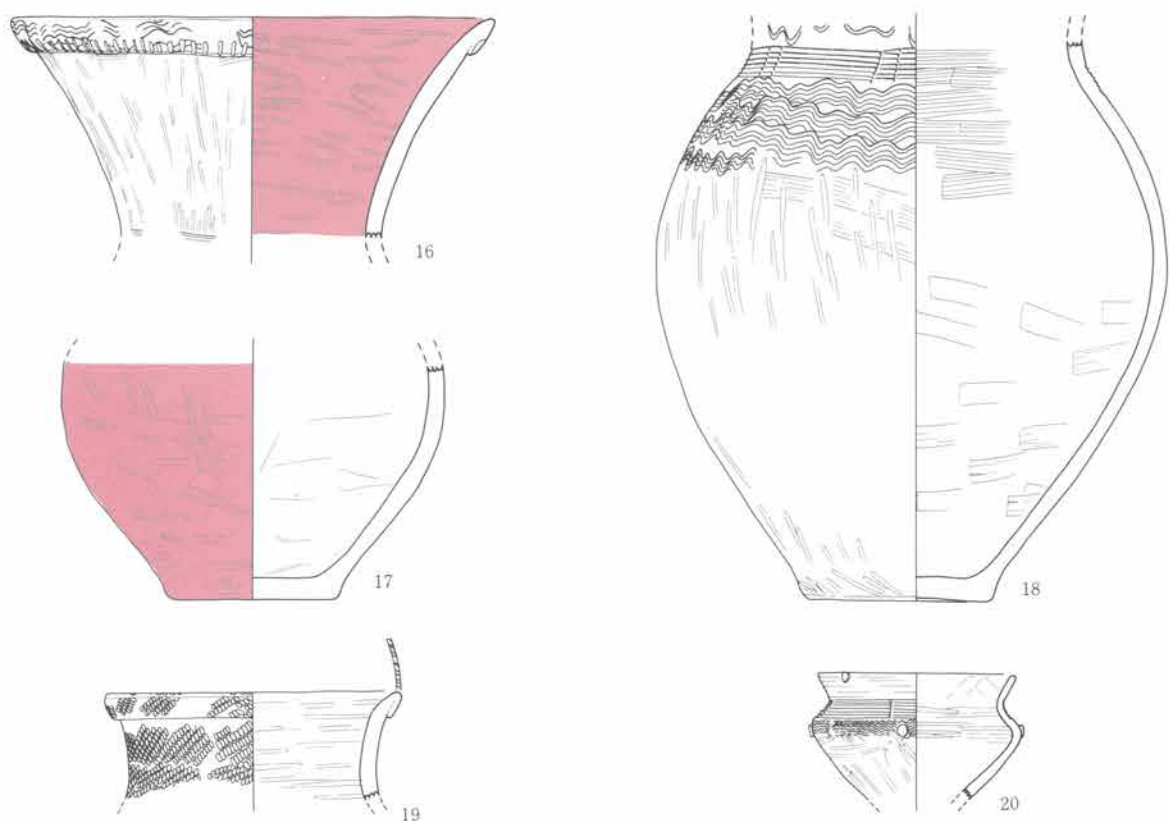
第240図 7号墓出土遺物(2)



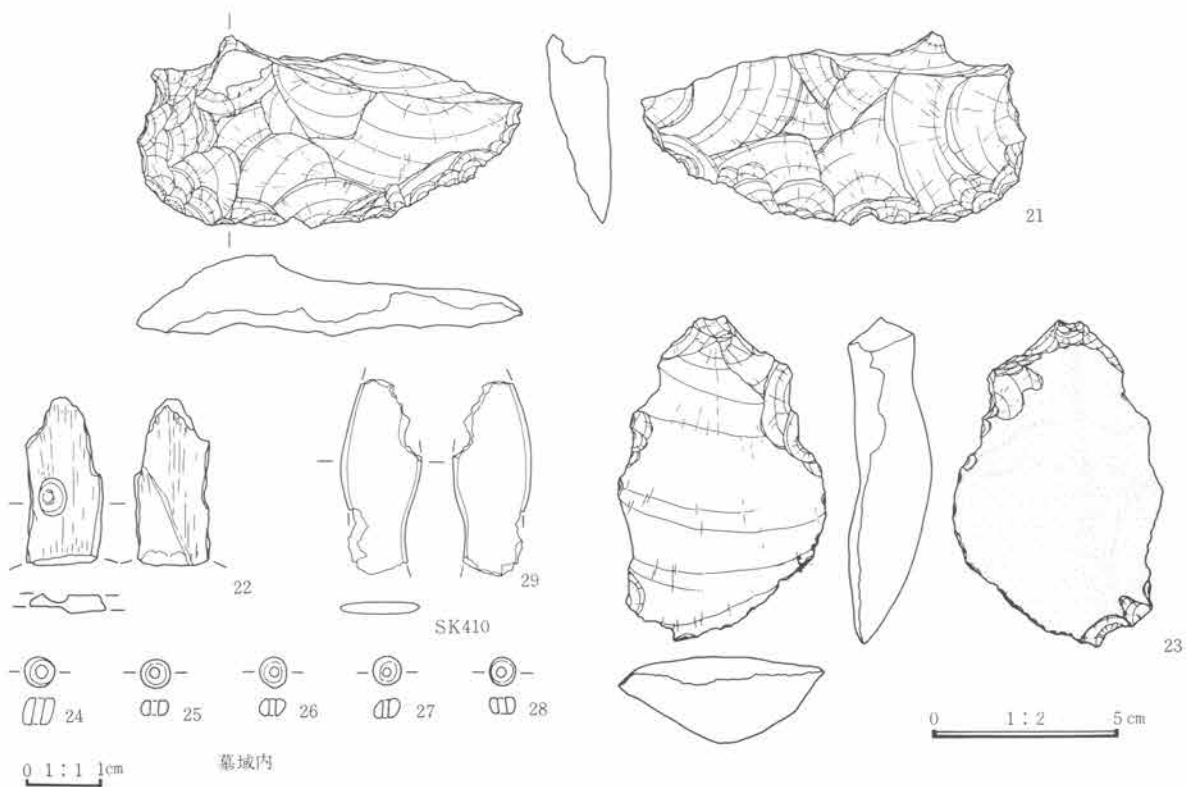
0 1:4 10cm

第241图 7号墓出土遗物(3)

6 検出した遺構・遺物



0 1:3 10cm



第242図 7号墓出土遺物(4)

7号墓出土土器観察表 PL.131・132

遺物番号	器 種	法 量	器 形 ・ 成 形	文 様 ・ 整 形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
14	壺	胴 28.0		外 頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文。 内 頸部はヘラミガキ、胴部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	頸～胴上部 $\frac{1}{4}$ 周 内外面丹彩
15	甕	口 22.0		外 頸部は2連止め簾状文、肩部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周 胴部 $\frac{1}{4}$ 周
16	壺	口 19.2	折り返し口縁。	外 口縁部は波状文後に刻み目文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周 内面丹彩
17	壺	底 6.8		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、赤色	胴下～底部全周 外面丹彩
18	甕	胴 20.5		外 口辺～肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 胴部はハケメ。器面が荒れている。	砂粒を含む。 堅緻、淡橙色	頸～胴部 $\frac{3}{4}$ 周、頸部 は接合面で欠損。
19	甕	口 11.8	折り返し口縁。	外 口縁端部～頸部LR縄文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周
20	台付壺	口 7.8 胴 8.4		外 口縁部に付文推定4個、頸部櫛描直線文、胴部は 波状文、付文推定4個、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周 胴部 $\frac{1}{2}$ 周

7号墓出土石器観察表 PL.132

遺物番号	名 称	計測値(縦×横×厚さ)	石 質	重量(g)	特 徴
21	刃 器	5.1 × 10.3 × 2.2	頁岩	85.6	片側に僅かに自然面を残す縦長剥片。刃部には両面からの剝離調整が施されている。
22	磨製石鏃	2.2(+) $\times$ 1.1(+) $\times$ 0.2	ケイ質準片岩	0.7	基部以外は欠損により不明。平基式、または凹基式。中央部の孔は未貫通である。
23	刃 器	8.6 × 5.6 × 2.3	ケイ質頁岩	99.2	片側自然面の縦長剥片。側縁部の一部に剝離調整を行う。刃部の細かな剝離は使用痕と思われる。

7号墓出土銅鏃観察表 PL.132

遺物番号	器 種	計測値(縦×横×厚さ)	材 質	重量(g)	特 徴
29	銅 鏃	2.5(+) $\times$ 1.1 $\times$ 0.2	銅製	0.7	柳葉状を呈する。尖端基部に欠損がある。身部両側縁は比較的丸味がある。鏃は認められない。

## 8号墓 (第243～245図、PL. 58)

## 8号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(礎床)×深さ	主体部主軸方位
南-北	11.0				
	北溝1.1 $\times$ 0.27	SK 421	2.6 $\times$ 1.5	1.6 $\times$ 0.8 (0.45) $\times$ 0.34	N-83.4°-W
	西溝0.68 $\times$ 0.23	SK 422	2.65 $\times$ 1.3	1.65 $\times$ 0.75(0.5) $\times$ 0.2	N-4.6°-E

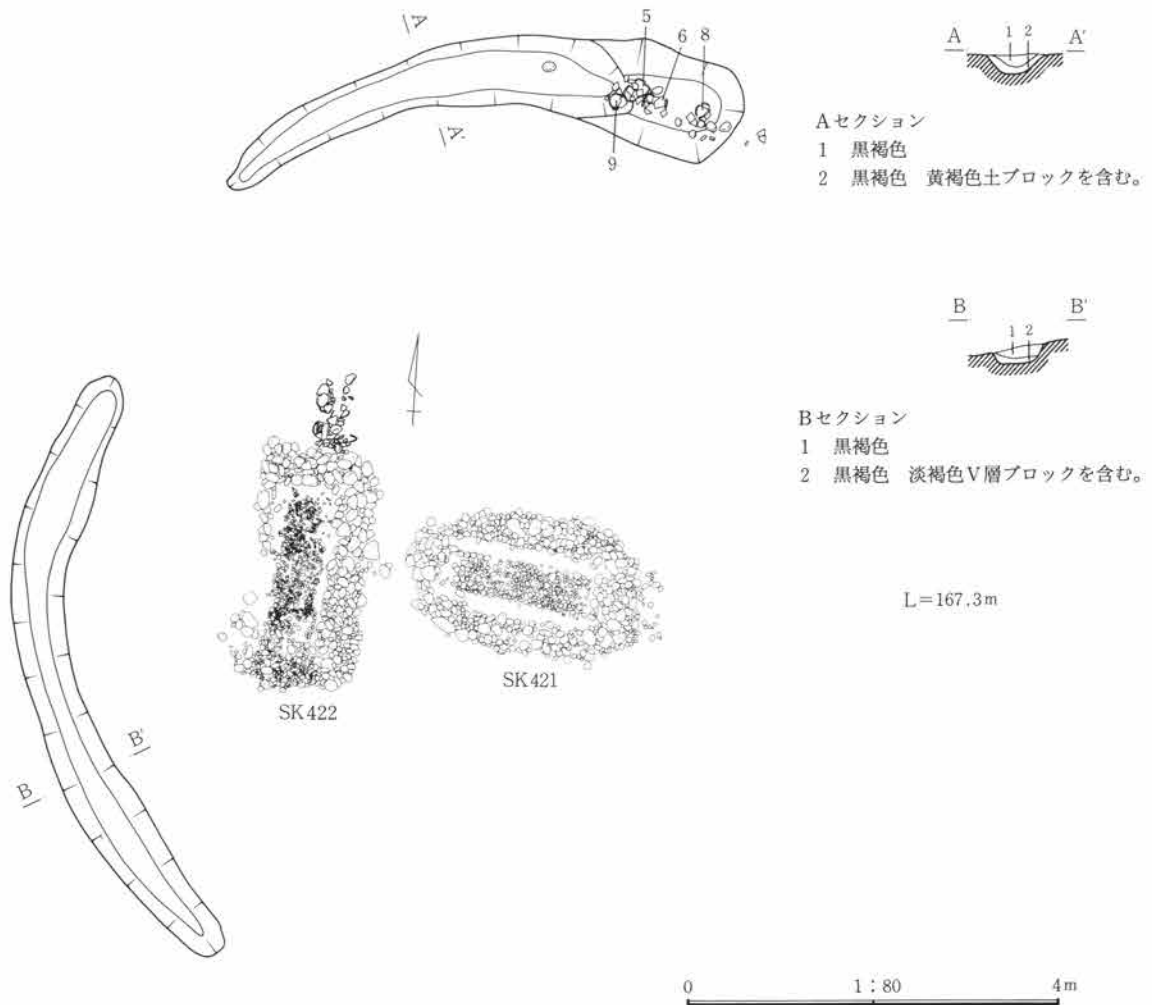
位置 34-H15に位置する。

周溝 2基の主体部の周囲を半円状に溝を巡らす。東半部については、周溝の有無を確認することができなかった。周溝内北部に土器大形破片が数個体分、重なり合って出土している。器種構成はすべて甕である。南端部で231号住居(弥生後期～古墳前期)とわずかに周溝が重複する。重複関係は不明確であるが、出土土器の関係から住居が1小期後出と認められる。

主体部 周溝内に主体部が2基認められる。



6 検出した遺構・遺物



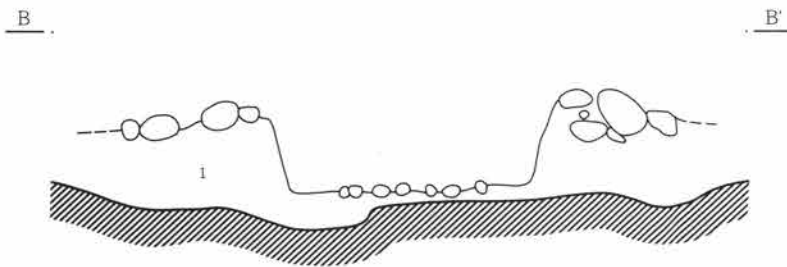
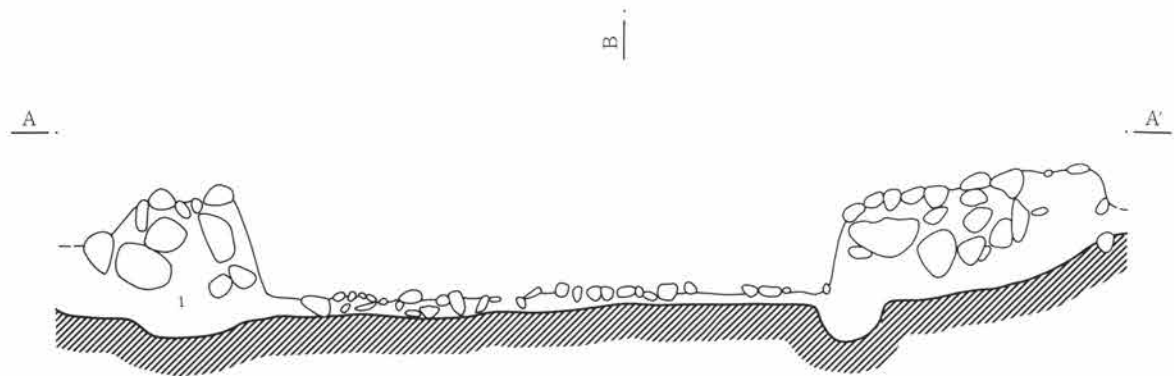
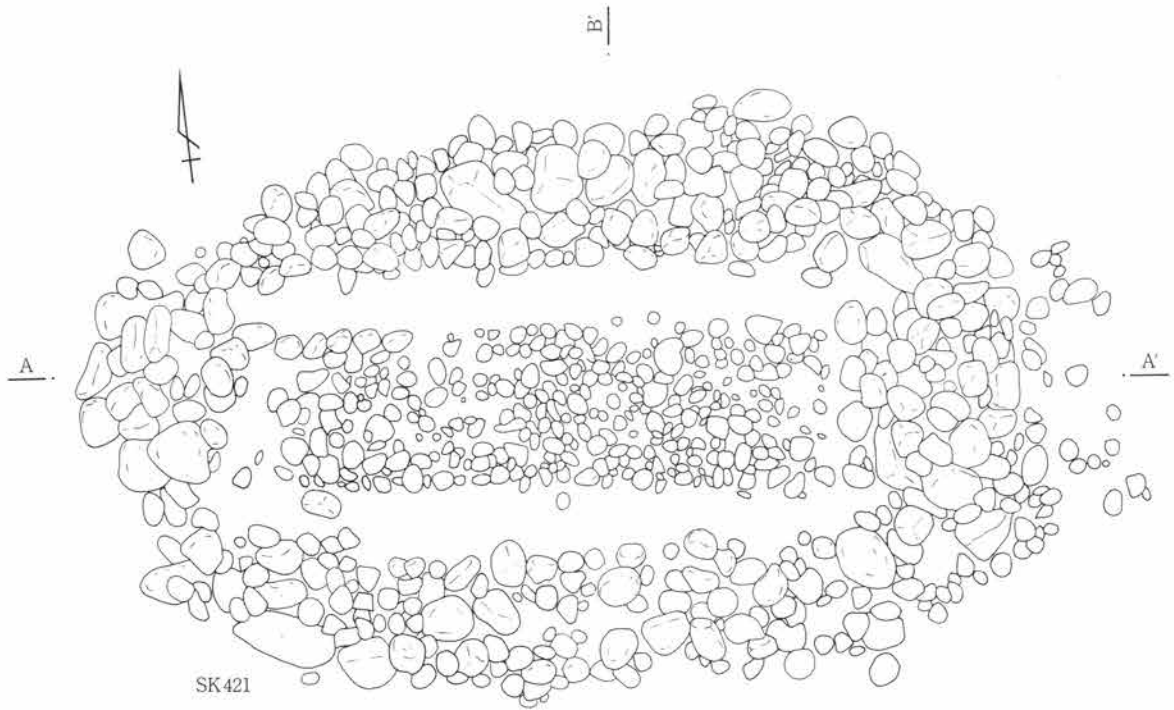
第243図 8号墓(1)

SK421は埋葬部に礫床を設け、その周囲に礫集積帯を巡らす。側部礫集積帯と礫床側縁の間には礫を配さない幅広の間隙が見られる。この間隙は礫床側縁から端部礫集積の側部まで直線状に延びている。これは板状の材のようなものが置かれていた痕跡ではないかと考えられる。埋葬部覆土中よりガラス製小玉を検出する。

SK422は埋葬部に礫床を設け、その周囲に礫集積帯を長方形に巡らす。

被葬者の遺体や遺物は検出できなかった。西縁部にやや欠損した様子が認められる。本主体部の北傍らに大形土器破片と小礫の集積が見られる。





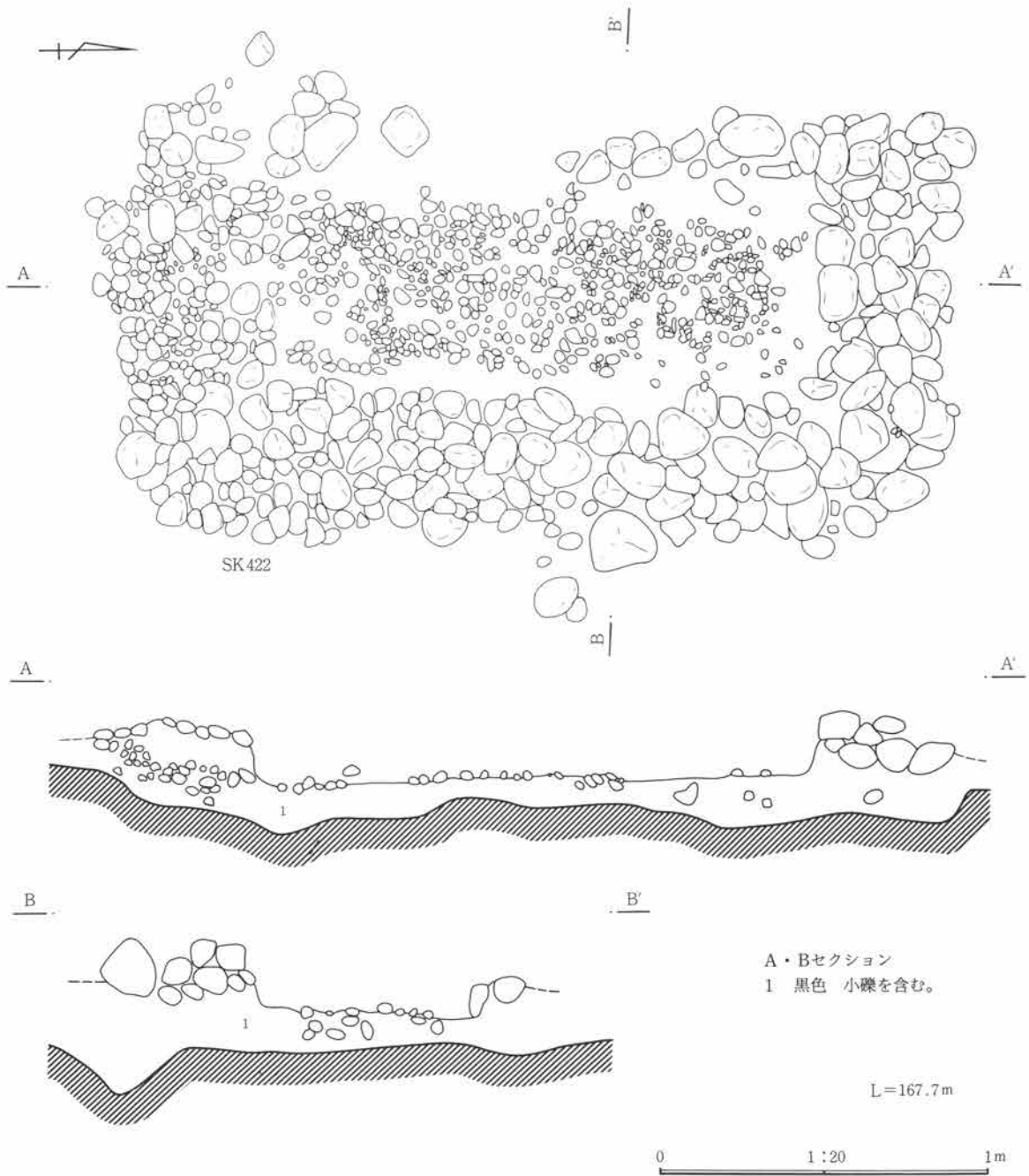
A・Bセクション  
1 黒色

L=167.7m

0 1:20 1m

第244図 8号墓(2)

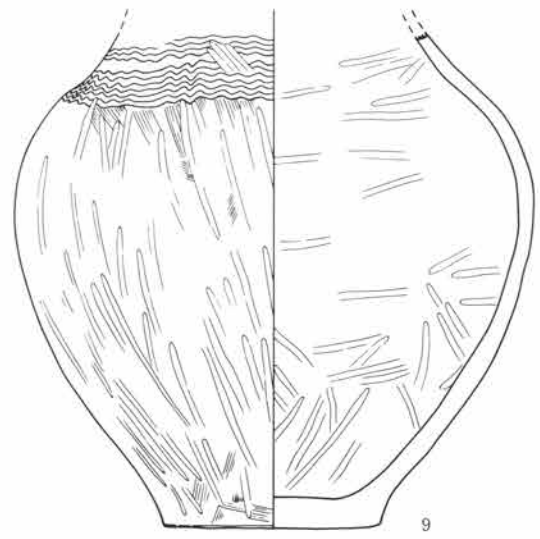
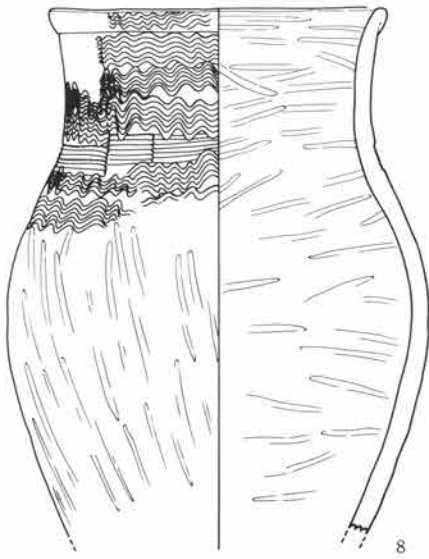
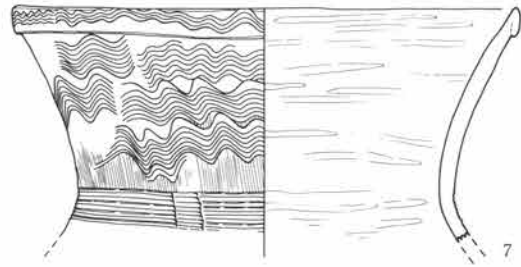
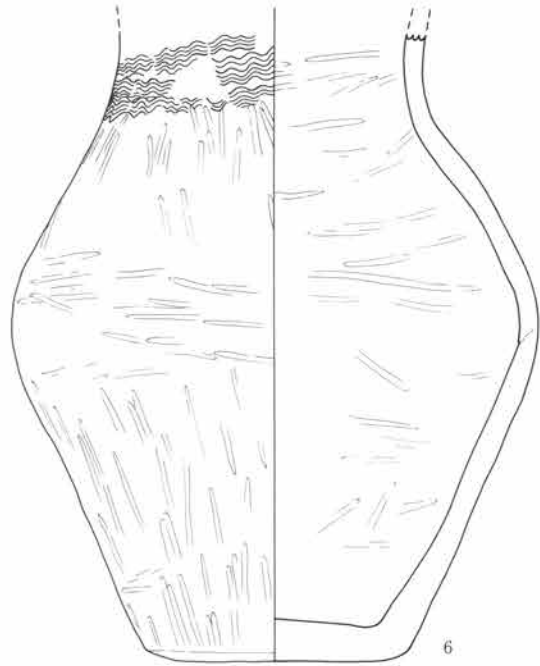
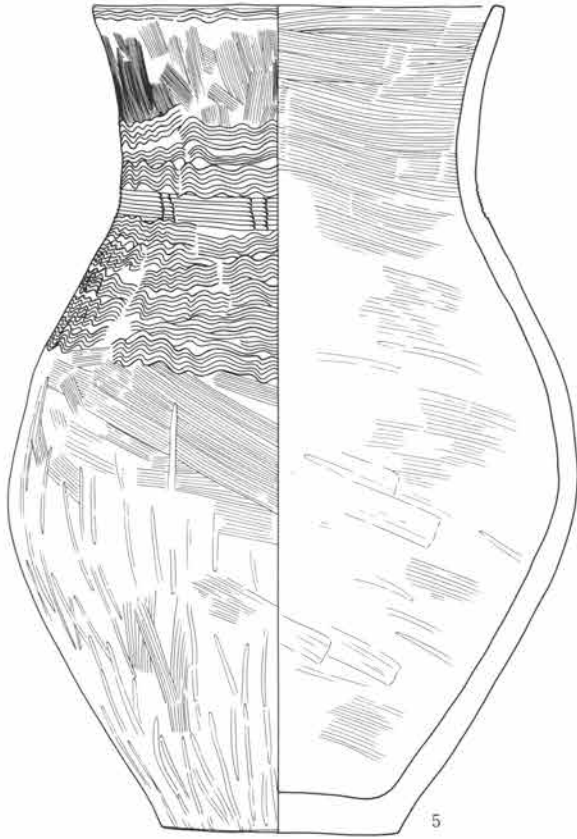
6 検出した遺構・遺物



第245図 8号墓(3)

8号墓出土玉類観察表 PL.144

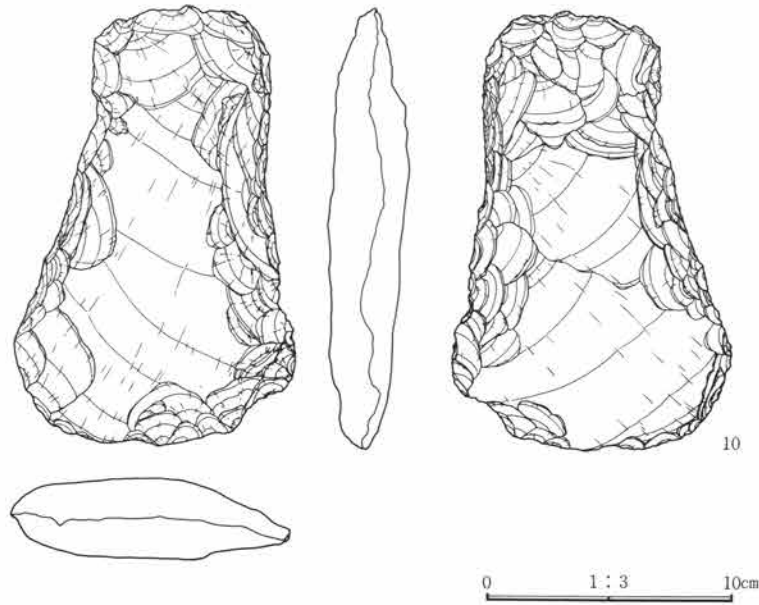
遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考	遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
1	小玉	0.22	0.39	0.14	ガラス、スカイブルー		3	小玉	0.16	0.35	0.12	ガラス、スカイブルー	
2	小玉	0.12	0.32	0.1	ガラス、スカイブルー	孔縁研磨面あり。	4	小玉	0.18	0.35	0.12	ガラス、スカイブルー	



0 1:3 10cm

第246图 8号墓出土遺物(1)

6 検出した遺構・遺物



第247図 8号墓出土遺物(2)

8号墓出土土器観察表 PL.132

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
5	甕	口 16.4 高 32.2	口縁端部は角ばる	外 口縁部は波状文、頸～胴上部は波状文、頸部は2連止め簾状文、以下ハケメ後ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はハケメ、胴部はハケメ後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、褐色	ほぼ完形
6	壺	胴 21.0		外 頸部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 軟弱、橙色	頸～胴部ほぼ完形
7	甕	口 20.3	折り返し口縁。	外 口縁～口辺部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、褐色	口縁～頸部 $\frac{3}{4}$ 周
8	甕	口 13.6 胴 16.8	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁部は一部遺存 頸～胴上部 $\frac{3}{4}$ 周
9	甕	胴 20.8		外 肩部は波状文、以下ハケメ後ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	頸～胴部 $\frac{1}{2}$ 周

8号墓出土石器観察表 PL.132

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
10	土掘り具	17.5×11.3×3.2	かんらん岩	712.0	大形の縦長剥片を素材としている。全周、両面から丹念に剝離調整を行っている。

9号墓 (第248～250図、PL. 59)

9号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(礎床)×深さ	主体部主軸方位
	北溝0.85×0.4 東溝0.65×0.2	SK 429	—×1.1	—×0.9(0.45)×0.35	N-58.8°-W
		SK 430	—	—×0.26	N-32°-E
		SK 432	—×1.2	—×0.75(0.4)×0.2	N-42.8°-E

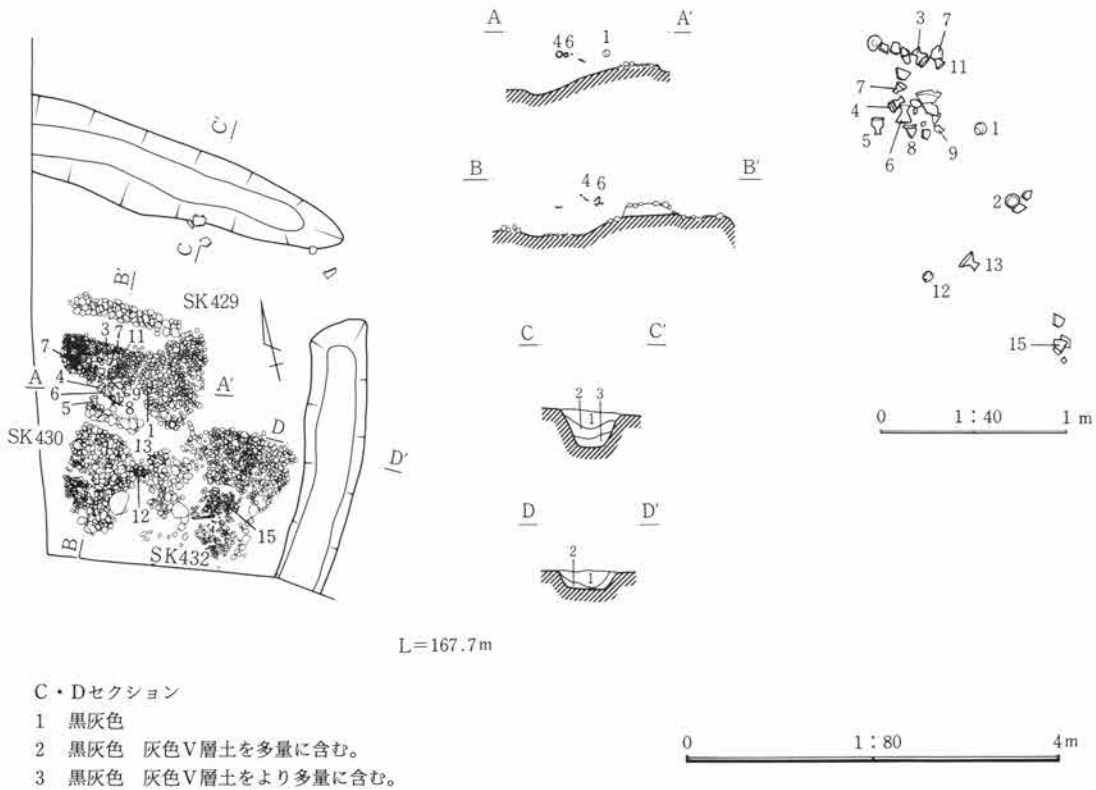
位置 57-H17に位置する。

周溝 3基の主体部の北側、及び東側にやや弧状をなす周溝が巡る。北東コーナー部は溝が土橋状に切れる。西、南部は調査区域外であるため不明であるが周溝は全体的にはやや胴の張った方形になると推定できる。溝覆土中からの出土遺物は少ない。

主体部 SK429は埋葬部に礫床を設け、その端部に礫を集積する。両側縁部には礫集積帯を配する。礫床両側縁は直線的で中央部に比べややせり上がっている。端部礫集積の両側部には礫床側縁部から板状の材を当てた痕跡かと思われるような鈎形にくびれた状態が観察される。礫集積下に不整形ピットが見られる。礫床面上5cm前後、中央部に被葬者の歯を検出する。主体部覆土上部に完形、及び大形土器破片を多数検出する。小型高坏、小型台付甕がその多くを占めている。

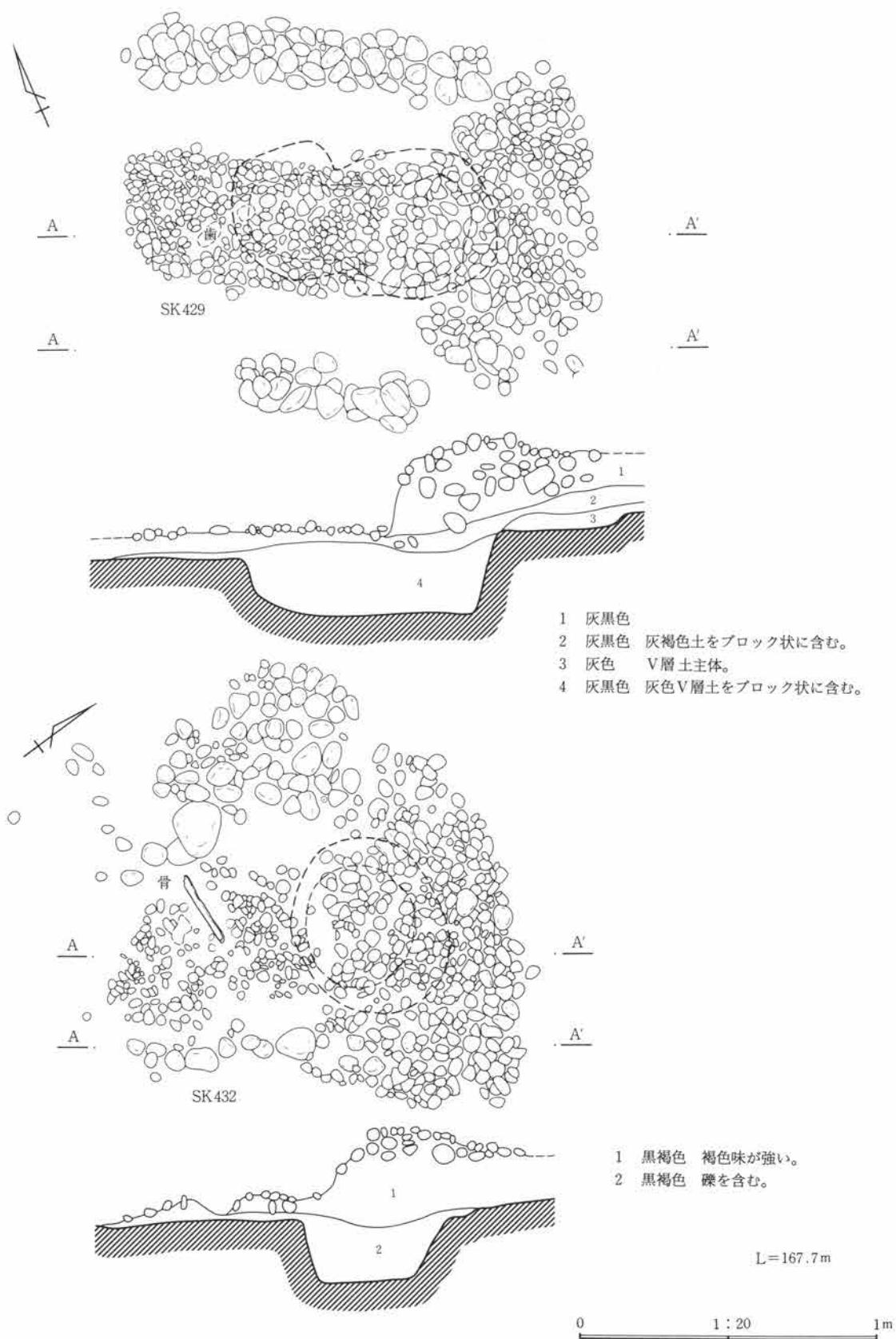
SK430は埋葬部に礫床を設け、その周囲に礫集積を巡らすと推定される。西部、南部の大半が調査区域外であるため形状を確認することができなかった。主軸方向は、遺存部分が少ないなどにより明確にできない。礫集積下にピットを検出する。主体部覆土中よりガラス製小玉が1点、覆土上部より壺の大形破片などが出土している。

SK432は埋葬部に礫床を設け、その両端部に礫を集積する。埋葬部の両側にわずかに礫の配列が認められる。端部礫集積の両側には埋葬部側から板状の材を当てたかと思われるような鈎形のくびれが観察される。礫集積下にピットを検出する。礫床面上に被葬者の歯、及び肢骨が検出される。覆土中よりガラス製小玉が出土する。



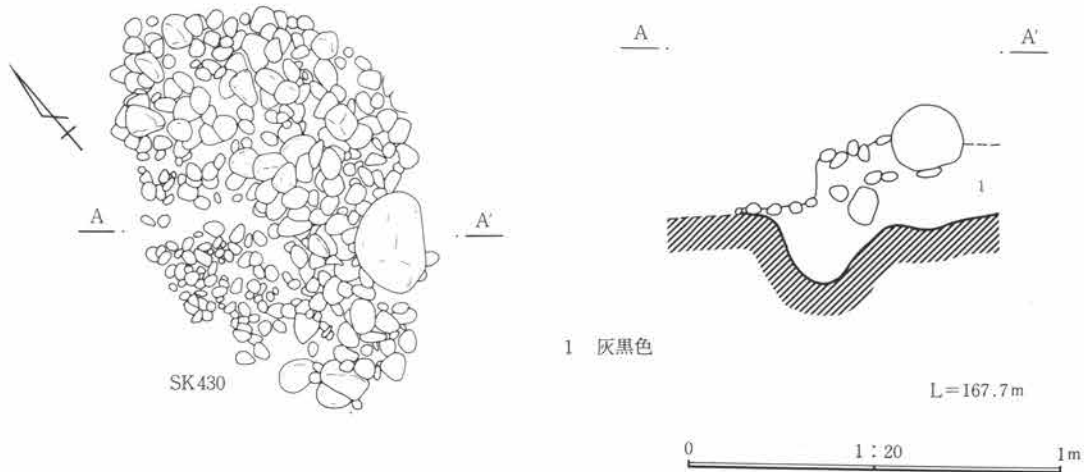
第248図 9号墓(1)

6 検出した遺構・遺物



第249図 9号墓(2)



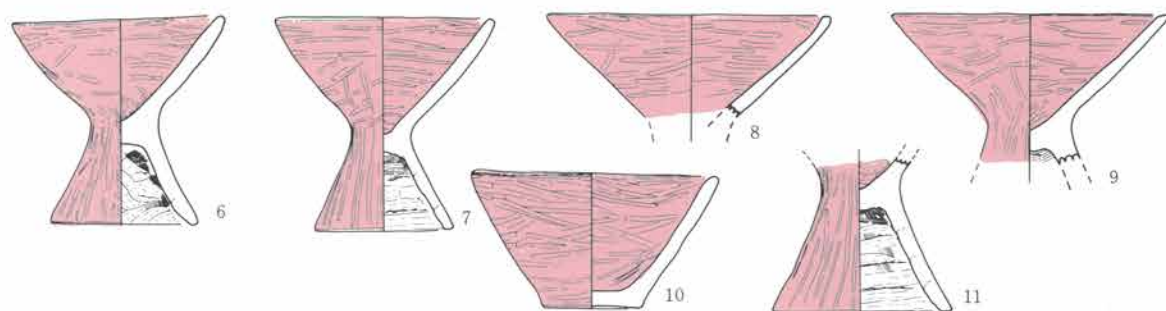


第250図 9号墓(3)

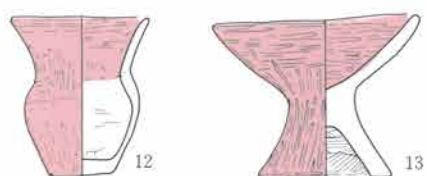
9号墓出土土器観察表 PL.133

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 7.0 高 7.4		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	完形 内外面丹彩
2	壺	胴 6.8		外 ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口辺～底部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩
3	台付甕	口 7.6 高 9.6		外 頸部、胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 口縁～底部はヘラミガキ、脚部はハケメ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	ほぼ完形
4	台付甕	口 6.5 高 9.2		外 口縁～胴上部は波状文、頸部は櫛描直線文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、浅黄橙色	完形
5	高 坏	口 7.7 高 9.0		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はハケメ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	完形 内外面丹彩
6	高 坏	口 8.3 高 8.1		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はハケメ、ナデ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	完形 内外面丹彩
7	高 坏	口 8.5 高 8.5		外 ヘラミガキ。丹彩。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はハケメ。丹彩。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	坏部 $\frac{1}{2}$ 周 脚部全周
8	高 坏	口 11.2		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	坏部全周 内外面丹彩
9	高 坏	口 11.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	坏部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩
10	鉢	口 9.7 高 5.4		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	完形 内外面丹彩
11	高 坏	脚 7.1		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	脚部全周 内外面丹彩
12	壺	口 5.5 高 6.4	頸部内側に接合痕 が認められる。	外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	完形 内外面丹彩
13	高 坏	口 8.1 高 6.2		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	完形 内外面丹彩
17	壺	口 26.0	2段の折り返し口 縁。	外 口縁部は刺突文、頸部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
18	壺	底 9.8		外 ヘラナデ後ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	小礫を含む。 堅緻、鈍橙色	胴下部～底部全 周
19	甕	頸 13.8		外 口辺～胴上部に波状文、頸部は3連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、褐色	頸～胴上部全周
21	台付甕(?)	脚 8.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	脚部 $\frac{1}{2}$ 周

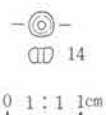
6 検出した遺構・遺物



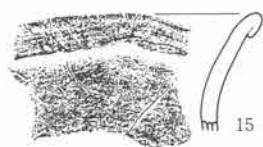
SK 429



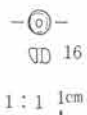
SK 430



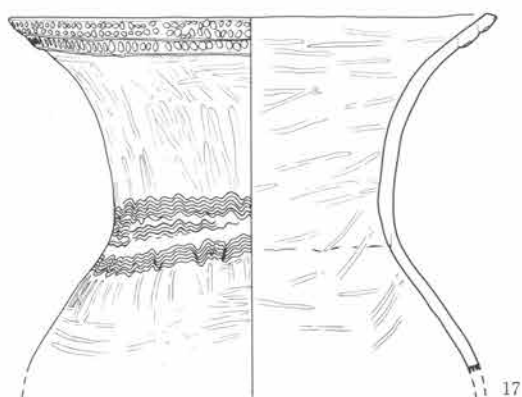
14



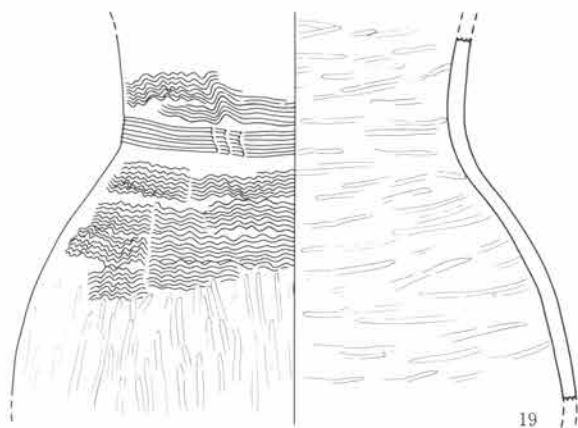
SK 432



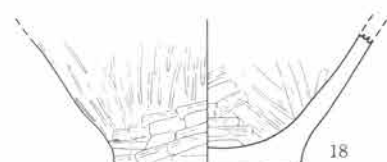
16



17



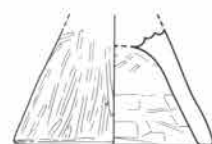
19



18



20



21

第251図 9号墓出土遺物

9号墓出土玉類観察表 PL.144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
14	小玉	0.2	0.32	0.1	ガラス、スカイブルー	
16	小玉	0.21	0.3	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。

9号墓出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
15	壺		折り返し口縁	外 ヘラミガキ、丹彩。内 ヘラミガキ、丹彩。	砂粒を含む。	堅緻	赤色	16%
20	甕	口 18	折り返し口縁	外 頸部は櫛描横直線に縦直線。	細砂粒を含む。	堅緻	鈍橙色	24%

## 10号墓 (第252~254図、PL.60)

10号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(磔床)×深さ	主体部主軸方位	
北東-南西	7.1	東溝0.7×0.35	S K 426	2.3×0.8	1.4 × — ×0.3	N-71.2°-W
西北-南東	6.9	西溝0.7×0.3	S K 427	2.2×0.8	1.1 ± × — ×0.45	N-64.6°-W
		北溝0.55×0.13	S K 428	2.35×0.9	1.45 × — ×0.35	N-60.8°-W
		南溝1.55×0.3				

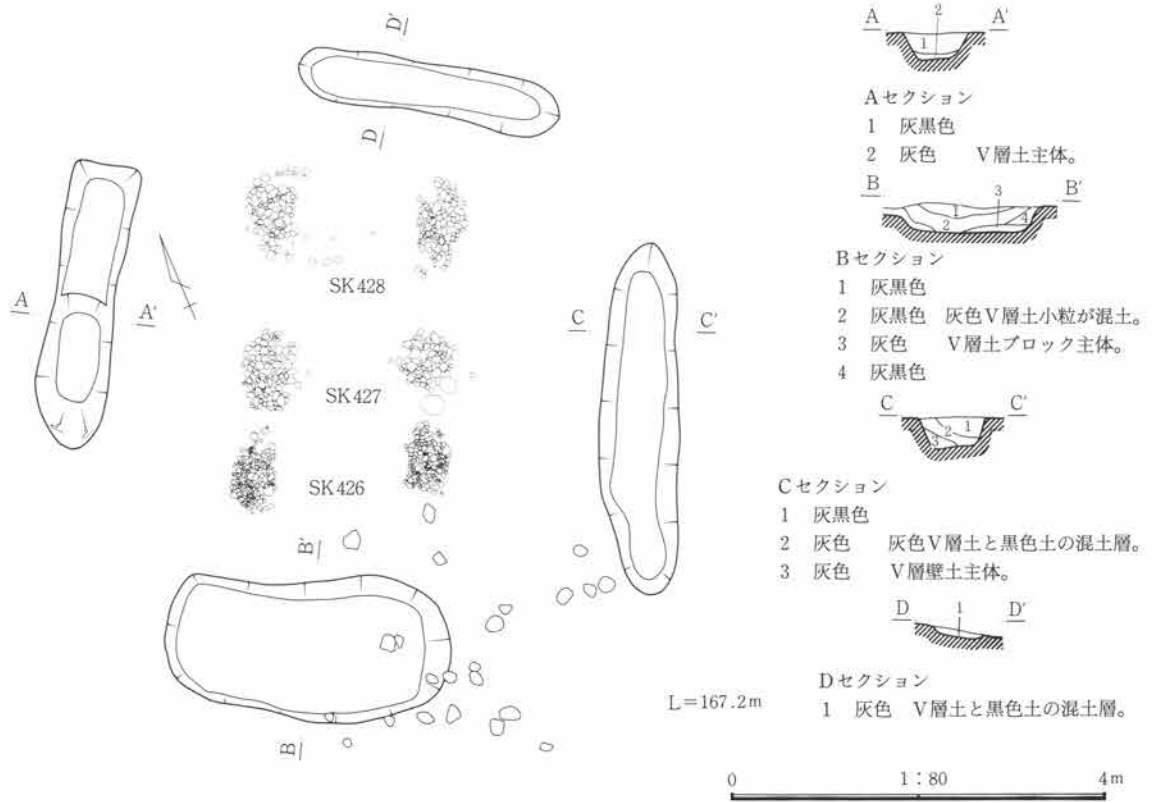
位置 52-H16に位置する。

周溝 3基の主体部の周囲、四辺に直状の溝を巡らす。四隅は土橋状に溝が切れる。溝内から遺物はほとんど出土しない。

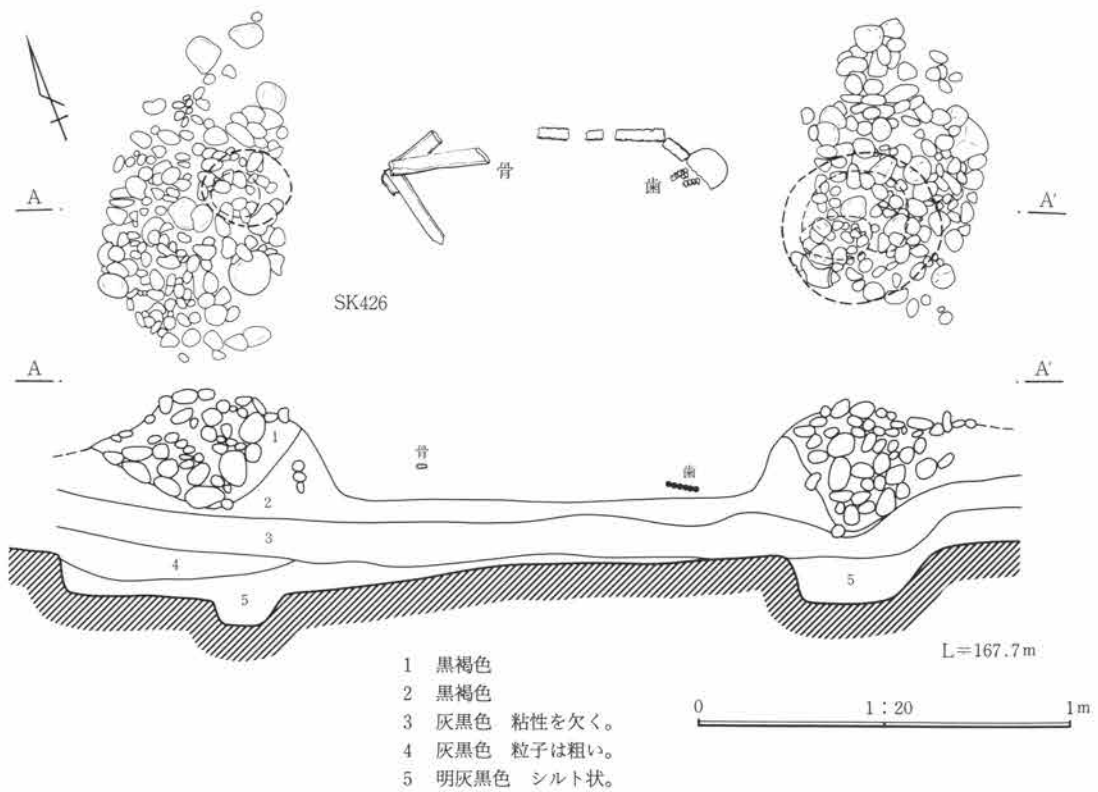
主体部 S K 426は埋葬部の両端部に磔を集積する。磔床は伴わない。端部磔集積の両側には埋葬部側から板状の材を当てた痕跡かと思われるような鈎形にくびれた状態が観察される。床面は不明確である。磔集積下、2か所に円形ピットを設けている。埋葬部には被葬者の遺体が比較的良好な遺存状態で検出された。東頭位左側臥屈葬である。埋葬部覆土中よりガラス製小玉が1点検出された。

S K 427は埋葬部の両端部に磔を集積する。磔床は伴わない。端部磔集積の両側には埋葬部側から板状の材を当てた痕跡かと思われるような鈎形にくびれた状態が観察される。床面は不明確である。磔集積下、2か所に円形ピットを設けている。埋葬部覆土中よりガラス製小玉3点、覆土上部より小型台付甕が数点出土する。

S K 428は埋葬部の両端部に磔を集積する。磔床は伴わない。端部磔集積の両側には埋葬部側から板状の材を当てた痕跡かと思われるような鈎形にくびれた状態が観察される。床面は不明確である。磔集積下、2か所に円形ピットを設けている。埋葬部には被葬者の遺体が東頭位で下肢骨をやや屈曲した状態で検出される。ガラス製小玉が1点埋葬部覆土中より検出される。

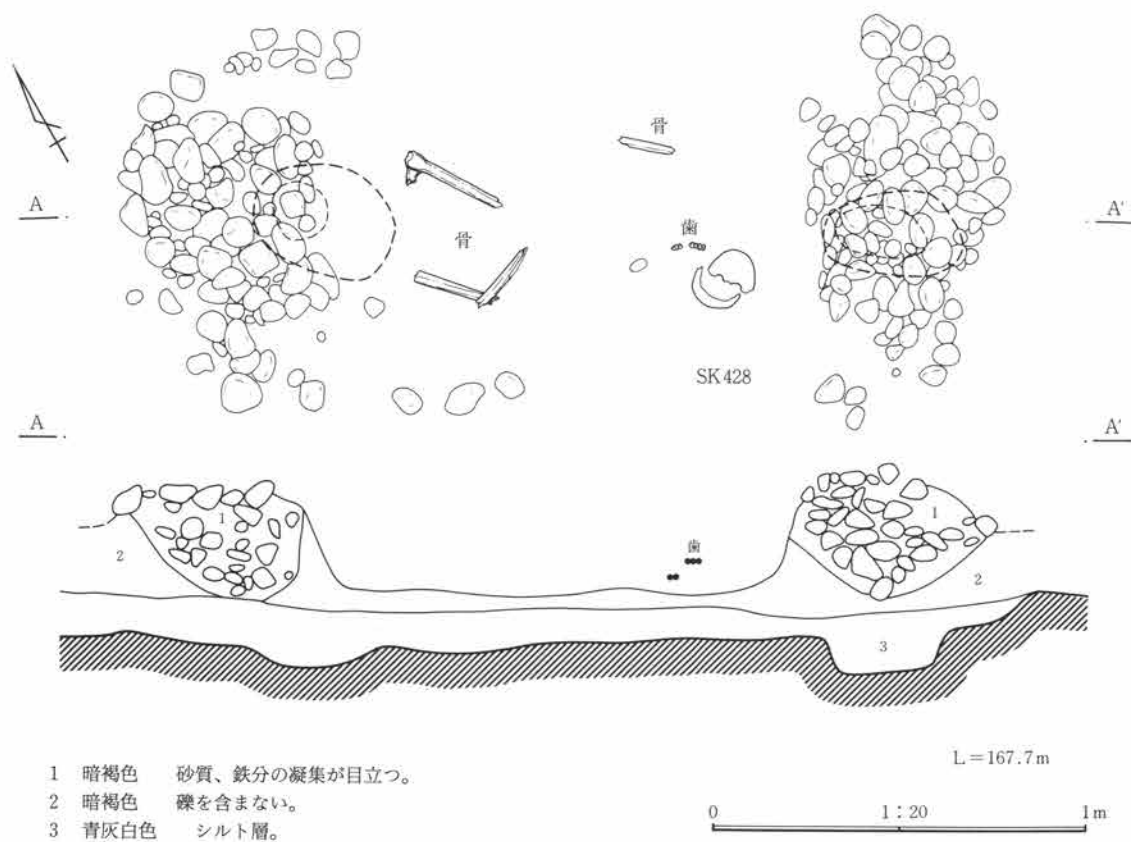
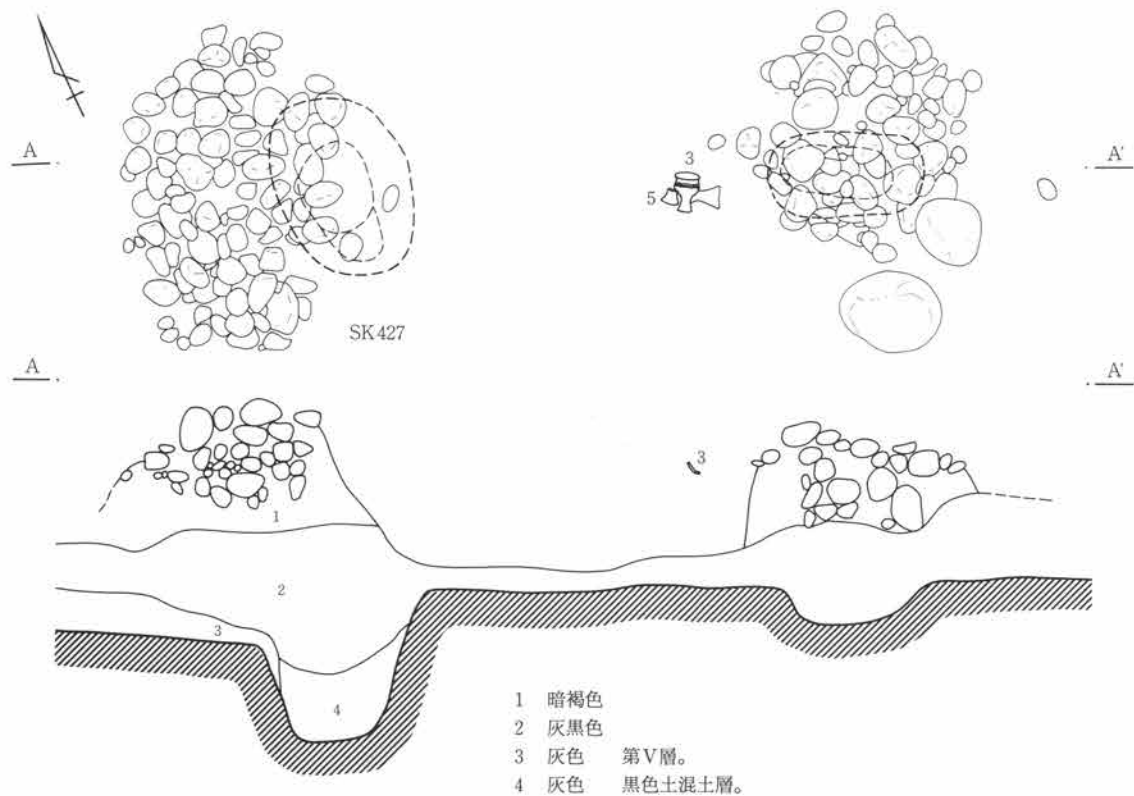


第252図 10号墓(1)



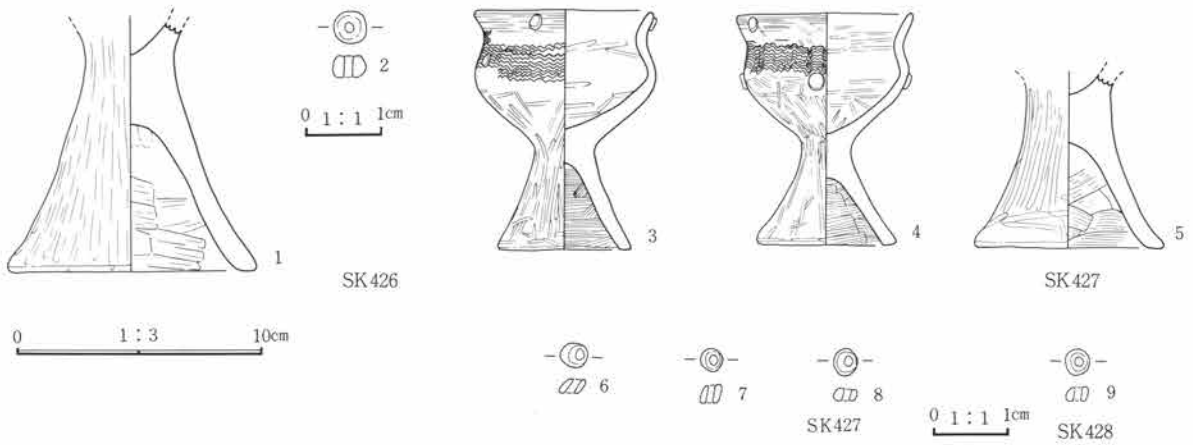
第253図 10号墓(2)

(5) 墓 跡



第254図 10号墓(3)

6 検出した遺構・遺物



第255図 10号墓出土遺物

10号墓出土土器観察表 PL.133

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	台付甕(?)	脚 10.0		外 ヘラミガキ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 やや堅緻、褐灰色	脚部全周
3	台付甕	口 6.9 高 9.5		外 頸～肩部は波状文、口縁、肩部に付文を付す。 内 体部はヘラミガキ、脚部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	ほぼ完形
4	台付甕	口 6.9 高 9.2		外 頸～肩部は波状文、口縁、胴部に各4個の付文を付す。 内 体部はヘラミガキ。脚部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	完形
5	台付甕(?)	脚 7.6		外 ヘラミガキ。 内 ハケメ、ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	脚部全周

10号墓出土玉類観察表 PL.144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
2	小玉	0.28 0.45	0.1		ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
6	小玉	0.19 0.37	0.1		ガラス、スカイブルー	
7	小玉	0.26 0.29	0.09		ガラス、スカイブルー	
遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
8	小玉	0.14 0.32	0.1		ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
9	小玉	0.17 0.34	0.1		ガラス、スカイブルー	研磨面あり。

11号墓 (第256～259図、PL. 61・62)

11号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(礎床)×深さ	主体部主軸方位
		SK 434	2.4 × 0.9	1.55 ± × (0.45) × 0.25	N-28.7°-E
		SK 435	2.2 × 1.3	1.5 × 0.75(0.4) × 0.2	N-65.3°-W
		SK 436	2.15 × 0.7	1.6 × 0.25 × 0.1	N-65.5°-W
		SK 437	2.2 × 1.3	1.4 × 0.6 (0.4) × 0.22	N-79.5°-W

位置 56-H22に位置する。

周溝 不明。第IV層、第V層を精査したが溝覆土を判別することができなかった。

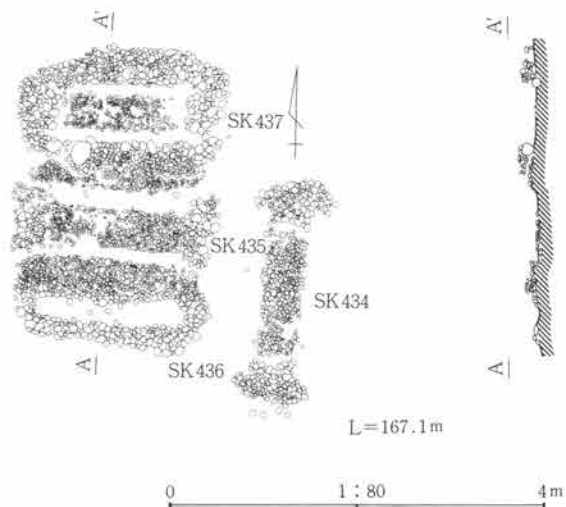


**主体部** SK434は埋葬部に礫床を設け、その両端部に礫を集積する。礫床両側縁は直線的で中央部に比べややせり上がっている。端部礫集積の両側には埋葬部側から板状の材を当てた痕跡かと思われるような鈎形にくびれた状態が観察される。礫集積下、2か所に円形ピットを設けている。礫床面南端部に下肢骨が3本重なった状態で検出される。埋葬部覆土中よりガラス製小玉が2点検出される。

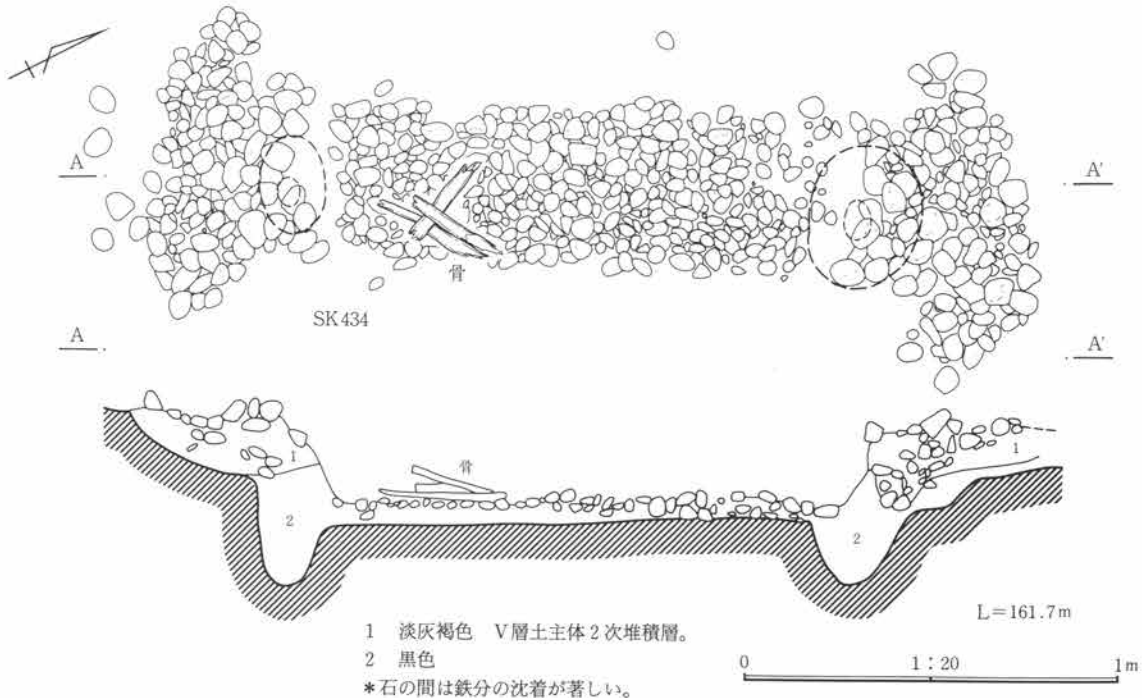
SK435は埋葬部に礫床を設け、その両端部に礫を集積する。埋葬部両側縁には礫集積帯を設けている。礫集積帯と端部礫集積はつながらない。礫床側縁は直線的である。端部礫集積の両側には埋葬部側から板状の材を当てた痕跡かと思

われるようなくびれた状態が観察される。SK435の南にはSK436が隣接する。側部礫集積帯が相互に重なり合った状態が見られる。SK435の礫集積帯は礫が細かく、これがSK436のやや大振りの礫集積を覆っている状態が認められる。SK437との重なり状態もSK436の場合とほぼ同様であるが、ここではSK437の側部礫集積帯の方がSK435のそれを覆っている状態が認められる。礫集積下、2か所に円形ピットを設けている。埋葬部覆土中より管玉、ガラス製小玉が数点出土している。埋葬部西寄りに肢骨を検出する。

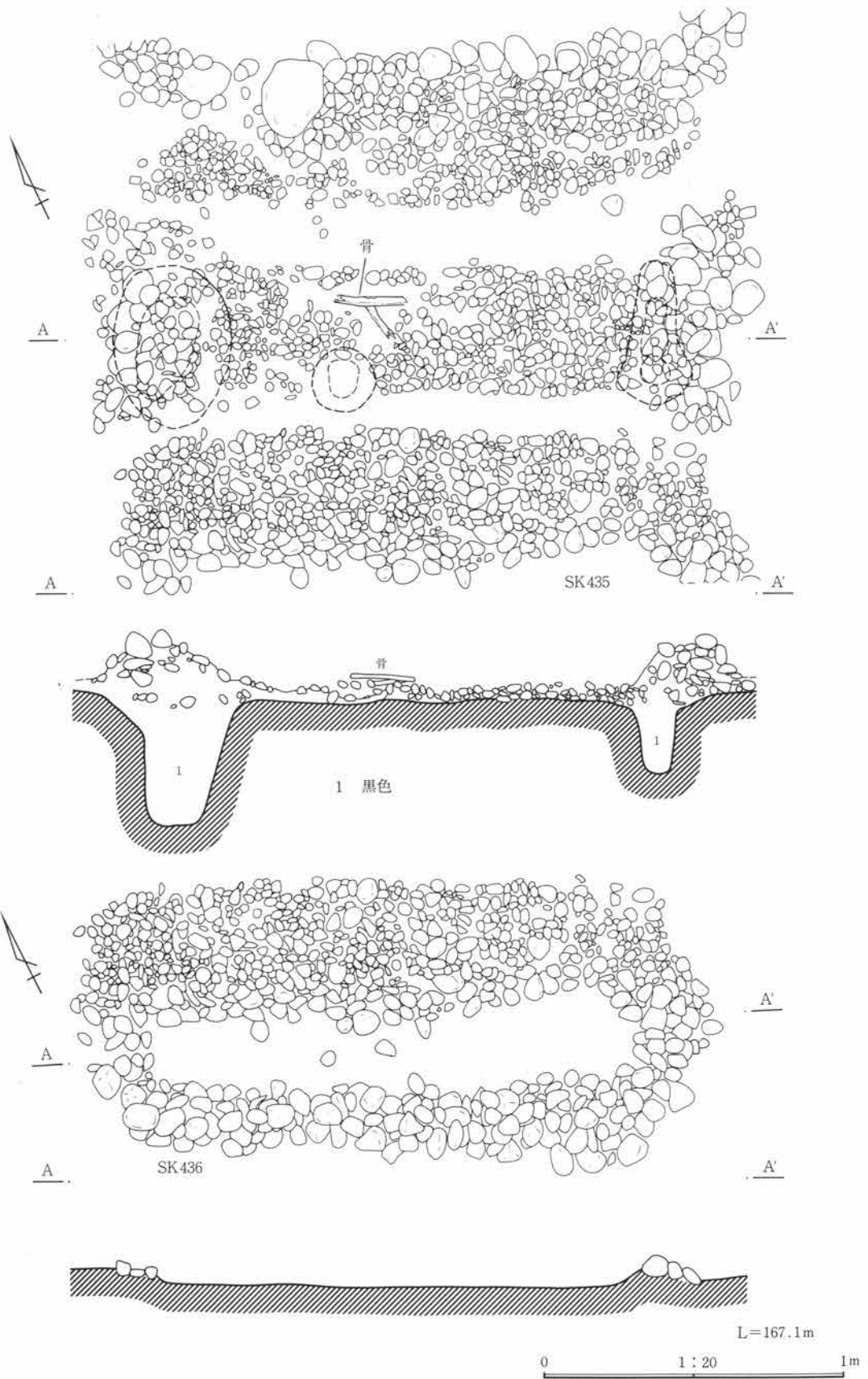
SK436は埋葬部の周囲に礫集積帯を巡らす。礫床は伴わない。端部礫集積と側部礫集積帯の接点が不明瞭



第256図 11号墓(1)



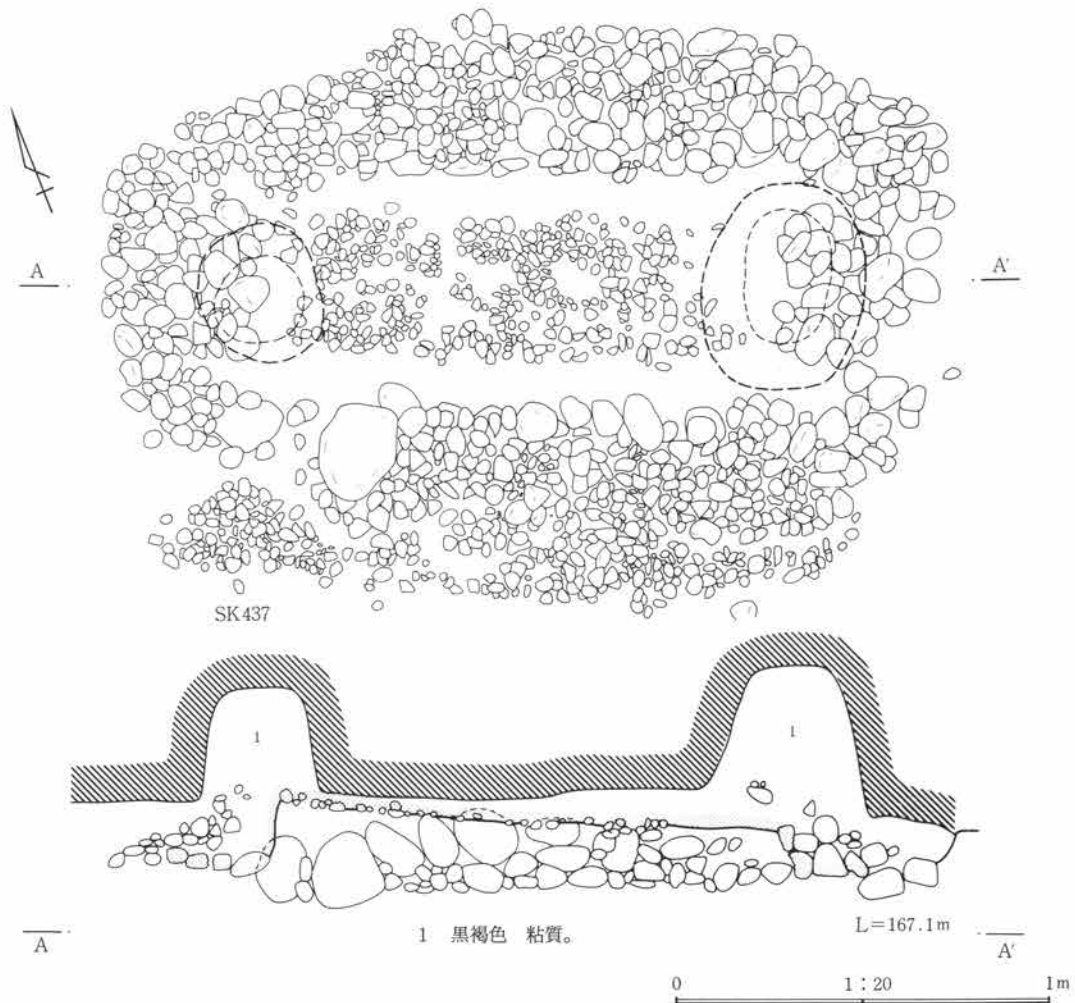
第257図 11号墓(2)



第258図 11号墓(3)

である。とくに端部礫集積は他の場合のように地中に埋め込まれた状態は認められない。埋葬部は幅が狭い。被葬者の遺体は検出できない。埋葬部覆土中よりガラス製小玉が2点検出される。

S K 437は埋葬部に礫床を設け、その周囲に礫集積帯を巡らす。側部礫集積帯の内縁は直線状で、大形の礫を積み上げ、整った壁面を造っている。礫床両側縁は直線上で、礫床の側縁から端部礫集積の側部にかけて、直状の材を設置した痕跡ではないかと思われる礫を配さない間隙が見られる。礫集積下、2か所に円形ピットを設けている。被葬者の遺体や遺物は認められない。

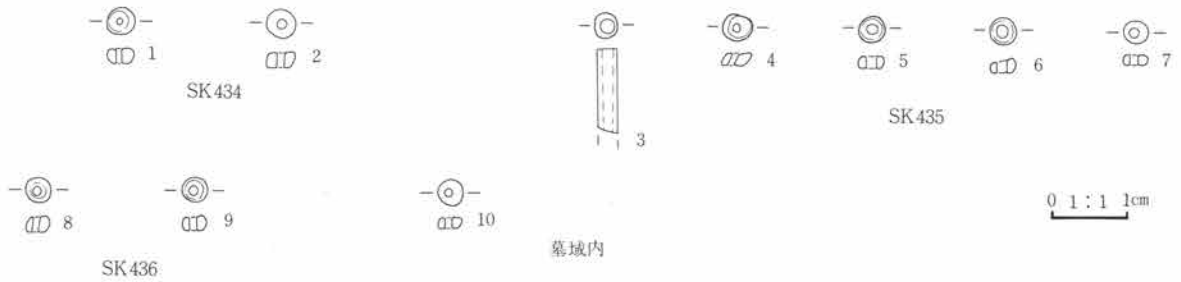


第259図 11号墓(4)

11号墓出土玉類観察表 PL. 133・144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考	遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
1	小玉	0.2	0.38	0.1	ガラス、スカイブルー		6	小玉	0.18	0.39	0.15	ガラス、スカイブルー	孔縁研磨面あり。
2	小玉	0.2	0.4	0.11	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。	7	小玉	0.13	0.32	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
3	管玉	—	0.31	0.2	赤色ケイ質岩	研磨稜線なし。	8	小玉	0.2	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー	
4	小玉	0.17	0.4	0.1	ガラス、コバルトブルー	研磨面あり。	9	小玉	0.22	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	
5	小玉	0.16	0.35	0.13	ガラス、スカイブルー		10	小玉	0.13	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー	

6 検出した遺構・遺物



第260図 11号墓出土遺物

12号墓 (第261~263図、PL. 62・63)

12号墓計測表

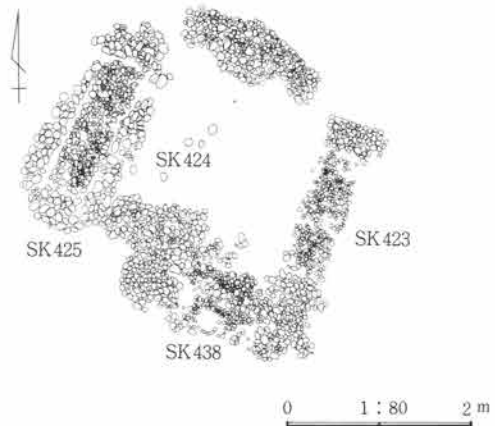
周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(磔床)×深さ	主体部主軸方位
		S K 423	2.15×0.65	1.4 × (0.5)×0.25	N-21.2°-E
		S K 425	2.4 ×1.0	1.6 ×0.5 (0.45)×0.13	N-25.8°-E
		S K 424	2.7 ×0.4	1.45 × - ×0.4	N-32°-E
		S K 438	2.2 ×0.65±	0.9 × (0.7)×0.24	N-72.5°-W

位置 50-H13に位置する。

周溝 不明。第IV層、第V層を精査したが溝覆土を判別することができなかった。

主体部 3基の形態の異なる主体部を並列し、この南に直行方向に接した小さな主体部が1基、総数4基の主体部が密集した状態で見られる。

S K 423は埋葬部に磔床を設け、その両端部に磔を集積する。端部磔集積には埋葬部側から板状の材を当てた痕跡かと思われるようなくびれた状態が観察される。磔集積下、2か所に円形ピットを設けている。遺体、遺物は認められない。埋葬部に被葬者の歯を検出する。

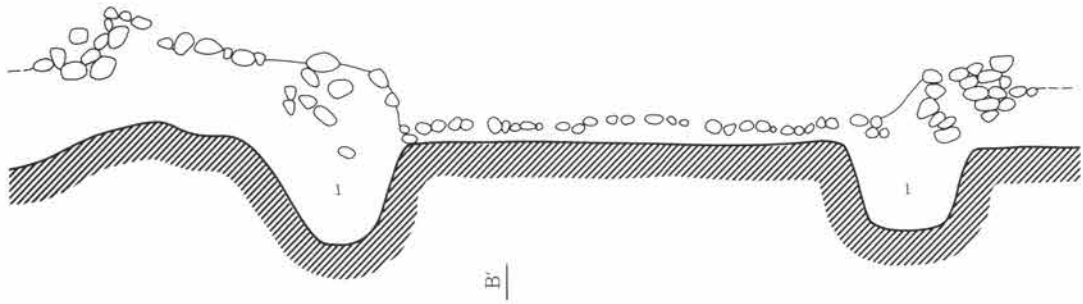
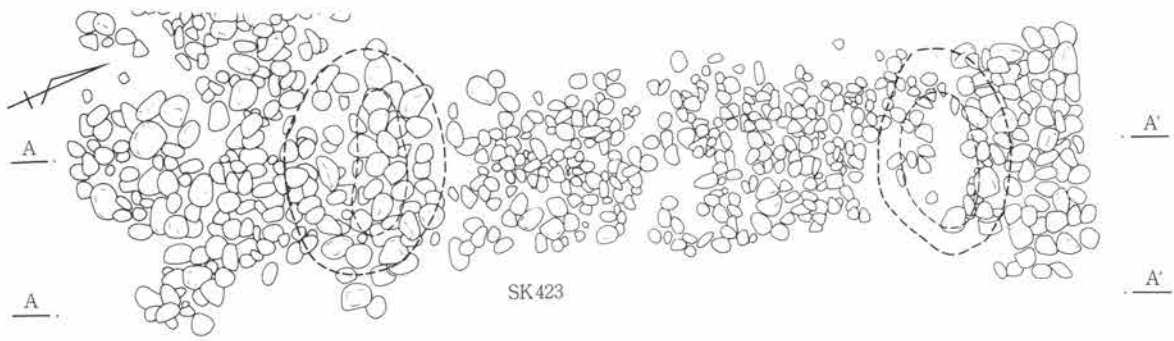


第261図 12号墓(1)

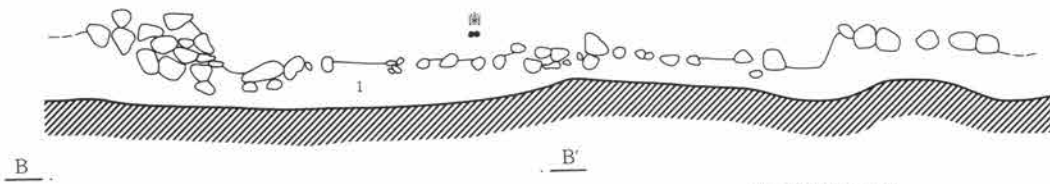
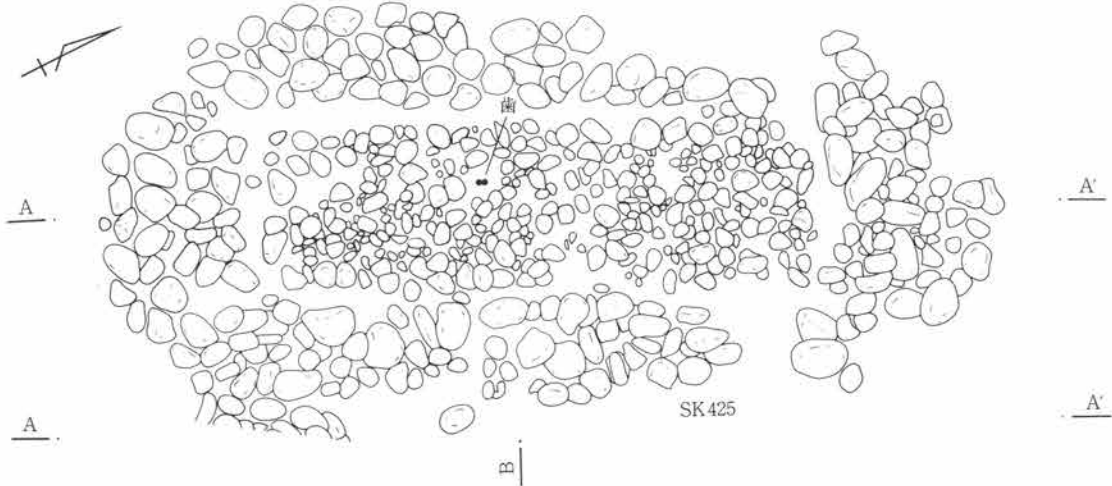
S K 424は埋葬部の両端部に磔を集積する。磔床は伴わない。床面は不明確である。端部磔集積は翼状に大きく広がり、埋葬部側には両側に板状の材を当てた痕跡かと思われるような鉤形にくびれた状態が観察される。磔集積下、2か所に円形ピットを設けている。埋葬部やや南寄りに被葬者の下肢骨体片2本、北寄りに歯が認められる。北半部にはガラス製小玉が数点点在したほかに、埋葬部覆土中からも多数検出している。

S K 425は埋葬部に磔床を設け、その周囲に磔集積帯を巡らす。磔床側縁と側部磔集積帯の内縁は直線状で、この間に磔を配さない狭い間隙が見られ、この間隙が端部磔集積の両側部まで直線状に延びている。板状の材が設置されていた痕跡ではないかと思われる。磔床面上5 cm、やや南寄りに被葬者の歯が検出される。埋葬部覆土中より管玉、ガラス製小玉が出土する。

S K 438はS K 423とS K 424の南端部磔集積上にわずかな部分が重なった状態で設けられている。他の主体

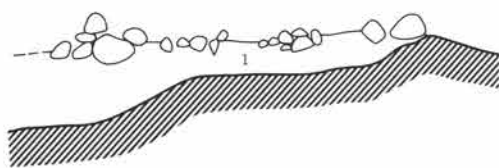


1 灰黒色 粘質、礫を含まない。



A・Bセクション

1 灰黒色 粘質、礫を含まない。

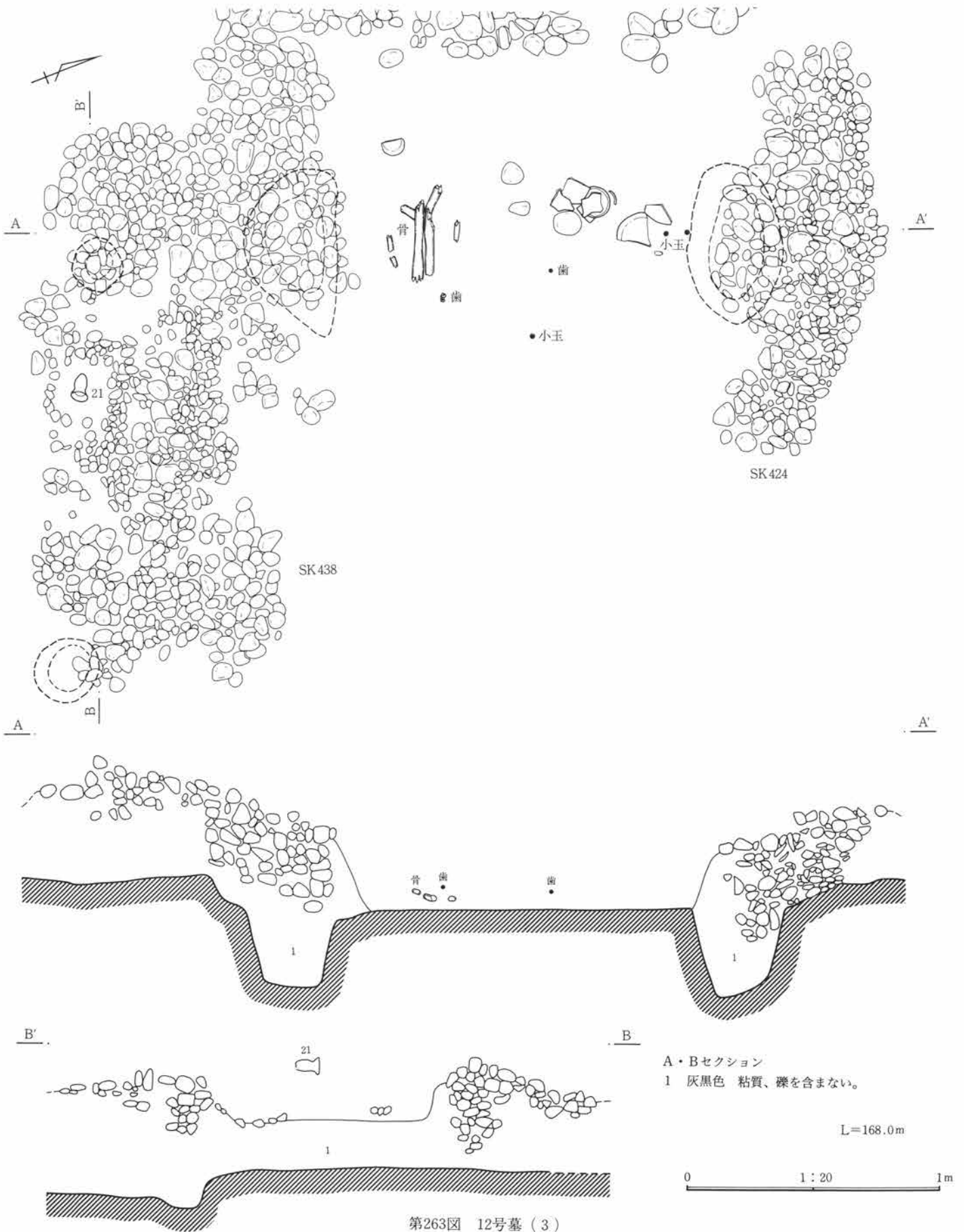


L=168.0m

0 1:20 1m

第262図 12号墓 (2)

6 検出した遺構・遺物

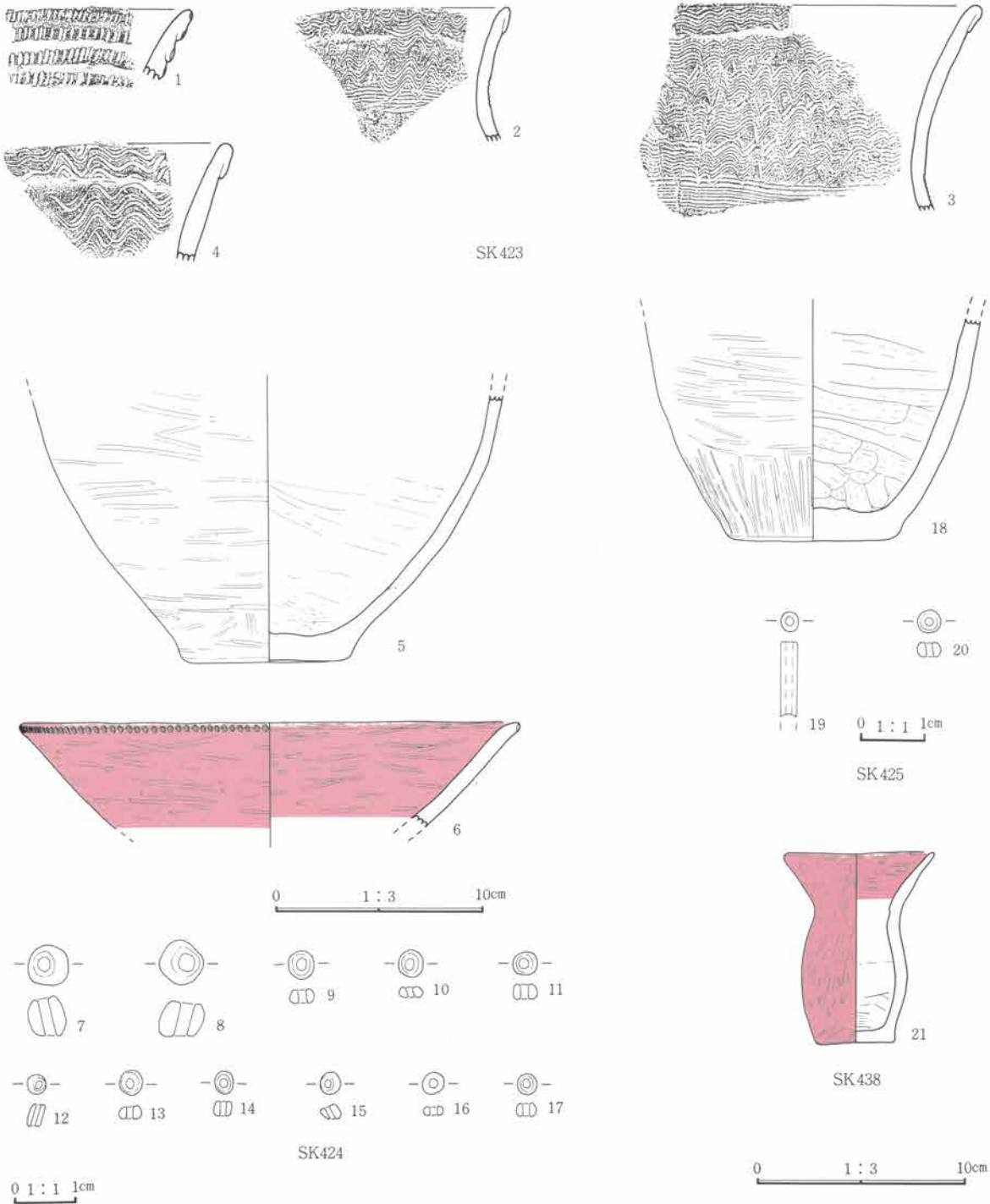


第263図 12号墓(3)



(5) 墓 跡

部に比べレベルが高い位置に造られている。規模は著しく小さい。埋葬部に磔床を設け、その両端部に磔を集積する形態である。端部磔集積には埋葬部側から板状の材を当てた痕跡かと思われるくびれた状態が観察される。ただし磔床側縁は磔がやや乱れている上に、端部磔集積のくびれ部に対応した状態は見られない。被葬者の遺体は認められない。埋葬部覆土上部より丹彩の小型壺の完形個体が出土している。磔周積下にピットを検出する。



第264図 12号墓出土遺物

6 検出した遺構・遺物

12号墓出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
1	壺		多段口縁	外 口縁部は刻み目。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	鈍褐色	8%
2	甕	口 12	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	22%
3	甕	口 24	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	灰褐色	13%
4	甕	口 22	折り返し口縁	外 波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	灰褐色	12%

12号墓出土土器観察表 PL.133

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
5	甕	底 7.8	打ち欠き面は直線的に整えられる。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	打ち欠き部は部分的に遺存。
6	高 坏	口 23.7		外 口縁端部は刻み目文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周 内外面丹彩
18	壺	底 7.6		外 胴部はヘラミガキ。 内 胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	胴部 $\frac{1}{2}$ 周 底部全周
21	壺	口 5.9 高 8.9	胴部内面接合痕明瞭。	外 ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はハケメ、ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	完形 内外面丹彩

12号墓出土玉類観察表 PL.133・144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
7	小 玉	0.62	0.6	0.2	ガラス、コバルトブルー	
8	小 玉	0.53	0.7	0.25	ガラス、コバルトブルー	長円形
9	小 玉	0.22	0.42	0.15	ガラス、スカイブルー	
10	小 玉	0.15	0.4	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
11	小 玉	0.24	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	孔縁研磨面あり。
12	小 玉	0.33	0.3	0.1	ガラス、スカイブルー	
13	小 玉	0.2	0.36	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
14	小 玉	0.21	0.3	0.1	ガラス、スカイブルー	
15	小 玉	0.21	0.32	0.09	ガラス、スカイブルー	
16	小 玉	0.13	0.32	0.1	ガラス、スカイブルー	
17	小 玉	0.2	0.3	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
19	管 玉	—	0.3	0.1	石製、オリーブ黒	研磨は滑沢。
20	小 玉	0.2	0.36	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。

13号墓 (第265～267図、PL.63・64)

13号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(磔床)×深さ	主体部主軸方位
		S K 365	1.55×0.7	0.7 × — ×0.16	N-83.2°-E
		S K 366	1.8 ×1.05	0.8 ×0.55(0.35)×0.09	N-81.2°-E
		S K 408	2.45×0.7	1.55 × (0.5) ×0.18	N-79.6°-E
		S K 409	2.15×0.85	0.9 × — ×0.35	N-76.2°-E

位置 43-G07に位置する。

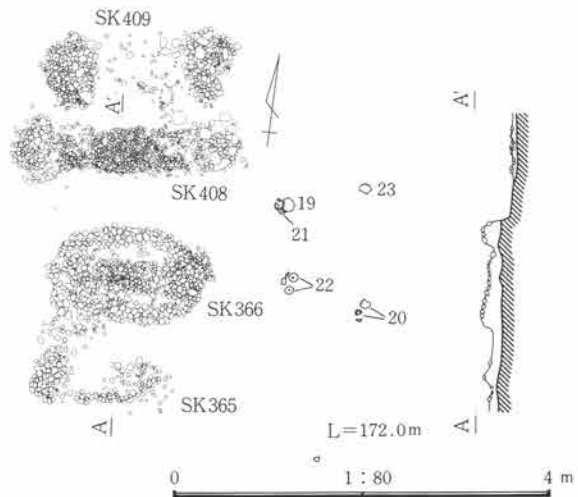
周溝 不明。第IV層、第V層を精査したが溝は認めることはできなかった。主体部群の東1～2mの辺りに小型壺、小型高坏、小型鉢などが点在する。周溝の位置をこの辺りに想定することも可能であるがやや配置に難点がある。

主体部 形態の異なる大小規模の主体部が4基並列する。

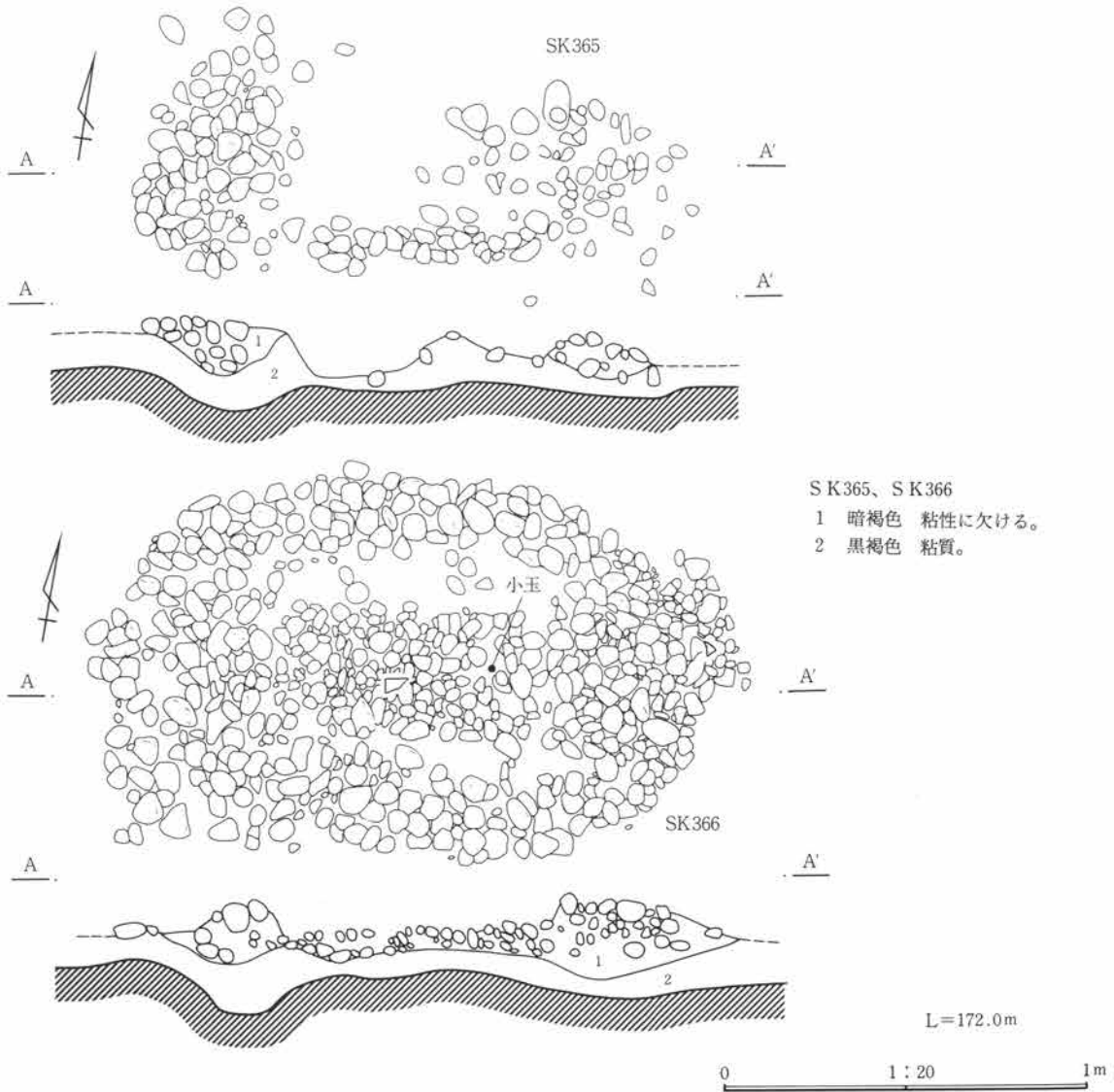
S K 365は埋葬部の両端部に磔を集積する。磔床は伴わない。他に比べ、とりわけ小規模である。埋葬部の

南側部に礫集積帯を設けているが北側では検出できない。端部礫集積には埋葬部側から板状の材を当てた痕跡かと思われるようなくびれた状態が観察される。礫集積下にピットは検出できない。埋葬部覆土中よりガラス製小玉が数点出土している。

S K 366は埋葬部に礫床を設け、その周囲に礫集積帯を巡らす。小規模である。礫床側縁は直線状で、側部礫床帯との間に礫を配さない間隙が見られる。この間隙は東端部礫集積の両側部まで達している。直状の材を設置した痕跡かと思われる。礫集積下にピットは検



第265図 13号墓 (1)



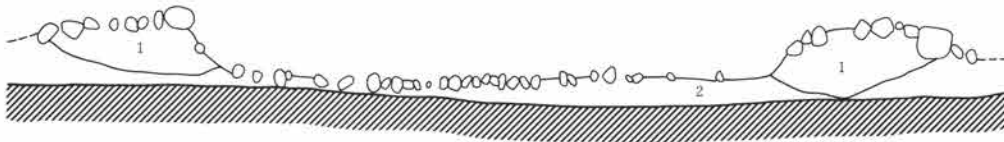
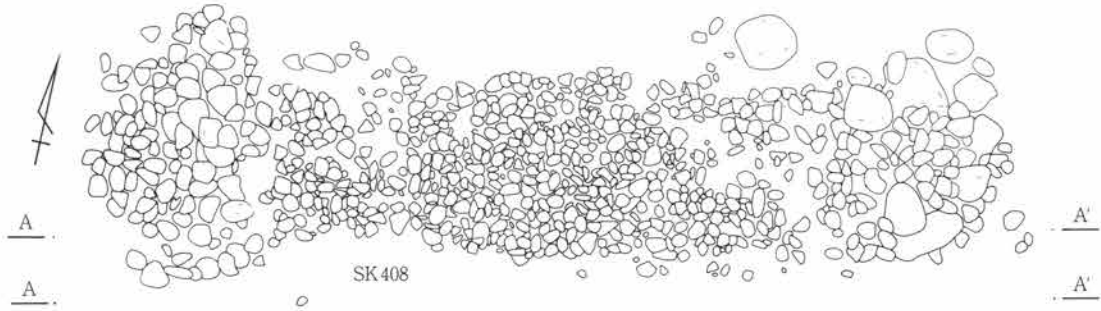
第266図 13号墓 (2)

6 検出した遺構・遺物

出できない。覆土中よりガラス製小玉が多数出土している。

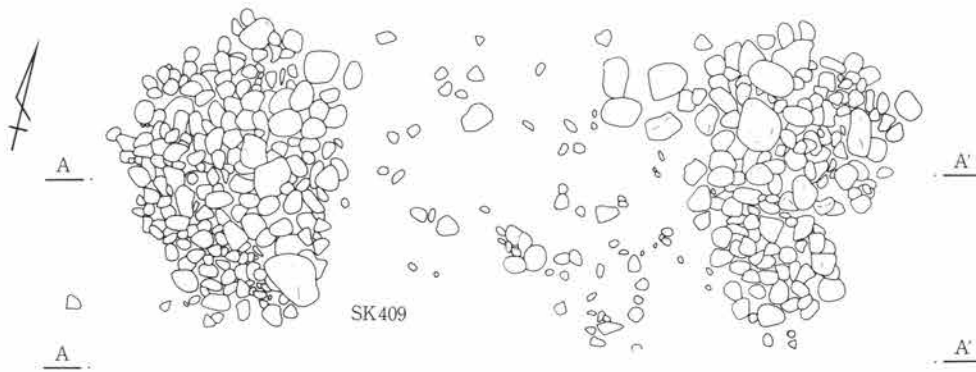
SK408は埋葬部に礫床を設け、その両端部に礫を集積する。礫床面は小礫が平坦に敷き詰められている。礫床の両側縁部は中央部よりわずかにせり上がっている。礫集積下にピットは検出できない。埋葬部において被葬者の歯を検出する。遺物はほとんど検出できない。

SK409は埋葬部の両端部に礫を集積する。礫床は伴わない。比較的小規模である。床面は不明確である。礫集積下にピットは検出できない。埋葬部覆土中よりガラス製小玉が1点出土している。



SK408、SK409

- 1 暗褐色 粘性に欠ける。
- 2 黒褐色 粘質。

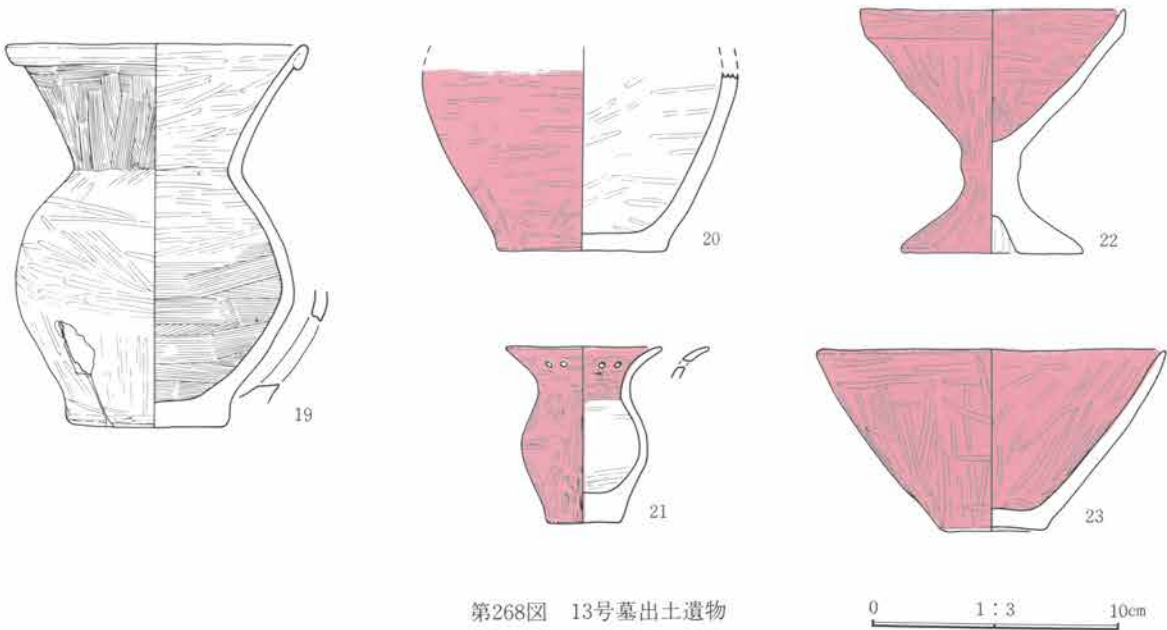
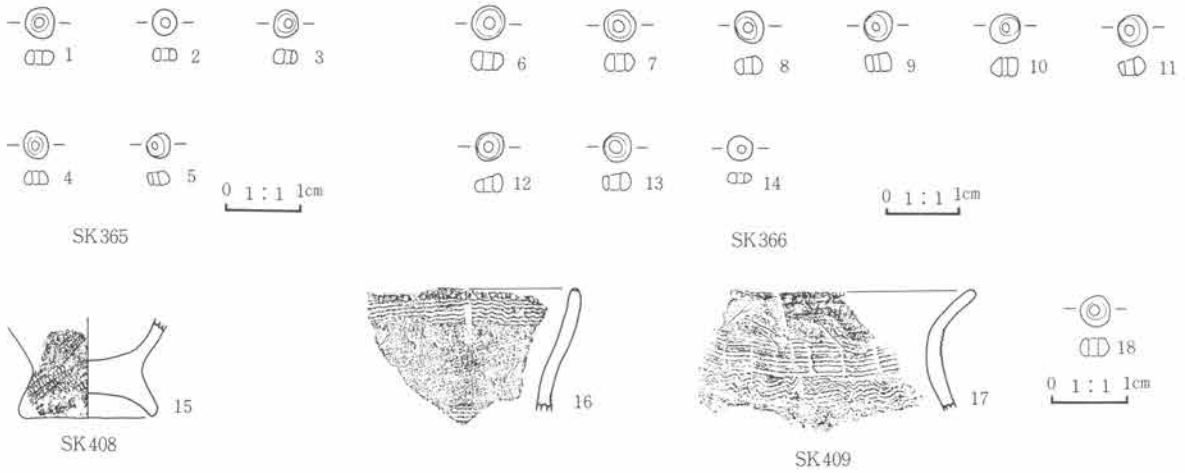


L=172.0m

0 1:20 1m

第267図 13号墓 (3)

(5) 墓 跡



第268図 13号墓出土遺物

13号墓出土玉類観察表 PL.144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
1	小玉	0.2	0.4	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
2	小玉	0.16	0.32	0.1	ガラス、スカイブルー	
3	小玉	0.18	0.34	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
4	小玉	0.18	0.34	0.09	ガラス、スカイブルー	
5	小玉	0.17	0.32	0.08	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
6	小玉	0.24	0.42	0.15	ガラス、スカイブルー	孔縁に研磨面あり。
7	小玉	0.25	0.45	0.15	ガラス、スカイブルー	孔縁に研磨面あり。
8	小玉	0.23	0.42	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
9	小玉	0.23	0.39	0.08	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
10	小玉	0.25	0.4	0.07	ガラス、スカイブルー	
11	小玉	0.25	0.4	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
12	小玉	0.24	0.4	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
13	小玉	0.23	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	孔縁研磨面あり。
14	小玉	0.15	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
18	小玉	0.23	0.42	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。

13号墓出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
15	甕	底 6		外 L R 縄文。内 ナデ。	細砂粒を含む。	堅緻	鈍橙色	100%
16	甕	口 17		外 口縁端部は細かい刻み目、口縁部は波状文。	砂粒を含む。	堅緻	灰褐色	9%
17	台付甕	口 14		外 頸部は等間隔止め簾状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	堅緻	灰赤色	22%



6 検出した遺構・遺物

13号墓出土土器観察表 PL.133

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
19	壺	口 11.8 高 15.2	折り返し口縁。胴下部に打ち欠き孔	外 口縁部はヨコナデ、頸部はハケメ、胴部はヘラミガキ、胴部の孔は二次調整はない、打撃は1回と見られる。 内 口縁～肩部はヘラミガキ、以下ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 胴部全周
20	壺	胴 12.6 底 6.7		外 ヘラミガキ、丹彩。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、淡赤橙色	胴部 $\frac{1}{2}$ 周 底部全周
21	壺	口 6.2 高 7.1	2個単位で2カ所に小孔あり。	外 ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部ナデ、ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	完形 内外面丹彩
22	高 坏	口 10.6 高 9.7	口縁部には稜を作り、脚くびれ部には緩い突帯が巡る。	外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部は指ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	完形 内外面丹彩
23	鉢	口 14.0 高 7.2		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩

14号墓 (第269～271図、PL.64)

14号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(磔床)×深さ	主体部主軸方位
		SK 401	2.4 × 0.5	1.5 × (0.35) × 0.15	N-80.3°-E
		SK 402	2.4 × 0.6	1.6 × 0.4 × 0.23	N-82°-E

位置 37-G10に位置する。

周溝 不明。第IV層、第V層中に溝を検出することができなかった。

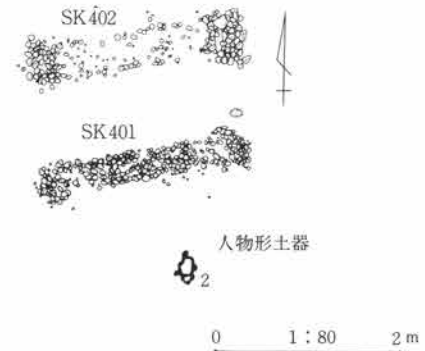
主体部 SK 401は埋葬部に磔床を設け、その両端部に磔を集積する。磔床部の磔は比較的大振りでもばらに敷かれている。磔床中央部が低く、側縁は直線的で、ややせり上がっている。磔集積下、2か所に円形ピットを設けている。磔床面上東端部に左右の下肢骨と歯が検出される。覆土中よりガラス製小玉が1点出土する。

SK 402は埋葬部の両端部に磔を集積する。磔床は伴わない。

埋葬部の側縁部には、小磔がまばらではあるが直線的に並んだ

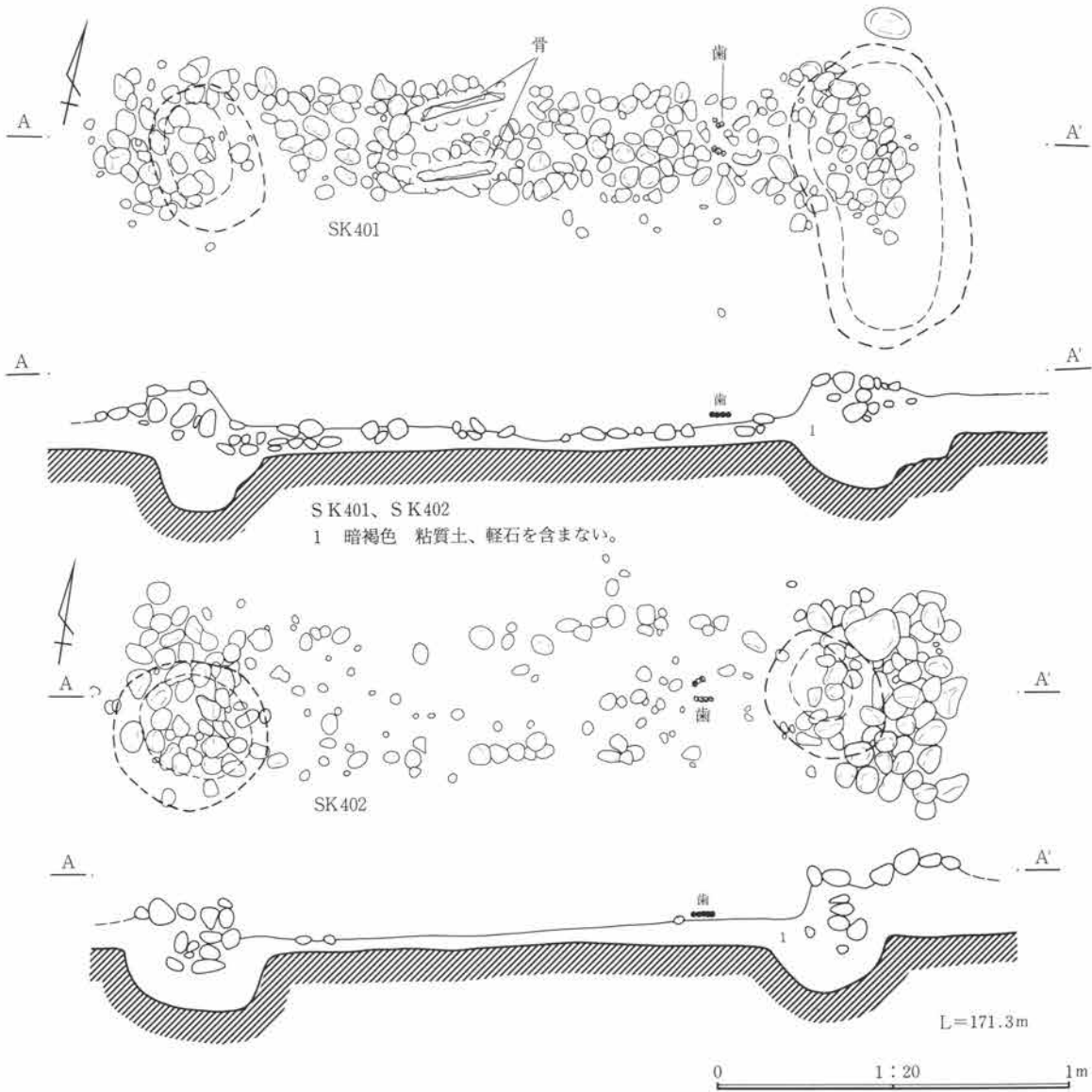
状態が見られる。端部集積は鉤状にくびれており側板状の材が当てられていたようである。埋葬部両側縁の石列は位置関係から側板の内側に沿っていたとみられる。端部磔集下にはピットが2か所で検出される。埋葬部東端部には床面直状に歯列が良好に遺存していた。西端部で243号住居(弥生後期第1期)と一部重複する。主体部は住居の覆土上に造られていることが認めらる。

人物形土器はSK 401の南傍ら1mの地点に出土する。頭位をやや低くし、俯せた状態であった。胴部、背から底部は平らに削り取られたように欠損していた。古墳時代の畑耕作によるものと思われる。この底部破片は7号墓周溝墓東端部で発見されている。



第269図 14号墓(1)

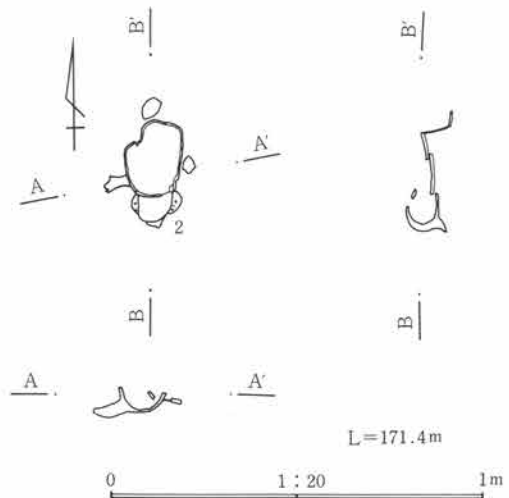




第270図 14号墓(2)

人物形土器 (第271図、PL. 64)

形状、成形 高さ36.5cm最大幅、胴幅14.0cm 頭部には幅1.3cm程の帯状の冠を付けている。冠は額の上で塊状に突出している。冠は粘土張り付けによるもので、頭頂部には添付の際の指頭圧痕が見られる。目は外側よりヘラ状具により穿孔し、外側縁部のみヘラミガキによる整形を行っている。鼻は粘土塊添付によるもので2個の小孔をヘラ状具により穿つ。口は頭部、胴部の接合の後ヘラ状具により穿孔し上下の唇を添付している。耳は大きく半円形で左が2か所、右に3か所径3~5mmの小円孔を穿つ。右の円孔の1つは径2mmで特に小さい。頭部と胴部の接合部は外側から補充粘土を当てているが内側からは何等の処置も行っていない。



第271図 14号墓(3)

6 検出した遺構・遺物

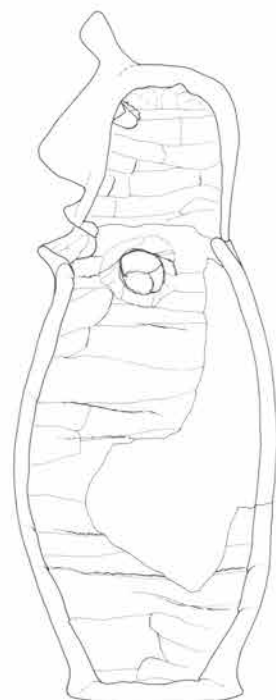
腕は、左腕は接合面より失われている。右腕は指が1本失われているが他に欠損はない。胴と腕の接合は胴部にあらかじめ臍錠の穴があけられここに差し込むように粘土棒を差し込み、外側から、補充粘土を当てて固定している。底部は著しく外に張り、底面はやや凸面状をなす。

**外面整形** 頭部は粗いヘラ状具によるミガキ、顔面の整形は全体にくまなく縦方向のヘラミガキを施している。右耳と目尻の間、及び耳の後ろに丹彩の痕跡が認められる。手首から指先にかけても丹彩が施される。胴部にはくまなく縦方向のヘラミガキを施している。

**内面整形** 頭頂部は指頭痕が著しく、以下は全体に横方向の指ナデ。胴部はヘラ状具による粗いナデ。粘土積み上げ痕が目立つ。

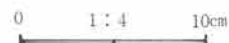
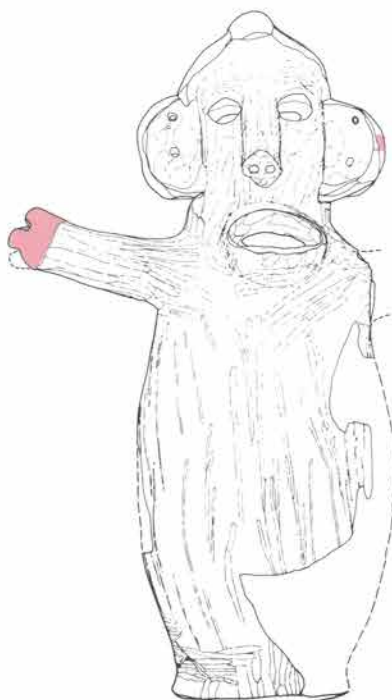
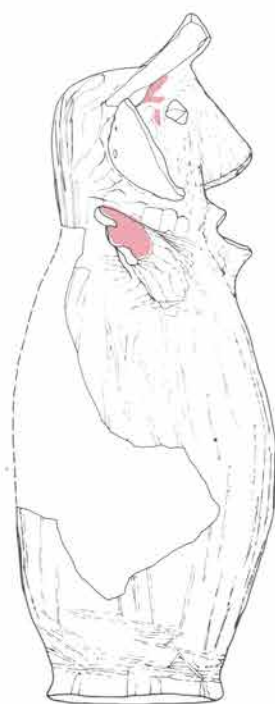
**色調、胎土** 橙色。胎土 細砂粒を含む。

**遺存状態** 背部から脇の下にかけて大きな欠損がある。左腕と右手指先が1本欠損する。



14号墓出土玉類観察表 PL.144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
1	小玉	0.17	0.42	0.12	ガラス、スカイブルー	孔縁に研磨面あり。



第272図 14号墓出土遺物

## 15号墓 (第273~276図、PL. 65・66)

15号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(磔床)×深さ	主体部主軸方位
		SK 397	2.65×1.25	1.8 ×0.55(0.4)×0.25	N-55°-E
		SK 412	2.5 ×1.1	1.55 ×0.65(0.45)×0.14	N-64.2°-E
		SK 413	2.55×1.0	1.6 ×0.55(0.4)×0.26	N-63.3°-E
		SK 414	1.85×1.05	1.0 ×0.5 ×0.14	N-54.6°-E
		SK 415	1.65×0.55	0.9 × - ×0.1	N-49.9°-E
		SK 416	1.55×0.65	1.1 × - ×0.15	N-25.3°-W

**位置** 38-G20に位置する。周囲に土器棺墓群(C群)が取り巻く。

**周溝** 不明。第IV層、第V層中に溝を検出することはできなかった。

**主体部** 主体部は7基からなる。磔床形式の6基と、土器棺1基である。

SK 396は土器棺である。SK 412の南側部磔集積帯の東寄りに埋置される。土器棺は斜位に、東方向に向けた開口部には壺の下半部を蓋として、身に重ねている。開口部は大方後世の攪乱により欠損している。棺内下部に骨粉が検出している。遺物は認められなかった。

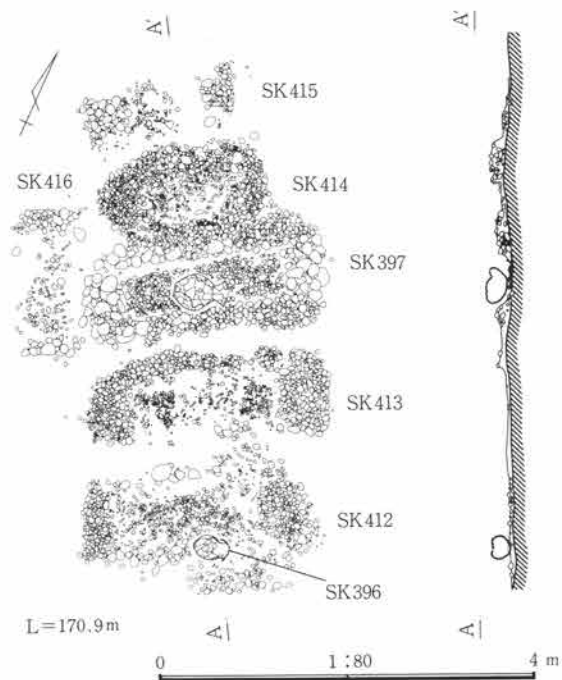
SK 397は埋葬部に磔床を設け、その周囲に磔集積帯を巡らす。磔床側縁と側部磔集積帯の内縁は直線状で、この間に磔を配さない間隙が見られ、この間隙が端部磔集積の両側部まで直線状に延びている。板状の材が置かれていた痕跡と思われる。磔集積下、2か所に円形ピットを設けている。磔床面上に大型壺の完形個体を横位に埋置している。壺には蓋などを付した痕跡は無く、また棺内や、磔床面上には被葬者の歯などの遺体や遺物は認められなかった。

SK 412は埋葬部に磔床を設け、その周囲に磔集積帯を巡らす。磔床部と側部磔集積帯の形は整っておらず、磔床は小磔をまばらに敷いた状態である。磔集積下、2か所に円形ピットを設けている。磔床面上、東端部には被葬者の歯が検出される。南側部磔集積帯の東部には土器棺(SK 396)が埋置されている。

SK 413は埋葬部に磔床を設け、その周囲に磔集積帯を巡らす。磔床部の状態は、磔はまばらで、側部磔集積帯は、南側では不明瞭である。磔集積下に円形ピットを設けている。被葬者の遺体や遺物は認められなかった。

SK 414は埋葬部に磔床を設け、その周囲に長円形に磔集積帯を巡らす。埋葬部はとくに小規模である。磔床は、小磔がまばらに敷かれている。南側部磔集積帯は隣接するSK 397との磔集積帯の上に部分的にかぶさった状態で重複している。埋葬部には被葬者の遺体や遺物は認められなかった。磔集積下、2か所に円形ピットを設けている。

SK 415は埋葬部に磔床を設け、この両端部に磔を集積する。磔床はまばらに大小の石を敷いた状態で明確

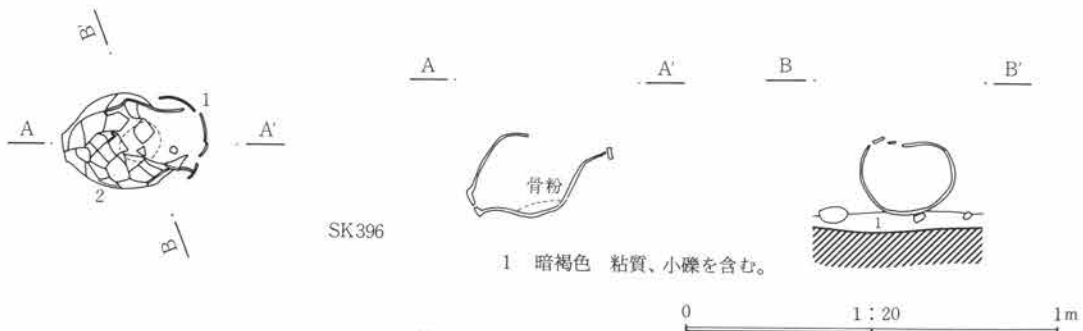
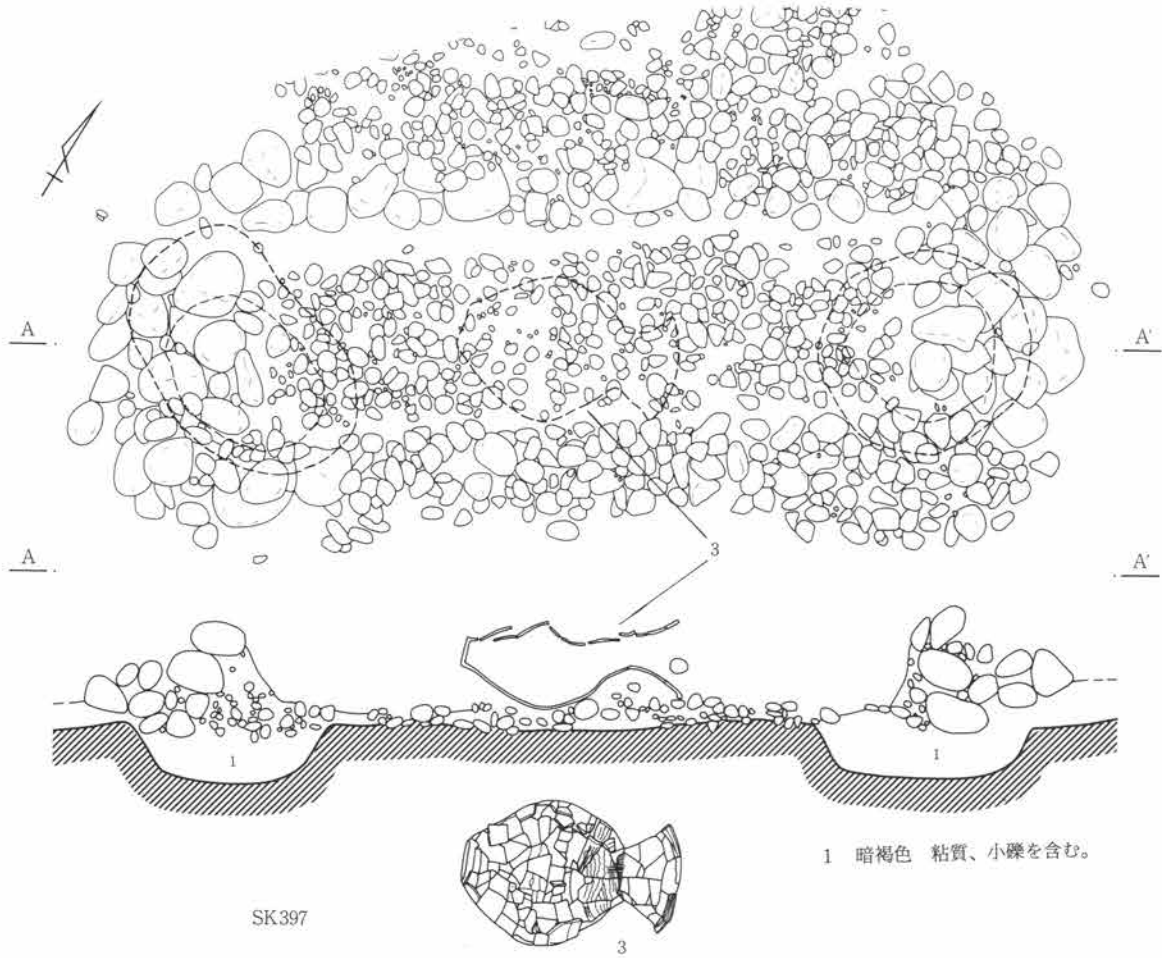


第273図 15号墓(1)

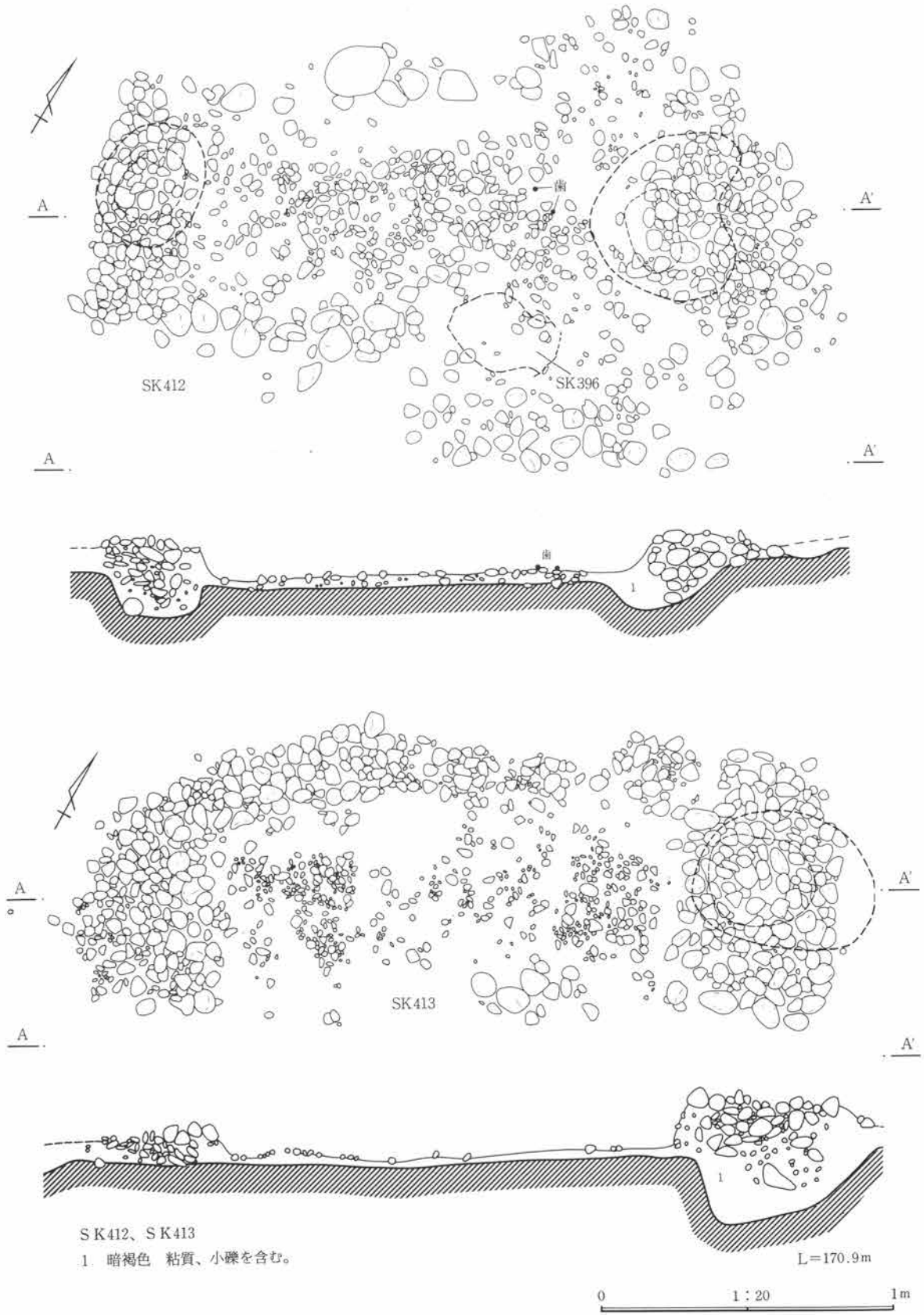
6 検出した遺構・遺物

とはいえ、端部礫集積には埋葬部側から板状の材を当てた痕跡かと思われるような鈎状にくびれた状態が観察される。埋葬部には被葬者の遺体は認められなかったが覆土中より小型高坏が出土する。礫集積下、2か所に円形ピットを設けている。

SK416は埋葬部に礫床を設け、この両端部に礫を集積する。礫床はまばらに大小の石を敷いた状態で明確とはいえ、端部礫集積には埋葬部側から板状の材を当てた痕跡かと思われるような鈎状にくびれた状態が観察される。埋葬部には被葬者の遺体や遺物は認められなかった。2か所に円形ピットを設けている。

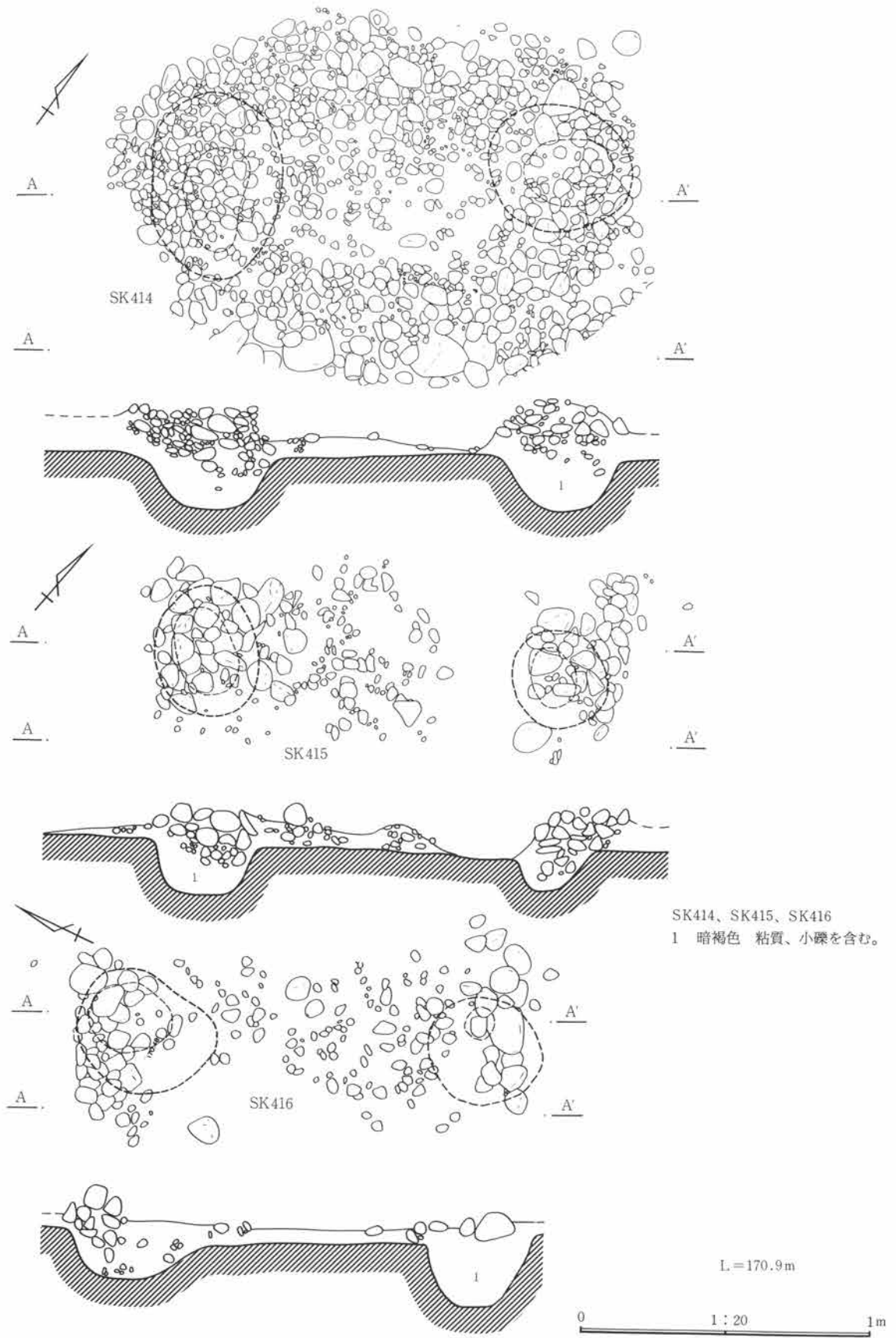


第274図 15号墓(2)



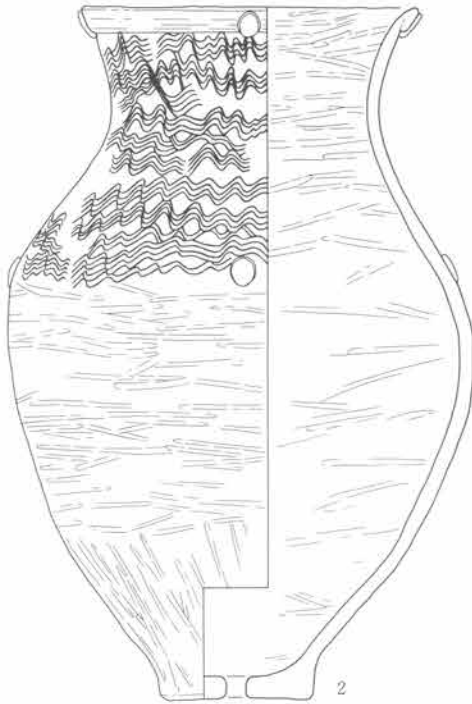
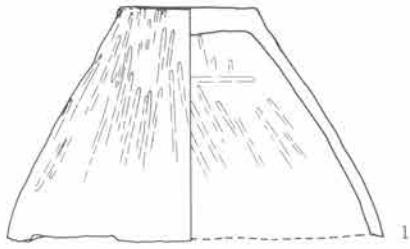
第275図 15号墓(3)

6 検出した遺構・遺物

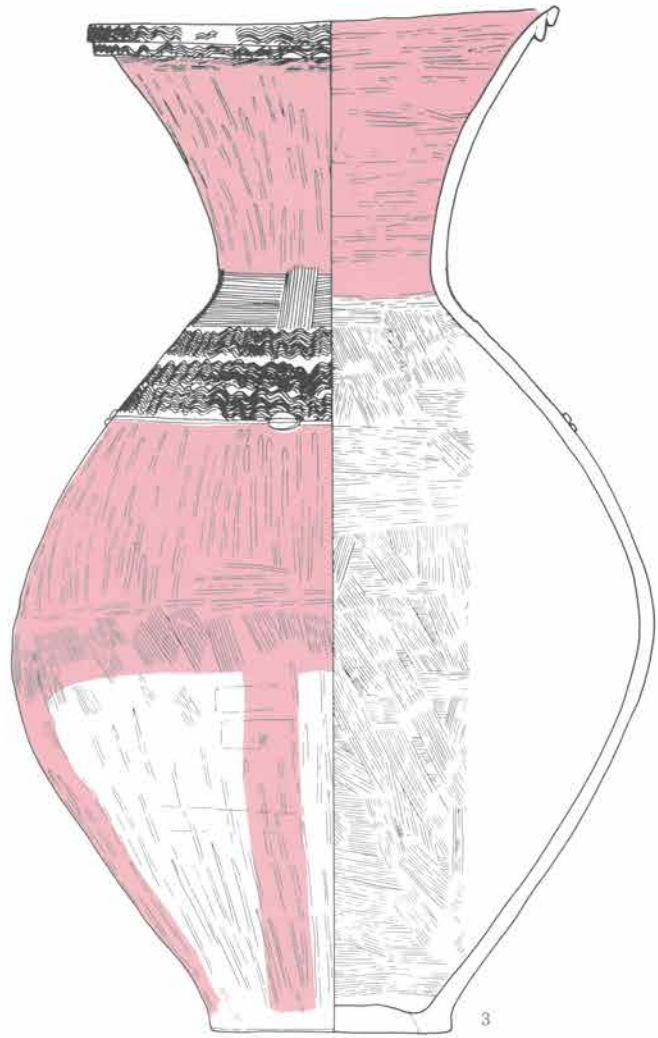


第276図 15号墓(4)

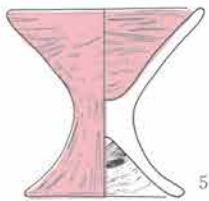




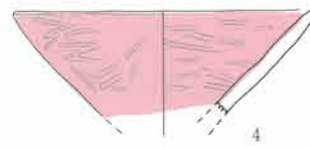
SK396



SK397 0 1:4 10cm



SK415 0 1:3 5cm



SK397 0 1:3 5cm



0 1:1 1cm 墓城内

第277图 15号墓出土遺物

6 検出した遺構・遺物

15号墓出土土器観察表 PL.134

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺(蓋)	底 7.4	欠損部は打ち欠き痕は見られない。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	胴下～底部 $\frac{1}{2}$ 周
2	甕 棺	口 18.0 高 36.7	折り返し口縁。底部に焼成後円孔を穿つ。	外 口縁部はヨコナデ。口辺～肩部は波状文。口縁部、肩部にそれぞれ付文を4個巡らす。以下ハケメ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸部以下ほぼ全周
3	壺 棺	口 24.8 高 53.4	2段の折り返し口縁。	外 口縁部は波状文、頸部は2段の櫛描横直線に縦直線。肩部波状文、沈線1条、胴下部に懸垂状に丹彩。 内 口縁～頸部はヘラミガキ。胴部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	完形 内外面丹彩
4	高 坏	口 11.9		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	坏部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩
5	高 坏	口 7.6 高 7.4		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はハケメ、ナデ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	ほぼ完形 内外面丹彩

15号墓出土玉類観察表 PL.144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
6	小 玉	0.2	0.4	0.09	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。

16号墓 (第278・279図、PL.66)

16号墓計測表

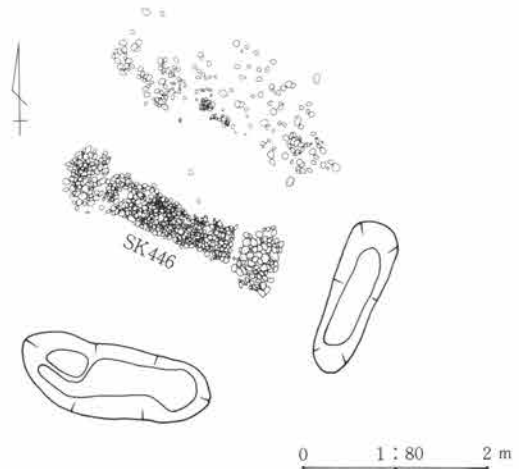
周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(磔床)×深さ	主体部主軸方位
南-北	4.3±	SK 446	2.5×0.7	1.6 × (0.45)×0.22	N-65.4°-W

位置 52-H26に位置する。

周溝 3辺に周溝、及びその痕跡を検出する。

西南、東南側の周溝は共に第V層、灰褐色土中に良好に検出される。溝中からの出土遺物はない。北東側は主体部の北に帯状の磔群が見られる。これらは溝の覆土中に包含されていた可能性も考えられる。

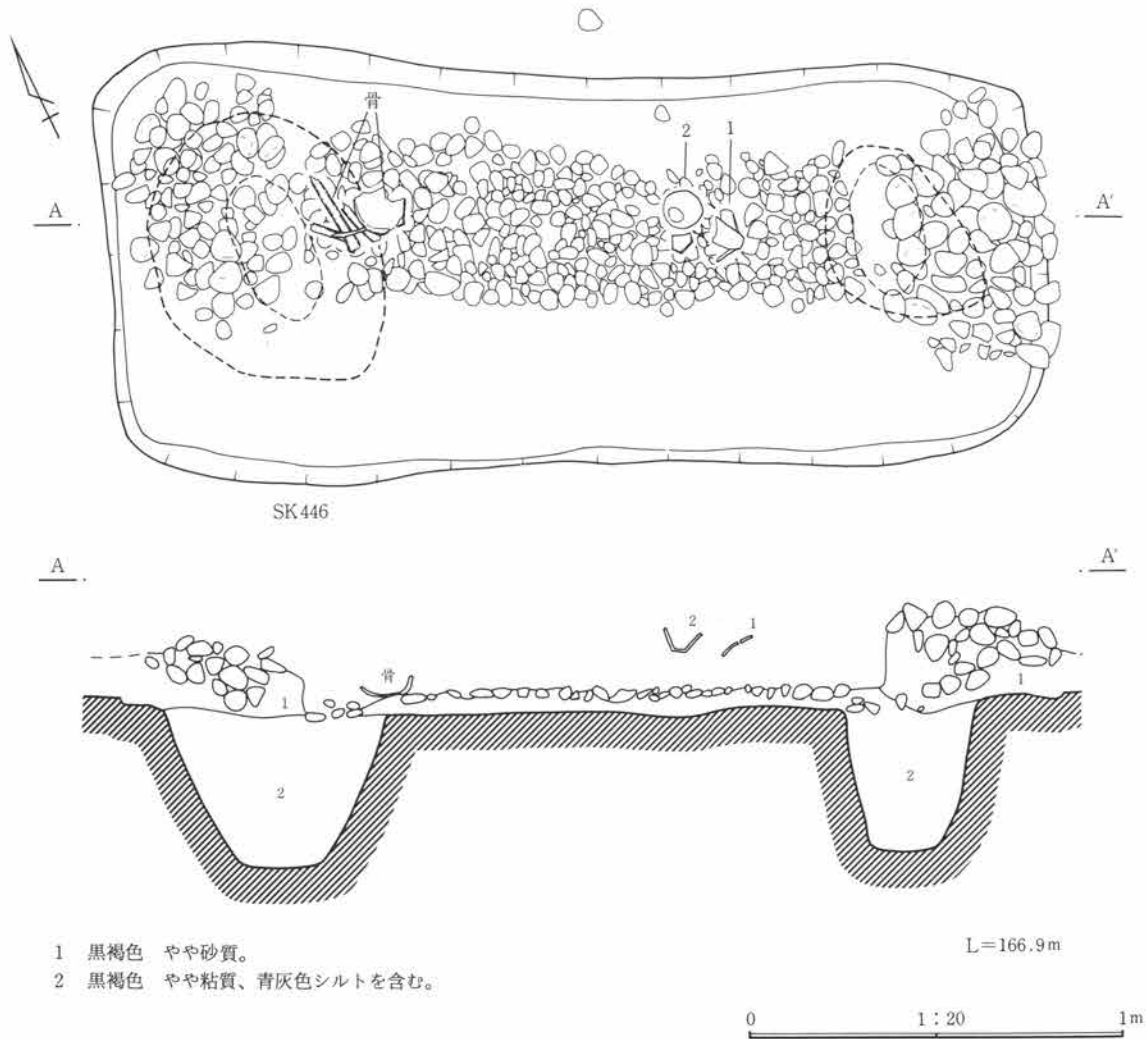
主体部 1基の主体部(SK446)が検出される。長さ2.5m、幅1.1mの隅丸長方形土壇内に磔床墓を造っている土壇は第V層中に検出される。



第278図 16号墓(1)

(5) 墓 跡

S K 446は埋葬部に礫床を設け、その両端部に礫を集積する。礫床面は平坦に小礫を敷き詰めている。側縁部は直線状である。端部礫集積には埋葬部側から板状の材を当てた痕跡かと思われるような鈎状にくびれた状態が観察される。礫集積下、2か所に円形ピットを設けている。礫床面上西端部には被葬者の頭蓋骨、歯が検出される。埋葬部覆土上部より小型高坏、および小型鉢が出土する。



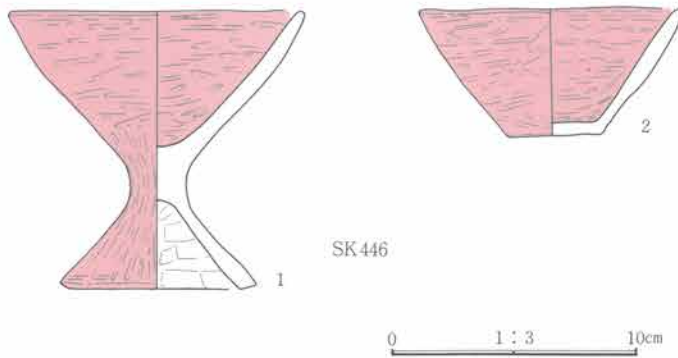
- 1 黒褐色 やや砂質。
- 2 黒褐色 やや粘質、青灰色シルトを含む。

第279図 16号墓(2)

16号墓出土土器観察表 PL.134

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	高坏	口 11.8 高 11.0		外 ヘラミガキ。 内 坏部はヘラミガキ、脚部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	完形 内外面丹彩
2	鉢	口 10.5 高 5.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	ほぼ完形 内外面丹彩

6 検出した遺構・遺物



第280図 16号墓出土遺物

17号墓 (第281~284図、PL. 66・67)

17号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(磔床)×深さ	主体部主軸方位
		SK 136	2.25×0.45	1.5 × (0.4)×0.14	N-34.5°-E
		SK 137	2.3 ×0.55	1.7 × (0.4)×0.06	N-34.5°-E
		SK 138	— ×0.7	— × (0.5)×0.08	N-42.7°-E
		SK 139	— ×0.45	— — —	N-48°-E
		SK 143	— ×0.4	— — —	N-39.5°-E

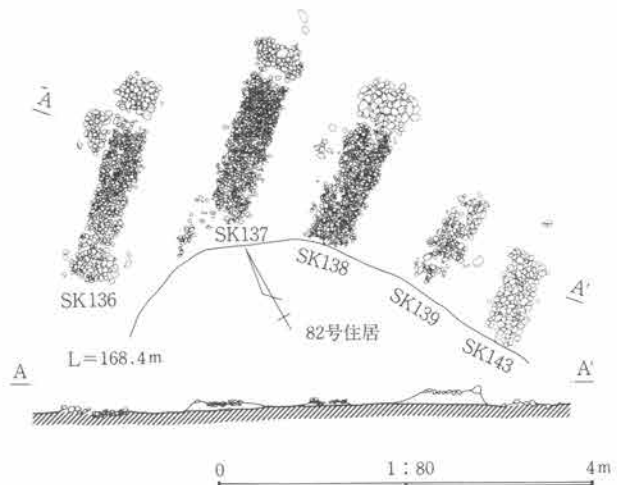
位置 43-H05に位置する。南部は82号住居（古墳前期）と重複する。

周溝 不明。第IV層、第V層中に溝を検出することはできなかった。

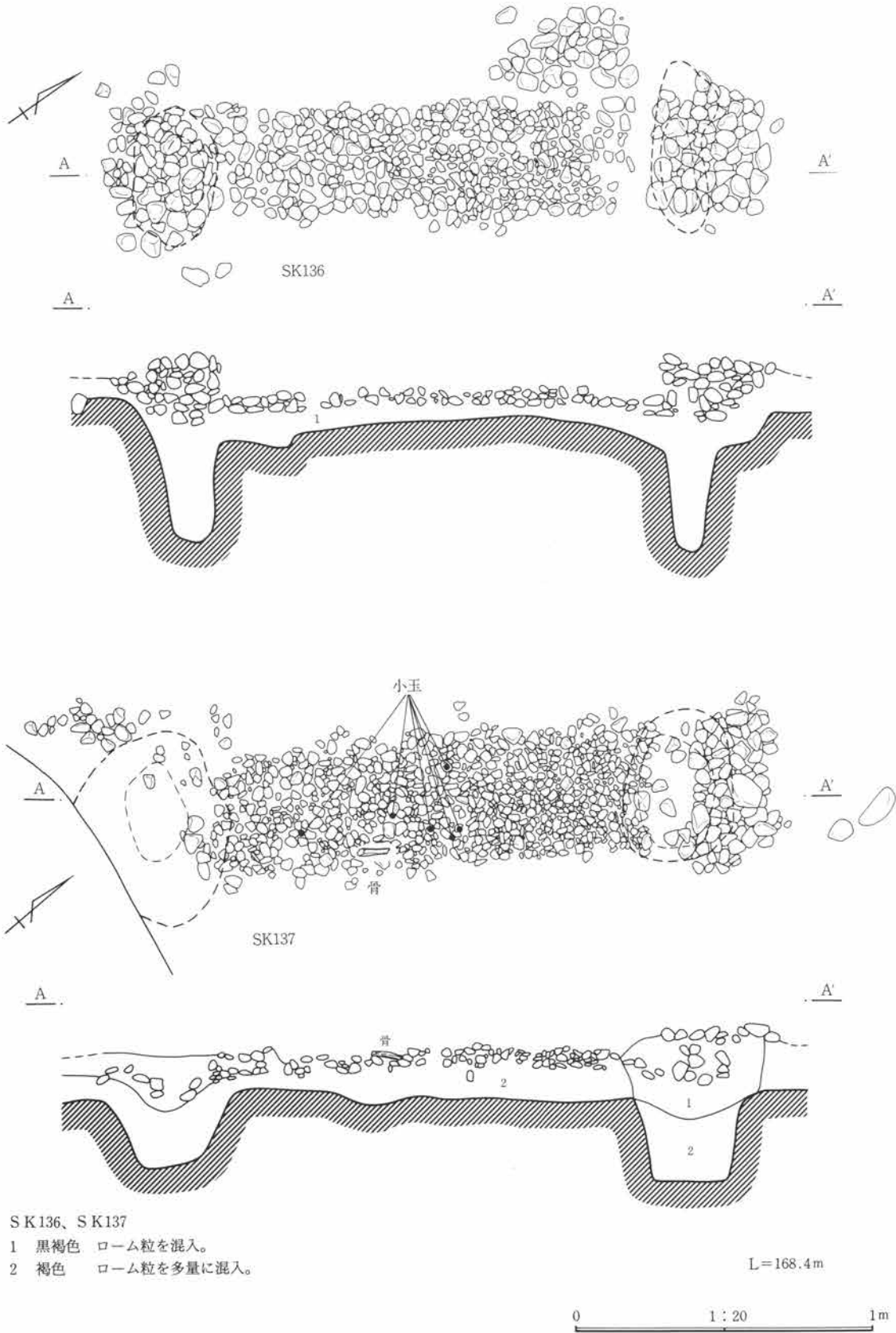
主体部 5基の主体部が並列する。5基の主体部のうち4基は82号住居に切られ南部が欠損している。

SK 136は埋葬部に磔床を設け、その両端部に磔を集積する。部分的ではあるが、磔床部の西側に、磔の無い狭い間隙を隔てて側部磔集積帯が見られる。磔床面は平坦に小磔を敷き詰めている。側縁部は直線状である。端部磔集積には埋葬部側から板状の材を当てた痕跡かと思われるような鈎状にくびれた状態が観察される。磔床西側縁の狭い間隙は直線状に鈎状のくびれまで達している。埋葬部には被葬者の遺体や遺物は検出されない磔集積下、2か所にピットを設けている。

SK 137は埋葬部に磔床を設け、その両端部に磔を集積する。南端部の磔集積は82号住居に切られ失われている。磔床は、小磔が密に敷き詰められている。磔床側縁は直線状である。磔床中央部に比べ側縁部がややせり上がっている。磔床面上南半部に骨片が検出され、埋葬部覆土中よりガラス製小玉が多数出土している。2か所にピットを設けている。



第281図 17号墓 (1)



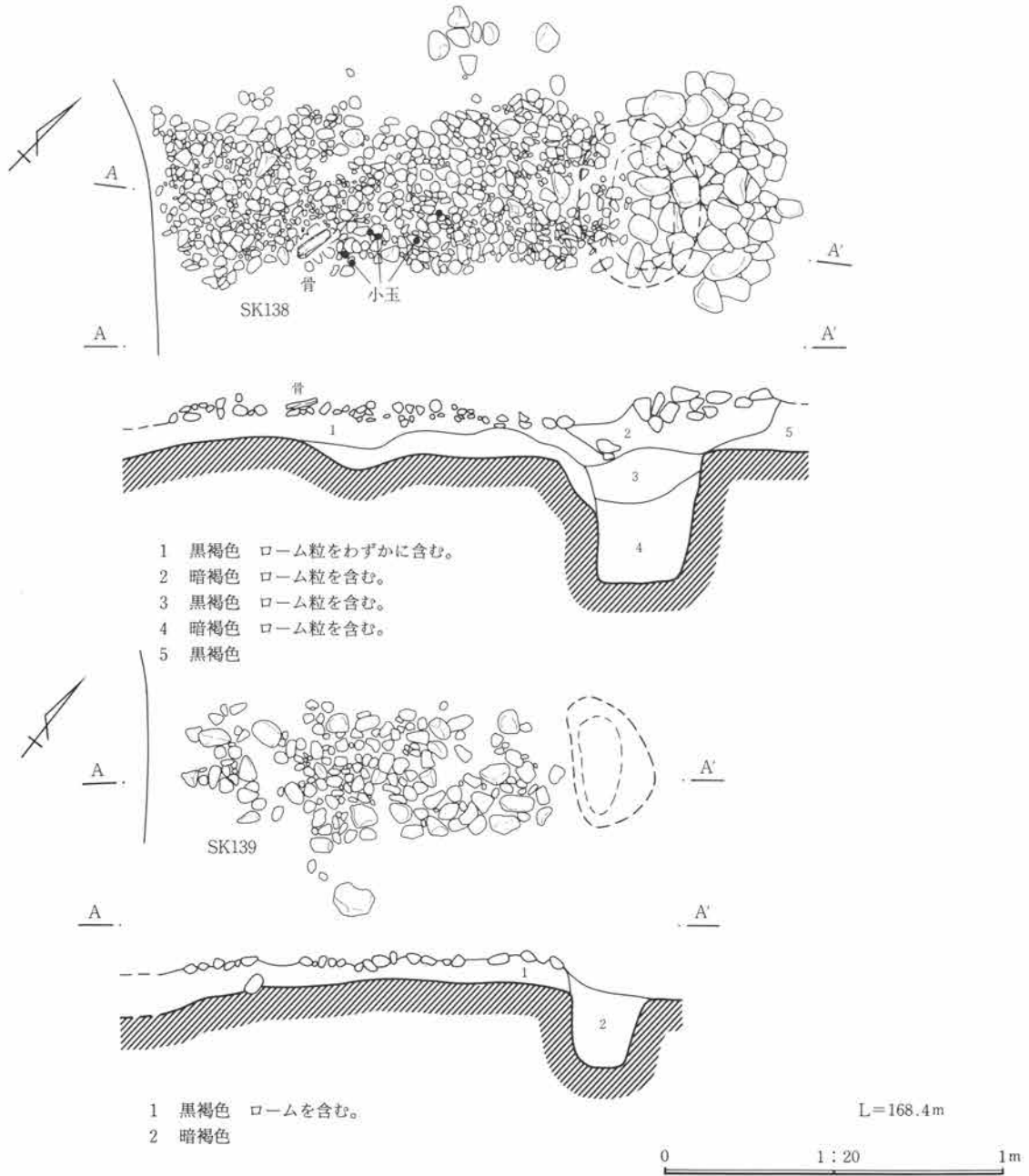
第282図 17号墓 (2)

6 検出した遺構・遺物

S K138は埋葬部に礫床を設け、その両端部に礫を集積する形態であったろう。82号住居に削り取られ南端部礫集積部分を失っている。端部礫集積には埋葬部側から板状の材を当てた痕跡かと思われるような鈎状にくびれた状態が観察される。礫床面上、南端部に被葬者の骨片が検出される。埋葬部覆土中よりガラス製小玉が多数出土している。1か所に円形ピットを設けている。

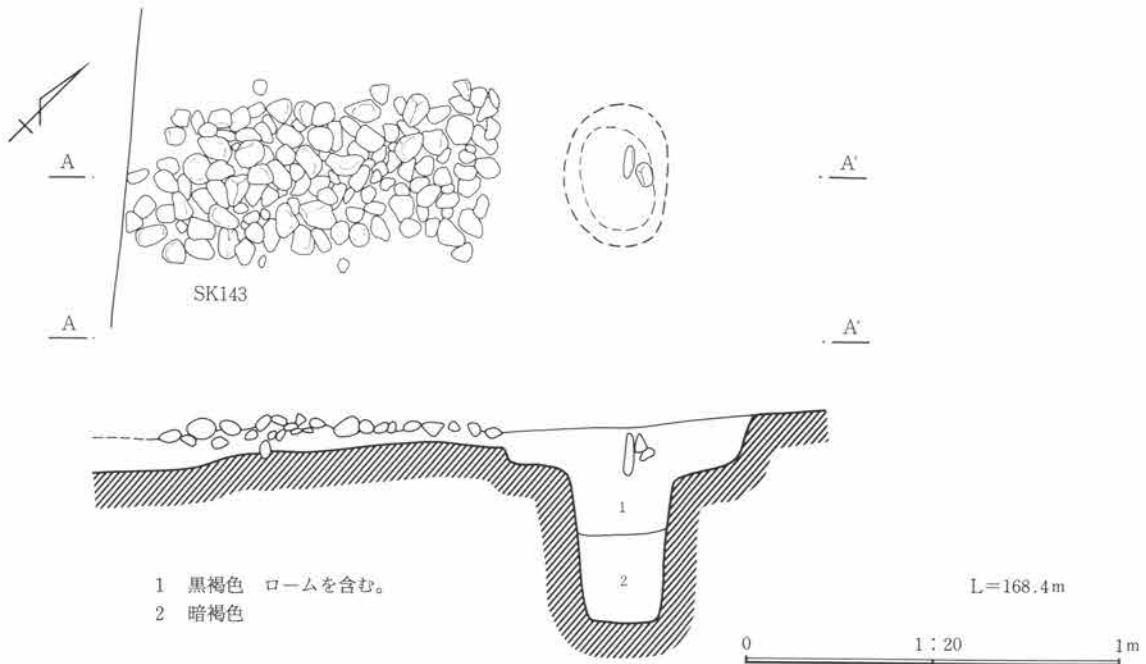
S K139は埋葬部に礫床を設けている。周囲に礫集積は認められない。主体部の南半部は82号住居に削り取られている。礫床部の北東端部に円形ピットが設けられている。遺体や遺物は検出できない。

S K143は埋葬部に礫床を設けている。周囲に礫集積は認められない。主体部の南半部は82号住居に削り取られている。礫床部の北東端部に円形ピットが設けられている。遺体や遺物は検出できない。

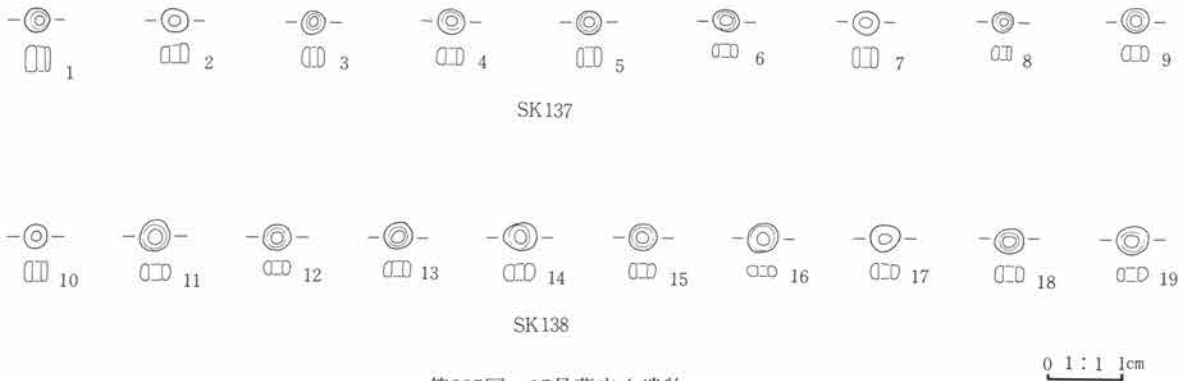


第283図 17号墓(3)





第284図 17号墓(4)



第285図 17号墓出土遺物

17号墓出土玉類観察表 PL.144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
1	小玉	0.35	0.32	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
2	小玉	0.29	0.35	0.2	ガラス、スカイブルー	
3	小玉	0.3	0.3	0.1	ガラス、スカイブルー	
4	小玉	0.25	0.35	0.2	ガラス、スカイブルー	
5	小玉	0.35	0.32	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
6	小玉	0.2	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	
7	小玉	0.32	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	
8	小玉	0.2	0.3	0.1	ガラス、スカイブルー	
9	小玉	0.2	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
10	小玉	0.25	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
11	小玉	0.25	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	
12	小玉	0.2	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
13	小玉	0.25	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
14	小玉	0.22	0.45	0.15	ガラス、スカイブルー	
15	小玉	0.2	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
16	小玉	0.15	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
17	小玉	0.25	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	孔は長円形。
18	小玉	0.2	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	
19	小玉	0.2	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	

6 検出した遺構・遺物

18号墓 (第286~289図、PL. 67・68)

18号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(磔床)×深さ	主体部主軸方位
		SK 114	2.45×0.7	1.45 × (0.5)×0.1	N-56.2°-E
		SK 115	2.75×1.2	1.8 × — ×0.22	N-53.1°-E
		SK 116	2.3 ×0.95	1.55 × (0.4)×0.24	N-44.6°-E
		SK 117	1.85×0.6	1.15 × — ×0.16	N-59.6°-W
		SK 134	2.3 ×0.5	1.45 × (0.4)×0.18	N- 27° -E

位置 48-H04に位置する。

周溝 不明。第IV層、第V層中に溝を検出することはできなかった。

主体部 4基の密集する主体部と、これらの東南に長軸方向を異にする磔床形式の主体部 (SK 134)と土器棺が一群を構成している。周溝などによる区画はないが、SK 134と土器棺が4基の主体部と同じ単位群であった可能性は高い。

SK 114は埋葬部に磔床を設け、その両端部に磔を集積する。埋葬部には遺物や遺体は検出できなかった。

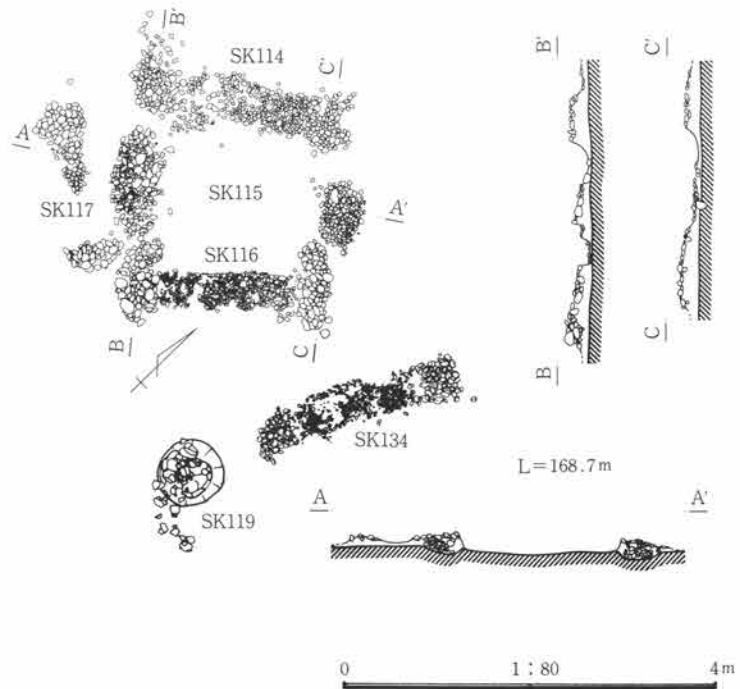
SK 115は埋葬部の両端に磔を集積する。磔床は伴わず、埋葬部の床面は不明確である。端部磔集積は比較的幅広く造られている。特に西南の磔集積は幅広く、側部から材を当てたと思われるような痕跡も観察されるが、明確ではない。埋葬部に被葬者の歯や頭蓋骨片、肢骨片を検出する。

SK 116は埋葬部に磔床を設け、その両端部に磔を集積する。磔床側縁は直線的で、しかも中央部に比べややせり上がっている。端部磔集積には鈎状のくびれやほぞ穴状の凹みなど、磔床側縁から端部磔集積にかけて板状の材を設置したとみられるような痕跡が観察される。磔床面上北東部に被葬者の歯が検出され、その周囲にガラス製小玉が数点出土する。

SK 117は埋葬部に磔床を設け、その両端に磔を集積する。小さな主体部である。磔床は埋葬部の東半部は欠けている。遺体は検出されない。埋葬部の覆土中よりガラス製小玉が数点出土する。

SK 134は埋葬部に磔床を設け、その両端に磔を集積する。磔床は小円磔をまばらに敷いているが側縁は直線的で、しかも中央部よりややせり上がった状態が見られる。端部磔集積は磔床部と同幅である。磔集積下、2か所に円形ピットを設けている。磔床面上、南半部より被葬者の肢骨片、西側縁部には鉄剣(戈)が尖端を南方向に向けて検出された。

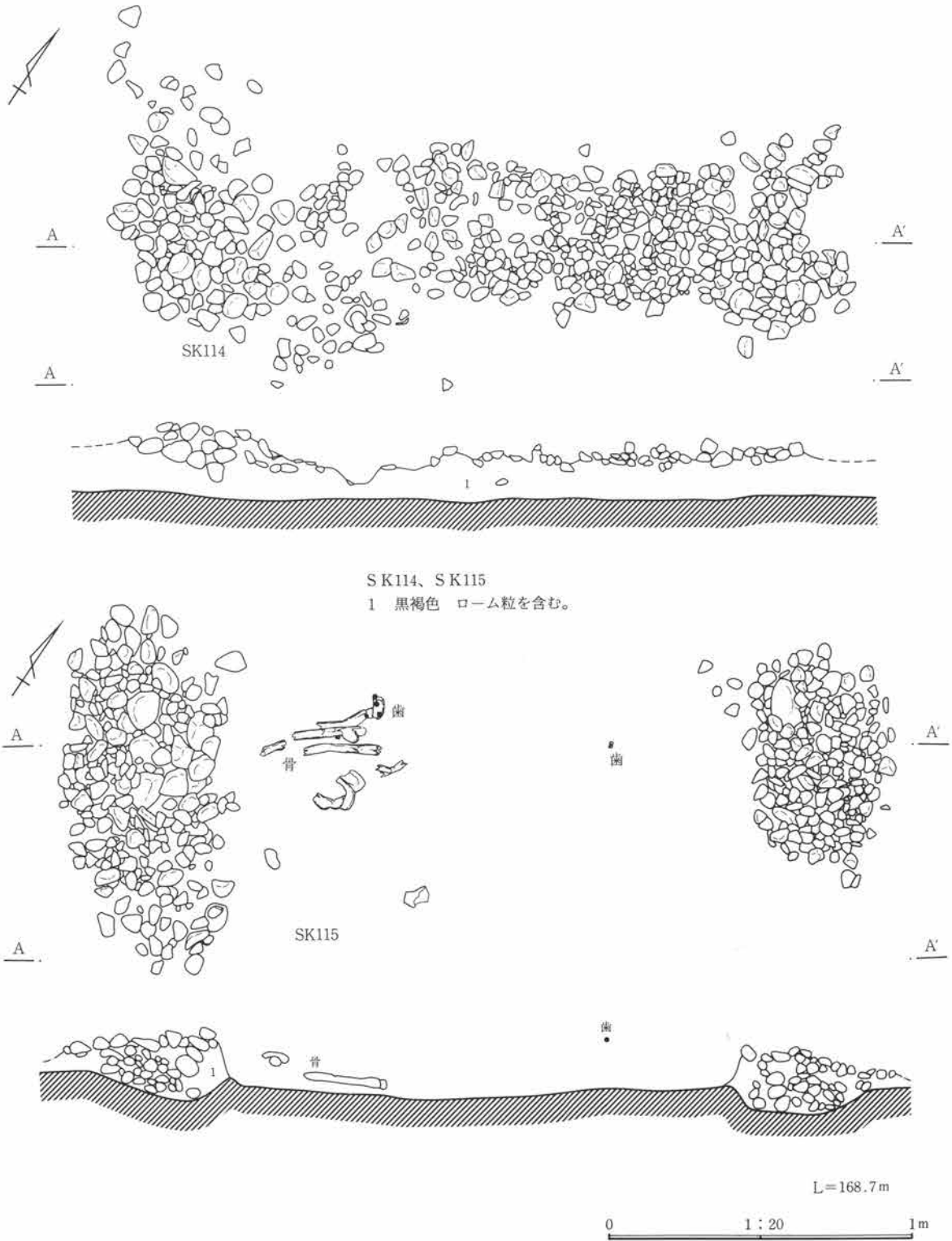
SK 119は壺棺である。径50cm前後の浅いピットを掘り、大型壺をほぼ直立に埋置している。上半部は後世



第286図 18号墓(1)

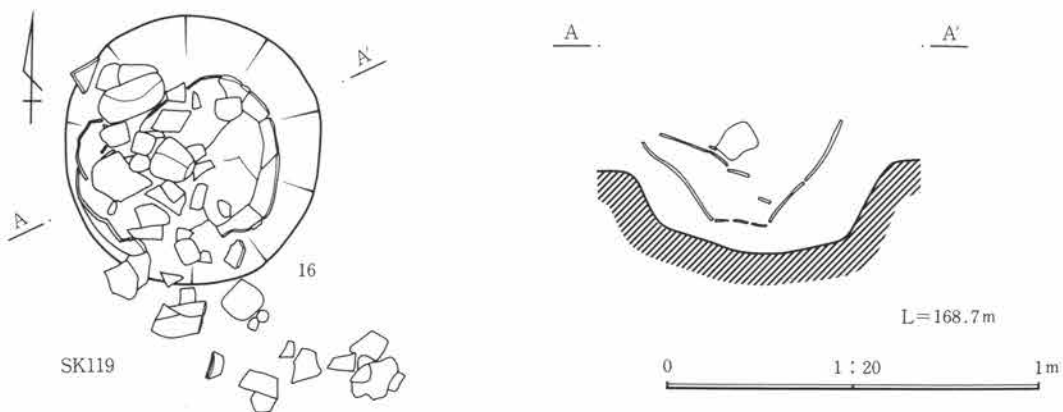
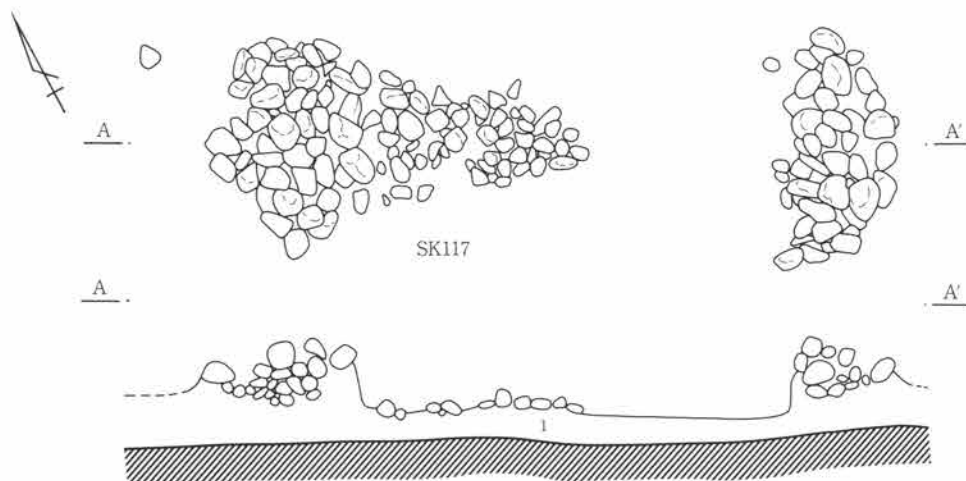
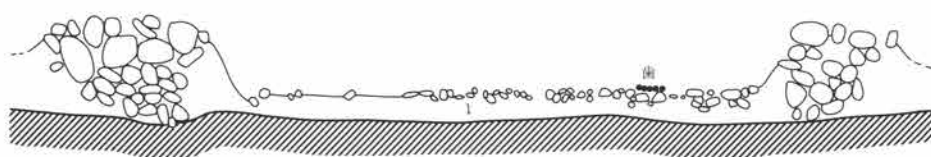
(5) 墓 跡

の攪乱により失われているが壺棺内より多数の崩落した棺の破片が出土している。蓋を付していた可能性が高いが、その状況は不明である。棺内から被葬者の歯が数点出土している。

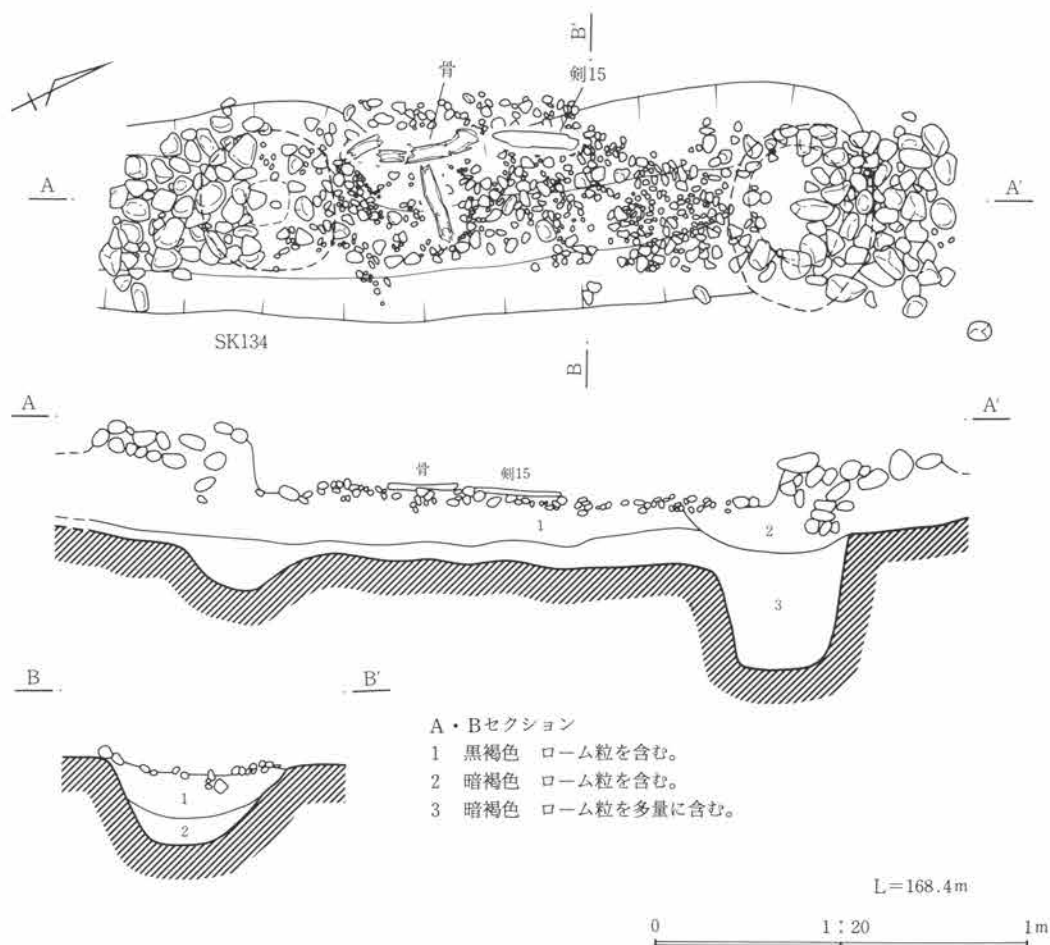


第287図 18号墓(2)

6 検出した遺構・遺物



第288図 18号墓(3)



第289図 18号墓(4)

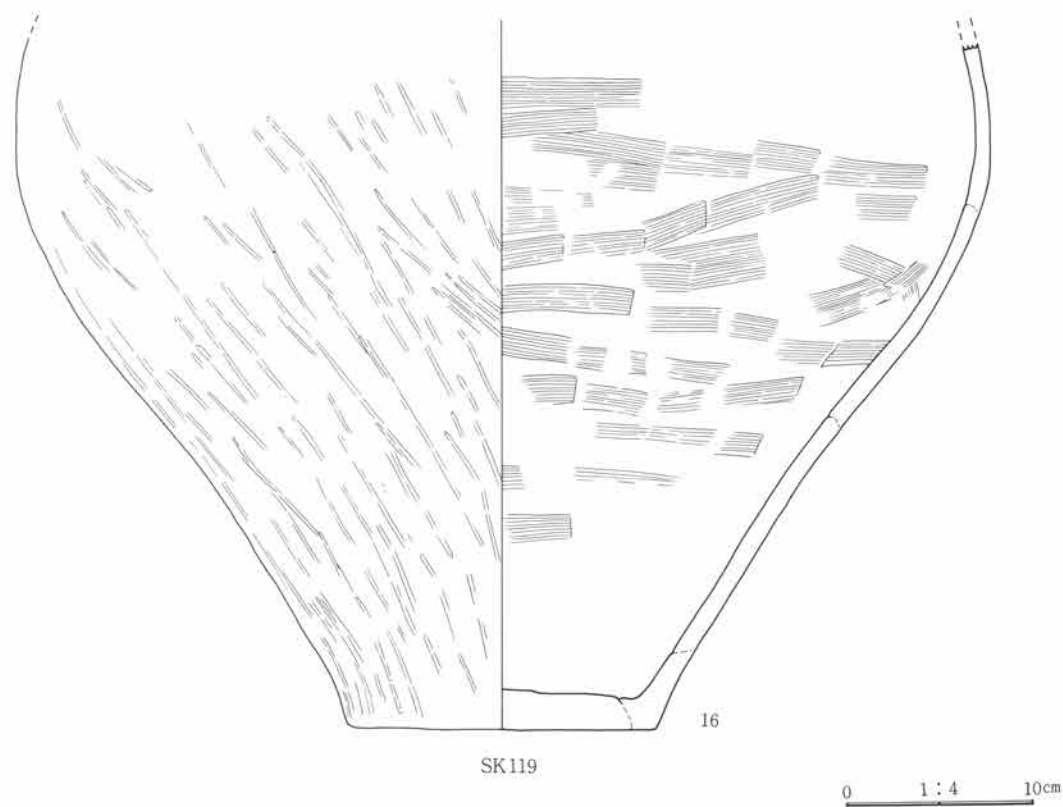
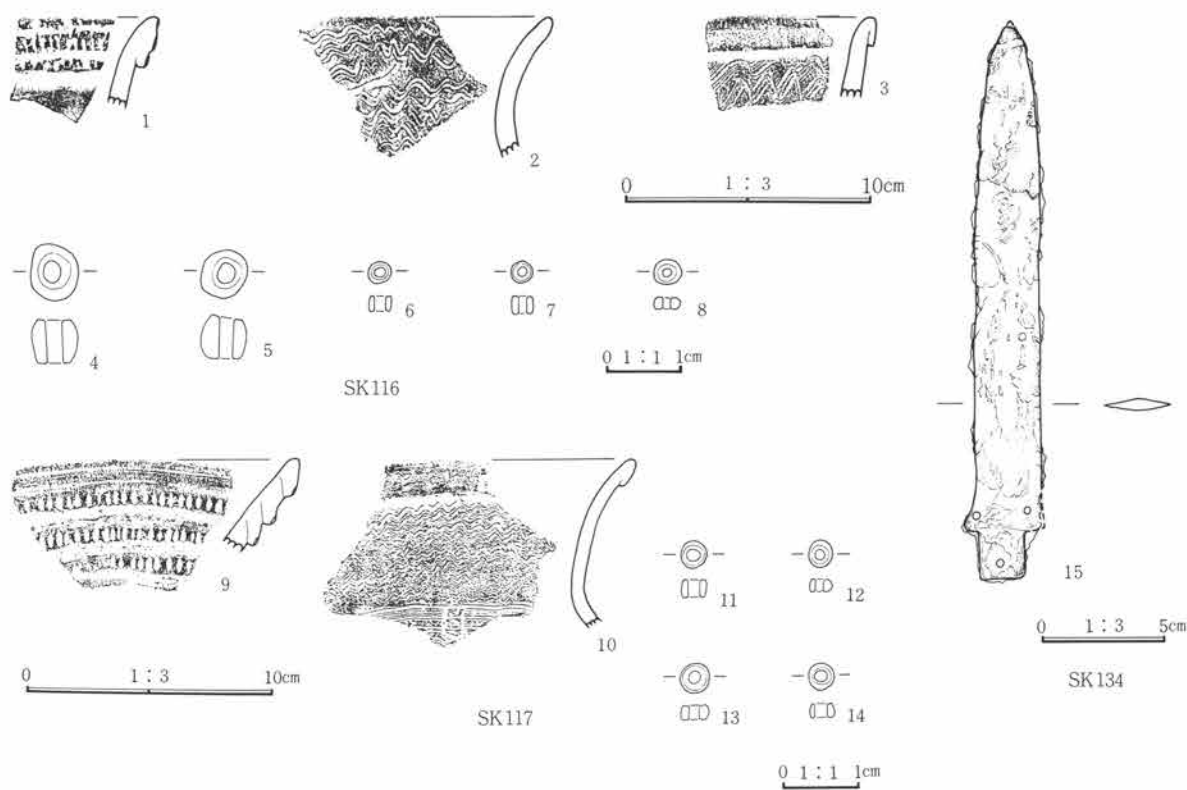
18号墓出土土器観察表(拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
1	壺		折り返し口縁	外口縁部は沈線区画、刻み目、丹彩。内丹彩。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	4%
2	甕			外波状文。内ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	鈍橙色	7%
3	甕		折り返し口縁	外口縁部はヨコナデ、以下波状文。	細砂粒を含む。	堅緻	鈍橙色	5%
9	壺	口 24	3段口縁	外口縁部は刻み目。内ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	やや堅緻	橙色	10%
10	甕	口 18	折り返し口縁	外頸部は2連止め簾状文。内ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	暗赤褐色	14%

18号墓出土土玉類観察表 PL.144

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
4	小玉	0.6	0.65	0.2	ガラス、コバルトブルー	孔は長円形。
5	小玉	0.6	0.6	0.25	ガラス、コバルトブルー	孔は長円形。
6	小玉	0.2	0.3	0.16	ガラス、スカイブルー	孔は長円形。
7	小玉	0.25	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
8	小玉	0.15	0.4	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
11	小玉	0.25	0.35	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
12	小玉	0.2	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
13	小玉	0.2	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	
14	小玉	0.2	0.35	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。

6 検出した遺構・遺物



第290図 18号墓出土遺物



18号墓出土鉄剣(戈)観察表 PL.135

遺物番号	全長	身幅	茎長	身厚	形状、遺存状態など
15	22.0	2.6	1.8	0.5±	茎は短く、目釘孔を1孔認める。刃部部の刃線はスカート状に広がる。反対側は錆が進行し、刃部部の形状は不明瞭である。刃部部にやや明確さを欠くが、2孔を認める。脛巾(ハバキ)をとめていた孔であろう。鏑(シノギ)は不明瞭。

18号墓出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
16	壺 棺 胴 底	51.8 16.2		外 ヘラミガキ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	胴部%周 開口部は欠損。

19号墓 (第291~297図、PL.68~70)

19号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(磔床)×深さ	主体部主軸方位
		S K 108	1.9 × 1.05	0.84 × 0.4 × 0.19	N-31.3°-E
		S K 110	2.2 × 0.65	1.45 × (0.5) × 0.19	N-59°-W
		S K 111	1.9 × 0.6	1.25 × (0.45) × 0.15	N-40.3°-E
		S K 113	1.65 × 0.7	0.8 × (0.35) × 0.19	N-60°-W
		S K 132	2.4 × 0.9	1.45 × (0.4) × 0.1	N-30.5°-W
		S K 133	2.6 × 1.0	1.6 × (0.4) × 0.17	N-60°-W
		S K 135	2.5 × 1.35	1.85 × 0.7 × 0.18	N-33.7°-E
		S K 140	2.55 × 0.65	1.5 × (0.4) × 0.24	N-33°-E
		S K 142	1.7 × 0.55	1.25 × (0.4) × 0.2	N-56°-W
		S K 145	1.77 × 0.68±	1.55 × (0.4) × 0.1	N-62°-W

**位置** 45-H05に位置する。周囲には17号墓、18号墓、20号墓が隣接する。本遺跡の墓域中、最も墓が密集した区域である。

**周溝** 不明。第IV層、第V層中に溝を検出することはできなかった。

**主体部** 10基の主体部が相互に間隙を置くことなく密集している。長軸線方向は同方向か、直行方向をとり整然と配置されている。ただS K 132が1基のみ、他の主体部よりも45°前後振れた配置となっている。

S K 108は埋葬部に磔床を設け、その周囲に磔集積帯を巡らす。磔床は、磔をややまばらに敷く。磔集積帯は比較的幅広で、埋葬部は小さい。主体部のレベルは周囲の他の主体部に比べ際立って高い。埋葬部の覆土中よりガラス製小玉が出土している。被葬者の遺体は認められない。

S K 109はS K 108の西に隣接した地点に検出される。磔床などの埋葬施設は認められない。第IV層の黒褐色土面上に、人歯とその周囲50cm前後の範囲にヒスイ製の勾玉やガラス製小玉が点在していた。

S K 110は埋葬部に磔床を設け、その両端部に磔を集積する。端部磔集積には埋葬部側から板状の材を当てた痕跡かと思われるような鈎状にくびれた状態が観察される。北側部には磔集積帯が部分的に認められる。磔集積下、2か所に円形ピットを設けている。埋葬部には被葬者の骨片が検出される。遺物は認められない。

S K 111は埋葬部に磔床を設け、その両端部に磔を集積する。磔床側縁は直線的で、北側の端部磔集積は磔

6 検出した遺構・遺物

床と同幅。南側の端部礫集積は側縁部に鈎状のくびれが認められる。これは、礫床側縁から端部礫集積にかけて板状の材が設置されていた痕跡ではないかと思われる。礫集積下、2か所に円形ピットを設けている。礫床面上、中央部に被葬者の歯が検出される。礫床の西側縁に沿って鉄剣が出土した。鉄剣は尖端を南に向けた状態で埋置されていた。

SK113は埋葬部に礫床を設け、その両端部に礫を集積する。規模は小さい。礫床部の礫の敷き方は側縁部がまばらである。端部礫集積には鈎状のくびれやほぞ穴状の凹みなど、礫床側縁から端部礫集積にかけて板状の材を設置したとみられるような痕跡が観察される。礫床面上、東端部にガラス製小玉を数点、ヒスイ製勾玉1点を検出する。遺体などは認められない。

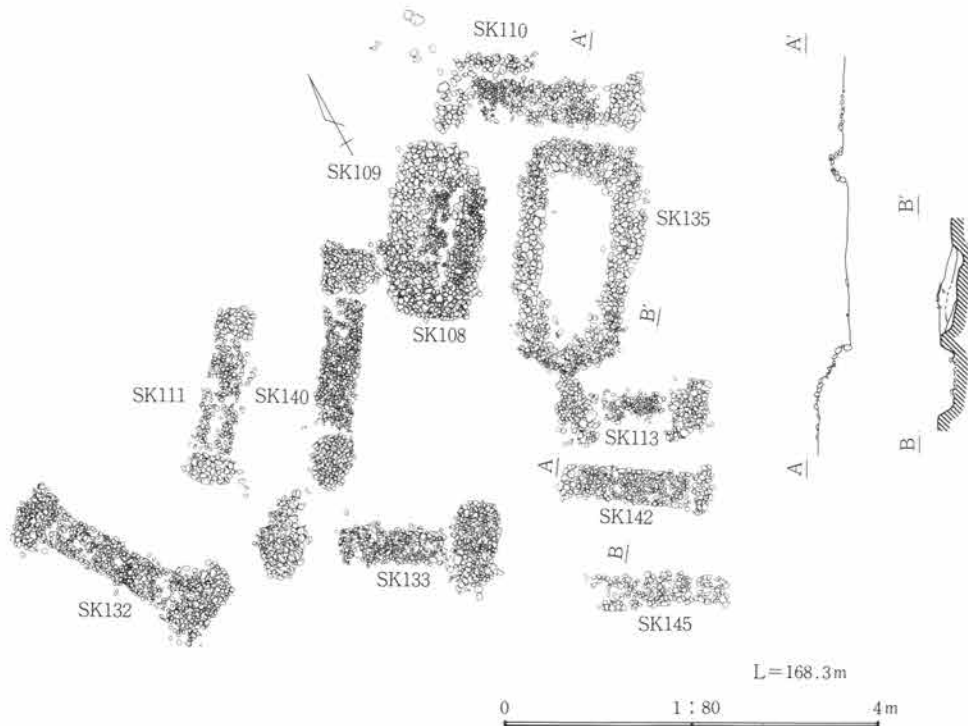
SK132は埋葬部に礫床を設け、その両端部に礫を集積する。礫床側縁部は直線的である。礫集積下、2か所に円形ピットを設けている。礫床面上北半部に被葬者の下肢骨、歯、ガラス製小玉を多数検出する。

SK133は埋葬部に礫床を設け、その両端部に礫を集積する。埋葬部の西端部では礫床をやや広く欠いている。礫集積の西半部に被葬者の下肢骨、東半部には歯、その周囲にはガラス製小玉が出土している。

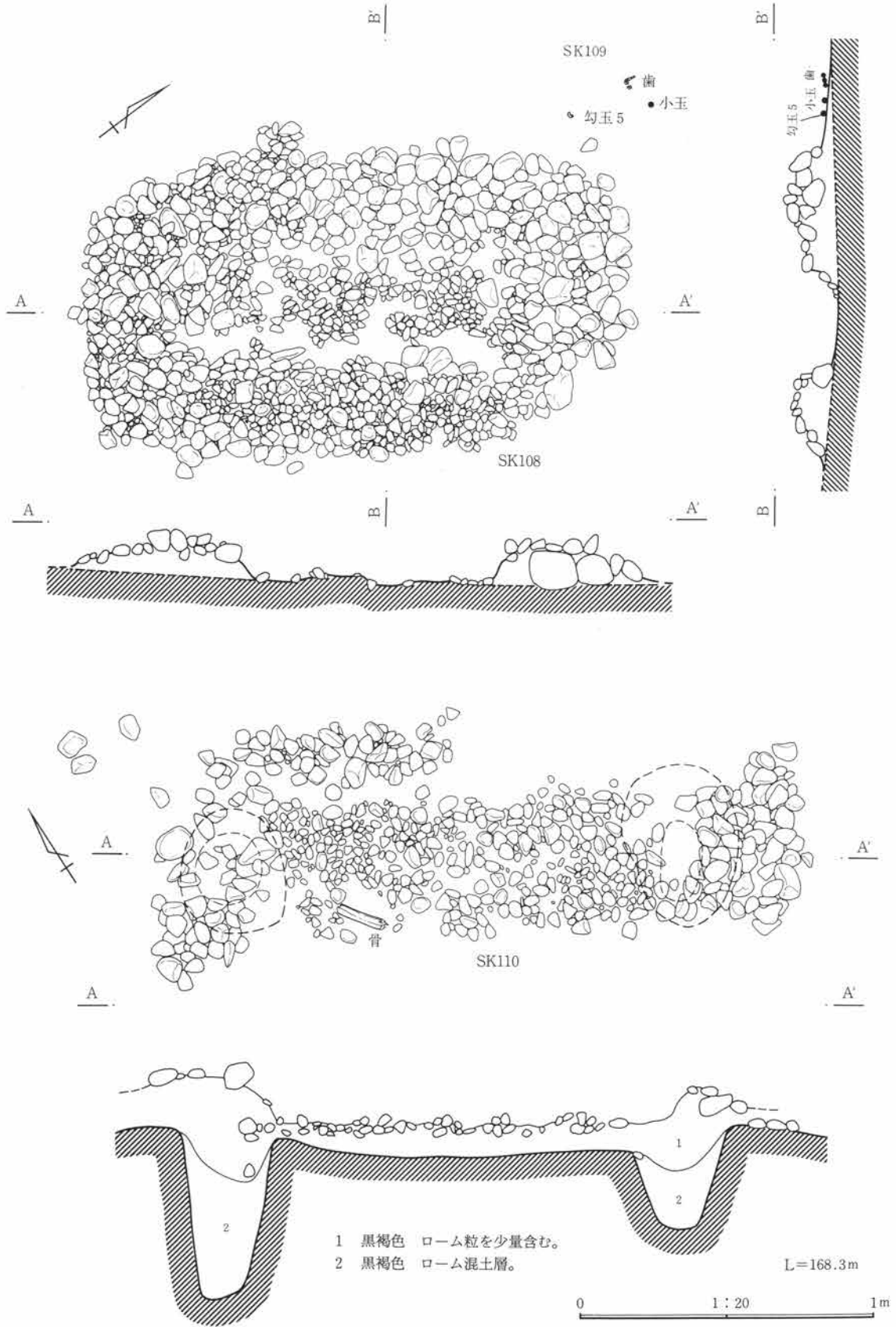
SK135は埋葬部の周囲に礫集積帯を巡らす。埋葬部は比較的大きい。礫床は伴わない。礫集積下、2か所に円形ピットを設けている。埋葬部北半部に被葬者の歯、骨片、ガラス製小玉が点在する。

SK140は埋葬部に礫床を設け、その両端部に礫を集積する。礫床は小円礫を密に敷き詰め、側縁は直線的である。礫集積下、2か所に長円形ピットを設けている。礫床面上南部に被葬者の長骨片と鉄剣を検出する。鉄剣は尖端を南方向に向けている。埋葬部覆土中よりガラス製小玉が数点出土している。

SK142は埋葬部に礫床を設け、その両端部に礫を集積する。規模は小さい。礫床側縁にはやや大きめの円礫を直線的に一行、高く縁どるように並べている。端部礫集積は礫床部と同幅か、側部がくびれており板状



第291図 19号墓(1)

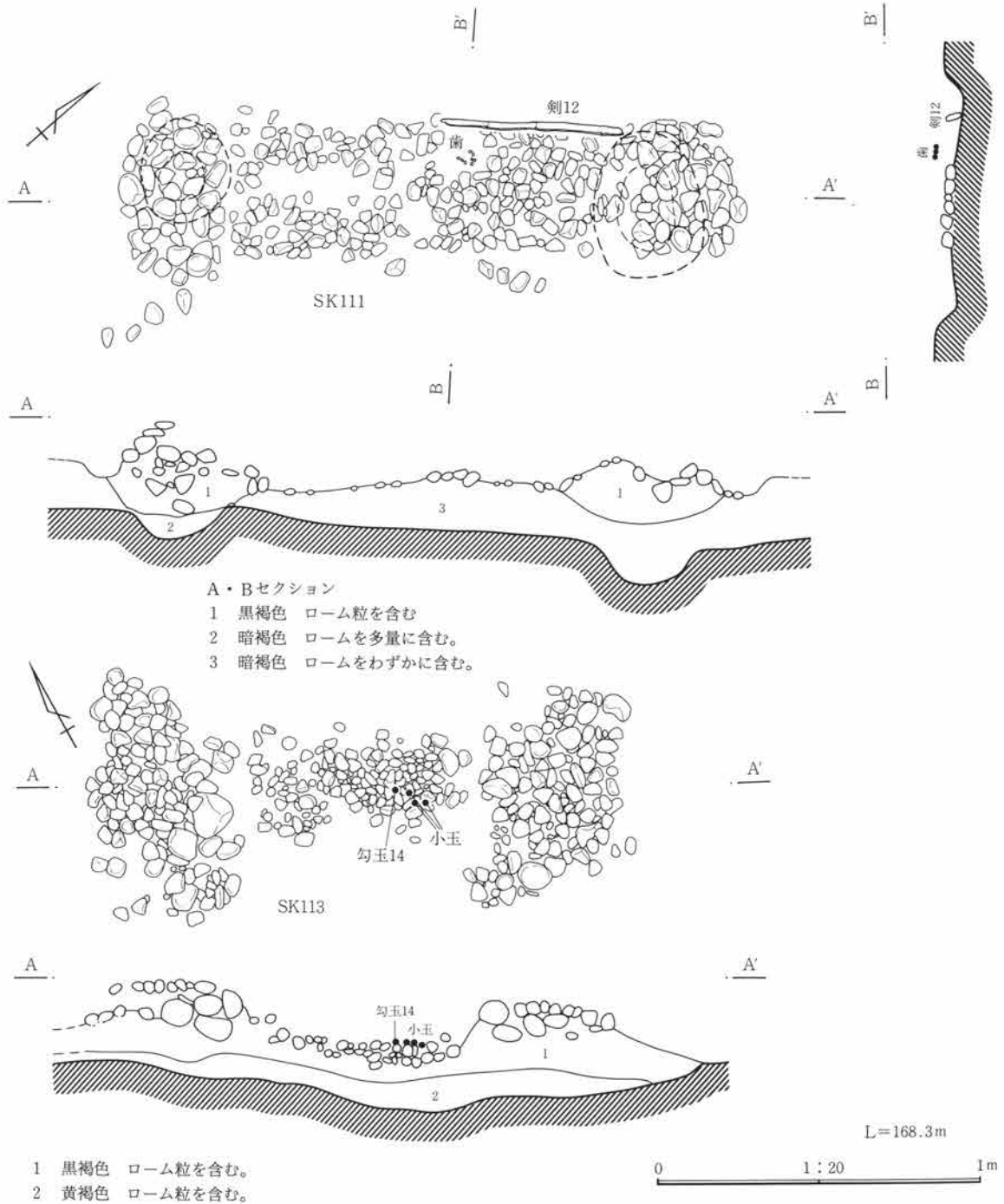


第292図 19号墓 (2)

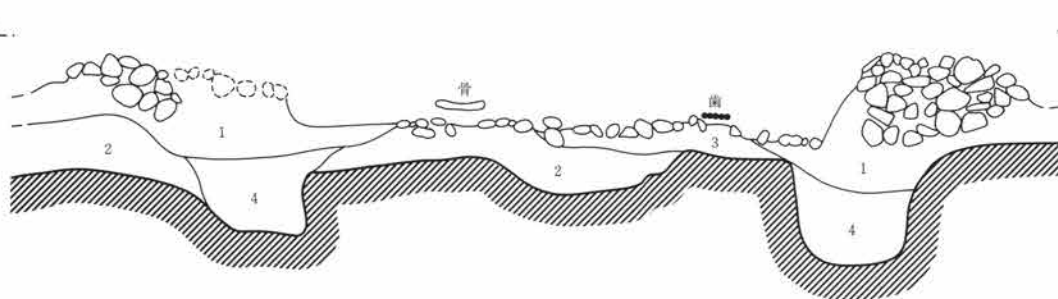
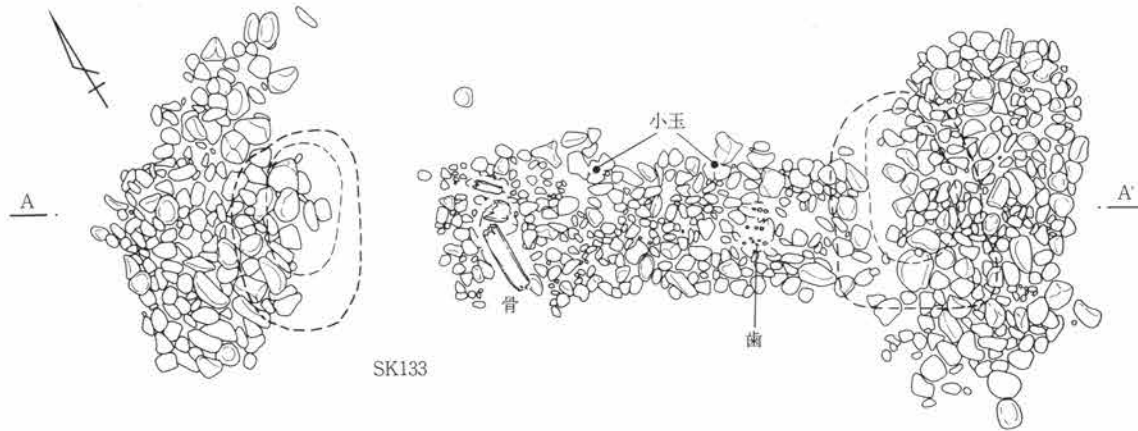
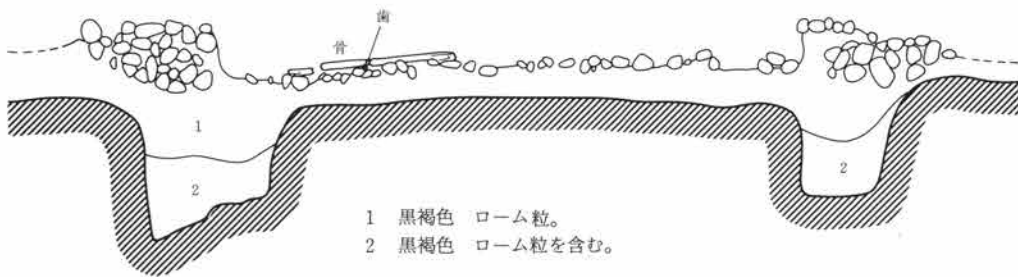
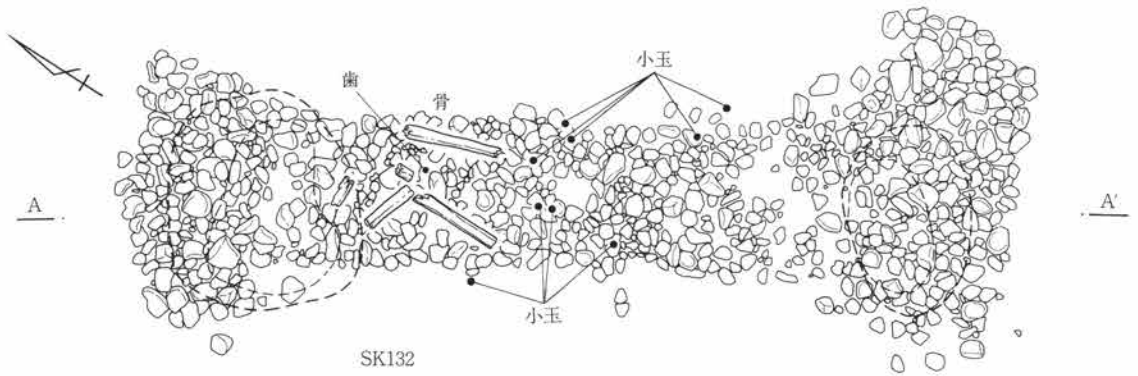
6 検出した遺構・遺物

の材が両側部に設置されていたのではないかとされる。礫床面上北東部に被葬者の歯が出土している。礫集積下、2か所にピットを設けている。

SK145は19号墓の最終精査段階で検出された主体部である。このため全景写真には見えない。第V層、暗灰色土下15cmの深さに掘られた土壌内に礫床を設けている。周囲に礫集積を伴わない。礫床は、土壌底面全体に、ややまばらではあるが長方形に大振りの円礫が敷かれている。礫床側縁が中央部よりやや高い。礫床下には円形ピットを伴わない。礫床面上、西部に骨片を検出する。遺物は認められない。



第293図 19号墓(3)

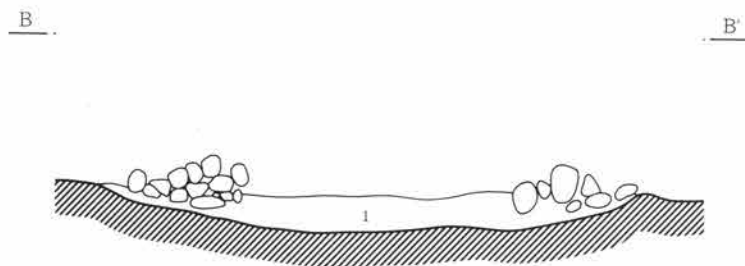
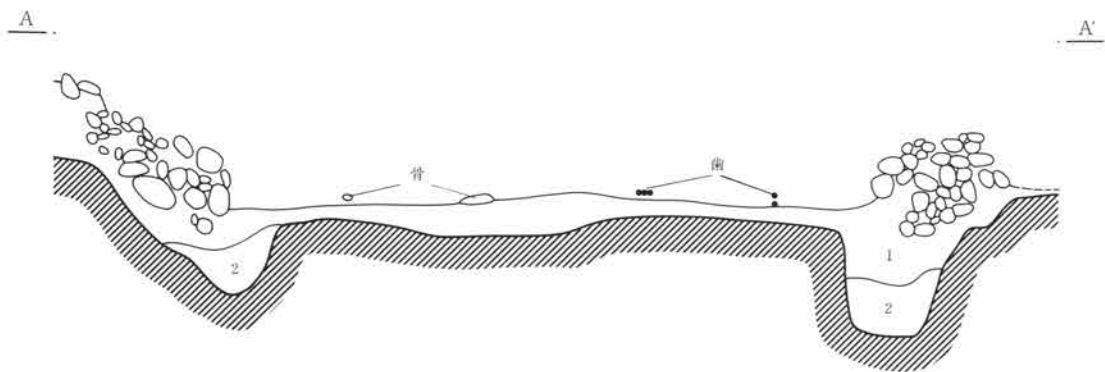
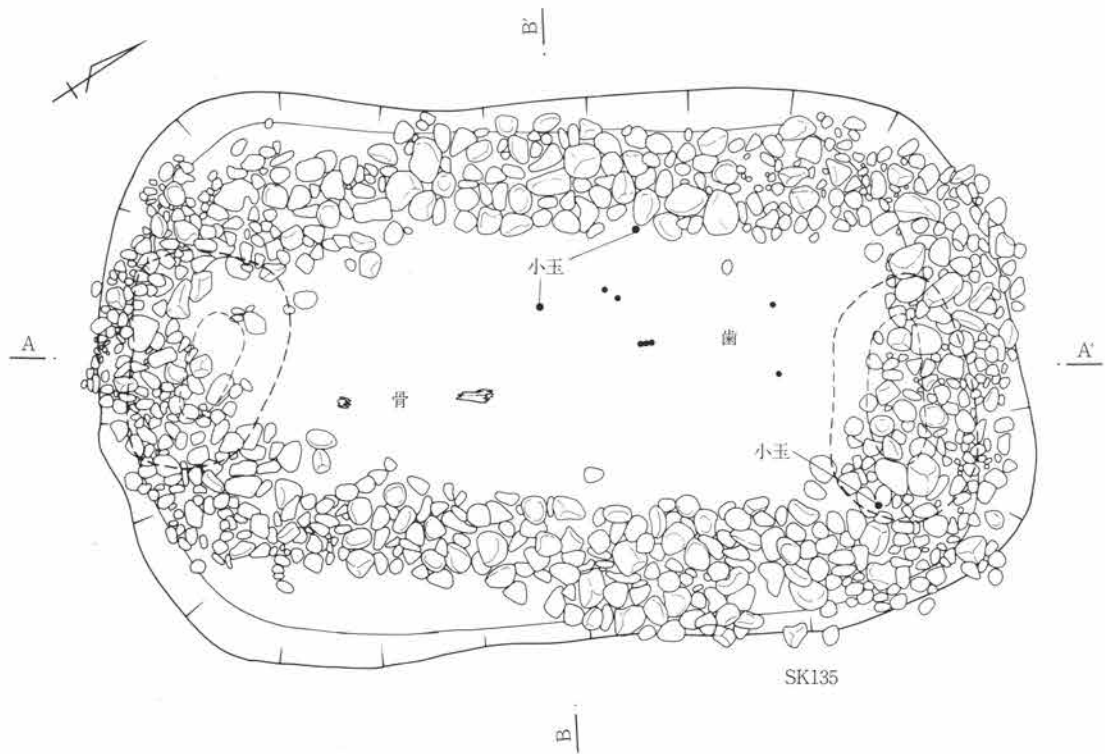


L=168.3m

0 1 : 20 1m

第294図 19号墓 (4)

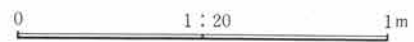
6 検出した遺構・遺物



A・Bセクション

- 1 黒褐色 ローム粒を少量含む。
- 2 黒褐色 ローム粒を含む。

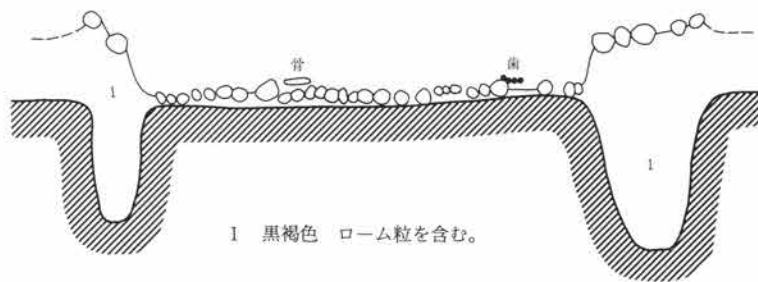
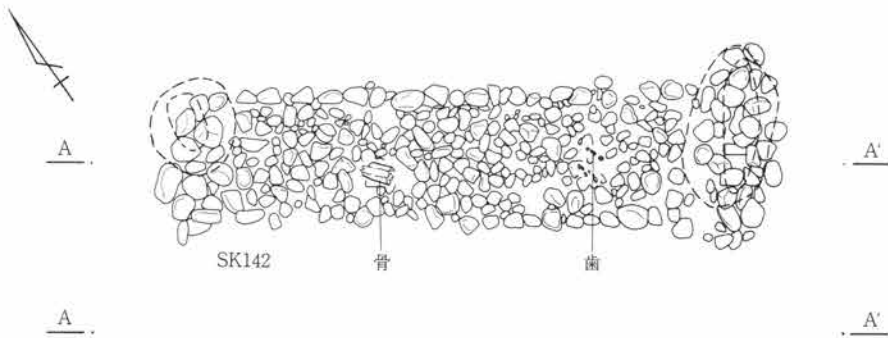
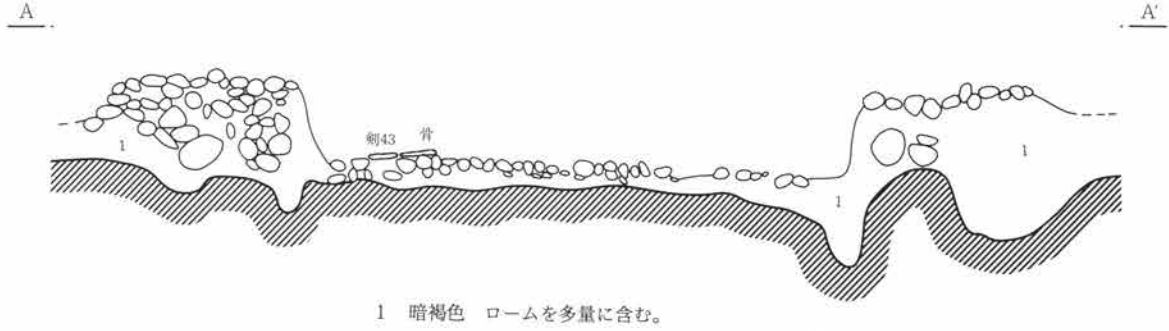
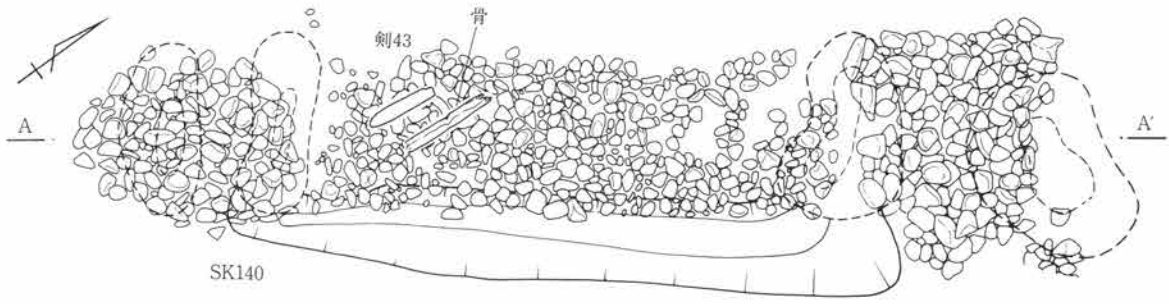
L=168.3m



第295図 19号墓(5)



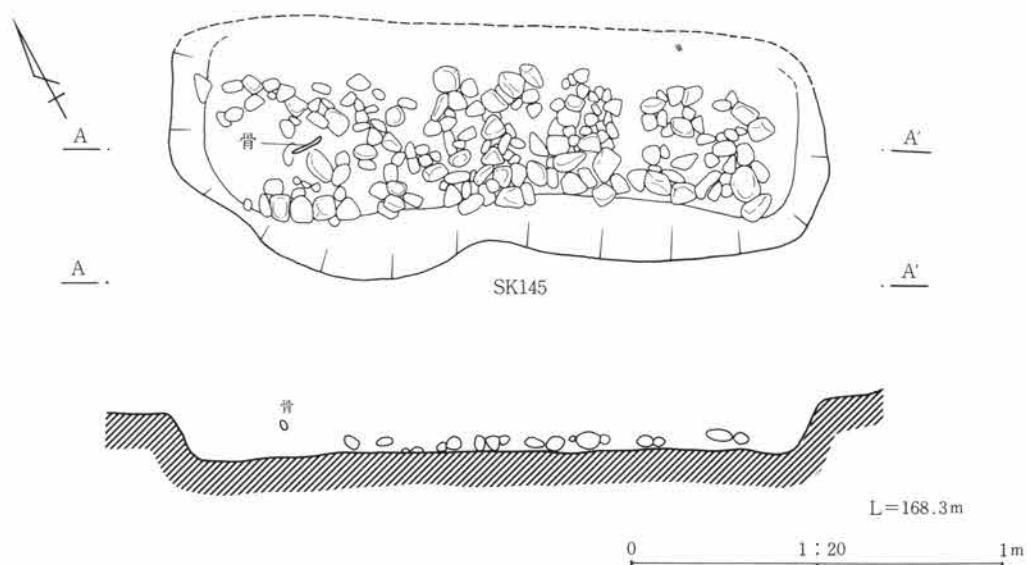
(5) 墓 跡



L=168.3m  
0 1:20 1m

第296図 19号墓(6)

6 検出した遺構・遺物



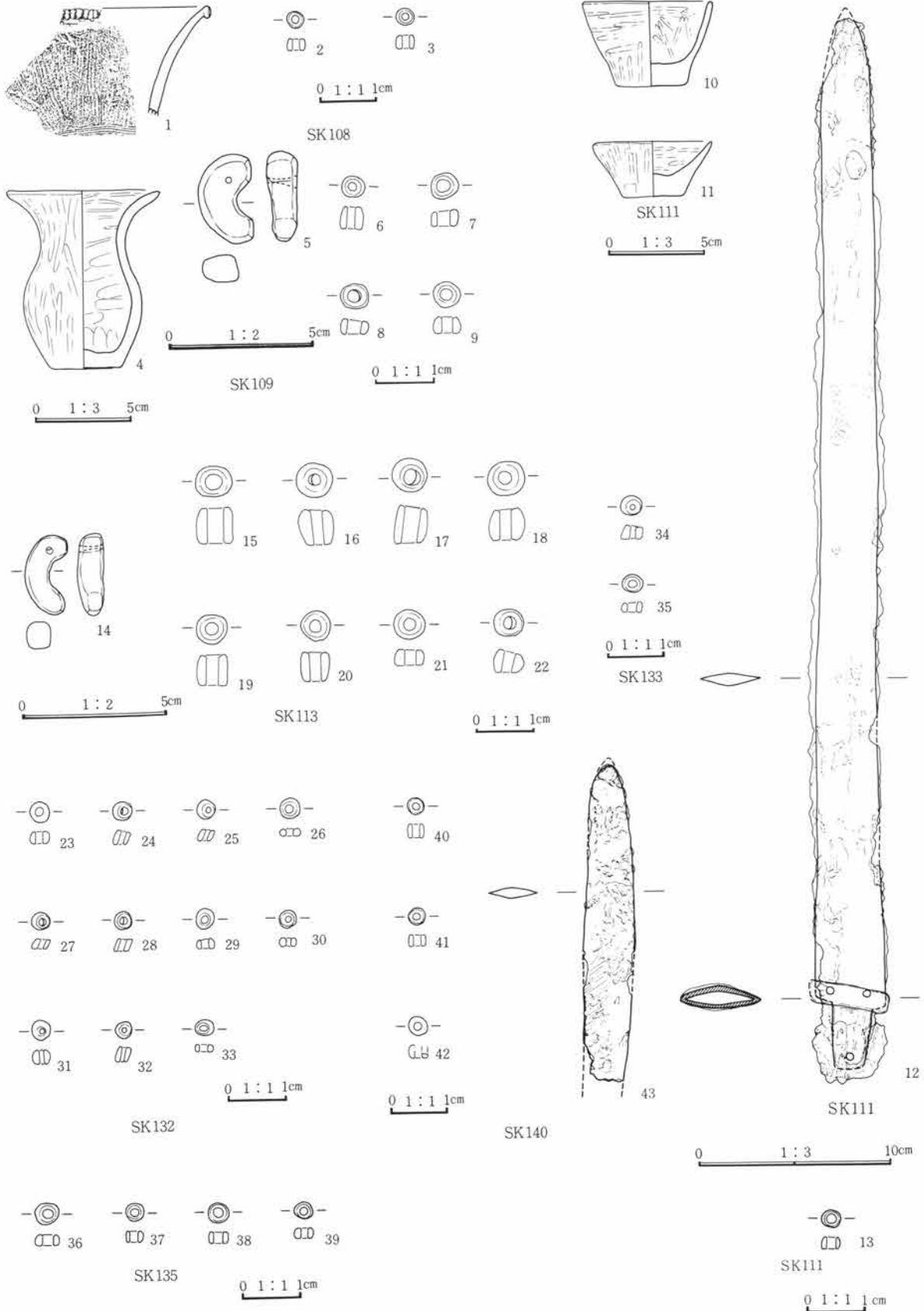
第297図 19号墓(7)

19号墓出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
1	壺		折り返し口縁	外 口縁部は刻み目。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	灰白色	8%

19号墓出土玉類観察表 PL.135・145

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
2	小玉	0.2	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
3	小玉	0.25	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	
5	勾玉	3.0	—	0.3	ヒスイ	研磨面あり。
6	小玉	0.45	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	
7	小玉	0.3	0.45	0.25	ガラス、スカイブルー	
8	小玉	0.25	0.5	0.35	ガラス、スカイブルー	
9	小玉	0.3	0.49	0.2	ガラス、スカイブルー	
13	小玉	0.22	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	
14	勾玉	2.7	—	0.25	ヒスイ	研磨面あり。
15	小玉	0.65	0.65	0.3	ガラス、コバルトブルー	
16	小玉	0.6	0.65	0.2	ガラス、コバルトブルー	
17	小玉	0.7	0.61	0.35	ガラス、コバルトブルー	
18	小玉	0.55	0.65	0.2	ガラス、コバルトブルー	
19	小玉	0.5	0.52	0.2	ガラス、コバルトブルー	
20	小玉	0.5	0.55	0.25	ガラス、コバルトブルー	
21	小玉	0.55	0.55	0.22	ガラス、コバルトブルー	
22	小玉	0.5	0.5	0.3	ガラス、コバルトブルー	
23	小玉	0.2	0.37	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
24	小玉	0.22	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー	
25	小玉	0.18	0.34	0.1	ガラス、スカイブルー	
26	小玉	0.14	0.38	0.12	ガラス、スカイブルー	
27	小玉	0.15	0.35	0.12	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
28	小玉	0.21	0.3	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
29	小玉	0.17	0.32	0.1	ガラス、スカイブルー	
30	小玉	0.15	0.3	0.1	ガラス、スカイブルー	
31	小玉	0.21	0.32	0.1	ガラス、スカイブルー	
32	小玉	0.24	0.3	0.7	ガラス、スカイブルー	
33	小玉	0.14	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	
34	小玉	0.25	0.4	0.1	ガラス、スカイブルー	
35	小玉	0.18	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	
36	小玉	0.18	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
37	小玉	0.2	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	
38	小玉	0.2	0.35	0.18	ガラス、スカイブルー	
39	小玉	0.2	0.32	0.15	ガラス、スカイブルー	
40	小玉	0.2	0.3	0.15	ガラス、スカイブルー	孔は楕円形。
41	小玉	0.2	0.28	0.18	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
42	小玉	0.23	0.35	0.13	ガラス、スカイブルー	



第298图 19号墓出土遗物

6 検出した遺構・遺物

19号墓出土土器観察表 PL.135

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
4	壺	口 7.3 高 9.1		外 ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部は指ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	ほぼ完形
10	鉢	口 6.8 底 3.8		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	底部全周
11	ミニチュア	口 6.1 高 2.8		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部全周

19号墓出土鉄剣観察表 PL.135

番号	全長	身幅	茎長	身厚	形状、遺存状態など
12	53.7	3.1	3.5	0.7±	全体に錆が進行している。剣身は特に長い。茎の端部はやや不明確であるが目釘孔からわずかに延びた辺りで切れるとみられる。刃關（マチ）部には鉄製の脛巾（ハバキ）が残損し、これを2個の円孔をもって留めている。把部に鹿角の遺存が認められる。錆（シノギ）は不明瞭。
43	16.1+	2.5	—	0.55±	基部側は欠損があり、關（マチ）の有無は不明である。刃線は片側縁で破断部まで鋭利な状態で遺存している。反対側の側縁部は錆が進行して刃線は不明瞭である。錆は不明瞭。

20号墓（第299・300・302図、PL.135）

20号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(礫床)×深さ	主体部主軸方位
		SK 107	1.5 × 1.0	0.75 × 0.3 × 0.16	N-32.5°-E
		SK 131	2.6 × 1.15	1.8 × 0.45 × 0.18	N-43.5°-E

位置 49-H09に位置する。

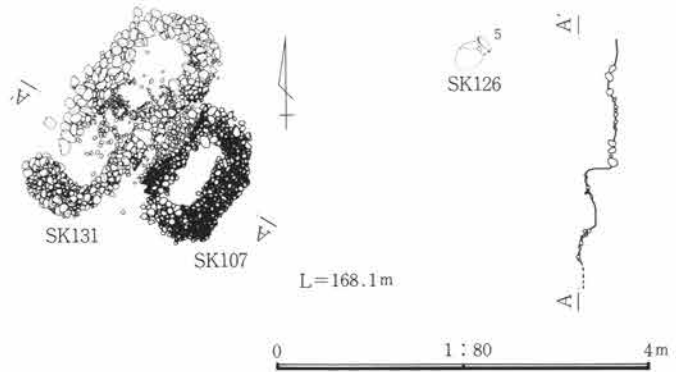
周溝 不明。第IV層、第V層中に検出できない。

主体部 主体部は壺棺を含め3基を認める。

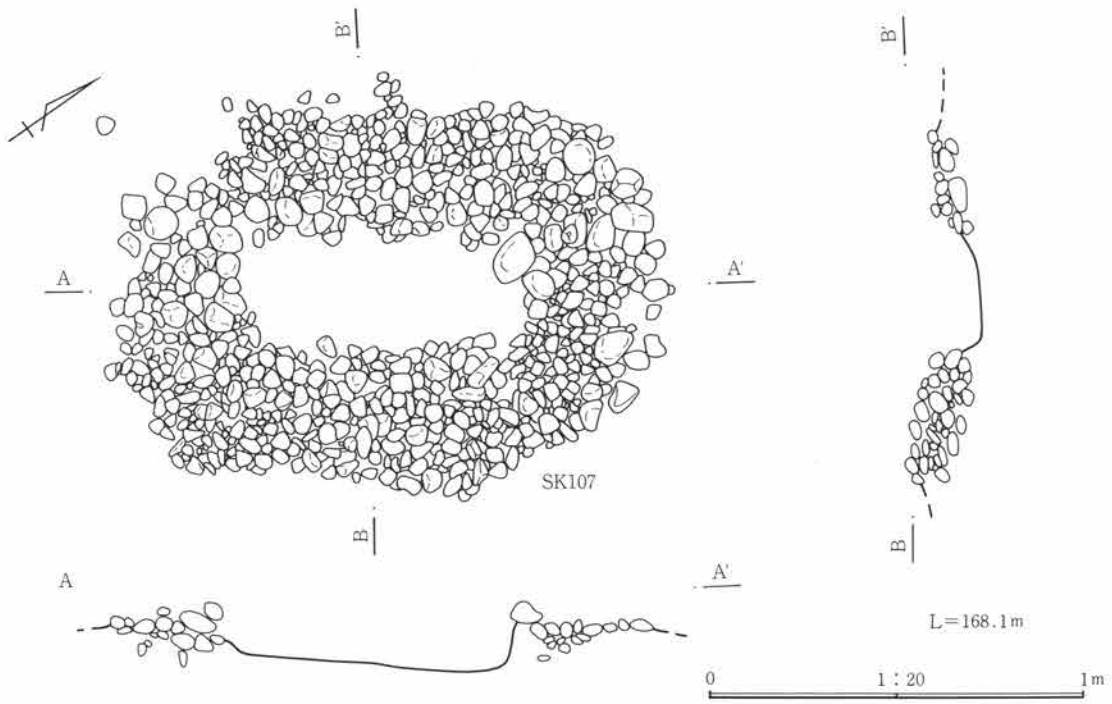
SK 107は埋葬部の周囲に礫集積帯を巡らす。礫床は伴わない。埋葬部の床面は明確ではない。主体部の規模は小さい。覆土中よりガラス製小玉、覆土上部より小型壺の完形個体が2点出土している。

西外縁部はSK 131の礫集積帯の上に重なっている。両者の礫集積帯同士の高低差は大きく、その差は25cm前後を測る。

SK 131は埋葬部に礫床を設け、周囲に礫集積帯を巡らす。礫床は小円礫を埋葬部の中心部にまばらに敷いている。側部礫集積帯の内側の縁線はやや内側に僅かに弓状に湾曲しているが、一線に整っている礫集積帯下、2か所に円形ピットを設けている。埋葬部北半部より被葬者の歯が検出される。埋葬部覆土中よりガラス製小玉が多数、小型壺、小型高坏の完形個体が数点出土している。SK 107との重複状態から本主体部の方が先行して造られたことが認められる。



第299図 20号墓（1）



第300図 20号墓(2)



第301図 20号墓出土遺物(1)

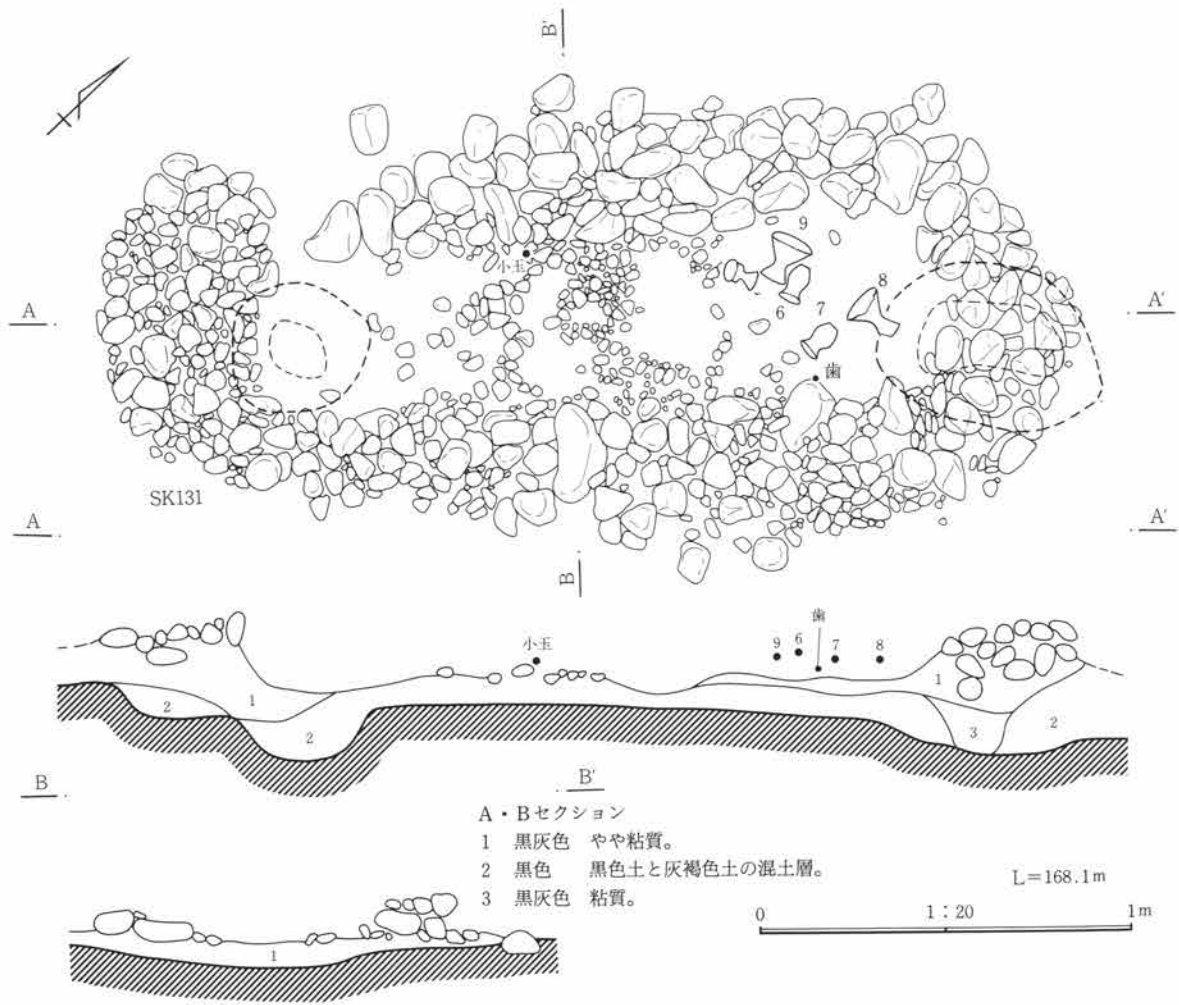
20号墓出土土器観察表 PL.135

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 8.6 高 11.6		外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はナデ。	細砂粒を含む。 堅緻、橙色	ほぼ完形
2	壺	口 8.8 高 11.0		外 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はナデ。	細砂粒を含む。 堅緻、橙色	ほぼ完形

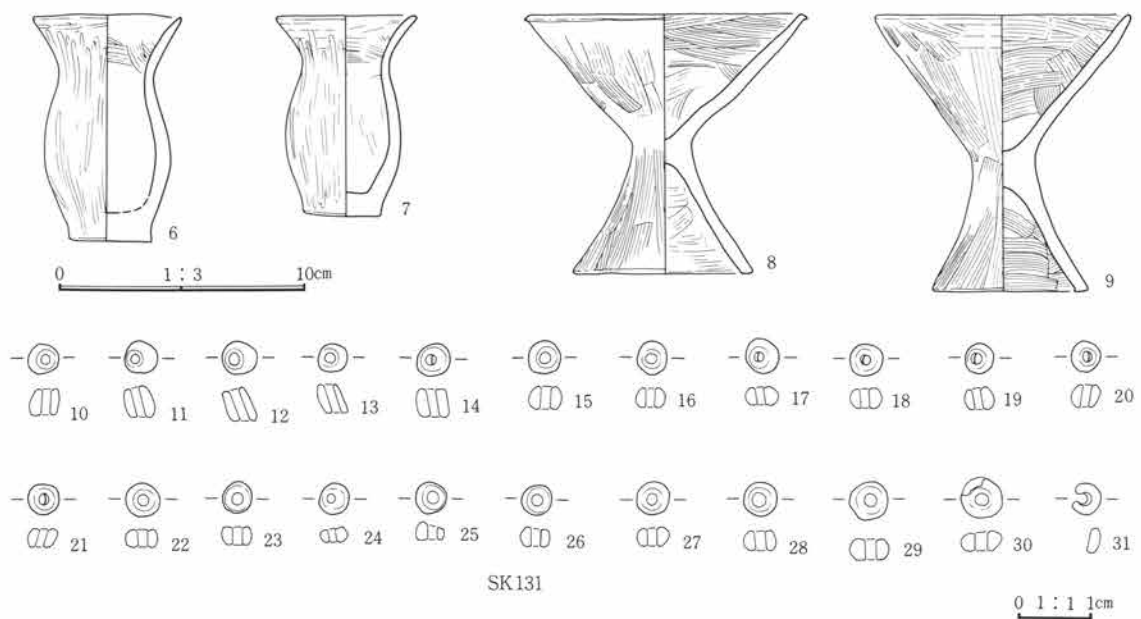
20号墓出土玉類観察表 PL.145

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
3	小玉	0.5	0.45	0.2	ガラス、青緑	研磨面あり。
4	小玉	0.3	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。

6 検出した遺構・遺物



第302図 20号墓 (3)



第303図 20号墓出土遺物 (2)

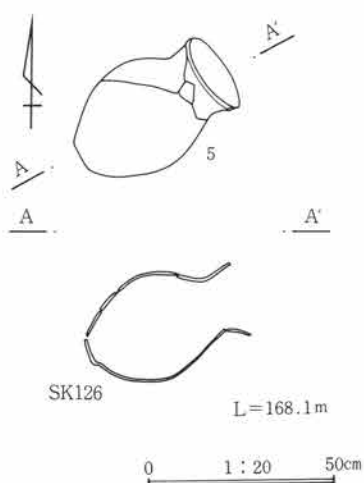


20号墓出土土器観察表 PL. 135

遺物番号	器 種	法 量	器 形 ・ 成 形	文 様 ・ 整 形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
5	甕	口 20.5 高 42.0	折り返し口縁、歪みが目立つ。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	ほぼ完形
6	壺	口 5.8 高 9.0		外 ヘラミガキ。 内 口縁部はナデ、胴部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	完形
7	壺	口 5.5 高 7.0		外 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラミガキ。 内 口縁部はナデ、頸部はヘラナデ、胴部はナデ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	完形
8	高 坏	口 10.8 高 10.3	口縁端部に鋭い稜を作る。	外 ハケメ。 内 口縁部はハケメ、坏下部、脚部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁、脚部の一部が欠損する。
9	高 坏	口 10.0 高 11.0		外 口縁部はヨコナデ、以下ハケメ。 内 坏部、脚部共にハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	ほぼ完形

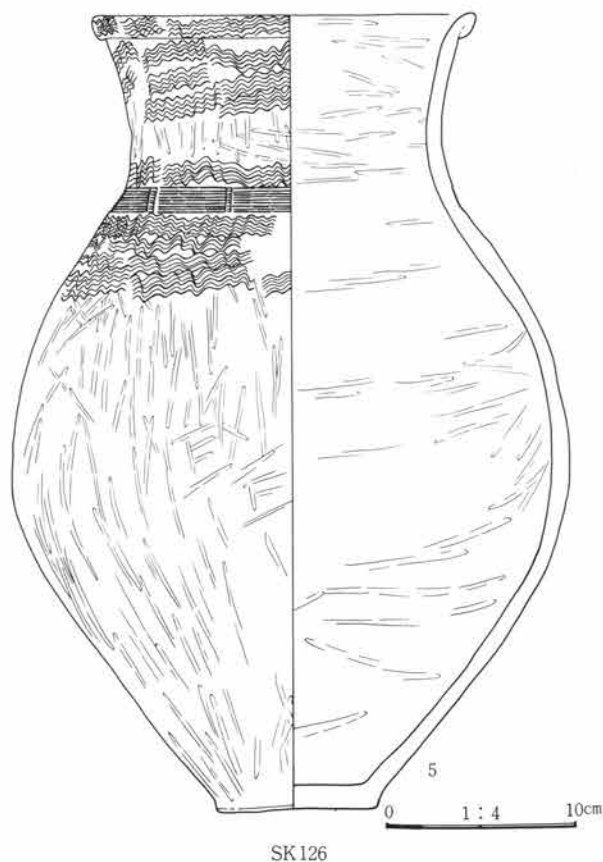
20号墓出土土類観察表 PL. 145

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
10	小 玉	0.33	0.4	0.12	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
11	小 玉	0.43	0.45	0.1	ガラス、スカイブルー	
12	小 玉	0.45	0.48	0.15	ガラス、スカイブルー	
13	小 玉	0.38	0.4	0.12	ガラス、スカイブルー	
14	小 玉	0.36	0.48	0.15	ガラス、スカイブルー	
15	小 玉	0.31	0.45	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
16	小 玉	0.27	0.42	0.15	ガラス、スカイブルー	孔縁に研磨面あり。
17	小 玉	0.25	0.45	0.14	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
18	小 玉	0.27	0.45	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
19	小 玉	0.3	0.4	0.1	ガラス、スカイブルー	
20	小 玉	0.3	0.4	0.12	ガラス、スカイブルー	
21	小 玉	0.23	0.42	0.12	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
22	小 玉	0.24	0.47	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
23	小 玉	0.22	0.45	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
24	小 玉	0.2	0.4	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
25	小 玉	0.22	0.45	0.15	ガラス、スカイブルー	孔縁研磨面あり。



第304図 20号墓(4)

SK126は20号墓東部、SK107の4m東に位置する。20号墓の墓域内の甕棺の可能性が考えられる。高さ42cm、口径20cmの完形の甕を横位に埋置している。甕は折り返し口縁で口縁部が完存しており、蓋などにより覆い、閉塞していた痕跡は認められない。棺内からの出土遺物は認められない。



第305図 20号墓出土遺物(3)

6 検出した遺構・遺物

20号墓出土玉類観察表 PL. 145

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
26	小玉	0.23	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	
27	小玉	0.24	0.45	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
28	小玉	0.28	0.48	0.15	ガラス、スカイブルー	孔縁に研磨面あり。

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
29	小玉	0.29	0.52	0.18	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
30	小玉	0.26	0.58	0.2	ガラス、スカイブルー	
31	小玉	0.32	—	—	ガラス、スカイブルー	

21号墓 (第306・308図、PL. 71・72)

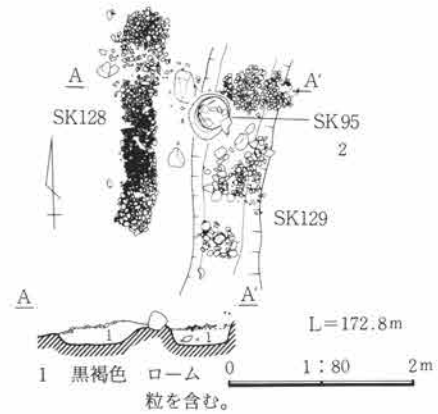
21号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(磔床)×深さ	主体部主軸方位
		SK 128	2.4×0.5	1.6 × (0.35)×0.12	N-4.5°-E
		SK 129	2.1×0.8	1.25 × — —	N-14.6°-E

位置 47-F46に位置する。

周溝 不明。第IV層、第V層中に検出できない。

主体部 2基の磔床を伴う主体部 (SK 128、SK 129) が南北に並列し、周囲に4基の壺棺が点在する。そのうち1基の壺棺、SK 95は両磔床主体部の間に位置しているため21号墓に含めた。21号墓は壺棺群 (B群) 内の南端部に位置することを考慮すると2基の磔床墓の周囲2m以内に埋置されている3基の土器棺墓 (SK 92、SK 96、SK 127) は土器棺B群に含め相互の墓域が重なっていると理解するのが妥当のようである。SK 95についてもSK 129に後出すると認められるが壺棺群に属する可能性もある。

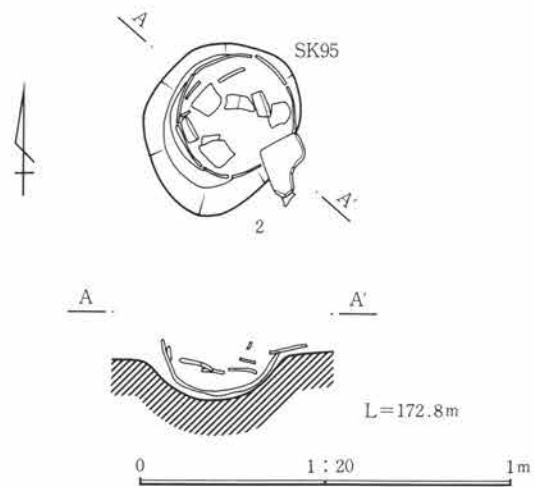


第306図 21号墓 (1)

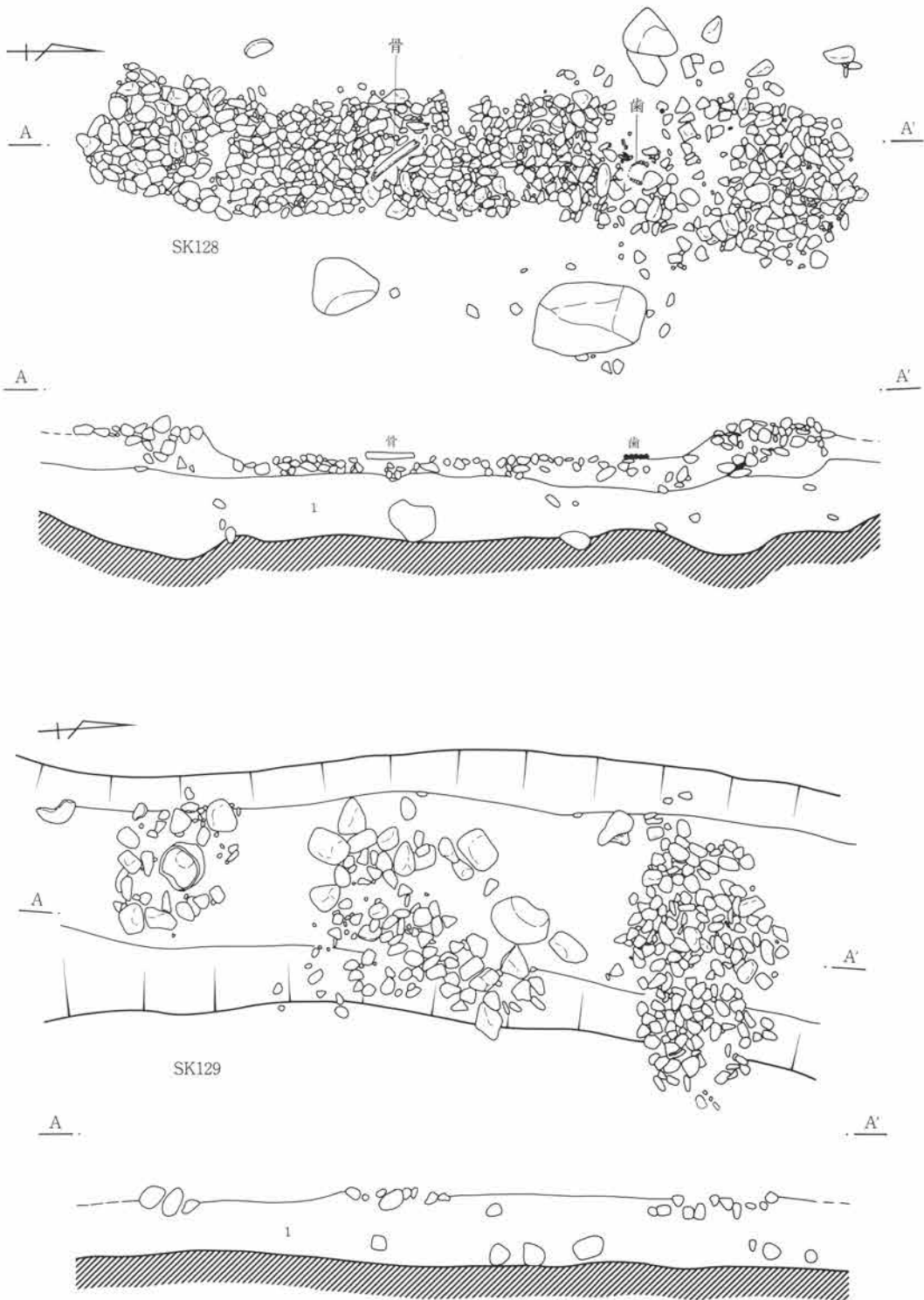
SK 95は大型の壺を棺とし、横位に埋置する。肩部を打ち欠き開口部とする。開口部の大きさは径15cm 棺の上部は破損し、棺内に崩落しているがこの破片中に別個体の壺の底部が見られることから、開口部はこの底部破片を当て閉塞していたと思われる。掘り方は長径40cm、深さ15cmの長円形を呈する。掘り方検出面上に崩落した棺の破片がみられる。

SK 128は埋葬部に磔床を設け、その両端部に磔を集積する。両側部に長さ20~30cmの磔が見られるが、これも埋葬施設を構成していたものと思われる。磔床側縁は比較的直線的で、中央部よりややせり上がっている。端部磔集積は磔床部と同幅であり、両側部に板状の材が設置されていたことを思わせる。磔床面上、北端部に被葬者の歯が良好に検出される。埋葬部からの出土遺物はない。

SK 129は埋葬部に磔床を設け、その両端部に磔



第307図 21号墓 (2)



SK128、SK129  
1 黒褐色 ローム粒を含む。

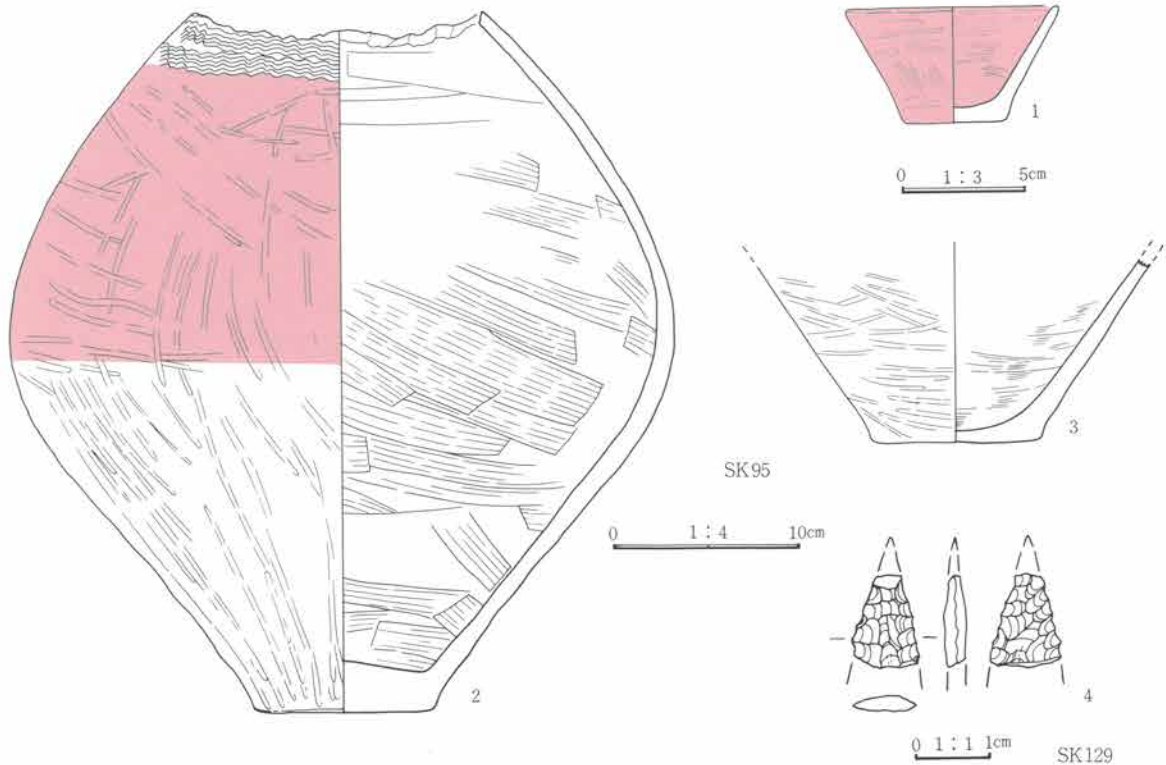
L=172.8m

0 1 : 20 1m

第308図 21号墓(3)

6 検出した遺構・遺物

を集積する。南端部から埋葬部には礫床として敷かれた小円礫のほかに、大きさの一律でない大きな礫が散在している。これらの礫は埋葬時以後の混入の可能性が考えられる。本主体部は21号溝の覆土上に造られているが、南半部は、遺存状態、及び検出状態は良好ではない。被葬者の遺体、遺物は検出できない。



第309図 21号墓出土遺物

21号墓出土土器観察表 PL.135

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	鉢	口 8.5 高 4.6		外 口縁部はヨコナデ、以下ハケメ後ヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、以下ハケメ後ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部1/2周 内外面丹彩
2	壺 棺	胴 35.6 高 36.0	肩部を打ち欠き孔を穿つ。端部断面は片刃状。	外 肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 肩部はヘラナデ、胴部はハケメ。	砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	開口部1/2周 胴部丹彩
3	壺(蓋?)	底 9.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、赤褐色	底部全周

21号墓出土石器観察表 PL.135

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
4	石 鏃	1.2(+) $\times$ 0.9 $\times$ 0.3	黒色頁岩	0.1	先端、基部を欠損する。両面は丹念に剝離調整を加えている。

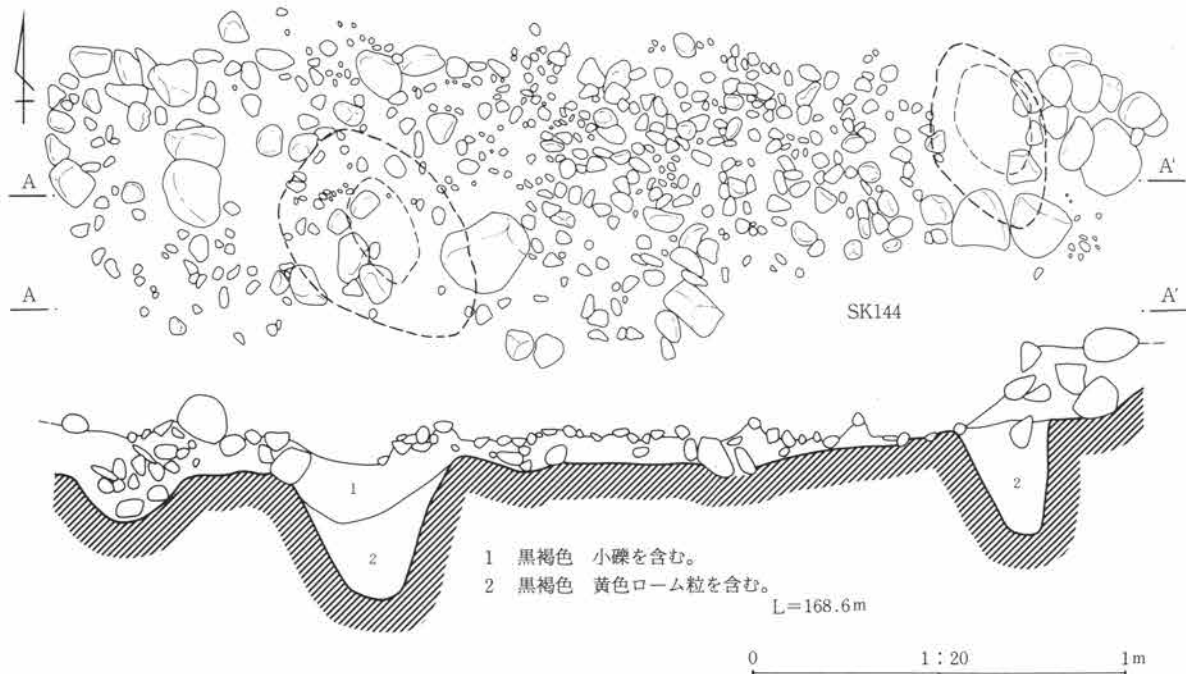
## 22号墓 (310図、PL. 72)

## 22号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(磔床)×深さ	主体部主軸方位
		SK 144	2.9 × 0.75	2.05 × (0.85) × 0.25	N-89.5°-W

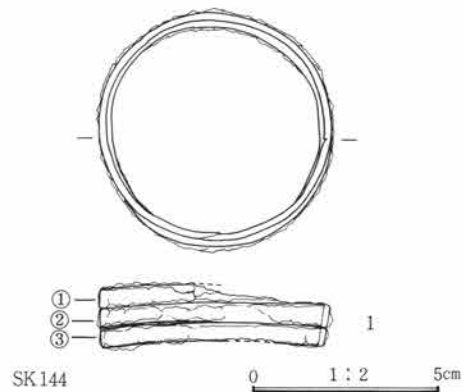
位置 40-H02に位置する。

周溝 不明。主体部(SK144)は礫群中に検出される。礫群の広がりには南北7m、東西6mを測る。厚さは中央部で20cm前後。下層は厚さ30cm程の礫まじりの黒色土(第IV層)、以下は礫を多量に包含する暗褐色(第V層)である。礫群中には弥生土器破片が混在する。この礫群中やそれ以下の層中には溝は検出されない。



第310図 22号墓

主体部 SK144は埋葬部に磔床を設け、その両端部に礫を集積する。磔床小円礫を比較的まばらに敷いている。端部礫集積は径15~20cmの礫を用いている。主体部は礫群の石を除去する過程で発見されており、礫群が主体部を覆っていた。主体部の検出では礫群の石と地山(第V層)中の石との峻別を要したが、端部礫集積の検出は部分的に困難を伴った。礫集積下、2か所に長円形ピットを設けている。埋葬部床面上より鉄釧が1点出土する。遺体は検出されない。



第311図 22号墓出土遺物

6 検出した遺構・遺物

22号墓出土鉄釧観察表 PL.135

番号	名称	個体番号	径	幅	厚さ	形状、成形、整形
1	鉄 釧	①	6.0~5.8	0.5	0.3	計測値①~③に示される3個の釧が束ねられ、1組となっている。釧の①は殆周を欠損している。腐食により失われたのだろう。螺旋ではない。環の継ぎ目は錆の進行と、破断箇所が多いため不明瞭である。断面はかまぼこ形で、外側が丸い。
		②	6.0~5.8	0.5	0.3	
		③	6.0~5.8	0.5	0.3	

23号墓 (第312~314・316図、PL.72・73)

23号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(磔床)×深さ	主体部主軸方位
		SK 448	2.2 × 0.75	1.4 × — × 0.21	N-14.6°-W
		SK 449	2.1 × 0.8	— — —	N-70.4°-W
		SK 452	— —	1.5 × (0.5) × —	N-67.2°-E
		SK 450	1.35 × 0.5	— — —	N-72.3°-E

位置 30-H30に位置する。

周溝 不明。第IV層、第V層中に検出できない。

主体部 4基の主体部が南北に連なっている。SK 450とSK 452は同じ掘りかた内に長軸方向を同じくして並列するが、他の2基は長軸方向を異にする。

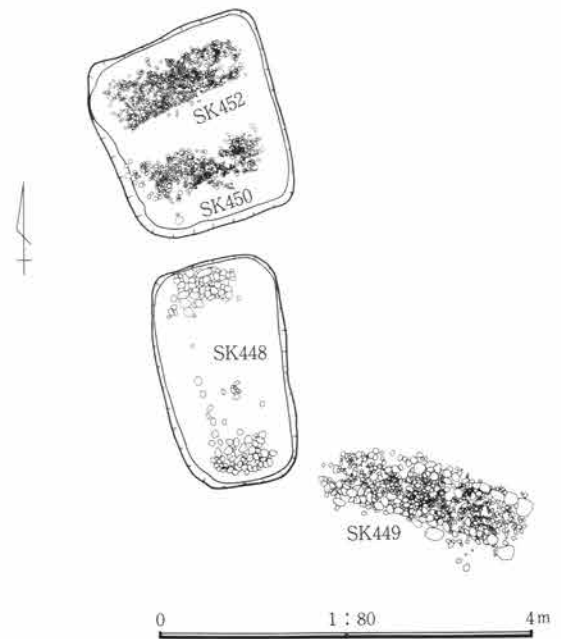
SK 448は埋葬部の両端部に磔を集積する。磔床は伴わない。中央部に僅かに小磔が集められているのみである。西側部に直線的に小円磔の並びが認められる。端部磔集積の側縁は直線状か、鈎状の配列が観察される。これは埋葬部から端部磔集積にかけて、側部に板状の材を設置した痕跡ではないかと考えられる。磔集積下、2か所に長円形ピットを設けている。磔集積の周囲には緩い立ち上がりが検出される。埋葬部の南部で被葬者の歯、骨片が検出される。遺物は認められない。

SK 449は埋葬部に磔床を設け、磔床側縁部に径20cm前後の円磔を配列している。端部には磔集積は認められない。磔床下にはピットなどは認められない。

SK 450は埋葬部に磔床を設ける。周囲に磔集積は認められない。磔床は、小円磔をまばらに敷いてい

る。磔床部の両端部には長円形のピットが設けられている。埋葬部からガラス製小玉が1点出土している。遺体は認められない。本主体部及び並列するSK 450の周囲には方形に立ち上がりが巡る。ただ東辺は不明瞭で、検出困難であった。

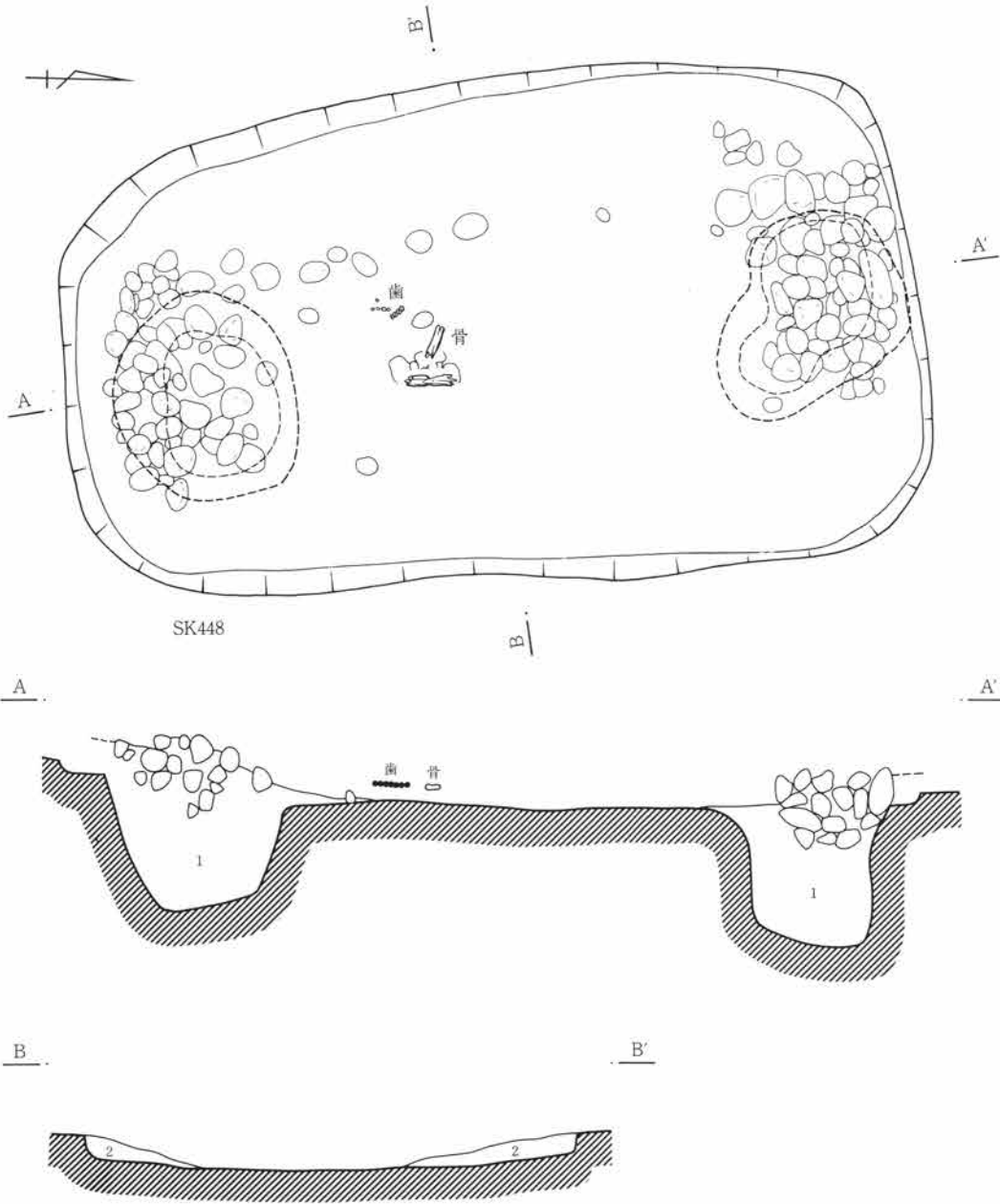
SK 452は埋葬部に磔床を設ける。周囲に磔集積は認められない。磔床は、小円磔を比較的幅広く敷き詰め、側縁は直線的である。磔床の西側縁部直下には溝状の掘り込みが検出される。直状の材を埋設した痕跡である可能性が考えられる。磔床部の両端部に長円形ピットが設けられている。磔床面上東端部に被葬者の歯、



第312図 23号墓 (1)



骨片が検出される。埋葬部覆土中からガラス製小玉が出土している。

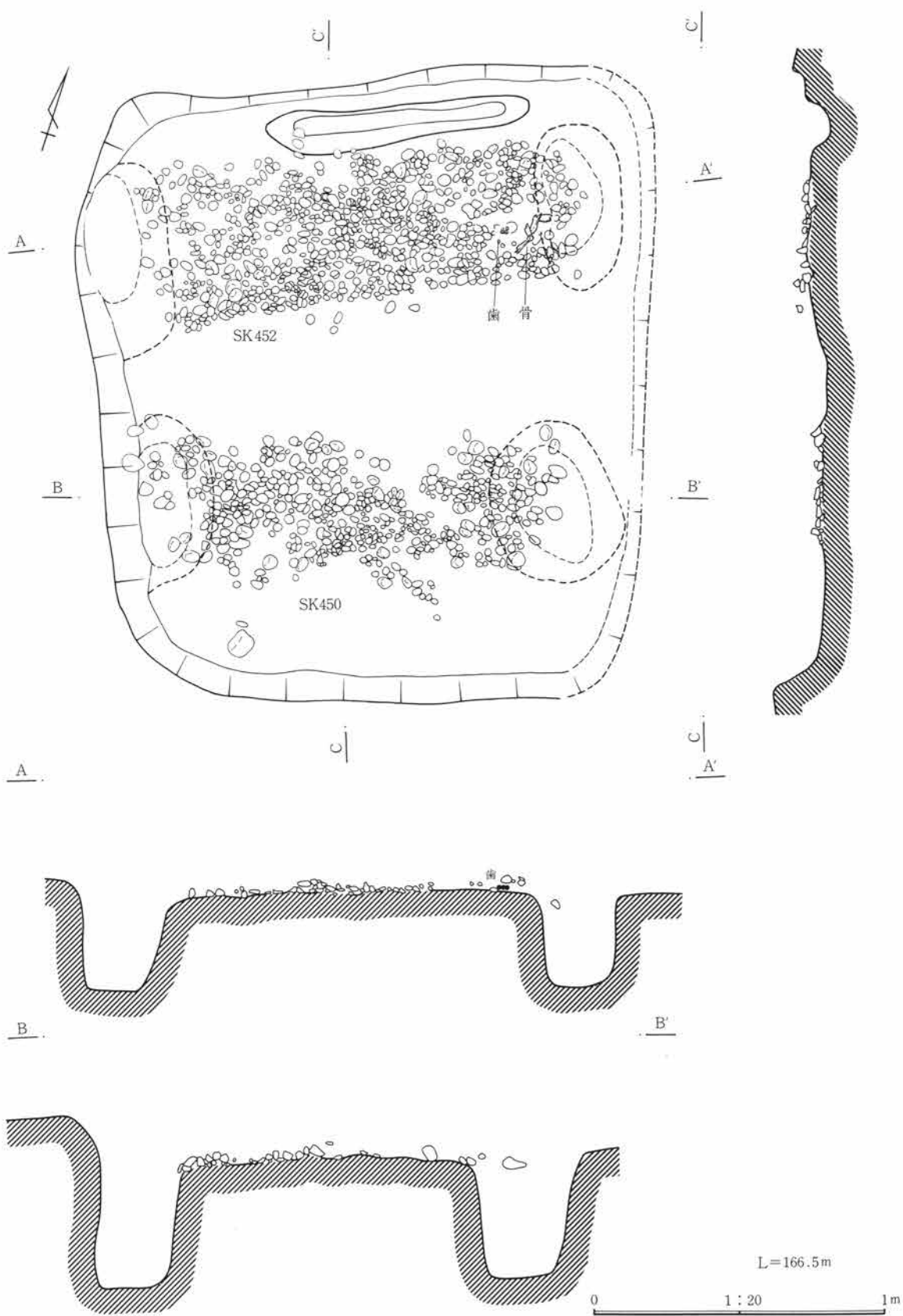


- A・Bセクション  
1 黒褐色 粘質、青灰色シルトを少量含む。  
2 青灰色 シルト、黒褐色土の混土層。

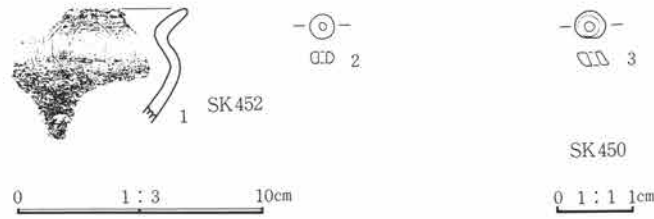
L=166.5m

0 1 : 20 1m

第313図 23号墓 (2)



第314図 23号墓(3)



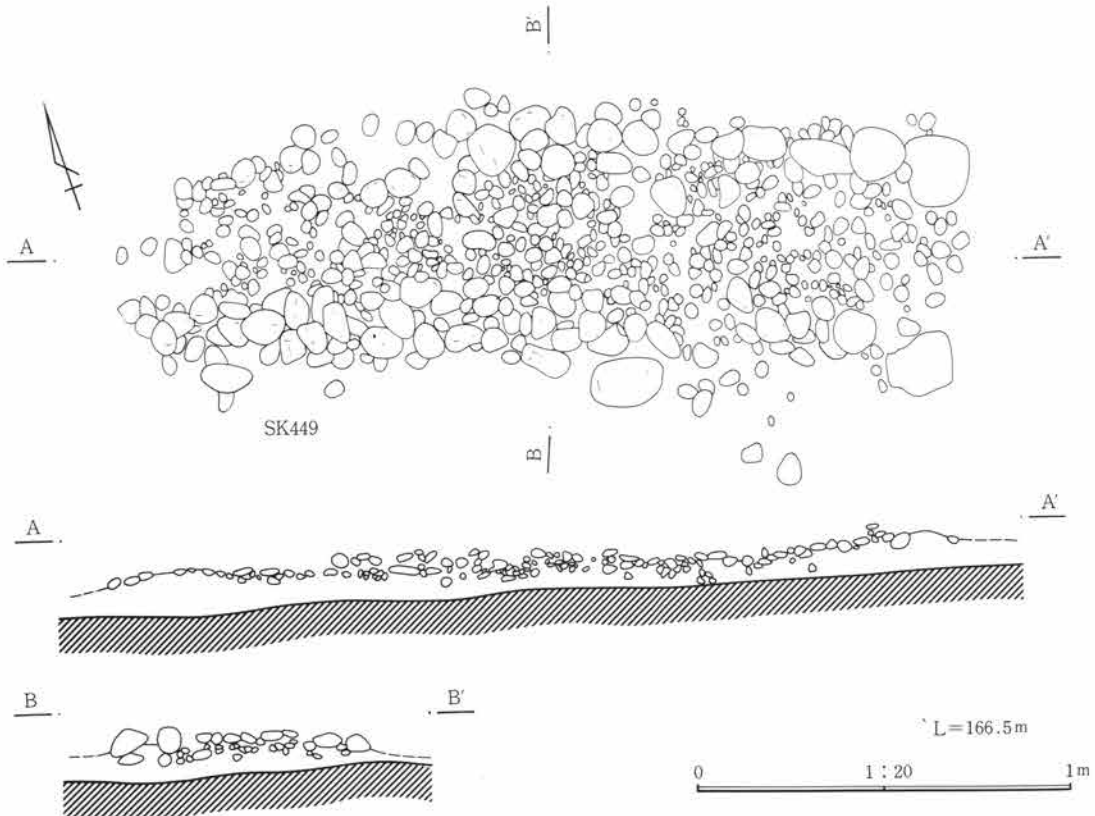
第315図 23号墓出土遺物

23号墓出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
1	高坏	口 9		外 ヨコナデ。内 丹彩。	砂粒を含む。	堅緻	褐灰色	17%

23号墓出土玉類観察表 PL.145

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考	遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
2	小玉	0.16	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー		3	小玉	0.18	0.4	0.15	ガラス、コバルトブルー	研磨面あり。



第316図 23号墓 (4)

6 検出した遺構・遺物

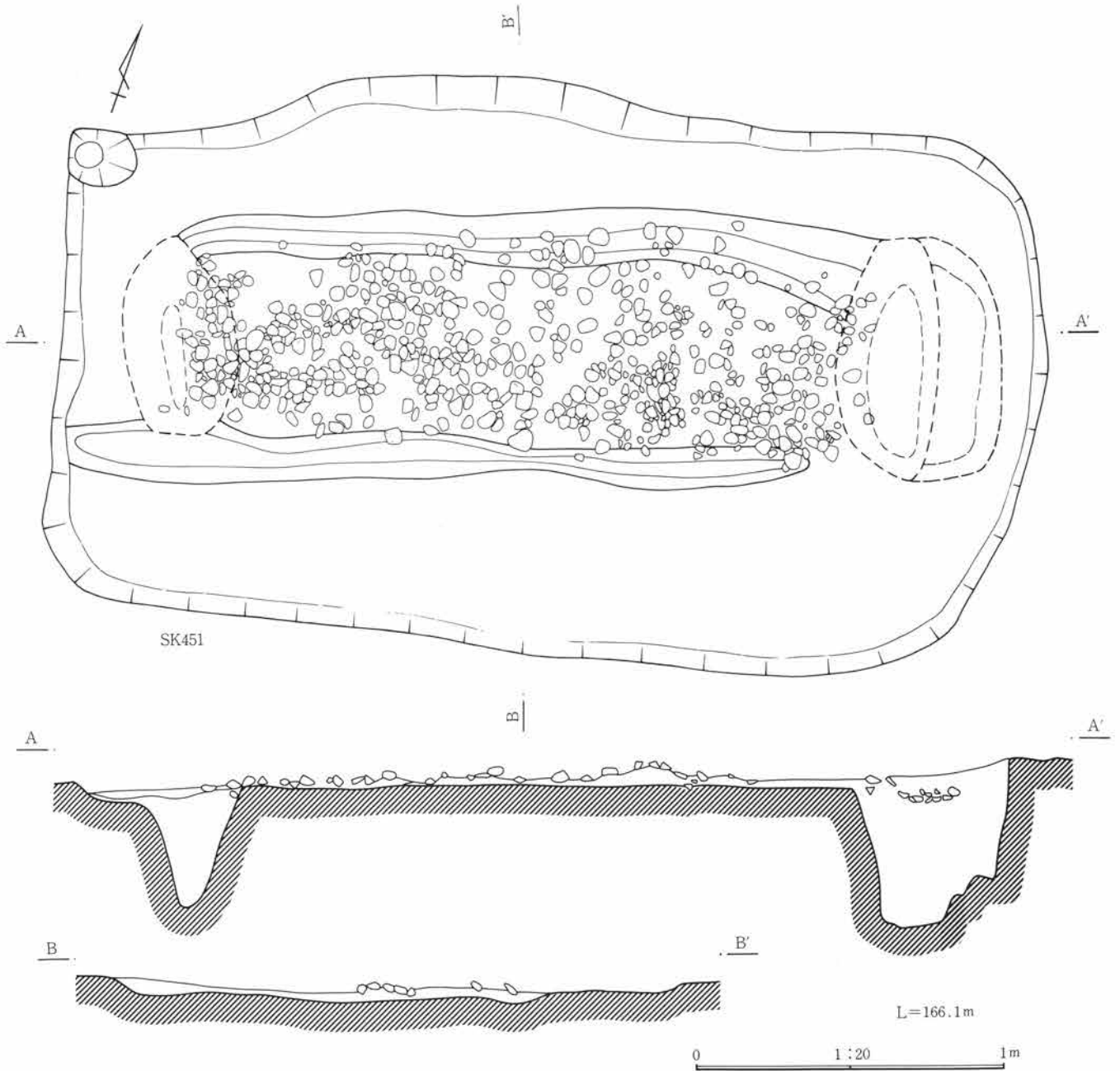
24号墓 (第317図、PL. 73)

24号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(磔床)×深さ	主体部主軸方位
		SK 451	— —	2.2 × (0.7) × —	N-72.4°-E

位置 30-H34に位置する。

周溝 不明。第IV層、第V層中に検出できない。



第317図 24号墓

**主体部** 主体部は1基のみである。

S K 451は埋葬部は礫床を設ける。周囲に礫集積は見られない。礫床は比較的幅広で側縁は直線的であり、その直下から溝状の掘り込みが検出される。直状の材を設置した痕跡である可能性が高い。礫床部の両端部に長円形ピットを設けている。礫床の周囲には緩い立ち上がりが方形状に巡る。



24号墓出土玉類観察表 PL.135

第318図 24号墓出土遺物

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
1	管玉	—	0.3	0.17	赤色ケイ質岩	研磨稜線あり。

### 25号墓 (第319図、PL.73)

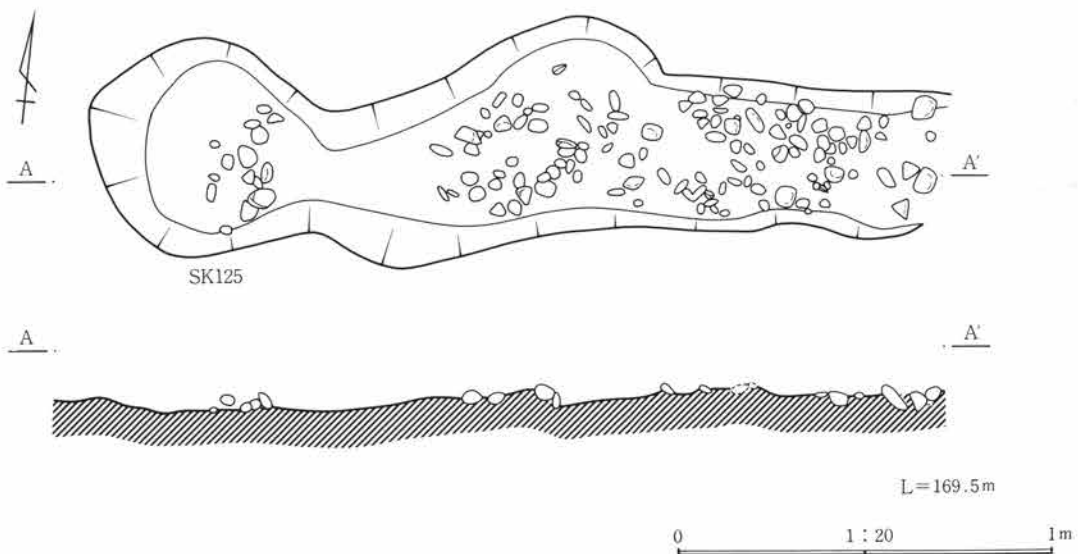
#### 25号墓計測表

周溝墓規模	周溝幅×深さ	主体部番号	主体部全長×幅	埋葬部長さ×幅(礫床)×深さ	主体部主軸方位
		S K 125	1.95±×—	1.35±×(0.35) × —	N-87.8°-E

**位置** 28-G41に位置する。周囲に弥生時代の墓はなく、調査区域内の墓域からは離れた場所に造られている。

**周溝** 不明。第IV層、第V層中に検出できない。

**主体部** 埋葬部に礫床を設ける。礫床は、小円礫がまばらに敷かれた状態である。礫床は輪郭が不整形な溝状の掘り込みを伴っている。東部が調査区域外であるため、全体像を把握できない。西端部に礫床部から60cmほど離れて集石が見られるが、礫床部との構造上の関連は不明である。遺体や遺物は認められない。



第319図 25号墓

## (6) 土器棺

土器棺A群 (第320・321図、PL. 74・75)

S K 90

甕の完形個体を横位置に設置する。口縁部は上方の部分を欠損している。後世の攪乱などによると思われる。蓋は確認できない。確認できた掘り方は不整形な長円形で深さ10cm。内部からの副葬品など認められない。土器棺以外の可能性もある。弥生後期第3期。

S K 91

甕の頸部以下を棺とし横位に埋置する。甕の胴部下部を蓋とする。棺は住居の覆土上に位置するため掘り方の確認はできない。副葬品など無し。弥生後期第3期。

S K 94

壺の頸部以下をほぼ直立に埋置し、棺の頸部（開口部）に壺の下半部による蓋で深く覆っている。掘り方は径38×34cm、20cmの円形ピットを検出する。弥生後期第3期。

S K 97

甕を斜位に埋置する。棺の胴部には小円孔を穿っている。棺の内側から先端の尖ったもので一撃したとみられる。棺の上位部、頸部・開口部から胴部にかかる部分は欠損している。後世の畑耕作による攪乱と思われる。弥生後期第3期。

S K 98

甕を土壌内にやや口縁部側を高く横位に埋置する。口縁～頸部は遺存しており、蓋は認められない。土器棺以外の可能性もある。土壌は径110cm、深さ20cmの円形。後期第3期。

S K 123

甕を円形小土壌内に倒立に埋置する。下方向に向けられた甕口縁部は蓋などにより閉塞されていない。底部は遺存状態が不良である。土壌は長径35cm、深さ40cm。棺内の土を洗い、ガラス小玉3点を検出する。弥生後期第3期。

S K 380

甕の胴下半部を土壌内に倒立して埋置する。棺の下方は開口状態でまた上方の底部も欠損し、開口している。これに甕上半部を重ねて覆っている。傍らに台付甕が出土しており、この台付甕が甕の口縁部分を覆って臥せられていた可能性も考えられる。長さ70cm、幅45cm、深さ10cmの長円形の土壌中に埋置されている。弥生後期第3期。

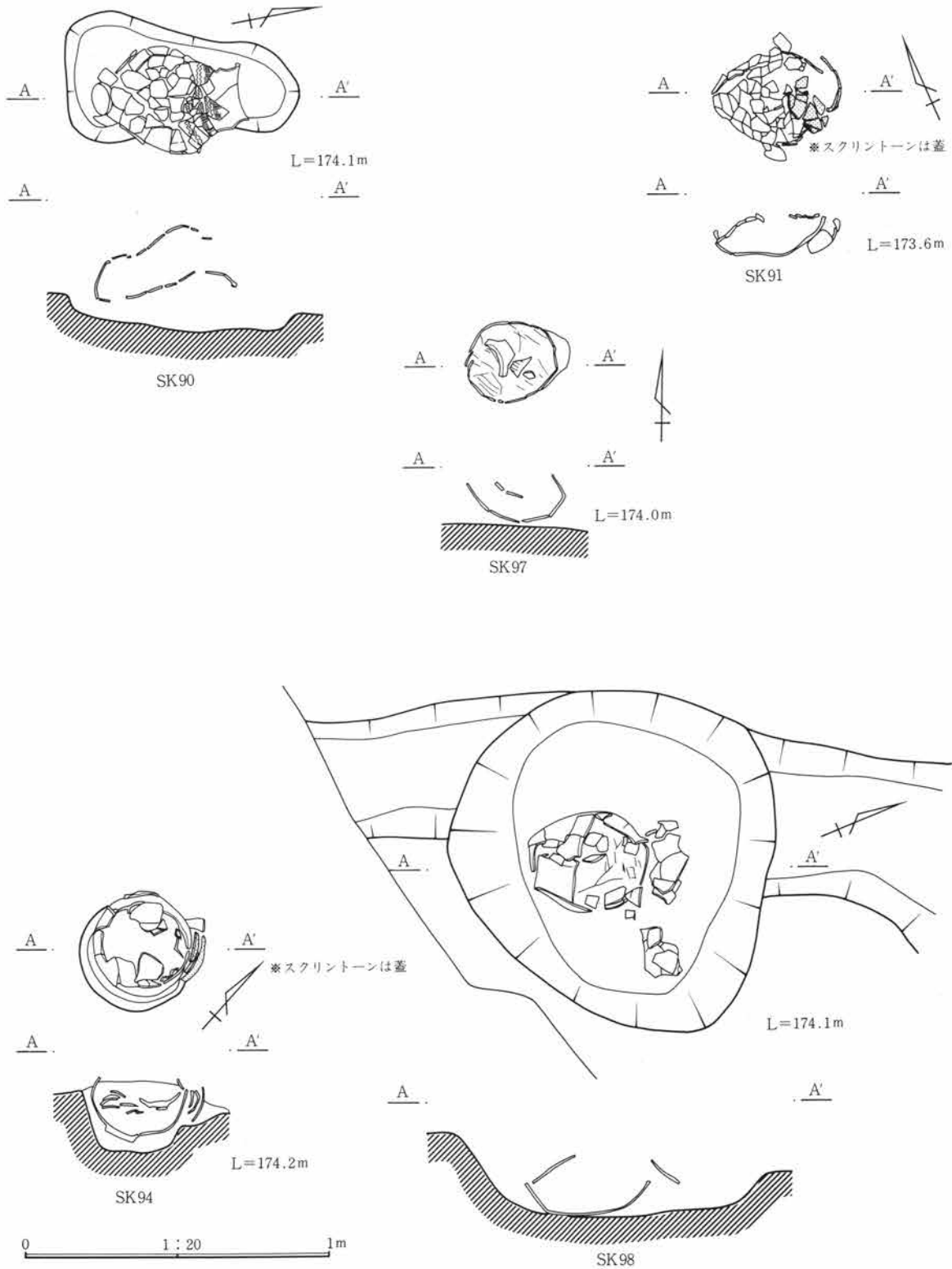
S K 404

大型壺棺をほぼ横位に埋置する。口縁部は上位置部分が欠損している。後世の攪乱による可能性も考えら



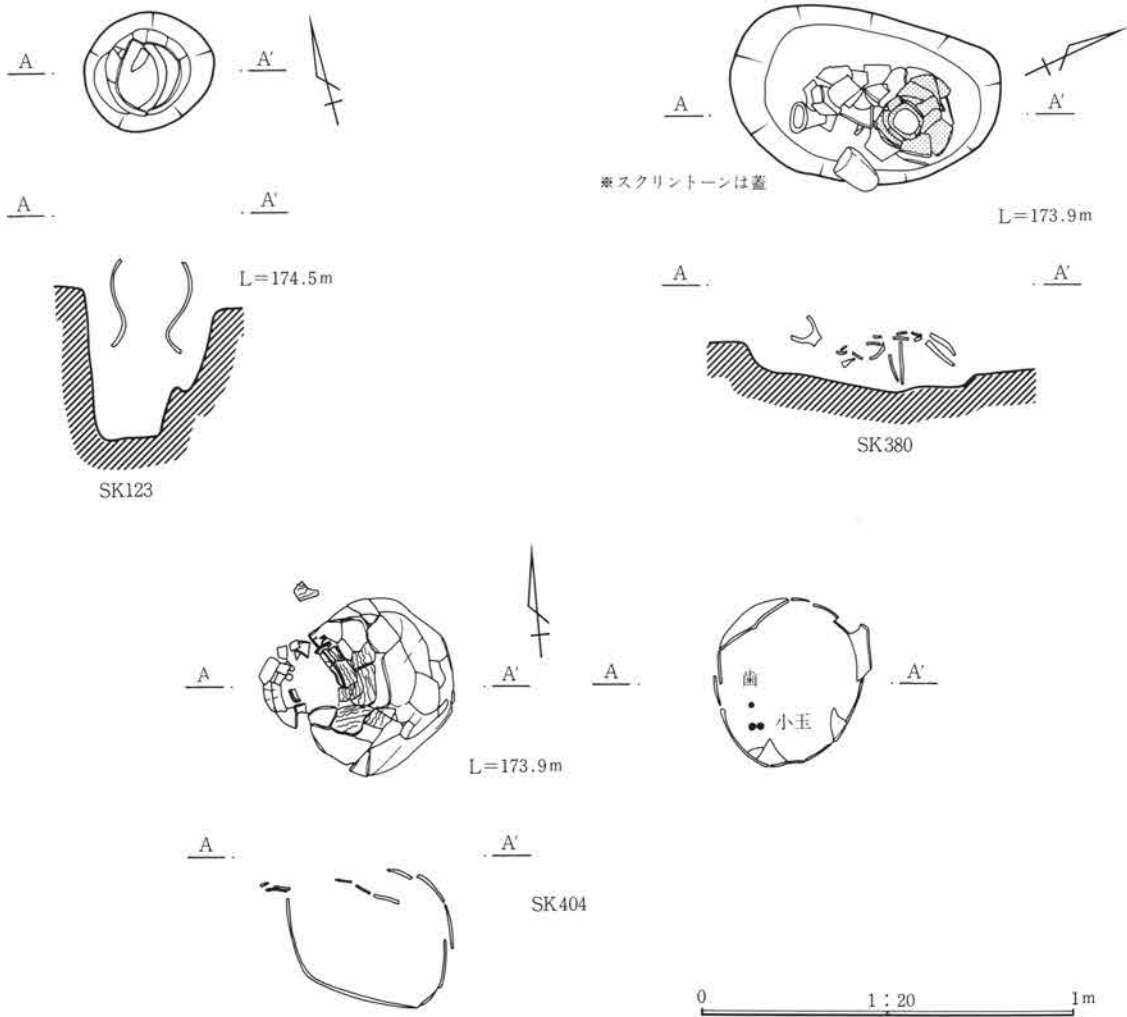
(6) 土器棺

れる。口縁部分の開口部に蓋などを当てていた様子は認められない。掘り方の形状、深さなどは不明。土器棺内底部付近よりヒトの歯1点、ガラス小玉が2点検出される。弥生後期第3期。



第320図 土器棺 A群(1)

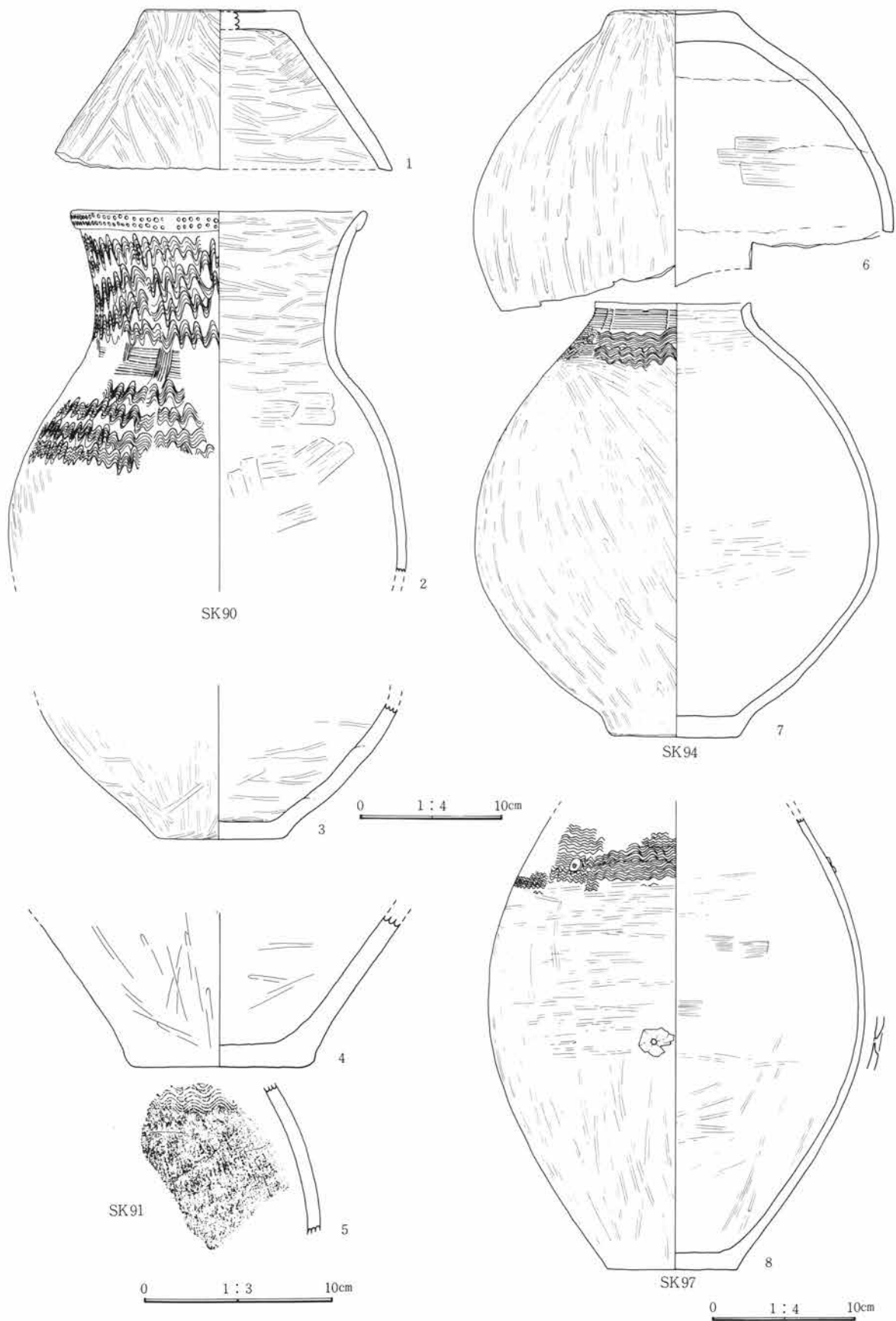
6 検出した遺構・遺物



第321図 土器棺 A群(2)

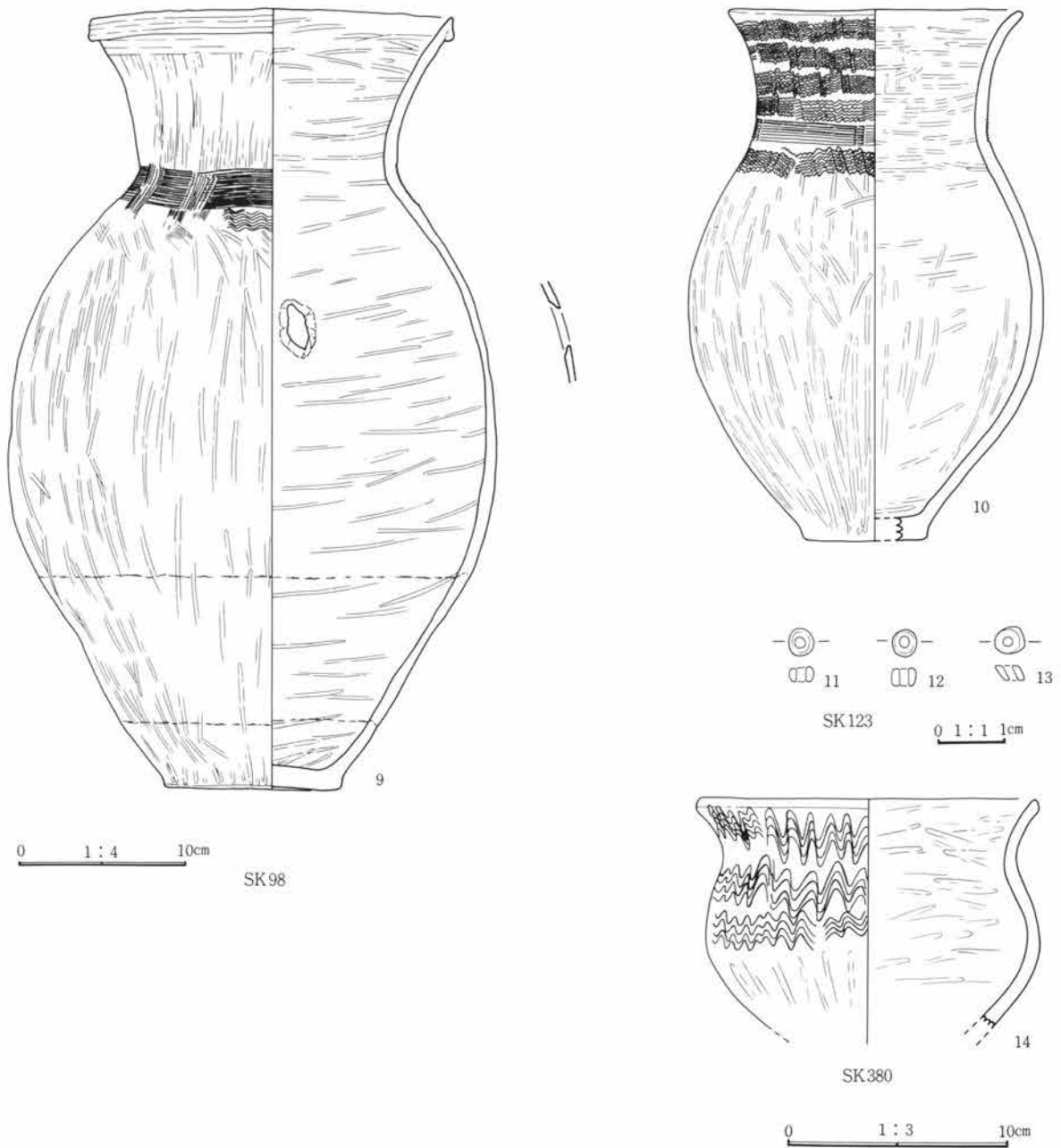
土器棺A群出土土器観察表 PL.136

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕(蓋)	口 23.6 底 11.0	胴上半部は打ち欠かれて欠損する。	外 ヘラミガキ。 内 ハケメ後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	胴下～底部迄周
2	甕 棺	口 20.6 胴 27.8	折り返し口縁。	外 口縁部は刺突文、口辺～胴上部は波状文。頸部は櫛描横直線に縦直線、以下ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～胴部全周
3	甕(蓋?)	底 9.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	胴下～底部迄周
4	甕	底 9.5		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	底部全周
6	甕(蓋)	胴 29.5	胴部中位以上を欠く。打ち欠き面は面調整不明。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ、ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	胴中～底部迄周



第322図 土器棺・棺内出土遺物 A群(1)

6 検出した遺構・遺物



第323図 土器棺・棺内出土遺物 A群(2)

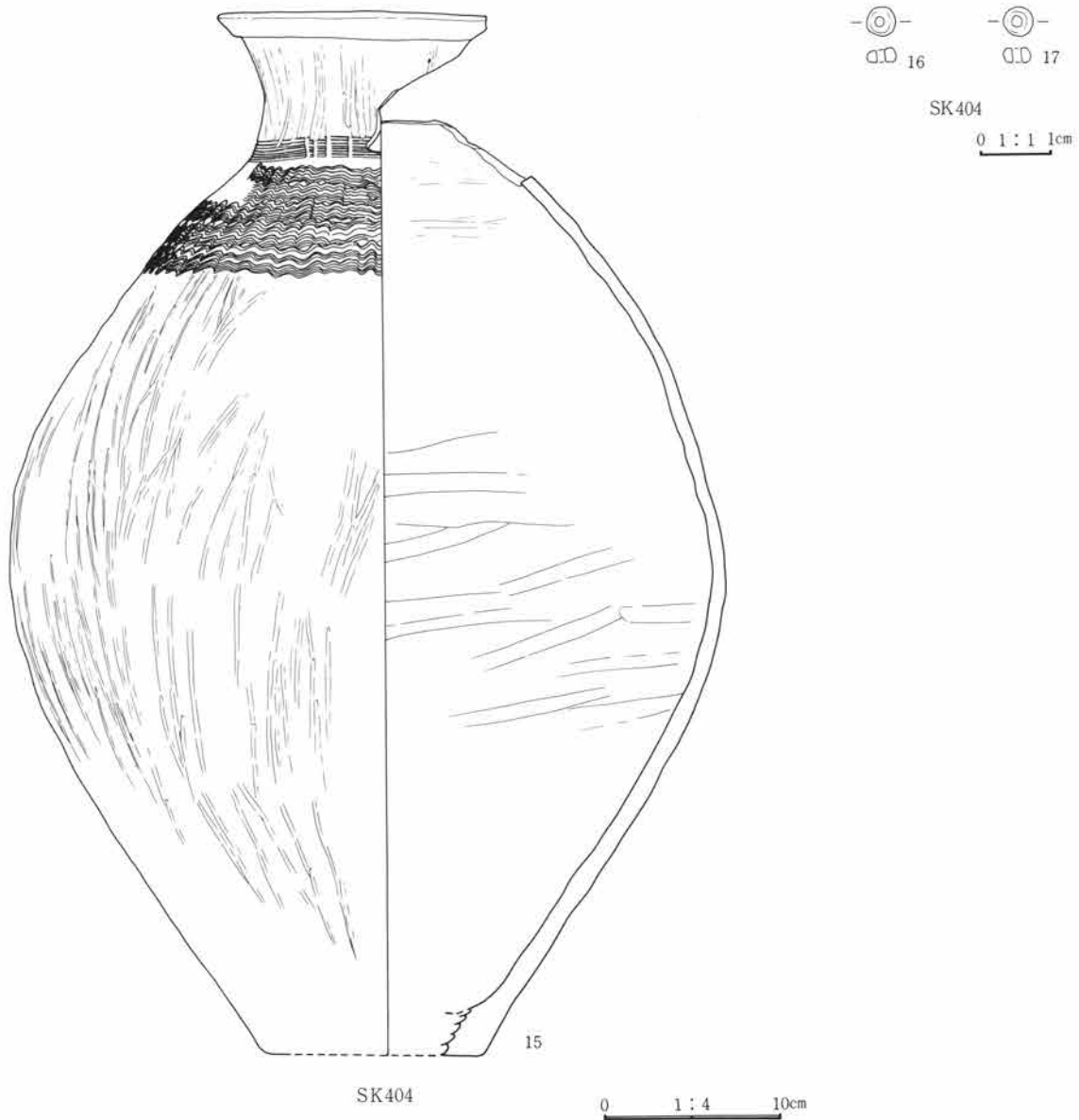
土器棺A群出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
5	甕			外 胴上部は波状文。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	堅緻	明赤褐色	

土器棺A出土玉類観察表 PL.145

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
11	小玉	0.23	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨あり。
12	小玉	0.26	0.38	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨あり。
13	小玉	0.24	0.46	0.15	ガラス、スカイブルー	
16	小玉	0.2	0.42	0.12	ガラス、スカイブルー	孔縁に研磨あり。
17	小玉	0.2	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。

(6) 土器 棺



第324図 土器棺・棺内出土遺物 A群(3)

土器棺A群出土土器観察表 PL. 136

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
7	甕 棺	孔径 9.5 胴 28.1	頸部以上を打ち欠き丁寧面に調整する。断面片刃状。	外 頸部は2連止め簾状文、肩部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	開口部 $\frac{1}{2}$ 周 胴～底部全周
8	甕 棺	胴 26.2 底 8.9	胴部中位に焼成後小孔を穿つ。	外 肩部は波状文、付文添付、以下ヘラミガキ。 内 胴部はハケメ後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍黄橙色	胴～底部 $\frac{1}{2}$ 周
9	甕 棺	口 21.5 高 46.2	折り返し口縁、断面三角形。胴部に一か所穿孔。	外 口縁部はヨコナデ、頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部に一か所小部分に波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明黄褐色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周 頸～底部全周
10	甕 棺	口 17.4 高 31.4		外 口縁～胴上部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	口縁～胴部全周 底部 $\frac{1}{4}$ 周

6 検出した遺構・遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
14	台付甕	口 15.1 胴 15.0		外 口縁～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
15	壺 棺	胴 40.3 孔径11.8 $\times$ 11.3	口縁～頸部を約 $\frac{1}{2}$ 周打ち欠き、開口部としている。	外 頸部は3～4連止め簾状文、肩部は波状文。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はヘラナデ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、橙色。	胴部ほぼ全周 底部は中央部が欠損。

土器棺B群 (第325～328図、PL.75～79)

S K92

大型の壺を棺とし、横位に埋置する。頸部を打ち欠き開口部とする。開口部の大きさは径16.2cm。開口部には別個体の壺の底部を当て閉塞する。棺及び蓋の打ち欠き面は平滑に調整している。棺内には棺の上部の破片や別個体の蓋の破片が崩落している。棺は一辺70cm、深さ15cmの正方形の土壌内に埋置される。弥生後期第3期

S K96

胴径28cmの甕を棺とし、直立に埋置する。棺の上半部は後世の攪乱により、欠損している。開口部は欠損しており、不明。掘り方は長径55cm、深さ20cmの長円形を呈する。弥生後期。

S K127

甕の胴部を棺とし、直立に土壌内に埋置する。甕は頸部以上を欠損しているが、ここを開口部としていたとみられる。蓋とした土器などの存在の有無は不明である。後世の攪乱により失われたものと思われる。頸部以下は破損はない。棺を埋置している土壌は円形で、径50cm、深さ15cmを測る。棺内より歯を数点検出する。弥生後期第3期。

S K367

土器棺は大型壺を横位に埋置する。大型壺は肩部以上を打ち欠かれた上に底部も欠損している。肩部の打ち欠き面は平滑に調整しており、開口部の大きさは25.5cm $\times$ 23.0cm。開口部には別個体の壺の胴部をかぶせ、閉塞する。底部、欠損部の孔は径11cmでこの孔をふさぐように大型の土器破片をあてている。掘り方は浅い不整形な深さ20cmの落ち込みを検出する。棺内より歯が検出されている。弥生後期。

S K368

大型壺を棺とし、直立に埋置する。別個体の壺胴下部を蓋としている。検出時の遺存状態は不良で著しく潰れた状態のうえ、上部が古墳時代の畑耕作などの後世の攪乱により失われ、棺は胴下部～底部、蓋は胴部の一部が遺存するのみである。壺棺及び蓋の径はおよそ50cmと見られる。弥生後期。

S K369

棺は大型壺を直立に埋置する。壺棺の頸部を打ち欠き開口部とし、この開口部には別個体の壺の胴下部を当て閉塞する。開口部の大きさは径15cm。打ち欠き面は比較的平滑に調整している。棺は60 $\times$ 70cm、深さ30cm

の円形の掘り方内に認められた。棺内の土を洗いガラス小玉13個を検出している。弥生後期。

## S K370

大型壺を棺とし、やや斜位に埋置する。棺は胴部以上を後世の攪乱により欠損しており、棺の開口部、蓋の状態などは不明である。掘り方は径50cm、深さ20cmの円形ピットである。棺内底部から歯が検出される。解剖学的鑑定の結果では幼児の歯とされている。弥生後期。

## S K371

高さ35cm前後の中型の甕を棺とし、横位に埋置する。甕の口縁部分には蓋の痕跡は認められない。棺は上部が後世の攪乱により失われるが、埋葬時は欠損のない甕を使用したものと思われる。掘り方は長径35cmの浅い落ち込みを検出する。弥生後期第3期。

## S K372

大型壺を棺とし横位に埋置する。頸部を打ち欠き開口部とし、開口部には高環を当て、閉塞している。頸部を打ち欠いた際の口縁部破片は壺棺の開口部、頸部の周囲に当たっていた。頸部の欠け口の状態は著しい凹凸があるままで、打ち欠き面の調整は行っていない。掘り方は明確に検出できない。弥生後期第3期。

## S K373

大型壺を棺とし、口縁方向がやや高い横位に埋置する。開口部は別個体の大型土器破片を当てて閉塞している。棺の開口部の大きさは、15.0×13.5cm。掘り方は径50～60cm、深さ15cmの円形ピット。棺内の土を洗いガラス小玉4点を検出している。弥生後期第3期。

## S K374

棺は特に大型の壺を使用している。棺は潰れた状態で原位置が著しく乱れているため棺の埋置状態は明らかではない。しかし壺棺の破片の遺存状態は比較的良く、口縁～頸部はほぼ完存し、胴部以下の破片も70%近く確認できた。棺の破片群内に、甕の胴下部、小型壺が出土している。弥生後期第3期。

## S K376

中型の壺が倒立状態で出土した。底部は欠損しており、後世の攪乱によったと思われる。口縁部破片は傍らに散在し、胴上部は破損し、棺の内側、あるいは下位より破片が出土している。蓋又は副葬品など認められないので壺棺ではない可能性もある。弥生後期第3期。

## S K377

比較的小型の壺が斜位に置かれた状態で見られた。口縁～頸部は打ち欠かれたと思われる様子で欠損している。掘り方は径45cm、深さ15cmの円形。傍らより甕の底部が出土しており、これが蓋として使われた可能性が考えられる。弥生後期。



## 6 検出した遺構・遺物

### S K 378

大型の壺を棺とし、やや口縁部方向を高く横位に埋置している。壺棺は口縁～頸部は打ち欠かれた状態で打ち欠き面は比較的丁寧に調整されている。棺は上半部が崩落した状態で、棺内に崩落した破片が重なりあってみられ、このなかに高坏の破片が認められた。この高坏は棺の蓋として棺の開口部に当てられていた可能性が考えられる。弥生後期第3期。

### S K 385

中型の甕を棺とし、斜位に埋置する。頸部は打ち欠かれ、開口部の傍らには蓋として当ててあったとおもわれる別個体の土器の破片が認められる。掘り方は僅かな窪みとして認められた。弥生後期第3期。

### S K 417

大型の甕を棺とし、横位に埋置する。甕棺は打ち欠かれた部分は認められず、完形の状態で用いられている。開口部には甕の胴部をかぶせて更に一部間隙には甕の頸部破片を当てている。掘り方は長径55cm、深さ15cmの長円形。弥生後期第3期。

### S K 418

大型壺を棺とし、斜位に埋置する。壺棺は頸部以上、及び底部を欠損し、開口部には別個体の土器を当て閉塞している。頸部開口部の大きさは12×17cm、壺胴下部の個体をかぶせている。底部の孔は径13cm。ここには壺の胴上部大形破片を当て閉塞している。弥生後期第3期。

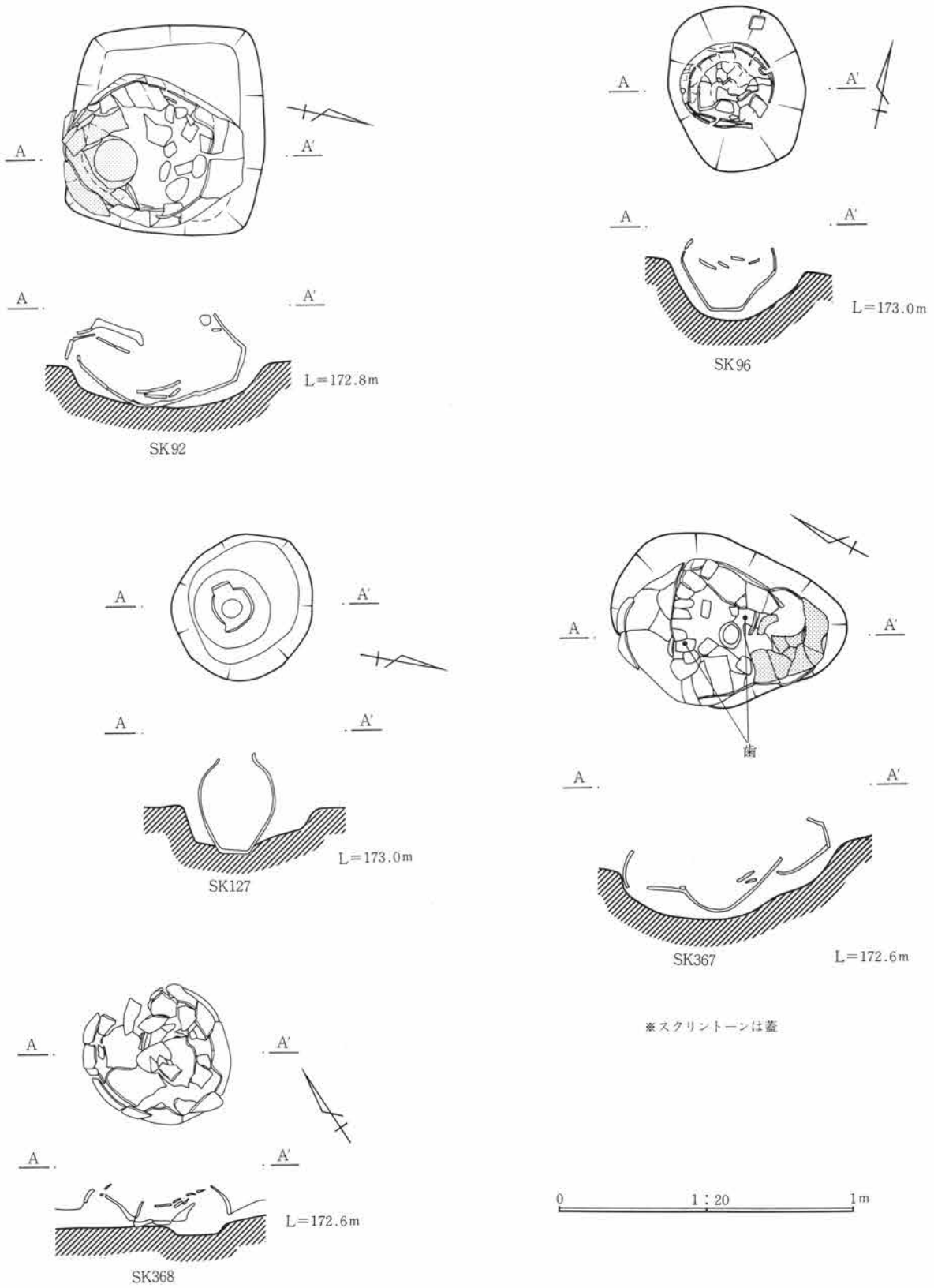
### S K 419

中型の壺を棺とし、斜位に埋置する。壺棺の開口部（口縁部）は別個体の土器を蓋としてかぶせ閉塞している。壺棺の開口部は出土時点では口縁～頸部が破損し、胴部にめり込んだ状態になっていたが埋葬時点ではこの破損はなかったとみられる。掘り方は径40cmの浅い窪みを検出する。弥生後期第3期。

### S K 420

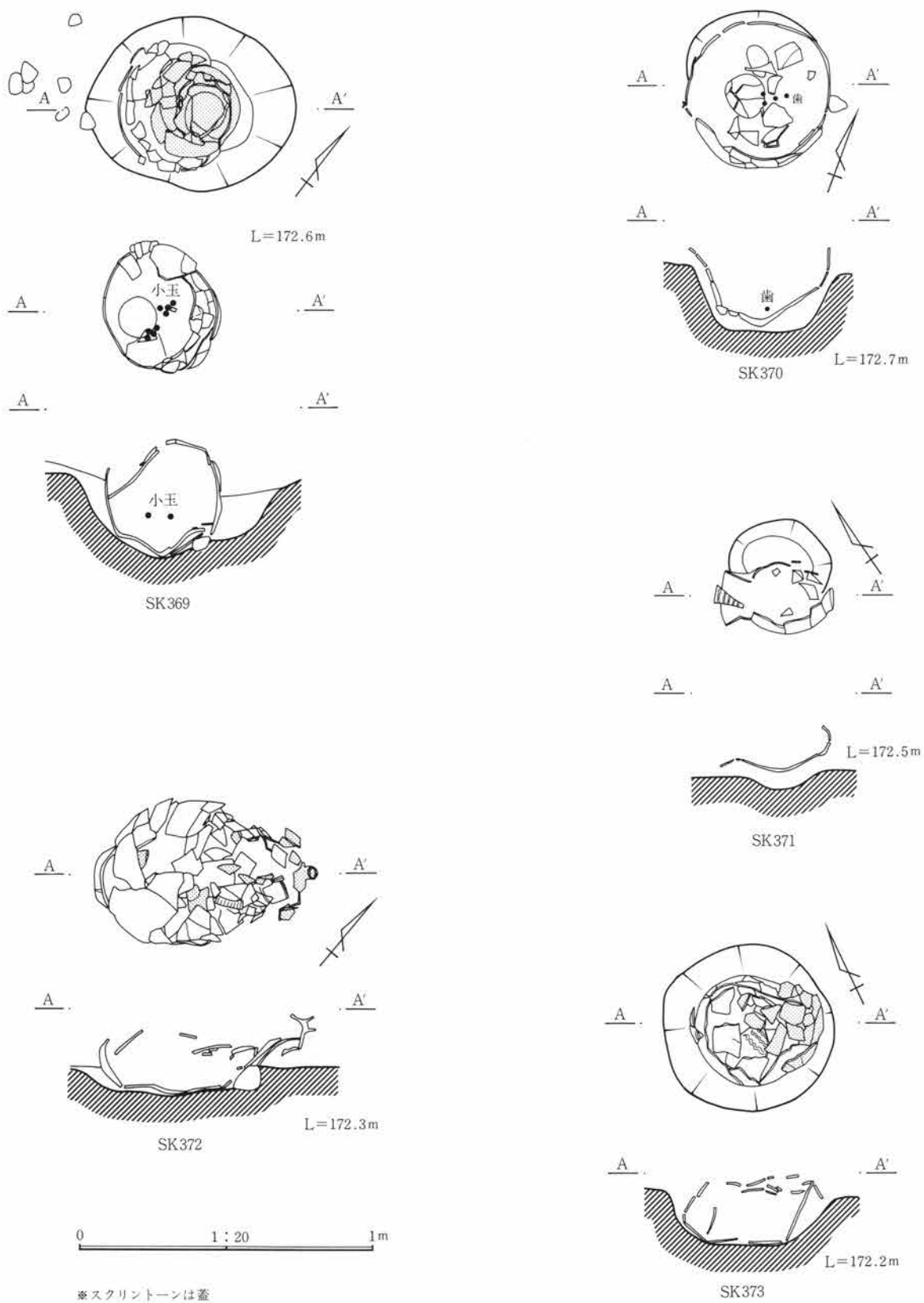
中型の甕を棺とし、斜位に埋置する。頸部以上は打ち欠かれ、開口部としている。この回りには別個体の大型壺の破片が認められることから、これで開口部は覆われ閉塞されていたとみられる。掘り方は円形で、径48cm、深さ15cm。弥生後期。

(6) 土器棺



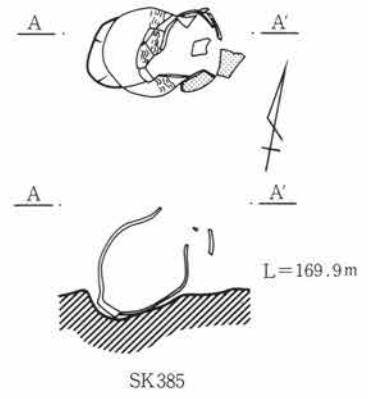
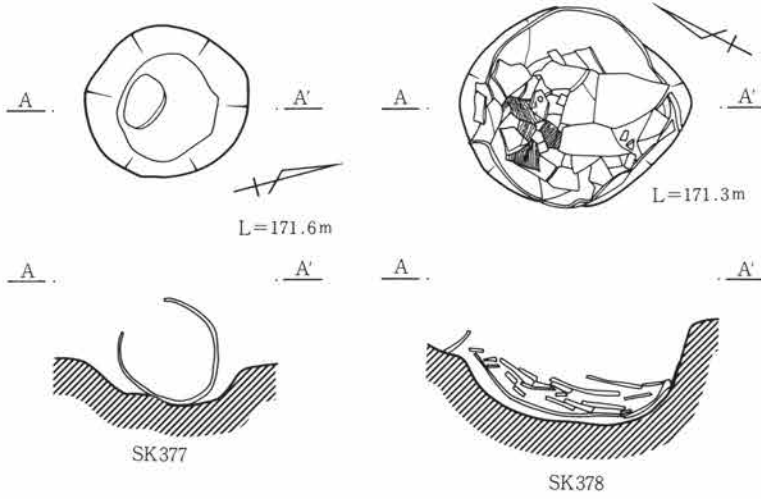
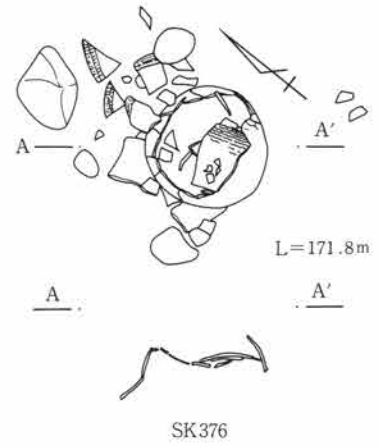
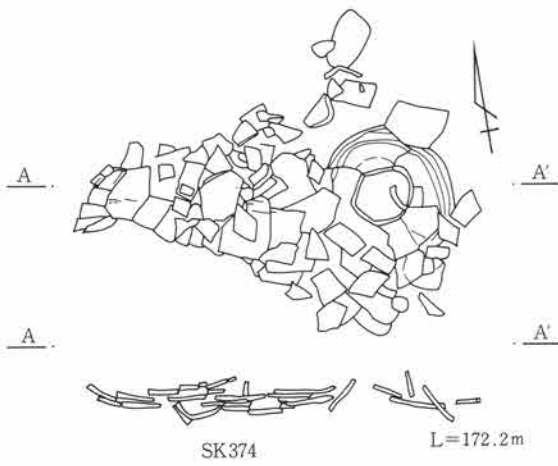
第325図 土器棺 B群(1)

6 検出した遺構・遺物

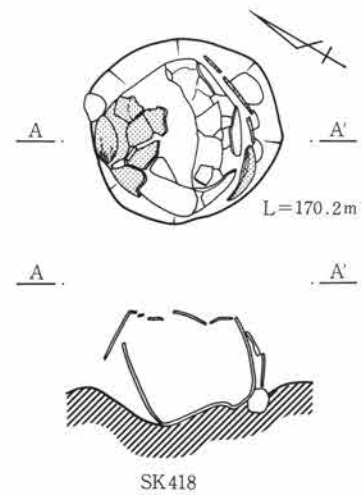
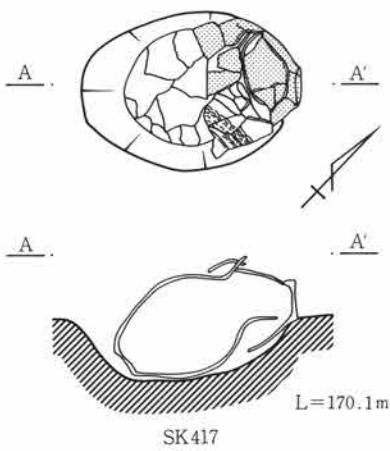


第326図 土器棺 B群(2)

(6) 土器棺



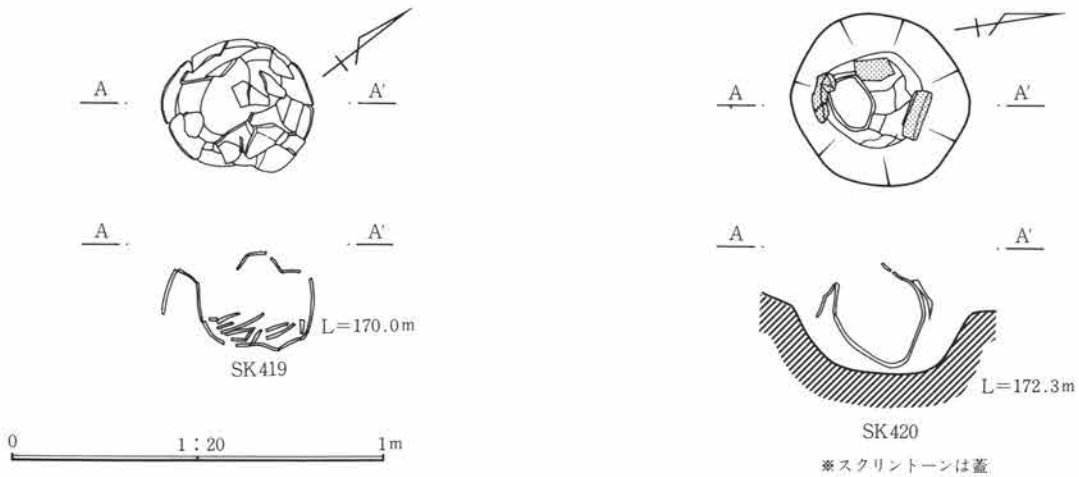
\*スクリントーンは蓋



0 1 : 20 1m

第327図 土器棺 B群 (3)

6 検出した遺構・遺物



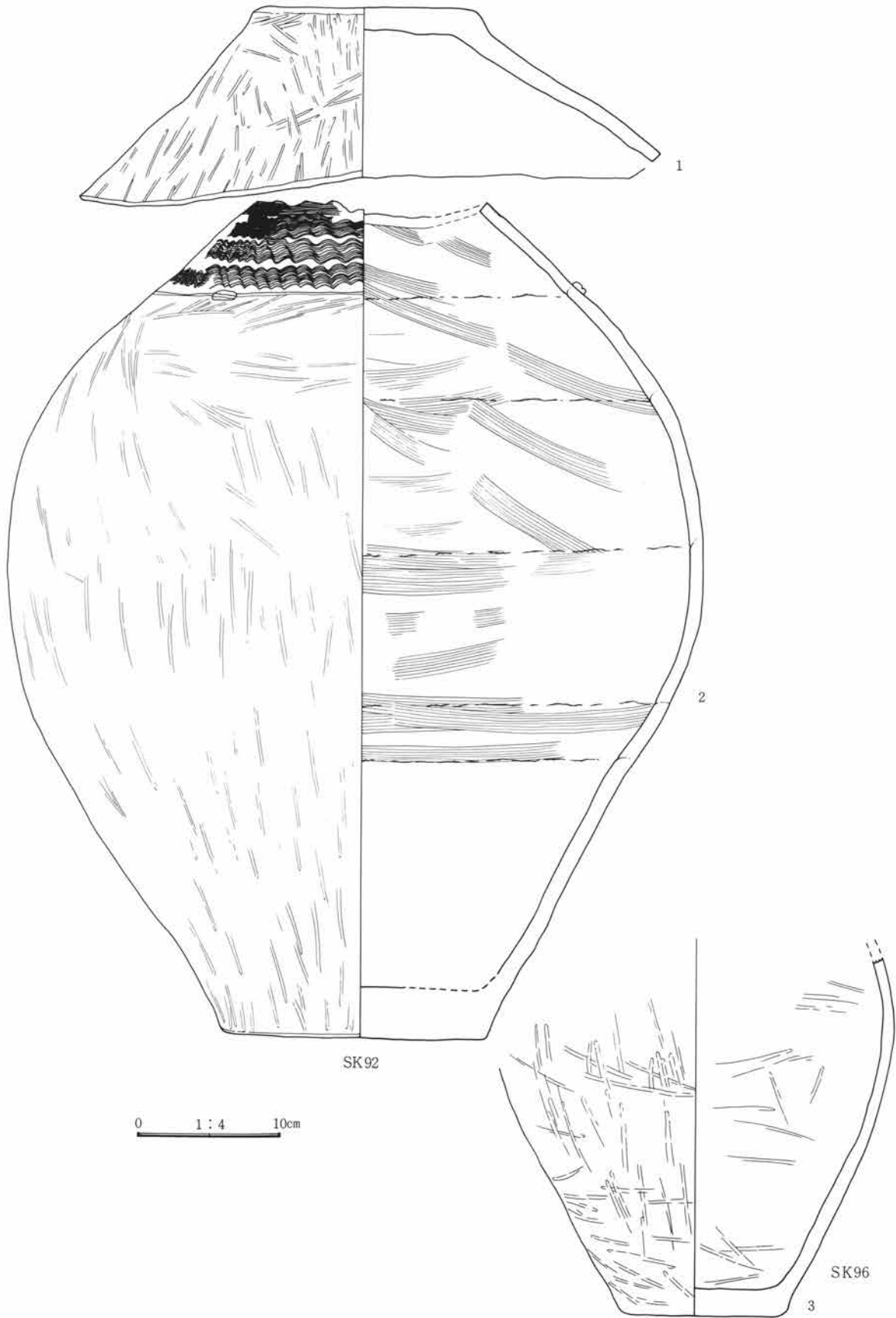
第328図 土器棺 B群(4)

土器棺B群出土土器観察表 PL.137・138

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺(蓋)	底 15.8	壺底部を打ち欠く、縁部は調整する。	外 ヘラミガキ。 内 荒れている。	砂粒を含む。 堅緻、浅黄色	胴下～底部全周
2	壺 棺	胴 48.3 孔径16.2 × —	頸部を打ち欠き、開口部とする。	外 頸部櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文、沈線、付文添付、以下ヘラミガキ。 内 ハケメ、接合痕が目立つ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	開口部1/4周 胴下部全周
3	甕	胴 28.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、赤褐色	胴～底部全周
4	壺(蓋)	胴 28.0	肩部から頸部を打ち欠く、一部断面片刃状に二次調整。	外 肩部は波状文、沈線を1条巡らす。以下ヘラミガキ。丹彩。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	底部は欠損。 胴上部1/4周 胴下部全周
5	壺 棺	胴 45.5 孔径25.5 ×23.0	肩部を打ち欠き開口部とする。欠け面は平滑。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、橙色	ほぼ全周 胴中部に一部欠損
7	壺(蓋)	胴 27.3		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、黄橙色	胴中～底部全周
8	壺 棺	胴 40.7 孔径16.0 × —	開口部の打ち欠き部は面調整している。	外 肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	開口部は部分的に遺存する。 胴中部は欠損。
9	高 坏	脚 5.8		外 ヘラミガキ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	脚部全周 外面丹彩
22	壺 棺	胴 43.6	棺の開口部は欠損し不明。	外 ハケメ後ヘラミガキ。 内 ハケメ。器面が荒れている。	砂粒を含む。 堅緻、浅黄褐色	胴中部～底部全周 胴下部1/4周
23	甕	口 18.3 高 34.6	口縁端部は鋭い稜を作り角ばる。	外 口縁端部～胴上部は波状文、頸部は櫛描横直線に縦直線、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、黄褐色	口縁～底部1/4周
24	壺 棺	胴 36.8 孔径15.0 ×13.5	底部に不整形の孔を穿つ。頸部を欠き開口部とする。	外 頸部は2連止め簾状文、肩部は波状文。 内 ハケメ。	粗砂粒を含む。 やや軟弱、浅橙色	開口部は一部欠損 内外面丹彩

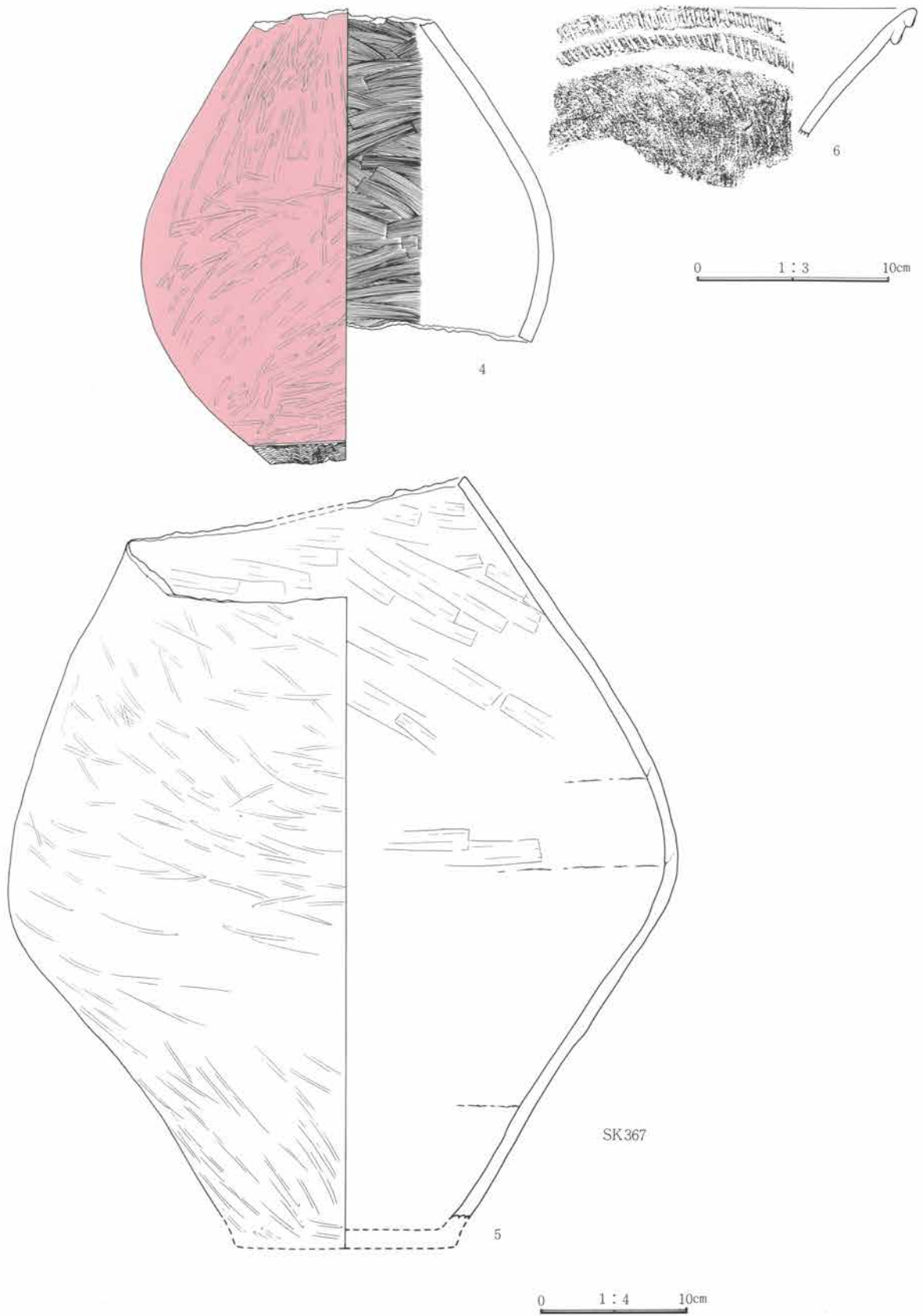
土器棺B群出土土器観察表(拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
6	壺	口 33	2段口縁	外 口縁部はヘラ刻み目。内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。	やや堅緻	浅黄褐色	14%



第329図 土器棺・棺内出土遺物 B群(1)

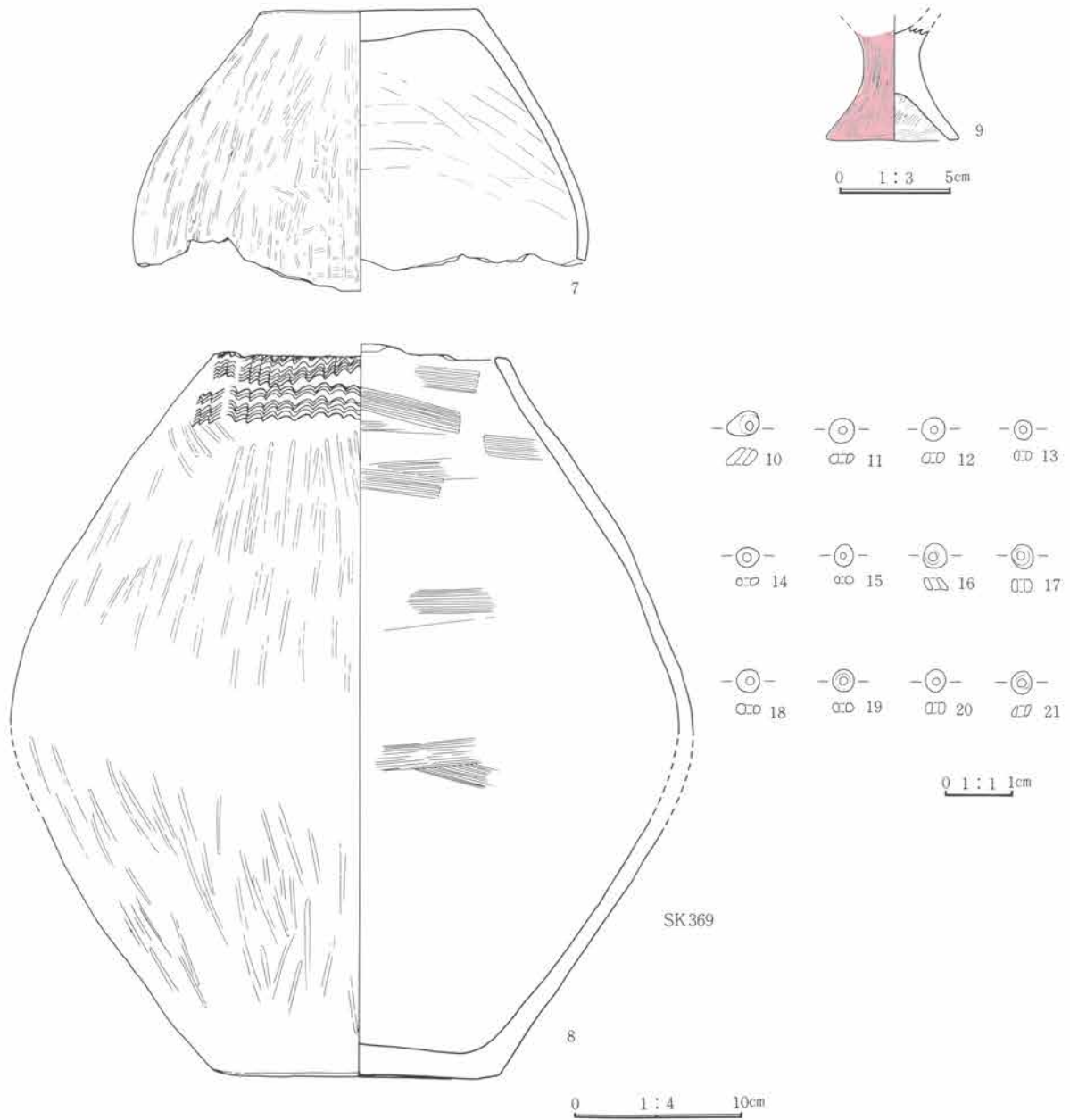
6 検出した遺構・遺物



第330図 土器棺・棺内出土遺物 B群(2)



(6) 土器棺

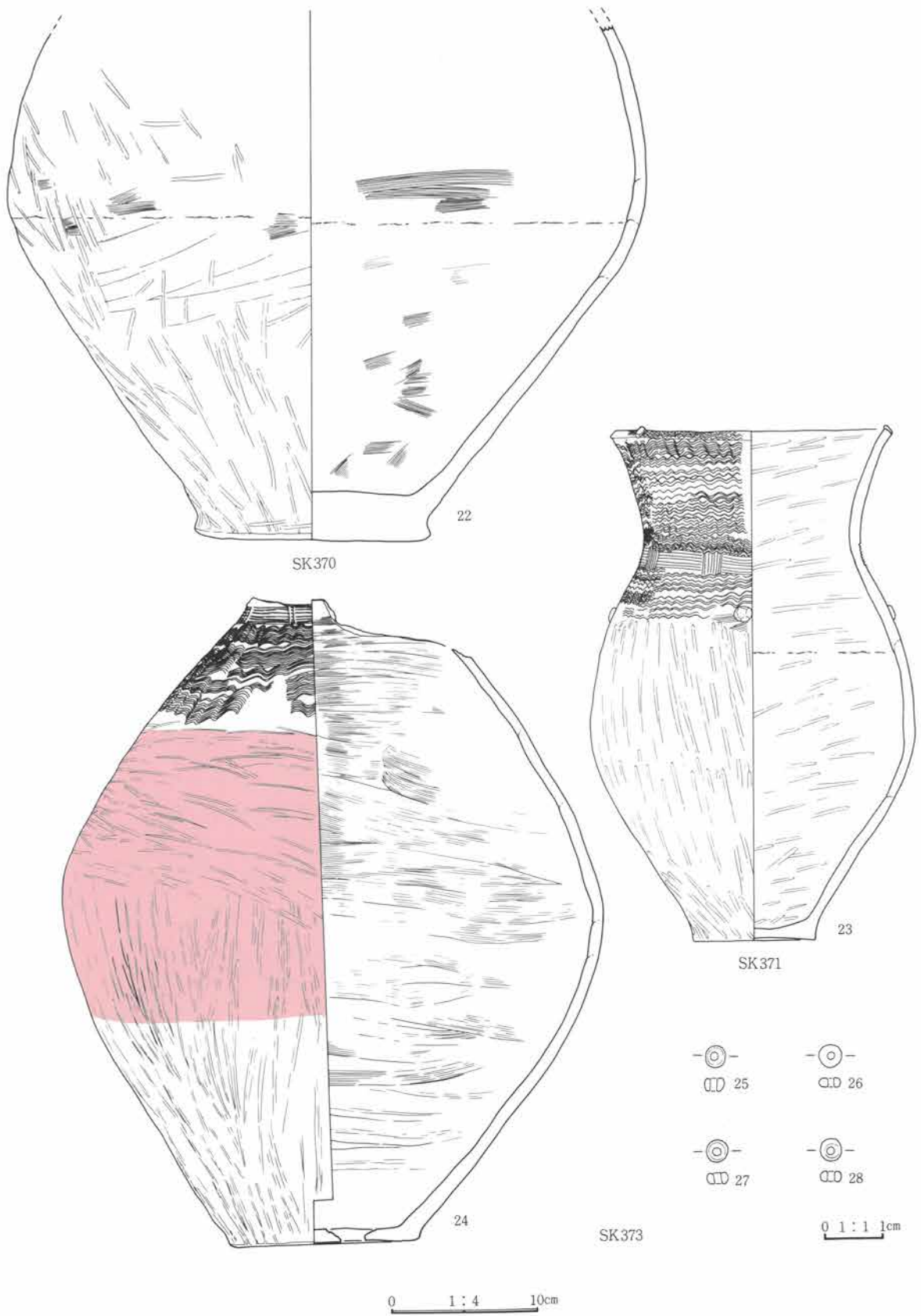


第331図 土器棺・棺内出土遺物 B群(3)

土器棺B群出土玉類観察表 PL.145

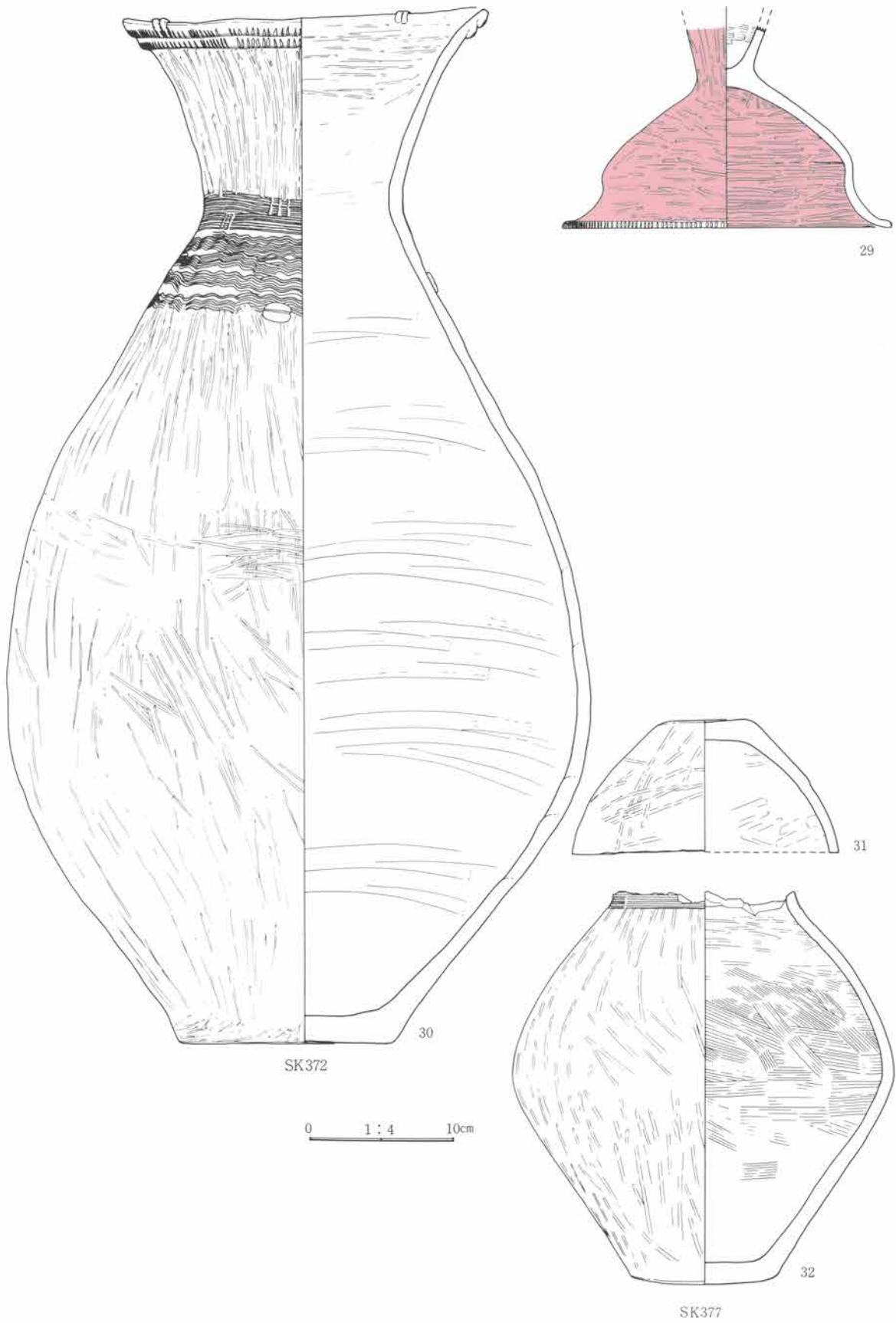
遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
10	小玉	0.25	0.45	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
11	小玉	0.13	0.38	0.15	ガラス、スカイブルー	
12	小玉	0.15	0.38	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
13	小玉	0.13	0.3	0.1	ガラス、スカイブルー	
14	小玉	0.12	0.38	0.14	ガラス、スカイブルー	
15	小玉	0.11	0.28	0.08	ガラス、スカイブルー	
16	小玉	0.17	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
17	小玉	0.18	0.35	0.1	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
18	小玉	0.12	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
19	小玉	0.12	0.3	0.1	ガラス、スカイブルー	
20	小玉	0.18	0.29	0.1	ガラス、スカイブルー	
21	小玉	0.16	0.3	0.1	ガラス、スカイブルー	
25	小玉	0.21	0.39	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
26	小玉	0.24	0.39	0.12	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
27	小玉	0.19	0.38	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
28	小玉	0.18	0.38	0.1	ガラス、スカイブルー	孔縁に研磨面あり。

6 検出した遺構・遺物



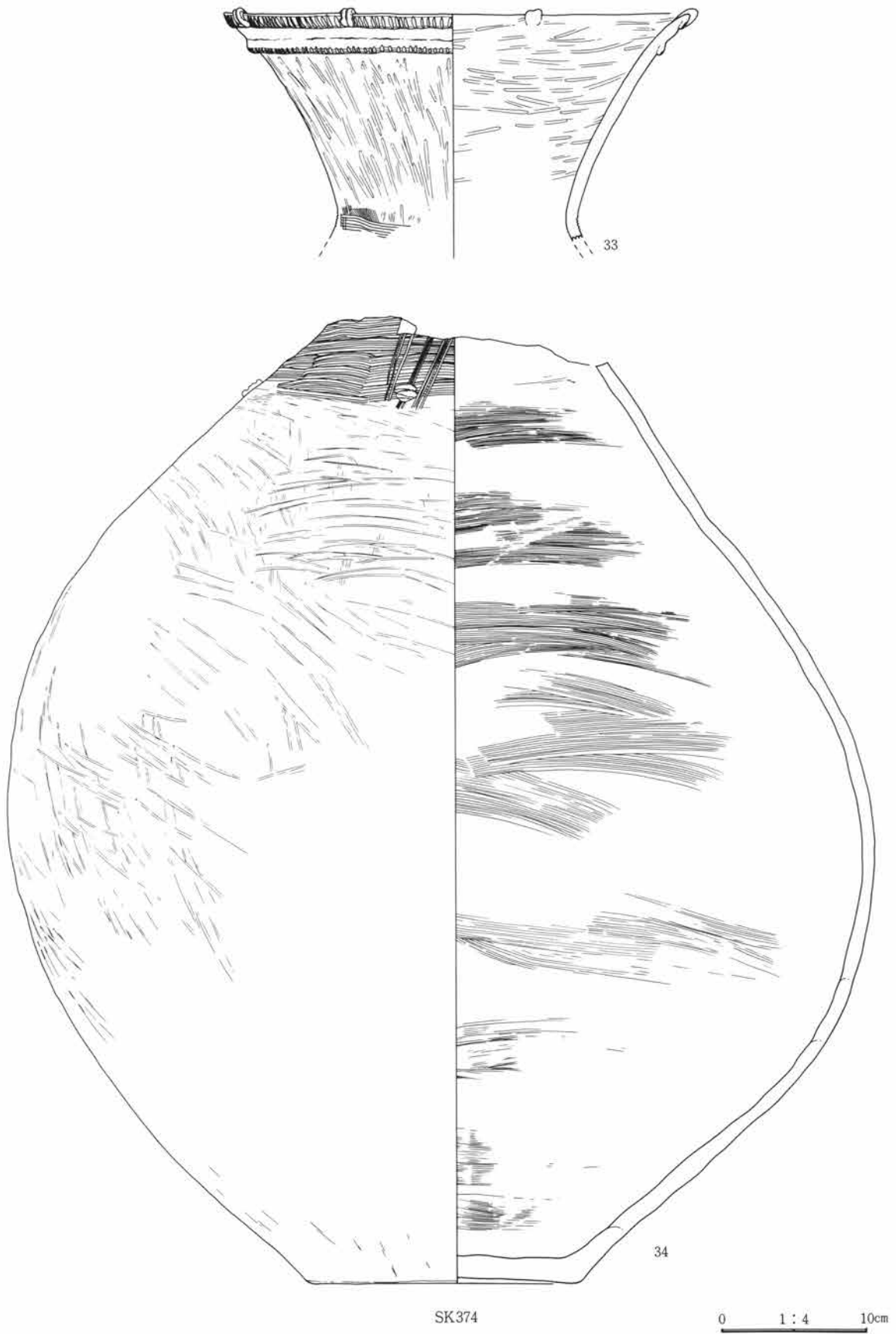
第332図 土器棺・棺内出土遺物 B群(4)

(6) 土器棺



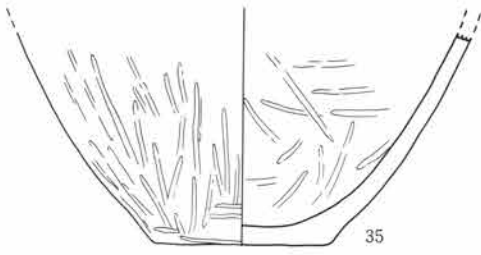
第333図 土器棺・棺内出土遺物 B群(5)

6 検出した遺構・遺物

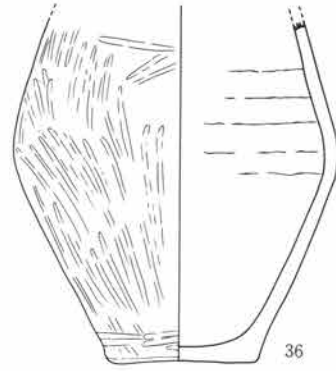


SK374  
第334図 土器棺・棺内出土遺物 B群(6)

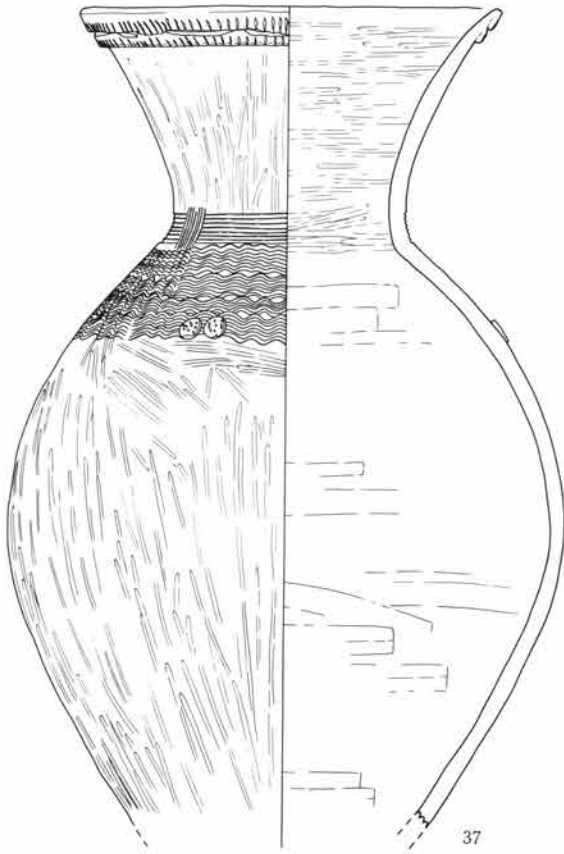
(6) 土器棺



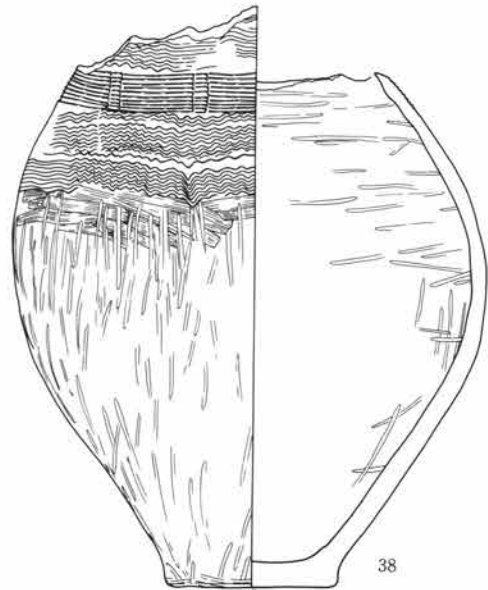
SK374



0 1:3 10cm



SK376



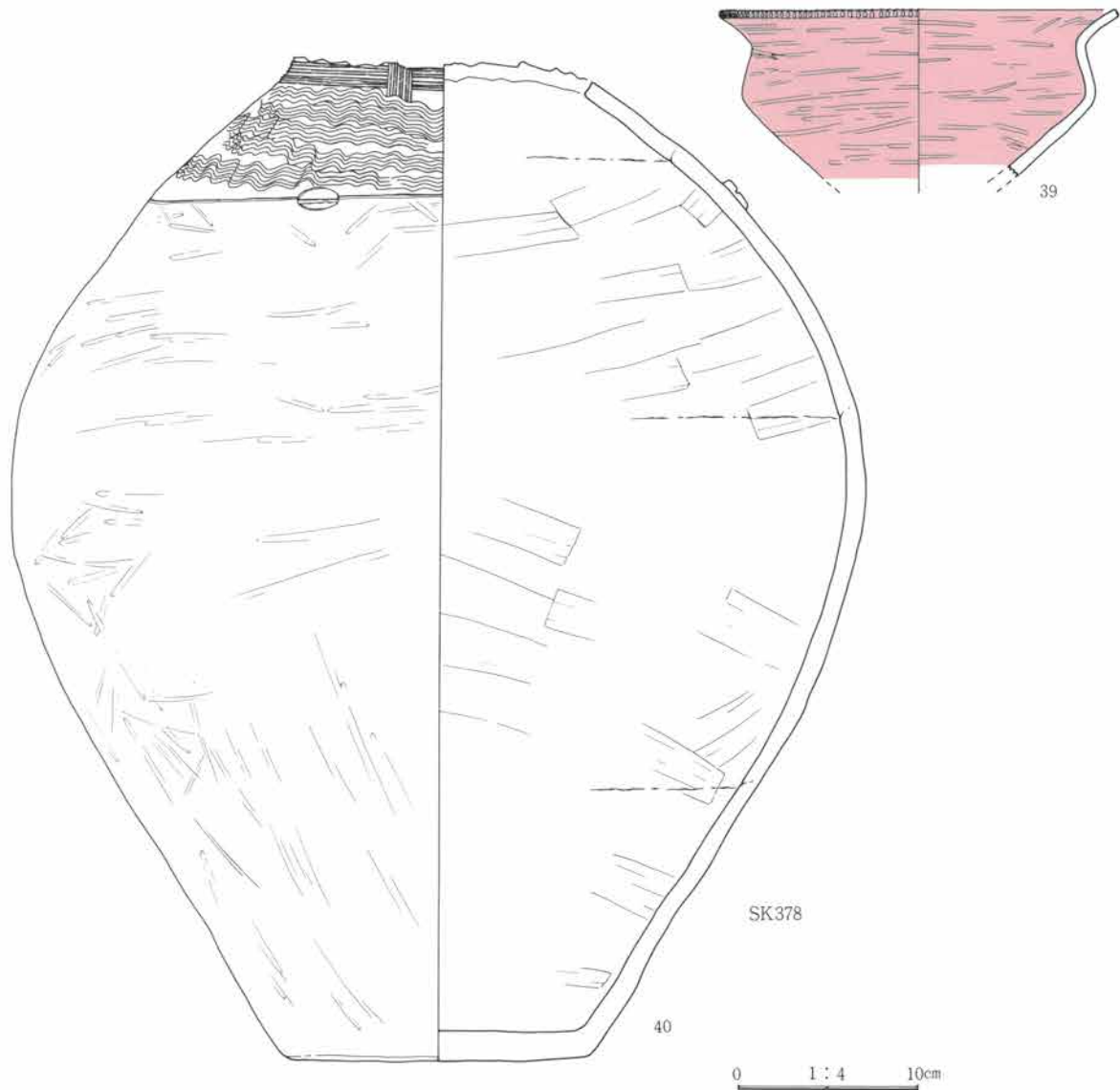
SK385

0 1:4 10cm

第335図 土器棺・棺内出土遺物 B群(7)



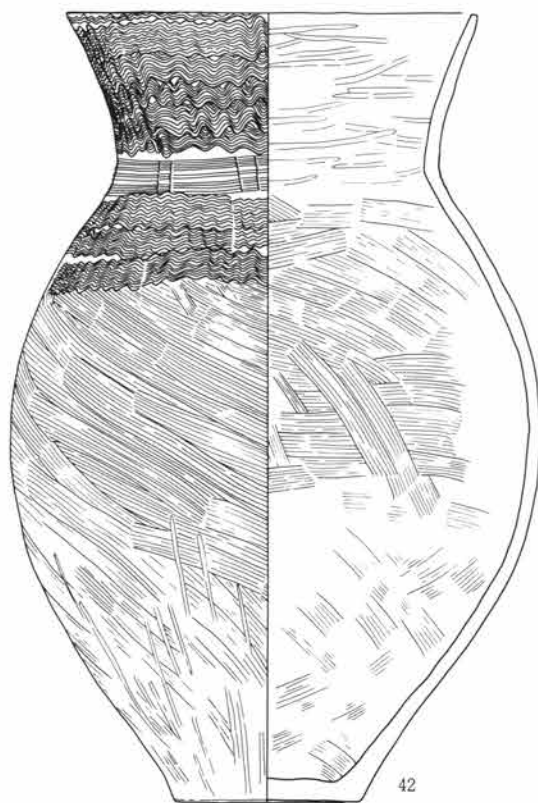
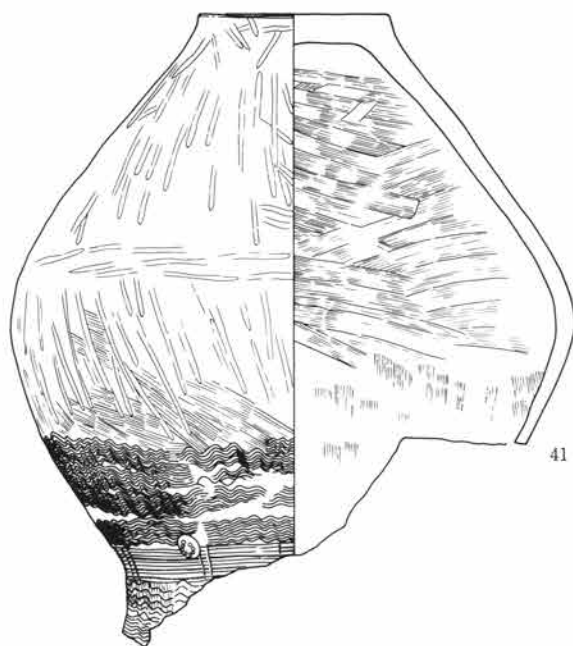
6 検出した遺構・遺物



第336図 土器棺・棺内出土遺物 B群(8)

土器棺B群出土土器観察表 PL. 138・139

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
29	高坏(蓋)	口 23.0		外 口縁端部は刻み目文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	坏部 $\frac{3}{4}$ 周 内外面丹彩
30	壺 棺	口 24.8 高 70.5	2段の折り返し口縁、頸部を打ち欠いて棺に使用。	外 口縁部は刻み目2段、付文、頸部は3連止め簾状文を2段、肩部は波状文、付文、以下ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、以下ヘラナデ。	粗砂粒を含む。 やや軟弱、橙色	口縁～胴部 $\frac{3}{4}$ 周 底部全周
31	甕(蓋)	底 6.0	胴上半部は打ち欠く、打ち欠き部は接合部。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ、ヘラナデ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、灰白色	胴下～底部全周
32	壺 棺	胴 26.5	頸部を打ち欠く、打ち欠き部は面調整は見られない。	外 頸部は櫛描直線文、以下ヘラミガキ。 内 頸部以上はヘラミガキ、以下ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	頸(開口部)～底部全周
33	壺	口 32.1	2段の折り返し口縁。下段は突帯状。打ち欠き面は粗い。	外 口縁部は刻み目文2段、付文、頸部は櫛描横直線に縦直線。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	口縁～頸部全周 頸部に接合部無し。



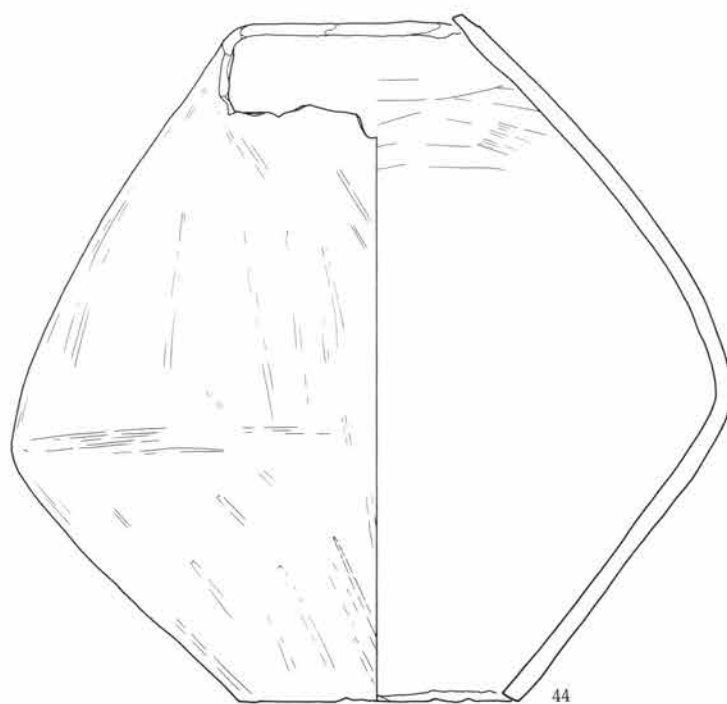
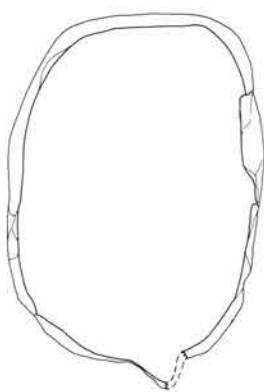
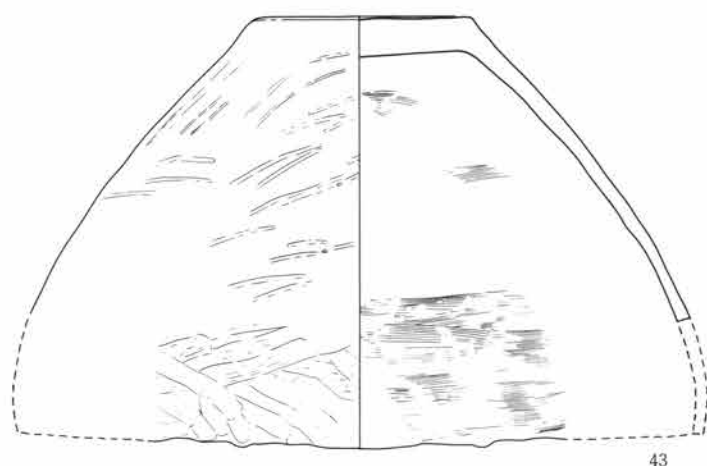
SK417

0 1:4 10cm

第337图 土器棺・棺内出土遺物 B群(9)



6 検出した遺構・遺物

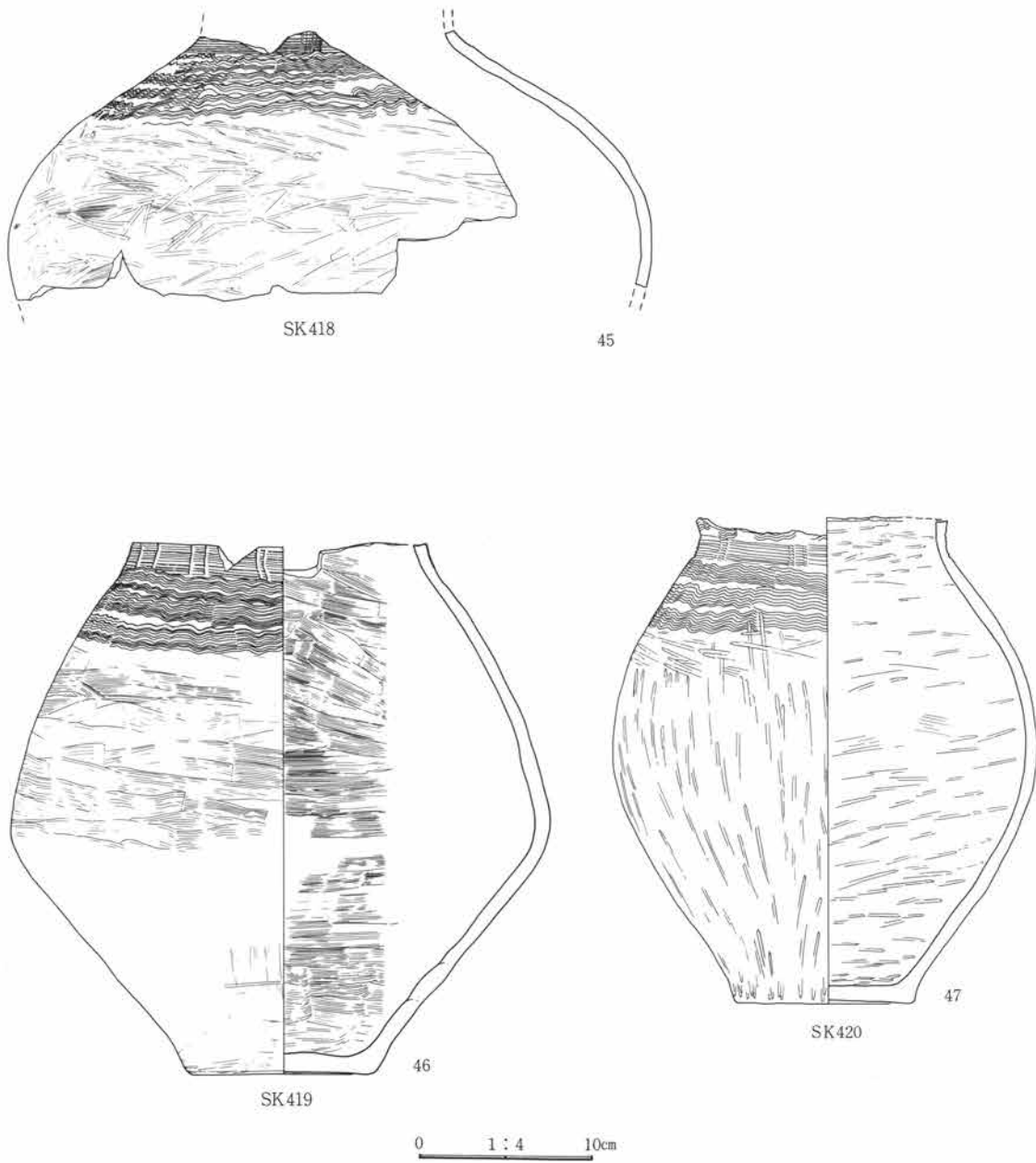


SK418

0 1:4 10cm

第338図 土器棺・棺内出土遺物 B群(10)

(6) 土器棺



第339図 土器棺・棺内出土遺物 B群(11)

土器棺B群出土土器観察表 PL. 139・140

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
34	壺 棺	胴 59.5 口径18.0 ×19.0	頸部を打ち欠き開口部とする。孔端部面調整痕無し。	外 頸～肩部は櫛描横直線5段以上に縦に3本単位の櫛描直線、付文、以下ヘラミガキ。 内 ハケメ。	粗砂粒を含む。 堅緻、赤橙色	胴部 $\frac{3}{4}$ 周
35	甕(蓋?)	底 9.4		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍い橙色	胴下～底部全周
36	壺	胴 13.0	接合痕目立つ。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。	小礫を含む。 堅緻、橙色	胴～底部 $\frac{1}{2}$ 周

6 検出した遺構・遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
37	壺 棺	口 22.3 胴 29.8	2段の折り返し口縁。	外 口縁部は刻み目2段、頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文、2個単位の付文4か所に貼付する。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤橙色	口縁～胴部ほぼ全周
38	甕 棺	胴 25.1 底 9.0	頸部は打ち欠いたと思われる。	外 頸部～胴上部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、褐色	頸～底部全周
39	高坏(蓋?)	口 22.0		外 口縁端部は刻み目文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	坏部 $\frac{1}{4}$ 周 内外面丹彩
40	壺 棺	胴 47.5 口径16.0 $\times 15.5$	開口部の打ち欠き面は比較的丁寧に調整している。	外 頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文、直下を沈線で区画する。付文は沈線の後に付す。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	頸～底部全周 開口部全周
41	壺(蓋)	胴 30.2 底 10.2	頸部～胴部を不整形に打ち欠く。	外 口辺～肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、黄褐色	口辺～胴上部 $\frac{1}{4}$ 周 胴中～底部全周
42	甕 棺	口 22.0 高 41.8	口縁端部は角ばる。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍褐色	完形
43	壺(蓋)	底 11.5		外 胴部はヘラナデ。 内 胴部はハケメ。	粗砂粒を含む。 軟弱、浅橙色	胴～底部 $\frac{3}{4}$ 周
44	壺 棺	胴 38.4 口径13.5	頸部を打ち欠き開口部とする。底部も開口していた。	外 ヘラミガキ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	頸～胴部全周 器面荒れている。
45	壺(蓋)	胴 37.2	胴上部破片で二次整形の痕跡はない。	外 頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文。 内 胴部はハケメ。	粗砂粒を含む。 やや軟弱、浅黄橙色	頸～胴上部 $\frac{3}{4}$ 周 棺の底部の孔にあてている。
46	甕 棺	胴 31.1	頸部開口部の破断面は直線状、面調整痕は見られず。	外 頸部は2連止め簾状文、肩部は波状文、以下ハケメ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	胴上部 $\frac{3}{4}$ 周 胴中～底部全周
47	甕 棺	胴 24.6 底 10.4	頸部を直線状に打ち欠いて開口部としている。	外 頸部は2連止め簾状文、肩部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	頸～底部全周

土器棺C群 (第340・341図、PL. 79)

S K383

大型の甕を棺とし、斜位に埋置する。甕棺の口縁部には別個体の甕胴部を蓋とし閉塞する。蓋の上部は後世の攪乱により欠損する。甕棺の口縁部の欠損も同じ攪乱によるものと思われる。頸部を欠き蓋に用いた甕の口縁～頸部破片は開口部の傍らに添えた状態で認められた。掘り方は径45cm、深さ25cmの円形を呈する。弥生後期第3期。

S K386

大型壺を棺とし、横位に埋置する。棺の上部は破損し、後世の攪乱をうけて欠損する。胴部破片の一部が棺の外側傍らに検出される。開口部は不明。掘り方不明。弥生後期。

S K395

大型壺を棺とし横位に埋置する。壺棺は頸部以上を打ち欠き開口部とし、ここに別個体の甕の下半部を蓋とし、孔を閉塞している。棺及び蓋の上部は後世の攪乱により、欠損している。掘り方は長径80cm、深さ25cmで長円形を呈する。棺内の下部、底部寄りには骨粉の集中が認められた。弥生後期。

S K398

甕をやや斜位に倒立状態に据えた状態に認める。口縁～胴上部はほぼ破損なく、胴下部～底部は破損し、

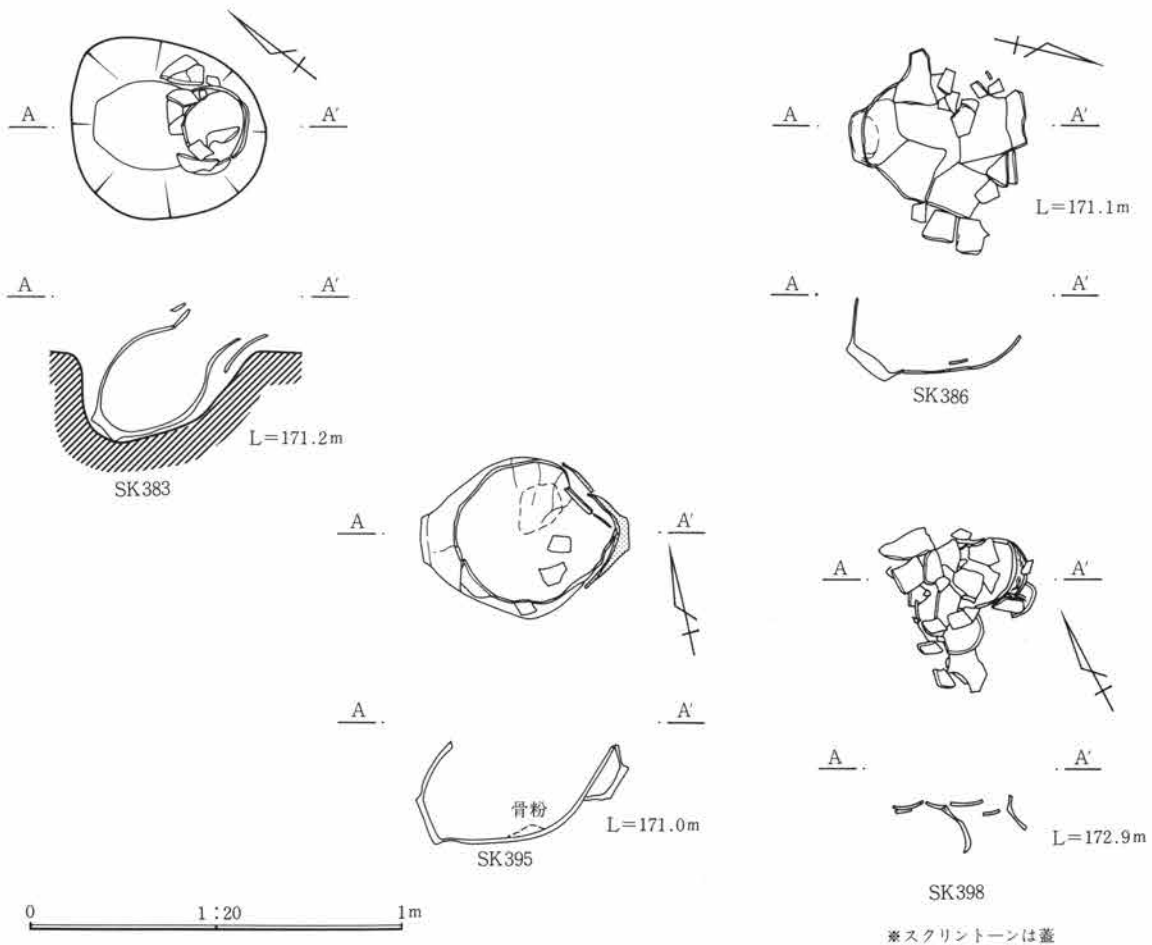
密に重なった状態で認められた。蓋などに用いられたとみられる別個体の土器は土器破片中に認めることはできない。掘り方は明確に検出できなかった。甕の内部からは副葬品など認められないことなど棺以外の可能性も考えられる。弥生後期第3期。

SK400

大型の壺とやや小型甕が隣接して出土する。甕は横位に潰れた状態、壺は破損して破片が重なりあった状態で検出される。破片が散乱しているので本来の埋置の状態は明瞭ではない。土器の中からの副葬品など無く、一方では棺ではない可能性もある。弥生後期第3期。

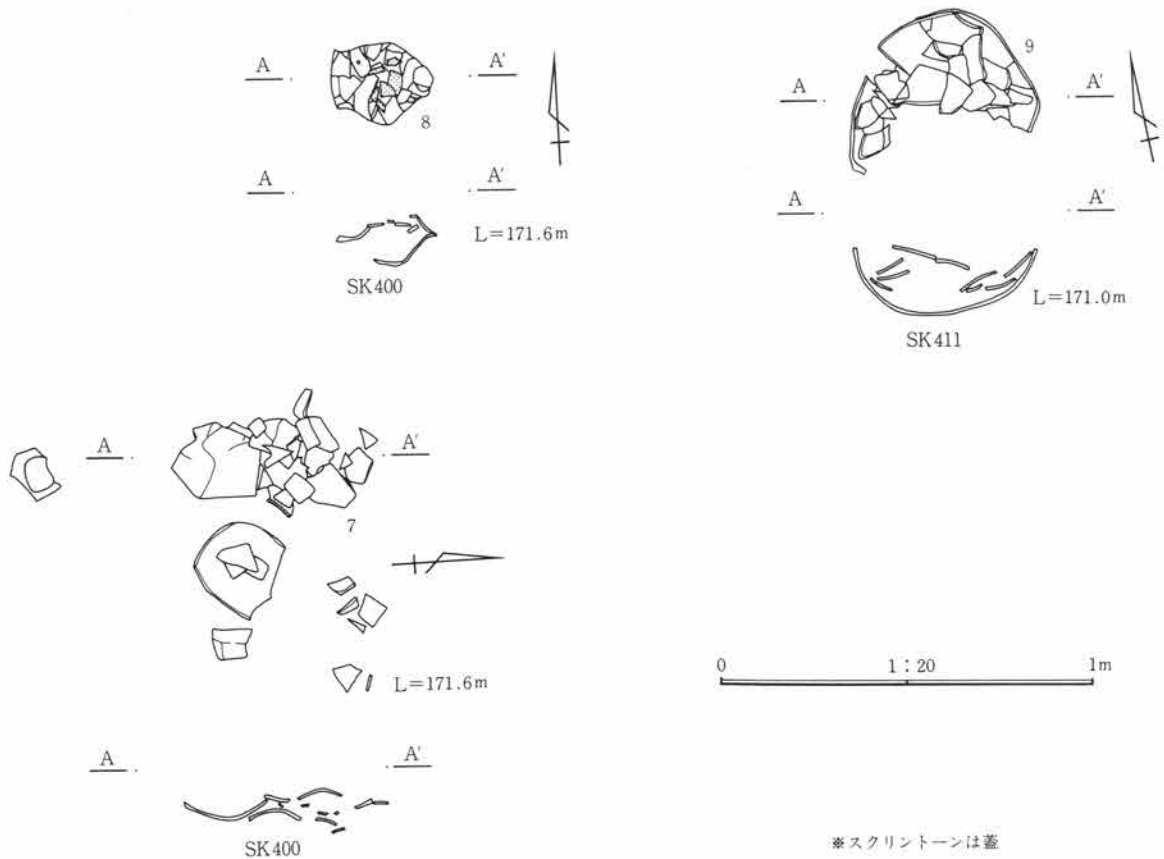
SK411

大型壺を棺とし、横位に埋置する。遺存状態は不良で、棺は上部が潰れて崩落している。開口部は壺の頸部を打ち欠く。開口部の大きさは径17cm。土器破片群中より、比較的小型の甕底部の出土を認め、これが開口部の蓋として用いられた可能性が考えられる。掘り方は不明確。弥生後期第3期。



第340図 土器棺 C群(1)

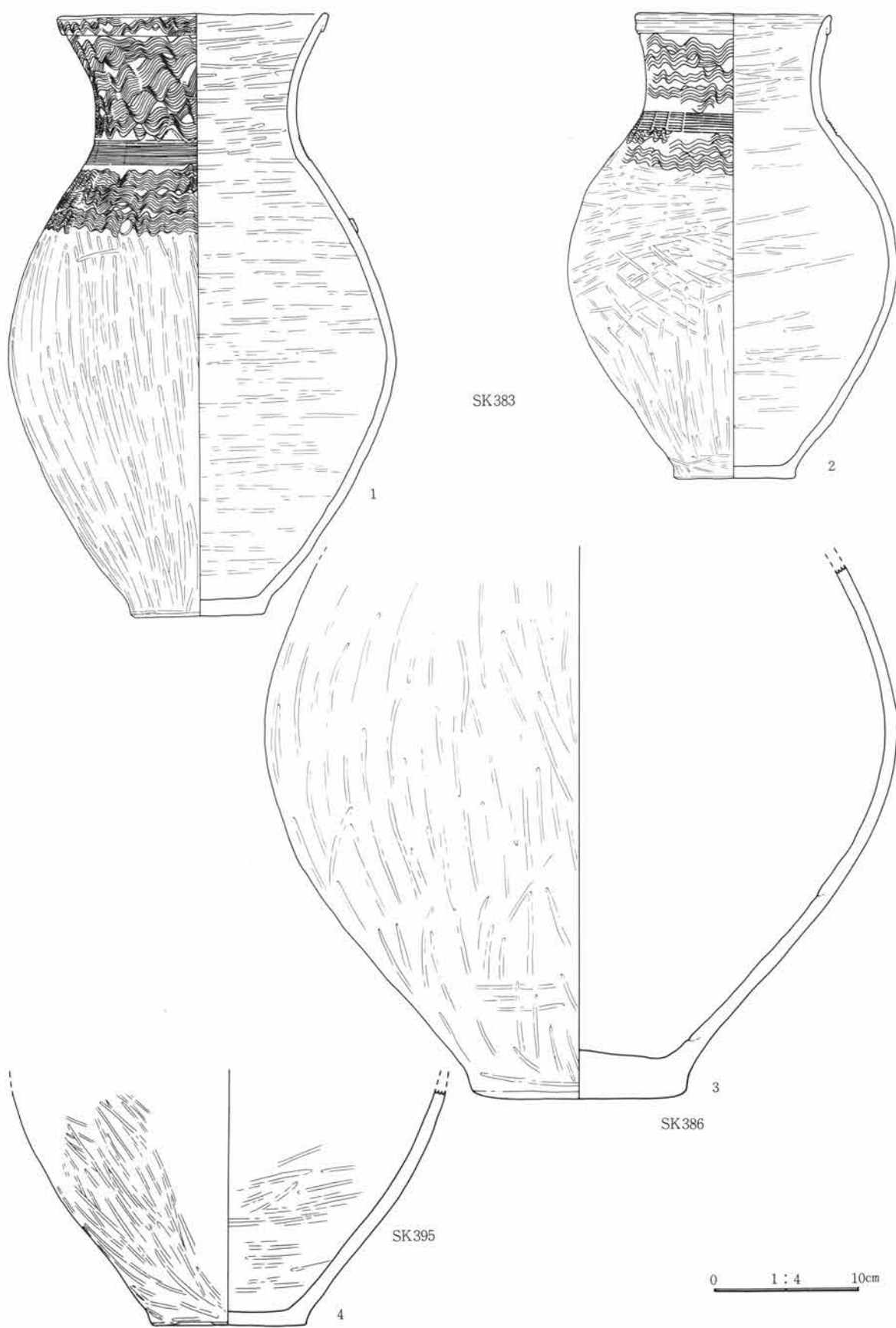
6 検出した遺構・遺物



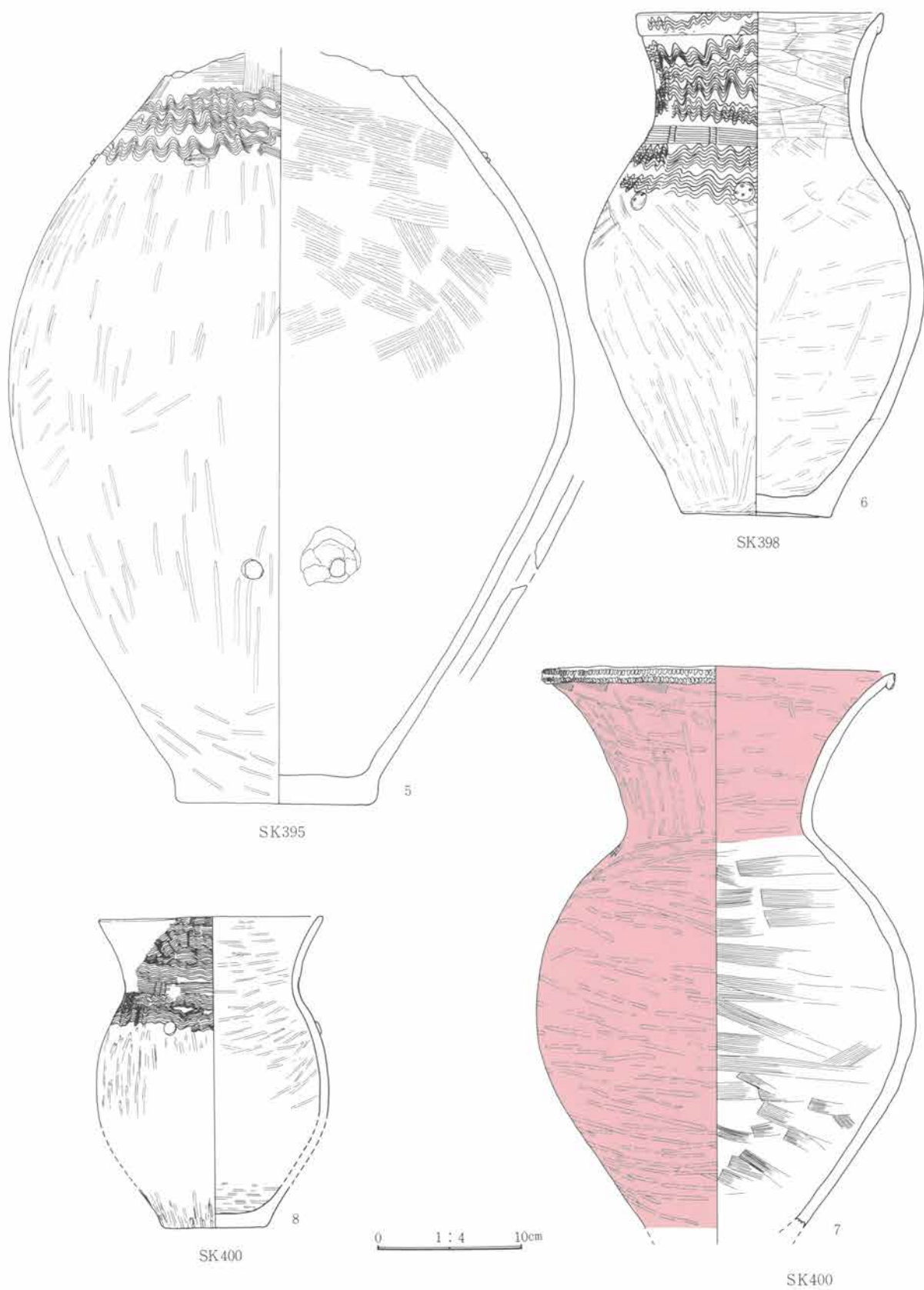
第341図 土器棺 C群(2)

土器棺C群出土土器観察表 PL.141

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕 棺	口 18.4 高 41.5	折り返し口縁、端部はやや角ばる。	外 口縁～胴上部は波状文、頸部は櫛描直線文、胴上部に付文5個添付。以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周 頸～底部全周
2	甕(蓋?)	口 13.4 高 32.2	折り返し口縁	外 口縁部はヨコナデ、口辺～肩部は波状文。頸部は4連止め簾状文。以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周 頸～底部 $\frac{1}{4}$ 周
3	壺 棺	胴 44.0		外 ヘラミガキ。 内 器面が荒れていて観察できない。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	開口部は欠損。
4	甕 棺	底 10.5		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	胴～底部 $\frac{1}{4}$ 周
5	壺 棺	胴 39.4 底 13.6	頸部を打ち欠き開口部としている。	外 頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文。 内 ハケメ。胴下部に内側から小円孔を穿っている。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	頸～胴部 $\frac{1}{4}$ 周
6	甕 棺	口 17.0 高 34.4	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。肩部に付文7個巡らす。以下ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はハケメ、胴部はハケメ後ヘラミガキ。	砂粒を多く含む。 堅緻、黒褐色	ほぼ完形
7	壺 棺	口 24.5 胴 26.3	折り返し口縁。	外 口縁部は刻み目。以下ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ。胴部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁～胴部ほぼ全周 内外面丹彩
8	甕 棺	口 14.9 胴 16.1 底 7.2		外 口縁～肩部は波状文、頸部は3連止め簾状文。肩部に付文を付す。以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周 頸～底部 $\frac{1}{4}$ 周
9	甕(蓋?)	底 5.8		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	底部 $\frac{1}{4}$ 周
10	壺 棺	胴 47.7	開口部打ち欠き面を面調整している。	外 肩部は波状文、以下ハケメ後ヘラミガキ。 内 肩部はヘラナデ、以下ハケメ。	細砂粒を含む。 堅緻、橙色	胴上部～底部 $\frac{1}{4}$ 周 開口部は部分的に遺存。



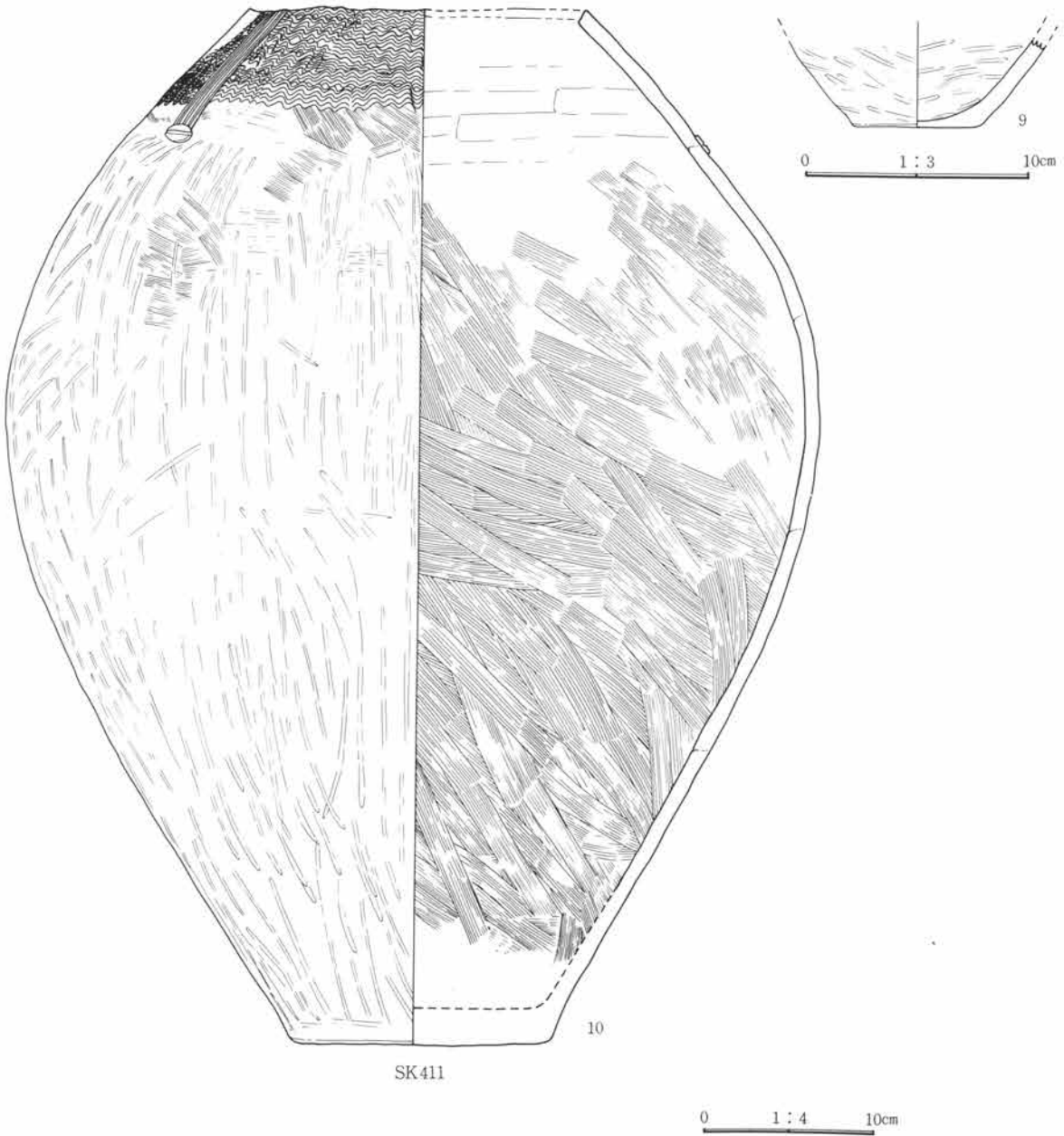
第342図 土器棺・棺内出土遺物 C群(1)



第343図 土器棺・棺内出土遺物 C群(2)



(6) 土器棺



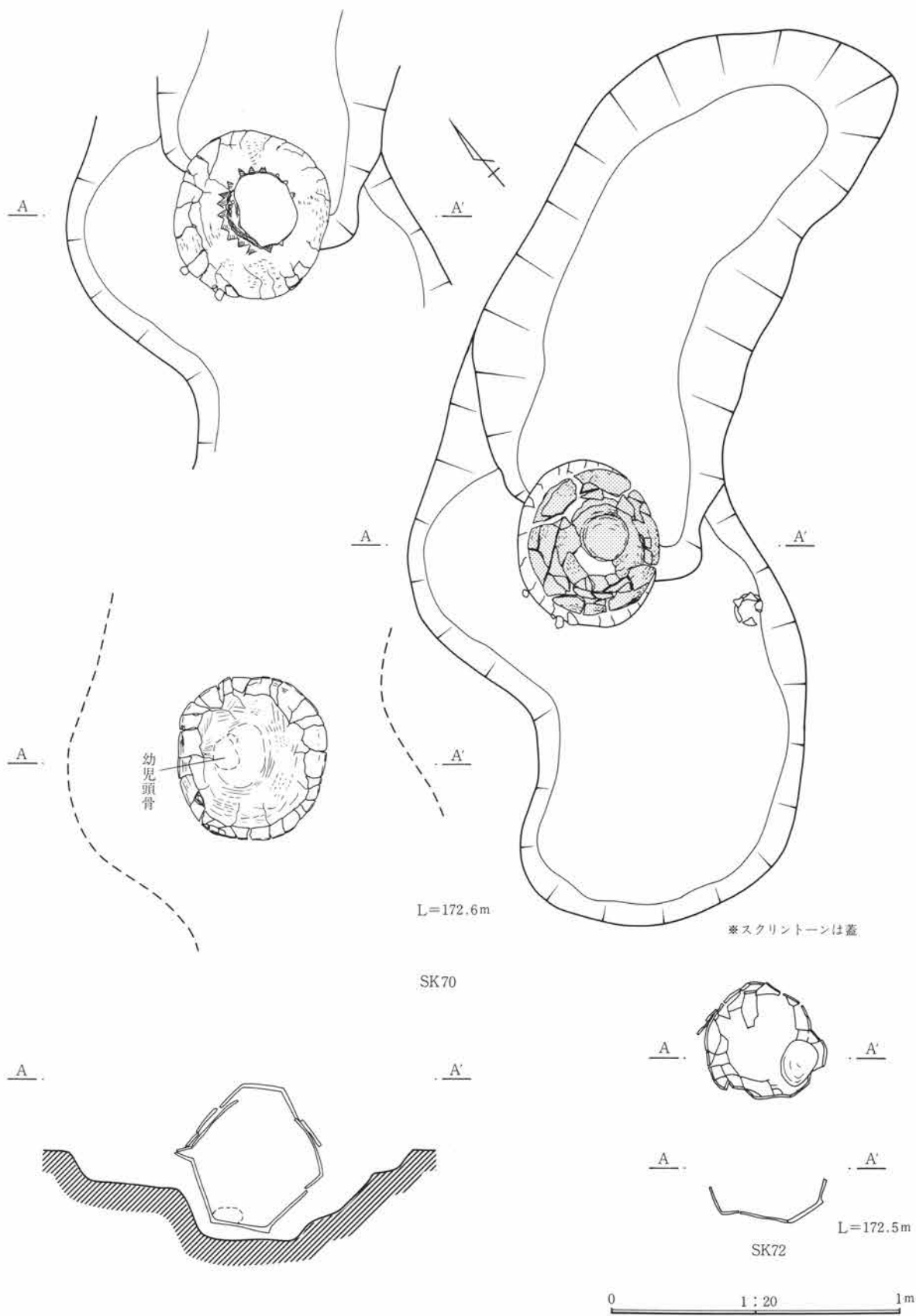
第344図 土器棺・棺内出土遺物 C群(3)

土器棺D群 (第345図、PL. 80)

SK70

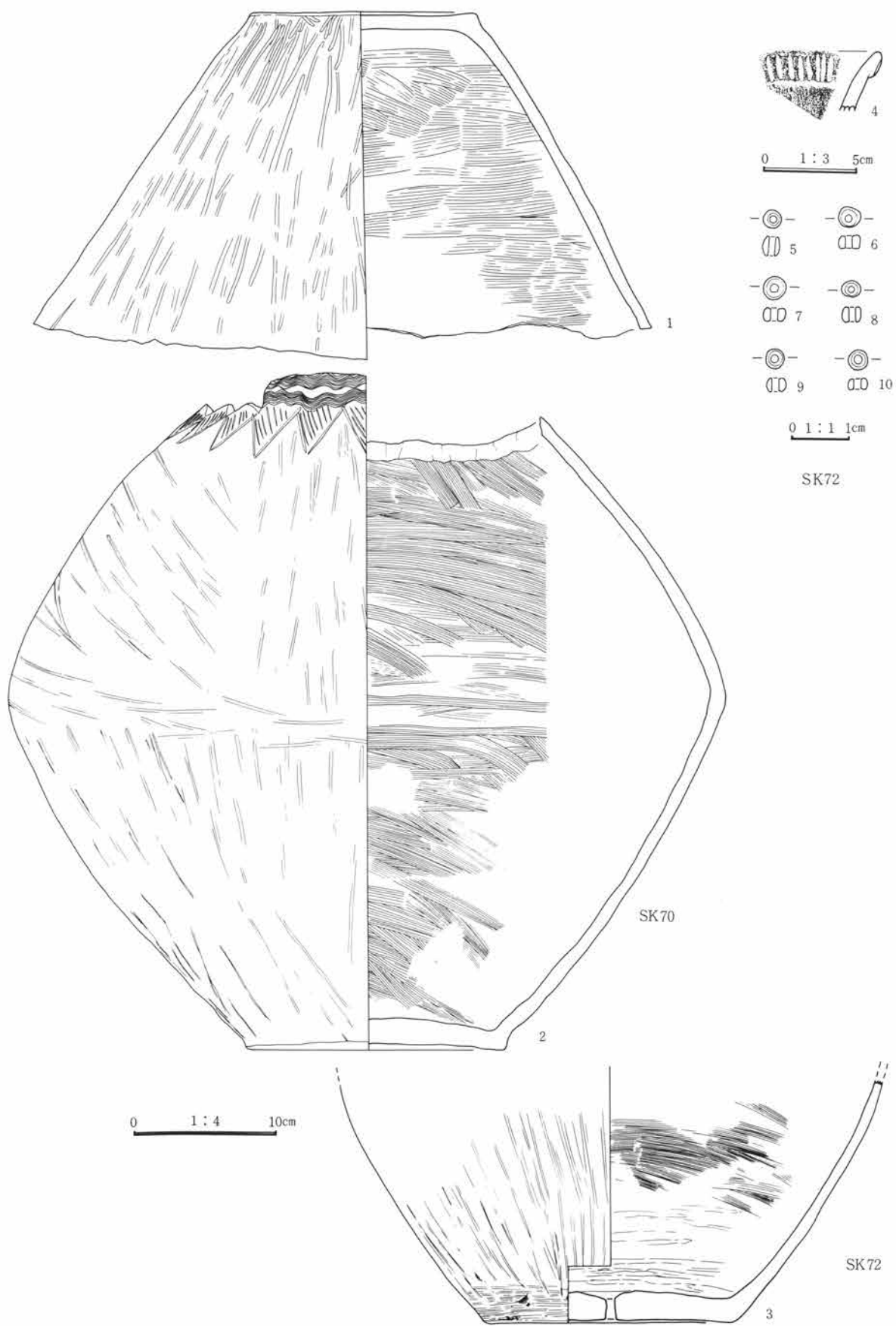
大型壺を棺とし、直立に埋置する。棺は肩部以上を打ち欠き開口部とし、開口部には別個体の壺の胴下部をあて、閉塞している。棺は3m×90cmの不整形な溝状の土中にほぼ直立状態で埋置されている。棺は密封され内部には土が侵入しておらず、棺内底部には幼児の頭骨が遺存していた。弥生後期。

6 検出した遺構・遺物



第345図 土器棺 D群

(6) 土器棺



第346图 土器棺·棺内出土遗物 D群

6 検出した遺構・遺物

SK72

大型壺を棺とし、斜位に埋置する。棺の上部は後世の攪乱により欠損している。開口部は遺存せず不明確。壺棺の底部には焼成後の小円孔が穿たれている。掘り方不明。棺内の土を洗いガラス小玉を6個検出する。弥生後期。

土器棺D群出土土器観察表 PL.142

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺(蓋)	底 15.9	胴中部以上を打ち欠く。打ち欠き面は面調整している。	外 ヘラミガキ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	胴中～底部全周
2	壺 棺	胴 50.5 孔径22.0 ×26.0	棺の開口部打ち欠き部は部分的に片刃状に調整する。	外 肩部は波状文、沈線充填鋸歯文、以下ヘラミガキ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	胴～底部全周
3	壺	底 17.2	底部に焼成後円孔を穿つ。	外 ヘラミガキ。 内 ハケメ、ヘラナデ。	粗砂粒を含む。 やや軟弱、淡黄色	胴下部1/4周 底部全周

土器棺D群出土土器観察表(拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
4	壺		折り返し口縁	外 ヘラ刻み目。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	明赤褐色	5%

土器棺群D出土玉類観察表 PL.145

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
5	小玉	0.35	0.33	0.15	ガラス、スカイブルー	
6	小玉	0.25	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
7	小玉	0.25	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
8	小玉	0.3	0.4	0.2	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。
9	小玉	0.25	0.35	0.15	ガラス、スカイブルー	
10	小玉	0.25	0.4	0.15	ガラス、スカイブルー	研磨面あり。

土器棺E群 (第347・348図、PL. 80)

SK82

中型の壺を直立に埋置している。壺の上半部は破損しており、開口部の状況は不明。破損部分に重なってみられる破片中には別個体の壺の破片も含まれており、その傍らにはこの別個体の壺の口縁部も認められる。棺以外の可能性も大きい。掘り方は不明。弥生後期第1期。

SK88

大型壺を棺とし、斜位に埋置する。胴上部以上は破損しており、口縁～頸部は殆ど破損のない状態で頸部直下に出土している。頸部と胴部の接合部の接点の破片は得られていない。頸部を打ち欠き棺の開口部とし

(6) 土器棺

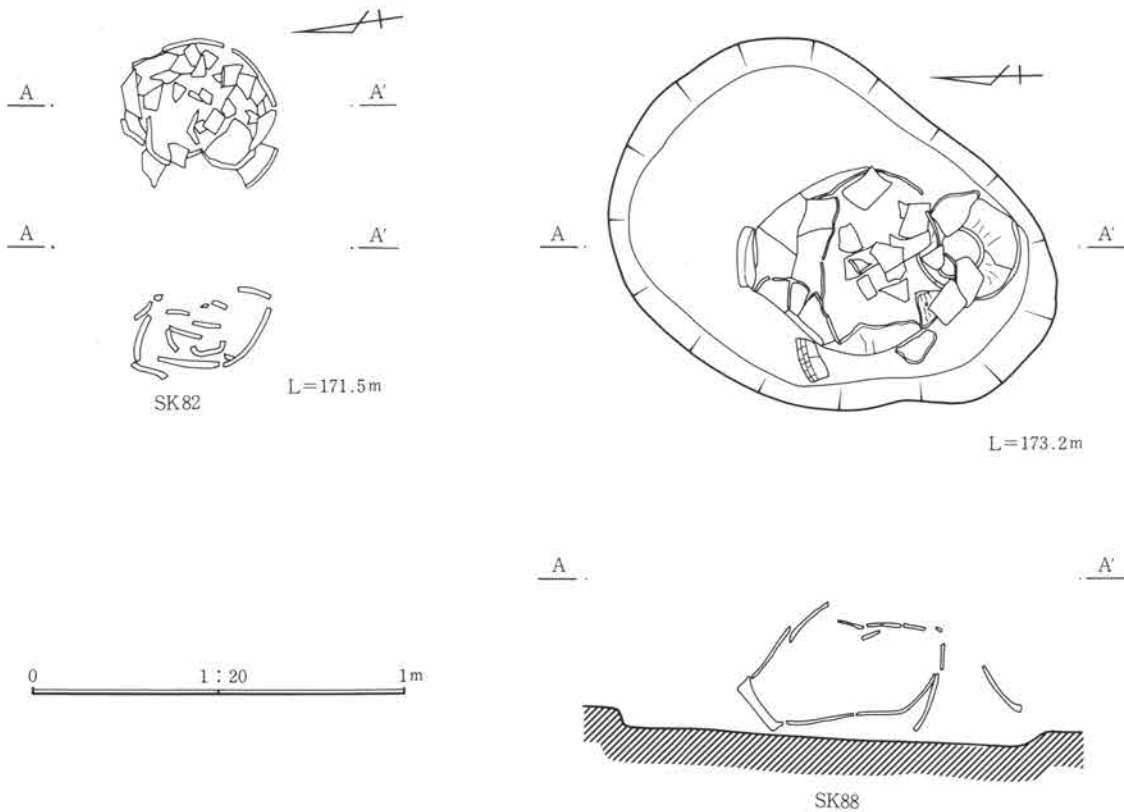
たか、あるいは口縁部をもった完形個体のまま棺としたか明確にできない。壺棺は長径1.2mの浅い長円形土  
壙内に埋置されている。弥生後期第3期。

S K106

大型壺を棺とし、斜位に埋置する。壺棺は上半部が後世の攪乱（古墳時代の畑耕作）によって欠損してい  
る。掘り方不明。弥生後期。

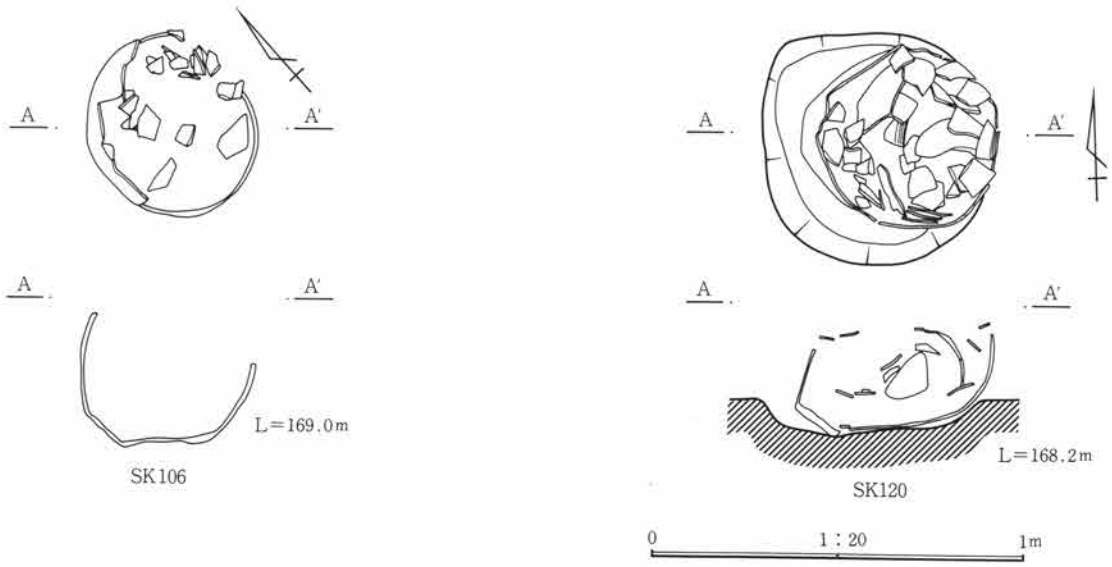
S K120

大型壺を棺とし、斜位に埋置する。壺棺は頸部以上を打ち欠き開口部とする。開口部の大きさは、頸部22.  
5cm、ここには別個体の壺の下半部で覆い、孔を閉塞している。頸部の打ち欠き面は比較的丁寧に調整されて  
いる。蓋として用いた壺下半部の打ち欠き面も同様な調整が認められる。掘り方は長径70cmの不整形な浅い  
ピット。弥生後期第3期。

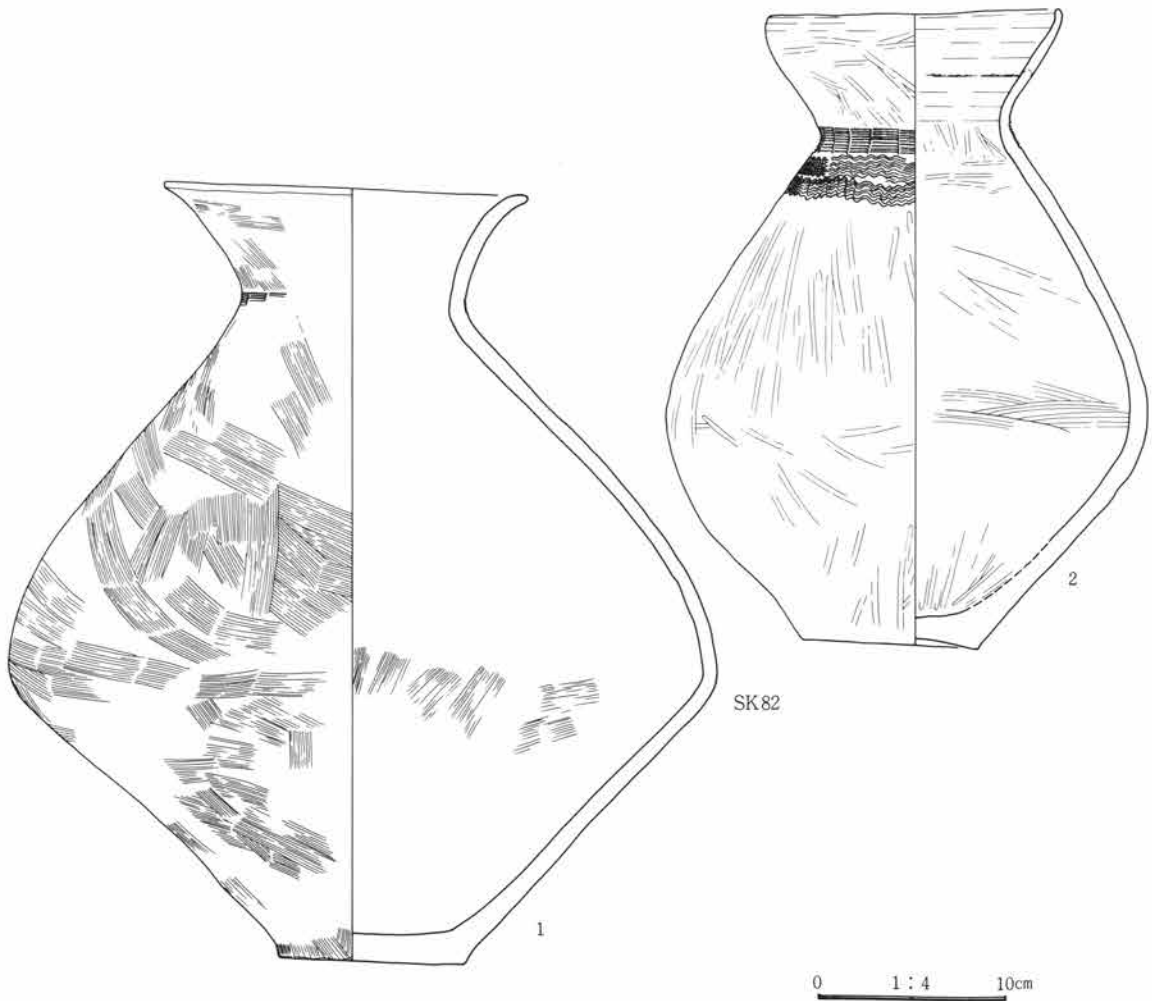


第347図 土器棺 E群(1)

6 検出した遺構・遺物

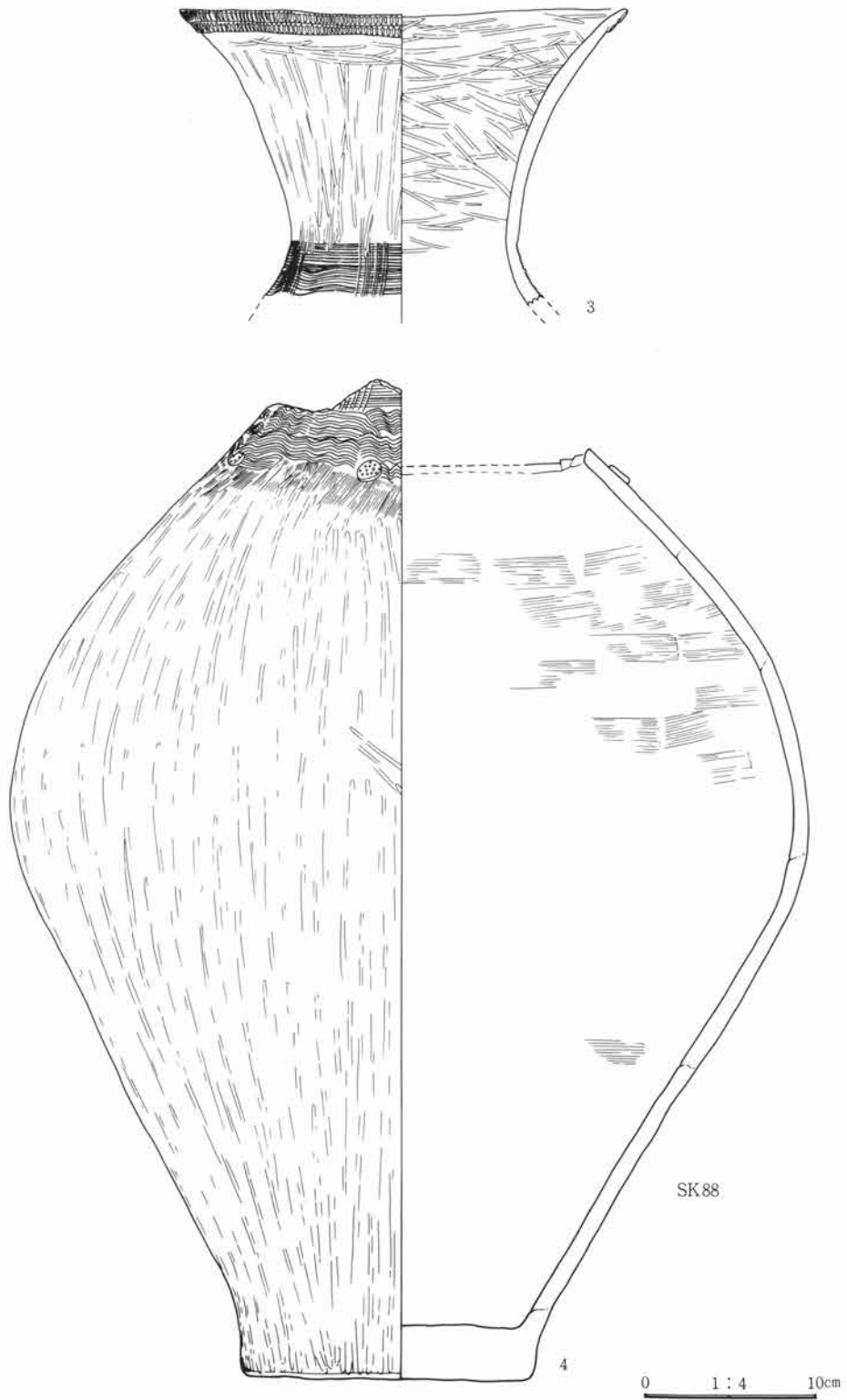


第348図 土器棺 E群(2)



第349図 土器棺・棺内出土遺物 E群(1)

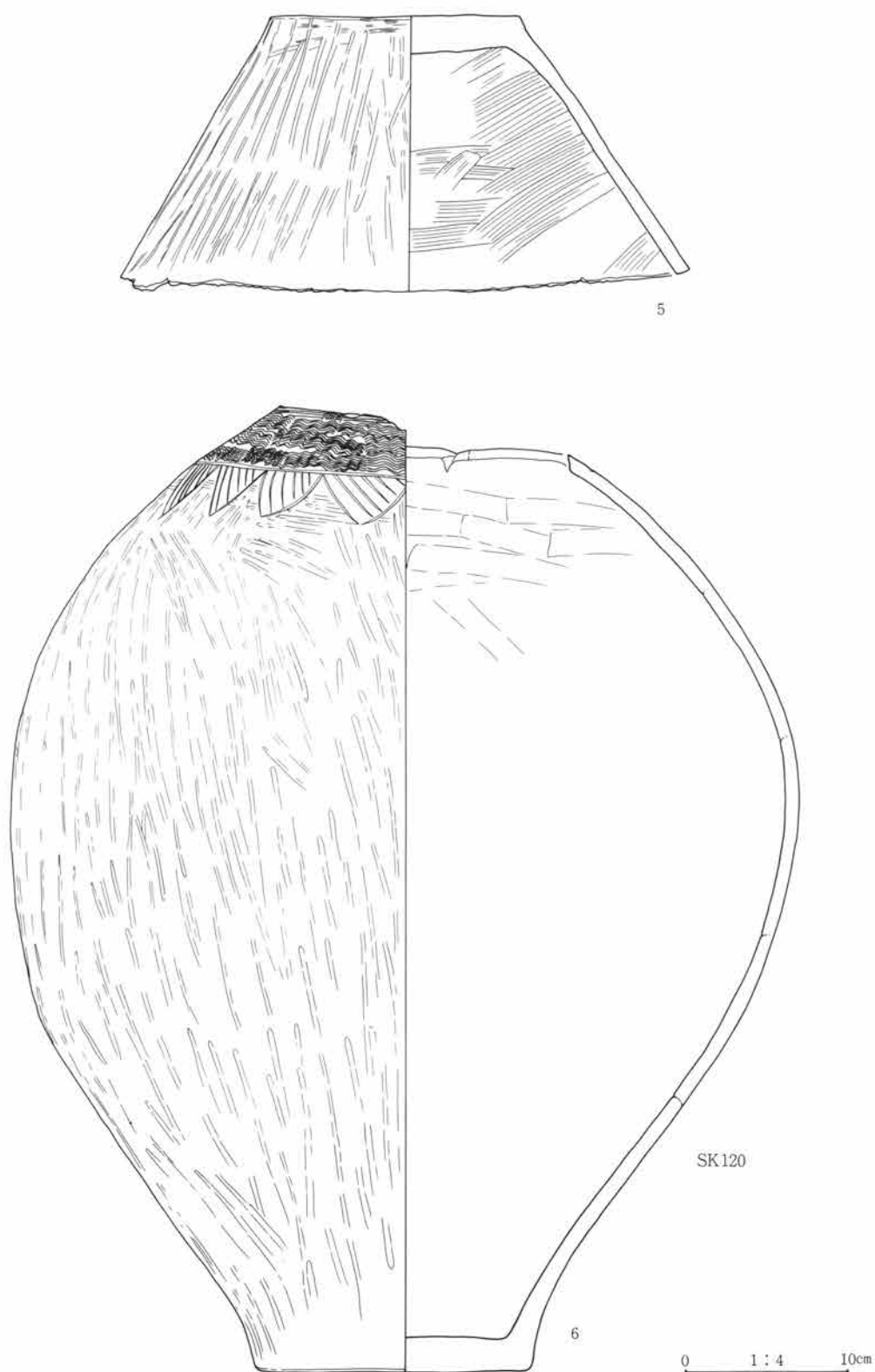
(6) 土器 棺



第350図 土器棺・棺内出土遺物 E群(2)



6 検出した遺構・遺物



第351図 土器棺・棺内出土遺物 E群(3)

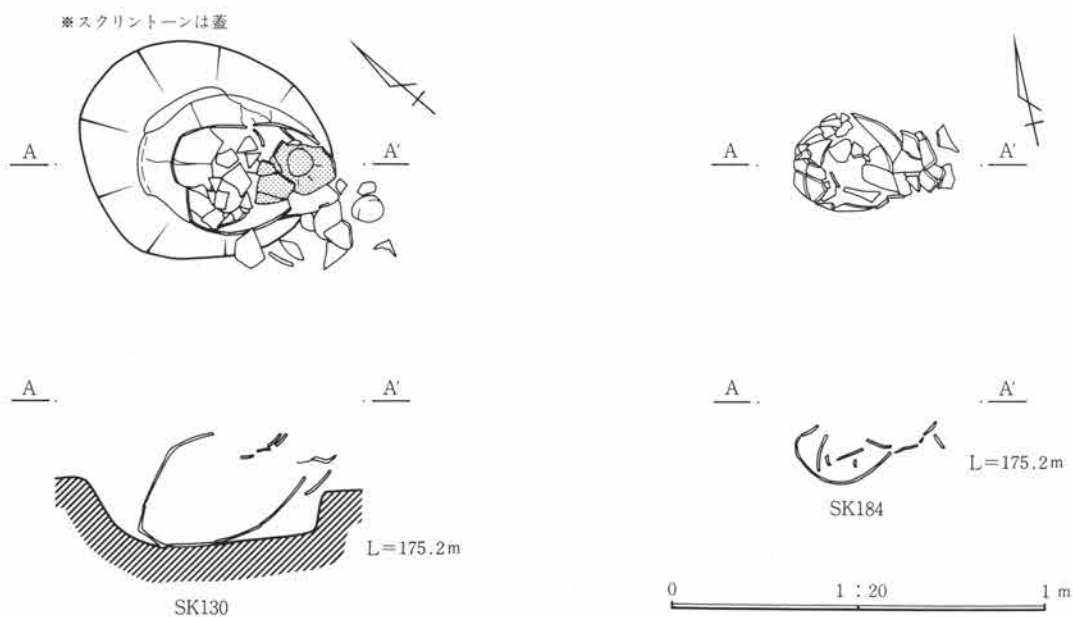
土器棺E群出土土器観察表 PL.142・143

遺物番号	器 種	法 量	器 形 ・ 成 形	文 様 ・ 整 形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 19.2 高 40.8	胴中位が強く張る。	外 頸部は等間隔止め簾状文、胴部はハケメ。 内 ハケメ。	小礫を含む。 やや堅緻、灰白色	ほぼ完形、部分的に欠損がある。
2	壺	口 15.3 高 33.5	口縁部は内湾する。底面は凹面をなす。	外 頸部は等間隔止め簾状文、肩部は波状文。 内 口縁～口辺部はヨコナデ、頸部はヘラミガキ、胴部はヘラナデ、ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、浅黄橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸～底部全周
3	壺	口 26.1	2段折り返し口縁。頸部以下は切断する。	外 口縁部は2段の刻み目、頸部は二段櫛描横直線に縦直線。 内 口縁～頸部はヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～頸部全周 壺棺の開口部と接合する。
4	壺 棺	胴 46.6 高 58.0 孔径18.0	開口部打ち欠き面凹凸が目立つ、面調整していない。	外 頸部は2段の櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文、肩部付文は推定6個。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	開口部～底部 $\frac{1}{2}$ 周 打ち欠いた口縁～頸部は伴出する。
5	壺 (蓋)	底 15.3	壺の胴下部を打ち欠く、打ち欠き面は面調整している。	外 ハケメ後ヘラミガキ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、明赤褐色	胴下～底部全周
6	壺 棺	胴 48.0 孔径22.5 $\times 20.5$	開口部は楕円形に打ち欠いている。	外 頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部波状文、沈線鋸歯文、沈線充填、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	開口部全周 胴部には部分的に欠損がある。

## その他の土器棺 (第352図、PL. 81)

SK130

67-F29に位置する。弥生期の遺構群から外れ、土器棺A群の西端から20m南西の地点である。大型壺を棺とし、斜位に埋置する。壺棺は頸部以上を打ち欠き開口部とする。開口部径は12.5cm、ここには壺の胴下半部をかぶせ、孔を閉塞している。掘り方は長径70cm、深さ25cmの長円形ピット。弥生後期第3期。

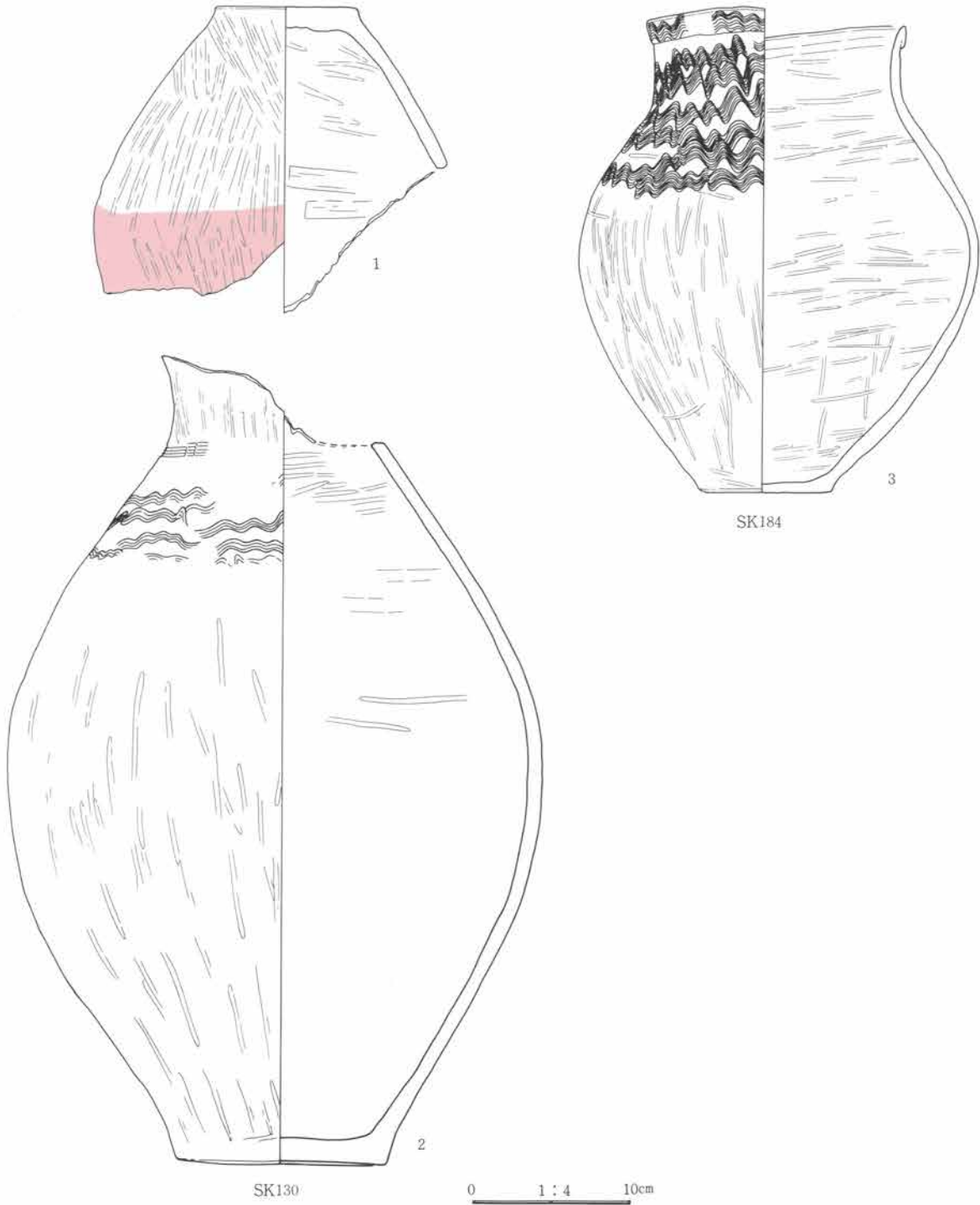


第352図 土器棺 その他の土器棺

6 検出した遺構・遺物

SK184

64-F20に位置する。弥生期の遺構群から外れ、土器棺A群の西南30mの地点にある。SK130との間は15m。中型の甕を棺とし、横位に埋置している。棺の上部は破損が著しく、開口部の状況、蓋による閉塞の有無などについては明らかではない。掘り方は不明確。弥生後期第3期。



第353図 土器棺・棺内出土遺物 その他の土器棺

## (7) 土壇、石囲遺構

その他の土器棺出土土器観察表 PL.143

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺(蓋)	底 8.8	打ち欠き面の調整は比較的凹凸がある。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	胴～底部%周 胴上部丹彩
2	壺 棺	胴 34.0 底 13.2 孔径12.3		外 口辺ヘラミガキ、肩部波状文、頸部2連止め簾状文。胴部はヘラミガキ。 内 ヘラミガキ、ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	頸～底部%周 器面荒れている。
3	甕 棺	口 16.3 高 30.6	器形の歪みが目立つ。	外 口縁部～胴上部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、暗赤褐色	ほぼ完形

## (7) 土壇、石囲遺構 (第354図・355図、PL. 81)

## 56号土壇

44-F12、3号墓の西に位置する。径2mの整った円形を呈する。深さは25cmを検出する。最上部に浅間C軽石を多量に含む層をレンズ状に堆積する。覆土下部には拳大の円礫が多数混入している。遺物はほとんど認められない。

## 59号土壇

F区の最南の46-F10に位置する。形状は隅丸長方形。規模は長軸1.8m、深さは5cmを検出するのみである。覆土の状況は浅間C軽石を含んでいる。遺物はほとんど認められない。

## 63号土壇

39-F26に位置する。形状は隅丸の台形を呈する。規模は一辺1.2m、深さ65cm。覆土上部には浅間C軽石を多量に含み、この層中、土壇の最上部に頭蓋骨片、頸骨片、歯が検出された。土壇中に遺物は殆ど認められない。

## 93号土壇

35-F46、5号墓の東南に位置する。平面形状は長円形で、周壁は2～3段の不規則な段を作っている。規模は長軸2.7m、短軸1.3m、深さ60cm。覆土の状況は、覆土上部に浅間C軽石を多量に含んでいる。土壇内から大型の甕の上半部が出土する。

## 379号土壇

57-G39に位置する。208号住居の南壁に接する。長径1.2m程の円形を呈する。深さは20cmを検出する。覆土上部に浅間C軽石を含んでいる。覆土中に弥生土器が数点出土する。208号住居との関連は不明。

## 447号土壇

41-H36に位置する。257号住居と重複する。形状は本来円形であったようであるが、257号住居に半ば切られている。径は2.9m、深さ15cmを検出する。底面は比較的平坦で直上から弥生土器の破片が多数出土する。

6 検出した遺構・遺物

453号土壌

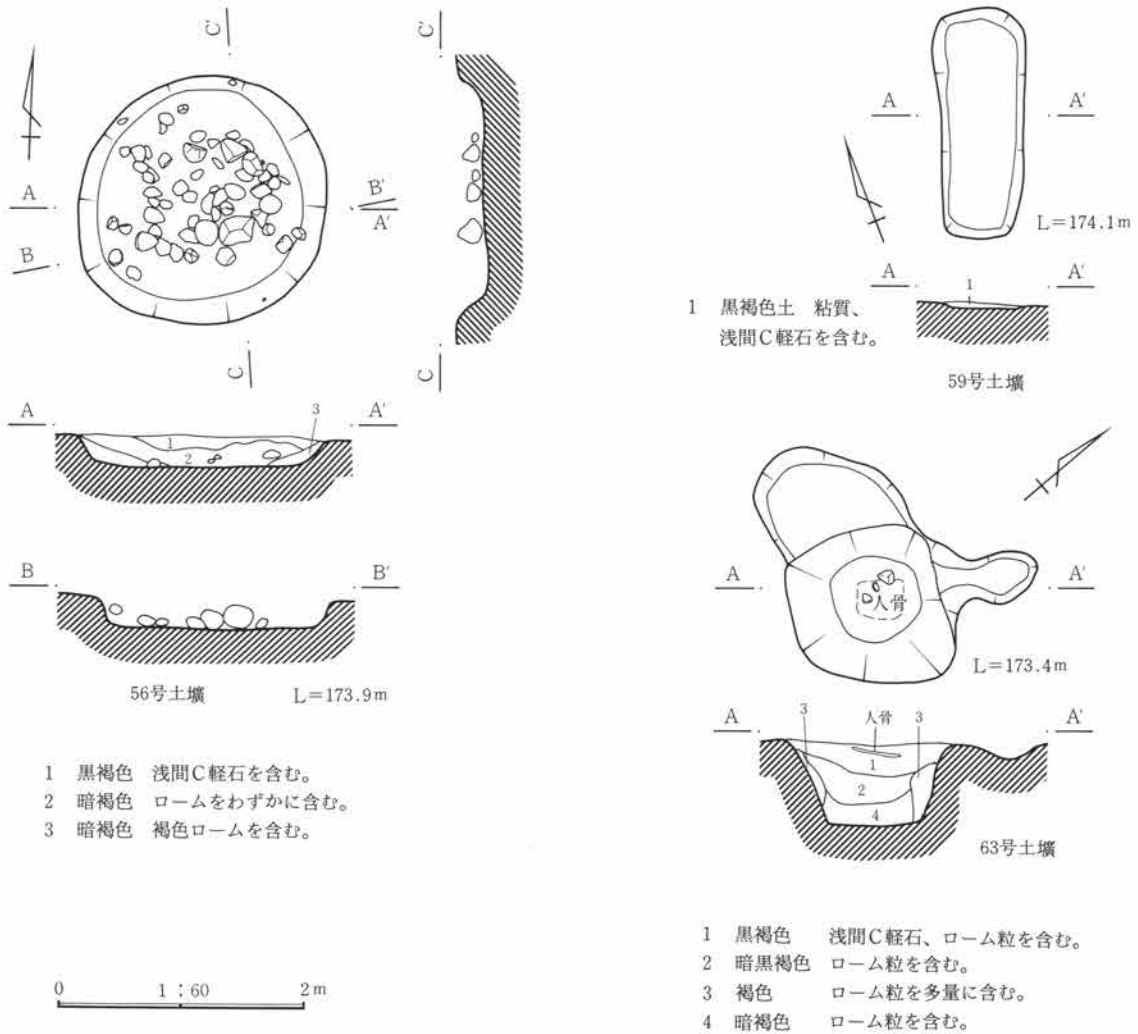
56-H23に位置する。11号墓の北に隣接している。径2.2m程の円形。深さは15cmで、浅く検出される。出土遺物はなし。覆土中には浅間C軽石を含まず。軽石降下前である。

454号土壌

55-H23に位置する。453号土壌に隣接している。長径1.4mの紡錘形を呈する。浅く検出される。覆土中に浅間C軽石は含まない。軽石降下以前である。

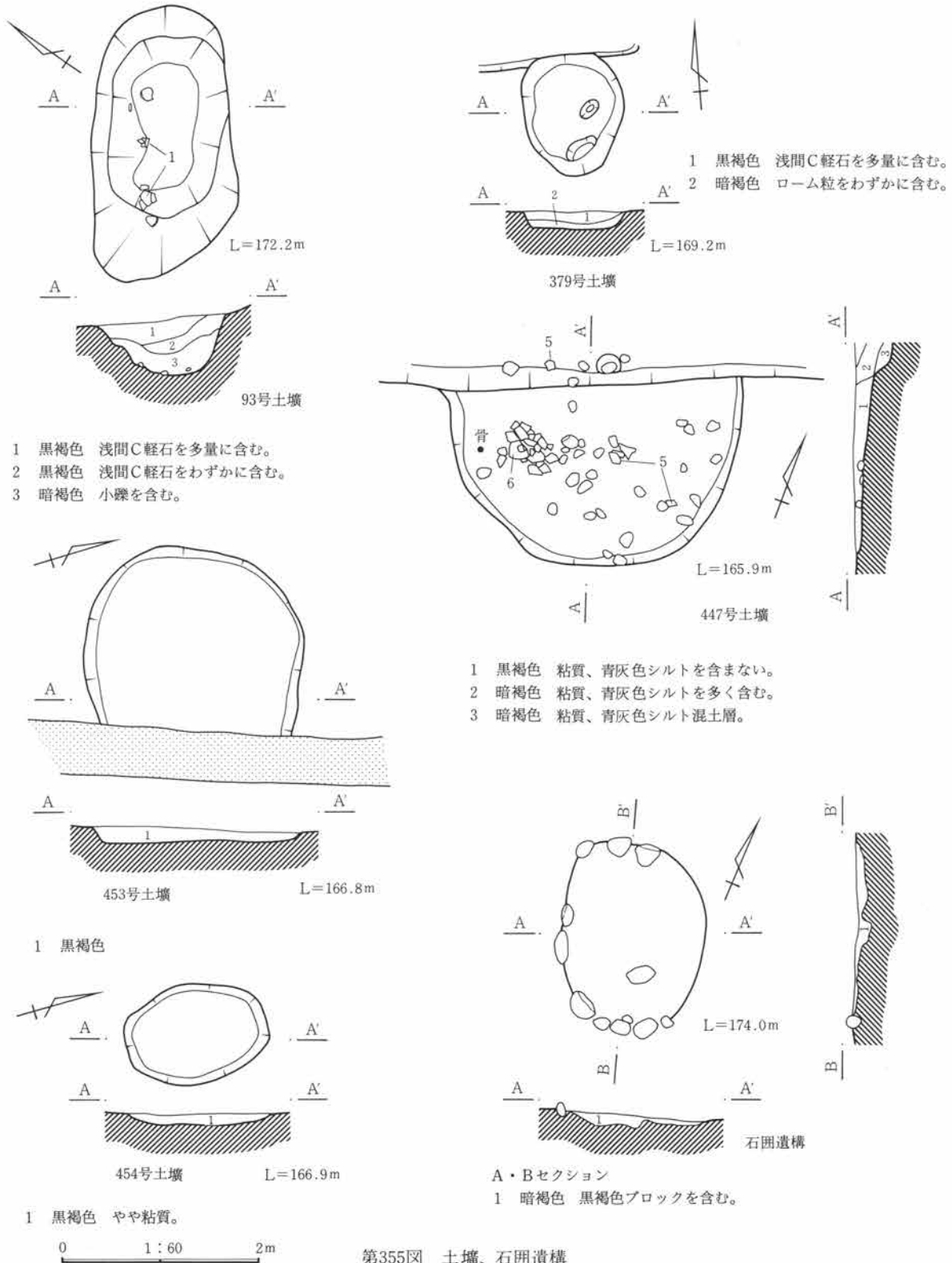
石囲遺構

59-G01、G区の斜面上に位置する。径20cm前後の円礫を長円形に配する。長径2m、短径は西縁部で礫を欠くが1.5m程になるとみられる。円礫に囲われた内側は土壌など、掘り込みや焼土帯は検出できない。覆土中より球状耳飾りの半欠品が出土している。遺構の性格、時期は共に不明。東斜面部の礫面上に縄文前期の土器小破片1～2片の出土をみるが、本遺跡唯一の縄文時代の遺構の可能性が高い。



第354図 土壌

(7) 土壌、石囲遺構

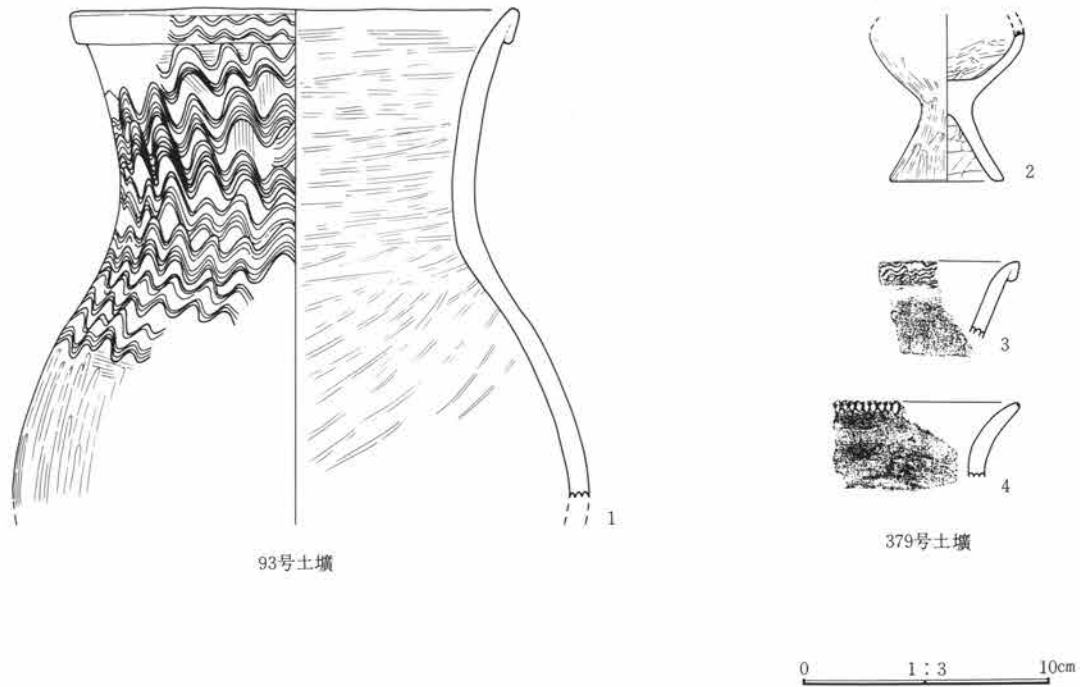


第355図 土壌、石囲遺構

93号土壌出土土器観察表 PL. 145

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 17.7 胴 23.0	折り返し口縁。	外 口縁～胴上部は波状文、胴部はヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁～胴部迄周

6 検出した遺構・遺物



第356図 土壌出土遺物

379号土壌出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
2	台付甕底	4.5		外 ハケメ後ヘラミガキ。 内 胴部はヘラミガキ、脚部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	胴～底部 $\frac{1}{2}$ 周

379号土壌出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
3	壺		折り返し口縁	外 口縁部は波状文。内 ヘラミガキ、丹彩。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	3%
4	高坏			外 口縁端部は刻み目、丹彩。内 丹彩。	砂粒を含む。	堅緻	赤色	6%

447号土壌出土土器観察表 PL.145

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
5	壺	胴 25.5		外 ヘラミガキ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 やや堅緻、赤色	胴部全周 外面に丹彩
6	甕	口 25.0	折り返し口縁	外 口縁部は波状文、付文10個、頸部は2段の櫛描直線に縦直線、付文6個、肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 口縁部にスス附着。

453号土壌出土土器観察表 (拓本)

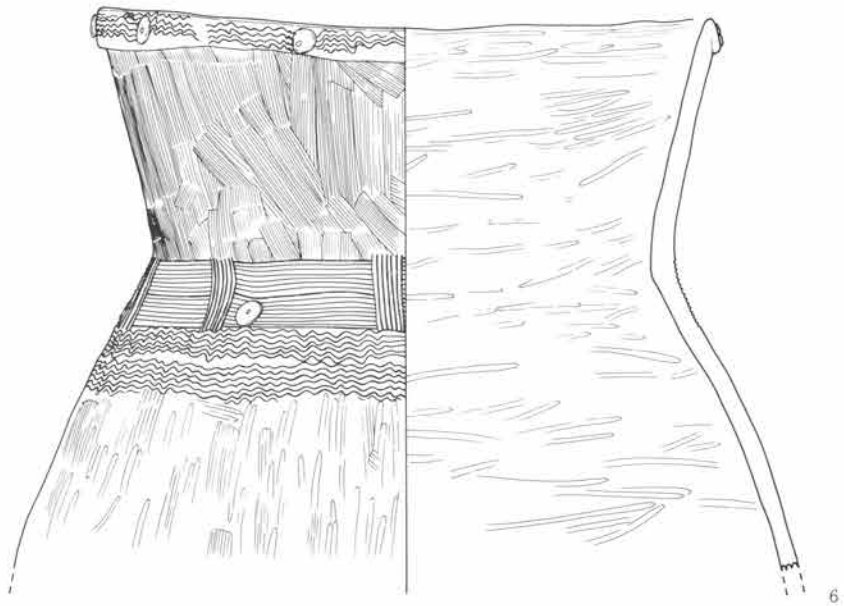
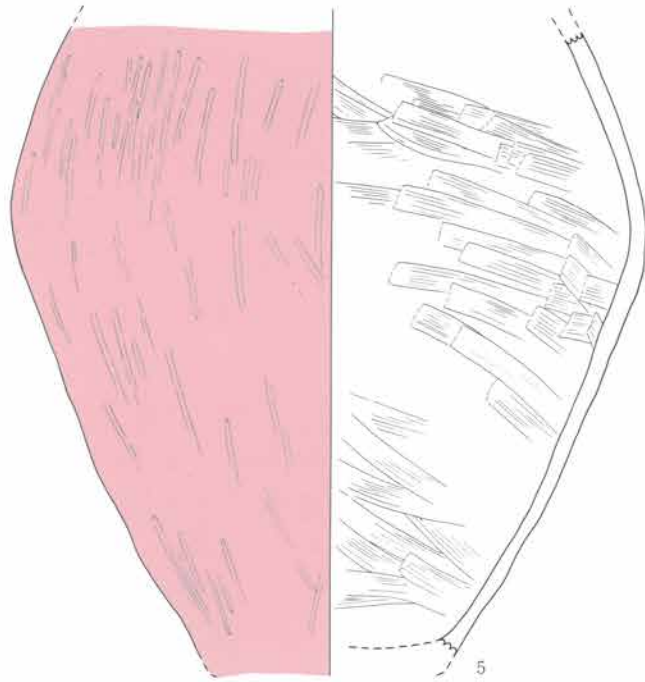
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
7	壺			外 波状文。内 ハケメ。	砂粒を含む。	やや堅緻	灰白色	

石田遺構出土球状耳飾り観察表 PL.145

番号	名称	径	厚さ	形状、成形、整形	色調	材質
8	球状耳飾	2.5	0.6	片側が $\frac{1}{2}$ 以上欠損している。破断面には二次的な調整はないが、小孔を穿つ。器形は滑沢に磨かれている。外縁部は丸く、内縁部はやや角ばっている。	鈍黄褐色	蛇文岩類



(7) 土壙、石圀遺構



447号土壙



0 1:3 10cm

453号土壙



石圀遺構

0 1:2 5cm

第357图 土壙、石圀遺構出土遺物

## (8) 溝

### 20号溝 付図1

F区北西部に位置し、東西12mにわたって、ほぼ直状に検出される。断面はV字状で、溝幅は30～50cm、深さは30cm前後。覆土上部を、浅間C軽石を多量に含む黒褐色第IV a層が覆っている。溝下半部には礫を含む砂層が縞状に堆積している。壁には部分的に水流による侵食が認められる。出土遺物はほとんど見られない。

### 21号溝 付図1

F区北部、調査区の中央を南北に曲線状に延びている。断面はU字状。溝幅30～60cm、深さは30cm前後。覆土上部を、浅間C軽石層を多量に含む黒褐色第IV a層が覆っている。覆土下部は礫、砂を含む暗褐色土である。覆土中より弥生後期第1期の土器破片が多数出土している。21号墓の主体部、S K129はこの溝の覆土上に造られている。

### 22号溝 付図2

H区南端部に位置し、75号住居北周壁部から18号墓北隣接部にかけて東西方向に直線状に20m確認される。18号墓の隣接部で分岐するが、分岐部以北では明瞭に検出できない。溝幅は50cm、深さ20cm前後を測る。断面はU字状。浅間C軽石層下に検出され、覆土は黒褐色土で、褐色ローム質土ブロックを多量に含む。軽石は含まない。出土遺物は認められない。

### 26号溝 付図1

F区北西部に位置し、一辺10m程の不整形な方形に小規模な溝が巡る。覆土上部には浅間C軽石を多量に含む。溝の南端部では土器棺墓が重複する。溝内、及び区画内では遺物はほとんど認められない。浅間C軽石直下の畑にかかわる可能性も考えられる。

### 44号溝 付図1

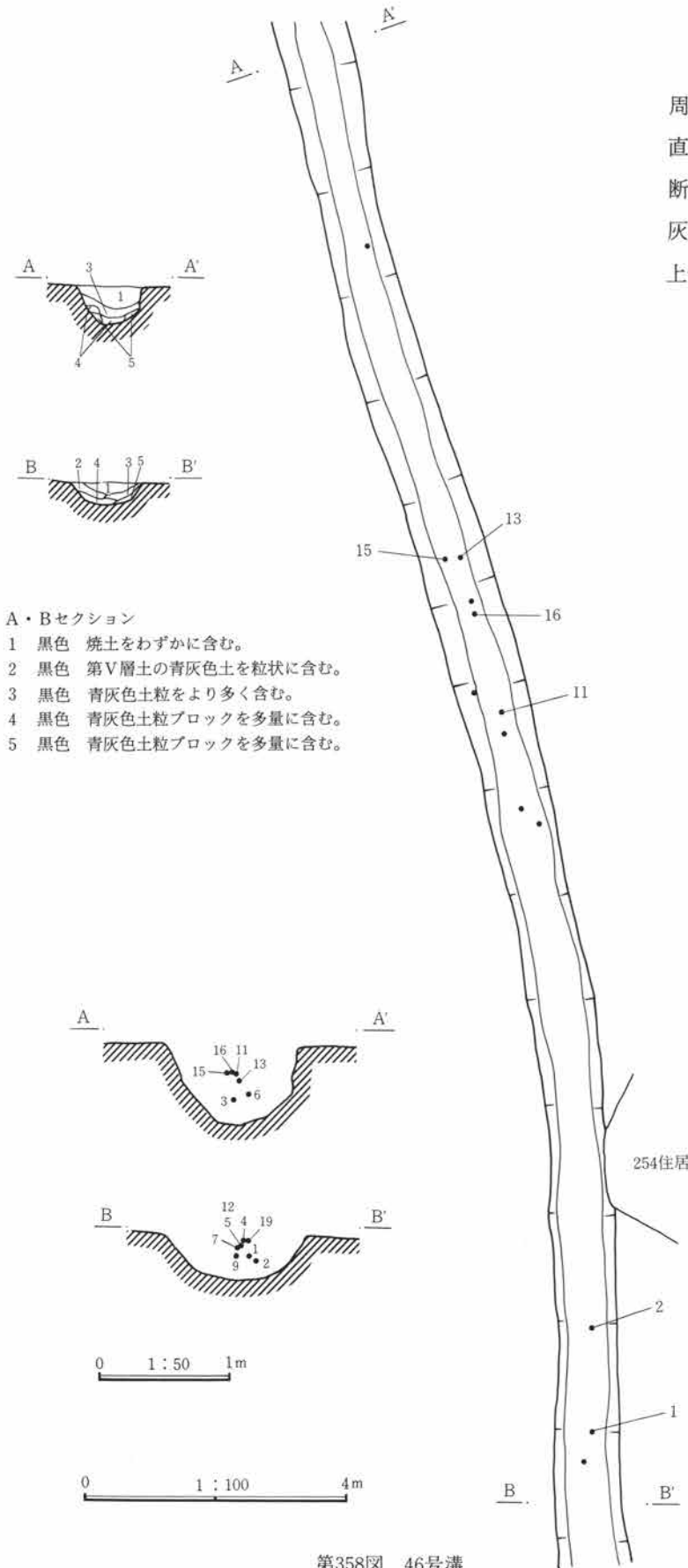
G区南端、斜面部分に北西-南東方向をとり、およそ21号溝の延長方向に直線状に見られる。幅60cm、深さ20cm、断面U字形。覆土は黄褐色で礫を多量に含み砂質である。覆土中から後期第1期の土器が比較的多数出土している。

### 46号溝 第358図、PL. 81

H30グリッドラインに沿い、東西方向に直線状に調査区を貫いている。幅1.2m、深さ70cm前後を測る。形状は整っており、断面はU字状。覆土上部～底部より後期第1期の完形、土器大形破片を多数出土している。覆土中には砂などの混入はなく水流の痕跡は認められない。全体的に第V層の黄白色土をブロック状に含んでいる。調査区の東部で260号住居と重複するが溝は260号住居の床面下に検出され、溝の方が古いと判断できる。

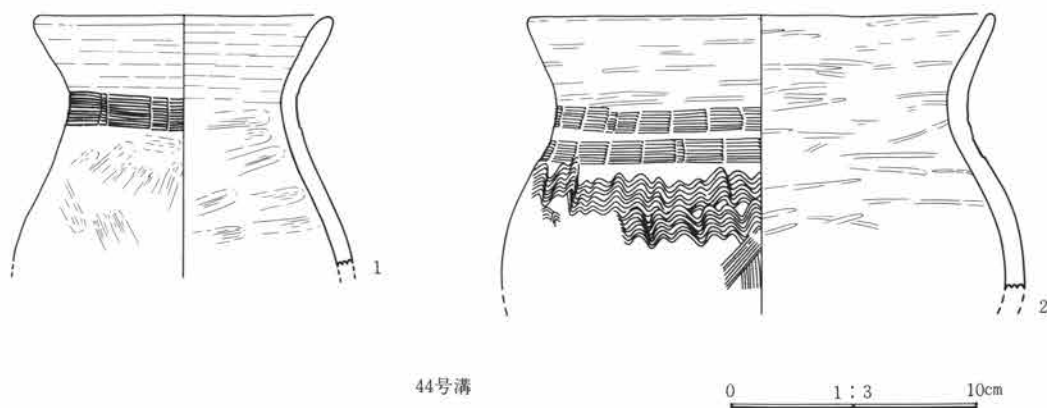
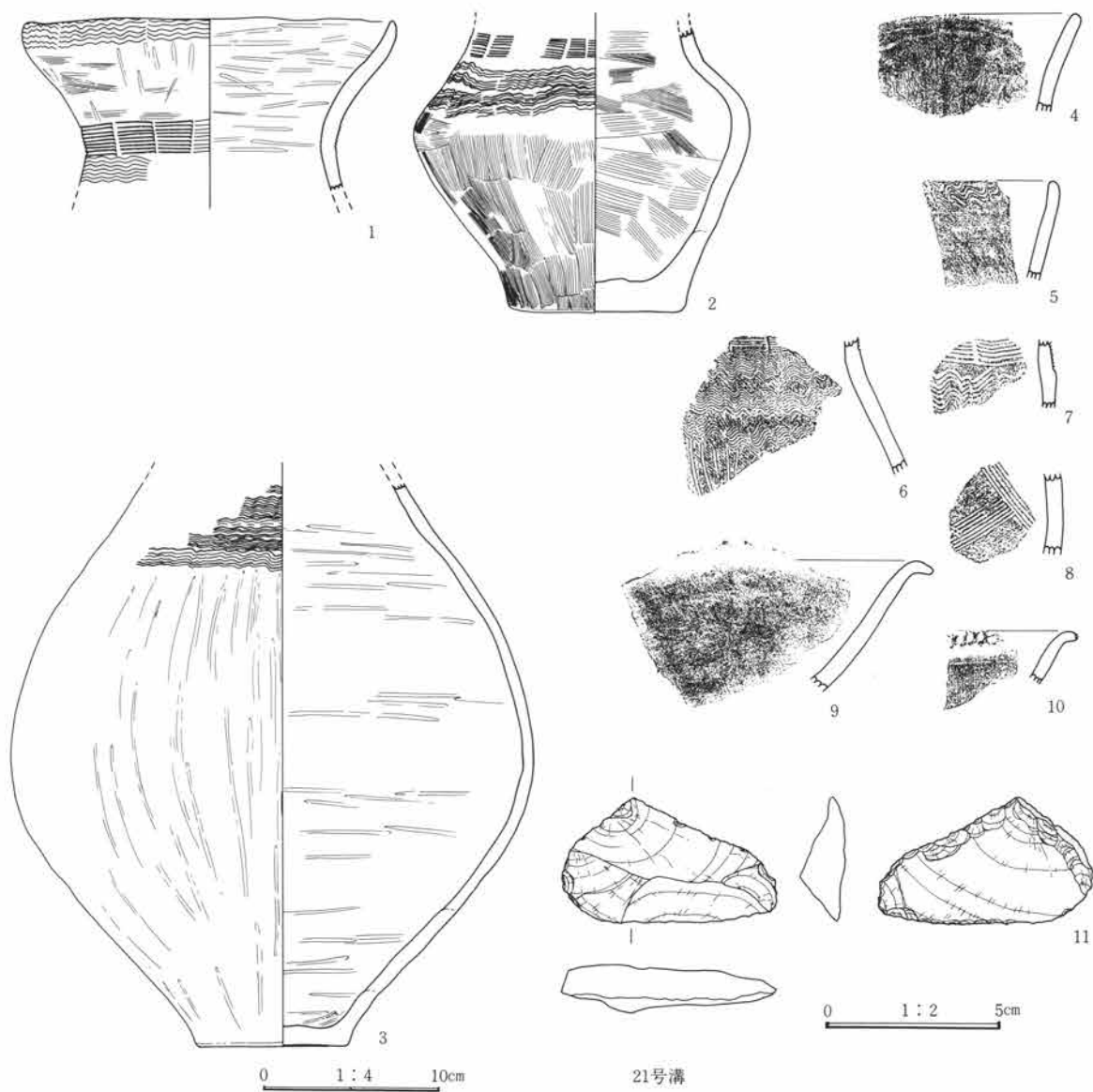
47号溝 付図2、PL.146

H区の最北端部に262号住居の北側周壁部から西北方向に、調査区域外へ直状に延びている。幅1m、深さ65cm。断面はU字状。覆土は黒色で第V層の灰褐色土をブロック状に多量に含む。上部に炭化物粒をわずかに含んでいる。

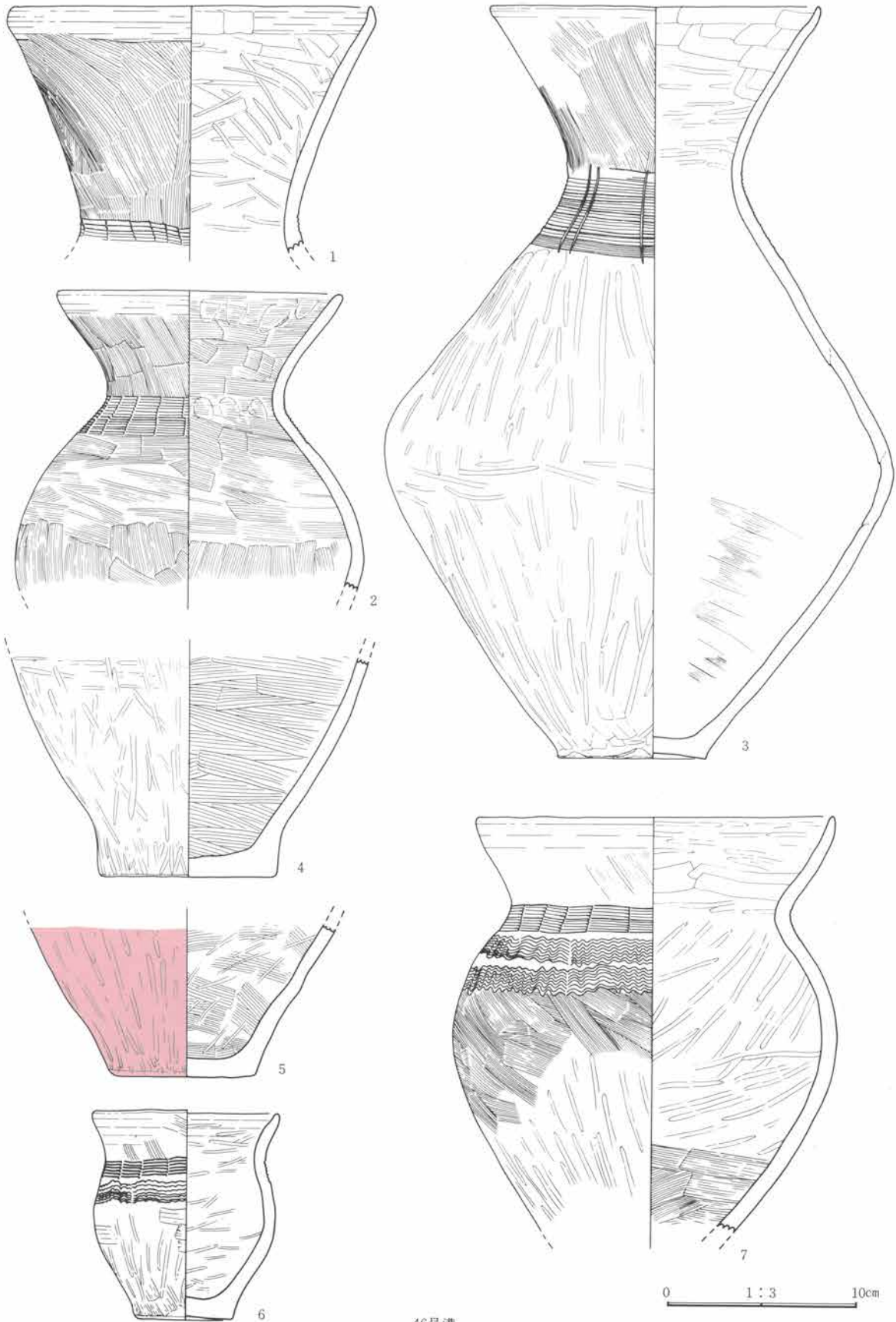


第358図 46号溝

6 検出した遺構・遺物



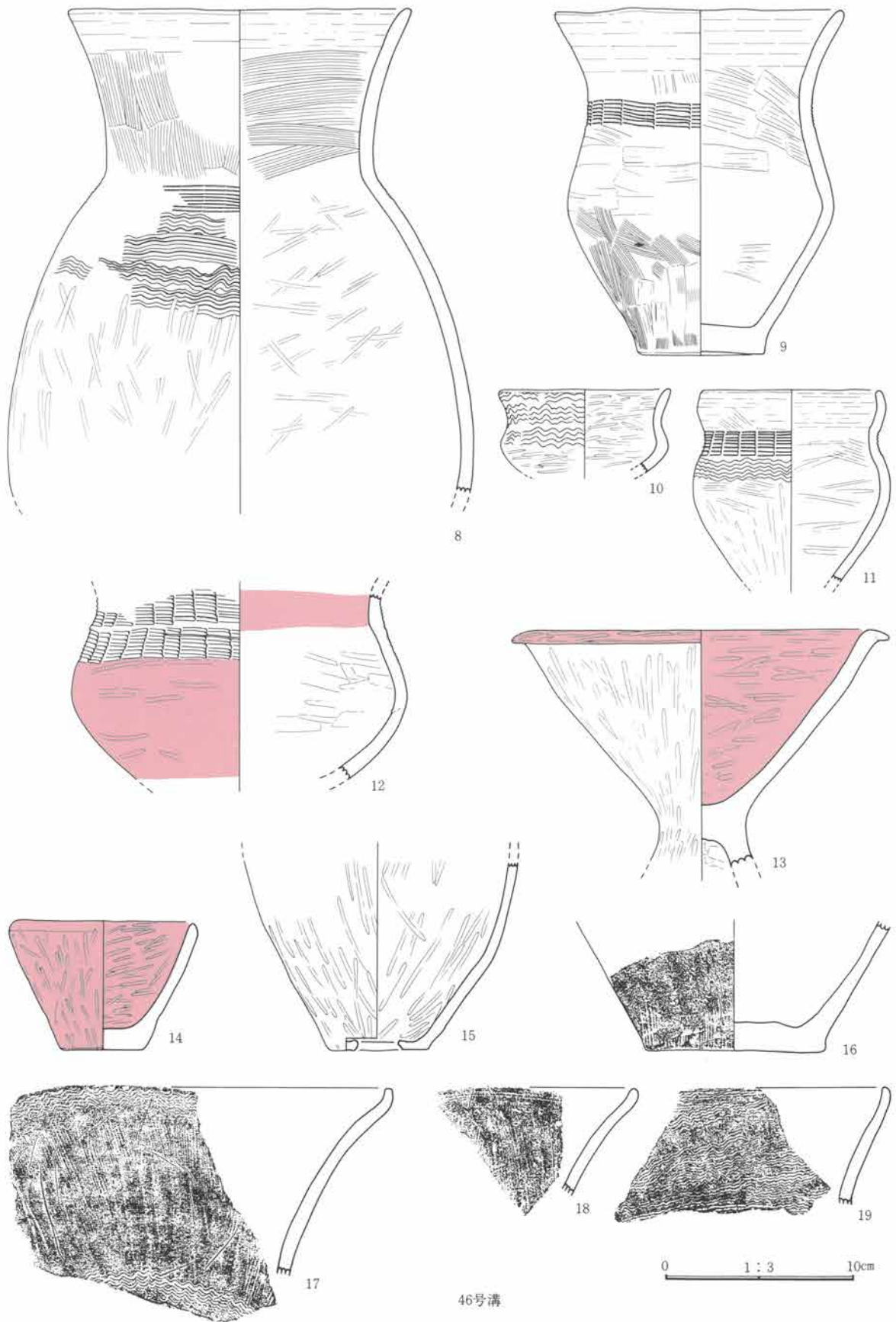
第359図 溝出土遺物(1)



46号溝

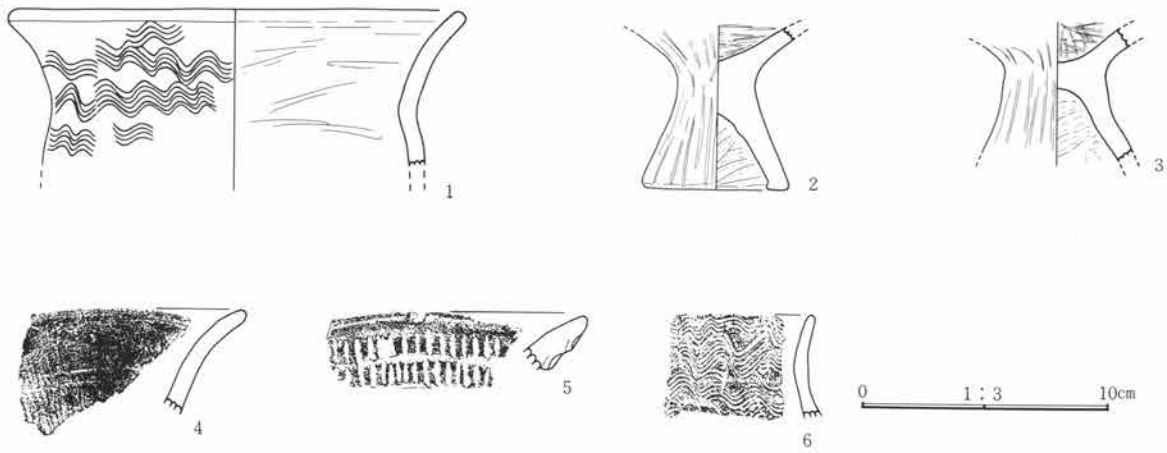
第360図 溝出土遺物(2)





第361図 溝出土遺物(3)

## (8) 溝



47号溝

## 第362図 溝出土遺物(4)

## 21号溝出土土器観察表 PL.145

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 15.7	受け口状口縁。	外 口縁部は波状文、頸部は等間隔止め簾状文、肩部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 頸部 $\frac{1}{2}$ 周
2	壺	胴 14.3 底 7.4	器形の歪みが目立つ。	外 頸部は等間隔止め簾状文、肩部は波状文。 内 胴部はハケメ。	砂粒を含む。 軟弱、橙色	頸～底部ほぼ全周
3	甕	胴 29.6		外 肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 やや軟弱、鈍橙色	頸～底部 $\frac{1}{2}$ 周

## 21号溝出土土器観察表(拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
4	壺	口 10		外 丹彩。内 丹彩。	細砂粒を含む。	堅緻	赤色	18%
5	甕			外 口縁部は波状文。内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。	やや堅緻	灰褐色	5%
6	甕			外 頸部は等間隔止め簾状文、胴部は鋸歯文。	砂粒を含む。	堅緻	赤褐色	
7	甕			外 頸部は等間隔止め簾状文。	細砂粒を含む。	堅緻	灰褐色	
8	甕			外 胴部は楯描斜格子文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	灰赤色	
9	高坏	口 24		外 ヘラミガキ、丹彩。内 ヘラミガキ、丹彩。	細砂粒を含む。	堅緻	赤色	15%
10	高坏			外 口縁端部は刻み目、丹彩。内 丹彩。	細砂粒を含む。	堅緻	赤色	5%

## 21号溝出土石器観察表 PL.145

遺物番号	名称	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特徴
11	刃器	3.5×6.1×1.3	黒色頁岩	22.7	一側縁に自然面を残す横長剝片。2辺に片面調整による刃部を作出している。



## 6 検出した遺構・遺物

44号溝出土土器観察表 PL.145

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 11.7 胴 13.5		外 口縁部はヨコナデ、頸部は2連止め簾状文、胴部はヘラナデ。 内 口縁部はヨコナデ、胴部はナデ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 胴部 $\frac{1}{2}$ 周
2	甕	口 18.4 胴 20.9		外 ヘラミガキ、頸部は等間隔止め簾状文を2段、胴上部は波状文、胴部は楕斜格子文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、灰褐色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周

46号溝出土土器観察表 PL.146

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 19.2	口縁部は稜を作つて内湾する。	外 口縁部はヨコナデ、頸部は等間隔止め簾状文。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、灰白色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周 口縁部にスス付着。
2	壺	口 14.7 胴 18.2		外 口縁部はヨコナデ、ハケメ、頸部は等間隔止め簾状文を2段、以下ハケメ。 内 ハケメ、口縁、頸部に指オサエ痕巡る。	砂粒、小礫を含む。 堅緻、灰白色	口縁部全周 胴部 $\frac{1}{2}$ 周
3	壺	口 17.1 高 38.8	口縁部は僅かに内湾する。	外 頸部は楕横直線を3段に2本単位の縦沈線。 内 口縁部はヘラナデ、ヘラミガキ、胴部はナデ、ハケメ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 胴部全周
4	壺	底 9.0		外 ヘラミガキ。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍赤褐色	胴～底部全周
5	壺	底 7.3		外 ヘラミガキ。 内 ハケメ、粗いヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや軟弱、鈍褐色	胴下部 $\frac{1}{2}$ 周 外面丹彩。
6	甕	口 9.4 高 10.8		外 口縁部はヨコナデ、頸部は等間隔止め簾状文。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周 底部全周
7	甕	口 18.5 胴 20.0	口縁は内湾する。	外 頸部は等間隔止め簾状文、肩部は波状文。 内 ヘラミガキ、胴下部はハケメ。	細砂粒を含む。 堅緻、褐色	口縁～胴部全周
8	甕	口 17.9 胴 24.4		外 頸部は楕横直線文、肩部は波状文。以下ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヨコナデ、ハケメ、胴部はヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、灰褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 胴部 $\frac{1}{2}$ 周
9	甕	口 15.0 高 18.0		外 口縁部はヨコナデ、頸部は等間隔止め簾状文。 内 口縁部はヨコナデ、胴部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、褐灰色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周 底部全周
10	台付甕	口 9.0 胴 8.8		外 口縁～肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 口縁～胴部はヘラミガキ。	砂粒を多量に含む。 やや軟弱、暗赤褐色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
11	甕	口 9.5 胴 10.2	受け口状口縁。	外 頸部は2連止め簾状文、肩部は波状文。 内 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、暗赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
12	高坏	胴 17.6		外 頸部は等間隔止め簾状文を2段、以下ヘラミガキ。 内 頸部はヘラミガキ、胴部はヘラナデ。	砂粒目だたず。 やや軟弱、灰白色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩
13	高坏	口 19.9		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 坏部内面丹彩。
14	鉢	口 9.8 高 6.7		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩。
15	甕	口 14.1 底 2.2	底部に焼成前の穿孔あり。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍褐色	胴下部 $\frac{1}{2}$ 周

46号溝出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
16	壺	底 9		外 ナデ。内 ハケメ。	細砂粒を含む。	やや堅緻	灰白色	42%
17	壺	口 22	受け口状口縁	外 口縁部、頸部は波状文。内 ハケメ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	11%
18	壺	口 20	受け口状口縁	外 口縁部はヨコナデ。内 ハケメ。	細砂粒を含む。	堅緻	灰白色	11%
19	甕		受け口状口縁	外 波状文。内 ヘラナデ。	細砂粒を含む。	堅緻	黒褐色	16%

47号溝出土土器観察表 PL.146

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 17.8		外 口縁～肩部は波状文。 内 ヘラミガキ、器面は荒れている。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、黒褐色	口縁端部僅か遺存 頸部 $\frac{1}{2}$ 周
2	台付甕(?)	脚 5.7		外 ヘラミガキ。 内 底部はヘラミガキ、脚部はナデ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍赤色	脚部 $\frac{1}{2}$ 周
3	台付甕(?)			外 ヘラミガキ。 内 底部はヘラミガキ、脚部はナデ。	砂粒を含む。 軟弱、鈍赤色	脚上部全周

47号溝出土土器観察表 (拓本)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土	焼成	色調	遺存
4	壺			外 ハケメ、ヘラミガキ。内 丹彩。	砂粒を含む。	堅緻	赤色	10%
5	壺	口 18	多段口縁	外 口縁部は刻み目。内 ヘラミガキ、丹彩。	細砂粒を含む。	堅緻	赤色	10%
6	甕	口 18		外 波状文。内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。	堅緻	橙色	8%

## (9) 古墳時代の畑跡

## 古墳時代初頭の畑跡—浅間C軽石層直下— PL. 82・83

有馬遺跡内における弥生～古墳時代前期の地表面（第IV層上面）の地形は、遺跡内の最南地区であるE区と最北のH区の間で比高は約9mを測り、南に高燥、北に漸次低湿となる。古墳時代初頭の畑跡は、覆土中に浅間C軽石層を包含する畑の畝間の溝により検出が可能となるが、この浅間C軽石層の堆積状況は、南の高燥地と北の低湿地区では層の薄厚、軽石の純度にこそ若干の違いが認められるものの調査区全体にその堆積を見ることができる。古墳時代初頭の畑跡はE区からH区の全域に分布しており、その分布状況は、数区画からなる小範囲の畑の広がり、ブロック状におよそ7か所で検出されている。

遺跡内各地区の畑の検出状況、及び関連土層の堆積状況についての概要は、E～G区では浅間C軽石の純層堆積は見られない。FA層下の標準的な堆積状況は、10～15cmのFA層直下畑の耕作土の下に10～20cmの厚さで浅間C軽石層を含む黒褐色土層、第IV a層が堆積し、その下層は厚さ10～20cmの浅間C軽石を含まない、やや硬粘質な黒褐色土層、第IV b層である。E～G区では、畝の頂部は不明瞭でC軽石を充填する畝間の溝は第IV b層中に比較的浅く検出される。このため部分的に明確さを欠き、畑の範囲が不明瞭な箇所も少なくない。その一方、より低湿なH区では有馬火山灰下に3～5cmの黒色軟粘質土（一部で畑の耕作土となる）が見られ、その下層に厚さ10cm前後の浅間C軽石を多量に含む黒褐色土が堆積している。第IV a層以下は厚さ20cm前後のC軽石を含まない黒褐色粘質土、第IV b層となる。この地区では畑跡の検出状態は良好で、畑を覆う浅間C軽石混土層・第IV a層中のC軽石の純度が高く、畑の検出状態は良好である。

## 6 検出した遺構・遺物

**E区** E区では昭和57年度の東側道の調査の際、南北22m東西10mの調査区(33~39-E13~25)内で浅間C軽石層直下畑跡を検出している(第363図)。畑の広がり、調査区の西南部、及び北部で畝間の溝が大方端を揃えた状態で切れ、畑区画の限界線になっている。東部、および西部は調査区域外へ延びている。調査区域外の状況は不明である。

畝間の溝は、N-65°-E方向にやや蛇行しながらも直状に走る。畝は平坦であり、上部が削平されている。この畑面の15cm上位には二ツ岳火山灰(F A)層直下の畑面が覆っており、このF A層直下畑の耕作時に主に削平を受けたと考えられる。畝幅は平均的には、溝の中心間で70cm、最も広い部分で1m、最も狭い部分で50cmを測る。溝の深さは約10cmである。

溝内は黒褐色で純度の高い浅間C軽石混土層が充填している。畝の部分はやや硬い粘質土である。土中に夾雑物は殆ど見られない。

地形は、東に低くなるが、調査区内での比高は10~20cmである。

このほかE区には33~38-E38~39グリッド内に、東西9m、南北3mの小範囲にC軽石層直下畑跡を検出している。長さ2m程の畝間の溝6条を認めるが、溝の深さは3cm前後である。畝幅は1.6~1.8m、溝の方向はN-31°-W。後世の耕作などによる削平を受けて、検出状態は不良である。本来は検出された範囲よりももっと広範囲であったと推定される。

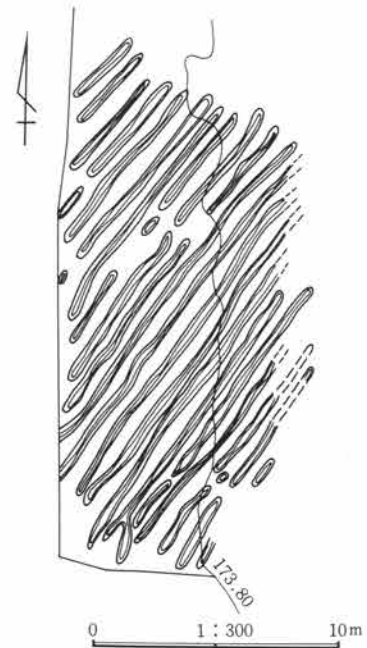
**F区** 53~69-F30~39内、東西35m、南北20mの範囲に2~3区画の畑跡が検出される。畝間の溝中には比較的純層に近い浅間C軽石が充填しているが、全体に検出状態は悪く、検出できた範囲よりも周囲に広がっていたものと想定される(付図1)。

西部の区画では畝間の溝がN-35°-Eの方向に直状に見られる。検出された溝の条数は6条で、畝幅は、溝の中心間でほぼ一律に2m。一か所西端で2.5mを測る。この区域の地形の傾斜はN-40°-E方向で、畝はほぼ傾斜方向に走っており、溝の東南端は傾斜が比較的強くなり始める辺りで切れる。

東部の区画は、西部の区画の溝が切れる辺りから、15m程東に位置する。西部の区画との比高はおよそ60cmで、斜面は比較的強い。3条の溝は斜面に対し直交方向、N-37°-W方向に直状に走っている。西部の溝の方向に対してもほぼ直交する。畝幅は1.5~2.0mである。

この他西部の区画の北の斜面部分に、西部の区画と方向を同じくする1条の溝を検出する。周囲に畑の広がりが予想されるが、不明確である。

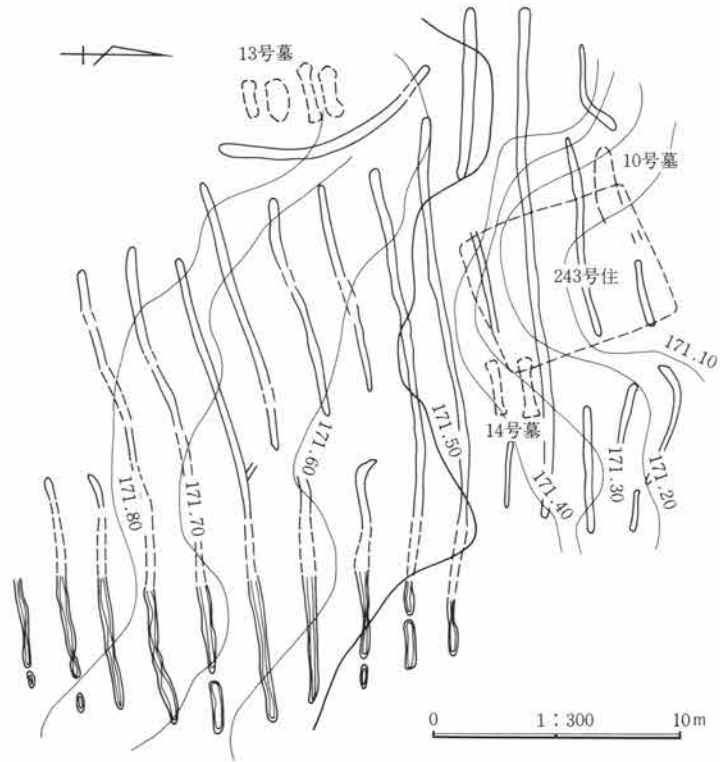
**G区** 30~45-G00~15グリッド内、南北27m、東西30mの範囲に検出される。(第367図) 検出状態は、畝間の溝中には純層に近い浅間C軽石を充填しているが、全体に畝の上部が失われており、随所に溝が浅く不明瞭な部分が見られる。畝間の溝は東西方向に15条、ほぼ直状に並走している。東部は溝の検出状態は良く、10条の溝がほぼ端を揃えて切れていることから、ここが区画の境界になるかと思われる。西部は区画境に沿



第363図 E区・浅間C軽石層直下の畑(1)

うように1条の溝が弧状に走る。この溝は13号墓の4基の主体部（弥生後期第3期）から1m外側に外れて墓域を囲むかのように配されている。こうした様子から畑を造る際、墓を意識していたことが窺われる。北部及び南部については畑の検出状態は悪く、それぞれに若干畑の範囲は広がるとおもわれる。畝幅は溝の中心間で、東部で1.7~2.1mを測る。

畑が位置する区域の地形状況は北方向に傾斜しており、畝の方向は東西方向で、傾斜に対して直交している。畑の検出区域の北部で243号住居跡（弥生後期第1期）を畑



第364図 G区・浅間C軽石層直下の畑（2）

の耕土下に検出するが、比較的深い住居の窪みが畑耕作時点まで残っている様子を見ることができる。畑の耕土面下には住居跡の他、14号墓（弥生後期第3期）が検出される。墓の直上耕土面にはなんら高まりは認められず、畝の乱れもない。また14号の傍らの畑の耕土面下に墓に伴うと思われる人物形土器の出土を見るが、この出土状態は伏せた体位で上部が大きく削り取られている。これはこの畑の耕作により破損した可能性が高い。13号墓の場合その存在が耕作を避けるべく意識されながらも、14号墓については既に何等考慮されなかった様子が窺われる。

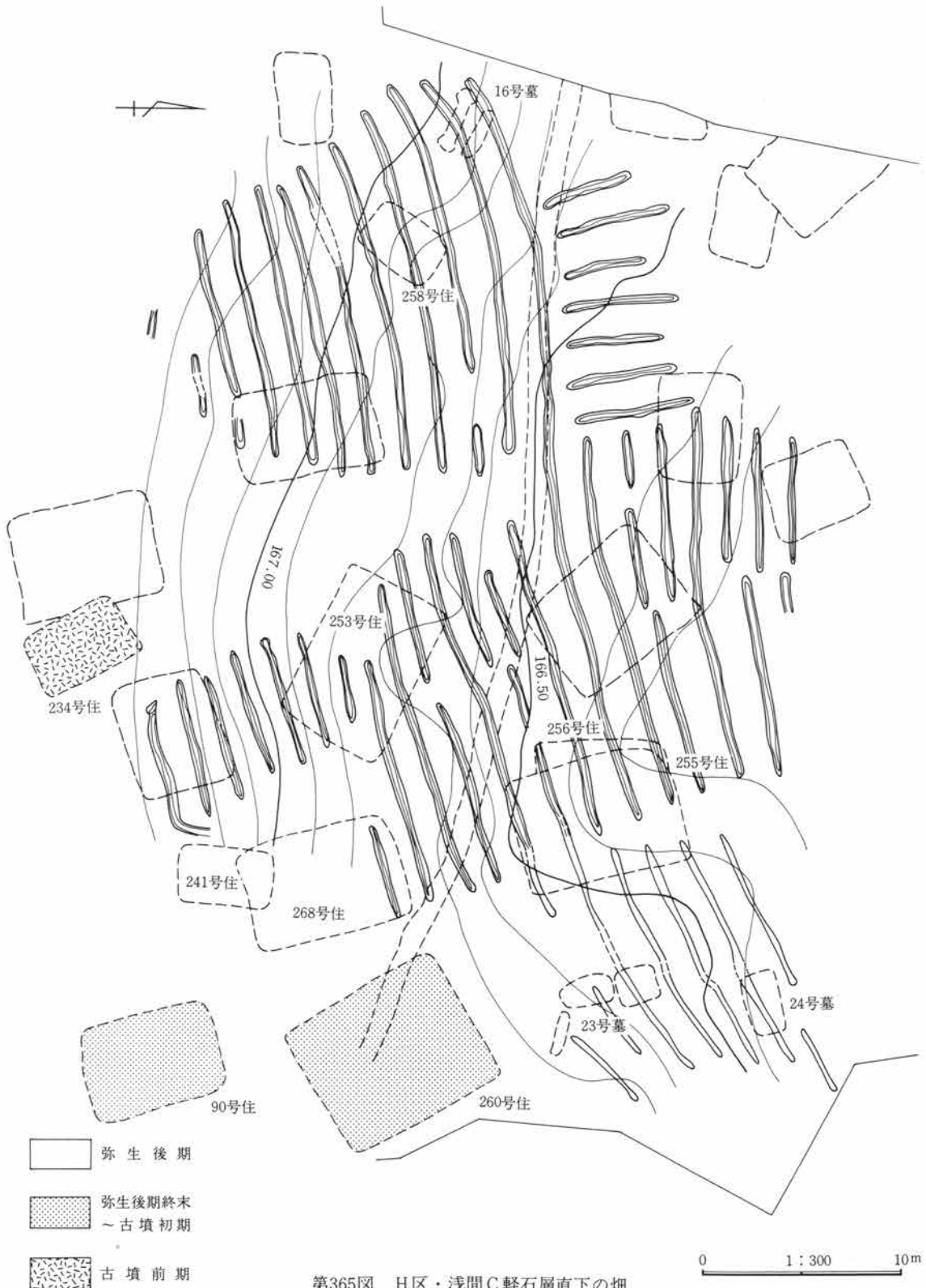
**H区** 30~55—H20~35グリッド内、南北35m東西50mの範囲に検出される。（第365図）畝の土壌は黒褐色で、畝間の溝には純層に近い浅間C軽石が充填する。畝の部分は平坦に検出されるが畝の形状はほぼ原型に近いと思われる。全体に遺存状態は良好である。畑は4~5区画からなる。この区域の地形は北方向に低く傾斜し、南北両端部35m間の比高はおよそ1mで、畝の方向は総じて傾斜の方向に対し直交するように造られている。またこの区域では、弥生後期第1期の溝や弥生後期第3期になる5軒の住居、6基の墓を耕土面下に検出している。

西南部の区画はN-72°-Eの方向にやや弧状に走る。畝間の溝幅は30~40cm、深さ12cm前後、畝幅は、溝中心間で2m前後である。西辺は溝が端を揃えて途切れており、ここが区画の縁辺になる。溝南端部は調査区境界部であったため検出が断片的になっているが、南への広がりは見られない。また耕土面下から16号墓、258号住居（共に弥生後期第3期）が検出される。258号住居との重複箇所は耕土面にはなだらかな窪みが残っている。

東南部の区画は鉤形の形状をなし、長短14条の溝が並走している。畝間の溝幅は30~40cm、深さ10cm前後、畝幅は1.6~1.8mで検出状態は明瞭である。耕土面下から253号住居（弥生後期第3期）が検出される。南半

6 検出した遺構・遺物

部は幅が狭く、短い溝が7条並走するが、西南隣接部には234号住居、東には260号住居（共に古墳時代）が見られる。この部分の区画が狭いことについては、隣接する2軒の古墳時代住居との併存、または近接時期に営まれたことと関係するのではないかとと思われる。



第365図 H区・浅間C 軽石層直下の畑

中央北部の区画は東西18m、南北10mで、大小10条の畝間の溝が並走する。区画の溝が切れたり、畝の幅が違って溝が繋がらない箇所が区画中央部に目立つ。これは畝替えか、区画替えの痕跡と思われる。畝幅は狭いもので1.6m、広いもので2.1m、深さは5～10cmを測る。北東部の区画との境界部は相互に溝の延長線が一致するが、その一方では溝の端部が直線状に、揃って途切れている。耕土面下には255号住居(弥生後期第3期)が検出される。

西北部には他の区画とは直交方向に配された長さ5m前後の溝7条からなる小さな区画がある。溝の幅は40cm前後、深さ5～10cm、畝幅は2m前後である。この区画のみ傾斜方向に畝が走る。

北東部では東西、南北とも12m前後の区画が認められる。この区画では畝間の溝は浅く、随所で溝のつながりに明確さを欠く。区画の西縁は中央部の区画との間に溝が繋がらない区画境界線が認められる。東部は、溝端部が揃って切れる辺りが区画境界になるかと思われる。畝幅は1.8m前後である。耕土面下から23号、24号墓、255号住居を検出する。23号墓の重複部の周辺は耕土面がやや膨らんでいる様子が認められる。

#### 古墳時代中期の畑跡—有馬火山灰層直下— PL. 84

G区からH区にかけて傾斜は強く、地形の変換点となっている。

H区はE、F区より、弥生～古墳中期面で6m程低い。

有馬火山灰はH10グリッドライン辺りで5～10cmの厚さを確認し、北に次第に厚さを増し、H30グリッドライン辺りでは有馬火山灰は1～1.2mの厚さを測る。有馬火山灰に直接覆われた畑はFA層直下畑面から1.5m～1.8m下がった位置で検出される。

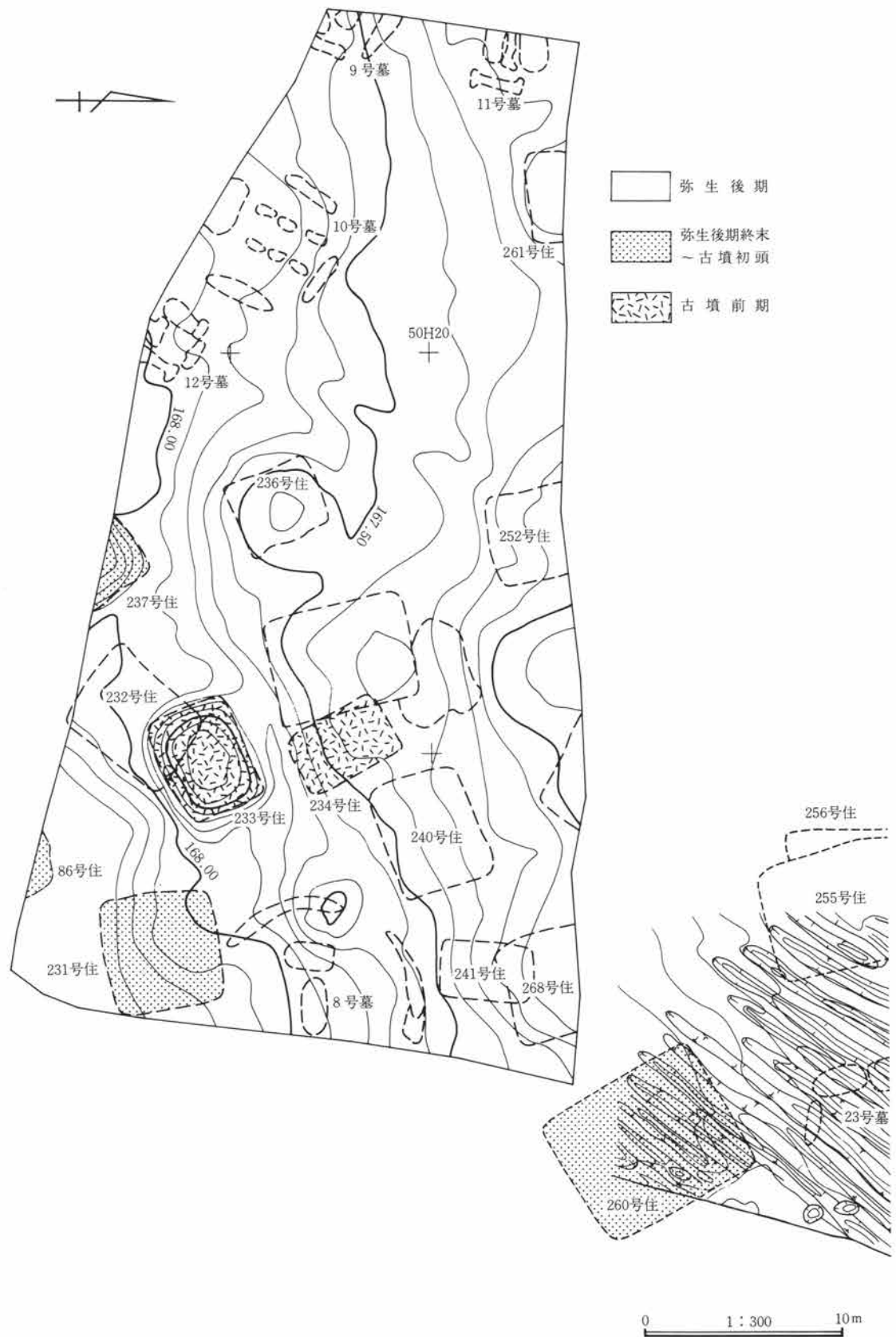
確認された畑の広がりには南北26m、東西18mである。東部は調査区境で限られており、畑はさらに東へ広がっている様子を示している。南部は畝間の溝の端部が比較的揃った状態で切れており、畑の区画境と認めることができる。北辺及び西辺部では明瞭に検出できない。

畑の形状は、畝間の溝は比較的浅く、畝の横断面形はなだらかな波状を呈している。検出された畝間の溝は16条を数え、走行方向はN-30°-Eで地形の傾斜に対して、およそ直交方向をとっている。畝幅は、畝間の溝中心間で平均1.5m、溝の深さは15cm前後を測る。畝の土壌は黒色の浅間C軽石混土層である。畑の耕土面下には255号・260号住居、23号墓が検出される。

H区における、有馬火山灰が一带に見られる区域の調査では他にこの火山灰下から畑を検出することはできなかった。火山灰面下の地形は第366図のように埋没住居が大小の窪みとして残る、起伏の大きな地面が広がっていたようである。



6 検出した遺構・遺物



第366図 H区・有馬火山灰層直下層上面、畑



(9) 古墳時代の畑跡



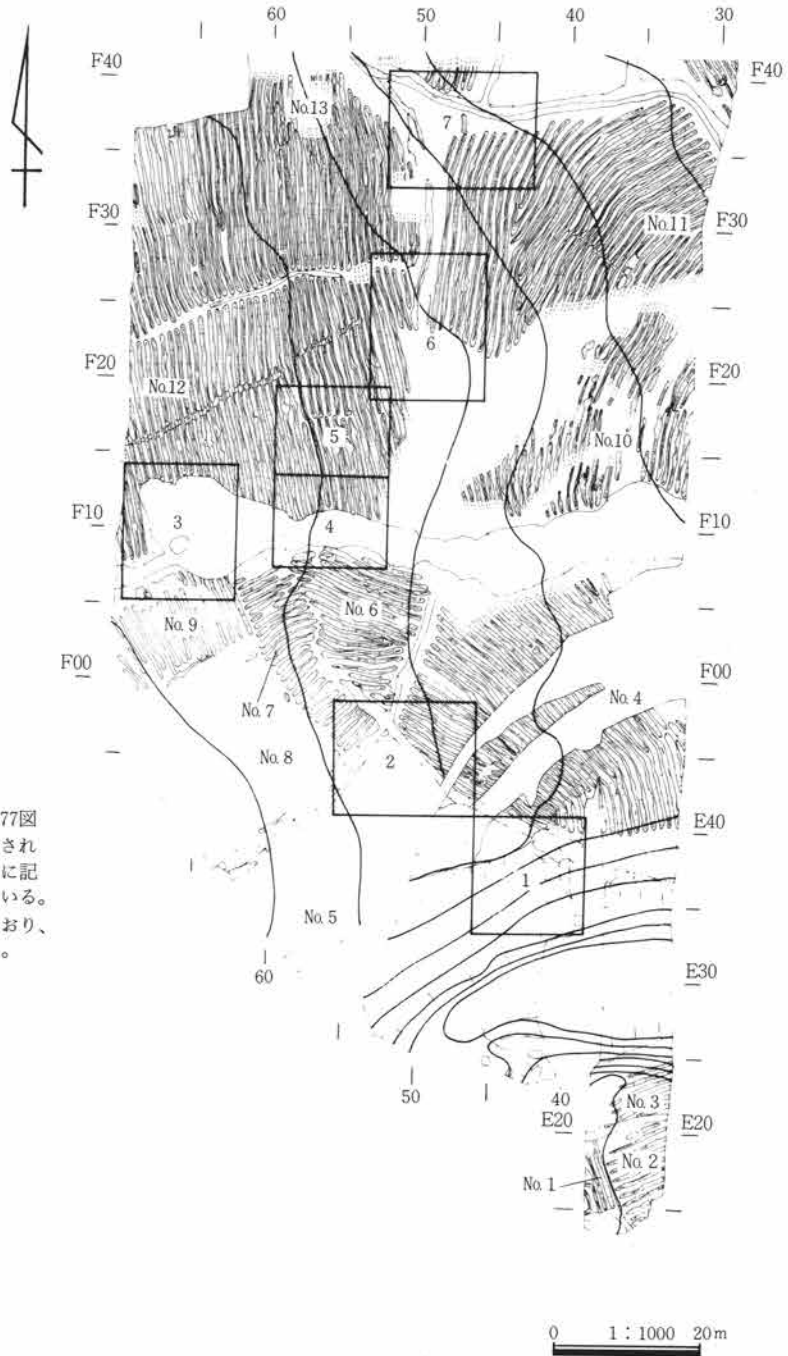
第367図 H区・有馬火山灰層直下の畑

古墳時代後期の畑跡—ニツ岳火山灰（FA）層直下— PL. 85～93

榛名山ニツ岳火山灰（FA）の降下に引き続いて、遺跡周辺にニツ岳火砕流（FPF-1）が厚く堆積する。以後この地形改変により河川の氾濫が頻繁になる。火砕流の上層には幾層にも重なる砂礫層が見られる。この砂礫層の間には数枚の畑が検出される。頻繁に押し寄せた氾濫砂礫層による災害を受けない畑は良好な状態が保たれてきている。この各時代にわたる畑のうちでもFA層直下畑は広域、かつ良好な遺存状態を保っている。畑は調査区域

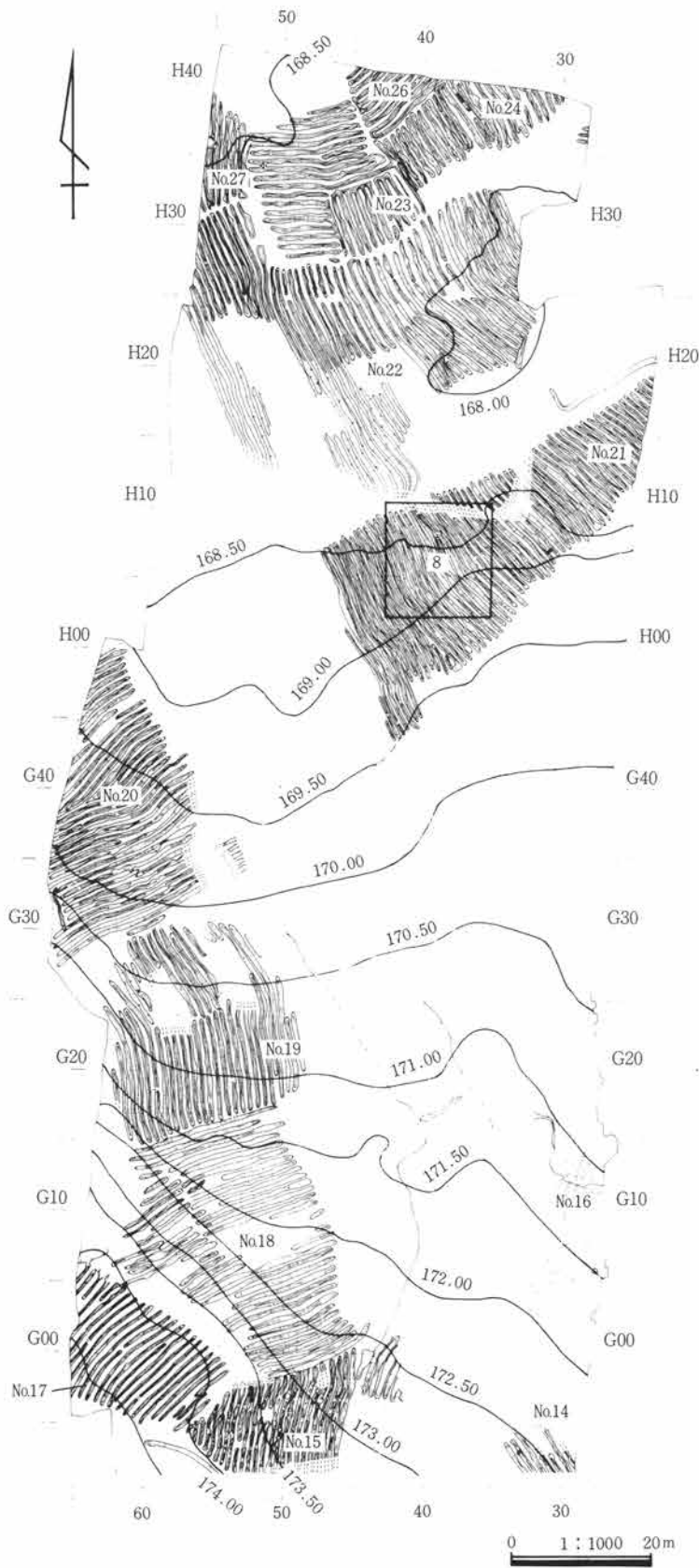
内全域に、ニツ岳火山灰（FA）が降下する時点の畑の原型のままに遺存している。

畑は大小に区画され、区画それぞれに畝の高低はさまざまで、畝の分岐、併合する走行の様子や耕土下の古い畝間の溝の状況から、畝替えや区画の推移も示されるなど多様な情報を含んでいる。



※図中の長方形区画は第370図～第377図の位置を示している。区画内に付された数字は各々の図のキャプションに記された（ ）内の数字に対応している。  
 ※図中のNoは畑の区画ごとに付しており、文中のゴシックNoに対応している。

第368図 FA層直下畑全体図（1）



第369図 F A層直下畑全体図(2)

## E区 PL. 85~87

E区の地形はFA層、及びFPF-1層により埋没している2条の溝、F区大溝と、E区大溝に挟まれた台地上区域とE区大溝の東南部の狭い部分からなる。E区大溝の南では溝や道状の大畝を挟んで畑が3区画（No.1~No.3）認められ、台地部分には中央部に十字交差する溝が配され、この溝を中心に6か所（No.3~No.8）の畑の区画を認めることができる。西南辺は調査区を斜めに貫く市道八木原、有馬線により調査区が限られている。また台地部には西南-北東方向に幅10~15mにわたり帯状の未調査部分を残している。これは後世の流路の侵食による畑上面の流失、あるいは市道域による未調査などによる。

**No.1の区画** E区最南にあつて、道状の畝に2辺、水路状の溝に1辺を区画されている。傾斜は緩く東方向に低くなる。畝幅は、畝間の溝中心間で1mで、畝は低くならぬかである。南辺を区画する畦道の南には別の畑の区画が極小範囲認められる。畑の南への広がりが見定される。

**No.2の区画** No.1区画の東に、畦道状の畝を挟んで隣接する。東、南は調査区域外へ延びている。畝方向は東-西方向をとり、No.1区画の畝と直交している。畝幅は1.3m。No.2区画は隣接する他の区画に比べて畝が高い。

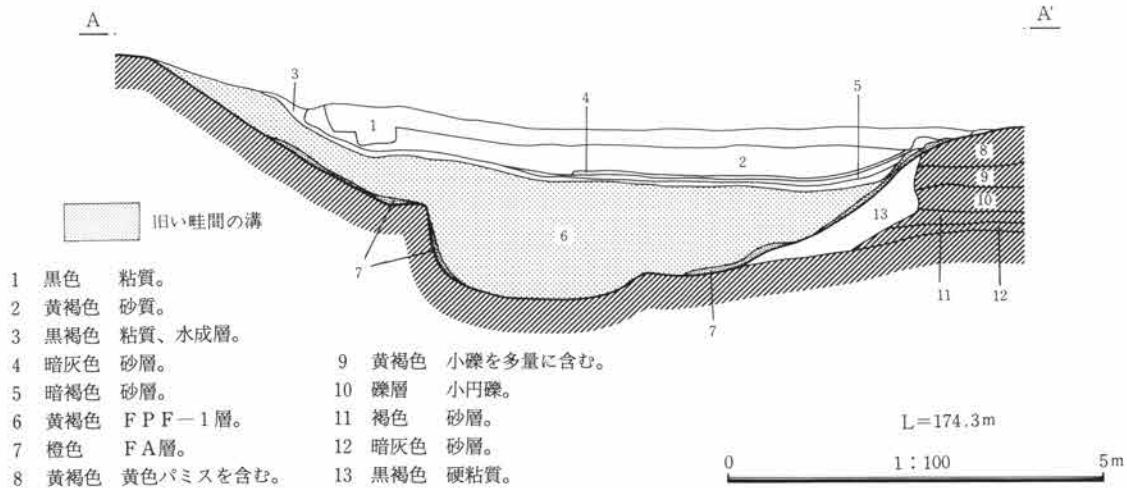
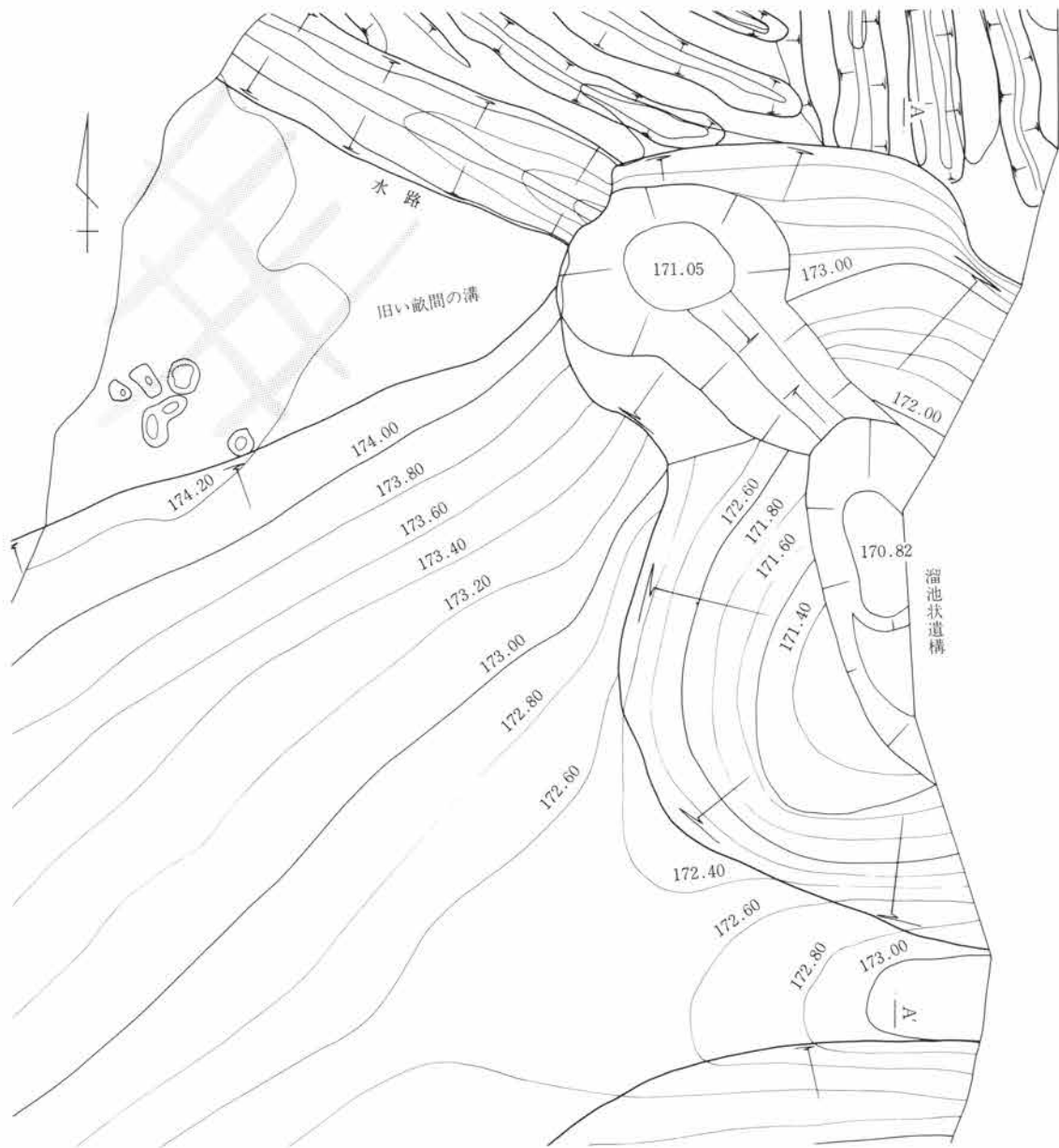
**No.3の区画** 南に幅1.2m程の東西に走る水路状の溝とE区大溝に挟まれた幅8m程の狭い区画で西辺は調査区域内で溝が切れている。東は調査区域外に延びている。畝幅は1m。

**E区大溝** 幅は23~28m、深さ3.2mを測り、調査区内を東西に貫く自然河川である。形状は北側は二段にならかに立ち上っており、南側の形状は複雑で3段以上のテラスを造っている。E区大溝の北側の河岸には直径9m前後を測る溜池状の深いひょうたん形の窪（第370図）が造られている。この窪みの北縁にはE区北半部の台地部から水路が取り付けられており、溝からの排水を窪みに落としていたとみられる。窪みの深さは畑面から4mを測り、大溝底面より70cm程高い。大溝と窪みの接合部は調査区域境であったため調査できなかった。大溝と窪みの覆土の状況は同様で、底部に二ツ岳火山灰（FA）層の堆積が認められ、溝の下半部は二ツ岳火砕流（FPF-1）が充填している。覆土上部は軽石が主体となる砂礫層である。E区大溝と窪みは畑と同時に降下火山灰と火砕流により埋没したものと認められる（第370図）。

**No.4の区画** F区大溝とE区大溝に挟まれた台地状の区域の東端の区画で、西は水路状の溝に画され、東は調査区域外に延びている。中央部に帯状に未調査部があり、この点やや明確さを欠くが畝の走行状態から南北35m、東西40m以上の広大な区画になるとみて良いだろう。畝の方向は東南部で直線状の境界をもって135°屈折している。境界以北の畝方向はN-65°-Wである。畝幅は1m前後で、畝は比較的高く、平均的には20cm前後である。耕土面下の調査では区画内全域に畝替えの痕跡が検出されている。古い畝の跡は、耕土を除去した第IV層黒褐色土面に、暗褐色の耕土を鋤き込んだ溝が並走する。この溝は畝の耕土の直下に検出される。畝替えの痕跡から想定されるところでは、畝替えは1回行われ、それは畝の土を畝間の溝の上に順次盛り上げて畝を造り替えていくといった方法であったと思われる。

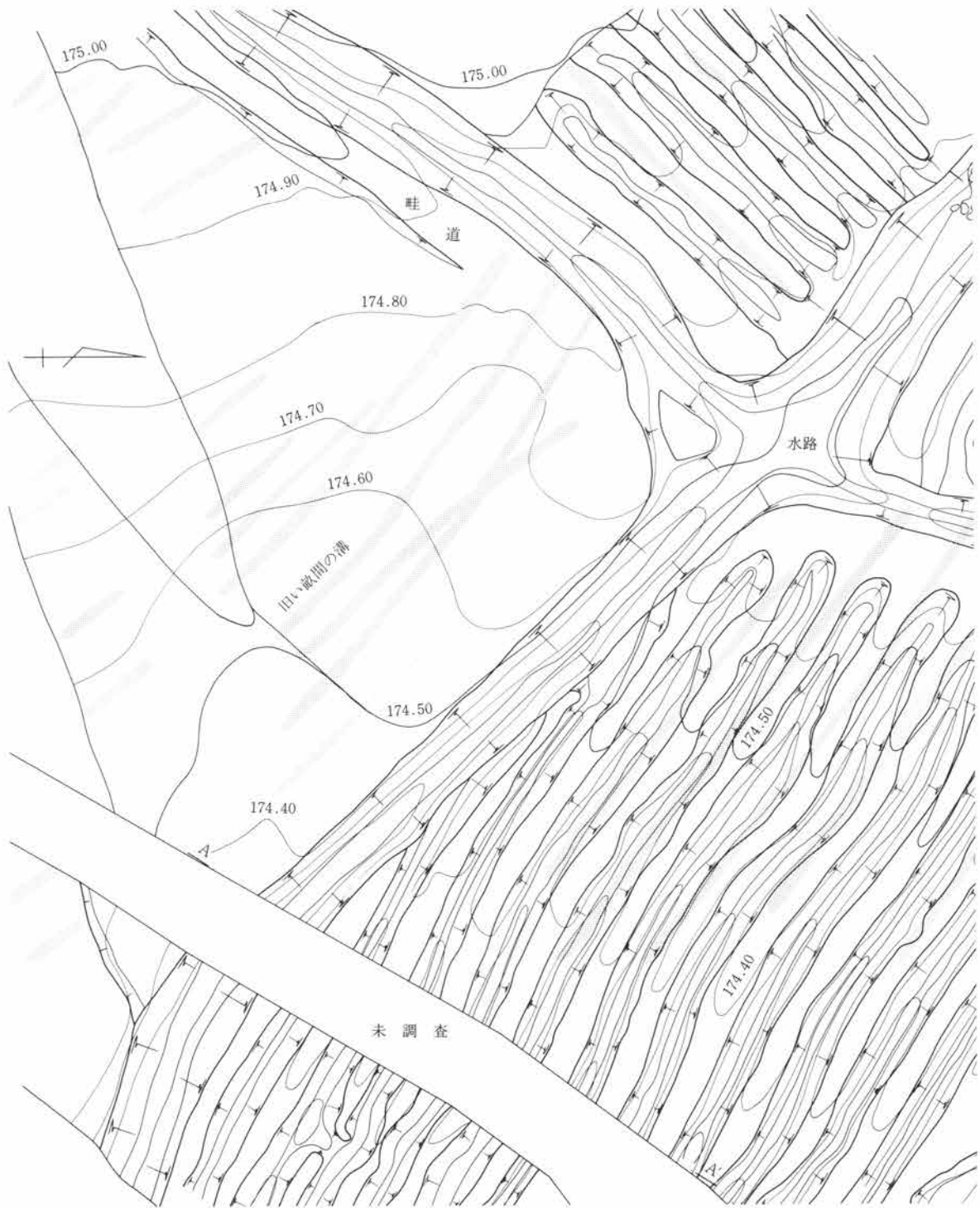
**No.5の区画** 東辺と北辺を水路状の溝に区画され、南辺はE区大溝に限られている。西は調査区域外に延びる。FA層直下の耕土面では畝の痕跡は認められないが、耕土面下の調査では2回以上の畝替え、あるいは区画の変更とみられる、方向を異にする溝が耕土下に並走していた。東南部の一部では耕土下の溝同士が直交方向に、中央部では斜格子状に、西南部では僅かに方向がずれて並走している。

**水路跡** E区を十字に交差する水路状の溝は場所によって幅を異にするが、1.0m~1.5mで、最大幅はNo.6の区画とNo.7の区画に挟まれた部分で1.8mをはかる。深さは50cm前後。覆土は底面に二ツ岳火山灰（FA）層



第370図 E区・FA層直下の畑(1)

6 検出した遺構・遺物



- 1 暗黄褐色 粘質、畑耕土。
- 2 黒褐色 浅間C軽石混土層。
- 3 暗褐色 粘質。
- 4 灰褐色 砂層。

L=174.4m

0 1:100 5m

第371図 E区・FA層直下の畑(2)



が直接覆っているが随所で底部に薄い砂層を認める（第371図）。雨水か灌溉水か明らかにできない。勾配は十字交差部に対しE区大溝の溜池状の窪みの上端部は70cm低く、No.5の区画とNo.8の区画の間の西端部で1m高い。F区大溝の縁辺部では高さは同じである。このことから流水は西方向から、E区大溝の溜池状の窪みに排水されたことが明らかである。またNo.5の区画に面する水路状の溝の南縁辺には水路状の溝に沿って幅70cm、高さ20～30cmの畦が造られている。

#### F区 PL. 87～92

**No.6の区画** 面積は小さく、F区大溝に北辺、水路に東辺を限られている。西辺はNo.7との間は畝はつながらず、一部では空地帯を設けている。畝幅は平均1m前後であり、畝の形状はやや蛇行を見せながら東西方向に並走するが、北半部と南半部ではやや方向を異にし、その境界部では畝が枝分かれしている様子も見られる。F区大溝との境界部では大溝との間に若干の空地帯があり溝に削り取られていない。畝の高さは15cm前後で、比較的なだらかである。耕土面下の調査では耕土下に2方向の溝が並走しており、2回の畝替え、区画の変更があったようである。最も古い段階の溝とみられる溝はNo.4の区画の畝の延長方向に直線的に並走する溝である。この溝はNo.4の区画との境界部から南半部に明瞭である。次の段階にはFA層直下の畑の畝の下に溝が検出される。この溝は、FA層直下の畝と同様にNo.7の区画との境界で切れている。また、区画の中央部にN-40°-E方向に緩くS字状に蛇行する溝の跡が検出されるが区画境界の水路の跡の可能性もある（付図5）。

**No.7の区画** 長さ25m、幅8mの狭長な区画である。畝はN-45°-E方向に走り、No.6の区画とは畝はつながらない。畝幅は一律に約1mで、畝の高さは10cm前後で比較的緩やかである。耕土面下の調査では畝の直下から古い溝が検出される。畝替えの痕跡は1回と認められる。また東南部辺に部分的に沿う水路の北端は次第に不明瞭になるが、耕土面下の調査では、幅広の溝の痕跡が、水路の延長線上北方向に畝の耕土下に延びている。この狭長な区画が造られる以前は水路がF区大溝まで延びていたようである。No.8、No.9との境界部は幅50cm程、畦道状にやや高りがある。

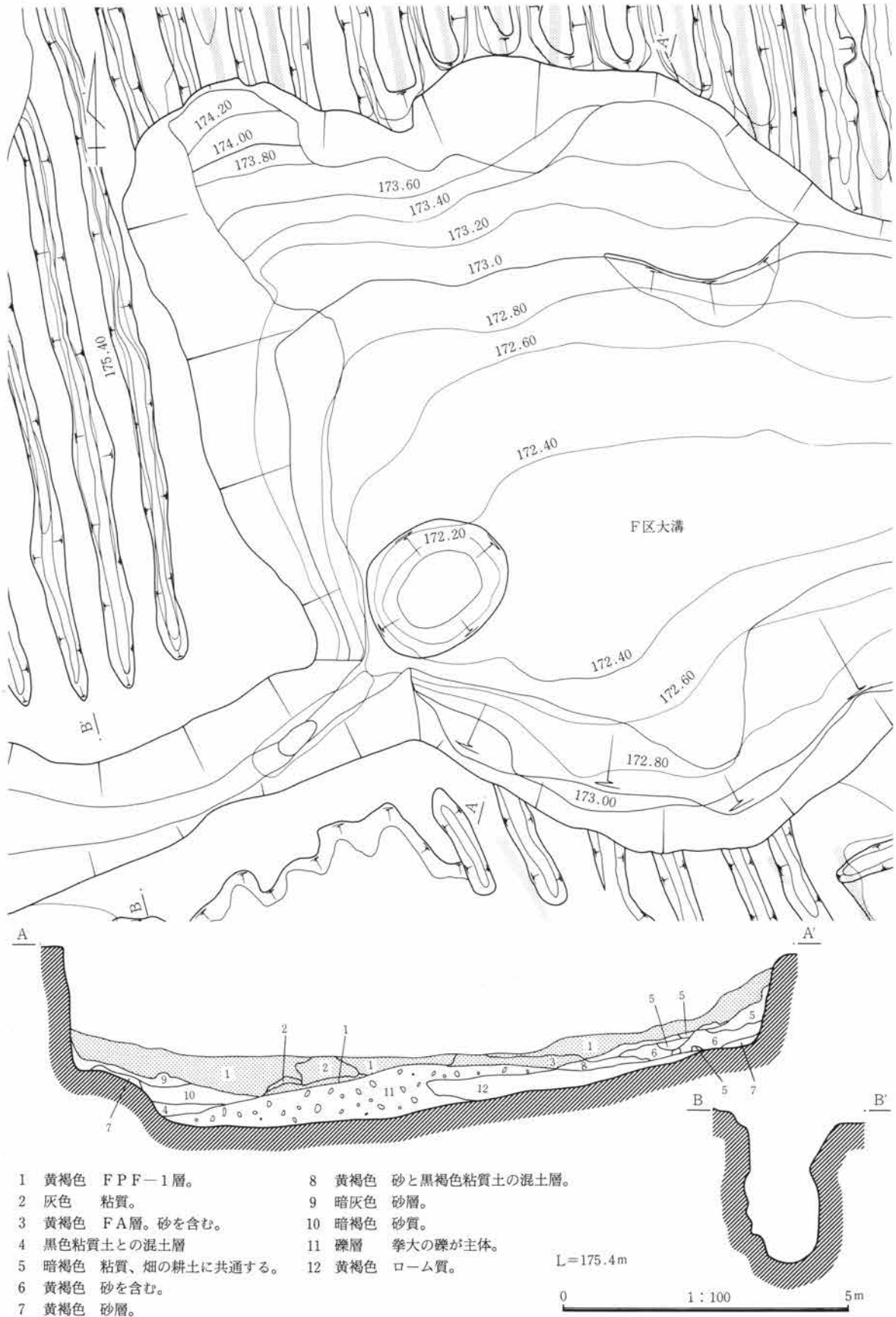
**No.8の区画** 南北25m、東西23m以上の方形区画である。西は調査区域外に延びている。FA層直下の耕土面には畝の痕跡は検出できない。耕土面下の調査では方向を異にする溝が交差しあって並走しており、少なくとも1回の畝替えを行ったこと認めて良い。これらの古い畝はFA降下時点では耕作されないために平坦化してしまったか、または整地したと思われる。

**No.9の区画** F区大溝に面し、西は調査区域外に延びている。大溝との境界部は畝は切れて幅80cm程の空地帯を設けている。この区画の畝は特になだらかであり、走行する各畝は明瞭に確認できない。No.8区画との境界部には幅50cm程の畦道状の高まりが見られる。耕土面下には、FA層直下の畝と20°方向を違えて古い畝溝が並走している。この溝もFA直下の畝と同様にNo.8の区画の畝と方向を同じにしながらも境界部に狭い空地帯を設け畝はつながらない。

**F区大溝** 最大幅14m、深さは畑面下2～2.5mを測り、調査区を東西に貫く。縁辺部の壁は砂礫を含む褐色ローム質土で、総じて2m前後直立に切り立った状態である。壁面には人為的な掘削の痕跡は認められず、侵食や崩落による湾入、突出が著しい。全体に溝幅は一定していない。溝の覆土は溝底部まで二ツ岳火山灰（FA）層、または二ツ岳火砕流（FPF-1）が覆い、溝内下半部に充填している。溝壁面の細部までFPF-1が密着して見られる。

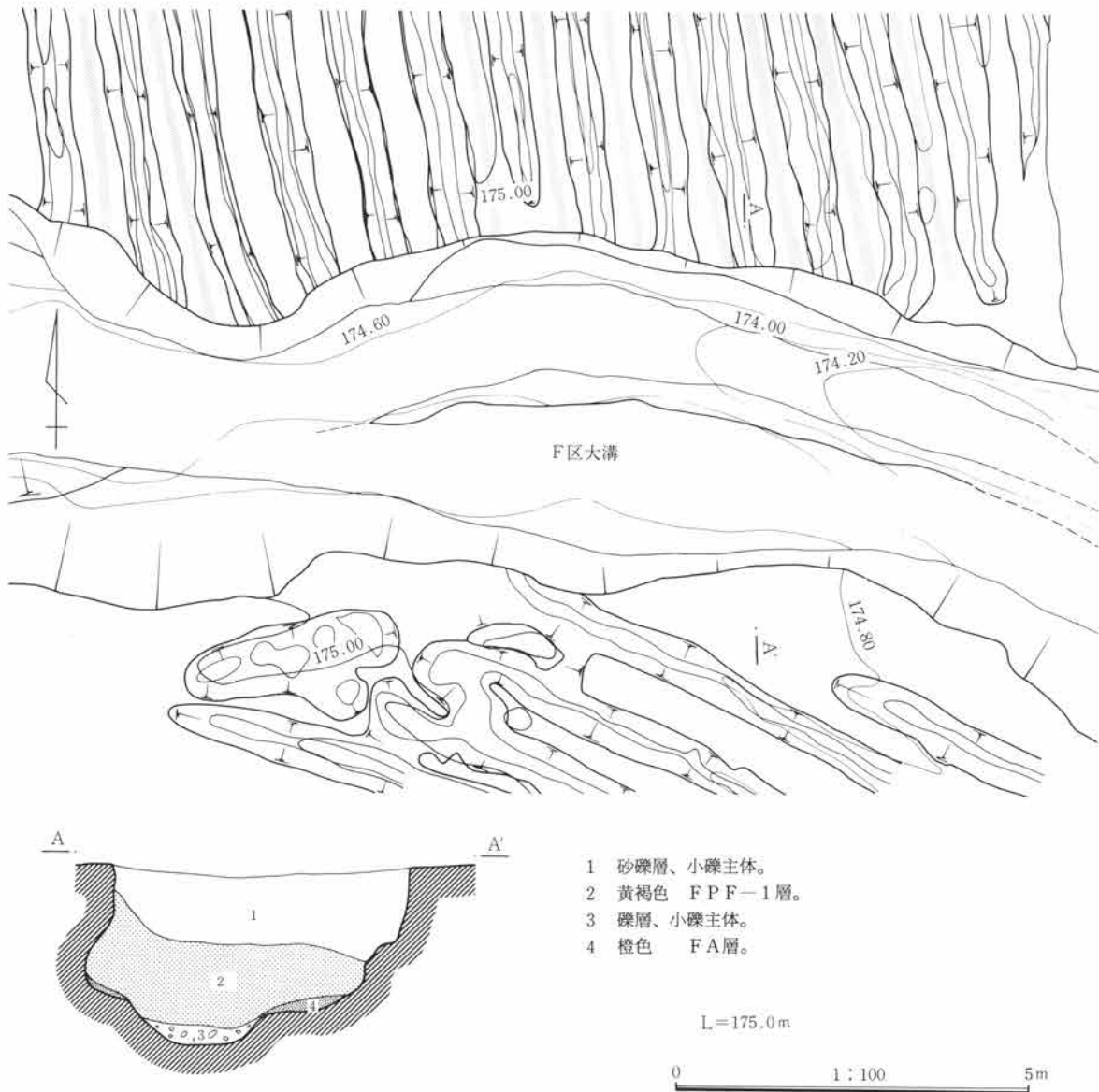


6 検出した遺構・遺物



- |                     |                     |
|---------------------|---------------------|
| 1 黄褐色 FPF-1層。       | 8 黄褐色 砂と黒褐色粘質土の混土層。 |
| 2 灰色 粘質。            | 9 暗灰色 砂層。           |
| 3 黄褐色 FA層。砂を含む。     | 10 暗褐色 砂質。          |
| 4 黒色粘質土との混土層        | 11 礫層 拳大の礫が主体。      |
| 5 暗褐色 粘質、畑の耕土に共通する。 | 12 黄褐色 ローム質。        |
| 6 黄褐色 砂を含む。         |                     |
| 7 黄褐色 砂層。           |                     |

第372図 F区・FA層直下の畑(3)

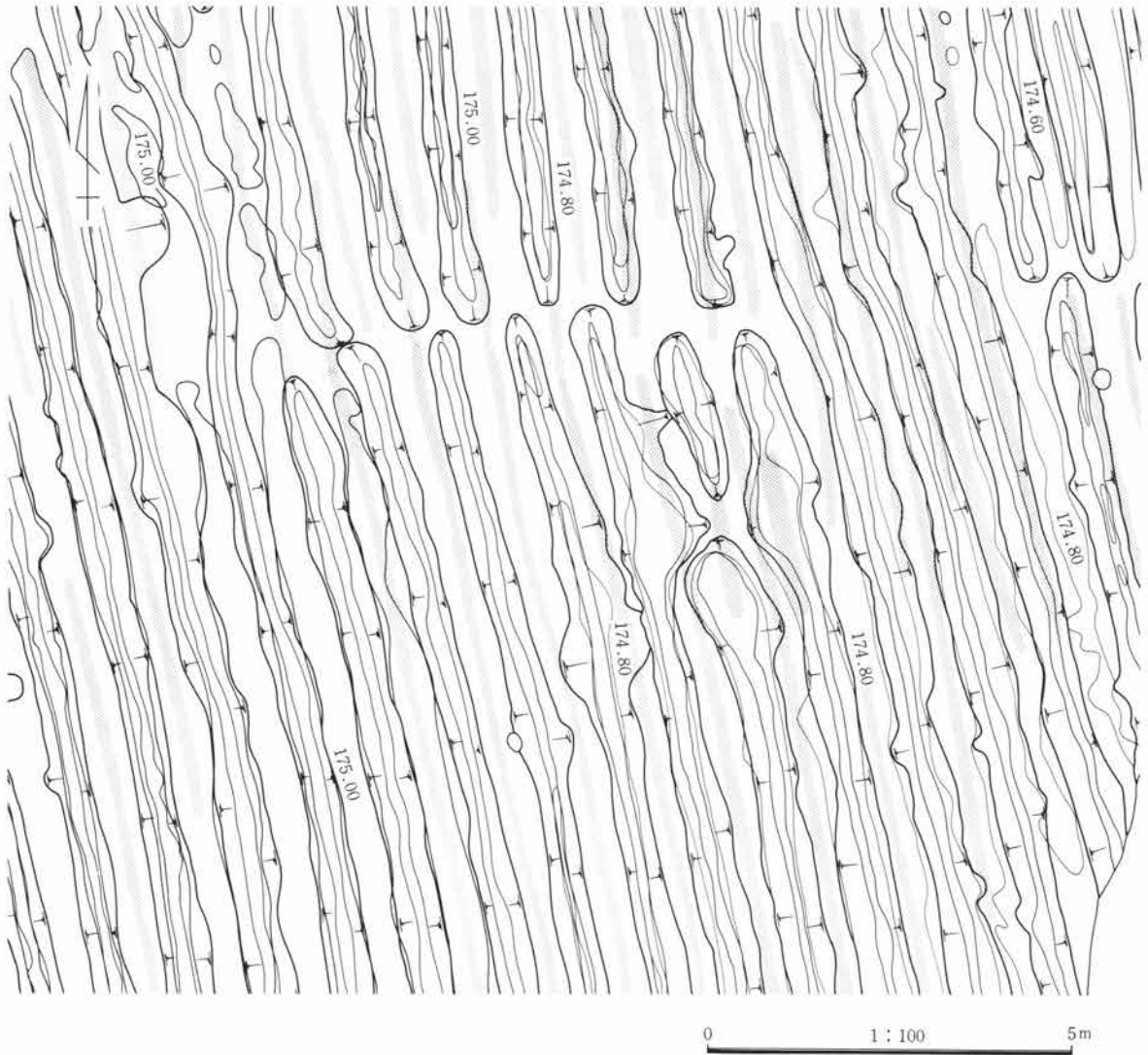


第373図 F区・FA層直下の畑(4)

大溝の西部は幅1.8mに溝幅が急激に収束している。深さは畑面下2.5mで、底面まで二ツ岳火砕流が充填しており、一気に埋没した状況を認める。溝の壁面は砂礫を含まない堅い褐色ローム質土で、水流の侵食により、滑らかな曲面状に中位部が膨れ、強くオーバーハングしている。強い水流を受けたことが想像される。この狭い部分を東に抜けると溝は大きく広がる。壁面は不規則に崩落によって広がった様子で、壁下を中心に崩落したローム質褐色土や黒色土が数10cmブロック状、またはレンズ状に堆積する。

狭い溝から水流が流れ込む部分には径2.5m、深さ40cm程の窪みができている。溝の底面は全体的に径20~30cmの円礫を主体とする砂礫層である。また底面には幅1.5m前後の流路の跡が見られる。溝の底面の勾配は西から東方向に緩い傾斜が見られ、西端部と東端部の比高は約1mである。

なお、大溝の周辺部、特に南側のFA層内にはヨシ類の葉が多量に含まれていた。圧痕の状態で検出されている。

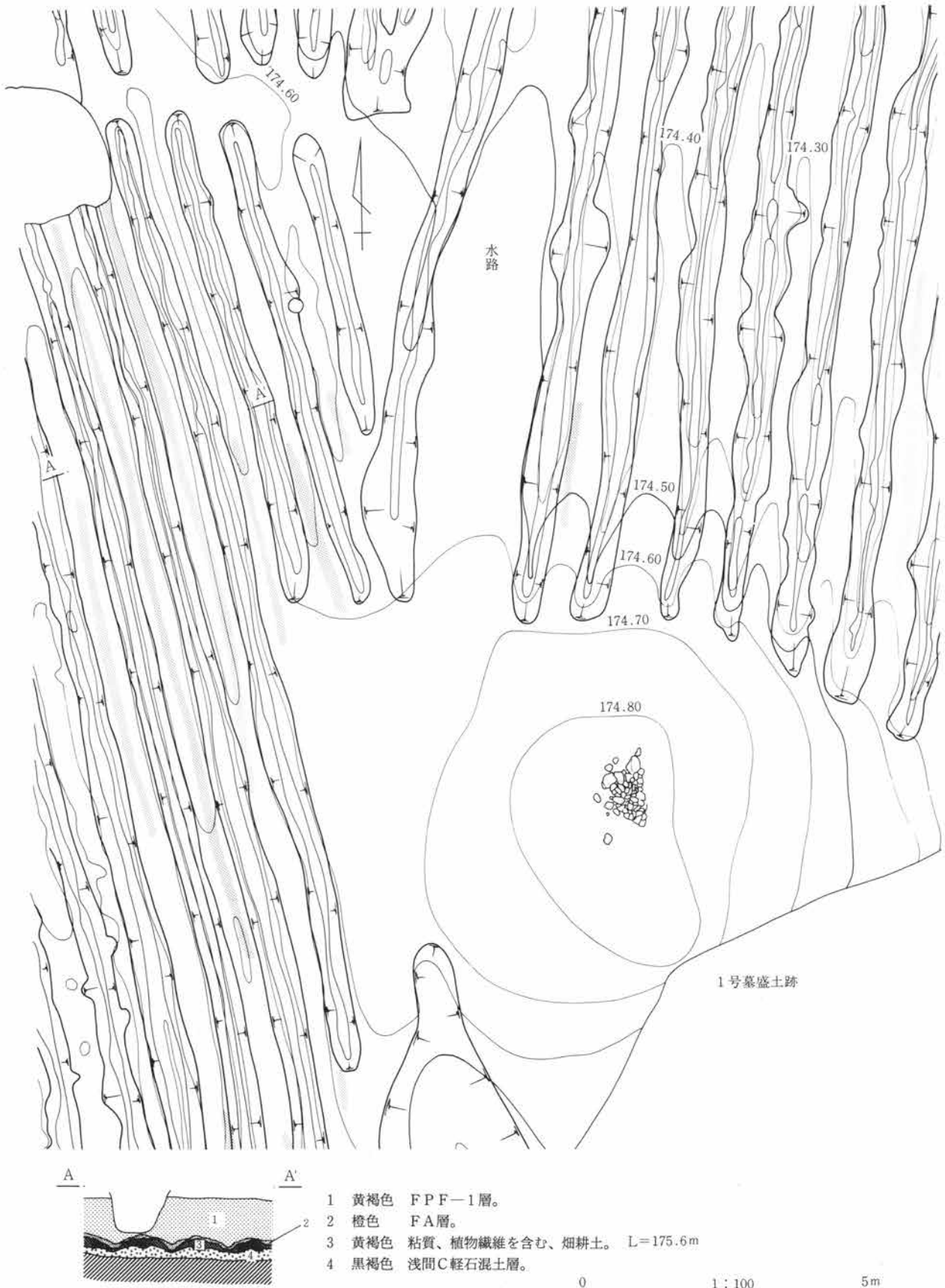


第374図 F区・FA層直下の畑(5)

**No.10の区画** 南は大溝に面し、北は後世の河川侵食が大きく横切っているため不明確であるがNo.11の区画に含まれる可能性も高い。大溝に面する南辺では畝は大溝の手前10数cmで止まっている。

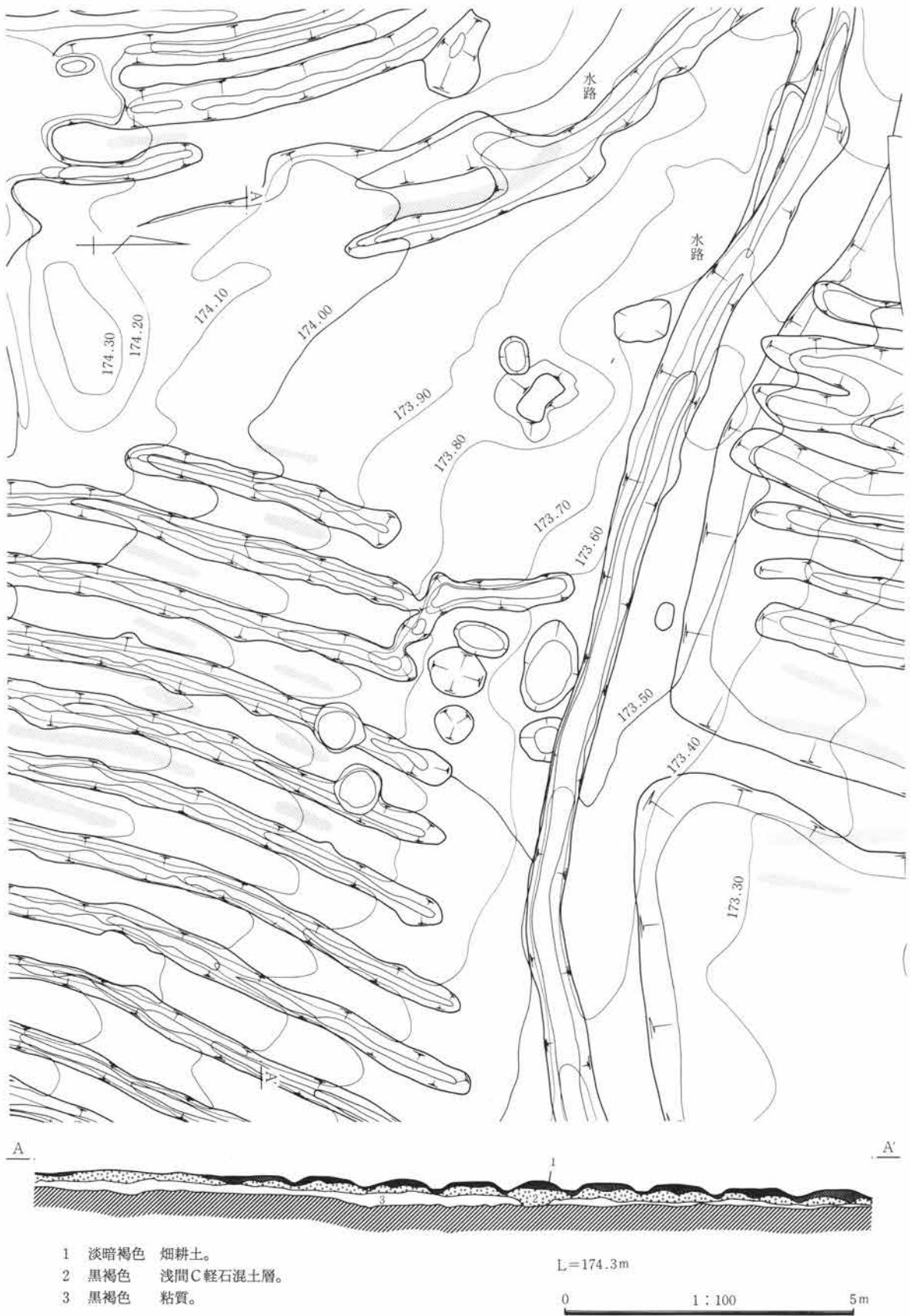
耕土面には砂礫層が随所で食い込んでおり、遺存状態は悪い。畝幅は約1mで、畝は比較的高く、良好な箇所では20cm前後を測る。畝の形状、方向はNo.11区画に一致する。

**No.11の区画** 北辺と西辺を水路状の溝と道に区画され、東は調査区域外に延びている。南辺は後世の河川侵食が大きく横切っているため不明確である。畝の方向などからNo.10の区画を含む可能性も高い。畝の形状は東半部と西半部は畝の方向が異なる。この境界部は南半部で明瞭であり、数か所で畝が枝状に分岐している。畝幅は1.1m前後、畝の高さは区画内全体に高く、20cmを測る。区画内の地形傾斜は比較的強く、北東方向に向かって低くなる。畝の方向は傾斜方向と一致している。区画内の比高は1.8mである。耕土面下の調査では区画内全面に畝の直下に古い溝が並走していた。畝の方向や区画を変えた痕跡は認められなかった。区画内、西南コーナー部には弥生後期の1号墓が検出されているが、FA層直下の上面は盛り土がなされ、周囲から20~50cm程高くマウンド状に高まっていた。径10m程のマウンド部に畝は造られておらず、マウンドの頂部に



第375図 F区・FA層直下の畑(6)

6 検出した遺構・遺物



第376図 F区・FA層直下の畑(7)



は拳大の石が寄せ集められていた。(第375図)

西辺部は水路状の溝にそって幅1.2m程、帯状に畝が造られていない。この区域は上面が比較的踏み固められており、道であったろうと思われる。

**No.12の区画** 南辺はF区大溝に面し、大溝が深く湾入している。北辺はNo.13の区画と隣接し、境界部には道を設けている。西は調査区域外に延びている。南辺部は大溝の縁辺に空地帯はなく、大溝の壁が畑面と共に崩落し大きく湾入したと思われる。畝は一律に幅1m、畝の高さは15~20cmで比較的高い。No.11、No.13の区画とほぼ同様である。畝はN-10°-W方向に直状に走っており、地形の傾斜と直交する。区画内の比高は約1mである。区画の中央部には畝の頂部が踏み潰された通路の跡が東西に横断している。東南部には東西に直線状に畝が切れ、互い違いになってつながらない部分が見られるが、これは畝替えが中止されたために、このような形状になったと認められる。(第374図) 耕土面下の調査では、全体的に各畝直下に古い溝が検出されるが、この畝が不連続な線の以北、以東では畝替えの痕跡が1回多く、2回認められる。西半部でも2回認められる。中央部では痕跡は1回のみである。畝の方向や区画を変えた痕跡はない。ただ北部の道跡にかかる辺りでN-35°-Eの方向に弧状に4条の最も古い溝が走っている。溝の中心間幅は90cmで比較的狭い畝が造られていたようであるが、広がり不明である(付図5)。

北辺の道跡の部分は、幅70cm程で堅く踏み固められている。道の面には川原石が1/2程度踏み込まれた状態で散在している。

**No.13の区画** 東辺は道と水路状の溝に、南辺は道路に区画され、西は調査区域外に延びている。畝の幅は一律に約1m、畝の高さは7cm前後である。地形の傾斜は北東方向に低くなり、畝は傾斜に対して直交方向に走る。区画内の比高は1.3mである。

耕土面下の調査では区画全体にわたって各畝の直下に古い溝が並走している。一部に2回の畝替え跡が認められるが、全体的には痕跡は1回のみで、畝方向や区画の変更は認められない。なお区画の北辺部は水路状の溝とその南に沿って幅広い空地帯を設けている。空地帯は溝が不明瞭になる西端部で幅6m、東に下るに従って幅が狭まり、東辺部で不明瞭になる。

**No.14の区画** 調査区の東端に小範囲に検出される。北、西辺は区画する施設はなく、畝が切れる辺りが境界となる。東は調査区域外に延びている畝は直状で幅は一律に約1m。畝方向は地形の傾斜に直交する

**道跡** 道は水路状の溝の北側沿いに1~1.5m幅に帯状に設けられている。また溝が分岐するに従ってNo.11区画と12区画の境界部では溝の東側沿いに見られる。特にNo.13区画とNo.15区画の境界部では畦道状に一段高く整えられ、堅く踏み固められている。No.15区画とNo.16区画の境界部ではT字路に分岐している(第376図)。分岐した道は北へ向かっており、G区の畑の北東外縁部を北西方向に向かって延びている。

## G区 PL. 92

G区は高燥なE、F区と低湿なH区との地形上の境界区域である。地形傾斜は他の区域に比べて大きい。南北100m間で比高は4mである。このうち最も強い傾斜地である、調査区の西半部に畑が帯状に造られている。その傾斜地から一段下がった辺りは幅30m以上にわたって、N-35°-W方向に帯状に空地帯が延びている。更にこの空地帯の中央部には、両側を低い段により区画された幅10m程の区域が空地帯に沿って直状に延びている。段は西側で長さ35mにわたって検出されている。段上は道であった可能性も考えられる。

## 6 検出した遺構・遺物

この空地帯に関係する事柄として時代は下がるが二ツ岳火砕流（FPF-1）上の奈良・平安時代の文化層以降の段階の流路が空地帯の西縁辺に沿って直状に走っている。流路の幅は4mで流路内には砂礫が厚く充填しており、水量が多い河道の跡と認められる。また遡って弥生時代後期にあつてはこの空地帯と重なるように後期後葉の住居群と墓群が帯状に延びている。奈良・平安時代住居群もこの部分を中心に広がり認められる。

時代を通じて地形条件に即した土地利用、集落占地の様子が見られ、なかでもこの地形の変換区域でのありかたは注目される。

なお、G、H区域の調査では耕土面下から古い畝の跡が検出できなかった。これは畑の耕土の黒色味が強いことや、礫を含む土壌であったことなどにより土の峻別が困難であったことによる。

**No.15の区画** 南辺、東辺を畦道に区画された三角形の比較的狭い区画である。畝幅は1m前後、畝は全体的に低く潰れている。畝方向は傾斜に対してやや斜め方向に一致する。区画内の比高は約90cmである。

**No.16の区画** FA層直下の耕土上面には、畝は部分的に確認できるのみで全体的には不明瞭である。このため区画の範囲も明確には把握できない。調査区の東限界部において平坦化が進んだ畝の跡が7条検出される。北端部の区画境には不定形な段が造られており畝は手前で切れている。耕土面下の調査ではほぼ区画内全面に畝の跡を検出する。並走する溝の方向はN-15°-Eとそれから30°東に振れるものがあり、2面の畝跡の重なりが認められる。地形傾斜は北東方向に低く区画内の比高は1.5mである。溝の方向はほぼ傾斜方向に一致する。

**No.17の区画** 調査区の西端部の区画で南辺は水路状の溝に区画され、北辺はNo.18区画との境界部で直線上に畝が切れている。西は調査区域外に延びている。畝幅は比較的広く1.2m前後で、畝の高さは15cm前後で、畝は比較的高い。頂部が平坦になっているのが特徴的である。

**No.18の区画** 最も傾斜の強い地形に造られた、南北35m、東西は最大幅で30mの区画である。東辺は畝が直線的に揃って切れる。東辺は畝の端部に沿って幅1mの畦道状緩いが高まりがあり、やや西辺は傾斜の上端変換線に当たるが、平坦化しているが、部分的に畝の端部が確認できる。畝幅は1.2m前後で、全体的に畝は低い。また、奈良・平安時代の住居跡などによる攪乱や、畝の平坦化などにより随所で明瞭さを欠く。斜面の上半部一帯に耕土面には人頭大～拳大の円礫や小礫が著しく露出している。北西部の一画で畝が乱れた状態がある。畝の東端部は以東の畝と互い違いになってつながらない。これは畝替えの跡とみられる。地形傾斜は強く、北東方向に低くなる。畝方向はほぼ傾斜方向に一致する。区画内25mの間で比高は2.5mである。

**No.19の区画** 南北29m、東西28m、北西部の一部がやや不明瞭であるが、四辺はほぼ調査区域内で把握される。畝幅は1.1～1.2mで、畝は比較的低いが明瞭である。北半部は畝替えの跡とみられる畝が互い違いに合わない箇所があるが、ここを境に北半部は一段と畝が緩やかになる。畝の方向は地形傾斜の方向にほぼ一致し区画内の比高は2mである。北半部には耕作土面に奈良・平安時代の住居による攪乱が数か所入っている。

**No.20の区画** 西半部が調査区域外になる。東辺は畝の端部が次第に不明瞭になる。畝幅は一律に1m前後で、畝は低く緩やかである。区画のほぼ中央部には畝が方向を異にする境界線が認められる。これを境に畝は約17°ほど以南と以北で方向を異にする。境界部では畝は枝分かれする形で続いている。それぞれの畝の走向はほぼ地形の傾斜方向に一致する



## H区 PL. 92・93

H区は本遺跡の最北部の調査区であり、標高は最も低く、調査時点ではFA層下は湧水位以下であった。地形傾斜はG区と比べると一段と緩やかである。H10グリッド以北では畑の耕土下に、堆積する有馬火山灰層が北方向に次第に厚くなり、FA層直下畑面では傾斜はなくなる。調査区の北端部ではFA層直下畑の耕土面は弥生後期の遺構検出面より約2m高くなる。

なおH区は、FA層直下畑の上面がFA及びFPF-1により約70cmの厚さで覆われた後、一帯に水田化する。(第377図)水田化の時期は明らかにできないがその廃棄は浅間B軽石層(1108年降下説が有力)降下時に数年以上先立つことが土層観察から推定される。即ち浅間B軽石層と水田面との間に厚さ3cm程の黒色粘質の縞状水性堆積土層が介在している。層中にはヨシ類の葉のケイ酸体が多量に含まれていた。また地表は現行水田面で、浅間B軽石層よりも1.2m程上位である。この1.2mの間の土層の主体は軽石を多量に包含する砂礫層である。この層中に見られる一連の経過は、二ツ岳の爆烈以降、水系を巡る土地条件の変貌があり、さらにその後も氾濫土砂の頻繁な流入があるなど、長期に環境が不安定な状態が続いたことを示している。

**No.21の区画** 楔状に細長く北東方向に調査区域外に延びている。北辺、南辺、西辺部は畝がほぼ直線状に切れる。畝幅は狭く0.8~1m、畝の高さは15~20cm程で、比較的高く明瞭である。地形の傾斜は比較強く北西方向に低く、畝方向は直線的に傾斜方向に一致する。この区画が位置する辺りは有馬火山灰の堆積は0~数cmであり、耕作土上面と弥生後期~古墳前期の遺構確認面の差は30cm前後である。区画中、86号住居(弥生終末期)の埋没跡が深さ30cmの緩い窪みとして検出されている。窪み中の畝幅、高さは周囲のそれと変わりはない。この上層である二ツ岳火砕流(FPF-1)の堆積過程で窪地は平坦化されているので、後世の陥没ではなく、窪地の状態で畑は営まれていたと推測される。耕作土はG区と同様拳大以下の小礫を著しく含む。区画の北辺部は東部で比較的大きい空地帯に面しているが空地帯との境界部には幅約80cmの溝を設けている。溝は西南に走って屈曲し、北上するがしだいに不明確になる。

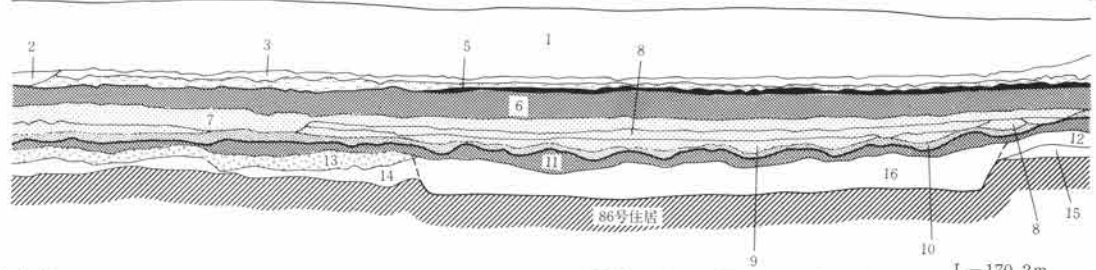
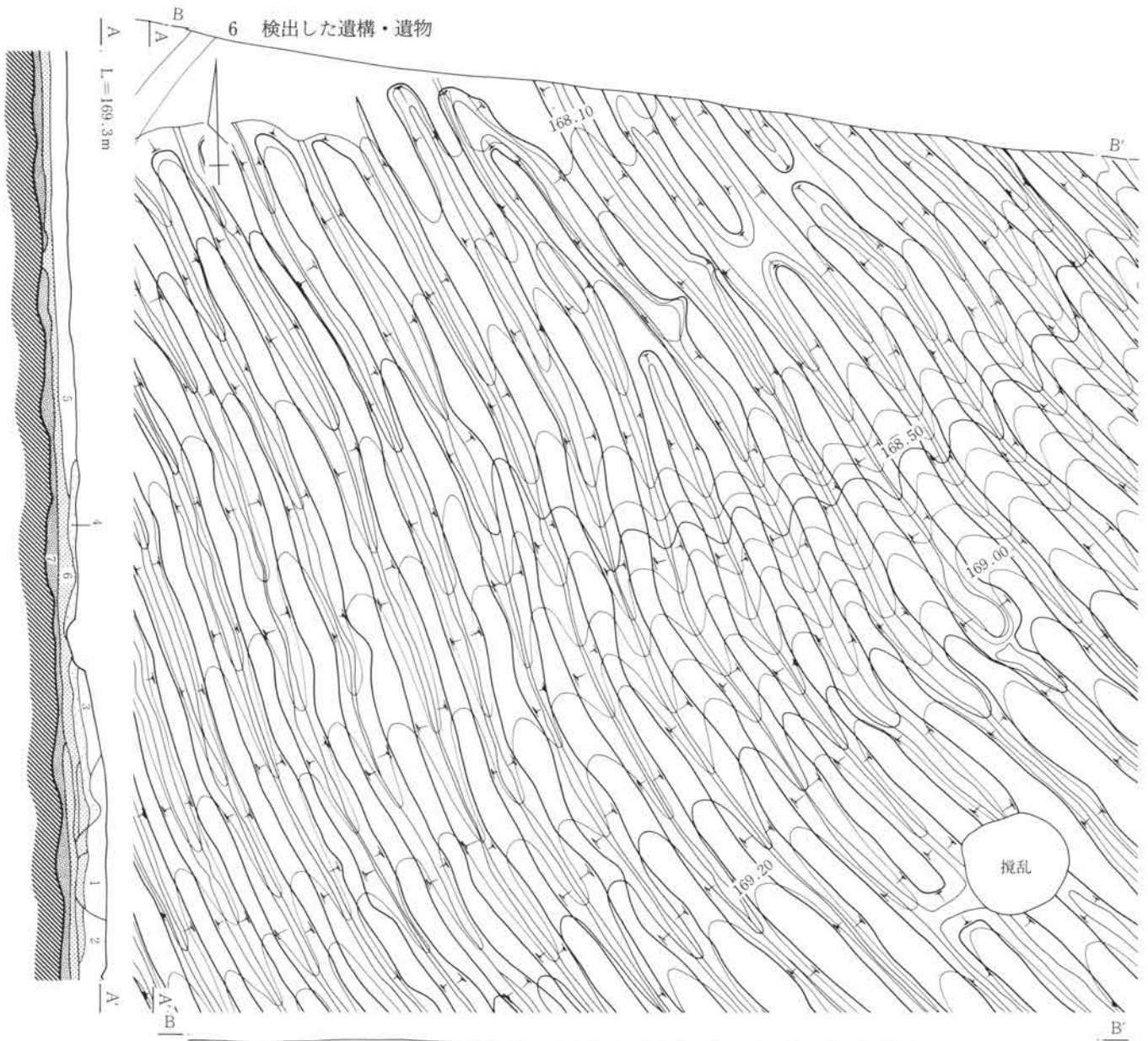
**No.22の区画** H区の中央部に東西48m、南北50mを測り、形状は不整形である。北辺部は他の区画と鍵状に隣接し、西端部と東端部の一部が調査区域外に外れている。南部は畝が平坦化しており、明瞭さを欠く。畝幅は全体に一律でない。中央部で1.1~1.2m。周辺部には1mを欠く箇所が多い。また、特に東南部の畝の形状は畝幅の狭さに加え、畝が湾曲し、枝分かれするなど畝の乱れが目立つ。これも畝替えに伴うものだろうか。地形は平坦で、区画内のレベル差は30cm以内である。

**No.23の区画** 南北11m、東西12mの方形の比較的小さい区画である。No.24、No.26の区画との区画境は、畝や溝かつながっており、他の場合とやや様子が異なる。No.26とは同一区画であって、畝替えが着手された部分と、されない部分の違いである可能性も高い。畝幅は1.1~1.2m、高さは10~15cmである。

**No.24の区画** 南北16m、東西17mの鍵状の区画であるがNo.23の区画は溝、畝がつながっている。畝幅は比較的広く1.2m前後、畝の高さは15cm前後で明瞭である。区画内の2か所で畝が切られて溝がつながっていたり、またNo.25の区画、No.27の区画と溝がつながるなど興味深い様子も見られる。北辺は畝が切れて空地帯に面している。

**No.25の区画** 幅10m前後の細長い区画で東方向へ調査区域外に延びている。南辺は畝端部が不揃いながらも明瞭に切れ、やや広めの空地に面している。

**No.26の区画** 西南辺はNo.24との境界部に狭い空地帯を設け北は調査区域外に延びている。畝幅は1m前後で



A・Bセクション

- |                               |                            |
|-------------------------------|----------------------------|
| 1 灰褐色 上部は砂層、下部は灰色砂層。          | 9 淡褐色 火山灰層。細礫を多量に含む。       |
| 2 灰褐色 細かい軽石粒を含む。              | 10 淡褐色 FA層。                |
| 3 黒灰色 粘質土、縞状水成層。              | 11 黒色 浅間C軽石、小礫を含む。畑耕土。     |
| 4 黒灰色 浅間B軽石純層。                | 12 黒色 粘質、軽石を含まない。小礫を多量に含む。 |
| 5 黒色 軟粘質、縞状水成層、ヨシ類の葉のケイ酸体を含む。 | 13 黒色 粘質、浅間C軽石を多量に含む。      |
| 6 暗灰色 やや粘性あり、FPF-1主体、水田耕土。    | 14 灰白色 粘質、第V層。             |
| 7 黄褐色 FPF-1                   | 15 褐色 礫層。                  |
| 8 黒灰褐色 火山灰層。                  | 16 暗灰色小礫を多量に含む。            |

第377図 H区・FA層直下の畑(8) 0 1:100 5m

畝は比較的高く明瞭である。

No.27の区画 調査区の西端部に小範囲に検出される。No.24との境界部は畝が明瞭に途切れて狭い空地帯を設けている。畝は低く潰れている。畝幅は1m前後である。

## (10) 土器群・礫群・包含層出土遺物

### 土器群・礫群 PL. 94

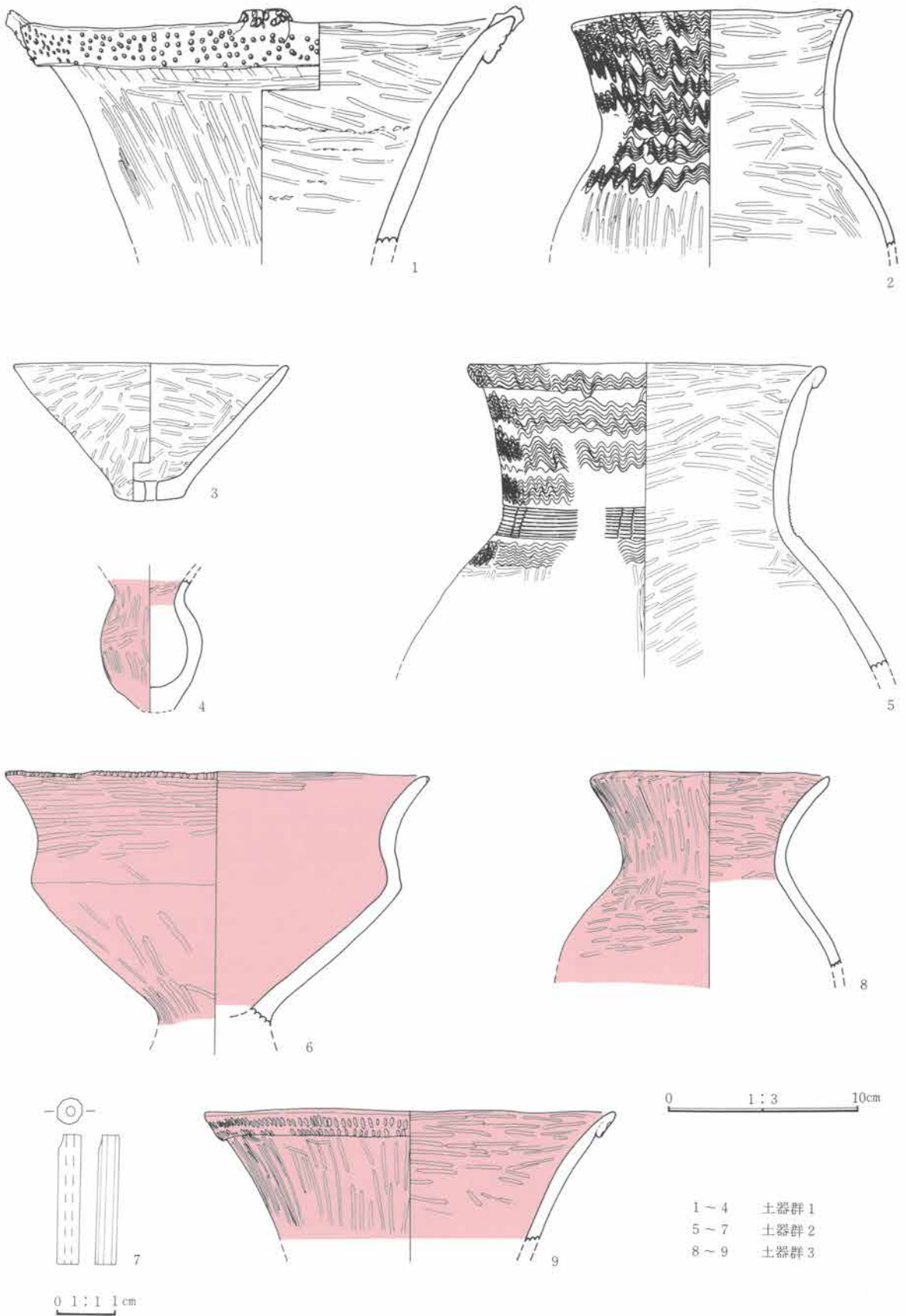
有馬遺跡の調査区域内には遺構に伴わない状態で弥生・古墳時代の遺物が多数出土している。これらの遺物のほとんどは大小の土器破片であり、そのうち完形、または欠損の少ない半完形品は第378～390図に掲載している。この外に遺構に伴わない土器破片はパン箱(60×38×15cm)にして150箱分出土している。ちなみに本書に図示されたもの以外で遺構覆土中出土の土器破片はパン箱にして48箱分ある。

調査区域内における土器破片の出土状況はおよそ上記のように遺構出土のものを凌ぐ程に多量に出土している。それらの土器の出土状況を見ると、その数量にして半ば程が、調査区域内の随所に大小の群集域を形成していたものである。付図1～2の遺跡全体図には群集箇所(土器群)の分布状況を、第378～385図にはこれを、土器群別に完形、大型破片を掲載した。

遺構外における土器破片群の分布状況についてみると、総じて遺構の群集域内には認められず、この隣接区域に濃い分布域を形成している。このうちでもG区の傾斜部は、弥生後期第3期(後期後葉)土器が特に広範囲で、濃密に集中する箇所である。このG区傾斜部の基盤層は拳大～人頭大からなる厚い礫層であり、住居群、墓群域はこの区域を避けるかのように、傾斜地の裾部に帯状に群域を形成している。この区域の土器の出土状況は、様々な器種からなる大小の破片や半完形の土器よりなるが、その一方土器棺B群の群域ともおよそ一致し、土器破片群中随所に土器棺が埋置されている。また6号、5号周溝墓の土器との接合関係では30点余の複合口縁の壺について調べたところ6号墓との間に1点、接合関係があった。いずれにしてもその在り方は多様である。生活用具の投棄場や幼児埋葬域、あるいは周溝墓供献土器の破碎の場など、土器群の形成には多様な事柄が関与したであろうことが想定される。

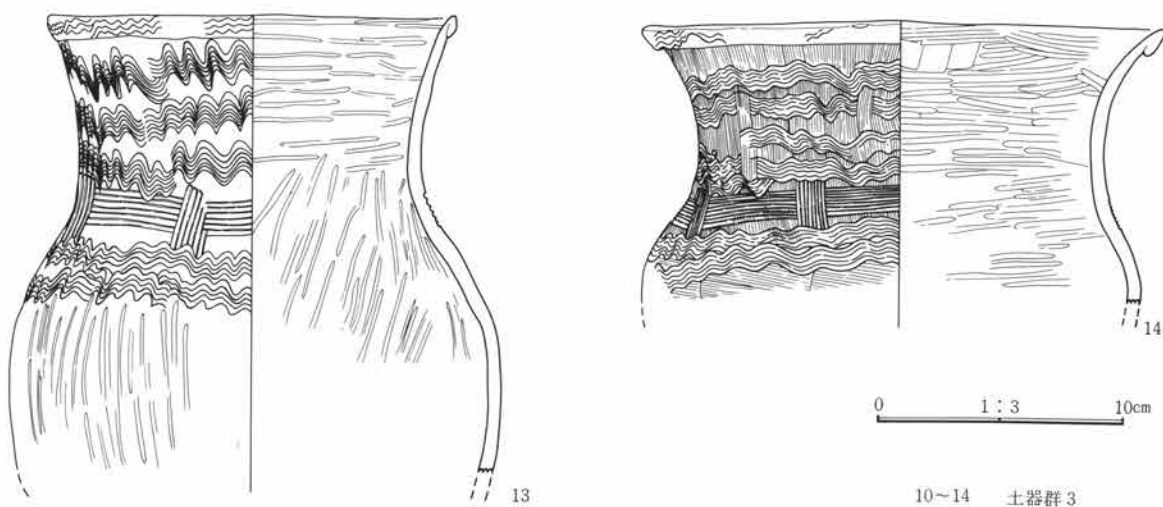
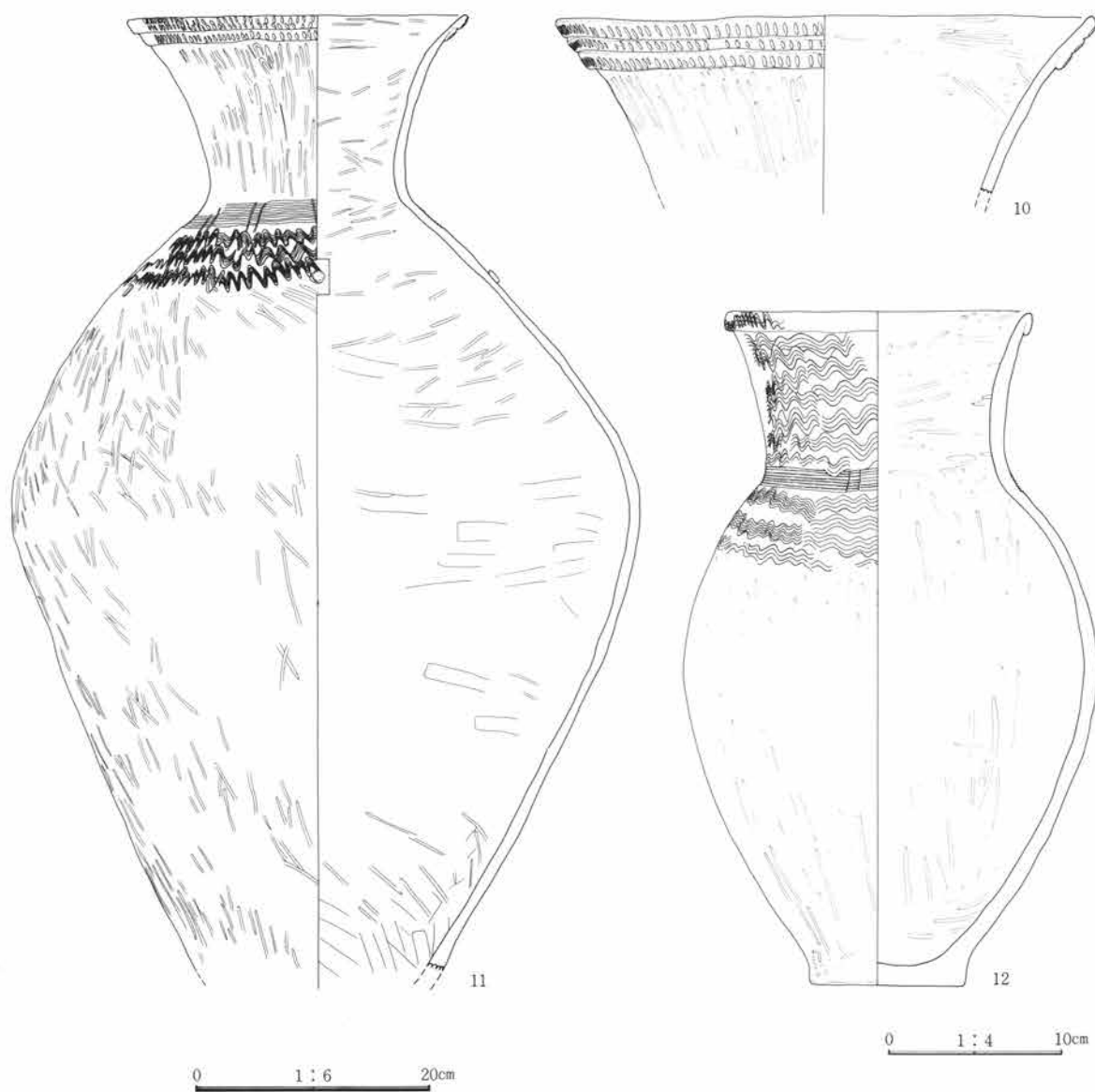
調査区域内の第IV層中、10数か所に拳大から頭大の礫が密集して検出されている。これら礫群の範囲は様々で、大方5～10mの広がりを見る。特にG区斜面部には川原状に広範囲に礫層が広がり、礫層上には土器破片が濃密に群在する。礫層は厚く第V層の基盤層にまで達している。一方礫群には住居の覆土を覆っていたり、22号墓の場合のように礫群の下から礫床墓が検出される例もある。

6 検出した遺構・遺物



第378図 土器群出土遺物(1)

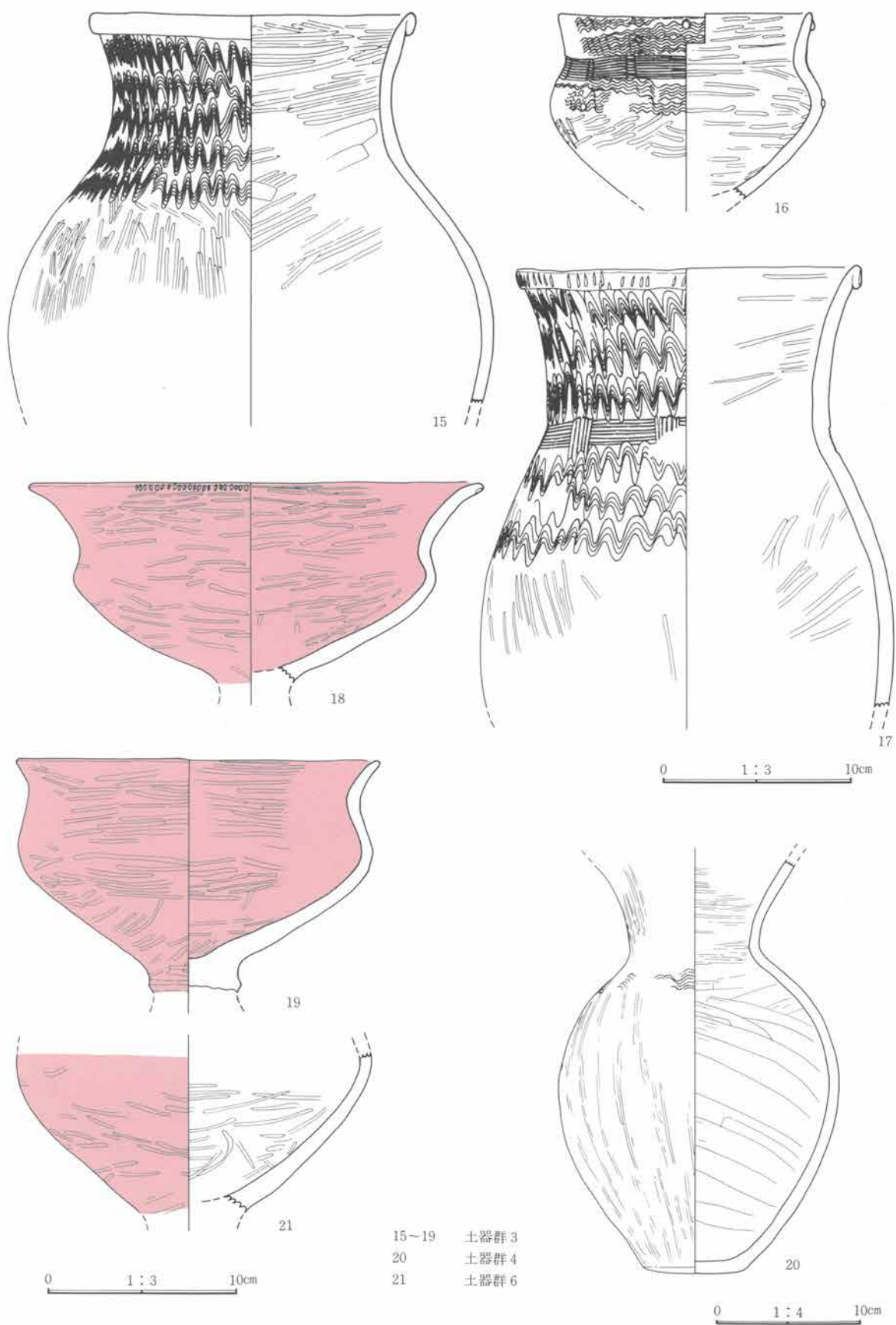
(10) 土器群、礫群、包含層出土遺物



10~14 土器群 3

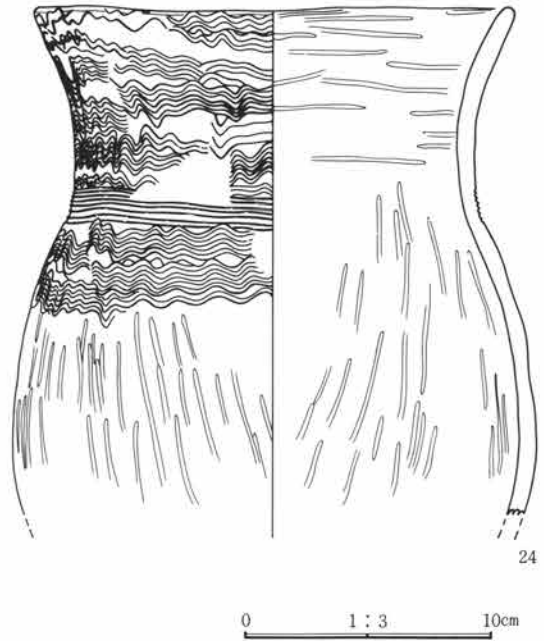
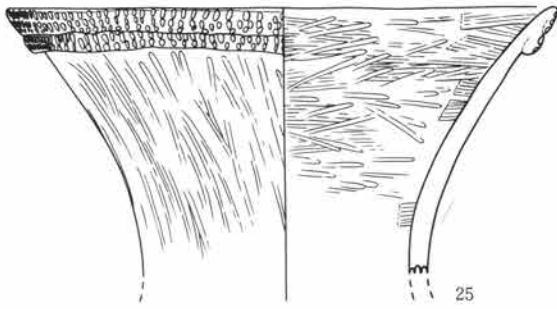
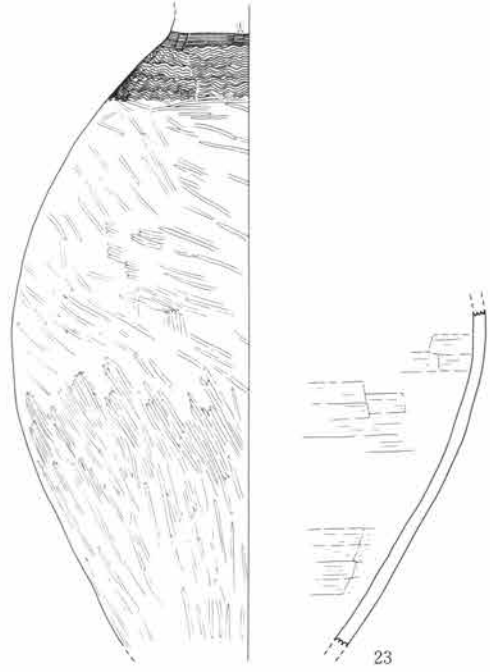
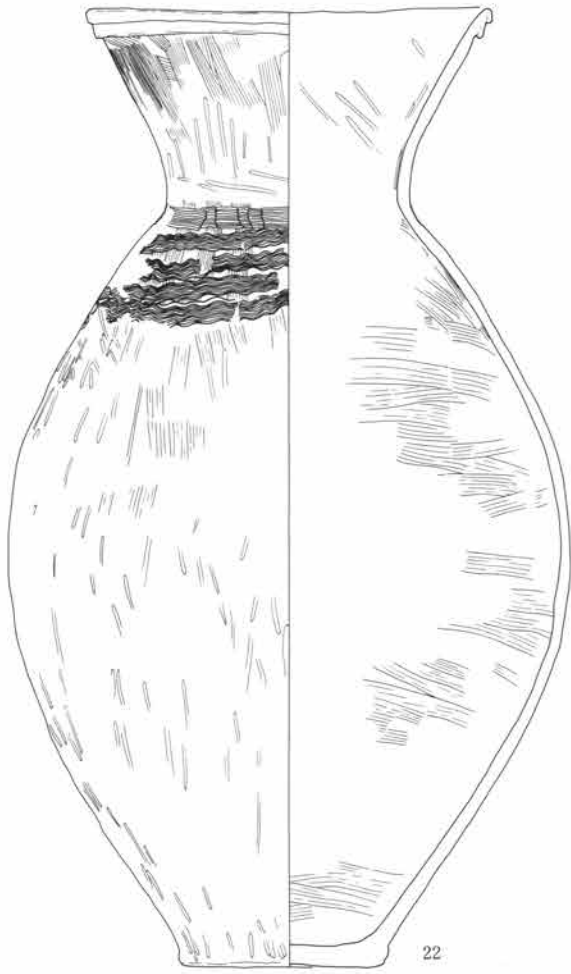
第379图 土器群出土遺物 (2)





第380図 土器群出土遺物(3)

(10) 土器群、礫群、包含層出土遺物

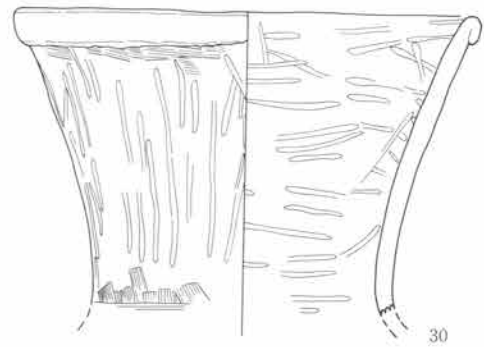
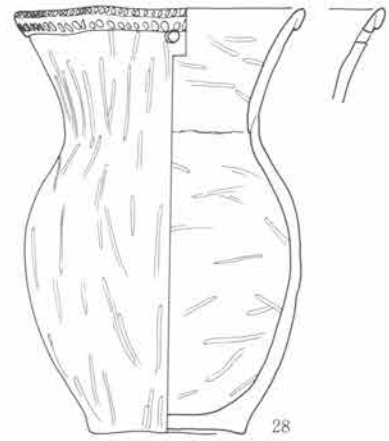
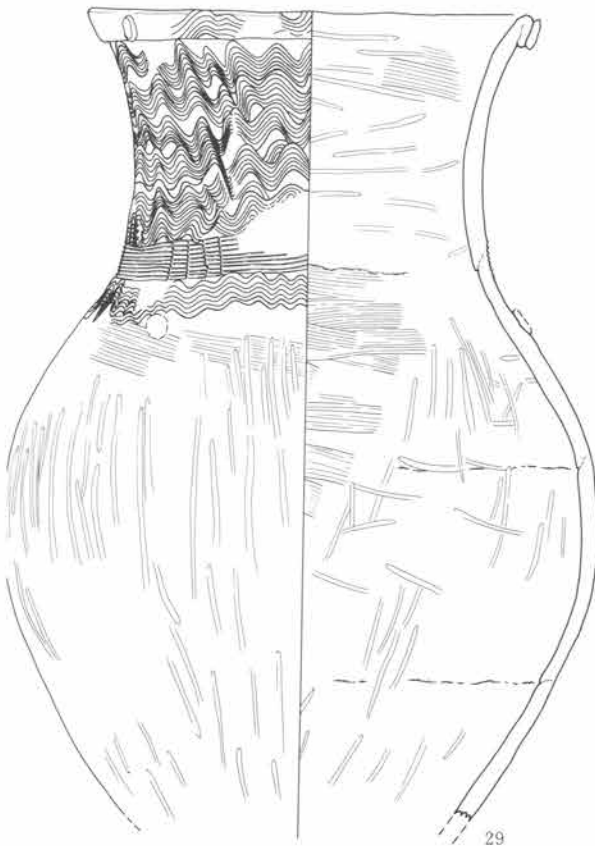
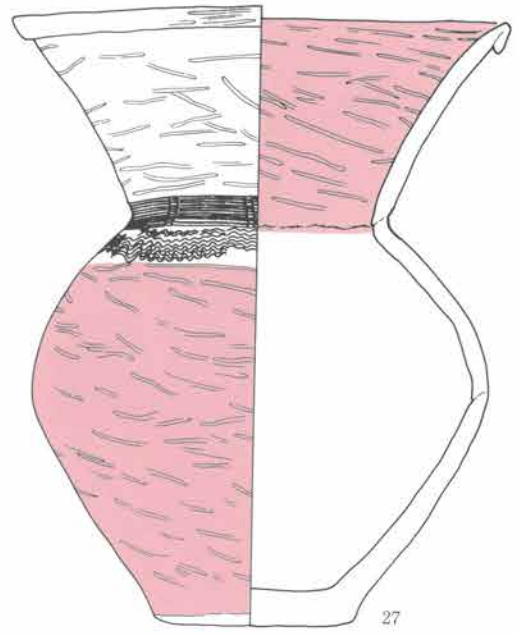
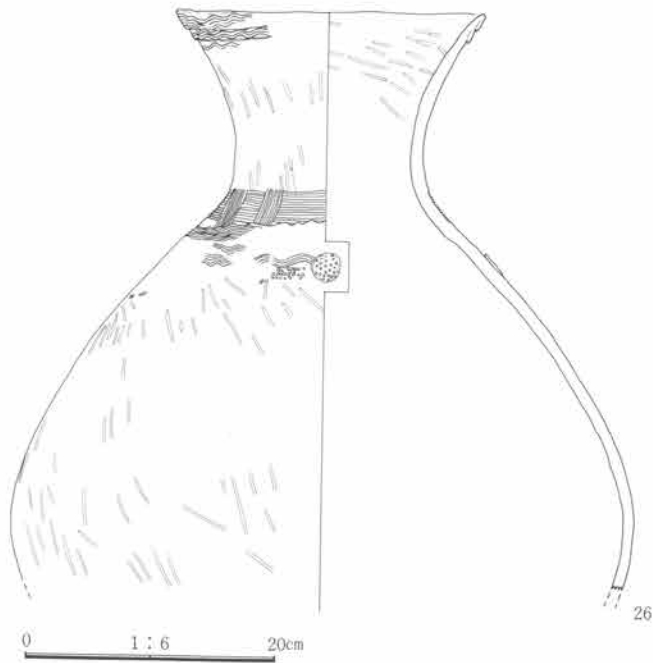


- 22、23 土器群 4
- 24 土器群 7
- 25 土器群 8

第381図 土器群出土遺物 (4)



6 検出した遺構・遺物



- 26 土器群7
- 27、28 土器群10
- 29、30 土器群12

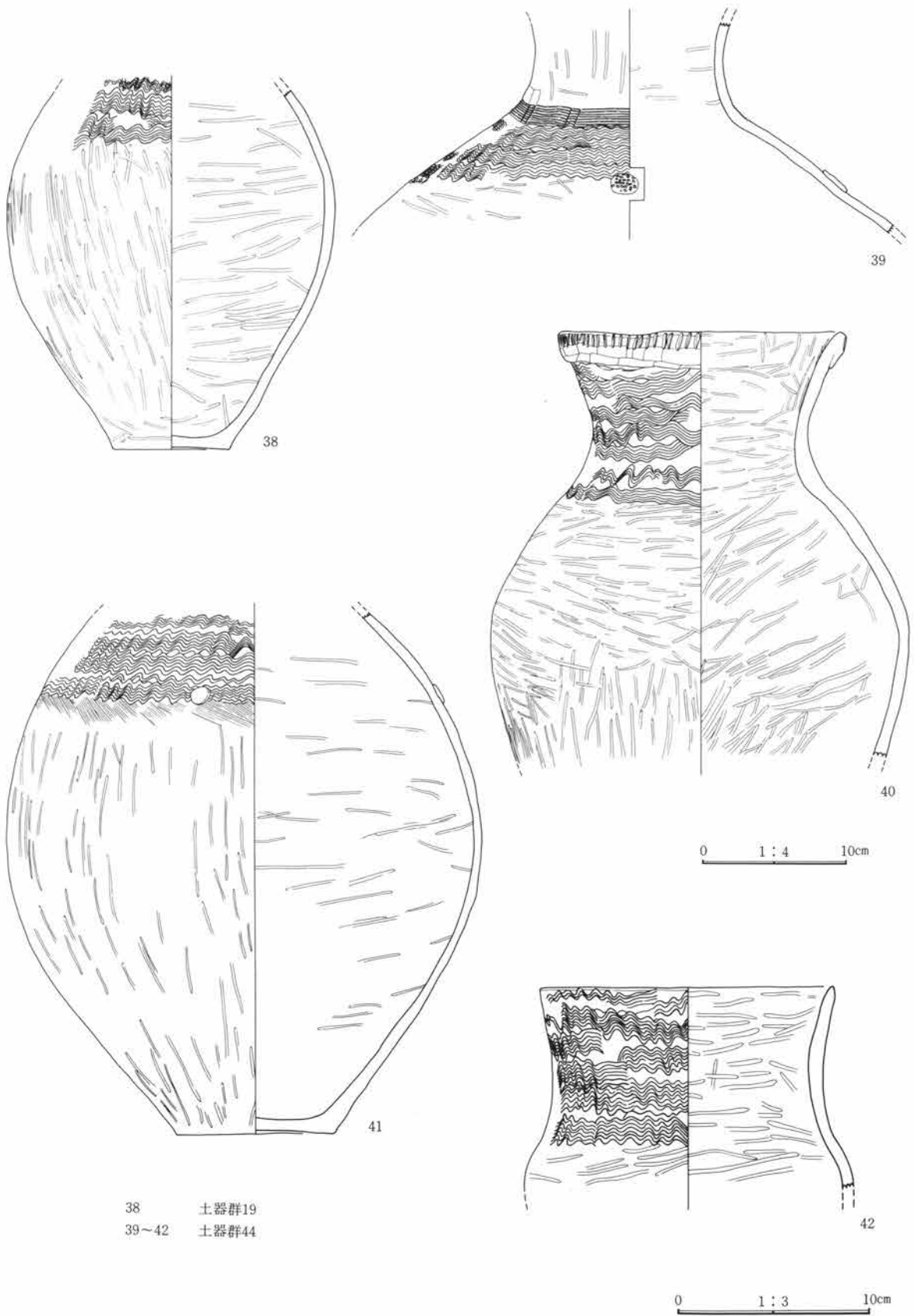
0 1:3 10cm

第382図 土器群出土遺物(5)



第383図 土器群出土遺物(6)

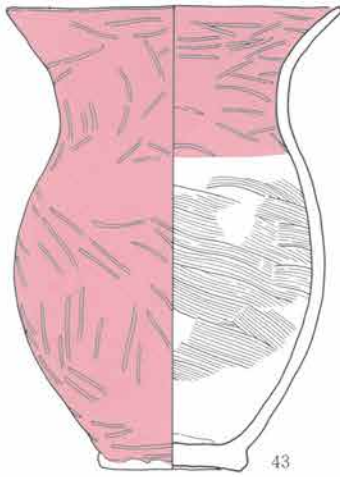
6 検出した遺構・遺物



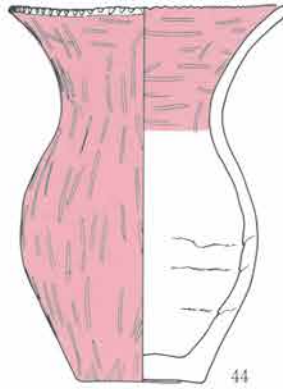
38 土器群19  
39~42 土器群44

第384図 土器群出土遺物(7)

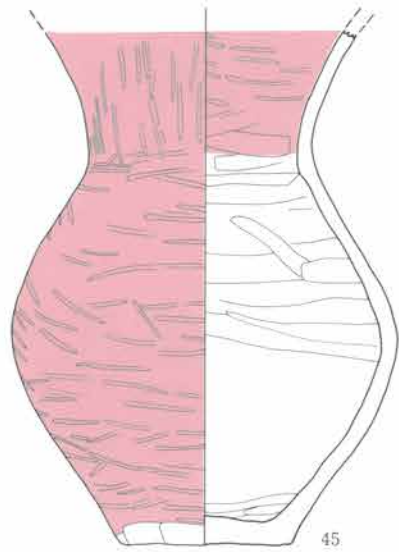
(10) 土器群、礫群、包含層出土遺物



43

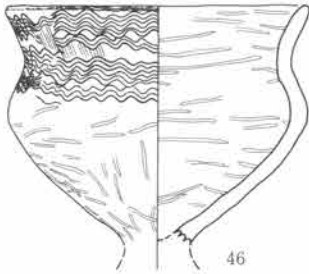


44

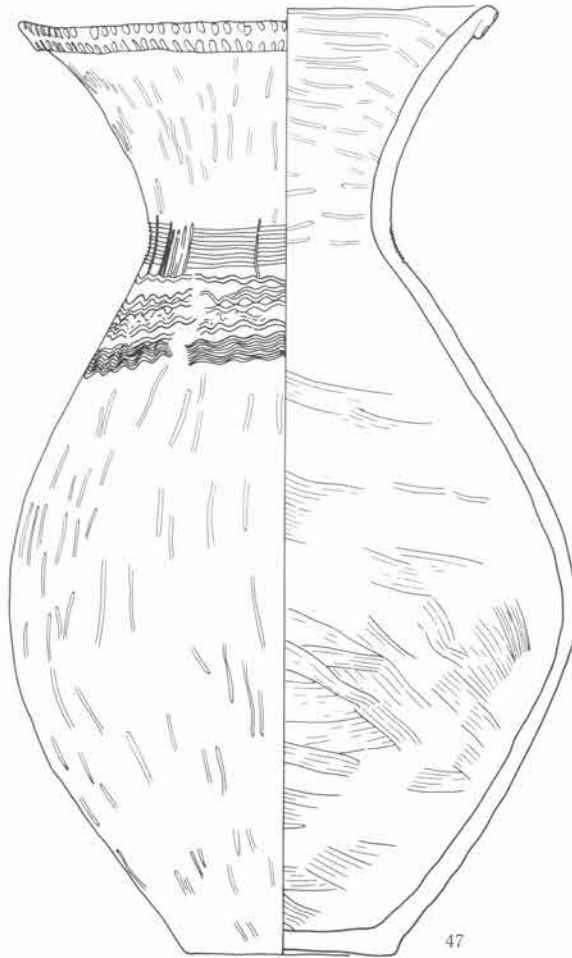


45

0 1:3 10cm



46



47

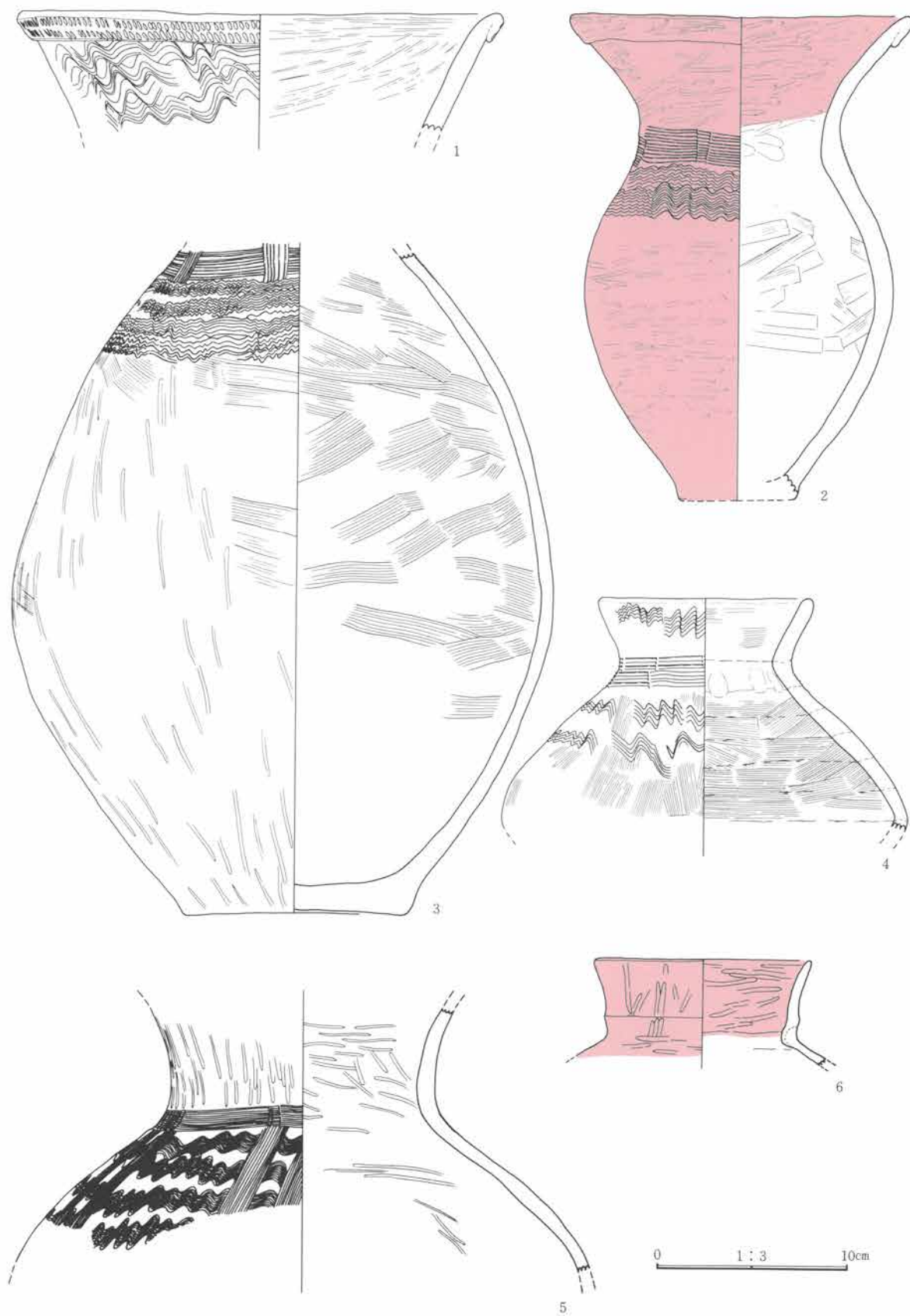
0 1:4 10cm

43~47 土器群47

第385図 土器群出土遺物(8)

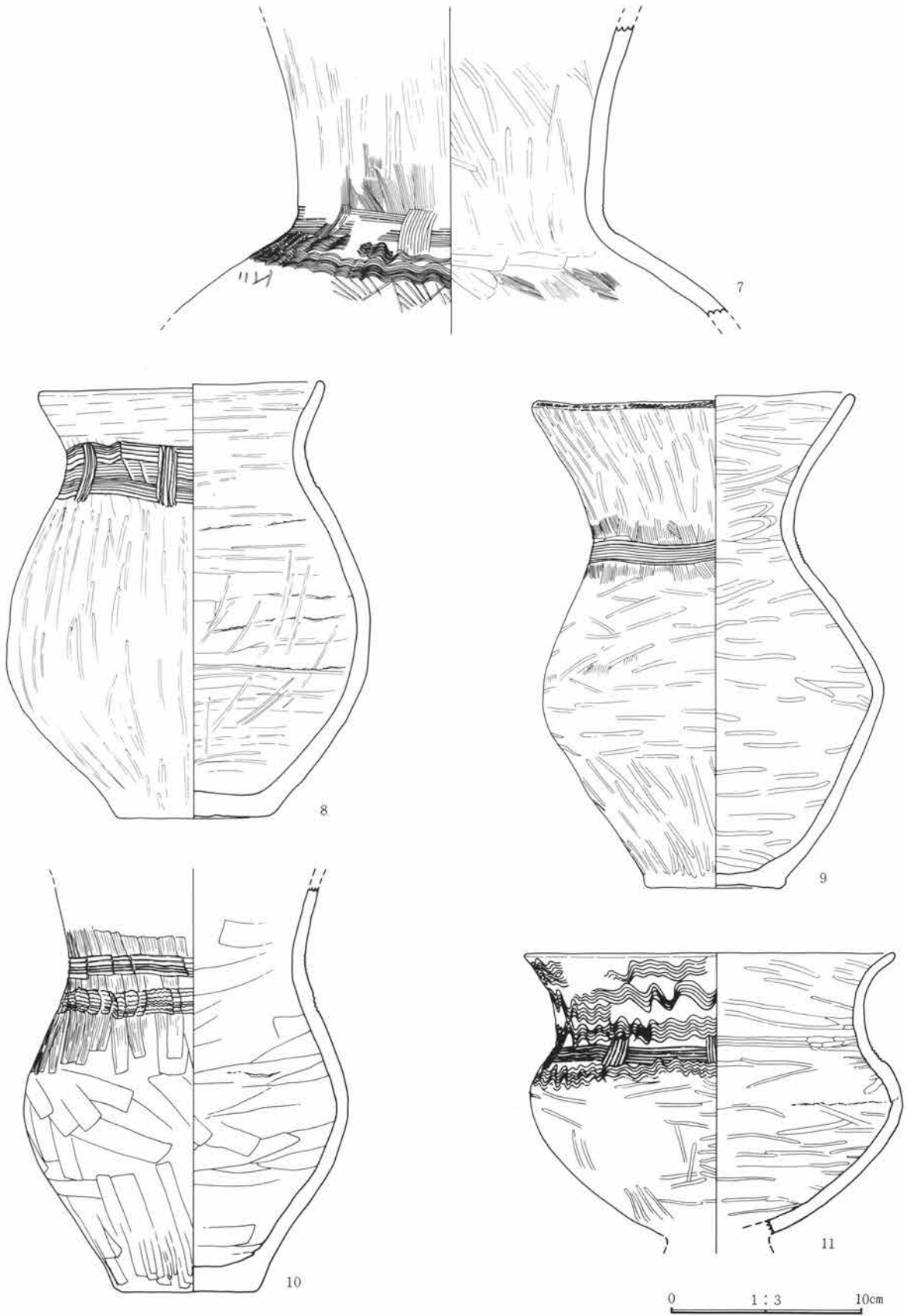


6 検出した遺構・遺物



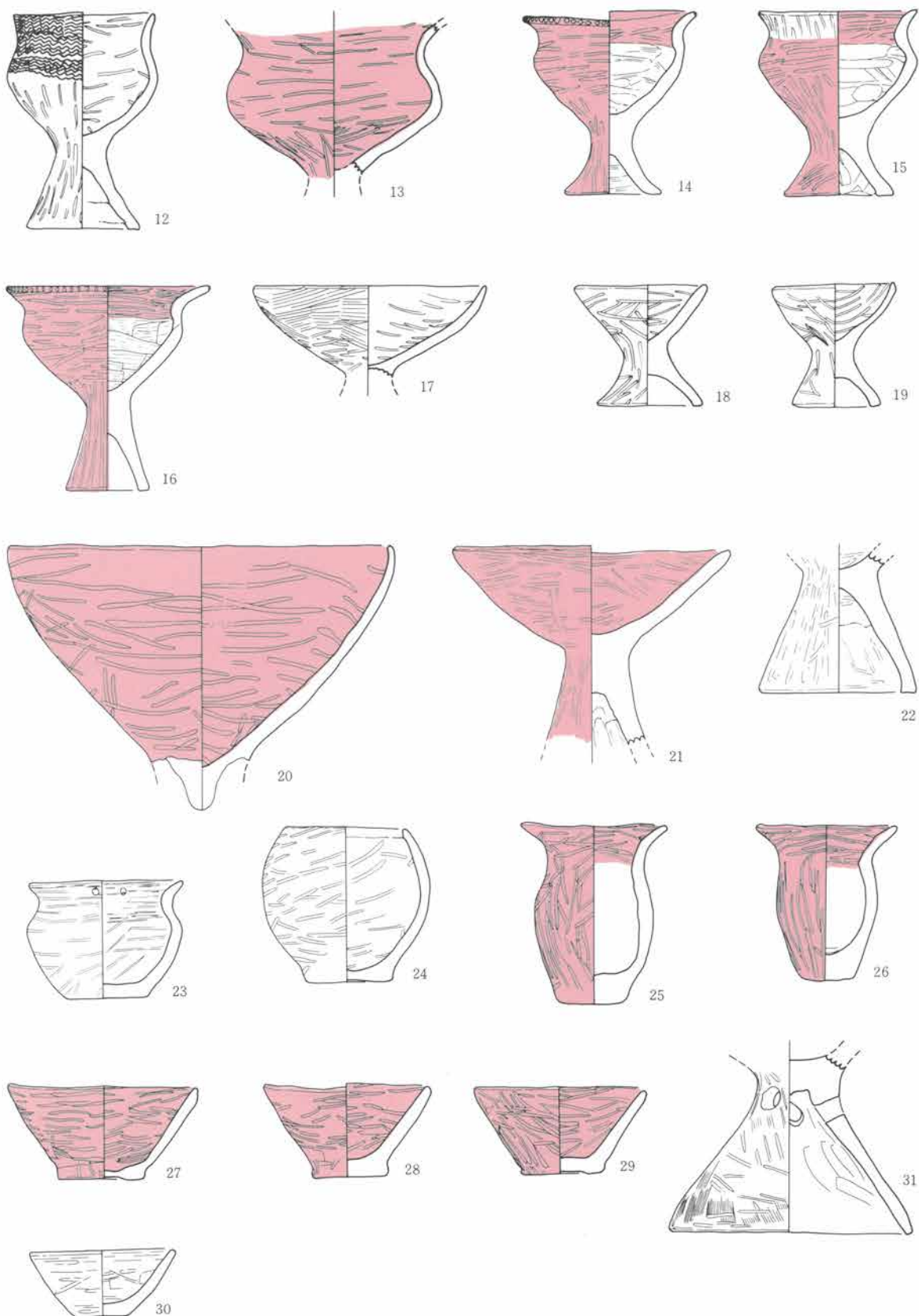
第386図 包含層出土遺物(1)

(10) 土器群、礫群、包含層出土遺物



第387図 包含層出土遺物(2)

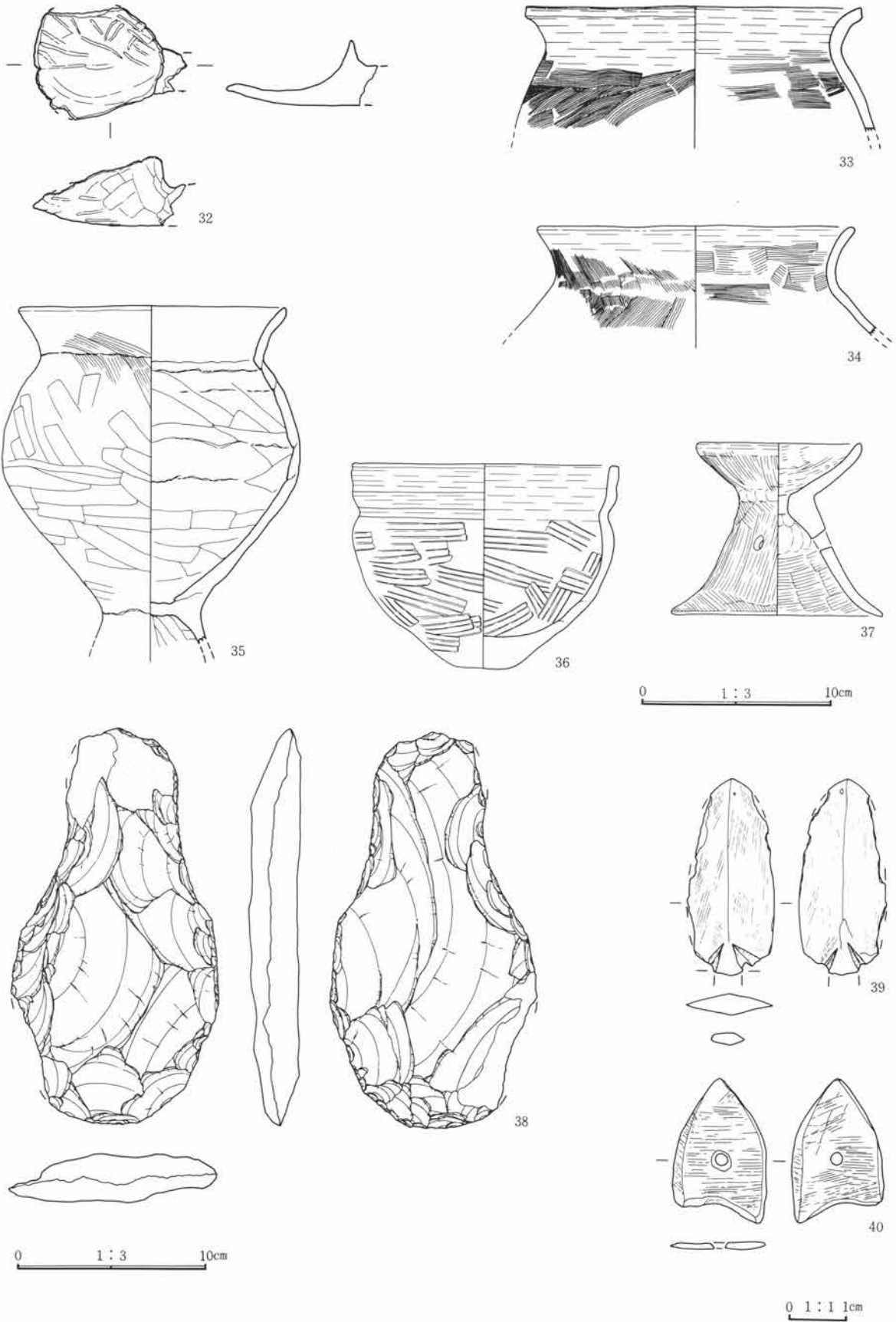
6 検出した遺構・遺物



第388図 包含層出土遺物(3)

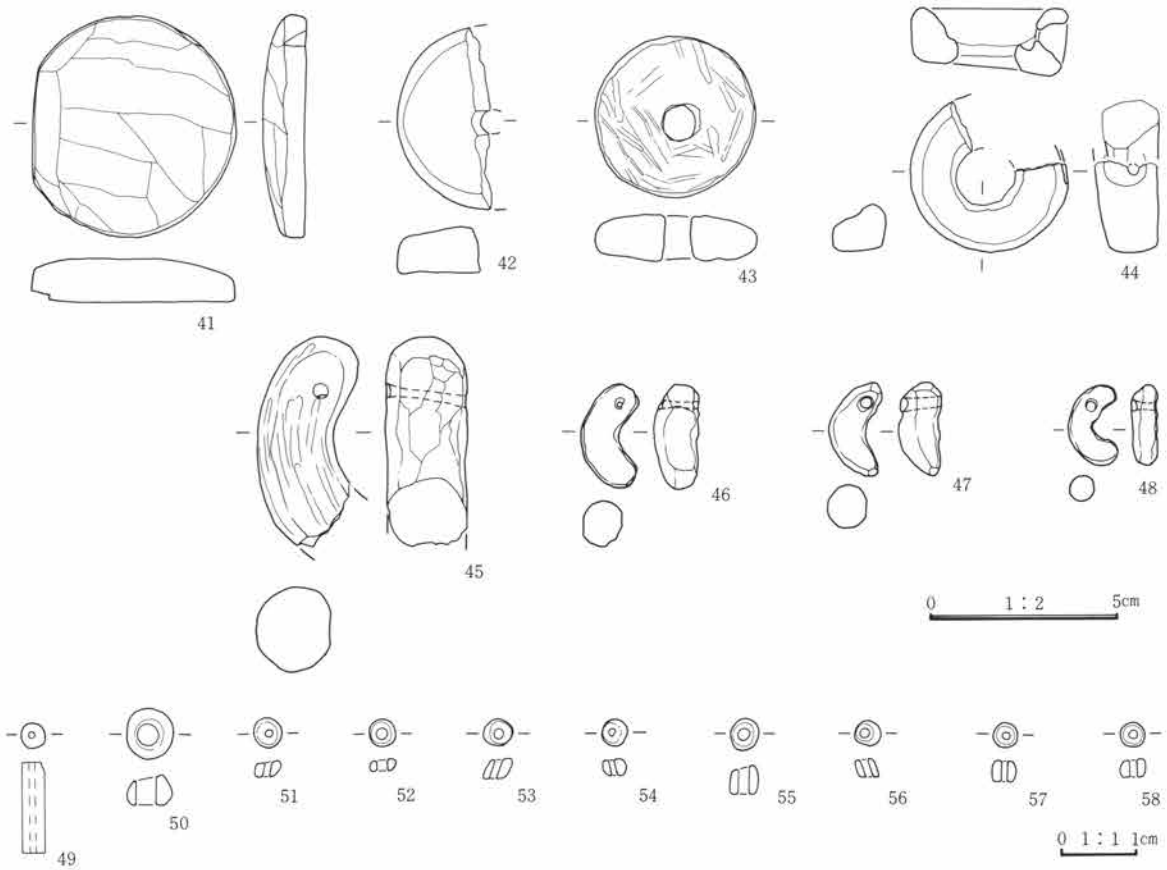


(10) 土器群、礫群、包含層出土遺物



第389図 包含層出土遺物(4)

6 検出した遺構・遺物



第390図 包含層出土遺物（5）

土器群出土土器観察表 PL.147~150

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 27.0	幅の広い折り返し口縁	外 口縁部は刺突文、頸部はハケメ後ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、淡黄色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
2	甕	口 14.7		外 口縁～肩部は櫛描波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 やや堅緻、黒褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
3	甕	口 14.3 高 7.1	底部に円孔を穿つ。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、灰白色	口縁部全周
4	小型壺	胴 5.8	器壁は比較的厚い。	外 ヘラミガキ、丹彩。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、以下ナデ、頸部丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	頸～胴部全周
5	甕	口 18.6	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は櫛描波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、明褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
6	高坏	口 22.0	坏部中央は強い稜線を作る。	外 口縁部は刻み目文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩
8	壺	口 12.4		外 ヘラミガキ、丹彩。 内 ヘラミガキ、口縁～頸部丹彩。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部全周
9	壺	口 21.3	折り返し口縁。	外 口縁部は2段のヘラ刻み目文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面丹彩
10	壺	口 30.7	3段口縁。	外 口縁3段の刻み目文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
11	壺	口 29.2 胴 53.6	2段口縁。	外 口縁部は2段のヘラ刻み目文、頸部は櫛描横直線に縦ヘラ描沈線を2条加える、肩部に付文。	砂粒、小礫を含む。 堅緻、橙色	口縁～胴下部 $\frac{1}{2}$ 周
12	甕	口 17.6 高 38.0	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒、小礫を含む。 やや堅緻、褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 胴部全周
13	甕	口 16.4	折り返し口縁。	外 口縁～肩部波状文、頸部は櫛描横直線に縦直線。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍暗褐色	口縁部全周

## (10) 土器群、礫群、包含層出土遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
14	甕(台付?)	口 21.0	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、頸部は櫛描縦直線に横直線。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周
15	甕	口 17.0	折り返し口縁。	外 口縁部は無文、口辺～肩は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍赤橙色	口縁部全周
16	台付甕	口 13.2		外 口縁～肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周
17	甕	口 18.0	折り返し口縁。	外 口縁部はヘラ刻み目文、口辺～肩部は櫛描横直線に縦直線。 内 ヘラミガキ。	砂粒、小礫を含む。 軟弱、明褐色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周
18	高 坏	口 23.8	坏部中位が屈曲する。	外 口縁部は刻み目が巡る、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部全周 内外面丹彩。
19	高 坏	口 19.0	脚部上端部に突帯を巡らす。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周 内外面丹彩
20	壺	胴底 19.5 7.4		外 ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、以下ヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	頸～胴部 $\frac{3}{4}$ 周
21	高 坏			外 ヘラミガキ、丹彩。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	坏部 $\frac{3}{4}$ 周
22	壺	口 32.8 高 75.4	2段口縁。	外 口縁部は無文、頸部は2～4連止め簾状文、肩部は波状文。 内 口縁～頸部ヘラミガキ、以下ハケメ。	砂粒小礫を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周
23	壺	胴 38.0		外 頸部は2連止め簾状文、肩部は波状文。 内 胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	頸～胴部 $\frac{3}{4}$ 周
24	甕	口 19.3		外 口縁～肩部は波状文、頸部は櫛描直線文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、黒褐色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周
25	壺	口 21.8	2段口縁。	外 口縁部はヘラ状具による押し引き文。 内 ハケメ後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部全周
26	壺	口 24.8	2段口縁。	外 口縁部は波状文、頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文、付文。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、器面荒れている。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周
27	壺	口 20.0 高 24.6	折り返し口縁。	外 頸部は2連止め簾状文、肩部は波状文、胴部丹彩。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、丹彩、以下ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、淡黄色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周 頸～底部全周
28	壺	口 11.7 高 16.8	折り返し口縁。 口縁部下に1孔穿つ。	外 口縁部は2段刻み目文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周 頸～底部 $\frac{3}{4}$ 周
29	甕	口 17.9 胴 23.9	折り返し口縁。	外 口縁～肩部は波状文、口縁部に付文、頸部は4連止め簾状文、以下ヘラミガキ。 内 ハケメ後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	口～胴下部 $\frac{3}{4}$ 周
30	甕	口 18.8	折り返し口縁。	外 頸部は櫛描直線か簾状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒、小礫を含む。 やや堅緻、鈍黄橙色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周
31	鉢	口 14.9 高 6.7		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部全周
32	壺		折り返し口縁。	外 頸部は櫛描直線か簾状文。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、丹彩。	砂粒、小礫を含む。 やや堅緻、淡黄色	口辺～頸部 $\frac{3}{4}$ 周
33	甕	口 17.5 胴 20.6		外 口縁部は刻み目文、口辺～肩部は波状文、頸部は3連止め簾状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒、小礫を含む。 やや堅緻、暗灰黄色	口縁～胴部全周
34	甕	口 24.0 高 36.6	折り返し口縁。	外 口縁は波状文、頸部2連止め簾状文、肩部は波状文。 内 ハケメ後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁～底部 $\frac{3}{4}$ 周
35	甕	口 14.9		外 口縁～肩部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁部全周
36	甕	口 10.1		外 口縁～肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、黒褐色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周
37	高 坏	口 22.0	坏部中位は強く屈曲する。	外 口縁部は刻み目文、以下ヘラミガキ、丹彩。 内 ヘラミガキ、丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 周
38	甕	胴 22.5		外 肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	胴部 $\frac{3}{4}$ 周
39	壺	頸 14.5		外 頸部は2連止め簾状文、肩部は波状文。 内 口辺～頸部はヘラミガキ、以下器面が荒れている。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	頸～肩部全周
40	甕	口 19.8 胴 28.7	折り返し口縁。	外 口縁部はヘラ刻み目文、折り返し部の下端にヘラナデ痕が目立つ、口辺～頸部は波状文。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、暗赤褐色	口縁部全周

6 検出した遺構・遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
41	甕	胴 32.6		外 肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	胴～底部 $\frac{1}{4}$ 周
42	甕	口 15.2		外 口縁～肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、灰白色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周
43	小型壺	口 13.5 高 18.4		外 ヘラミガキ、丹彩。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、丹彩、以下ハケメ。	砂粒、小礫を含む。 堅緻、赤色	口縁～底部 $\frac{1}{4}$ 周
44	小型壺	口 11.2 高 14.9		外 口縁端部は刻み目文、以下ヘラミガキ、丹彩。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、丹彩、以下ナデ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周
45	小型壺	胴 15.4		外 ヘラミガキ、丹彩。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、丹彩、以下ヘラナデ。	砂粒、小礫を含む。 堅緻、赤色	頸～底部 $\frac{1}{4}$ 周
46	台付甕	口 12.2		外 口縁～肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、暗褐色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周
47	壺	口 25.8 高 50.2	折り返し口縁。	外 口縁は2段の刻み目文、頸部は櫛描横直線に縦直線。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、胴部はハケメ。	砂粒、小礫を含む。	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周

土器群出土玉類観察表 PL.147

遺物番号	名称	長さ 厚さ	径	孔径	材質・色	備考
7	管玉	2.2	0.37	0.15	赤色ケイ質岩	研磨稜線あり

包含層出土土器観察表 PL.150・151

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 24.4	折り返し口縁。	外 口縁部は2段の刻み目文、口辺は波状文。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、暗褐色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周
2	壺	口 17.4 胴 15.9	折り返し口縁。	外 頸部は2連止め簾状文、肩部は波状文、丹彩。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、丹彩、以下ヘラナデ。	砂粒、小礫を含む。 堅緻、赤色	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 周
3	壺	胴 28.0		外 頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍黄橙色	胴～底部 $\frac{1}{4}$ 周
4	壺	口 11.1 頸 9.3	頸部に指オサエ痕を巡らす。	外 口縁部は波状文、頸部は2段の簾状文、肩部は波状文。 内 ハケメ。	砂粒を含む。 やや堅緻、淡橙色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周 肩部全周
5	壺			外 頸部は2連止め簾状文、肩部は波状文の後2条1単位の櫛描縦直線を垂下する。	砂粒を含む。 堅緻、鈍赤褐色	頸～肩部 $\frac{1}{4}$ 周
6	壺	口 11.0	口辺部に段を作る。	外 ヘラミガキ、丹彩。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周
7	壺	頸 15.3		外 頸部は櫛描横直線に縦直線、肩部は波状文、沈線鋸歯文、以下ヘラミガキ。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、頸部はヘラナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	口辺～肩部全周
8	甕	口 14.3 高 22.3		外 頸部は櫛描横直線3段に縦直線、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、淡黄色	口縁～底部 $\frac{1}{4}$ 周
9	甕	口 16.7 高 25.3		外 口縁端部は波状文、頸部は櫛描横直線。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	口縁～底部 $\frac{1}{4}$ 周
10	甕	胴 16.8 底 7.5		外 頸部等間隔止め簾状文、肩部は簾状文風の波状文。 内 ヘラナデ。	砂粒を含む。 やや堅緻、褐色	頸～底部 $\frac{1}{4}$ 周
11	台付甕	口 19.1 胴 19.2		外 口縁～肩部は波状文、頸部は櫛描横直線に縦直線。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 やや堅緻、鈍橙色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周
12	台付甕	口 7.2 高 10.9		外 口縁～肩部は波状文、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	ほぼ完形
13	高坏	胴 11.0		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	胴部 $\frac{1}{4}$ 周 内外面丹彩
14	高坏	口 8.6 高 8.9		外 口縁端部は刻み目、以下ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	ほぼ完形 内外面丹彩
15	高坏	口 8.0 高 9.2		外 ヘラミガキ、丹彩。 内 ヘラミガキ、口縁～頸部丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周 脚部全周
16	高坏	口 10.4 高 10.0		外 口縁端部は刻み目、以下ヘラミガキ、丹彩。 内 ヘラミガキ、口縁～頸部丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	ほぼ完形

## (10) 土器群、礫群、包含層出土遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
17	高 坏	口 11.8		外 ハケメ後ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部全周
18	高 坏	口 6.8 高 6.1		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	口縁部全周
19	高 坏	口 6.3 高 6.2		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、鈍橙色	ほぼ完形
20	高 坏	口 19.8	脚部との接合部に 剝離面あり。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部全周 内外面丹彩
21	高 坏	口 14.0		外 ヘラミガキ、丹彩。 内 ヘラミガキ、丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部全周 脚部1/2周
22	高 坏	脚 8.0		外 ヘラミガキ。 内 ナデ。	粗砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	脚部全周
23	鉢	口 7.6 高 6.0	口縁部に小孔を2 個穿つ。	外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	粗砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	ほぼ完形
24	鉢	口 6.1 高 7.8		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、灰黄色	口縁部1/4周
25	小型 壺	口 7.5 高 9.0		外 ヘラミガキ、丹彩。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部全周
26	小型 壺	口 7.2 高 7.8		外 ヘラミガキ、丹彩。 内 口縁～頸部はヘラミガキ、丹彩。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部全周
27	鉢	口 9.7 高 4.6		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部全周 内外面丹彩
28	鉢	口 8.5 高 4.8		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	口縁部全周 内外面丹彩
29	鉢	口 8.7 高 4.4		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	砂粒を含む。 堅緻、赤色	ほぼ完形 内外面丹彩
30	鉢	口 7.3 高 3.3		外 ヘラミガキ。 内 ヘラミガキ。	細砂粒を含む。 堅緻、赤褐色	完形
31	高 坏	脚 12.4	脚下部はやや内湾 する。孔は4個。	外 ハケメ後ヘラミガキ。 内 ヘラナデ。	細砂粒を含む。 堅緻、灰白色	脚部全周
32	さ じ	長さ 8.0(+) 幅 5.4(+)		外 ナデ。 内 ナデ。	砂粒を含む。 やや堅緻、暗褐色	側縁部と柄部を 欠く
33	甕	口 17.3	口縁端部は角ばり 面を作る。	外 口縁部はヨコナデ、以下ハケメ。 内 口縁部はヨコナデ、以下ハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、淡黄橙色	口縁部1/4周
34	甕	口 16.2		外 口縁部はヨコナデ、以下ハケメ。 内 口縁部はヨコナデ、以下ハケメ。	粗砂粒を含む。 堅緻、橙色	口縁部1/4周
35	台付 甕	口 14.0 胴 15.6		外 胴部はハケメ、ヘラナデ。 内 胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。 軟弱、褐灰色	口縁～脚部1/2周
36	甕	口 14.0 高 10.3	頸部はくびれ口縁 は直立する。	外 口縁はヨコナデ、胴部は粗いハケメ。 内 口縁はヨコナデ、胴部は粗いハケメ。	粗砂粒を含む。 やや堅緻、黄灰色	完形
37	器 台	器受 8.7 高 8.9	脚部に円孔3個穿 つ。	外 ハケメ。 内 器受部はヘラミガキ、脚部はハケメ。	砂粒を含む。 堅緻、橙色	器受～底部1/4周

包含層出土石器観察表 PL.151

遺物番号	器種	計測値(縦×横×厚さ)	石質	重量(g)	特 徴
38	土掘り具	20.6×10.9×2.7	黒色安山岩	59.5	横長の大形薄片を両面剝離調整する。片面基部に自然面を残す。周縁部を剝離整形している。
40	磨製石鏃	2.5×1.8×0.15	ケイ質頁岩	0.7	基部は欠損はないが、対称を欠く。周縁部は研磨されている。円孔を作っている。

6 検出した遺構・遺物

包含層出土銅鉄観察表 PL. 151

遺物番号	器種	計測値(縦×横×厚さ)	材質	重量(g)	特徴
39	銅鉄	3.4(+) $\times$ 1.5 $\times$ 1.35	銅製	4.6	木の葉状を呈し、鋳は両面に明瞭に認められ、断面は薄変形をなす。基部は研磨溝を作り、茎を作出する。

包含層出土石・土製品観察表 PL. 151

遺物番号	名称	径	厚さ	形状、成形、整形	色調	材質	備考
41	石製円盤	5.5	1.1	円形を呈する。周縁部には面を作る。片面は平坦。他面は凸面をなす。研磨面の稜線は明瞭。	灰白色	流文岩質凝灰岩	完形
42	紡錘車	4.8	1.2	円形を呈する。周縁部はやや角ばる。全体にヘラミガキを施す。	明赤褐色	土製	半欠品
43	紡錘車	4.3	1.2	円形を呈する。円孔は径0.9cm周縁部は丸みがある。全面ヘラミガキを施す。	鈍黄橙色	土製	完形
44	リング状製品	4.2	1.7	外周縁部、内周縁部ともに明瞭な稜線を作っている。外縁部に一か所V字状の小穴を穿つ。器面は平滑。	鈍黄橙色	流文岩質凝灰岩	欠損

包含層出土土製品観察表 PL. 151

遺物番号	名称	長さ	幅	厚さ	孔径	形状、成形、整形	色調	遺存状態
45	土製勾玉		2.0	2.2	0.4	断面は円形、全体に丁寧な研磨を施す。	赤褐色	尾部欠損
46	土製勾玉	2.8	1.0	1.2	0.25	断面は円形、全体に粗いナデを施す。	鈍橙色	完形
47	土製勾玉	2.5	1.0	1.2	0.4	断面は円形、全体に粗いヘラミガキを施す。	黄橙色	完形
48	土製勾玉	2.1	0.7	0.7	0.3	断面は円形、全体に粗いナデを施す。	橙色	完形

包含層出土玉類観察表 PL. 151

遺物番号	名称	長さ	厚さ	径	孔径	材質・色	備考	遺物番号	名称	長さ	厚さ	径	孔径	材質・色	備考
49	管玉	1.2	0.28	0.03		赤色ケイ質岩	研磨稜線なし	54	小玉	0.2	0.35	0.1		ガラス、カイブルー	孔縁研磨
50	小玉	0.4	0.65	0.3		蛇文岩類、緑色		55	小玉	0.4	0.4	0.15		ガラス、スカイブルー	孔縁研磨
51	小玉	0.2	0.4	0.1		ガラス、スカイブルー	孔縁研磨	56	小玉	0.3	0.25	0.12		ガラス、スカイブルー	
52	小玉	0.15	0.4	0.15		ガラス、スカイブルー		57	小玉	0.3	0.3	0.09		ガラス、スカイブルー	
53	小玉	0.3	0.35	0.1		ガラス、コバルトブルー		58	小玉	0.25	0.35	0.1		ガラス、スカイブルー	



## 7 鑑定分析

### (1) 有馬遺跡出土の弥生時代後期の人骨について

森 本 岩太郎

吉 田 俊 爾

#### I はじめに

この人骨は昭和57年1月～59年1月の(勲)群馬県埋蔵文化財調査事業団による渋川市八木原所在の有馬遺跡発掘調査により発見されたもので、弥生時代後期に属する成人骨28体、小児人骨(若年も含む)16体、年齢不詳人骨9体、合計53個体分である。人骨は同事業団調査担当者らによって取り上げられ、後日鑑定のため筆者のもとへ届けられた。ここに、その鑑定結果を報告する。

なお、以上の人骨のほかはこの有馬遺跡からは古代末・中世の人骨が10個体分出土している(別報)。

#### II 人骨の出土状態と保存状態

人骨の出土状態は、関係者の話や出土図からおおむね2型に分類できる。それは(1)小礫を敷きつめた礫床墓から出土したもの、(2)土器棺に入れられて出土したもの、埋葬様式不明のものである。(1)については、SK426号人骨が東頭位左側臥屈葬であるが、その他の場合は人骨の保存状態が悪いので、埋葬姿勢は確認できない。また、(2)に関連しては土器棺に屈葬の状態に入っているのは全て乳幼児の人骨である。

人骨の保存状態は極めて不良で、内・外面から腐食が進みほとんど崩壊している。したがって人骨量は少なく、辛うじて頭蓋片、遊離歯、および上・下肢の長骨体片などが残っているにすぎない。

#### III 人骨所見

人骨は前述したように保存状態が極めて不良で、そのためパラフィンで土と一緒に固定し、土塊とともに取り上げてある。土塊と人骨を分離することが困難なのでそのまま可能な限り観察した。しかし、歯については土塊と分離し破片となったものでもできるだけ復元に努めた。したがって所見の中心は歯についてであり、各個体の性別すらよく分からない。歯はほとんどが歯槽から遊離したものである。なお、歯の種別についてはアラビア数字を用いて永久歯を、アルファベットの大文字で乳歯を示した。×印は欠損または破片のため状況不明のことを、( )内は未萌出歯を表す。また、歯や骨の破片については細かすぎて数量化できない場合が多々あることをあらかじめ断っておく。以下、判明した範囲内で所見を述べる。

##### (1) SK29号人骨 (PL. 153)

以下に示す遊離歯だけである。

8 7 6 5 4 × × ×	× × × 4 5 6 7 8
× 7 6 × × × × ×	× × × 4 5 6 7 8

咬耗度は Martin の第1～2度である。壮年期のものと思われる。性別は不詳。

##### (2) SK31号人骨 (PL. 154)

所属部位不明の長骨片と遊離歯である。遊離歯は次のとおりである。

7 鑑定分析

× 7 × 5 × × × ×	× × 3 4 5 × 7 ×
8 7 × 5 4 3 2 ×	× × 3 4 5 6 7 8

咬耗度歯 Martin の第1度である。

長骨片の形状から女性の可能性が高いがよく分からない。年齢は壮年期と思われる。

(3) S K45号人骨

歯種の鑑別不可能な永久歯の破片1個と左右不明の大腿骨体上部の破片があるだけで、詳しいことは分からない。

(4) S K54号人骨 (PL. 153)

以下に示す遊離歯だけである。

× 7 6 5 4 × × 1	1 × × × × 6 7 ×
× × × 5 4 × × ×	× × × 4 5 6 7 ×

咬耗度は Martin の第1度である。おそらく壮年期のものであろう。性別は不詳。

(5) S K63号人骨 (PL. 154)

頭蓋冠片と左右不明の脛骨片および以下に示す遊離歯が残っている。

8 × 6 × 4 × × 1	1 × × 4 5 6 7 ×
× 7 6 5 4 × × ×	× × × 4 5 6 7 ×

咬耗度は Martin の第1度である。頭蓋冠、脛骨の状況から壮年期の男性である可能性が高い。

(6) S K70号人骨 (PL. 155)

土器棺に埋葬された幼児の頭頂骨片・左右の側頭骨錐体片および遊離歯  $\overline{C}A \overline{B}D \cdot \overline{E}$  である。年齢は1歳前後と思われる。

(7) S K76号人骨

歯の細片だけなので何も分からない。

(8) S K83号人骨

以下に示す遊離永久歯だけである。

8 7 6 5 4 × × ×	× × × × 5 6 × ×
8 7 6 5 × × × ×	× × × 4 5 6 7 8

咬耗度は Martin の第1度である。壮年期のものであろう。性別は不詳。

(9) S K84号人骨

左右・順位不明の大白歯片と所属部位不明の小骨片1個がある。大白歯片の咬耗度は Martin の第1度である。成人のものと思われるが、詳しいことは分からない。性別は不詳。

(10) S K85号人骨

$\overline{7}$  と左右・順位不明の上顎小白歯片だけで、その咬耗度は Martin の第1度である。成人の可能性が高い。性別は不詳。

(11) S K109号人骨

遊離歯  $\overline{7} \cdot \overline{7}$  だけで、咬耗は認められない。歯冠の完成度からみて8~12歳の小児と思われる。

(12) S K111号人骨

永久歯の小破片であるが歯種の鑑別すらできない。

(13) S K115号人骨

(1) 有馬遺跡出土の弥生時代後期の人骨について

頭蓋片と上・下肢骨片および遊離歯  $\overline{4\ 5\ 6}$  である。遊離歯の咬耗度は Martin の第 1 度である。おそらく成人のものであろう。性別は不詳。

(14) S K116号人骨

若干の長骨片と遊離歯  $\overline{7} \cdot \overline{(8)7} \mid \overline{5\ 6\ 7(8)}$  が残っている。咬耗度は  $\overline{(8)} \mid \overline{(8)}$  以外が Martin の第 1 度である。 $\overline{(8)} \mid \overline{(8)}$  が未萌出なので青年期の可能性が高い。

(15) S K119号人骨

土器棺に埋葬されたわずかな骨片と以下に示す遊離歯である。

$$\begin{array}{c|c} (7)(6)(3) \times (1) \times D & \times \times (1)(2) \times (6) \\ \hline \times (6)(3)(2)(1) E D & \times E (1)(2)(3) \times \end{array}$$

$\overline{D} \cdot \overline{D}$  にはわずかに咬耗が認められる。4 歳前後の幼児とおもわれる。

(16) S K127号人骨

土器棺に埋葬された人骨で、小さな骨片 9 個と遊離歯  $\overline{A} \cdot \overline{A}$  が主なものである。3～4 歳の幼児と思われる。

(17) S K128号人骨

所属部位不明の長骨片と、以下に示す遊離歯がある。

$$\begin{array}{c|c} 8\ 7\ 6\ 5 \times \times \times \times & \times \times \times \times 5\ 6\ 7\ \times \\ \hline 8\ 7\ 6 \times 4 \times \times \times & \times \times \times \times 5\ 6 \times \times \end{array}$$

咬耗度は全般に Martin の第 1 度である。壮年期のものと思われる。性別は不詳。

(18) S K131号人骨

遊離歯  $\overline{4}$  があるだけで、その咬耗は極めてわずかである。小児の可能性が高い。

(19) S K132号人骨

残っているのは左右の大腿骨体片と脛骨体片と思われる。おそらく成人のものであろう。性別は不詳。

(20) S K133号人骨

下肢の長骨片と、以下に示す遊離歯である。

$$\begin{array}{c|c} 8\ 7 \times \times \times \times \times \times & \times \times \times \times \times 6\ 7\ 8 \\ \hline \times 7\ 6 \times \times \times \times \times & \times \times \times 4\ 5\ 6\ 7\ \times \end{array}$$

$\overline{8} \mid \overline{8}$  には咬耗が見られないが、ほかの歯は Martin の第 1 度である。おそらく青年期のものであろう。

(21) S K134号人骨

上・下肢の長骨片であるが、成人のものと思われる。性別は不詳。

(22) S K135号人骨

部位不明の骨片と遊離歯  $\overline{(6)(3)(1)D} \mid \overline{(1)(2)(6)}$  である。4 歳前後の小児と思われる。

(23) S K137号人骨

長骨片が 1 個だけなので何も分からない。

(24) S K138号人骨

部位不明の骨片が 3 個ある。詳しいことは分からない。

(25) S K140号人骨

部位不明の長骨片が 1 個だけある。詳細は不明である。

(26) S K142号人骨

7 鑑定分析

部位不明の骨片が若干と遊離歯  $\overline{567} \cdot \overline{54} \mid \overline{467}$  が残っている。咬耗度は Martin の第1～2度である。壮年期のものであろう。性別は不詳。

(27) SK367号人骨 (PL. 155)

土器棺に埋葬されてある。遊離歯  $\overline{(6)} \cdot \overline{(6)E} \mid \overline{E}$  だけが残っている。 $\overline{E} \mid \overline{E}$  にはわずかながら咬耗がある。3歳前後の幼児と思われる。

(28) SK370号人骨

土器棺に埋葬されてある。幼児の歯の破片と思われるが、詳しいことは分からない。

(29) SK387号人骨

以下に示す遊離歯だけが残っている。

$$\frac{\begin{array}{c} \times 76543 \times \times \times \mid \times \times \times \times \times 67 \times \\ \times 76 \times \times \times \times \times \mid \times \times \times \times 567 \times \end{array}}{\times 76543 \times \times \times \mid \times \times \times \times \times 67 \times}$$

咬耗度は  $\overline{6} \mid \overline{6} \cdot \overline{6} \mid \overline{6}$  が Martin の第2度、他が同第1度である。壮年期のものであろう。性別は不詳。

(30) SK390号人骨

遊離歯  $\overline{76(4)} \mid \overline{6} \cdot \overline{76E} \mid \overline{(5)67}$  だけである。 $\overline{6} \mid \overline{6} \cdot \overline{6} \mid \overline{6}$  の咬耗度は Martin の第1度である。 $\overline{7}$  にもわずかに咬耗が認められる。11歳前後の小児と思われる。

(31) SK391号人骨

上顎骨歯槽突起を含む頭蓋片と遊離歯である。遊離歯の状況を以下に示す。

$$\frac{\begin{array}{c} 8765 \times \times \times \times \times \mid \times \times \times 45 \times \times 8 \\ 87654 \times \times \times \times \mid \times \times 3 \times 5678 \end{array}}{87654 \times \times \times \times \times \mid \times \times \times 45 \times \times 8}$$

咬耗度は Martin 第1度である。壮年期のものであろう。性別は不詳。

(32) SK401号人骨

下肢の長骨片と遊離歯  $\overline{75} \mid \overline{7} \cdot \overline{76} \mid \overline{6}$  である。咬耗度は Martin の第1度である。壮年期のものと思われる。性別は不詳。

(33) SK402号人骨 (PL. 153)

残っているのは以下に示す遊離歯だけである。

$$\frac{\begin{array}{c} 87 \times \times \times \times \times \times \times \mid \times \times \times 4567 \times \\ 876 \times \times \times \times \times \times \mid \times \times \times \times 5678 \end{array}}{876 \times \times \times \times \times \times \times \mid \times \times \times \times 5678}$$

咬耗度は Martin の第1度である。壮年期のものと思われる。性別は不詳。

(34) SK408号人骨

残っているのは遊離歯  $\overline{67}$  だけである。咬耗度は  $\overline{6}$  が Martin の第2度、 $\overline{7}$  が同第1度である。おそらく壮年期のものであろう。性別は不詳。

(35) SK410号人骨 (PL. 153)

以下に示す遊離歯だけである。

$$\frac{\begin{array}{c} 87654 \times \times 1 \mid 1 \times 34567 \times \\ 87654 \times \times \times \times \mid \times \times \times 4 \times 678 \end{array}}{87654 \times \times \times \times \mid \times \times \times 4 \times 678}$$

咬耗度は全般に Martin の第1度である。壮年期のものであろう。性別は不詳。

(36) SK412号人骨

遊離歯  $\overline{4} \cdot \overline{6} \mid \overline{78}$  が残っている。咬耗度は  $\overline{6}$  が Martin の第1度である。咬耗は  $\overline{4} \cdot \overline{7}$  にもわず

(1) 有馬遺跡出土の弥生時代後期の人骨について

かに認められるが、 $\overline{8}$  にはない。12歳前後の小児であろうか。

(37) S K 423号人骨

遊離歯  $\overline{5 4}$  だけである。咬耗度は Martin の第1度で、おそらく壮年期のものと思われる。性別は不詳。

(38) S K 424号人骨

残っているのは下肢骨片と遊離歯  $\overline{8 7 6} \overline{6}$  である。下肢骨片のなかには大腿骨体片と思われるものが認められる。歯の咬耗度は  $\overline{6} \overline{6}$  が Martin の第2度、 $\overline{8 7}$  が同第1度である。壮年期のものであろう。性別は不詳。残存骨の主体は、平行して残っている比較的長い下肢骨体片2本だけであり、そのうちの1本が大腿骨らしいと言える程度の保存状態であるために、埋葬姿勢は不明である。

(39) S K 425号人骨

遊離歯  $\overline{7 6 5 4} \overline{4}$  だけが残っている。咬耗度は Martin の第1度である。壮年期のものであろう。性別は不詳。

(40) S K 426号人骨

左右不明の脛骨体中央部があり、大腿骨体と思われる破片も残っている。そのほか以下に示す遊離歯がある。東頭位左側臥屈葬と思われる。

$\overline{8 7 6 5 4} \times \times \times$	$\times \times \times 4 5 6 7 8$
$\overline{8 7 6 5 4} \times \times \times$	$\times \times \times 4 5 6 7 8$

咬耗度は Martin の第2度である。熟年期のものと思われる。性別は不詳。

(41) S K 428号人骨

小児の頭蓋片、歯槽から遊離した右上顎小白歯片および長骨片であるが詳しいことは分からない。保存不良の各人骨片が散らばっている程度出土状況なので、埋葬姿勢は不明である。

(42) S K 429号人骨

遊離歯  $\overline{4} \overline{6}$  と部位不明の大白歯片がある。 $\overline{4}$  の咬耗度が Martin の第1度、 $\overline{6}$  が同第2度。壮年期のものであろう。性別は不詳。

(43) S K 432号人骨

部位不明の長骨片と遊離歯  $\overline{6 5 4} \overline{4 5 6} \cdot \overline{7 4} \overline{4 6}$  がある。 $\overline{7}$  に咬耗があるかないか分からない。 $\overline{7}$  以外の歯の咬耗度は Martin の第1度である。14歳前後の小児と思われる。出土人骨が断片的であるので、埋葬姿勢は不明である。

(44) S K 434号人骨

下肢の長骨片と大白歯片・下顎小白歯片がある。おそらく成人のものと思われる。人骨片が保存不良のため、埋葬姿勢は不明である。

(45) S K 435号人骨

所属部位不明の長骨片が残っているが、詳しいことは分からない。

(46) S K 440号人骨

部位不明の長骨片と上顎骨歯槽突起片および遊離歯が残っている。遊離歯の状況を以下に示す。

$\times \times 6 5 4 \times 2 1$	$\times \times \times 4 5 6 \times \times$
$\overline{8 7 6 5 4} \times 2 \times$	$\times \times \times \times 5 6 7 8$

咬耗度は全般に Martin の第2度である。熟年期のものと思われる。性別は不詳。

(47) S K 442号人骨

## 7 鑑定分析

以下に示す遊離歯が残っている。

$$\frac{\times \times \times \times (3) \times (1) C \mid \times E (1) (2) \times (4) (5) 6 (7)}{\times 6 (5) (4) \times (2) (1) \times \mid D \times (1) (2) \times (4) (5) 6 (7)}$$

$\overline{6 \cdot 6 \mid 6}$  には若干の咬耗が認められる。8～9歳の小児と思われる。

(48) S K 444号人骨

部位不明の骨片が残っているだけで詳しいことは分からない。

(49) S K 445号人骨

左右不明の大腿骨体中央部片、脛骨体上部などがある。大腿骨の粗線は比較的良く発達している。成人のものであろう。性別は不詳。

(50) S K 446号人骨

頭蓋片、長骨片および遊離歯  $\overline{8}$  がある。 $\overline{8}$  の咬耗度は Martin の第1度である。壮年期のものと思われる。性別は不詳。

(51) S K 447号人骨

骨片が若干残っているが詳しいことは分からない。

(52) S K 448号人骨

部位不明の骨片と遊離歯  $\overline{5 6 7 8}$  がある。咬耗度は  $\overline{5 8}$  が Martin の第1度、 $\overline{6 7}$  が同第2度である。壮年期のものと思われる。性別は不詳。

(53) S K 452号人骨

部位不明の骨片と遊離歯の破片である。歯の破片は小児の未萌出永久歯と乳歯と思われるがよく分からない。

## IV 若干の考察

### (1) 年齢構成

出土人骨の年齢についてまとめたのが第1表である。成人28体、青年・小児16体であるから成人と未成年者の比は約7：4であり、未成年者の比率が高い。成人の年齢構成についてみると熟年期はわずか2体に過ぎない。それに対して壮年期は19体を数える。熟年期と壮年期の比は約1：9で壮年期の死者が多い。要するに弥生時代後期の本遺跡の場合、平均寿命が短かったと推定される。

### (2) 埋葬施設と年齢との関係

出土人骨の性別、年齢および埋葬施設について一覧にしたのが第2表である。これによると例外もあるが、傾向として乳幼児期(4歳以下)の死者は土器棺に入れて葬り、それ以上の年齢の死者については未成年者・成人を問わず礫床墓に埋葬したように思われる。ちなみに、発掘資料によれば土器棺は大きなもので口径が24cm、高さが51cm(S K 367)、小さなものでも口径が9.5cm、(高さは不明)である。木村邦彦(1979)の引用によると木村邦彦ほか(1965)の資料によれば、現代人5歳男児の立位生体計測値は、肩峰幅が約24cm、胸郭幅が約17.5cm、腸骨稜幅が約17cmであり、同じく座位では座高が約61cmである。同年齢の女兒や4歳以下ではこの値はより小さくなると思われる。以上のことから、有馬遺跡出土の土器棺の大きさがあれば乳幼児期の死者の埋納は充分可能と考えられる。



## V ま と め

有馬遺跡墓主体部から出土した弥生時代後期に属する人骨は土葬骨53体、合計53個体分である。大部分の個体については性別が分からなかった。年齢の判明した個体については、成人28体、青年2体、小児14体である。4歳以下の乳幼児は土器棺内に納め、それ以上の年齢の場合は未成年者・成人を問わず礫床墓に埋葬する傾向がみられた。

## VI 参 考 文 献

木村邦彦 (1979) 「発育」『人類学講座』第8巻、成長、pp. 61-180、雄山閣、東京。

第1表 出土人骨の年齢構成

熟年期	壮年期	成人骨	青年期	小児骨	不詳	計
2	19	7	2	14	9	53

第2表 出土人骨の性別・年齢及び埋葬施設など

No.	人骨番号	性	年 齢	埋 葬 施 設	No.	人骨番号	性	年 齢	埋 葬 施 設
1	S K 29	—	壮年	礫床墓	28	S K 370	—	幼児	土器棺墓
2	S K 31	女性?	壮年	礫床墓	29	S K 387	—	壮年	礫床墓
3	S K 45	—	不詳	礫床墓	30	S K 390	—	11歳前後	礫床墓
4	S K 54	—	壮年	礫床墓	31	S K 391	—	壮年	礫床墓
5	S K 63	男性?	壮年	礫床墓	32	S K 401	—	壮年	礫床墓
6	S K 70	—	1歳前後	土器棺墓	33	S K 402	—	壮年	礫床墓
7	S K 76	—	不詳	礫床墓	34	S K 408	—	壮年	—
8	S K 83	—	壮年	礫床墓	35	S K 410	—	壮年	—
9	S K 84	—	成人	礫床墓	36	S K 412	—	12歳前後	礫床墓
10	S K 85	—	成人	礫床墓	37	S K 423	—	壮年	—
11	S K 109	—	8~12歳	礫床墓	38	S K 424	—	壮年	礫床墓
12	S K 111	—	不詳	—	39	S K 425	—	壮年	—
13	S K 115	—	成人	礫床墓	40	S K 426	—	熟年	礫床墓
14	S K 116	—	青年	礫床墓	41	S K 428	—	小児	礫床墓
15	S K 119	—	4歳前後	土器棺墓	42	S K 429	—	壮年	—
16	S K 127	—	3~4歳	土器棺墓	43	S K 432	—	14歳前後	礫床墓
17	S K 128	—	壮年	礫床墓	44	S K 434	—	成人	礫床墓
18	S K 131	—	小児	礫床墓	45	S K 435	—	不詳	礫床墓
19	S K 132	—	成人	礫床墓	46	S K 440	—	熟年	礫床墓
20	S K 133	—	青年	礫床墓	47	S K 442	—	8~9歳	礫床墓
21	S K 134	—	成人	礫床墓	48	S K 444	—	不詳	—
22	S K 135	—	4歳前後	礫床墓	49	S K 445	男性?	成人	礫床墓
23	S K 137	—	不詳	礫床墓	50	S K 446	—	壮年	礫床墓
24	S K 138	—	不詳	礫床墓	51	S K 447	—	不詳	—
25	S K 140	—	不詳	礫床墓	52	S K 448	—	壮年	礫床墓
26	S K 142	—	壮年	礫床墓	53	S K 452	—	小児	礫床墓
27	S K 367	—	3歳前後	土器棺墓					

## (2) 有馬遺跡試料花粉分析

パリノ・サーベイ株式会社

### 1 試料および目的

有馬遺跡では弥生時代以降の遺物および遺構が発掘されている。広域テフラとしてはF A（榛名二ツ岳火山灰）やA s—B（浅間B軽石）などが認められ、本遺跡周辺には中村遺跡・有馬条里遺跡などがあり、これらの遺跡と共通する堆積層序が見られる（第391図）。分析試料はA B C D D'地点から採取されたもので、A、B地点では栽培植物の検出、C、D、D'地点では当時の植生および環境を知る一手段として花粉分析を行った。

### 2 分析方法および結果の表示

花粉・孢子化石の抽出方法は、試料を10g前後秤量し、フッ化水素酸（HF）処理により試量中の珪酸質の溶解と試料の泥化を行う。次に重液（ZnBr<sub>2</sub>比重2.2）を用いて鉱物質と有機物を分離させ、有機物を濃集する。その有機物残渣について、アセトリシス処理を行い植物遺体中のセルロースを加水分解し、最後にKOH処理により腐植酸の溶解を行う。処理後の残渣はよく攪拌してマイクロピペットでその適量を取り、グリセリン・ゼリーで封入する。

検鏡においてはプレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類（Taxa）について同定・計数した（第1表）。

古植生および古環境の検討を行うために、計数の結果にもとづいて花粉化石群集変遷図を作製した（第395図）。出現率は、樹木花粉総数、草本花粉とシダ類孢子は総花粉孢子数から不明花粉数を除いた数を、それぞれ基数として百分率で算出した。なお、樹木花粉の合計が100個体未満の試料についてはデータが歪曲される恐れがあるので図示しなかった。第392図、第1表においてハイフォン（-）で結ばれた分類群はその間の区別が明確でないものである。

### 3 結果

検出された花粉化石としては、樹木花粉が28種類・草本花粉が19種類・シダ類孢子が5種類・緑藻類のBotryococcusが1種類検出された。全般的にA、B、C地点の各試料における花粉化石の保存状態は何れも悪く、花粉化石の産出も非常に少なかった。また、D地点についてもNo.5、6試料では花粉化石の産出が少なかった。

#### A地点No.1試料

黒褐色から黒色をおびた植物遺体が非常に多かったが、花粉化石は非常に少なく、ニレ属-ケヤキ属・イネ科・ヨモギ属・タンポポ亜科が僅かに出現するに過ぎない。

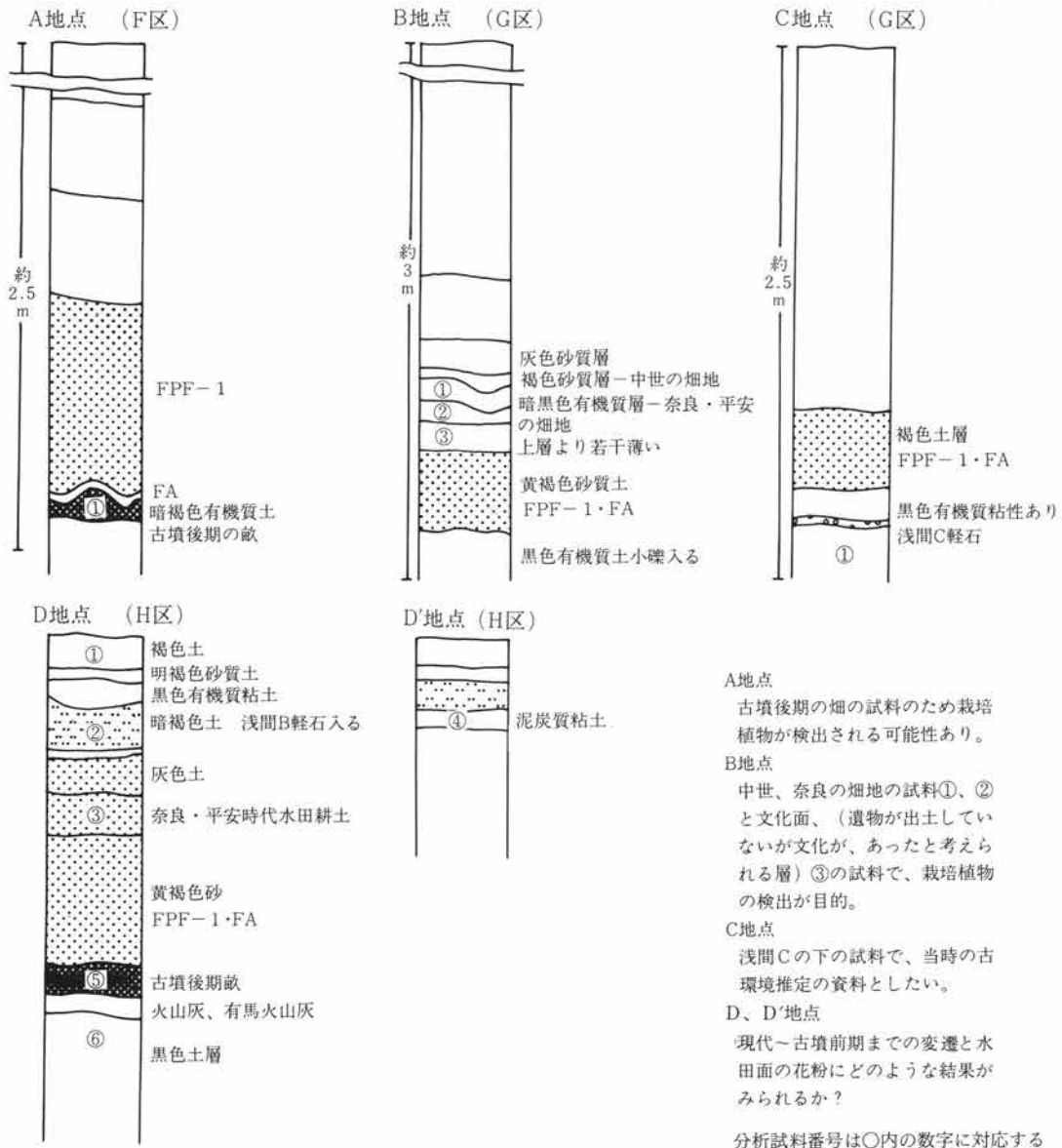
#### B地点No.1、2、3試料

何れの試料ともに黒褐色から黒色をおびた植物遺体が非常に多かったが、花粉化石はA地点と同様に非常に少なく、スギ属・ハンノキ属・ブナ属・イネ科・ヨモギ属・タンポポ亜科が僅かに出現するに過ぎない。

#### C地点No.1試料

K試料中には黒褐色から黒色をおびた植物遺体が非常に多かったが、花粉化石はA地点と同様に非常に少

(2) 有馬遺跡資料花粉分析



第391図 試料採集位置図

なく、クルミ属・イネ科・カラムツソウ属・ヨモギ属・キク亜科が僅かに出現するに過ぎない。

D地点No.1、2、3、5、6試料

No.5、6試料では、花粉化石の産出は少ないが、モミ属・コナラ亜属・ニレ属—ケヤキ属・イネ科・ヨモギ属などが検出されている。

No.3試料では、樹木花粉のクリ属が非常に高い出現率を示し、コナラ亜属・スギ属・エノキ属—ムクノキ属などを伴う。草本花粉とシダ類孢子ではイネ科・ヨモギ属・シダ類孢子が高率に出現し、タンポポ科・カヤツリグサ科・アカザ科・アブラナ科などを伴う。また、緑藻類の Botryococcus が出現している。

No.2試料では、花粉化石の産出が少なかったものの、その種類は多い。樹木花粉ではコナラ亜属・スギ属・アカガシ亜属・ブナ属・クマシデ属—アサダ属・イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科などが出現し、草本花粉とシダ類孢子ではイネ科・ヨモギ属・サナエタデ節—ウナギツカミ節・ナデシコ科・カヤツリグサ科などが出現し、抽水植物のガンマ属も出現している。また、緑藻類の Botryococcus が出現している。

## 7 鑑定分析

No.1 試料では樹木花粉のスギ属・コナラ亜属・マツ属〔(複維管束亜属)と種名不明〕が高率に出現し、クマシデ属—アサダ属・ニレ属—ケヤキ属・ハンノキ属・イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科などを伴う。草本花粉では、イネ科が非常に高い出現率を示し、ヨモギ属・アブラナ科・タンポポ亜科・カヤツリグサ科などを伴う。また、抽水植物のオモダカ属が出現している。

### D'地点No.4 試料

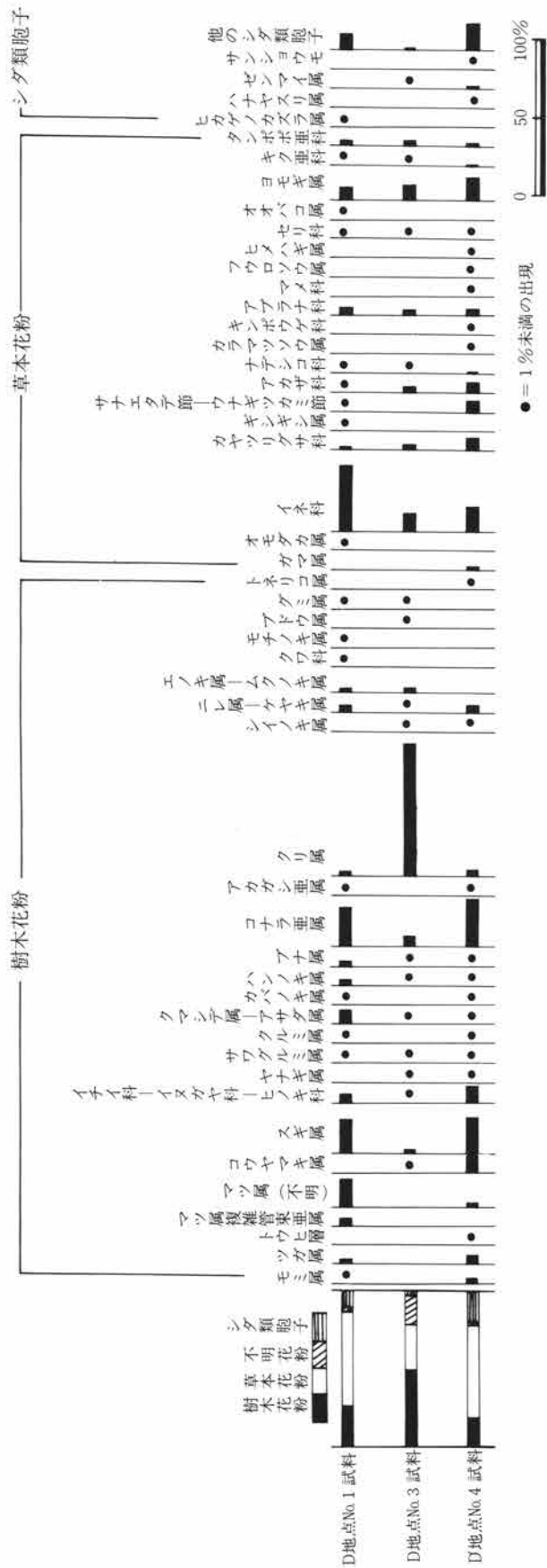
樹木花粉ではコナラ亜属とスギ属が高率に、コウヤマキ属とイチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科が比較的高率に出現し、ニレ属—ケヤキ属・クリ属・マツ属などを伴う。草本花粉とシダ類胞子では、イネ科・ヨモギ属・シダ類胞子が高率に、カヤツリグサ科・サナエタデ節—ウナギツカネミ節・アカザ科・アブラナ科・タンポポ亜科などを伴う、抽水植物のガマ属や浮水植物のサンショウモが出現する。また、緑藻類の *Botryococcus* が出現している。

## 4 考察

A地点(古墳時代後期の畑の畝)、B地点(奈良・平安～中期の畑)、C地点(古墳時代前～中期)では花粉化石が殆ど検出されなかった。花粉化石の産出が非常に少なかった理由として次のことが考えられる。A、B両地点の試料は何れも畑と考えられる堆積層から試料を採取している。畑の堆積環境としては空気によくふれるため、酸化状態になっている。このような酸化状態の堆積環境では、花粉は堆積物中に取り込まれても空気中の酸素や微生物の作用によって分解され易いので、両地点の各試料では花粉化石の多くが分解消失した可能性が高い。したがって、検出された花粉化石の母植物が周辺に存在していたと思われるがこの結果から当時の栽培植物や古環境について解析することは困難である。花粉化石が少なかったC地点のNo.1 試料についても酸化的な堆積環境であった可能性が考えられる。

D地点では下部のNo.5、6 試料(古墳時代)は花粉化石の産出が非常に少ない。これらの試料についてもA、B、C地点の各試料とおなじように酸化的な堆積環境であったと思われる。したがって、検出されたモミ属・コナラ亜属・ニレ属—ケヤキ属・イネ科・ヨモギ属などの母植物が周辺に存在していたと思われるが、大部分の花粉化石が分解・消失している可能性が高く、これら以外の植物も存在していたと考えられるので、この結果から古植物について解析することは、困難である。FA、とAS—Bの間のNo.3 試料(奈良・平安時代と考えられる)はクリ属が非常に高い出現率を示すことから、付近にクリ属が局地的に分布していた可能性が高い。クリ属を局地的なものとするナラ類とスギ属が周辺の森林植生として考えられる。また、緑藻類の *Botryococcus* の出現は周辺に水域が存在していたことを示唆し、その水域の内外にイネ科・ヨモギ属・アカザ科・カヤツリグサ科などが生育していたと推定される。中世のNo.2 試料では周囲にはナラ類とスギ属からなる森林が存在していたと考えられる。そして、付近にはガマ属や *Botryococcus* が生育可能な水域が存在し、その内外にイネ科やヨモギ属をはじめとする草本植物が生育していたと推定される。現代のNo.1 試料では周囲にはナラ類・スギ属・マツ属(おそらくアカマツ)などがおもに分布していたと考えられる。現植生と調和的といえる。付近にはオモダカ属が生育できる水域が存在し、その内外にイネ科からなる草本植物が生育していたといえよう。

平安から中世にわたるD'地点でのNo.4 試料では、周囲にはナラ類とスギ属からなる森林が存在していたと考えられ、*Botryococcus* やガマ属が出現されたことにより付近にはこれらの植物が生育可能な水域が存在していたと推定される。その内外にはイネ科をはじめとする草本植物が生育していたといえよう。



第392図 有馬遺跡D地点No. 1、3およびD'地点No. 4 試料花粉化石群集

7 鑑定分析

第1表 有馬遺跡A、B、C、D、D'地点試料花粉分析結果

種類 (Taxa)	地 点 試料番号	A				B				C	D					D'
		1	1	2	3	1	1	2	3	5	6	4				
樹 木 花 粉																
モミ属		—	—	—	—	—	1	2	—	4	—	—	—	3		
ツガ属		—	—	—	—	—	2	2	—	2	—	—	—	5		
トウヒ属		—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1		
マツ属複雑管束亜属		—	—	—	—	—	4	1	—	—	—	—	—	—		
マツ属 (不明)		—	—	—	—	—	17	2	—	1	—	—	—	2		
コウヤマキ属		—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	10		
スギ属		—	1	—	1	—	20	10	4	1	—	—	—	22		
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科		—	—	—	—	—	4	5	1	—	—	—	—	10		
ヤナギ属		—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	1		
サワグルミ属		—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—	1		
クルミ属		—	—	—	—	1	1	1	—	—	—	—	—	1		
クマシデ属—アサダ属		—	—	—	—	—	8	6	1	—	—	1	—	1		
ハシバミ属		—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—		
カバノキ属		—	—	—	—	—	1	2	—	—	—	—	—	1		
ハンノキ属		—	1	—	—	—	3	2	1	—	—	—	—	1		
ブナ属		—	1	—	—	—	2	6	1	1	—	—	—	1		
コナラ亜属		—	—	—	—	—	24	26	11	6	8	—	—	30		
アカガシ亜属		—	—	—	—	—	1	5	—	—	—	—	—	1		
クリ属		—	—	—	—	—	2	1	168	—	1	—	—	4		
シイノキ属		—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1		
ニレ属—ケヤキ属		2	—	—	—	—	4	2	1	5	—	—	—	4		
エノキ属—ムクノキ属		—	—	—	—	—	2	1	5	1	—	—	—	—		
クワ科		—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—		
モチノキ属		—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—		
トモノキ属		—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—		
ブドウ属		—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—		
グミ属		—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—	—		
トネリコ属		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1		
草 本 花 粉																
ガマ属		—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	9		
オモダカ属		—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—		
イネ科		2	2	3	1	4	152	62	35	38	12	—	—	82		
カヤツリグサ科		—	—	—	—	—	5	9	10	3	—	—	—	40		
ギンギン属		—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—		
サナエタデ節—ウナギツカミ節		—	—	—	—	—	2	14	—	—	—	—	—	29		
アカザ科		—	—	1	—	—	2	3	9	—	—	—	—	33		
ナデシコ科		—	—	—	—	—	3	11	3	—	—	—	—	6		
カラマツソウ属		—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1		
キンボウゲ科		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1		
アブラナ科		—	—	—	—	—	16	—	11	—	—	—	—	22		
マメ科		—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	1		
フウロソウ属		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1		
ヒメハギ属		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1		
セリ科		—	—	—	—	—	1	8	1	1	—	—	—	1		
オオバコ属		—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—		
ヨモギ属		2	12	5	9	14	31	10	31	34	13	—	—	77		
キク亜科		—	—	—	—	1	2	6	2	3	—	—	—	6		
タンポポ亜科		1	1	—	—	—	11	—	14	1	1	—	—	8		
不明花粉		—	2	—	1	1	13	5	74	2	—	—	—	9		
シ ダ 類 胞 子																
ヒカゲノカズラ属		—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—		
ハナヤスリ属		—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	1		
ゼンマイ属		—	—	—	—	—	—	—	1	2	1	—	—	8		
サンショウモ		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3		
他のシダ類胞子		—	—	—	2	1	36	12	6	21	1	—	—	91		
Botryococcus		—	—	—	—	—	—	5	6	—	—	—	—	21		
合 計																
樹 木 花 粉		2	3	0	1	1	100	78	200	22	10	—	—	101		
草 本 花 粉		5	15	9	10	20	228	124	116	83	26	—	—	318		
不 明 花 粉		0	2	0	1	1	13	5	74	2	0	—	—	9		
シ ダ 類 胞 子		0	0	0	2	1	37	12	7	25	2	—	—	103		
総花粉・胞子		7	20	9	14	23	378	219	397	132	38	—	—	531		



### (3) 有馬遺跡におけるプラントオパール分析

藤原宏志

群馬・前橋台地では日高遺跡をはじめ多くの先史時代遺跡で水田跡が発掘されている。群馬県におけるこれらの調査成果は1980年代に入り全国各地で行われた先史時代水田遺跡調査の先駆けであり古代農耕史の解明に大きく貢献するものであった。

群馬県における水田遺跡の調査成果は調査担当者の熱意・努力とともに降下火山灰の堆積という調査上恵まれた条件に負うところも大きかった。

最近十年間の調査研究により水田農耕の開始期、伝播あるいは様式変遷に関する従来の定説は大きく見直されることになった。これに対して、畑作農耕の歴史は水田遺跡に比べて調査例が少なく未だ不詳の所が多い。畑跡は水田跡に比べて遺構の残りが悪くまた考古学的検出も難しいのが通例である。しかし、畑作の開始期は水田作に比べて必ずしも遅いとは限らず、出土作物痕からみれば、むしろ畑作の開始が先行した可能性も十分考えられる。

畑遺構の検出に困難が伴うことを考えれば、調査条件に恵まれた群馬地方で調査研究の先鞭が付けられることを期待するものである。

このたび当該遺跡で農耕跡とみられる畝状の遺構が検出されプラント・オパール分析を行う機会に恵まれた。

本報ではその結果について述べるとともに若干の検討を加えることにしたい。

#### 1 試料および分析法

{試料}

1982年8月F区東壁、F区南壁、およびH区カルバート区西壁、三地点で各層計32試料を採取した。試料採取は100cc採土円筒を用い異物の混入がないように配慮した。

{分析法}

常法(プラント・オパール定量分析法—ガラス・ビーズ法)に従い宮崎大学農学部で分析した。とくに、9層についてはキビ族植物の定量をも試みた。

#### 2 分析結果

分析結果は第391図および第1表に示した。

#### 3 考察および結論

試料の採取地点により分析結果に多少の違いがでてくるのは、このような傾斜地の場合当然であろう。ここでは当該遺跡の状況をもっとも的確に表していると考えられるF区東壁の分析結果を中心に検討してみた。

(1) 9層以降では火山灰層を除く各層でほぼ連続的にイネが検出されている。ただし、畝状遺構の検出された9層ではイネの量が比較的少ない。

(2) 9層以前にはタケ類が比較的多く検出された。このタケ類は落葉樹林の下床植生であるササ類であろ

## 7 鑑定分析

う。5層でやや多量のヨシが検出された。これは稲作などによる灌がいの影響と考えられる。

- (3) F区南壁で浅間C軽石直下の土層から試料を採取した。C軽石層は4世紀初頭に浅間山から噴出し降下した堆積物であり、この地方における土層年代を決める鍵層の一つである。F区南壁試料の分析結果は畝を形成している土層中に対応する土層にイネが存在しており、この遺構が稲作にも利用されたことを示している。

- (4) 9層で検出された畝状遺構で栽培されたイネ以外の作物種を推定するためキビ族植物のプラント・オパールを検出・定量した。キビ族植物にはアワ、ヒエ、キビなど主食になりうる畑作物が包含されており、検出されたプラント・オパールの形状からヒエの可能性が高いと判断された。分析結果には検出されたキビ族植物が総てヒエとした場合の値を示した。

こうしてみると、この畝状遺構ではイネだけが栽培されていたというよりヒエなどのいわゆる雑穀類とともにイネが輪作作物の一つとして組み込まれていたと判断するのが妥当であろう。

- (5) 検出された畝状遺構は畝幅：60～80cm、畝高：20～30cm、溝幅：20～30cmの比較的大型のものである。とりわけ注目されるのは畝の方向が等高線にほぼ直交する形になっていることである。傾斜地に造られた畑では流水による侵食を防止するため畝を等高線に平行な方向に作るのが通例である。

それにもかかわらず、あえて侵食の生じやすい方向に畝が作られているのは相当な理由があるはずである。その理由として考えられるのは畝間灌がいであろう。

畑作イネ（陸稲）の場合は水田のように湛水することは出来ないまでも渇水期にはやはり灌水する必要がある。畑作イネも植物学的には水稻と同種であり、他の作物に比べると容水量は大きいのである。したがって、おそらくこの畑では溝に沿って上部から水を流下させる方法で灌がいたのであろう。ちょうど溝の下端部にため池状の窪地が検出されていることは上述の推論を裏付けるものであろう。

同様な畝状遺構が北九州：御座遺跡でも発掘されており、当時の畑作技術を考える上で大変興味深いところである。

### グラフの見方について

1. layers：採取地点の土層模式図、( )内の数字は土層番号、左すみの小数字は表層からの深さをcmで表したものの。
2. O. sati：Oryza sativa. 栽培稲の地上部乾物重。  
rice. g：Oryza sativa. の穎果（粳）乾物重。  
Phrag.：Phragmites communis. ヨシの地上部乾物重。  
BAmb.：Bambaceae. タケ亜科の地上部乾物重。  
各植物体重はそれぞれの植物により異なる珪酸体密度係数と土壌中から検出された各植物に由来するプラント・オパール密度をもとに算出されたものである。
3. 土柱模式図の右側に栽培植物、同左側に野、雑草を示している。単位 t / 10 a. cmはその土層の厚さ1cm、面積10a（1000m<sup>2</sup>）に包含されるプラント・オパールの数から推定した各植物の乾物量をt（トン、1×10<sup>3</sup>kg）で表したものである。例えばその土層が10cmの厚みであると、グラフで示した値に10を乗じた量の植物体はその土層の堆積期間中に生産されたことになる。生産量が年間生産量ではないことに注意されたい。
4. 水田址が埋蔵されている土層ではO. sati. の値がピークを形成する場合が多い土層の堆積状況により一

(3) 有馬遺跡におけるプラントオパール分析

概にいえないが、水田址の層位はこのピークと一致するのが通例である。

5. Phrag. (ヨシ)、Bamb. (タケ) の乾物量変遷はその地点における土壤水分状況の時代的変遷を知るうえに役立つ。ヨシは比較的水分の多い湿った環境に成育し、タケ (ササ) は比較的乾燥した環境下で繁茂する。両者の消長をみると、その地点の乾湿変化を推定できる。
6. 最下段は採取地点のグリット、採取年月日を示す。  
なお、プラント、オパール定量分析結果の数値表を添付するので参照されたい。  
また、不詳、不明の点があれば下記あて問合せください。

889-21 宮崎市大字熊野7710

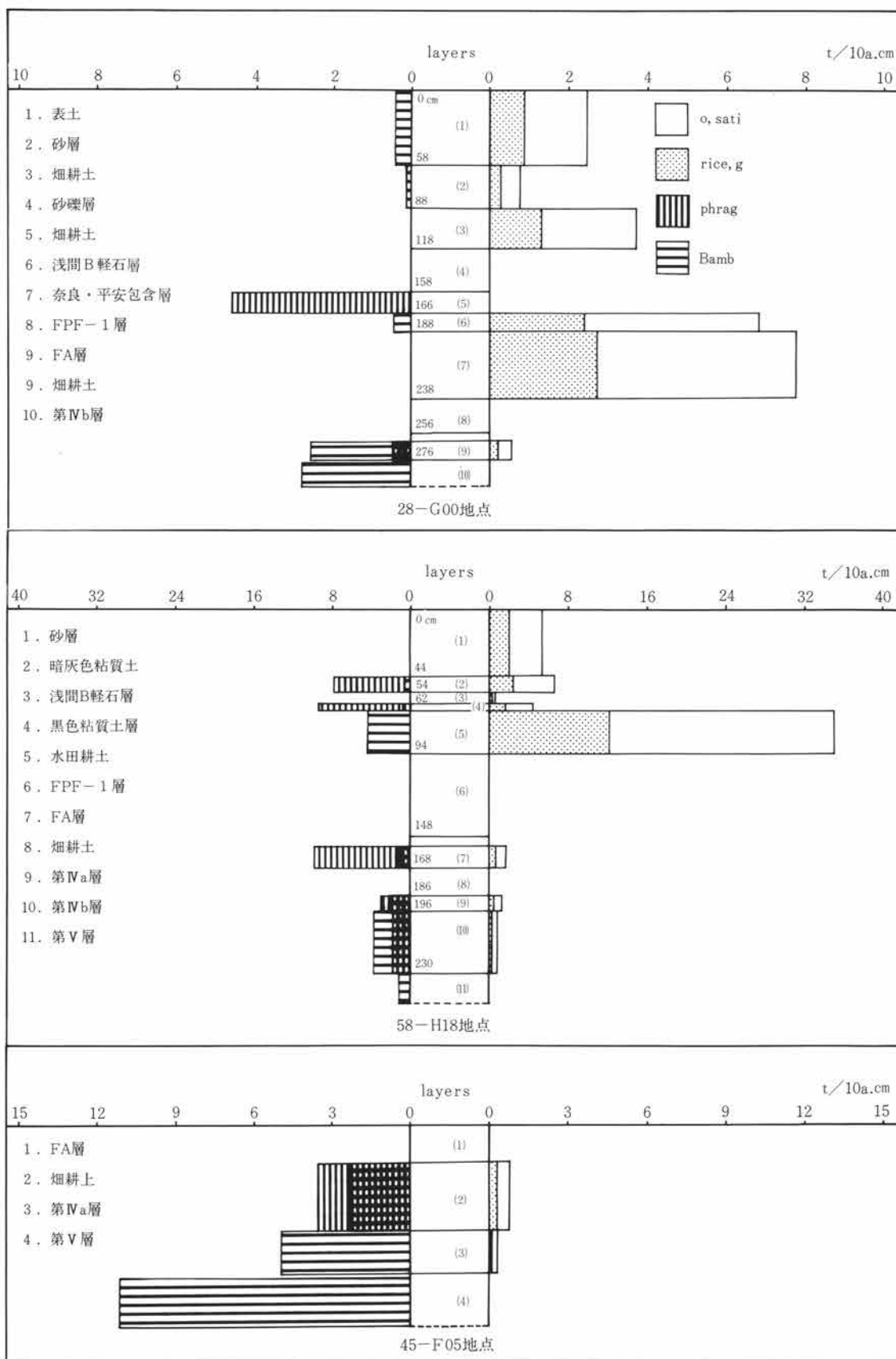
宮崎大学農学部農作業管理学研究室

TEL 0985-58-2811 (内線3481)

第1表 9層におけるイネ科植物生産量

植物	乾物重 (g) / g	乾物重 (t) / 10a・cm
イネ (Oryza)		
地上部	$2.56 \times 10^{-2}$	0.24
種実	$1.19 \times 10^{-2}$	0.11
ヨシ (Phragmites)		
地上部	$6.60 \times 10^{-2}$	0.63
タケ (Bambusaceae)		
地上部	$1.14 \times 10^{-1}$	1.08
ススキ (Miscanthus)		
地上部	$6.87 \times 10^{-1}$	6.52
ヒエ (Echinochloa)		
地上部	$4.88 \times 10^{-3}$	0.46
種実	$2.22 \times 10^{-3}$	0.21

7 鑑定分析



第393図 試料採集地点別植物生産量

## (4) 有馬遺跡出土鉄剣の分析

清 永 欣 吾

群馬県埋蔵文化財調査事業団の依頼により、群馬県渋川市八木原に所在する弥生時代後期後半の有馬遺跡より出土した鉄剣8本について、その化学組成ならびに金属組織的調査を実施したので、その結果について報告する。

有馬遺跡は榛名山東麓に発達した洪積世に形成された扇状地形面上にあり、その中の礫床墓8基から計8本の鉄剣が副葬品として発見されている。副葬品としては鉄剣のほか、銅釧、鉄釧、ガラス小玉、勾玉などがあるが鉄剣と銅釧の伴出副葬例はない。なお、この地方では、鉄製の刃を有する農耕具は古墳時代後期にならないと出土しないという<sup>(1)</sup>。

## 1 試料及び調査方法

資料は鉄剣8本で、その明細を下表に示す。

断面はレンズ状で鑄は明確でない。刃区を有し、鹿角のはばきをもっていたと思われる。いずれも保存処理が施されている。

分析用試料は各鉄剣の長手方向中央部から刃先側にかけて、すでに横割れの発生している部分より下図のように5×5mmおよび5×3mmの大きさに乾式マイクロカッターで切断し採取した。5×5mm試料は組成分析用に、5×3mm試料は顕微鏡組織観察用に供した。



第394図 分析試料採取位置の例

顕微鏡組織観察用試料は樹脂に埋め込み後、鉄剣長手方向に平行な断面(図1に表示)をダイヤモンドペー  
トで研磨し、金属顕微鏡及び走査型電子顕微鏡で観察した。非金属介在物など異状組織が観察された場合は、EDX分析(エネルギー分散型X線分析)により構成元素の定性分析を実施した。

化学組成分析用試料は小さく、かつ脆いために超音波洗浄は行わず、そのまま乳鉢で粉碎後、塩酸、硝酸、  
弗酸の混酸中で高温加圧溶解し、ICP溶液発光分光分析により含有元素の分析値を定量した。なお、炭素お  
よび硫黄は赤外吸収法により分析されるが、試料が少なく、かつ保存処理が施されているため省略した。

第1表 資料一観表 (cm)

番号	出土遺構	長さ	身幅	重ね	備考	挿図、写真
1	2A号墓 SK 41	17.5	2.3	0.4±	茎は比較的長い。	第185図-2 PL, 119
2	2B号墓 SK 45	31.4	3.6	0.5±	鹿角のはばきが付く。	第184図-1 PL, 119
3	5号墓 SK 84	29.2	2.9	0.5±	茎に鹿角の把が残存する。	第203図-85 PL, 120
4	5号墓 SK 85	9.0+	2.4	0.6±	切っ先に近い部分が残存。	第203図-88 PL, 120
5	6号墓 SK 440	17.9	3.0	0.5±	茎に鹿角の把が残存する。	第215図-1 巻頭写真
6	18号墓 SK 134	22.0	2.6	0.5±	茎は短い。	第290図-15 PL, 135
7	19号墓 SK 111	53.7	3.1	0.7±	はばきが付く。	第298図-12 PL, 135
8	19号墓 SK 140	16.1+	2.5	0.6±	茎は不明瞭。	第298図-43 PL, 135

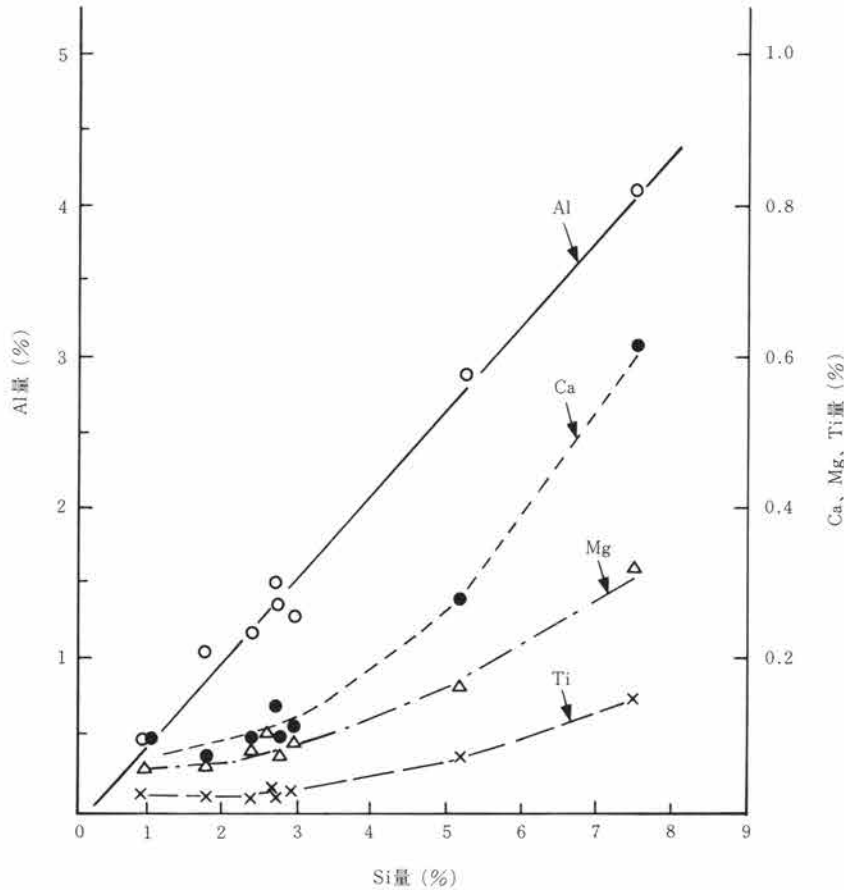
長さは基部も含む。はば中央部で挿図中断面図の位置。錆部分は計測値に含まれない。

## 7 鑑定分析

### 2 化学組成

各資料の化学組成を第2表に示す。

Si、Al量が多いのは、遺存中に周囲の土質中の $\text{SiO}_2$ 、 $\text{Al}_2\text{O}_3$ が鉄錆と一体となって固化したため、Si量の多い資料ほどAl量も多くなっている。各資料のSiとAl量の関係をグラフに示すと第395図のように極めてよい直線関係が得られる。



第395図 Si量に対するAl、Ca、Mg、Ti量の相関

同様に土質中に含まれる元素であるCa、Mg、TiについてSi量との関係を求めると第395図に併記したようになり、相関のあることがわかる。したがって、資料中のこれらの元素は、本来資料に含有されていたものでなく、主として遺存中に周囲の土質からの汚染により富化されたものであると判断できる。

Si約5%を含む資料3について、Si、Al、Ca、Mg、Ti量の含有比を求めると、Si 61.4%、Al 32.4%、Ca 3.3%、Mg 2.0%、Ti 0.8%となり、筆者が島根県古墳より出土した鉄刀剣など35件を分析した際の平均組成(Si 1.37%、Al 0.604%、Ca 0.077%、Mg 0.037%、Ti 0.018%)から求めたこれら元素の含有比、すなわち、Si 65%、Al 29%、Ca 3.7%、Mg 1.8%、Ti 0.9%とおおよそ一致する。<sup>(2)</sup>粘土の組成は産地により異なるが、上記の組成比は粘土の組成範囲に入るものである。

第395図によれば、Si量を0%とした場合、Al量は0%となるが、Ca、Mg、Ti量は0%に収斂しない。Caは約0.07%、Mgは0.05%、Ti量は0.015%となる。これは本来鉄剣中に存在していた量と考えられる。これらの量は上記島根県古墳出土鉄刀剣の平均組成とおおむね一致する。

## (4) 有馬遺跡出土鉄剣の分析

第2表 資料の化学組成 (重量：%)

No.	Si 珪素	Mn マンガン	P 燐	Ni ニッケル	Cr クロム	V バナジウム	Co コバルト	Cu 銅	Al アルミニウム	Ti チタン	Ca カルシウム	Mg マグネシウム	Zr ジルコニウム	T・Fe 全鉄量	重量 (g)
1	1.77	0.014	0.168	0.010	0.011	0.031	0.002	0.108	1.06	0.015	0.069	0.060	0.009	63.75	0.1
2	2.75	0.043	0.601	0.008	0.011	0.028	0.003	0.076	1.35	0.024	0.096	0.075	0.008	53.75	0.2
3	5.18	0.116	0.118	0.008	0.011	0.018	0.002	0.106	2.73	0.070	0.281	0.171	0.008	50.05	0.2
4	2.68	0.062	0.329	0.010	0.010	0.017	0.002	0.069	1.49	0.029	0.134	0.103	0.007	54.95	0.25
5	2.94	0.019	0.402	0.010	0.010	0.015	0.002	0.136	1.29	0.026	0.111	0.090	0.008	54.28	0.25
6	0.96	0.037	0.333	0.010	0.010	0.039	0.003	0.050	0.472	0.020	0.099	0.062	0.007	59.75	0.2
7	7.48	0.053	0.566	0.009	0.010	0.030	0.002	0.050	4.21	0.153	0.613	0.328	0.007	42.75	0.2
8	2.37	0.017	0.172	0.009	0.010	0.032	0.002	0.030	1.36	0.015	0.099	0.085	0.008	48.50	0.1

第3表 第2表におけるT・Feに対する各元素の含有率 (%)

No.	Si	Mn	P	Ni	Cr	V	Co	Cu	Al	Ti	Ca	Mg	Zr
1	2.78	0.02	0.26	0.016	0.017	0.049	0.003	0.17	1.66	0.024	0.11	0.09	0.014
2	5.12	0.08	1.12	0.015	0.020	0.052	0.006	0.14	2.51	0.045	0.18	0.14	0.015
3	10.35	0.23	0.24	0.016	0.022	0.036	0.004	0.21	5.45	0.140	0.56	0.34	0.015
4	4.88	0.11	0.60	0.018	0.018	0.031	0.004	0.13	2.71	0.053	0.24	0.19	0.013
5	5.42	0.04	0.74	0.018	0.018	0.028	0.004	0.25	2.38	0.048	0.20	0.17	0.015
6	1.61	0.06	0.56	0.017	0.017	0.065	0.005	0.08	0.79	0.033	0.17	0.10	0.012
7	17.50	0.12	1.32	0.021	0.023	0.070	0.005	0.12	9.85	0.358	1.43	0.77	0.016
8	4.89	0.04	0.35	0.019	0.021	0.066	0.004	0.06	2.80	0.31	0.20	0.18	0.016

第2表は資料の化学分析値をそのまま示したものであるが、ほとんど錆化しているため、各元素の総計は約60%程度にすぎない。残りは酸素や水素である。錆化した場合、ゲーサイト(Fe(OH))の形になるので、鉄分は約62.9%となる。これらの資料が錆化していない状態の化学組成を推定するために鉄分に対する各元素の含有比(%)を求めた。結果を第3表に示す。Si、Al、Ti、Ca、Mgは汚染による富化が考えられるので参考値である。先に汚染がなかった場合のTi、Ca、Mg量を推定したが、その値を用いて、同様に鉄分に対する含有比(%)を求めると、全鉄量の平均を53.5%としてCa 0.13%、Mg 0.09%、Ti 0.028%となる。

次に他の化学組成における本資料の特徴をみると次が挙げられる。

- (1) Mn量は資料間の差が大きい、やや多目である。

砂鉄系原料を用いた鉄では、Mn 0.02%以下が普通である。<sup>(3)</sup>

- (2) Ni、Cr、Co量は少なく、砂鉄系原料による鉄と同程度である。<sup>(3)</sup>

- (3) V量は第2表において0.015~0.039%、平均0.026%を含有し、全鉄に対し平均0.05%を含む。これは、かなり多い量であり、砂鉄系原料を用いた鉄であることを示唆する。

砂鉄中にはTiO<sub>2</sub>1~10%、V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>0.1~0.5%が含有され、砂鉄を原料とした鉄中には平均でTi 0.02%、V 0.01%を含むため、Ti、V量は鉄原料判定の有力な指標となる。<sup>(3)</sup>

本資料の場合、Ti(≒0.028%)、V(≒0.05%)とも、この判定基準より多い。

- (4) Zrも砂鉄中に0.01%程度含有される成分であり、近世たたら製鉄による玉鋼、左下鉄、流し鉄、包丁鉄に0.01~0.03%含まれている場合が多い。<sup>(4)</sup>本資料でも約0.01%が含有され、砂鉄系を用いた鉄であることを示唆する。

- (5) P量は多い。普通は0.1%以下である。しかし、砂鉄系原料でも多い場合があり、また遺存中に富化



## 7 鑑定分析

する場合も考えられるので、鉄原料推定の指標にはなりにくい。

(6) Cuは0.1%程度含有されており多い。砂鉄系原料の場合、0.02%以下が普通である。<sup>(3)</sup>

Cu は同時に副葬されていた金銅製品から Cu が溶出し、鉄製品の上に晶出する場合がある。しかし、本資料の場合は Cu 製品との同時副葬はなかったとのことであり、そうとすれば鉄剣中にもともと含まれていたことになる。その場合、鉄原料としては中国大陸の含銅磁鉄鉱を用いた可能性が示唆される。

以上、化学組成から推量すれば、鉄剣の製造に用いた鉄原料は、Ti、V、Zr、Ni、Cr、Co 量の点で砂鉄系、Cu、Mn 量の点で鉄鉱石系と判断される。

そこで、Cu および Mn が真に鉄中に含まれていたものか、あるいは周囲環境からの汚染により富化したものかを判断するために、資料中とくに Cu、Mn の多かった資料3の断面の元素分布をX線マイクロアナライザーによるカラーマッピングにより調査した。

巻頭写真4はFe、O、Siの濃度分布を示し、赤色の部分が多く、青～黒の部分が高い。Oは全面にわたり濃化し、資料が完全に錆化していることを示す。青い部分は孔である。Feは表面約0.8mmの部分の濃度が低く、この部分ではSiが多い。つまり外部からの汚染部分に相当する。Cu及びMnの濃度分布では(同写真)、Cuは全面に低く、0.02%以下と判断されるが、写真左上に局部的にCuの高い点が認められる(矢印)。この部分は巻頭写真4から孔の部分に相当し、外部からの汚染の影響を受けた部分である。資料3のCuの分析値は約0.1%であり、このカラーマッピングの結果と矛盾するが、Cuが外部からの汚染によって局部的に富化した部分があると考えられる。それ故、資料3の本来の鉄質中のCuは低かったと考える。

Mnは外側に少なく内部に多く分布し、Si、Oの比較的少ない部分に多い傾向がある。多い部分で約0.3%の濃度を有し、資料3の本来の鉄質中に0.2%程度含まれていた可能性は高い。

砂鉄中には0.2～0.7%程度のMnOが含まれており、鉄分対比約0.3～0.8%のMnを含む。通常のたたら製鉄ではMnOは還元されず鉄滓中に入るために、玉鋼や包丁鉄中のMnは0.02%ないしそれ以下の場合が多い。しかし、十分還元性の強い製錬がおこなわれたとすれば0.2%程度のMnが鉄中に入ることはあり得る。砂鉄系原料を用い、そのような製錬によって作られた鉄素材を用いて、この鉄剣がつくられた可能性がある。当時、日本ではこのような進んだ製錬があったと考えられないので、大陸から舶載されたものと推察する。

## 3 ミクロ組織

各資料切断面について光学顕微鏡及び走査型電子顕微鏡でミクロ組織を観察し色調の異なる部分あるいは非金属介在物についてはEDX分析(局部分析)を実施した。

しかしながら、資料はいずれも完全に錆化しており、金属組織を留どめているものはなかった。また、使用原料や製鋼法を推定する証拠となる非金属介在物を探し、それと思われるもののEDX分析も行ったが、Feのみが検出され、有効な情報は得られなかった。

## 4 結 言

有馬遺跡出土の鉄剣8本について、化学組成ならびにミクロ組織を調査した結果を要約すると次の通りである。

- (1) 各資料とも完全に錆化し、金属組織の痕跡も認められなかった。
- (2) 各資料とも遺存中に周囲の土質によって汚染されている。

(4) 有馬遺跡出土鉄剣の分析

- (3) Ti、V、Zr、など砂鉄中に含まれる特有元素の全鉄分に対する含有量は、それぞれ約0.028%、0.05%、0.01%であり、砂鉄を原料とした鉄から製造された可能性が推定される。
- (4) 一方、砂鉄中の含有が少なく、鉄鉱石中には含有されることのあるCu、Mnの全鉄分に対する含有量は、それぞれ0.1~0.2%および0.02~0.2%と高く、この面では鉄鉱石を原料とした鉄から製造された可能性がある。
- (5) しかし、X線マイクロアナライザーによるCu、Mnの濃度分布測定結果により、Cuは外部からの汚染により、Mnは鉄中に含まれていた可能性が高いことが分った。
- (6) 以上の結果を総括し、本鉄剣は砂鉄を原料とし、かなり還元度の高い製錬によってつくられた鉄素材を用いて製作されたものと推定され、恐らく、大陸から舶載された鉄素材を用いたか、鉄剣として製品が舶載されたものであろう。
- (7) 鉄剣の組織観察からは、全体が錆化しているため、金属組織の痕跡あるいは非金属介在物の残存を認めることはできなかった。

最後に、本調査に当たり協力された日立金属株式会社安来工場冶金研究所瀬崎博史氏、山田英矢氏、小路親利氏および分析課菊地孝人氏に深甚の謝意を表す。

参考文献

- (1) 佐藤明人・友廣哲也・大西雅広：群馬県有馬遺跡—弥生時代後期の墓跡を中心に—；日本考古学年報 35（1982年度版）163、（1985年4月刊）
- (2) 清永欣吾：島根県の古墳より出土した鉄器の化学分析とその金属学的調査；「出雲岡田山古墳」136、（昭和62年3月、島根県教育委員会）
- (3) 清永欣吾：奈良県の古墳より出土した鉄刀剣の化学分析；考古学論叢第9冊、11（1983、橿原考古学研究所）
- (4) 矢野武彦：たたら製品の品質；金属材料、vol. 9、No10、85、（昭和44年）

## (5) 有馬遺跡出土ガラス玉の材質分析

富沢 威<sup>1</sup>、富永 健<sup>2</sup>、小泉好延<sup>3</sup>

- |                     |                       |
|---------------------|-----------------------|
| 1) 慶応義塾大学・文学部       | 〒108 東京都港区三田二丁目15     |
| 2) 東京大学・理学部         | 〒113 東京都文京区本郷 7-3-1   |
| 3) 東京大学アイソトープ総合センター | 〒113 東京都文京区弥生 2-11-16 |

### 1 はじめに

ガラスは、人工的に合成される。したがって、ガラス材の組成や着色剤に関する知見は、わが国のガラスの原材料の種類やガラス製造技術の変遷の歴史を解明する際の重要な指標になるものと思われるが、古代ガラスの分析例は少なく、ガラスの組成や着色剤に関する知見は必ずしも十分であるとは言えない現状である。

今回は、群馬県渋川市八木原有馬遺跡（弥生時代後期～古墳時代前期）で出土した多数のガラス玉について、蛍光X線分析やPIXE分析、および中性子放射化分析を行い、組成や着色剤について検討し、いくつかの有用な結果を得ることができた。

### 2 実験

#### 2、1 分析したガラス試料

有馬遺跡は、群馬県渋川市八木原に所在する。ガラス玉出土遺構は弥生時代後期、3世紀に属すると推定されている。有馬遺跡では、多数の副葬品が発見された。副葬品には、ガラス玉、ヒスイ製勾玉、鉄釧、銅釧、鉄剣などがある。

有馬遺跡で出土したガラス玉は、348点の多数に及んでいる。ガラス玉は、一般に小玉あるいは中玉と呼ばれている直径がおよそ3～7mmの玉であり、わが国の上古の遺跡で出土する代表的な玉である。ガラス玉の色調には、淡い青色と紺色、および青緑色の3種類がある。青緑色のガラス玉は、中玉の一例だけが出土した。色調と形状との関連をみると、青色は小玉に紺色は中玉に多くみられる。出土数は、青色のガラス玉が多くて紺色のガラス玉は少ない。青色のガラス玉と紺色のガラス玉の割合は、およそ16：1である。

#### 2、2 実験の方法

##### 2、2、1 蛍光X線分析

出土例が少ないガラスなどの考古遺物の分析では、形状そのものが情報としての価値をもつことから、一般には非破壊法が用いられる。ここで言うところの非破壊法とは、一部の試料をも採取しないことを意味している。有馬遺跡で出土した全てのガラス玉について、代表的な非破壊法である蛍光X線法を用いて分析を行った。分析には、東京大学アイソトープ総合センターのエネルギー分散型の蛍光X線分析装置を用いた。システムの構成は、100mCiの<sup>241</sup>AmのRI線源とSi(Li)半導体検出器、および4096チャンネル波高分析器である。測定時間は、2000秒から200000秒の間である。

### 2、2、2 PIXE分析

2点のガラス試料について、PIXE (particle-induced X-ray emission) 分析を行うことができた。PIXE法は、加速器から得られた高エネルギーのイオンを標的試料に照射し、励起された原子から発生する特性X線を測定し、試料に含まれる元素を分析する方法である。PIXE法では、原子番号20～30と80付近の元素については特に高感度で元素分析ができる。測定は、東京大学原子力研究総合センターのタンデム型イオン加速装置とSi(Li)半導体検出器、および2048チャンネル波高分析器を用いた。今回の実験では、4MeVの陽子ビームを用い、ビーム電流は2～5 nAで、およそ500秒間測定した。

### 2、2、3 中性子放射化分析

3点の試料の中性子放射化分析を行った。分析には、青色をしたガラス小玉を用いた。試料をポリエチレン袋に封入して照射に供した。中性子の照射は、立教大学原子力研究所の照射孔を用いた。短寿命核種は、気送管(熱中性子束： $1.5 \times 10^{12} \text{n} \cdot \text{cm}^{-2} \cdot \text{sec}^{-1}$ )で30秒間照射、7分間冷却後、Ge(Li)半導体検出器と4096チャンネル波高分析器により5分間 $\gamma$ 線スペクトルの測定を行った。長寿命核種は、F-21孔(熱中性子束： $1.5 \times 10^{12} \text{n} \cdot \text{cm}^{-2} \cdot \text{sec}^{-1}$ )で18時間照射、7日間冷却後、Ge(Li)半導体検出器と4096チャンネル波高分析器で3000秒間 $\gamma$ 線スペクトルの測定を行い、1ヶ月冷却後、Ge(Li)半導体検出器と4096チャンネル波高分析器で10000秒間 $\gamma$ 線スペクトルの測定を行った。短寿命核種、長寿命核種の定量には、化学試薬を調製した標準試料やNBSのガラス標準試料No.89やNo.621、工業技術院地質調査所で調製した岩石標準試料のJB-1やJG-1および米国地質調査所のG-2などを標準に用いた。定量に用いた主な $\gamma$ 線のエネルギーと半減期を表1に示す。

## 3 結果と考察

### 3、1 古代ガラスの組成

以下に、ガラスの種類や原料、およびガラスの製造法に関する基礎的な知見を述べておく。一般にガラスの種類は、主成分に基づいて分類されている。ガラスの主成分は、ケイ素 Si、アルミニウム Al、ナトリウム Na、カリウム K、マグネシウム Mg、鉄 Fe、カルシウム Ca、チタン Ti、マンガン Mn、鉛 Pb の10元素である。ガラスは、これら10元素の酸化物として表現される。わが国で出土するガラスの組成には、ソーダ石灰系ガラス、カリ石灰系ガラスおよび鉛ガラスがある。ガラスの種類は酸化鉛とケイ酸を主成分とする鉛ガラスと、ケイ酸とアルカリ成分を主成分とするアルカリ石灰ガラスの二種類に大別されている。ケイ酸とアルカリ成分を主成分とするアルカリ石灰ガラスでは、主なアルカリをナトリウムとするガラスをソーダ石灰系ガラス、主なアルカリをカリウムとするガラスをカリ石灰系ガラスとして区分している<sup>1)</sup>。

ガラス原料の重要な成分は、天然砂や長石、並びに天然ソーダなどのアルカリ分である。こうしたガラスの主成分原料の供給源には、ケイ素原料のケイ砂や天然砂、アルミニウム原料の長石や粘土、ソーダ原料の天然ソーダや芒硝、カリウム原料の植物灰や硝石、石灰原料である石灰石や貝殻およびケイ酸原料の不純物などがある。ガラスは、これらの原料に着色剤などの副原料を加えて、調合・熔融されて人工的に合成される。したがって、ガラス組成の種類の違いは、ガラスの主成分となる原料の調合率の過多の差異で生じていると考えることができる。

またガラスを特徴付ける要素に着色剤に関する情報がある。ガラスに微量に含まれるガラスの色を支配する金属酸化物を一般に着色剤と呼ぶが、表2に古代ガラスに用いられている主な着色剤を示しておく。金属酸化物を用いたガラスの着色では、ガラスを合成する時の熔融状態が酸化雰囲気であるのか還元雰囲気であるのかの違いだけでなく、ガラス組成の違いによっても発色が異なることが知られている。

## 7 鑑定分析

### 3、2 分析結果

有馬遺跡では、青色と紺色の2種類の色調を示すガラス玉が多数出土している。図1と図2に、有馬遺跡で出土する代表的な青色と紺色のガラス玉の蛍光X線スペクトルを示す。図1は淡い青色の色調をした小玉の蛍光X線スペクトルであり、図2は紺色をした中玉の蛍光X線スペクトルである。通常に用いられている条件下での蛍光X線分析では、原子番号20のカルシウム Ca よりも原子番号が大きい元素が測定できる。励起エネルギーが高い  $^{241}\text{Am}$  を線源に用いたことで、原子番号56のバリウム Ba の  $K\beta$  線 (36.376keV) まで測定できる。蛍光X線スペクトルで元素名を示していないピークは、 $^{241}\text{Am}$  線源からのバックグラウンドによるものである。

青色のガラス玉の蛍光X線スペクトルは、鉄 Fe、銅 Cu、鉛 Pb、スズ Sn、銀 Ag のピークが認められる。青色のガラス玉は、着色剤に由来する銅に富んでいる。青色のガラス玉にみられる顕著なピークにスズがあるが、これはわが国の青色の古代ガラスに見られる傾向である。着色剤の銅の原料に黄銅鉱  $\text{CuFeS}_2$  を用いたと考えるとスズを今有する理由が理解できる。その理由とは、黄銅鉱は黄錫鉱  $\text{Cu}_2\text{FeSnS}_4$  を伴うことによる。

紺色のガラス玉の蛍光X線スペクトルは、マンガン Mn、鉄 Fe、バリウム Ba のピークが認められる。紺色のガラスは、バリウムやマンガに富む特徴がある。今回の蛍光X線分析ではコバルトの分析は困難であったが、色調からコバルトによる着色と判断される。コバルトを用いると、数百ppmの濃度でガラスの着色が可能である。コバルトとマンガンは強い正の相関を示すので、マンガに富むのは、コバルト着色であることを示唆するものであろう。また、鉄も着色剤として用いられたものと思われる。

蛍光X線分析の結果から、鉛の含有率の違いに基づいて、簡便に鉛ガラスとアルカリ石灰ガラスの識別をすることが可能である。鉛のピークが全くみられない紺色のガラス玉はアルカリ石灰ガラスと判断される。青色のガラス玉には、鉛のピークが認められるが、その鉛の含有量は、X線強度から普通の鉛ガラスよりはるかに少ないことが分る。

鉛の含有率は、密度測定から推察することができる。密度 ( $\text{g}/\text{cm}^3$ ) とは、単位体積あたりの重量である。密度は、組成と密接な関連があり、鉛やバリウムなどの含有率が増すと、ガラスの密度は大きくなることが知られている。例えばアルカリ石灰ガラスの密度はおよそ2.5であるが、鉛ガラスでは3.0~4.5の値となる。青色のガラス玉の密度は2.6~2.8の付近に分布していることから、鉛を含有するアルカリ石灰ガラスと看做すことができる。極くわずかの鉛を含有する青色ガラスは特異的なガラスであり、鉛ガラスか或はアルカリ石灰ガラスかという従来の分類法で識別することは甚だ困難である。したがって、鉛ガラスやアルカリ石灰ガラスと異なる点に着目して、鉛アルカリガラスと呼ぶことにする。後に示すが、わが国では多数の鉛アルカリガラスが出土している。微量の鉛が含まれる理由であるが、黒鉱をガラス原料に用いたと考えると理解できる。黒鉱は、バリウム、鉛、銅、銀、ヒ素などが濃集している。

一例であるが、バリウムに富む鉛アルカリガラスもある。図3に、奈良時代或は平安時代と見られるグリッドで出土した青緑色のガラス玉 (SJ112-1) の蛍光X線スペクトルを示す。図1に示した青色の鉛アルカリガラスとは、バリウムの含有率に著しい差があることが分る。このガラスは、有馬遺跡ではむしろ特異的なガラスであると言えるだろう。

青色と紺色のガラスは、鉛やバリウムの含有率が異っていると見えよう。蛍光X線スペクトルを見ると、ガラス玉は色調毎に概して類似していることが分かる。また、表面観察からでは、色調毎に同様の溶融状態であると推察される。溶融状態や組成が各々の色調毎に類似している理由を、ガラスの製造条件に求めるこ

ともできるだろう。例えば有馬遺跡で出土した青色のガラス玉の総重量はおよそ10g前後になるが、現在の技術ではこの程度の重量のガラスは小さな坩堝を用いて一回で溶融することも可能である。もし一度の溶融でつくられたガラスを用いたとすると、ガラス玉の材質はよく類似しているだろう。古代においてもガラスの溶融が比較的簡便に行われたと考えると、大規模の施設は不要であるので、ガラスの生産跡が発見されない理由も理解しやすい。

蛍光X線分析の結果を要約すると、次のようになる。有馬遺跡で出土した主なガラス玉は、青色と紺色の2つの色調である。紺色のガラス玉はバリウムに富むアルカリ石灰ガラスであり、青色のガラス玉はバリウムが少ない鉛アルカリガラスである。さらにバリウムに富む鉛アルカリガラスの青緑色のガラス玉があるが、出土地点の推定年代が奈良時代或は平安時代ということから、むしろ例外として考えた方がよいと思われる。化学組成の内訳を表3に示すが、有馬遺跡出土のガラス玉は3つのグループに分類できる。

P I X E法は、微量の試料について、迅速に非破壊で多元素を同時に分析できる特徴を持っている。非破壊法であるP I X E法は、試料採取ができない貴重な文化財資料の材質分析では極めて有効な手法であると言えるだろう。このような特徴をもつP I X E法を用いてガラスの材質分析を行なった。P I X E分析で検出された元素は、ケイ素 Si、カリウム K、カルシウム Ca、チタン Ti、マンガン Mn、鉄 Fe、銅 Cu、鉛 Pb、ストロンチウム Sr、スズ Sn である。P I X E法では、ケイ素 Si、カリウム K、カルシウム Caなどのガラスの主成分の殆どを非破壊で分析することができる。P I X E法を用いると、K/Ca 比を求めることができるので、古代ガラスのうちアルカリ石灰ガラスについて、完全非破壊で簡便にソーダ石灰系ガラスとカリ石灰系ガラスの分類ができるという可能性もある。また、P I X E法は表面分析であるからマトリックス効果の影響が小さくて、X線強度は試料中の元素組成の割合を比較的よく再現しているとみることができる。図4にP I X Eスペクトルを示す。

核的手法を用いる放射化法は、希土類元素などの化学的性質が類似する元素を化学分離せずに定量できるなどの特徴がある。試料を採取することができた3点の青色のガラス試料について、中性子放射化分析による定量を行い、ガラス組成や着色剤について検討した。表4に、中性子放射化分析の結果を示す。中性子放射化分析では、主成分のケイ素と鉛については定量ができない。定量結果は、ナトリウム  $\text{Na}_2\text{O}$  の含有率は1%以下であるが、カリウム  $\text{K}_2\text{O}$  を10%程度含むガラスである。アルカリ成分については、カリウムの含有率がナトリウムよりも高いことから、基本的にはカリ石灰系ガラスであると言えるだろう。わが国で出土するアルカリ石灰ガラスはナトリウムに富むが、鉛ガラスにはカリウムがナトリウムの含有率よりも高い傾向がある。3試料の定量値は、類似している。着色剤に用いられた銅の含有率が高いなど、中性子放射化分析の結果は、蛍光X線分析の結果と良い対応を示している。

### 3、3 有馬遺跡で出土したガラス玉の化学組成の特徴

第1は、着色剤についての知見である。結果を検討すると、青色のガラス玉は銅 Cu、鉄 Fe を、紺色のガラス玉はコバルト Co、銅 Cu、鉄 Fe を着色剤に用いているものと考えられる。

第2は、ガラス組成に関する知見である。有馬遺跡で出土したガラス玉は、鉛アルカリガラスとアルカリ石灰ガラスの2つの組成に分類される。青色をしたガラス玉は鉛アルカリガラスであり、紺色をしたガラス玉はアルカリ石灰ガラスである。鉛アルカリガラスと名付けた青色のガラス玉は、基本的にはケイ素とカルシウム、カリウムを主成分とするアルカリ石灰ガラス（カリ石灰系ガラス）である。有馬遺跡出土の青色のガラス玉は、アルカリ石灰ガラスには一般には含まれないとされている鉛を、副成分として含有する。今回は非破壊法による分析だけが許可されていたという理由から、鉛の定量分析をすることはできなかったが、



## 7 鑑定分析

過去の分析データや今回の蛍光X線分析の結果などから判断すると、鉛の含有率は、およそ1%以下程度であると推定される。アルカリ石灰ガラスにわずかに鉛を含むガラス組成は、有馬遺跡の他には、弥生時代後期の青色のガラス玉（静岡県袋井市愛野・向山遺跡<sup>2)</sup>）や、五世紀前後の古墳時代前期の関東地方の遺跡で出土する紺色のガラス玉（群馬県邑楽郡大泉町古海原前古墳<sup>3)</sup>や神奈川県厚木市吾妻坂遺跡<sup>4)</sup>）、並びに古墳時代後期の東北地方の遺跡の紺色のガラス玉（福島県福島市月ノ輪山古墳<sup>5)</sup>）など多数の出土例がある。アルカリ石灰ガラスに鉛を含む鉛アルカリガラスは、関東地方や東北地方の弥生時代後期から古墳時代後期の遺跡で出土するガラスの代表的な組成であると言えよう。このような原料の相違を示すと推察されるガラス組成の特徴に関する知見は、わが国のガラス製造の歴史や技術の伝播、並びに文化の交流や交易を考察する上ではきわめて重要である。

第3は、微量成分として含有するバリウムについての知見である。バリウムを主成分として含有するガラスは、古代中国の戦国時代や漢代の鉛バリウムガラスが良く知られているが、今回分析した試料は、主成分としてバリウムを含有する例ではない。蛍光X線分析の結果は、試料間にバリウム含有率の明らかな差異があることを示している。従来の分析結果を基に蛍光X線分析の測定値を判断すると、バリウムに富む紺色のガラス玉で、バリウムの含有率はおよそ2000ppm程度であると推定される。古代ガラスに微量に含有するバリウムの供給源を黒鉱に求めると、バリウムの含有率の差異はガラス原料の違いを示すものであると考えられる。

## 謝 辞

東京大学理学部の鹿園直建氏、東京大学総合研究資料館の清水正明氏からは、黒鉱試料とそれに関連する種々の有益な情報の提供を受けた。東京大学地震研究所の高橋春男氏には古代のガラス原料についてのいろいろな示唆をしていただいた。深く感謝する次第である。

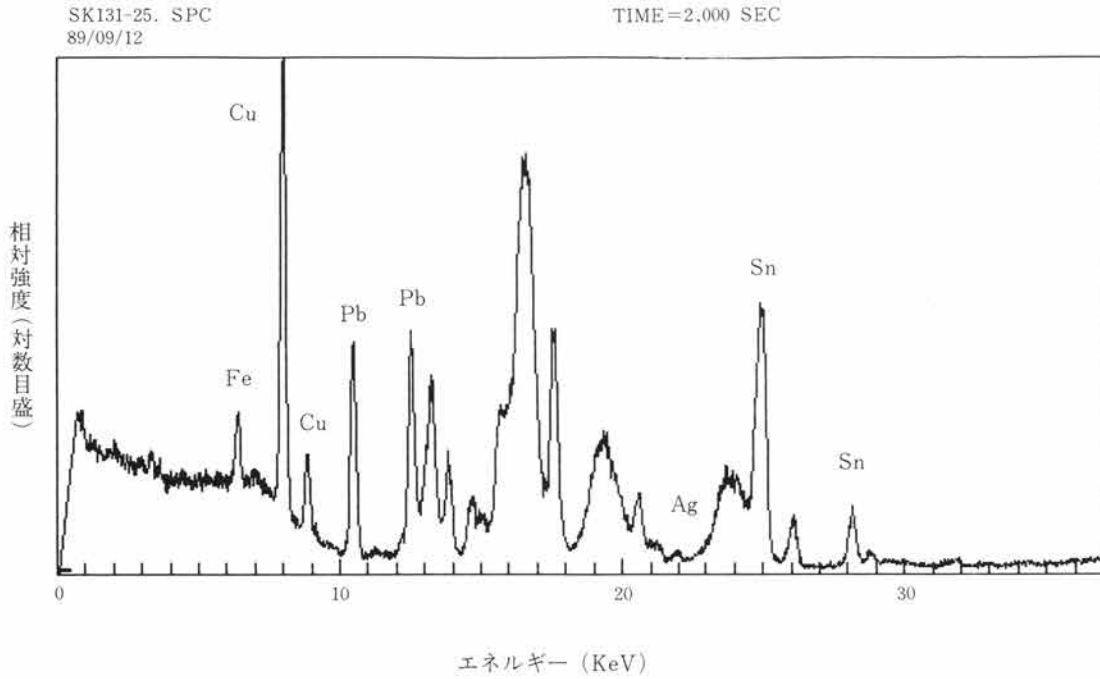
蛍光X線分析では、東京大学アイソトープ総合センターの奥村尚久氏の御協力を戴いた。PIXE分析に関しては、東京大学原子力研究総合センターの小林紘一氏、東京大学理学部素粒子国際センターの山下博氏、東京大学宇宙線研究所の大橋英雄氏、および東京大学遺跡調査室の西田泰民氏の御協力を戴いた。記して感謝するものである。

## 参考文献

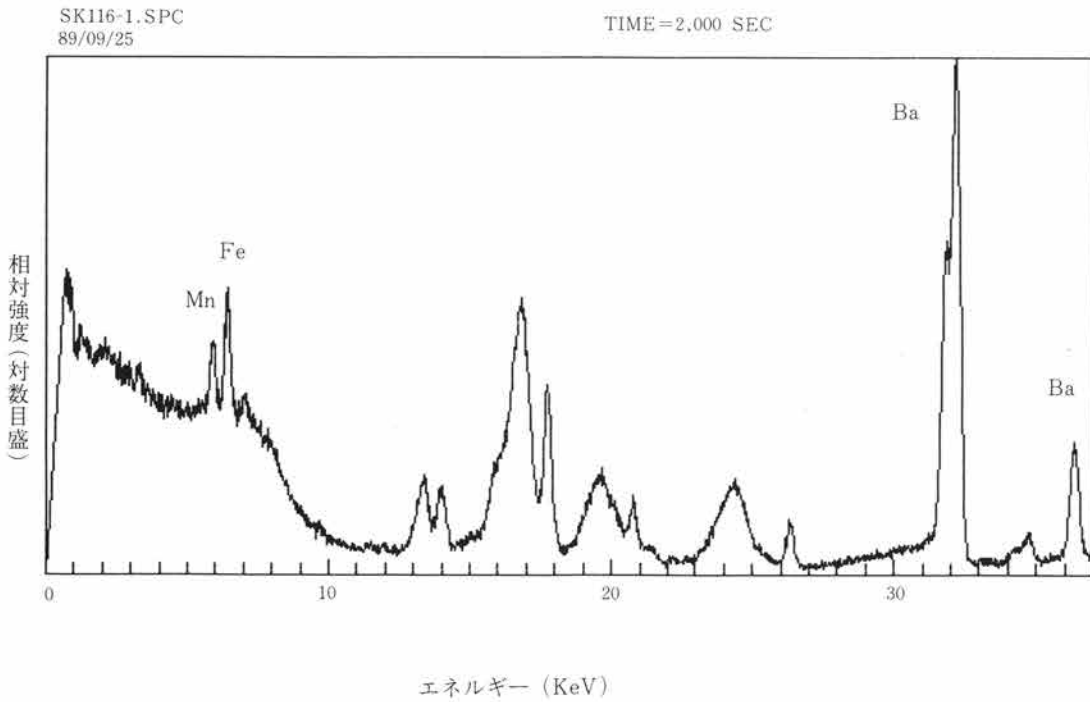
- 1) 富沢 威：1986 「古代ガラスの化学—古代オリエントから日本まで」『続考古学のための化学10章』 馬淵久夫、富永 健編 東京大学出版会。
- 2) 富沢 威：未発表。
- 3) 富沢 威、馬淵久夫、富永 健：1988 日本文化財科学会第5回大会講演（東京）。
- 4) 富沢 威：未発表。
- 5) 富沢 威、富永 健、小泉好延、馬淵久夫：1989 「福島県福島市鎌田字月ノ輪山1号墳で出土したガラス玉の材質分析」 月ノ輪山1号墳発掘調査報告書。



(5) 有馬遺跡出土ガラス製品の元素分析



第396図 蛍光X線スペクトル(鉛アルカリガラス、試料番号189)

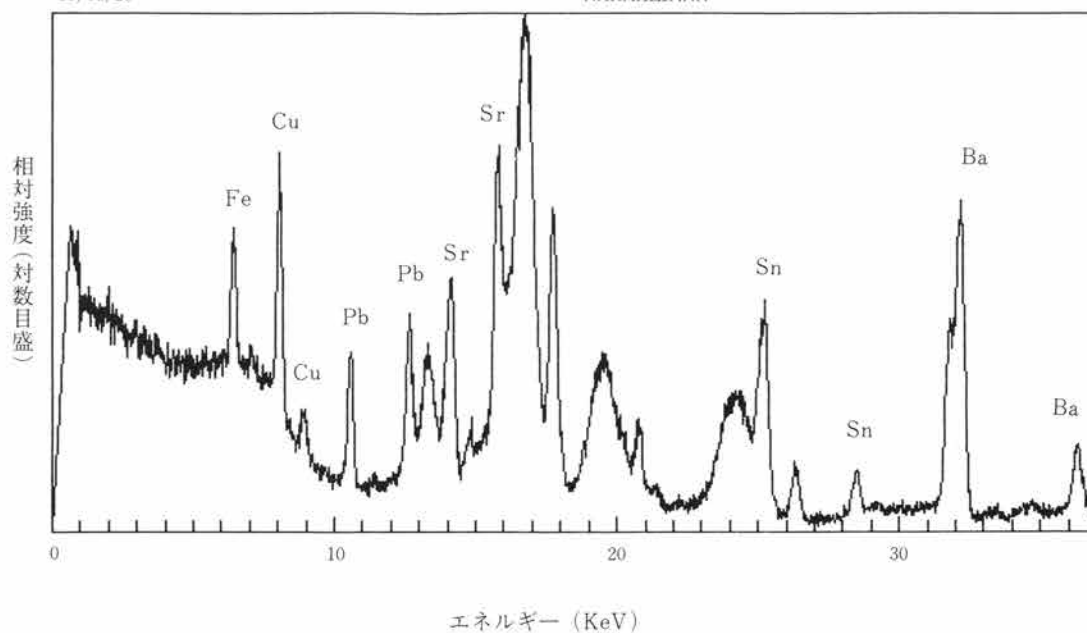


第397図 蛍光X線分析スペクトル(アルカリ石灰ガラス、試料番号157)

7 鑑定分析

SJ112-1.SPC  
89/08/29

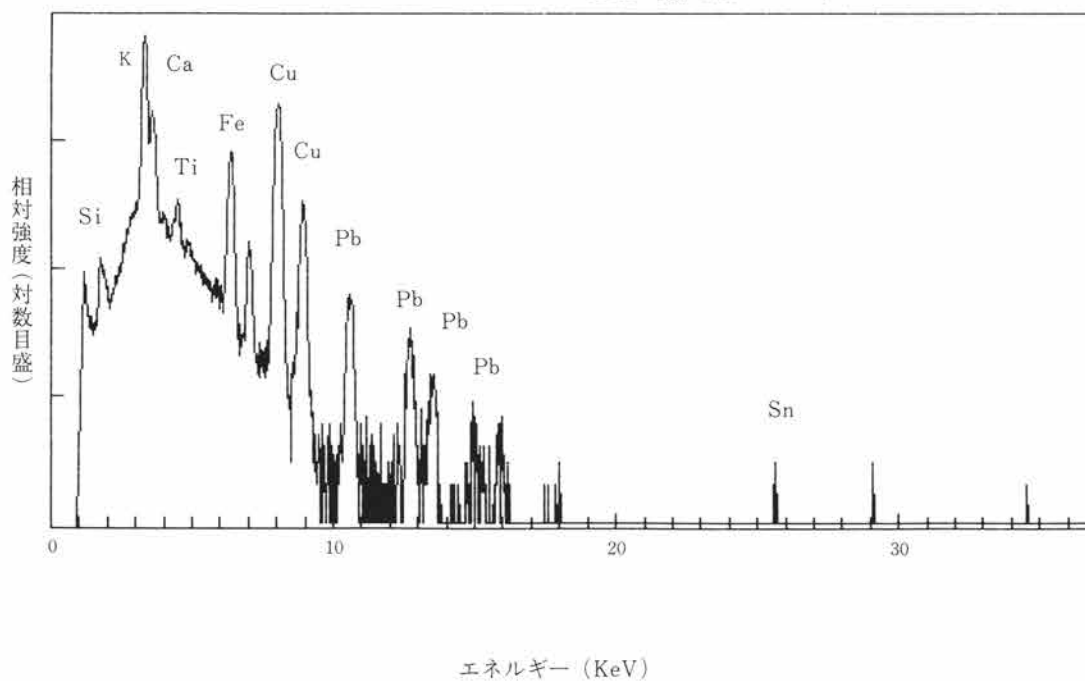
TIME=2,000 SEC  
NARAHEIANN



第398図 蛍光X線分析スペクトル(バリウムに富む鉛アルカリガラス、試料番号303)

900117 .014

TIME=495 SEC



第399図 PIXEスペクトル(鉛アルカリガラス、試料番号344)

## (5) 有馬遺跡出土ガラス製品の元素分析

表1 中性子放射化分析の定量に用いた核種の $\gamma$ 線のエネルギーと半減期

元素	核種	半減期	$\gamma$ 線エネルギー(keV)
Al	<sup>28</sup> Al	2.3 min	1779
V	<sup>52</sup> V	3.76 min	1434
Cu	<sup>66</sup> Cu	5.10 min	1039
Ti	<sup>51</sup> Ti	5.8 min	320
Ca	<sup>49</sup> Ca	8.8 min	3084
Mg	<sup>27</sup> Mg	9.5 min	1014
Mn	<sup>56</sup> Mn	2.58 hr	847
K	<sup>42</sup> K	12.52 hr	1525
Na	<sup>24</sup> Na	15.0 hr	1369
As	<sup>76</sup> As	26.40 hr	559
La	<sup>140</sup> La	40.2 hr	1596
Sm	<sup>153</sup> Sm	47.1 hr	103
U	<sup>239</sup> Np	2.35 d	106
Yb	<sup>175</sup> Yb	4.2 d	396
Lu	<sup>177</sup> Lu	6.7 d	208
Ba	<sup>131</sup> Ba	12.0 d	496
Rb	<sup>86</sup> Rb	18.7 d	1076
Th	<sup>233</sup> Pa	27.0 d	312
Cr	<sup>51</sup> Cr	27.8 d	320
Ce	<sup>141</sup> Ce	32.5 d	145
Hf	<sup>181</sup> Hf	42.3 d	482
Fe	<sup>59</sup> Fe	45.0 d	1292
Sb	<sup>124</sup> Sb	60.1 d	1691
Tb	<sup>160</sup> Tb	73 d	299
Sc	<sup>46</sup> Sc	83.8 d	1121
Ta	<sup>182</sup> Ta	115.1 d	1221
Ag	<sup>110m</sup> Ag	253 d	658
Co	<sup>60</sup> Co	5.26 y	1333
Eu	<sup>152</sup> Eu	12.3 y	1407

表2 古代ガラスに用いられる主な着色剤

	酸化条件	還元条件
鉄	黄褐色	青緑色
コバルト	紺青色	紺青色
マンガン	紫色	無色
クロム	黄緑色	エメラルド緑
カドミウム	無色	黄色
ニッケル	すみれ色(カリガラス) 褐色(ソーダガラス)	すみれ色(カリガラス) 褐色(ソーダガラス)
銅	青色	銅赤*
金	金赤*	—

\*コロイド着色、再加熱で発色させる。

表3 有馬遺跡のガラス組成の内訳

ガラスの組成	色調	個体数
鉛アルカリガラス	青色	328
バリウムに富む鉛アルカリガラス	青緑色	1
バリウムに富むアルカリ石灰ガラス	紺色	19

表4 中性子放射化分析による定量結果

試料番号	346	347	348
色調 試料重量	青色 23.3 (mg)	青色 7.9 (mg)	青色 28.7 (mg)
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	4.78	4.2	6.36
Na <sub>2</sub> O	0.58	0.69	0.63
K <sub>2</sub> O	10.6	8.6	11.4
CaO	n.d.	n.d.	n.d.
TiO <sub>2</sub>	0.22	0.29	0.25
MgO	1.2	0.92	n.d.
MnO	n.d.	0.007	n.d.
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.63	0.66	0.58
Sc(ppm)	2.8	1.9	3.1
V	20	22	20
Cr	14	15	14
Co	2.5	4.3	2.1
Cu	14000	13000	8400
As	99	180	79
Ag	18	13	2.6
Rb	480	470	440
Sb	46	36	13
Ba	n.d.	n.d.	n.d.
La	8.6	5.0	9.0
Ce	18	11	22
Sm	1.4	0.84	1.4
Eu	0.33	0.52	0.33
Tb	0.15	0.18	n.d.
Yb	0.91	0.76	0.87
Lu	0.20	n.d.	0.21
Hf	1.5	n.d.	1.5
Ta	0.92	n.d.	0.65
Th	3.6	3.7	3.3
U	n.d.	n.d.	n.d.

n.d. 検出限界以下で検出できず。

表5-1 ガラス試料の一覧

試料番号	試料名称	試料重量	形状	色調	ガラス組成	分析法	特徴	遺物番号
1	SK41-1	48.40(mg)	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		2 A号墓3
2	SK45-2	54.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		2 B号墓3
3	SK45-3	74.00	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 4
4	SK45-4	85.45	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 5
5	SK45-5	72.80	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 6
6	SK45-6	79.85	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 7
7	SK45-7	77.47	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 8

7 鑑定分析

表5-2 ガラス試料の一覧

試料番号	試料名称	試料重量	形状	色調	ガラス組成	分析法	特徴	遺物番号
8	SK45-8	74.10(mg)	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		2 B号墓 9
9	SK45-9	60.93	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 10
10	SK45-10	63.45	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 11
11	SK45-11	69.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 12
12	SK45-12	79.45	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 13
13	SK45-13	61.20	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 14
14	SK45-14	71.15	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 15
15	SK45-15	55.60	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 16
16	SK45-16	43.64	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 17
17	SK45-17	44.95	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 18
18	SK45-18	62.40	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 19
19	SK45-19	40.55	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 20
20	SK45-20	40.20	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 21
21	SK45-21	72.40	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 22
22	SK54-8	46.20	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		3号墓 11
23	SK54-9	34.60	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 12
24	SK54-10	33.50	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 13
25	SK54-11	33.43	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 14
26	SK54-12	31.88	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 15
27	SK54-13	28.90	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 16
28	SK54-14	31.27	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 17
29	SK54-15	35.30	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 18
30	SK72-2	45.51	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		土器棺D 5
31	SK72-3	44.25	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 6
32	SK72-4	48.30	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 7
33	SK72-5	40.00	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 8
34	SK72-6	46.40	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 9
35	SK72-7	55.15	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 10
36	SK75-2	37.50	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		4 B号墓 2
37	SK78-1	63.32	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 3
38	SK83-1	29.22	小玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	5号墓 1
39	SK83-2	38.82	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 2
40	SK83-3	36.22	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 3
41	SK83-4	35.92	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 4
42	SK83-5	39.27	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 5
43	SK83-6	37.17	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 6
44	SK83-7	36.07	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 7
45	SK83-8	52.12	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 8
46	SK83-9	29.92	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 9
47	SK83-10	24.77	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 10
48	SK83-11	34.87	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 11
49	SK83-12	29.32	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 12
50	SK83-13	24.62	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 13
51	SK83-14	31.17	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 14
52	SK83-15	51.27	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 15
53	SK83-16	38.77	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 16
54	SK83-17	31.72	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 17
55	SK83-18	28.22	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 18
56	SK83-19	22.77	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 19
57	SK83-20	31.07	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 20
58	SK83-21	35.47	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 21
59	SK83-22	24.52	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 22
60	SK83-23	31.82	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 23
61	SK83-24	32.12	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 24
62	SK83-25	28.42	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 25
63	SK83-26	24.39	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 26
64	SK83-27	29.57	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 27
65	SK83-28	30.57	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 28
66	SK83-29	30.37	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 29
67	SK83-30	22.17	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 30

## (5) 有馬遺跡出土ガラス製品の元素分析

表5-3 ガラス試料の一覧

試料番号	試料名称	試料重量	形状	色調	ガラス組成	分析法	特徴	遺物番号
68	SK83-31	33.67(mg)	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		5号墓 31
69	SK83-32	43.77	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 32
70	SK83-33	61.09	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 33
71	SK83-34	27.37	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 34
72	SK83-35	33.17	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 35
73	SK83-36	31.82	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 36
74	SK83-37	30.07	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 37
75	SK83-38	28.67	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 38
76	SK83-39	34.27	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 39
77	SK83-40	34.82	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 40
78	SK83-41	24.30	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 41
79	SK83-42	25.20	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 42
80	SK83-43	34.20	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 43
81	SK83-44	26.50	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 44
82	SK83-45	29.30	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 45
83	SK83-46	28.30	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 46
84	SK83-47	29.60	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 47
85	SK83-48	27.40	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 48
86	SK83-49	35.80	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 49
87	SK83-50	26.55	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 50
88	SK83-51	27.00	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 51
89	SK83-52	27.35	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 52
90	SK83-53	26.50	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 53
91	SK83-54	26.05	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 54
92	SK83-55	24.48	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 55
93	SK83-56	27.00	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 56
94	SK83-57	38.15	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 57
95	SK83-58	24.18	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 58
96	SK83-59	28.80	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 59
97	SK83-60	36.00	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 60
98	SK83-61	27.25	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 61
99	SK83-62	30.36	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 62
100	SK83-63	21.25	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 63
101	SK83-64	32.75	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 64
102	SK83-65	21.70	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 65
103	SK83-66	24.05	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 66
104	SK83-67	25.70	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 67
105	SK83-68	25.25	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 68
106	SK83-69	23.90	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 69
107	SK83-70	22.05	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 70
108	SK83-71	22.85	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 71
109	SK83-72	28.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 72
110	SK83-73	17.60	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 73
111	SK83-74	25.65	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 74
112	SK83-75	34.48	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 75
113	SK84-2	32.70	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 76
114	SK84-3	22.15	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 77
115	SK84-4	31.45	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 78
116	SK84-5	29.60	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 79
117	SK84-6	35.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 80
118	SK84-7	22.35	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 81
119	SK84-8	45.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 82
120	SK84-9	43.60	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 83
121	SK85-3	44.05	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 89
122	SK85-4	55.60	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 90
123	SK85-5	39.16	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 91
124	SK85-6	28.75	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 92
125	SK85-7	53.60	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 93
126	SK85-8	55.35	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 94
127	SK85-9	58.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		” 95

## 7 鑑定分析

表5-4 ガラス試料の一覧

試料番号	試料名称	試料重量	形状	色調	ガラス組成	分析法	特徴	遺物番号
128	SK85-10	35.20(mg)	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		5号墓 96
129	SK85-11	54.25	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 97
130	SK85-12	43.25	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 98
131	SK85-13	55.85	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 99
132	SK85-14	52.80	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 100
133	SK85-15	52.15	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 101
134	SK85-16	52.65	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 102
135	SK85-17	43.95	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 103
136	SK85-18	35.20	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 104
137	SK85-19	43.25	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 105
138	SK85-20	破片	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		-
139	SK87-1	48.25	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 107
140	SK107-3	116.25	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		20号墓 3
141	SK107-4	64.00	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 4
142	SK108-1	36.30	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		19号墓 2
143	SK108-2	31.30	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 3
144	SK109-3	92.50	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 6
145	SK109-4	91.38	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 7
146	SK109-5	79.15	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 8
147	SK109-6	92.57	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 9
148	SK111-3	27.90	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 13
149	SK113-2	393.15	中玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	// 15
150	SK113-3	439.15	中玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	// 16
151	SK113-4	304.20	中玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	// 17
152	SK113-5	364.90	中玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	// 18
153	SK113-6	183.85	中玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	// 19
154	SK113-7	149.25	中玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	// 20
155	SK113-8	215.05	中玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	// 21
156	SK113-9	147.75	中玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	// 22
157	SK116-1	502.10	中玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	18号墓 4
158	SK116-2	322.80	中玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	// 5
159	SK116-3	20.35	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 6
160	SK116-4	27.15	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 7
161	SK116-5	29.21	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 8
162	SK117,8-1	48.05	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 11
163	SK117,8-2	31.00	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 12
164	SK117,8-3	40.95	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 13
165	SK117,8-4	33.24	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 14
166	SK123-2	46.70	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		土器棺A11
167	SK123-3	52.75	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 12
168	SK123-4	55.05	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 13
169	SK131-5	63.68	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		20号墓 10
170	SK131-6	99.05	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 11
171	SK131-7	88.00	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 12
172	SK131-8	69.95	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 13
173	SK131-9	83.65	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 14
174	SK131-10	76.85	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 15
175	SK131-11	67.60	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 16
176	SK131-12	79.30	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 17
177	SK131-13	61.00	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 18
178	SK131-14	50.62	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 19
179	SK131-15	54.25	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 20
180	SK131-16	51.20	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 21
181	SK131-17	58.50	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 22
182	SK131-18	52.15	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 23
183	SK131-19	43.84	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 24
184	SK131-20	40.85	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 25
185	SK131-21	44.40	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 26
186	SK131-22	54.00	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 27
187	SK131-23	67.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 28

## (5) 有馬遺跡出土ガラス製品の元素分析

表5-5 ガラス試料の一覧

試料番号	試料名称	試料重量	形状	色調	ガラス組成	分析法	特徴	遺物番号
188	SK131-24	98.20(mg)	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		20号墓 29
189	SK131-25	87.70	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 30
190	SK131-26	破片	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 31
191	SK132-1	26.96	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		19号墓 23
192	SK132-2	23.30	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 24
193	SK132-3	21.77	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 25
194	SK132-4	20.35	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 26
195	SK132-5	17.95	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 27
196	SK132-6	21.05	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 28
197	SK132-7	17.90	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 29
198	SK132-8	13.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 30
199	SK132-9	25.07	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 31
200	SK132-10	21.75	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 32
201	SK132-11	12.40	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 33
202	SK133-1	40.80	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 34
203	SK133-2	24.80	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 35
204	SK133-3	破片	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		-
205	SK135-1	38.90	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 36
206	SK135-2	27.55	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 37
207	SK135-3	23.80	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 38
208	SK135-4	28.90	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 39
209	SK137-1	39.60	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		17号墓 1
210	SK137-2	39.85	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 2
211	SK137-3	39.88	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 3
212	SK137-4	31.05	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 4
213	SK137-5	34.76	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 5
214	SK137-6	27.16	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 6
215	SK137-7	35.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 7
216	SK137-8	16.45	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 8
217	SK137-9	32.60	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 9
218	SK138-1	39.95	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 10
219	SK138-2	41.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 11
220	SK138-3	32.90	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 12
221	SK138-4	39.15	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 13
222	SK138-5	42.35	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 14
223	SK138-6	35.62	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 15
224	SK138-7	32.55	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 16
225	SK138-8	44.96	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 17
226	SK138-9	29.30	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 18
227	SK138-10	29.50	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 19
228	SK140-1	25.15	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		19号墓 40
229	SK140-2	18.21	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 41
230	SK140-3	破片	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 42
231	SK365-1	42.60	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		13号墓 1
232	SK365-2	20.60	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 2
233	SK365-3	22.70	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 3
234	SK365-4	22.53	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 4
235	SK365-5	22.35	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 5
236	SK366-1	56.61	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 6
237	SK366-2	47.40	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 7
238	SK366-3	50.40	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 8
239	SK366-4	42.40	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 9
240	SK366-5	46.85	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 10
241	SK366-6	39.75	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 11
242	SK366-7	39.60	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 12
243	SK366-8	41.95	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 13
244	SK366-9	19.05	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 14
245	SK369-4	44.30	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		土器棺B10
246	SK369-5	25.40	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 11
247	SK369-6	19.95	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 12



## 7 鑑定分析

表5-6 ガラス試料の一覧

試料番号	試料名称	試料重量	形状	色調	ガラス組成	分析法	特徴	遺物番号
248	SK369-7	14.90 (mg)	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		土器棺B13
249	SK369-8	14.55	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 14
250	SK369-9	12.55	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 15
251	SK369-10	33.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 16
252	SK369-11	25.95	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 17
253	SK369-12	20.05	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 18
254	SK369-13	7.40	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 19
255	SK369-14	19.25	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 20
256	SK369-15	17.45	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 21
257	SK369-16	破片	小玉	緑色	鉛アルカリガラス	XRF		—
258	SK373-2	35.58	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 25
259	SK373-3	28.80	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 26
260	SK373-4	28.80	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 27
261	SK373-5	29.85	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 28
262	SK388-1	43.16	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		7号墓 2
263	SK390-1	28.64	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 3
264	SK401-1	34.75	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		14号墓 1
265	SK404-2	38.90	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		土器棺A16
266	SK404-3	47.90	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 17
267	SK409-1	39.35	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		13号墓 18
268	SK421-1	28.90	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		8号墓 1
269	SK421-2	17.75	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 2
270	SK421-3	26.55	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 3
271	SK421-4	24.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 4
272	SK424-3	300.20	中玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	12号墓 7
273	SK424-4	254.80	中玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	// 8
274	SK424-5	40.25	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 9
275	SK424-6	38.83	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 10
276	SK424-7	36.75	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 11
277	SK424-8	32.71	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 12
278	SK424-9	33.05	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 13
279	SK424-10	24.25	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 14
280	SK424-11	25.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 15
281	SK424-12	15.65	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 16
282	SK424-13	20.35	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 17
283	SK425-3	32.22	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 20
284	SK426-2	72.65	中玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		10号墓 2
285	SK427-5	25.20	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 6
286	SK427-6	25.15	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 7
287	SK427-7	18.55	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 8
288	SK428-1	26.15	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 9
289	SK430-3	27.90	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		9号墓 14
290	SK432-1	23.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 16
291	SK434-1	34.00	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		11号墓 1
292	SK434-2	31.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 2
293	SK435-2	30.10	小玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	// 4
294	SK435-3	24.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 5
295	SK435-4	20.45	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 6
296	SK435-5	18.70	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 7
297	SK436-1	29.80	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 8
298	SK436-2	23.90	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 9
299	SK441-1	28.40	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		6号墓 2
300	SK450-1	43.90	小玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	23号墓 3
301	SK451-2	破片	小玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	—
302	SK452-1	19.80	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 2
303	SJ112-1	150.90	中玉	靑緑	鉛アルカリガラス	XRF	Baに富む	—
304	SJ212-7	415.80	中玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	212住 9
305	SJ257-5	48.75	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		257住 20
306	SJ257-6	33.60	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 21
307	SZ1周溝-1	71.65	中玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		1号墓 14

## (5) 有馬遺跡出土ガラス製品の元素分析

表5-7 ガラス試料の一覧

試料番号	試料名称	試料重量	形状	色調	ガラス組成	分析法	特徴	遺物番号
308	SZ4南溝-1	破片(mg)	中玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	4 A号墓 5
309	SZ4南溝-2	42.30	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 6
310	SZ4南溝-3	36.70	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 7
311	SZ4南溝-4	37.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 8
312	SZ4南溝-5	36.55	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 9
313	SZ4南溝-6	32.20	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 10
314	SZ4南溝-7	34.30	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 11
315	SZ4南溝-8	38.35	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 12
316	SZ4南溝-9	31.05	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 13
317	SZ4南溝-10	33.70	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 14
318	SZ4南溝-11	30.70	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 15
319	SZ4南溝-12	33.20	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 16
320	SZ4南溝-13	36.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 17
321	SZ5-54	37.75	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		5号墓 161
322	SZ5-55	41.60	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 162
323	SZ6-152	67.60	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		6号墓 155
324	SZ6-153	47.20	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 156
325	SZ6-154	51.60	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 157
326	SZ6-155	52.45	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 158
327	SZ6-156	36.25	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF	// 159	
328	SZ6-157	32.03	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF	// 160	
329	SZ7-15	26.00	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF	7号墓 24	
330	SZ7-16	36.30	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF	// 25	
331	SZ7-17	36.00	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF	// 26	
332	SZ7-18	38.05	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF	// 27	
333	SZ7-19	66.82	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF	// 28	
334	SZ11-1	14.75	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF	11号墓 10	
335	SZ15-1	39.35	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF	15号墓 6	
336	A地区拡張区1	43.80	小玉	紺色	アルカリ石灰ガラス	XRF	Baに富む	包含層 53
337	A地区拡張区2	27.45	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 54
338	3S-1	38.65	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 51
339	土器留り1	23.90	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 52
340	不明-10	71.50	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 55
341	不明-11	33.10	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 56
342	不明-12	35.65	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 57
343	不明-13	29.00	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF		// 58
344	ARIG	19.44	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF、PIXE		—
345	ARIB	破片	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF、PIXE		—
346	ARIT	23.30	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF、NAA		—
347	ARI1	破片	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF、NAA		—
348	ARI2	28.70	小玉	青色	鉛アルカリガラス	XRF、NAA		—

\*XRF、PIXE、NAA は、それぞれ蛍光X線分析、PIXE分析、中性子放射化分析であることを示す。

\*\*No1~343の試料は、出土地点の確認がなされている。No344~348は、出土地点の確認できない試料である。

## 8 ま と め

## 1 集落の変遷

有馬遺跡における集落の形成は弥生後期第1期(後期前葉)に始まる。この時期にはH区に1軒、南へ140m隔ててF区に2軒の住居が見られる。後期第2期(中葉)はH区に2軒あり、F区に1軒この時期に属すると思われる273号住居がある。第1期、第2期の両時期とも第3期(後葉)に比べ格段に分布が希薄である。調査区が住居群の中心部からはずれた可能性を考慮する必要がある。北に隣接する有馬条里遺跡に中期末葉から後期第2期の住居が多数検出されていることから、後期第2期以前の集落の中心部はむしろ有馬条里遺跡にかかる区域にあったとみられる。この時期に該当する墓は認められない。

後期第3期に集落は急激に大規模化する。集落の拡大、または移動を契機としたものだろうか。後期第3期にはG区の傾斜面周縁部に帯状に2つの住居支群(H区住居支群、G区住居支群)を構成する。この二つの住居支群の間、及びG区住居支群の南に墓支群が形成される。この期の集落構成については次の項で詳述する。

古墳前期には第3期のH区住居支群の東端部に初頭段階と見られる一群の住居群が形成される。この住居群からの出土土器は古式土師器と櫛描文の樽式土器が混在し、86号住居で縄文を施す赤井戸式系の壺と甕を出土している。この7～8軒からなる住居群は相互に著しい近接や重複はなく、しかも弥生後期第3期の住居群域の住居との重複も見られない。しかしこの住居群と同期の畑(浅間C軽石層直下畑)が後期第3期の住居群域を覆っている。樽式土器が払拭される段階の住居(233号、234号)では前代の弥生期の住居群域内に延びている。一方、G区住居支群域では弥生後期末～古墳初頭段階の住居は205号と219号のみで他は櫛描文系統の要素が払拭された段階の住居である。これらの住居は同期のもの同士の重なりは見られないが、弥生後期の群域に完全に重なっている。この段階に属する82号住居はH区墓支群を侵し、17号墓を断ち切っている。ここでもH区住居支群の場合と同様に前代の群域を引き継いでいると認められる。弥生後期から古墳時代への移行期に集落構成=集団構成が引き継がれた状況を示している。こういった状況からこの弥生後期末～古墳初頭の一群や櫛描文土器が払拭される古墳前期の段階の住居群域は弥生後期の住居群域からこれと血縁的につながる同系統の集団により継承されたのではないかと推測される。そして古墳前期のH区、及びG区の住居支群は北から南に盛衰したと認められよう。

古墳中期の段階では調査区域内に検出された遺構はH区で、有馬火山灰層の直下に小範囲に検出された畑のみである。前代のH区の住居群域には既に廃棄され、埋没の進んだ竪穴住居の跡がすり鉢状の窪地として点在する状況を有馬火山灰面下に見ることができる。一帯に荒地と化したのだろうか。

古墳後期初頭段階の二ツ岳火山灰(FA)の降下直前には遺跡地全体的に整備された畑が営まれている。その広がり、遺跡地内に限っても延長500m、西方3kmに位置する吉岡村平石遺跡では同期の畑の良好な検出がなされており、また北方1kmに所在する有馬条里、中村遺跡においても広範囲に同様の畑が調査されている。ここには古墳社会の確立期における耕地の拡大に伴う村落景観の改変過程の一端をみることができる。

## 2 後期第3期の住居支群

H区住居支群は大小22軒の住居群からなる。支群の西及び北方向への広がり調査区域に限られていて不明である。南は232号住居を南限とし、東部では住居群域は同じ第3期に営まれた8号墓とその北の23号、24号墓と2～3mに近接する。以東には同期の住居は認められないのでここが群域の限界となる可能性が高い。この時期の住居と墓は至近距離に近接するが、相互の重複は認められない。241号住居と8号墓北側周溝との間隙は1m以内である。23号、24号墓の主体部と255号、263号住居との間は3～4mであり、もし、これらの墓が周溝を巡らしていたとしても、8号墓の場合と同様それぞれの領域は重なることはなかったろう。西南部では11号墓、12号墓、16号墓の主体部との間でも、その間は3～4mと、やはり同様な状況を見ることができる。

G区住居支群は幅30m北西—東南方向に帯状の群域を作る。群域の東南の限界は、202号住居が東南端に位置し、以東は広く遺構の空白地帯となっている。群域の西南部はG区の傾斜地の辺りで分布は希薄になるが、やや離れて極小型の住居が2軒一対をなして、傾斜地の裾部に占地している。群域の西北部は調査区外に延びている。南側の住居支群の更に南方向50m、G区の斜面上に2軒の住居を認める。調査区の西縁辺に位置しており、西方向に更に住居群が広がり、これが別の支群を形成するか否かは不明である。

## 3 後期第3期の墓支群

G、H両住居支群間には周溝墓・単位墓群8～9基からなるH区墓支群が幅15m前後の比較的密な帯状の群域を形成し、G区住居支群のさらに南には13基の周溝墓・単位墓群よりなるF・G区墓支群が比較的分散的に形成されている。F・G区墓支群墓は15号墓を北端とし、南端部は3号墓とする。この間、南北50mにわたる広域な墓域を形成している。この南北両墓支群はともに墓域内に同時期の住居が造られない。ただし古墳前期段階ではH区墓支群の南端部には82号住居が17号墓を切っ、墓域を侵している。



第397図 有馬遺跡の集落構成(弥生・古墳時代)

#### 4 住居支群と墓支群の構成

墓及び住居はそれぞれに群領域を異にする複数の支群を構成する。調査区内では住居、墓それぞれに2～3か所の支群を認める。調査区が遺構群域のどれ程の範囲を捕捉しているのか明らかではないので、不確定要素をはらむが、住居及び墓支群相互の間には位置関係、および遺構数において対応関係が想定できる。遺構数では、仮にH区墓支群にH区住居支群が対応するとして、単位墓群（主体部の最小単位群＝周溝墓など）が8～9基（1基当たり主体部3～5基含む）に対して、住居軒数は22軒である。他方、F・G区墓支群とG区住居支群が対応するとして、単位墓群13基に対して住居は25軒である。およそ住居軒数は単位墓群の2～3倍である。

単位墓群・周溝墓は最大10基、最小1基、平均値3.1基の主体部から構成されている。単位墓群・周溝墓の主体部は礫床・礫集積に特徴づけられる礫床墓であり、一部に土器棺を伴っている。それ以外の形式の主体部では19号墓のSK109が礫を伴わないことから土壌墓であった可能性が高い。この他に主体部の痕跡は認められない。この平均3.1基の主体部からなる単位墓群・周溝墓の背景には支群に対応する集団よりも1段階小さい集団の存在が想定される。他方これに対応するような小単位群が住居支群中に存在する蓋然性は大きい。

住居軒数は単位墓群・周溝墓の2～3倍である。南北両住居支群中には第3期の住居同士での重複や著しい近接、拡張が少なからず見られる。南住居支群では3軒の重複例も見られる。このような状況から同時併存住居数を半数以下と仮定すると、単位墓群、周溝墓に対応する最小単位集団（家族に相当する集団）の住居軒数は1～2軒である。しかし、有馬遺跡の住居配置からこの最小単位群の居住領域を明確に摘出するのは難しい。

#### 5 土器棺墓の群構成

土器棺墓は総数46基が認められる。土器棺は大・中型の壺、または甕をもって棺とし、別個体の土器を蓋として棺の開口部にあて、土壌内に直立、または斜位に埋置されるなどの状態で検出されている。そして土器棺内からは歯や玉類など副葬品を伴う場合もある。しかし土器棺と認めたもののうちでも開口部や蓋を欠損するなど遺存状態が不良で棺と認定する上の要件を十分備えていないものも少なくない。

土器棺の群構成の仕方には幾つかの形がある。第1は土器棺のみにより群域を形成する。ほとんどのものがこの形をとっており、調査区内にはA～E群とした5つの土器棺群を認めることができる。第2は単位墓群・周溝墓に伴う場合である。この形をとる例は非常に少なく、全体で5例である。5号、15号、21号では礫床墓の傍らに1基接して見られ、18号墓、20号墓では礫床墓からやや離れて、それぞれ1基の土器棺が検出されている。第3は単独に他の棺と数十m以上離れて設けられている例であるが、この形をとるものも前者と同様に少ない。

第1の土器棺による群域はG区を中心に、傾斜地に沿って帯状に形成される。A群は傾斜地の上部、B群はF・G区墓支群の西に沿い、傾斜が最も強い区域に群域を形成する。この区域には拳～頭大の礫が表出し、一帯に投棄された土器破片が多量に出土している。C群は傾斜が緩く、墓支群域の北端部15号墓の周囲に群を形成している。D群は墓支群中、4A号墓と5号墓の間の一画に小さな群を形成している。これらの土器棺墓は礫床墓が大方周溝を伴いながら2～10基の群を形成しているのに対して土器棺のほとんどは、この単位群から外れ、A群、B群では墓支群からも外れ、それぞれ独自の群域を形成する。この背景には、土器棺の被葬者が集落を構成する集団系列の外に置かれたことを想定させる。土器の被葬者の性格については棺内から幼児の歯が検出されているものが5例あることから、土器棺が専ら幼児のための埋葬形態である可能性

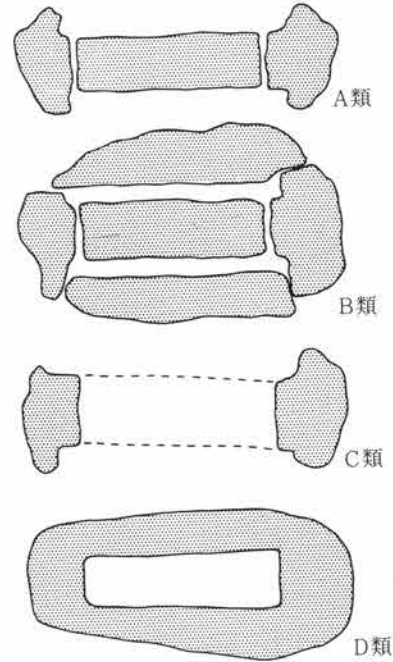


は高い。この土器棺被葬者に関する集団原理が果たして葬制に止どまるものか、日常の集団原理にまで及んでいるのかについては今後の課題として提起された問題である。

### 6 墓主体部の形態

有馬遺跡において調査された単位墓群・周溝墓を構成する埋葬主体部は、土壙墓と認められるもの1例、土器棺は5例、構築材として磔を用いる磔床墓は84例で圧倒的に多くを占めている。磔床墓の検出に際しては土壙あるいは掘り方の形状把握が明確にできなかったが、磔の配置形状が良好に把握されたことにより、埋葬部の想定復元がある程度可能であり、主体部も以下のように幾つかの形態に分類することが可能である。

- A類 埋葬部に磔床を伴い、埋葬部を挟み両端に磔を集積する。32基 (38%)
- B類 埋葬部に磔床を伴い、埋葬部を挟み両端に磔を集積するとともに側部にも磔集積帯を設けている。23基 (27.4%)
- C類 埋葬部を挟んで両端に磔を集積する。磔床は伴わない。14基 (16.7%)
- D類 埋葬部を挟んで両端に磔を集積するとともに側部にも磔集積帯を設ける。磔床は伴わない。6基 (7.1%)
- E類 埋葬部に磔床を設け、埋葬部の端部、側部共に磔集積を伴わない。9基 (10.7%)



第398図 磔床墓の形態

このような形態差は何に由来するものか、様々の事柄が考えられるが、まずもって検討すべきは被葬者の性格との関連である。

### 7 埋葬施設の形態と被葬者の性格

被葬者の性格については、性別、年令、出自、集団内での地位などがその内容として考えられる。そのいずれが墓の形態に関わるのか検討する上の関連資料として、出土人骨や副葬品を多数得ている。出土人骨鑑定結果については第7章に掲載している。それによれば、性別については大方不明であるが、年令については良好な分析結果を得ている。その年令構成の概要は幼児5体、小児9体、青年、壮年、熟年30体である。この結果と墓の類型を比較すると、右の表のように一定の相関関係を認めることができる。

墓の類型と被葬者の年齢の相関関係表

	成人・青年	小児	幼児
A 類	17	0	0
B 類	6	5	0
C 類	5	1	0
D 類	0	1	0
E 類	1	1	0
土器棺	0	0	5

この表から読み取れることは、土器棺の場合5体とも4歳以下の幼児で、小児や成人の遺体の歯や骨は検出されておらず、また他の形態の埋葬施設には幼児骨は見られないので、幼児埋葬は専ら土器棺によったと思われる。磔床墓の場合は最も数の多いA類で小児は見られない。形態特徴からの全体的な傾向としては、埋葬部側部に磔集積帯を持たないA・C類では96%が青年、成人であり、側部に磔集積帯を配するB・D類に小児埋葬の傾向が高いことが認められる。

## 8 礫床墓の形態と規模

被葬者の年齢に関連して埋葬部の規模と形態の関係をみると埋葬部の長さ(埋葬部長)の平均はA類145cm、C類が129cm。これに対してB類は144cm、D類が131cmである。被葬者が小児である5例の埋葬部長の平均値は161cm。同じく壮年19例の平均値は149cmである。ここには被葬者の身長の違いが埋葬施設の差に現れていない。これには埋葬体位が関係しているのであろう。すなわち10号墓S K 426では屈葬が明らかになっている。被葬者が壮年で埋葬部の最も小規模例はS K 142で、埋葬部長が125cmである。成人で埋葬部長が140cmのものが8例ある。これらの場合伸展葬には無理があり、屈葬を考えるのが妥当である。

## 9 単位群と礫床墓の形態

単位墓群・周溝墓がどのようなタイプの礫床墓により構成されるかといった問題である。被葬者に成人が高い率を占めるA類・C類のみにより構成される例は5号、6号、9号、14号、17号、18号の6例。小児の率が高いB類、D類のみによる構成は8号、20号の2例で、他は各類型が混在する。この構成状況から次のようなことが想定できる。各類型が混在する例が大半を占めていることにより、単位墓群・周溝墓の被葬者である最小単位集団(家族に相当するか)の違いにより、それぞれの類型が採られるのではなく、最小単位集団内の構成員それぞれの性格に従っていると考えられる。この性格については少なからず年齢と関係していることは上記のとおりである。それはこの最小集団との関係とも矛盾しない。しかし、年齢との関係のみでは計りきれない表れも認められる。この点については有馬遺跡の資料の分析のみでは明らかにできない。

## 10 礫床墓に伴う墓壇について

1号、6号、23号、24号墓などにおいて埋葬部の周囲に浅い墓壇の周壁を検出している。平面形は、1号墓は周壁が明確に検出できなかったため、不整形である。6号墓の場合も壁の検出は明確さを欠くが長方形であり、23号、24号では隅丸長方形である。これらの墓壇の検出に際しては検出面はローム漸移層を前後するところである。構築時の、地表面からの深さは明らかではない。埋葬部の両端部の礫集積の頂部と地表とのレベル差がいか程あったかということは埋葬部床面の地表面からの深さの問題と同時に、主体部間の重複が殆ど見られないことと関係して、礫集積が表出し、墓標になりえたか否かの問題にも関わっている。

## 11 端部礫集積と地表面

墓が営まれた弥生後期の地表面は浅間C軽石層下の第IV b層上部である。第IV b層は平均的には厚さ20~30cmこの上層は浅間C軽石を含む黒色土第IV a層でF、G区では軽石混土層で厚さ15~20cm。H区では、浅間C軽石は純層に近く、厚さ15cmほどであり北半部ではC軽石に直接覆われて比較的広く畑が検出されている。またC軽石層の上面は有馬火山灰に覆われる。第399図のグラフでは礫床墓の端部礫集積の頂部とFA直下畑の溝底(F区、G区)、有馬火山灰直下面(H区南)、C軽石直下畑の溝底(H区北)とのレベル差を表している。浅間C軽石直下畑との差は最小は14号墓のS K 402で4cm、最大は23号墓S K 448の19cm、有馬火山灰直下面との差は最小は9号墓S K 430の3cm、最大で11号墓のS K 436の35cmである。FA直下畑との差では最小は6号墓S K 440の0cm、最高は19号墓S K 135の45cmである。FA直下畑、有馬火山灰では第IV a層の厚さ分として10~15cmを差し引くならば最大で30~35cmとなる。なお、埋葬部床面レベルはこの礫集積頂部より20~30cm低い。同一単位墓群内でのレベル差の大きい例では、19号墓のS K 108とS K 135は相互に隣接するが、それぞれ23cmと45cmであり、20号墓のS K 107とS K 131は22cmと40cmで、これらは特に差が

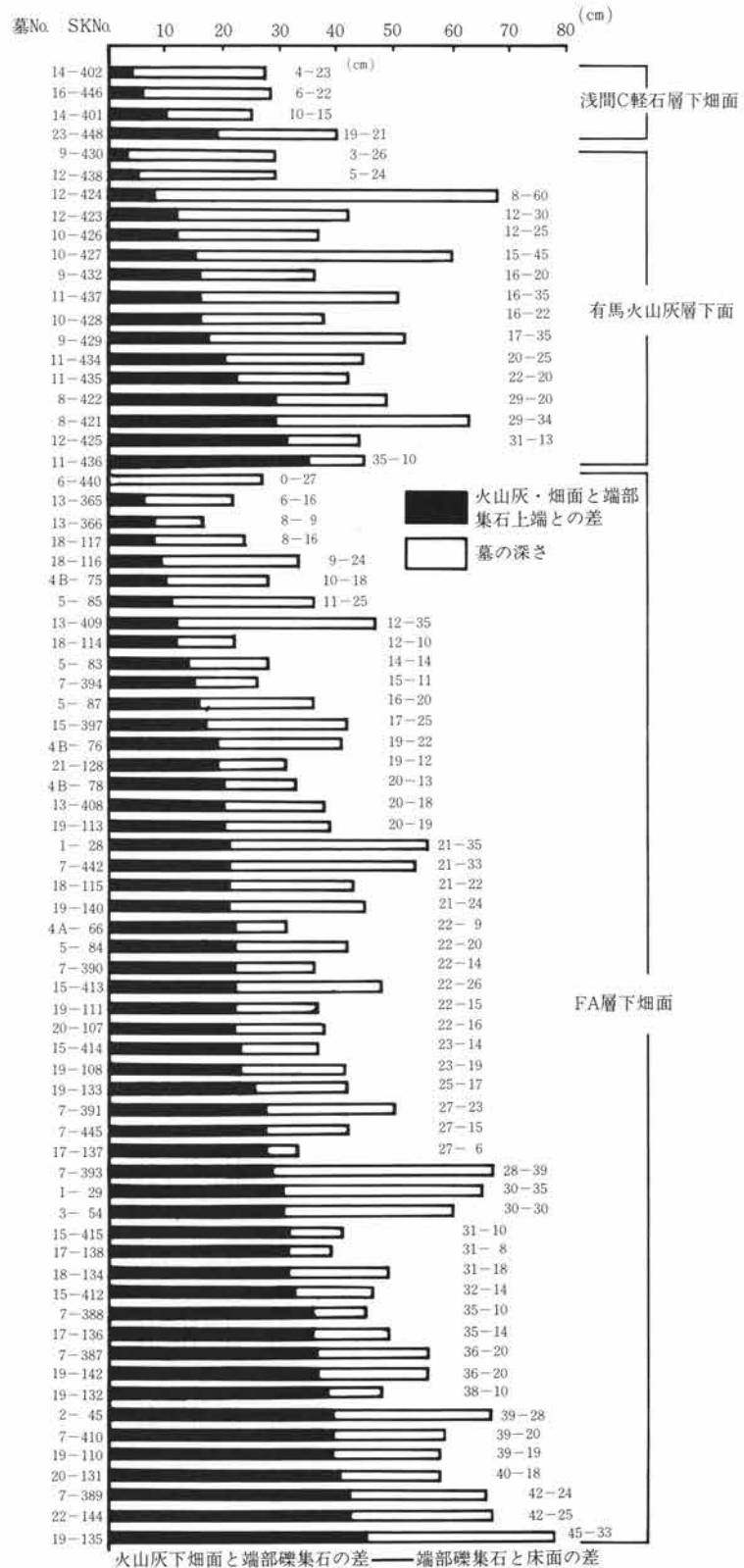


大きい例である。全般的傾向としては相互に隣接する主体部同士ではレベルの差は小さい。

### 12 木棺について

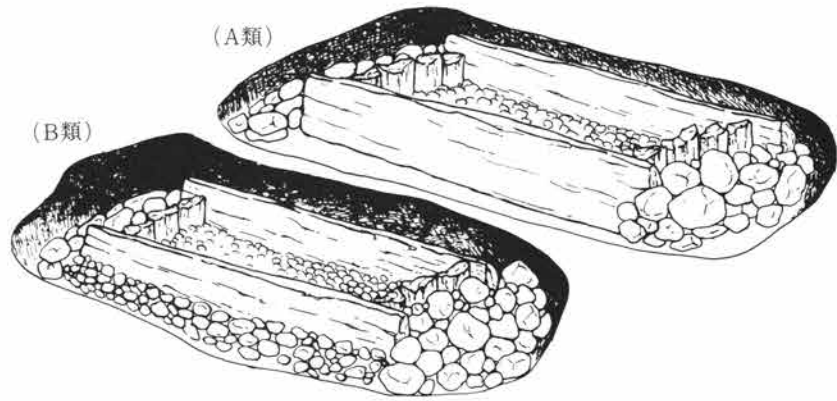
調査では棺材そのものの残存はいずれの主体部でも認められなかった。しかし埋葬部の両側に側板を設置した痕跡を礫床側縁、端部の礫集積部に認めることができる。礫床側縁は直線状であり、礫床は中央がやや低く、縁部の石はせり上がっている。両側から板を当てた上で礫を敷詰め、整えている様子が窺える。23号墓SK450、24号墓SK451では礫床両側縁に沿って細い溝が検出されており、これは板の下端が埋め込まれていた痕跡だろう。端部礫集積は礫床側縁の延長線上に鈎状のくびれ、または「ほぞ、状の凹みが認められる。この凹みやくびれは、ここに側板を差し込むか、組み込むことにより、側板を内側に倒れ込まないように、固定したものと思われる。

また、埋葬部・礫床部の両端の礫集積下には円形または長円形の掘り方ピットが検出される。これは埋葬部の両小口部に杭、または板を立て、内側から側板を



第399図 礫床墓の深さ一覧

おさえるか、両端に集積した礫が埋葬部に崩れ落ちないように防いだものと思われる。ただし、礫床の短辺の輪郭線はどれも不明瞭で、幅広な板などで画された痕跡は認められない。底板については、礫床面の状態から、底板を設置した可能性は低い。礫床面は両側縁が中央部よりやや高くせり上がっている場合が多く、1



第400図 礫床墓想定復元図

号墓S K29や19号墓S K142のように両側縁にやや大きい石を1列に並べる例もある。そうした礫床面上に底板が安定した状態で設置されていた可能性は考えにくい。

礫床や礫集積により特徴づけられる、この礫床墓と称せられる主体部形式は現在までのところ弥生後期後葉段階に渋川周辺地域にのみ類例が知られる。渋川市有馬条里遺跡で2例、同中村遺跡で1基の周溝墓の主体部として7基調査されている。渋川市空沢遺跡で周溝墓の主体部として1例を見る。

この礫床墓は礫床と礫集積に特徴づけられ、この点地域色の強い、特異な形態といえるが、これに伴う他の要素については弥生時代の各時期を通じて多くの類例をみる木棺墓に多くの点で共通する。とりわけ端部礫集積下に検出される2個のピット（小口穴とも呼ばれる）と側板の痕跡であり、それは弥生時代の木棺墓には通例のものである。群馬県地域では類例は少ないが、隣接県である長野県地域に調査例が多い。県内では沼田市石墨遺跡では7基、一部周溝をともなってみられ、長野県地域では長野県飯山市須田ヶ峰遺跡の弥生後期周溝墓に伴って2基、長野市伊勢宮遺跡では弥生中期段階の例であるが30基中22基にこの特徴が見られる。このほか塩尻市丘中学校遺跡、岡谷市橋原遺跡、佐久市周防畑B遺跡などで類例の調査がある。西日本ではこの形式の墓壇の検出例は多く、しかも、小口穴部に埋め込まれた木棺の小口板や側板の検出例も少なくない。この小口穴を持つ墓壇の系譜は九州では弥生前期にその存在が認められており、この型式は、木棺の出現期から存在し、以後、広範に伝播、継承されたようである。有馬遺跡の礫床墓もこの小口穴をもつ型式の木棺墓に系譜上つながるものであり、礫床や礫集積は一種の地方的なバリエーションと理解するのが妥当かと思われる。

### 13 副 葬 品

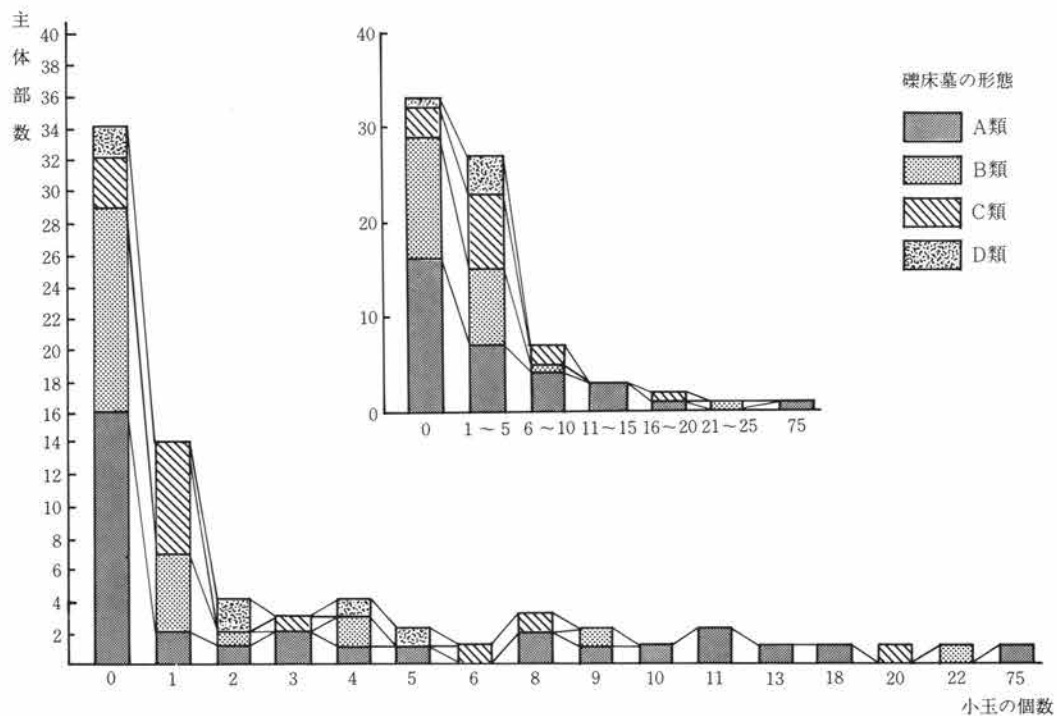
有馬遺跡の墓主体部内には多様な副葬品が検出されている。このことも有馬遺跡の墓制を特徴付けている大きな要素といえよう。副葬品は、総数で鉄剣8本、鉄釧2個、銅釧4個(1束)、銅鏃1個、ヒスイ製勾玉3個、石製管玉8個、ガラス製小玉322個、ミニチュア土器など多数にのぼる。

ガラス小玉は副葬品の内でも最も数が著しく多い。これらの大部分は主体部の調査中に埋葬部の床面上に点在、あるいは遺体の歯の周囲などに集中して検出されているが、少なからぬ部分が覆土をフルイにかけた際摘出されている。主体部の覆土は基本的に総てフルイにかけているので、およそ取りこぼしはないと思われる。礫床墓87基中ガラス小玉を伴うものは46基である。各主体部における出土点数については、壮年で最

大75個、小児で最大22個である。玉を伴っているものに限っての出土個数の平均値は熟・壮年・成人・青年を合わせた平均は12.2個、小児の平均は4.9個である。壮年の被葬者全体では平均5.3個、小児の被葬者平均3.5個である。第401図のグラフでは前出の5つの主体部類型に従って、それぞれに出土点数を表している。ガラス小玉を出土している主体部での出土点数の平均値はA類で11.4個、B類は4.6個、C類は4個、D類は3.3個である。なお、土器棺ではガラス小玉を伴うものは6例で、平均4.8個である。ガラス小玉の副葬は成人のみでなく小児、幼児に対して行われるが、その数については成人に個数が多く、または被葬者に成人が高い比率を占めるA類に多くの点数を認める。小児、幼児にやや少ない傾向をみるが、両者間の出土点数に顕著な差があるとは言い切れない。出土点数は1～5個の例が多く、特に1個の例が34例でとりわけ多いのが注意される。ガラス小玉が副葬されるについては、これが生前の垂飾の延長なのか、あるいは小玉数個を副葬することが葬送儀礼として行われたのか、また、数の多寡は被葬者のこういった事情を反映しているのか。ガラス小玉の数量分析結果はこの問題を検討する上に少なからず示唆を与えるものと思う。

鉄剣はそれぞれ別個の主体部に各1本伴っていた。出土状態は被葬者の腰部辺りに剣の先端を足方向に向けている。111号の長剣だけは礎床側縁に沿って側板の内側か外側に接した位置に認められた。鉄剣が副葬された被葬者については成・壮・熟年が5例であるが、ガラス小玉の副葬は鉄剣を伴う主体部の場合、2B号墓・SK45の20個が最多で、平均値は7.1個で全体の平均値のおよそ2倍で、僅かながら鉄剣を伴う被葬者への集中が認められる。

以上、ガラス小玉、鉄剣の副葬状況、特に数量的偏在性について、主体部の形態、被葬者の年令と関連させて検討を試みた。この結果、個々の主体部間にはなんら副葬を見ないものから多数のガラス小玉を伴うものや鉄剣、その他釦など金属製品を伴う主体部まで様々である。しかしその一方ガラス小玉を除くと複数個の伴出は無く、また品目の異なる副葬品の1主体部への一括集中も無く、墓の規模と副葬品の多寡は結びつ



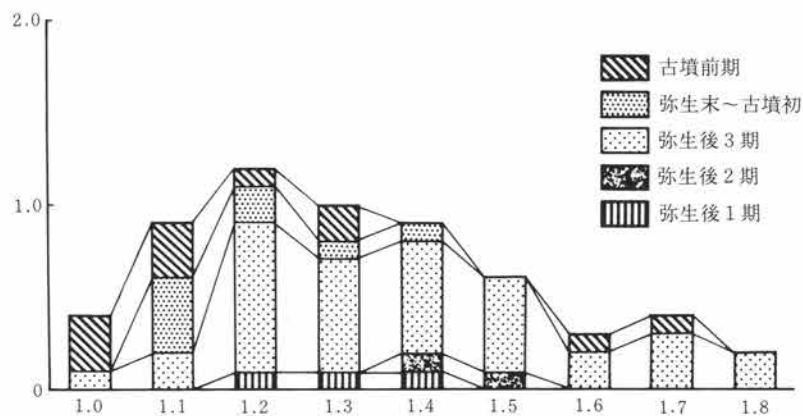
第401図 礎床墓類型別ガラス小玉出土個数

かない。また、家族に相当するかと思われる最小単位集団によったと想定される周溝墓・単位墓群相互の間の格差も一定程度見られながらも顕著なものになっていない。そうした一定の格差もその起因するところについては、一部は年令によるものであることは判明したが、その他、被葬者の性別、出自、階層差、富裕など様々な要因が想定されるが、現段階ではこれらのことについて明らかにすることはできない。ただいずれにせよ、副葬品、墓の規模、形態など墓制全般を通じて個々の被葬者間や最小単位集団間に突出した厚葬は認められない。限られた調査区内での不確定要素を含んだ結果からではあるが、まだそうした厚葬が出現する社会状況を見るに至らない状況であったといえようか。

#### 14 住居の平面構造

有馬遺跡の調査により弥生後期から古墳前期にかけての竪穴住居が83軒検出されたがそのうち時期が明らかになり、住居の平面形状が把握できるほどに検出できたものは、弥生後期前葉（第1期）3軒、中葉（第2期）2軒、後葉（第3期）36軒、弥生時代終末～古墳時代初頭8軒、古墳前期、11軒である。これら各時期にわたる住居はそれぞれに規模の大小や、平面形状にも一定の差異が生じている。また同時に、時期を追っての平面形状の変化も少なくない。住居の長辺と短辺の比率、主柱と炉跡の位置など、住居の基本構造に関わる変化を認めることができる。またこの推移の大筋は近隣地域の在り方と同様であるが若干の地域色も窺うことができる。

住居の規模は各時期にわたって差は大きい。後期第3期では規模が10㎡前後で形状が一律な小型住居が14軒見られる。この住居は主柱が中軸線に2本検出される場合が多く、構造上特異である。最大規模の住居は、263号住居で6本主柱、面積は82㎡で他を大きく凌いでいる。面積値の全体傾向は比較的規模な14軒の小型



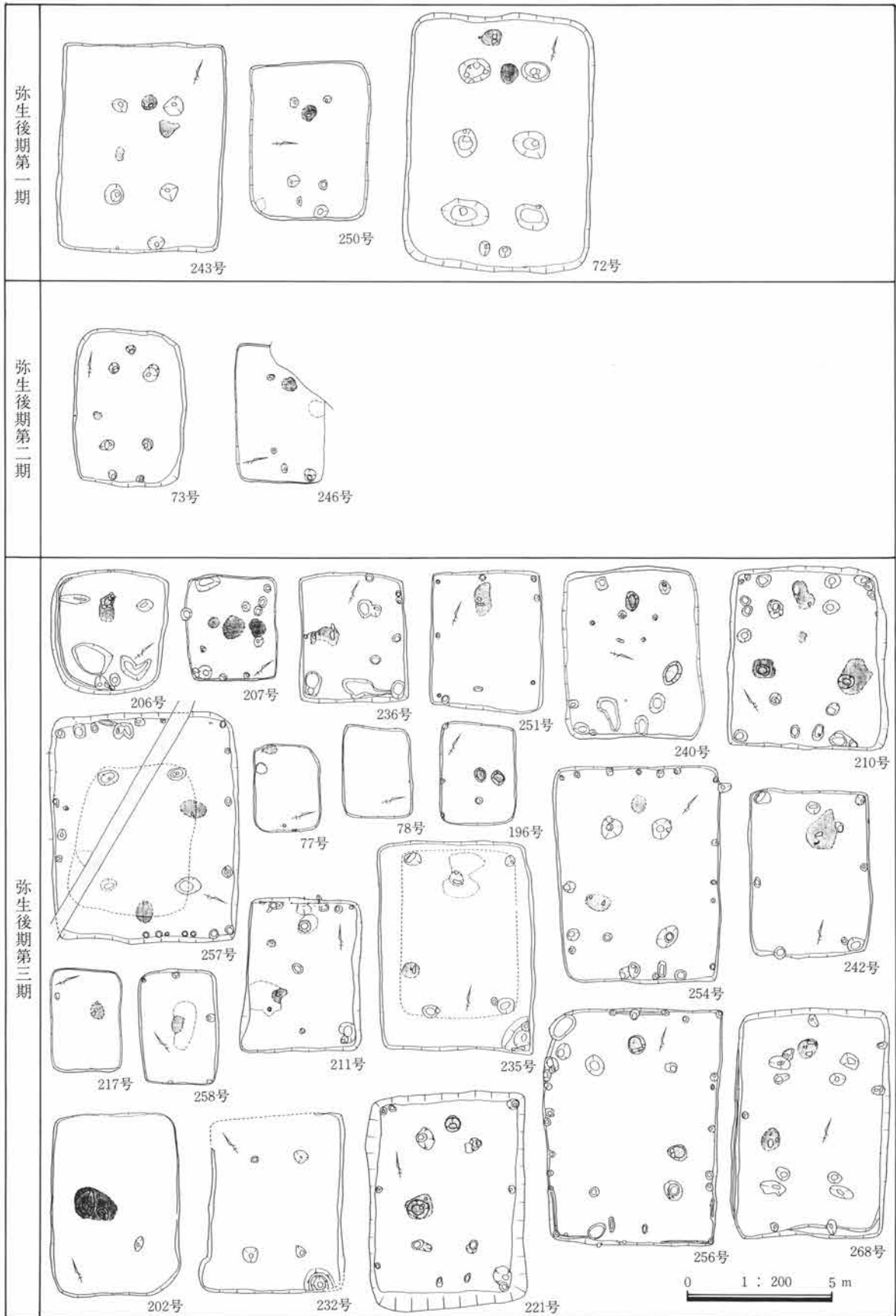
第402図 住居の長短軸比率、時期別分布

住居を除き、これを越える規模の住居では面積は段階的で同じ規模に集中することはない。

古墳前期では83.2㎡の82号住居が圧倒的に大きくその他は20㎡前後で差は小さい。

住居の平面形では長辺と短辺の比率に時期を追って推移が認められる。後期第1期では長辺と短辺の比率の平均値が1.3、後期第2期が2例であるが14.5、第3期が1.38、弥生後期末～古墳初頭では1.18、古墳前期では1.15である。関連資料として本遺跡の西に隣接する有馬廃寺遺跡の後期第1期の2軒の住居の平均値は1.15である。すなわち弥生中期後半から後期にかけてやや縦に長くなり、古墳前期に方形化する。

炉跡の位置にも同様の推移が見られる。後期第1期では奥側の主柱の間のやや中央寄りに地床炉が設けられる。有馬廃寺遺跡の場合も同様である。第3期では奥側の主柱間の外側の周壁寄りに設けられる。この炉跡の推移の仕方は、弥生中期後半期の場合の住居中央部への設置とともに、これに引き続く推移として、榛名山東南麓地域のこの時期の住居に一般的に認められる。



第403図 有馬遺跡住居一覽(1)



第404図 有馬遺跡住居一覽(2)



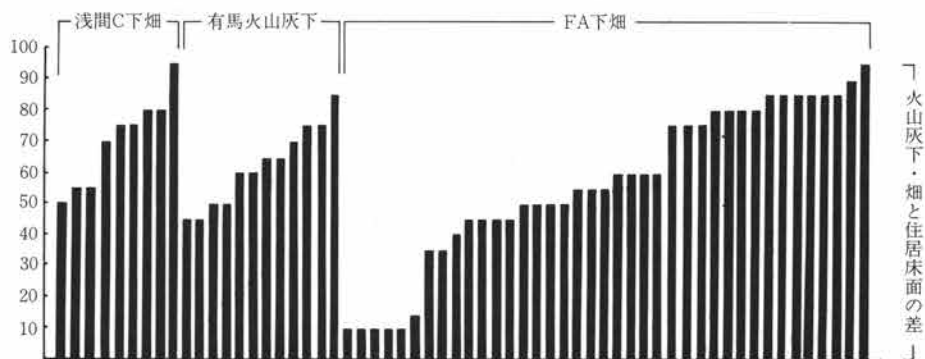
弥生時代から古墳前期にかけて、有馬遺跡においても住居構造上大きな転換が認められる。それは平面形状、柱配置、炉跡の位置に見られるが、当然これは上屋構造の変化を伴ってのものである。主柱配置の原理として「有軸対象主柱配列構造」と「求心主柱配列構造」があり、東・西日本の弥生時代の竪穴住居の殆どは原則としてこの二つの原理のいずれかに分類しようと指摘されている。群馬県地域における弥生時代から古墳時代にかけての住居構造の推移はこの基本原理の転換を伴うものである。有馬遺跡では弥生時代から古墳時代へ、出土土器や集落構成など総体に断絶なく、漸移的な推移が認められる。住居構造についても他の文化要素にともなって基本原理の転換が漸移的に行われていく様子を観察することができる。画期における文化内容の構造的推移の一例として興味深い。

## 15 周壁の高さ

住居の確認、検出は第IV層黒色土において行うよう務めたが少なからず、結果的に第V層ローム質土上面か漸移層となった場合も少なくない。弥生時代後期の生活面は第IV層中であるが、調査により検出され、実測されている壁の高さはそのまま本来の高さを表さない。しかし有馬遺跡では住居廃絶後時期を隔てずに営まれた畑が火山灰におおわれ良好に検出されている。そこで住居の覆土直上を覆う浅間C軽石層直下の畑の畝間の溝底から住居床面までの深さを算出した。この条件に恵まれない地区では有馬火山灰直下、及び二ツ岳火山灰（FA）層直下畑の畝間の溝底から住居床面までの深さを算出した。第405図はこの数値を個々の住居ごとにグラフに表したものである。

弥生後期、または古墳時代前期の住居が営まれた時期から上記の火山灰、降下までの期間は最大で弥生後期～古墳後期初頭、

最小で弥生後期～古墳初頭である。上記の3時期の火山灰直下の畑面などには随所に廃絶住居の窪みが残っており、畑の造成の際には削平や土盛りなど土を動かした様子は認められない。このことから



第405図 弥生・古墳時代住居の深さ一覧

住居の壁の高さは少なくともグラフに表示された数値以上ではないといえよう。なおFA畑による地区は高燥であり、浅間C軽石層は黒色土との混土層として存在し、有馬火山灰層は認められない。有馬火山灰による地区は、浅間C軽石層は比較的純度の高い混土層として存在している。低湿なH区の状況についてみると、浅間C軽石層直下の畑による深さでは最も深い例が227号住居の95cm、最も浅い例が260号の50cmである。平均62cmである。高燥区のF・G区ではFA層直下畑によれば最も深い例が223号住居の105cm、最も浅い例が203号住居の35cmである。平均は66cmである。この数値はH区に比べやや高いが、両区の数値を比べる場合はFA畑からの数値は、畑と住居との間に10～20cmの浅間C軽石混土層を介在させているので、この分を考慮に入れなければならないだろう。



## 16 出土石器について

調査区域内の遺構や包含層から多数の石器が出土している。下表は遺構、及び土器群内から出土した石器、剥片などを総て集計している。出土数を遺構別にみると、住居から89点、土壇から6点、墓から32点、その他土器群内から130点出土している。下表では石器の器種別数量、比率、器種と石材の関係について示している。出土石器の時期についてはそのほとんどが弥生後期に属すると認められる。古墳前期の遺構から出土した石器は、この時期の住居出土石器の総数は9点である。器種は磨製石斧2点、土掘り具4点、刃器2点、砥石1点である。弥生後期の住居の場合に比べると頻度は少なく、またこの内には弥生石器の混入も否定はできない。しかし82号住居出土の2点の磨製石斧は共に床面に密着した状態で出土していることから、古墳前期段階までこの種の石器が使われたことを示す資料として意義深い。遺構外では、主に投棄によるとみられる土器群内から出土の石器が130点を数えるが、これら石器の時期については、伴出土器に縄文土器の出土が小片で5点に達しないことからほとんどのものが弥生時代に属すると認められる。

器種は剥片からなる刃器が最も多く、次に土掘り具となっている。刃器は不定形で、形状、大きさは一律でなく、二次調整がなされないうで、一次剥離による鋭利な側縁部に使用痕とみられる極細かい剥離が観察されるものも多い。使用痕や二次調整の見られない剥片は圧倒的に多いが、これらは2～3cm以上の大きさのものであり、石器作成過程でのチップに限らず、刃器として使用されたものも少なくないだろう。この種の石器については、県内の同期の遺跡においても同様の出土状況が認められている。今後、基幹的な文化要素の一つとして多様な角度から注意を傾けていく必要があるだろう。

出土石器の器種と石材一覧 (個)

器種	刃器	剥片	土掘り具	石核刃器	磨製石斧	石核	磨石	砥石	くぼみ石	打製石鏃	磨製石鏃	計	%
ケイ質頁岩	4	4								1		9	3.7
ケイ質準頁岩		2									1	3	1.2
灰色安山岩	1	4	2	2								9	3.7
輝緑岩		3	1		1							5	2.0
輝緑凝灰岩			1									1	0.4
黒色安山岩	3	3										6	2.4
黒色頁岩	33	64	16	1		3	1			1		119	47.8
黒曜岩		9										9	3.7
砂岩	1	5	1						3			10	4.0
細粒安山岩		7	6			2						15	6.0
石英閃緑岩							2					2	0.8
粗粒安山岩	1	6	4				6		13			30	12.0
頁岩	3	10										13	5.2
変輝緑岩					2							2	0.8
変玄武岩					1							1	0.4
変質安山岩		1					1					2	0.8
変質玄武岩		4			1	2	1					8	3.1
流紋岩									1			1	0.4
チャート		1										1	0.4
硬質泥岩			1									1	0.4
かんらん岩			1									1	0.4
緑色片岩			1									1	0.4
計	46	123	34	3	5	7	11	4	13(20)	2	1	249	100
%	18	50	13.4	1.2	2.1	2.8	4.4	1.7	5.2	0.8	0.4	100	

※ ( ) 内の数は石材鑑定未済分

## 参考文献

- (1) 「有馬条里遺跡」『年報』3号 1984 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (2) 「空沢遺跡第2次・諏訪ノ木遺跡発掘調査概要」1980 群馬県渋川市教育委員会
- (3) 「中村遺跡 関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書」1986
- (4) 「長野市の文化財第8集—塩崎遺跡群IV」1986 長野市教育委員会
- (5) 「須多ヶ峯遺跡」『長野県史』考古資料編全1巻(2) 1982
- (6) 「丘中学校遺跡—長野県塩尻市丘中学校遺跡発掘調査報告書—」1983 丘中学校遺跡発掘調査団
- (7) 「橋原遺跡—中部山岳地の弥生時代後期集落址—」1981 長野県岡谷市教育委員会
- (8) 福永 伸「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻1号 1985
- (9) 都市比呂志「日本農耕社会の成立過程」1989 岩波書店



(助)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第102集

《本文編》

## 有馬遺跡Ⅱ

一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第32集一

平成2年3月15日 印刷

平成2年3月20日 発行

編集／群馬県教育委員会

前橋市大手町1丁目1番1号

電話(0272)23-1111

(助)群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

勢多郡北橋村下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社